

AC Zokuzoku gunsho ruiju
145
G857
v.4

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries



續
人
群
書
類
從

第
四

AC
145
G857
v. 4



續々群書類從第四

例言

一本編は、史傳部の第三卷として、餘目氏舊記以下二十二種を收む、
一餘目氏舊記は、陸中國鹽釜村水澤の餘目氏に傳へらるゝ留守氏の
記録にして、文治年中より永正十一年まで三百餘年間に渉る、東國
の事情を知るに屈竟の史料たり、但末文の佚したるは惜むべし、留
守氏もと伊澤と稱し、賴朝に従うて奥州を征し、留守職に補せらる、
依て子孫留守を以て氏とせり、其孫裔、村岡氏餘部氏等庶流ありと
雖も、此古記には、毫も之を記するを見ず、本書は、原本を謄寫せる、大
學史料編纂掛所藏本を底本とし、吉田東伍氏所藏本を以て校訂せ
り、

一雙林寺傳記は、長尾昌賢影像記、及び上杉傳來記の二種より成る、前

者は、寛正四年上州群馬郡白井雙林寺上杉景仲木像造立に際し、同寺二世某の記する所にして、長尾氏の家系より、景仲一生の事蹟を略述せるもの、後者は、同寺第十一世某の記する所にして、景仲以後、景信景春景英景誠憲景政景等の小傳を集めたるものなり、

一 公方兩將記は、應仁兵亂の起より、永正の末年、細川高國政務一統に至るまで、細川畠山兩氏の政權爭奪を記せるものなり、

一 小弓御所様御討死軍物語は、天文七年十月七日に於ける、國府臺の戦記なり、

一 平嶋記は、阿波平嶋公方家の歴代、同義冬の母系、三好氏の系、義冬の事蹟等を記せる、同家の記録なり、以上の四書は、黒川氏所藏本を以て底本とせり、

一 多賀谷七代記は、常陸國下妻城主多賀谷氏家より重經に至る、七代の事蹟を述べたるもの、氏家は、金子家忠の裔、同族結城氏朝と共に

足利成氏に仕へ、下妻城を築いて之に住し、子孫相繼で居る、重經に至つて、徳川家康の滅す所となれり、此書は、黒川氏所藏本に據り、大學史料編纂掛所藏本を以て校訂せり、

一世田谷私記は、奥州吉良氏後の領、武州荏原郡世田谷に於ける事蹟を記述せるもの、吉良氏は、治家に至つて足利持氏に従ひ、世田谷郷を賜はる、子孫小田原北條氏と姻親を結び、徳川氏に至つて蒔田とも稱し、高家衆たり、本書は、水戸家所藏本を謄寫せる、大學史料編纂掛所藏本を採收せり、

一沼田記は、上州沼田の城主平經信、源賴朝に従つて戦功を樹てしより以來、經信泰經常泰景泰義景家景の事蹟、及び景貞に至り、武田勝頼の爲に滅されたる顛末を記す、文辭拙劣、誤脱亦尠からずと雖も、沼田氏の事蹟を詳記せる唯一の史料たり、本書は、黒川氏所藏本を以て底本とせり、

一 棚守房顯手記は、嚴嶋明神の神官棚守房顯の記述に係る同社の記録にして、誤字借字頗る多く、讀む能はざるものありと雖も、同社の古實を原ね、尼子氏大内氏の事蹟、ことに嚴嶋合戦に關しては、缺くべからざるの史料たり、此書は、大學史料編纂掛所藏本を採り、村田氏の修補本を以て校訂せり、

一 佐野宗綱記は、野州佐野城主宗綱一代の事を記せる外に、其弟天徳寺及び養子信宣等の事蹟を述べたるものにして、黒川氏所藏本を以て底本とせり、

一 香宗我部氏記録は、香宗家證跡記、香宗我部親泰從臣覺下總佐倉同姓書冊寫、香宗我部文書、同證文等、數種を收めたるものにして、大學史料編纂掛所藏本を採れり、

一 菅谷記は、寶曆の頃、菅谷氏の家臣が、主家の事蹟を記せるものにして、常陸小田の幕下菅谷攝津守勝貞が、同國太田の佐竹義重と戰ふ

事より、常陸に於ける諸家爭奪の概略を述べたり、

一箱根山中城責由來は、天正十八年秀吉小田原征伐の際、山中城主間宮豊前が城守の様を記し、并せて秀吉の先鋒越智直末が碑文をも載せたり、以上の二本は、黒川氏所藏本に據れり、

一忍城戦記は、小田原征伐の際、忍城主成田長氏が兵の籠城せる様を記せるものにして、大學史料編纂掛所藏本を以て底本とせり、

一清正高麗陣覺書は、清正の臣下川兵太夫の記する所と傳へられ、我自刊我本にも收められたるも、本編所收の黒川氏所藏本とは、多少異同あるを以て、茲に加ふることゝせり、

一石川忠總家臣大坂陣覺書は、石川主殿頭が大坂冬陣夏陣に於ける軍の働を記せるものにして、大學史料編纂掛所藏本を以て底本とせり、

一大坂陣山口休庵咄は、豊臣氏の臣山口休庵が、大坂冬役に於ける城

兵の働を述べたるものにして、水戸彰考館本を謄寫せる、大學史料編纂掛所藏本を底本とせり、

一 土屋忠兵衛知貞私記は、大坂兩役に於ける、供奉留守の人名、大名賞罰の事、并に大坂方籠城の輩、及び戰死の人名を列舉せるものにして、大學史料編纂掛所藏本に據れり、

一 嶋原一揆松倉記は、寛永十四年嶋原一揆の始末を記せるもの、本書は、内閣文庫本を以て底本とせり、

一 嶋原天草日記は、松平甲斐守輝綱が、一揆征討の從軍日誌なり、

一 山田右衛門作物語は、山田右衛門作に託して構作せる、嶋原亂の物語なり、右衛門作は、洋畫を以て松倉氏に仕へ、凶徒に迫られて一揆に與みし、私に官軍に通ぜんとして、幽囚の身となりしが、後官軍に救はれたる人なり、以上の二書は、大學史料編纂掛所藏本を底本とせり、

一 休明光記は、幕府の松前奉行羽太正養が在役中に於ける、蝦夷に關する事件を記載せるものなり、此書は、黒川氏所藏本を底本とし、早稻田大學圖書館本、及び帝國圖書館本を以て校訂せり、

一本編は、文學士堀田璋左右氏主として材料の選擇、及び編纂の勞を執られたり、茲に一言謝意を表す、又史傳部第一例言に、「文學博士萩野由之氏親しく材料選擇の勞を執られ」たる旨を記載せるも、該編は、印刷に臨み、本會に於て、其材料を増減せるものあるを以て、同氏の爲に之を訂正す、

明治四十年六月

例

言

八

續々群書類從第四史傳部

目錄

餘目氏舊記.....一

雙林寺傳記.....一八

長尾昌賢影像記○上杉傳來記

公方兩將記

卷上.....二九

應仁兵亂發起事○飛鳥井雅康卿詠歌事附義尙公御政務事○義尙公於陣中御

逝去事○將軍家江州御動座事○豆州堀越御所滅亡事附義澄御上洛事○河州正

覺寺合戰畠山政長自害事○將軍御沒落事○新將軍家御在位事附山門炎上事○

雪敵事附畠山義豐滅亡事○畠山尙順入道卜山與細河方合戰事○和州合戰事

○江州百濟寺炎上附音羽城合戰事

卷下.....四四

細河家亂根事○藥師寺與市滅亡事附兩島山和睦事○天下妖怪事附政元滅亡事
○細河九郎澄之最新事○細河澄元同高國任管領職一事附前大樹御上洛事○前
大樹入洛御再任事附盜賊御誅伐事○先公方義澄卿御沒落事附諸國亂逆怪異事
○攝州蘆屋邊合戰事附先公方御逝去事○佐々木高賴參三將軍味方一事○船岡山
合戰事○大内介義興任三管領一事附江州九里誅伐事○武衛今河於三遠州一軍事附
朝倉出身事○大内介歸國事附四國勢攻上事○攝州所々合戰事附若槻伊豆守最
期辭世事○三好筑前守之長降參自害事○高賴澄元卒去事附高國政務事

小弓御所樣御討死軍物語

六三

平嶋記

七〇

源家平嶋先祖○三好先祖○持隆三好豐前守ニ被レ討給事○義冬周防ノ國エ下
リ給事○三好豐前守義形討死之事○義冬周防國ヨリ阿波國江歸給事○將軍義
輝公ヲ三好奉レ討事○義親病死之事○義昭公信長尾州ヨリ上洛之事○阿波國
治次第○當國ノ大守達拙家ヲ憐給フ事○天下次第

多賀谷七代記

八八

多賀谷俗姓平氏系圖傳○結城氏朝并春王安王被レ害事○多賀谷氏家討三管領一
事○建ニ築下妻館一籠城之事○多賀谷左近攻ニ落出城一事○北條氏直氏輝攻ニ下

妻事○小田天菴與佐竹義宣不和之事附及合戰事○小田原北條ノ軍卒下妻ノ城ヲ攻ル事○豐田ノ元祖ノ沙汰附蛇沼合戰之事○白井全洞攻落豐田城井飯見被誅事○多賀谷重經驕奢之事附伯父經伯異見之事○多賀谷彦六經明討死井矢田部落城經伯父子最期之事○重經攻落牛久足高城事○多賀谷勢攻府中井藥師堂燒亡之事○行方刑部最期事○長谷川鞆負鎗之仕合之事○下妻勢攻筒戶城事○言谷左衛門尉事○信田菅谷月見之會井重成最期之事○白井全洞滅亡之沙汰事○多賀谷滅亡ノ發端○下妻落城之沙汰井重經背御當家滅亡之事

世田谷私記.....一一七

沼田記.....一三〇

棚守房顯手記.....一四五

佐野宗綱記.....一七五

藤岡榎本合戰之事井松本丹波強弓之事○從小田原佐野富士山へ寄來事○境七箇村取合之事○免鳥合戰之事○宗綱公早苗をふらせし事○彦間小野兵部被討事○足利攻相談之事○御遺恨數多之次第○大拔越中計謀御諫言

香宗我部氏記録

之事○宗綱公御歳廿八にして討死之事○宗綱公御老母并御内婦御嘆之事○	一九八
佐野家老中天德寺請待之事○大拔越中切腹の事○長尾殿宗綱公を討大悦之事○	二〇二
足利新田小田原へ被 _レ 召籠居之事○小田原より使者來る事○佐野より	二〇六
天德寺へ飛札之事○小田原より人質取に來事○山上道及事○秀吉公小田原	二一八
攻并天德寺先手之事○小田原合戰事○秀吉公天下一本之次第○天德寺佐野	二二〇
へ御入部之事○佐野侍中出仕之事○御養子家老中へ御相談之事○天德寺御	二二〇
禮に上京之事○天德寺御隱居之事○信宣公天德寺へ不孝之事○普代の侍御	二二〇
暇之事○唐澤之城天明春日山に引築し事○信宣公信州松本へ御預ケ之事○	二二〇
佐野家老侍中色々義心之事○信宣公御申分訴訟之事	二二〇
<small>○長尾殿宗綱公を討大悦之事 以下十九條大學本を以て補ふ</small>	二二〇
香宗家證跡記	二二〇
左衛門佐様御支配御家臣連名	二二〇
下總佐倉同姓書冊寫	二二〇
香宗我部文書	二二〇
香宗我部證文	二二〇
新宮村西山傳兵衛所藏古文書之寫	二二〇

雜錄.....二四二

寶鏡寺建立勸化牒雜.....二六〇

寶鏡寺追遠記.....二六一

菅谷傳記.....二六六

信太範宗木田餘へ引籠事○信太範宗討捕事○常州無垂合戰の事○山王堂軍の事○府中と小川の百姓鬭諍の事○梶原北條眞壁謀叛の事○小田城責事○鳥出の臺戰の事○守治梶原北條と再戰事○藤澤の城軍の事○北條城軍の事○藤澤の城軍の事○木田餘の城軍の事○土浦合戰の事○氏治土浦へ落事○木田餘落城并田宮合戰の事○土浦の城開事

箱根山中城責由來.....二八四

忍城戰記.....二八七

清正高麗陣覺書.....二九三

關白秀吉公御治世之事○高麗陣被ニ思召立ニ藍觴之事○高麗御陣備定之事○名古屋御城普請之事○文祿元年正月朔日兩御所御對面之事○諸大名衆御暇被遺國々江罷下陣支度仕候事○各高麗渡海并釜山海城落去之事附けく

えう古都發向之事○ちくしうにて清正行長一所江行亂妨物ども焼捨申事○
清正行長又手分仕兩道江行別候事附清正都川渡候事○清正都江一番乗仕候
事○諸勢都江被_レ着候事附王をとらへ可_レ申とて清正行長又手分仕兩道を押
玄申事○長橋と申府中に王御通り候段札を立候事附鍋嶋異見候へども清正
承引不_レ仕おして參候事附はいれぐ人王をとらへ置候通清正へ注進事○清
正はいれぐの城本へ參着候事附清正城中江入王を請取被_レ申事○おらん海
人の城一日に十三取事附其内一之名城は清正自身乗崩被_レ申事○清正朝鮮
地江歸陣仕候處をおらんかい人猛勢にて附送候事○せいしう浦江能越せる
とうすをとらへ候事附後藤二郎と申通詞をとらへ申事○せるとうす王に對
面之事○鏡の城よりあんへん迄清正歸陣の事附つたひくの城に日本勢
被_レ置候事○本唐口へ參候小西行長其外日本勢敗北之事附都南大門合戰之
事○清正陣所あんへんね北京の大王より勅使之事○吉州より到來有_レ之に
付てあんへんより北青と申所迄七日路清正被_レ戻候事附鍋嶋異見之事○せ
るとうすを取ぬがし申事○かくなみ勢十萬餘騎の大將を清正自身討捕候事
附惣人數かせんは川へ追はめ不_レ殘討捕候事○大岡より御教書參都を明ヶ
釜山海迄引取候へとの儀に付て各ふさんかいへ引取候事○陣州之城日本勢

責る事附木曾判官を川に追はめ其頸日本に渡候事○日本勢諸所在陣之事附
やくさん迄七日路之間浦々日本勢取つゝ候事○石田治部少加主計を讒奏
仕候ニ付大閣御腹立被_レ成加藤主計に切腹可_レ被_ニ仰附_一との儀にて日本に被_ニ
召寄_ニ候事附二ノ傳奏日本來朝之事○二ノ傳奏登城之事○清正歸朝候て増
田右衛門尉所ね被_レ參大閣ねの御理之談合被_レ仕候事附清正の家老くやみ申
事○大地震之事附清正大閣御座候伏見之御城江參上候事○清正江政所様松
之丸様より御使并御上ろう衆其外よりも御使御座候事附清正下城之事○三
奉行衆より清正江使之事○清正御前を被_レ免大閣清正江御對面之事附清正科
無_レ之段直に被_ニ申開_ニ事附清正に豊臣之民被_レ下十萬餘騎の大將ニ被_ニ仰附_一
重而高麗渡海之事○清正并高麗渡海之事附奥十日路なで切附唐人鼻を切日
本江渡鼻塚を御築せ被_レ成候事○蔚山籠城之事附かくなみ人城中へ石火矢を
打かけ候事○蔚山追討之事附吉川藏人廣家江清正馬印を被_レ出候事○蔚山籠
城之間ニ不思議之奇瑞共御座候事○蔚山籠城之段并唐人敗軍候通日本大閣
様江被_レ遂ニ注進_ニ候事○重而蔚山籠城之事附寄手之唐人又敗軍之事○諸大
名衆歸朝候へとの使札參各ふさんかい迄被_ニ罷出_ニ候事○小西行長釜山海江
遅參候ニ付清正迎に被_レ參候事○釜山海より日本人歸朝之事○清正屬ニ家康

公一御馳走被ニ申上候事

石川忠總家臣大坂陣覺書……………三三一

○冬陣○夏陣○首帳○冬御陣之時主殿頭様御陣取并大坂迄武者押之次第

○夏御陣并押陣之次第

大坂陣山口休庵咄……………三五四

御陣前大坂衆喧嘩附御天守怪之事○大坂冬陣起り之事○諸卒人被ニ召抱ニ之

事○大坂御譜代衆人數高本知高之事○城中手配之事○博勞ヶ淵取出落去之

事○後藤又兵衛中嶋出張の事○城中浮勢之事○伴團右衛門蜂須賀手へ夜討

之事○志貴野合戦之事○十二月四日惣せめの事○御扱内談之事○榎井合戦

之事附伴團右衛門討死之事○五月六日七日合戦附大坂落去之事○天樹院様

御城出之事○赤座内膳伊藤丹後岩佐右近妙石寺へ行候事○國松様御生害の

事とき若狹はなし

土屋忠兵衛知貞私記……………二七四

大坂兩御陣供奉并 在國又江戸ニ被ニ殘置ニ輩○大坂御陣所ニ御番并御供之

品々又知行拜領御加増并 討死之輩并 乍ニ御改易之身ニ供奉高名之輩○大坂籠

城之輩○大坂方討死自害生捕退城○諸家名跡殘リ餘地減少之輩

嶋原一揆松倉記……………四〇四

嶋原天草日記……………四三〇

山田右衛門作以言語記

卷之一……………四五〇

貴利師檀始發之事

卷之二……………四五四

松倉人數深江村押寄事附郷人等高來ノ城ツケ入ントセシ事

卷之三……………四五五

松倉人數籠城ノ事附城内ヨリ三江村へ糧取ニ出シ事

卷之四……………四五七

天草吉利支丹起發之事附大矢野大司庄カラメトラル、事

卷之五……………四五九

天草城代三宅藤兵衛尉唐津使者立事附唐津勢天草押向事

卷之六.....四六三

嶋原一揆之徒頭等天草四郎大將立事

卷之七.....四六四

吉利支丹等嶋子へ取懸事并本渡合戰之事

卷之八.....四六八

唐津勢富岡籠城之事附郷人等富岡ノ城ヲ徒黨等兩度攻事

卷之九.....四七〇

嶋原天草ノ徒黨等爲ニ退治ニ諸勢押向事附一揆郷人等原ノ城へ楯籠人數ヲ配事

卷之十.....四七四

十二月廿日原城一番攻ノ事

卷十一.....四七七

元日原ノ城二番攻ノ事

卷十二.....四八〇

松平伊豆守信綱戸田左門氏繼有間下向事附隣國ヨリ加勢事

卷十三.....四八三

二月廿一日吉利支丹等夜討ニ出シ事

卷十四.....四八七

同月廿七日吉利支丹落城之事并根村源五右衛門先懸ノ事

卷十五.....四九二

山田右衛門作萬死ヲ出テ一生ヲ得ル事

卷十六.....四九四

寄手ノ人數歸陣之事附松倉兄弟流刑之事

休明光記

卷之一.....四九八

○蝦夷地惣論の事○蝦夷地警衛の掛りを命ぜらるゝ事并東蝦夷地七箇年御試として上地の事○懸り五人の有司商議并松前大炊介事○蝦夷地經濟の地大本伺の事并村上三郎右衛門遠山金四郎長坂忠七郎御用を蒙る事附官吏共

役割の事○松平忠明大河内政壽三橋成方井村上遠山長坂及官吏共出立且澁江長伯蝦夷地に至る事○御用聞町人共の事○江戸會所の事○御用船の事井政徳丸ヲモロヘ直乗の譯○天文者堀田仁助乗組の事○無名の御箱訴の事井中村徳三郎作一書のこと○細見權十郎西村常藏熊を仕留る事○シリウチより箱館迄上地の事

卷之二

.....五二七

松平大河内三橋村上遠山長坂等於ニ蝦夷地ニ品々取計の事井製札の事○南部家津輕家勤番の事○蝦夷地御用執政方惣御取扱となる事○大河内善兵衛遠山金四郎御役替の事○江戸掛り御手當の事○原半左衛門同新助手附之者共召連れ蝦夷地に至る事○御武器箱館井蝦夷地場所江備る事○松前獻上の品々相止此方より調進之事○在住之事○申年春三橋成方同年冬村上常福箱館に至る事○戸川藤十郎大河内善十郎蝦夷地に至る事○豆州波浮湊切割浚御普請の事○伊能勘解由測量として蝦夷地に至る事○長坂忠七郎御役替の事○諸家御買上來之事井姦人共御仕置之事○河田甚太郎蝦夷地に至る事○望月三作蝦夷地に至る事○エトロウ嶋開基之事井高田屋加兵衛定御雇船頭と成事

卷之三……………五三三

ウルツブ嶋に居住せしヲロシヤ人之事○蝦夷地御用得失の議論三奉行へ命せらるゝ事○松平忠明石川忠房羽太正養蝦夷地巡行の事并箱館船作事場出來榮國橋掛る事○カラフト嶋見分として中村小市郎高橋次太夫相越す事

卷之四……………五五七

戸川安論羽太正養蝦夷地奉行被_ニ仰付_ニ事○松平忠明石川忠房三橋成方出雲守種周朝臣等當御用御免の事○忠明忠房より申送可_レ承由御書付の事○御入費筋御勘定奉行と可_ニ申合_ニ由御書付の事○箱館御役宅并出立の儀伺の事○支配向の事に付申上の事○村上常福當御用御免の事○御入費向取計方伺書御勘定所江爲_ニ相談_ニ遣す事并一件の伺濟見度由御勘定所より申上たるにより御答の事○箱館奉行の御役名極る事○東蝦夷地永久上地被_ニ仰出_ニ事○蝦夷地取計ひ方の事に付御勘定所より存寄書を呈進し御答の事并御勘定所と贈答の事

卷之五……………五七七

支配吟味役被_ニ仰付_ニ事○蝦夷地新寺院開基の事○御入費取計方元極の事○箱館奉行御役料の事○正養叙爵の事○奉行吟味役交代時節の事○箱館御仕

置筋の事○箱館支配向被_ニ仰付_一事并御用濟御返し人の事○支配向在勤割并引越の者の事○奉行并支配向參上御禮獻上物の事○箱館御役宅出來并御普請懸り御褒美の事○御黒印御下知狀を賜る事并安論箱館へ出立の事○蝦夷地場所に行程を定る事并箱館六箇場所の事○アブタ牧取立の事○富山泉の事○交代屋舗造立の事○正養箱館在勤新田開發の事○制札の事○下役御増人の事○萬年橋の事○日浦孝女の事○常盤木橋の事○千とせ川の事

卷之六

.....六〇〇

ラシヨア嶋蝦夷人エトロフ嶋へ渡來の事○鍛冶村二孝女の事○石切地村長壽者の事○箱館回祿并鼎の泉の事

卷之七

.....六一五

南部領牛瀧村船方の者共魯西亞國へ漂流歸帆せし事○松前西蝦夷地上地の事附支記向御増人并地役雇の者同心の名目に成し事○カラフト嶋へ異國船渡來の事

卷之八

.....六三五

エトロフ嶋へ異國船渡來一件の上

卷之九……………六五八

エトロフ嶋へ異國船渡來一件の下附新規松前奉行兩人命せらるゝ事并箱館
奉行の御役名替りし事

續々群書類從第四史傳部目錄終

續々群書類從第四

史傳部 三

餘目氏舊記

奥州宮城郡引付、并留守之先祖之事、依_ニ御所望_一大概書進候畢、

彼家ニハ藤原氏天津兒屋根廿一世之孫、鎌足大臣大職冠_三、_{或本ついき不_レ申}正一位内大臣仁王卅九代、天智天皇御宇の人也、淡海公忠仁公、_{照宣公、}

粟田之關白通家御末葉、伊澤四郎家景、官途_ヲバ左近將監家景と號す、二代目民部丞家元、三代左兵衛丞家廣、四代左兵衛丞恒家、五代目出羽守家信、六代目遠江守家助、七代美作守家高、八代目美作二郎家冬、九代淡路守、十代彈正少弼、十一代駿河

守家助、十二代四郎詮家、母山内方息女_{主典方}まうてん腹也、大崎_{主典方}朔の上様之御判形にて、留守之家をつがれ候を、御_サたにて被_ニ腹切_一、下腹舍兄美作

持家留守之家ニた_レれ候、是まで十三代目に男子なくて、伊達大膳大夫持宗息、長谷五郎郡宗遺跡ニ被_レ立候、是まで十四代、其息に藤王九十歳にて卒ス、以上十五代、留守之家ニハ_或はたのくはんはくより家といふ字持字なり、景といふ字先祖ニ候へ共、それは_レしての字に候也、伊澤とこそ可_レ申ニ、號_ニ留守_一事ゆいしよ候也、奥州_{新方}ヲバ仁德天皇之御宇ニ當、將軍忠平と云人平泉ニ居住して、王のけしんニて奥州ヲ知行ス、いせいニ尙々まし候也、其後後冷泉院御宇、安部貞任ト云人當國探題也、其時八幡太郎義家さだたうをつい_追ふくし、秀衡祖父_或なりの權_或太郎清平たんだいニ定め給ふといへども、秀衡いせいニふけり、兩國を公領とし、越後のうかいよりこなたヲ知行し、ちよくちやうをもそむき、かまくら殿平家をたいぢし、日本國を掌の内にし給ふといへども、えたがひたてまつらざりしゆへに、文治五年ニ御發向有て、秀

衛たいちし、平泉まで御下向候て、御歸ニ三迫おつゝみ松山と申所に御陣をめされ、兩國を日本の諸侍に御配分、其時賴朝奥州守護ニ畠山庄司重忠をなすべきと被^不仰出、梶原平三景時をげたいニ内々ふくはいの間、申ていはく、昨日の秀衡今日の重忠たるべしと申間、賴朝さて本朝ニ賴朝ニ心安き輩誰か候べきと被^レ仰、其時かちはら取あへず申ていはく、誰と申とも伊澤の四郎家景ならでへと申によりて、賴朝の御誼ニ、所詮日本第一の大國なり、此絶^感賴朝居住と存候共、鎌倉ニ歸べし、然^レバ常ニ動座有べし、其間の留守と號して、家景ヲ可ニ指置として、則御判をくださる、如何ニいせいふけん候へども、外様ニハ執事、侍所といふもの候はず候、留守ニハ佐藤をまつじといひ、南宮ヲ侍所と云候、大崎、京都より貞和二年ニ御下向まへは、佐藤をば御父と云、家部をば御母と云候、六代目遠江守家助の代までは七百郷知行、九代目淡路守までは、名取宮城百廿郷領知ニス、大崎ニハ兩國諸侍の御座前々より相定候、伊達、葛西、南部三人ハ何事も同輩御座ス、一間か口さがり候、前々

ハ留守殿ハ伊達、葛西より扇だけ御座あがり候、伊達宗冬威勢を取られ、留守家助いせいをうしなはれ候以後、留守座一間半さがられ候、白川、蘆名、岩城なども一間半さがり候、桃生、登米、深谷、相馬、田村、和賀、稗貫などは二間口さがり候、伊達、葛西の一ぞくはそれよりさがり候、家景當國へ下向候時、宇都宮と留守ハ兄弟のながれにて、うつの宮やくヲ芳加もち候程ニ、宮城の役をもはがが可^レ持候を、所詮當國の案内者たるにて、家景頼まれ候て供いたし候故ニ、佐藤役を持候、大崎殿御下の以前ハ、兩國ヲ公家のりんばんニ、三年持ニ御持候、其後三年ニ一度ヅ、或ハ國司或探題守護下給ひて、弓矢也、中頃奥州ニ四探題也、吉良殿、畠山殿、斯波殿、石塔殿とて四人御座候、まば殿とは大崎の御弟にて候、應永七年ニ牛袋ひじりのほり給ひて、京都より國一圓の御判下て、後大崎殿一探題なり、將軍ハ申事なふ候、國司ハ公家もち給へば、こくしと申し、探題は國司の次ニ候也、其次ニだざいの大貳、小貳、其次ニ守護、目題とて候、探題は京都公方様、筑紫

と陸奥國ハ國遠く候とて、御代官ニ指置御申候、しゆごと申候人ハ日本ニ三十餘人候也、いまは探題ハ奥州計に御座候、玄ゆこのうはて也、かくべつの義也、能々此御思慮可然候也、留守殿は動^{ヤモスレ}まけ大將之味方ニ候、ぶげんさがられ候也、大崎御下以前、きら、畠山殿の國あらそいの弓矢たへずある時、畠山殿、宮城之内岩切ニたちこもり給ふニ、吉良殿うちほこり給ふ、畠山殿留守一族ニ吉田と申人をたのみ給ふ間、夜中に及でぐそくし奉、遠江守家助在城へ門ヲたゝき、吉田が參候と被^レ申候間、無難きどをひらき候處、畠山殿御供いたし家助のさぶらひへ御越候間、不^レ及^レ力同心し奉る、さる間岩切にて畠山がたさいげんなく打死ス、其時畠山殿、留守方は^サなくも、玄やうへひたれにて、夜ひそかに卅人、馬ニくつはをまき候て、玄ほがまの内ちんニかくれこもるを、吉良殿がたより引いだしきられ候、國分^サきら方をいだし候、家助のくびはいかずちと成て天へ上候、家助ハ男子をもちたまはず、桃生山内方の智也、二年まへに自拍子わき二人にて、留守殿在城こまざきへ出

仕ス、わき自拍子十七ニ成候を一夜とめ給いて、その腹に三歳になるわか一人もち給ふ、かの母中野といふ所ニ住居ス、然バ留守殿腹を切られ候うへは、六十六郷一時にやぶれはてぬ、かの白びやう・もはだかニせられて、たけなるかみにてうしろまへヲかくし、若子ヲかくし置て、ゑんじやたる間、桃生へ下り、山内方を頼むといへども、まけ大將のかたをし給ふ人を不背にて、かくごに不^レ及^レとして、小鹿^サへ葛西を頼むといへども、是も格勤に不^レ及、ぬかのぶへ南部を頼みくだす、南方三年留守殿をかくごし、六歳之時、三千餘騎の衆にて押てのぼる、その程三年が間、留守名代たゆるなり、留守一ぞく吉田と云人、卅日留守どのとて留守とよぼる、去間南部勢はい坂までをしてのぼる間、吉田の方、矢を一^ツいすして自落^ス、手くだかで留守に成給ふ、美作守家高之事也、如何に親子の間たりといふ共、こゝろざしふかきとて、家高ハ母儀の棟見へ候所にて下馬す、神妙之由諸人云々、伊澤四郎家景の舍弟宮城の小四郎家業トいふ、そも宮ざと名乗根本は、頼朝御逝去以後、頼家鎌

倉殿に成給ふ、無^レ程御死去、御弟實朝將軍ニ也給ふ、彼御代彌次郎左衛門といふ朝敵いできたり、たけは八尺貳分、男力は七百人がちからなり、わづか手勢三百餘騎たりといへども、勢衆をばうしろニおきて、只一騎數十万騎が中ニはせ入防戦すといへ共、矢かたなも不^レ立間、かなふべき様なし、鎌倉殿ニハ平家ヲたいらげ、秀衡をほろぼし、四海をたなごゝろの内にしたまへども、彼彌二郎左衛門は、えんたいきわまりたまいて、六十六箇國へ御札を立、かのぞくとをくみうちしたらん輩は、くんこうけんしやうのぞみによるべしとふれ給へども、日本ひろしと申せども、御ふだニ付てのぼる俗なし、小四郎家^成なり、御札の面に付て在鎌倉し、くみうちせんと思立て、老母の方へ暇乞に立越たり、老母對面してはいはく、さても鎌倉にては平家^ヲたいらげ、木曾をえたがひ、秀ひらをついふくし給ふといへども、かの彌二郎左衛門御しんたいきわまり給ふを、汝がくみうちせんとはおろか也、まげてといまり給へとせいしけれども承引せず、其時老母目のまへなりし女房衆をよびて、

ひそかに物^ヲをのたまへば、良久有て、から竹のねのふしあい一寸づゝ有^ヲしとうばんニすみちがへニ置て、家なりがまへニおく、母その竹をひしぎ給へ、先あまが所にて力わざヲ見んと仰けり、家なりハ此竹おせども、不^レ叶、其時女房衆ニ竹の櫛を取寄ツ、小ゆびにてやすくとひしぎ、さてもあまがこゆびの力^ヲたにももたざるか、てきにくまんと思ふ事いはれなし、たい思留り給へと仰けり、かの^尼公は畠山重能の息女なり、祖父がたの力也、然ども小四郎えきりニ可^レ登と申間、母さらばちから武者ニくむやう知り給ひ候かといふ、不^レ存候よし申、更ばをしへべし、力武者をば先引おとせば、かならず我がしたに成なり、てきのぐそくの袖をくさずりととりて、先我馬よりとつておりひきおとせば、必くみしくなりとをしへ給ふ、さて小四郎家なり鎌倉ニ登り、此旨披露ス、鎌倉殿ぎよかん有て、軍ヲはじめ給ふ、げにも彌二郎左衛門三百餘騎ヲ後ニおきて、一騎はせまわるに、面ヲあはする人なし、其時小四郎家なり駒打よせて、奥州より留守家景が弟伊澤小四郎家なりとは我事

也、くみ給へといふ、彌二郎左衛門をしならべてくむ、母のをしへのごとくくみふす、刀をぬきくびヲはん分かきたりしかば、彌二郎左衛門足のあぐとにて、ぐそくのをしつけヲ二打うちければ、大力ニうたれ二つへ計まへニ打いだされ、せつしゆす、ゆめのごとくにおもひけるは、さてもかほどの高名ヲとげて、人にまやうこ取られてあしかりなんと存、ゆめのごどくはへおき、左のみゝをすこしきりて、たゝうがみニつゝみ、むないたニをし入、又せつしゆす、そのまにまう勢おちかさなりてくびをとる、かくてまづけんの以後、家なりはれゝゝとして君の御前に參、今日の朝敵くみ打のよし申、鎌倉殿御誕ニハ、他人しやうこを持參のうへは、子細ニおよばずと仰有、其時家なりくびヲめしいだし、重而まづけん有べしと申間、めしいださる、家なりてきの耳を取ていで、ひきくらぶるニ無相違、實朝の上意ニハ、家なりが高名比るいなし、一箇國も二箇國も可_レ給と被_レ仰、家なり奥州ヲ可_レ給と申、かなふまじき由御誕なり、さらば宮城之郡ヲ可_レ給と申、仰ていはく、兄家景が在城也、

叶まじき由被_レ仰、さらば宮城と申所名計被_レ下べしとて、にかたけの郷宮城本郷と申、かの一郷ばかりにて宮城とら書ヲする、小四郎家なり、二男わらは名にてぼう丸、菅谷ニなる、五郎家冬と號す、是すげやの先祖なり、前々ハ留守一ぞく十七人也、一番の一ぞく頭宮城方也、村岡先祖文明とて、是二番め、一ぞくとがうす、八幡庄三箇村の事ハ、文治より朝頼の御判にて給置、八幡介と號す、末世たりといふとも、於_レ留守一彼方にまゆくい不可_レ有也、國分ハ小山より長沼相分、ながぬまの親類にて、出家にて下荒井が先祖也、きへ僧たりしが、きようたるによつて聲に成、けつく正印とがうす、果報の人也、動かち大將味方ヲいたし、其いせいいやましニ候也、荒井七郷ハさい所の三河守とて、さいまよの先祖之恩なり、かの七郷知行のとき、まはがまのさいれいニざせきに名馬ヲかたはつなにつなぐ、彼馬くるふ事申計なし、諸人かたはつなぶさたのよし云ければ、さい所申やう、荒井七郷ばかりにて、もろはつなつなぎかたしと申、國分がたニハ此義をき、あらそう處ニ、國分

藥師堂かやくようのとき、むながきにたづな、さ
 いまよの三河守と候ヲ見て、其後無_ニ其沙汰_一候也、
 一尊氏將軍鎌倉の先代九代めの將軍高時を、弘元二
 年五月廿二日ニせめほろ_{●は勝力}し奉り、せんだいの御
 一家の御在城、一日に六十二城御本意候事、ゆへ
 なく鎌倉殿に成給ふ、中先だいとて、幾程なふし
 て、又鎌倉殿へ打入給ふ、建武の比、又たか氏將
 軍御本意とす、其時兩國軍勢鎌倉へ馳參、留守代
 官佐藤兵庫助高名仕、忝も尊氏將軍の御自筆にて、
 佐藤の母衣に河内守とじゆりやうを被_レ下候、然バ
 五十四郡の外様、又被官ニ鎌倉殿の御さぶらいへ
 めされ候人跡、葛西の末永と留守の佐藤兩人より
 外はなく候由申候、

一留守七代め美作守家高之時、河内七郡には澁谷大
 椽泉田四方田とて、文治五年ニ當國ニ下外様に四
 頭一揆にて候しが、千騎衆たり、留守殿ニ五人一きヲ
 いだし、連判ニのる、まぶやの一ぞく、その内の大
 椽四方田、いづみた一ぞく悉く_●連判ス、其中にか
 さも候ける哉、中目上總介とて取分連判ニのる、留
 守けいづニそへ候て、末世いまにいたるまで候也、

一又留守、葛西、山内、長江、登米五郡一揆いださ
 れ候、連判も文書ニそへ候、留守の家ニハ取分頼朝
 御報恩ふかきにより、源氏をまほり奉ルべきよし
 代々議定ス、大崎殿御先祖、京都九代以前御當家は
 じめ、尊氏將軍公方ニなり給ひし、御さうそふ_●ハ、兄
 弟三人也、斯波、澁川、足利也、斯波ハ京都武衛
 の御事、まぶ川ハ今ニ御座候、あしかハ三番め
 にて、京都公方様の御事候、武衛日本二番の御人
 にてわたらせ給ふ程ニ、將軍の望御座有べく候と
 て、畠山徳本のさたヲもつて、前々ニ畠山殿、細川
 殿兩官領職ニ御座候を、三職にかうし_●武衛を官領
 ニス、さて將軍の御のぞみ御座なく候也、いまだ
 ぶるい所にて御座候時、大崎の十代以前、在京權
 大夫家兼長國寺殿、公家官從四位上也、京都七條
 より貞和二年ニ伊達神大名_●りやうせん_●と申山寺へ
 先御下、彼所ニ三年御座候て、其より河内志田那
 師山へ御つき有しより、無二無三ニ留守殿守ニ大崎
 候、十一代駿河守家明、十七年畠山殿かたをいた
 し、八幡介ハ家明のあねむこ也、十八ニ成、長世保
 長尾郷はひろくきと申候所ニ取陣、其勢七百餘騎

也、氏家三河守其比當國の執筆もたれ候間、岩手
ざはより手勢三百餘騎にてはせつき、日之内に七
度陣をとり候、火をゆる程もなくして、互七度破
やぶられ候、留守八幡兩人七十八にて馬はなれ、
一所へおちあひ候、被官一人も供いたすべき様な
く候處ニ、童名をさいまつ孫二郎と申候中間一人、
家明の供仕候、氏家方家明の陣屋の口まで馬をか
けよせ、太刀のめぬきをうちおり、陣屋の内へさ
かさまにたつ、てきも味方も可取やうなし、其時
岩手澤、吉田の道場時衆飛入、重代太刀取られ候、
七度合戦候へ共無隙候て、つゝに陣屋に火をかけ
ずして、治合戦候て引退、乍去兵庫助打死ス、彼
人うたれ候計にて留守まけ軍と云々、八いろくき
の佐藤とは此事也、

一 小山御退治有べきニ付て、鎌倉殿へ京都より兩國
ヲ渡可進候間、鎌倉殿の御代官入候て、山形殿ハ
出羽守護にて御座候、大崎は奥州の探題にて御座
候、何も不可有ニ相違ニ可被守之由、京都より
御誼候間、兩國探題守護諸外様在鎌倉をす、十一
年つめ候人も有、九年つめ候もあり、留守殿駿河守

家明ハ十九年在鎌倉ヲす、一大ほうじ方と山内方
よりあいて廿間の家を二百貫文ニかい、はん分ヅ
ツ宿ニス、其内ニ持氏の御祖父に永安寺殿御逝去
有、留守殿國にては親之千秋萬歳にもあはず、一
期の以後もらくはつせざる人神人たる故ニ候へど
も、在鎌倉の時ハらくはつす、かまくらわらへど
も、小入道見よとてわらいければ、又人申様、國
にては金の足だをばく人なる由ほうひす、大崎殿
鎌倉にては瀬ヶ崎殿御宿をめされ候間、せがさき
殿と山形殿ハ長尾に御宿たる間、長尾殿と申、京都
にても、御一家をば小路の名を申、瀬ヶ崎殿御出仕
之時、諸外様之後ニ御出仕候、兩國外様庭へいで
つくばい候ニ、こしよりおり給ひ候て、えんのき
わにてあしなかをめされ、御こしもたをめす、御
座へ御入候を、上杉の房州中書官領是を見て、斯
波殿のふるまいあまりくわしよくなり、とがめべ
きよし云々也、其比奉行人數不絶殿、二階堂殿、
きら殿、ゆき殿と云、人數被申けるは、玉々守護
探題はわたくしならぬ事候、昔ハ大裏よりりんじ
にて候、此頃は公方様の御判にて被成候、奥州探

題職被_レ下候時は、京都公方様より會津、白河、伊達、葛西へ御内裏御教書にて、斯波左京大夫入道國一圓をまかせ置所也、彼義ニ_レえたがひ奉り可_レ被_レ中候由被_ニ仰下_一候鶴、然_レバ何事も武衛御同輩候、所詮京都へ人を被_レ立候て、武衛御口_様を御らん候て、御とがめ候べく候と被_レ申候ニ依、尤とて都へ人を被_レ立候處ニ、使京着して翌日ニ、公方北野へ御參詣有、京都十三人大名およそ御供、細川殿、畠山殿ハ御輿の立候二丁計こなたより馬よりおりあゆみ給ふ、武衛の御輿ハ立候まとは比計まで御馬ニめされ、そこにており給ふ、其時御使鎌倉にかへり、如_レ此と申間、房州尤さるべし、國の守護ト申ハ其國にてハよこ座ニ居ス、ひざ不_レ立焼物のうらくわす、はしのくわてんせず、まして瀬ヶ崎殿はたんだいにて渡候上ニハとて、つゐにとがめず、如此候間、一事ニ宮城ニハ大崎ヲ守られ候よし、大崎ヲ守候外様は留守、八幡、國分、山内、長江、登米、一迫、うはかた、二迫、長崎、和賀、稗貫、遠野、相馬、田村、白川、岩瀬、信夫、其外あまた候よし、如_レ斯御わかり候間、いまニお

ても大崎よりハ京鎌倉公方様へうら書を御申なく候、日本ニハ二人とも無_ニ御座_一候由申候、山形殿はうら書を御申候、山形殿ハ大崎、京都より御下の二代目、左衛門尉大夫大興守殿の二番目の御曹司、修理大夫兼頼と申候、大崎都より御下候て、十一年後ニ延文元年ニ大崎より出羽へ御越候て、守護ニ成給ひ候、御曹司とはいかにいせいふげんに候とも、平氏、藤原、橘氏、其外八十氏の人の子どもをバ不_レ可_レ申候、源の御子ニかぎりて申候、其故には八幡太郎殿わらは名をさうしこと申候程に、御内人御さうしと申候よりはじまりたる事ニ候、去間平家御子をばきんだちと申候、一駿河守ようせうの時、高森ニ五木田入道といふ者有て、留守のさたをもつ、留守霜臺死去之後、鎌倉へ次目の御判可_レ申候ためニ罷上、程なく申下、忠節不_レ可_レ有_ニ此上_一と存候、其夜佐藤、南宮同心しこきた入道を夜打ニうつ、そのおんりやういまニ宮城に候也、又其以後大崎御被官澤田の口_様主留守長門彈正と云人、師山を知行シ、みまや別當なり、御不審にて宮城へ越て、駿河守ヲたのみ、佐藤後

家ニさいあひし、器用たる間、宮城のさたをもつ、郡中に村岡方いせいたる間、いかんとしても村岡をたいぢすべしとなしなむ、あるとき葛西へ此旨云越、その狀を路次にて飛脚取おとす、此狀いな澤へ來候間、村岡宮内少輔方いきどをりふかくして、駿河守と一城になりて、彈正らをうたれ候、

一駿河守悉本所を國分へ取られ候て、其いきどをりおびたいし、大さき六代朔の殿御舍弟彌三郎殿直兼と申候、後に青塚殿と申候ヲ、我が城高森へ申越、我が宿所うわたてニ置奉り、駿州ハ中城へおり、其後ハ村岡城おと森へおり給ひて、代官に村岡刑部少輔遠江守舍弟也、南宮、佐藤ヲさしそへ奉り、いつきかしづき奉り候、國分をばたいぢし給はず、結句むこニ成給ふ、然バ大谷保に其比城くはくなし、さと在所までニ候を、代官を入、三年知行し給ふ、竹城保宮澤大利八郎とて有、其在城せめおとし、二年御知行かはうちにもかなたこなた百餘郷知行し給ひて、名取も大かた御手を入られ、すでニ國ニ二人の大將のごとく也、宮城衆つぎ目其外所帶等之時ハ、まづ高森殿と申、かの御

判を給、次に留守殿判をとる、彌ちやうくわの間、彌三郎殿嶋へ御下の跡におしのけ奉ル、朔の上様も宮城衆十分之至也とて、青塚どのを御不審にて、やうく青塚郷其外二三箇所計もたれ候て、一期ヲくらし給ふ、其時宮城衆大崎ヲすてたてまつり、伊達ヲ〔伊達ヲ〕たのむなり、

一應永年號はじめつかたの事也、村岡文明の子孫、總州とてせきねに有、其息四人也、宮の前其外かなたこなたニ居住ス、其親類遠州と云候、親父宮内少輔とて京の人有、其舍弟兵部少輔とて殊更大きやうの人なり、用心館調、弓箭のちやうき、ひやうちやうならびなし、於レ今かのさたをまなぶ也、宮内少輔いまだ又二郎の時、そうりやうたりし村岡總州ニせつかんせられ候て、かはうちへ罷出、大崎致三奉公、加美郡小泉郷ヲ御恩給、大いぬ塚ニ居住ス、こほり大狼塚ニて調義し、一夜之内ニそうしうを父子五人うち、應而兄弟被宮十七人にて、いな澤のたちヲ築、留守方三百餘騎にて取陣、村岡兵部少輔うち死いたすべきとおもひさだめ、かみヲあらひしが、てき押よする間、かみヲゆふべ

き無隙日夜七日が間やぐらニのぼり矢ヲいる、それにより候とて、一期之間かみヲあらひ候ては、廳而絲もとゆひにてかみヲゆふ、角テ大さきより朔の上様、宮ぎへ馳給ふ、府中山いたやどをりヲ大木をきりふさぐといへども、事ともせず、そうの關へ御出張候間、留守殿おそれたてまつり、陣ヲ引退給ふ、其儘村岡ニ成、兄弟いせい無_ニ申計_ニ、村岡兵部少輔、大崎いくさ奉行ヲもつ、稻澤西城をつくべきよし、兄宮内入道存命之間、雖_ニ佐言_ニ不_ニ承引_ニ、宮内ちやく子遠州いまだ又二郎之時、親父の不審ふかくして、大いぬ塚の佐藤といふ人類たる間、かの所ニ居住ス、一期ノ後も三男六郎太郎とて、兵部方の智也、かれニ遺跡ヲゆづる、兵部名人たる間、わが智をば不_レ立、遺跡筋目たるとて、ちやくし又二郎ヲよびかへし、村岡とよばず、如_レ此きたニより、遠州の代ニ西館をゆるすあいだ、つかする也、村岡遠州家明のむこ也、四郎方切腹の事いきどをりふかくして、四郎の舍弟山内腹に飛驒守いまだ三郎二郎なりしを取立可_レ成留守とて、義作守ニ矢をいる、西館兵部少輔ち

やく子長門守高森かたをし、伊達之勢衆を引入ル、東館遠江守ハ三郎二郎ヲかくごし、大崎ヲひき、三年の弓矢にてつゐに兵部入道遂ニ本意、長門守村岡ニ成、

いまだ年號はじまらざる時に候、まほがまの大明神仁王十四代仲哀天皇御孫、花ぞの、新少將にて流人として宮城高府ニ下給て、其後歸洛し、東海道十五箇國北陸道七箇國兩國御知行有て、御一期之後まほがまの明神とあらはれて、大同元年ニ宮城のこほりニ立給ふ、當永正十一年まで七百九年ニ成給ふ、昔ハ當國諸郡ニ神領有、行方保にも、宇多庄にも、そとのほまニ有、ぬかのぶニあり、三迫ニ有、黒河ハ不_レ及_ニ申候、小田保ニ有、まかまの保にも有、大谷保、羽生よりハ七月御神事ニあふ、屋代同御へいかみあがる、三迫、高泉よりは駿河守之代まで御へいがみあふ屋の代あがり候、大崎殿ハかならず國ニ立給ふべき御曹司御くはいし_生ようの時、まほがま大明神御かけをさし給ふと申傳候也、留守殿は當國へ下之事、文治三年_{ひの}い_ひつ永正十一年まで三百廿七年也、葛西も同年也、

伊達ハ關東伊佐より文治五年

つちのと

ニ被_レ下候、

三百廿五年ニ當也、迄はや先祖泉田四方田、文治四

年五年ニ、下大崎ハ貞和二年ニ下給ふ、當年まで

百七十年に當る、山形殿ハ大崎より十一年後ニ御

越候、延文元年ニ百五十九年也、留守殿ハ十六代

ニあたる、伊達殿ハ十六代ニあたる、南部殿ハ甲

斐國下て六代なり、葛城殿ハ家口まで十六代、斯

波殿ハ四代ニ成給ふ、一迫狩野殿ハ六代、大崎ハ

十一代、御世ハ九代、山形殿ハ九代、黒河殿ハ六

代にてたへ給ふ也、

一

有時

吉良殿、畠山殿とり合也、吉良殿ハこま崎

ニ扣給ふ、畠山殿長岡郡澤田要害へ打入給ふ、大

崎ハ近所也、大崎より打出、羽黒堂山、長岡之地藏

堂山に陣を取給ふ之間、こらへかね、すでニ長世保

井番神ニ築_レ館給ふ、從_ニ大崎勢_一鉢森ニ取_レ陣_也、かま

河ヲへだて、其間一里へだて、中せひひやう遠矢を

いる、なかさしにて家久侍ヲいころす、矢一にて

彼城引退、竹城保之内長田ニ築城、又吉良がたよ

り日々とり合なり、葛西れんせいの十番め子、富澤

の先祖右馬助とて、所帶の一所も不_レ持、こ_うと_う

ばかりして候よし、又_うはかた先祖か_いめう_形玄ゆ

さんとて、是も在家ノ一字も不_レ持、但かの仁ハ内

力候よし、有時雨中ニ徒然のあまりニ、典厩玄ゆ

さんの方へ立越て云、爾もか程の國あらそひの御

弓矢ニ侍と成て、身をもたざるハ口惜しと、いは

く玄ゆさん如何とたつね候ニ、馬具足ヲはしもち

候は_いやすかるべしといふ、玄ゆさん、さらばそ

れがし_えちニ取候具足、同馬一疋借進べしとて、

二人奉公ニいづ、但一所ニ罷出候ては、自然軍無

レ曲してはかなふまじ、吉良、畠山御兩所へ可_ニ罷

出_し、一方かち給候は_い、こ_ろへをもつて何も

身ヲもつべしと思案ヲめぐら_え、玄ゆさんハ畠山

かたへいで、なかつたの城ニこもる、てんき_典うはこ

まさきへいで、吉良殿ニ奉公す、玄ゆさんひそか

ニいで、典厩ニいはく、明日調議ヲさせたまへ、

今夜つかねのぬきとをしを、地とこ五寸おきて、

鋸_{ノコギリ}をもつて十本ばかりひききるべし、御身かまを

持つめ給へ、我らやりをもちて役所をこらへ、ぐ

そくのうへばかりつくべし、其時かまにてぬきと

をしを引給へ、やすくやぶれべしとをしへければ、

てんきう吉良殿ニ參て、明日彼城責られべし、それがしさがけを仕、やすく御本意をとげべしと申、さらばとて御調義有て、そのごとく破給ふ間、三間ハ海也、落所なくして舟にてかいどうへおち給ひて、其儘二本松殿ニ成給ふ、其時の忠節により^{うはら}方ニハ二迫三國郷を被^カ下、富澤には三迫とみさはの^{郷カ}口^ヲを給る、其後いせいいやましにて、富澤、三迫、高倉庄七十三郷、西岩井のこほり卅三郷のぬしたり、うは方は二迫、栗原、小野、松庄廿四郷今ニ知行ス、吉良殿ハ大崎御いせいたる間、弓矢ヲすて、是も安達郡へのぼり、玄ほの松卅三郷計持給ふ、

一吉良、畠山數度取合ニ、兩所た^ニいぐん^軍にて、一度ハ無事ニ御談合ヲもつて、奥州ヲ半分ツ、國わけヲし給ふ、其時ハ糖延郡と、みやぎヲバ一郡ヲ半分づゝわけ給ふ、そのゆへは、ぬかのぶは大郡といひ、玄ゆゝのこほりたるゆへなり、みやぎは國の府中^{府中}にて、昔より國々あるじ御在所たる間也、一留守のひくは^{ひくは}ん年來之事、芳賀、佐藤、南宮、笠上^{笠上}すり殿と思加^{思加}最所さいしよとは、八幡のほうじ

やうへニ、留守代官被^レ越、さいしよニかはヲ見候程ニ、如^レ此不^レを申候、せんふ、さかしら、さつくわ、おかしま、鈴木、鶴谷、安太夫、源太夫、是等ハ大概宮侍也、朔十五日ニかならず玄ほがまへ參詣シ、御へいヲ取給ふニ、朔ニ月袴^{ツキ}きつき事昔よりのほうにて候、

一京鎌倉より御内書、御教書、奉書下候ハ、大崎御下のまへは、先宮城へつき候て、其後伊達、葛西^{葛西}へ筑也、大崎御下候て以後ハ、大崎へつゝき候て、二番目ニ留守へつき候、高森ニハ昔ハ當國外様出仕をいたし候間、い^{伊達}だて屋敷葛西屋敷とて候也、一ひでひらヲバいせい日本一たるゆへニ、日本國ニてみたちと云、留守どのをバ昔ハ當國ニてみたちと申候、ざいかまくらの時、永安守殿御ゆ^ゆいかいニ、今若御曹司、乙若御さうしとて御兄弟御座ヲ、兩國之御主に可^レ奉^レ成と御ゆひかい候間、鎌倉殿御臺様かたじけなふも、御す^{みか}へハ伊達入^入・白川入^入道ヲめされ、御玄やうじごしにいまわかヲくだす事、い^いだてヲ父とたのみ、玄らかはヲ母とたのむべきよし被^レ仰、恐々餘ニ夢ノ心地して、畏て候と

申上、上杉の司忠官領職にて、兩御若君下給ふ、御宿ハ白川殿也、伊達殿鎌倉へおりのほりの定宿白河也、御へん小路の五郎左衛門云者のかた也、白河殿の中間所也、上杉藏人太輔がうちニ馬ヲ扣、大家ヲ宿ニ可_レ取と被_レ云、五郎左衛門が家、關一の大家也、かれを宿に可_レ取といはる、伊達政宗如何ニ官領にて御座候とも、侍程之者ノ不_レ可_レ引よし被_レ云也、及事候間、白河方伊達殿ニ手ヲするといへども、政宗不_レ承引、其時桑嶋先祖、宮澤の先祖、兩入道其座ニ候しが、たゞ白河殿の御志ニなさるべしと申間、政宗十里ばかりある山家へ宿をかゆる、はやいこんに候歟、其後又玄ちう、いたで、白川へ先ニ御公領ヲ可_レ被_レ致進上_北といはる、心得がたく乍_レ存、伊達よりハ長井はうちやうの三十三郷、あらかはよりは宇多庄ヲ可_レ進之由被_レ申、しちう庄などは心得がたし、郡ヲ進上ト被_レ云候故ニ、宮澤之先祖申様、此上ハ思召被_レ定、大崎御一所にて京都ヲ被_レ守、御切腹候べしといふ間、伊達殿其旨ニ同事迎ヲよびのほせらる、五百餘騎勢衆のぼる、去間白河中ニハ伊達可_レ被_レ逃、打留よと

相ふれけり、政宗宿ニ心ヲあはせて、出羽ニかりてにげくだる、去程ニ白河中かねたいこヲ打テ、三千騎計おつけ、信夫庄までおいけれ共、おいつかずして引返ス、大崎殿ハ瀬ヶ崎よりにげ給しが、大勢ニおはれ、又行さきも大切之間、仙道大越ニて、ひそかに御はらヲめさる、御子四代目のそくとう積灯寺をば國ニ置奉、御孫大洲賀さま向上院殿十五歳に成給ふヲつれ奉りしがにげ給ふ、東福院、對馬守十七人御供のうちたりしが、仙道の中塚といふ人の聲也、彼方へぐそくしたてまつる也、それより御とも十七人ヲ、女房いてだちニて南長谷まで御下、それより大崎へ付給ふ、去間伊達殿京都へ注進被_レ申間、美濃國さんたんじ、若木、吉家、越後、梶原わたり半分給、長崎も若狭くらみの庄ヲ御給候、角テ應永七年ニ新田の岩松殿大將にて御下、伊達、西根、長藏要害せめそんじ、大打せられたれば、かまといふものにて七日くひをつく、其後中一年過、上杉殿大將たて、應永九年ニ廿八萬騎にて被_レ下、伊達一ぞくなぐら入道本人たり、存旨アリテ要害ヲ引、西根、長倉、あ

かだテを築、かの所へ廿八萬き押よせ、日々大將勅使河原の兼貞十三歳なり、せめそんじ、しのぶまで切付られ、一騎不殘うたれ、兼貞虜ル、政宗悦の餘に一首の歌を詠す

二度の弓箭の花は是かとよ

やちよノ橘千世の梅かえ

大たき五代目向上院殿之御事

自三大崎ニ大す須賀か様御さうしにて、老田城へ御登、

三年御扣候し、長世保ハ其時以ニ忠節、いだてニは

大崎よりの御判形にて知行候也、左様ノ引付にて、

老田方代ニ大崎の御えぼし子なられ候、花山播州

まで如レ此候、此間播磨守元宗、京都御官領細川勝

元ノ御一字にて、其例違候、大さき御一所ハ伊達

殿小外様ニ登米方二人、其外兩國諸外様かまへら

がたヲいたす也、又於ニ登米一いたち澤といふ所ニ、

かさい衆桃生、深谷、其外奥六郡同心也、張陣ス、

自ニ大崎ニ中目太郎三郎御代ニ下討死ス、立死也、

雖レ然合戦勝利之間、無難大崎殿國をせいひつし

給ふ、其兩若君ヲ殿之御所と申、如レ斯御弓箭取ま

け給て、二度鎌倉へ不レ可レ登とて、仙道ニさ、川

はどのニ成給候、

一大崎御文書ニハ留守様體をへらし、留守文書ニハ

大崎日本國に御書様牒之事、

一京都公方様へハ進上書、時之御指南之名ヲ被レ遊ニ

思召ニ候を、武衛御視處御寄方取分武衛御舍弟三條烏丸ニ

御座候て、下屋形と申候、其御指南之時者如レ此、

進上 烏丸殿

左衛門佐敦兼

裏書ハ無ニ御申

一其後ハ飯尾肥前守殿、今ハ伊勢守殿之御指南カにて

候間、

進上 伊勢守殿

左衛門佐敦兼

武衛様へハ 左行少遍ヲ懸勤ニ被レ遊候

謹上

烏丸殿

左衛門佐敦兼

御宿所

互ニウラガキナシ

アナタヨリハ

謹上 左衛門佐殿

左兵衛佐義俊

御報

はたけ山殿ハ御同輩也

謹上 烏山殿御宿所

左衛門佐敦兼

謹上 斯波殿

左衛門佐殿 御名乗

御報

武崎口如大崎はちとこなたヲ御賞致候

細川殿へハ如^レ斯

謹上 細川殿御宿所

左衛門佐教兼

謹上 斯波左衛門佐殿

左京大夫勝元

御宿所互ニウラガキナシ

謹上 山名殿御宿所

左衛門佐教兼

赤松殿 六角殿 土岐殿 京極殿ヨリハ少

緩怠ニ被^レ遊候伊勢殿へハ内封にて候アナ

タヨリハ伊勢守ウラガキアリ

謹上 氏家三河守殿 貞宗

御奉行より飯尾殿布施殿松田殿佐藤へハ如

^レ斯、何も内封ニ

進上 氏家三河守殿 左衛門丞爲終

鎌倉殿へハ如^ニ京都^ニ上杉山田殿へハ三管領

よりはサガリニ遊候伊勢殿のごとく歟少慰

懃^{●るれカ}た[●]べく候

進上 二階堂殿 左衛門佐教兼

越後上杉へハ畠山殿細川殿ハ謹上ガキヲワ

タクシ御様之時ハめされ候

武衛様へ内封被^レ遊候何事も大崎ハ武衛御

同輩にて候程ニ

上杉民部少輔殿

教兼

アナタヨリハ左衛門佐殿小付ニ

謹上 氏家安藝守入道殿

民部大輔 房貞

此間ハ如^レ此左衛門佐殿

謹上 中目上總守殿

相摸守 房貞

謹上 山形殿

左衛門佐教兼

アナタヨリハ

謹上 大崎殿御宿所

源義春

謹上 天童三郎殿

衛門佐教

謹上 大崎殿御宿所

源頼武

其外兩國之御一家ハ内封ニ被^レ遊候

アナタヨリハ

中野

進上 大崎殿人々御中 源義建

眞ノ謹上書之時も御座候兩國外様へハ伊

達大膳大夫殿 教兼

アナタヨリハ

藤原尙宗

謹上御宿所

教兼

葛西陸奥守殿

進上中目殿

武藏守宗清

南部修理大夫殿

教兼

進上中日殿

南部
修理大夫

留守出羽守殿

教兼

アナタヨリハ御當代まで

留守

進上大窪殿

藤原景宗

奥之斯波殿へハ

謹上斯波殿御宿所

左衛門佐教兼

アナタヨリハ

ウラガキナシ

謹上大崎殿御宿所

御名乗名

謹上鹽松殿

左衛門佐教兼

ウラガキナシ

謹上大崎殿御宿所

御名乗

謹上二本松殿

左衛門佐教兼

ウラガキナシ

謹上大崎殿御宿所

源材國

大崎よりは兩國へ彼レ成ニ謹上書ニ候ハ五人、其外ハ無ニ御座ニ候、斯波殿、鹽松殿、二本松殿、山形殿、天童殿計にて候、越後、越中、加賀、坂東八箇國へ鎌倉殿無ニ申事ニ候、大御堂殿様、若君殿、今宮殿などへは眞謹上書、其外被レ成ニ謹上ニ候方ハ一

人も無ニ御座ニ候、越前ニハ武衛様御一家、斯波殿、仙北殿、五條殿、末野殿へハ謹上書候、千葉殿へハ内封ニ候、千葉介殿教兼、

アナタ

謹上 大崎殿御奉行所

平治胤

宇都宮彌三郎殿

教兼

謹上 大崎殿御奉行所

宇都宮
藤原朝綱

此比ハ下野守護ヲ被レ持候間、今ハうらがき是あるまじくと存候、

葛西、本所五郡二保とは、江刺、伊澤郡、氣仙ニ、元良ニ、岩伊郡、奥田保、黃海保是也、大谷保ハ吉良之石橋殿御領候ヲ、在鎌倉時、方違役つとめ、十物十引物之内羽二すし致ニ進上ニ候返ニ被レ下候、應永年内之事候、遠田ハかまくら殿、千臺九代御公領ニ萬貫所也、御年貢ニハ年々一度砂金きんもつ一のほりかし、文臺たい爲レ後知行ス、小田保荒井七郷ハ從ニ文治ニ給、主ノ知行大崎が下にて十二郷、大崎ハ知行候ヲ、伊達成宗以ニ調法、遠田之爲ニ替地ニ遠田十七郷、荒井七郷、當年永正十一より四十三年前也、かさい淨蓮へ相渡也、五郡二保御判

形正月三日にいで候間、以_ニ其吉例_一かさいにはし
 やくを御_{はか}かはれ候、かさいの系圖は如_レ此、桓武天
 王、葛原親王、高望王_{ミサ}、村岡の五郎大夫良文、武
 藏權守將常、秩父武基、一番舍弟從五位下武常、
 二代目豐嶋_平□□_{秩父}常家、三代目三郎虛家_{虚カ}、四代目
 權頭清元_光、葛西三郎清重、伯耆守清親也、葛西ノ
 分合兄_{合カ}秩父十郎武基之息、秩父官者武綱、_子上
 野權守重綱、舍弟六郎基家、平三大夫重家、澁谷
 庄司重國、玄ぶやとかさいはち、ぶより相分、伯
 父甥の流に候也、四家也、相分は七平、八源、九
 橘、十藤と申候、七平は平家御一門一流、北條一
 流大極_{幾カ}一流、余吾將軍一流、上總介千葉一流、秩
 父一流、三浦、梶原、大庭、懷嶋權五郎景政是一
 流、合テ七流也、△藤原は二條關白一流、金若生_{コシヅカウ}、
 安部、佐藤一流、上杉、伊達は一ぞう山内、小野寺
 一ゾウ、宇都宮、留守一ゾウ、小山、白河、登米、
 八幡、國分は一ゾウ、鎌足大臣、十番目子にて氏
 家一流、故に十郎とがうす、氏家庄ヲ爲_ニ本所_一故
 に、氏家と云、一國之主ヲバ其國之内にては、上
 様上意など、申候て、努々不_レ苦敷_一候、他國人に

相對しては不_レ可_レ申候、

三官領 京都十三人大名

武衛

山名

三官領 同

細川

一色

侍所職 同

赤松

六角 同

極

土岐

武田

小笠原

在京大名 同

大内

上杉

伊勢守

大名と奉行之間、奉行人數布施下野守、飯尾肥前

守、松田丹後守、濟藤御一家三人、吉良殿、今河

殿、

日本國知行人數之事

武衛様御分國越前國守護代

同 朝倉尾張二之ゆご代小田大和守

同 甲斐左衛門大輔

雙林寺傳記

〔長尾昌賢影像記〕
〔上杉傳來記〕

最大山雙林寺者、月澄院殿俊叟昌賢菴主之開基也、緊有壹軀之靈像、卽是東山道上野國群馬郡白井之城主長尾氏左金吾入道昌賢之像也、菴主尋常崇禪法、一朝入山僧室、受衣持戒、孳々精勤、迨無虛日矣、朝唱古佛之寶號、夕澄真如之覺日、涅不縑磨不磷、自改世名號俊叟、昌賢克文克武、龍蛇陳上看謀略、養氣養神法、戰場中策勝旗、孫吳呂望不能及矣、麗老到此倒退三千、可謂股肱輔弼之臣、岢寶德二年命其嫡子景信、創一宇梵刹、山號最大、寺謂雙林、請月光正文和尚、入院開堂、世々傳持祖燈、嗣續佛壽、嗚呼昌賢菴主弋世之芳聲不遑枚舉矣、惜哉命不可延、無常緊來、寬正第四禩八月念菴七十有六載卒、於茲其嫡子景信文武兼全、忠孝尤篤、故履其芳蹟、守白井城、嚴父之光恩謂更巴酬、集一旗之諸士於雙林、笏室緊判緊斷、欲雕鑿菴主在世之尊容、雖然畫像木像月久年深、必可破壞、故命運慶之末裔佛匠、抹土砂合膠漆、造立壹軀之靈像、

欲窮沒後之孝、由之菴主運步覺路、擁座率陀必矣、兼祈長尾氏子葉鎮拔綠孫枝世々看花矣、一日像成、安居之序、山僧猥操筆、記一生之受用底、以號御影之記、若有闕略、埃后昆之知識、懇訂焉々爾、

寬正四年十二月五日

雙林第二世一列叟記焉 在判

御影之記

長尾左衛門尉從五位下平景仲者、桓武天皇第五之皇子葛野親王之御孫高望、始而平姓賜、高望五代之末孫村岡左衛門尉致經ト云有、依無男子、伯父之致成ガ二男權五郎景正ヲ村岡權五郎忠通ト改、致經家ヲ繼、忠通壯年ヨリ智仁勇兼備、源賴義於奥州安部貞任、宗任退治之時、軍忠ヲ盡シ、任鎮守府將軍相摸守、忠通五人ノ子アリ、嫡子平大夫爲通、始爲次ト云、

二男權守景成、大庭祖、三男左衛門尉景村、堀川院瀧口

忠通家繼、四男

才大夫景通梶原祖、五男權五郎景政

是ヨリ鎌倉長尾ト云、如

是五流ニ分ル、承暦元年忠通相摸國村岡ヨリ長

尾郷ニ移リ、是ヨリ長尾ヲ稱號ノ始トス、其後源

義家奥州後三年ノ合戰ニ、長尾忠通爲副將、戰功ヲ

盡ス、雖レ然老病難_レ遁、永保二年九月十八日、奥州ノ於ニ陣中ニ病死、以後五家氏神ニ祭_ン事ヲ願フ、寛治七年御靈號ヲ賜_ル、相州長尾郷ニ景村御靈宮ヲ建立ス、右五家トモニ諸國ニ勸請シテ仰_レ之、三男左衛門尉景村、忠通家ヲ繼、景村ヨリ四代ニ當テ長尾四郎左衛門尉友景、承久元年頼經公鎌倉御下向ノ時、伊豫少輔實雅朝臣爲ニ介添、鎌倉エ下リ、無_レ程卒ス、其子長尾四郎大夫景熙、後深草院北面ナリシヲ、宗尊親王建長四年鎌倉御下向ノ時、上杉掃部頭重房爲ニ介添、鎌倉エ下リ、是ヨリ武家ニ落ツ、康元元年上州白井ノ莊ヲ賜_リ、同年十一月入部、是ヨリ白井長尾ト云、景熙ヨリ五代末孫、長尾彦四郎景守ト云、其子孫四郎景仲昌賢入道是也、

長尾左衛門尉景仲入道昌賢者、嘉慶二年正月於ニ鎌倉ニ誕生、始ハ景重ト云、實ハ鎌倉長尾新五郎景房二男也、景守依_レ爲_レ甥、景守嫁ニ末女、孫四郎景仲ト改、九歳ノ時ヨリ白井ノ家ヲ繼デ、長尾ノ正統トナル、景仲十四歳ノ時、景守卒_テ家督ス、壯年ヨリ智仁勇ヲ備ヘ、内ニハ法燈ノ廢タルヲ起ス、誠ニ英傑ノ勇士也、應永廿年景仲廿六歳ノ時、嫡子彦四郎

景信ヲ儲タリ、應永廿三年十二月、上杉氏憲入道禪秀辭_ニ管領職、後奉_ニ足利滿隆、持仲_ニ催_ニ關東兵、攻_ニ鎌倉公方持氏_ノ軍、無_レ利シテ御所ヲ退給フ、此時景仲、油井濱ニ陣ヲ張_リ、御所ノ御旗ヲ立、景仲幕ヲ張、味方ヲ招グ、時ニ潮滿テ景仲幕ヲ芝引_ニ留_ス、禪秀兵士不_レ得_ニ戰シテ、悉退散、持氏窺_ニ此隙ヲ、遁_ニ駿州大森山ニ、此依_ニ軍功_一テ、景仲幕ノ芝引ノ尉免水色ヲ家傳ノ幕トス、至_レ今如_レ是、

永享三年、景仲度々依_ニ忠功_一、山内執事職ヲ賜_ル、永享十年六月、持氏若君兼王丸御元服可_レ在トテ、御用意ノ沙汰有、管領上杉憲實於_ニ御所_一被_ニ申上_一ハ、鎌倉公方御元服ハ、御代々京都エ御使在テ、御一字拜受有事ナレバ、任_ニ先例_一御申上可_レ然由、數回雖_レ申、持氏無_ニ御承引_一、剩憲實誅罰ノ御勢被_ニ催_一、依テ景仲智略ヲ以テ、己領分上州白井城エ憲實ヲ移シテ害ヲ遁シ、讒者ノ根本ヲ持氏エ訴フ、是皆景仲忠勤也、此時從_ニ京都_一御教書下テ、憲實攻_ニ鎌倉_一、景仲爲_ニ副將_一盡_ニ軍功_一、同十二年結城一亂根本人一色伊豫守、同年七月成田館エ桶籠、廳鼻性順長尾景仲、同三日發向シテ、終

日及三十餘度戰、暮シ相引ニス、翌日性順景仲一手ニ成テ、伊豫守ニ討テ掛リ、忽得ニ勝利、是ヨリ所々ノ一黨爲ニ退治、武上相三國ノ間ニ在テ、景仲父子忠義ヲ勵ス事二箇年也、

文安二年景仲越後ノ上杉相摸守房定ト志ヲ合セ、上洛シテ關東ノ公方管領ノ衰微ヲ歎ジ、再興ノ志ヲ將軍家ニ訴フ、因レ之永壽王ヲ信州ヨリ招出シ、元服在テ號ニ左兵衛督源成氏ト、任ニ四位少將ニ亦上杉憲實ノ子息龍若丸ヲ尋ニ求山内ニ補ニ管領、號ニ上杉右京大夫藤原憲忠、景仲依ニ此忠節、叙ニ從五位下、又將軍家御感有テ、長尾如ニ代々關東管領ノ後見、並武藏國青木、諸岡、八幡山ノ三莊ヲ賜リ、朱宰配ヲ恩免シ賜フ、

文安四年ノ春、景仲度々ノ依ニ忠功、鎌倉ノ公方管領ヲ再興シ、我官祿ヲ賜事厚シ、景仲ガ果ハ是迄也、月滿テハ缺、華開テハ必落ツ、生死ノ轉變目前ニ在ト觀念シ、官職ヲ抛擲シテ剃髮シ、號ニ昌賢入道、嫡子彦四郎ヲ改ニ左衛門尉ニ世人聞レ之猶以禮義厚ト云々、

享德二年十二月廿七日、昌賢、景信、長尾郷御靈宮ニ歳暮之社參シテ神拜スル所エ、早馬ヲ以憲忠於ニ御

所ニ生害ノ由告來ル、昌賢驚ト雖、神前ヲ不レ退、父子家臣ヲ集テ曰、敵ハ計略ヲ以テ大將ヲ討ツ、味方ハ案外ニシテ主君ヲ亡フ、是十二分ノ負也、掛テ勝事不レ可有、退テ案ヲ廻シニハシカジトテ、父子一同ニ兵カタメ、山内ノ屋形エ掛入テ見ルニ、介ル兵士モナシ、景信、憲忠ノ御旗ヲ立、味方ヲ雖招不レ應レ之、鎌倉ニ在テ無利ヲ知リ、及ニ暮忍之武兵ニ命ジ、御所ノ邊、谷々ヲ放火シ、其隙ニ憲忠ノ籠中悉引拂、一家ノ臣前後ヲ警固シテ、鎌倉ヲ退、面々城地エ入、昌賢父子ハ白井城ニ楯籠リ、越後上杉ノ一家ト心ヲ合、上杉顯定ヲ招出シ、白井ノ城ニ籠置、味方ノ諸士ニ力ヲ合、嫡子景信ヲ京都エ遣シ、憲忠故ナキ生害ノ趣ヲ將軍家エ訴、因レ之從ニ京都ニ鎌倉ニ被レ向、御勢攻ニ公方成氏、又越後上杉房顯父子爲ニ大將、昌賢景信、副將ノ命ヲ受テ攻レ之、大得ニ勝利、成氏終ニ戰負、敗奔ニ野州古河、此時御教書下テ、上杉顯定入ニ鎌倉、稱ニ八州ノ管領、昌賢軍忠依レ無比類、從ニ將軍家ニ上州玉村十五郷ヲ賜ル、

上州白井ハ、昔時伊勢神明ノ御厨ナリシヲ、建保年中武家ヘ渡ル。
○建曆四年ノ神風抄ニ、伊勢兩宮御厨ノ内ニ白井ハ見エズ、建保前ニ武家ニタリシカ、其後

長尾代々ノ領地トナル、景仲神道ヲ崇敬シ、御靈宮ノ境内ニ神明建立シ、御靈宮トトモニ信心常ニ不_レ淺、神主朝暮抽_ニ丹誠、長尾一家武運長久祈_ル無_レ怠、藤原ノ清範ト云儒者ヲ京都ヨリ招下シ、上州白井エ遣シ、祿ヲ與ヘ、城内聖堂ヲ建立シテ、一月ニ六日ノ會日ヲ定メ、家臣集テ聖人ノ道ヲ聞テ敬_レ之、仁義禮智信ヲ專ラ身ニ行_ニ心得テ、又於_ニ聖堂_ニ家傳ノ記錄ヲ集テ、聖殿、御靈宮、雙林寺三所ノ寶藏ニ籠置、又正長元年景仲領分ノ百姓ヲ撫育シ、三百貫ノ繩ヲ捨免シ、一年ニ三日ノ遊日ニ、一日加テ四日ニナス、人民曾テ不_レ苦、戰場エ出ル百姓ヲ夫丸ト云シヲ、此節ヨリ改テ號_ニ新給_ニ、是ヨリ弓鏑ニ加フ、如_レ是ノ者少シタリトモ於_ニ戰場_ニ三度迄志ヲ顯ス者ニハ、或詞ノ褒美ヲ出シ、或祿ヲ與ヘ、號者數多民ヨリ見出シ、物頭ニナス、況於_ニ直勤者_ニヲヤ、是皆昌賢武道賢キ故也、又領分澁川ノ信光寺ニ、相州江之嶋ノ辨才天ヲ、昔ヨリ勸請シテ、武門繁昌ヲ祈願ス、信光寺ノ道場ニハ丈六ノ彌陀ノ尊像ヲ安置シテ、先祖代々ノ聖靈、井家臣戰場ニテ討死ノ亡魂、爲_ニ頓證菩提_ニ、常念佛ヲ唱テ弔也、如_レ是儒佛神ヲ崇敬シテ明ナル故、世人智仁

勇ノ人ト云々、昌賢從_ニ幼少_ニ歸_ニ依佛法_ニ、嫡子景信ト心ヲ合、寶德二年上州白井ニ蘭若ヲ建立シ、額ヲ號_ニ最大山雙林寺_ニ、月光和尚入院有テ、是ヲ開山トシ、代々傳法盛ニシテ、上野、越後、佐渡、信濃四箇國、元來白井長尾一家ナルニヨリ、連々蘭若ヲ敬_奇禪林ニナス、是皆昌賢菩提心深キ故也、寬正四年昌賢不例ニシテ、老病難_レ遁、八月廿六日於_ニ鎌倉_ニ逝去ス、行年七十六歲、號_ニ月澄院殿俊叟_ニ昌賢庵主_ニ、

跋

昌賢入道其爲_レ人也、生_ニ今之世_ニ慕_ニ古之風_ニ、遊_ニ於禮義之境_ニ、枕_ニ於忠臣之床_ニ、是故無_レ儒無_レ釋、以_ニ道之所_ニ存_ニ、爲_ニ師之所_ニ存_ニ、無_レ不_レ學焉、平日正_ニ其心_ニ、脩_ニ其身_ニ、以及_ニ於_ニ之_ニ、國家其利博哉、以_ニ此盛德輔_ニ佐主君_ニ而汲_ニ々於利_ニ者、豈可_ニ同年而語_ニ哉矣、日燦_ニ雙林_ニ長不_レ尾、月昇_ニ最大_ニ點無_レ塵云々、

寬正五年八月廿六日

二世雙林頭陀正伊跋 在判

經曰、吾法者、附屬國王大臣有力檀越、因茲思之、非有檀越護法幢、爭得轉不退法輪乎、疇昔從五位下平朝臣長尾景仲入道法名昌賢菴主、振武名於關之東、開鴻基於上之北、則山名最大、寺號雙林、以懇情請月江師翁、軍務之暇常訪五道、卽有亡後影像、在世行實、是則第二世伊公之所述作也、其子景信嫡子相承、而景春、景英、景誠、憲景、今也到政景、代々不忘箕裘之業、世々踞白井之城、去天正庚寅夏時、關盛衰之運、終爲豐臣秀吉公被傾此城、畢、於茲白井之城司絕、亦無居人矣、爾來長尾代々位牌、或石塔雖有之、以無其後裔故、蓋夫到末世、必勿有辨知嫡庶之次第人、然則悲月江一派之法永忽乾、昌賢一家之武略速盡、頻爲之落淚、依今所籠置雙林之寶藏、搜出長尾數代之記錄、爲始昌賢之嫡男景信嫡流六世之威名、彼於記錄中逐一出焉、當山開基代々外護檀越、顯莫大之德義、爲後看遺度之者乎、

天正十九年九月廿三日

雙林十一世自然在判

景信

長尾左衛門尉景信者、昌賢之嫡子也、應永廿年於鎌倉誕生、母ハ景守末女也、父トトモニ在鎌倉、山内エ忠功ヲナス、永享十二年正月十三日、一色伊豫守鎌倉ヲ退テ以來、結城ノ一黨八州ニ蜂起ス、因之山内上杉兵庫頭清方、時ノ執事長尾左衛門尉景仲、長尾尾張守入道芳傳、大石石見守憲重等ヲ集評定シ、京都エ爲使節、長尾彦四郎景信ヲ遣ス、關東兵起ノ旨ヲ達ス、將軍家依之日月ノ旗、并御教書ヲ賜リ、上杉中務大輔持房ヲ被指添、景信トトモニ鎌倉エ下向、八州ノ諸士從之、結城悉退治、是景信忠勤也、其後享德二年十二月廿七日、公方成氏公、管領憲忠ヲ被害、此時景信忠功ヲ勵シ、父トトモニ上州白井エ退テ、昌賢白井ノ城ニ在テ、景信越後エ下向、上杉房顯、并長尾ノ一族エ軍議ヲ示合、上杉民部大輔顯定ヲ白井ノ城エ招キ入、憲忠家ノ諸士ト心ヲ合、景信上洛シテ、憲忠無故生害ノ旨ヲ將軍家ニ訴、依之成氏追罰ノ御教書ヲ賜リ、上杉顯定房顯攻ニ鎌倉、成氏終ニ戰負テ、下總國下河邊莊古河エ退去、自是成氏勅勒ヲ受テ、古河城ニ蟄居、其後御教書以テ、顯定被管領補ハ

鎌倉山内ニ在テ八州ヲ靜謐ニ成敗ス、景信度々依ニ忠功、長祿二年昌賢爲ニ介添、山内執事職ヲ賜リ、父子トモニ勤役ス、寛正六年上州雙林寺ノ二代一列和尚、寺役隱遁ナリシヲ、景信相州長尾郷エ招テ、巴ノ井ノ邊ニ菴室ヲ建立ス、是ニヨリ和尚此庵ヲ玉泉軒ト號ス、暫住侶ス、景信家業ノ透ニハ、法ヲ聞テ心ノ垢ヲ拂フ、此時ヨリ玉泉ノ號ヲ法名トス、其後一列和尚、上州沼田エ引テ玉泉寺開基ス、文明五年六月廿三日、行年六十一歳卒ス、法性院殿玉泉宗德庵主、

景春

長尾四郎右衛門入道伊玄齋者、景信嫡子、母ハ越後府中長尾信濃守頼景女也、幼少ヨリ在ニ鎌倉シテ、山内ニ勤仕ス、武略智略力量人ニ勝タル勇士也、祖父景仲、父景信、山内執事職ヲ相傳スル所ニ、文明五年六月景信卒シテ、總社長尾忠景ニ景信ガ職ヲ賜ル、景春太ニ述懐シテ、昔時宗尊親王鎌倉御下向ノ時、先祖景照上杉掃部頭重房爲ニ介添、武家ニ下リ、鎌倉ニ在府セシヨリ以來、代々上杉後見評定ノ席ヲ勤來ル處ニ、無ニ其甲斐ニ事無ニ面目ニ次第也ト、山内ヲ深く恨、祖父昌賢、永享永徳ノ譽ニ依テ、山内ノ爲ニ後見、京

都從ニ將軍家ニ賜ニル武州ニ青木、諸岡、八幡山、上州ニ玉村十五郷ニ並意趣ヲ書認テ、京都將軍家エ指ニ上之、景春ハ相州ヲ退テ、舊領上州白井ノ城ニ住シテ、伊玄入道ト改名シテ、古河ノ公方ヲ頼寄テ、山内ヲ背ク、其後兩上杉ノ合戦ニモ、古河ノ命ニヨリ、扇谷エ意ヲ合、山内ト戰事度々也、永正六年伊玄入道、越後長尾信濃守爲景ト示合、沼田、白井ノ兩城ヲ堅メテ、管領越後エノ通路ヲ妨ル、依レ之憲房、同年六月八州ノ諸士ヲ引卒シテ、白井ノ城ヲ責ル、伊玄軍利ヲ失、己ガ領分利根川ノ向不動山ノ館ニ楯籠ル、沼田城主ハ憲房エ降參ス、白井ノ城ニハ大森式部入道、相武兩國ノ良士ヲ籠置、管領憲房越後エ進發シテ、多勢ヲ以テ爲景ト合戰ス、爲景負テ、同六年七月廿八日、越中國エ退ク、管領父子越後ニ在留ス、翌七年六月十二日、信濃ノ一家ト示合、爲景越後エ來テ、管領父子ト合戰ス、顯定ノ軍破レテ高梨ニ討レ玉フ、因レ之憲房越後ニ逗留不レ叶シテ、上州白井エ引取、暫雖ニ在留、信州ノ長尾一家勝ニ乘ジテ、伊玄入道ニ力ヲ合スル由、管領聞レ之白井ヲ退玉フ、同年秋、長尾爲景越後勢ヲ引卒シテ、上州エ來リ、伊玄入道ニ

力ヲ合、白井ノ城ヲ責ル、番人不_レ叶シテ落城、此時數千騎ヲ討取ル、伊玄白井ノ城ニ還住ス、其後管領ヨリ和談雖_レ有、伊玄一生無_ニ承引_一、古河公方ノ命ヲ守、伊玄入道從_ニ壯年_一有_ニ乘馬術_一、頗得_ニ精妙_一、昔城陸奥守平泰盛、悉興ノ馬書家ニ傳故也、永正十一年八月廿四日卒、行年七十二歲、號_ニ涼峰院殿大雄伊玄庵主_一、

景英

長尾左衛門尉景英者、伊玄入道嫡子、於_ニ白井_一誕生、母ハ足利長尾景定女也、幼少ヨリ上州ニ在テ、古河公方ニ仕フ、永正十一年伊玄卒去ノ後、古河ノ御所ノ依_レ命、山内エ和談シテ出仕ス、無_ニ幾程_一、大永七年十二月五日卒、行年四十九歲、號_ニ洞然院殿明岩宗哲居士_一、

景誠_シ

長尾孫四郎景誠者、景英嫡男、母ハ箕輪ノ城主長野信濃守業正姉也、大永七年十二月五日、景英卒シテ四十九日、於_ニ法事ノ席_一、野心ノ家來有テ、景誠ヲ害ス、長野信濃守聞_レ之、白井エ來リ、長尾陪臣ト志ヲ合、總社長尾景房ヲ招ギ、白井長尾ノ正統ヲ繼、景誠大永

八年正月廿四日生害、行年廿二歲、號_ニ輝雲院殿明室正光居士_一、

憲景

長尾左衛門尉憲景入道一井齋者、實ハ惣社長尾顯忠ノ嫡男、母ハ築田中務大輔姉也、永正八年誕生、十七歲時、白井景誠遺跡ヲ相續ス、管領憲政御諱ノ字ヲ賜リ、景房ヲ改號_テ憲景、上杉憲政平井ヲ退玉ヒテ後、上越ノ境ニ舊臣ドモ雖_レ奉_ニ隱置_一、近年北條氏康沼田ノ莊ヲ手ニ入、北條孫次郎、眞田薩摩守城代タルニ依テ、御旗ヲ揚玉フ事不_レ叶シテ、永祿元年築田中務大輔ヲ以テ、越後ノ長尾景虎ヲ御賴有リ、此時公方晴氏公モ、築田ニ被_ニ御心添_一、又上杉ノ舊臣白井、箕輪、總社、太田ノ面々モ管領同意ノ旨申談、因_レ之景虎早速御受有テ、同年八月憲政越後エ御入馬、是白井領ハ、越後エ通路自由成ニ依テ、如_レ是憲景忠節ヲナス、同三年九月上旬、上杉政虎上州沼田エ進發、白井長尾一家箕輪城主長野信濃守業正、總社ノ城主長尾尾張守顯方、政虎エ内通シテ、沼田ノ城主北條孫四郎、眞田薩摩守ヲ責ラル、政虎大勢ニ、兩將軍失_レ利落城シテ、北條、眞田トモニ討取、憲景モ數百騎ヲ討捕

テ、預ニ御感ニ此時政虎ヲ白井ノ城ニ招請、御太刀一腰兼光號御馬一疋龍體號、政虎喜悅異レ他、憲景馬術ノ名譽ヲ美稱シ玉フ、所レ獻ノ保生月毛馬ヲ乘玉フ、其早事緝上ヲ不レ拂、政虎ヲ大ニ預ニ御感ニ諸士一同目ヲ驚ス、同年藤澤ノ道場ヨリ佐竹義重好之僧ヲ招、上州安中ノ住人小林某ヲ相添、憲景志ヲ佐竹エ内通、依レ之義重、政虎エ一味ス、同四年三月、政虎北條氏康居城相州小田原ヲ攻ラル、此節憲景依ニ腦病ニ嫡子孫九郎憲春ヲ爲ニ名代、於ニ小田原ニ武功ヲ盡ス、政虎於ニ鎌倉八幡宮ニ拜賀時、弓箭ノ役ス、永祿五年三月、政虎武州私市城ヲ攻ラル、憲景先登、進デ軍忠多シ、就中憲景家臣山本石見守、彼城ノ案内ヲ知テ、夜中舟ニテ政虎ノ人數ヲ本丸エ引入、大破得ニ勝利ニ依テ、預ニ御感ニ元龜三年八月上旬、武田信玄、真田安房守昌幸ヲ先手トシテ、新道切テ、信州ヨリ白井領エ亂入、憲景勇士ヲ籠置、岩居堂ノ館ヲ攻取、小野子ノ莊エ攻入、遠里近村ヲ燒拂、横川ニ寄居、取立、柏原ノ館ヲモ攻落シテ、伊香保ノ地ヲ寄居ニ構、澁川エ働出、宿中無レ殘放火、信光寺本堂彌陀堂、辨才天堂迄悉燒拂、東上州エ發向シテ、沼田、厩橋ノ

通路ヲ妨ル事度々也、同年九月下旬、武田勝頼白井ノ城ヲ攻ル、此時一井齋、雙林寺ノ森ニ矢野山城入道ヲ備置、憲景ハ出向テ、先手ノ安房守ト戰、此時矢野入道玄清、横合ニ掛テ眞田ヲ討、大敗北シテ數百騎ヲ討捕、又甲州勢新手ヲ入替責戰、入道不レ叶シテ白井ヲ退キ、領内東上州不動山ノ館ニ入、此節御靈宮、空專寺、雙林寺、佛殿、山門廻廊、並近邊ノ人家不レ殘兵火、翌天正元年三月上旬、輝虎加勢トシテ、沼田厩橋ノ大軍ヲ以テ、甲州衆ヲ攻破、大得ニ勝利、白井ノ城番千餘騎討捕テ、一井齋白井ノ城エ入、其後憲景眞田領ヲ責取事及ニ三度ニ年月ヲ送ル、天正六年三月十三日、於ニ越後ニ輝虎逝去シ玉フ、沼田厩橋ノ面々ト憲景心ヲ合、越後エ内通ス、天正七年武田勝頼ト上杉景勝と談有テ、信州ハ景勝エ御任セ、上州ハ勝頼エ附、此時憲景勝頼エ禮儀ヲナス、外上州ノ諸士、或ハ武田エ内通、或ハ小田原エ仕フ、四箇年上州亂國トナル、天正十年三月十一日、勝頼生害、此節上州諸家何モ信長エ降參、瀧川左近將監一益ニ隨フ、憲景、一益ニ一味スル處ニ、同年六月二日、於ニ京都ニ信長爲ニ明智日向守光秀ニ生害、依レ之瀧川上州ヨリ上

洛ノ節、憲景兵士ヲ差添、信州エ送ル、此時一井齋軍議ヲ考テ、諸家ニ先達テ、北條氏政氏直ノ幕下ニ希由、以ニ使節一北條安房守氏邦エ申入、氏政大喜悅有テ、使者高山越前守ニ對面、憲景志ヲ被レ感由預ニ書簡、因レ之長尾一家ヲ小田原エ附、其上三男鳥坊丸ヲ證人ニ遣ス、是ヨリ上州靜謐也、天正十一年四月二日、一井齋卒、行年七十三歲、號ニ雲林院殿梁雄玄棟庵主、

政 景 後景廣

長尾權四郎政景者、憲景三男、母ハ勅使河原左近將監女也、憲景嫡子孫九郎憲春ハ、永祿六年廿六歲ニシテ卒、一男玄勢丸ハ、永祿六年七歲ノ時、於ニ京都ニ白井局就奉レ願ニ將軍義輝公、御諱字ヲ賜リ、號ニ輝景、改ニ左衛門尉、然ドモ多病ニシテ難レ勤蟄居ス、依レ之憲景此旨ヲ氏政エ申達、三男鳥坊丸ヲ證人ニ遣ス、氏政憲景ガ先忠ヲ被レ感テ懇篤多シ、天正十一年四月二日、於ニ白井ニ憲景卒ス、因レ之白井ノ家臣小田原エ來リ、對ニ北條安房守、憲景入道卒去ニ付テ、鳥坊丸於ニ白井ニ作善執行仕度旨、其上鳥坊丸老母病氣存命難レ計間、旁御暇申請度旨、右爲ニ證人ニ鳥坊丸姉、井家臣

矢野山城守ヲ可ニ差添申一ヲ願ニ安房守、此趣ヲ氏政父子エ達ス、六月上旬願叶テ、矢野山城守、鳥坊丸姉ヲ小田原エ渡ス、鳥坊丸、六月十二日小田原ヲ發シテ、同月廿日、於ニ白井一井齋百箇日ノ法事ヲ執行シ、老母ノ病氣ヲ醫療シ、家臣ニ命ジ、領分堅固ノ仕置ヲナサセ、同廿三日小田原エ歸府ス、同廿五日氏政父子鳥坊丸、並家來矢野玄清入道、吉里八郎太郎、矢野山城守、青木出雲守、師岡伊豫守、高山越前守ヲ召出シ、憲景入道事於ニ上州ニ先忠ヲ發、諸家ヲ引附、證人ノ始ヲ出ス、因レ之上州不レ戰シテ手ニ入事、偏ニ憲景ノ功也、此度長尾家督、並白井舊領ノ分、鳥坊丸無ニ相違、又長尾代々在ニ鎌倉ニシテ、公方家ヨリ在府免賜リ、舊例也、自今以後開府ニ在ベシトテ、眞壁、清見寺ヲ在府免ト御書ヲ出シテ、鳥坊丸ニ賜リ、兄輝景コト憲景入道申通依レ爲ニ多病、小田原エ出仕事無レ據次第也、然ドモ輝景休息免、白井ノ城廻ヲ除外、河内分可レ出旨ヲ是亦御書ヲ出シテ、鳥坊丸ニ賜ル、同七月廿四日、氏直鳥坊丸ヲ改ニ權四郎、氏政一字ヲ賜リ、號ニ政景、是ヨリ長尾權四郎政景ト云、天正十三年政景、白井入部、此時家臣牧彈正ト云者、領内大

室ノ館ニ在テ政景エ不_レ隨、依_レ之家臣等ニ深ク隱シ、號鷹野兵士、少々召連、政景自彼館ニ乘入、彈正父子、並家來悉討取テ、領分靜謐ニナス、天正十七年夏、政景白井エ來リ、城中ノ普請、並、兵糧等籠置、小田原エ歸府ス、同年冬輝景重病ニ付、政景エ領地ヲ任ス、此時本領一致シテ要害ヲ堅ル、同十八年豐臣秀吉小田原ヲ攻ム、政景北國ノ爲ニ鎮兵一白井城ヲ可_レ固旨、氏政ノ命ヲ請テ、天正十八年正月九日、小田原ヲ發シテ、白井城ニ籠ル、同月下旬、氏直ノ家臣堀和伯者守爲ニ檢使ニ與力甘騎相具シ、籠城ノ諸家エ來テ、證人ヲ改、城内堅固ヲ巡見ス、正月廿六日入來、政景出向城中エ招請、此時氏直ヨリ鐵炮玉藥甘箱美酒肴ヲ送ル、政景兼テ心掛置所ノ堀柵堀水ノ手兵糧米鹽噲薪等迄見分ニ入、翌廿七日伯者守白井ヲ發、爲ニ見送、矢野山城守、青木清九郎ヲ差添、領分發崎ノ館、不動山ノ館ヲ巡見シ、沼田エ送ル、同三月廿六日、從ニ小田原爲ニ使節、荒木兵内羽書持來、近日秀吉京都發向ノ用意急也、次加州利家、越後ノ景勝、信州ヨリ其他エ發向ノ由、無ニ油斷ニ堅固ノ籠城肝要ノ旨申來ル、同年四月利家景勝、笛吹峠ヲ越、松枝

ノ城主北條陸奥守ヲ攻ル、不_レ叶シテ四月月上旬降參、夫ヨリ白井エ進發シテ、利家ハ白井領内澁川ノ宿ノ人家ヲ壞シテ、奎川ニ筏ヲ渡シ、數萬騎ヲ引越、白井城エ押寄攻戰フ、又東上州ヨリ攻來ル勢ハ、發崎ノ館ヲ乘取、彼館ヨリ鐵炮ヲ放シ掛ル、此時利家ノ勢四ノ丸エ火ヲ掛ル、其變化ニ三四ノ丸ヲ乘取、然ドモ城内堅固ニシテ及_レ暮、四月十四日ノ夜、利家ノ臣政景ニ和ヲ入、城中ノ男女ノ爲ニ代命ニ政景降參ス、依_レ之城中ノ士卒、同十五日ノ早朝ヨリ兵具ヲ捨テ城ヲ出テ、命ヲ助ル、政景召人ト成、加州エ行、此時家ノ重寶悉紛失ス、其後政景窄浪シテ、上杉景勝ニ頼寄テ、家臣ト成、改ニ景廣、此時白井城番雖ニ暫有、無ニ其後居人ハ、

跋

菴主之行實者、委二世有所_レ述、景信嗣ニ業於昌賢ニ已降、今此到ニ政景、年代已古、智謀夫恢、未_レ聞_下如_レ斯者、晦而後明者物理固然也、一家正統之嫡流、未ニ必絕、父祖勳業豈厥可_レ虛、天運必以_ニ循環_一、後榮尙須期、寺門特有_ニ誠祈_一、檀門爭亦可_レ有_ニ盡斯_一哉、

天正十九年九月廿三日

雙林十一世玄悅在判

當城六代也

開祖ヨリ廿九代

玄棟院記之

右二書以ニ上野國群馬郡白井玄棟院所藏本一冊ニ寫之

天保元年八月下旬

黒川春村

公方兩將記上

應仁兵亂發起事

人皇百四代後土御門院ノ御宇應仁年中、兵亂興テ天下大ニ騷動ス、其亂根ヲ尋レバ、尊氏將軍ヨリ七代ノ公方室町大樹義政公天下ノ成敗ヲ司リ給シ時、管領畠山德本入道老藤シテ家督ヲ定メ兼ケル故、養子左衛門督政長、實子右衛門佐義就、互ニ家嫡ヲ爭テ合戰ニ及ブ、又斯波ノ千世德九早世セシニ依テ、治部太輔義敏、左兵衛督義廉ト云兩人ノ一族相分レテ其家督ヲ諍論ス、然シヨリ以來、世上ノ人心兩方ヘ分レ分レニ成ケル頃、公方義政公御實子無キノ故ヲ以テ、御舍弟淨土寺ノ門主ヲ還俗セサセ參ラセテ、御養子ニ定メラレ、今出河殿ト申ス、義視公是也、角テ今出河殿エ天下ヲ讓ラセ給ハン由御契約定テ、執事ニハ細河右京太夫勝元ヲ被ニ仰付、既ニ義政公御隱居ニ及バントス、然處ニ大樹ノ御臺所ハ深ク此事御姪有テ、御所ヲバ出給テ、姨母御前ノ禁中ニ内住シテマシ、ケルエ密ニ頼入ラセ給ヒ、暫ク御住居有

ケルヲ、姨母御前ノ様々ニ賺シ參ラセテ、又御所エ歸リ入セ給フ、幾程ナクテ御臺所御懷胎ノ儀有リ、滿月ニ及デ若君御誕生マシ、ケリ、扱モ此御臺所ハ、裏松ノ贈内大臣重政公ノ御娘、其頃無雙ノ美人也、然レバ世上ノ風聞ニハ、此若君ハ大樹ノ御子ニテハ無シ、御臺所暫ク内裏ニマシ、ケル時、主上潜ニ御通ヒオハシマシ儲給ヘル御子也、其時御臺所ヨリ薦ノ細道ト云硯箱ヲ御記念トシテ主上ヘ參ラセケルナンド申合ケル、ウタテカリシ事トモ也、抑此若君御誕生有ケル以後、公方家御家督御違變ノ御志アリ、御臺所猶以密ニ御内書ヲ山名入道宗全ガ許ヘ被レ遣、實子ニ御世ヲ讓ラセ給ハン事深ク頼入セ給フ、又今出河殿ハ勝元ヲ頼マセ給フ故、後ニハ兩君ノ御爭トナリ、應仁ノ兵亂起レリケル、其レヨリシテ洛中ノ合戰、諸國ノ亂レト成行ケリ、其後去ル子細有テ、今出河殿ヲバ山名方ニ成シ參ラセ、若君ヲバ却テ勝元取立參ラセ、公方家思召マ、ニ、天下ノ家督ヲ定給フ、文明五年大亂一統シテ、宗全勝元二人トモニ病死シケリ、今年十二月、若君御元服有テ征夷大將軍ニ被レ任、御名ヲバ義尚公ト稱號アリ、御歳九歳トゾ

聞へケル、勝元ノ子息、細河九郎政元ヲ管領職ニ被
レ定、武藏守ニ補セラル、公方家ノ御悦譬へテ謂ン方
モナシ、同七年新將軍義尙公御讀書始アリ、其ヨリ
文學ヲ御好アリ、小槻宿禰雅久講師ニシテ、論語ノ
御會談アリシ、卜部兼俱參向シテ神代ノ卷ヲ講讀ス、
其外禮法ノ儀ヲ正サレ、弓馬ノ藝ヲ好マセ給ヒ、文
武二道ニ闇カラズ、誠ニ希代ノ公方名譽ノ將軍出來
サセ給フ也トテ、都鄙世上ノ人申合ケリ、又其頃世
ニ稀ナル歌人ト聞ヘシ飛鳥井大納言雅康卿ヲ師範ト
シテ、和歌ノ奥儀ヲ究ラレ、鞠ノ遊ヲ興ジ給フニ、
皆其即可ヲ得給ケレバ、是ヲ見聞人ゴトニ、此將軍ノ
御德儀ヲ感信セズト云事ナシ、

飛鳥井雅康卿詠歌事附義尙公御政務事

文明九年、京都ニ今迄集リ居タル諸國ノ軍兵退散シ
テ、其ヨリ在京ヲ不_レ勤、國々ノ合戰所々ノ騷動天下
ノ亂トナリケレバ、諸人一日モ安堵ノ思ヲナス事ナ
シ、公方家深ク此事ヲ歎セ給フ、同十一年ノ秋、御
臺所ハ大神宮へ御參詣アリ、是ハ御立願ニ天下ノ兵
亂ヲ鎮メラレン爲トゾ聞ヘシ、其頃飛鳥井雅康卿ハ、
江州甲賀郡柏木ノ里ニ閑居シテ、花ニ吟ジ月ニ嘯キ

世ニ與カラズ居給ケル、其山庄へ音信サセ給ツ、
近隣ニ御旅宿アリ、雅康卿取アヘズ和歌ヲ詠ジテ獻
セラレケリ、

世ヲ祈ル君カ心ノ誠ニヤ

内外ノ神モ惠添ラン

御臺所御返シアリ、

世ヲ祈ル心ヲ神ノ稟ヌトモ

此言ノ葉ニ更ニコソ知レ

今年公方家御治世ノ儀、新將軍へ御讓リ御隱居有テ、
東山殿ト申奉ル、慈照寺ノ院内ニ東求堂ヲ造リ給テ、
此所ニ御閑居アリ、累代ノ奇物、和漢ノ名器ヲ集メ給
ヒ、茶ノ湯ノ會ヲ催シテ、世間ノ事ヲ知シメサズ、
樂シミノミニ日ヲ送り明シ暮サセ給ケリ、新將軍十
五歳ニテ天下ノ政務ヲ始メラレ、成敗ヲ執行ハル、
理非分明ニシテ皆人歸服シ奉ル、同十二年三月ノ頃、
御鞠始アリ、其御人數ハ新將軍、東山殿、飛鳥井雅
康卿、同雅親、是四人トゾ聞ヘケル、蹴鞠終テ、雅康
卿又詠歌ヲ獻ジ給フ、

君々ノ千世モ連テ袖ヲ見テ

身ニ餘リヌル今日ノ嬉シサ

東山殿御返歌アリ、

末遠ク連テ袖ニ包テモ

ケニ嬉シサン身ニ餘リヌル

同年ノ七月、一條ノ關白殿下兼良公へ、天下ヲ治ル政道ノ法御尋アリ、此殿下ハ古今ニ稀ナル博覽ノ智者也、殿下則御領掌ニテ一卷ノ書ニ記シ、將軍ニ附屬シフ、樵談知要抄是也、同十七年關東古河御所、源成氏朝臣連年公儀ヲ背キ、兵革ヲ用テ我威ヲ振フノ儀、御赦免ニ預リ度由、御佗言申ニ依テ御赦免有ケリ、是又善政トゾ申シ合ケル、今年八月ニ將軍家右大將ニ被_レ任、翌年七月廿九日、大將拜賀ノ爲ニ御參内有ケリ、御供ノ人々兵亂ノ後、衰微ノ身トイヘドモ、我劣ジト綺羅ヲ盡シ、アタリヲ拂テ供奉セラル、洛中ノ貴賤上下是ヲ見物シ奉ル、東山殿モ棧敷ヲ構ヘテ御覽アリ、サコシ嬉シク思召ケン、禮儀ノ次第ノ故實ヲバ、二階堂判官政行ニ被_レ仰付、一々作法ヲ定タリケル、先ヅ小侍所ハ細河右馬助政賢、先陣ヲ承テ騎馬十人ヲ打セタリ、其次ニ雲客廿餘人、其次ニ重代ノ武士打込ニ番長隨身、次ニ帶刀左右トモニ十二番、其次ニ將軍家御車ニ召サレ參向アリ、次ニ衛府官人、

次ニ公卿廿人御供也、菊亭大納言公興卿ハ御簾ノ役、柳原別當重光卿ハ御沓ノ役ヲ勤ラレケル、次ニ畠山政長ノ嫡子尾張守尙順、佐々木治部少輔經秀、伊勢備中前司貞隆、富樫介政親等各々騎馬、後陣ハ時ノ管領細河右京太夫政元、騎馬十騎ヲ從ヘテ靜ニ供奉シ奉ル、珍シカリシ行粧也、

義尙公於陣中御逝去事

文明一統ノ後トイヘドモ、諸國ノ兵亂イマダ不_レ止、山名方ノ餘類猶國々ニ逃下リ、在々所々ヲ押領ス、就中近江國ノ住人佐々木六角四郎高賴、存外ノ曲者ニテ、更ニ上洛スル事ナク、公方ニ屬ヒ奉ラズ、我意ニ任セテ逆威ヲ振フ、剩ヘ山門ノ領地ヲ押領シテ、山徒ノ訴訟頻也シカバ、旁々以指置ガタシ、不日ニ追伏アルベシトテ、長享元年九月十二日、新將軍義尙公數千騎ノ人數ヲ卒シテ、江州ヘ御進發、其日ハ坂本ニ着カセ給フ、斯ニ暫ク御陣ヲ被_レ居、高賴ヲ攻ラル、高賴モ一家ヲ盡シ出向テ合戰ニ及ブ、佐々木勢打負テ新將軍御勝利ナレバ、高賴終ニ己ガ居城觀音寺ノ城ヲ落テ、山賊ノ望月、山中、和田ト云者ドモヲ相語ラヒ、甲賀山ノ中ニ隱レテ、行方知ズナリニ

ケル、此山ハ深嶺幽谷人跡絶テ、輒ク攻入ガタケル
バ、攻干サレン事叶難シ、殘黨多シテ高賴領地ノ分
内廣ク、彼ガ一類所々ニ散居シ、不日ニ御退治成ガ
タケレバ、猶彼輩搜出シ御誅伐アルベシトテ、同十
月四日坂本ヨリ御船ニ召サレ、安養寺ヘ御陣ヲ替ラ
ル、斯ニテ御父東山殿ヘ御詠歌ヲ獻セラレタリ、

坂本ノ濱路ヲ過テ波安ク

養フ寺ニ住ト答ヘヨ

東山殿御返歌アリ、

頓テ又國治リテ民安ク

養フ寺モ立ソ歸ラン

同廿八日、同國鈞ノ里ヘ御着陣、斯ニ三年御在陣ア
リ、同年十二月二日、待從中納言實隆卿ヲ勅使トシ
テ、今上皇帝忝モ陣中ヘ御製ヲ下サレケルハ、

君住メハ人ノ心ノマカリヲモ

サコソハスクニ治メナスラメ

新將軍ヨリ御返シヲ獻セラル、

人心マカリノ里ソ名ノミセン

スクナル君力代ニ仕ヘナハ

角テ長陣ノ間、御徒然ヲ慰メラレンガ爲メ、且ハ御

信心ノ爲ニトテ、春秋傳ト孝經ノ談儀ヲ御聽聞アリ、
花晨月夕折ニ觸タル御詠歌ハ其際限モ無ケル、然ル
處ニ長享三年ノ春ノ頃、不圖御不例ノ御事アリ、事
假初ノ様ナリシガ、次第ニ重ラセ給ツ、醫療祈念
ノ驗モナク、同三月廿六日忽ニ御逝去有ケリ、御出
陣ノ御年ヨリ今春迄三箇年、合戦ノ御營ニ御身心ヲ
苦シメラレ、御勝利有テ陣中ニテ御逝去有事、武將
ノ本意ト申ナガラ、御年イマダ廿五歳、器量才藝御
行迹皆以世ニ超給ヒ、殊更御父義政公老後ノ一子、
天下ノ武將旁以一方ナラズト、貴賤上下オシナベテ
歎キ悲シム計也、御父君東山殿、御母堂大方殿、御
兩所ノ御歎キ喩ヘテ謂ン方モ無シ、同卯月廿七日ノ
新將軍義尚公ノ御死骸ヲ、洛陽ノ等持寺ニテ御葬禮
ノ儀アリ、其日禁裏ヨリ勅使立テ、義尚公ニ從一位
ノ太政大臣ヲ御贈官御贈位アリ、又御追號ヲバ常德
院殿トゾ稱セラレケル、草ノ陰ニテモ亡魂サコソ御
悅ビ有ベシト、皆人申シ合ケル、飛鳥井權大納言雅
康卿、今度ノ御事愁歎ニ堪佐テ、一首ノ短歌ヲ沈吟
シテ、御手向ニゾ備ヘラレケル、

ハシメ無ク、終リ無キ世ニ、メクリ來テ、ヲノツ

カラナル、コトハリヲ、見シモ聞シモ、トマラズ、過シ中ニモ、タノミツル、ヒロキ樹^{ツツキ}ノ、影カクス、闇ノウツ、ハ、誰モミナ、夢ニマサラヌ、思ヒニテ、心マヨヒノ、兎ニ角ニ、日數ウツリテ、卯月テフ、名モウラメシキ、コ、スカノ、朝タノ煙リ、立ト見シ、涙モキエテ、マボロシノ、有カ無カノ、俤^{オモカゲ}ハ、ナニ中々ニ、殘ルラン、馴ニシ事ヲ、ツク^トト、思ヘバ悲シ、和歌ノ浦ニ、道ヲ學テ、眞鶴ノ、アサル渚ノ、シホカヒニ、玉藻數々、アラハレン、波ノ打キ、人シレズ、掛シ心ハ、袖ヌル、ヨスガトノミヅ、ナリハッル、アハレ昔ニ、イヒ置シ、稀ナル齡、七十ノ、餘レル迄ニ、ナガラヘテ、惜カラヌ身ノ、カハリ行、習モガナト、思ヘドモ、猶オクレ居テ、歎ク頃哉、

聞人皆哀ガリケルトゾ聞ヘシ、

將軍家江州御勤座事

長亨三年卯月十日改元有テ、延德ニ遷サル、扨モ今出河殿義視卿、去文明九年諸國ノ軍兵京都ヲ退去シケル頃、美濃國へ御開キアリ、其時十二歳ニ成ラセ給

シ若君ノマシノケルヲ、同ク誘引御退失アリ、此若君ノ御母上モ裏松殿ノ御息女ニテ、大方殿ノ御妹也、長亨元年ノ秋八月、濃州ニ於テ此若君ヒソカニ御首服マシノテ、從五位下左馬頭ニ被^レ任、御稱號、其頃義材ト申奉ル、其後度々御改名アリ、明應三年ニハ義高ト被^レ改、文德元年ニハ義光ト申ス、永正十年終ニ義植公ト稱ス、皆是義材ノ御事也、爰ニ今春常德院殿御早世アリケル以後、東山殿ニ御實子ナク、天下ノ武將大樹ノ位ヲ可ニ相續一人無レバ、今ハ東山殿モ、又大方殿モ御心折レサセ給テ、今出河殿御和睦アリ、彼御子左馬頭義植ヲ東山殿ノ御養子ニ成シ參ラセ、征夷將軍ノ位ヲ讓ラセ給ヒ、天下ノ政事ヲ與奪有ベシト御定メ有ケレバ、延德元年四月十二日、今出河大納言義視卿、同左馬頭義植朝臣、濃州ヨリ御上洛、即左馬頭殿ヲ東山義政公ノ御養子ニナシ給ヒ、公方ノ家督ヲ御相續アリ、東山殿、今出河殿、本ノ如ク御和睦也、角テ翌年延德二年正月七日、東山殿義政將軍ノ御薨逝、御年五十六歳ニナラセ給フ、即葬禮ノ御營有テ、慈照院殿ト謚シ奉リケル、同年ノ七月左馬頭殿征夷將軍ノ宣下ヲ蒙リ給ヒ、宰相中將從四

位下ニ御官位アリ、政道正シクマシ／＼テ皆人歸服申ケリ、其次ノ年延徳三年正月七日、今出河殿御逝去アリ、御歳五十三トゾ聞ヘケル、御追號大智院ト稱ス、去々年御上洛ノ後ハ、三條東洞院通賢寺ノ方丈ニ御居住有テ、御飾ヲ落サセ給ヒ、御名ヲバ今出河大納言義視入道道存ト申シケルガ、果シテ今春御薨去有ケル、去程ニ義植將軍ハ大樹ノ位ニ備リ給ヒ、天下ノ政道ヲ執行給ケルガ、御代替リノ事ナレバ、國々ノ大名高家皆使者ヲ以テ名代トシ、御禮ニ差上、或ハ自身上洛シテ御禮申上ケルニ、江州ノ佐々木六角四郎高頼ハ近國ニ在ナガラ、猶モ上洛不レ仕、上意ニ從ヒ申サマル故、又是ヲ退治有ベシトテ、明應元年八月將軍家江州ヘ御動座有リ、三井寺ニ御陣ヲ召サレ、佐々木ガ居館觀音寺ノ城ヲ攻ラル、高頼打負、城ヲ落テ又甲賀ノ山中ヘ隠レ入り、塾居シテ在ケル故、將軍則御歸京有ケリ、同年十二月防州住人大内左京太夫義興、中國九箇國ノ勢ヲ率シ、上洛シテ將軍ニ拜仕シケル、是ハ遙ナル國ヲ隔タルニ、加樣ニ公方ヲ敬奉ル事、他ニ異ナル大名也トゾ、皆人申シ沙汰シケル、

豆州堀越御所滅亡事附義澄御上洛事

其頃關東ニ事アリケルハ、去ル享徳年中鎌倉ノ御所左馬頭成氏ヨリ上杉民部太夫憲忠ヲ誅伐有ケリ、此時ヨリ以來、鎌倉方ト上杉方トニ成テ合戰アリ、上杉ハ京都ヨリ御下知ヲ承リ、合力ノ者多ケレバ、成氏獨身ニテ終ニ打負、鎌倉ヲ追落サレ、野州古河ヘ落行給フ、上杉方ハ武州五十子^{イカゴ}ニ旗ヲ立テ、頻ニ京都ヘ執シ申シ、關東ノ主ヲ請奉ル、依レ茲東山殿ノ御舍弟天龍寺ノ香嚴院ヲ還俗セシメ、左兵衛督ニ補任シテ政知ト號シ、關東ヘ被^レ下向、然レドモ相州ノ諸侍猶成氏ヲ慕フ者有ガ故ニ、政知ニ隨逐セズ、然間政知鎌倉ヘハ不入給、豆州北條ニ御所ヲ立、斯ニ御住居有ケレバ、其所ノ名ヲ取テ堀越殿トゾ申シケル、其時分駿州高國寺城主ニ伊勢新九郎平盛時ト云者アリ、後ニハ長氏ト改名シ、剃髮ノ後ハ早雲寺宗瑞ト云ケル、文武二道ニ達シ、才智拔群ノ者也、是ハ其頃京都ニ在シ伊勢守貞國ニハ外叔ノ甥也、此者ノ先祖伊勢肥前守平盛綱ハ、故大樹等持院尊氏公天下草創ノ時、手越河原ノ戰場ニテ討死ヲ遂^シヨリ、爾來代々京都公方家ノ御供衆ニテ有ケルガ、一族ナレ

バ又代々伊勢守トモ縁座ナリケル、于レ斯新九郎盛時ハ、先年今出河殿御供申シ、勢州エ下リケルガ、關東兵亂ノ久シキヲ鑑ミ、時運ニ乗ジテ吾家ヲモ興起セント思ケルニヤ、駿河國主今河義忠ト云人姉婿ナリケレバ、新九郎是ヲ頼デ駿州ヘ下ル、其頃隣國ト合戰有テ、義忠ハ討死シ、其家督五郎氏親漸ク七歳也ケル間、幼稚ニシテ國政ニ疎キガ故ニ、彼家ノ一門家老等我意ニ任セ威ヲ爭ヒ、分レ／＼ニ合戰ニ及ブ事アリ、新九郎此大節ニ及デ氏親ヲ介抱シ、此爭亂ヲ取扱ヒ、終ニ駿河ヲ無爲ニ治メ、氏親ノ世トナシケレバ、氏親此忠義ヲ賞祿シテ、同國高國寺城ニ富士郡ヲ相添ヘ、新九郎ニ授ケ、ル、新九郎ハ本ヨリ京家ノ者ナル故、常ニ豆州堀越ノ御所ヘ參リ仕フ、政知モ又御心安ク思召テ、諸事念頃ニ仰合サル、于レ時延德三年ニ、政知ニ二人ノ御子アリ、長男ハ先腹ニテ今歳十五歳、茶々丸殿ト申ケル、二男ハ當腹ニテ十一歳ニナリ給フ、然ルニ政知モ御臺所モ次男當腹ノ若君ニ世ヲ讓ラント思召、茶々丸殿ノ少シ計リ酒狂醉亂ナリケルヲ、誠ノ狂氣ト披露有テ籠ニ入奉ル、御内ノ人々憐レミ申シ、竊ニ籠舍ノ中ヘ小刀一本ヲ

參ラセケレバ、茶々丸殿其小刀ヲ以テ番ノ武士ヲ刺殺シ、彼武士ノ刀ヲ奪取リ、走リ出テ繼母公ヲ刺殺シ、其後數多合力シテ、軍兵ヲ引具シ、父政和ヲ攻ラレケルニ、政知モ力及給バネバ、其儘自害マシ／＼ケリ、哀レナリケル事ドモ也、二男ノ若君ハ駿州ヘ落行給フ、伊勢新九郎是ヲ聞テ、急キ義兵ヲ興シ、茶々丸ヲ攻ケレバ、伊豆一國ノ侍ドモ、茶々丸殿ハ父ノ首ヲ斬シ人也、此人ニ組セン事勿體ナキ事也トテ、皆背キケル程ニ、茶々丸獨身ニテ可ニ合戰ノ様モ無、堀越ヲ出デ、相摸ヘ落行、三浦介平時高ヲ頼居給ケル、扱モ政知御次男ノ若君ハ、駿州ノ今河五郎氏親ヲ頼ミ給フ、氏親思案シテ此若君ヲ京都ヘ上セ奉リ、天龍寺ノ香嚴院ヘ入申シ、御喝食ニテマシ／＼ケルガ、後ニ此若君公方ト成リ世ヲ繼給ケル、義澄將軍トハ是也、其以後三年ノ間、茶々丸殿ハ三浦介ガ館ニ居給フ、然處ニ伊勢新九郎入道早雲ハ、上州ノ上杉定正、駿州ノ今河氏親ヨリ加勢ヲ請ヒ、明應三年九月廿三日、相州三浦ヘ押渡リ、三浦介ヲ攻落ス、茶々丸殿不レ叶シテ其儘自害シ給ケル、法名ヲバ成就院福山廣德トゾ申ケル、前三浦介ハ主君ノ鎌倉殿古

典範持氏ヲ亡シテ、己ガ養子時高ニ亡サレケリ、今又時高亡シ時、其頃時高ガ子義同モ父子不快ニテ相州ニ在ケルガ、上杉方ヨリ催サレ、案内者シテ三浦ヘ先掛シ、寄手ニ加リ、父ノ時高ヲ責亡ス、誠ニ父子トモニ大惡人トゾ聞ヘケル、三浦ニハ上杉ノ下知トシテ、義同ヲ入置ヌ、早雲ハ名氏ヲ改メ北條ト號シ、末繁昌ニゾ榮ヘケル、同六年古河ノ御所成氏朝臣モ卒去有ケレバ、乾享院殿ト追號シ奉ル、政知ノ追號ヲバ勝幢院殿トゾ申ケル、

河州正覺寺合戰畠山政長自害事

京都ニハ應仁ノ兵亂ノ後、文明一統ヨリ爾來、細河勝元モ山名宗全、畠山義就モ皆々卒去セシメケレバ、當時古キ人トテハ畠山左衛門督政長計ゾ殘リケル、此政長本ヨリ一方ノ棟梁ニテ、位モ從三位ニ叙爵シ、管領職ニモ三箇度迄補任セシガ、三職四職ノ面々、御供衆ニ至ル迄、彼人ノ下風ニ立、然レバ政長驕ヲ極メ、書狀ト文章モ古ノ法ト替リ、四職ノ人々ヲ始トシテ、サナガラ被官ノ如クニス、因レ茲一色、赤松、山名ノ面々色々此儀ヲ歎訴シテ、政長ヲ恨ル頃、政長ノ讐敵前右衛門佐義就ガ子畠山上總介義豐、河州

譽田ニ在城シテ、毎度政長ト合戦ス、將軍義種公ハ政長ト御一味也ケル故、政長則將軍ノ御供シテ數多ノ軍兵ヲ卒シ、河州正覺寺ニ楯籠リ、近日譽田ヲ攻ントス、義豐ガ滅亡近キアリト見ヘケル處ニ、細河右京太夫政元ハ亡父ノ親ミヲモ不省、政長ニ恨ヲ含ミ、多勢ヲ引具シ義豐ニ加リケル、是ニ依テ桃井、京極、山名、一色、此人々ヲ初トシテ、皆敵陣ニ加、義豐數萬ノ合力ヲ得、却テ正覺寺ヲゾ責ニケル、于レ時明應二年四月廿八日、政長方ニハ遊佐、齋藤、志貴、杉原ノ人々其心ヲ一ニシテ、斯ヲ先途ト防戦フ、サレドモ敵ハ四萬餘騎、味方纔ニ二千餘人、叶フベシトモ見ヘザリケレバ、事ノ急ニナラヌ先ニ公方ヲ落シ參ラスベシトテ、義材公ヲバ御馬ニ召サセ申シ、夜ニ紛レ御出城有リ、和州筒井城ヘ落着カセ給ケリ、角テ其夜モ明ケレバ、敵陣次第ニ多勢加リ、四方ヨリ取卷テ、可レ落道モ無リケル、城中ノ人々今ハ遁レヌ所ナレバ、尋常ニ腹切シト中々ニ思ヒ切テ、心ヲ靜メ待居タリ、政長ハ平ト云侍ヲ招テ、子息御兒丸トテ十三歳ニ成リ給フ、是ハ三歳ノ時常徳院殿ヨリ一字ヲ賜リ、尙慶ト申シケルヲ呼出シ給ツ、此子

ヲ汝ニ預ルゾ、イカナル知慮ヲモ廻ラシテ落シ申シ、再度當家開運ノ時ヲ待ベシト宣ヒケレバ、平申シケルハ、某ハ此度御最期ノ御供セント存切テ侍リ候、一族ニテ候平ノ三郎左衛門ニ被_レ仰付_二候ヘト云、三郎左衛門モ是非御最期ノ御供致サン、若君ノ御供ヲ他人ニ被_レ仰付_二ベシト頻ニ辭シ申ケリ、政長大ニ怒リ、汝ハ不覺ノ申シ事哉、十死ヲ暫時ニ定、只今自害セン事最ヨリ安キ事也、一生ヲ來日ニ期シ、尙慶ヲ守立テ世ニ出サント致ス事ハ、却テ大事ノ儀ナルベシ、早々ト宣ケレバ、平三郎畏テ泣々座敷ヲ立ニケル、扱三郎ガ謀慮ニハ、此頃公方ノ御慰ニ參リ居テ、舞謳ナドシタリケル、桂ノ遊女等ガ裝束ドモヲ取付テ、御兒丸ヲ桂ノ姿ニ作立、彼女ドモノ中ヘ入、己ハ桂ガ男ノ風情ニナリ、被_レ類、裝束ナンドヲ包物ノ内ヘ取入、畠山重代ノ長刀ヲバ竹ノ筒ニ入テ背荷、敵陣ノ前ヲ通リケルガ、敵方ニモ桂ヲ知タル人多クテ、ソレカト思通シケレバ、咎ムル者ハ無リケリ、其ヨリ馬ニ乗奉リ、鞭ヲ進メテ大和國奥ノ郡ヘ落シ參ラス、角テ今日四月廿八日夜ニ入テ、政長最期ノ酒宴ヲ始メ、其時城ニ籠ラレケル葉室大納

言光忠卿ヲ初メ參ラセ、一味ノ面々ニ盃ヲ廻ラシ、心閑ニ念佛申シ、車座ニ並居テ各々腹ヲ切ラントス、政長ハ藤四郎吉光ノ脇指ニテ腹ヲ三度切給フニ、三度ナガラ切レザリケレバ、腹ヲ立テ其刀ヲ投ヤリ給ケルニ、傍ナル藥研ニ當リ、藥研ヲバ裏表二重迄通シケル、其ヨリシテ此刀ヲ藥研藤四郎トゾ名付ケル、扱ハ重代ノ刀ニテ主人ノ死スルヲ惜ケルゾヤ、如何スベキト宣フ處ニ、丹下備後守冠落シノ信國ノ刀ヲ拔テ、己ガ股ヲ二刀突通シ、イカニモ及心能候、是ニテ遊バサレ候ヘトテ、政長ニ奉ル、政長此刀ヲ逆手ニ取直シテ、腹十文字ニ抓破リ、刀ヲ光忠ニ參ラスル、光忠卿モ其儘自害シ給ケレバ、其ヨリ次第ニ腹切テ、二百餘人ノ者ドモ一騎モ不_レ殘、一同ニ自害セシメ、城ニハ火ヲ放テ片時ノ煙ト燒失ケリ、

將軍御沒落事

角テ細河政元ハ正覺寺ノ軍ニ討勝テ、政長ヲ擊取、公方ノ御行衛ヲ尋搜シ參ラセケルニ、和州筒井城ニマシマシケレバ、彼城ヨリ取奉テ、忝モ征夷將軍源義植公ヲ波波下部紀伊守ニ預置、籠ヲ作_レ入奉テ、遁世者只一人配膳ノ役ニゾ侍ラセケル、男女トモニ彼

籠へ參ル事堅ク制禁シタリケルガ、將軍ノ伯母御前ノ比丘尼御所ニマシマシケル、只此御方バカリコソ番人ノ許免ヲ得ラレ、折々籠中へ御見廻マシ／＼テ、御物語アラレケル、或時彼遁世者ヒソカニ將軍ヲ進メ申シケルハ、早々斯御所ヲ落サセ給ヒ、何方ニモ御座ヲ移サレ、御運ヲ開カセ給ベシ、御本意ヲ遂ラレナバ、某ガ子孫ヲバ必御取立給ハラセ候へ、某ハ御跡ニテ水火ノ責ニ遇トテモ、御行衛ヲ申マジキト懇ニ申上ケル、將軍此由最ト思召シ、サラバ其意ニ任スベシ、汝ガ忠義程生々世々忘ルベカラズ、子孫ニ至テハ必取立召仕ハレント御約束有ケリ、其後將軍ハ頓テ彼伯母御前ト一ツ乘輿ニ召サレツ、其後舍ノ中ヲ忍出、安々ト遁レ落給フ、先ツ北國ヘト赴キ給フ、道々武士等ヲ催サル、中ニモ能登國ノ住人畠山修理太夫、椎名、神保、石黒ヲ頼マセ給ヒ、越中國放生津ト云所ニ御下着有ケリ、扱モ將軍御没落ノ御跡ニ、彼遁世者ハ此事ヲ深く隠シ、何事ナク御座ノ如クニ日々御膳ヲ捧ツ、人知ヌ様ニモテナシ、獨シテ御物語申ス體ニシ居タリケリ、サレドモ十日計過テ自然ト皆人知タリケル、昔鎌倉ニテ賴朝卿ノ御

時、木曾左馬頭義仲ノ嫡男清水冠者義高ヲ召籠置給ケルニ、清水殿或時女房ノ姿トナリ落行給タリケルニ、乳母子ノ海野小太郎幸氏ト謂フ者一人御座ノ亭ニ居殘リ、獨シテ物語シ、又獨シテ雙六ヲ打テ居タリケル、外様ノ番侍ハ此事ヲ不レ知、イツモ只志水殿ノオワシマスト思居ケルニ、遙ノ日數ヲ經ケル後、此事既ニ顯レケレバ、彼幸氏ヲ召捕テ囚問ハレケルトカヤ、此遁世者モ加様ノ事ヲ思合、角ハ計ヒケル物ナラン、角テ伯伯下部紀伊守ハ此遁世者ヲ召捕テ、様々ニ拷問シテ、公方ノ御行衛ヲ尋問タリケルトモ、終ニ此者落ザリケレバ、後ニハ河原ニ引出シ、首ヲ刎テ捨ニケリ、其日紀伊守ガ父豐前守頓死シケレバ、公方ニ惡シクアタリ申シ、御罰ナルベシト、世上ノ人ハ申合ケル、

新將軍御在位事附山門炎上事

去程ニ京都ニハ公方無クシテ叶ベカラズ、堀越殿ノ御次男ノ天龍寺ノ香嚴院ニ喝食シテ、未ダ落髮シ給ハザルヲ、九條殿下政基公ニ内縁有テ、様々申サセ給ケレバ、右京太夫政元此儀ニ承伏シ、不日ニ取立參ラセ、喝食御元服有テ、義退ト御稱號、後ニハ義澄

ト御改名有ケリ、扱モ義植卿ヲバ將軍職ヲ解官有シメ、義澄卿ヲ公方ト仰ギ、征夷將軍ノ位ニ備リ給ヒ、皆人傳申ケレバ、榮枯一時ニ轉變ス、爰ニ又前大樹義植卿ハ北國ニ御座有テ、一味ノ面々ヲ催サル、御手ニ屬スル輩ハ、能州ニ畠山修理太夫長九郎左衛門、越中國ニ椎名、神保、小坂等、加賀國ニ富樫中務政親、越前ニ朝倉、若狹ニ武田、其外石黒左近藏人、多田治部太夫等也、頓テ此人々ヲ御供ニテ、明應二年閏四月責上ラセ給ツ、江州坂本ニ着御アリ、深ク山門ヲ賴御在陣ナリ、然處ニ京方ノ軍勢雲霞ノ如ク押寄、山門ヲ取卷、夜ヲ日ニ繼デ攻ケルガ、サシモ賴ミ思召ケル根本中堂、三千ノ僧房マデ寄手方ヨリ火ヲ放テ、一片ノ煙ト燒拂、今ハ楯籠ラセ給ベキ城廓陣所モ無リケレバ、又此所ヲ御退去有テ、前大樹中國ヘ御沒落、防州ノ大守大内左京太夫義興ヲ賴マセ給フ、此者多勢ノ者ナレバ、甲斐ノ敷御請申シ、尼子、小貳、大友備前守等ニ觸遣シ、皆味方ニ參リケル、斯ニ暫時御座ヲ居ラレ、催促ノ御教書ヲ國々ヘ廻シ下サル、其頃江州住人石丸丹波守利光ハ、前大樹ノ味方トシテ、同年五月十日、尾州ノ勢ヲ相語ラヒ、美

濃國ノ齋藤ガ新將軍ノ味方ナルヲ、退治ノ爲ニ出陣シテ、旗落寺ニ陣ヲ取ル、齋藤法印妙椿ハ兼テ約束有シカバ、越後國住人上杉相州ヨリ數多ノ加勢ヲ待請テ、三千餘人ヲ相繼シ、小山城ニ出張シテ、晝夜四十餘日合戦シケルガ、終ニ石丸打負テ、父子兄弟皆一所ニ自害シ失ケル、于レ斯畠山中務少輔政光ハ、先年河内ノ合戦ノ時、前大樹ノ御供シテ筒井城迄參ケルガ、此城ニテ大樹敵陣ニ囚レ給ヌ、政光其ヨリ無力落行テ、石丸ガ許ニ今年迄隠レ居ケル、此度石丸軍ニ打負テ、齋藤ガ爲ニ自害シテ亡ケレバ、政光ハ賴ム木ノ本ニ雨ノ降ル心地シテ、又斯ヲモ立出テ、前大樹ノ御跡ヲ慕ヒ申、遙々中國ニ赴キ、周防國山口マデ下リ着テ拜仕申タリケレバ、前大樹御感ノ餘ニ、御自筆ノ御書ヲゾ下サレケル、其詞ニ云、

今度正覺寺供奉之輩馳ニ上京都ニ敵同意候處相殘堪忍一段忠節殊就ニ當國下向ニ馳參之條感悅候彌抽ニ戰功ノ者可レ爲ニ神妙候也

明應二年七月十三日

御判

畠山中務少輔殿

雪敵事

島山尾張守尙慶ハ、和州奥郡ニ隠レ居ケルガ、彼侍ニ
 木澤ト云者アリ、政長自害ノ後、イカニモシテ主君
 ノ本意ヲ達シ、尙慶ヲ二度河内ノ本領ヘ返シ入申サ
 バヤト、骨髓ニ徹シ思ケルガ、天感ニヤ有ケン、其
 本意ヲ達ニケル、扱其子細ヲ尋ニ、木澤其頃浪率
 シテ、泉州ノ堺ヘ落行商人ニ成居ケル、然處ニ或時
 大雪降ケルニ、夜ニ入テ名屋ト云商人ノ家ノ門前ヲ
 行過ル、于^レ時木澤ガハキタル木履ニ雪ノ多ク付タル
 ヲ、夜更タルマ、ニ名屋ガ門ノ闔ニアテ、丁々ト打
 付、雪ヲ敲キ落シケレバ、其儘内ヨリ戸ヲ開テ袖ヲ
 引行者アリ、折節闇夜ニ怪シケレドモ、木澤少シモ
 不^レ騷シテ、音モセズ袖ヲ引カレテ奥ヘスベリ入タレ
 バ、屏風ノ中ニ引入レテ、女房二人燈ヲ持來リ、熟
 熟^ヅト木澤ヲ見テアキレタル風情ニ見ヘケリ、是ハ其
 亭主名屋ト云町人、商賣ノ爲ニ高麗國ヘ渡海シ、長
 長ノ留主ナレバ、名屋ガ女房他ノ男ニ密通シテ、夜
 ナ夜ナ通ヒ來ル者アリ、然レバ今夜モ名屋ガ女房彼
 忍男ノ通來テ、門ヲ敲ク音カト思ヒ、戸ヲ開テ木澤
 ガ手ヲ取り引入ケルトゾ聞ヘケル、木澤頓テ其氣色
 ヲ見取ケレバ、女房ニ向テ申ケルハ、我ハ是此家ノ

主人ト知音ノ者也、主人頓テ高麗ヨリ歸來ラバ、汝
 ガ不行義ノ段々具ニ申シ聞スベシト云、名屋ガ妻女
 ハ手ヲ摩頭ヲ地ニ付テ、此事隠シ給ハルベシト様々
 ニ佗言シテ、金銀財寶持來リ、色々ニ賄ヒ宥メケレ
 ドモ、終ニ不^レ聞、金銀ヲバ不^レ取シテ、床ノ上ニ一
 管ノ笛ノ有ケルヲ懷中シテゾ歸リケル、沓ニ程經テ
 後、名屋ハ高麗ヨリ歸ルベキ由先立テ申シ越、其待
 儲^ヲ爲ニトテ妻女ハ家ノ内ヲ掃除シケルニ、彼床ノ
 上ニ置ケル笛ノ曾テ見ヘザリケルヲ、不思議ニ思ヒ
 尋ル内ニ、或下女ノ申シケルハ、日外ノ夜ノ男コソ
 彼笛ヲバ懷中シテ取テ歸リ候ト云、其ヲ能々尋レバ、
 木澤ニテゾ有ケル、木澤申ケルハ、是非トモニ此事
 名屋ニ告聞カセ、此笛ヲ證據ニシテ(脫字アラシ)妻女ガ
 父臙脂屋ト云町人アリ、此事ヲ聞テ木澤ガ許ヘ尋行、
 吾娘ノ不作法ヲ夫ノ名屋ニ告給ハバ、娘ノ一命危カ
 ルベシ、イカニモシテ此事ヲ隠シ給ハラバ、報恩ノ爲
 ニ何様ノ御所望ヲモ相叶ヘ申ベキ由様々ニ佗言シケ
 ルヲ、木澤申シケルハ、吾ハ是故島山政長ガ臣下ナ
 リ、先君ノ讐ヲ報ゼン爲ニ合戰ヲ思立、河州平野城ヲ
 攻テ、敵ノ上總介義豐ヲ討ント謀ル者也、然レトモ當

家近年浪牽ノ身トナリ、金銀米錢微方ニシテ、長陣ノ支度叶ヒガタシ、是ヲ以テ大義ノ計略延引ニ及ブ者ハ、富家ナレバ兵糧金銀ヲ見續テ給ルベシヤト云、臘脂屋ハ卑シキ町人ナレドモ、木澤ガ義志ニ感信シ、又吾娘ノ一命ヲ救ハン爲ニ、ソレコソ安キ御所望ナレ、何分ニモ糧米金銀ヲ續ケ申ベシト云テ、其約束ヲゾ堅メケル、木澤扱ハ心安シトテ、笛ヲバ臘脂屋ニ與ヘ遣シ、畠山ノ家人杉原、齋藤、志貴、丹下、宮崎、安見、遊佐等ニ觸遣シ、大軍ヲ催シ、畠山尙慶ノ紀州ニ隱レマシムケルヲ、大將ニ取立テ蜂起シケレバ、臘脂屋モ即チ策約ノ如ク兵糧ヲ運送シケリ、木澤ガ忠節有難カリシ事ドモ也、扱モ畠山總州義豐ハ河州平野ニ在城シテ、細河政元ヨリ加勢ヲ受、和州ヲ退治スベシト企ツ、是ニ依テ和州、河州ノ間ニテ合戦度々ニ及ケルヲ、尙順自ラ多勢ヲ卒シテ平野城ヲ取卷、息ヲモ不繼攻ケル程ニ、總州方終ニ打負、明應八年正月廿七日、平野城攻落サレテ、畠山義豐ハ伴拔ト云所ニテ、自害シテ果給フ、其子彈正忠ハ行方知ズ成給ケリ、尾張守尙順ハ父ノ仇義豐ヲ討取ノミナラズ、紀伊、大和、河内三箇國ヲ一時ニ從ヘ、

河州高屋ニ在城シテ、暫ク遲ヲ開カレケル、

畠山尙順入道ト山與ニ細河方ニ合戦事

畠山義豐自害ノ由聞ヘケレバ、細河右京太夫政元大ニ怒リ、尙慶追討ノ爲ニ多勢ヲ催シ、赤澤宗益ト云者ヲ大將トシテ大和國ヘ發向ス、彼國住人越智古市ヲ初トシテ皆味方ニ參リシカバ、其勢力ヲ得テ河州譽田城ヲ攻ル、此城尙順味方ナレバ、其急ヲ救ハン爲ニ、尾張守尙順多勢ヲ卒シテ後詰シケルガ、防戦不レ叶シテ、終ニ尙順勝利ヲ失ヒ、譽田城攻落サル、其ヨリ宗益猶將軍ノ力ヲ得テ、高屋城ヲ圍攻ル、同十二月十八日終ニ此城攻落サレテ、畠山尙順ハ紀州廣ト云所ヘ落行テ隱レ居給ヒ、殘徒大半討捕ラレテ、細河方ノ軍兵大ニ勝利ヲ得タリケル、抑此高屋城ハ、安閑天皇ノ御廟所也ケルヲ、要害能所也トテ、尙順初テ城ニ取立、安々ト居住セラレシガ、靈神ノ祟ニヤ、程ナク落城シタリケルカト皆人申合ニケル、去程ニ赤澤宗益ハ、畠山故總州義豐ガ子彈正忠ヲ取立テ、河内國ノ守護ニ定メ、甚ダ威勢ヲ振ヒケル、尾張守尙順ハ今年十八歳、紀州ニ在テ剃髮シ、ト山入道ト號シケルガ、扱在ベキニアラザレバ、又敗軍ノ

士卒ヲ集メ、明應九年九月廿八日ニ河州へ發向シテ、高屋城ヲ攻ラレケル、細河政元是ヲ聞テ、又高屋城後詰ノ爲ニ、同朋ノ澤藏軒ト云者ト、江州ノ内堀ト云者ヲ大將トシ、五千餘騎ノ軍兵ヲ河内國へ差向ラル、此勢高屋ニ下着シテ、ト全方ト合戦ス、ト山入道ハ新手ノ敵ニ切立ラレ、忽打負タリケルヲ、城中ノ兵ドモ後詰ノ勢ニ力ヲ得テ、追掛ノ戦ケレバ、ト山彌々敗軍シテ、其身ハ^{へうく}匍々ニテ漸ク紀州へ落テ行、畠山彌次郎以下同苗ノ一族七人迄生捕ニコソセラレケル、

和州合戦事

明應九年庚申九月廿八日、主上崩御マシケレバ、洛中ノ悲歎淺カラズ、御追號有テ土御門院ト申ス、頓テ新帝御踐祚アリ、後柏原院是也、翌年辛酉二月廿五日改元有テ、文龜ニ遷サル、文龜元年四月晦日、栗程ノ大雹降ケリ、是只事ニアラズト云、前大樹義植卿其頃周防國山口ニマシケテ、諸國へ御内書ヲ廻ラサレテ御勢ヲ召サレ、再度御歸京ノ儀ヲ被レ催シニ、九州ノ諸侍等皆以歸服シ奉ル、畠山入道ト山ハ、猶紀伊國ニ蟄居シケルガ、先敗ニ打殘サレタル家

子郎等、所々方々ヨリ馳集リ、又多勢ニ成ケレバ、程無ク和州へ亂入テ、越智伊賀守ガ城ヲ取卷、透間モナク攻戰テ、終ニ此城攻落シヌ、此時越智ガ家臣武者大將ト聞ヘシ鳥屋ト云侍父子、一番ニ渡リ合セ、散々ニ戰ケルガ、痛手負テ死スベカリシヲ、郎黨等肩ニ掛テ漸ニ引退キ、附慕フ敵ドモヲバ、引返々々防矢射テコソ落延ケル、鳥屋ガ子息ハ十六歳ニテ、散散ニ戰ヒ討死シケル、角テ其夜落城シ、越智伊賀守ハ城ヲ開テ落失ケリ、此事京都ニ聞ヘシカバ、新將軍哀マセ給ツ、御詠歌ヲ下サレケリ、

子ヲ思フ燒野ノ雉子ホロト

涙モ越智ノ鳥屋啼ラン

細河政元ハ又ト山入道ガ蜂起ノ由ヲ聞給テ、赤澤宗益ガ弟福王寺、并、喜嶋源左衛門、和田孫四郎、澤藏軒、柳本、近江勢ノ内堀ヲ始トシテ、三千ノ軍兵ヲ大和國へ差遣シ、ト山ヲ責ラル、文龜二年五月三日、方々手分シテト山方ノ諸城ヲ攻ル、同月七日澤藏軒ハ南都西大寺ニ陣取ケルガ、其夜彼寺炎上シテ、澤藏軒陣ヲ開ク、ト山入道籠リ居ケルヲ、同八月ヨリ細河勢取卷テ攻レドモ、終ニ不落、同十月五日城中ヨ

リ逆寄シテ、寄手ノ細河勢悉ク敗北ス、城中ト山方、齋藤、畠田、杉原、平、遊佐、二具ノ者トモ悉ク高名シテ、ト山入道ハ又家運ヲゾ開カレケル、此由中國ニ聞ヘケレバ、前大樹義植卿大ニ御感有テ、御内書ヲ下サレケル、其狀ニ云、

十月五日信貴城合戰時遊佐九郎次郎平三郎討死之由注進去月卅日到來畢言語同斷且忠節且不便雖然無ニ異儀ニ相踏候由先以大慶候彌成敗可_レ爲_ニ肝要_一候仍細河式部太夫不_レ存_ニ疎略_一通神妙候佐佐木中務大輔江内書事即遣之候政近義隆可_レ述候謹言

十二月十七日

御判

畠山尾張守どのへ

江州百濟寺炎上附音羽城合戰事

其頃近江國佐々木六角四郎高頼ノ家臣ニ伊庭ト云者謀叛ヲ起シ、六角ニ敵對ス、依_レ茲佐々木家軍勢ニニ分_レ合戰ニ及_レブガ故ニ、南部一圓ニ騷動シテ悉ク亂レケレバ、此亂ノ變ニ遇テ、文龜三年四月七日、當國百濟寺炎上シケリ、此費ニ乘リ隙ヲ伺ヒ、澤藏軒多勢ヲ率シテ江州ヘ亂入ス、城々ヲ攻取テ、一國不

レ殘治ベシトテ、猛威ヲ振テ相働ク、同國日野音羽城主ハ、蒲生貞秀ト云者籠リ居タリ、此人ハ當國ノ湖水ニテ、昔百足_{ムカデ}ヲ射テ龍宮ヘ渡リシト云傳ヘタル倭藤太秀郷ガ後胤、武勇ノ士也、薙髮シテ智閑法師ト云、先是ヲ攻落セヨトテ、音羽城ヲ取卷_二日夜稠ク攻ルトイヘドモ、城強ク能防テ可_レ落樣モ無リケレバ、寄手攻アグミテ、徒ニ日數ヲ送り、延々ト圍居タリ、城中ニ鑄物師ノ安河ト謂フ者籠リ居ケル、希代ノ弓ノ上手ニテ、彼ガ射ケル矢先ニ立者一人トシテ命ヲ不_レ落ト云事ナシ、澤藏軒ハ音羽城ヨリ三町程遠ザケテ本陣ヲ取テ居タリケルガ、陣ノ前ニ五尺廻ノ柳ノ木アリケルヲ、彼安河ガ射ケル矢ニテ羽ブクラセメテ射拔ケレバ、是ヲ見ル人々舌ヲ卷テゾ畏懼ケル、頓テ此柳ノ木ヲ切テ城中ヘ送り、名譽ノ精兵トゾ褒美シケル、扱江州ノ國人次第_一ニ寄手ニ靡キ從ヒケレバ、澤藏軒ノ人數二萬人ニ及ケリ、サレドモ城主ハ不_ニ心屈_一、一通ノ書ヲ寄テ澤藏軒ヘ送りケリ、其辭云、

合戰雌雄依_レ難ニ相決_ニ數日御在陣御苦勞令_ニ推察_一候寔是驚_ニ武威之雷鼓_一被_レ奪_ニ竊戰之術_一一條輕_レ命

公方兩將記下

細河家亂根事

昔皇胤二流ニ分レ、北朝ノ持明院殿ト南朝ノ大覺寺殿ト天下ヲ爭ヒマシ／＼ケルニ、終ニ北朝一統シテ、南方ハ歸服マシ／＼ケリ、公方家近年兩派ニシテ、今出河殿ト堀越殿ト大樹ノ位ヲ爭ヒ給ヒケレバ、上ヲ學ブ下トシテ、畠山モ兩家ニ分レ、斯波モ二方ニ立並テ、合戰互ニ止ム時ナシ、三管領ノ内ニテハ只細河殿バカリコソ一家モ睦シク、總領ヲ尊ンデ六代迄繁昌ナレバ、大名高家ノ手本トモ成給シニ、當管領右京太夫政元ノ世ニ至テ、其子孫二流ニ分レ、是モ兄弟世ヲ爭テ互ニ挑合給フ、其濫觴ヲ尋ルニ、政元ノ舉動先祖ニ替ル事ノミ有リ、抑細河ノ先祖ヲ尋ルニ、八幡太郎義家ノ孫陸奥判官義康ニ三人ノ子アリ、一人ハ新田先祖義重、一人ハ足利ノ先祖義兼、今一人ハ矢田判官代義清トテ、是細河ノ先祖也、此人源平亂ニ本曾左馬頭義仲ニ從ヒ、備中國水嶋ノ合戰ニ討死シ給フ、其レヨリ代々朝廷ノ武臣トシテ、

重シ義尤感入候洛ニ久年之恩波諸國之猛卒抽ニ忠勤盡粉骨事神妙之儀候仍懸替之弦五百張令ニ進入候可レ被レ立ニ御用ニ候城中之輩恰似ニ鷹前之雉子墮ニ草底ニ歟今更率ニ卑賤之塾衛ニ而迎ニ花洛之勇將ニ遂合戰決ニ勝負ニ捨レ命瀑レ骸事當時面目自他嘉幸不レ過レ之候畢早破ニ四圍之構ニ靡ニ凱歌之旗ニ武勇佳名可レ被レ傳ニ後代ニ者也恐々謹言

文龜三年卯月廿八日

一本年號無之

蒲生國人等

澤藏軒御陣所

トゾ書送リケル、城兵志ヲ一ニシテ堅固ニ防居ケル程ニ、寄手長陣ニ疲レ、攻戰フニ退屈シテ、糧米悉ク盡ケレバ、先ヅ此城ヲバ重テノ軍ニ攻ベシトテ、四面ノ圍ヲ解キ、寄手皆々引返ス所ヲ、智閑法師城兵ヲ拂テ、多勢ヲ引具シ、中山ト云方ヘ切テ出、小谷繩手ト云所ニテ寄手ノ前後ヲ挾立、悉切崩シヌ、澤藏軒ガ軍兵悉ク敗軍シ、細河方打負テ、何々諸國ヘ落失ケリ、蒲生ガ武勇褒ヌ人コソ無ケル、

又鎌倉へ隨身ス、足利氏ノ一族ニハ是ヨリ近キ分レハナシ、大公方尊氏卿天下ヲ知シメサレケルヨリ、代當家ノ執事トシ、彼庶流讃岐守清氏ハ虎口ノ讒言ニテ御敵ニナサレテ亡給フ、其外ノ氏族一人トシテ御敵トナリシ人ハナシ、政元先祖武藏守頼元、右京太夫頼元ヨリ爾來代々管領職ニ補ス、其外武衛畠山モ相替テ管領ニ補ストイヘドモ、是ハ其先祖斯波修理太夫高經、畠山尾張守義深一度公方へ敵對シテ降參シケル子孫ナレバ、細河家トハ各別也、應仁ノ亂ノ時、右京太夫勝元ハ、畠山政長ヲ負シテ、山名入道宗全ト合戦ニ及バントス、其時ノ上意ニ、政長ヲ救フ者ハ御敵ニナラルベシト被_レ仰出_ニタリケルニ、猶細河ノ一族衆政長ヲ救ハント云ケルヲ、勝元忠有テ智惠深キ人也ケレバ、思案ヲ廻ラシ申サレケルハ、當家將軍ノ執權トシテ、某ドモニ六代迄終ニ一度モ御敵ノ名ヲ汚サズ、然ル處ニ今我政長ヲ合力シテ御敵トナルナラバ、主君ハ不忠也、先祖エハ不孝也、不忠不孝ノ身トナラバ、天下ノ人望ニ背テ萬代ノ嘲是ニ過ギジトテ、目ノ前ノ政長ニ合力加勢モ無リケリ、翌年上意ヲ經テ、公方家ヲ守護セシメ、山名ト

對陣シテ、應仁元年ヨリ文明九年マデ十一年ノ合戦ハ記スニ暇アルベカラズ、終ニ勝元政長ハ運ヲ開テ勝利ヲ得、山名方一族ハ京都ニモタマリ不得、散散ニ成テ亡ケル、是只勝元忠義ヲ守リ、先祖ヲ崇ミ給フ故也、然ルニ政元其子トシテ亡父ノ志ヲ破リ、畠山政長ヲ討ノミニアラズ、公方ノ御敵ト成テ將軍ノ位ヲ替奉ル事、主君ヘ不忠、先祖ヘ不孝、是ニハ過ジト見ヘケレバ、天下ノ人望ニ背テ滅ビ近キニアルベシト皆人申沙汰シケルガ、果シテ違フ事無リキ、サレバ政元ハ世ノ人ニ替リ給ヒ、行年四十歳ノ頃マデ女人ヲ禁制シ、魔法飯綱^{イツナ}ノ法、愛宕ノ法ヲ行テ經ヲ誦、多羅尼ヲ咒シ、サナガラ出家山伏ノ如クニテ、見ル人聞人皆身ノ毛ヲヨダツ計也、サレバ男子モ女子モナク、家督ヲ繼ベキ様ナケレバ、家老ノ面々色々ニ此事ヲ諫申ケル、其頃新將軍義澄卿ノ御母堂ハ、柳原大納言陸光卿ノ御娘、今ノ攝政九條太政大臣政基公ノ北ノ政所トハ御兄弟ニテマシマス故、公家武家トモニオシナベテ九條殿ヲ崇敬ス、政元當時公方家ノ權ヲ執テ驕ヲ極シ餘リニヤ、アラヌ心出來テ、九條殿ノ御末子ヲ己ガ養子ニシ奉リ、元服ノ時ハ、忝モ

新將軍家御加冠アリ、是ヲ細河九郎澄元ト名乗セラル、公武トモニ崇敬シテ、丹波國ノ守護ニ補セラル、古ヘ鎌倉ノ將軍賴經卿月輪殿ノ公達ナルヲ、武家ニナシ給シサヘ世ノ謗ナキニ非ズ、ソレハ右大將賴朝卿ノ親戚ニテ、右大臣實朝公ノ跡目ナレバ、輕キ事トハ云難シ、今澄元ハマサシク相國ノ御子ナルニ、將軍ノ執事政元ガ家督トナラセ給フ事、末世トハ云ナガラ、淺マシカリシ事ドモ也、是ヨリ先キ政元ハ藥師寺ヲ使者トシテ、阿波國ノ守護細河慈雲院ニハ、孫讃岐守之勝ノ子ヲ養子ニセント約束アリ、是ハ先年政元病氣頻ノ時、俄ニ契約有シト也、此養子器量アル人也ケルヲ、是モ將軍ヨリ一字ヲ賜リ、元服有テ細河六郎澄元ト申シケルガ、未上洛ハセズシテ、下ノ屋形ニ居給ケル、下ノ屋形トハ阿波國ニ侍ル也、細河ノ先祖賴之朝臣大忠ノ人ナル故、公方鹿苑院殿ヨリ攝州丹波ノ外ニ四國ヲ添テ賜ケル、ソレヨリ賴之ハ在京シテ、阿波國ニ舍弟讃岐守詮春ヲ留置、四國ノ政道ヲ執行ハセラレケルガ、是ヲ下屋形ト號シ、代々阿波ニ居住セラル、今ノ之勝モ詮春ノ子孫トゾ聞ヘケル、政元ハカ、ル同姓ノ近親ヲ養子トシ、又

九條殿ノ御末子ヲ養フ儀、一家ヲ二流ニシテ、後日ノ殃ヲ招ク事ハ、是只事ニ非ズ、平生不忠不孝ナレバ天罰ヲ蒙リ、一家此時滅亡セン其前表トゾ見ヘニケル、

藥師寺與市滅亡事附兩畠山和陸事

抑藥師寺ハ細河家ノ被官ノ中ニモ歷々ノ者也、其頃ノ藥師寺與市郎一元ハ淀ノ城ニ住シ、攝州守護代也、其弟與次トモニ無雙ノ勇士也、合戰ノ手柄ヲ顯ス、就中與市ハ一文不通ニテ文官ノ人ナレドモ、天性正直ニテ理非曉キ德アリケレバ、細河一家ノ人々常ニ是ヲ賞翫ス、然ルニ近年政元ハ魔法ヲ行テ空上ヘ飛上リ、空中ニ立ナドシテ不思議ヲ顯シ、後々ニハウツツナキ事ヲ宣テ、時々狂亂ノ如クナレバ、如何様今ノ分ニテハ、末々當家亡ベシト覺ヘケリ、依レ是藥師寺與市一元、赤澤宗益ト令ニ相談、六郎澄元ヲ取立家督トシ、政元ヲ隱居セサセ、細河ノ家ヲ治ベシト評議決定シテ謀叛ヲ起シ、一元ハ淀ノ城ニ櫛籠リ、宗益ハ三百餘騎ニテ伏見竹田邊マデ攻上ル由聞ヘケレバ、政元大ニ驚キ、一元ガ舍弟藥師寺與次ヲ大將トシ淀ノ城ヲ攻ラル、與次ハ當城ノ案内者ナレバ、不日ニ淀ヲ責落シテ、兄ノ與市ハ自害ニモ不レ及生捕レ

上京ス、與市ハ先年一元寺ト云寺ヲ舟橋ノ邊ニ定置
信仰シケルヲ、此度與次ガ計ヒニテ、與市則彼寺ニ
テ傷害ス、與次ハ今度ノ忠賞トシテ、公方ヨリ御威
狀ヲ賜リ、桐ノ御紋ヲ下サレケル、剽擲州ノ守護代
ニ任ゼラレケリ、昔源義朝父ノ爲義ヲ殺シテ忠賞ニ
預シ如也トテ、爪ハジキヲシテ笑人多カリケリ、赤
澤宗益ハ降參シテ様々ニ陳謝シケレバ、旬々一命ヲ
助ケラレニケル、細河家ハ如レ斯爭論ノ萌ヲ顯シケ
レドモ、永正元年十二月廿五日、公方家ノ上意トシ
テ、畠山尾州方ト同ク、上總介方ハ兩家和睦シテ、河
内國富田ノ八幡宮ニ會シ、互ニ和平ノ酒宴シテ、年
來ノ遺恨ヲ忘ケリ、サレバ其證ニ鎧太刀等ヲ寶前ニ
納奉ル、紀伊大和河内ノ人々國民等迄和睦シテ相悅
事限ナシ、

天下妖怪事附政元滅亡事

永正二年ノ春、天下大飢饉、餓^キ孳岐ニ滿、喩ヘバ十
人ノ者九人ハ死スト云程也、同三年諸國ニ億萬鼠出
來テ、耕作ノ穀米山林ノ竹木ヲ喰ソコナフ、是ハ餓
死ノ者ノ亡靈ナラントテ、諸國在々所々ニ於テ、餓
孳ノ骨ヲ取集メ、是ヲ收メ寺ヲ立テ吊祭リケル程ニ、

頓テ此鼠ノ靜リケルコソ不思議ナレ、今年細河方ヨ
リ澤藏軒ヲ大將トシ、和州ヘ打入、當國ヲ治メント
ス、畠山方ノ者ドモ澤藏ガ下風ニ立^{シタテ}ン事ヲ耻思テ、
所々城々ニ楯籠テ防戦ケル程ニ、多武峯ノ衆徒中モ
細河方ヲ背シカバ、澤藏軒押寄セ、難無攻落シテ、
同九月四日多武峯ヲ燒拂フ、大和勢不^レ叶シテ方々
ヘ落行ケル、澤藏軒ハ心ノ儘ニ和州ヲ退治シタル躰
ニテ、陣ヲ開テ歸ケル、于^レ爰細河六郎澄元ハ未^ダ四國
ニ居給ケルガ、某政元ノ養子トシ、イツ迄角テ有ベ
キトテ、四國ヲ立テ上洛アリ、實父讃岐守殿ヨリ三
好筑前守之長ト、高島與三郎トテ二人相トモニ武勇
ノ達者ヲ撰出シ、輔佐ノ臣ニ相添ラル、此三好ハ阿
波國ノ守護代ニテ、小笠原ノ末流名譽ノ者トゾ聞ヘ
ケル、後ニハ改名シテ長輝ト云、剃髮ノ後ハ希雲入
道トゾ申シケル、又香西又六郎元近ト云者アリ、武
勇ニ長ジタル者ナリケレバ、讃岐國ノ守護代トシ、
一方ノ堅トナリ居ケル、又其頃藥師寺ノ與次ハ三郎
左衛門ト改名シテ、政元ニ寵セラレ、厚恩蒙テ傍若
無人ニ舉動居ケルガ、今度三好之長ガ澄元ノ後見シ
テ在京ノ間、權威高ク何事モ藥師寺ガ下知ニ^ル從^ルテ

深ク惡ミ憤^{ウレ}テ、確執爭ヒ、哀レイカナル事モ出來ヨカシ、六郎殿方ノ人々ヲ亡シテ本意ヲ遂ント思廻シ、香西又六郎、竹田源七、新名等ノ者ドモ寄合評定シタリケルガ、政元近年物狂シク、此人存命セバ當家長久セシメ難シ、六郎殿ノ世トナラバ、三好彌彌權ヲ執ベシ、イザ政元ヲ生害シテ、丹波九郎殿ニ京兆ノ家督ヲ續ガセ、我等一モ一天下ノ權柄ヲ執ント評定ス、此儀尤トテ政元ノ右筆戸倉ト云者ヲ語置キ、永正四年六月廿三日、政元イツモノ魔法ヲ行ヒ給ハントテ、沐浴ノ爲ニ湯殿ヘ入給フ處ヲ、戸倉スルスルト走來テ、終ニ政元ヲ刺殺ス、不斷政元ノ傍ニ近在シケル波々伯部ト云小性湯明衣持^{カサヒラ}テ來タル處ヲ、戸倉是ヲモ切ケルガ、薄手也ケレバ後ニハ蘇生シテ、疵平愈ノ療治シ一命助リケルト也、此時政元ヨリ丹波國退治ノ爲ニ赤澤宗益ヲ大將トシ、三百餘騎ヲ被^レ差向、河内國高屋、ハ宗益弟福王寺、并喜嶋源左衛門、和田源四郎ニ大和勢攝津勢ヲ差向ラレ、日ノ合戰ニ每度味方勝利ヲ得、所々ノ敵モ降參シケルガ、政元切害ノ變ヲ聞テ、味方ノ軍勢皆散^ル失^セハ討ル、者多シ、香西又六郎此次而ニ澄元ヲモ討申サン

トテ、翌廿四日藥師寺香西大將トシテ澄元ノ館ヘ寄來ル、三好高島ハ思儲シ事ナレバ、百々橋ヲ相隔、出向テ防戰、敵方ノ戸倉一陣ニ進ンデ攻來ルヲ、波波伯部是ヲ見テ、昨日深手ハ負ケレドモ、マサシキ主君ノ敵也、遁スマジト云儘ニ、鎗ニテ戸倉ヲ突伏テ、郎黨ニ頸ヲゾ取セケル、又澄元ノ方ヨリモ奈良修理ト名乗テ出、香西孫六ト太刀打シ、孫六ガ頸ヲ取ル、修理モ深手負、屋形ノ内ヘ引テ入、澄元今歳十六歳、心ハ矢長ニ勇メドモ、味方讒ノ小勢ニテ叶ヒ難ク見ヘケレバ、三好高島等評議シテ、澄元ヲ相伴ヒ江州ヘ落行ヌ、洛中洛外騷動シテ、又大亂トゾ也ニケル、扱又防州山口ニマシマシケル前大樹義植卿此山ヲ被^レ聞召、大ニ悅思召サレ、此時ノ變ニ乗ジテ御上洛有ベシトテ、御用意ノ爲ニ國々ノ味方ヲ集メ給フ、中國西國ノ面々、大形味方ニ參ケレドモ、毛利治部太輔ヲ始メ宗徒ノ大名ドモ、猶モ京都ノ御下知ニ從ヒ申ケレバ、京都ノ新將軍義澄卿ヨリ御敦書ヲ被^レ成下ニケルハ、

就ニ右京太夫生害之儀ニ都鄙可^レ及ニ大篇ニ候然者今出河可^レ有ニ出張ニ候所詮其以前罷向取懸可^レ致ニ合

戰一候補ニ軍忠一者尤以可レ爲ニ神妙一候補貞宗朝臣
可レ申候也

七月五日

御判

毛利治部太輔殿

トゾ有ケル、

細河九郎澄之最期事

香西藥師寺相談シテ、丹波ヨリ源九郎澄之ヲ迎取、
管領ト仰テ右京太夫ニ遷ル、是ハ實ハ九條殿ノ御子
ナレバ、上一人ヨリ公家武家迄モテナシ申事限無シ、
香西又六郎藥師寺三郎左衛門等權柄ヲ取、我儘ヲ
舉動ケル、角テ五十餘日ヲ過シニ、三好之長ハ六郎
澄元ノ供ヲシテ、近江國甲賀谷山中新左衛門ヲ賴、
近江伊賀ノ軍士ヲ催シ、畠山總州ヲモ賴入、大和
河内ノ勢ヲ招キ、多勢ヲ引率シテ、同八月朔日京都
ヲ差テ攻上リ、九郎澄之ノ居給ケル遊初軒ヘ取
掛、入替入替攻掛ル、九郎殿御内一宮兵庫助ト名乗、
一番ニ切テ出、火花ヲ散戰ケルガ、甲賀勢ニ望月ヲ
始トシ、先掛ノ敵七八騎切テ落シ、終ニ討死シテケ
リ、是ヲ軍ノ初トシテ、九郎方ノ侍ドモ藥師寺香
西ヲ先途ト防ケレドモ、藥師寺不レ叶自害シケレ

バ、香西又六モ流矢ニ當テ亡ケリ、波々伯部紀伊守
ハ澄之ニ向テ申様、君ノ楯戈ト思召ス香西藥師寺
討死シテ、味方残り寡ク成リ、敵四方ヨリ取圍デ今
ハ遁ヌ所也、敵ノ手ニカ、ラセ給ハンヨリハ御自害
然ルベシト申ス、九郎澄之ソレハ覺悟ノ前也トテ、
硯ヲ請テ文ヲ書キ、父ノ九條殿下、母ノ政所ヘ遣ス
ベシトテ、同朋ノ有ケルニ此文ヲゾ渡サレケル、其
文ニハ、澄之此頃丹波ニテ物憂カリシ事ドモ、又御二
人ヨリ先ニ角亡果參ラセ、御歎ヲ殘ス悲シサトヲ書
ツバケ給フテ、奥ニ一首ノ歌有、
梓弓張テ心ハ強ケレト

引手スクナキ身トソ成ケル

扱鬢ノ髮ヲ少シ切添、泪ト共ニ卷籠テ、我文ナガラ
名殘惜ゲニ渡サレケルトゾ聞ヘケリ、澄之ハ雪ノ如
クナル身ヲ押ハダヌキ給ツ、尋常ニ腹切死シ給ヘ
バ、波々伯部紀伊守介錯シテ、其儘ソコニテ腹ヲ切
リ、館ニ火ヲ懸燒死ケル、香西兄弟藥師寺ヲ始トシ
テ、討死ノ面々自害ノ者都合百七十餘人トゾ聞ヘケ
ル、扱此時ノ有様ヲ同朋モ局ノ女モ九條殿ヘ申上、
澄之ノ形見ノ文ヲ奉リタリケレバ、父ノ殿下政基公

モ、母ノ北ノ政所モ、是ハ夢カヤ現カトテ、御歎ハ限リナシ、

細河澄元同高國任管領職事附前大樹御上洛事細河澄之自害ノ後、同六郎澄元管領ニ備テ右京太夫ニ任官ス、三好高島天下ノ權ヲ柄リ、心ノ儘ニ威勢ヲ振フ、然レドモ程ナク諸人ニ疎レテ、公家武家トモニ澄之ヲ惜ム者多シ、三好高島諸人ニ無禮ヲシテ驕ヲ極メケル程ニ、内々澄元ヲ背ク者コン出來ケル、就中京都ニ奈良修理進元吉、攝州ニ伊丹兵庫助元扶、丹波ニ内藤備前守貞正等、一味同心シテ九條殿ヘモ其好有ケレバ、殿下ヨリモ被ニ仰合、又其器量モ勝レツ、一門中ニ並ナキ人也トテ、細河民部少輔高國ヲ撰出シ、管領職ニ補セラル、是ハ彼家ノ庶流細河防州政春ノ子也、角テ中國ニオハシマス前大樹義植卿ヘ申通ジ、義兵ヲ起シテ諸國ヲ反覆セシメシ故、永正五年夏四月ニ中國ノ多勢上洛スルト聞ヘシカバ、澄元方ノ人々此小勢ノ分ニテハ大敵防ギ難シトテ、卯月九日澄元モ三好高島モ、京ヲ開テ散散ニ落行ケリ、澄元ト三好之長ハ江州ヘ隱レ給フ、斯ニ之長ノ嫡子當執事三好下總守長秀勢州ヘ落行ケ

ルヲ、伊勢ノ國司ハ高國ノ一味ナレバ、討手ヲ差向攻ラル、長秀不レ叶シテ山田ノ中嶋ト云所ニテ、主從十二人自害シケリ、新將軍義澄卿京都御住居難レ叶、同月十六日京都御退去有テ、忍デ江州ノ朽木ヘ落サセ給ヒ、三四年バカリ當國ニジマシムケル、扨モ前將軍義植卿ハ、中國ヨリ畿内ノ味方國々ノ者ドモニ御教書ヲ遣サレ、御勢ヲ召シケル、其狀ニ曰、泉州邊之儀其後無ニ殊事ニ候哉此節各有ニ相談一段可レ被抽ニ忠節ニ候條可レ爲ニ本意ニ候早速御馳走肝要旨候於ニ京都之儀ニ者諸家申談可レ致ニ勤功ニ覺悟一味候之旨可ニ御心易ニ候彌回ニ謀略ニ計候猶重而可ニ申承ニ候恐々謹言

四月十八日

大和衆中參

義興判

去程ニ前將軍義植卿ハ、中國ヲ立セ給ヒ、同四月廿七日泉州堺ノ津マデ御上着アリ、爰ニテ義尹ト御改名アリシト也、扨御供ノ人々ニハ、先防州山口城主大内左京太夫義興父子并大友備前守、太宰新少貳、島山尾張守、松浦、秋月、此者ドモヲ始トシテ、都合三萬三千餘騎御供申テ攻上ル、五畿内ノ軍勢ドモ、甲ヲ

脱弓弦ヲ弛シテ、又我先ニト馳參レバ、御勢程無^六萬餘騎ニテ御上洛トゾ聞ヘケル、加樣^ニ皆人降參シケルニ、攝州池田城主池田筑後守バカリ澄元味方トシテ、少シモ不^レ屈城ニ籠ル、管領高國ヨリ細河右馬頭尹賢ヲ大將トシ、同五月上旬ヨリ池田城ヲ攻ラル、ニ、筑後守ハ一騎當千ノ兵ナレバ、城ヨリ切テ出、合戰數度及ビケルニ、寄手毎度打負ケリ、サレドモ此城後詰モ無^レ兵糧モ盡ケレバ、一族池田遠江守降人ニ成テ城ヲ出ケリ、殘ル軍兵ドモ今ハ不^レ可^レ叶トテ、同苗廿餘人雜兵七千餘人切テ出、寄手ノ大勢ヲ散々ニ追拂ヒ城ヘ引返シテ、五月十日筑後守ヲ始トシテ、一族同苗七十餘人一度ニ腹ヲ切テ、城ニハ火ヲ掛燒捨ケリ、是程敵味方移リカハル世ノ中ニ、池田少シモ心ヲ不^レ變介節ヲ守テ討死シケルヲ、都鄙皆褒ヌ人無^レリキ、

前大樹入洛御再任事附盜賊御誅伐事

永正五年六月八日、公方前將軍義植朝臣御歸洛有、同月十日ヨリ御參内、小番御勤仕有ケレバ、公卿殿上人サシツドヒテ珍シキ事ニ思^レ悅奉ル事限ナシ、就中九條殿下ハ、公方ノ御手ヲ取ラセ給、足下ノ早ク

上ラセ給ハバ、ヨモ九郎ヲバ討スマジキ者ヲトテ、御歎有^レ之ケリ、畠山尾張守尙順ヲ始トシテ、舊功ノ人々喜悅ノ眉ヲ開キ合ヘリ、同七月朔日勅命ヲ蒙テ、征夷大將軍ニ被^ニ再任、又ソレヨリシテ將軍トゾ申奉リケル、新將軍義澄卿ヲバ其日ニ被^ニ解官^一ケレバ、先公方トゾ申シケル、凡ソ帝王ニハ重祚ノ例多シトイヘドモ、武家ノ將軍再任ノ儀是始メトゾ承ル、頓テ三條殿ノ故御所ヲ轉ジ、御殿ノ造營有ケル比、永正六年六月廿六日子刻計ニ殿中ヘ盜賊ドモ忍入リ、御重寶ヲ奪取ケリ、當番ノ面々ハ折節油斷シテ知ザリケレバ、盜賊等安々ト公方ノ御寢所ヘ忍入タリケルヲ、將軍義植卿御寢卷ノ物バカリ召サレ、御太刀ヲ抜合セ、夜盜ノ輩ヲ即時ニ四人切伏給フ、然ドモ九箇所ノ疵ヲ蒙ラセ給ケル、誠ニ天運ニ叶ハセ給フ故ナガラ、天晴武勇ノ御舉動哉トゾ皆人感奉リケル、御瘡療養有テ御平愈也シカバ、同十二月十九日表御所ヘ御出有リ、諸大名ノ面々御太刀持參シ、御馬進上ノ目出度御祝儀斜ナラズ見ヘニケル、先公方義澄卿御沒落事附諸國亂逆怪異事先公方義澄卿ニハ細河三好附從ヒ奉リ、江州ニ隱

レマシ／＼ケルガ、主從一所ニ蟄居シテハ、大義ノ計略叶難カルベシトテ、三好ハ阿波へ下向シケレバ、先公方ハ江州九里備前守ヲ頼マセ給ヒ、暫時彼ガ許ニゾマシ／＼ケル、近年大亂ニテ諸大名皆己ガ分國ニ引籠リ、近隣ニ干戈ヲ動シテ、公儀ノ御味方申ス人稀ナリケレバ、先公方モ管領モ大儀ノ計略叶ヒ難クテ、徒ニ月日ヲ送り給フ、就中肩ヲ張り黨ヲ立ル大名數多有トイヘドモ、關東ノ上杉、美濃ノ齋藤、越後ノ上杉、駿河ノ今河、伊勢ノ國司、何レモ多勢ノ者ナルガ、此比ノ亂中一度モ上洛不レ仕、イカナル公方ノ御大事ニ及バセ給事アラバ、サリトモ馳上テ御難儀ヲ見續ンカト頼母敷思召ケルニ、今年越後國ノ守護上杉民部太輔藤原房能モ、家人長尾六郎爲景ニ被ニ打取、越後一扁ニ亡國トナリシカバ、關東ニ居住セシ上杉修理太夫顯定、同憲房多勢ヲ率シ、越後へ打越爲景ヲ攻ケレバ、爲景不レ叶シテ越中へ落行ヌ、然ルニ信州ノ高梨攝津守ト云者爲景ニカタラハレ、越後へ打越、椎屋ノ軍ニ打勝テ、顯定ヲ討取シカバ、憲房不レ叶シテ上州へ歸ケル、此由京へモ注進ス、洛中洛外ノ逆亂イマダ靜ラザル内ニ、諸國又カク亂果

ケルウタテサヨ、同年八月七日ノ夜、大地震夥シ、國々ノ堂社佛閣顛倒スル者多シ、此時天王寺ノ石ノ鳥居モ倒レニケリ、其地震七十餘日不レ止シテ、剩へ同八月廿七日、廿八日兩日間遠江國へ大波夥ク來リ、陸地悉ク海トナル、其ヨリ此處ヲ今切ノ渡リトゾ申シケル、加樣ノ天地ノ變異打續キ奇怪ナレバ、イカサマ天下治リヤラジト、心アル人ハ歎キ合ケリ、扱モ義澄卿ハ、忍テ江州ノ九里ガ許ニマシ／＼ケルガ、同八年三月ノ比、斯ニテ嫡男ノ若君御儲アリケリ、然レドモ當國ノ太守佐々木六角四郎高賴ハ、將軍義植卿エ無二ノ味方仕テ、先公方ヲ搜索ケル間、此國ニテハ若君ヲ養育ナサルベキ様ナシトテ、義澄卿ハ若君ヲ御同道ニテ、密ニ播州へ御下向アリ、彼所ノ國守赤松ヲ頼マセ給フ、斯ニシバラク御座間ニ、次男ノ若君御誕生有ケレバ、即此若君ヲ赤松ニ御預置給フ、赤松是ヲ養奉テ、後ニハ公方ニナシ參ラセ、義晴卿ト申ケルハ此若君ノ御事也、嫡男ノ若君ヲバ細河澄元ニ預置カレ、四國ノ者ドモカシヅキ申シ、御元服有テ堺冠者義維ト申ケルガ、是モ後ニハ左馬頭ニ補任シ給ヒ、其御子ヲバ阿波ノ御所義榮ト申ケル、

扱モ先公方ハ、兩人ノ若君ヲ澄元ト赤松ニ御預有シ
事、一ハ此兩人何モ無二ノ忠臣ナル故ニ、此人々ノ
心ヲ取セ給ベキ御謀ノ爲ナリ、一ハ又戰國ノ最中ナ
レバ、御父子分々ニナラセ給テ、何方ニテ成トモ御運
ヲ開カセ給ベキ御思案也トゾ聞ヘケル、最ニ淺カラ
ヌ事トゾ申ケル、

攝州蘆屋邊合戰事附先公方御逝去事

細河右京太夫澄元三好筑前守ハ播州ヘ落行、赤松
ヲカタラヒ、播磨勢ヲ從ヘ、其他四國ノ軍兵并細河
右馬頭政賢、同名和泉守護島山總州、遊佐河内守ヲ
相催シ、和泉國ヘ攻上、深井ニ陣取居給ヒケル、管
領高國是ヲ聞テ、先五百餘騎攝州ヘ差下、此勢萬代
庄ニ陣取ケルガ、四國勢モカ、ラズ、互ニ日數ヲ送
リケルニ、七月十三日京方多勢ニテ深井ヘ押寄攻ケ
レバ、澄元勢ニ横合ヲ懸ラレテ、京方打負、過半討
死シ、相殘ル軍兵堺津ヘ引退ク、澄元勝ニ乗テ中嶋
迄攻寄タリ、細河淡路守ハ兵庫ヘ押渡リ、難波迄攻
上ル、高國方ノ河原林對馬守正賴、同國蘆屋庄ノ上
鷹尾城ニ楯籠レルヲ、淡州ノ軍勢是ヲ攻ヨトテ、深
井ニ陣ヲ取ケレバ、河原林驚テ此由注進シケル程ニ、

管領高國ハ此注進ヲ聞ヤ否ヤ、馬廻柳本宗雄、其子
波多野孫左衛門、能勢因幡守、荒木大藏ヲ始、三十
餘頭攝州ヘ差下シ、同七月廿六日蘆屋ノ原ニテ合戰
ス、鷹尾城ニ籠リシ勢ニ氣ヲ得、切テ出、横合ニ
懸リケレバ、淡州ノ軍兵數百人討死シテ、京勢難ナ
ク軍ニ打勝悅居ケル處ニ、播州ノ赤松勢約束ヲ不差
出勢シテ、同年八月八日九日ニ鷹尾城ヲ攻ラル、
岸^ガ鯉トモ不^レ謂シテ堀ヲ埋ミ、喚キ叫ンデ息ヲモ不^レ
繼攻ケレバ、サシモ武キ河原林、二日目ノ合戰ニ悉
ク打負、同十日夜ニ紛レテ城ヲ出テ落行ケリ、赤松
勢ハ手合ノ軍ニ打勝テ、ソレヨリ伊丹城ヲ攻ル、河
内攝津ノ御敵トモニ二手ニ成テ、京都ヘ攻入ベキノ
由注進頻也ケレバ、管領高國モ大内義興モ京都ニハ
タマリ不^レ得、頓テ將軍ノ御供申シ、丹波國ヘ落行ケ
リ、此時先公方義澄澄卿御上洛有ベシトテ、播州ヲ御
立アリ、江州ニ着セ給テ、岡山城ニ入ラセ給ヒ、近
日御歸京アルベシト有シ處ニ、御不例頻ニ重ラセ給
ヒ、永正八年八月十四日終ニ此城ニテ御逝去有ケリ、
御歳三十二歳、哀ナリシ事ドモ也、御追號ヲ奉テ法
住院殿トゾ申ケル、

佐々木高賴參ニ將軍味方ニ事

其頃將軍義植卿ヨリ江州佐々木六角ヲ賴マセ給フ、抑江州兩佐々木ト申ハ、六角ハ惣領ニテ國人彼下知ニ從フ、京極庶流ナレドモ、先祖道譽入道等持院殿ヘ忠功多キ人ニテ、公方家はヲ御賞用アリ、于レ今四職ノ隨一也、應仁ノ亂ヨリ爾來、京極ハ細河ニ同意シ、六角ハ山名ト一味ス、互ニ敵對セシメケルガ、山名方打負シカドモ、六角一人ハ京都ヘ隨奉ラズ、御動座度々ニ及ビケリ、然ルニ今將軍ヨリモ、又管領高國ヨリモ頻ニ高賴ヲ御賴アリケレバ、終ニ六角モ將軍ノ味方ニ參ラル、高賴老衰セリトテ、一男龜樹丸ニ家ヲ讓ル、後ニ近綱ト云シハ此人也、近綱片足短シテ立居不自由也、カヤウノ御大事ニハ立ガタキ人也トテ、高賴二男吉侍者トテ相國寺ノ禪僧ニテマシ／＼ケルヲ、是ハ一入武勇ノ器量アル人也、イザヤ取立參ラセント、彼家ノ宿老多賀備後守、蒲生下野守、田中四郎兵衛等相談ヲ調ヘ、公方家ヘ令ニ言上、今度還俗シテ高賴名代トシ是ヲ將軍ヘ奉リ、定賴ト號ス、將軍家大ニ御悅有テ、卽彈正少弼ニ被_レ任ケリ、定賴木刀ヲ腰ニ指テ、將軍ノ御前ヘ出ラレケル

ヲ、是ハ如何ト御尋有、定賴申サル、ハ、某ハ本出家ノ身ニテ刀ヲバ不_ニ持申ト答申上ラレケル、將軍家笑ハセ給ヒ、卽國行ノ御ハカセヲ賜ケルトゾ聞ヘケル、

船岡山合戰事

去程ニ將軍ハ丹波國內藤ガ館ヨリモ多勢ヲ率シテ攻上ラセ給ケル、御供ノ人々ニハ大内左京太夫義興、畠山尾張入道ト山、細河民部少輔高國、同右馬頭、伊勢兵庫頭、齋藤法印、土岐美濃守、大友備前守、佐々木彈正少弼、同中務太輔、細河式部太輔、畠山修理太夫、遊佐彈正忠、石黒左近藏人、進士九郎、多田治部太夫、神保、小坂長九郎左衛門、朝倉彈正忠、同太郎左衛門等、都合御勢三萬餘騎トゾ聞ヘケル、京方細河澄元三好等小川ニ有ケルガ、攻上ル敵ヲ防ガントテ、紫野上、船岡山ヲ陣城ニ拵、澄元ノ妹聲細河右馬頭政賢ニ畠山上總介義英遊佐河内守ヲ大將トシ、三好筑前守同山城守一萬餘騎ヲ相添テ寄來ル勢ヲ待懸タリ、大德寺、今宮、小川邊ニ透間モナク陣取ヌ、大將右京太夫澄元ハ、丹州ノ住人竹内刑部太夫以下五百餘人ヲ引率シ、小河ノ屋形ニ扣ヘタ

リ、同八月廿四日攻上ル勢既ニ長坂山ニ陣取、先駈
ノ勢ドモ齋藤法印手ノ者、土岐、佐々木、六角勢一番
ニ攻來ルヲ、畠山總州、安富、神保、湯河、平ニ切立
ラレ、立足モナク引退ク、二番内藤備前守、嶋村彈
正、河原林、息ヲモ不_レ繼攻カ、ル、其荒手ニ切立ラレ
テ、遊佐彈正忠、同河内守ヲ始メ總州ノ軍勢皆討レ
テ、尤危ク見ヘニケル、大内義興ガ馬廻五百餘騎ノ
者ドモ、短兵急ニ挫_{トリシ}テ、喚キ叫ンデ切テ入ル、義興
直先ニ進ンデ、重代ノ長刀ニテ向フ敵三騎薙伏セ、
四方ヲ拂テ切テ廻ル、三好筑前守同山城守斯ヲ先
途ト防戦ヒ、大内方ト三好方ト自身ノ太刀打度々ニ
及ブ、郎黨ドモ懸隔懸合セ、互ニ戦ヒ入亂レテイッ
果ベシトモ見ヘザリケルニ、佐々木定頼荒手ヲ以テ
唯一文字ニ切テ懸ルニ、三好忽敗軍ス、先京兆ヲ落
シ申セトテ、三好ソレヨリ澄元ヲ相伴ヒ、攝津國ヘ
落テ行ク、大將右馬頭政賢ハ、小川ニ殘リ留テ防矢射
テ討死シ給フ、惣ジテ京方討死ノ數二千三百餘人ト
記ス、赤松勢ハ伊丹城ヲ攻テ居ケルニ、船岡山ニテ
味方ノ勢打負ケル由聞ケレバ、早々ニ引返シ、生瀬
口ヘ落行ケリ、

大内介義興任ニ管領ニ事附江州九里誅伐事

將軍ト高國ハ高雄山ニ御陣ヲ召シケルニ、澄元沒落
シ洛中無爲ニ成ケレバ、同年九月朔日御歸京ヲ遂ラ
ル、法住院殿御沒後ナレバ、此上誰人カ此代ヲ傾ケ
申サンヤト、皆人安堵シ悅合フ、此度合戰御本意ニ
叶フノミナラズ、近年莫大ノ介抱皆是大内介ガ忠功
ニ因レル者也トテ、義興ヲ召シテ管領ニ任ゼシメ、
翌年從三位ニ叙爵ス、去年合戰ノ賞也ト注サレケル、
又其比江州ノ住人ニ九里備前守、山中新左衛門云者
アリ、三好ト一味シテ、良モスレバ先公方ヲ隱シ參
ラセ、六角方下知ヲ背ク、山中ハ討死シ、九里ハ猶
殘ル勢強クシテ、左右ナク亡スベキ様ナシ、六角高
頼モ此事如何トタメラヒケルガ、今度定頼舟岡山ニ
テ拔群ノ軍忠有シ故、位既ニ從四位下ニ叙セラル、
君恩報謝ノ次デニ九里ヲモ誅伐スベシト思ヒ、密ニ
將軍ヘ申上テ御加勢ヲ申シ請ラル、扨モ定頼ノ謀ニ、
近日定頼伊勢參宮ニ赴クベシ、九里ヲモ供ニ連ベキ
也、其外種村三河守、伯修理進、田中、二階堂ノ人
人供タルベシト定ラレ、定頼即備前守ガ館ヘ入來ス、
九里ハ驚キ悅ンデ色々ニ響應ス、數獻ノ酒ヲ進ケル

ニ、定頼モ供ノ人々モ皆以沈酔ス、定頼ハ九里ガ膝ヲ枕トシ空寢入シテ居給ケルガ、兼テ期シタル事ナレバ、多賀豐後守、吉田永原等、將軍ノ御加勢二千餘騎ヲ引牽シ、九里ガ館ヲ取卷テ時ノ聲ヲ揚ケレバ、定頼其時驚キタル風情ニテ、コハ如何ト云儘ニ、太刀ヲツ取、其マ、九里ヲ切殺シテ、年來ノ本意ヲ達セラル、佐々木家ノ者ドモ其ヨリ皆定頼ノ武勇ニ恐れ、悉ク靡キ從ヒケルト也、

武衛今河於ニ遠州ニ軍事附朝倉出身事

管領大内介義興在洛十二年ノ間、都ノ掟モ無レ私、五畿近國モ漸々ニ靜也シガ、猶モ東海西海ニハ合戰止隙無リケル、就中遠江國ハ本今河家ノ分國ナリシニ、中比ヨリ武衛家ノ領地トナリケリ、今又武衛ハ衰ヘケルニ、今川ハ度々京都ノ亂ニ御加勢ヲ參ラセテ、忠節他ニ異ナレバトテ、又遠州ヲ今河ニ下シ賜リケル、其比三河國臥蝶ノ住人ニ大河内備中守久綱ト謂者アリ、本ハ吉良ノ家來ナリシガ、近年國中ニ威勢ヲ振ヒ、遠三兩國ノ侍ト相親ミ、一揆ヲ語ヒ黨ヲ結ビ、惡逆度々ニ及ビケリ、是ハ先代ノ源三位入道頼政ノ二男源太夫判官兼綱ヨリ十一代ノ末孫也、

家ノ紋丸ノ内ニ十六葉ノ菊ノ花ヲ付ケレバ、菊一揆ト號シケル、其時分今河修理太夫氏親駿州ニ在ケルガ、イカニモシテ上洛シ、將軍ヘ出仕シテ、禁裏ヘモ參内セント思企、然レドモ尾州ハ武衛ノ領國ニテ、敵軍所々ニ遮ケレバ、武衛今河度々合戰ニ及ビケリ、此節大河内貞綱、信濃三河ノ勢ヲ語ヒ、尾州武衛ノ味方ヲシテ、遠州ヲ切テ取ラントス、永正十年三月、氏親一萬ノ兵ヲ牽シ出張シ、笠井庄楞嚴寺ニ陣ヲ取、先勢ハ河ヲ渡リ大菩薩山ニ陣取、又武衛次部太輔義達、尾州ノ勢ヲ引牽シ、伊井次郎ヲ語ラヒ、深嶽城ニ籠リケルヲ、今河ノ先手朝伊奈十郎泰以、唯一手ニテ深嶽山ヘ押寄、案内ヲ知ケレバ、一夜討シテ攻落シ、敵ヲ討事數百騎也、尾州勢打負、同國ノ奥山ヘ引退キ、大河内ヲ始トシテ散々ニ落失タリ、翌年甲斐國ノ守護人武田次郎兄弟、牟楯ノ事有テ合戰ニ及ブ、氏親ヘ加勢ヲ請ケレバ、遠駿ノ勢二千餘騎ヲ差遣ス、此勢甲州勝山城ニ楯籠テ戰ニ及ケル、同正月ヨリ此費ニ乘テ大河内久綱、又信濃尾張三河ノ一族等并浪人ドモヲ語ヒ、武衛ヲ申請ケ、遠州濱松庄引間城ニ楯籠テ、天龍河前後ヲ押領ス、同年五月下

旬、氏親六千餘騎遠州へ發向ス、折節洪水夥シテ、天龍河モ大海ノ如ク湛ケレバ、舟橋ヲ掛ラル、船數凡三百餘艘、竹ノ大繩ヲ以テ掛渡シケリ、扱武衛方討テ出、大河内高橋以下敵ヲ渡サセジト矢軍ニ及ビケレドモ、今河方ニハ加勢數多有、數萬ノ軍兵一同ニ押渡リ、終ニ追籠ケリ、大河内以下不^レ叶追込ラレ、五十餘町ガ内ヘ城四五搆ヘ楯籠テ、六月ヨリ八月迄合戰シテ、後ニハ寄手阿部山ノ金堀ヲ以テ、城中筒井ヲ悉掘崩シ、水一滴モ無シケレバ、勢氣盡果テ、城兵終ニ難^レ叶、八月十九日引間落城シテ、大河内備中守、同弟巨海新右衛門、高橋以下楯籠ル兵千餘人討死ス、武衛義達不^レ叶シテ降參セラレタリケルヲ、命ヲバ助ケ參ラセ、普濟寺ト云會下寺ヘ入出家有ケルヲ、其儘尾州ヘ送り遣ス、武衛今日ヨリ遠州ニ望事ナシ、自今以後、今河家ヘ敵對ヲスベカラズトテ、一向ニ和睦有ケリ、然レドモ三州ノ住人戸田彈正少弼、諏訪信濃守以下、猶大河内ガ殘徒ヲ催シ、遠州ヘ發向シ、合戰度々ニ及ケリ、就中三州堺船方山ノ城代多末又三郎ト云者今河方ニテ有ケルヲ、彼一揆等押寄テ忽ニ攻落ス、多末又三郎討死ス、

掛河城主朝伊奈備中守泰以軍兵ヲ將ヒ來テ、又舟方城ヲ攻落ス、斯シテ尾州遠州ニハ合戰ノ隙ナク、月日ヲ明シ暮シケル、其比又武衛ノ被官ニ朝倉彈正左衛門教景ト云者、是ハ越前國ノ守護代也、去ル比ヨリ日本六十餘州ノ國人、大名守護ノ數ニ入ケル、其輩兩三人アリ、宇都宮ノ被官ニ芳賀、結城ノ被官ニ多賀谷、千葉ノ被官ニ原、武衛ノ被官ニ朝倉等、度度ノ忠勤ニ依テ、一度ニ皆六十六人ノ數ニ入ラル、然レドモ京童部ハ猶合子ハリトゾ笑ケルト聞ヘケル、斯ル凡下ノ者ナレドモ、果報ノ時節至リケルニヤ、永正十三年六月ノ比、當時管領大内介義興ノ吹舉ニ依テ、朝倉教景ニ白傘袋鞍覆御免有ケリ、剩後ニハ經上テ御相伴衆ニ加リケル、イミジカリケル繁昌也、

大内介歸國事附四國勢攻上事

角テ洛中無爲ニ治リ、公方御安座マシマスニ依、今ハ當代心安シトテ、永正十五年八月廿三日、大内左京太夫義興京都ノ成敗ヲ辭シ奉リ、本國ヘ下向有ケレバ、其跡ニ細河高國ヲ左京太夫ニ任ゼシメ、管領執事ノ職ニ補セラル、義興ガ忠功喻ヘテ謂ン方モナ

シ、哀レ文武ノ良將哉ト、世以稱美セシメケル、義興歸國シテ、洛中シバラク無勢ノ由諸國ニ隠レ無リケレバ、永正十六年冬、四國ニ在ケル細河前右京太夫澄元、同執事三好筑前守、能時節トヤ思ケン、所ヘ回文シテ味方ヲ催シケル程ニ、時日ヲ不_レ移、千餘人馳集ル、卽播州ヘ押渡リ、赤松_□ヲ語ラヒ打立ケレバ、池田故筑後守ガ子息池田三郎五郎、時ヲ得タリト馳來テ、今度某ハ攝津國口ノ先陣ヲ仕ラントテ、有馬郡ノ田中ト云所ヘ出張シテ、人數ヲ揃ケル、是ヲ聞テ高國方ノ川原林對馬守正賴、池田民部丞、鹽川孫太郎相談シテ、同十月廿二日、夜討ニ寄ル、然ドモ敵中ニ還忠ノ者出來テ、此由ヲ告シ故ニ、三郎五郎用心シテ靜テ待ケルガ、案ノ如ク寄ケル間、池田逆打ニ競懸テ、手痛ク切テ廻リケレバ、寄手三十餘人忽ニ被_ニ討取_一テ、這々ニ引退ク、其日池田ガ手ヘ討取シ頸ドモ、阿波國ヘ進上シテ、合戰次第ヲ一々ニ申シ遣ス、澄元大ニ感悅シテ、池田三郎五郎ニハ攝津豐嶋郡ヲ一圓ニ賜リ、彈正忠ニナシ給ヒ、池田彈正トゾ呼レケル、誠ニ父子二代ノ忠功拔群ノ由聞ヘケル、

攝州所々合戰事附若槻伊豆守最期辭世事

前右京太夫澄元四國勢ヲ催シ、播州ノ赤松是ニ組シテ、多勢既ニ攝州ノ兵庫ニ着シカバ、當管領高國ノ被官河原林對馬守是ヲ支ヘ防_ン爲ニ、越水ノ城ニ籠ル、澄元ノ軍兵等先是ヲ攻ヨトテ、一萬餘騎ニテ取卷ケリ、大將澄元本陣ハ神呪寺ノ南、鏡ノ尾山ニスヘラレタリ、三好筑前守、海部、久禾、河村、香河、安富、此者ドモハ廣田、中村、西宮邊ニ陣取、入替入替日々ニ責戰フ、城中精兵數多有、其中ニ一宮三郎宗是ト云者名譽ノ射手ニテ、每度一矢二三人ヲ射落ケレバ、諸人はヲ恐レ感ズ、寄手モ是ニヒルミ、左右ナク城モ不_レ落由ヲ高國ヘ言上シケレバ、一宮ハ久敷御勘氣蒙リケル者ナレドモ、此度ノ忠功ニ御勘氣忽御免許有、剩本領安堵ノ上ニ、加恩ノ所領ヲ下シ賜ル、去程ニ高國ハ丹波、山城、攝州ノ味方ニ觸催シ、同十一月廿一日帝都ヲ立テ、同十二月六日池田城ニ着キ、越水ノ城ヲ後詰シ給フ、其軍兵等、小屋野間九十九町、高木、河原林、武庫、守部、水堂、濱田、新田、武庫河ノ方上カラ下迄透間モナク陣ヲ取ル、明レバ永正十七年正月十日、高國ハ二萬餘

騎ニテ押寄セ、諸口ヲ分散シテ、一手々々相戰フ、先高國ノ先陣丹波國守護代内藤備前守貞正一番ニ競懸、阿波勢ト斬結ブ、阿波勢百餘人討レケレドモ、内藤終ニ打負、二百餘人討死シテ、其儘ソコヲ引退、二番ニ高國方攝津國住人伊丹兵庫助國扶ト名乗テ、中村口ヘ切テ懸リ、木戸内マデ攻入ケル、誠ニ一騎當千ノ者ト見ヘケレドモ、是モ討負引返ス、阿波勢打勝テ首數五十餘討取ケル、梟リケレバ、越水ノ城中後詰ニ競ヒ、追手ノ木戸口ヲ押開キ、當國大嶋ノ住人雀部與次郎、同弟次郎太郎ト名乗リ突テ出ル、澄元方ヨリ田井藏人ト名乗リ、切テ懸リ相戰フ、藏人ハ討レ、雀部兄弟深手負テ、城中ヘ引入ケルガ、二三日過テ死ケルヲ、上下惜ヌ者ナカリキ、然レドモ城中ニ兵糧盡^キ、勢力乏シカリケレバ、同二月三日城ノ本人對馬守、阿部藏人ト相談シテ、城ヲ開キ引退ク、同ジク城ニ籠ケル若槻伊豆守長澄ハ、吾身老果テ餘命ナシ、何ノ爲ニ此城ヲ退キ去ベシヤトテ、猶城ニ籠リ自害シケルガ、先代源三位頼政最期ノ昔ヲ思合タリケルニヤ、扇子ヲ敷居直リテ、辭世ノ和歌ヲ詠吟シテ、尋常ニ腹ヲゾ切ニケル、

花サカヌ今ノ憂身モ古ヘモ

身ノナル果ハ替ラサリケル 長澄

若槻ガ舉動皆人感涙ヲ催シケリ、角テ高國ハ諸方ノ軍ニ打負テ、池田、伊丹、久々知、長洲、尾崎ノ邊ニ陣所ヲ替給ケレバ、同十六日澄元方ノ者ドモ悅勇シテ、三好之長難波庄ニ陣取、一萬餘騎ノ兵ヲ率シテ、尾崎、長洲ヘ取掛、競懸テ攻戰フ、大物庄ノ北横堤ニテ高國方香西與四郎ト名乗切テ出レバ、三好孫四郎ト名乗、阿波勢ノ中ヨリ進出、香西ニ渡合、人交^{マセ}モナク散々ニ切合、相引ニコソシタリケレ、高國今日ノ軍ニモ又打負、城中ヘ引入ケルガ、兎ニ角ニ叶マジト思ハレケレバ、其夜中ニ城ヲ逃出テ、京都ヲ差テ引歸サル、四國勢ハ逃ルヲ追テ、ヒタ攻ニ攻上レバ、高國ハ京ヘモ入レ不得、直ニ江州ヘ落行給ヒ、將軍ハ猶京都ニ止マリマシ^ノケル、毎年正月十日迄當國ハ西宮大明神ノ神事ニテ、居籠ト云事アリ、此所ノ民ドモ此日ノ食物ヲ兼テ營ミ置、物音ヲモ不^レ鳴道行ヲモ不^レ入、戸ヲ閉物忌ニ籠リ居テ、物ヲモ高ク不^レ謂也、他所ノ人此事ヲ知ナガラ、態ト物ヲ云セントテ、西ノ宮人ノ門戸ヲ敲キ、詞ヲ掛ナンドスレ

バ、其人必神罰ヲ蒙ルト申ナラハス、梟ル奇特ノ神日ニ高國軍ヲ始シ故、其神罰ニテ合戰ニ打負ケリト其比皆人申合ケリ、爰ニ又同國伊丹城ニ籠リシ伊丹但馬守、野間豐前守、兩人トモニ申ケルハ、我々此城ヲ數年骨折築立置、今更敵ノ爲ニ燒捨ラレン事口惜キ次第也、又城ヲ無下ニ開テ落行ン事モ謂甲斐ナシ、所詮自害シテ冥途ヲ心安行ベシトテ、城ニハ火ヲ掛テ兩人ノ者ドモ煙ノ中ニ枕ヲ並べ、腹ヲ切テゾ死失ケル、

三好筑前守之長降參自害事

同二月廿七日、三好之長京都ヲ差テ攻上ル、威勢權柄アタリヲ拂テ無類コソ見ヘニケレ、同三月十六日、前右京太夫細河澄元、神咒寺陣ヲ拂テ伊丹庄ヘ移リケレバ、攝津國ヨリ京都マデ軍兵巷ニ充滿タリ、然ルニ三好之長ハ、去年阿波國高津ト云所ニテ、一方ノ主君トモ仰來リシ細河淡路守成春ヲ討タリケレバ、是ハ敵ナガラ主筋ノ人也、之長放逸ノ舉動ナレバ、行末頼母シカラジトテ、危ブム人多カリケルガ、案ノ如ク此度京都ヲ難ナク追落シタリケレドモ、味方ニ參ル者モナク、剩今迄味方ニ在ケル者モ、之長

ガ驕ヲ惡ンデ、アハレ何事モアレヨカシ、敵ト成テ思知ラセント存族多カリケル、去程ニ將軍モ高國モ江州ニ落集、佐々木定頼ヲ憑セ給フ、江州衆味方ニ參テ、佐々木勢等不_レ及_レ申_二朽木民部少輔、蒲生右兵衛太夫、三上、永原、越前朝倉勢、美濃ノ土岐勢、丸毛、齋藤利綱軍兵ドモ各々馳着ケル間、無_レ程多勢ニ成給ヘバ、定頼ヲ先陣ノ大將トシ、都合三萬餘騎ヲ率シテ、將軍モ高國モ同年五月三日、京都東山白河表ヘ攻上ラル、三好筑前守之長、四國勢五千餘騎ヲ率シ、二條三條四條高倉ヘ駈出防戰トイヘドモ、敵軍雲霞ノ如ナレバ、不_レ叶トヤ思ケン、其比之長ガ兩手ノ如ニ思ヒケル香河、安富、久米、河村一度ニ引分降參シテ、高國方ヘゾ出ニケル、之長次第ニ無勢ニナリ、合戰叶ガタケレバ、陣ヲ開テ同五月五日、比丘尼寺曇花院殿ヘ逃入テ、密ニ忍居タリケル、細河澄元ハ伊丹庄ニ陣シケルガ、京都無下ニ攻落サレヌト聞ヘケレバ、中々當庄ヲ敵ニ取マカレテハ叶ベシトモ覺ヘネバ、早々四國ヘ落去ベシトテ、同七日ノ早朝ニ生瀬口ヲ差テ落ル、攝州高國方河原林對馬守、泉州堺ノ津ニ在ケルガ、此由ヲ聞テ

早船ニテ海ヲ渡シ、澄元ヲ追掛ル、道ニテ難儀ニ及ビケルヲ、澄元馬廻ノ者ドモ所々ニテ防矢射討死シケル其間ニ、澄元無シ恙播州へ落着給ケリ、三好之長父子ハ、猶モ曇花院ニ在ケルガ、其夜落ナバ落ベカリシヲ、運命ヤ盡果ケン、曇花院殿ヲ不落去ニ滞留シテ居タリケル、此事頓テ敵方エ洩レ聞へ、高國方ノ軍兵等曇花院殿ヲ八重九重ニ取卷タリ、然レバ之長ハ今度ノ命ヲ助カラント心弱クヤ成ニケン、降參申シ度由ヲ頻リニ侘申サレケル、高國サラバ先對面有ベシトテ、之長ガ子息芥河次郎長光、同孫四郎長則先此寺ヲ出シ、同十日高國へ對談申ケレバ、上京安達ガ宿所へ入置給フ、扱之長ヲモ一命助ケラルベカリシ處ニ、故細河淡路守成春ノ子淡路ノ彦四郎ト云人、頻ニ高國へ訴訟シテ、之長ハ某ガ父ノ讐ニテ候條、是ヲ賜リ生害スベキ由ヲ望マル、終ニハ請受テ彦四郎ノ軍兵ドモ、其比之長ハ百萬邊ノ寺ニ在シヲ、混々ト押寄セ、取卷テ自害遲シト攻入ケレバ、之長今ハ不_レ力及、終ニハ此寺中ニ居テ腹搔切テ死失ケル、法名ヲバ希雲居士トゾ稱シケル、同苗新四郎ト云者之長ヲ介錯シテ、同ジク腹切死ニケリ、今日ハ

亡君淡路守成春ノ一周忌ニ當リケルガ、之長角亡ケル事天罰ノ報忽ニ來リケルトゾ聞ヘケル、扱又彦次郎ヨリ之長ガ子ドモ芥河次郎同孫四郎ヲモ申請テ誅スベキ由、高國エ所望申サレケレドモ、之ハ降人ト成テ預ケ置タレバ、殺サレン事如何也トテ、其許無リケルヲ、又同月十二日ニ彦四郎ノ軍兵ドモ、彼兄弟ガ宿所ヲ取卷、芥河次郎同孫四郎此由ヲ見、又父ノ之長腹切テ失スト聞テ、扱ハ誰ガ爲ニ一命ヲ惜ムベキ、イザヤ腹切テ父上ニ追附參ラントテ、兄弟最後ノ盃ヲ取カハシ、沐浴看經シテ、心閑ニ兄弟ドモ一度ニ腹切テ失ニケルヲ、惜マス者コソナカリケレ、

高賴澄元卒去事附高國政務事

同年五月九日、將軍源義植卿ハ江州觀音寺城ヲ立セ給ヒ、御入洛在テ本ノ如ク天下ノ政務ヲ取行ハル、當國ノ守護佐々木六角大膳太夫高賴ハ隱居ノ身ナレドモ、何トカ思ヒケン、御供セントテ上洛ス、此人去ル永正十五年七月九日、嫡子近綱早世シテ、其嗣子モ無リシヲ深ク歎キ申サレケルニ、高賴ノ二男彈正少弼定賴、武勇モ勝レ度々忠功ノ義有ケレバ、將

軍モ管領高國モ近年江州エ落着給テ、彼人ノ威勢ヲ頼ミ給フ、然レバ武士面眉ト云ヒ、且ハ當家ノ再興ト云ヒ、旁々大ニ喜悅シテ高賴老後ノ愁ヲ忘レ、様様馳走申サレケル、今度ハ老後ノ上洛ナレバ、再會計リ難シトテ、靜ニ將軍ヘモ最後ノ御暇乞ヲ申シ、同八月歸國セシガ、幾程アラズシテ同月廿一日、一病ノ煩モナク終ニ卒去セラレケル、法名ヲバ龍光院花

武藝ヲモ心懸、射禮ノ法ヲ中興シ、子息六郎冠者植國ニ申付、上ノ馬場ニ於テ犬追物ヲ執行ハル、其時小笠原備前守、波々伯部源次郎、伴出羽守等其役々ヲ勤ケル、理非分明ニシテ、政道正シク執行ケル程ニ、諸將彼家風ヲ望ミ、萬民ヲシナベテ管領ヲ慕ヒケレバ、高國ノ威勢日ヲ追テ盛ンニ成ニケル、

山宗椿居士ト號ス、將軍モ高國モ深ク追悼マシテ、百首ノ和歌ヲ詠吟マシ、彼追福ニゾ備ヘラル、扱又細河澄元ハ京ヲ落テ播磨ニ下リ、ソレヨリ四國ニ押渡テ、故義澄ノ御子阿波御所ヲ傳立參ラセ、今一度上洛シテ高國ヲ亡シ、三好之長ガ遺恨ヲ報ズベキ由ヲ志シ居給シガ、同年ノ夏ノ比ヨリ病氣次第ニ募ツ、同六月十日阿波國ニテ卒去シケル、眞乘院ト法名ス、生年二十五歳トゾ聞ヘシ、三好討レ澄元死シテ後ハ、管領高國ハ政務ヲ一統ニ執行ヒ、其門葉マデ繁昌シテ、威勢萬人ニ超過シケル、高國ハ本ヨリ文武ノ達者ニテ、其比和歌ノ道ニ心ヲ寄セララル、伊勢國司北畠左中將材親卿ハ高國ノ聲ニテ歌人ナレバ、此人ト相談シテ六百番ノ歌合ヲ興行ス、又

公方兩將記終

小弓御所様御討死軍物語

ころは天文七ねんつちのべいぬ、春も中ばのをりふし、皇ゑもふさの國とかやこ府うの皇だいといふところ、もとはうへ杉のかるふおほたの小弓だうくわんさうとうとりたてのふるち也、いまはおゆみの御皇ゑよさま御とりたて候へて、むさしの國ごうとのゑろにさしむかつて、御はたをたてさせらる、ほうでう左京の太夫氏つなは、いず、さがみ、むさし三箇國の皇ゑゆごたりといへ共、御所さまへたいし申、くわんたいをかまへず、すどにおよび、そうじやをかへ、てをかへ、さまく御皇ゑやめんのだん申あげ候得ども、お弓さま御げんぶんは、一どかまくらに御さをたてられ候て、とうはしうをめしおかれ、日の下のしやうぐんと御かくござだまる御事なれば、御皇ゑやめんのきはさらになし、皇ゑかるところに、こがの御所皇はる氏さまとお弓の御所皇よしあき様、とし月御中かふあいなれば、こがさまよりお弓さまを御つ皇いとうあるべき御ないしよども、氏つなにくだされ候へ共、氏

つなげんぶんは、上は御一たい、下としてりよぐわいをぞんずべきにもなければとて、御皇ゑやめんの皇ぎ申、すぢめはうちを皇かす、しかども、皇ゑもおさの皇ぐんびやうとうこ皇うの皇だいへよせられ、こ皇うづけ、皇ゑもづけ、こ皇うしう、するが、同日に氏つなぶんこくへ御らん皇にうのもよほし御きじやうなり、そのうへは、氏つな日月のびてはかなふべからずとて、えど、かはごへれう皇じろへやがてひやう皇ろ皇うをこめをき、ほりをほり、やぐら皇をあげ、ふしんしてこそかまへけれ、ときにいたつて十月七日に、氏つなはこ皇うの皇だいにさしむかつて、はたらきをなす、彼こ皇うの皇だといふところは、えどのしろよりほどとおさ皇井皇り皇と申也、すみだ河のみな皇かみさるがまたといふところよりながれ、わかつて皇いちかわ、中川、あさ草川とて、三すぢ四すぢの大かわ、皇ゑほのみちひにわたりなし、あさ草川に船ばしをかけ、いち川、中川はしほのみちひにわたりあるとは申せども、さるがまたへさしのばり、三十よりをうちまはり、ざいざい皇ゑよ皇くをほうくわあるべきひやうだんし、こ皇うの皇だいのつ皇き、松どのたいといふ山へさきせ皇いう

ちあぐる、こうのだいに御ツカきありける小弓さまは、
かづさ、なもふされう國のいくさ手なみに御なら
い、なろをはなれて十里ばかり御いであつて、物ち
かに御そなへ候し也、七日みのこくよりさるのこく
にいたるまで、やいくさ野ぶしかぎりなし、小弓さ
まの御せいは二千よきとう也、左京の太夫氏つなは
三千よきにてひかへたり、年月御~~な~~やめんを申おそ
れの~~な~~ゆびなれば、まひらにはうちむかはず、おそ
れをなして、物とうにこまをひかへてそなへたり、
小弓さまはこのよしをてよわにや御らんする、め
しぐせらる、さて又よせてのつわ物共は、一ぞくを
ゑりにかす、たにをこへ、そわをつたひ、思ひく
にむまにのり、あいかにぞかゝりける、なかり
とは申せ共、小弓さまの御勢はまちいくさとけちな
され、この山よりはたかきみねに、小松四五本たち
ならぶその~~な~~たかけに、御はたを御たてあつてみへ
にけり、たがいにあるやは雨とふり、天くわ、いな
づま、とぶほたる、いづれをわかつひかりぞとやさ
けびのこへかぎりなし、ときみかたのはなすやは中
にてやすへ、なたへおつ、内々氏つなけんふんは、

このたびのいくさをとりかけ申物ならば、とし月の
御~~な~~やめん申すしめはいつわりと、かづさ、なもお
さ兩國の~~な~~よさぶらいはぞんずべし、ひかばやとは
おもへ共、このきわをひくならば、とう八しうのぐ
んせいをめしぐせられて、小弓様明日はかまくらへ
御らんにはひつじやうぞ、さりとてはよけかたな
く、おのくぞんずる事共也、ことさら大河三すち
までうしろにあて、ひくならば、一人ものこるまじ
とおもひさだめて、氏つなはてそなへをしてときを
待、みのこくより野ぶしして、さるのおわりに成け
れば、ほうでう氏つなは、ちやくなんの新九郎氏や
すにうちわをとらせて、たゞいまといくさはじめて
よせかくる、氏つなのあしがることはたゝかひ申や
う、小弓さまの御そなへよわくしくみへ申、あわ
れ御引候へかして、きやうか一~~な~~ゆかくなん、
御所さまの小弓のよはくなりぬれば

ひきてみよかしちからなくとも

小弓さまの御あしがるも、やがて返歌にかくばか
り、

あつさ弓たかにひくもひかれねは

うんの極は天にあるへし

かやうによみつらぬ、御所さまの御そなへは岩^磐ばんじやくか、くろがねのついちなどもいひつへし、大木の風になびかぬがごとくにて、やりの糸をひぎにのせ、きつさをそへ、かぶとのしころ、袖のいたづり、あい／＼ひざをおりてぞそなへたる、よせてのつね物これをみて、かなわじと思けん、こまのたづなをかいくつて、からめてさしてむまをいる、物にもなれぬこわかとう、小弓さまの御そなへまばらかけしてきりかゝる、御所さまの御そなへいまはとみへたまふ、御きへんのかたぐ、こうのだいにはやり物^{モノ}ななわらて、ぬきてにかけて一どうにきりかゝる、いくさのひきかけ、せのならひ、すこしそらひきしたりけり、氏つなと氏やすのむまわりはこれを見て、物のぐをとりもちて、一どうにせめかゝる、あやなくも小弓さまの御せいはいくづれぬ、つたへさくそのむかし、からこくにおいてまうのぶわうとゐんのちうわうのぼくやといふところにて御たがい候へば、てきみかたのながすちは海となりてなぐれしも、このごとくにや候し、このたびもてきみかた

の入みだれ、つばをわり、まのぎをけづり、まはしがほどは、てきみかたのまやゑもなくみへわかざりし事共なり、氏つなのぐんせいは弓とやりにひたりまきして、二ちうのまでをつけ、袖ぬるしにもさいはいをきりつけたり、又あい事には、てきかとはい、うつとこたへよと也、そのこたへなきものをば見わけ見わけて、くみうちする、かううかうそがた、かい、はんくわい、ちやうりやうもこれよりほかの事あらじ、氏つな氏やすのげちにまがいがい、ぐんせいはうつわ物に水のまがいがうごとく也、さすが小弓さまも目の下のまやうぐん、御心がけの事なれば、一ぞくも御みたちのかず、いくさのせうれつ世ならいならば、さだめなくして御所^{御所}さままけさせ給ふ物也、たちどころにて御ふし御まやていのもとよりさま御うちじになされけり、御いたわし共中／＼申につきせざりしなり、又ほうこうのかたぐ、國がたのめん／＼、ことごとく御ともある、心なきざうひやうはにげじにはうたれぬ、氏つなのぐんせいもすいぶんのこものうちじにつかまつり、いくさばのありさま、たちのおれ、やりのおれ、さんを見だすがごとく也、御所が

たの御せいはやむまにうちのりて、にげのびてゆくもあり、その中にまち野の十郎と申せし人、小弓様御ぶし、御うちじにうけ給て、三日すぎてけき川といふところにておひばらをきるとかや、ひるいなきはたらきなり、あけて八日たつのこく、こうのだいへうち入て、くびをあつめてかづみれば、一千よとちうもんあり、小弓さま御ぶしの御ゑるし、日の下のゑやうぐんこがの御所へちさんある、かゝりけるところに、右河玄よほうこうのかたぐ、又國かたのめんくのくび共をこゝにたづねて、世玄ゆつけたちここのだいよりきたり、くびを見わけて、とりぐに、ころもの袖にをしつゝみ、かたわらさして、わうらいしは三まいにをしかくし、ねんぶつするぞあわれ也、小弓にましますみだいがた、これをば夢にもゑろしめさず、月をながめて花にめで、思ひくの御あそび、おぼしめしよらざるおりふし、御所さまのとし月御ひざうめされし月げのむま、ところぐにうすでおひい、くれないに身をそめ、御まやさしてかけ入ぬ、みだいま申あぐ、時のうつればにげたるさう人どもはかけまわり、いまはかなわじ、かたときも玄のばせ給へみだ

いとて、御てをひきていでければ、十や五ツのわか君さま、すぎこしかたは御庭のゑらすをだにもふみたまわす、何とあゆませ給ふべきと、にしやひがしたちまよひ、おちやめのとゝこゑぐに、さけばせたまへどかいぞなき、かくてあるべき事ならねば、山ちをさしておち給ふ、いやしき玄づにうちまぎれ、行ゑもゑらぬとおき野をたどり給ふぞあわれ也、御所さまの御事は、むかしもいまもならひとや、御心をよせ給ふおもひ人はす十人、その中にとしのころ二十ばかりの女ぼうのおもひたち給ふやう、いつまでいきいてつの世に、誰にちぎりてあるべきと、二ツなく思ひきり御ゑがいと申なり、一兩日もまへころとか、このだいより御所さまのみだいへふみをまいせらる、いくさのならひさだめなし、もしうちじにもあるならば、かづさ玄もおさ兩國の玄よさぶらひは、氏つながはたもとへあつまるべし、たとひとし月てきなりとも、ほうでう氏つなはなさけのふかきものゝふとつたへきこしめさるれば、たつときてらへ御身をよせ、おこたらす後の世をねがはせ給ふ物ならば、何の玄さいのあるべきと、くり返ノ筆をつくし

て書給ふ、氏つなはこのよしをうけたまはりおよびて、みだいがたの御ざりける御てらのもんせんまでも、ものゝふの一人もさしつかはす事はなし、かくでかづさゑもうさのいやしきゑづのめゑづのおも、おや親子この行ゑゑらすして、手にもちたる物とりおとし申也、おりふし七日の夜に入れば、月のひかりもよいのあと、おのゝやみぢにたどりゆく、二ツや三ツやみどり子は、おやのゆくゑをゑらすして、たちどころにしてあこがるゝ、にけちりとともにふみころされ、海べのすなにうづもれて、かすをゑらすぞころびゑす、いかりてたけきものゝふども、涙をながしてうちすぎぬ、かくていくさのおりふし、かづにいさめるものゝふ共は、てきのくびに物のぐをととりそへて、氏つなのちんのまへにひざをつく、氏やすは是を見て、こん日のこうみやう甲こうをつはなけれ共、としにもたらぬわかむしやの、かくのごとくのはたらき、まつだいまでもたのもしき事也けりとかんぜらる、三日すぎて九日に、小弓のゑろへかけ入に、おそれながらも御所さまの御ばんどころにちんをとる、あけて十日そう天に、かづさの國の中ゑまに五千よきにてぢ

んをとる、きんへんを取ほ火うくわすれば、わらや一ツも残らざる、まりやつ八郎太郎のぶたか、一兩年はらう人して、氏つなをたのみてむさしのくにの、かたわら、かね金ざ譯ねにざいしゆくして、とし月をおくりしが、此とき渡こ船舟にのり、五百よてうのかいしやうを、一ときに渡とかいして、ちんちうへはせさんず、かづさの國のゑまさぶらひ、このよしをきくよりも、百き二百きひきつれて、我もゝと氏つなのはたもとへときをうつさずはせきたる、ゑかれば、まりやつ三日もすぎざるに五百きになりにつけり、とし月はのぶたかをそねみつるおとゝの八郎四郎、そのほかゑんるい、だうみやう、いゑの子にいたるまで、氏つなと氏やすのたちかげにおそれて、そふれうのぶたかにことゝひざをおり、下おふさの國とかや小弓のゑろの本ぬし、はらのゑきぶの太夫たねきに、とし月は小弓の御所さまに國をおはれ申て、こゝかしこをるらうし、きんねん月はむさしの國へうちこし、氏綱をたのみて、あさ草にざいしゆくせし、ほどをへて十七年、おもはざるところに氏つなと氏やすのたちのひかりにひかれて、たいいま小弓へほんいするこそきとくなれ、三日

のうちに六千よきになりにつけり、そのほかの玄よきむらい、千葉のすけまさたねをはじめて、氏綱にむかつてたがいなれいをとつけらる、五三日のうちに兩國をおさめ、北條氏つなチおよそ日本にかくれはあるまじ、兩國のめんく玄んるい、だうみやう、思ひ思ひにとりあいしが、氏つなのげちにより、このたびことと一見して、さきせいをするとかや、かゝりけるところに、かまくらつるがテおかざうりうあつて、二千よねんそのいご玄ゆりもなし、上下のくわいらうノ、かわら、ひわたのやぶれおち、のきは玄のぶとわすれ草、露や玄づくのおこたらず、やぶれたえなんそのあと、千草と成て蟲のこへ物すこくなりぬべしと、あわれもよをすおりふし、ほうてう氏綱こんりうを思ひたち、きねんしてらいはいある、むかしは日本六十よしうの大みやう小みやうほうがして、よりともへたてまつる、たいいまの氏つなは三箇國の玄ゆごなれど、たい一人思ひたち、京ばんしやうなら大きくす百人よびくだし、いづさがみむさし三箇國の玄よしよく人ことくくあつまつて、海邊ちかき山くのざい木をとりくだし、三四箇年にこんりうある、かく

のごとく玄んりよなどめのまへの事なりと、きせん上下ぞんずる也、小弓の御所さま、玄やけさまと申て御名のり候へど、こんりうざうゑいのおもむき、九牛の一もモうもおぼしめしはたれずして、いたづらにとしつきを御暮し候し也、北條氏綱は玄んちうもふかく、玄ノそんにもかうく、玄よきむらいになさけのいとふかき事ども、筆かみにつくしがたき也、いくさは十月七日、同二十三日に鎌くらへたちかへり、けんちやう寺、ゑんがく寺、五山十さつのそうちうを申さる、きやうとのしたいとんしやせんほうきやうたうしんそ、ねんがうをなされけり、玄ゆしやうさども中く申につきざりし也、小弓の御所さまらいせににおいては、玄やうぶつとくだつのうてなにいらせ給ふべし、ほうでう氏綱はぶつしん三ぼうのめぐみふかくして、百代百そんまで、みやうあるべき事ども、かんせんたるべきものなり、

天文七つちのへいぬ十月二十五日

いくさは十月七日とらのこく、ひのとのひつじの日なり、御所さまひがし御をなへ、氏綱はにしきたうしとらかくのごとくそなへかゝり口き、からめてはう

しとらなりしなり、ここのだいはみなみ、いくさは松
どのだいはきた也、きたよりみなみへちりし也、

平嶋記

源家平嶋先祖

清和天皇十六代足利尊氏公ヨリ十一代將軍義植公惠林院ノ長男也、

義冬 平嶋元祖也、永正六年己巳京都ニテ生ル、廿

六歲天文三年甲午、都ヨリ阿波國エ下向有テ、平嶋庄

ニ居住ス、天正元年癸酉十月八日ニ同平嶋ニテ卒ス、

年六十五歲也、即同所ノ内ニ葬ル、法名中山、菩提寺

同所西光寺也、義冬母ハ阿波國細川讃岐守成之ノ女

也、天文三甲午年三月十六日ニ平嶋ニテ果ル、法名清

雲院、菩提寺右同寺也、右茶湯領トシテ平嶋之内中川

ニテ田地三反、義冬ヨリ西光寺エ令ニ寄附一也、即家來

荒川民部少輔、留永豐後守并清雲院ノ老女冷泉ノ局

方ヨリ紙面差遣ス、

義親 天文戊戌年阿波國平嶋ニテ生ル、永祿九丙

子年十月廿日ニ撫養ニテ卒ス、年廿九歲也、内平嶋之

内ニ葬ル、法名玉山、

義親母ハ周防國大内介之女也、永祿六癸亥年十二月

廿二日、周防國ニテ死ス、法名惠光院、義親内室ハ結城氏也、永祿十丁卯年平嶋ニテ死、

義助 天文辛丑年平嶋ニテ生ル、母右同前也、

右義親早世故、義助惣領ニ立テ義冬ノ家繼也、文祿壬

辰年七月二日、平嶋ニテ卒ス、年五十二歲也、同所ニ

葬ル、法名寶山、

義任 天文十二年癸卯平嶋ニテ生ル、母右同前也、

文祿年中ニ卒ス、是萩原光勝院明岳父也、

義種 拙者儀也、天正二甲戌年九月二日ニ平嶋ニ

テ生ル、母ハ周防國大内介一家柳澤主膳正女也、慶長

五庚子二月三日ニ平嶋ニテ死、法名慶德院玉林也、

義次 平嶋又八郎、慶長元丙申年九月廿三日ニ平

嶋ニテ生ル、母ハ平安城水瀬前中納言兼成女也、

尊氏ヨリ義冬迄十二代也、義冬ヨリ又八郎義次迄四

代也、義冬都ヨリ阿波國エ下向之時ヨリ慶長廿年大

坂陣迄凡八拾年程カ、

足利氏ノ儀ハ拙者家ニ有傳ル系圖ノ如ク也、

拙家母方氏此記通如ク也、

右代々覺傳ル通り如レ此書置者也、

寛永六年九月日

平嶋又八郎方工

清和天皇十二代義冬母先祖

義季義季ノ男也 細川太郎是元祖也、

俊氏俊氏ノ男也 細川八郎也、

公賴公賴ノ男也 細川八郎太郎也、

賴春賴春ノ男也 細川讃岐守也、此賴春兄ニ和氏ト云人有、相模守清氏ノ父也、

尊氏公ノ時、此賴春侍大將となり、讃岐の宇多津庄ニ

居住シ、後阿波國勝瑞ノ庄ニ居城ス、觀應三年之春、

楠都を責ける時、賴春討死す、阿波國板東郡萩原ニ

葬ル、法名光勝院祐繁寶洲、

詮春賴春男也 細川讃岐守也、阿波國秋月ノ庄居城ス、又勝

瑞ニモ住、此詮春を阿波國の御屋形ト云也、法名寶勝

寺也、貞治六丁未年四月廿五日卒、三十八歲、此詮春

ノ兄ニ右馬頭賴之ト云人有て、義滿公の時天下之執

權を司取也、

義之詮春男也 細川讃岐守也、勝瑞ニ居城、

法名寶光院也、三十二歲、

應永十七年寅六月十日、

義之男也 滿久 同讃岐守也、同所住、法名心華院、永享二年庚

戌九月廿八日、

滿久男也

持常 同讃岐守也、勝瑞ニ居住ス、法名桂林院、

寶徳元年己巳十二月十六日、四十一歲、

持常男也 成之 同讃岐守也、同所住ス、法名慈雲院道空、

永正八年辛未九月九日、七十八歲卒、

阿波國勝浦郡瑞麟山丈六寺菩提寺也、此成之息女義

冬母儀清雲院也、

成之嫡孫也、但シ成之ヨリ持隆之間時代略ス、

持隆 同讃岐守也、同所ニ住ス、

天文廿一年八月十九日ニ、阿波國勝瑞の庄ニ見性寺

ニテ、家老三好豐前守義賢ノ爲に自害、即丈六寺ニ葬

ル、法名德雲院也、

持隆男也 眞之 同六郎後掃部頭ト云、阿波國仁宇山住ス、又

生稻山ニ住スト云、眞之元龜ノ頃、攝州福嶋ノ城ニ安

宅シテ、安宅甚太郎信康ト一所に籠居る、信長に對戰

して名をあらはすト云、阿波國南方山郡にて、天正十

一癸未年十月八日の頃、不意に害にあひて死、法名法

昌院、如レ是有て阿波國細川家終也、

三好先祖

元祖本國信濃國小笠原成由、

之長 三好主膳正也、後ニ筑前守ト云、三好ニ在城

す、三好天下に名をあらはしけるは、文明の頃、北國勢二萬餘騎ニテ都へ責上りしを、細川出向しに、三好三千騎にて先懸して、洛外にて合戦す、北國勢、謀車

之長男也
元長 天文ノ頃、泉州ノ合戦打負、堺浦顯本寺と云法花寺にて比類なき自害す、右親子二代主君の爲ニ切腹ス、細川家におひて尤忠臣也、

ひしと云物をさきてのもの壹人壹ヅ、持せ、にぐる様にして道にまきすて、其ひしを敵ニふませ、たゞよ

元長一男也
長慶 三好修理太夫也、河内國高屋に在城ス、此人文武達ル故、將軍義晴公ニ仕ル也、永祿七年甲子七月

ふ所を打取べしとたくみける、三好勢のすくなきを見て、味方とう勢計にて三好を討取とて、彼軍ひしを

元長二男也
義賢 同豊前守也、阿波國三好ニ在城ス、後ニ勝瑞ニ居住ス、永祿三庚申年三月ニ泉州岸和田ニテ、畠山高政との合戦に討負、久米田ト云所ニテ自害ス、法名以徹實休、

なげすて懸り來けり、三好は小勢成とはいへ共、一騎當千の兵共にて、鎧の柄を二間半の四方竹に拵て、之長が下知にまかせ、一面にたゞきつれて懸りければ、

元長三男也
冬康 安宅攝津守也、泉州岸和田在城ス、又淡州瀧本にも住す、此人能書、歌道にも達しける、永祿末病死、永祿七甲子年五月九日、於河州飯盛城卒、

北國勢不叶引しりぞきけるが、我がすてたるひしをふみたてしり居成にけり、跡よりすは來らんと軍路をふさぎければ、せん方なく見えける所を、おひつめ

元長四男也
勝正一存 十川左衛門督也、後ニ讃岐守ト言也、讃岐國十川ニ居城ス、天正ノ中頃病死スト云、又討死共

討取ける程に、一萬計打捨けり、是都鄙共にかくれなき手柄也、其後又京都に合戦有とて、細川打まけ、其時之長切腹したりける、

言、
長慶修理太夫男也
義繼 三好左京太夫也、

元
院ト號、
永正十七庚辰五月十二日、於百萬遍自害、法名喜雲

天正元年癸酉十一月十六日、在河州自殺、天文ノ末

之長は三好筑前守也、享祿四辛卯年六月十五日卒、法名海雲ト號、

ヨリ河内國若江ニ居住ス、

是將軍義昭公ノ妹智也、天正ノ始に義昭公ヲ信長ヨリ配流せられける時、義繼儀義昭ノ妹智也、又三好ノ惣領なれば、兎角討果スべきとて、信長若江の城にせめよせ給へば、義繼ノ家老三入信長ニ返忠ス、其ゆへ義繼は此上は可レ戰不レ及とて、大手の矢倉ニ上リ腹十文字にかき切て、臍を掴出しなげ捨て、遊佐與傳といふ者をよびて、介錯せよと有ければ、與傳畏候とて、太刀をふり上たりしが、甲にまかりかいしやくならずと言ければ、心得たりとて兩手にて甲おし上られる處を、兩手共に首打おとして、與傳は義繼の首を指上て敵に見せ、矢倉に火をかけて、與傳も腹かき切て果にけり、信長見給て、あつはれ大將かな、か様成主君を持て逆心をなしつる家老共のむざんやと、信長もおしみ給と聞へける、又一説に義繼病死とも言も有、是大きなるあやまり也、

豐前守之康一男也

長治 三好彥二郎勝瑞ニ居城ス、之康討死以後、阿波國の太守と成しが、心行不レ正して、一門中と不快ニなりし、天正の始より度々合戰有、爰ニ一宮長門守成助と言は、長治の家老殊に姨智なり、然共長治大敵と成、土州長宗我部元親方々加勢を乞、元親も兼て阿波

國を望なれば、多勢を用意して海部迄指越故、眞之と成助其きおひを以テ長治を責けり、長治不レ叶して淡州に落行べきとて、居城を立出けるを、一宮追懸テ別宮の浦にて天正五丁丑年三月廿八日、長治自害、法名慶翁宗昌大居士、

之康二男

正安 三好孫六也、泉州堺浦ニ居住ス、長治死後勝瑞ニ來り、成助元親にも不レ隨して、城を堅固ニ持て四五年も有しが、天正十年の秋、元親數勢をもつて責ける故、不レ叶して扱テ成て城を明渡シ、讃州に落行ける、其後九州にて死ス、

天正十四年丙戌十二月十二日、於ニ豐後戰死、行年二十三歲、義形妹智也

成助 一宮長門守也、一宮ニ居住ス、右のごとく土

州元親と一味し、長治を討取けれ共、又元親と不快に成、天正壬午年當國夷山にて元親ニ討れにけり、

義形妹智也

忠元 新開遠江守入道道善也、留岡ニ居城ス、道善

は元親成助にも不レ隨、城を堅固ニ持て居けるを、元親侍大將ニ久武と云者、智略を以て和談し、天正十年ニ丈六寺に道善をよび出し、たばかつて討取けり、右道善を討し者は、元親内横山源太兵衛と云者也、又道善内松田新兵衛と云者、其時右之横山を討取也、

攝津守冬康一男也

信康 安宅木甚太郎也、淡州洲本ニ居城ス、元龜元

庚午年甚太郎年十五歳也、信長五畿内を隨え給時、信

康攝州福嶋之城ニ細川六郎と一所ニこもり居、信長に

對戦し、其後洲本に歸り、程なく病死ス、

冬康二男、但義子ニテ信康ヨリ年兄成由、

清康 安宅河内守淡州油良ニ居城ス、

天正ノ中比、信長ヨリ池田勝九郎ヲ由良に討手ニ被

レ遣候時、清康不_レ叶城明渡シ然共如何有けん、信長ヨ

リ本領安堵シテ、今度ハ洲本ニ居城シテ有しが、やが

て病死す、右之外、三好家數多有_レ之、阿波國所々ニ居

城ス、又五畿内ハ三好山城守入道笑岩、同日向守長縁、

内下野守入道釣閑齋、岩成主税助、松永彈正久秀、彼

是所々ニ居住ス、淡州には十河一存、瀧宮豐後守、豫州

ニハ眞邊、石川、淡州ニハ安宅、野口、是皆實休ニ近キ

一門也、國を守護シ、三好家繁榮成し、右言ごとく長治

惡心成故、一家中互ニ遺恨出來、親子兄弟も立別る、

敵と成味方と成、討つ打_レつ相果ル、又土州元親にも大

形うたれ、信長秀吉公ノ代にも、或は討れ、又又他國

に落行、終ニ亡失スル也、

將軍義植公ノ御臺を清雲院殿ト云也、心だて替給へ

將軍義植公ノ御臺を清雲院殿ト云也、心だて替給へ

ば、きやう人の様におはしましけり、それにヨリ義植

公と夫婦ノ間不くわいになり給けり、夫故義植公は

子そく義冬を少も御寵愛なく、剩くげ方ヨリ又御

臺をむかへ給い、是別てこんせつ成故、清雲院殿も義

冬もあさましき有様にておわしましけり、就_レ其新御

臺義冬の事を様々讒言有ゆへ、御父子の間彌不快に

成給也、其故將軍は天下を義高か義晴に御渡可_レ有と被_レ仰けり、是は皆新御臺に近き一門なる故也、然上義冬は都の住居も不_レ叶して、清雲院殿をぐし、天正

三年甲午に都を出給、四國へと心ざし下給ひしが、先

淡州志築の浦ニ着、暫_ク淡州に住居し給ひしと、細川讃

岐守より迎舟を差遣、義冬を當國に呼越、平嶋の庄に

居置、馬飼領として平嶋十二箇村並山形四箇村被_ニ仰行_一けり、其外様々忠節有故、世間の者も用意して、

御所様公方様など崇ると聞し也、

義冬ニ付下ル侍之覺、

留永豐後守據宗_{兵部少輔父也}

大和國高市ノ住人也

駿河國志多ノ住人也

河内國松原ノ住人也

三州八若ノ住人也

荒川民部少輔珍國

森小平太時常綱三郎父也

村井權内

足代七郎右衛門

淺田將監延房

堀喜左衛門景盛

眞淵伊豆守忠元

安井源右衛門

三江兵庫頭善行

湯淺次太夫兼綱

是ハ清雲院殿之者也、今吉井村奎衛ハ此子孫也、

越前國長坂ノ住人也

關東ノ者生國失念

武藏國ノ者領所不知

攝州豐嶋郡淺田住人也

江州鯉江ノ住人也

但馬出石ノ住人也親ハ則出石形部ト云人也

中國之者住所失念

攝州野口ノ住人也

阿波國長山ノ住人也

侍分以上拾五人都合三百六拾人附下ル由、右之侍共

義冬につかへ忠義不淺けり、然其義冬儀窄人故、侍共

皆召おかるべき様もなく、右之内三江、留永、結城、

就、荒川、湯淺六人召置、殘ル九人其外若黨雜人共、大

形暇をつかわし本國へもどし給と也、

細川讃岐守持隆ノ内室ハ、周防國大内介息女也、此内

室妹ノ有けるを、持隆、計ひととしてよひ越、義冬御臺に

なし給也、是は義冬ノ行末ノ儀を持隆思案有てか様

に調給也、此御臺ニ男子三人出來、一男を義親、二男

を義助、三男を義任と言也、此義助拙者父也、如此持

隆取持有ル故、天文三年ヨリ同廿四年迄、平嶋ノ庄ニ

住居也、義冬始テ阿波國へ來り給時、平嶋之内西光寺

ニ落着給、又其後居所家作りかへ給時、西光寺ニ居給

ニヨリ、則西光寺領分田地二町餘ノ年貢、諸役、物見ニ

赦免有て、家來三江兵庫入道善行方ヨリ紙面差遣也、

文 言

至阿波國平嶋ノ庄西光寺ニ依レ致ヨ居御座ニ當年領年

貢諸公事物等永代被レ免所被レ仰下ニ也

沙彌

天文十六年四月十三日 善 行

西光寺

此書付西光寺ニ今ニ有由、

持隆三好豐前守ニ被レ討給事、

義冬周防ノ國エ下リ給事、

細川讃岐守持隆ハ、有時家老三好家ノ中を召集て申

されけるは、義冬公當國ニ久々奉レ置儀、別ていたはし

く思也、各智略を以て義冬一度天下ニ居申度念願也、

何も同心有て、此儀可レ然と申有處、三好豐前守義形

壹人同心なく、剩氣色かへ、持隆をさんぐに匂けり、

持隆儀ハ云ニ及ず、座中何も色をかへ、持隆此儀を口

惜思はれ、先義形を討果シ憤をさんせんとて、近習の

侍共ニ密ニ内談し給、四宮與兵衛と云者返忠して、義形ニ此旨ヲ告知らせり、義形玄あんして、右ニ持隆仰給事を當分同心仕^ラざる儀を残念ニ存由^ラ、近習の侍共を以持隆之機嫌の能様ニ申成^シ、扱分國の人數、又近町ノ一門中^ヲ玄のび^ハに呼寄、勝瑞近キ在^ニカニかくし置、彼四宮を以持隆に申上けるは、北の川端にて御道遙被^レ成候得ば、御遊山の時分能と種々たばかり申故、持隆逆心とはおもひより給^サず、尤成程とて天文廿一年八月十九日ニ、見性寺の前へ出給へば、義形かくし置し人數一度ニ押出し、持隆ヲ取卷^キて、時のころを上^ニにければ、持隆曾て無勢ニテ出給へば、ふせがすべき様もなく、あきれ居給所に、剩^リ供の者も方々に逃ければ、せんかたもなかりける、星合彌三郎蓮池清助と言者二人留て、持隆を見性寺へ入ける、然處ニ義形ノ舍弟一存込で、持隆の直に可^ニ討取^ニ様に有けるを、清介押へだて置、持隆ニ切腹させ申、星合介錯致けり、此二人之者、常ニハ持隆の氣にいらざる者ども也、人並退^ニばのがるべきなれども、侍の儀を守^リ一足も走りぞかずして、星合も蓮池も二人共立腹切て、主君の供をぞしたりけり、諸人は是を感じける也、

持隆ニ六郎とて、曾て幼少成男壹人有、但^レ下玄やく腹也、義形申けるは、持隆を奉^レ討は身の災をのがれん爲也、此御子恨なしとぞだて置、又主君ニあがめんとして養置けり、是細川六郎掃部頭眞之、此眞之母は當國西條むら岡本美濃守女也、持隆死後、眞之母を義形取て妻にして、是に男子二人出來、一男を彦次郎長治、一男ヲ孫六郎存保ト云けり、此兩子ノ儀尚^ニ玄るし置也、返忠ノ四宮ハ無道の者也とて、義形翌年の春討果す由也、持隆を討取し以後、義形ヨリ三好入道如三使にて、義冬に申越けるは、徳雲院殿いわれたる儀を思立給、御身をうしなはせ給也、然共尊公御事は御別儀も無^ニ御座^ニ候、只今迄のごとく當所ニ其儘御座可^レ被^レ遊候、御領知も全相違御座有間鋪由申越ける、義冬被^レ仰けるは、徳雲院無^ニ之上は、當國に住して不^レ叶、然何方も可^ニ立退^ニ由仰給へば、民部人道達てせいし申により、然ば重て御返事可^レ有と被^レ仰けり、又持隆果給節、義冬の母儀清雲院殿、其時勝瑞ニ居合給けり、義形は義冬何方へも立退可^レ給かとて、清雲院殿を勝瑞ニ二三年も留置、平嶋に御座なき故、義冬せん方なく居給也、義形かやうに義冬を念頃^ニ云ける

も子細有儀也、其時將軍義輝公は如何有けん、義冬を
たいせつニ養けるニよつて、義形も少はたつとみけ
るとぞ聞へし、然所ニ清雲院殿御病氣ニ成、天文廿三
年三月ニ相果給故、此一周忌を御とむらい有て、後中
國に御下可有由、義形被仰ければ、義形も尤と思
ひ、大船三艘調越ける、義形早々仕度有之、弘治元乙
卯年四月十日に、周防國へ下給附居ける、侍六人の内
乾定直儀は、上方の様子可_レ知爲とて、河内國にもど
し給、又湯淺儀は阿波國生れの者成とて、義形ニ預
置給ひ、残る四人は妻子等迄召れ周防に下り給所ニ、
大内介ハ殊外ニ取持、早々小原と言所ニ居所を構、義
冬を入置て様々忠節有故、永祿六癸亥年秋迄周防國
に居給ふなり、

三好豊前守義形討死之事、

義冬周防國ヨリ阿波國に歸給事、

將軍義輝公ヲ三好奉_レ討事、

義親病死之事、

義昭公信長尾州ヨリ上洛之事、

天文廿一壬子年、阿波國ノ屋形細川讃岐守持隆ヲ家
臣三好豊前守義形討捕シ後ハ、細川ノ領國分皆義形

令_ニ知行、三好家彌諸國威を増けり、さて義形は弘治
ノ頃ヨリ法舛シテ、名を實休と號、然に實休は五畿内
所々に一門を居置、おのづから天下の執權（同也）也、然
共好三家は細川の家來成ニヨリ、諸大名中三好ノ執
權を殊外猜給也、實休（倉をきわめ、万事我意ニまか
せける故、將軍義輝公も實休を以の外にくみ給ふなり、
畠山右衛門督高政ト言人、前ニ將軍の時ヨリ窄人し
て、紀伊國廣と言所に居けるを、去時將軍ヨリ高政方
へひそかに免狀を指遣し、實休を可_ニ討取、由仰附給
ふ、此高政と細川三好家とは年來の敵す（成故如_レ此
也、高政請喜で早々紀伊國の諸侍并熊野根ごろの法
師武者迄催促、其勢一萬五千餘騎にて、永祿三庚申
年二月下旬に紀伊國を打出、先泉州岸和田の城をぞ
責にけり、是は阿波國より實休を引上べきとの謀
也、此岸和田ノ城實休上洛の宿城として、舍弟安宅攝
津守冬康を被置けり、如_レ案實休此由を聞附、阿波ノ
國ヨリ人數を出して、岸和田のうしろづめにむかは
れけり、さて久米田と云所にて合戦有しが、高政智略
にてたゞ一戰に勝、永祿三庚申年三月十五日ニ實休
自害ス、か様に大將討死しけるにより、諸勢皆はいぐ

んして、高政忽運をひらきけり、

其後大和國筒井喜三ト云侍、人數二萬計にて河内國木本ト言所へ打て出、三好家と度々戦けり、然共此陣は三好宗三也、謀を以喜三をなんなく討捕けり、是も將軍より喜三方へ内證有ての軍とぞ聞ける、其子細は是程の大亂ニ、三好左京太夫義繼は、兩度の合戦に虚病を構出合ざりけり、此義繼は、則將軍義輝の妹聲成により、此兩陣ニ立まじきよし將軍コリ義繼方内書有てなり、扱喜三討死後、義繼が外に三好家ねは將軍機嫌あしきやうにぞ聞ける、

三好山城守、同下野守、日向守、松永等評議しけるは、今度兩度の合戦は正敷將軍の計也、然上は我々行末不_レ可_レ然と、智略を以將軍を奉_レ討、中國の義冬を都に居へ置、一家中も心安_レ有とて、永祿六癸亥年秋、三好日向守周防國へ下て義冬へ申けるは、徳雲院果させ給により、尊公是に御下向の儀、我々面目をなき事に候、乍_レ去其節我等實休にくみせざる所は御存被_レ成儀に候、其に付實休も天命にて高政にむざんと討果され申候、さて高政喜三兩陣は將軍の御はからにて御座候、實休儀は尤惡逆の者にて候間、御にく

しみ有も理にて候、別儀もなき我々を御にくしみ有事以外候、然上は我々行末とても不_レ可_レ然候、彼是時節到來仕候、此上は三好一家中として代を亂し、尊公を一度天下ニ居、御會稽をあらはし、我々一家も身安穩置申度候、乍_レ去尊公遠國ニ御座候ては、評議難_レ成候、先阿波國へ御歸着可_レ有候、實休男長治阿波國ニ居候へば、曾て幼少ニ御座候、其上父實休も尊公御事は疎略にも不_レ奉_レ存候、又彦次郎も今將軍を親の敵と存候故、尊公へ少も別儀は無_レ之儀ニ候、早々思召立候得と、共爲一家中より某御迎ニ下し候と、色々理をつくして申ける故、義冬満足有_レ之、早々思召立給しが、此儀一先大内介ニおらせばやとて、大内介ニ内談有ければ、大内も尤と思ひけれ共、他家の謀を以義冬を代に出し候ては、家の外聞よからずと思ひけん、仰尤に候へ共、我存ル子細候間、先今度御無用ニ被_レ成候へと堅留申ニより、義冬も日向守もせん方なく、日向守は罷上べきとて、湊迄出けるを、義冬名残おしく思給ひ、義親と二人船場迄見立に出給所、三好船より申けるは、今一度申置度儀御座候、乍_レ恐少の間船に御召給候へと申ければ、何の玄あんもなく、

義冬親子ともに三好が船へ乗給へば、日向守兼て家來ニ云合けるが、其儘船押出けり、義冬はせんかたなく居給しが、折節順風にて、なんなく阿波國に着、本の平嶋ノ庄ニ置、彦二郎長治をはじめ、三好家來中不殘伺公し、忠節致けり、即日向守諸事相計、領知分をも無相違渡けり、扱日向守申せし如く、永祿八乙丑年謀叛くはだて、將軍義輝公をなんなく奉討けり、即平嶋へ其趣注進す、折節痛給故、長男義親上洛えたまひ、攝津國富田村普門寺と言禪寺に陣取居給し所に、三好家中は言不及、方々より侍共走來て、既ニ代にも出給べき所、其頃尾張國織田上總介信長と云人、隣國數箇國切隨へ、五畿内西國へ貢上る由聞ければ、三好義親に附隨し勢も、身の用心をせんとして、我々が居城をまもり、義親は折々見廻計にて、さながら合戰の評議も濟ざりけり、又三好も將軍を討けれども、東國中亂逆最中也、然共五畿内へ近附敵もなければ、誰を敵にし、いづれの國へ責行べき様もなし、先大敵は信長也、是を可討取一智略をめぐらしけれども、さながら信長を責ほどの軍勢もなければ、五畿内を取まづめて、信長來なば引請て合戰をすべしとて、いた

づらに月日を暮けり、然所ニ將軍義輝公舍弟先年より南都に居給しが、義輝公を三好討ける由聞給て、南都を忍出て北國に落行給しが、若狹國武田大膳太夫、越前國朝倉義景、尾張國信長を頼給しにより、數萬軍勢集り由聞ければ、畿内勢も其縁々にひかされて、三好方、人數も次第にげんじければ、彌合戰評議もおろそかに成けり、

松永彈正久秀がいとこ松永喜内と云若者有けるが、まへ大和國宇多ト云所ニいたりしが、其頃窄人にて有けるを、右彈正計として義親ニつき居けり、然共殊外不行儀者にて、義親の命にも不隨、剩慮外しけるに寄て、義親手打にせられけり、松永是を聞て憤を合けるが、義親道理至極せる故、せんかたもなく有しが、上向には別儀もなかりけれども、心中には遺恨有て、夫より義親松永不快の様に成にけり、又義親不運にや、普門寺にて病氣指出、様々養生成けれども、快氣あらざれば、本國にかへり養生すべしとて、阿波國へもどりしが、撫養と云所ニ着て、永祿九丙寅年十月八日に、則撫養にて果られけり、義親の病證をきけば、松永彈正がちんどくをあたへたと云さた有け

り、然其實事にてはあるまじき也、然に次男義助は義冬病氣以の外成故に居給しが、義親果給由を聞て、義助可_レ上とて船用立せらるゝ處に、一宮長門守成助方より數勢を以、義助の船をおさへ、上洛を留けり、此由來は、義親撫養にて舅給よしを松永彈正聞附、然ば一宮成助を取立都にするんとて、其趣を成助方に申越にけり、右の如く義助の上洛をおさへけり、此成助は松永爲には兄公也、又小笠原氏の傳にてあれば、都にすへても可_レ然とて如_レ此也、松永取持けるとなり、扨義助は一宮に船をおさへられ、口惜おもひけれ共、成助は本身、義助は牢人の後なれば、せんかたなく居れる所に、一宮方より船の押番におきける者共、平嶋へ來りて義助の様躰をみるとや思ひけん、屋敷廻門前に立やすらいけるを、義助堪かね、家來の者共に書附、彼やつばらおもふ様に打擲し、方々におひちらしける、夫につき平嶋川口に舟番に居ける侍頭弟重佐介金山藤兵衛と云者二人、太將として其外に侍がましき者數十人雜人原數を不_レ知相催し、義助へ寄きたるよし聞ける、義助いはれけるは、いやしき奴原に居所を踏破れては口惜事なるべし、川迄出向戦

んとて、義助も弓矢取持て馬に乗出けり、家來のものども何も不_レ殘出けり、案のごとく大勢寄來けり、義助かたには射手ども有ける故、散々に射ける故、かの奴原射し口まされて難儀に見えし所に、彼二人の侍も能鎧着て見えけるが、鎧おつとりのへ、壹番に突かかりけり、義助内三江兵庫頭男左太夫は大力成しが、長刀持て渡り合散々に戦しが、終_ニ弟重を討取、金山もいた手おひ引ゑりぞきけり、其外入亂戦ける、兩方手負多かりける、然所に留岡の城主新開道善并_ニ近所の侍共走來て、雙方押合扱ける故、先互に引ゑりぞきけり、三江左太夫深手おひ、其日の暮に相はてけり、扨長門守成助此由を聞附、數百騎の勢にて翌日平嶋に寄來ル由聞えける故、義助方にも其用意して侍ける所ニ、右ノ新開道善、安草左近、矢野駿河守、其ほか長治家老中出合扱ける故無事に成けり、然其扱衆中より義助上洛も成助上洛も指留られけり、然其上方の三好中は兎角義助を可_ニ取立_一と言、松永は成助を立_ニと云により、三好と松永と不快に成て、南都に度々同士軍をたりけり、其時三好山城守侍大將中村新衛と云大がらの者有けり、ならの大佛堂ニちん

取居けるを、松永是を打果すべきとて、多勢を以て永祿十年丁卯十月十日の夜中、大佛堂に草こみて大佛を焼けり、三好方の軍兵多やき打討けり、然共彼中村新兵衛は如何したりけん、堂よりぬけ出、松永が多勢の中へ懸入て、敵あまた打取て討死しける、是によつて三好彌憤ふかくして、松永と度々合戦したりけり、然處に義昭、信長大軍にて都へ上り給、攝津國へ責下り給故、松永、三好和睦して、所々城廓を構、信長を一防けれども、信長多勢故かなわすして、三好、松永、共に信長に降参したりけり、それによりて義昭を都に居へ置、信長は本國に歸給也、然に三好、松永又評議しけるは、將軍義輝公を討取しより此方、信長におさへられて本望をとげず、むねん至極也、剩義昭公天下にすはり給へば、我々行末とても不_レ可_レ然、此上は今一度謀叛して、義昭公を討取本望をとげんとて、永祿十二己巳年正月に義昭ノ居給都六條を責ける、又不_レ叶して引しりぞきけり、其後に信長多勢にて上洛し給、彌五畿内を切隨へ給、其時三好、松永共にまた信長に降参したりしが、如何有けん、松永岩成主税、信長に逆心して我々居城に引籠り、合戦をと

げ、終に自害して果けり、三好智略して彌信長に随ひけり、か様に成行て義昭公少の間天下の主と成給也、義昭公都に居り、將軍任じ給しが、又信長と遺恨出來て、天正始ノ頃、城州宇治にて合戦して、義昭公忽討負、はいぐんして河内國若江庄へ落行、妹智の左京太夫義繼を頼給へども、義繼いかゞ思ひけん、城中へ入ざりけり、義昭なんぎに及ばせ給しが、爰に同若江ノ住人乾太郎右衛門尉定直と云者、先年義冬都より阿波國へ下向の時附下し者也、義冬周防國へ下給時、子細有て暇をえ、古郷若江へ歸りけるが、義輝公へ奉_レ仕儀もならず、三好義繼の旗本に來居けるが、定直は義昭の有様をいたわしく思ひ、我いにしへ義冬公に奉_レ仕、今不快の義昭公をかへ申、後本意にあらずといへども、か様に落人と成給、又此君とても世に出給御身てもなし、其上御先祖は同主君すち成とて義昭公を我館へ入、忠節いたしける、其時義昭公、定直先祖の儀共尋給いて、定直を乾内藏丞義直と取替給、扱義昭は乾方ニ數日居給へども、誰取立る者もなし、また信長と和睦もならずして、終には流人と成て、義昭公代をうしない給、後は信長の天下を治給

也、

右の内藏承義直は天正中頃に仙石權兵衛秀久方出、
天正十三乙酉年讃州にて討死しけり、此義直倅五郎
兵衛正直といふ者、先祖の主従の縁所を傳知て、折節
牢人にて大坂に居けるが、慶長九年甲辰の春、拙者を
見舞に下り、一月計逗留して歸しが、義昭公、三好義
繼、儀、并に五畿内、儀共能知て語ける故、如、此書附
也、

阿波國治次第

土州長宗我部宮内少輔元親は阿波國三好家ともく
しけるを聞て、哀事出來よかしと思所に、一宮長門守
成助方より一味可有由云越に附、早々人數四五千用
意し、阿波國海部迄責入處に、同五年丁丑春、三好長
次を討取由成助方より注進す、其上南方諸侍も大形
元親にしよくしける故、同五年に仁宇、桑野迄責入
る、桑野城要害能拵、又畑山にも城を構、一兩具足の
者二百人宛相そへ、桑野、吉明に預置き、元親は土州
へ歸けり、然處に天正六戊寅年の春、三好存保泉州よ
り下て、即勝瑞に居、長治跡を繼居ける處に、紀州、
淡州より加勢多來ける故、一宮を責けり、成助かなわ

ずして大栗山へ引籠、又元親え加勢をこふ、同八年庚
辰元親の侍大將久武と云者一萬計の軍勢にて、成助
に一味す、夫ゆへ存保も迎て可、戰様もなく有ける
處、彌土佐方におもむく者多かりける故、阿波國過半
元親領知す、一宮の城に池内肥前守、野中三郎左衛門
と言者大將にて、一兩具足二百人計相添、成助と一所
に置、るびす山の城に吳田五郎左衛門、東川庄左衛門
と云者大將にて、一兩具足二百人相添、庄野和泉守に
城を預け、其外手に入城々皆番手を置領納しける所
に、天正十一癸未年の春、信長より三好山城守入道笑
岩、阿波國被_レ仰付により、笑岩數千騎にて當國へ下
ければ、前方元親に隨ける阿波國古侍共、又笑岩にぞ
くしける故、元親の者ども不_レ叶し池田_デ肥前守、野中
三郎左衛門は成助を人質に取、夷山の吳田五郎左衛
門、東川庄左衛門は庄野和泉守子を人しちに取、其外
番手の者共皆土州へ歸りけり、其上又阿波國三好家
の領知と成處、同年六月二日に明智日向守光秀謀叛
して、信長を討取由聞ければ、笑岩に附下上方勢、同
笑岩共に取あへず上洛しければ、元親此由聞て、同年
八月に二百計の軍勢にて當國へ責入、前に言ごとく

三好存保、勝瑞より打出、中富表にて元親と戦ければ、存保無勢故不_レ叶、侍共多討れ、本城へ引籠しが、其後扱に成城を元親に渡し、讃州え落行ける、其外小城其は隙も入_レ責取ける、扱成助儀右笑岩下し、笑岩に内通儀有とて、夷山にて謀て、成助を元親討果しけり、庄野和泉守別心なきとて、本領八百村を廿四町宛行いけり、扱今度一宮城に元親舍弟二郎親安、池村親載と言者に一兩具足數百騎相添置、脇氣城元親伯父新右衛門尉親吉を籠置、其外の城々に一門共を入置國を治、天正癸未年讃岐豫州まできりしたがへり、羽柴筑前守秀吉公、天正壬午年播磨國を隨居給しが、明智が謀叛の由を聞給、早々走上り、攝州山崎、并勝龍寺にて合戦有て、明智を討取、其外逆徒共多切隨給、天下を治給也、然に蜂須賀蓬庵公秀吉に數度勳功有により、阿波國を被_二仰附_一けるに付、天正十三乙酉年、蓬庵公當國え御打入有により、長宗我部不_レ叶して、阿州、讃州、豫州三箇國を指上、本國を安堵して土州へ歸、其外逆心の者そく時に討隨給ば、即渭津居城を構、蓬庵公御入城有故、國中長久に治也、

當國の大守達拙家を憐給ふ事

義冬阿波國え初て下給時、前にしるすごとく細川讃岐守持隆より領知として、平嶋十二箇村、并山部、長山内にて吉井、楠根、仁宇、和食四箇村、都合十六箇村、此高三千貫分給り、天文の初より同廿四年の春迄、義冬の領知也、

義冬天正廿四年乙卯_{改弘治元年}夏、周防國へ下り彼地にて大内介にはごくまれ、永祿癸亥六年の秋迄、周防國に住す也、_{已上九年}

義冬永祿六年の秋、周防國より當國へ歸着有けるとき、三好日向守長縁計として、同長治方より領知前前のごとく宛行ける、然共周防國大内介は義冬、義親阿波國え歸儀、日向守と内談にて有けるとて、殊外腹立して、義冬内室は言に不_レ及、義助、義任其外家來の者迄押え置、一人も差越ざるにより、諸事の調もならざりける故、日向守方より賄の代官として、田宮右衛門佐と云者、家筋能侍成として、義冬居所の近邊屋作して置、朝夕の膳部等も此田宮方より調ける、然田宮は義冬儀をたつとみて、膳部下々のいきなどかゝらざる様にとて、給仕人其外膳部賄の者覆面を懸させて調させける也、是一笑成體也ト言傳也、此屋のたつ

みに代官屋敷と云田地有_レ是、田宮が居所也、

義冬周防國より當國へ歸給、同年の暮義冬内室彼地にて果給_レけり、其故大内介は義助、義任にも指てかま_レい無_レりける故、翌年正月早々義助夫婦、義任、同家來の者共皆阿波國へ戻りけるに付、永祿七甲子年より天正元癸酉迄拾年の間、右の十六箇村無_レ相違義冬令_二知行_一也、然處に義冬は天正元年十月十八日に果給_レいける、領知分無_二異儀_一天正四年迄、義助令_二知行_一也、

天正五丁丑年土州長宗我部元親當國へ責入、元親は桑野に陣取居て、桑野梅谷寺と云出家に、池田甚兵衛と云者を相添、義助方へ申越けるは、尊公御事御領知分共に全異儀御座有間鋪候、然_レば此馬細失と申駿足にて候、召料に被_レ成候へとて、土佐名物の紙等相添、おくりゑさせけり、同天正十年秋、元親又當國へ打入、勝瑞三好存保を責隨へし時、元親は夷山と云所に陣取居て、八萬村糸光寺と云出家西寺賢齋と云法師武者を相添越、如_二先年_一御領分相違御座有間敷候、此馬小錦と申て、隨分の引廻し乗心能馬にて候とて、今度も名物の布等を相添越ける、其後元親讃州へ責入

し時、義助も侍三人陣に立遣ける、此者共十川の城責ける時、少々高名をもして歸り申により、元親猶以念頃有也、

天正十三年蓬庵公當國へ打入有て、追附義助方へ使者有て、念頃成儀共仰給り、義助も頓て渭津へ行、蓬庵公へ目見致、然_二翌年_一秋、義助方え仰給りけるは、阿波國先方の侍中の知行分何も取上候ける、義助も先此方え可_レ被_二預置_一候、重て宜相計とて、十六箇村不_レ殘取上給い、其後茶代に致候へとて、平嶋の内にて高百石給り、義助言けるは、拙者儀何方へも可_二罷越_一候、茶の代不_レ入と申ければ、蓬庵公より尤に候へ共、先堪忍被_レ致候へ、細川長宗我部申におとりも有間鋪候、以來如在有間敷と仰給りけれども、義助無_二同心_一、知行も所務せざりければ、しせん何方へも可_二立退_一かとて、浦々の船をも留置て、又念頃の使を度々給りける故、義助せひもなく百石分所務申附けり、今の知行是也、然_レ共家來の者可_二召仕_一様もなく、右の年寄侍皆隙を遣しける所に、此者共云けるは、草履取風情にても此儘御奉公可_レ仕と申によりて、三江兵庫頭、留永兵部少輔二人殘置、殘る三人并若黨中間

女等まで暇をさし遣ける、然所に文祿元年七月二日義助相果けり、其節拙者若年にて、身體□々十方もなかりける所に、即蓬庵公より佐治九右衛門使にて、義助相果力落、其上諸事不自由に可_レ有とて、米二十石給り、又領地分も無_ニ異儀_一所務可_レ致旨仰給に付て大悦、蓬庵公へ禮等申けり、其より義助家を拙者繼也、

慶長五庚子年關が原陣の時、蓬庵公上方ニ御詰有、至鎮公は關が原ニ居させ給ふニ付、渭津の城中え拙者度々見廻申ニ付、太守歸國被_レ成て、至鎮公より初て米廿石、蓬庵公より小袖共給わりけり、

同十三戌申年太守え義次ニ初て目見えをさせける節、至鎮被_レ仰候は、代々名乗計にて名はなく候かと尋給ふ、拙者云けるは、被_レ仰のごとく名なくして惡敷御座候間、いか様にも名附給候へと申ければ、太守公尤ニ候、乍_レ去平人にてはなく候故、其名を附申事如何ニ候、蓬庵は年よられ法體にて候へば、佛同前ニて候間、蓬庵を令_レ頼可_レ有と、拙者方より其由可_ニ申遣_一とて、即かへられければ、蓬庵公心得候とて、萩原光勝院を被_レ召御談合有て、名字も在名を名乗候へと

て、則平嶋又八郎と御附有て、御脇指小袖共給り、扱至鎮被_ニ仰遣_一給へば、至鎮公一段の儀にて候とて、又八郎ニ小袖給り、重慮ニ仕合にて平嶋へ歸り、如此蓬庵公附給ル名にて有候間、又八郎子孫皆々又の字を置字ニ致可_レ附也、

右ノ明岳、義任ノ子にて、拙者とは從弟にて、其故蓬庵公明岳にも念頃なる故、義次名之儀ニ附、被_ニ召給_一談合有、先年故勝光院死節にも、萩原の寺を望ける出家衆も有共、蓬庵公念頃に思召より、明岳に被_ニ仰附_一、光勝院ニ居り、數年持來ル所、蓬庵より地切の慈光寺に御居へ可_レ有と被_レ仰けり、明岳申けるは、慈光寺は大寺にて忝儀ニ候へども、萩原は先年尊公より御念頃を以被_ニ仰附_一けり、また拙者師寺にて候へば、光勝院を罷出、是え參儀如何ニ候間、御免候へと被_レ申ければ、蓬庵公尤候、然は慈光寺より萩原も懸持ニ致され能候はんと被_レ仰、其通にて慈光寺に居、光勝院も今に懸持ニいたさるゝ也、

慶長十九甲寅年冬、大坂籠城の節、秀頼ノ家老大野修理治長方より秀頼申附候由にて、父子大坂え可_ニ罷上_一旨、米村新助と云者使にて狀并小船一艘指下け

る、拙者思様、此儀侍冥加ニ叶處成と、早々可_レ打立
と思ひしが、乍_レ去只今迄太守公の育をゑて、今此儀
沙汰もなく上ル儀本意あらすと思ひ、大坂への返事
調使者をもどし、即修理亮方の狀を渭津へ持て行、
細山主水正政慶を以、此旨太守公え申ければ、至鎮公
某ニ對面有て、神妙成ル仕合感入候、重て申來候とも
同心有間敷候、此狀次で能候は、御前ノ御目に懸べ
き也、具足の箱ニ置候へと、梶浦佐次右衛門ニ御渡
有けり、其時拙者云けるは、破具足成共着可_レ申候、
今度陣に召れ給り候得と云ければ、太守公尤候、然
共家頼は共同前に召れ申事も不_レ成、今ふせい成人指
添、不自由成武具を調申事も難_レ成、心指はいづれの
道にても同前に候間、留主の内城中え節々見廻給候
へと被_レ仰候所、是非もなくして其後城中へ度々見廻
けり、然處に太守公無_ニ比類_一高名にて歸國被_レ成ける
が、留守中骨折満足に候とて、米三拾石給けり、寛永
始に蓬庵公當今津へ御越有けるせつ、拙者家宅見苦
敷由御聞有て、家普請いたし候へとて、材木竹并戸障
子迄給候付、此表作事せしむる事也、右の外吳服帷子
乗馬等給儀は不_レ及_レ記候、か様ニ太守公御念頃到有候

ゆへ、今に牢人相懸る者也、其方代も如_レ此諸事記置
子孫え可_ニ相傳_一者也、

寛永六年九月日

義種判

義次方江

天下次第

平清盛公 永暦元庚辰年ヨリ壽永二癸卯年迄廿四年間
也、

源頼朝公 元暦元_辰年ヨリ正治己_未年迄十六年、

同頼家公 正治二_申年ヨリ建仁_亥年迄四年間也、

頼朝ノ一男也、弟ノ實朝ニ討ル、也、

同實朝公 元久元_子年ヨリ承久元_卯年迄十六年也、

頼朝二男也、兄頼家ノ子曉法師ニ討る、公曉ががいず也、

平時政男也
頼朝公ヨリ實朝公迄三代三拾六年代リ知也、

北條義時 承久二_辰年ヨリ元弘三_癸年迄百拾四年間

也、

内六年ハ頼朝後家二位尼ノ天下ト也、是ヲ尼將軍ト云也、元祖時
政ヨリ高時崇鑑迄九代也、

後醍醐天皇 建武元_甲年ヨリ延元二_丁年迄四年間

也、

足利尊氏公

曆應元

戊子

年ヨリ元龜三

壬申

年迄二百三十

五年間也、

内永祿八乙丑年ニ將軍義輝公ヲ三好奉_レ討、同九年十年三ヶ年ノ間

天下ニ主ナシ、但三ヶ年ノ間ヲ三好代ヲ知ト云也、然ニ永祿十一戊

辰年義輝ノ弟義昭代ニ出ル、右元龜三年迄四年ノ間、天下持給フ

也、尊氏ヨリ義昭迄十五代也、

織田信長公

天正元

癸酉

年ヨリ同十年_{壬午}迄拾年之間

也、

羽柴秀吉公

天正十一

癸未

年ヨリ慶長三_{戊戌}年迄十六年

之間也、同六月十九日ニ秀吉公明智を討取、天下を

治、慶長三年八月十八日ニ卒給、則豐國大明神と崇

也、同四年一箇年は秀吉長男秀頼天下分知、然ニ秀

頼ノ家臣石田治部少輔三成といふ者、西國の諸侍

をかたらい、慶長五_{庚子}年謀叛を企けり、此時源ノ德

川家康關東より走上り給、美濃國關ヶ原にて合戰

をとげ、并石田逆徒の者共多討取給、天下を治給

也、是を關ヶ原陣とも、大がさくづれとも、又治部

少輔亂とも云也、

徳川家康公

慶長五

庚子

年より天下長久に治給也、

平清盛公代永暦元年ヨリ秀頼公代慶長四年迄凡四百四十年也、

右是平嶋君の自記也余暇日考同異得失墨以正文

字朱以改事實他日爲修史の一助樂之

寛文戊申孟夏念有一日

好松子

右從道祐走寫本被差越候へども寸暇無之漸愚子

に腐毫をそめさせ便を幸に進献之候落字文字の

形任寫本者也

寛文八年初秋二日

□ 勝

武成公 足下

多賀谷七代記

大極一たび動して乾坤を生じ、天地開闢せしより人物あり、これを三才と名くる、皆大極の理より生じ、同根一體なり、故に三略に曰、四體相隨、骨節相救がごとし、天下國家の備もかくのごとし、君は體也、臣は四肢なり、夫四肢は我有にして自由なりといへども、正しく熱湯をさぐり、白刃をふむ事をきらふは人倫の常也、民を使ふも我手足を痛みるが如くして無理ならずば、敵いづれの處にかあらん、親賢遠姦、世の政道に私有事なかれ、私あれば則必人の恨有、人の恨ある時は國家治らず、實なるかな天道は奢を惡む、滿る月は必缺る、鯉魚は龍門の瀧津瀬に登るといへども、終に巖に當深谷に其身を絶す、治亂盛衰の理、歡樂極て哀情多し、只慎むべきは天の誠なり、爰に下妻の城主多賀谷七代の花の色を、慶長の風に破れ散々になりし昔を書集て、今改めて多賀谷七代記と名づけけらし、

于時延享四年丁卯八月初旬 小林姓尙房識

多賀谷俗姓平氏系圖傳

人皇五十代桓武天皇九代後胤

〇〇金子十郎家忠

平治ノ亂ニ左馬頭義朝嫡男惡源太義平十六騎ニ撰レ武藏七黨ノ内其一人ナリ

家政

金子十郎家忠二男多賀谷左衛門尉ト號ス

重茂 景茂 家經

政忠 家茂 政朝

滿廣 是ハ結城ヨリ續 氏家 彦四郎

高經 家植 家重 重政

政經

重經

修理大夫 宣家 佐竹ノ四男重經養子

政頭

信濃守重經也其 忠經 是ハ石田治部三成カ鳥帽子子ト親族多シ 後三經ト名乗

泰經

彦四郎安藝守又安房守ト本文ニアリ重經弟ナリ

多賀谷家次第書

金子次郎家政

武州崎玉郡多賀谷ノ郷ニ住居シテ年久シ、是家忠ノ二男ナリ、然トイヘドモ苗字ヲツ、ミ在名ヲ名乗ル、征夷大將軍源賴朝

公御治世ノ時、嘉祿二年ノ春、隨兵ノ列ニ加ハリ、御上京ノ刻在名ヲ名乗リ、多賀谷左衛

門尉ニ任ゼラル、

多賀谷彌五郎重茂 家政ノ長男ナリ、建長三年正月

弓始ノトキ、若侍ノ中ヨリ選出サレ、弓射ノ

役ヲツトム、鎌倉ニ其名ヲアラハス、

同 五郎景茂 重茂ノ嫡男ナリ、建長七年ノ時、相

模守時頼ニ奉仕、射法一流ノ名ヲアラハシ、

弓始ノ役ヲツトムルナリ、

同 太郎家經 景茂ノ長男ナリ、西正恩寺相模守

貞時ニ奉仕ス、

同 正五郎政忠 是ハ家經ノ次男ナリ、相模守時

宗ニ奉仕、

同 彦太郎家茂 正五郎政忠ノ長男ナリ、

同 彌五郎政朝 彦太郎家茂ノ嫡子ナリ、此彌五

郎政朝ハ男子ナクシテ、女子ヲ持、行年五十

七才ニテ卒ス、依レ之一族ノ家臣木崎、金窪、

糟谷、渡邊等相議シテ、結城ノ二男小次郎滿

廣ヲ請シテ、政朝ノ嫡女ニ嫁ス、是氏家ノ母

ナリ、此母ハ多賀谷ノ長久ヲ祈リテ、稻荷牛

頭天王ヲ勸請ス、

同 彦四郎氏家 是結城小次郎滿廣ノ長男ナリ、

(結城ト多賀谷ハ元祖共ニ平氏ナリ)氏家ノ母其志賢聖ニシテ、辨才天女妙音菩薩ヲ信敬シテ、多賀谷ノ繁榮ヲ祈ケル加護ニヨツテ氏家ヲ生産ス、福壽無量ノ悲願ニシテ、氏家生長ノ後、弓馬他家ニコヘテ、多賀谷ノ家七代繁昌スト云々、氏家ハ結城ノ郭中ニ住居ス、世人是ヲ結城殿ト云、今ハ結城ノ城迄作場ニナリ、多賀谷ト云田畑ノ字アリト云云、

結城氏朝並春王安王被害事

永享十一年ノ春、鎌倉ノ公方足利ノ持氏公全不義ニシテ、京都ヲ攻傾ント軍兵ヲ催ス、足利持氏公ハ京都ノ公方足利義教公トハ一族ナリ、依レ之關東管領上杉安房守憲實諫ヲ加ルトイヘドモ、却テ耳ニ逆、良將ノ上杉安房守ヲ誅セント欲シテ、憲實無レ據シテ上野國白井ノ城ヲ逃テ京都ニ上リ、將軍足利源義教公へ訴レ之、持氏公ハ足利尊氏公ヨリ七代目ナリ、故ニ相州持氏追討スベキノ旨御教書ヲ下シ玉フ、憲實是ヲ承リ、關東へ進發ス、鎌倉ニ至テ數々攻戰フ、持氏ヲ擒トナシニケリ、其子義久鎌倉ニテ自害ス、憲實ハ京都

ニ於テ持氏ノ死ヲ宥ムト云トモ、御赦免ナク持氏公切腹ス、鎌倉落城ノ刻、持氏ノ次男春王丸、三男安王丸、潜カニ野州日光山ヘ逃ル、京都使ト小笠原政康公日光山ヘ尋入ル、依レ之日、光山ヲ退キ、結城中務大輔氏政ヲ頼ミ、結城ノ廊中ニ住居ス、去程ニ京都公方義教公ノ御命ニ依、上杉憲實是ヲ承トイヘドモ固辭退ス、其後同苗持房旗ヲ授ケ、結城ニ發向セシムト云々、上杉持朝、持房ニ屬ス、永享十一年七月ヨリ同年十月ニ至リ攻戰フト云ドモ、落スコトヲ不_レ得テ退去ス、其翌年ハ改元、嘉吉元年四月十六日、結城落城シテ一族餘類悉討死ス、春王丸、安王丸ハ長尾因幡守ガ爲ニ擒トナル、京都公方義教ノ旨命ニ依テ是ヲ害ス、此時多賀谷彦四郎氏家ハ結城氏政ノ末子ヲ資、戰場ヲ逃テ常州佐竹ヲ頼テ年月ヲ送ル、成長シテ後結城四郎氏朝ト號ス、又持氏ノ末子永壽王信州ヘ逃テ、大井越前守ヲ頼テ年長スト云々、

多賀谷氏家討ニ管領ニ事

嘉吉元年春、上杉憲實ノ家臣長尾左衛門尉、京都ノ公方科ヲ宥テ和睦セシム、此時公方義教公關東ノ諸士告文ヲ達シ、時ノ變化ヲ窺ヒ、永壽王ヲ元服セシメ、

成氏ト名乗、則左兵衛尉ニ任ゼラレ、其後鎌倉ヘ下ス、是則鎌倉ノ公方ト號ス、同年極暮ニ至リ、上杉憲實ノ長男左京亮憲忠管領職ニ任ゼラレ、關東靜謐ノ爲ニ古河ノ城ニ住居ス、嘉吉二年八月、鎌倉ノ公方左兵衛尉成氏公、多賀谷、結城ノ兩家奉仕ス、結城四郎氏朝ハ下妻ノ城ニ住居ス、漸ク此時ニ本家ヲ名乗テ、成氏公ニ奉仕ス、是迄ハ多賀谷ヲ名乗テ忍居ト云々、鎌倉公方左兵衛尉成氏公ハ足利持氏ノ三男ナレバ、密ニ結城四郎氏朝ヲ召シ謀テ曰、上杉憲實ハ父兄ノ爲敵ナリ、然ルニ今ノ管領ハ憲實ガ子也、豈悶ナカラシヤ、誅伐セズンバアルベカラズト、氏朝ニ密談ス、依レ之公方成氏公ノ仰ヲ請奉テ、多賀谷彦四郎氏家、結城四郎氏朝^{十三(五イ)}歲ノ時ナリ_ハ伴テ、嘉吉二年十二月廿七日ノ夜、鎌倉ノ御門ニシテ、不意ニ管領憲忠ニ行逢、何ノ手モナク討ケリ、憲忠ガ首ヲ三方ニ載テ、公方成氏公ニ獻ジ奉ル刻、首ノ跡三方ニ染ルナリ、此時ノ忠勤ニ依テ則三品ヲ賞ス、其一ツハ關東ノ諸士會合ノ節席ヲ重ル也、是ヲ世話ニ多賀谷疊ト云、其一ハ常州川内郡ヲ給ルナリ、依レ之多賀谷彦四郎氏家ハ今ハ關ノ館ニ住居ス、其後下妻ニ要害ヲ構ヘ、西ノ館ヲ以テ本

九トス、寛正元年元文三丙午迄二
百七十年ニ成

十月漸ク普請ニ成就シ

ケル也、此年ノ極暮ニ至リ、下妻ノ要害ニ氏家移リ玉

フ、翌年ノ春多賀谷普代ノ舊臣、悉ク氏家ノ仁德ヲ慕

ヒ、志ヲ通スル族日ヲ重テ發進セリ、因レ玆多賀谷ノ

武功近國ニ普シ、同二年ノ春、大寶八幡宮ヲ建立シ、

氏家子孫無窮ヲ祈リ奉ル、抑大寶八幡宮ハ往昔人王

四十二代文武天皇ノ御宇、和氣宰相權ノ藤原時忠卿

ト云人、常州河内郡守護ノ爲ニ御下向アリシトキ、豐

前國宇佐八幡宮ヲ勸請シ、人王十六代應神天皇ヲ
字佐八幡宮ト崇メ玉フ長時ニ

是ヲ祈念ス、此時ノ年號大寶元年也、元文三丙午迄
千三十八年此故

ニ大寶八幡宮ト異名スト云、時忠卿ノ御隨身ノ殿原、

今ハ八坊ト異名シ、神ヲ尊敬シ奉ルナリ、多賀谷彦四

郎氏家、行年五十八歳ニテ卒ス、法名祥賀天翁大居

士、

建ニ築下妻館ニ籠城事

高經又尊經、氏家子息ナク弟ノ子息
ニ家督ヲ相續サスルトナリ、同年十月下總守ニ任シ

續家、寛正六年十月、足利左兵衛督成氏公鎌倉ヨリ

古河ノ城ヘ移ル、文正元年古河公方左兵衛督成氏公

ハ、上杉兵部少輔房顯ヲ征伐ノ爲ニ武州ヘ發向ス、多

賀谷高經供奉ス、文明三年上杉民部大輔古河ノ城ヲ

攻落ス、此時成氏十九歳、雅知ノ大將ナリ、依レ之テ敗

北スト云々、此時高經ノ長男家植、古河加勢ノ爲發馬

ノ刻、古河ノ城落テ敗軍ノ士卒ニ土露生ノ原ニテ行

向フ、則成氏公ヲ伴ヒ下妻ニ歸リ、其後上總國千葉

ノ城ヘ送ル、千葉陸奥守康胤ハ足利ノ祖族タリ、是ヲ

頼ンデ十餘年ノ曆數ヲ送り、文明十四年ノ春、古河ノ

城ヘ歸リ玉フ、多賀谷下總守高經行年六十八歳ニシ

テ死ス、文明十四年八月十七日也、法名祥英傑叟大

居士、

家植高經ノ長男
家督ヲ續ク、同年左近大夫ニ任ジ、家督ヲ續ク、文明

十五年ノ春、多賀谷左近大夫家植總州ニ發向アリ、東

南西北ヲ悉ク拂、行田ノ城主、宮内栗村ノ城主、常樂

寺ノ某兩士一筋ニ志ヲ合セテ防戰ノ故ニ、家植利ア

ラズシテ馬ヲカヘス、カ、ル刻家植ノ母南門ニ出テ、

謀計ノ口傳ヲ示ス、家植急ニ唯受シ兵ヲス、メ、其情

氣ヲ撃テ兩村ヲ伐取、兩士是ニ漂泊シテ、家植ニ降許

ヲ請ケル、多賀谷是ヲ憐レミ、死ヲ宥シテ授村シテ、

下妻ニ歸陣ス、下栗、行田ノ兩士家植ノ旗下トシテ、

兩館ヲ渡シ、下妻ニ歸リケリ、袋畑右京、肘谷小次郎、

唐崎修理、袋彈正、伊古立掃部、長萱大炊、古川又五

郎、桐ヶ瀬ノ城主是ラハ皆家植ノ武威ニ怖レテ降許
ヲ請フ、幕下ニ付ス、吉沼ノ城主原外記、子息彌五郎
原村ニ住ス、是ヲ攻落シ殺害シテ、渡部道欽居士渡邊道欽
ハ多賀谷ノヲ居ヘ置ケリ、

多賀谷左近攻ニ落出城ニ事

去程ニ文明十五年ノ秋、家植ハ豊田ノ城主豊田安藝
守治部ヲ攻ントテ、吉沼ノ城主渡部道欽居士ニ多賀
谷家重ヲ添テ、數日攻ルト云トモ、豊田ノ城主要害ニ
楯籠リ、弟赤津七郎、將親臺ノ豊田ニ出城ヲ構ヘ住居
シケルガ、時々横合ヨリ多賀谷ヲ懸散シケレバ、落ル
コトヲ得ズシテ下妻ヘ歸リケリ、同年秋多賀谷左近
大夫家植ハ向石下ノ城主豊田中務尉政治ヲ攻ント欲
シ、下妻ノ郷士百餘人ヲ隨ヘ御出馬アリ、其勢ニ怖レ
ヲ成、降許ヲ請、家植ノ旗下ニ屬ス、豊田中務ハ小田天庵
ノ旗下ニテ、豊田治親
族也、同國岡田郡ノ大方、飯沼ノ兩館ヲ攻落シ、下總猿
島ノ押トシテ、赤松民部大輔ヲ飯沼ノ城ニ居置、同羽
生民部、下妻ノ武威ニ怖レテ幕下ニ附、是ハ横曾根ノ城
主ニテ、小田ノ旗
下ナ、報恩寺平太郎國長、家植ノ旗下ニ屬ス、是ハ今報恩
寺村ニ一向
宗ノ門徒
寺ナリ、

多賀谷左近大夫家植ハ其威近國ニ武功ヲ輝シ、益盛

ンナリ、同國若江島ノ城主ニ居置ケル、若江ノ十郎氏
忠、北條家ノ内通ニ依テ多賀谷ノ舊恩ヲ忘テ、北條家
ヘ志ヲ通ズルノ旨其キコヘ有ケレバ、飯沼ノ城主赤
松民部少輔ニ命ジテ是ヲ攻落シ、若江ノ十郎ヲ生捕、
下妻ニ歸陣ス、家植氏忠ニ對面シラ白サク、汝氏族ノ
因ヲ捨テ怨ヲ結ブノ天罰通ニ處無シトテ、則是ヲ誅
シ玉フ、其後岡田郡江島ノ城ヲ赤松民部ニ授ル也、此
赤松民部少輔先祖ハ、村上天皇ノ苗裔赤松次郎入道
圓心ガ子息律師即祐四代目ノ末孫ナリ、依レ之若ノ向
山ト云所ニ熊野權現ヲ祭り、長時ニ是ヲ祈念ス、飯沼
ノ城ハ赤松民部ガ弟赤松藤五郎正祐ヲ兵部大輔ニ任
ゼラレテ、天神ノ城ニ居置ト云リ、

多賀谷左近大夫家植始テ大寶八幡宮ニ誓テ曰、予不
肖ノ身トシテ兵ヲ起シ、近隣遠境ヲ隨ルコト、全武德
ノ勝タルニ非ズ、偏ニ八幡大神ノ御加護ニ依テナリ
トテ、強敵平均ノ後、帶シ玉ヘル太刀一振神前ニ奉
納ス、是ハ先年多賀谷彦四郎氏家憲思テ討ケル
太刀ナリ、名青雲、銘ハ信房ノ作ナリ、其後小島山ノ
熊野宮并ニ觀音堂ヲ再興ス、寺ヲ建立シ寺領ヲ附ル、
又本丸ノ東ニ祈願所トシテ、稻荷宮ヲ勸請ス、辨才天
ノ社ニ虚空藏牛頭天王ヲ古澤村ニ遷シ、其餘神社佛

閣ヲ修造スト云々、

北條氏直氏輝攻ニ下妻ニ事

家植休日館沼ニ樓船ヲ浮ヘ亂舞ス、謠ニ曰下妻ノ多賀谷殿鼓ヲ打スト世話ニ云傳ヘタリ、嘯船山雪月詠詩歌、サレドモ生命限アリテ、天文十一年七月七日、家植行年六十八歳ニシテ逝ス、法名祥禪大居士、又多寶院殿祥龍山大居士、家重家植ノ又龍山祥潛大居士ト云、家重家植ノ長男、任ニ下總守ニ家督ヲツグ、同年ノ秋ニ至テ父家植ノ菩提ノ爲ニ家重寺ヲ建立シ、潛龍山多法院ト號ス、此節結城小次郎正勝、結城ニ毘沙門天ヲ建立シ、多門寺ト號、是ハ正勝下妻ニ居住シタル刻、守本尊トス、今相原山ニ是アリモ同ジ、天文十四年古河ノ公方晴氏古河ハ東國ノ管領ノ城也、京都ニ上リ、其跡ニ上杉憲政居城ス、是ハ足利義教公ノ一族ナリ、同年ノ春上杉憲政、武州河越ノ城ヲ攻ント欲シテ軍卒ヲ催シ、三月ヨリ五月ニ至リ攻ルトイヘドモ、落ルコトヲ得ズシテ退陣ス、河越ノ城主北條左衛門大夫綱重居住ス、多賀谷彥太郎家重ニ北條氏康報書ヲ賜ハリ、家重ヲ以テ上杉憲政ヲ家亡ト欲ス、然ト云トモ多賀谷是ニ不レ應、又其後北條家ヨリ多賀谷ニ命ジテ結城ノ陣代小田左京大夫ヲ攻亡ト欲スト云ヘドモ、多賀谷家重北條家ニ與セズ、依テ下妻ハ北條ノ惡ヲ受ト云、此節北條氏輝ハ

關宿ノ城ニ住ス、北條氏康ハ佐倉ノ城ニ居住スト云、天文十九年二月中旬ニ至リ、北條氏直關東ノ在城ヲ悉攻落ス、氏直ノ先祖ハ往昔平相國清盛ノ長男小松ノ内大臣重盛ノ嫡子權ノ左少將維盛ヨリ九代ノ末流、伊勢新九郎氏重早雲入道ト云、豆州中島ノ卿ニ住ス、此時ニ至小田原ノ城ヲ構ヘ、武功ヲ輝シ、伊豆、相模兩國ヲ伐取ナリ、北條氏直迄五代相續セリ、北條氏康房カ是ハ氏直ノ弟也、氏輝ハ從弟、氏政ハ氏康之子也、家臣松田尾張守國廣、弟松田彈正國長、北條氏直近國ヲ隨ヘテ自然ニ武威遠境ニ輝ケリ、天文廿年ノ春、總常ノ間ニ發向アリ、在館ヲ攻落シ、神社佛閣ヲ燒拂フ、猛卒民家ニ込入、財産ヲ亂取ケルト云々、是ヲ世ニ南方ノ亂ト云フ、結城ノ陣代菅谷隱岐守、不意ニ上杉憲政ニ代ル、依レ之南軍ノ諸卒一時ニ勝利ヲ失フタリ、此戰ハ古河ノ管領ヨリ密ニ命セラレテ曰、上杉憲政北條氏康ニ與シ隱謀ヲ企ル由其キコハアリ、是ニ依テ晴氏公關東下向之刻、密ニ是ヲ奉討ベキノ旨、先達テ晴氏公ヘ訴ヘ、則結城ノ陣代菅谷隱岐守ニ命ジテ上杉ヲ攻落シケリ、武州河越ノ城ヲ攻落シ、則上杉憲政ヲ害セラル、是ニ依テ憲政ガ子息憲久越後ヘ退キ、長尾ノ家ニ忍ビ居、年月ヲ送ルト云、晴氏公ハ古河城ニ居ス、此節關東ノ諸士頗ル北條氏直ニ與ス、北條氏康房カ關宿ノ城ニ居ス、然レドモ多賀谷喜好ノ土下妻ニ潛伏シテ、吾勇ヲ守リ志ヲ通ズル故、結城朝經ト多賀谷家重ハ北條家ノ惡ヲ受ルトイヘリ、

天文二十年七月十一日、多賀谷下總守行年七十五歳ニテ逝ス、一説ニ天文二十三年甲寅ニ逝ストアリ、法名祥徹通菴大居士、重政初彦太郎、家督ヲツギ、修理大夫ニ任ジ重政ト改ム、朝經ト云、

小田天菴與佐竹義宣不和之事附及合戰事

小田天菴氏治、系圖小田天菴記ニ詳ナリ略レ之、シカシ此多賀谷七萬五千貫ヲ記シハ藤原氏字部宮綱三郎友綱ノ末流ニテ、永樂領ストアリ、息男喜太郎守治、勇氣ノ武家臣信太和泉守浦士ナリ、

片野入道三樂、梶原美濃守、菅谷左衛門尉正光、行方行方ノ城主也、北條安房守是等ハ皆城持ナリ、其外在館ノ諸士數多ナリ略レ之、

文祿元年ノ春、小田ノ領地府中ノ百姓ト佐竹ノ領分

小川ノ百姓ト、山論ヲナシテ討合ニ及ブ、府中ノ百姓一人打殺サル、依レ之時ノ長ヨリ小田ヘ訴ヘケル、天

菴諸士ニ命ジテ小川ノ百姓ヲ拾餘人打殺ケリ、小川ノ百姓又此ヲ佐竹ヘ訴ヘケレバ、太田ヨリ久留間丹

波守騎馬二十騎ニテ向、小田ノ領分府中ノ百姓ヲ五十餘人切害シケリ、其後小田ヨリ北條安房守ヲ使ト

シテ、小川ノ百姓ヲ五十餘切捨テケリ、依レ之兩家悶合戰ニ及ビケリ、子曰君子慎ニ其獨、其本亂而末治者

否矣云々、先言實ナル哉、同年六月中旬ニ佐竹方ノ討手トシテ、鹽井内膳正三百餘ニテ小田ノ城ヘ發向ト

コン聞ヘケリ、天菴方ヨリ菅谷左衛門尉正光、并北條

安房守ニ仰セテ、隨兵二百騎ニテ佐竹勢ヲ防シ爲、府中ニ出テ對陣シ、互ニ及ニ合戰ケリ、菅谷左衛門尉正光謀略ヲ以テ兵ヲ茅原ニ伏シテ、横切ニシテナサシム、佐竹勢是ニ迷動シテ備ヲ切破ラレ、軍將鹽井内膳正退參スルト云々、

常州太田ノ城主佐竹右京大夫義宣ハ清和天皇ノ苗裔

ニテ、新羅三郎義光ノ末孫ニテ、永樂百二十萬貫ヲ領シ玉フ、此度討手ニサシ向ラレシ鹽井内膳正、初度ノ

軍ニ打負退參スル條、甚立腹シ玉ヘバ、久留間丹波守ニ太田十郎氏房ヲ副テ、隨兵一千餘騎ニテ小田ヲ攻

落スベキ旨、其間遠近ニ隠レナシ、

永祿二年是ニ依テ多賀谷方ヨリ加勢トシテ、白井入道全洞天菴記ニハ善通トアリ、平石渡部等ヲ其將トシテ、動勢百五

十騎着陣ス、此譯ハ多賀谷下總守家重ノ女子、佐竹義宣公ヘ嫁ス、然レハ佐竹ハ多賀谷縁者ナル故也トゾ、然

レドモ佐竹義宣公下妻ノ加勢ヲ御延引有テ、御返シアルベキ旨、再三仰附ラル、ト云トモ、白井、渡部等

頻ニ佐竹ノ命ヲ奉レ承、小田ノ簷下山根岸ノ在館ヲ攻落シケリ、

小田ノ天菴氏治ハ老臣行方刑部少輔、并信太和泉守等、其外小田ノ簷下ヲ召寄セ、諸士ノ異見ヲ問玉ヒケ

リ、此度佐竹勢ヲ防爲、天菴ノ命ニ依テ梶原美濃守、片野入道三樂、并北條安房守ニ三百餘騎ヲ隨、片野ノ城ヲ要害ニ取テ、時々兵ノ氣ヲ資ケ、佐竹勢ヲ防戰ベシトゾ評議セラレケリ、行方刑部少輔諸士ニ向テ曰、軍ハ勢ノ多少ニヨルベカラズ、君臣ノ志ヲ一ニスルトセザルトニアリ、人ハ居易知難ト云リトテ、城内ニ兵糧ヲ籠、軍卒ヲ催シケリ、實經山ニ出城ヲ構、喜太郎守治住居ス、是ハ佐竹勢小田ノ城ヲ攻ルトキ時々機切チセン爲ナリ、永祿九年八月廿三日、多賀谷修理大夫重政行年六十五歳ニシテ逝ス、法名天英祥春大居士、

政經重政ノ長男、家督ヲ續下總守ニ任ズ、

永祿十年ノ春、政經白井全洞ヲ使トシテ、北條ノ北ノ方二十五町餘燒拂フ、安房守ヲ攻落ス、其餘大曾根、若森、田中、藏持、海老ケ嶋ノ在館ヲ攻落シケリ、是ハ皆小田ノ簷下也、逃テ小田ノ城ヘ加ハル、穴戸ノ城主平太夫友仲是モ小田ノ旗下一也、落城シテ、下妻ニ屬ス、下總守政經佐竹ノ命ヲ受テ小田ノ簷下ヲ責落ト云ヘドモ、實ハ此政ニ乘取リ下妻ノ旗下一ニ屬サシメ、山根ヲ侵取領シケルトナリ、永祿十一年五月中旬、佐竹ノ軍將久留間丹波守、太田十郎、片野ノ城ニ至テ互ニ對陣シテ雌雄ヲ一時ニ決セント、火花ヲ散シテ戰ヒケリ、小田ノ軍卒要害ニ籠

テ兵ノ氣ヲ資、敵カ、レバ退キ引ハ掛リ、互ニ剛臆ヲ計テ日ヲ暮シケル故、五月中旬ヨリ七月下旬迄是ヲ防戰ト云トモ、資ノ兵糧ナキ故カ、兵次第ニ減シケレバ、力不及、夜中ニ城ニ火ヲ掛、烟亂ノ紛ニ殘兵ヲ隨ヘ、小田ノ城ヘ退參スト云々、去程ニ佐竹勢モ太田ヘ歸陣ス、義宣公ノ命ヲ受テ、重テ小田城ヲ攻落スベシトテ、軍慮ヲ計テ扣ヘケリ、永祿十三年ノ春元龜ト改元、此年ノ春義宣公ノ依レ命、鹽井内膳正并穴戸中務大夫友秋ヲ添テ、元龜元年三月ヨリ九月下旬迄動勢一千餘騎ニテ責ルトイヘドモ、小田ノ城要害夥シクシテ克ク是ヲ防ギ戰フ、佐竹勢モ退屈シテ、後ニハ遠攻ニ日ヲ暮シケルユヘ、極暮ニ至リ太田ヨリ飛脚到來シテ歸陣スト云々、穴戸中務大夫友秋ハ元小田ノ旗下一下ニ屬ス、其後弟友秋ハ佐竹ヘ屬シケルトナリ、

元龜二年ノ春、多賀谷下總守政經、子息重經ニ命ジテ常州小張、板橋、牛久、足高、谷田部、守谷、筒戸、金田、中根、若柴是ハ此頃小田ノ旗下一也ノ城ドモヲ攻落サントテ、下妻ノ郷士三百餘騎ニテ重經發向ス、下妻ノ武威ニ怖レテ降人ニ出ルモアリ、或在城ニ楯籠テ思フ程戰テ切腹スルモアリ、城ヲ逝テ小田ノ城ヘ屬スルモアリ、重

經谷田部ノ城ニ到リ、深泥廣堀ヲ埋メ、草ヲ以埋メ
出シ塀櫓ヲ燒落シ、喚叫テ攻戰フ、此勢ニ怖ヲ成シ
テ、城主尾上主殿ハ牛久ノ城へ退去ス、牛久ノ城主尾
上治部大夫^{主殿}、依^弟之出^兵迎^之、堀内三丸ニ屋形ヲ
建、爰ニ住居ス、家臣尾上因幡并増田宮内、谷田部ノ
城ニ居殘リ、下妻勢ト思フ程戰討死ス此戰ニ下妻方

ニテ宗徒ノ郷士坂入出雲、多賀谷與三左衛門討死ス
ト云、谷田部落城シケレバ、政經ノ弟淡路守經伯ヲ谷
田部ノ城ニ居置、元龜二年ノ春、今里村圓福寺ヲ下妻
ノ大町ニ移シ、國家ノ護持ヲ祈リ、多賀谷繁昌ノ爲ニ
寺ヲ建立スト云々、

相州小田原北條氏直ハ常總ノ間ニ發向シ、在館ヲ悉
ク責落シ、其威漸ク關東ニ盛ニシテ、附隨フ者多カリ
ケル、總州關宿ノ城主築田中務尉氏政^{義氏ノ家臣也、多賀}
^{谷記ニハ中務大輔}
トア謀叛ノ由其間アリ、依テ北條氏輝、結城、山川ヲ語
ラヒ、是ヲ攻ント欲テ兵ヲ起、土露生野ニテ相戰フ、
已ニシテ和睦ス、^{是ハ私ノ宿意ニ依テナリ、氏政使者ヲ以遺恨}
^{ナキノ旨ヲ談ス、氏輝是ニ信ヲトリテ和睦ス}
トナ

佐竹義重^{義宣ノ弟ナリ}、義宣公ノ依^命上三河ニ出陣ス、是ハ
北條勢ヲ横切セン謀計ナリ、佐竹義宣公ハ筑波根ノ

麓櫻川ニ屯ヲ張、兩軍ノ軍慮ヲ計テ控テケリ、然ル處
ニ築田中務尉氏政、北條氏輝ト和平ス、依^レ之佐竹勢
太田へ退陣ナサレケル、カ、リシカバ南軍ノ諸卒總
常ノ間ニ發向シ、兩國ノ神社佛閣ヲ燒拂フ、民家ヲコ
ボチ或ハ兵糧ノ爲ニ百姓ノ財産ヲ奪ヒ、亂入押取言
語ニ盡シ難シト云々、

小田原北條ノ軍卒下妻ノ城ヲ攻ル事

元龜二年五月下旬ニ至、北條陸奥守氏輝、築田中務尉
氏政ニ命シテ下妻ヲ攻ル、勇猛血氣ノ南兵一千餘騎
發向シテ、古澤村ノ出曲輪ヲ攻破リ、喚叫テ攻戰フ、
然ト云トイヘドモ此城ノ要害險阻ニシテ、□ニ大沼
ヲ構ヘ、東ハ泥土ノ廣堀アリテ、禽獸ガモ翔難シ、高
築地ノ上ニハ櫓ヲアゲ、大弩ノ箭先ヲ揃ヘ、敵夥シク
カ、レバ是ヲ拂フ、サシモニ勇ム南軍ノ猛卒退屈シ
テ引退キ、向陣ヲ張テ遠攻ニ責ベキトゾ評議シケリ、
其翌日北條陸奥守氏輝、築田中務尉氏政、諸卒ニ向テ
曰、此城敗北瞬目ノ間ニアリ、萬死一生ノ戰今日ニ限
ルト、勇ヲ宗トシ義ヲ先達テ、一時ニ是ヲ破ラントゾ
下知シケル、依^レ之多賀谷政經謀計ノ口傳ヲ示シ、敵
ヲ欺キヲビキ入ル、又重經ニ百五十騎ヲ副テ、峯町

ニ伏兵ヲ置、元龜二年五月廿五日ノ早旦ニ、北條ノ兩將大軍ヲ率ヒテ攻カ、ル、先陣ハ築田中務尉三百餘騎、矢尻ヲ揃テ責カ、ル、此時下妻方ニハ野武士五十餘人ニ竹弓ヲ持セ、野飼ノ馬ニ打乗、凱聲ヲ合テケル、北條勢是ヲ見侮リテ、一參ニカケチ、ラシケリ、件ノ野武士散々ニ逃迷ヒケレバ、下妻方ハ敵ヲ思フ途ニヲ引入テ、多賀谷重經^{此時十}、峯町ヨリ責大鼓ヲ鳴シ、貝ヲ吹立テ、鶴翼ニ備ヲ代カ、リケレバ、南兵三百餘騎思ヒヨラザル後ヨリ大敵アリト動轉ス、然ル處ニ多賀谷下總守政經、青木、坂入、渡部等其外宗徒ノ勇兵前後左右ニ立テ、五百餘騎眞シクラニ討テ出レバ、北條ノ大軍前後ノ敵ヲ防キ兼テ悉逃迷フ、政經、重經下知シテ曰、逃ルヲ追コト進ニシカジト、案内シラズノ他國武士要所難所ニ追込、小島山ニ於取ル處ノ首五十餘級、馬頭堂ノ東ニ梟レ之、依テ北條勢殘兵ヲ引圓、關宿迄コソ退參ス、政經、重經諸士ニ軍賞ヲ宛行、或ハ疵ヲ蒙ル者ニハ醫療ヲ加ヘ玉フ、誠ニ武德功勇ノ名將トゾキコヘシ、

元龜三年、此年京都西三條大納言實澄卿依ニ勅命^一和平ヲナサシメンガ爲、關東ニ御下向アツテ下妻ニイ

タル、政經、重經尊敬ノ禮ヲ厚ス、大町ノ圓福寺ヲ以テ多賀谷是ヲ公卿ノ旅宿トス、實澄卿甚悅ニ思召テ、和歌ヲ詠ジ寺ノ風致ヲ嘆賞ス、花下忘^{三條大納言詠歌ノ筆跡今}歸因^{大町圓福寺ニコレアリ}美景、樽前勸^一醉是春風、關東諸士令^レ成^二和平、玆ニ因テ多賀谷ト氏政、氏輝ノ軍モ止テ一兩年和平ス、小田天菴ト佐竹ノ懸合モ一兩年止テ和平、元龜モ三年ニシテ天正ト改元アリ、明レバ天正元年ノ春、關宿ノ城築田中務尉氏政軍卒ヲ催シ、飯沼ノ城主赤松兵部太夫ヲ攻亡ス、^{是ハ下妻ノ鎮下ナリ}氏政天神ノ城ヲ燒拂、是ヲ出城ニ拵ヘ、氏政ノ弟氏綱ヲ居置由其キコヘアリ、依レ之多賀谷下總守政經、子息重經ニ命ジテ是ヲ攻ル、多賀谷ノ先手ハ石塚、風間ヲ其將トシテ三百餘騎差向ケル、下妻勢三日三夜荒手ヲ入替入替戰ドモ、天神ノ城無^レ左右落事ヲ不^レ得シテ、延引ニゾ及ケリ、是ハ猿島ノ城主染谷喜藤次ト云者、夜ニ兵糧ヲ船ニテ送リコレヲ資、兵ヲ加ヘケル故ナリトゾ、下妻勢數日ニ及天神ノ城ヲ落シ得ザル條、其キコヘ有ケレバ、政經、重經御父子^一賀出馬アリ、遙ニ天神宮ヲ拜シテ曰、南北ノ敗北ヲ求願ヲタノミ、武運長久ヲ祈誓シ玉ヒケリ、カクテ軍兵ヲ岡田ガ原

ニト、ノヘ、天神ノ城ヲセメ落サントゾ欲シケリ、北條家ハ南兵二百餘騎ヲ城ヲ出シ、花島村ノ出張ニ兵ヲ備テ、多賀勢ノ退屈ヲ窺ヒ横切ニセント智謀ヲ廻ラス、重經渡部周防ヲ遣ハシ、爰ニ近邊ノ郷土ヲ添テ今湯田村ノ在館ヲ燒拂、染谷喜藤次ヲ夜討ニシテ殺害シケレバ、天神ノ城ヲ資クベキ兵糧ナクシテ、終ニ落城トコン見ニケル、去程ニ重經ハ水海道ヲ經テ、乾ニ野陳ヲ張、諸勢ヲ附テ是ヲ政破ラントゾ巧ケリ、亦南方ノ軍卒多賀谷ヲ討ント横合ヨリ鐵炮ヲ打カケ、黒烟ヲ立テ攻タリケル、此勢ニ僻易シテ、南方アハテ、城ヘ歸ラントス、政經重經父子相謀アリ、敵ヲ追ナビカシケレバ、南軍ノ兵深泥ニ蹈込、川水ニ溺レテ死スル者多カリケル、此時湯田村ヘ廻リケル石塚、風間、渡部等、一手ニ成テ東西ヨリ責カ、ル、此時ニ至テ天神ノ城退避ス、諸卒皆小船ニ乗、猿島ノ方ヘ逃タリケル、政經、重經夜中ニ大口ヲ船ニテ渡シ、其翌日下猿島ニ發向ス、多賀谷勢ヲシテ南兵ヲ悉ク討取、天神ノ城ヲ乗取ケリ、政經ハ天神ノ宮ヲ造營シ、寺ヲ建立シテ寺社領ヲ附ス、願望成就ノ悦トシテ、鎧一領、多賀谷重代、太刀雉子尾三乃切ト名クル二振ヲ奉納ス、

其夜重經神前ニ通夜シ靈夢ヲ蒙ル、鏡ニ天神ノ御影ヲ寫シ奉納ス、是重經ノ鏡ナリ、今鏡ノ天神ト云、則天神ノ城ヘハ若江島ノ城主赤松民部ヲ居置、又若江島ノ城ヘハ重經ノ子息多賀谷左近忠經ヲ居置也、天正元年ノ仲秋、大寶八幡宮ノ拜殿ヲ建立シ、本宮ヲ修造ス、

同二年ノ夏、太閤秀吉公關東御進發ノ刻、石田木工頭ヲ御使トシテ、御報書ヲ以テ結城、多賀谷ノ兩家ヲ御賴アル、依レ之多賀谷政經、重經、結城ノ名代トシテ相州早山ニ參著シ、御奉書奉レ畏ノ旨、并關東御進發ノ禮ヲ達シケリ、吳服三鶴ヲ奉レ獻、秀吉公甚悦ニ思召テ、脇差一腰ヲ重經ニ下シ給フ、銘ハ左文字ナリ、其後結城、多賀谷ハ石田三成ニ屬シ、肥州名古屋ノ陣ニテ柴田勝家、并高麗ヲ誅伐ス、此時ノ賞ニ重經ノ子息左近忠經ヲ石田三成ガ烏帽子子トシテ、石田三經ト名乘リ、後ニ名古屋ヘ移ス、其後若江島ノ城ハ家臣古澤佐渡ヲ居置ケリ、依レ之多賀谷ハ家康公ノ思召好ラズト云々、此一條ハ末ニ全洞滅亡ノ後ニアルベシ、其後秀吉公北條ノ族徒ヲ平均シ、同年ノ秋大坂ヘ御歸陣アリ、總常ノ間靜謐ノコトハ、結城、佐竹、多賀谷

ノ三家ニ被レ命ト云々、

天正四年五月八日、多賀谷下總守政經、行年五十八歳

ニシテ逝ス、法名祥聯綿室大居士、

重經政經ノ長男、童名犬二被レ任ニ修理太夫ニ續ニ家督、
郎又彦太郎ト號ス、

豐田ノ元祖ノ沙汰并蛇沼合戰之事

天正四年ノ秋、多賀谷修理大夫重經ハ、豐田治親ヲ攻

ントテ、多賀谷普代ノ舊臣ヲ召レ評議セラレケリ、

抑豐田治親ノ先祖ハ藤氏也、此多賀谷記ニ藤原氏トアルハ、
誤ナラン、我キク豐田ハ桓武天

皇ノ苗裔ニテ、平親王將門カ一族平氏ナリ、高祖赤津四郎將軍將基、或書ニ赤
頭ト書ス八幡

太郎義家公陸奥下向ノ刻、供奉ノ衆ニ加ハリケレ、カ

カル折節阿武隈川満水ニテ、數萬ノ軍兵渡コトヲ不

レ得シテ延引ニ及ケリ、此時御大將義家公、赤津四郎

ニ預ケ置王ヘルツクミ蹲龍ノ御簾或記ニ豐田重
代ノ旗トアリヲ川端ニ建

テ、龍神ニ御祈誓アリ、源氏重代ノ蜘蛛切丸ヲ水中ニ浮

玉ヒケル、此時旗動渡テ大龍ト成テ大川ニ横ハリ、義

家公大龍ノ背ニ乗リ玉ヒ、無難此川ヲ渡シ玉ヒケ

リ、不思議ナル哉、川ノ瀬淺クシテ隨兵數萬騎片時ニ

越タリ、義家公御歸陣ノ後、御簾ヲ將基ニ給ハル也、

數代豐田ニ在城ナリ、義家公ヨリ給ル處ノ御簾ヲ雷

ノ宮ト祭り、長時ニ是ヲ祈念シ、子孫ノ無窮ヲ祈ケ

リ、此事異說様
様ナリ略之、

天正五年ノ春、豐田攻アルベキ由、下妻ノ在士觸狀ニ

依テハセ集ル由其聞ヘアリケレバ、豐田ノ郷士手ノ

者合テ五百餘騎、下妻ヲ逆攻ニセント評議セラレケ

ル、カ、ル折節、豐田ノ郷士中山計之助告テ曰、明日

未明ニ多賀谷勢發向ノ由急ヲ知セケリ、依レ之治親ノ

弟將親ヲ召テ軍ノ異見ヲ問玉フ、將親謀計ヲナシテ

夜中ニ蛇沼ノ西ヘ溝ヲ堀セ、土橋ヲカケテ其上ヲ平

ニシテ落穴ヲ拵ヘ、觀音ノ森ニ伏兵ヲ置テ横矢ヲ射

サセント搆ケリ、多賀谷修理大夫重經ハ、天正五年三

月初旬、豐田攻アルベキ旨、下妻ノ在士手ノ者ニ應テ

發參セリ、○著到次第寫レ之、多賀谷左衛門尉、同名兵

部少輔、同名勘解由、同名藏人、同名治部右衛門、同名

長門、同名甚八、廣瀬掃部助、同彦三郎、平石治部、同

左馬介、久保谷能登、同彦四郎、堀中大炊、同内記、同

軒林、岡田縫殿介、菅谷賀右衛門、同玄蕃、染谷豐前、

同太郎右衛門、同淨軒、一佛宮内、稻田豐前、同岡太

郎、秋庭時兵衛、同長門、相原右京、大畑孫四郎、同大

藏、勝貫新三郎、同助五郎、鶴見若狹、同平六、野寺作

平、同三幸齋、赤羽豐前、同忠八、糟谷治部、同五平次、

大竹藏人、同市藏、礪内内記、同民部、鳩貝縫殿介、同勘解山、手子生大學、同三左衛門、秋葉大内藏、同玄蕃、石塚圖書、同左京、川野五郎右衛門、美濃部内記、同十藏、栗原長五郎、渡部長門、同彌八、同源兵衛、白井對馬、同縫之介、同與五郎、青木民部、同源三郎、堤内記、野口治部大夫、同源八、海老澤軍八、中里但馬、同小平次、中島佐渡、同與右衛門、海老原又次郎、同圖書、大里雅樂、同與惣次、山田新八、小久保將監、同左近、齋藤安三郎、坂入出雲、同監物、同左兵衛、正根寺掃部介、櫻井伊豫、古澤伊豆、同左源太、山口隼人、同助五郎、須藤大學、稻葉彌五郎、同掃部右衛門、戸輪牛之介、塚原藤八、同常右衛門、慶野隼人、伊古立掃部、石島圖書、仙波三十郎、矢島帶刀、同豊前、杉山大炊、同兵藏、星宇右衛門、同又三郎、小島大學、富山隼人、大淵采女、同長次郎、川澄角平、同備中、吉原本工助、同孫右衛門、石濱周防、同半五郎、永築采女、原外記、串田尾張、猪瀬隼人、同彌一郎、宇佐美源内、野手彌平次、同因幡、尾崎民部、内藤帶刀、市川宮内、中山治部右衛門、同大炊、香丸三左衛門、同豊前、宮川與三郎、塚越隼人、同民部、塚田兵庫、同平藏、飯塚源八、樽若

狹、同山城、飯島京右衛門、落合圖書、飯村一藏、多賀谷與四郎、桂木兵庫、望月宮内、其外多賀谷與力難、靈筆紙、凡五百餘騎ト記之ス、天正五年三月五日、多賀谷修理大夫重經ハ、猛卒一千餘騎ヲ隨ヘ、豊田ヘ發向ス、多賀谷與四郎氏經、三百餘騎ニテ先陣ニ駈向フ、此手ノ者ニ屬シケル中ニ、大膽不敵ノ惡僧二人是ハ並木ニテ赤塚淨阿彌ガ、子ニ虎藏熊藏トテ兄弟也、アリ、每度軍ノ砌重經ノ御馬副也、鐵ヲ以長サ八尺廻リ一尺ニ棒ヲ拵ヘ杖ニツキ、重經ノ前後ヲ守護シケリ、下妻勢在館ヲ攻ルトキニ、門築地ヲ破ルコト彼ラ二人ニ越ル者ナシ、世人是ヲ商賣金坊ト異名シケリ、此度豊田押ノ先手ニ加ハ、リケルガ、蛇沼ノ西ニ至リ、勢猛ニ割リ、人數ヲ掛立通リケルガ、件ノ落シ穴ヘハマリ、先手ノ軍卒村立サハグ、其氣ニ乗テ豊田ノ伏兵矢尻ヲ揃横切ル、雨ノ如ニ射立ラレ、サシモニ猛卒下妻勢備ヲ亂シテ、士卒迷動ス、カ、ル折節、將親三百餘騎ニテ觀音ノ森ヨリ討テ出戰ヒケル故ニ、多賀谷與四郎悉敗北シテ下妻ヘ歸陣ス、此戰ニ商賣金坊二人ハ知メシテ、込矢ニ中リ命ヲ果シケリトゾ、多賀谷修理大夫重經ハ時日ヲ不レ移蛇沼ニ馳著ケリ、豊田方ノ軍卒是ニ對シテ剛臆ヲ後代ニ殘シ、勇ヲ宗トシ義ヲ專ラ

トシテ戰ケリ、下妻ノ大軍荒手ヲ入替、雌雄ヲ一時ニ決セント夥シク攻カケタリ、カ、ル處ニ小田ヨリノ加勢トシテ菅谷左衛門、行方刑部、其外宗徒ノ武士三百餘騎ニテ馳著タリ、小貝川ニテ馬ニテ渡シ、横合ヨリ亂入、鐵炮ヲ打掛、石飛矢ヲ飛シ、或ハ込矢ヲ射カケ、飛道具ヲ以テ攻入、火花ヲチラシ戰ヒケリ、サシモノ下妻勢、多賀谷ノ軍制ヲ破、備ヲ散亂シ散々ニ退參シケルコソ本意ナカリケル次第也、或人云ク、多賀谷ハチ海リ竹束持橋等ノ用意モナク、貴落スコトハ一日ナ不期ト輕々シク思ヒケル故、此軍利アラズト評スナリ、其後多寶院ノ南山和尚、豐田龍心寺ノ住僧ト會談シテ、下妻ト豐田ヲ和平ス、多賀谷ト豐田ハトモ、ニ平氏ニテ氏族ナリ、

豐田安藝守治親ハ蛇沼觀音堂ヲ建立シ、寺領ヲ附置、兄弟ノ人々參籠シテ、去多賀谷ノ大軍ヲ豐田ノ小勢ヲ以テ追散シタルコト、全我武德ニアラズ、是偏ニ觀音ノ妙智力ニ依テ、諸々ノ怨悉ク退散スル處ナリト、長時ニ是ヲ祈念スト云々、

白井全洞攻ニ落豐田城、並飯見被レ誅事

其翌年ノ春鯨村ノ在館白井入道善通又全洞トモ、豐田ヲ討ンコトヲ謀テ、態ト作病ヲ起シ、腮ニ灸ヲスヘ、爛藥ヲヌリ惡病ト號シ、雷ノ宮ヘ參籠ス、又豐田ガ家臣飯

見大膳正、是モ雷ノ宮ヘ參籠シケルガ、互ニ見知ケレバ、通夜シテ舊軍ノ物語シケルガ、其後ハ飯見ガ館ヘ申入ケリ、又一人ノ息女ヲ持シガ、全洞是ヲ娶ニ貫、白井小次郎ニ嫁ス、依レ之無ニ底意、互ニ志ヲ通シケリ、白井全洞飯見ヲ謀テ曰、貴方潛カニ治親公ヲ討奉ルベキ旨多賀谷ノ報書ヲ以テ密談ス、報書ニ曰、

豐田之逆徒征伐之事、揚ニ不日義兵一於レ有ニ其功者、治親兄弟之領地一圓可ニ宛行ニ者也、ハ重經ノ謀略ノ報書ナリ、貪欲不道ノ飯見、此謀略ニ組シ、天正六年五月三日ノ夜、主君治親公ヲ密ニ討奉ル、白井全洞ヲ伴ヒ、下妻ニ到テ主君ノ首ヲ獻シ奉ル、業報ノ程コソ淺猿マシケレ、重經ハ心得難キコトニ思召シ、治親ノ首ヲ能々見知ケル者ニ是ヲ改メサセ、其後飯見大膳ニ對面シテ申ケルハ、主君ノ首ヲ以テ賞ヲ望ム者ハ古今ニ稀ナリ、平治ノ昔長田庄司忠致ハ義朝公ヲ奉レ討、六波羅ニ獻レ之、所領ヲ望シト云リ、且ハ若侍ノ見コリニモ可レ成コトナリ、忠致誅伐ノ先例ニ任セ、庭前ニテ則縛首ヲ伐ラセ、大寶ノ堤ヘ獄門ニカケ、往來ノ輩ニサラシ見セケルハ淺マシカリケル有様ナリ、其後豐田ノ城ニハ舍弟七郎將親移テ、舊臣ヲ語ラヒ

楯籠ケル、依レ之白井全洞豐田ノ城ヲ乗取ト、數日ニ及
 攻ルト云ドモ、落コトヲ得ザレバ、時節ヲ窺待居タリ、
 此年ノ夏、鬼怒川満水シテ堤モ危ク見ケル刻、原土手
 ヲ切テ落シ流水ヲセキ掛ケリ、依レ之豐田城水責ニシ
 テ終ニ落サレケリ、治親公ノ内室、女ノ童大坊ノ東光
 寺ヘ逃テ出家ヲ遂、豐田一家ノ菩提ヲ祈ケルト也、赤
 津七郎將親、并豐田ノ舊臣百餘人自害シテ、敵ニ首ヲ
 取セジト館ニ火ヲカケ焼拂ケリ、白井全洞ハ豐田ヲ
 亡シ專一ノ高名也、然ルニ重經如何思召ケルヤラン、
 一字モ其賞ヲ宛行レズト云々、是ハ己ガ慾心ニ迷豐田ヲ討
 ケルコト眞ノ忠義ニ非ズ、
 重經諸士ノ思フ處ヲ量
 フテ其賞ヲ不_レ宛行_一哉去ル寛正五年春、多賀谷彦四郎氏
 家下妻ヲ急ニ建節、觀音寺ヲ沒取シテ其客廳ヲ氏家
 ノ居所トス、其後觀音寺ノ造營ナシ、時ノ住僧ヨリ訴
 レ之、其後重經、長沼ノ惣光寺ヲ沒取シテ、觀音寺ヘ移
 ス、此間ニ依テ東叡山ヘ訴、宮樣ノ御覺心好ラズ、自
 然ニシテ多賀城滅亡ス、天正六年ノ極暮ニ多賀谷重
 經ノ嫡女ヲ以テ佐竹義重ノ四男義治ヲ請テ嫁ス、多
 賀谷彦太郎家宣ト號シ、家督ヲ續クナリ、下妻落城ノ
 後秋田ヘ退キ、佐竹ノ家中トナル、今多賀谷左衛門尉經忠、
 永年中下妻ヘ尋米リ尊靈ヲ拜スト、或
 人語レシ、一本多賀谷左兵衛尉トアリ、是家宣ノ末孫ナリ、實

多賀谷重經驕之事附伯父經伯異見之事

城ノ西北ニ當テ大沼アリ、高築地ヲ築キ其内ニ大堀
 ヲ構、流水ヲセキ入ケリ、東南ハ泥土ノ廣堀ニテ險阻
 滑カナリ、城中ニ館沼ト名ケ、方二十五町ノ池アリ、
 鬼怒川ヨリ溝堀ヲ附テ船ヲ乗込、其入口ニ夥シク水
 門ヲ拵ラヘ、通船ヲ改ム、城郭守護ノ爲、靈神ヲ建立
 ス、良ハ大寶八幡宮ヲ勸請シ奉、乾ニ當愛宕ノ社、坤
 ニハ今泉ノ不動尊、巽ハ樋橋ノ荒神、其外要害守護ノ
 爲東西南北ニ靈神ヲ祭り、高櫓ノ上ニハ鐘ヲ掛テ、隣
 國ノ諸士ニ急ヲ告ル、此時ニ臨ンデ、晝夜ヲ不_レ限、下
 妻ノ幕下ノ輩馬ヲ發スルコト、櫛ノ齒ヲ引ガ如シト
 云ヘリ、

多賀谷修理大夫重經ハ、鶴鷹遊獵ヲ好、自莊園ニ出テ
 民屋ヲ煩ハシメ、或ハ眉目清美ナル女ノ童ヲ猥ニ奪、
 郭中ニカシ附、晝夜嬉樂ニ溺レテ、九夏三伏ノ暑日樓
 船ヲ館沼ニウカベ、酒色ヲ友トシ、光陰ノ暮ンコトヲ
 惜ムトナリ、

重經流石ノ勇將タリト云ドモ、人慾ノ私ニ奪ハレ、其
 身奢自然ト重過シテ、政道日ヲ經テ衰ヘ、遊宴甚盛ナ
 リ、多賀谷淡路守是ハ谷田部ノ城主
 重經ノ伯父ナリ、下妻ノ亡ンコトヲ愁

テ、折ニ諫ヲ加ルトイヘドモ、良樂ハ口ニ苦ク、治國ノ忠言ハ却テ妄將ノ耳ニ逆、重經露斗モ是ヲ聞入給ハズ、不興ニシテ谷田部ノ城ヘ歸リケル、重經ハ勇ヲ宗トシ賢ヲ嫌ヒ、倭ヲ愛シテ萬端ニ附テ我意ヲ振ヒ、酒宴遊興ヲ事トシ、近隣遠境ノ民百姓、遊宴ノ爲妻子ヲ奪レ、親子兄弟恩愛ノ別ヲ愁ヒ、悲者勝テ計ニ暇ナシ、下妻ノ滅亡モ瞬目ノ間ニアリト、世人跟ヲ翻シケリ、子曰不義而富且貴於我如浮雲トカヤ、

此年ノ春、多賀谷ノ諸士渡部、正根寺、廣瀬、風間等、黒子ノ原ニテ遊獵ヲナス、下館ノ城主水野谷ノ家臣増田備後、中村民部ト云者ト、不動坂ニテ及ニ爭論、已ニ兵刃ヲ交ユ、カ、ル折節多寶院ノ南山和尚出合玉ヒ、双方ヲ宥メ和平ヲナサシムト云リ、

文祿元年ノ春、常州牛久ノ城主尾上治部、同國岩崎ノ城主只越尾張守、同國板橋ノ城主月岡玄蕃、同國小張ノ城主次郎入道室久、是ハ皆小田天菴ノ旗トナリ、是等ハ皆多賀谷ノ爲ニ在城ヲ攻落サレ、其恨骨髓ニ徹シ、近邊ノ好ヲ慕ヒ、忍居セラレケルガ、潜ニ評議シテ兵ヲ起シ、俄ニ谷田部ノ城ヲ責ル、谷田部ハ淡路守經伯住居ス、然ル所ニ小田部ヲセムル、田ノ旗トヨリ近隣ノ郷士ヲ整ヘ、二百餘騎ニテ不意ニ谷田部ヲセムル、依レ之經伯下妻ヘ急ヲ告ル、是ハ谷田部ト下妻ノ間ヘ一里宛

置テ鐘ヲ掛テ是ヲ鳴シテ、一時ニ下妻ヘ告ケリ、多賀谷修理大夫重經ハ相圖ノ早鐘ヲ聞コシ召、ハヤ谷田部ニ一亂アリト思惟シテ、下妻ノ諸士ニ急ヲ告ルユヘ、召ニ隨ヒ馳集ル、爰ニ谷田部ノ城主經伯ノ子息ニ多賀谷彦六郎經明、生年廿一歲、血氣ヲ勇士、父ノ難儀ヲ救ハント、只一騎多賀谷ノ秘藏ノ大黒ト云名馬ニ乘、一陣ニ馬ヲ發ス、多賀谷ノ舊臣渡部藤内、廣瀬郷右衛門、日頃淡路守ノ報恩ヲ默止ガタクシテ、多賀谷彦六郎ト一所ニ馬ヲ發シ、谷田部ノ城ニテ討死トキコヘシ、實ニヤ元曆ノ昔佐藤次信ガ人者一言報恩之義ニ依テ百年ノ命ヲ絶スト、八島ノ磯ニ身ヲ果シ、名ヲ後代ニ殘シケル例ヲ爰ニ引浪ノ渡部廣瀬ガ最期ノ有様、後ニ思ヒシラレケル、

下妻寄騎黨士寫レ之

多賀谷隱岐守、同孫十郎、同與四郎、同備後、同南宿坊ノ律師、同休應、同圖書、廣瀬掃部助、同郷右衛門、平石治部、同左馬介、同彦七郎、鳩谷勘解由、同縫殿介、正田宮内、中島清間、同淡路、平塚五郎右衛門、同文七、鶴見若狹、同平右衛門、大塚藏人、築兵部、糟谷五平次、同宮内、甲邊但馬、同内記、限邊若狹、同圖書、片岡紀伊、長澤平右衛門、井澤兵庫、田宮源内、荒卷筑

後、村上甚十郎、同監物、堤内記、菊池隼人、同四郎右衛門、飯田備前、森對馬、山崎丹後、田戸部彦十郎、野村兵庫、唐崎庄右衛門、海老澤外記、同助五郎、山木勘助、國府田四郎次郎、袋畑彈正、荒井丹後、井口小三郎、十倉左京、人見右京、横倉彈正、永田主税、早乙女大學、同主水、高德助兵衛、同民部、江口但馬、小野星彌七、相田圖書、細谷大膳、香丸福右衛門、新關八兵衛、三戸部大學、沼尻伊豆、栗橋藤兵衛、同一内、猪瀬隼人、同太郎右衛門、同大學、館與四郎、瀧川上總、小田部彌三郎、濱名和周防、淺野新次郎、五明若狹、中井川出雲、野口豊前、同但馬、猪野彌太夫、築瀬新五右衛門、石島三右衛門、喜田岡彌市兵衛、白石市兵衛、青木民部、同但馬、秋森助五郎、同大隅、櫻井伊豫、青柳備前、増田大學、玉名和源藏、野尻三河、原田彌八、和田四郎右衛門、本川彦左衛門、山田彈正、草間治部、川田出雲、若代彦六、行田宮内、風間隼人、下栗常閑寺、田崎治部右衛門、市村豊前、内藤右馬介、倉持兵庫、同宗内、小樽彌正、羽生式部、伊奈甚内、同豊前、田村大膳、赤塚淨阿彌、川澄囚獄、宇佐美五平次、桐ヶ瀬彈正、同因德寺、吉原木工助、仁平主税、鈴木平右衛門、厚木加

茂右衛門、野手若狹、塚原藤八、間田九平次、正根寺源八、同掃部介、古澤太郎右衛門、同佐渡、坂入刑部、同彌八、渡部常助、同外記、杉山大炊、同全久、稻葉掃部助、飯島京右衛門、赤羽日向、礪民部、望月宮内、平井手平三郎、久保谷能登、山口專助、佐藤久八、同越後、中山主税、森隼人、中島藏之助、大久保兵庫、染谷新兵衛、堀川内記、同軒林、齋藤太郎右衛門、近藤平八、石伊賀、塙大學、肘谷五郎、袋彈正、保科伊豆、篠崎大膳、泉右京、星野民部、永須采女、原外記、此外多賀谷ノ旗下、筆紙ニ盡シガタシ、

多賀谷彦六經明討死并矢田部落城經伯最期之事

文祿元年三月十一日ノ早旦ニ下妻勢ハ谷田部ノ城ヘ發向トキコヘケル、カ、ル處ニ多賀谷ノ彦六經明ハ父淡路守ノ難儀ヲ救ン爲、早馬ニテハセツキ、既ニ谷田部ノ城ニ至リ、渡部、廣瀬ノ兩勇ヲ前後ニ立テ、大敵ヲ掛破リ城内ヘ入ント欲シ、火花ヲ散シ戰ヒケル、父ノ經伯槽ヨリ是ヲ見附、流石ノ武士ナレドモ、親子恩愛ノ執着ニ溺シ、吾子ノ危キヲ救ントテ、備ノ亂ル、ヲ不レ願軍門ヲ開キ、隨兵二十餘騎ヲ双ニ立テ討ケレバ、サシモニイサム寄手ノ勢アタリニ近附者モナ

シ、然リトイヘドモ敵ノ取圍テ放ツ矢ニ、彥六馬ノ太腹ヲ射サセ、不_レ叶シテ歩立ニ成テ戰ケルガ、數ケ處ノ疵ヲ蒙リケル、廣瀬郷右衛門ハ、敵方ノ大將只越尾張守ガ弟只越主膳ト差違テ死シタリケル、渡部藤内ハ矢責ニ逢テ切腹ス、兼テ一言報恩ノ義ニ因テ百年ノ命ヲ絶スト覺悟シタリシ最期ノ體、勇々シカリケル有様ナリ、多賀谷淡路守四十二餘ル老武者、私曰、三十六十ヲ老ト云、サレバ四十ノ老武者ニ非ジ七十九カ、大軍ヲ追ナビカシ悉ク氣ヲモミテ勢力盡ハテ、遁レガタクヤ思ヒケン、一簇シゲル竹園ニカケ入テ曰、夫侍ハ死スベキ處ヲ退テ死セザレバ必死ニマサル耻アリト、親子諸トモ腹カキ切テ死タリシハ本意ナカリケル次第ナリ、仁者ハ必有_レ勇、勇者必不_レ有_レ仁ト文宣王モ傳タリ、經伯最期ニ角ナン、一本ニ云討モノモ討ル、モノモ土器ノ碎ケテ後ハモトノ土クレトアリ、

討ツ事モ討タル、事モ土器ノ

碎テ見レバ元ノ土哉。

死生ハ有無中道ニ住シ、四體白刃ニ破テ空ニ歸スル、經伯親子腹切ケレバ敵軍城ヲ乗取ケリ、カ、リケル處へ、下妻ノ大軍龍ノ雲ヲ起スガ如ク馳著、此有様ヲ見ルヨリモ大ニ驚キ、重經諸士ニ向テ

曰、淡路守ハ不覺ノ大將ナリ、恩愛ノ輕ニ儉約ノ重キヲ忘、相圖ヲ違へ、此城ヲ敵ニ乗取ル、コト先非ヲ悔ルニ其益ナシト愁サセ給ヒケリ、青木、坂入、渡部、風間、石塚等ノ家臣、セメテ我々半日早此城ニ馳ツキナバ、淡路守御親子ノ命ニ替ラン者ト悲歎ノ涙ヲ流シケリ、去程ニ下妻勢、面ノ井ト三ツ堀兩村ノ平原ニ野陣ヲ張り、時々兵ノ氣ヲ資ケ互ニ對陣シテ戰ヒケル、下妻ノ大軍荒手ヲ入替、晝夜十日ニ及攻戰ト云ドモ、雌雄ヲ未決セズ、重經諸士ニ命シテ曰、僅ノ館一ツ下妻ノ大軍數日ニ及攻落シ得ザルコソ遺恨ナリトテ、則勢ヲ三軍ニ分テ陣ヲ堅ケル、先陣百五十騎、多賀谷信濃守政頼、重經ノ弟ナリ、糟谷平井手等ナリ、後陣ハ百九十騎、多賀谷彥四郎泰經、重經ノ弟ナリ、後安房守ト云、十五歳、幼稚ノ大將ナリ、此手ニハ白井、石濱、青木、吉原、和田、長澤、正根寺、風間等ヲ添テ差向ラル、重經ハ諸將ノ命ヲ司テ、下妻ノ在士二百餘騎ニテ、南北ノ氣ヲ窺、本陣ニコソ支タリ、谷田部ノ城ニハ俄ニ敵軍入込テ籠ケレバ、兵糧ノ資モナケレバ次第次第ニ兵減シ、日ヲ經テ軍卒情ケレバ、文祿元年壬辰四月五日、念ナク此城夜中ニ落テ退散ス、依_レ之下妻勢谷田部ノ城ヲ乗取、

則平石伊賀、同名隼人、渡部越前、同名周防、平井手、
一本ニハ平山口等ヲ指置守レ之、此度ノ掛合ニ討取所ノ
出トアリ首三百餘級、馬ニ荷テ下妻ニ歸陣シ、重經諸士ニ軍賞
 ヲ宛行、北大寶ニ頭塚ヲ築テ、敵ノ首ヲゾ埋メケル、

重經攻ニ落手久足高城ニ事

同年夏六月下旬ニ至、多賀谷重經、足高、小張ノ兩館
 ヲ攻落ントテ、谷田部ノ城主ニ居置タル平出、川田、
 渡部等ニ命テ不意ニ足高ヘ押寄ケル、下妻勢三ノ丸
 ニ亂入、喚叫ンデ攻戰、城モ甚危カリケレバ、足高ノ
 城主尾上中務其黨ニ急ヲ告ル、依レ之牛久ノ城主尾上
 治部大夫、若柴ノ城主若柴集人、小金ノ城主豐島三河
 守、深川ノ城主高木治部少輔、足高ノ城ヲ救ハント、方
 方ヨリ加勢ノ兵馳寄ル、下妻勢是ニ掛立ラレテ勝利
 ヲ得ズ、一兩日延引ニ及ビケリ、カ、リシカバ重經諸
 士ニ命シテ謀計ヲナシテ、潛カニ城ノ西南ニ泥土ノ
 險道ヲ經テ、青巖滑ナル切岸ニ立テ劔ヲ以テ巖壁ヲ
 鑿テ鎗ヲ杖ニツキテ、青苔滑ナル巖ニ登リ、本城ヘ亂
 入ラント仕タリケル、城中ヨリ尾上中務大木ヲ落シ
 カケ、或ハ鐵炮ヲ打カケ防キ戰ヒケレバ、多賀谷勢
 暫ク時刻ヲ移シ、此戰ニ利アラズシテ引退ク、其翌旦

ニ曲輪ヲ出テ切破リ、下妻勢責入ケレバ、城内悉騷動
 シ、備ヲ亂村立テ迷動ス、此費ニ乘取火矢ヲ射カケ、
 燒草ヲ以テ櫓ヲ燒落シケレバ、與類ノ輩敗北シテ終
 ニ落城シタリケル、下妻勢勝凱ヲ作テ足高ノ城ヲ乘
 取、平石伊賀、青木民部ヲ城主ニ居ヲキ、夫ヨリ重經
 ハ下妻ヘニソ歸ラレケリ、

文祿二年ノ春、又多賀谷修理大夫重經大軍ヲ起シ、下
 常州ヲ攻ト欲シテ發向アル、板橋ノ城主月岡玄蕃、多
 賀谷ノ武威ニ怖レ降人ニ出ケレバ、則重經、月岡玄蕃
 ニ命シテ豐田糟内ノ城主ニ居ヲキケル、其後青木、風
 間、平石、渡部等ニ命シテ岩崎ノ城ヲ攻ント議セラレ
 ケル、諸士一同ニ尤トテ勢ニカ、ツテ攻ヨスル、岩崎
 ノ城主只越民部、下妻ノ大軍ヲ引受テ晝夜ヲ三日ニ
 及ビ防戰ト云トモ、勢力ツキハテ退散ス、此戰ニ只越
 民部ガ舍弟只越又次郎、城ニ居殘リ多賀谷勢ト思程
 戰ヒ討死シケレバ、風間治部大輔、平名宮内モ討死ス
 トキコヘケリ、多賀谷勢二陣ニ備ヘ、一手ハ兵士谷田
 部ノ西ヲ經テ巽ニ向、針崎ニ屯ヲ張、一手ハ牛久沼ノ
 泥水ヲ渡シテ、牛久ノ城ヲ責トコンハシタリケル、サ
 レドモ要害險岨ニシテ落スコトヲ得ズ、下妻勢向陣

ヲ張り、遠責ニ日ヲ暮シケリ、深川、小金、若柴、其餘ノ小城ハ安危此城ノ運ニアリト、近郡ノ加勢身命ヲ惜マズ防戦ヒケレバ、輒ク落ベキトハ見ヘザリケリ、

去程ニ多賀谷重經ハ情思慮ヲ廻シ、此城ヲ夜討ニシテ攻落サント、手ノ者甘騎餘隨ヘ、青巖滑ナル苔ノ細道ヲ足ヲ爪立攀登、一段高キ所ニ至リ暫息ヲツキテ城内ヲ見下セバ、夜廻リノ者拍子木ヲ打テ通リ、所々ニ篝火ヲ燒テ用心嚴シキ有様ナリ、重經案ニ相違シテ暫シ躊ラフ處ニ、夜廻是ヲ見附、陣處ニ是ヲ告ケレバ、寸破夜軍ヨ餘スナト、敵堀ヲ隔テ横切ル雨ノ如射ケル矢ニ、重經甚ダ危カリケル、此時ニ臨ンデ心中ニ大寶八幡宮ヲ祈念シ、太刀ヲ胸ニ押當、金剛堅固ノ身ト成テ、雨ヤ雹ト降クル矢ヲ受ルトイヘドモ、少シモ疵ヲ蒙ラズ、神力ノ程コソ有難ケレ、此時宗徒ノ勇士ト頼ケル、相原山、常閑寺、并ニ青木三郎兵衛主シラヌ矢ニ中テ死ダリケル、カ、ル處ヘ身方ノ大勢大手ヨリ夥ク攻カケタリ、城中是ニ動轉シ、前後ノ敵ヲ防キ兼、馳集リシ加勢ノ族徒散々ニ逸失ケリ、牛久ノ城主尾上治部、切腹ノ體ニ見セテ牛久ノ沼ヲ船ニテ渡シ、

常府ヲサシテ退散ス、重經牛久ノ城ヲ乘取、舍弟多賀谷信濃守ヲ城主ニコソハ居置ケリ、重經ハ牛久ヨリ歸陣アリ、願望成就ノ祝トシテ大寶八幡宮ヘ參籠シ、鳥井ヲ建テ奉幣ヲ捧ク、先年多賀谷彦四郎氏家奉納ノ太刀ヲ申ヲロシ、重經帶シケルガ、此度牛久攻ノ願望ニ依テ八幡宮ヘ奉納ス、此太刀ハ信房ノ作ナリ、牛久ノ合戦ニウケ留シ矢尻ノ跡十餘ケ所有レ之、今ニ傳ヘテ神前ニ納シ青雲ト名付ルハ此名劔ノコトナリシ、

多賀勢攻ニ府中ニ並藥師堂燒亡之事

爰ニ常州府中ノ城主行方修理ハ牛久ノ尾上治部トハ親族ノコトナレバ、二ノ丸ニ尾形ヲ建、尾上治部ヲ居ヲキ、ヨキニ勞ハリ玉ヒケル、多賀谷修理大夫重經此由ヲキクヨリモ、常州ノ城未ダ不如意ナルニ臨ンデ是ヲ責落サシト、文祿年中三月初旬ニ下妻ノ大軍常府ヲサシテ發向アリ、高濱ノ臺ニ向陣ヲ張、數日攻戰フト云トモ、小田方ノ族徒馳集リ、是ヲヨク防キケレバ、多賀谷勢荒手ヲ入替入替晝夜責ルトイヘドモ、雌雄ハイマダ決セザリケル、然ル折節南風強ク吹テ枯木モ倒ル、計也、白井全洞手ノ者五十餘騎ヲ隨ヘ南

へ廻リ、夜中ニ火矢ヲ射カケ、或ハ在家ニ火ヲ放チケレバ、風ノマニマニ燃上リ、猛火盛ニシテ餘烟天ヲゾ掠メケル、城中是ニ迷動シケレバ、其費ニ乘取リ全洞城ニ責入ケル、城中ノ途ヲ失テ逃去ケリ、軍將行方修理、尾上治部ヲ伴ヒ藥師堂ニ逃入ケリ、白井全洞追駈テ本堂へ責入ラントセシ處ニ、半鐵ノ黒衣ニ忍辱ノ袈裟ヲカケ、一丈餘ノ棒ヲツキ、敵軍ニ向テ曰我藥師ノ行者ヲ空スルコトナカレト、大勢ニ破テ入、堅横十文字ニ打テ廻レバ、全洞ノ猛卒此法師一人ニ打立ラレ、攻入ベキ様非シテ、暫山門ニ控ヘケリ、此法師ノ行キ方ヲミレバ藥師ノ本堂ノ内へ入ニケリ、下妻勢夥シクカ、レバ是ヲ追散シ、二三度四五度ニ及、猛卒ヲ退ケリ、如何様此堂ノ内ニ敵カクレ居タルニ極レリ、只燒拂ハシニハシカズト各々署リケレバ、全洞ノ手ノ者ニ青柳越後ト云者、鎗ノ柄ニ松明ヲ結附、藥師堂ニ火ヲ放チケレバ、忽チ本堂廻廊出門迄一時ノ烟ト燒拂フ、猛惡ノ程コソ恐シケレ、多賀谷ノ軍卒烟亂ノ紛ニ本堂ニ亂入、繪幃佛像或寶物御震筆ノ刺額迄己ガ様々亂取ケルコソ怖シケレ、行方修理、尾上治部ハ行方シラズ落失ケリ、多賀谷勢ハ烟亂ノ刻、尾上行

方ハ燒死シタリト思惟シテ、下妻へ歸リケリ、扱モ白井入道常府ノ城ヲ夜討シテ、責落タルコト專一ノ高名也ト申セドモ、藥師ノ本堂ヲ燒シコト、行末如何有ベキト、世ノ人眉ヲ顰メケリ、抑此藥師ト申ハ、人王六十二代ノ帝村上天皇ノ御宇ニ、日本一州國分寺ヲ建立シ、藥師ノ像ヲ安置ス、斯程ニ尊キ靈場ヲ一片ノ烟トナシタル惡逆ハ、往昔人皇八十代高倉院ノ治天ニ、平相國清盛公三位中將重衡ニ命ジテ南都ヲ攻ル刻、時ノ軍將燒松ニ火ヲ附ヨト云ケルヲ聞誤リ、興福寺ノ門前ニ火ヲ掛ケル、魔風吹來テ大佛殿迄燒亡ス、是ハ攝津國ノ住人次郎太夫友仲ト云者ノ仕業ニテ、敢テ重衡ノ心ヨリ起玉ハズトイヘドモ、末ノ露元ノ零トキク時ハ、木ノ實ハ元へ返ルノ道理、終ニ重衡卿南都ニテ法師ノ爲ニ命ヲ絶ストカヤ、カ、ル列ヲ聞トキハ多賀谷ノ繁榮モ久ニ非ラジト、世人是ヲ嘲哂ス、

或人曰、甲府ノ城ニ行方民部ト云者、常府ノ親族タリ、常府落城ノ後、信濃へ退去シ、松本ノ郷ニ住居ス、老年ノ後、小田滅亡トキク、紀州高野山ニ登リ、小田一家ノ菩提ヲ吊フト云リ、

行方刑部最期之事

小田ノ老臣行方刑部少輔久明ハ天菴記ニハ鹿島郡行方ノ城主ニテ、其志賢才ニシテ言ニ笑ヲ含、諸士ヲ點頭シ、下常州ヲ隨ヘ、此十餘年ノ間、佐竹ノ大軍ヲ退キ、天菴殿小田ノ城ヲ保ケルコトモ、行方刑部ガ計略ニ因處也ト、世人はヲ評シキ、サレドモ生者必滅ノ理、會別離苦ノ掟通レガタクシテ、今年ノ春ヨリ病ノ床ニ伏シテ、身命危クキコヘケレバ、小田殿忠臣ノ別ヲ愁ヒ玉ヒテ、其頃長崎ヨリ名醫渡リテ常陸ニ居住ス、是ヲ小田ノ城ヘ召サレ、行方醫療ノ爲トテ天菴殿書翰ヲ認メ、小田久米次郎治親ヲ以テ行方ノ城ヘゾ道サレケル、其文ニ云、

貴方不快之事可レ及ニ大事ニ旨有ニ其聞、幸從ニ長崎ニ名醫渡國國子徘徊依レ之爲ニ療養ニ遣者也令レ得ニ本復ニ也

ト仰遣サレタリケル、小田久米次郎天菴記ニハ行方ノ城ニ至リ、件ノ趣ヲ宣タリケル、行方刑部重キ枕ヲ漸資ケ起サレ、對面シテ曰、醫療ノ事畏而令ニ承知ニ候、何ゾ我天心ノ計ヲ以定業ノ病既ニ來レリ、唐醫又扁鵲ニ勝タリトモ、人倫ノ死苦ヲ救ヒ療センヤ、願クハ君

弘ク聖賢ノ道ニ不レ違、一國ノ民ニ德ヲ施シ、諸士ノ志ヲ不レ奪、小田ノ家ヲ治ルコトヲ得セシメ玉ヘ、愚臣老衰シテ死期甚急ナリトテ、禮ヲ厚シテ小田ノ使者ヲ歸シケリ、文祿四年八月四日、行方刑部少輔久明行年八十五才ニテ終ニ空シクナリ玉ヘバ、葬禮ノ儀式ヲ調ヘテ野外一片ノ畑トゾナシニケリ、法名久明丁傳眞菴居士、小田記ニハ土浦ノ城ニテ病死トアリ、但小田方ハコトハ小田記ヲ用ヒテ是ナラン、小田殿忠臣ノ別ヲ御悲歎アツテ、則於ニ長久寺ニ御追善アリケルトカヤ、傳ギク唐ノ太宗ハ魏徵ト云臣下歿テ悲ノ餘リ曰、昔殷武丁夢中得ニ良弼、今朕醒後失ニ賢臣ト云、碑ノ文ヲ書テ廟ニ立シハ尤也、周武王ノ語ニ曰、舜ニ忠臣五人有テ天下治ル、吾ニ亂臣十人有テ國亂ル、ト愁玉ヘケルトカヤ、實ナル哉老臣行方刑部死去ノ後幾程モナク、三歳ヲ經ズシテ小田殿滅亡シケルコソ本意ナケレ、

長谷川鞆負鎗之仕合之事

文祿二年ノ春ノ頃、長谷川鞆負ト云者駿州今川義元下妻ニ仕シ者ト云來テ兵衛ヲ教ルコトアリ、重經長谷川ヲ召寄セラレ、管鎗ノ利方ヲ問、鞆負答テ曰、鎗ハ短ガ利有ト申

ケレバ、重經二間柄ノ鎗ヲ好マレケルユヘ、彼者ノ申所奇恠ニ思召レ、則白井全洞ニ仰附ラレ、多賀谷ノ手ノ者十人ニ二間柄ノ鎗ヲ持セ、長谷川ガ手ノ者十人ニハ一間柄ノ管鎗ニテ、十人ヅ、双方ヘ別テ互ニ手詰ヲナサシム、然ルニ長谷川ガ門弟、多賀谷ノ猛士ニ突立ラレテ跡ヲモ見ズシテ逃去ケリ、依レ之長谷川負ニ成テ下妻ヲ退キケリ、其後守谷ノ城主相馬小次郎胤信ニ仕テ、何トゾ下妻ヘ怨ヲ結バント計リケルコソ尤ナリ、小人有レ勇無レ義則爲レ盜、君子有レ勇無レ義則爲レ亂ト云リ、重經血氣ノ勇士ニテ國ヲ治ルヲ不レ得、總常ノ兩國一日モ不レ靜トコソ申シキ、

下妻勢攻_二箇戸城_一事

文祿三年四月中旬、多賀谷重經ハ總州箇戸ノ城ヲ攻ント、白井入道全洞ヲ大將トシテ、百五拾騎差向タリ、箇戸ノ城主相馬小次郎胤長、守谷ノ城主相馬小三郎胤信ハ下妻勢水海道ヲ經テ責來ル由其聞ヘ有ケレバ、箇戸ノ城ニ早鐘ヲ鳴シ急ヲ告ル、去程ニ守谷ヨリ加勢トシテ、横田民部ヲ大將トシテ百五十騎、思モヨラヌ横合ヨリ急ニ攻入ケレバ、下妻勢迷動シテ、板樋迄散々ニ逃タリケリ、其後白井全洞ハ板樋ノ木崎ニ野

陣ヲ張、度々用意ヲシテ時日ヲ窺居タリケル、其翌日守谷ノ家臣横田民部、雨ノ夜イト闇カリケルヲ幸ニ夜討ニセント究竟ノ射手ヲ揃ヘ、十餘人長谷川藤藏ヲ副テ黄昏時分板樋ノ南ヨリ竊ニ廻リ、一簇シゲル小松原ニカクレテ相圖ヲ待テ控ヘタリ、横田民部五十騎ヲ引率シテ鐘大鼓ヲ鳴シ攻カケタリ、此時南ヘ廻リケル長谷川ノ黨、寸破ヤ爰ゾト云マ、ニ、陣小屋ノ上ヨリ込矢ヲ横切雨ノ如ク射カケラレ、下妻勢途ヲ失テ下妻ヘコソ引退、白井全洞モ面目ヲ失ヒ、病氣ト號シ館ニ引籠、出仕ヲ止テ居タリケリ、是ハ全洞モ板樋ノ夜討ニ込矢ヲ射カケラレ、十四ヶ所疵ヲ蒙リケルトナリ、是ハ去春長谷川報負ニ耻チアタヘテ追出シケル返報ナリトゾ、

菅谷左衛門尉事

麒麟ハ角ニ肉有テ猛心ヲ現サズト、軍書ニ傳ヘテ炳然トカヤ、爰ニ佐竹義宣公ハ暫兵及ヲ止メテ籌ヲ帷幄ノ中ニ廻シ、小田ヲ亡スベキ方便ヲコソハナサレケル、則小田家臣菅谷左衛門尉ニ報書ヲ認贈ケル、其文ニ曰、不日揚_二義兵_一小田滅亡於_レ在_レ之者、天菴之領地一圓可_レ宛行_二者也、菅谷左衛門尉殿、義宣判トゾ書レケル、菅谷サシモノ智勇ノ侍ナレドモ、天理ノ公終ニ人欲ノ私ニヒカレ、小田ノ運命傾キテ落城遠カラザ

ルコトヲ勘へ、時ノ謀略ニ心迷テ小田殿ヲ亡サント志ヲ通ジケルコソウタテケレ、扱モ此菅谷ハ小田天菴氏治ノ祖父小田左京大夫正治、菅谷ノ原ハ鷹野ニ出玉ヒケル刻、廻國ノ鑒笈ヲ荷テ通ケル折節、硯ノ入コトアリケレバ、正治此硯ヲ借玉ヒケルニ、硯ニ水ナシ、聖野邊ノ桔梗ノ花ヲ揉テ硯ニ滴テ墨ヲ磨テ奉ル、小田殿其才覺ラ感ジ玉ヒ、小田へ伴、則菅谷ノ原ニテ對面シケレバトテ、正治ノ正ノ字ヲ下サレ、菅谷喜八郎正俊ト號シ、手ノ郷三百貫給ケル、今菅谷左衛門迄三代相傳ナリ、然ルニ正光小田ノ舊恩ヲ捨テ、佐竹ニ與シ、天菴公ヲ亡サント謀ケルコソ本意ナケレ、
小田記ト少違アリ、

信田菅谷月見會并重成最期之事

文祿三年八月十五日、菅谷左衛門正光ハ土浦ノ城主、信太殿ヲ手野郷ニ招キ請シ、月見ノ御遊ヲ催シケル、信太殿正光ガ隱謀ヲ夢ニモシロシ召レズ來臨アリ、清明ノ月ニ心ヲユダネ玉ヒ、實ニ白樂天ガ三五夜中新月色、二千里外故人心ト詠ゼシモサルコトゾカシ、其頃小田ノ申子トテ氣色艶キ女ノ童アリ、菅谷是ヲ召シテ清ヲニ肥脂ツキタルヲ片肌ヌイテ舞ヲ舞、唄

カナデケル有様ハ、平相國清盛ノ愛シ玉ヘル妓王、妓女、佛御前ト申トモ是ニハ如何デマサルベキ、誠ニ傾城ハ城ヲ傾クト後ニゾ思シラレケル、信太殿モ是ニ心迷テ、長夜遊宴醉狂ニゾ及ケル、座久而不歸近危トカヤ、然ト云トイヘドモ大剛ノ兵ナレバ、隱勢モ討コトヲ不_レ得、菅谷モ怖畏シテ數刻ヲ移シケルガ、運ノ極ノ哀サハ、信太殿隱所ヘ行玉ヒケルヲ、跡ヨリ菅谷付ネラヒ、隱所ヨリ何心ナク出玉フ處ヲ飛掛テ、何ナク討取ケル、信太殿最期ニ眼ヲ怒ラシ、菅谷ヲニラミ付玉フトカヤ、恐ロシカリケル次第ナリ、夫ヨリ菅谷左衛門ハ土浦ノ城ニ入替ル、或人曰、信太和泉守重成ノ子ガ、相馬小次郎氏正ト名乗テ、後家康公ヘ息、此時十五歳ニナリケル降人ニ出ケル今相馬彈正ノ祖也ト云、カクテ小田ノ天菴氏治ハ忠臣ヲ失ヒ、佞臣敵ニ心ヲ通シ、其年ノ秋ヨリ佐竹勢小田ヲ攻ルト云トモ落シ不_レ得ンテ、十二月下旬ニ至リ、佐竹勢モ退陣ス、其翌年文祿四年正月下旬、菅谷左衛門正光ガ計ラヒニテ、小田殿土浦ノ城ニ移玉ヒケルコソ、小田ノ晚連傾キシ前表ナリ、大姦者似レ忠、大偽者似レ信、菅谷左衛門表ハ小田ノ忠臣、裏ハ佐竹ニ心ヲ通、忠臣ノ信太ヲ謀叛人ト稱シ殺害シ、片野三樂、梶原政景、眞壁北條ヲ退ケシ、カ、ル例ヲ傳

キクニ、昔北條時政義時等、既ニ天下ヲ平吞スヘキ心有テ、己サマタゲトナルベキ和田山等ヲ誅シ、實朝ト謀テ頼家ヲ害シ、頼家ノ子善哉ヲ僧トナシ、公曉ト號シ、鶴ガ岡ニ居シメ、人ヲシテ公曉ヲス、メテ實朝ヲ討シメ、其敵ナリトテ公曉ヲモ誅セシカバ、頼朝ノ血脈忽斷絶シテ、天下自ラ北條ノ掌握トナレリ、今ノ菅谷モ小田殿滅亡ノ後ニ小田領地ヲ平吞セント内心ニ含シモノ也、此年二月初旬ヨリ佐竹二千餘騎ニテ發向シ、城ヲ七重ニ取圍ミ、短兵急ニ取ヒシガント、弩ノ筒前ヲ揃ヘテ天地モ崩計ニ是ヲ放ツ、佐竹義宣公御出馬アツテ、兵ヲ進メ時ノ軍將久留間丹波守太田十郎東西ヨリ火ヲ掛ル、南北ニ別レ夥攻タリケル、爰ニ小田ノ老臣行方刑部カ子息主馬五郎久重、小田ハ、海上主馬五郎武經、桓武帝ノ後嵐平忠經カ末孫トアリ、行方刑部カ弟、菊丸ト討死ストアリ、土浦ノ城ノ大手ヲ堅メケルガ、此軍急ニシテ落城ト見ヘケレバ、自切テ出、佐竹方ノ軍奉行久留間備前守ト引組差違テ二人トモニ死ダリケル、生年廿一歳、比類ナカリシ勳ト譽ヌ者コソナカリケル、終ニ文祿四年二月廿五日ノ夜、小田一家悉滅亡セリ、菅谷左衛門尉正光ハ、小田家亡シ後ハ佐竹義宣ノ手ニ屬シ、土浦ノ城ニ住ト云ド

モ、義宣公其賞ヲ宛行玉ハズ、案スルニ是ハ菅谷ガ智謀軍術タクマシケレバ、却テ獅子身中ノ虫トナリテ佐竹ニ害ヲナスベシト恐レ玉ヒシナルベシ、昔漢高祖大忠アリシ韓信ヲ亡シ、我朝ノ右大將頼朝ハ梶原ガ讒ヲ用テ義經ニ忠賞ヲ宛行ハズ、却テ義經ヲ討亡シ玉ヘハ其例ナキニ非ズ、依レ之菅谷ハ佐竹ヲ背キテ家康公ヘ降人ニ出、手子生村ニテ五千石ヲ拜領ス、然トイヘドモ信太ガ怨靈止コトヲ得ズ、菅谷家ニ祟リケルハ、手子村ニ八幡宮ト崇奉リ、靈社ト名ヅケ毎年八月十五日祭禮懈怠ナカリケル、或記ニ曰、小田ノ舊臣今公ニ奉仕ス、此好ナシタヒ大坂ニ上リ、秀吉公ヘ降人ニ出、其後氏治老年ノ後、越後ヘ退キ病死ス、嫡男喜太郎守治ハ大坂落城ノ節討死ト云々、○又小田天菴記ニハ天菴殿天正二年、土浦ノ城ニテ生害、守治ハ生死シレズトアリ、土浦落城ノ年代相違ナリ、シカシ土浦落城ノ節、天菴殿切腹ト偽リ守治ト一所ニ落失タルニヤ、昔モ小松ノ三位維盛ハ那智ノ海ヘ入水ト偽リ、清經ノ中將ハ柳ガ浦ヘ身ヲ投シト偽リ、小舟ニ乗テ四國ノ方ヘ逃テ、後其子孫義兵ヲアゲシト云フ、拾遺物語等ニ見ヘタリ、是ラノ謀計ニテモアリケルニヤ、

白井全洞滅亡之沙汰事

文祿四年三月三日、桃花ノ節會ナレバトテ、鯨ノ城主白井全洞ガ館ニハ近邊ノ郷士ヲ集、酒宴ヲコソハ催シケリ、カ、ル處ヘ多賀谷ヨリノ御使トシテ、野口平内高德助五郎兩使來テ全洞ニ對面シテ申ス様、貴方

板樋退陣ノ後出仕ヲ止メ、長々在城ノ儀上ニモ奇怪
ニ思召レ候、今日ヲ期セズ早速參着スベキノ旨、仰ニ
依テ兩使マカリ越候ト相演ケリ、全洞畏入答テ曰、某
不快之事不_レ在、奉_レ詐_レ上全持病再發ニ依テ療養ノ爲
在城仕候、愚臣病衰シテ久君ノ尊顏ヲ拜シ奉ラザル
ノ恐_レ、宜ク御兩使ヲ頼入候旨返答申テ、則使者ヲ歸
サレケルガ、全洞愚案ヲ廻ラシ、如何様ニモ此者其下
妻ヘ歸リ我息才ナル躰ヲ眞直ニ申上タランニハ、白
井ノ家滅亡近キニ有、追馳テ討取ント、在士ノ手ノ者
五十餘騎ヲ引連、跡ヲ慕フテ急ガレケル、然ルニ下妻
ノ兩使鯨村ヘ參ラレケル刻、是ハ一大事ノ御使ナリ、
一言ノ否ニヨツテ互ニ諍論ニモ及ベキ哉ト、兼テ隱
勢ヲ連ラレケルガ、大明神ノ西ニテ白井全洞ト懸合、
火花ヲ散テ戰ヒケリ、爰ニ下妻ノ中ニ泉利助野口平
右衛門トテ射法一流ノ達者アリ、白井全洞ヲ目掛テ
散々ニ射カケタリ、鯨ノ在士是ニ迷惑シテ、大明神ノ
森迄引退キケレバ、下妻勢モ黃昏ニ及、下妻ヘコソ歸
ラレケル、依_レ之重經ハ彌心不_レ好、終ニ其身ヲ責ル媒
トコソ成ニケリ、災禍元無_レ種以_ニ惡事爲_レ種ト、其罪
汝ガ罪ニシテ汝ヲ責ルト佛語ニモ傳タリ、或人曰、忠

孝ハ小魚ヲ煮ガ如シ、煮過タランニハ却テ其味ヲ失
トヤ、鯨ノ城主白井入道全洞ハ、多賀谷數代ノ忠臣ナ
リ、然ニ去天正ノ末年ヨリ重經御覺不_レ好心、是ハ先年
白井全洞、豐田ノ城主安藝守治親ヲ討シトキ、豐田ノ
領地一圓ニモ給フベキ處、重經其賞ヲ宛不_レ行、白井
之ヲ憤ニ含テ在城スト訴シ者有_レ之故ナリケリ、然ル
ニ此度重經ヨリノ兩使ヲ討ント計シコト、白井逆心
ニ極リシト重經大ニ立腹シ、吉沼ノ城主渡邊道欽居
士ニ命ジテ、急ニ白井ヲ攻ツベシト有ケレバ、道欽畏
テ則子息渡邊外記ニ百五騎ヲ副テ鯨ノ城ヘゾ向ハレ
ケル、慶長元年丙申五月三日ノ夜、鯨ノ城主全洞ハ夢
ニモ角トハ知ラズシテ、聊カ悅事アリテ我館ニ郷士
ヲ集メ亂舞シテコソ居タリケル、カ、ル處ヘ下妻ノ
討手渡邊外記ハ不意ニ押寄、凱ヲドツト作リケル、
館内ニハ思モ寄ヌコトナレバ、馬物具ノ用意モナク、
鯨ノ郷士防ニ勢力非ズシテ、子ハ親ヲ捨テ下人ハ主
ヲ忘レツ、皆散々ニ夜中ニ迷失タリケレバ、全洞今
ハ是迄ト我館ニ火ヲ附、腹切躰ニ見セテ妻子ヲ見捨、
行方シレズニ落失ケリ、不思議ナル哉、天正六年五月
三日ノ夜、白井全洞豐田ノ家臣飯見大膳正ヲカタラ

ヒ、豐田安藝守治親ヲ奉_レ討ケルガ、十七年目ノ五月三日ノ夜ニ當テ、白井滅亡シタリケル、業報ノ程コン恐シケレ、實ニヤキ、傳、凡計ノ末代ハ鯨ノ塔ノ森ニ建シ卒都婆ノ苦ムシテ文字モ定カニ見ヘネドモ、法名傍元白井善道居士ト石碑ノ隱ニ消殘ル、移替レル有様ニテ、シルシノ塚ハカケテ畑ニウタレ、千歳ヲ待タテ薪ニグダカレ、ソノカタダニナクナリユキヌルコソ哀ナレ、

多賀谷滅亡ノ發端

上杉彈正喜平次景勝、長尾謙信ノ甥子ナリ、則謙信ノ家督ヲ續ギ與會津ヘ出、諸將ノ氣ヲ窺、越後ノ城代ヨリ天糟近江ヲ居置キ、太閤秀吉公夢御ノ後、出仕ヲ止メテ在城ス、依_レ之家康公關東ノ諸士ヘ觸狀ヲ廻シ、景勝誅伐ノ爲奥州ヘ各發向ス、慶長五年七月十八日武城ヲ御發足アリ、家康公御進發、同日野州小山ニ着陣ス、

結城三河守秀康公家康公長男、同七月十八日夜白川ニ着陣、

秀忠卿御二男、後御家督ヲツケ、_レ德院様是ナリ、同七月十八日宇津宮ニ着陣、

其餘關東ノ諸大名不_レ殘奥州發向トキコヘケリ、此景勝誅伐ニ奥州御進發ハ日傳アリ、或曰、

此時佐竹多賀谷ハ如何思ヒケル哉、景勝誅伐ニ奥州御進發ハ日傳アリ、或曰、

病氣ト號シテ供奉ノ衆ニ不_レ加ト云リ、慶長五年七月十九日ヨリ同廿五日迄、家康公小山ニ御逗留、是天

運ニ叶玉フ故ナリ、一日モ御逗留ナク奥州ヘ御進發於_レ有_レ之ハ、必危キコトバモ可_レ有_レ之、或人曰、佐竹、多賀谷ノ兩家隱謀ヲ企テ作病ヲ起シ、此度奥州押ノ人數ニ不_レ加、因_レ茲諸士ノ評議ヲ以テ家康公ヘ訴ヘケル、慶長五年七月廿五日夜、從ニ駿府ニ飛脚到來シテ、江州澤山ノ城主石田治郎少輔三成起ニ逆心ニ兵ヲ催スノ旨注進ス、依_レ之家康公景勝征伐之事ハ諸士ニ命ジテ、則御嫡男結城三河守秀康公、御三男宇都宮藤五郎秀行公、其餘那須ノ七騎黨ヲ副テ、各々奥州ヘ發向ス、

同廿五日夜鷄鳴ニ家康公ハ御立アリテ、武城ヘ御歸陣有_レ之、其後江州ヘ御進發、濃州關ヶ原ニテ對陣アリ、則石田治郎少輔三成并安國寺福太輔ヲ生捕御歸陣アリケレバ、御威光益天下ニ輝キケリ、依_レ之上杉景勝請_レ降許テ家康公ノ御命ニ隨奉ル、佐竹右京大夫義宣公永樂百二十萬貫ノ處、御公儀ヘ召上ラレ、二十八萬石ニテ秋田ヘ國替ナリ、多賀谷重經モ家康公ヲ奉_レ背滅亡ノ端トハナレリ、

下妻落城之沙汰并重經背ニ御當家ニ滅亡之事慶長六年二月中旬、多賀谷御誅伐ノ爲榊原侍從并伊

井三幸齋下妻へ發向アリ、城外僅ニ隔テ下栗村ノ臺ニ向陣ヲ張、潜ニ謀計ヲ以テ重經ヲタバカリ、田下村へ呼出シ、神原侍從重經ニ對シテ曰、我賤クモ公方ノ御使トシテ下妻ニ下着ス、貴方兩使ニ向怨ヲ結ハ是天下ノ敵ナリ、暫當城ヲ退去シ重テ實否ヲ開クベシ、今此節ニ望テ讒者ノロヲ閉ルニ無_レ據ト頻ニ進ミケレバ、重經是ニ信ヲ取テ、田下村ヨリ直ニ江州彦根ヲ志シ退散ス、是ハ多賀谷左近三經、江州澤山石田治部少輔三成ガ養子トナリテ住シケルヲ頼ミテ行シモノナルベシ、子曰、一家仁一國興_レ仁、一人貪戾一國作_レ亂トカヤ、多賀谷重經ハ元祖彦四郎氏家ヨリ七代相傳ノ家督ヲツギ、下妻ニ住居シ、其威近國ニ武功ヲ輝シ、總常ノ間ニ於テ永樂十二萬貫ヲ領セリ、然リト云ドモ治亂盛衰ノ理、樂盡テ悲來ル、貨悖テ入者亦悖テ出ト云、重經武勇ノ達人ト云ドモ、家康公奉_レ背_三御命、慶長六年二月十七日ニ下妻沒落シタリケル、軍卒城ヲ燒拂ヒケレバ、烟ニムセブ老若男女喚叫其聲ハ、蒸熱地獄ノ罪人モ是ニハ如何デマサルベキ、或ハ幼子ヲ懷ニ入テ館沼ニ身ヲ投、或ハ重經ノ御内室女郎達ニ至ル迄紅顏ノ粧モ早ク白骨トナツテ朽果ルコソ

哀_レナリ、其外譜代相傳ノ舊臣、或ハ沼ニ飛込或ハ兵火ニ燒死、自滅スル輩三百餘人ニ及ケリ、此外主ヲ資ケ親ヲ伴ヒ、兄弟誘ヒテ近邊ノ好ヲ慕フテ逃ル者モ多カリケル、深谷園離ノ春ノ花、一朝ノ嵐ニサソワレ、四方ノ霞ニ散ユキテ、昔ノ夢ニ不_レ異トキク、人哀ヲ催シ、見人涙ニ袖ヲ濡シケル、跡ハ草露ノ路野邊ト成テ、名耳バカリゾ殘リケル、

此多賀谷記ハ、寶永四年ノ春、秋田ノ城内ヨリ多賀谷左兵衛尉經忠ト云人、八十有餘ニテ下妻へ尋來ケル折節書集シ也、是ハ先年佐竹義重ノ四男重經ノ養子トナリ、多賀谷彦太郎家宣ト名乘リシ人ノ御末ナリ、依_レ之下妻於ニ圓福寺ニ御追善ヲ營ミ、多賀谷七代ノ尊靈ヲ拜シケルトナリ、或人曰、下妻滅亡ノ刻、多賀谷淡路守經伯ノ娘幼少ニテアリケルヲ、家臣青木、坂入、渡部等養_レ之、黒子千明寺ニ住シ尼トナリ、妙法院ト號シ、多賀谷一家ノ菩提ヲ弔ヒ、老年ニ至リ九十七歳ニテ寶永六年己丑四月死ス、

右多賀谷記ハ多賀谷左衛門尉家政ヨリ修理大夫重
經迄十四代ノ事ヲ記ストイヘドモ委シカラズ、正
シク多賀谷彦四郎氏家下妻ニ始テ要害ヲカマヘ住
居ス、是ヨリ重經迄七代ノ沙汰ハ分明ニ書記ス哉、
下妻ノ城ハ人皇百三代 後花園院ノ御宇永享十
一年己ノ未ニ始リ、慶長六年辛丑ニ終ル、曆數百
年ノ間ナリ、慶長六年ヨリ延享四年迄百四十八
年也、延享四年ヨリ文化八年迄六十五年ナリ、自ニ永享己未一 至ニ文化辛
未、凡三百七十四年也、慶長辛丑ヨリ文化辛未迄二百十一年也、
下妻城主多賀谷修理大夫重經

元和四年戊午十一月九日逝、號ニ安養院、

法名覺心祥圓大居士、紀州高野山ニ石塔アリ、
延享十四年丁卯仲秋吉旦 小林覺右衛門尉尙房

行年四十八歳而寫之

多賀谷七代記大尾

世田谷私記

穗積隆彥撰

○武藏國住原郡菅荊庄世田谷郷は、菅荊和名類石見往古吉良家の領地なり、抑吉良と稱するは、足利家の嫡流足利左馬頭義氏朝臣の嫡子從五位下左馬頭義繼朝臣、吉良左馬四郎三河國吉良の庄に住給ひ、入唐歸朝の後、陸奥國に下り給ふ、一曰北畠殿と供にく義繼朝臣居住の地藤谷の庄といふとぞ、此家頭書ニ曰ク系圖ノ事諸説區々なり數本可ニ合考、但是とす、こゝ吉良東條乃祖也、一云東城、義繼朝臣入道し給ひ、法名等覺號寂光寺、其子從四位下上總介經氏朝臣吉良號實相寺、其子從四位下上總介經家朝臣又太郎號實珍院、其子正四位下左京大夫貞家朝臣號常樂院、陸奥國一方ノ管領となる、其子正五位下中務大輔治氏朝臣、一云備家、是又陸奥國一方の管領として有武功、其子治部大輔治家朝臣從陸奥國移居上野國飽間地、飽間治部大亦從三持氏卿、傍書曰く、足利泰氏五世尊氏公吉良義繼六輔トモに基、賜三武藏國世田谷郷、初てこゝに住給ひ、夫より世々稱世田谷殿治家朝臣卒て、貞和五年八月廿一日號ニ興

善寺、元文二巳年改延命院此代世田谷勝光院を開基すと云、亦曰、勝光院は、貞和年中開基共、さ其子兵部大輔賴治朝臣、亦左兵衛佐也、實は、西條太郎號金龍院、其子左京大夫賴氏朝臣太郎、實は、西條太郎也、右兵衛佐俊氏三男、也號靈應寺、後號興善寺其子右京大夫賴守朝臣號三柄澤寺、明徳二未年〇頭書ニ曰、梅澤寺は本島山村にあり、今は稻毛其子右京大夫政忠朝臣號洞春院、一曰疑べし、文龜二也其子左兵衛佐成高朝臣號養雲院、元和十六日領ニ武藏國世田谷、相摸國蒔田郷、今武藏國久良岐郡古は相摸國の内とみ代々蒔田居住とも、〇蒔田勝國寺は文和年中開基政忠を號其子正勝國寺殿と云々、一書に政忠以來世田谷に移り玉ふと云三位左兵衛佐賴康卿、督也と號勝光院、永祿四其子從四位下左兵衛佐氏朝臣號實相院、實今川庶流堀越治部川系圖に、貞世子治部少輔貞相、其子治部少輔範時、其子陸奥守貞延、其嫡瀨名陸奥守一秀の舍弟堀越治部大輔貞基、其嫡堀越六郎氏延、其舍弟氏朝也此系享和二戌年七月廿五日、於今川丹後寺殿隆

常寫、

世田谷を領し給ふ、其比何ほどの貫高にや、今に至てわかりがたし、大概のみ傳へたるは拾八萬石といへど非なり、ゑかるに相應の比より伊勢新九郎長氏に號宗伊豆國にはびこり、相摸國小田原の城主大森實賴を攻落し居城として、其子左京大夫氏綱朝臣、其子左

京大夫氏康朝臣、其子左京大夫氏政朝臣、其子左京大夫氏直朝臣、世々小田原に住で、氏康朝臣より關東に威をふるひ、七國を領し、氏政朝臣上野を隨へければ、八箇國の大小名此下知に迄たがはざるはなし、就中氏綱朝臣は、管領兩上杉を攻、足利左馬頭晴氏朝臣を下總の古河にうつし、智に縁結し、北條の世前代に復さんことをはかる、世に晴氏朝臣を古河の公方と稱しける、亦世田谷頼康卿傍書に曰く、一説に氏康のむことも云、末に詳也、をも智とし、彌關東に猛威を振ひけるが、天正十八年七月十八日、遂に豊臣秀吉公の爲に被亡、五代合て九十五年にして斷滅す、此時關東の諸城或は攻落され、或は聞落して、悉く落城す、八州皆北條に屬する故也、此時世田谷城主氏朝朝臣上總國生實にのがれ給ひけり、今下千葉郡生實の地首也、往古は上總國の内に見へたり、諸書に上總國生實とあり、生實は天文の比、足利左馬頭政氏朝臣の次男義明朝臣晴氏の御父居住の地にて、世に小弓の御所と云ひたる所也、其故にや氏朝朝臣此所に一足のがれ給ふか、東照宮駿遠三甲信の國々を上知し給ひて、北條の領國其儘秀吉公より賜り給ふ、同年八月朔日、江戸の城へ入御、是を關東と云、此時氏朝朝臣初て東照宮に謁す、同月九日右御領國御配分の節、世田谷左兵衛佐氏朝朝臣本前荏原郡世田谷を賜ふと、河肥今ハ川越トカケリの記と云ものにみへ

たり、則武藏國御領地御配分給りたる姓名こゝの序に記置也、

松平	内膳正家廣	松山城	壹萬石
松平	主殿助家忠	忍城	壹萬石
松平	玄蕃允清家	八幡山	壹萬石
松平	源七郎康忠	深谷	壹萬石
松平	丹波守康長	東方	壹萬石
松平	周防守康重	騎西	貳萬石
高力	河内守清長	岩付城	壹萬石
大久保治部大輔忠隣		羽生	壹萬石
小笠原	掃部助信嶺	本庄城	壹萬石
阿部	伊豫守正勝	市原	五千石
牧野	讃岐守正成	石戸	五千石
戸田	左門一西	鯨井	五千石
内藤四郎左衛門正成		柏戸	五千石
三宅	宗左衛門康貞	見加尻	五千石
永井	右京大夫直勝		五千石
三宅	彌兵衛正貞	内野	五千石
神谷	彌五郎忠家	小雀	五千石
柴田	七九郎重政	菖蒲	五千石

營 沼 新八郎定盈

阿保城

壹萬石

設 樂 甚三郎貞光

禮 羽

五千石

渡 邊 半 藏 弘

松 嶺

三千石

源 内 喜太郎利定

稻毛庄峯村

千 石

高 木 善次郎正次

賜本知

在原郡世田谷

千 石

世田谷 左兵衛氏朝

河越内

五千石

酒 井 與四郎忠利

河越内

五千石

酒 井 右兵衛忠世

河越内

五千石

同二十年二月朔日、吉良家上總國長柄郡寺崎村に於て千百貳拾五石玉ふ、此時世田谷郷は上知し給ふとみへたり、氏朝朝臣同所に止り隱居し給ひ、學翁齋と號し給ふ、其居住の地、今弦卷村實相院の地是なり、氏朝朝臣の息蒔田左兵衛佐賴久主初源六郎寺崎村へ歸り給ふ、其後元和元年頭書ニ曰ク、井伊氏世田谷の地拜領は寛永十四年也元和は讀りなり、井伊掃部頭直孝朝臣は、世田谷の郷を給ふ、是大坂戰功に依てなり、吉良家上總國寺崎村を賜り、天正二十年二月朔日時田源六に蒔田左兵衛佐賴久主初源六郎寺崎村を拜謁し玉ふ、世田谷没落之節也、慶長六年近江國日野郡寺尻村七百石加増台命曰、吉良は三州東城西城の外不可稱號、宜改蒔田也、依之號蒔田、亦曰世田谷、没落以前賴久主は、關ヶ原御陣御久は蒔田村に居、仍在名を名乗と云賴久主は、關ヶ原御陣御供七百石加増、伏見全阿彌曲輪之勤番、上總住居年始獨禮、其息蒔田左兵衛尉義祇主幼少家督故、七百石上

知、此代大坂兩度の御陣幼少に付、陣代家人を差出、本多佐渡守正信朝臣の組を勤、陣代は中義祇主息蒔田左兵衛佐義成主、其子吉良左京大夫義俊朝臣復ニ吉良氏、高家任ニ侍從、被叙從五位下、三百石加増、千四百貳拾五石、其息吉良左兵衛義所主表高家、其息當左京大夫義豐朝臣初義隆從四位下侍從、其息式部義房主世世かくのごとし、

一云、大坂御陣之時、陣代家人班目兵左衛門經行と云者也と、北條分限帳云、永祿二年に世田谷弦卷郷八貫六百五拾文、桑原右京進分と見へたり、然ば永祿の比は吉良家世田谷郷一領し給ふとも云がたしいぶかし、

○賴康卿の簾中八崎姫の方とて、北條氏綱朝臣の娘なり、頭書ニ曰ク、東亂記にも氏康の息女とあり、又三増合戰トタホを氏綱の義女にして、賴康卿と俱に蒔田村に住給ふ、世來ると云、是なるべし、賴康卿と俱に蒔田村に住給ふ、世に蒔田殿と云は是なり、號三商源院、其比氏朝朝臣は世田谷に住給ふ、亦氏朝朝臣の代、賴久主は蒔田村に住給ふとみへたり、今彼村に古城跡と云傳へたる所あり、當時村高三百貳拾六石餘也、外に蒔田領とて數箇村立たる事とみへたり、今尋るに、近郷にても此者

は不_レ知なり、

今蒔田村を尋るに、頼康卿代蒔部豊後並木伊賀兩人は、蒔田村居住被_ニ申付、外蒔部鈴木この面々は世田谷御所へ供奉のよし傳へありけるとなり、

世田谷は前にあるすごとく、何ほどの貫高なる所か不_レ知、古城跡あり、今野山なり、村高四百拾六石餘也、弦卷村高百三拾三石餘なり、亦世田谷領と唱へたる所、今郷數五拾七箇村あり、所謂世田谷、弦卷上下、祖師、各船橋、經堂、在家、赤堤、烏山、給田、小足立、和泉、上野、猪方、岩戸、駒井、喜多見、横根、宇奈根、大藏、鎌田、岡平、瀬田、上野毛、下野毛、尾山、用賀、野良田、入間、大町、廻_リ澤上下、北澤、粕屋、深澤、池尻、野澤、石川、上沼部、奥澤、等々力、袈、松原、代田、太子堂、三宿、池澤、野澤上下、馬引澤、若林、北野、野川、野崎、押立上下、飛田、給深、大寺等今高合壹萬三千六百三拾四石餘あり、頭書ニ曰ク、今世田谷領と云村々の組合分にて、本世田谷城主舊領と云事にはあらず、武州に是而已ならず、みな領名にて村の組合を分るなり是は古の城附村々のみか分りがたし、外に蒔田郷も領し給ふ、之かれば何程の領地成哉、其家にも之らず、傍書ニ曰ク、等々力村大平利左衛門方に、吉良氏の文書數通あり、其文書によりてみれば、凡て世田谷近郷は、みな吉良氏の進退のやうに思はる、也、寫し別にあり、

世田谷勝光院は、太郎治部大輔治家朝臣の草創にして、往古は淨土宗にて、龍鳳寺とぞ申ける、然るに治家朝臣七代頼康卿、相摸國小松村梅林寺の林遠和尚歸依し給ふ故、氏朝朝臣の代彼僧を招き住職とす、此時號_ニ興善山勝光院、治家の法號興善寺月山清光大居士と云、頼康卿は永祿四十年十二月五日薨じ給ひて、法號は勝光院脫山淨森大居士と云、吉良古領よりの引付にして、此寺御朱印三拾六石也、今は號_ニ延命山、亦頼康卿のはかは、此寺にては、代々の墓所の中央にあると云へどさだかならず、蒔田村の勝國寺にありて、此勝國寺は臨濟宗にて、八王子安下村心源寺の末寺なり、頭書ニ曰ク、吉良氏世田谷居住ノ中系圖法號年號は諸説まちぐにて疑多し、等々力村大平氏先祖の大平右衛門大夫所自書の系圖一枚あり、永祿の年號あり、是を證とすべし、別に寫す、

蒔田村勝國寺住持の曰、開基の節は靈應寺傍書ニ曰ク、治家の法號なり、或はと云ふ、中興開基は吉良左京大夫治家の孫頼氏と、と云ふ、中興開基は吉良左京大夫政忠朝臣にして、勝國寺と改給ふと云、政忠朝臣の手道具の内今残りあるは、生花筒並茶碗壹つ有_レ之よし、法號は勝國寺照岳道旭、文龜二壬戌年六月十七日とあり、成高朝臣の法號春雲院松岳道攝、(延命院鐵翁惠心、延元元年十一月七日、吉

良先祖と而已有之、興禪寺月山清光、貞和五丑八月十一日、吉良左京大夫と而已有之、傍書ニ曰ク、或書ニ成高

ノ兄ニ禪定寺と云あり、傍書ニ曰、疑へし、治氏朝臣歟治家朝臣か不分とな
り、倭書ニ曰、疑ニ非なり、頭書ニ曰ク、或書
ニ曰、治氏海澤寺殿治家靈應寺殿とあり、又頼高朝臣は

梅澤寺月舟應雲寺而有之、年月不知、隆彥其家

へ尋るに、延命院は經家歟傍書ニ「ク」興善寺は貞

家歟と云り、作書ニ曰ク、其の父曰ク、或書ニ勝持院とあり、隆彥按するに「靈應寺毀」と云へるは、眞氏、明臣なり、頭書ニ曰ク、靈應寺

應寺廟と云たるは、刺只尊曰た、殿は觀應二年とあり、然れば賴氏興善寺殿傍書曰、説は治家朝臣なり、延

命院殿は賴治朝臣か、賴高朝臣は梅澤寺殿、傍曰、是書

し、〔はよ政忠朝臣は勝國寺殿、はよ傍書曰、是〕成高朝臣は

養雲院殿也、其内延命院殿のこと可考也、勝國寺

は天正十酉年焼失したる故不_レ分由、吉良殿系圖

一卷有之。刺康輿所持。勝國寺へ秘藏置一たる
由申傳へ有之。延享年中全額和尚古系圖僧改め

置れたると也、

勝光院の什物にくわしやの爪あり、是はある亡者

送りける時に、俄に天かきくもり、黒雲おほひ亡者

とらんとせしに、此寺の住持智徳ありて、珠數にて

化文

九申年十一月五日を見るに、爪四つ也、珠數水晶なり、燒たるけさもあり、氏朝の守一寸三分、觀音の像也、緣佛と云あり、今參詣の輩に何方にありといふことをいはす、マ玄かに此寺に今にあることなり、他の人に拜禮をゆるさずと也、銅佛と見えて、丈ケ貳尺ばかりもあるよし、則愛緣佛の緣記にくはし、

文化九申十二月五日、隆彦此縁佛初て拜禮す、銅佛にあらず、木佛箔置也、

隆彥按するに、此愛縁佛の縁紀は、中興の僞作也。

元祿年中吉良殿高家席に成給ふ、
時分より代々表高家なり、元録中
 吉良殿高家席に成給ふ、
 録以前蒔田氏と云

ニ至りて高家席に入にてはなし、之かるに此終走に言
良の御所の御子孫は今高家の御家にして榮へ給

ふ也と言へり、先ツ此縁起の内に崎姫の方は北

條氏康の御娘也、永祿元年蒔田邊を三千石遣は

ひめんにつけられ、姫君に相添て、世田谷御所へ

入せ給ふと有、其初めは天文六年春の比、樂師如來皮治に告ありて、曰、鶯の足に杖を付放したる

に、此鷺賴康卿の鷹是を取ると云ことより、縁

起のことあり、天文六より永祿元迄は、其間廿年

とあることにて、時代の當らぬなり、殊に永祿の

比は蒔田村邊郡關東は貫高にて、何貫文の地と

云也、氏康の娘とあるは間違也、氏綱の娘なり、是にて偽作したること分るべし、よつてこゝにくわしくはあるさず、頭書曰、今おく澤村九品佛の脇切ニ生ルサキ草と云艸あり、是ニ云傳ル説あり、共疑ふべし、

崎姫の方世田谷御所へ入興の節、小田原の家臣宗哲といふ者、崎姫の方婚姻の時は、かやうくと詞までをしへしかな書の一巻、今に吉良殿にあり、政忠朝臣所持の一節切一管あり、笛也、尺八のやう、扱愛縁薬師の縁起の内に、世田谷の家臣の名田中三河守、關加賀、中地山城守、岡防上野介、大平出羽守、大場對馬守、小田原より姫の供奉の人には森豊後守、苅部長門守、並木又次郎、小串彌太郎、松原藤六、其外あまためしぐしけると也、一書云、程ヶ谷驛帷子、新町、程谷三郷合て一宿と云、永祿の比、帷子宿には北條氏康の妹聲吉良左兵衛佐義門と云人居住す、大橋山城守康忠、北見關加賀守滿頼、輕部豊前守泰則等、吉良の簷下なりと、頭書ニ曰、東亂記の文ニ似たり、北見は喜多見氏也、關加賀守は別人也、此所文脫漏ある歟余が見し東亂記に、おなじ、但東亂記ニハ義門の名のりはなし、斯見へたり、一北條系圖の内にも、吉良左兵衛佐義門と見へ

たり、頼康卿元は義門と云たることなるべし、亦前に記し置蒔田村の土俗の傳へは、苅部豊後並木伊賀は蒔田に止り、外苅部鈴木は世田谷御所へ供奉すとあり、可_二見合、今其家にも時代の分限帳とか姓名帳とかあるならんと尋けれどもなし、愛縁薬師の縁起に載たる人々の名は、何の書より取たる歟、苅部、並木、鈴木等は、小田原よりの附の衆なり、

○世田谷豪徳寺は、吉良左京大夫頼高朝臣の娘、後ニ弘徳院殿と云たる人の草創也、文明十二庚子年と云り、開山馬堂昌譽禪師也、政忠朝臣并弘徳院殿の墓あり、法號弘徳院久榮理椿大姉、文明十二庚子年十二月二日逝去、政忠朝臣法號は、洞春院照岳道旭居士、文龜二壬戌年六月十七日卒とあり、蒔田村時國寺ニ而ハ、勝國寺殿照岳道旭文龜二年六月十七日とあるに今は井伊家の菩提所となり、掃部頭直孝朝臣の法號久昌院豪徳天英大居士と稱し、弘徳の寺號を豪徳寺と書あらためたりとみゆ、此寺の過去帳に前開基吉良政忠、中興開基井伊直孝とあり、吉良二方の墓は、住職代々の墓所の際にありて、五輪のかしらのみ残りたるは殊勝のことなり、之かれば政忠朝

臣は此寺に葬りたる也、亦是は蒔田村勝國寺へ葬たるかゝれず、

○同所勝國寺は、吉良御所勝國の開基なりといへり、今御朱印地なり、吉良家代々に勝國寺と云人不見、

隆彦考るに、蒔田村勝國寺は政忠の開基とある

上は、政忠初は勝國と書たる歟、文龜帝 後柏原

院御諱稱三勝仁、仍之勝の字憚り忠政と改め給ふ

なるべし、此寺は眞言宗なり、蒔田の勝國寺は禪

宗也、元は一宗なるべし、亦祈願所なる故、もと

より眞言宗なり、

○同所常徳院草創は、將軍義尙公の開基也と云り、過

去帳に常恒院尙山源義大庵主、延徳元己酉年三月廿

六日とあり、住持曰、此寺往古庵室なるを、義尙公開

基給ふといふ、是は吉良一族に淨徳院と云し人あり

たるを、足利の一族の縁を以、乃寺の住持僞作して、

義尙公世田谷に來り給ひて、此庵室に逗留を給ひし

ゆへに、薨御の後に一寺に建立したりと云り、將軍家

を佛法に引入れんとてなんぞ大庵主とは稱したり可

し忌、義尙公は近江國鈎里軍中に薨じ玉ひ、治世十七

年、御歳貳拾五、法號は常徳院悅山道治大居士なり、

世田谷常徳院に、氏朝の佛供料をおさめ給ふ時の寄進狀今にありと、頭書曰、うつし前ニあり、其書面は淨徳院とあり、年號は元龜年中、判所は左兵衛佐氏朝とあり、亦別に家臣中北山城守と記したる書あり、これには淨徳庵と有、是にて僞作分見し、

○同所常盤橋は、昔吉良家の内室常盤御前と云る女は、頭書曰、此常盤平出羽守が女也、賴康朝臣之妾也と云り、不義のことありて、此川の邊にて害

せられける、其靈雨曇の夜いで、里人おそるゝこと

かぎりなし、或沙門の智徳をもて、後不_レ出、今小溝の

はし也、瘡をやまふるもの、此はしに祈りて治す、其

時體を供すと云、今下宿の水なき溝ニかゝる、石橋

也、其貳拾間程原の方北側に、松の木植たる塚あり、

是常盤の墓也と、此塚の上に不動の石像有、延享元子

年に建置たり、又南の方にも塚あり、是なりともいへ

ど、いづれの方かさだかならず、常盤は賴康卿の妾な

りと、今其靈を辨天に祭り、其腹に出生し給ふ男子を

若宮八幡と崇めあり、馬引村に在、九阿社は、上、左あれば、此男子も害

せられけるか、

世田谷の里民常盤記常盤記寫別ニあり、とて一冊を傳へあるよし、隆彦はいまだ是を不_レ見、又曰、常盤は懷

胎にて殺害せられけるに、男子を生りと云、

○弦卷村實相院開基は、蒔田左兵衛佐賴久主也、此寺は氏朝朝臣の隱居し給ふ地にして、今に構の跡堀もあり、學翁齋として住給ふとなり、玄かるに學翁齋卒去の後、一寺に建立し給ふよし、氏朝朝臣の内室上總國より勝光院へおこし給ふ、文今に勝光院にあるよし、是は實相院開基のことを言殘し玉ふ文也、則氏朝朝臣の息賴久主の時に開基也、今御朱印拾五石は、台徳院殿より被下けると也、吉良家寄附の例に依る也、慶長八癸卯年九月六日、從四位下左兵衛佐氏朝卒去、法號は實相院學翁意岑大居士、則此寺に墓所あり、山號は鶴松山と云、

盛時云、深大寺村之源大寺にも吉良の由緒ありて、今の御朱印五十石は吉良家よりの引付也と云、吉良より奉納の正宗の刀もあるよしなり、

追加雜集

○見立の松として世田谷古城跡に今にあり、見立とな
づくる事、愛縁薬師の縁起にくはしく見へたり、

○豪徳寺本堂の前に大なる櫻あり、政忠朝臣の庭木なりと云傳へたり、盛時云、單瓣白花なり、下屋敷之花井宮坂八幡の花もみな同種なり、

○御所櫻として古城跡にありけるさくらの實生、今古良家の下屋敷の内にあり、下屋敷は、氏朝五代義隆代、先祖之云々（傍古曰、文化十一年此さくら今は枯れたり、株のみあり、頭領於世田谷三平下屋敷群書見付、古城部にある櫻は、先年はやくより、枯なるより、今に跡にても書いへずと、屋敷の文は、枯株あり、文化十年未だ枯株あり、

亦彼家にては、氏朝以來所持也と、未詳、

○一記云、賴久代慶長六年、加_二倍江州日野郡寺尻村七百石之地_一、台命曰、吉良者於_二參州一東城、西城南流之外不可_レ稱號、宜_レ改_二蒔田一也、因_レ茲自_レ是號_二蒔田氏_一云々、亦曰、義信代寶永七年二月十六日、改號_二吉良_一、因_レ是東城、西城兩家斷絶也、仍_二台命先祖之舊領武州世田谷三千坪下屋敷拜領_一、頭書曰、今按_二此屋敷數千六百坪餘あり_一と云、又曰、此改姓願_二の事吉良家ニ云所は別なり、上野介一風の_二前より願出被_レ置たり_一淺野一件にて上野介斷絶するか、右に改苗被_レ仰付_二にてはなしと云、西城吉良寛永系圖、東城四郎義繼、此子孫住_二奥州一、近年號_二吉良_一、_レ云かるに神君仰にて、吉良は

一人ノ外名乗まじと也、仍蒔田號ス、隆彦按るニ、改ミ蒔田氏ニ神君之台命なるべけれど、義繼は三州東城に最始に住して、東城の吉良と稱す、亦南城吉良家次男吉良左馬助尊義、亦住ニ東城、是を後に東城の吉良と云、此家八代右兵衛佐持廣代斷絶す、持廣は贈大納言廣忠卿烏帽子親なり、吉良正嫡考東城西城兩家の事可レ辨、

○衾村東岡寺頭書曰、東光寺殿ニ作ルは、治家朝臣の嫡子祖朝と云たる人、十歳にて卒葬、爰、號ニ東岡寺殿ニ云々、

傍書曰、今石碑を見るに、年號寛永甲子六月廿三日とあり、法名ニツあり疑べし、東光寺殿瑞陽雲祥公大禪定門、清雲院殿居室妙安大姉、

○奥澤新田村の砦の跡は、吉良の臣大平出羽守の居住と云傳ふよし、亦曰、大平左馬と言たる人とも云へり、

傍書曰、今世田谷領等々力村ニ大平利左衛門と云百姓あり、大平氏の子孫にて、北條吉良よりの古文書十五通並古系圖ニ枚短冊一枚あり、其文書には、大平右衛門尉大平清九郎とあり、隨成文書也うつし置ぬ、

○世田谷村八幡宮は、御朱印拾壹石餘あり、賴貞朝臣の勸請なりと云り、神主大場大内藏と云、吉良家の祈

願所也、勸請の年曆由緒等不レ分、傍書曰、天文十五年八月廿日とあり、近年吉良殿より神寶刀奉納有よし、雲澤の刀長二尺三寸ホトあり社地に御所櫻あり○傍書曰、社傳には、往昔義家朝臣の勸請にて、吉良氏の再興なりと云、疑べし、

○世田谷領と子レ今傳ふ村々には、吉良家臣の居住の跡は間々あり、上北澤村のうち八幡宮の社の裏手に、新八郎屋敷と云所あり、是は氏朝朝臣の臣鈴木新八郎が屋敷跡なり、此新八郎は、隆彦等が先祖なり、此外にも北見村に江戸氏、御旗本に成て元祿中斷絶す、稻毛藩口村に松原氏の孫あり、世田谷に大場氏の孫あり、又北見村に森豐後守子孫あり今は小川氏を名乗、同所備中に關加賀守ノ孫あり、亦御旗本に廣戸氏の孫あり、等々力村の大平に孫あり、程谷宿に菊部氏の孫あり、大藏村ニ田中氏の孫ありしが今はなし、又同村ニ石井氏、是は此寺ニ見へざれども、盛時の家の祖にして、吉良の幕下也、

傳ニ曰、經家朝臣者仕ニ南朝、陸奥國一方之管領職也、被レ叙ニ從四位下、其子貞家朝臣叙ニ正四位下、被レ任ニ左京權大夫、菊桐御紋、勅許、爲ニ陸奥國一方之管領、其子治氏叙ニ正五位下、任ニ中務大輔、延文元年春、足利高經舍弟大崎家兼、奥羽爲ニ探題、襲ニ來於藤谷、戰レ與ニ治氏、治氏不レ利而避退ニ藤谷、而赴ニ于東國ニ云云、大永六年四月廿九日、雖レ在ニ踐祚、仍ニ亂世ニ未レ執ニ行、御卽位之式、吉良賴康觀ニ北條氏綱ニ令レ獻ニ料米及黃金廿枚、賴康上洛、報ニ九條植通公、爲ニ奏

聞、有^ニ後奈良院 叡感、故天文五年二月廿六日、有^ニ

御即位式、于^レ時賴康蒙^ニ莫大勸賞、被^レ叙^ニ正三位、氏綱

菩提所相州早雲寺^ヲ以^テ爲^ニ勅願所、亦氏綱任^ニ左京大

夫、被^レ叙^ニ從四位下^ニ云々、

相摸國大山の御師佐藤圖書方に氏朝朝臣の書あり、

任^レ例參詣の節は、可^レ爲^ニ圖書助^ニありて、左兵衛佐氏

朝と云るし、花押あり、此花押は、世田谷淨德院にある

佛供料の寄進狀花押とは少々違有よし、氏朝朝臣は

初は賴貞^{傍書曰、賴貞は賴康の初名也}、と名乗たまふよしあるゆへ、押

字の違あるべし、

等々力村満願寺は、政忠朝臣の男經舜住職し給ふと云り、前錄

せる世田谷の事、後^ニ此棟札之寫を吉良殿は見たるにより、左

に記し置也、(傍書曰、此棟札一覽せしに、名前役割等違あり、

目撃うつし別ニあり)

世田谷八幡建立大檀那

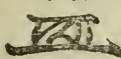
源賴貞御在判

惣奉行

江戸前攝津守

法名淨仙

華押如
此あり



等々力村
にある所
の賴康と
ある文書
の判と同
じ

大工奉行

西村左近將監

吉重

遷宮導師
鶴岡相承院法印快元和尚位

天文十五丙午年八月廿日

若宮奉行

熊澤入道々珍

青木右馬助

安重

惣大工
番工
番工

脇大工

山井大藏

由木内匠

石渡戸新兵衛

常久

松原藤六

貞吉

鈴木藤十郎

有宗

鍛冶奉行

賴貞と有は、氏朝朝臣也と云り、氏朝は、慶長八年六十二歳ニ而卒去也と、左あれば、氏朝僅に五年の時也、亦氏朝天文十五年十二月晦日叙^ニ從四位下^ニ玉りと、位記^ニ賴貞と有、隆彦按^ニ賴貞は賴康卿にはあらずや、此卿は永祿四酉年薨じ給ひし也、惣奉行江戸氏は、天正十八年御入國之後、其時之在名木田見と名乗、北見若狹守は攝津守の後歟、若狹守有^レ故て斷絶す、○傍書曰、賴貞と有は、賴康卿の事也、大平文書と棟札ノ文と花押同きにて疑なし、

一文化九申年十二月五日、賴康卿二百五十回忌ニ付、義廣主一日罷出て拜禮す、前年の取越也、

右這書者、諸記錄及老少口々相傳前書之說錄之而號世田谷私記、寛政九巳年三月廿八日爲一冊以吉良侍從之入進覽其後亦增補傳子孫者也、

文化六巳年十一月卅日 穗積隆彦(花押)

改隆雄

世田谷豪徳寺政忠朝臣の墓、廿年程以前とは向を替て、一本の松のもとへ移して、寛政十未十一月中添碑を建る、其文は萬治中辛弘徳爲豪徳、蓋今中興開基久昌院豪徳法號、以弘豪倭音近也云々、弘徳院殿并政忠朝臣の墓ども五輪の頭のみあなたこなたに残りたるに、今他の五輪の臺と思しきを重てあり、其重たる石に至徳元年と有石あり、

盛時者右石碑建立之時、吉良の由緒の舊臣等よりみな助力したり、予が家にても乃公之御代御寄附ありて、碑文之裏に乃公之御名あり、傍書曰、世田谷豪徳寺に古系一本あり、等々力村利左衛門方ニ古系圖一本あり、右いづれも異同アリ、うつし置ぬ、

吉良家正嫡考

穗積隆彦述

吉良家之祖足利左馬助義繼朝臣は、左馬頭義氏朝臣之三男也と諸書ニ見へたり、板本大系圖にも次男と云たるも有、亦三男と云たるもあり、嫡子長氏朝臣、次男泰氏朝臣、三男義繼朝臣と也、世説に長氏朝臣之嫡流を西城之吉良と云、長氏朝臣の曾孫滿氏朝臣、次男左馬助尊義朝臣を以、東城之吉良の祖と心得、尊義朝臣八代右兵衛佐持廣朝臣の子、去時之時此家斷絶すと云、持廣朝臣は、源清康君之御妹嫁にして、贈亞相廣忠朝臣は、持廣より一字を奉れり、持廣朝臣之家も東城ニ住して、後之東城吉良と云たるなる也、本朝略名傳記に云、足利義氏の三男左馬頭義繼は、吉良東條之祖也とあり、亦藤原公定卿之撰せられ玉ふ系圖ニ、義氏之嫡子泰氏、次男義繼、三男上總介長氏、號吉良太郎是正嫡とあり、或は同書に長氏は泰氏の男ともあり、亦印本ニ東條西城と記せり、東城西城あり、西城ハ今西尾也此所より文武天皇御宇始て雲母紺青を掘出し獻ず、仍て吉良との庄と云、亦公武大跡略記、足利左馬四郎義

繼ハ吉良之初也、上總介長氏今川之始也、尾張守家氏は斯波并石橋之先人也、次郎義顯ハ澁川之先祖也、四郎頼義ハ石塔之初也、宮内卿律師公深ハ一色之初也、律師義辨ハ上野之始也、法印賢實ハ小侯之初也、以上兄弟七人ハ左衛門佐泰氏之息也とあり、此書ハ兼然バ義繼朝臣と泰氏朝臣とは兄弟にして、長氏朝臣を始賢實迄七人ハ皆泰氏朝臣の息也、此書ニ而義繼朝臣ハ義氏朝臣の嫡子にして、吉良東城之祖たる事分明也、亦公定卿之大系圖にも、長氏或は泰氏子ともある上ハ彌分明也、然バ嫡子義繼朝臣、次男泰氏朝臣如レ此也、既ニ義繼朝臣曾孫貞家朝臣ハ、陸奥國一方の管領也、亦大系圖に、義繼息經氏ハ長氏の子満氏、是を猶子とすと見へたり、又義繼之譜所ニハ其子經氏ハ満氏爲レ子とあり、然れば經氏ハ長氏之息にして、義繼養子となり玉ふとの事を誤り傳ふること、見へたり、箇様に不審ある譜ハ取用ゆるにたらず、長氏朝臣之流より東城太郎ハ出たる事ならば、何ぞ今義繼朝臣之後胤にて嫡男の外、次男より東城氏と名乗べきやうなし、略名傳記、義繼ハ吉良東城之祖とあるにて知べし、最初東城ニ義繼朝臣、西城ニハ長氏朝臣住

し玉ひしに、義繼朝臣ハ陸奥國へ移り玉ふ政に、後之東城長氏之曾孫満氏之次男尊義此所ニ住て、東城と云たることなるを、後人は東城之吉良心得、義繼之流をば奥州吉良と云來りたると見へたり、義繼以來陸奥國へ移り、曾孫其國の管領となり玉ふ程の家也、左あれば、今人之云東城吉良と云ハ、やはり西城吉良次男家なれども、是は東城ニ住玉ふ故に、是亦東城と云來るものと心得べし、東城西城と云事ニあまり心を附尋ぬべからず、東城吉良と云ハ正しく奥州吉良之家なり、

瀨名貞雄曰、長氏母ハ家の女房、二男泰氏母ハ平泰時娘也、仍て長氏は時之權威を憚り、嫡子たりといへども、退て泰氏を本家とす、泰氏亦本家を義繼に傳へたりと見へたり、依て義繼を嫡家と云なるべしと考へるは、是亦其理ニあらず、

右正嫡考者、寛政八巳年三月廿八日成一冊、以吉良侍從之入進覽矣、

于時文化十年癸酉六月日

於武藏野玉川里別業杉乃菴寫之

○南向茶話追加^{十八}に、武州世多ヶ谷吉良ハ、家系ニ云、是^レ則^チ義氏の末男長氏、其子義繼始て參州吉良東條に住、吉良と稱し、夫より十一代の孫成高、是^レ刻^{キキ}將軍より武州世田ヶ谷、相州蒔田を賜はり、其子左兵衛佐賴康、其子左兵衛氏朝に至り、此地に居住する所ニ、天正十八年、小田原陣に、領地沒收、神君に拜謁同十九年、上總國に於て千百石の地を給ハリ、其子賴久の代に、仰ニ曰、吉良は一人乃外不^レ可^レ有^ニ稱號^一よし、依^ニ台命^一、始て蒔田と改、左兵衛佐と號す、今に子孫連綿たり、是により、世田ヶ谷に吉良古墳事跡申傳るよし云々、

○松屋外集百十三卷五十則

沼田記

抑沼田之初其根元監、赤城山、子持山ニ相續、一面ニハ谷川山、武尊山、其内廣々滿々たる湖水二千幾歳ヲ不_レ知、傳所人皇四拾代天皇白鳳十三年正月、日本大ジシ_ン、諸國山崩、水涌出、人民六畜死、伊豫國溫泉埋、土佐國田地五拾餘萬頃沒、伊豆國俄一ツ之嶋出、上野國北山湖水ヲキ出、上野下總押流、今爰以監にアマド切破、其跡自然と掘流行、下總國流出村と申處に赤城山大權現御留り、末世之印也、其後人皇四十八代稱徳天皇天平神護元年七月、僧勝道初下野國荒山大權現開キ、日光山是也、同時赤城山開キ、扱又湖水跡何分舊事不_レ知廣原也、自然不_レ扣、民家遠國他國より集り來リ、隱里と名附、雪霜陰有之、然共次第繩詰り家作り繁昌、壹番和田之庄、二番庄田庄、三番忍田之庄、四番硯田庄、五番川田之庄、六番下沼田之庄、七番町田之庄、是ヲ七田之庄と名附、地頭も無之年暮、佛神祭る事も不_レ知、鳥類畜類のごとく、川狩野狩リヲ業として蕃、然處に人王六拾代村上天皇天慶

之頃、相馬將門一亂關八州騷動止事なし、其頃都より平氏何がし流浪と成、庄田之庄へ來り居住、所之者帶刀不_レ知恐崇敬、月日を増主君のごとくかしづき、近郷之者集崇敬事言事なし、文武兩道兼備誠にケイナリける人成、後には和田之様と申ける、然處庄田之一女嫁し、位フリ種なき一子を出生し、何れもかつごう仕、和田四郎と申ける、拾五歳之頃、鹿狩野狩業として、七田之庄官ナリ、其外近郷之もの扣集り、壹番師之住人、二番石墨之住人、三番眞庭之住人、四番後閑之住人、五番瀧棚之住人、同根岸之住人、六番牧之住人、七番岡之住人、八番發知之住人、九番川場之住人、十番生品之住人、拾壹番古語文之住人、何れも集崇敬、和田四郎成人丑田之庄ガ娘嫁、繁昌し、庄十壹之番之住人駒之立どなし、あるとき和田之庄申やう、我父都より流浪之身なり、不思議に天道に叶如_レ斯繁昌する事神德なるべし、鎮守を祭り子孫之氏神とせん、上之山に社ヲ立、三峰山大明神是都之神也、扱又和田之庄司一子出生歡際なし、其名を和田之太郎殿と申ける、成人彌増、右拾壹人之住人カツガウ際ナク、先例にまたがひ、三峰山ヲ祭り、先祖之改_ニ和田太郎、平經家と名

乗り、武藝弓馬強、諸國六藝之達者召呼れ、さながら一騎をも収立、保元平治一亂に平之清盛天下一等權柄取、依之武藏上野下野之流人我もくと馳集る由聞傳、我も古へは平氏也、今不出者何世に可出と、經家拾八歳、上下人立之番師左京、二番恩田兵部、三番下沼田舍人、四番町田主計、五番視田平馬、六番川田圖書、七番庄田丹宇、合テ貳拾人、上下共出立いさみける、程なく京着ス、大將清盛訴を申上、清盛武將左様也、目見へ申ける、經家御能上意たり、沼田之始終間邊言上、依之沼田、利根勢田兩郡之主たるべし、安堵之御教書被下、暫在京可致と被仰附候、其外武藏之七黨、上野八黨、下野七騎在京、經家兩郡之庄官免許を給、其名を高あらはし、翌年歸國、兩郡之主萬歳うたいける、七田之庄拾壹番之住人門前に市を成、有時經家我かく官位登、能場所見立一城を築べし、如何々あらんと申ける、今の住居之場せまし、依之小澤原能所成、吉日をゑらび、土手堀二重に可致由、外堀深三間、敷高サ九尺、内堀深五間、貳間半、土手貳間、近郷百姓役公屋敷、本丸共年中出來致候に付、町屋敷割和田之庄不殘引取、小澤之城名付、丑寅

之方に當、瀧本山小澤寺祈願寺立、萬歳を謠、七田之庄拾壹番之家中立たらべ、此城一方川有、本丸之方に致候小澤川ト名付、扱又位勢日々に増、然る所に小川住人名作之住人、羽場之住人、布施之住人、須川住人、右四人御旗本に奉願、其上東は平澤住人、生井住人、追貝之住人、日御はたしたに被遊被下と願出、其外數を不れ馳來り伺公、其節古枕着類切古物流出候、御吟味被遊、若後日如何あらんと申上、依之牧之住人、後閑之住人、小川之住人、右三人大勢添山を別尋見所に、高山之岩根に稻荷あり、立寄見れば老人男女居る、是は何方よりかゝる片地に居る、眞すぐに申せ、鎮するにおゐては今打殺と、てんでに太刀に手をかけひねりけり、老人答テ、我々奥州より迷ひ候者をかけひねりけり、老人答テ、我々奥州より迷ひ候者をかけひねりけり、越後之山里に參成、奥州亂世山越、是まで罷出けり、飯米を支度致、平日は猪鹿申を取給物に仕候、貴公様方は何方より御出被成候、我々は是より十四里程里に出、此國之大將より位を蒙り參候、扱又此國に御大將御座候は、憐御慈悲に御手下に被成被下候は、難有奉存候、其名を何と申ぞ、乍恐それがし阿部之末流宗家ト申者、先祖は壹騎前も仕候、忤貳

人御座候、被_レ召寄、御出被_二下置_一候は、難_レ有と願
候、私義は明_レ不_レ存、依_レ之谷深奥州道遠し、其故
藤原申候、然ば大將へ申上候、此地被_二下置_一、随分切開
可_レ申候、私一類共越後之山里に長男壹人御座候被_レ
召可_レ被_二下置_一候、則野人ふとく、阿部之力丸ト名乗申
候、此段御大將へ申上、御怡際なし、然る所へ東入よ
り申上候は、壹番に花咲之住人、腰本、土出、小川、右
之村々之住人、其外大勢にぞ願出るは、我等住居仕候
山奥も人間共不_レ知、惡鬼共不_レ知、住居之里出候、人
を追拂給物をかすめ取、民家をなやませ、御退治被_二
仰附_一被_二下置_一候は、本山に入手下に可_二罷成_一、然ば
案内可_レ仕候、壹番川場之住人、二番古證文之住人、三
番岡之谷之住人、四番生品之住人、五番發知之住人、
六番平澤之住人、七番生井之住人、其外東山に入者、
土出之住人、小川之住人、腰本、追貝之住人、其外名有者
共里々村々より吉日をゑらみ、惣人數千人之餘打立、
籠居賊人皆阿部之末流、有時者湖水勢多郡深、扨々た
やすく返成候、阿部貞任末流ならん、奥州よりまよひ
出、此所に住居する也、折々奥州方會津へ相出、押取
切取業として月日を送り、人之妻子を取、又は此東山

入て妻子をうばい取、去ゆでんどうじのごとく也、依
之大將經家出馬、東西北に人を廻し、食責可_レ致候、
大手からめ責けるに、大勢に無勢晝夜不_レ限責られ
て、うへに及し大將を生取、經家前に引出、己何者成、
此山に住居して氏家をなやます、阿部之貞任宗任暫
此所に去のび罷有、我は多勢丸と申者、住家無_レ之此
所に數年罷有、猪鹿申飯食仕、今如此むねんの次第
と齒がみをなして申ける、則首打落、く門に懸たり
けり、其外同類打殺したり、所々うばい取たる男女古
郷へ歸しける、大將經家歸陣候、大小太刀在々所々御
褒美被_二下置_一候、

一、人王八拾代高倉院御宇清盛惡逆、木曾義仲信州よ
り一騎^か起、北國西國不_レ納、關東には頼朝公寄々廻文、
義經忍_二奥州_一、隱便ならず、石橋山合戰發り、經家熊谷
治郎由身有故同道、壹番馳向、夫より頼朝打負、上總
義助同心合打勝、頼朝萬歲後、經家近習たり、上總之
助加勢關八州人數百貳拾萬騎、夫より頼朝義經心を
合打勝、頼朝萬歲也、經家近習たり、沼田之城主永代
安同御教書被_二下置_一、鎌倉に在番ス、翌年歸國之暇被_二
下置_一、沼田へ歸城ス、經家嫡男三つ峰に登り、其名を

改沼田左衛門之尉平經信、次は女子うつも利根姫と申、器量餘にすぐれ、夫婦の御てうあい世にあより、然る處に經家七田之庄十壹番之住人召寄、此所暫住居するといへ共、城内せまし、是より向瀧棚之原城内廣取立可申と被仰付、夫より吉日を撰、是北東西岩、南壹方原也、繩張外堀内堀本丸三之九構、小川之堀を引拂、土屋敷、町屋鋪移シ、其上根岸之瀧棚へ民家引移、榮作出來、則瀧棚幕岩之堀名附也、經信の師兵部娘嫁ス、男子出生、則兵部うぶ親にす、然處利根姫美女たる事、賴朝悅義無際、經家も彌出當也、程なく利根局懷妊と聞へける、然處政子聞給、下部に申付、利根をうしない、夜に入可參段申付給ふ、賴朝聞付、然者其儘には叶まじとて、代官等被下、其夜こしに乗せ、西國方へ遣とかや、其砌衰氣之藤九郎あり亦懷略と成、政子承失可申段、美女たる事、賴朝之召寄、則丹後之局と申、御てうあい無際、又懷略政子承失可申段、下部に申附、あやうき所に、本多何家に賴朝被仰附、こしに乗、其夜大坂さして急ける、住吉邊にぞ行暮、庵室有、立寄見れば、庵主右行之もの伴女子を連、一夜は安事、只々一夜賴と、本多則丹後之局

御入、急にいたはり、夜半時分出産之氣ざし有、窄坊本田立さはぎ、近所氏家を尋、老女をたのみ取上、玉の様成男子也、片わら成信家をたのみ、月日を送り、此若君成人には不_レ成、随分と大切にいたはり、年月をへて、既に拾壹歳之頃、賴朝公大佛供養に上京之砌、本田丹後之局打連れ、御若君諸共に御先にたゝすみたり、御先拂之武士何者成とあやしみける、本田罷出、我々御訴訟申上度事御座候、此段申上、賴朝公御目通へ被召出、御免有、御こしより飛出給ふ、扨々本田が忠節、丹後局がふし物不具、則秩父之重忠へ被仰付、旅宿改大勢之人々終計也、夫より其名を改、鳴津之三郎と申、大隅、薩摩兩國被下とかや、扨又經家忤左衛門殿、賴朝下向之後、鎌倉へ被召寄、經家老衰たるに依て、沼田其方自今安部爲べし、經信難有仕合奉_レ存候と沼田へ歸國ス、沼田勢多利根兩郡之由來書附出可申段、重忠を以被仰附、乍恐歸城ス、家中之面々途中迄罷出恐悅申上ル、經家老病養生不_レ叶死去、經信初家中闇夜之ごとくなり、古城を名附、法城院殿心岸主田大居士ト號ス、元龜三庚午六月十五日也、

抑沼田利根郡と申事、其水上は奥州金花山、其先はあや切湖水干形ナリ、たへず流出ル、金花山裏通りにて、金水たへず、凡沼田より三拾里程奥にぞ金水流るる也、利金水之文字返して利根利金相生乃義を取なり、扱又勢多郡と申事、從沼田一廿五里程奥に湖水あり、大湖水多勢丸住居之場ゆへ、おせの沼と申なり、此流は勢多郡俗に多勢之沼と申也、

一、人王四拾五代聖武天皇之御宇、行基大師吉備大臣入唐歸朝之砌、日本三拾三箇國六十六箇國に改、後諸國順見、然所奥州小田郡より黄金出る、初而獻上する、依之金水故利根川と申事也、沼田左衛門平經信は父におくれ安事、家老家之子召寄、我かんがへる所、此城大鋪居所にあらず、是より下瀧、棚倉懸と申所如何に候哉、壹番に師兵部、忍田舍人、庄田隼人、硯田左京、平澤豊前、仰御尤に存候、御忌服明候は、被仰附可然と御請申、材木は川田より可出、月日送り、經信忌服濟、夫より吉日を改、本丸三之丸兩輪構屋敷町割普請年中に出來候、移徙祝義にて、家中萬歳樂謠けり、然る處鎌倉より申來り、實朝公天下之讓を請、賴家不行跡たるに依り、鎌倉に馳登り、繼目申

上、御禮相濟、御教書頂戴、歸國家中之面々途中迄御迎萬歳謠けり、其上川田の住人平井右近一女嫁ス、則城入濟、蓬萊を莊り婚義整ける、然る處十月より大雪降、東西南北之往來留、凡雪壹丈餘有之故、死するもの多し、經信米石を出し民を救、則經信一女、次は男子也、成人之後、女子は下沼田之庄婚義被下、次男今年十五歳、父に勝武道能、則三峰山登、氏神を拜泰經ト名乗、家祿を繼、家老家子一等に恐悅申上、然處鎌倉より飛脚到來、實朝公逝去、依之御世繼無御座、執權陸奥守平之義時、政子と談じ、京都關白道家公四男賴經と號、天下政子簾中政取、依之泰經鎌倉へ馳登り、繼目御祝義申上、御教書給歸國之願、其上北上野沼田、片地取、山賊強盜さかんにして難鎖、依之早御暇願上出立可有候段被仰附歸國ス、家老惣家中途中迄罷出歸城ス、千秋謠相濟、有時泰經申様、我兩郡之境を不知、誰か參候は可相究候哉、忍田舍人、師兵部、和田之庄司、平井右近、右四人境目可遊と被仰付、先壹番沼田之舟渡境とす、夫より戸鹿野舟渡越あやと坂峠境を立、夫より空澤通り、夫より不動峠境を立、爰に名棚誂住人鈴木内匠と申一騎當千之

者罷出、御先祖御先仕、人數合夫より須川大度峠と申所へ出垣立、夫より布施猿ヶ原と申所へ出、長井三國峠へ懸り、社人罷出申様、傳承候、古へ行泰大師御通り之節、飯場御見立、則三社權現之印立、是三國之境なりと被_レ仰、其後往來之者難所を安事參り、錢を掛置たまりて神社と成、

上野國赤城山

信濃國諏訪

是則三國三社權現也

越後國彌萬孫

此所を境と遊下向、猿ヶ京に歸、夫より湯原ト申處に案内、峠を越湯原より谷川、此所より越後通り有之と聞、成程歩行道御座候、越後何と申處出ル、山里と申所へ出候、夫より段下り、米石洞と申所も出候と申上ル、此高山越後迄上州境と定、不盡山ト申、又奥に藤原と申所有、奥州迄谷ふじゆへ、不盡原と申、是より奥州何程有と申、大方十里餘も參道無シ、大木之下又拾里も有之、奥州金山之裏へ出、夫より御通可_レ被_レ成候、我々此谷は被_二仰附_一候而も、鬼神に而も及不_レ申候、然者末々可_レ遊ト、夫より湯原へ歸り、川を越、牧村の出、是より佐山村へ越シ、案内罷出、大沼村

を越御案内、左之高山は何と申、是は天ふだんゆきふり申候、夫より發知村へ出候、此所に木村宇母と申者永ク御座候御案内、扱又此向山は何と申、此山は弘法大師諸國廻り之時、此所へ御出、大唐之五大山口、太瀧藏山と被_レ仰一ウ可_レ有と被_レ仰、依_レ之所は麓壹ウ建立仕候、其後は庵主も無_二御座_一候、金山の水流なり、此山所之もの申には、發知山と申、夫より川場へ御案内可_レ仕候、川場より案内とうげへ被_レ出、このところゆしま庄司御先を仕、一宿あそばされ、是より古證文むらやまのふもとをとおり、ひらさはと申ところへ出、爰に平澤豊前と申もの御迎に出、生井村、棚村之もの共御迎に罷出、是より東谷入へ可_レ參被_二仰付_一、此奥山雜所にぞ人馬立兼候由申上、是より會津通り東入へ廻文を遣、御迎罷出、追欠村金子之住人、小河平澤之住人、土出村星野住人、腰本村田村住人、右之者共御先拂、戸倉ト申處へ付、里々村々谷々之者集り、是より會津迄何程有ぞ、如何様八里計り御座候と申上る、馬足立不_レ申、則戸倉、土出、小河へ被_二仰附_一一宿被_レ遊、此山奥は何と申所ぞと御尋、去古阿部之多勢丸と申盜賊此里をなやまし、を、御先祖御

退治被_レ下、今は安隱御座候、其先は何共知り不_レ申、
奥州程近ク御座候利根川之本なり、金山之裏へこの
多勢丸之湖は皆勢多郡會津之境究、夫より御歸沼田
右之趣段々言上、泰經、師左京娘婚禮、城入相濟、家
中恐悅申上、萬歲謠、泰經申様、領分之道橋隨分能、民
之困窮無_レ之様可_レ致、薄根川橋三箇所懸片品川地領
入合、沼須舟渡、利根川、戸鹿野むらふな渡、後閑むら
船渡可_レ然、出水等有_レ之は、日本一之要害名城也、經泰
男子出生歡なり、然處鎌倉より廻文來り、今度賴經公
逝去、賴嗣公へ御世を讓申候、早速馳登り、執權武藏
守時氏御目見へ相濟、鎌倉上番可_レ仕候と被_二仰附_一、沼
田安部之御願書被_レ下、翌年御暇被_レ下、御城より家中
之面々途中迄御迎出、萬歲を謠けり、泰經男子成人、
今年七歳、三峰山に登り、御供師左京、忍田舍人、根岸
兵部、右三人登り山神を拜、其名を改め、沼田勘左衛
門平之安泰號_下向ス、文武兩道達者、家中諸士敬け
る、月日重り次第に父に勝り、國も治る御勢也、然處
に鎌倉より廻文來り、今度賴嗣御逝去、御世繼無_レ之、
後嵯峨院第一皇子宗尊親王鎌倉へ下り、天下之將軍
と成、泰平之由申來り、依_レ之早速馳走、執權相摸守平

時賴御目見へ仕、鎌倉在番たり、鎌倉之親王五代に
初、時賴におとない民懷、六拾餘州無事、翌年泰經沼田
へ歸國被_二仰附_一歸城ス、家中面々途中迄御迎城入、恐
悅申上ル、然處泰經病氣重り、安泰を取立候様に申則
逝去、人々かなしみ限りなし、月日積り安泰父之跡を
繼、繁昌ノ其上鎌倉に登り、繼目申上、安堵之御教書
被_二下御歸國、治事第一也と被_二仰附_一歸國、家中面々
御迎萬歲謠ける、皆々武藝第一に致と被_二仰附_一、弓馬
懸り行、稽古專也、猪鹿狩なぐさみたるべし、天下大
平ト申は此節なり、安泰今に御てうあいなく、町小澤
主計娘嫁入、何も宜敷申上、婚儀濟、然處沼田町大小
賴狀上、御城水不足に付、町々難儀仕候、何卒上水御
奉行被_二仰附_一被_二下候は、行徳無水も可_レ參處、水引
落に付行届不_レ申候段申上、依_レ之鹽野井平右衛門上
水之役被_二仰附_一無_レ滯可_レ參候、足輕三人平井隼人急
申上、上水境中山之賤人出馬合而貳百人計押込、在家
に押取仕、何共難義仕候、御人數御借可_レ被_二下申上、
早速可_レ遣と根岸大膳平井隼人兩人手下三百人指
遣シ、則峠に而弓引懸、鏑をならし、打かけ、坂之
麓へ追落し、石を飛せ、いきもつがせず追敗ける、跡を

も不見して逃にけり、暫飯屋を拵、十日計見合けり、其後は音もなし、何れ歸けり、安泰如此申上、境を押込所、早速打拂事勢力すぐれたりとて、御ほうび被下候、去程安泰一子出生男子、御怡際無、然處文永拾壹年鎌倉より宗尊親王御遠行付、早速鎌倉へ馳登、則惟康親王御代執權相摸守時宗へ御目見仕、依之沼田之事御尋之上可申上、鎌倉在勤被仰附、安堵之御教書被下、翌三月歸國之御暇被下、御城御安泰、嫡子成人、今年七歳、三峰山に登、御供師左京、庄田左門、忍田舍人、家臣氏神並拜、沼田上野之助、平之常泰と號、則下向、父御歡限なし、然所に須川之住人須川兵庫注進、上之山大道峠之城下に我妻郡之賊人日々に峠に追入、此方之民家をかすめ、里に而狼藉仕候、御加勢可被下と申候、則三百人被遣、手勢共人數五百人夜を日についで急ける、此方麓小屋を懸、弓鏑棒様々之道具を搦出向責戰、賊人責立られ、或は疵請或は生捕終博、跡方口なく追ちらし、又は可參之峠にをり火を燒き、凡十五日程詰居たり、沼田へ歸、右之段逸々申上候へば、御目見得被仰附、此度之出勢去儀何れも休足の御暇被下候、扱又常泰成人被

遊、勇力當年拾五歳之春之頃、領地之山々猪狩可致也、雪澤山に有時節也、家中諸士に被仰附、三峰山は鎮守山なり、その外之山々狩可致と被仰附候、發知へ川端山勢子之人數を出、勢子大將は發知たるべし、日々に狩をこのみける、然處安泰老病を引請、養生不叶逝去、成孝院殿春王道英大居士、成孝院開禪也、家老家中寄、常泰をいさめける、父之養生不叶天命之究所也、則山陵へ納被仰となり、常泰月日おくり忌服過、家中大小之士、古軍之事申渡シ、領内之民之步行なし、清道但しく鎌倉より廻文來り、其書に曰、惟康親王御遠行、御世繼無之、深草之院第二之皇子久明親王御世繼給、執權相摸守貞時也、常泰早速鎌倉へ馳登、貞時へ御目見仕、常泰申上は、拙方代々之先祖相談納候所に、近年賊人徒原境領内をおびやし、御地之ものかすめとり、雪國に而霜霜之間、四箇月程限り難義仕候段申上ル、尤に被思召、則御暇被下下向、家中之面々大小途中まで御迎に罷出拜祝ス、城入萬歳を誂ける、常泰忍田舍人娘婚儀調、城入御悅限なし、年來程有テ懷胎身彌大切、臨月を待所、若君御平産、御歡際なし、然處追欠金子市藏と申もの

注進、近郷東上州新田之方、并山家のものども根利家之棟峠と申所、其より在々所々かすめ取り、男子かどわかしかける、難義仕候御加勢被_レ下追拂、あんのんに仕度義願上、御老人數三百人差越、何れも長柄之鎌鎧弓矢長刀やう日_ヅについて案内させ、右之峠近に飯屋立待居たり、あのごとく百人計人有共不_レ知峠へ上りける所を、すはやと追懸られ、思寄らぬ責道具打す打れず大勢無勢、不_レ叶賊共命ヲおしみ逃所ヲ、追打に弓矢を以討懸ケ打ちらし、暫見合居たりけり、番所と所之者差置、皆沼田に歸り遂一右之段言上仕、遠方別而太儀至極と御褒美被_レ下、何れも在所に歸り、休足可_レ仕と被_二仰出_一、扱又常泰一子成人、當年七歳、吉日を改、三峰山に登り、氏神を拜し、御供師兵部、和田之庄司、庄田右衛門、右三人登山致、並拜仕、沼田右近太夫平泰景ト改、和田大膳と申者根元縁傳也、和田常泰申やう、鎌倉におゐて祈願菩提寺ト申事有、此城下に兩寺建立すべし、則新田大光院僧ト申趣呼寄、正覺寺ト號、新田、瀬、良田、長樂寺、僧呼寄、三光院號ス、各各一ツ建立、然處に町田主計申上候、此頃上之原に夜夜光物出、往來成がたし、何卒御吟味被_二成下_一候は

ば難_レ有存候、小澤大膳同道に而參候處、見る所に二ツ之塚有、堀くづし見れば、黄金之觀音一體光りをはなつて出る、是は所之守護也、大切に致、其所に一ウヲ立、堂を立、則別當は堀口民部に被_二仰附_一ける、其頃鎌倉執權より廻文參り候、久明親王御遠行に付、守邦親王に御世を譲り、早々罷登可_レ申、依_レ之其時鎌倉之執權相摸守高時に繼目之御目見仕、則鎌倉在番可_レ仕段被_二仰附_一、翌年春歸國之暇被_レ下、沼田に歸ける、城入恐悅申上ル、然處嫡子右近之太夫當年拾七歳、何れ成共妻を見立可_レ申段被_二仰附_一候、家中面々忍田舍人申上ル、平澤息女可_レ然由、則平澤に被_二仰附_一候、難_レ有御請申、吉日をゑらび婚儀濟、其頃新田足利兩家より内通折々也、鎌倉高時惡行日々に重り、時節見合一騎おこし可_レ申段一身連判之廻文來り、彌相違無_レ之趣申候、月日送軍張_リ高時さらに其いろ不_レ見、然其毎年鎌倉出仕はやめざりけり、右近之太夫男子出生、父歡際、無家中彌恐悅、然處常泰病氣に付、養生不_レ叶死去、家中大小闇夜之燈きへたるごとく、弓馬之家に生城主國主は、只誠を以民をなで、士卒ヲ扶持する事第一之可之名君也、月日送り家老役人被_レ召、郡中に觸

をなし、ほどこし寶をくばりけり、新田之内通もだし
がたし、家中之若士武藝を磨べし、弓馬別而磨べし、
強くありけん、然處右近之尉、父之繼目可_ニ申上_ニ鎌倉
に參上ス、高時御目見仕、安堵之御教書被_レ下、暫在番
可_レ致ト被_ニ仰附_ニ翌年沼田歸國ス、家中之面々三日三
夜萬歲謠ける、

正慶二、鎌倉にて守邦親王薨、御年三拾三、同年新田
左中將源義貞高時亡ス、北條九代百五拾年にて亡、是
より一亂起、日本國中刀ヲケツリ止事無、高氏打負西
國へ落ける、義貞利軍加勢才束、依_レ之新田より猶才
束ス、義貞勝ほこり、こうとうの内侍を被_レ下ける、高
氏西國より押來り、義貞打まけ高氏天下をにぎる、然
共國之庄官國主駆動止事なし、然處右近尉嫡子當年
拾壹歳、三峰山に登り氏神拜、御供師民部、和田庄司、
庄田右衛門、社人和田大膳、則神前並拜、沼田左衛門
尉平義景と名乗ル、則御下向、扱又鎌倉にては後醍醐
之天皇第貳之皇子大塔之宮尊雲二品親王治世三歳、
直義がタメニ薨、同第三之王成良親王治世三年薨、
是より鎌倉親王五代滅ス、尊氏天下一等、六拾四州掌
に入トイエドモ、三代義満に漸天下納ル、天下泰平ト

成、同拾二年之内、去程に右近之尉泰貞、直義之使鎌
倉に相談在番ス、鎌倉におゐて病死之段飛脚到來、左
衛門之尉義景早速馳登り、父之遺蹟繼目、鎌倉在番
被_ニ仰附_ニ相詰ル、沼田は家老共計り相守、然處新田義
貞之餘類越前越後より三國を通り、沼田に流浪シ、
爰かしこの民家をさがし、其上新田館邊より沼田
に押寄、若シ別心あらば於_ニ一戰_ニ可_レ及段申越之、依
之左衛門尉鎌倉在番、此段早々申渡し、差圖次第早
速歸國致、一戰及候は、加勢可_レ付段被_ニ仰附_ニ頓而
沼田より急ぎ城意する、沼田にても今哉と待駒
引立ける、其上越後通之勢、新田より之勢前後より責
懸る、左衛門尉申やう、免角無_ニ申譯_ニ家中之士誰壹人
先應一身可_レ仕旨申、其上免も角も時之シキニ可_レ致、
依_レ之新田之陣屋へ使を立、一身可_レ仕、庄田成馬に申
付、沼須川向之陣屋へ罷渡、大將脇屋義治へ申上、向
後は鎌倉を打捨、御身方可_レ仕申上、其義神妙也、則返
禮指出可_レ申段、大森之後何寺、細須田豊前等を引れ、
新田之一族軍用催促所々觸ける、左衛門尉沼田之城
に誓居ス、然處家老面々打寄、君には御てうあいも無
之、幸イ岡谷兵部が娘美女に御座候被_ニ召寄_ニ可_レ然

と申上ル、尤に思召、兵部へ此段申聞せける、難有御請申、則吉日を改、婚義濟、扱又都に者建武二年より應永元年まで四拾年之間、京都吉野年號兩朝二立、吉野皇居も五拾貳年に而滅ス、一天帝王ト極ける、然處に沼田に而左衛門尉出世せんとすれば、新田より押寄、又新田へ組せんとスレバ鎌倉も無心元、如何せんと家中一等評議、先暫見合テ世中を御讒勘可遊段一統に申上、尤に思召なり、月日重り左衛門尉男子を設御歡際なし、然處に鎌倉より廻文、兩上杉管領相極、和田之餘類悉打果、天下一等納り、早々馳登り異義無之旨申上、則鎌倉在番可致段兩上杉より被仰附、浦嶋々迄足利殿一類意恨懷者なし、義景も鎌倉に相詰、沼田は家老取計、然處義景之男子當年拾五歳、父は鎌倉に御座候へ共、家老打寄、御父は當主たり共、御名を改則三峰山へ登り可然、御供師左京、眞庭大學、後閑舍人、右三人登山せり、社人和田大膳祓幣取並拜、沼田民部太夫平之家景ト名乗、則下向之威勢ゆゆしける、扱又鎌倉には兩管領位をあらそひ、意恨如山、表は睦敷候得共、數年御迎拜烈、嫡子成人御覽、御悅は際なし、家老之面々國之口法御聞被遊、少も違

亂無之段吉慶たり、然處大胡豐前、樽村、細村、南雲村ヲ掠押取、夫より長井川村森下まで押領せんとす、依之大森之後何寺より飛脚來り、右之段加勢可被下ト急に乞候、則物頭一組、大小之士惣人數三百人直に早馬を飛せける、大森も大勢一手に成て相待ける、豊前も是にたまりかね、永井坂へ引にけり、暫窺ける、坂下へ押詰、山手にかゝり、遠見を置、ぶせんも今はせんなしとて引にけり、自分も暫日を重て大森へ引取、沼田勢も直に歸けり、大森方眞下之一族に返禮に出陣之面々禮物持參せり、扱又家景當年拾八歳、御妻女なく、依之西山兵庫娘可然と申上、尤に被思召、右之段兵庫へ被仰附、難有御請申、吉日を撰婚儀濟、扱又大森壹等平日片品河通境論日々止事なく、此方よりも手痛く責防、重而手を不レ入、扱又義景老病に而醫藥不叶逝死ス、長男家景遺讓、正覺寺山後納葬、愼成月日送忘明、家中之面々繼目之御祝義申上、今度鎌倉へ出立之御供立被仰附、吉日改出仕有、急鎌倉參着ス、兩管領へ御目見濟、則父之遺讓無相違、安堵之御教書被下、在番被仰附、翌年歸國御暇、沼田へ歸、家中面々御祝義申上、此節京都にては

高氏、西國にては毛利弘元、赤松一等、駿河義元、尾張、小田原北條、甲斐信玄、越後之景虎、在國出立なし、依之兩上杉可責領關八州思召之出立也、其味方數を不_レ知、扱又家景男子出生御歡際なし、成人を待にけり、鎌倉兩上杉相論互に止事無、其上小田原北條に打破れ、關東數年之戰、管領長尾景虎壹人にて意振、其上一類共在所越後日々押領ス、箕輪之城主長尾信濃、白井之城主長尾上野之助、平井之城主長尾武藏守、然長尾信濃守沼田へ入魂有之互に睦敷、則沼田、景虎旗下と成けり、沼田家景嫡子當年拾五歳、氏神三峰山に登家名を改、御供師左京、忍田舍人、和田庄司、右三人社人和田大膳神前拜し、沼田上野之助平景貞ト名乗下向、家中一統に恐悦ス、然處に箕輪之城主長尾信濃守より飛脚來ル、其文に曰、我等今貴殿と入魂之上は、長く御身結び可_レ申候、依之治女貴殿娘に可_レ遣如何と申越候、家景歎けり、急ぎ家老壹人可_レ遣、則忍田舍人に申附、早速罷越大悦と申、然ば婚禮は當十一月差越可_レ申と相究メ、舍人御暇乞罷歸る、家景に右之段申上、御歡際無し、普請申附、御望之通り程無出來せり、十一月初旬に至り日限究こし、迎に大勢

指越、箕輪より沼田迄櫛之はを引、沼田着城内へ入にけり、家中面々上下御歡申上ル、景貞御夫婦睦鋪、父母之御怡不_レ淺聞へける、程過上野之助景貞、箕輪之城に着ス、信濃守出向御禮濟、一間に玄やうじ、景貞立廻りを見て御歡不_レ淺、貞方へもけんざん、日本一之士と申ける、貞方申様、當所鎮守は榛名大權現御座を立くわんじやう致旨申候、景貞尤に思召、別當に申附、沼田へ移ス、當所八幡關東初之八幡、是も勸請可_レ申ト、板鼻之八幡是也、戸鹿野村に建立、榛名權現は根岸村に建立、是より御領内惣鎮守也とて、人々敬參詣ス、其後根岸村を榛名村と申傳也、右兩社城主より御建立なり、然處に鎌倉管領小田原北條威勢強ク鎌倉を押破管領憲政を押拂、北條之天下之如也、依之憲政は武藏平井へ欠落、爰に暫住居ス、然處甲斐信玄責られ、爰にも不_レ叶、越後へ逃廻、景虎をたのみ、管領職をゆすり隱居ス、依之景虎位勢強ク、其頃白井長尾意元入道、色々知謀を通、入道申事も不_レ用シテ終に平井落城する、憲政爰かしこにて打れ、或は三國通りも有、或は沼田通りもあり、沼田之内下沼田と申處に百人計り待休にて打れ、湯原通り上牧小松ト申處に而

も打れ、或は出水に流れ、殘は越後の行とて道にて打れける、長尾信濃守、信玄に多度責られ、意玄入道も打れ、關東大方北條になりけり、沼田は景虎加勢にぞ、信州より中嶋年々數度の戰止事無、小田原北條越後領押寄、前橋、平井、箕輪、白井、沼田は越後領也、景虎と度々打出、又信州へ信玄打出兩度戰、不意を破る、然其年若成大將にて、其上管領印を持、京都より義輝教文被下、輝虎ト號、北條次男養子に致シまづか成、然所輝虎三拾九歳に而病死、此様子見て信玄之諸士勝頼に所、直に我妻郡不殘責取、横谷、西窪、湯本、鎌原四人打シタガイ、是を案内人にシテ沼田ヲ打取り可申、案内致せと申、眞田彈正忠手勢三千引取、我妻より中山通り責落、夫より沼田に急ける、程無沼田押寄、時之聲上にけり、思もよらぬ事なれば、あはてふためきまよいける、其勢雲霞のごとく也、家老面々打寄、兎角城を明降參いたすにまきは無聲をふるゑて申ける、依之景貞妻をつれ住シ城を忍び出、貝野せ通りを落行ける、家老共眞田に降參仕城を渡ける、矢澤但馬に騎馬相添、諸士を籠置、城主景貞出奔、尋出候は先地を無相違可被下候相觸ける、景貞

は妻子引連、夜に紛新田の方へ落行、然處金子美濃ト申もの惡逆無道者尋出し、先地に成申さんと、則跡をまたい、景貞に尋逢、眞田軍勢皆々引歸り候、先君御壹人は忍太御歸被成と申候、先久屋通り夫より町田觀音堂へ廻り、是より御志やうぞく御仕替、星口論より御入被成と申、是に御家來皆々打寄、御迎と申上る、左様ト思召、則本輪へ廻り門に入らんとする所、同待懸シ士共首打落、其首大將へ美濃差上、則御はうび被下、其上金子美濃儀は數代之主君ヲ打事、大逆無道之惡人也、依之我妻川原之穿へ入、諸人之見せしめたるべし、其後我ト死ス、海野能登、矢澤但馬、交代城代ス、然處小田原北條、關八州不殘納、片地沼田を殘置事、依之軍勢押寄手もなく責落、城代壹人たまりかね城を渡しける、其後猪俣能登守御せんぎきびしく、眞田ふせく、北條も末に成、秀吉公に責落され、扱又猪俣能登守ト出奔ス、關東權現公御領ト成、關ヶ原陣之時働に付、眞田安房守昌幸に天正拾八年入部、同伊豆守信幸、同元和八年大内記信政、同河内守信吉、同伊賀守信行、同彈正忠信成、六世に而天和二歳酉之十一月領地沒收、おしむかな沼田之城主

始眞田安房守貞方、本多中務大輔平八郎忠房之娘、其上權現公御孫也、昌幸沼田に暫居城ス、依レ之貞方御願に付、天守迄立る者也、大蓮院殿から町正覺寺ニ御靈供有レ之、奥方沼田領分に鎮守、信州之諏訪大明神勸請シ、村毎に立ル、其上武尊大明神、日本惣鎮守也、是又可ニ相立ニ被レ仰附、眞田安房守沼田物領之時節建立致候也、天正十八庚寅年也、眞田伊賀守迄六世にて沒收ス、其濫觴ヲ尋に、伊賀守元妾腹に而、沼田領内小川五千石にて部屋住之人、成人後何卒信濃守拾萬石心懸、常に其心のみ、然處に河内守に信州拾萬石家督渡、沼田三萬石は伊賀守へ渡る、心外に請取、城主ト成、夫より松代と觀音へ不レ通、是より同高に可レ致ト領分三萬石新檢を入、拾三萬三千石に打出シ、依レ之領分百性の過役申附、難儀日々に増シ、其上浪人ヲ高知行にて召抱、年々として不勝手に成、依レ之江戸兩國橋かけ替に付、何方之地頭成共望の方へ手金として三千兩成と之御觸に付、伊賀守信行、永城代之面々諸役人被レ召、近年不勝手に付、我領分に此通り之橋木有レ之哉、若年有レ之候は、三千兩請取勤仕度、并に當用にも成り、其上材木出方は尋役百性に

申付如何候と被レ仰出、諸役人御尤に被レ存候、御注文御請書差上、來年八月上旬に兩國橋場へ着可レ爲レ仕ト申上候、家老并山奉行普請奉行兼帶役なり、連判證文可ニ差出、之旨御下書被レ下、家老無レ之、根岸宮内川田押込置、假り城主舍人家老判、山奉行宮下七太夫、麻田權兵衛右三人連判證文差上、則三千兩之金請取、首尾よしと歡夫より藤原山、發知村、川幡村、佐山村、手別材木御注文之通見立不レ殘根伐致、出シ方は領分之百性役に申付候處に、未申酉三箇年大ききん、百性夫食無レ之、材木山出し成不レ申、年中懸りても里へも不レ出、數年按立られ候事、其上八月中旬之證文暮に成り而も城下へも不レ見、延引之返事も不レ申辨、其上大將家綱公度々之乗打立林樣之時も無レ之、不禮數度に至り、口數箇條御書申分ケ不レ立、伊賀守天奏之召青繩かけ、宇津之宮奥平能太夫殿へ御願、御家門之面々不レ殘所々へ御預ケ、沼田之城破却之仰附、依レ之御城請取、御上使には安藤對馬守、新庄因幡守、其外大勢無ニ異儀ニ渡シ、夫より天守引たおし、堀埋土居くずし、一城官廣原ト成、御代官竹村惣左衛門、熊澤武兵衛、新町士屋鋪貳軒殘し置陣屋と

す、然る處に借置し橋木材木屋長嶋屋長兵衛へ被_ニ仰附_ニ、半年計りに江戸へ着ス、百姓願に附、則貞享元年より新檢被_ニ仰附_ニ、酒井雅樂守様へ被_ニ仰附_ニ、五百三十石餘に相定者也、天和元辛酉より元祿拾五壬午迄貳拾壹年御代官所也、

棚守房顯手記

抑嚴嶋大明神ト奉_レ申ハ吾朝推古天皇ノ御宇端正五年戊申十二月十三日、此嶋ニ來輪御座テ悦玉フ、當社信心ノ仁等子息繁昌シテ福喜榮花ニホコルナリ、去程ニ清盛入道殿參詣ノ時、ウツ、ニ白金ノヒル卷シタル小長大刀ヲ玉リ、此劔ヲ以テ一天四海ヲ吾儘ニヲサムベシ、但惡行アルニ付テハ、子孫マデハ守ガタシト御神上セ玉フ、彌清盛福原ヨリ月詣テ在リ音渡瀬戸其砌被_レ掘ル、

一高倉院當社御參詣事、治承三年四月三日御着岸ナリ、二夜三日御社籠經會舞樂等執行、神主佐伯景廣位ヲ上ル、座主尊永大僧正成玉フ、社家六人、内侍三人位ニツク、黒木ノ御所ヲ被_レ立ル、御宿清盛内侍ノ宿所ナリ、瀧宮ニテ三井寺高賢大僧正、

雲より落くる瀧の白糸ニ

契ヲむすぶ事_{（寺名大文字院、歌）}うれしき

二夜三日在テ御乗船ノ砌、徳大・臣殿御詠、長濱ニテ、

立返る名殘も在の浦風に

神もこゝろをかくるゑら波

如_レ此津々浦々ニテ御詠歌在リ、福原へ歸幸成_レバ清盛喜悅無_ニ申計_一候、

一在時清盛入道殿高野山江詣テノ時、大師清盛ニ直ノ玉フ、越前氣比社サカン成共、嚴嶋ヲ造榮在ベシト被_ニ仰渡_一ケル間、舍弟賴盛ヲ奉行トシテ社々ヲ立替、鳥居々々ヲ立カヘラル、女院ヨリ伊與國新庄ヨリ米三千石送リ被_レ參、彌山ノ鐘宗盛寄進、治承二年春ノ比、鐘ノ文ニ在_レ之、

一推古天皇ヨリ廿七代安德天皇、源平兩家ノ取合節、平家懸負時、二位ノ尼先帝ヲイタキ參セ、長門國早伴ノ興_{（神）}ニテ海底へ沈玉ヒケリ、二位ノ尼御前ハ西海ヨリ流_レ上リ、在浦ニ留リ玉フ、其ヨリシテ彼崎ニ時屋ヲ立、阿彌陀堂ヲ立ル、今ノ道場ノ本尊之也、

一源氏ノ代トナル、先神主佐伯景廣斷絶ノ間、鎌倉ヨリ神主職ヲ改ラル、齋院ノ次官親吉ノ次男親實神主職ヲ玉リ下向ス、其以後當嶋色々儀不_レ及ニ書知_一也、

一酉ノ年大晦夜、西ノ廻廊ヨリ大黒ノアタリマデ火事焼ル、其節本願伊與大願寺覺慶戊申歲ニ廻廊立調也、

一寅ノ歲ノ三月十五日祭禮ノ夜、倉橋舟者酒醉ニテ高聲スル間、祭禮ノ警固衆論處ニ、船ヨリ神前ヘ矢共射候、是ハ一遍ノ事、次ノ日十六日、倉橋者廿日市河内カリ屋ナベ一ツノ口輪ニ付而、神領衆各同心ニ倉橋舟十六艘、アマサヘ人數十人討候、此内多賀居名字ノ衆四五人討ルノ間、カマカリ小晦日警固船百六七十艘當嶋ヘ寄セ來ル、色色神慮之儀云理立共、不聞明之間、社家神法ヲ振ル、然處敵舟杉ノ浦ヘ下リ、ハクチ尾ヨリ來リ、西浦、瀧小路、中江、在浦ニ火ヲ懸ル、折節雨風付而引退砌、多賀谷兵部少輔上下ノヒサシヨリ禮拜シ、其儘乗船スルトテ、鳥居ノ前にて兵部少輔ヲ爲初トシ、宗トノ者廿四人海底ニ沈、去程ニ與州ヨリ縁流付而茂見警固舟廿艘計ニテ合力ス、多賀谷討死ノ由ヲ聞、舟ヲ押モドシ、各警固衆申入候、兵部少輔討死ノ間、我舟計ヲ又アガルベン横楯ノ上ニテキシメク處ニ、風吹雨降ル間、何トカシタ

リケン、長濱ノ與ニテ沈ミケレバ、是ヲ見ケル合力ノ警固衆、勿躰ナヤ各逃ゲ押返ル、其後ハカマカリ荒果人躰ナシ、

一神主親實ヨリ四郎與親迄十四代、彼與親今出川殿御歸洛之時供奉、去辰ノ年二月當嶋船乘在、其年十二月八日於京都一病死アリ、兵庫福嚴寺ニダシ中在、神主斷絶間、小方加賀守、友田上野介在京ス、國本にて東西ト引分、東方五日市実戸治部少輔爲始トシ、櫻尾ニ立籠ル、西方ハ新里若狹守ヲ始トシ、藤懸ノ城ニ楯籠、數箇年取合也、在時東方ノ爲ニ合力ハ、武田元重神領ヘ打入發向ス、大野河内城聞逃歸ル、其以後己斐ノ要害ヲ取卷數箇月武田セムルト云ヘ共、銘城故落ズ、山縣民部在田今田三人、元重ノ一所成レバ己斐ノ城至出陣ノ間ニ、毛利吉川ヨリ山縣民部在田ヲ切被レ取ル、武田元重己斐ノ城ヲ差置歸陣す、隨而山縣ニ出張す、彼在所ニ二三箇年在陣處ニ、毛利吉川兩家ニ武田味方成シ笠戸心ヲ合ス間、今田ニテ刑部少輔元重討死す、其時吉木竹内備後守元重ニ所討死ス、一去程ニ神主與親斷絶以後、當嶋之儀、東方ノ時嶋本、

衆草津ノ羽仁ト同前ニ東方ヲ背處ニ、寅ノ歲正月十六日ニ東方成シ座主、兒玉治部丞ヲ始トシ、西方へ現形ス、宍戸役人其外東方成シ者共他出ス、同三月八日、五日市、廿日市、小方、東方小船七八十艘にて押懸リ、嶋中ヲ切返取、西方成シ者共合戰ニ負、山中ヘカ、リ、同九日早朝至大野渡ル、然處ニ羽仁美濃守、野間四郎ヲ契約シテ、淺沼各被レ成ニ合力、警固船百艘計にて五日市ノ永明院宮崎山ヲ城ニコシラヘ楯籠處ヲ、三月八日、同年十一月十二日未明ニ、永明院高木奎助、中村兵庫助、其外五日市小方衆十四五人討死ス、然間當嶋西方ト成間、羽仁美濃守ヨリ當嶋先役人新里ニ嶋ヲ去渡ス、然處ニ花谷山ヲ城ニ調號ニ勝山ト一處、巳ノ年ノ正月十四日ニ、五日市、小方、東方衆小船七八十艘計にて押寄ス、同日早朝ニ兒玉治部丞ムヘヲ射サセ死去ス、一夜陣ヲ取リ、十五日未明、東方ハイグンス、一上卿事西方ヲ縁類者として、親正ノ次男ケンギヤウ役ノ新太郎ヲ五日市ヨリ成バイ在、三月六日上卿家政親正孫ノ親家父子孫三人、能美ノ嶋ヘ他宿ス、彼上卿事無沙汰なりし風聞有ニ付て、三月ニ他嶋

所ヲ同年八月ニ歸嶋有、其外色々ノ事を書知ニヲヨス、

一 去程ニ神主家事、東西引合色々事共アリ、事多キ事成バ、不レ能ニ書記、

一 尼子伊與守經久、雲州因幡伯耆我儘ニ切平ゲ、至ニ當國西條ニ鐘ノ城ヲ切取歸陣ス、彼城にて市地圖

松爲レ初、其外宗トノ衆千計討死ス、頭場ヲ付ク、

一 大内左京大夫義興、辰ノ年ノ六月十八日京入す、明

ル年ノ八月十八日、京都中嶋眞木嶋三箇所ノ合戰

懸負、今出川公方様ヲ供奉す、細川右京大夫高國

畠山・左京大夫義興、其外大名各京都ヲ引退、至ニ丹

波國ニ下向、則八月廿二日、公方様三家、其外大名小

名各御歸洛アリ、連大寺船岡ノ合戰ニ大内同名間

田討死ス、子息掃部頭大力ノ間、親ヲ脇ニイダギ戰

フ所、大内間間田掃部頭高名非類なし、能美肥前

守、陶内江良藤右兵衛、同深野岩見守、千本ノ在家

ニ火ヲ懸ケ、連大寺、船岡、近江衆竹下、其外數萬儀

切果シテ、公方様京都御案座有天下ヲ閑給フ、

一 大内左京大夫義興在京十一年アリテ、爲ニ湯治一攝津國在間ノ湯ヘ入、其儘直ニ至ニ堺津ニ下向シタマ

フ、京都ヨリ色々御仰留ノ間、堺ニ三年在津して、永正四年辰ノ年ヨリ後ノ辰年迄十三年フリニ下向在、小方加賀守、友田上野介在京ヲト、ケ、大内ノ供奉シ下ル、神主職兩家愁訴候ト云ヘ共、論ズル物をバ中ヨリ取ト、神領大内義興爲ニ存知、己斐城番内藤孫六、本城ニハ杉甲斐守、櫻尾には此前ニ嶋田越中守など城番ス、其以後ハ前興親、陶ノ縁類ニ付而其名シミタル故、陶安房守内大藤加賀守、毛利下野守城番ス、然者午ノ歲防州ヨリハ至ニ佐東陶尾張守大將トシ、豐筑防長藝石無殘所ニ各出張シ、佐東藤九陳取、三月ヨリ八月迄在陣ト云ヘ共、其知るし成りし、去其新庄小幡、伴ノ大場縁類故か、彼要害一箇所手ニ被入計ニテ開陣在、

一 去程ニ神主ノ家事、於ニ京都ニ興親死去以後、辰ノ歲ヨリ到ニ未年ニ十六年斷絶ノ間、友田上野介興藤、未ノ年閏四月十一日、武田光和其外ノ國衆ヲ合力ヲ以、櫻尾入城シテ神主家ニナリ給、己斐ノ城ニ内藤孫六、櫻尾ノ城ニ大藤加賀守追下ス、石道本城ニアル杉甲斐守ヲバ廿日市後小路にて佐東衆ヨリ討、興藤被官ハタミ十郎左衛門尉トモニ討死ス

ルナリ、其後防州ヨリ陶尾張守、弘中下野守、大野到門山、未ノ年ノ八月ヨリ在陣アリ、同八月十八日防州ノ警固船ノ爲ニ大將、弘中越後守當嶋押寄ノ間、廿日市ノ當嶋ノ衆、廿日市ノ番衆共明退ク、嶋中ノ供僧、社家衆、町以下ノ者在嶋ス、然間平良宮内之儀、神主興藤存知事敵ナレバ、神を祭斷絶ノ間、越後守ヘ申處ニ、山口ヘ言上アレバ、御供米其外米錢急場ニ其調アリ、其年ノ御衣アヤ五端、衣三疋、越前綿三把調アリ、然處ニ陶尾張守ヨリ弘中越後家使者アリ、在嶋ノ間、社家衆ニ細々可レ在ニ參會、其外本口ナル社家被レ及レ見ニ一人ニ差被レ渡候者ト在、弘中越後守當嶋ヘ打入ノ時節、到而馳走ノ故、棚守左近大夫ト申社家ヲ可レ遣トテ、未ノ年十二月廿八日、弘中氏長一所吉井藏人沓屋ノ四郎兩人相別、至門山西に渡ル、則對面アリ御酒、サウ者山崎左馬助、然者深野名字文祝、肥留惣右衛門兩使以、神前兩社ヘ定灯可レ被ニ參メ、其時寄進太刀、御供料、請取歸嶋ス、其後申ノ年ノ正月八日至門山ニ參ス、其ヨリ師旦ナリ、未ノ年十月ヨリ申ノ歲ノ五月十二日まで色々事在、未ノ年石道小幡

興行防州家タルニ付而、佐東衆神領ヨリ取懸、武略ニ和談シ、三宅圓明寺ニテ落城、彼寺家ニテ親流八人腹切ル、十一月一日ナリ、去程防州警固船當嶋ヨリ五日市押上リ發向ス、船ヘノリバニ、吉浦野間刑部大輔、能美彈正忠、弘中越後守ガ一人野村民部丞、其外宗トノ衆廿人計討死引返ル、去程ニ申ノ歲五月十二日、武田光和、嚴嶋上野介、大野女瀧へ出張シ、防州陣ト對陣ス、大野ノ城主彈正少弼、陶尾張守ヘ内々懇望條、周防陣ト城内一味ノ間、同月十二日城ニ火ヲ懸處、佐東神領衆ハイグンス、追討ニ雜人原七八十茂防州家ヘ打取ル、此ヲ氣ヲイトシテ大内義興子息義隆發足之間、豐筑防長藝石殘所ナク、櫻尾ノ城ヲ取卷、陶尾張守大輕陣ニ岩戸山、吉見其外杉内、藤陣、天神山、篠尾ヲ被ニ陣取ル、去間大内義興、當嶋勝山ノ二重ニ屋形ヲ立、在嶋ナサル、日々に櫻尾ニ渡海ナサレ勒ヲ御覽ズル、七月廿四日櫻尾ニ重迄、陶衆切入合戰在、寄手勝屋ノ甚右兵衛ハ渡邊掃部助、青目喜三興藤ノ宗トノ十人計討死ス、櫻尾城内高名衆野坂藤三、絲賀中務丞、舍弟平左衛門尉、福田治部丞、三井右衛

門尉、其外各分取高名ス、然處ニ防州衆車ヤグラヲコシラヘ、北下ニ懸寄處ニ、城ヨリ笛大鼓にてハヤス、城内彌手ヅヨケレバ、吉見ノ三河守賴興和談ノ爲ニ調法ニ興藤ノ兄男藤太郎、十月十日當嶋ヘ渡海ス、義興對面在所至櫻尾下向ス、城内ヘ吉見衆之事者不レ及申、其外防州衆モ出入在、去程ニ酉ノ歲ノ越年義興御父子當嶋ニテアリ、然者陶之内野上右馬助爲ニ防州ノ守護ニ故、十二月廿八日ヨリ渡海アル、同深野ノ文祝、河内山圖書力行ナド、云者、棚守宿所ヘ越、元日ノ大番興房ノ宿コシラヘトモス、明ル元日ニ尾張守岩戸陣ヨリ渡海在、其外銘々各出頭ナリ、同正月廿六日御使者弘中越後守棚守召出シ、明後日廿八日御社參在ベシ、先年ノ目錄等上覽アルベシト被ニ仰出ル間、大内義弘孝弘政弘御三代ノ御參詣ノ目錄ヲ上覽ス、御神物兩社御太刀銘ノ物百廿貫文、社家三方舞樂料、瀧ノ宮ヘ十貫文、彌山ヘ五貫文、神馬十貳疋ヒザ・キ十二貫、宮引、樂頭田、道榮二十貫文、棚守請取配當ス、正月廿八日ニ社參アリ、御座敷神前ノクミ・レ天上ノ脇ノ歌仙ノ間ナリ、雜肴御樽十折

五合、棚守房顯進上ス、彼爲ニ御返禮ニ卅貫文被レ下
 ル、坊布施百貫事ハ岡ノ屋形ヨリ御參詣ノ間無
 レ之、然間興房正月ノ五日ノ立春ニ「又一重山あた
 らしき霞哉」發句御連歌岩戸陣興行ナリ、其外色
 色儀共多々在ト云ヘ共、書知スニヲヨバズ、去程ニ
 二月十日屋形ヲ陶尾張守岩戸ヨリ渡海在テ御申ナ
 リ、種々様々ノ御馳走、乍去山口ニテ物マネナリ
 ト事也、棚守宿所にて事也、同二月廿二日、義興
 大野門山ヲ御覽ニ御渡海御留守ニ、在浦ノ興ニツ
 ナグ御座船火事在、其日ノ船番能美孫三郎御船
 ニ在し御幟箱ヲ取持、興ノカジニ取附タスカル、
 然處大野ヨリ歸嶋アリ、御船其日ノ番成レバ腹共
 切セラル、カト思處ニ、サハナクテ義興上意ニ
 ハ、能美孫三郎若輩成る、御幟ヲ心懸テ取上ル事
 非類ナシトテ、防州於田布施五十貫足ノ所領被
 レ遣ル、世上ノ覺ヘ有難事也、去間陶ノ次郎興次、興
 房同前ニ在陣有しが、養性氣間、三月十八日先ヘ
 歸陣アリ、岩戸ヨリ舟にて興次下向有レバ、興房モ
 此興マデ送ニ被渡セ給給フ、嶋ヨリハ弘中越後
 守其外警固衆各棚守房顯船中迄參ル、時陶父子ノ

御別弘中氏長ヲ始トシ落類衰成^ル事也、義興ハ三
 月廿六日至三門山ニ御渡海ナサル、陶尾張守四月
 五日岩戸山ヲ陣カアレシ、矢野ヘ渡サル、其ヨリ
 志和ノ天野ノ米山ヲ取懸和談シ、備後黒山合戦ニ、
 興房ノ内江良三郎、屋形三嶋彦九郎、陶内深野奎
 助、同名平太郎、宗ト衆十人計討死ス、尼子衆ウシ尾
 ノ備後守米原ノ衆、備後越ナド數十人打死ス、防州
 衆備後ヨリ歸陣シ、淺沼之内野村、大藤備後陣ノ留
 守無本^{津及}ニ付而、世野烏子ヘ取懸、野村奎允ニ腹ヲ切
 セ和請在、
 一豊後ヨリ爲ニ合力ウスキ小原、兩田原、志賀、佐伯、
 一萬田、戸次、齋藤、筑後衆、三四箇國衆一萬計、陸路
 ノボル、アルイハ船にて上ル、西ノ歲ノ十二月廿七
 八日嶋着ス、明ル戌ノ年佐東對中城ヘ取懸ル、岩道
 新城佐東ヨリノ城間逃ニ明ル、去間防州衆對中
 コ、モリニ陣ヲ取ル、彼要害安藝國にてハ名
 城成ト云ヘ共、城ヨリ豐州衆ノ様鉢ヲ見及ビ和談
 シ、佐東内藤玄蕃助、シシヤ兩人腹ヲ切セ和談ス、
 然處ニ豐州於國元ニ不慮ノ難證有ニ付而、豊後
 衆歸陣ス、國衆各ヲバ國ヘ入ケレドモ、小原右並ヲ

バ頭崎船本ニテ討ハタサント在シカバ、豐州舟ノ着場ヨリ逃去リ、防州對中マナヲニ在宅ナリ、同志賀ノ大藏左衛門尉、小原同前ニ在郷ス、如何成儀共哉覽サシチガヘ死去スルナリ、其外色々事共アリ、書知ス及ズ、

一 去程ニ陶興房、未ノ歳ノ八月ヨリ至ニ當國ニ在陣ナリ、義興御父子ハ申ノ歳六月當嶋へ着岸アリ、西ノ歳嶋ニテ御越年、西ノ歳ヨリ子ノ年迄門山ニ御在城ナリ、然所左京大夫殿御養性氣ノ間、佐東之毛利ノ陣ヨリ陶野田、右田、杉、内藤、七月十四日當嶋へ下向アル、門山ヨリ杉民部入道、右田右京亮渡崎アリ、西ノ廻廊にてノ談合ナリ、然バ屋形ヲ山口ヘ下シ參スベシトノ儀定ナリ、去程ニ嚴嶋興藤兄子藤太郎病死ノ間、舍弟四郎ヲ掃部頭廣就ト號シ、八月廿日陶尾張守爲ニ調法ニ、義興ニ掃部對面成シ、大内大夫殿山口下向在、其子年ノ十二月廿日義興遠行アリ、瀧雲院是ナリ、去程上野介興藤、神領思儘ニ被レ納ル、陶尾張守ヨリ至ニ櫻尾ニ使者アリ、御代替ノ間、義隆へ掃部頭へ參上アリテ可レ然ト在ケレバ、寅ノ年ノ十二月十三日、當嶋へカドデアリ、

則山口へ下向アリ、同廿八日到ニ櫻尾ニ歸坂在、去程前神主興親、永正四年辰ノ歳死去以後、神主職斷絶、辰ノ年未ノ年迄十六年、上野介嚴嶋家建立事、未ノ年ヨリ丑ノ年マデ十九年、然處大内左京大夫義隆、同恒持父子、其外各子ノ歳ノ正月九日防對迄出張アリ、次第々々上ル、尼子ノ石州まで出張シ、子ノ歳ノ九月四日ニ、吉田青三井到陣取懸ル、然間義隆、恒持御父子到ニ岩國ニ出張在、陶隆房其外杉内藤諸勢、同十月四日、警固船二三百艘ニテ當嶋へ參詣アリ、陶隆房、棚守宿ニテヒキハタシ、只一ヨシにて則景舟アリ、其夜ハ在浦興ニ舟懸リ、未明ニ至海田着給、陶隆房神前儀兩社へ御太刀貳フリ、御神馬貳疋、御供被ニ御參セ候爲ニ名代ト一伊香賀對馬守被ニ殘置ニ社詣也、海田ヨリ中コウリヲ打登リ、吉田シロマメノタヲ陣ヲ取り、日々ノ合戦ナリ、然處ニ吉田ノ御師職棚守房顯被ニ仰付ニ事ハ、陶隆房ノ爲ニ使者ニ深野文祝以ノ調法ナリ、同九月廿八日、熊野民部丞、石田六郎左衛門尉棚守房顯(脫字カ)到ニ吉田ニ初而卷數上進ノ處ニ、則元就棚守、使兩人へ對面アリ、然間

同月廿八日、尼子衆青三井ヨリ豊嶋小原勤發向ス、尼子衆井原彌次郎其外宗トノ者共數十人討取、其頭ドモヲ棚守房顯使者元就對面ノ座敷ヘ持來ル、只嚴嶋大明神ノ被_レ召_ル御事ト大慶御満足ト喜悅ナリ、十月二日ニ從_レ吉田ヨリ祇遠神田爲_レ使來ル、櫻尾事防州ノ敵トモ見ヘズ味方モト見ヘザル間、彼祇園神田世上ヲ忍タメラフ間、色々ノ御寄附、太刀一腰、刀料足千疋、吉田ヨリ給_ル、同十月十日ニ又熊野左馬助、石田彦左衛門尉吉田ヘ進處ニ、同日十日吉田衆尼子陣ヘ懸ル、三澤三郎左衛門尉太ヲトコ、太刀ヲ光長四郎右衛門尉ガ討取、其外雲州衆數十人吉田ヘ討取、粟屋、井上、兒玉、各、高名セラル、其外數箇度ノ合戰在ト云ヘ共、城衆ノ一度モノカクヲトラズ、然處ニ大内義隆ヨリ細々被_レ成ニ御尋_ト弘中越中守對ニ房顯使者御奉書ヲナスレ共、其世上ヲタメラフ故參上申サズ、カクシノヘ御請共申處ニ、十月十一日ニ正長ノ一所石津藤四郎ヲ差上此者ト同道シ、早々罷下ベシ、嶋中にてはいかにもヒソカニ忍ベシと在しかば、嶋ヲバ夜ニミツダレ到_ニ岩國_一下向スト云

ヘ共、未櫻尾ノ衆共出入間、一國ニ忍_レズ、同十三日對面アリ、參上御祝着ニ被_ニ思召_一ルト在テ、御太刀一腰千疋被_レ御_下ル、其時ノ御立願ニ、神前御簾藏經、嚴嶋往古ヨリノ御祭禮神事、如_ニ舊例_一斷絶ノ所ヲ馳走在ベシと被_ニ仰渡_一、房顯歸嶋ス、然者弘中越中守正長、十六日ノ御供ニ爲_ニ御代官ト_一參詣アリ、氷上眞如坊爲_ニ御祈念_一七日在嶋、在南ノ攝受坊宿坊也、細々被_レ成ニ御出_一ナサレ參會申ナリ、此等之段其陰_ル無ク條、棚守氣遣不_レ及_ニ是非_一、其九月ヨリ鹿ノ死事限なし、御闔共ヲ行處ニ、神主ノ身上トナリ、

一外宮寶殿事ハイスル條、興藤下智以本願道本上人齋號_{再興在}、寅歲春ヨリ思立、子ノ歲ノ十月ニザウヒツス、遷宮之事十一月廿八日カベ代ノ衣十疋、布百端、舞樂布施百貫アリ、然而棟上十一月廿六日ナリ、社御棟ノ西東ニ弓ヲハル處ニ、東方ノ弓ヲル、ナリ、櫻尾ノ惡事也、去程ニ興藤遷宮ヘ社參アルベキ處ニ、大田衆ト已妻大藏大夫先陣後陣ノアラソイ在、時々取合にも成べかりし間、廿八日ノ遷宮ニハ社參無シ、岩國御在陣或バ、屋形ヨリ外宮御

遷宮ニ御太刀一腰、料足十貳貫文宛にて請取申、陶
隆房ヨリモ太刀一腰、五百文被^レ參ル、尼子吉田
陣ヨリ多古左衛門尉所ヨリ、先年當嶋在嶋ノ條、神
樂錢共至^ニ地御前^一持來リ、田内藏助ニ渡ス、防州ヨ
リノ儀をば三ツ返成^レ共、尼子ト櫻尾一味成^レバカタ
サズ、然者色々儀多在ト云ヘドモ書記ニ及ズ、爲^ニ
歲暮之儀^一從^ニ屋形^一御供ヲ御參セラル、大行事
民部ヲ請取、遣候、十二月晦ニ參ル、御直禮御衣御
所望間、大行事民部丞ヲ爲^ニ年頭^一八日到^ニ岩國^一參
上候、

一去程興藤防州へ手切申サル、間、興家三家ノ警固
二三十艘呼下ス、正月十二日ノ日也、然者防州衆岩
國ヨリ參詣せしヲ、現行間討べしと政所五日市宍
戸代官中村石見守、防州衆ヲ山へ追上ケレバ、卒ト
浦ヘヲリ下リ乗船引退、此段者嶋中儀也、吉田白
マメタヲ防州衆陶隆房ヲ始トシテ、尼子陣へ正月
十一日進陣被^レ寄ル、其夜事外雪成^レば不^レ知^レ之、
ス十二日伯耆多高浦ヲ吉田衆懸^テ登^リ切ヲトス、
五六百人一所にて討果ス、陶衆是ヲ見テ青三井
至^レ麓^ニ打出ル處へ、尼子下野守三四千程にてヲリ

下リ戰處ニ、陶衆深野平左衛門尉、神新右兵衛、宮
川善左衛門、脇藤右兵衛ハ宗トノ衆十四人、江良伊
豆守十三箇所手ヲイスレ共タスカリケル、尼子下
野守ヲ初トシ、雲州十五人一所にて打死ス、敵味方
躰當成ト云ヘ共、尼子下野守大將人躰成バ、陶勝
合戰トス、然者雲州衆十二・夜半計ニハイグンス、
少々追討ニス、此吉田事也、當嶋ニハ是等バ不^レ智、
防州衆ノ兵糧以下嶋中ニ萬々ト有、時ニ諸警固ヘ
櫻尾ヨリ可^レ遣由候處ニ、同十五日ニ防州警固船二
三百艘、黑河兵部少輔隆尙大將にて當嶋へ押上ル、
野嶋、吳嶋ノ船數三十艘餘、取物モ取あへず乗艘、
舟押向鳥居ノ御前にて戰ヒ興船ハ下ヘ押下、防
州ノ警固大船間跡ヨリ追下ル、然處櫻尾ノ被官衆
到ニ廿日市ニ逃退ケル間、房顯小舟にて大野ノ興
で黑河殿ノ迎ニ參リ、隆尙ノ船五六艘ニテ押上リ、
當嶋ヲ散ル、防州衆嶋中ノ兵糧一圓ニ散ス、去ハ大
内殿ヨリ棚守房顯所へ、弘中越中守一所石津藤四
郎乍^ニ警固^一隆尙舟ニノセ被^レ下ル、同十七日石津
同道シ到^ニ岩國^一參上申處ニ、同十八日御對面在、
今度嶋中棚守事無^ニ心元^一思召處ニ、無事參上、御

悦喜被^ニ思召^ニ陶トノ上意にて、御烏帽子、鎌倉ノ御腰物、琴ノ緒卷、金龍目貫、カウガヒ、御太刀、金福輪金具、皆金銘助宗被^レ下ル、神前へ御太刀貳ツ、何^レ茂銘ノモノ、神馬貳足、御酒計にて罷上ル、當嶋事房顯存知儘ナリ、二月一日御供被^ニ御參^ニル、御代官ニ正長參詣也、同二月十日被^レ成^ニ召文ヲ一聞、參上之處ニ、防州御師役ノ事、前々ヨリ德壽内侍爲^ニ存智^ト云ヘ共、二三箇度ノ御弓箭ニ在嶋モセズ、男ト付^{共カ}陸地ニ居たる事、女在^ニ無沙汰^ニ不^レ及^ニ是非一次第ナリ、何様思召儘ニおゐて一應被^ニ仰付^ニベシ、御師職之事、棚守房顯被^ニ仰附^ニル、子々孫々末代知行在^ニベシとて、防州日積破石十五石、西祭御反錢三十貳貫、御書御判被^レ下ル罷上ル、同二月廿三日ニ參上申、社家奉行神事、田同社家三方相物知行ノ反錢、房顯分ト愁訴、何^レ茂對^ニ棚守房顯^ニ被^レ成^ニ御判^ニ候、社家末代儀候、其外色々儀共候ヘ共不^レ及^ニ書知に、御神物事、御太刀貳ツ、御神馬二疋、月々參ル也、然處ニ棚守存分儘成間、尼子衆ヌギ捨置たる具足三十五兩、久河^{久河}ノ小山藤左衛門所ヨリ持參ス、四方竹ノ鍵三十本五貫文、三十五兩ノ

彼具足十六貫文ニモトメ、ヲカヤウ甲ナハネウ野筑後守破石ヲ預ケ候間、具足廿兩、甲十、鍵廿本、弘中越中守ヘ進シ候、三月十八日岩國ヨリ到^ニ門山^ニ御陣ノ寄候之間、房顯大野ヘ參上之間、具足廿五六、此内カタトリ具足七八兩にて渡海候て、弘中正長ニ加^ハリ候處ニ、屋形も被^ニ聞召^ニ、其外防州衆房顯ヲ御ホウビアリ、棚守石原、小者、中間十人計にて卷數御太刀計ニテ參上申ス、同十九日爲^ニ御代官ト、越中守社參ナリ、御神物御太刀貳ツ、神馬一疋、料十貫文、同日櫻尾山見トシテ防州衆到^ニ七尾^ニ取上リ引バニ内藤彦次郎、能野藤右衛門尉、宮川大藏大輔、其外宗トノ周防衆十人計討死、弘中三河守返合ズハ悉^悉計ベキヲトノ後日風聞之、同三月廿三日、七尾ヘノ御陣寄ル、櫻尾ヲ取ツメラル、去程ニ神領衆羽仁、野坂、熊野、其外家來ノ者共、對^ニ與藤^ニ二心有付而、四月五日夜半ニ明退ケレバ、上野介只一人城ニ火ヲ懸ケ腹ヲ切^切燒死給フ、明ル六日ニ櫻尾ヘ上リ、防州衆見物有處、與藤ノ死ガイトラボシキガ燒フスボリタルガ、モトバリノ髮筋ムスブマ、ニ在ケレバ、右田右京、神

代左馬助、彼、髮氣筋ヲヌキ取^テケル、是ヲ周防衆其
外各、不思議なる事共ノ御沙汰也、息掃部頭廣就、
太田、栗栖只一人供奉して、直ニ落行タマハ、タス
カリ給フベキニ、五日市ノ城へ案内有ケレバ、城ヨ
リ綱ヲ下シ、其ヨリツタテ城内へ入給フ、栗栖ハ
太田歸ル、去間明ル六日ニ、五日市ノ城へ被^ニ取懸、
同八日、穴戸彌七郎廣就ニ腹切スル、其時、有様掃部
頭事外セイヒヤウ強弓成ハ、防州陣矢ヲ三筋射、弓
ヲ切折、腹ヲ切^ラル、頭ヲ取り鞍ヲケニ入、弘中三
州ニ渡ス、●請取七尾にて九日御シンケンナリ、義隆
小手小具足、飯田石見守小手小具足にて懸^ニ御目
ル、其九日同日櫻尾ニテノ勝時ヲ上ゲ給フ、此等
ハ神領表事也、吉田へ御合力ノ陶、杉、内藤、毛利殿
爲^ニ初ト、至^ニ佐東ニ打被^レ入ル、武田光和ハ去年之六
月ニ病死タリト云ヘ共、洞ノ賀川、早川、齋藤、内
藤、^衆近見親流ノ伴、其外被官ノ者共金山ヲ持^テ口免在
城ナルノ間、陶大將陣南ノ御所被^ニ陣取^ル、其外
在々所々ニ陣取、毛利元就金藏寺ノ山ヲ陣取給
フ、此等佐東表之儀ナリ、去程ニ七尾ノ御陣ヨリ房
顯被^レ召ル、四月十一日ニ渡海申候處ニ、來十七八

日ニ御社參在ベシ、然者御宿コシラヘ仕ベシト
被^ニ仰出^ノ條、亂ミ^{符カ}ダレ事成バ、不^レ如意是非及
ズト云ヘ共、御請申罷歸ル、御宿等何トカト調申
處ニ、四月十七日被^レ成^ニ御渡海、二夜三日御逗留、
十八日ノ御社參如^ニ舊例、經會舞樂執行、御神物之
事、兩社へ御太刀貳ツ、何茂銘物、神馬十二疋、ヒ
ザツキ十四貫四百文、彌山ヘ五貫、瀧宮ヘ十貫、導
師布施トンキン二端、宮引ニ十貫、舞樂料百廿貫、
坊布施百貫文、房顯子大夫丸ニ扇五本、御太刀長光
ヲ被^レ下ル、十九日御歸嶋、社家三方ノ年寄共被^ニ
召出^レ、當社ノ往古ヨリ神事祭禮目録上覽在度
之由被^ニ仰出^ノ之間、神前目録等御覽ナサレ、何茂追
而可^レ被^ニ仰付^ニ之由にて被^レ成^ニ歸嶋^ル、今度者大
本ヨリ下ヘ御舟ヲ召レ、嶋ヲ爲^ニ御見物、七尾ノ御
陣ヘ御歸ナサル、去程ニ外宮端午ノ神事五十貫五
十俵下行在、房顯執行ヤブサメなど屢々御馬共ヲ
被^レ出^レ、諸陣ノ見物ハレガマシ、恒持御見物ナリ、
將又五月七日外宮ヘ御社參在ベシト被^ニ仰出^ニサ
レケル間、其旨存ト御請申處、御神物御太刀貳、
神馬二疋御供ヲ御參セラル、七尾ヨリ御參詣、則

御歸陣ナリ、然者佐東金山和談ナサレ、内藤、齋藤ノ者共ヤグラマデ追下シ、五月十二日討果ス、新羅三郎ノ鎧、武田家什物タリト云ヘ共、陶尾州ヨリ屋形ヘ被_レ進_レバ、五月十八日房顯ヲ被_レ召テ當社ヘ被_レ成_ニ御寄進_ニル、小松殿鎧同前寶藏ニ在リ、同五月廿四日、藤カケ七尾ヨリ佐東至金山御陣替ナリ、房顯六月五日參上、參上申候處則被_レ成_ニ御對面、佐東管幣_ヤノ御前嚴嶋ノ末社タル間、房顯ニ下サル、其以後社家ノ年寄共同道仕、棚守參上可_レ申之由候條、供僧ニハ修善坊祝師秀久、田内藏助親尊、至_ニ金山_ニ參上申處_スニ、嚴嶋往古年中ノ目録ヲ御上覽在ルニ、正月元日ヨリ歳暮_{マデ}ノ年中神事三千八百五十石、御倉下行ト在、其外リン時ノ御神事數ヲシラズ、内外定ル神事三百八十箇度ナリ、義隆御心中ニハ彼目録ヲ御覽ズル上ハ、如_ニ往古_ニ御調有度之由被_ニ仰出_ト云ヘ共、然者神領分上ハ己斐、草津、半役ヲ石道、吉木、五日市、北ハ太田ヲ限_リ、西ハ安藝大竹カギリ、小方、久岐_イ、黑海、大野、山郷_ニ四郷、平良、宮内所領算用在處_ニ、六七千貫是アリ、上意ニ往古ノ目録ニ三千八百五十石、此六七千_ヲ以

相當、御寄進在ベシト思召被_レ仰處ニ、奉行衆其外被_レ申ケルハ、上意ノ趣尤ニ存ル、雖_レ然其在所ヲ被_ニ切取_ニ、其所ニ城番被_ニ仰付_ニ、要害物置候程ノ所領無_ニ御座_ニテハ可_レ在_ニ如何_ニ候哉、其在所ノ御味方申侍共ノイサメ共ナサレズバ、其所智_チ在ガタクト在ケレバ、山里四郷悉御寄進ナサル、廿日市東西ノ地領錢卅五貫、轉經ノ三箇日御供、社家供僧ノ勘忍_定、此内壹貫八百文修行坊裁判ノ布施地蒔ノ代物也、平良宮内神領社領事不_レ及_レ申、社家當嶋御法度申附也、當社本願道本上人、小方加賀守、新里市頭成申ニ付而可_レ在_ニキウ命_ニカリケル處ニ、棚守房顯黑河殿ニ彼大願寺申理船_リニヌリコメ成シ、舟ヨリ下リ大願寺ヘ歸寺スル、修理行事親家事、尼子ノ師旦タル故ニ成敗スベキノ由被_ニ仰出_ニルヲ、棚守懇望申他宿ス、丑ノ歳正月十八日他宿在_レ之、明ル二月ニ小早川殿竹林内侍師旦ニ附而、歸嶋之儀小早川殿ヨリ被_レ理_ニ御申、内藤左京進申次、社家中次、弘中越中守兩人ノ御奉書ニテ、對_ニ棚守_ニ社家奉行事成_レバ、歸嶋之儀被_ニ仰渡_ニル、修理行事、小早川殿ヨリ土屋紀伊守棚守所ヘ來_ラル、去程ニ金山

ノ御陣替、到三入^一八月廿二日ナリ、三入願音寺御宿也、細々參上申、然所^ルニ棚守房顯ヲ十一月廿日被^ニ召出^レ、然者嚴嶋ノ神主職ヲ被^ニ仰附^一ベシ、小方加賀守息女ヲ相^ルダシタル間、杉刑部少輔ヲ被^ニ仰附^一間馳走スベシト在間、畏テ候ト申歸嶋ス、同十二月廿二日渡海在^ル、神主ニ相列ラル、神領衆惣公文政所大野兵部丞、野坂左衛門大夫、熊野玄蕃允、高井松丸、西カウチ、坪井、三宅、其外櫻尾ノ小近習共取集、三四十人着シ、南ノ攝受坊宿ナリ、所領之事、嚴嶋神主前々ハ一萬六千貫分現、其上播磨神邊庄七百貫、引聲料、其外ノ神事料、美作にも在^ル由也、伊與國新ノ庄ニアリ、先年中比ノ事カ、尊氏將軍筑紫ヘ被^レ成^ニ御下向^一、筑前タゞ羅濱ノ御合戰被^レ得^ニ御大利^一、御歸洛之時當嶋被^レ成^ニ御社參^一ル、三夜三日御社籠アリ、其時造果七百貫、己斐、草津三箇所ヲ被^レ成^ニ御寄進^一ル、昔嚴嶋領事、寺原、北方、南方、高田、原、西條、黑瀬、天ノ庄、佐東、ムギ田、中小師、緣井、管幣ノ御前、三田、井原、長田、其外所々ニ神領在^ト云ヘ共、弘袖故カ、ムヨリ返ノ國衆切取レ、神領六七千貫之内ヲ平良五十貫、其外

ニ貳百五十貫計智行ナリ、其ニ惣公文政所小給人相副ラル、取合、八百貫程分在^ニ分現^一、去間當社ヘ寄進神馬ノ事、先年者神主殿取^ル、ト云ヘ共、與藤ノ以後ハ棚守被^レ下^ル、丑ノ歲ノ正月十八日以來寅ノ歲ノ二月迄八十三疋參^ル、其内可^レ然馬ヲバ方々ヨリ所望也、惡馬共ヲバ人ニ遣セ共、上□スル間、神馬下^リ馬之事、前々與藤マデハ神主存智之儀ノ間、當神主殿ヘ可^レ進之由言上候處ニ、近頃之儀ヲ申タリトテ、事外ノ御ホウビニテ神主景教ヘ被^レ遣^ル、御衣ノ召下シ社家ヘ給^ルナリ、去間東坊公事共、先住寺元真他出間、神主景教東坊ヘ入寺アリ、然間當社ノ社家衆ヲ大内殿御存分ニハ、防州山口神明祇園又ハ氷上明現ナドノ社家ヅレニ思召^ル、處ニ、當社寶藏ノ目錄ヲ上覽在^テ、其以後事外ノ御ソシキヤウナリ、河津筑後ヲ以^テ神主景教ヘ被^ニ仰出^一サレケルハ、神主ト社家ト當輩ト目錄ニ書記置^ニ間^一ニ、於^ニ向後^一ハ無禮にては不^レ可^レ然之由被^ニ仰渡^一レケレバ、其後ヨリ對^ニ社家^一神主腰ヲクリ在^リ、去程ウラベノ神主兼右京都ヨリ三入之至^ニ御陣^一下向在^ケレバ、ヤガ而當嶋ヘ下向アリ、宿坊大乘坊

則於三神前護摩行事二七箇日執行ル、御被其外神通少々神職相傳アル、上意ヨリ之儀者、棚守房顯には月次ノ神事ヲ相傳ベシと神主兼右へ被ニ仰渡ケレバ傳申ナリ、此御神事ハ千貫計モ入事成ト、御旦那ハ大内殿成バト存知傳申也、兼右ハ卅日計在嶋在、到ニ山口ニ向アル、去間義興ハ寅歲ノ六月廿八日三入ヨリ到ニ河本、赤名へ先勢取懸ルニ、七月初比、赤名ノ城にて熊谷平三、陶内粟屋内藏助其外宗トノ衆廿計討死ス、然共赤名ヲ退治在、小笠原降、其外石州御手被入、十月廿日ニ雲州馬津は御陣經羅本ニ山陣ナリ、卯ノ歲ノ御越年アリ、卯ノ歲ノ二月廿八日、星坂へ進陣ヲ寄ル、富田、月山城、間五六町ニテ細々合戦アリ、然間雲州衆現形者共皆心替申間、五月七日防州衆敗軍アル、アタカイノ津迄義隆介殿下向アリ、義隆乗船アル、介殿別ノ御船ニ召ル、時、介殿、細川是久、右田彌四郎、福島深三郎、四人討死ナリ、屋形舟にて退被下ル、陶内藤陸地退ケル間、雲州衆門人共七八千にて跡ヨリ送ル、去レ共追返し追モドシ、退時サツカにて陶内深野勘解由左衛門尉ト内藤内能野藏人大夫申

結ブ儀有て、深野、能野、藏人ヲ馬ヨリ切テ落ス、然間内藤下野守馬ヨリヲリ、陶尾張守ニ向、如レ此子細可レ在ニ如何トノ給ひケレバ、深野勘解由左衛門尉ニ腹ヲ切セ、其後陶内藤同道アリ、屋形ノ供奉シ山口下向アル、於ニ雲州當國ノ衆小早川興尹於ニ八幡ニ主從十餘人腹切タマフ、毛利殿無事ニ歸陣ナリ、此等ハ雲州山口ニテ事、去程ニ土州一條殿御息所ハ、伏見殿御息女、一條殿ノ御コケ子、介殿恒持ノ御爲ニハ御袋ニテ御マセバ、介殿御見參ノ爲ニ、卯ノ年ノ二月ヨリ五月ニ到テ御在嶋アリ、神ハ九前、王ハ十前ノ位トテミダレ成ル事共多々在ケレドモ書記ニ及ズ、去間雲州ノ敗軍、五月四日五日風聞ノ間、同七日當嶋ヲ到ニ小方、御宮様送參セ、小瀬ニ一兩月御逗留在、其後山口ヨリ迎參御下向在、介殿ハ雲州にて御死去、去バ介殿舍弟チャチ若君、實壽寺ニナシ被レ參レ、宮様同前ニ實壽寺ニイタラセタマフ、

一 去程ニ萬里小路殿山口へ御下向ナサレ、御歸洛ノ時御社參在、御宿坊大聖院、大永ノ辰ノ歲ノ十月廿八日二夜三日ノ社籠ナリ、參宮ノ時ノ儀式、山口ヨ

リノ御中間衆十四人、左右ニ七人宛、白ハレニ立烏帽子ニタイ松ヲトボシ、御供ニ大内ノ樂人山井ノ安藝守御劔ノ持、御神物丸サヤノ御太刀計也、

一廣橋殿山口ヨリ御上ニ參詣、御宿坊道場神泉院、當社二夜三日ノ御逗留ナリ、棚守宿所へ御出ナサル、懸香ヲ五十ツ、ミ持セらるゝ、

一御本所一條殿京都ヨリ到ニ土州ニ御下向ナサル、當社ヘ次デナガラ御社參在しとて御參詣アリ、岡長兵部丞所御宿ナリ、卯ノ歳ノ月迫ニ御渡海條、辰ノ歳ノ御越年當嶋にて在、明ル二月ノ末まで御逗留ナリ、山口ヘ御下向ナケレバ、從義隆ヨリ爲ニ使者右田左馬介渡海色々御進上物ナリ、棚守房顯事、土州一條殿御宮様、チャチ若君、於ニ當嶋ノ御宿ノ故、別而細々得ニ御意、御鞠ノ御合計共にも參合候、一御本所二條殿、天下ヨリノ御事、防州雲州ノ和談ニ付而御下向ナサル、一條殿御在嶋ノ間、岡ヘ尋給ヘバ、兵部丞前ノ小家ヲ二條殿ノ御宿ニ一條殿ヨリ被ニ仰付ラル、五日御逗留在、二條殿ヨリ御使、難波一條殿ヨリハ持明院殿ヲ二條殿ノ御使者ニ相列、房顯所ヘ被下、天下ヨリ山口ヘ御下向ナサル

ル、御案内者イタスベキノ由被ニ仰出ル、御案内者ノ事ハ不レ寄レ存ト上表申、到ニ小方ニ御舟ノ事、其比ハ小原中務丞當嶋ヲ存知、政所代事能ニ兵部丞ニ申付御下向アリ、周防ノ對中まで御馬二疋、人足五人申付ナリ、去間一條殿ハ三月廿八日ニ當嶋ヨリ御歸洛在、

一九條殿山口ヘ下向有べしとて、當嶋ヘ御參詣アル、棚守被レ成ニ御尋ル、然者山口ヘ吹舉之儀被ニ仰出之間、無ニ志案ニナガラ、一仁軒管務殿ヘ書帖ヲ進處ニ、一圓無ニ取合ニテ防對ヨリ追返シ被レ申ルニ、其儘御上洛ナリ、

一義隆ヨリ於ニ當社ニ被ニ仰附ル方句御發句、四月十五日「影うつすみとりや嶋ね夏木立」、此ヲ卷頭にて、同十八日ヨリ先千句ヲ三日興行シ、到ニ八月十五日御成就にて、千句三箇日ノ興行、會所朝座ナリ、連歌仕京衆、等俊、道休、有定、宗雅、大休、其外地下親尊爲ニ始ト、連衆多々在、將又二三箇年有て防州ヨリ萬句被ニ仰付ル、今度ノ御發句「さはまかの月にさやけき宮ゐか那」、是ヲ卷頭にて、八月十八日ヨリ十一月至テ、此内千ク、クンタウ千句にて

興行申候、

一毛利殿當社御信心事、前廣元ヨリノ稻光リ、太刀奉納ナリ、神馬十二疋被^レ引事在、興元御參詣、四月十八日事也、神物等書記ニ不^レ及、御宿岡兒玉七郎左衛門尉所也、於^ニ國衆^一モ取分當社ヲ御信心ナリ、去程ニ尼子出張之御立願哉覽、棚守房顯備後ノ中山ヘ召ル、間、參ルニ、吉田ノ小山西浦之事神領タル間、嚴嶋ヘ寄進有^レベシ、然者年中ニ一町可^レ立様ノ神事ヲ取行^{ベシ}被^ニ仰渡^ル、町共立^{ベキ}神事成ガタク候、天神堂ヲ立ラレ、會所ヲ被^ニ仰附^一、月次ノ連歌興行申^{ベシ}、其上にては六月十七夜管絃ノ稽古事二日ヨリ到^ニ十七日ノ夜^一大小七箇度ノ寄合共候、二日ノ當番ニ社家之儀ハ不^レ及ニ申ニ、地下御奉公衆、其外町人至^ニまで貳三百人呼^ビ、酒飯調一日遊覽候、此御酒吉田ヨリ當嶋ノ各ヘ之事由申候、六日九日管絃ノ稽古、十四日ニハ供僧、社家寄合、十六日ハ船酌、十七夜管絃過、大元ノ興にて酒飯在之、此等之儀社家各合力ナリ、去間房顯五十二ニ成年、歲佛詣申處一條殿當嶋ヘ御下向之時馳走申ニ付而事外御懇ナル不^レ能^レ申ニ幸之儀共條、參禮申セト

ノ御事成共、大内殿案内モ得^ズ、參禮之儀不^レ寄存由申處、玉體御眞筆三十六首ノ歌仙被^レ下畢、近頃面目ノ次第、鞠ノ門弟之事、飛鳥井殿ヘ參、於^ニ京都^一得^ニ御意^一也、參宮申高野山罷上ル、藤坊一會興行ニ「所から聞名も高し時鳥」ト申候つる、於^ニ神明^一ハ御神物自分之儀不^レ及^レ申、屋形陶殿ノ奉書タテニ神馬共參候ハ、言上候喜、

一去程ニ、大内殿丑ノ年ヨリ寅ノ歲まで、十一年神領御存知ノ處、陶隆房成めゆる天滿ハシカン事哉覽、無本到來條、山口之事ハ不^レ能^レ申ニ、毛利殿ヘ申談、八月廿日、當嶋之事、陶之内大林我々嶋中ヲ隆房ノ裁判ナリ、櫻尾之儀、驚頭殿城番成故、惣公文新里等、藤懸ヲヘテ、コウソ共、調驚頭殿ヘ以^レ使陶方申^レける、山口之事、杉内藤申談、屋形ニ腹ヲ被^レ切申之間、櫻尾ニ被^レ明^レ請取可^レ申ノ由度々被^レ申ければ、別明渡シ山口下向、
一然處ニ、佐東金山事、爲^ニ城番^一麻生與太郎、福嶋、其外ノ防州ノ給人衆五六十人在ケルヲ、吉田ヨリ出張在、福嶋ナド心寄ノ條、安々と金山請取ル、其外伴大場ニテハ吉田ヨリ存知ナリ、

去程義隆八月廿八日、屋形ヲ寶泉寺へ退給、是モ公家衆多々在山口ノ故ナリ、郷人共ヤカタ入ウツリ、ランボウスル間、陶ノ番衆共氣ヲウ事限なし、其後寶泉寺ノ屋形衆各、逃陰レケレバ、義カタ十二三人にて長門先崎ニテ小舟ニ召レ、何方ヘモ下向有ベキヲ、浪風惡ケバレ御舟ヲコギモドシケレバ、對念寺入寺アル、然處ニ陶衆千騎計にて取籠參ル上、義隆七ニ成セ給フ若君、二條殿、御方様、十六ノ小幡四郎、十六大内冷泉院、天野藤内、三條殿内衆、八幡ノ祝右延、以上十三人御腹召レ討死ナリ、其外ノ衆屋形方成し衆討死ナリ、陶一味衆被_レ申談、如此處ニ備後ノ江田玄蕃助對_ニ當家ニ無沙汰之條對治有ベしとて、防州ヨリハ江良丹後守爲_ニ人舩_ニ出張ス、毛利元就自身出陣アリ、翌日幡返ノ要害切取ル處ニ、防州ヨリ此城ヲ吉田被_レ渡レタラバ可_レ然カリシヲ、陶衆常座ヲ相物レ共、後々ニハ毛利殿知行ナリ、

義隆腹ヲ召レケレバ、大内人體無ケレバ、陶尾張守、杉内藤、弘中三河守隆兼、豐後大友殿舍弟八郎殿ヲ

呼越、大内ノ家ニ取立申ス、吉見陶ノ半前々ヨリヨカラヌ間、此度到_ニ吉見ニ、防州衆被_ニ取懸_ニルニ、斯處ニ陶方ヨリモ毛利殿自身御合力有_ニベシト、度度使者催促在ケルニ、サハ無シテ、寅ノ歲五月十二日、己斐草津ノ城ヲ取、櫻尾ノ城ヲ取、神領發向、宮嶋ニハ陶内深野小右兵衛番衆成シヲ失追フ、當嶋吉田ノ裁判ナリ、神領衆悉ク吉見在陣ノ事成バ、神領侍給人衆女子共不_レ及_ニ是非_ニ有様也、然者吉見防州陣案ニサヲヒシ、西日ク和談シ、陶歸陣成レバ各歸陣セラ、在陣間六月十九日到_ニ富田_ニ石見後卷ト號、藝州警固二三百艘にて富田發向ス、野間ノ彦太郎防州方成バ、草津羽仁源七ヲ防州ヨリ城番ニ入レケレ共、和談シ野間城ヲ明レバ、羽仁源七佐東對中ノ町にて討果ス、十八ニ成シガ無_ニ非_ニ類_ニ働ヲシ、名ヲ末代ニ上ル、其後六月五日、防州警固船百計至_ニ當嶋_ニ押懸ト云ヘ共、城等ヲカマヘフク間、嶋ヘモ上ズ、陸地ヨリハ山代衆其外防州口二三千、平良宮内ヘ打入ト見ヘシガ、陶内宮川甲斐守馬ガハヤリ、ガケホラヘ落死ニケリ、彼仁在京舟岡ノ合戰以來、度々高名セシ人也、兩弓カケノ右ノ

弓カケヲハヅシタルバカリ、此ヲ見ル人カタマリ
テ如レ此ト沙汰シホメル成、寅ノ年茂暮卯歲ニ明
レ、警固四五十艘にて細々當嶋ヘカクル、斯處ニ江
良丹後守、三月十五日ニ、當社祭禮ニ、警固百五十
艘ニテ佐東^{サト}入ル、鹽舟ヲ二三艘浮取ニトリテ返
リ様ニ當嶋ヘ押懸ル、其砌參詣ノ衆共ニ、先年ノカ
マカリ、多賀居ガ時ノ古物語共申聞セシ處ニ、江良
ガ舟ヨリ一人海底ニ飛入ル、防州警固舟矢カ、リ
ニ無ケレバ、兩方矢ノ一モ射チガヘヌ、其儘敵舟下
向ス、去程成^ニ何儀共哉覽、明十六日弘中隆兼ヘ陶
尾張守被^レ頼江良ガ成敗アリ、神領衆江良丹後守無
ケレバ寄親ヲ矢計持惡ケレ共、小方大竹ニ在ケル
ガ、卯月八日ニ小船七八十艘にてヲシカ、ル、與
クガにて射クサラス、御本地堂にて管絃經在、サテ
引退、其次ノ五月十三日、周防警固百艘計ニテ押上
リ、在浦ヲ燒斗^{ホカ}フ、兒玉三郎左衛門尉討死ス、其儘
敵舟引退、其以後ハ陶尾張守山里黒瀧ニ在陣在
間、此方ニハ狼カ藏ヲ要害^ニコシラヘ、迎城ニセラ
ル、其間陶善門ノ名ヲ禪^{ぜん}キウト付、九月廿一日當嶋
ヘ押上リ、宮崎ヲ大將陣トシ、弘中三河守ハ古城ヲ

下陣取^リレ、其外ノ防州衆思々ニ、陣ヲ取^ル、斯處ニ吉
田ヨリハ廿三日地御前^ニ到テ出張、國衆各聞懸ニ陸
路ノ沖、西大立石迄被^レ出^ルケル、船數無ケレバ、興
家使者ヲ與セラルハ、折節土州表ヘ寄^ルベトテ乗船
ノ砌ナレバ、先安藝内ヘ合力スベシトテ、船數二三
百餘艘ニテ被^レ下^ル、去ハ當嶋城心モトナシトテ、
熊谷信直廿六日船數五六十艘にて當城ヘ入給フ、
城氣ヲイ不及是非、然間廿八日ニハ、興家ノ警固二
三百艘下^ル間、明ル廿九日暮ニカ、リ、元就乗船在
テ、包ノ浦ヘ舟付テ、バクチ尾ヘ上リ給フ、興家其外
國衆ナドハ博奕尾大將陣ニ時ノ聲ノ上リシ後ヲシ
上ル、陶弘中一矢モ射ズ、西山ヲサシテ引退^ル、
小早川隆景追懸ケ給ヒテ、西山ノタ尾^ニにて陶内三
浦ニ懸合^ニ戰行フ、隆景ノ内南ノナニガシ山縣勘次
郎其外五六人討^レ、小早川殿ア^ニ穩也、三浦越中ハ
一所ノ者廿人計、隆景ヘ打取給フ、陶ノ禪^{ぜん}キヲハ
其ヨリ下、大江ト云所にて腹切セ申ス、宮川市允カ
イシヤク、其キハまでハ五六人在^ルシナリ、爰ニ陶内
柿並佐渡入道我頸ヲ取^リ、禪^{ぜん}キヲノ頭トシ持出^ルベシ
ト申セバ、脇彌左衛門尉ト云新里内者クビヲセンノ

ツ、ミニ入、兒玉周防守サ、グレバクビヲモ請取、彌左衛門尉ヲモ討ケル、然ニ兒玉新五郎小船にてヲシメグリ落人ヲ見メグル處、年十二三十五六ナル落人、若衆共七八人タスケ舟ニ乗セケル處ニ、ヲヂ周防守見及ビ、如何ニ新五郎人ヲタスケダテコト身ヲ失ナト在ケレバ、其内年ノマサリタル討ベシト在ケレバ、弘中越中守被官池内丹後守ガ行合兄弟、兄ハ十六弟ハ十五成シガ、兄ハ我ヲ打給ヘ弟ヲタスケ玉ヘト云、弟ハ我ヲ打給ヒテ兄ヲタスケ給ヘト在ケレバ、兒玉新五案ジワズラヒ云ヘ共、年マシノ兄ヲ討、不レ及ニ是非哀成次第也、此等兄弟ハ房顯先年於山口にて約束ノ者共、棚守子共佐東松尾ニ在ケレバ、彼池内子他人法師ト子共歸嶋之時召連渡海ナリ、其後二箇月在テ五六人下ス、三浦事ハヲヂノ越中深野了圓召連上ル、天野中務少輔隆重ヒン取房顯ニ給ル、于今在嶋ナル故、社家一分也、

一隨而弘中三河守隆兼子息源太郎、人數二三百にて龍ノいはニ取上リ、十月一日ヨリ三日まで山中ニ取卷レ在しが、弘中備中守、同中兵衛、絲長加賀守、

宗トノ者人數ホソメント、十二三人タスケ申ベシト在ケレバ、眞ト心得、彼者ヒン取ル、殘ル者共ヒトリ返ト落ケレバ、弘中父子計ナリ、爰ニ攝津國住吉ノ了善ト云出家在しが、弘中三州別而懸ニ目ヲレれし間、弘中父子一所ニ腹ヲ切ル、先代未聞之儀也、隆兼ノ頭ヲバ淺沼洞ヘ取、息源太郎首ヲ熊谷洞ヘ取ナリ、陶弘中ヲ討レバ、山中ヲサガラベキ事成レ共、江田安藝新五郎討レネバ、彼者討ントテ三日ノ夜モ元就一夜陣ヲスヘ給フ、斯處天野紀州隆重ヘ江田新五討取首到來スレバ、彌山下向アル、頭取集八千計モアリ、然バ地ニクビヅカヲツカセラレベシト在ケレ共、元就ノ御志案在トテ、クビヅカ返リレズ、其後到小方岩國ノ城ヲ切取、久河杉治部大輔ニ腹ヲ切セ、千束ノ要害ヲ切取、ス、マニ下向アリ、彼城ヲ切取、富田若山ヲ明退間、山口ニ入給フ、大内八郎義長、陶鶴千代丸五歳成シヲ、野上隱岐守供奉シ、長門谷ノ寺迄退下ル、先勢トシ天野紀伊守隆景追懸申シ、義長腹ヲメス、陶鶴千代幼生成バ、野上隱岐守差コロシ申、野上其刀にて腹ヲ切ル、哀成シ在様也、然間先防長切シタガヘ歸陣アル、去

程於當社ニ萬部御經在、元就對ニ房顯ニ被ニ仰渡ニケルハ、當社ノ御事者不レ及ニ申、從前ノ分在領地等寄進申、灯共ニ灯明領寄進申、置ニ外宮ニ定灯參度由被ニ仰出ニル、外宮棚守無調法ニ被レ及ニ御覽シニ如何在ベシト被レ仰ル、御意尤存ル、雖然彼棚守去年八月以來、地御前町人等悉失退處、彼棚守五六人ニテ社頭山取籠神前御コウシドモ開立、我等ヨリ灯明共參セ候て、于レ今外宮ヲ積タル棚守にて候ト申理ケレバ、左様之事ヲバ無ニ存テ、如此之儀尤事ニ在トテ、山里之内鳥屋原十八貫目ノ在所外宮棚守ニ被レ下ル、有時小早川殿吉川殿ノ爲ニ御祈念ニ黃金二枚、元就ヨリ被レ下ル、一枚ハ舞樂料ス、一枚ハ外宮、長屋ヲ立ル、先年大般若經房顯寄進申ス、御輿ナド調申候、棚守房顯ナリ、御旅所御供屋立置也、一聖護院殿被レ成ニ御下向、吉田ヨリ御馳走ナリ、當嶋中之儀一會ヅ、興行、房顯千句等執行、其外別而得ニ御意ニシテ、去間ナ内殿重代ノ千鳥荒波亂髮菊作小林長太刀思々ニ取持、吉田へ進上處、右馬頭隆元請取給ヒ、我等事ハ義隆ノ以ニ扶持ニ家ヲ續ギタル毛利成バ、御恩忘ザル我成レバ、坊長兩國之

事度不レ寄レ存共、獻進バト存知行ス、彼大内殿御重物、我家ニハ如何シ、大内神へ願ケ寄進仕給フ、小松殿ノ時自代恩出ル、然所ニ荒波ノ刀上意ニ御覽在度之由にて、御奉書度々アリ、此由棚守へ吉田ヨリ被ニ仰聞ニ處ニ、房顯申事ニハ、平家清盛御時代之事ハ不レ及ニ申、賴朝以來御代々には天下ヨリ銘物ノ御太刀刀共ヲ御寄進社候へ、御神物御所望ノ御事ハ神慮ヲ不レ存之由ヲ度々申上處ニ、尤ノ申様也、然者對吉田此等之段以狀可申由條棚守房顯ガ狀ニ、進處荒波亂髮ノ大刀ニ房顯カ代ヲ相州天下へ上セ給フ、一兩年過テ上野兵部大輔殿ヲ下シ在、彼荒波ノ爲替、先度進上被ニ申シ亂髮ヲ持下リ、是非共荒波御上覽在度之由被ニ仰ケレバ、吉田一乘院ヲ上野殿ニ相州渡海條棚守重而不レ及難受可進上ニ覺悟ス、然處ニ石州澤ニ逗留候長永ト云シ出家候シガ、於當社ニ十端十萬枚ヲ執行度之由被ニ申ル間、四月廿八日護摩行事執行神前ノ御事成バ、寶藏繪本尊取出懸サスル處ニ、カナオカ□一ブク失ル無ニ勿躰ニ事ト沙汰スレ共、ウセタル間不レ及ニ力ニ處ニ、五月廿八日荒波ヲ取出日客人御前上シトミ

ノ上ニ此繪在^リタリトテ、宮バウヘ持來ル、是社先月
ニ失タル不動成トテ、事ノ子細共書付、荒波取出^ス日
寶藏ヘ奉^レ納ル、去間荒波ノカハリニ亂髮ヲ奉納
申、荒波ヲ取出シ於^ニ神前^ニ御番^ニ上奉^レ置リ、此刀
神慮ヲ不^レ存事成^レ共、當社末代御事間、御神ヘ御
返シ有^ニ様ニト祈念申、上野兵部太輔殿ヲ神前ヨ
ビ渡シ申時、天下御代々ニハ御寄進共社候、神物
御所望之儀不^レ成^ニ舊例^ニ事ト申渡處ニ、上野殿返ト
ニ社管被^レ申様尤ニ存^ル上意ニモ、御前ニ有^ア相シ若
輩達、荒波ヲ御上覽アラデハナド、申セバ、アサア
サト思召タル事ニテ候、此刀則返シ可^レ進トト、テ
請取歸^ラル、荒波上^ル然處^ニ此刀上^リシヨリ天下
不慮之儀共到來シ、若君様など御タカイ在^シカバ、
彼荒波常榮寺新當頭堂ノ京都宿坊マデ返サル、
此由ヲ申下ル、ト云ヘ共、此刀於^ニ京都^ニモ卅萬足
ハスベシト在^ケレバ、彼新當堂者、其儘京ニカキ返
サルベキ沙汰無^シ處^ニ、彼ガ預^リ手ノ東福寺ノ賢
西堂隆元ノ逡行成バ、爲^ニ御吊^ニ從^ニ公方様^ニ彼ノ賢
西堂ヲ下郷在^ル、比ハ七月六日ナリ、岩國永興寺丹
東堂、雲州嶋根ノ陣ヘ上^リ、七月六日下向シ、南ノ

民部大夫ガ所ニ着^ル處ニ、賢西東永興寺ノ菊藏主、京
都ヨリ同日六日下^リ合、永興寺ノ同宿シ給、然者此荒
波ノ刀ヲ持下、新東堂ニ渡ベキ由物語在^ケレバ、其
比常榮寺山口ニ下向事ナリ、此刀ノ新東堂ヘ渡ナ
バ、神前ヘ難^レ參候トテ、房顯ハ此等之段永興寺ヨ
リ申サル、條色々申理處ニ、賢西東荒波ノ刀、棚守
ノ宿所ヘ持來^リ給、同日七夕成^ル寶藏ヘ奉納申ス、
此刀事ハ永興寺丹東道^ニ寄進トス、アマリキドク
不思儀成^ル仕合成^ル、書記置也、寶藏ノ御神物天下
ヨリ毛利殿ヘ被^レ遣候ランジヤタイ、其外寄進ノ太
刀、刀、御當家ヨリ房顯取附奉^ル事也、彼目錄寶藏
ニアリ、

一 飛井雅教卿下向在^リ、於^ニ京都^ニ門弟之條被^レ成^ニ御尋^ニ
候條、神泉寺ヲ宿坊ニ申附、廿日計御在^ル嶋にて、自
是豐後ヘ御下向候、將又飛井雅綱モ被^レ成^ニ御下
向^ニ候、御宿坊ハ在^ル浦多居庵ニテ候、御息八幡齋性
院ヲ御同道候也、豐後ヨリノ御上^リ之事候間、御船待
之間、三四十日計御在^ル嶋事間、鞠御會等細々興行
候、其以後御上洛候、

一 聖護院殿御下^リ候、此等之段注進候處ニ、從^リ吉田ヨ

リ可^レ致^ス馳走^ス之由候條、社家各一會ヅ、興行候、房顯事ハ千句度々興行候、門跡茂御返方御千句共興行候テ、事條ノ地走附而別而御懇切候、

一輝元御元服付而細河是久御息隆是下向候、一段得^ニ御意^ニ候、到^ニ吉田^ニ被^レ成^ニ御上^ニ候而、直^ニ御上洛^ニ候、義輝公方様ヲ松長彈正忠腹ヲ召ル時御供輩申ル、ナリ、

一於^ニ當嶋^ニ吉田ヨリ千部經八箇度、於^ニ大元^ニ二箇度、萬部御經二箇度執沙汰アリ、

一觀世大夫下向在、吉田ヨリ至^ニ當嶋^ニ參詣之條、先宿ハ岡飯田右近所ナリ、其以後宿事、神子内侍、飛鳥井殿宿成バ、大夫ヲモ同前ニ宿ヲ申附ル、昔觀世大夫下向之時ハ舞々臺^{マヒナダイ}にて仕ルト云ヘドモ、見物所モ無レバ、今度ハ郷之中にて舞臺ヲハラセ申附ル、神前ニテ九番仕ル、其以後棚守於^ニ宿所^ニ舞臺ヲハラセ、十一番仕ルナリ、其時ノ見物聖護院殿飛鳥井殿御兩所御見物ナリ、山口ニ逗留ノ安木與八キヤウダ^ゲンス、其年幸若大夫下向シ、逗留七月中、又其次年八郎次郎下向ス、

一當社立替事、備後和知對^ニ當家^ニ無^ニ本意條^ニ、與州ヨリ

開陣ノ砌、嶋中ニ被^ニ留置^ニル時、南攝受坊前々ヨリ宿ノ條、彼寺ニ有しが、何ヲ恨共不^レ知之條、十二月十六日社頭ヘハシリ入コム、不^レ及^ニ計^ニノ條、正月廿四日迄ハヘイ門シ、神事祭禮無^カリケリ、色々彼兄弟、被^ニ宮^ニ一人、三人ヲ神前打ハタシ、其年ノ御衣正月廿五日ヲ十二月ニシ、正月晦日ヲ極月ニシ、客人御前籠リ、二月一日ヲ元日トシ、三箇日何モ神事祭禮執行、弓始其外ノ祭禮如^ニ舊例^ニ一執行ナリ、

一社頭事立替ラル、然者遷宮ノ儀、往古ハ當社々家老者中調來ト見エル、房顯ハ當社事彌^マ太ヤカント存故、元就公ト申談、從前ノ神道傳受成レバ、京都吉田神主兼右ヲヨビクダサント申、然者未歲六月十四日、元就公御死去成レバ、萬事相違成共、兼右ヲヨビ下中、十二月廿一日下向アリ、長樂寺ヲ宿坊申付ル、廿一日ヨリ晦日マデハ棚守カクマイ申、正月一日ヨリハ上ヨリノマカナイナリ、今度兼右下向付而、神道傳受事、元行護摩行事上啓^カ景豐行傳受、祝師正久行事、防州末岡行事、碁打專哉同道下向在、山口長岡於^ニ吉田^ニハレナル碁在、專哉ニニツニテ三番長岡マクルナリ、去程ニ兼右ニ寶藏ノ太刀

刀ヲ從^ニ明神ノ御引手物ニ可^レ被^レ參之由、元就公ト得^ニ御意候間、菊作ノ太刀ハセベノ國重ノ刀ヲ取出シ參セ候處、隆景ノ御奉納候キ、來大郎兩作ノ太刀ヲ所望成之由にて、兩種ヲ御返シ候條、何茂不^レ進候、御闇共給見候處ニ、オリザル間、寶藏ノ太刀刀一種モ不^レ參候、棚守ヨリ銘作太刀二ツ、刀四ツ、丸貫ノダンノ脇刀一ツ進上申候喜、上ヨリハ太刀、刀、銀子百枚、其外卷物多在^レ之、今度ノ御入目、彼是二三萬貫茂可^レ入候哉、

一元祐東坊於^ニ經所ニ死去事、申ノ歲五月廿七日夜、賢知ト云出家ト申給フ、子細其候哉ツキコロス、然者彼元祐ヲ我寺家ヘ取入、其以後迎ヘ渡ス、去程ニ先役人五日市政所ヨリ嚴嶋ノ舊例ノヲモムキ、相違不^レ及^ニ是非ニ次第ナリ、先年ハ往來者共社頭ニテ死去者ヲ在^ル時ハイタヲ切ハヅシ、鹽ニ入流由ヲ書立言上申ス、其義ヲ房顯ヘ持上被^セ下ノ間、田石兵衛兄弟成バ遣處ニ、此等之段先政所ノ申様無^ニ餘儀ニ我等ヲ當嶋勘忍サセラルベキモ何ト成共、房顯ノ儘タルベキノ由候間、棚守山口ノ御請文ニ政所ヨリ言上之段先例之趣無^ニ別儀、乍^レ去元祐事カタ

イキカヨフ間、寺家ヘカキ入養生ヲクハエベキ覺悟候處、シバラクニテ去ヲハリ候由言上申候ヘバ、其以後ハ御尋ナシ、

一 狐狼在嶋ノ事、山口代ヨリ事候、當嶋諸國ノ差合在所成バ、ミダリナル事ノミ成ル故カ、防州代にも狼ガリナサル、ヲシヲカケ候テ一二疋取下候喜、其以後モ五六疋取候、狐共一二疋コロシ候、何茂嶋中法度、社邊ノ砂共可^レ被^レ取セノ御立願ナリ、御弓矢御繁多付而御延引ナリ、

一 播磨國上月城尼子勝久、鹿介差籠ト云ヘ共、天正六年八月ニ勝久ニ腹ヲ切スル、其外宗トノ者數仁打果ス、鹿介事河舟ニテ打果ス、荒藤四郎ガ粟屋新右衛門尉打取テ上ヘ上ル、

一 浮田依^テ二心ニ備前美作到^リ被^レ取懸、度々合戰是在、大寺畑又小寺畑切クヅス、敵味方計ヲイ死人數人在、口山事可^レ被^レ切落相定ル、然所ニ上勢五六千、到^ニ上月ニ下向ス、美作口ヘモアケテ手ノ衆下向風聞ス、然者作州高田ヲ歸陣在、備中水田ト云所陣取タマフ、四月十三日粟屋余十郎、兒玉小次郎、神田宗四郎、此若輩衆我手勢七八百、三澤衆何ヤカヤ千

五百ニテ竹庄ト云在所へ被^レ口、粟屋余十郎打死シ、名ヲ高代^後上ル、兒玉小次郎三箇所ニ手ヲラル、一所衆四五人打死ス、神田宗四郎二箇所手ヲ負フ、一所ノ者三四人打死ス、其外四五十人打死ナリ、

一有時隆元公房顯ヲ召^レ嶋中往古社頭其外神事祭禮等、近年斷絶ノ所ヲ可^レ致言上^一之通被^ニ仰出^一之條、先例之儀ハ年々定神事三百八十箇度、大湯屋ノ大風呂ト申候テ、社家衆行水ノ風呂御座候、永享ノ比迄候シ、百五十六年バカリ斷絶之由申上候處、然者永祿六年七月七日、上ヨリ燒始ラル、然所供僧社家此風呂ニ付而前後ノアラソヒ有^レバ、一兩年不燒ズ、去程ニ當社遷宮執行間、供僧社家相談シ、棚守一役ニ燒^{カス}ル、先年ハ六齋、當時ハ月ニ三箇度宛申付ル、往古ノ大湯ノ札ニ社家ノ座拜在、自然社家座拜之時彼札ヲ取出シ見ルベキナリ、房顯ガ一役ニタカスル事如何敷申セ共、愚老一生ハ常榮ノ御事ハ別而御奉公ト存上、如^レ此無^ニ御足付^一候へ共調來候、

在時又隆元公房顯ヲ岩國へ被^ニ召寄^一、社頭近邊ノ在

家退ケ、嚴嶋法度如^ニ舊例^一被^レ仰ル、其時ノ御物語御書ニアラハサレケルニ、義隆ノ御恩報ジガタシ、豐筑防長之儀ハ望ナケレドモ、隣國敵成^レバ國ノワヅライ成故也、夫付テ防長ヲバ取り置也、豐筑事ハ天下へ申セ共、豐後へ被^レ遣^一ノ由被^レ仰、四位陸奥守大膳大夫ニシキノヒタ、レエホヲシ下サル、隆元公遠行ノ已後、元就公、元春、隆景、元秋、元清、其外藝石出雲伯州備後備中防長十箇國衆、各筑前に橋下向在、然者大内輝弘、大友殿以^ニ加勢^一爲^ニ後卷^一二千計にて山口へ被^ニ打入^一ル、去程ニ筑前ノ諸勢無事引退、大内輝弘防州打石ニ取上リ處ヲ、腹ヲ切開陣、其時嶋中サヲイ不^レ及^レ申、社頭小屋ヲカクル、然者元就公、輝元公、隆景、元秋、元清、御社參ナリ、五日在嶋在、御兄弟衆何^レ茂棚守所御宿ニ小早川殿竹林御宿ナリ、吉川殿ハ陸路ヲ直ニ御歸陣ナリ、其御雲州ノ尼子勝久ナド色々ノタクミ共有ト云へ共打ハタザル也、

一天正三年子ノ歲ノ正月四日座主江上卿、祝師、大行事、小行事、大御前棚田中務丞、客人御前棚守、御灯八人、舊例ヨリ參處ニ、神前ノ出仕ノ時モ座拜定

ノ條無申事候ニ、二季ノ十七夜卯月八日、船管絃之時ノ座敷是又定候處ニ、正月四日於座主田中務ト大行事ト上下ノアラソイ有之、其以後ハソ子返成候て、九月ノ法會ノ社役不勤候、社家各座主ヲ爲證人、役人佐竹十月初ヨリ吉田江罷上リ、棚守ヲ無シ力サスベキノ由候、元行十月廿四日到吉田ニ參上候、座主ハ廿六日參上候、彼公事等、田中務丞、同左衛門大夫、上卿三人召仕ナサレ參候、佐武ハ廿日以前ヨリ參ス、座主ト役人佐武ト社家三人棚守元行合躰シ、吉田奉行衆ニハ、平佐藤右衛門尉、國司右京亮、栗屋內藏丞、兒玉三郎右衛門尉、彼公事出ト云ヘ共、棚守前々ヨリ對吉田馳走故、供僧社家チリヲヒネル、座主ノ事ハ天正三十月ヨリ無歸嶋、明ル寅歲ニ萬部經ヲ次デニ歸嶋ナリ、社家三人衆ヲバ改ラルベキ由被仰出ト云ヘ共、上卿ノ儀ヲ桂土佐守ヨリ愁訴、元清ヘ被申條、對神慮棚守見參候テ、于今社役等勤仕ル、役人佐武モソホ返ト歸嶋ス、當時社家中モ無相當事ノミ共候ヘ共、棚守社奉行ノ故ハ多々ト申付ズ、

神子内侍事、河田周防守ト云人存ト云ヘ共、當家御

代ト成、卯歲十月以來、棚守房顯ニ被仰付處也、至子々孫々知行スベキ者也、神前一夜ガハリ五十人ヒル守其外神主殿御宿成故、當嶋地頭成レバ、昔家には飯床ナド在ナリ、神主殿正月四日參詣之時者、松、バヤシ東西ヨリ馳走ス、其外念佛フリヲト年入ナリ、

一當社舊例新御神事等ノ目錄等寶藏ニアリ、其外年中祭禮次第、折節御神事、裝束之次第、何書記シ寶藏是ナルナリ、末ノ代ニハ彼目錄ヲ取シ披見スベキ者ナリ、

一嶋中高煙停止成リ、雖然二季ノ法會已後ハ、色々チリドモ有故、掃除申付、チリヲ燒、前々年ニ二三箇度ヅ、非人嶋ヲ廻リ、モノ、ホ子流寄物ヲヒロイ陸スツルナリ、

一當社嶋廻事、以前ヨリ毎年六ヶ衆七、兩棚守、田樂頭十人、一次第二御床江入ル、昔ハ合嶋廻多ケレバ、日暮ヲ入モアリ、向後モ此旨可存知一者也、

一嶋中祭ゼイ事、布ヲルハタ、クソク專ニイマシムル、當時家之内軒ノ本にてヲル哉覽、不レ及ニ是非一、次第ナリ、左様成ル故カ、狐狼ナド在嶋ノ條、無ニ勿

躰ニ次第候、

一親ノ忌ノ事、向月ニ^{命日カ}ソイ月社參セズ、死スレバ隨而地へ遣ス、其舟當嶋へヲシ渡共、七日嶋へヲリズ、七日過レバクガヘヲリ用ヲベンズル、七十五日ニ成リ、當嶋ノ奥山迄戻リ、九十日ニ成レバ又イマレニ入、九十六日ニテ我屋へ入り、九十九日ニ百箇日トブラウ也、百二三日ニテ人ニ寄合、猶當嶋七月火ヲクハヌ所、座主、上卿、祝師、兩棚守、御灯六箇所ナリ、猶陸地ハ外宮、棚守、神主殿、政所、惣公文、此四箇前ナリ、父方ノヲウヂ、ウバ、ヲヂイミトモニ九十日、父方イトコニ三日、ハシノ間までヘダツ、七日過ハ社參スベシ、母方ノヲウヂ、ウバ、ヲヂ十日イミトモニ三十日過ハ社參スベシ、母方ノイトコニハ七日社參スベカラズ、我屋^{新カ}山送リノ出家達地ヘヲリタラバ、七日社參スベカラズ、地ヘヲリズバ三日過ハ社參スベシ、チノウノイミ事十二日にて我屋ヘ入り、十四日出使ス、ハラミテ七月成レバ、社家天上役ヲセズ、母ハ子ヲミテ七十五日にて我家ヘ歸ル、八十一日にて社家殿火合、生子七十五日ノ内ニ^{スレ}ウブヤにて死ルニハイミ多ズ、七十六日ニモ成、

本ニイマル、ナリ、鹿火事合火七十五日、又其合火卅三日、猪鹿^{符カ}合火事卅三日、又其合廿一日也、書記ヲコバズ、於當嶋ハ不^レ及ニ其沙汰事ナリ、能可^ニ延慮^延事也、

一月水日數之事、七日奥ノ山在テ七日ニ又イマレヘ入ル、九日ニテ社家ヘ不入他宿ス、十二日にて我屋ヘ入り、内侍所ナドハ十三日にて出使ス、在家ノ衆ハ九日にて我屋ヘ入り、十一日にて火ヲ合ル、一金山佐東御陣ヘ參上之時、天下ヨリ御寄進ノ御劔之時ノ御請文如^レ此調可^レ申之由にて、義隆御自筆ヲ以アンバサレ、房顯ニ直ニ被^レ下ル、難^レ有次第ナリ、棚守^家佳書目錄ニ相副、末代忤家ノ長寶故、左近大夫ニ遣置ナリ、

一當社家奉行ヲ存^ル上、何ト候テモ名ヲ殘度故、ゆり若君殿御父德大侍ノ公光ノヒチリキ、野間家斷絶付而、房顯モトメ野間ノ家、住書目錄、共ニ寶藏ニ納ヲク、又ヨコハギ大臣姫君、中將ヒメエ掛ケ物阿彌陀三尊赤千端、棚守内儀寶藏納ル、將又天王寺俗人蔦坊、岡兵部少輔父蘭式部、東儀因幡守細々下向アリ、然處ニ京一ノ琴成バ法華トナヅク、銀子五百文

目ニモトメ下ス、當社末世ノ調法ナリ、佐々木ノ綱切ト云アラノ太刀、野坂家ノ重代タリ、神領一亂ノ砌、棚守ガ手ニ渡ル、社家ノ事成レバ寶藏ニ納ル、末代ノ事也、

一寶藏太刀刀具足何成共奉納之時ハ、ヒザツキ錢二貫三百文を座主棚守政所代三人にて百疋宛三百文事ハ、承使棚守ガ沙汰人、地下散仕遣スナリ、正月三日藏開祝棚守役、七夕蟲拂ヨリ外ハ不_レ開ナリ、カギ神前棚守預ルナリ、彼寶藏ヲ明應年中ノ事哉覽、與州イマハリノマトバト云海ゾク、十月廿日ノ夜イタ敷ヲ燒貫、昔ヨリノ太刀刀ヲトル、小松殿ノヨロイヲモトリシヲ、河野殿サラエラレ返サレラル、カイラゲ丸サヤノ太刀共同具ノ無ハ、何當社ノタ、リ在テ返シ寄進ノ物ナリ、義興ノ一文字廣元稻ビカリ、其以後ノ寄ナリ、義隆ヨリ彼一文字ヲ可_レ在_ニ御請_ニ之由、日積若相陽雲等以_テ對_ニ房顯_ニ被_ニ仰出_ニル、御園次第トテ閣ヲ給候ヘドモヲリズ、同于_レ今寶藏アリ、吉平刀上ヨリ寄進、國吉ノ刀ナシ、和殿丸貫脇ザシ、井原ノ彈正忠奉納ナリ、目錄寶藏ニアリ、

一先公方樣義輝御代之時、對_ニ房顯_ニ從_ニ水澤彈正少弼_ニ被_レ成_ニ御内書_ニ、於_ニ當嶋中_ニ社家奉行共存故_ニ御請共申ナリ、聖護院殿御調ナリ、愚老四位修理大夫成事、何茂御門跡ノ御調法ナリ、

一當公方樣輒御下向之條、從_ニ當家_ニ御馳走成_レバ、天正四年當社ヘ御劔、御神馬料足十貳貫、眞木嶋殿御奉公にて對_ニ房顯_ニ被_ニ仰付_ニ候條御祈念申、御請文義隆ノ以_ニ御自筆_ニ書記被_レ下候趣申上候、何茂御奉書歷々所持之條、末代之棚守忤家可_レ爲_ニ調法_ニ者ナリ、此等之段書記置事老給故、前後可_レ爲_ニ不同_ニ事多カルベシ、後見旁々可_レ預_ニ御分別_ニ者ナリ、

一參詣御宿事、屋形始元春樣ノ御家中各御宿ナリ、天野殿元清樣御家來、雲州元秋樣、元泰樣、何茂御旦那ナレバ御宿ナリ、隆景樣御一人自_ニ往古_ニ竹林内侍御宿成_レバ、別宿ヲ被_レ召ル、雖_レ然御社參之時ハ何方ヘモ無_ニ御座_ニ共、棚守宿所ヘ小早川殿樣被_レ成_ニ御出_ニル、對_ニ棚守房顯_ニ陰居ノ爲_ニ御合力_ニ、毎年米廿荷宛被_レ下ル、ナリ、上樣ヨリ御寄進地、元春樣、元清樣、其外銘々御寄進ノ地不_レ及_ニ三書記_ニ、御寄進狀目錄等、左近大夫元行渡遺處也、御神事祭禮無_ニ油斷_ニ

可_レ馳走_二者ナリ、

一當嶋定エボシ直垂ノ衆事、上卿、祝師、兩棚守、御灯、大行事、田中務丞、此七八人衆事、當時ハ少々ノ會合茂鳥帽子着ズ、寄合事無_レ勿_レ鉢_二事也、往古、法度社家ヨリ破ナリ、能々可_レ自慮_二者ナリ、社家ヨリ地下町ノ法度之儀可_レ申付_二事ナリ、

一當嶋アマリミダリ成故カ、狐狼在嶋ノ間、如_レ往古、神主殿ヲ櫻尾ニ被_レ置、嶋中法度如_レ前可_レ被_レ成_二下智、シ社邊ノ砂事、二家被_レ成_二社參可_レ被_レ退_二トノ御願書、對_二房顯_二御願書二通、御書三通有定也、雖_レ然御弓矢御繁多付而御延引也、何茂此兩條ハ不_レ可_レ在_二御油斷_二之間、何茂御調有ベキ者ナリ、

一聖觀院殿、朝山日季上人、在嶋之節被_レ仰事ニ、當社大明神ハ未_レ御位付_二御神ナレバ、天下ヘ言上理、正一位ノ上ニ可_レ申調_二トノ仰事共候喜、高倉院當社ヘ御幸之由、又彌山鐘ノ文之儀申處ニ、門跡御欣ノ事のみ候、其以後寶藏ノ從_二往古_二ノ目錄等御目ニカケ候、此等之理爲_レ申トテ、從_二吉田_二事外御ホウビナリ、

一爰ニ石田助十郎ト申者候シ、親ノ六郎左衛門尉、元

就公ノ上意ニ相叶、對_二棚守_二忠節ノ者成バ、社家準ズ、然所ニ彼助十郎社家ニ成間敷存分共候哉、天野元政ヘ奉公可_レ仕ノ由内々申候哉、端午ノ外宮ノ神事、社家ニハ不_レ同、只ヒヤクヘナカ常ノ鉢にて、出使之時如_レ此候、左候間佐東祇園ノ猿樂、十七日能、廿三日迄相延候間、廿日罷渡リ、其儘病にて七月死去仕候、當社之儀神慮恐敷候間、不_レ入事候ヘ共書付置申候、

一當嶋ヘ道場神泉寺可_レ爲_二無祿_二處ニ、防州田布施之人シチ申事ニ、山口ノ道場ノ爲_二末寺_二田布施貳十石在所アル由申候條、兒玉就忠以愁訴候テ、貳十石ニ神泉寺寺領ニ申付所也、

一藏福坊智嚴ト申出家關東ノ仁にて候、事外殊勝ナル出家にて候、弘中正長爲_二調法_二供僧被_レ準_レ、義隆ノ被_レ懸_二御目_二候喜、從_二先年_二ノ修行者彼智嚴程ノ廻國人無_レ之ノ由候條、房顯爲_二指南_二在嶋候、向後彼等程ノ出家可_レ在候哉ト申事候、

一寅歲安藝周防引合付而、同卯年九月陶殿ノクズレ時ヨリ、修善坊、修行坊、端光寺他出アリ、然者供僧四五人他國ノ間、從_二吉田_二對_二我等_二被_レ仰事、供僧

坊明所多々アル條、何ト成共可レ計之由候條、修行坊ヲバ長印ヲイノ良重ニ申付候、東藏坊ヲバ深音申付、一乘坊事ヲ村上當類事間、十月興榮警固歸ニ在所ヘノ事候ヘバ、辰歲二月歸嶋之時、吳嶋道泰ヨリ

對棚守書狀ニ、彼伊勢新發意事、先座主出家弟師事間、座主にも可レ成事候ヘ共、何と成共可レ然之様上意ニ可ニ申理之由條、此儀ヲ元就公ヘ御目懸處、尤吳嶋殿ヨリ被レ仰儀之條、座主之儀ハヤ申付所成バ、其内可レ然き供僧ヲ可ニ申付ノ由候條、一乘坊アキ所事候ヘバ申付候、去程ニ當家思召儘之條、山里社領等被レ仰之條、修善坊、東藏坊良秀兩人事高野呼下歸嶋事候、良秀事瑞光寺專順迄穴戸殿ヘ申理、于レ今智行事候、修行長印事旁々カケリマハラレ故ニ、十二三年ニテ下向ス、歸嶋にて候、座主留ス代事、石道ノ西福寺當嶋ニ四五年在嶋ノ條、房顯相抱申、上之祈念候テ、眞讀大般若共誂資申條、先留守代事、十一月十五日ヨリ座主代等候、辰ノ年二月二日ニ當座主兒ニテ十一ニテ御渡海候、長屋下野守孫ヲ同道候テ、房顯中江罷居候被レ成ニ御出候、同二月十五日千部經被レ仰付候條、於ニ房顯宿

所ニ兒ノ御出立にて出使候、其節導師吉田滿願寺眞勢僧都にて候哉、其以後眞勢ノ髮ヲソリタマイ良勢ト申ナリ、

一座主良辨事寅歲ヨリ到ニ高野ニ住山候、卯歲七月廿一日、攝津國室ノ興にて自海候、越後公大夫公滿願寺新發意二人以上六七八人海流候、其日浪風高鹽興、口舞臺ナド鹽ニ震リ、夕高鹽ミツル事房顯代五度ナリ、末世ノ故カ如何哉覽、

一口慈光院快誰事在嶋付而、岩國喜樂寺ニ寺家ヲ取上セ、慈光院法事等執行候、彼屋敷事、從ニ先輩無祿にて、供俊坊にても無レ之候ヘ共、被ニ申談、彼寺家ヲ被レ立候、然處老少不定成ル事候ヘバ、於ニ吉田ニ死去之條、彼寺ヲ被レ立候砌、過分之借錢共候哉、近邊之事候ヘバ、彼寺ヲ百貫文返辨申付候テ留置候、無祿所續難候間、何トゾシテ少々所領共申請トテ、供僧坊ニ續度候、對ニ房顯ニ從ニ隆景ニ陰居ノ爲ニ御合力、年廿俵宛被レ下候條、此等ヲ慈光院付度心中候、一從ニ吉田ニ之六月十七夜之管絃、當役事成歲ヨリ到ニ當年三十一箇年也、會所事、寅歲ニ建立在、會所坊主野村自行五六年、其已後山崎一葉五六年、其後奥州

相津之弘音、其已後到吉田參ル、其後加運宗勢宗軒ナドモ二三箇月逗留也、當時ノ護摩憐興逗留、

一天正九年二月初甲三日山口アク、然者二月以來嶋廻五箇度、至四月雖執行、渡供一度モ不_レ上、此

由遂_ニ注進_一候、公方和、社家三方氣遣不_レ及_ニ是非次第也、當社神秘雖_ニ多々、彼トクヒ年取分御神秘之故、房顯同五月十六日嶋廻申處ニ、馬ハ二ツヤブ

サキ社頭廻ニハタリ候ヘドモアガラズ候間、色々立願共七浦ノ社、牛王、十社、百韻之連歌、速田御供進

宮之願書共仕候テ祈念申處ニ、如_ニ先例_一ハルカノ於_ニ海上_一トクヒ上リ申之條、上和當嶋案塔、此節之

條書記畢、其以後元良内藤小七郎二箇度鳥啄上リ申候、

一御本地觀音堂之事、去天文十年五月四日七日ノ出

水山河クヅレ、社頭廻砂ハマル間、三月廿三日破リ土ヲ給、天正九年則八月造榮調、御本尊移奉ル、九年

巳ノ歲ノ夏中時、花香於_ニ大御前之經所_一執行、卯月八日管絃經同前也、

當嶋往古ヨリ之儀覺江次第跡ヲ先江書置ナリ、向後ノ事彌書記可_レ置_{ヘク}定而シトロ成ベシ、後見御方ニ可_レ預_ニ御分別_一者ナリ、

天正八年後三月上旬

棚守左近衛將監房顯朝臣(花押)

八十八歲

佐野宗綱記

一抑下野國安蘇郡佐野根古屋唐澤の城主御先祖は、藤原氏の元祖天兒屋根命之末、太政大臣大職冠鎌足大臣之子淡海公より三十[・]代[・]の孫、佐野・修理助横山宗綱公と申、智仁勇の三徳を兼、五常の道明にて、目出度御大將なり、御兄弟五人、天徳寺、龍願寺、虎松殿、御一人は桐生へ御養子に御越、御弟四人亦御家の侍中には、富士下野守、同源太左衛門殿とて、御一家の御末なり、其外、大拔越中守、山上道及、竹澤山城守、津布久彈正とて、佐野四天王と號、忠有て禮儀正しく、勇有て恐なし、其外近習外様多し、段々記に不^レ及、日々夜々に忠儀を盡し、出仕の御事、

一上杉管領則政公、武州川越夜軍に、北條氏直公に討負給、越後へ敗亡し給ふ、以後關八州の城主皆々思思に、長尾謙信公、武田信玄公、佐竹義信公、里見義胤公の旗下に屬し、人質を遣し、出仕の粧を刷媚給ふ、小幡松枝などは、信玄公の旗下になる、惣社より東、上州宇都宮より北、野州は謙信公旗下な

り、小山より東は佐竹義信公の旗下と成る、然共佐野宗綱公并に新田四郎信濃守殿、足利館林の城主長尾但馬守殿、小役の城主澁川相摸守殿、桐生の城主桐生大炊助殿、右五人の城主は、何方へも人質を出す事もなし、由良長尾伯母^{兄弟}聲なり、新田足利は、小田原の氏直公と御無事にて、家老壹人宛にて名代の御禮式あり、佐野殿桐生殿は、代々御一家にて、中にも其比は御兄弟、此御兩家は、謙信公御無事にて、上州武州口の儀任せ置との御事なり、虎松殿を御養子に被^レ成、猶以御入魂なり、由良殿、澁川一家なれば、佐野桐生と度々合戦有故、給人は境を論じ、百姓等は馬草場を論じ、城主の下知をも待たず、夏は麥作早苗をふり、秋は作毛をふり、境目くには要害を構へ、物見番所を居へ、拾貫拾五貫計の宛の知行を與へ、郷一揆と名付、貳貫參貫の割符を取らせ置、歩弓人とも、境目々々の番所、五郷七郷の分は、其番所の塞に付隨、右番所にて鐘貝を擣立れば、在々の者共は其番所へ馳集り、所々の物見は、村々にて鐘貝を擣立れば、城付に定置、外の與力歩弓は、本城へはせ集り、此外色々の相圖手立有、合戦の中、

妻子共の俵糧運び送の手つがへなき用心有、足利館林より佐野へ敵對あれば、佐野殿と御無事故、結城小山下館より加勢有、桐生より新田へ責行ば、足利より加勢有、桐生殿と佐野殿境は大山にして、其上足利支配入組によりて、御兄弟と雖、互に加勢ならざる故、由良殿と桐生殿、廣澤、吉澤、境野にて取合あれば、沼田、高崎より加勢入、是は謙信公御支配所なる故なり、

一 謙信公、足利佐野御一覽のため御出馬被_レ成、宗綱公へ御見舞として、唐澤の城御本丸へ御入被_レ成、三日御逗留有て能を御見物被_レ成候、御馳走の爲なり、此時虎松殿を御養子となし、越後へ御同道なり、其後子細有て、宗綱公謙信公と御通路なし、依_レ之謙信公向後敵對の上は、其元心易き爲なり、_{（逆イ）}松殿佐野へ御歸しの事なり、

一 宗綱公御舍弟、天德寺、龍願寺、右兩人武者修行の爲とて國々へ御出有、天德寺は攝州大阪の城主秀吉公へ御入なり、龍願寺は武田信玄公へ勤め、_{（逆イ）}松殿寺は腰に紅のすがりに砥石を入、高名の度々にめたばを付られしとなり、信玄公より本國名某と御

尋なさる、重て場數を究候節申上べく候とて名乗らず、重て右にをとらぬ場數度々有_レ之上、亦信玄公御尋ありければ、佐野宗綱が弟に龍願寺と申者にて御座候と名乗ければ、扱は聞及たる侍也とて、其名を聞つる上は、千貫より内は不足なり、其家に貴老におとらぬ譜代相傳の侍數多雖有之、三百貫五百貫取らせて置なり、貴老の大將と可_レ頼者は、今時某が外には、越後の謙信公成べしとて、太刀御馬砂金杯遣され、越後へ御越有所に、謙信公より則千貫に與力弓御預被_レ成謙信公の長刀の御師範とす、鎧にて手結し給ひ、鎧遣を討たるに依て、謙信公彌御氣に入給ひけるといふ、然共謙信公乃家臣直江山城子息は、鎧遣の弟子なるにより、いきどをりありけるか、又さもなければ共、山城智謀深き者なれば、信玄公の家より來るとてか、龍願寺の事色々謙信公へ訴ゑしかば、則切腹被_レ仰付しなり、此故宗綱公謙信公へ御遺恨か、通路なきに依て、越後より虎松殿佐野へ御歸、無_レ程御病死なり、

藤岡榎本合戰之事并に松本丹波強弓之事

一 藤岡の城主佐渡守殿、榎本城主大隅守殿、右兩人宗

綱公と同水戸城主佐竹義信公の旗下成しが、心替して、兩人小田原の氏直公乃旗下と成る、宗綱公御立腹にて、兩城主可被攻由御内談有て、譜代の侍赤見六郎富士源太に被_レ仰付、夜討の相談被_レ遊ける所に、山口藤七郎大將にて、はやり勇の若侍三拾六人抜鬪にて、夜の丑の刻に榎本大手口へ押寄、時乃聲を上る、城中不意乃事なれば、周章ひしめく折節討入れば、城中已に危見へける、已に夜明方成ければ、佐野よりの寄手小勢なるを見届け、城中色を直しければ、藤七郎以上七人に成迄は働けれ共、無_レ是非引歸してけり、此由宗綱公へ御上聞に達せしかば、法度乃拔鬪殊に勝利には不_レ及、其上侍共大勢討せ不出來なる事なりとて御腹立被_レ遊ける、藤七郎失_レ面目、犬伏大庵寺にて切腹せんとて行ける、此儀家老中不便に被_レ思召、左有とても志の侍なれば、宗綱公へ御訴訟にて、御免狀被_レ下候得共、最早其内切腹せしとなり、

一 藤岡へは、津布久彈正、竹澤山城守、柿沼丹後に被_レ仰付、是も夜討の御相談極り、大田和山より可_レ被_レ責御相談にて、松本丹波に被_レ仰付しは、貴殿常

常古河、藤岡の物見なれば、今度壹人藤岡の城より風上へ廻り、在家へ火を付べし、其光にて押寄可_レ討取旨相究、其夜丹波忍行に、内々藤岡にても佐野より夜討にも押寄來らんも知がたしとて用心の所へ、丹波はやり過、火付候所を見出され、大勢に取詰られ、難儀に及、其節も下人壹人強弓爲_レ持參けり、日比宗綱公の御前にて的被_レ仰付に、八分の弓に四寸の的を輪墨目の内へ計射る程の上手、又二十間に絲を下げ射切程の上手なり、佐野御家中は申に不_レ及、近國一の上手にて、件の弓押張射ければ、矢壹筋にて貳人射殺し、手本へ寄をば切拂引歸す、最早夜明に成しかば、藤岡勢も打出、佐野方よりも押寄、只木、新井の原にて兩方互に入亂戦事三時計にて、藤岡勢數多打死しければ、殘手勢散散敗軍して虜となり、其已後藤岡榎本の城主、度々掛合有ども、一度も佐野方後れを不_レ被_レ取事なり、竹澤、津布久、柿沼無_レ比類、高名にて、三人宗綱公より御感狀下されけるとなり、

一 竹澤山城守、出流原の庄五百石、柿沼は植野の庄五百石、一子は宮内とて御秘藏の御小姓なり、御兩人

にて九百石、津布久彈正は新里の庄五百石宛加増被_レ下、世の聞え太悦目出度事なり、扱亦松本丹波には越名乃庄給り、猶々古河藤岡の物見被_二仰付_一べしとの御掟にて、其外手嶋又五郎、上岡源次兩人歩弓御預けきびしく、御番被_二仰付_一べしとなり、
曰此一節大學本無

從_二小田原_一佐野富士山へ寄來事

○璋

一榎本藤岡兩城主掛合に討負給ふ故、殘念無_レ計小田原へ申遣しけるは、佐野宗綱公と取合之節、某共兩人にて人數無_レ之、足利より加勢可_レ有事なれ共、佐野領入組故、加勢難_レ成、宗綱勢は數多なり、其上、結城、小山、皆川、壬生、右四箇所より加勢有_レ之故に依而不_レ達_二本意_一候、此上は御出馬にて佐野を御責可_レ被_レ遊か、御人數可_レ被_レ下かと申遣ければ、無_レ程御出馬被_レ成、佐野唐澤の城へ數萬騎にて押寄、大手より御攻可_レ有御相談有所に、大手はけづりはぎにて、山高く峯より大石大木をなげ下し、先年も攻あぐみたる事有_レ之由聞及ければ、富士口より御責可_レ有とて、富士山に陣を取、其比氏直公の御事は、關八州にて屋形殿と申故、陣場を屋形山と

申なり、然に氏直公諸軍勢に被_二仰付_一けるは、明日卯の刻に出馬と被_二仰出_一、富士口へ惣奉行として北條安房守、軍奉行には伊勢大和守、多米伊勢守を遣し忍、深谷、岩付、其外武藏上野の勢を以、數萬騎唐澤大手口前川原迄押寄けり、宗綱公も諸軍勢へ御下知被_レ成けるは、先富士源太、柿沼丹後、竹澤山城守、細野次郎左衛門、山越才吉、稻垣淡路、葛生縫殿を大將にて、下館結城勢にて、富士口上げ木戸より谷々迄、歩弓鐵炮にて數千騎にて堅たり、大手口前川原へは先一番に山上道及、津布久彈正、大拔越中守大將にて、赤見六郎、戸室才藏、春山權八、佐野田左京、其外記に不_レ及、壬生皆川勢を引入堅たり、追手富士口共に三日の合戦なれ共事共せず、雖_レ然二日の合戦には、二三の備迄掛崩されしかども、立直し三日ながら相引にせしとなり、

境七箇村取合之事

一稻岡村、西場村、只木村、駒場村、村上村、羽田村、寺岡村、此村々は境七郷とて、之は佐野領代々乃御支配の村なり、長尾殿小田原と同心にて、新田、館林、飯野の加勢にて、右七箇村の分は度々宗綱公と御

取合、毎年の合戦に、宗綱一度も後を御取不_レ被_レ成、長尾殿只木山に陣を取、宗綱公は寺岡村岡崎山に御陣を取、出流川^{イツル}を隔て合戦、亦或時は足利領八柄猿田の合戦には、長尾殿散々旗本備迄つき崩され、無_ニ是非_一足利古屋の城へ引入ける、佐野勢は追嗣、一足も不_レ引攻ける程に、大將宗綱公も古屋の城廻輪迄追詰、町中侍屋敷迄焼拂ひ、悉く勝利被_レ成ける處へ、新田、館林の勢共鬪着るに依て、兩方人數引上る事、

免鳥合戦之事

一右其遺恨か、翌年長尾殿手勢に、新田、館林、飯野の加勢にて、佐野へ押寄候由、村上にて天海^{アマカイ}佐度、猿田^{サヘ}にて福地出羽、植野にて柿沼丹後、次藤左^サ衛門早馬にて告來る、右の旨申上、鐘具響かしければ、佐野勢無_レ程馳集り、宗綱公御出馬被_レ成候内、最早免鳥の城へ押寄、大勢を以攻戦ふ、佐野先手衆、山上道及、富士源太、其外六十騎計急ぎ掛着けれ共、其内免鳥の城主高瀬紀伊守討死して、長尾殿に城を被_ニ討取_一、其内跡勢押寄兩方佐野、足利勝負所と、身を原上の塵土に曝といふは爰成とて戦、兩方手負死人

不_レ知_ニ其數_一なり、軍半に足利方より惣大將と見て武者壹騎、何様佐野方に名有武者をと心掛馳廻る氣色、強氣の者と思て、少々佐野方にても近付者なし、山上道及是を見て馳向、雙方鍵にて手結しける、道及元より鍵は上手なりければ、不_レ叶とや思けん、鞭鐙を合て引歸す、道及すかさず追詰、虚空藏乃前なる深田へ押込討取けり、其武者名は不_レ知ども、何様惣大將成べし、足利方にても此由を見るよりも、山上道及は鬼神とて近付者なかりけり、然所へ武州忍、騎西、羽生の勢加勢して、宗綱公も攻あぐみ、唐澤本丸へ御引上、山上道及、大拔、竹澤、赤見六郎、富士源太、津布久杯を被_レ召、此上は結城、小山、下館、壬生、皆川、宇都宮、右六箇所へ通じ加勢を乞請、大軍を以討捕か、又は後れ振して館野邊へおびき入、富士口より犬伏天明へ人數を廻し、横鍵、歩弓、鐵炮打掛、何も一兩人は、小中並木より、歩弓横鍵三方より攻入べき御相談被_レ成けれども、内々家老衆少々不和にて、思々の心入御相談不_レ極して、右六箇所へ御通路なし、山上道及は無_レ程宗綱公へ御願を上げ、武者修行に出けるなり、免鳥

の城には長尾殿家來館林勢を籠置せ、城乃外かわにも杭をふり、人數指置きびしく用心して相守り、境七箇村此時に足利支配と成、長尾殿御家來、淺葉左衛門同甚内と申者、免鳥の爲ニ城代ニ預置しなり、

宗綱公早苗をふらせし事

一 免鳥の合戦餘り殘念に思召、宗綱公家老衆へ被ニ仰聞候は、長尾は只木山に出張を構へ、免鳥の城境七箇村の順見として折々出候由、さもあらんに於ては、忍之者壹人宛出し、長尾只木山へ參日を聞見届させ、馬を出し、其計謀は先村上天海佐渡、椿田福地出羽、同帶刀、是三人は免鳥乃近所に居、在々所所の小道迄能案内を存の事なれば、步弓郷人指添、免鳥寺岡の野中に出し、麥作早苗をふらせ、左もある時は免取の城より可ニ討出の間、大拔越中、赤見六郎大將にて、朽納、戸奈良、其外乃侍五拾騎計にて、免鳥の城を押へべし、只木山より長尾も可ニ討出、各は足黒に隠れ居て、長尾出ば押寄可ニ討取なり、大勢にて勝利難レ成として、人數被ニ仰付ける、先一番富士源太、阿部主計、山越才吉、佐藤美濃守、手嶋又五郎、上岡源次、柿沼丹後、次藤左右衛門初とし

て、萬生縫殿、春山權八、戸室才藏、野代豐後、清水左京、川田右近、品川大和、大川右衛門、關口土佐、稻垣淡路、龜田主水、岩崎平次、川崎加賀、小曾戸外記、戸叶信濃、此等を御馬添、此外百騎計被ニ仰付、竹澤山城、小野兵部、同長門、津布久彈正などは、方方押へとして、居城に指置、御相談御極の事、

一天正年中四月廿八日に、長尾殿只木山へ御出の由、忍の者聞見届、唐澤の御本丸へ申上ければ、兼て御用意の事なれば、御出馬足黒村に御忍被レ遊、右三人の者に指圖被ニ仰付、步弓郷人等に馬草の爲として作毛をふらせけるを、如案長尾物見の者共只木山より免鳥へ告ければ、淺葉左衛門、其内、兄弟共に討て出、只木山長尾殿も立腹有て、馬廻り上下百五拾人計にて、壹人も不レ殘討取れとて、步弓郷人足に任せず、侍はわづか壹人も可レ爲レ出と心掛、無二無三に討出る、宗綱公も足黒村より寺岡迄發向被レ成、大拔、赤見、朽納、戸奈良は、免鳥の城へ押寄、何とぞ淺葉兄弟の内壹人成共討捕と責戰、宗綱は長尾を討たんと思召、今日命限りと御攻有、長尾旗本つき崩され敗軍してけり、長尾殿も宗綱の人數備

の様子見て、何様今日を限りと心掛んやらんと思召、早々足利へ鞭むちを打て御引有ければ、宗綱公も無二是非免鳥一の押へとも唐澤御本丸へ御引上しとなり、

彦間小野兵部被討事

(天正十四丙戌年乙)
一極月十日乃事成に、長尾家老小曾根筑前と、私に御

内談被成けるは、彦間小野兵部家來下總と云者有、其方何とぞ彼をすかし、兵部兄弟を可討取、左も有ば下總をも引立、其方と一所に彦間に指置、佐野の押にすべし、謀計を廻し可討取と、堅く被仰ければ、小曾根申上るは、委細畏入候、何とぞ左様に可仕とて、名草より下總方へ隱密に、少々内談の儀有之間、其元御隙次第御出可有とて、念比に書狀を遣ければ、下總何事かと存れ共、敵方へ不行ば臆病者と云れんとて、早々行ければ、筑前喜び色々馳走の上にて、件の由を咄しければ、下總も玄ばらく思案しけれ共、侍は渡り者、兵部家來にては佐野又者なり、今度御相談を用れば長尾家來なりと心得、小曾根と同心して、十五日に兵部兄弟を私宅へ申入、馳走に風呂をたき、小曾根勝手に隱居

て、風呂の内にて可討と相談極め、十五日、兵部長門此事とは努にも不レ知、下總所へ御出有、如案風呂にて兵部兄弟を安々と討取、長尾方へ注進せしとなり、兵部内室老母乍レ涙に立出、唐澤本城へ落入ければ、宗綱公を初、座中の侍落涙しけるとなり、

足利攻相談之事

一宗綱公天正十四イ・年中極月廿九日、富士源太御家老中へ被仰けるは、元日に簀本の人數計にて足利へ押寄、上下共に不意成所へ押寄、長尾と勝負を可致、本道、寺岡、村上は道遠く、其上免鳥城にて鐘貝を擣立候は、長尾が居城迄押寄ざる前に、足利の諸軍勢方々より可馳集、其上館林、新田勢、即時に後詰すべし、飛駒飛駒イより下名草へ打出ば、佐野、足利入組なれば、此段足利へ打越迄は隱密すべし、長尾さへ於討捕は、縦新田足利館林の者其前後より被圍被討共不レ及是非、佐野足利度々取合雖有之、尙後れを取たる事なし、雖然頃日に成て、長尾に遺恨數多有之事なり、

御遺恨數多之次第

一 第一長尾押へに飛駒^{飛駒}に指置る、小野兵部同長門を被討取、小曾根筑前守を彦間に指置事、第二彦間と名草の境に代々百姓等山林馬草場を論じ、彦間より杭をふり、中木戸と名付置所に、名草より杭を破し事、第三に免鳥合戦といひ、彼是討果しても餘り有事ぞかし、敵方の者より猶以耻敷は、天徳寺免鳥合戦の後なれ共、山上道及武者修行に國々へ出候間、此者共がさげすまんも一入口惜事なりと御意被遊けれども、御家老中は御上意尤と計にて、其日は御相談なき事なり、

大拔越中計謀御諫言之事

一 大拔越中御歳暮に登城有ければ、宗綱公私に被仰けるは、明元日に足利へ名草より御寄可被遊由御相[・]有ければ、大拔申様、正月朔日に掛て合戦する事、昔より大きに嫌ひ候由承候、味方守護乃備を御立候てこそ、敵の不意を御勝利御取可有なり、不^レ可^レ然と奉^レ存候、何とやらん申上に、御腹立被遊候様に御諫言の申上れば、以乃外御機嫌惡敷、惣じて御主の思召詰られし事は、強氣乃大將御氣短故か、亦是御武運盡端にや、家老衆不和にして、大拔

も底意に小田原より内通か、足利より内通か、心替りと見へて、御家中ニツに成、大拔も佐野家一人の侍大將、近き比大拔方御家方杯とてひそかに申廻るなり、達而御諫申上者なし、夜乃丑の刻に本城御出馬有ければ、御馬前に若き女乃白き帷子を着たるが、歩行諸人奇異乃思をなす所に、無^レ程何く共なく消失ぬ、不思議成し事共なりとて、萬人肝消計なり、

宗綱公御歳廿八にして討死之事

一 足利長尾顯長公より佐野押へに彦間に指置る小曾根筑前は、何とやらん佐野領少々騒と聞て、所々方山林迄人を付置處に、如^レ案此事を告來る、定而此城に御構有間敷と思ひ、妻子以下をば山林へ隠入置[・]しと云て、其身は與力、歩[・]の者共を召連、名草^{スバナ}數葉名の寄居場へ馳參、出番の者に其趣を中に依而、貝鐘を吹立ければ、先一番に名草に置く芳賀右衛門半月乃指物に馬印にて、歩弓[・]召連馳來る、一番に柳田隼人、山下播磨、和泉新重郎、岩下右近、杉下修理など馳集る所に、最早佐野先手富士源太山越才吉兩人は名草迄討入、足利にては無[・]何

心、元日の事なれば、不_レ思寄、周章してさはぎけり、宗綱公強氣故、旗本勢後勢共に勇早めんと思召、御先立被_レ遊、旗本勢不_レ續程に、御馬をはやめ御出馬有ければ、御鍵持壹人馬乃尾に取付程に翩_レれ共不_レ叶、閑馬川原にて吐血して死けりと也、旗本勢も早馬にて續かんとすれ共、御大將御馬は肝強故、四五町計翩_レ抜給ひ、數葉那坂迄御壹人御出馬有所に、數葉那坂より大將とは不_レ知共、佐野勢と見て高聲しけるは、小曾根筑前なり、彦間に差置るる小野兵部をも某討取申、其已後も御家に對し度敵對いたし候、今度も働_キ最早顯長公方へも申遣し、此寄居に名草六郎と某し一家其外籠居て候、跡より續く同勢へ弓鐵炮を討掛可_レ申と云ければ、宗綱公是を御聞、内々數葉那乃寄居を攻落し、足利を討取、長尾が首を見て歸り足に、筑前を可_レ討と思召所に、慮外なる廣言かな、己を一攻にせんと塵を振り、御簀本續_ヤと思召、振り歸り御覽有ければ、後勢未_レ續しかば、まばらした、すみ給_レ所に、御武運の盡にて、何く共なく野鐵炮來て、胸に當り、御落馬之所に、豐嶋七右衛門と申輕少の侍なり

しが、此由を見て、大將共不_レ存走寄、御首を二太刀討けれ共不_レ叶、宗綱公被_レ仰は、うろたへ者鏝を卷て切べし、其方太刀にては叶まじ、我等太刀にて可_レ切と被_レ仰ければ、則御腰なる首取を拔、鏝を卷、御首を給る、七右衛門意に、何様佐野先手物頭可_レ成、血氣勇者にて一騎可_レ來と思に、馬物具乃能を見て、若大將にてはなきやらんと疑、大勢に首見せければ、其内に能見知たる者有て、御大將宗綱公と申ける、足利方にては大將を討取、目出度々々と一度にとつと大悅する處へ、佐野簀本勢翩_レ付、大將の御事は不_レ知、數葉那の出陣何程かあらん、只一もみに翩_レ破れと喚き叫て勇みける、筑前小高所_キに登り、あら物々しや佐野勢、此數葉那坂をば小曾根筑前堅たり、去ぬる比彦間に指置る小野兵部兄弟を討取、其上今日乃軍初に、大將乃宗綱公の御首給はつたり、志有ん侍は此小曾根が手に掛り、主乃御供仕と大音聲にて名乗しかば、佐野勢是を聞て、嗚呼口惜き次第なり、此上は骸を原上の塵土に曝す共、命を惜べきにあらず、粉骨を働くは定なりと、先主乃敵なれば小曾根めを討捕れと、一命を不_レ顧

勇み進て責ければ、差も堅めし數葉那も佐野勢に被_レ責立_レ方々敗ぼくする、猶佐野勢は勇み宛、足利勢を責落さんと喚き叫で攻ければ、さしも勇足利勢敗軍なす所へ、樺崎^{カサキ}勢新井圖書、大沼田淡路、市川右衛門、久米伊賀守、此外數多馳來り、佐野勢も意はたけく勇、共、大將は不意に被_レ討させ給、後れ馳に成、方々へ引退く、佐野勢無念と云も餘り有、爰に豐嶋七右衛門は、宗綱乃御首を足利へ注進のため、本道は物騒ければ、樺崎より山隱乃野道をつたひ通りける、かゝる所へ敗軍したる佐野勢乃中に、山越才吉、戸室才藏は馬乗捨て、步行立に成、秘に山中に忍居たりしに、向乃谷道を見れば、武者一騎下人に人乃首を持せ通ける、宗綱乃御首を足利へ注進と覺えたり、待請て討取べしと、澤へ下り小蔭に待居たる處へ、七右衛門は無_レ何心來りける、兩人小蔭より立出、其元へ來る武者は、宗綱乃御首を足利へ注進と見請、爰元に待かけたりと、無_二無三に打て掛る、七右衛門は只二人ではあらじ、隱勢有らんと心得、御首を打捨、山蔭に逃入ければ、兩人悦び御首を見れば、主君宗綱乃御首なり、急御供申歸

りけるとなり、佐野家老中は、方々敗軍の諸勢を集め、宗綱居城へ會合し、今度大將討死被_レ遊上は、我々を初、於_レ彼地一戸を廣原に曝し討死事雖_レ有_二本意、大將被_レ討ければ散亂の者難_レ集、亦是甲斐々々數働不_レ致して、彌、人の口も口惜事なれば、此上は天德寺を請待して、後日に勝利相待可_レ遂_二本望に_一て候の間、宗綱公存生の時分より、猶以_レ本城の儀は不_レ及_レ申、銘々居城村々迄堅固に可_レ致_二用心_一由、侍中へ申渡せし事、

宗綱公御老母并御内婦御嘆之事

一宗綱公討死被_レ遊、御老母御内婦様御泪ながらに、兩人乃姫君をつくぐと御覽被_レ成、扱々親上討死にて候事、弓馬の家に生る、可_レ驚にあらす、武士の本意と思へども、子供二人之内、せめて一人男子にて有ならば、如程には有間敷者をと思召、今一入の御嘆申も有_レ餘、姉君五歳、次は三歳、何の御事もなき有様を奉_レ見にも、家中の面々絶_二言語_一、何共御挨拶不_二申上_一、泪にて有_レ之所に、山越才吉戸室才藏、兩人は御首を奪取、唐澤の城へ立歸り、御嘆の處、件の御首をする置、何共無_二言葉_一、泪を流計也、老母

御内婦御覽有て、御首に取付御落涙有、老母泪を押へ、空き死骸に打向ひ、嗚呼不覺なり宗綱、計謀と云ながら、大拔が諫言の用なば、加程に有間敷物を、さかりし花を落花となし、老木乃枝の有甲斐もなき、母が意を思ひやれ宗綱と被_レ仰、御聲上嘆給へば、座中一度にわつと計にて物云者なかりけり、老母泪を押へ兩人を召され、御首奪取し初終を御聞被_レ遊、扱も汝等は軍勢乃中に見へざる故、若討死かと思しに、思にまさるかくの者かな、宗綱存生にてか程の働有なば、恩賞可有に、不運なる宗綱に頼まれし汝等迄も不運也と被_レ仰、又御泪に暮給、座中御挨拶申者もなきとなり、

佐野家老中天德寺請待之事

一宗綱の御老母被_レ仰けるは、嘆ても不_レ叶事なれば、我々女性的事なれば、何事も思に無_二甲斐_一事なり、此上は天德寺を請待し下知爲_レ致、何とぞ今一度足利新田を攻、長尾と信濃を可_二討取_一被_レ仰ければ、家老衆家中の面々一同に仰にて無_二御座_一共、家中不_レ殘左様に奉_レ存罷在候、又か様乃亂國の節は、大將なくては士卒も心掛輕き者にて御座候、早々天

德寺を請待可_レ申とて、宗綱公討死、御老母御意の趣、飛脚にて委細に上方天德寺へ申越候事也、

大拔越中切腹の事

一今度大拔越中守、元旦之御出馬に御供なき事は、尤御諫言乃砌御腹立被_レ遊、御用なく御出馬の事は、是非に不_レ叶、越中申儀雖_レ有_二一理_一、乍_レ去心底難_レ計、本城の御留主居も不_レ被_二仰付_一、何共御意不_レ被_レ成して、無_二二三_一に御出馬被_レ遊候處、越中御所に居殘候事非_二本意_一、御留主の儀御城主より常々急成時の爲に被_二仰置_一候間、常の衆は尤にて候、跡に居殘候節にも本意成衆も雖_レ有、大拔方成れば無_二是非_一、心替は必定と覺たり、押寄勝負を決せんと富士源太、竹澤山城、山越才吉、津布久彈正、細野次藤左右衛門を初として、其外記に不_レ及、三十餘人の者侍大將として、此外數百騎を催し、大拔攻の相談相究となり、大拔越中も佐野四天王乃隨一にして、一騎當千乃侍なれ共、家老衆と不和にして、御相談一にならずして、殊に元旦乃御出陣御諫言御用なき故、居殘し事雖_レ有_二道理_一、二戰乃御供不_レ仕、家老衆と不和乃儀段々背_レ道たり、此度寄來る敵を見て、一戰に

不_レ及ば、臆病に似たれ共、若彼等と戦なば、主君へ敵對と長く呼れんは、侍の本意にあらずとて、宗綱公討死たまひし後、無_レ程一戰にも不_レ及、父子切腹せしと也、

長尾殿宗綱公を討大悅之事

本條以下以大
學本補足之

一同正月二日に、足利於_ニ本城、家來中へ悅の御盃を被_レ下、長尾殿家來中へ仰らるゝは、佐野足利の取合數年雖_レ及_ニ度々、大將を捕子にする迄の事なかりしに、今度宗綱を不思議に討捕事、且は後代の譽、且は家連長久の元、何事か是にまかんや、近々令_ニ出馬、佐野の家來ども討捕、佐野仕置可_ニ申付一の旨被_レ仰、各承り、今度の御勝利、偏に兼日之御武略不_レ淺と社奉_レ存候、關東城主數多雖_レ有_レ之、小田原越後甲州佐竹の旗本に屬せずと云事なけれども、足利新田之御兩家計、何方の御旗本共不_レ被_レ成、此上は野州上州迄も御手に可_レ被_レ入にて社候得と申上れば、不_ニ大形一御大悅有_レ之、御盃は最前小曾根筑前に被_レ下、次には豊崎七右衛門に被_レ下、是は宗綱を筑前が手にて討取たる故也、侍大將成ける江戸豊後計何之御挨拶も不_ニ申上、豊後かたへ御盃被

下頂戴いたしながら涙をはらゝと流す、長尾殿御立腹在て、強敵を討取諸人悅之所に、扨豊後は最前より愁たる、躰不思議の至也、其方縁者宗綱が下に有_レ之故かと被_レ仰ければ、豊後承り、御屋形の仰とも覺不_レ申物哉、親兄弟立別て戰場に臨ては、却て互に耻を奉_レ存故に、一入勇強事は古より其例多し、若某野心を存は、日頃一命を輕じ忠勤を抽で、又今御前に罷出るに不_レ可_レ及、愚意を取て了簡仕に、北條氏綱公より今氏直迄は已に五代成る故、御一家廣く、代々普代衆數多雖_レ有_レ之、新田足利の御兩家を御一族の外御懇意被_レ遊、利關東の城主數多の内、御兩家よりは互に御禮の前後を爭給候共、結句小田原より御無事を被_レ成、御疎略のなき事は、全以御兩家を大切に被_ニ思召るゝ、御心底に不_レ有、第一は謙信公の御支配、近國無雙の強將、宗綱公をうるさく思召、此奥意の爲に御兩家を立置れ、御懇意被_レ成と覺候、此上は氏直公御氣遣被_ニ思召一敵なければ、却而御兩家を御氣遣に被_ニ思召、さも有んに於は御兩家を御退治被_レ成、親き御一門御普代衆を新田足利館林桐生へ可_レ被_ニ指置一御計略と奉_レ存

候旨申上ければ、長尾顯長公以の外御立服被_レ成、左有とて寄來る宗綱討ず_ニ其儘置るゝものかと被_レ仰、豐後重而申上るは、御敵對之儀に御座候上は、御退治被_レ成事御尤に奉_レ存候、某右申上候處、御思慮於_レ被_レ遊は、箇様の大利深く御敬み、免鳥、樺崎、彦間、名草へ、敵寄來べき所を大切に被_ニ仰付_ニ社深き御武略に可_レ有_ニ御座_ニ、信長公又謙信公信玄公三大將ながら、弓矢の道三五七とて、六方の勝を專に守て、様子作法共に宜き格法なり、爰を以大將を近代對道の名人と是を天下にさた仕候、佐野天徳寺、山上道及なども、武者修行に出し留主と申、又は佐野家老中不和にして、法令以下區成折からなれば社、御利運とは罷成て候、佐野家中於_ニ一和は、主君をやみゝと討せ申事口惜く存、敵の様躰を伺ひ、身命をおします、方々より攻來候は、必死の敵に對して戰危き事にて御座候、敵若免鳥の城か彦間の要害を攻落し、火の手を上げ候は、大將の不覺には罷成間敷候哉、宗綱うたれ給ふ事、卒忽の働に依て不思議の所、又宗綱運命盡たる故なり、淺葉兄弟、小曾根筑前、新井圖書その外の衆中も、某

が申上る所理に當らざる儀も候は、可_レ承候、又合戰之様子并に宗綱討捕候事、早々小田原へ御使者を被_レ遣、なを跡より委細之儀可_ニ申入_ニ一抔とて被_ニ仰越_ニ候てこそ可_レ然所に、當前之御勝利のみを御悦、行末御家の亡る事を不_ニ思召_ニ儀、なげかはしき様に奉_レ存候、良將は奥に奥有と申、又古語にも遠き慮なき時は必近き愁有と申事も御座候、小田原は大家と申、關八州に何の城主肩を雙ぶるものなし、此以後無_ニ覺束_ニ事出來之上は、猶親を深く敬給ひて社、御先祖鎌倉權五郎景政公より代々の御家を可_レやかし可_レ給時にも御逢可_レ有、又わざはひを薄くし、幸をなすは、良將の智慧と承と、惶所もなく申上けれども、家亡べき時節にや、終に御納得なし、此故に江戸豐後無_レ程長尾殿を立のく、諸人情み思事なり、

足利新田小田原へ被_ニ召籠居_ニ之事

一 佐野宗綱公を足利にて討捕申之旨、長尾顯長公より小田原へ被_ニ仰遣_ニければ、氏直公御感悦にて、山上五右衛門を上州厩橋へ被_レ遣、其歸りに則由良長尾殿へ被_ニ仰遣_ニければ、先年由良殿武略を以、桐生

又次郎殿を退治し給、今度又長尾顯長公、佐野宗綱を被討捕、甲州駿州杯迄手に入候はん事無疑、新田よりは西上州を手に入、信州迄發向し給へ、足利の儀者宗綱を討捕といへども、家來の者佐野を堅領して有之事なれば、迎もの事にかのもの共を一々退治して、それより、小田原、結城、下館、壬生、皆川迄手に入、此外北野州常陸迄も手に可被入計略尤に候、是は佐竹義信、同く義久、景勝支配の地なれば、定て此兩家より加勢申付べし、日比の勇才感入候、兩家の働を以手に入給、國々郡々の事は、此方より少も望無之候、右の子細ども直段、又各兩家の働感悦之段申入、數日之御苦勞を慰申さん爲、山上五右衛門指越の旨、御兩家ながら、此五右衛門御同道にて入來所希也と被仰越に依て、由良殿、長尾殿、則小田原へ御越有所に、氏直公より山上五右衛門を以、兩城主へ被仰には、第壹、合戦に各々勝利得らる事尤には候得とも、此方へ注進延引の事第二、先年佐野を攻候刻、佐野、前川原、富士口迄攻寄、宗綱が二三の備迄切崩、旗本後備迄色めき立て見へ候、此時節各人數を加勢候は、宗綱が

備立直す事不可成所に、兩家見除故、宗綱備を立なをし下知しけるに依て、味方利を不得事、第三、今度宗綱を討取候は、即刻其首を爲持、顯長小田原へ可參府の所に、五日以後注進之儀、旁以無禮至極のよし御腹立也、依之御籠居被仰付候、被仰分於有之は、重而家老中迄可被仰達迎、兼而相圖の者共出合ひしと押取籠居也、其以後無程御免にて人質を御とり、其上新田足利へ兩城主歸城なれ共、又翌年小田原より被攻、終に無程兩家ながら亡し事也、

小田原より使者來る事

小田原氏直公より佐野へ御使者にて被仰けるは、宗綱討取之趣、委細長尾顯長方より届候、其元佐野之分は不殘今迄の通りに支配無相違可被致候、就夫左も有んにおゐては、小田原へ關八州の格法にて候間、人質可相渡候、押寄勝負とは存れども、宗綱内婦老母居城にて、無大將所へ何とやらん長なし、又長尾由良兩城主、佐野桐生雖討取、無禮旁以子細有之故、小田原へ招寄籠居に申付候、右兩人申分相立雖歸城有、其元より人質於

渡は、重て遺恨有之共、此方より後詰可申と家老衆へ被仰遣ければ、委細御使者の趣違背中に似たりと雖、宗綱社討死仕候共、弟天德寺と申者御座候上は、天德寺心を承、此方より御報可申上とて使者を小田原へ歸し、早速使者之趣上方へ申遣候事も、

佐野より天德寺へ飛札之事

一天德寺は、上方秀吉公へ御勤、家中の衆中鍵の弟子と被成、秀吉公にも御氣に入、御前近く被遊、諸事御心易被仰候、第一天德寺智仁強將無並、度々場數有之、其上兵法鍵之上手、天下無雙の事も、秀吉公にも一度は御取立可被遊と思召御念頃也、然所に野州佐野より飛札到來之趣御覽被成、扨々殘念成事哉、吾等兄弟佐野に居住あるならば、即時に長尾を討捕可達本意者と思召、又宗綱公にも其時には天德寺有ならばと思召候はん事、鏡に懸て覺候と、御心強き天德寺にも御泪なり、左有とも無是非、此上は下向して長尾を討取んと思召、野州への御返事は、今度兄宗綱公御討死無是非事なれば、其元居城は不及申、村々境目々々迄能々

用心尤に候、追付下向して可達本意候と佐野へ被仰下之間、家老中是不及申、家中の侍一同に心を合用心之事、

一天正年中二月上旬の事、天德寺は、右の飛札具に秀吉公へ申上ければ、扨は佐野宗綱は、長尾に被討取候か、貴老殘念に有所尤に候、早々野州へ下向して長尾を可討取、若も貴老所存も於有之は、無殘可被仰と、忝も秀吉公御念頃の御意、天德寺難有仕合奉存候、拙者下向仕、佐野家來共と心を合、隨分働、長尾を討取申さんと申上、一兩日中に下向の用意被成所に、二月中旬に又佐野より委細以飛札申越候は、小田原より使者之儀、是は案の外也とて、亦秀吉公飛札之趣申上ければ、於有左は下向の儀無用にて候、此上は小田原へ人質を遣し、下知に隨て居城を守り可有よし、佐野へ可被仰遣と、天德寺へ私に御相談、秀吉公御意被遊候は、最早長尾由良南人小田原へ籠居の上は、貴老下向して無益、又新田足利兩城主申分有之歸城の事にても、小田原へ人質相渡からは、新田足利よりも可遠慮、然時は野州唐澤の城無心元儀

無_レ之候、時節を見合、我等小田原を攻、退治可_レ申候、その時分は貴老も達_ニ本望_一候半と、件之趣私に可_レ被_ニ仰遣_一候と御意被_レ遊ければ、佐野へ此旨一々不_レ殘被_ニ仰下_一し事なり、

小田原より人質取に來事

一氏直公より山上五右衛門を以、佐野家來中へ被_ニ仰遣_一けるは、去る時分以_ニ使者_一申遣候人質の事、天德寺へ被_レ聞候哉、人質無_レ之候は、存寄之儀候はば可_レ被_レ給候と被_レ申ければ、佐野家來衆は御尤に而候、天德寺へ申遣しければ、此上何分にも氏直公御意次第に可_レ致由申越候間、御下知に隨而人質可_ニ相渡_一旨申ければ、五右衛門その儀に而候は、佐野本城に御入候家老衆は、不_レ殘妻女か子共衆之中一人宛、侍中も右の通りにて、以上廿四人之人質召連、山上五右衛門同道に而小田原へ差越、無_ニ是非_一事共也、

山上道及事

一山上道及は武者修行として、上方又は關東中小田原にも少の間働、武田信玄公へ入候所に、佐野の様子段々承り、夫より秀吉公へ參上し、天德寺へ御目

懸り、宗綱公御討死の次第互に御物語、是非に不_レ叶以_ニ天德寺_一を申上、秀吉公へ御目見仕ければ、秀吉公被_レ仰けるは、近日小田原を攻、退治可_レ被_レ遊旨、就_レ夫天德寺道及は所生關東者なれば、關東之繪圖を御望被_レ遊、關八州の城々山川大小道難所迄殘らず繪圖に仕差上ければ、御感悅不_レ淺して、彌御氣に入、此上は兩人を關八州、今度小田原の案内可_レ被_ニ仰付_一とて、無_レ程五畿内五箇國之中へ被_ニ仰遣_一ければ、五畿内の軍勢數萬騎に而御用意之事也、

秀吉公小田原攻并天德寺先手之事

天正十八年庚寅

一秀吉公五畿内の勢數萬騎にて、小田原氏直を御攻可_レ有とて、諸軍勢へ軍法の御下知被_レ遊けるに、天德寺申上は、今度小田原攻之御先手を某に被_ニ仰付_一候得かしと御願を申上れば、秀吉公御意有しは、貴老人數も不_レ持、壹人に而は成間敷と被_レ仰ければ、天德寺申上は、今度御先手被_ニ仰付_一候は、野州佐野へ申遣し、宗綱が家來共都合五百騎計は可_レ有_ニ御座_一候、彼等を呼寄、御先手可_レ仕と申上げれば、秀吉公御感深き大將にて、いや／＼佐野に居

殘候侍共も最早數箇年以前之事なれば、思ひく
に頼み働たるも不_レ被_レ存候、若其時如何可_レ有と仰
ければ、宗綱が侍代々普代の事なれば、何國へも頼
申儀に而も無_レ之候と達て申上ければ、左も有ば貴
老望に先手可_レ有と被_レ仰付ければ、佐野へ件之由
被_レ仰越けるに、思召とは相違して、秀吉公如_レ御
意、方々へ散亂にて、小田原へ人質之衆其外以上百
騎より内にて、其日限に參上仕候、天德寺此由を御
覽じて、扱も無_レ是非_二次第_一とて失_二面目_一けり、夫
より少し秀吉公御前宜く不_二思召_一事也、

小田原合戦之事

一 秀吉公御軍代には加藤主計頭殿、御目付には富田
左近殿、其外不_レ及_レ記、數萬騎にて、小田原へ押寄、
小田原にても兼て用意の事なれば、氏直公も諸軍
勢へ御下知、先大手口には北條安房守、山上五右衛
門大將にて、數千騎にて堅たり、氏直公被_レ仰ける
は、此度の合戦に聞は、佐野天德寺、同家來山上道
及、兩人關東の案内、殊に今度先手を望たるよし實
正也、扱々佐野より人質相渡置たる侍供も、天德寺
に寄騎して馳向せ惡次第也、大手口にて佐野より

の人質共不_レ殘羽付に懸置、天德寺勢に可_レ被_レ見と
被_レ仰ければ、北條安房守氏直公へ申上は、尤御意
に而御座候得ども、天德寺道及彼者共を見は、身
命をおします可_二討入_一、命をおしまぬ敵には大勢成
とても敗軍は必定也、天德寺道及勵を御覽可_レ有、
若又人の心と申者は、其者共を見るより此方へ同
心可_レ致も不_レ被_レ存候と申ければ、氏直公尤なれど
も此段々眼前に乍_レ存、佐野之者共天德寺と同心に
て押寄上は、如何可_レ有共不_レ被_レ存、關八州の人質
數多之事令_レ見の爲にとて、達て被_レ仰ければ、大手
口に三十四人、佐野の人質羽付に掛て置、佐野勢目
前にて突殺し見すべきとて、生ながら置ける事不
便なる次第也、然所に五畿内の諸軍勢數萬押寄け
る、天德寺は道及を先として、最前秀吉公御先手を
所望の上、是非々々此度先陣と心掛、露命を輕じ進
ける所に、件之羽付を御覽じて、目もくれ心もきへ
けれ共、一入々々口惜、佐野勢共妻子を目前にて如
_レ此、命可_レ惜事なしとて、無_二無三_一に討入ければ、
さしも堅たる大手口一の備一縦崩ける、加藤主計
頭殿此由を御覽じて、天德寺道及を討すなとて後

勢寄ける程に、天德寺を先として攻ければ、小田原方散々敗軍しけるなり、是よりして天德寺秀吉の御前首尾能也しとなり、

秀吉公天下一本之次第

一 小田原無_レ程落城し、信長公の後、明智日向守を御退治以前、武田信玄公御病死之後、長尾謙信公も御病死にて、御兩家は亡、關八州の分は不_レ殘、佐竹義治公、同義久公、里見義胤公を初として、其外奥州迄御無事に成、西國安藝の毛利殿御無事にて、六拾餘州に秀吉公へ御敵對なすもの無之、御自身一天之御主と被_レ仰し事なり、

天德寺佐野へ御入部之事

一 秀吉公被_レ仰けるは、天德寺貴老數年場數、其上今度小田原にての働難_レ記ニ言語ニ高名なり、就_レ夫佐野領は不_レ及_レ申足利領迄合て拾貳萬石之所被_レ下ける、又道及も働の者なれば、いよく可_ニ引立_一との御内意難_レ有仕合なり、天德寺申上は、御上意の趣難_レ有奉_レ存候、乍_レ去拙者儀出家の事、高地不_レ被_レ下候共不足に不_レ奉_レ存候、兄宗綱が女生の子其御座候、御見合に而養子仕度奉_レ存候、其節如何様に

も御取立可_レ被_レ下と申上ければ、天德寺事中所尤の事也、出家にて有間、本領佐野を被_レ遣けり、秀吉公被_レ仰けるは、富田左近子ども次男宗綱が養子と即時に被_ニ仰付_一、左近次男未幼少の事なれば、御意に而御約束被_レ成、野州唐澤御本丸へ御入被_レ遊し事なり、

佐野侍中出仕之事

一 天德寺公唐澤御本丸へ御居城有て、家老中其外佐野譜代の侍居殘候分は、御本丸へ被_ニ召寄_一、殊に竹澤山城守城にて小田原へも不_レ働城を守り、今度天德寺御入部の旨大悦不_レ淺して、宗綱公すばなの上雲雀、鳥屋寄居にて御討死被_レ遊し次第、一々御物語申上ければ、さて無_ニ是非_一思召、又家老中佐野を堅固に持、其以後一村も敵に不_レ被_レ取事、始終の忠勤手柄の段、前代未聞、誠に可_ニ報謝_一様もなしとて御感悦不_レ淺、又大拔越中が事、切腹程之儀にても有間敷ものをと被_ニ思召_一、我等下り様子見届、少々な事は罪を免し置べきにと被_レ仰ければ、一度の衆中何其御挨拶不_ニ申上_一、仁義ふかき大將哉と感心の事にて、天德寺御繁昌、宗綱公御時に不_ニ相替_一脇々へ

出し侍、又は引込浪人にて、百姓とも侍とも不_レ知所々在々に居住の者ども、天徳寺御入部と聞しより、段々の様子申上、御目見への處に、天徳寺公被_レ仰けるは、何も被_レ申段尤なれ共、普代の侍にて如何に大將討死有ばとて、散亂は不_ニ出來_一也、然ども大拔越中が事と云、惣而佐野家老中侍不和之儀にて、申所も一理有_レ之、其上我等佐野入を待懸、左樣之歸來と申志有間、先知にその上少々宛の御心付にて被_ニ召遣_一被_レ仰けるは、其方達前々働の段々忠勤感入候、此上は宗綱同前に忠義可_レ抽と被_ニ仰渡_一し事なり、

御養子家老中へ御相談之事

一天徳寺被_レ仰しは、内々何もへ申通り、最早宗綱公御跡目之儀、秀吉公へ可_ニ申上_一と家老中へ御相談被_レ仰ければ、竹澤山城守申上候て、御意之趣御尤に奉_レ存候、富田左近殿御次男當年十八歳に御生長、此元姫君にも御成生の御事、早速御願を被_レ遊可_レ然と申上る、天徳寺被_レ仰けるは、其方我等名代として秀吉公へ參上し、御意之段相違無_レ之候は、其方下り次第に某上京し申上、同道可_レ致候とて、

竹澤山城守を御使者に被_レ遣、秀吉公へ以_ニ時之御取次_一を天徳寺願之趣申上る、秀吉公御意被_レ遊けるは、以前天徳寺佐野入之時分に約束の事なれば、無_ニ相違_一と御意にて、富田左近殿へも右之段被_ニ仰付_一けるは、天徳寺上京迄にも不_レ及、今度吉日次第に竹澤と此方家來之者一兩人成長人者を指添、野州へ可_レ被_レ遣と富田殿へも御上意被_レ下、竹澤山城御供にて佐野へ御越の事なり、

天徳寺御禮に上京之事

一天徳寺は、秀吉公へ爲_ニ御禮_一御上京被_レ成右の御禮申上、さて山城を御意窺に指上申所に、即時に被_ニ仰付_一、難_レ有奉_レ存候旨、又御願を申上候者、宗綱某養子の儀に仕候、如何様にも名を御付可_レ被_レ下由申上ければ、秀吉公も御機嫌にて、天徳寺申所神妙に候被_レ仰、則佐野小太郎修理太夫信宣と被_ニ仰付_一、天徳寺難_レ有奉_レ存候とて御暇申上、富田左近殿へも御禮式被_レ遊、佐野へ御下り、御婚禮の御事旁以目出度御首尾と、上下御祝悅之事なり、

天徳寺御隱居之事

一信宣公御成長、佐野御支配村々まで堅固に被_ニ仰

付、家老衆其外家中の侍中一和にして、御長久の御家と御感悦の儀不_レ淺、天德寺公被_二仰出_一けるは、信宣諸事長成人家中在々迄支配、大悦不_レ過_レ之候、就_レ夫我等は數箇年見届、その上老身なれば、赤見村へ隱居可_レ被_レ遊旨被_レ仰ければ、信宣公を始家老衆不_レ殘御意之段御尤に奉_レ存候とて、無_レ程御相談極り、赤見村へ御隱居被_レ遊候事也、

信宣公天德寺へ不孝之事

一天德寺公亦見村へ御隱居被_レ遊ければ、諸事之儀に付て、信宣公御我儘成御心出來被_レ遊し事、家老中を初御異見數度の事なれども、御用ひ不_レ被_レ成故、赤見天德寺公御聞被_レ遊、唐澤へ御越にて、度々御異見の處に、御用ひ不_レ被_レ成、其上天德寺近所に御入候ては、御心せはしく思召、是非々々仙場村へ御越可_レ有とて、不意に仙場村へ御押込、其以後御通路不_レ被_レ成、唐澤へも御入なき様にと、扱々無_二是非_一次第也、信宣公慢氣の事なれば、家亡る儀無_レ疑、嘆かはしき事也とて、朝夕泪計にて、無_レ程御病死被_レ遊し也、其以後は猶以御氣儘の事也、

普代の侍御暇之事

一信宣公諸事御氣儘被_レ遊候を、家老衆度々御諫言申上けれども、右天德寺御異見だに御聞入不_レ被_レ成、御諫言申上る者は背_二本意_一、普代の侍名は不_レ及_レ記、一人二人宛御隙申請し事不_レ知_二其數_一、富士源太御一家の末なれ共、富士村へ御引込御病死、四天王の末は竹澤子孫計、其外佐野普代衆少也、他所へ奉公に出、又は引込百姓に入まじり、富田の家より来る衆も、後には御隙にて立のく、其中に秀吉公富田左近殿御病死なれば、御約束の御加増御さたなく、佐野本領計御支配なり、其節の家老衆は佐野和泉守、竹澤山城守孫佐野内匠頭とて佐野を家名に被_レ下、和泉守は富士源太之智なりとて家名被_レ下けり、弓削長門守、内藤五左衛門、中江川大膳也、此外新參衆譜代の衆不_レ及_レ記、度々御我儘の御諫言なれども御用不_レ被_レ成、雖_レ然江府家康公御前は御無事也、

唐澤之城天明春日山に引築し事

一信宣公唐澤の居城へ、江府の火事夜中に見へければ、諸家中にて江府か何國やらん夥敷火事也とて申上る、信宣公御覽じて、是は正敷江戸に無_レ疑と、

急に御供廻りも續兼る程に、早馬にて館林より御通り、道にて御馬死ける程に、御急忍領にて御馬死しければ、不便に思召、其在所に馬頭觀音と御祭り有也、扨江戸へ夜中の火事に明る九ツ前には、江府家康公爲御見舞申上る、家康公扨々早々の見廻感入候、何時佐野を御出何方より告參候と被仰けり、餘り御前宜き儘に、某居城よりは目の下に見、扨佐野居城は我等居城目の下に被見候は、殊外高く御入候哉、淺事ながら某も關八州は不及申に、日本の支配申からは、某居城よりは高く候は、平地に貴殿の居城築可然旨被仰出ける、委細御請を申上、首尾不_レ宜、佐野へ御歸り、家老中へ御相談にて、無_二是非_一天明春日山に居城御築、寅の年中御移り被成けり、扨々惡事出來の時節にや、御築初の日取も亡日にて、御移の日も亡日と申侍なり、

移城慶長七年壬寅か、關ヶ原御陣は五年庚寅なれば、丑年一ヶ年過て也、春日山の城又寅年破崩とあり、是又同十九年甲寅か、然ば大坂夏御陣の年にて、右城落滅の前年か、

信宣公信州松本へ御預ケ之事

一信宣公常々我ま、成御事は、第一は天德寺へ御不孝、普代の侍中に御暇被遣、新參の者共古來衆よ

り近所に被召遣、諸事御意次第と出仕して、追從輕薄申上者、無作法之儀御進、是等計御氣に入、家老中也時節計の出仕にて、無_二是非_一折節、御内婦様より嫉妬の御遺恨により、信宣公を隱居之願、御嫡子小吉殿を御世に立、家中の嘆御自身の御心をはらし可被遊と、家老衆とも無_二御相談_一、七八箇條の御書付にて御訴狀、御内縁之傳にて私に御上ケ、家康公にも内々は目付衆より佐野信宣我儘無沙汰のよし少々御聞被遊ける所へ、訴狀御覽被遊、尤公儀へ對し無禮なしとはいへ共、旁以我儘成儀數多有之間、一先押籠、於有_二申分_一は可有_二免許_一とて、信州松本へ國替と被仰付、佐野へ御上使被遣、寺岡村岡崎山に、旗本衆五人に被仰付、日限時刻を極め岡崎に密れ居て、信宣公御親子三人ひしと取籠、松本城主へ御預ケ置被遊ける、天明春日山の城へ御移り、中十二年被成_二御座_一候事、

佐野家老侍中色々義心之事

一然所へ江府家康公より城請取に爲_二御上使_一、溝口外記殿旗本衆以上三人被遣けり、佐野家老中諸將不_二思寄_一事なれば、おもひの評議なり、先城代

和泉守被_レ仰は、今度不思議の被_二仰付_一、何様無_二覺東_一城を明渡し、時節を窺、無罪様子御訴訟、於_二申分仕_一は、歸城無_レ疑、何も思召承度しと被_レ仰けり、佐野内匠被_レ仰しは、尤和泉守殿思召のとふり、今度不思議に存ずれども、さすがに侍が主より預り置城を、一言もなくおめくくと渡可_レ申事口惜き次第なり、此城を枕にして討死と被_レ申ければ、弓削長門守被_レ申しは、内匠殿如_レ被_レ仰、某も左様に存候と申ければ、中江川大膳被_レ仰は、尤なる和泉殿と雖、某存寄は以_二時節_一申分け、歸城有間敷者にて無_レ之候、分別は雖_二似臆病_一、今度は無_二異儀_一相渡し可_レ然と被_レ申ける、長門守達て兩所之被_レ仰は合點參不_レ申候、此長門守と内匠頭は城を出中間敷、但し侍中之御心次第と思切て被_レ申ければ、其中にも長門守之仰を尤と申者も有、和泉守殿被_レ仰しを御道理と申者も有、和泉守殿達て被_レ仰しは、忠義は侍の本也、主人大切に存る上は、重て世に立申社本意なるべし、今度不意に信宣公松本へ籠居、殘念の次第也、せめて罪の様子家來共にも一々被_二仰聞_一、其上箇様の段は不_レ及_二是非_一、何も被_レ仰義尤に候得

ども、信宣公我儘成儀は、一分之於_二公義_一無禮少もなし、時日を待申分立間敷ものにてなしと被_レ申ければ、此道理可_レ然と、四人の家老衆同心にて、城をすなをに可_レ渡と被_レ申けれ共、長門守一人は更に不_レ爲_二同心_一、雖_レ然一人にては城可_レ持様もなし、一命有上は孰もと同心難_レ成とて、早馬にて犬臥大庵寺へ欠入、則時に切腹せしとなり、四人の家老衆侍中へ被_レ仰けるは、我々申處御同心候は、御上使の衆へ様子申上可_二相渡_一とて、佐野和泉守、同内匠頭、内藤五左衛門、中江川大膳、御上使之衆へ罷出申けるは、今度主人信宣儀不意に信州松本へ御預け籠居被_二仰付_一一段、罪の次第家來共も承度奉_レ存候、又主人より預り置候居城早速相渡し申儀、侍の本意に雖_レ非、向_二御上使_一及_二異儀_一候は、御訴訟申分難_レ成奉_レ存恐入候、重而御訴訟爲_二申上_一相渡可_レ申候、乍_レ恐御前之儀頼上候と敬て申ければ、御上使三人の衆、尤也神妙に候、後日に御申分成間敷にて無_レ之候と、御禮式にて御請取、三日の間に城を崩破り、御上使江府へ御歸之事なり、

信宣公御申分訴訟之事

一佐野和泉守殿法躰之後、山中仙齋とて土井大炊頭殿へ御内縁以有之取入、其節土井大炊頭殿家康公へ御出頭して御有し所へ、山中仙齋、信宣公無罪次第御前へ宜様に御取成奉頼上候と、種々訴訟御申分依有之、無程御免之御内意にて、仙齋御迎に松本へ被參ければ、御親子三人御感悦不淺、江府へ御越、御目見へ可被遊所に、武州深谷迄御出有、御運之盡哉、道にて卒中風被遊、江府へ御着、無程御死去也、其故御沙汰なし、無是非御兄弟ながら御牢人にて被成御座、無程家康公御他界其以後、土井大炊頭仙齋老にも御病死、其より長々御牢人の御苦勞難申盡、然所へ御兄弟佐野吉之丞殿同喜兵衛殿被召出、御子孫御繁昌御出世御長久と目出度奉願候、

香宗我部氏記錄

香宗家證跡記

抑中山氏之先祖、土佐國香宗我部者、人皇五拾六代清和天皇七代之後胤、鎮守將軍源賴義之三男、兵衛尉甲斐守義光號新羅三郎、崇徳院ノ大治二年、歳七十二卒ス、弓馬藝勝源氏一流祖ト云、之曾孫、武田太郎信義之苗裔何某、甲斐國武田之氏族、今世世上中山家所藏系圖、雖載三世々無斷絶、詳於姓名、有疑、故ニ不レ取レ之、雖然所載姓名ト與三年時、今所存古文書符合之者、證トシテ之舉レ之、鎌倉源將軍之時、何代ト云コト未詳、土佐國賜ニ於香我美郡、自夫世々住ニ於香宗郷土居村而號香宗我部、家紋割葵、世ニ云武田葵、今立仙宮、紋割葵也、

或曰土州二有ニ宗我部、在ニ於長岡郡一居秦氏號ニ長宗我部、在ニ於香我美郡一居源氏號ニ香宗我部一、

○重通又太郎、法名照海、

所傳在ニ系圖一、但如ニ右記一、家譜連綿相續、一世雖无ニ斷絶、无レ證者不レ取、此照海之事、西山氏所藏之文書、香宗我部通秀西山氏所賜之文書之内有、以是實有ニ照海一知也、出ニ於通秀之條一略

之、

右重通時代推而量ルニ、北條貞時高時比人歟、

○秀頼甲斐孫四郎、法名性海、系圖正和之比人ト云、

長岡郡介良村西養寺所藏文書蠶簡集

土佐國介良庄事、爲ニ走湯山密嚴院領ニ之處、甲乙人致ニ濫妨狼藉一條、父甲斐孫四郎入相共相ニ鎮狼藉沙汰、居代官可レ令ニ所務、且載ニ起請之詞、可ニ注進、違犯仁交名之狀如件、

元弘三年六月四日 源朝臣

長宗我部新左衛門殿

蠶簡集曰、右介良西養寺藏、凡十九通、今按源朝臣足利尊氏、新左衛門豐岡城主泰信能、孫四郎入香宗城主甲斐又太郎重通次男甲斐孫四郎頼入道性海也、

私曰、元弘三年ハ光嚴院ノ正慶二年也、此年鎌倉九代將軍守邦親王、執權北條相摸守平高時并一族等、新田義貞被ニ打亡、去治承四年頼朝鎌倉入、平家之一族滅、天下ヲ治、今年正慶二年迄年數百五十餘年、將軍九代北條八代也、右之内將軍九代といヘ共、初一代源頼朝、二代頼朝、嫡子頼家、治世僅ニ

而伊豆國へ流、三代實朝、賴家ノ弟也、是又治世不久、其甥
ル後又被ノ殺、爲ニ公曉ニ於ニ鶴ヶ岡ニ害セラル、
此以後ハ親王或攝家ノ末男ヲ將軍ニ立ル、然共
名ノミニテ、執權北條天下之政事心ノ儘ニ行ヘ
リ、從ニ是足利尊氏天下ヲ治ム、

○時秀法名善海、系圖
秀頼ノ子トス

右時秀之事、西山氏所傳文書如左、

如レ仰未入ニ見參ニ候得ども、承候而悅存候、口
直之時は承候ハ、自レ是可入レ申候、兼又物部
案主職之事ハ、時秀之御時、甲斐二郎殿と仰候
之間、身が出申、もしうりけんには、甲斐二郎
殿と出申て候、いまの御案文は身が進候之
狀江ハ、もし五つたがいて候と存候、何事連々
に可ニ申承ニ候、恐々謹言

七月廿六日

沙彌了(花押)

謹上 甲斐二郎太郎殿

○通秀甲斐守、法名
蓮海、系圖在、

右通秀、西山氏所傳證文、永和五年ノ文書有、如
左、

去申香宗我部卿内甲斐小次郎氏秀子息次郎太
郎安秀分事、

合貳町壹反卅屋敷二所田數
注文在ニ別當、

右件田畠等者、伯父氏秀尙未ニ處分ニ間、子息安
秀江彼地ニ而去申畢、公家武家御公事等者、昭
海置文定候間、於ニ後々未來ニ不可レ有ニ異儀
上者、限ニ永代、安秀江去申候也、仍爲ニ後日、去
狀如件、

永和五年壬四月廿一日 通秀(花押)

右照海置文ト有ヲ以、知レ有ニ重通ニ也、

○親秀出羽守、此親秀之弟何某、其子中山田左
衛門佐泰吉ト云、土佐國中山氏之祖也、

右親秀、金剛頂寺西寺所藏墨簡集願文、有文明十
八年源出羽守親秀、

新宮村西山氏所藏文書如左、

新宮別當職豐後入道次男申付所明白也、但跡
公事無沙汰候ハ、何時も違反可レ仕候也、仍
狀如件、

延德四年壬子六月八日 親秀(花押)

私曰、親秀之弟何某、其子中山田泰吉ト云、此親
秀者如ニ右記、文明延德之比人也、泰吉者大永三
癸未年生ル、從ニ延德四明應
元也壬子四十二年也、今
也上中山家之系圖ニ、中山田左衛門佐親秀之弟

トス、甚誤也、譬バ文明元年ヲ以、親秀ノ生年トス、大永三迄八十餘歲也、爭弟トセン、實未詳、

但此時分、足利將軍天下ヲ治ルトイヘドモ、次第々々威衰ヘ、諸國不レ治、就中應仁亂後、永正文文弘治永祿之比ニ至、東西南北國ヲ爭ヒ、四國者長宗我部取ヒシクノ時節、一日片時不ニ安隱、故ニ父子兄弟家ヲ離レ、國ヲ去スルノ間、家傳モ斷絶スルコト當然也、

○親泰内記、後左近、又安藝守、實秦國親三男、元親之弟也、

今世上中山家之系圖ニ、親秀之爲ニ養子ト、是甚誤也、親秀如ニ右記、文明之比ノ人也、親泰享年雖ニ未詳、其兄元親天文八年之産也、然レバ文明ヨリ天文マデ八十有餘年也、爭ッ八旬之後、當歲之以ニ親泰ニ養子トセンヤ、親秀親泰之間、恐絶ニ於一代乎、雖ニ无レ證、土佐軍記曰、香宗我部景好四千貫ノ主而此郡主也、元親之弟以ニ親泰ニ養子トスト有、又香宗之遣臣村田氏系圖序曰、天文中文宗我部與ニ安喜郡司戰有年、香宗漸及ニ衰微、量ニ家運、而一夕頓自殺、家士驚皆歸城、相議而請ニ秦姓ニ而嗣レ家、後說區而辨ニ一訣、

○親氏千菊丸、彌七郎、

親泰之嫡男、元龜年生ニ於土居村、從ニ元親ニ於朝鮮一病卒、葬ニ遺骨於寶鏡寺、石碑曰、
面ニ月溪芳心、

右ニ清和天皇六孫王多田滿仲武田朝臣親氏、

於ニ高麗陣中ニ有ニ他界、

左ニ于時文祿元壬辰年中冬廿四日、

右石碑有レ事、絶テ无ニ知人、予享保年中墓參之時、幽ニ文字有コトナ見ル、然レドモ苔ムシテ不レ分ニ文字、高橋氏ニ告レ之、高橋則石面ヲ洗、白粉ヲ流、初而見レ之、

親泰之次男
○貞親始親和、後改ニ貞親、始右衛門八、後改ニ左近太夫、

天正十九辛卯生ニ土居村、慶長五庚子亂、其年僅十歲、其身雖不ニ出陣、亂後去レ國退ニ于泉堺、元和元、大坂落城以後、仕ニ堀田加賀守正盛、領ニ千三百石、正盛武州川越之城主也、寛永十六、信州松本ニ移リ、同十九年、下總國佐倉移、此事中山所藏貞親與ニ澁谷ニ書ニ見ル、萬治三子年七月九日、於ニ佐倉ニ病死、七十歲、

或曰、貞親及レ長、仕ニ肥前唐津領主寺澤志摩守

堅高、領ニ五百石、是大坂落去以前之事也、元和元、豐臣氏滅

亡之後、秦氏之近族故、憚恐辭ニ退唐津、而潛

至ニ武府、在ニ知足院、于時號ニ中原源左衛門、幸

其伯母仕將軍家、春日局云、是便トシテ竊達ニ上聞、春日局賴堀田氏ト云、

蠹簡集、國吉五左衛門、野瀬惣兵衛、十月五日與書、中原源左衛門殿知足院御座被成ノ文有、

右貞親中山正氏氏昌與文書有、在別卷、略ニ于

此、

貞親子
○親重 香宗我部軍人

實、加賀守之老臣、高井源左衛門男也、高井氏加賀守妹婿也、萬治三年堀田上野介正信所謫、後仕ニ於松平陸奥守綱村、

○親重子
○久秀 香宗我部采女、後號ニ左中、

實當國中山覺丞秀治之三男新助也、親重无ニ男子、招レ之而爲ニ家督、

如ニ今世上中山家所藏香宗我部之系圖、世々連續而无ニ斷絶ニ甚詳也、雖ニ然全无ニ明證、剩雜ニ他姓、大中臣秋家類也、或何代之御教書、或屬ニ何麾下、親秀、信長公之類、或聞ニ其名ニ而爲ニ其親、爲ニ其子、親秀親屬ニ麾下之類、深悲レ之、享保之初年求レ之不倦、好古識者、高橋氏村田翁

尋レ之、而有據古文書、或傳家文書、或彼蠹簡集、騰寫、又新宮村西山氏所秘藏、古書悉寫レ之、香宗家歷代之爲證者也、

于時延享五戊辰秋八月 日

中山益庵源良爲

今中山家所藏系譜者、先年從ニ奥州ニ傳ニ于本町中山家、樗尾正直請レ之、使ニ弟中山久通書ニ寫之、久通信レ之而爲ニ一卷、儒生桂井素庵作ニ其序文、夫ヨリ段々末流傳レ之爲ニ家珍、今按、香宗我部左近親和主ハ、慶長五之亂去レ國泉州堺暫潛身、此時親和纔ニ八九歲、十歲未滿ト云傳フ、然レバ非可レ知ニ來由、漸成長後、持傳ヘタル古文書等ヲ以、彼系圖識ト云者ニ命ジテ、作ラシムルナルベシ、可レ疑處數多、如レ左、

○一條次郎忠賴之子秋家 東鑑ニ、忠賴家人有ニ甲斐小四郎大斐源氏、爭レ使ニ大中臣姓、稱ニ源氏哉、今按、適秋家甲斐小四郎ト云、

系圖スルモノ其來由ヲ不レ知、所レ闕以レ之所ニ附會、平、甚可レ疑、

○秋通 被ニ養ニ大中臣秋家ト有、可レ疑、 通長 織田信長ノ狀ヲ藏、其子親秀、

有レ疑、 見レ後、 秋通 被ニ養ニ大中臣秋家ト有、可レ疑、 通長 織田信長ノ狀ヲ藏、其子親秀、

○親秀 屬ニ信長麾下、按ニ、親秀ハ文明ノ比人也、信長ハ天文三甲午ニ生レ、天正十年四十九歲ニテ生害也、大稔文明ヨリ至ニ

天正十二百年
ニ及、可疑、

○親泰 親秀之爲養子、今按、親秀ハ文明延徳比ノ人、委備ニ別卷ニ
親泰享年雖未レ知、舍兄元親主ノ以ニ享年ニ量レ之、天文ノ

比出生ノ人、シカレバ文明、天
文ノ間七十年ニ近シ、可疑、

○通秀 香宗我部出羽守親秀之弟、中山田左衛門佐、今按、寶鏡寺所
藏中山田左衛門佐泰吉(花押)有ニ天正年中之文書、因改レ之

而作ニ
泰吉、

○秀政 新助 ○政氏 五郎右衛門、今按、安喜濱八幡宮棟札、中山
門正氏アリ、因兩政
之字改而作ニ正之字、

右之外眞偽猶又可ニ訂正ニ者也、

寛保元辛酉中冬念二鳥 中山田益庵良爲

左衛門佐樣御支配御家臣連名

(香宗我部武田朝臣安藝守親泰公從臣覺)

香宗我部出羽守親秀公御嫡孫、實ハ御舍弟孫十良君
之御嫡、御配地ヲ以被レ屬ニ御幕下ニ老職之上ニ列、

御城代

中山田左衛門佐殿

御舍弟

同 新助殿

但御本領之内配分、中山田殿知行在所、香宗郷
ノ内土居村、同中ノ村、富家村、赤岡村、十林寺
村、上曾我村、下曾我村、中山田村、新宮村、免
田村、深淵郷、大谷村、佐古村、父養寺村、上田
村、吾川郡ノ内森山村、中嶋村、仁ノ村、安藝郡
内川北村、江川村、伊尾木村ニ在リ、別紙分限
ノ根居帳之通リ、

以下

中山田吉左衛門殿

池内肥前頭

西山兵太夫殿

久武右馬丞

池内掃部

野村新左衛門

今西隼人佐
野本民部佐
森田民部
池內六兵衛
池內楠千代
池內玄蕃
池內三良左衛門
池內勘兵衛
東村久右衛門
東村藤助
池內助兵衛
東村四郎左衛門
池內三吉良
池內新右衛門
面佐近右衛門
久甫內彌十郎
久甫孫右衛門
野村彌左衛門
野村亦兵衛
永田與三右衛門

富永雅樂佐
西隼人
池內大炊助
池內彌太良
池內彌六
池內吉太夫
池內五郎兵衛
池內九兵衛
東村宗左衛門
池內源左衛門
池內勘太夫
池內忠三良
池內九良兵衛
西右兵衛
久甫內勘左衛門
久甫大八良兵衛
野村與助
野村孫右衛門
野村與七郎
森本九良左衛門

永田藤兵衛
西山勘太良
西山新之丞
西澤新左衛門
西山次良太夫
西澤平次良
竹村孫之丞
竹村彌兵衛
富家次良左衛門
富家雅樂丞
富家左近右衛門
富家助兵衛
長尾長左衛門
野村與七良
長尾市兵衛
西岡次郎
立山太良左衛門
藏橋御熊
藏橋孫市
門田三良右衛門

森本神十良
西山次太夫
森本甚兵衛
松村藤左衛門
松村清右衛門
竹村源兵衛
竹村源內
竹村孫左衛門
富家主計丞
富家神左衛門
富家助左衛門
寺內五良左衛門
田中市介
久甫內食兵衛
光久九良太良
西岡孫七郎
藏橋五郎左衛門
石淵九良五良
石淵九良次良
門田源兵衛

門田次良右衛門	門田文左衛門	竹崎十良左衛門	森本四良右衛門
門田市左衛門	門田新兵衛	大坪新右衛門	池本六良左衛門
門田與左衛門	北村彌藤次良	大坪神助	澁谷藤作
横田神兵衛	北村源三兵衛	絲川四良左衛門	正木兼之丞
横田源右衛門	北村彌三右衛門	石田八良左衛門	竹内源兵衛
今西九右衛門	大谷五兵衛	竹内源内	平樂寺五良介
富家與左衛門	森田勘助	野崎五良左衛門	松田與左衛門
成谷祐六	馬場源助	松田善右衛門	松田新左衛門
岩原源左衛門	馬場平兵衛	原野忠兵衛	寺内五良左衛門
岩本七良兵衛	井關嘉兵衛	岡崎善兵衛	岡崎常力
野本久兵衛	野本亦兵衛	横山喜太夫	嶋崎彦左衛門
鶴來須喜兵衛	吉村喜助	德弘彦太夫	大石民部丞
小林神兵衛	小林源兵衛	田内次良兵衛	前田三助
別役新助	岡田彌左衛門	須田八良左衛門	濱田新九郎
別役與市兵衛	田内與三次郎	吉村左兵衛	寺村喜助
金子久左衛門	金子次郎右衛門	池三良右衛門	竹内三良右衛門
金子次良左衛門	岡田勘右衛門	竹内孫之丞	宇賀源兵衛
久橋九良兵衛	岡田新兵衛	森本久次良	森田次良右衛門
金子助右衛門	永瀬七良右衛門	成谷助左衛門	岡本文七郎
大坪次良兵衛	竹崎十良兵衛	松村清右衛門	光明院助丞

光明院彌八良
光明院新左衛門
光明院六良右衛門
志賀式部左衛門
堀與平
吉久彥左衛門
三田猪助
山崎五良左衛門
山崎神助
黑石甚左衛門
上窪孫兵衛
能瀬惣兵衛
公文孫七郎
公文三良右衛門
村田七兵衛
村田七良兵衛
中村與左衛門
上窪喜兵衛
永瀬七良右衛門
大西孫右衛門

光明院源右衛門
光明院源次右衛門
行延彥四郎
畠中太郎右衛門
畠中平兵衛
吉川三良兵衛
山崎五良右衛門
山崎源左衛門
大坪次良兵衛
山本彥助
公文源八良
能瀬新左衛門
公文喜兵衛
公文平左
村田彌三右衛門
中村源兵衛
上窪喜三兵衛
上窪奎兵衛
安宗新六
小橋新兵衛

大西彌五兵衛
松永吉右衛門
松永甚左衛門
岡本與七郎
原藤兵衛
助永左衛門五郎
岩田源五郎
岩田久右衛門
森本四良左衛門
窪田八良兵衛
松本與三兵衛
森本彌木兵衛
池內忠三郎
岩村平左衛門
森本新左衛門
田所新右衛門
岩崎善兵衛
川谷三郎右衛門
野崎四良左衛門
中岡太良左衛門

南宗兵衛
南彥右衛門
吉延源三郎
松村清右衛門
原藤左衛門
中內六之丞
岩田新五郎
澤善助
澤新右衛門
窪田孫右衛門
鳴村源助
池內左兵衛
森本又三郎
絲川次良右衛門
竹內太左衛門
野崎五良兵衛
山村彌五良左衛門
野嶋源助
竹內源兵衛
松本與三左衛門

岡田與次右衛門 久甫田彌次右衛門

今村忠兵衛 遠崎善兵衛

遠崎新次良 橫矢三良兵衛

內川神右衛門 濱田新九郎

瀧本彌六 西村左近右衛門

大崎新右衛門 松岡神兵衛

松岡勘兵衛 松岡彦四郎

友重孫右衛門 內田茂左衛門

內川太郎次郎 德田彦右衛門 內川善兵衛

御紺屋

村山與左衛門 村山與市 酒屋藤四郎

以上

別紙目錄之通、分限帳相添、右面々名書ヲ以、御引渡
仕候間、御執成被下度候、恐惶謹言、

天正十六年戊子三月廿五日

池内肥前頭直武(花押)

中山田左衛門佐樣御取次

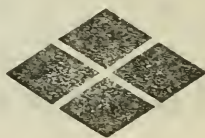
堀與平殿

金子助右衛殿

下總佐倉同姓書冊寫

定紋

割菱



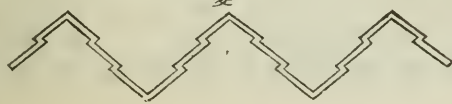
替紋

細輪酸漿



合印

松皮菱



松皮菱割菱故事

永承五年、後冷泉院依_レ勅、奥州安倍賴時攻、是時詣_二住吉社_一、祈_レ平_二復夷賊_一、于_レ時有_二神託_一、賜_二旗一流_一、鎧一領、昔神功皇后征_二三韓_一用也、神功皇后鎧脇楯者、住吉之御子香良大明神之鎧袖也、此裙之紋割菱也、三韓歸國後、鎮_二座於攝津國住吉_一、以奉_二納于寶殿_一矣、今依_二靈神之感應_一、于_二源賴義_一賜_レ之、可_レ謂_二希代_一也、賴義三男新羅三郎義光、雖_レ爲_二季子_一、依_二父鐘愛_一傳_レ之、卽旗楯無_レ是也、旗者白地無紋、鎧有_二松皮菱_一、故義光末裔當家爲_レ紋、

七ツ鳩酢



長宗我部紋

元親參内ノ時天盃ヲ賜フ、盃中ニ鳩酢艸浮ブ、是ヨリ家ノ紋所トス、故ニ國吉ノ家ニテ、丸ノ内ニカタバミヲ紋所トス、三ツカタバミナリ、當家モ替紋七鳩酢ヲ用、

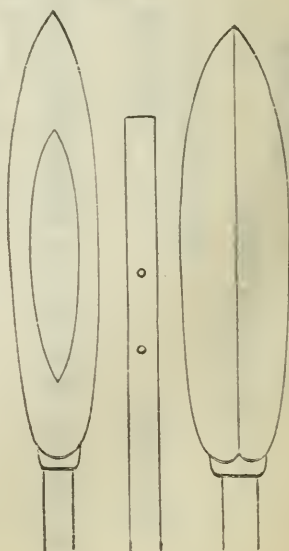
傳來從_二太閤秀吉公_一拜領鎗之圖

銘

石見守藤原國助

柄長一丈三寸五分餘、石突迄太刀打朱染卷一尺六寸五分、金物にくるめ、柄青貝 ふき寄せ、鞘白たいき、

鞘縮圖



右

湊親明迄持鎗ニ用_レ之、隼人親保に至りて別に持鎗を製造す、無銘、後南海岸惣奉行被_レ命る時、木川織右衛門某に壯年の頃、鏡智流の槍術を學、仍て鎗を造る、銘粟田口忠國、小身長貳尺三寸餘、何も柄青貝、其頃添鎗も青貝柄ニ造る、朱の柄ハ法度有_レ之候附、渡邊主計が問合る上にて製す、表向之外は不_レ成事か、敬親に至りて細川忠義に鍛冶せしめ、傳來之通被_レ立、持鎗とす、

家傳證文入箱之内古書

後水尾院勅筆

太山には松の雪たにきしなくに

見やこは野への若菜つみけり

右御短冊

一將軍綱吉公御幼少之節御畫貳枚

一貞親重親已來兩代之判物右之通、

寺澤侯ニ而貞親江給ふ知行書出、

怡土郡村長野村之内三百石令_ニ扶助_ニ畢、全可_レ有_ニ知行_ニ候、仍如_レ件、

慶長十九年十一月廿二日

志摩守廣高

香宗我部喜左衛門殿

正盛公より給ふ所

香宗我部喜左衛門殿

子ノ九月廿二日致頂戴候

御知行御書出し一通

知行方之事

高千石者

右武藏國河越領分之内を以、令_ニ扶助_ニ訖、全所_ニ領知_ニ者也、

寛永拾貳

堀田加賀守

寅六月廿八日

正盛

香曾我部左近太夫とのへ

知行方之事

一高三百石ハ

右信濃國松本領之内を以令ニ加増ニ訖、爲ニ與力ニ給ニ
三百石、都合千三百石、全可ニ領知ニ者也、

寛永拾五年

堀田加賀守

寅五月十五日

正信田
正信田

香宗我部左近とのへ

正信公より所給御朱印

知行方之事

高三百石

右下總之國佐倉領之内を以、令ニ扶助ニ訖、全可ニ領知ニ
者也、

慶安五年

辰正月二日

正信田
正信田

堀田上野介

香宗我部左馬之助とのへ

知行高之事

高千三百石

右下總國佐倉領之内を以、令ニ扶助ニ訖、全可ニ領知ニ者
也、

萬治三年

子二月廿一日

正信田
正信田

堀田上野介

表

香宗我部隼人殿

裏

覺
三百石 大原形部左衛門
貳百石 愛久澤元左衛門
貳百石 倉林權太夫
百石 増澤久左衛門
百石 堀部五郎左衛門
四百石 平野喜内
百五十石 前原文右衛門
三百石 國吉五左衛門
貳百石 向加右衛門
貳百石 渡部忠兵衛
百合カ米 倭 愛久澤 彌七郎
貳百石 兼松 左次兵衛
百五十石 武山市太夫

貳百石 水野 孫左衛門
百五十石 別府 平左衛門
百石 川村 理左衛門
貳百五十拾石 三木安左衛門
百五十石 小野 庄右衛門
百石 石寺武太夫
八拾石 井村安之丞
人數ノ貳拾人
都合知行高
付分共ニ
四千九百三拾石

春日局貞親江之章

香宗我部隼人との

一通

一左近貞親章

同

一堀田兵部樣畫

一枚

一仙臺柴田外記書狀

御家來安並五郎兵衛爲御使者、遠路御札致_ニ拜見候、然ば貴樣御事、上野介樣江御暇被_ニ仰請、今程備中守樣御在所守谷_ニ御座候處、御暇被_ニ仰請候儀、内々上野介樣御不快、同中務樣、備中樣、何茂御兄弟樣中江御間も惡躰_ニ御座候故、貴樣御迷惑_ニ思召候段、尤之御事御座候、依_レ之何方へも御引越被_レ成度思召候得共、左近殿御一類迎も別_ニ無_レ之、且又御一身而已_ニ無_レ之、御母儀樣并左近殿御息女御座候付而、御心當之所も無_レ之候間、拙者以_ニ才覺、當地何方に成共、一兩年御住宅被_レ成度旨、御紙面之趣得_ニ其意存候、將又吉松道與方江之御書中、後御袋樣、拙者女共所へ茂委細に可_ニ仰越、其儀御家來五郎兵衛方物語之通令_ニ承知、寔以無_レ據儀共、御心底致_ニ推察候、拙者儀遠國_ニ罷有候故、書狀之御取交迄_ニ而、未_レ得_ニ御意候得共、不_レ通儀_ニ御座候間、聊不_レ存_ニ疎略候、被_レ越候上者、辭退不_レ及仕候間、拙者知

行所_ニ一兩年茂可_レ被_レ成御座候、尤其節御勝手次第_ニ御下向可_レ被_レ成候、拙者在所遠國田舎之儀_ニ御座候間、萬事御不自由之段は御推察可_レ被_レ成候、公儀御伺被_レ成候内、差次_ニ茂可_ニ相成候ハ、御不自由之段は御堪忍之儀、兼而御思慮不_レ及_ニ申入候、委細五郎兵衛可_レ被_ニ申上候間、不_レ能_ニ一二候、恐惶謹言、

六月八日

柴田外記朝意(花押)

香宗我部隼人樣御報

一元親之御筆

一枚

文字

謙下

元親_印

左近貞親勤方覽書

一未ノ年口棋樣、

一申ノ年大阪大普請登、

一亥ノ年又大阪御普請用意登、子ノ年迄御普請勤、其

年ノ暮江戶江下リ、正月早々上京、妙心寺_ニ着、

一午ノ年ヨリ大阪逗留之間、中五箇年、

一午ノ年江戶江下リ、五箇年間智足院逗留、

一亥ノ年三月廿八日、川越ニ而御禮申、

一子ノ年四月日光江御供、

一寅ノ年三月廿日松本江參、同廿六日御城請取、

一午ノ八月廿八日松本出、九月四日江戶着、同十三日

佐倉江、

土州ニ居國侍

片山五郎右衛門

前野孫五右衛門

同 源右衛門

深 十右衛門

田 中 三郎兵衛

徳久五郎右衛門

千 齡 甚右衛門

町 孫 太 夫

士 侍 次郎兵衛

西山次郎右衛門

右左近自筆之書附、以上家傳之證文箱ニ入、

庄兵衛親清養子之節

一札

覺

一香宗我部隼人殿御男子無レ之、拾歳之御娘御座候、
遠山因幡、弟正兵衛ヲ御取合智苗跡ニ被レ成、隼人
殿御眩暈御煩候故、御奉公も不レ被レ成候付、當時
ヨリ御番代ニ被ニ相出一度旨被ニ仰合、隼人殿以後者
御合力、小判百兩、御扶持方百人分之所、無ニ御相

違ニ被ニ下置候様ニ可レ被ニ仰立ニ事、

一右正兵衛事、萬一不孝不忠、又ハ御奉公難レ成程之

病氣指出候歟、不レ寄ニ何事、侍ニ不似合不行跡之儀

於レ有レ之者、其品ニ仰聞可レ被ニ相返ニ事、

一御娘正兵衛氣ニ入不レ申候ハ、其品同斷立除可

レ申候、勿論跡名字も相返可レ申候、若又御娘御病死

共、御家督御相違被レ成間敷事、

一隼人殿以後も御祖母御後室、并御娘乍ニ勿論、少も

不和之儀無レ之様可レ被レ申事、

一隼人殿御男子出生申候ハ、正兵衛弟ニ相定、正兵

衛心次第、何様ニもかた附可レ申旨、被ニ仰合ニ之通、

無ニ異儀ニ申合候事、

右之通御相談之上申合候、以上、

遠山 因幡

延寶五年壬十二月廿八日

命民(花押)

芳賀 九郎左衛門

頼久(花押)

香宗我部隼人殿

遠山家有^レ故斷絶、當時無^レ之由、慶應三丁卯年、仙臺同姓壽三郎、久々文通も打絶居、爾後如^ニ往古^一文通いたし度、瀬脇節藏を以申來ル時、承リ遣度處、前書之通、

一元親一代軍鑑ハ元親記ニ有^レ之、舊臣澁谷用齋書寫、左近江進^レ之、上中下三冊、

一豊臣秀吉卿元親亭江御成之時、御料理獻立等、於^ニ江戸^一類火之砌焼失、

一元親ノ旗ハ、黃地黒キ石餅也、

馬印ハ赤キ三ツ焔灯竿留、白ネリノ吹流、

一香宗我部ノハ不^レ知、

一元和元年乙卯五月十一日、捕^ニ長曾我部盛親^一、御年譜、

一元曆已來之古書一枚ヅ、箱ニ入有^レ之を、正俊公林大學頭殿江御頼被^レ成、一々御詮議之上、小札ヲ被^レ附候、其筆者秋元但馬守様御家中樋口文右衛門之筆跡、右使ハ中山田一重也、

一寶曆七丑夏、總州佐倉の城外、山ヶ崎村隆勝寺ニ而江湖有^レ之、依^レ之諸國の出家來ル、其節伊部丹治、

彼に參詣す、出家壹人出、咄シノ内、某ハ土佐國より來ル旨、丹治が本家の事尋、其安否聞、伊部氏の親族も出家致、彼の兼州と相弟子なり、拙僧が親類ハ長曾我部の舊臣ニ而御座候、元祖ハ長曾我部のわかれニ而、則秦氏にて同姓也申候、彼出家江戸へ歸候時分、丹治宅江來ゆへ、むかし咄しなど承、又聞出致置候、其節のやくそくわすれず、河州高安より一通の書の中へ、元親公の畫像封^テ送れり、丹治是を靱負江遣、靱負方にも先年於^ニ山形^一、寶幢寺の隠居六十六部ニ出、土佐の國至、吸江寺にやどる、住僧云、昔土佐の大守の寺ニ而御座候、其節ハ寺領多有^レ之故、寺も繁昌ニ而御座候よし、今ハ不緣地同前ノ事ニ而、御覽之通及^ニ大破^一ども、修覆すべき心當もなく、誠ニ貧事ニ相成候、爰にふしぎなる事ノ、此木像ハ則當寺の開山元親の靈像ニ而候が、狐附、おこり、はやり病の類ニ此御影をゑりにかけ、又ハ家内ニはり候へば、忽チ快く、依^レ之承傳、方々より貫ニ參り候、^ニ家中ニ其子孫の御座候由、是を屈可^レ給候とて遣候を、隠居靱負方へ届られ候、其御影ニ少もたがはず所持有^レ之故、不佞

貫置しなり、彼州兼州由緒の事あらまし爰ニ記、

一土佐國吾妻郡長濱村吸江寺ニ元親公ノ有ニ木像、同所少林山雪蹊禪寺ニハ元親公有レ廟、

一土佐國山田と云所郷侍之様ニ成、數年居候、刀をも帶申候、書急候故、丹治も承殘由被レ申候、

秦姓

上村善三郎正親

次男兼洲右之者家ニハ御座候

三男庄五郎親行

息男 丹治

長宗我部の分れ國吉之本名、上村ニ而御座候、後國吉改申、之かれば上村對馬守秦親正より之わかれニ而可レ有レ之存候、系圖等も有レ之由候、

一宗卜様佐倉城御拜領之時、爲ニ受取ニ參候役人ハ、

城代 香宗我部左近 大名分 秋田修理

奉行 豐永 理右衛門 是ハ式部親之由

同 品山六郎左衛門

一盛親兄長曾我部四郎左衛門尹親子主水正玄親、大坂落城の後、藤堂和泉守高虎公ニ被レ召抱ニ令レ申、藤堂大學と云ハ、則主水が末葉也、桑名彌次兵衛が

孫も彼家に仕て勤功を勵、

一江村藤左衛門ハ、佐倉崩後、越後様之御家ニ仕、越後騷動之後、浪人致候、其後居所相分不レ申、

一豐永式部者、土佐より出候、次而正盛公ハ被ニ召出、佐倉崩後、豐前守様へ仕、其末葉今ニ出羽守様ニ有レ之、是ハ二代目之式部が事、土佐より出候ハ佐倉ニ而死去、同所嶺南寺ニ石塔有レ之、

一黒岩治左衛門ハ、間部様へ召出候所、其年相果申候、親參もの故斷絶、

一乙竹十次郎ハ、京極若狹守様へ相勤しが、浪人致候、其後行衛相知不レ申、

一小山吉兵衛ハ佐倉時分、左近娘采女、乳母ハ則吉兵衛妻ニ而御座候、吉兵衛も表ニ而中小姓分に而相勤申候、其子左吉ハ守若より安中時分迄、御持筒小頭相勤、古河ニ而病死、世忤ハ御掃除坊主ニ出候、

其後豆州公御代ニ御側小僧ニ成、名三徳と云、其後元□□仰附、三十俵三人ふち被レ下、中小姓被ニ仰付、御側ニ而被ニ召仕ニ候は、於ニ山形ニ病死、世忤十郎左衛門跡式被ニ仰附、延享年中江戸住宅御供方相勤申候、於ニ江戸ニ病死、男子無レ之故、□尾百太夫三男一

十郎を養子仕、跡式無_ニ相違_一被_ニ下置_一、佐倉住宅當時幸次郎様御近習相勤、

三徳を徳七ニ相改候様ニ被_ニ仰附_一、徳七代迄左近ニ貫候、紋附之麻上下致_ニ所持_一之由、此譯徳七咄

ニ者承置候、

一 上田文庵ハ實父中村良宿、妻桑名源六孫娘也、長曾我部の長臣桑名掃部が末葉、右桑名掃部ハ元親時代、盛親後見ニ申附、大坂籠城の節も一所に居、攝州久寶寺合戰の時も、渡部功兵衛と戰て死、其弟大坂落城後、松平下總守様被_ニ召出_一相勤候、然候處ニ手討仕方不_レ宜ニ附、御暇出、同州の内山鳥村ヘ引込罷在內、良宿方縁付申候、其娘の腹に出生致候が則文庵ニ而御座候、

一 春日の局ハ、明智日向守臣、齊藤内藏介利三之娘なり、山崎合戰の後、内藏介討死、子五人落人となり、西國舟ニ積、伊豫の長曾我部江送りけるを、舟中ニ而改る者鍵ニ而つき候得共不_レ中、無_レ程伊豫ニ至る、長宗我部のはからヘニ而、内藏助息女林八右衛門江嫁す、是春日局也、御子三人有、然といへども嫉妬ニ而、佐渡守家を出、京都ニ行、長橋の局の肝

煎ニ而、台徳院殿江被_ニ召出_一、竹千代君ヘ被_レ附、當家江被_ニ召出_一候も、右長曾我部の由緒を以之故と思はる、

一 辨才天像

弘法大師之彫作之由、長宗我部元親於_ニ四國_一旗あげし時、或夜夢に南海より寶の船くると見て、夢は覺たり、枕上に此尊像有_レ之、夫より四國一統すべき思ひたちとならせ、出軍の度々此尊像持參して、向ふ所勝ざるなし、當家ヘ相傳して秘藏す、

右像靈顯ありて、俗家に難_レ置、宗圓寺江先代預置候處、安政四丁巳年四月十九日、同寺より引取家藏す、右像に添て宗圓寺ニ有_レ之略記之寫左之通、

辨才天略記

抑此辨才天尊像者、弘法大師之御自作、而大師四國巡行之節、爲_ニ本尊_一背_ニ中負奉處_一、其靈驗一偏ナラズ、後諸願成就四國巡行畢、土州長岡郡曾我部村龍雲山雪溪禪寺奉_ニ安置_一也、其後長曾我部宮内少輔泰元親公、爲_ニ四國之大守_一、幡多郷於_ニ笹山_一構_ニ本城_一居_レ之、或時元親公一夜夢、辨才天船之先乘、賜_ニ旌旗_一建_ニ樓船數艘_一、珠玉珊瑚、米穀金

銀種々之寶器如_レ山積得、而浦戶津ヨリ高智湊迄着船來視_ニ其繁華、全地銀海草木榮色、奇容無所_レ可_レ名、即夢覺云、自_レ此武感益高、鄰國恐怖、數度之戰場、兵糧軍用一無_レ謂_ニ不足、國富民豐、上下自寧、於_レ是移_ニ于居城高智之龍躰山、武運尙新、威德愈隆、于_レ時天正九辛巳年四月、元親公先日從_レ有_ニ靈夢、而奉_レ請_ニ長岡郡曾我部村龍雲山雪溪禪寺、空海所_レ修辨才天尊像以爲_ニ守護、數度之出陣、歸陣共_ニ斯像爲_レ持、朝夕香花、尊敬無_レ怠、故戰場勝利福祿自在、不_レ可_レ期而自足、其靈驗豈啻哉、慶長五辛丑年關ヶ原出陣之節、元親公最期一戰ト被_ニ思召、朝夕爲_ニ守護一處之像香曾我部左衛門尉被_レ讓、其子孫之繁榮ヲ祈請、夫香曾我部家傳、其後大坂落城以來、諸國流浪致サレシヨリ、即守護持傳來、於_レ今其靈驗尙新、信心之輩日々月々、以_ニ已之日而祈念、則福祿自在、武運高隆、衣食滿備、金銀融饒也ト云、其餘ハ香宗我部之記錄ニ詳也ト云、

正覺山記錄寫

一 正信公佐倉之城ニ有_レ之、組頭へ連狀遣、其文ニ云、

今度存寄之祈狀差上候、仰_ニ達御耳、以後如何樣ニ落着可_レ仕も上意次第ニ候之間、少も不_ニ相驚候、委細深見縫殿、多賀四郎兵衛、花木外記、舟木吉兵衛、四人之者江申遣候條、可_レ受_ニ差圖一候、少も於_ニ違背一者、不忠至極可_レ爲、此節組々侍中へ此旨可_ニ申渡一候也、

堀田上野

十月十三日

正信判

神尾圖書殿

香宗我部隼人殿

野々口 丹波殿

安藤志摩殿

田口宮内殿

山村勾左衛門殿

稻葉 左衛門殿

豐水式部殿

一 土州元親墓所

土州吾川郡長濱邑少林山雪溪禪寺菩提寺、法名

羽林次將贈正五位雪溪恕三大居士、
右雪溪寺より元親之畫像出ス、

境内松檜木大木有

元親墓

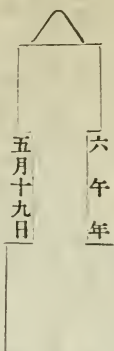
十二三間石坂

壹町計杉並木

石塔

境内五十四方計

此墓宇天保地ト申所也
高福寺ヨリ八町計有之此寺ニハ御壹人之
御墓御木像有



奉寄進雪溪如三眞前
寺村清右衛門ト有之

一嘉永五壬子年九月廿七日、土佐國香我美郡香宗土居
村寶鏡寺尋來、中山右衛門七郎より書狀相達、此度
越前國永平寺開山遠忌ニ付、寺用有之罷登候、序
之由新町之内油屋佐右衛門へ止宿爲之致、於ニ宗圓
寺ニ面會、傳來之古證文等見申度旨ニ付、同寺江持
參爲見申候、歸國之節右古證文寫之卷かり申度旨
ニ付、借遣候、先年寶鏡寺燒失之節、朝鮮より分取
之幕、其外寶器不殘煙失致候由、仙臺へも相尋度
旨申望候ニ付、書狀相渡遣、十月廿九日仙臺より罷

歸、九月廿九日爰元出立、去寅年親泰君年忌之節、
燒香之儀ニ付舊臣農家ニ罷在候者共、彼是及ニ混
雜、土州公へ願之上、寶鏡寺境内者一族、舊臣農家
ニ罷在候者ニ而も不殘、帶刀致度相濟、郷人ニ而
も土州公之御家人より先江燒香相濟候者も有之
由、仙臺ニ而者齋病氣ニ付、面會も不致候由、當方
者茂庭周防弟ニ而、妻ハ片倉小十郎より參り申候
由、忤者伊織と申候由、奥村藤翁と申て、蝦夷より
歸、對面萬端世話致吳候而、齋緣者之由、寶鏡寺藏
峰坊ハ中山家之血縁之者ニ而御座候様子、歸國之
節三つ組盃箱入、かたばみ紋附望ニ付差遣、是者先
年正月十一日之餅、舊臣江山稚之頃、仕來之口振舞
之節、出來候品匱ニ者候得共差遣す、中山佐右衛
門、同龜三郎、三拾六餘にも被成居候由、土州公目
見之節者、御家人平士之末江着坐、右之外物語等有
れども略ス、

一後柏原院御宇大永年中、

一條關白右大臣教房公ノ子息、

權大納言房家卿始テ土佐國江下向、畑郡屋形ヲ
建、土佐ノ御所ト申ナリ、

五千貫 五千貫 四千貫 五千貫 五千貫 四千貫
津野 吉良 大比奈 本山 安喜 香宗我部
三千貫

長宗我部
何も一條殿江屬す、

一香宗我部江元親ノ弟左近太夫親泰ヲ養テ子トス、

△池 十市 下田 廣井 西和田 此分一組ニテ降參、元親へ、

△御岡 森 中村 尾川 波川 三ノ宮 此分一組ニテ降參、元親へ、

△大高坂 國澤 吉松 大黒 若 横山 此分一組ニテ左京進へ、

△野中 假倉 小野 國吉 高場 萩野 五百藏 此分一組ニテ降參、元親へ、

植村 野田 甫喜山 山川 伊尾喜 豐永 此分一組ニテ降參、元親へ、

△安田 北川 寶津 有井 横山 和食 奈半利

北村 此分一組ニテ降參、元親へ、
高野山高室院

自文明之頃一
至寛永年中一過去帳之寫

珠 公 瓊 窓 禪 定

海 公 藏 翁 信 男

土州香宗我部北村殿立之、
文明七年乙未二月四日、
同香宗我部北村殿爲大妻
立之、文明九年丁酉八月四
日、卅一歳早世、

妙 善 禪 定 尼 同岸本立之、
文明十八年八月十五日、

前甲州太守金波海公禪定門 同香宗我部殿御親父也、

明 庵 禪 定 門 同香宗我部殿使者忠兵衛
殿、大永二年壬午七月廿
一日立之、

月 巖 常海 禪 定 門 同香宗我部殿也、矢倉上ニ
テ御生害、大永六年八月十
六日切腹人數十六人也、

爲 法 悅 正 禪 定 門 同香宗我部殿、池内肥前守
登山ニテ立之、乘信坊爲
親父一本爲子息一本元龜三
年壬申閏正月三日、

宴 質 昭海 禪 定 門 同香宗我部殿、施主幸菊女、
永正五年十一月四日死去
也、永祿五年九月廿一日立
之、

天 與 龍冠 禪 定 門 同香宗我部殿、池内肥前守
立之、元龜三年壬申四月三
日、

日 窓 妙用 禪 定 尼 同香宗我部殿、吉村甚助殿、
元龜三年五月四日、

寶 明 禪 定 尼 同吉良川源兵衛殿内方、
元龜三年四月五日、

常 諦 禪 定 門 同香宗我部中山田新助内方
立之、元龜三年五月四日、
當院家之護摩堂不動尊御寄
進也、四月四日死去也、香宗
我部殿也、

出羽守周洲遷仙禪定門

月 洲 臣海 禪 定 門 同香宗我部西山左門太夫殿
立之、元龜三年四月五日、

南 秀 桂海 禪 定 門 同左衛門太夫殿立之、
元龜三年四月五日、

盛徹祐昌禪定門
南浦守海禪定門

同香宗我部田中市助殿親、
元龜三年十月九日、
同香宗我部殿也、
元龜三年四月十日、

香宗我部文書

土佐國介良庄事、爲_二走湯山密嚴院領_一之處、甲乙人致_二濫妨狼藉_一條、早長曾我部新左衛門と相共相_二鎮狼藉沙汰_一、居_二代官所_一可_レ令_二所務_一、且載_二起請之詞_一可_レ注進、違犯仁交名之狀如_レ件、

元弘三年六月四日

源朝臣(花押)

甲斐孫四郎殿

承了(花押)

大忍庄西河内行宗名事、如_レ元所_レ令_二安堵_一也、於_二御年貢御公事_一、考_二任先例_一、無_二懈怠_一可_レ令_二勤仕_一之狀如_レ件、

曆應元年十一月廿二日

猶々事多道候御尋候へ、愚意隨分可_レ申候、先日以_二書_一雖_レ申、如_レ此之狀、口傳不_二濃成_一候へば不審多事重令_レ申候、

今度阿州表之働、無_二比類_一令_二感悅_一珍重候、然而勢州面之儀、肝煎專一候、尙山城守可_レ申候、謹言、

六月十三日

信長(朱印)

香宗我部出羽守殿

同 孫十郎殿

雖ニ申通候一令ニ啓上ニ候、仍而東國江御内意以ニ吉藤一被ニ仰越之條、使者相副遣置候、則信雄様再從ニ家康ニ向後御入魂之御誓紙相調珍重候、然間急速有ニ御渡海、御手合肝要存候、幸紀州表有ニ之儀候、相應之御用等可レ被ニ仰付ニ候、猶吉藤可レ被ニ申分ニ候、恐々謹言、

五月十七日

元政(花押)

長宗我部宮内少輔殿

香宗我部左近太夫殿

人々御中

誠改年吉慶彌珍重候、殊早々一札到來悅入候、將又至ニ海部ニ來儀之由候條、旁從ニ是可レ申候、恐々謹言、

正月十日

信良(花押)

先日之御報被ニ相達ニ候哉、昨日ハ早々御歸殘多候、少用事候間、早々御出待入候、次此狀中平次殿へ御届可レ給候、恐々謹言、

正 三日

元閣(花押)

上書 香喜左殿參る

長宮内

速ニ對ニ當家ニ惡心之族候ッ、就レ其今度光明院方生害

候、殊大谷儀彼組之衆無レ紛候、始末旁御存知之事候條、昨日與成敗候、忤家固キ所以御心遣如レ此候、彌御憑敷存計候、今更不レ及レ申、就レ中昨日被レ對ニ姬炎、内々入魂之儀共、誠ニ前後貴所内心之通承難ニ申盡、我々存分委豐前守可レ申、將又岩右、富右公私對ニ此方別而懇望申越候、併貴邊御才覺之驗、是又大慶候、于レ餘無音候條、先々以ニ書狀ニ申候、委ハ御意得頼申、猶自レ是可レ申條閣筆候、恐々謹言、

小春十四日

元親(花押)

上書

池内左近介殿(池内は長曾我部のお老臣なり)

元親

進之

尊書奉ニ披見ニ候、御安泰被レ爲レ入、畏悅之至奉レ存候、隨而私事無レ恙滯留仕候、將又矢箱ニツ、鐵鉋七挺、槓受取申候、猶委曲肥前可ニ申上ニ候條、貴答迄不レ能ニ一二候、恐惶謹言、

七月十四日

香宗我部彌七郎(親氏花押)

左衛門佐様

已上

半分德政之事、藤五郎手前之儀者、餘ニ口少身ニ而、

年來令_二奉公_一候間、何之者たりとも、おしく事除置候間、右返可_レ被_二申聞_一者也、

霜月廿四日

盛(長曾我部衛門太郎盛親花押)

久內藏殿

去月廿三日之芳札即披見本望候、仍其元今度盛親と就_二別心_一可_レ爲_二在國_一內意候由、尤忠節之儀候、殊懇深之示預喜悅之至候、然而途_二合戰_一凶徒可_二討果_一事、掌_二握關東_一之諸勢相催候本意上、御身何様之臨候共、可_レ任_二存分_一候、尙委細井伊兵部少輔可_二申入_一候、恐恐謹言、

九月十六日

家康(花押)

香宗我部左衛門佐殿

御芳札披見仕、恐悅之至存候、仍上國內々拒之旨、就_レ其御氣遣之由被_二仰越_一、家康祝着候、其元雖_レ爲_二子孫_一、別而不_レ可_レ存_二疎略_一候間、可_レ被_二御心易_一候、將又房鞆_二掛進_一上之仕候、誠風情計候、尙御使者江申合候條、不_レ能_二再毫_一候、恐々謹言、

九月十七日

直政(花押)

香宗我部左衛門佐殿

人々御中

香宗我部證文

中山家證文

此書孫々永系圖可_二添藏_一者也、又外ニ西山氏

文書寫、並香宗我部左近親和主ノ文書一、中山

田新介秀直佐倉ヨリノ狀一、近世中山家傳系

圖一書添也、

一 中山田之系圖中山辨多敏道、十八歲而訂正之、備別卷、此書

一 香宗家系圖之證文寫、并逐一愚按ノ記、

二 中山田左衛門佐、同新助給ホノキ坪附、

三 香宗我部親泰主ヨリ系圖、并諸說眞僞辨、

四 中山五郎左衛門氏昌卿士職之後差上覺書ノ

寫、

五 富岡山ノ事、

六 親泰主百五十年忌於ニ寶鏡寺ニ焼香出席列座

事、

七 香宗家所_レ傳系譜可_レ疑所辨之事、

八 中山與兵衛良久、山内家ニ有付事、

九 村田氏系圖序辨疑事、

香宗我部氏者、清和天皇六代陸奥守源賴義之三男、

新羅三郎義光之苗裔、而甲斐源氏也、往昔蒙鎌倉

源將軍之命、領香宗鄉並近邑、世居土居村、所傳

言一也、然如今當家所傳言、可爲證者、所藏于西

養寺一、文書、元弘三年者光嚴帝正慶二年癸酉也、寬保

元年、四百當年北條平高時滅、然者鎌倉源將軍之時、

已所、在香宗鄉、顯然也、所藏西山傳兵衛一、文書

貳拾有五通、此文書今年盡、康安、今至寬保元、永和、同上

六、應永、同上、三百、永享、同上、三十、長祿、同上

二十、寬正、同上、三百、文明、同上、二百、延德、同上、二、永正、

六十、寬正、同上、三百、天文、同上、二百、天正、同上、百五、右文

書所、年號記一如是、於于此、真知所傳一者也、

且近代中山家藏家譜、世系甚詳矣、然予近歲欲訂

正之、因好古士探其真偽、不充無疑、因茲證

古文書、以家傳系圖之內所、有據如左、所疑出卷末

○重通法名照海、西山氏所藏、永和五年通秀文書有昭海、其文見後條

○秀賴甲斐孫四郎性海、四養寺所藏、元弘三年源朝臣文書有甲斐孫四郎、又見後條

○時秀法名善海、西山氏所藏、沙彌了文書有、時秀、見後條

○通秀、西山氏所藏、永和五年文書有通秀、見後條

○親秀出羽守、金剛頂寺所藏、文明十八年顯文有源出羽守親秀、西山氏所藏、延德四年六月八日文書有親秀、見

後、

○親泰、寶鏡寺所藏、文祿元年、同二年文書、並吾川郡森山村妙見社、安喜郡伊尾木八幡、安喜浦八幡、香美郡鬼田村八幡、棧札有

親泰、

○親氏、寶鏡寺境內墓碑、見後條

○秀通左衛門佐、寶鏡寺所藏、天正十四年文書有中山田左衛門佐泰吉、花押、今傳書作秀通、恐誤也、因而

改作

○秀政新助、安喜濱八幡宮、天正十三年棟札有中山田秀正、見後條

香宗我部系圖有所據古文書之寫

○土佐國介良庄事、爲走湯山密嚴院領之處、甲乙人

致濫妨狼藉一條、早甲斐孫四郎人、相共相鎮狼

藉沙汰、居代官、可令所務、且載記請之詞、可

注進、違犯仁交名之狀如件、

元弘三年六月四日

源朝臣

蠹簡集云、

右介良西養寺藏凡十九通、今按、源朝臣蓋足利尊

氏、新左衛門豐岡城主秦信能、孫四郎入香宗城主

甲斐又太郎重通次男甲斐孫四郎秀賴入道性海

也、

幸於京師、復皇位、去正慶號、爲元弘三年、

西山氏所藏寫

○去申香宗我部郷内甲斐次郎氏秀子息次郎太郎安秀分事、

合貳町壹段卅

屋敷二所田數
注文在別帶一

右件田畠等者、伯父氏秀爲ニ未處分之間、子息安秀江彼地お去申畢、公家武家御公事等者、昭海置文定候間於ニ後々未來ニ不可有ニ異儀一候、上者限ニ永代ニ安秀殿所江去申候也、仍爲ニ後日ニ去狀如件、

寛保元マテ三百六十二年
永和五年潤四月廿一日

通秀(花押)

按、此通秀ハ、香宗我部殿也、甲斐次郎氏秀ハ、通秀ノ伯父ニテ、初テ領ニ新宮村、即西山氏ノ祖也、氏秀死後安秀エ去リ渡

テ、初テ領ニ新宮村、即西山氏ノ祖也、氏秀死後安秀エ去リ渡

西山氏所藏

○如レ仰未不レ入ニ見參ニ候得ど、御承候間悅存候、□直之時は承候はゞ自レ是可レ入申候、兼又物部惣案主職之事ハ、時秀之御時甲斐二郎殿と仰候し間、身より出申候しうりけんには甲斐二郎殿と出して候、いまの御案文は身か進候し狀には、もし五つたかいて候と存候、何事連々に可ニ申承候、恐々謹言、

七月廿六日

沙彌了花押

謹上 甲斐二郎兵衛殿

按、西山氏所藏、康安二年十一月十三日藤原隆重沾券狀ニ

云、物部惣案主職、香宗我部甲斐次郎殿母儀、太夫殿ヘ限ニ永代沾渡ト有、今又此書中ハ、甲斐二郎氏秀ノ子孫ナルベシ、

○時秀ハ甲斐孫四郎性海ノ子善海也、

西山氏所藏

○新宮別當職豐後入道次男申付所明白也、但諸公事無沙汰候ハ、何時も違犯可レ仕候也、仍狀如件、

寛保元マテ二百五十年

延德四年壬子六月八日

親秀

按、親秀主ハ、香宗我部出羽守殿也、○愚簡集云、嘗聞ニ金剛頂寺所藏願文ニ有ニ文明十八年源出羽守親秀ニ云々、

寛保元マテ二百五十七年

於西山氏爲之

親秀主御花押(花押略)

○安喜浦八幡宮棟札云、大檀那親泰、同親氏、天正十三年乙酉霜月一日、中山田秀正、正木通安、

○寶鏡寺内香宗我部親氏主墓碑銘云、

清和天皇六孫王多田滿仲武田朝臣親氏、於ニ高麗陣中ニ有ニ他界ニ云々

寶鏡寺所藏元久五庚申年六月九日寫之、

アシノヨ

○人質米爲ニ返辨ニ本物之事、俵物拾六俵之分ニ、三段リ壹反おゐて

進上申候、何時成共以ニ本米ニ請可レ申候、其時ハ可レ預ニ御取成ニ候、仍爲ニ後日ニ狀如件、

天正十四年五月十日

中山田左衛門佐

泰吉(花押)

池内兵へ

○中山五郎衛門氏益所藏

右衛門八殿へ對し、皆々神妙被_レ相届一段、誠頼母敷候、我々進退不_レ相濟候付而、嬭右衛門八殿御手前之義、萬成_ニ推量_ニ候、其方儀も先々何へ成共あり被_レ付、身上可_レ被_ニ相續_ニ事尤_ニ候、何時よりず我々進退相澄候は歸參あるべく候、少も別儀あるまじく候、今迄若年之主人を被_ニ相届_ニ事、さりとては本意不_レ淺義候、かしく、

二月十五日

長右

盛親(花押)

中山田五郎衛門殿

按、此書簡慶長六年ノ比乎、萬治年中祖父五郎左衛門氏昌破_ニ差上_ニ先祖書云、香宗我部國ヲ去、堺ニ居住、親五郎左衛門屋從三年ト有、

○中山益所藏

尙々新助無事に奉公申候、我等内萬事之儀頼置申候、程近候は、貴殿舍弟被_レ參候様ニ申度候へ共、遠路之義、其上我等只今之躰ニ候へば難_レ申候、返々五江右病中以_ニ書狀_ニも不_ニ申入_ニ、一入殘多存候、

一筆令_ニ啓達_ニ候、然バ五郎右殿久敷煩にて、去秋被_ニ相果_ニ候由候、老足之義と乍_レ申、別而殘多存計

候、大方之有付も無_レ之被_レ果候段、其身存命之内、心底察入、不便彌増申候、乍_ニ三分_ニ香典_ニ壹分遣申候、誠以志計候、次ニ貴殿仕合之程承度候、舍弟にも有_レ之由候、終ニ參會不_レ申候へ共、言傳申度候、能々被_ニ相心得_ニ候て可_レ給候、此地我等無事候間、可_ニ心安_ニ候、折々以_ニ書中_ニ申度候へ共、便不_レ存心計候、猶期_ニ後音之時_ニ、恐々謹言、

四月廿日

香宗我部左近

貞親(花押)

中山田三郎太夫殿參る

按、此書中慶安元戊子四月廿日也、曾祖父正氏ハ、正保四丁亥十月十九日、於_ニ御北屋鋪_ニ、行齡七十有七歳にて病卒、墓碑寶鏡寺内ニ今見存○三郎太夫ハ、五郎衛門也、舍弟ト有ハ與兵衛良久也、新助ハ、直治(五郎左衛門正氏ハ、弟五郎左衛門ナリ)ノ嫡子秀直(覺承秀治ノ兄弟也)也、

天正年中秦守地檢帳香宗我部御領之内中山田左衛門佐泰吉同新助秀正給之寫

中山田村次郎九名分

一タハタヤシキ
一タハタ同ノ東
一タハタ同ノ北

同郷
同郷
同郷

一タハタ同ノ東
一タハタ同ノ北

同郷

一タハタ同ノ東
一タハタ同ノ北

同郷

一 所貳反貳拾三代貳步 ワサタノ前本三反トアリ 同
 一 所三拾三代貳步內廿八代貳步久ア 同
 一 所四反四拾八代 ノタノ同 同
 一 所五代 出七代 相川村 中山田 新助扣
 一 所貳反廿代 出貳拾四代貳步 古川村分 中山田 左衛門給
 一 所六反 出貳反廿四代三步 同 中山田 左衛門給
 一 所壹町壹反拾八代五步 御北ノ同 赤岡村分
 一 所壹反 ヤシキ地替ト有 土居村 中山田 左衛門佐分
 一 所四拾代三步 ヤシキ 同 主口土口
 一 所壹反 出廿代四步 ヤシキ 同 給同新介口
 一 所壹反 出廿五代 チコキ場 同
 一 所壹反 出廿五代 カリヤ道かけて 同
 一 所壹反卅代 出四拾代五步 同
 一 所四反貳拾代 出貳拾五代杓 杉ノチテン 中山田 新助給
 一 所壹反 出三拾代 下ノ出羽ヤシキ 中山田 新介給
 一 所三拾代 出拾代 タイマヤシキ 中山田 新助給
 一 所四拾代 出拾四代 同 給
 一 所四拾貳代 同 給

一 所三拾三代 同 中山田 左衛門給
 一 所參反 出四拾九代五步勾方 内ゴモリ 同 給
 一 所壹反 出四代 同 給
 一 所壹反廿代 出三拾三代 チモテアシ 同 給
 一 所貳反廿代 出壹反四拾三代 立ア上同 中山田 左衛門佐給
 一 所四拾代 出五代 ウラアミ 同 給
 一 所三拾代 出七代三步 同 給
 一 所壹反 出八代五步方 同 給
 一 所壹反三拾代 出壹反三拾八代 三斗代 同 給
 一 所壹反三拾代 出廿壹代三步勾 チモテカマダ 同 給
 一 所貳反 出七代勾 カナチ 中山田 新助給
 一 所參反貳拾代 出四拾代 川原田 中山田 左衛門佐給
 一 所六代四步 トクヒ同ホリタ 中山田 新介給
 一 所壹反三拾代 出壹反拾八代 同 給
 一 所五反貳拾代 出貳反拾八代 同 給
 一 所五反貳拾代 出貳反拾八代 地五町四反貳代三步 土居村分
 一 所三町壹反四拾代五步勾 中山田 左衛門給

中地同ノ同ノ同	貳町貳反拾壹代三步勾	中山田新助給	
一所壹反	出拾五代上	中山田左衛門給	
シヤクノ瓦同ノ同ノ同	一所貳拾代	出五内 ^{十代ア}	同
南クロッヘ	一所貳反拾代	出四拾貳代四步方	同
シレイタ同	一所貳反拾代	出壹反拾代中	同
同ノ同ノ同ノ東	一所壹反卅代	出三拾代三步勾	中山田左衛門佐給
イマニシ	一所七反三拾代	出三反壹代五步上	同
一所四拾五代	出八代貳步中	同	給
ク ^レ ノ本同同大忍大堺ツメテ	一所三拾代	出十一代下	同
コスイラン	一所壹反四拾代	出廿代下	中山田新助給
ヒラタ同	一所三拾代	出拾九代五步	中山田左衛門佐給
同ノ同ノ同ノ西南ノ川ツメテ	一所壹反	出壹反十代上	中山田新助給
内 ^{廿五} 下	十五代スナ入	同	給
ヒラタ同浦ヒラタ北道ノ下少有	一所四拾代	出貳步中	中山田左衛門給
横田道ッヘ同ノ西	一所三拾代	出拾三代中	同
一所貳反	出三拾壹代内	島六代	同
一所四拾代	出貳拾四代四步方下	同	給

青村ノ同ノ南	一所拾代	出貳拾九代下ヤシキ	同
六村ヤシキ同ノ南	一所拾五代	出貳拾九代下ヤシキ	同
地三町四反貳拾八代	中ノ村分	給	
内	三町八代	中山田左衛門佐給	
四反貳拾代	中山田新助給		
右之村々寛保元年辛酉初冬、於庄屋宅、天正年中泰主以地檢帳、村田杏仙寫之、	吾川郡森山村	中山田新介給	
西門新開同南	一所三拾代	給	
マカリ田	一所壹反拾代貳步	給	
川久ホ同東大サカイ	一所三拾九代	給	
地貳反廿九代貳步	吾川郡森山村分	中山田新介扣	
一所三拾代	吾川郡中嶋村	給	
一所壹反	出五代	中山田新介給	
クホタ	一本田五反九代三步	給	
安藝郡川北村江川村帳之内	中山田左衛門佐給		
但川北江川地檢帳江ハ、明暦三年打直シ、絲川、松田嶋、承應貳年打直シ、此分ハ御當代之給取控主記有之也、考ニ此打直シ、内ニ中山田給可有之哉、在所帳ニテ不レ知故、此打直			

ノ處序ヲ以、前代ノ本帳可レ尋ノ旨、川田氏ヨリ申來ル、

一 田四反六代四步

同郡伊尾木村

中山田左衛門佐給

一 同貳代三步

中山田左衛門尉給

地四反九代壹步

伊尾木村

右香川郡三箇村、安喜郡三箇村ハ、元文五庚申ノ秋、御免方役人川田彌五郎寫レ之、

母代寺分

深淵郷

ナキ同北

大谷村同

市衛門作

一 所壹反卅代 出十三代貳步下

中山田新介給

堂ノ前同ノ東

香宗衆

作古村同 中山田新介給

一 所貳拾代 出廿一代四步中

香宗様御分

東佐古分

ヨリモト同ノ東

一 所壹段 下

作古村同

中山田新介給

父養安寺分

父養寺同

中山田新介給

一 所四反 出廿一代中

香宗様御分

地八段六代

深淵郷分

右ハ於ニ佐古村大庄屋嶋屋與一兵衛宅、寛保元年辛酉霜月

廿六日、村田杏仙寫レ之、

上田村

新田同ノ西

香宗御分

池添善兵衛口

一 所四拾九代四分 中ヤシキ

中山田給

一 所壹反四拾代四分 中

同 同

扣

同ノ西

一 所四拾七代四分 中

同 同庄衛門扣

中山田給

同ノ北

一 所拾貳代五步 中

同 同様

同 同様 給

同ノ北

一 所四拾八代四步 下ヤシキ

同 同様

同 同様 給

同本ヤス衆

香宗御分

一 所三反拾八代 中

中山田新介給

地八反拾七代三步

上田村分

右ハ寛保元年辛酉十一月廿七日、上田村年惣八寫レ之、

合地百七拾參石貳斗九升三合

内

百貳拾參石七斗八升三合

中山田左衛門佐

四拾四石五斗四升

中山田新介

四石九斗七升

中山田給

但是ハ新助給力未詳

〇〇親泰

左近太夫 後安藝守

實長曾我部泰國親之三男也、所傳系圖曰、香宗我部出羽守源親秀無二男息、以ニ親泰ニ爲ニ養子、今按金剛頂寺西寺所藏有ニ文明十八年出羽守源親秀之願文、親泰之享年雖レ未レ詳、兄泰元親生ニ於天文八年己亥、慶長四年己亥六十

一歲而逝去也、爲_ニ其弟_一之間、天文年中出生之人也、假令ハ文明元年ヲ以親秀之生年トシ、天文十年ヲ以親泰之生年トス、弘治二年丙辰ニ至テ親秀已ニ八十八歲、親泰十五歲也、此時已ニ養子ト成玉フニシテ、父子行齡之懸隔大ニ可_レ疑、且蠹簡集、香宗我部系圖、親秀之弟孫十郎之條曰、親秀以_ニ弟孫十郎_一爲_ニ家督_一、今却養_ニ親泰_一、孫十郎不平、密發_ニ刺_一兄之言、有_ニ反者_一告_ニ之親秀_一、大怒使_ニ人殺_一之、同書孫十郎子中山田左衛門佐泰吉條曰、父難泰吉在_ニ櫛櫛之内_一、乳母懷_レ之遁_ニ于近邑親戚_一、烏兔漸移、親秀悲_ニ之孤獨_一、愿疑招請、遂與_ニ中山田之家_一、此文ニヨレバ、孫十郎ヲ害スルハ親秀八十歲ノ後也、其時泰吉櫛櫛ヲ免、サレバ成長_ニ及テ中山田ヲ與ルト云ハ、親秀百歲ノ後ニ當_レリ、此亦可_レ疑之甚者也、竊按_ニ親秀親泰之間_一、恐一代ヲ脫スル者乎、

於_ニ寶鏡寺_一寫之

親泰主御花押(花押略)

親氏 千菊丸 彌七郎

元龜年生_ニ香宗土居_一、從_ニ元親_一於_ニ朝鮮陣中_一病死、藏_ニ遺骨於寶鏡寺_一、石碑曰、面_ニ月溪芳心_一、右_ニ清和天皇六孫王多田滿仲武田朝臣親氏_一、於_ニ高麗陣中_一有_ニ御他界_一、左_ニ于時文祿元壬辰年中冬廿四日_一、

貞親 右衛門八 左近太夫 始親和後貞親

天正十九年辛卯生_ニ香宗土居_一、慶長五年庚子亂後、去_レ國退_ニ于泉州堺_一、于_レ時十歲也、及_レ長仕_ニ肥前國唐津城主寺澤志摩守堅高_一、領_ニ五百石_一、後仕_ニ堀田加賀守正盛_一、武州川越城監、寛永十六年ヨリ信州松本ニ移リ、同十九年ヨリ下總佐倉ニ移ル、領_ニ二千石_一、中山五郎右衛門所藏、用齋ハ與萬治三年庚子七月九日、於_ニ佐倉_一病卒、享年七十歲、

或曰、貞親_{ルニ}仕_ニ寺澤氏_一、大坂落城以前事也、元和元年乙卯豐臣滅亡後、秦氏ノ近族故、憚恐_レ辭退唐津、而潛至_ニ江府_一、在_ニ知足院_一、于_レ時號_ニ中原源左衛門_一、幸其伯母仕_ニ將軍家_一、春日ノ局ト云、是ヲ便トシテ竊_ニ達_一上聞、春日局賴堀田正盛ト云、○蠹簡集、國吉五左衛門、野瀬惣兵

衛二十月十五日ニ與フル書中ニ云、中原源左衛門殿
知足院ニ御座被_レ成候、切々御見舞候哉ノ文アリ、

親重 香宗我部隼人

實加守老臣高井源左衛門男也、高井氏加守妹
婿也、萬治三年堀田上野介正信所_レ謫、後仕ニ
於松平陸奥守綱村、賜ニ二千石、

久秀 香宗我部采女、後改_ニ左中、

實中山覺丞秀治之三男新助也、親重無_ニ男子、招
之爲_ニ家督、

○蠹簡集ニ、香宗左近親和、澁谷用齋ニ與ル正月廿八
日ノ狀ニ云、我等事去春不_ニ存寄、武藏國川越ト申
處ニ有付申ト有、

○益菴按ニ、右親和主_{後改}貞親_{貞親}用齋_{貞親}與ル正月廿八日ノ書

ハ、寛永十四五年ノ比カ、中山氏益所藏用齋_{貞親}與ル
五月十五日ノ書中ニ、加賀守加増ニテ此十三日松
本ニ入部ト有、又同書ノ中ニ、當正月廿八日川越ニ
テ類火過半燒失之文有、此書面ヲ以見レバ、右蠹簡
集ニ出ル正月廿八日ノ書ハ、前年川越ヨリノ狀必

然也、親和堀田家ニ初メテ仕玉フハ、寛永十二年ヨ
リ十四年ノ内ヲ不_レ可_レ離、元和元年卯夏大坂落城
ヨリ廿二三箇年也、

武鑑ヲ以考ルニ、武州忍城主松平伊豆守信綱、寛永十六年同國
川越ニ移ル、忍エハ同年阿部豊後守忠秋移ルト有、堀田正盛寛
永十二川越ニウツリ、同十七信州松本ニ移ト有、然レドモ右
信綱忠秋、忍川越兩城ノ交替十六年也、是ヲ見レバ、堀田川越
ヲ去リ松本ニ移ルヤ、必定十六年ナルベシ、

○親泰主ノ古牌_{以ニ白木鹿相}作_{之緑色也}、拜_ニ先年、益菴、然ルニ享保年

中、寶鏡寺先住持古牌上京シ新造シ、誤而文祿元壬
辰十二月廿一日ノ卒去トス、因_レ茲今當住ニ古牌ヲ
尋ルニ紛失シテ無_レ之、誠可_レ悲事也、然_モ當寺所藏文
書ニ、文祿二年卯月八日親泰_{華押有}、以_レ是文祿二年
卯月存命之事ヲ知ル、

○蠹簡集、香宗系圖親泰ノ條曰、寶鏡寺所藏牌主曰、前藝州太守明
彭孤仙碑定門古靈、文祿二年癸巳十二月二十一日、

○高橋敬信云、寶鏡寺僧近去_ニ親泰古牌、而新製_ニ黑漆牌主、誤_ニ卒
年_ニ而爲_ニ文祿元壬辰年_ニ不_レ可_レ證矣、

○敬信云、村田克復翁曰、親泰爲_ニ親氏之代_ニ赴朝鮮、至_ニ長門國文
字關_ニ而病卒、享年未_レ詳、○敬信又按、親泰長門而卒、蓋本説也、文
祿二年癸巳十二月廿三日、香宗隣村王子村王子宮有_ニ再造上棟、隣
村且元親之家弟、則當_ニ延引_ニ而不_レ爲_ニ者、蓋自_ニ長門_ニ凶事未_レ達也、

○親泰主有御息女二人、

○敬信曰、因親和主與村田七郎兵衛書、親和有二兩姉、一人號久禮田二人、號山際、與親氏不知姉妹、山際親和伴去國、於大坂令嫁某氏、即見其書中矣、又村田翁傳口碑曰、久禮田婦人嫁久禮田氏、故號久禮田也、有稱知久女、從久禮田婦人之嫁、此香宗鄉久武右馬丞孫、而金子某之女也、此女後嫁高知城士由比五左衛門、領三百石、其養子九兵衛、其子今ノ九郎丞也、知久女婢居香宗、後常語三年仕而不見一條様云、久禮田婦人親和殘之國、中山田、村田、澁谷等其外數ノ遺臣於香宗育之、終卒於此、敬信謂、親和自他邦數與遺臣書、禮讓懇懇、且謝姉婦數年關劬勞、又爲養之料而贈白金、或歎姉之病症、其爲文皆孝弟懇到、且運筆優美、百載下使讀者逼真自落淚矣、
墨簡集
 墨簡集第五卷所載長岡郡天行寺村藥師堂棟札曰、地頭立花久禮田先生（稱帶刀歟）宗清、天正十六年三月十九日、宗清疑久禮田婦人之夫君歟、與宮氏曰、宗清恐久禮田豐前守入道定祐之子歟、敬信謂、定祐天正六年戊寅二月十三日卒、八年庚辰遷一條內政之子息於長岡郡久禮田焉、然則香宗家之婢女所稱有由乎、

○妙見社當地頭源親安元龜三年壬申霜月廿六日、

右森山村妙見社棟札凡三枚、今按安當作泰、此香宗我部安藝守親泰也、香宗我部姓源、甲斐武田之氏族、世領香美郡香宗郷住于土居村、世系未詳、下略、

同
○六社八幡宮天正三年乙亥十二月廿八日、大願主源

朝臣親泰、同泰氏久吉、

右安喜伊尾木八幡棟札、

同
○八幡宮大檀那香宗源前ニ朝字有木札ニナシ故ニ臣親泰、同千菊丸、

天正四年丙子三月吉日、池内眞武、北村秀張、奉行岡本與右衛門、北村新左衛門、池内長介、

右見田村八幡宮權現社棟札凡二枚、千菊丸蓋親氏董名、

同書
○八幡宮大檀那親泰、同親氏、天正十三年乙酉霜月一

日、中山田秀正、正木通安、

右安喜濱八幡棟札凡三枚、

中山氏益所藏之寫

○先月五日兩通、今日披見申候、先以無事之由承、大

慶此事ニ候、此地ニ而無事候間、可心安候、

一加々守加増拜領所替にて、信州松本へ越申候、少成

共上方へ近寄候而満足申候、

一久禮田無事之由承候、我等方より文便之度々ニ遣

候へ共、終一度も此六七箇年之内文不參候、ふし

ん千萬に候、未氣色なをり不申と察申事候、

一松本へ此十三日に入部候故、我等儀一切不得透、

此狀さへやうく相調申候へば、七郎兵衛、中山五

郎右取不申候故、はるくよび候ても、先々堪忍

つゝき不申候へば如何候歟難成候、貴様まごも

有之由候へ共、我等身躰少立あがり候はゞ、よび候而、連々其身も能様ニ候へば能候へ共、未此躰ニ而は下り被申候へと申儀も難成候、猶近々可申候、恐々謹言、

五月十五日

用齋老へ

親 和(花押)

猶申度事山々候へ共、此狀さへ五六度にやうやう相調候故、何事も申殘候、親泰親氏年記之事書付、終ニ相届不申候、廿一日廿四日は存候へ共、年來不存候故申候つる、去年高野高寶院ニあい候て書付取申候、中山三郎兵事其元ニ而無他言、内證にて相談候て、今一度此方へ可承候、無隙候間、追々可申候、

益菴按ニ、右御文書ハ、澁谷用齋江ノ御書簡ナリ、傳ニ于當家、三郎太夫今被呼戻様ノ御狀ナリ、故ニ用齋此書面ヲ以可示談、因藏之、

此五月十五日ハ、寛永十六、五月十五日ナルベシ、堀田氏去川越、寛永十六年ナリ、信州松本ニ移ルハ同年五月五月十三日カ

○中山五郎衛門氏益所藏
去霜月廿五日之書中相届披見、先以其元無事之由承大慶候、此地も相更儀無之候間可心易候、次ニ

久禮田久敷煩にて、終去年九月廿五日ニ被相果由承驚入申候、去年も五郎右迄如ニ申入候、一兩年之内ニ迎遣可申と存候處ニ、一入殘多存計ニ候、久禮田病中、其上永々逗留候間、五郎右別而肝煎之段、中々書中にて禮難申入候、早々以ニ使札申入度儀ニ候へ共、遠方其上何角指相候而、乍存無其儀、何も其元にて被存取急恐申候、恐々謹言、

九月三日

中山三郎太夫殿

香宗我部左近

貞 親(花押)

猶々貴殿事、先々其元有付候由尤に候、我等身上少もおもわしき様に候はゞ、是非被參候様ニ申度候へども、少々之躰に候へバ難申候、猶追追可申達候、其元より便之刻ハ左右承度候、此地よりは便無之ニ付、乍存打過候、不及申候へ共、無何事様御心得專用ニ候、

益菴按ニ、此御文書ハ、寛永ノ末正保ノ始ナルベシ、本文ニ去年も五郎右迄如ニ申入と有、シカレバ正保四年ヨリ以前ナリ、又猶々ニ先々其元有付ト有之ハ、即三郎太夫殿寛永ノ末年、正保ノ始、郷土職ニ成給ふ後と見ユル、以是知之、

覺

中山五郎衛門藏

中山田村之大帳ニ可有御座候

惣領

○一知行高拾貳町

中山田左衛門佐

一同 七町

中山田 新介

何ほどハ土井村何村ノ帳ニ有、
殘ル分ハ香宗我部領之他村可有御座候、

一同 七町

新助子直治弟ナリ
同 五郎右衛門

但新助隱居仕右ヲ渡

右五郎右衛門儀ハ、御入國以前迄、右之分知行仕居
申、香宗我部右衛門ハ在所を明被申時、堺へ見届
參、三箇年堺ニ罷在、右衛門太郎殿、右衛門八殿ニ
暇ヲ乞罷下候、其刻お上方 宗傳様へも御目見仕
候、其後浪人ニ而罷居、山内市正殿御預ニ而相果申
候、以上、

萬治元年十一月十日

中山五郎左衛門

野村甚兵衛殿

右萬治年ハ正保年ヨリ十六七年後也、是ハ郷士ニ成テ數年ノ
後、先祖へ御尋有レ之カ、

○富岡山之事

今按ニ、祖父五郎左衛門殿願書、野中傳右衛門殿裏
判物、中山五郎右衛門氏益所藏文曰、富岡山三ツ

森、私先祖之山ニ而御座候と有レ之、然ば此山ハ、先
代より持傳へられたる山なるべし、

○寛保元年辛酉年十二月廿一日、香宗我部親泰主二百
有五十年之忌相當、十一月廿一日於寶鏡寺ニ有御
法會、因茲廿一日之朝、出席列座次第、

上座

中山五郎右衛門

右脇ヨリ次第

二中山 益 菴

新宮村郷士

四西山 圓 藏

三中山 重次郎

六西山 傳兵衛

五谷 清五右衛門

渡邊氏ノ家來分

七村 山彦兵衛

八村 山源兵衛

九西 岡 貞 喜

十西 岡 源 作

中ノ村百生西ノ内民

土居村組頭久武民

十一左 兵 衛

十二安 衛 門

土居村百生東村民

赤岡香原東村民

十三清 衛 門

十四源 吉

土居村百生野村民

中山五郎衛門左脇ヨリ次第

十五重 衛 門

二池内 喜之介

郷士

四西岡 熊衛門

三西岡 作右衛門

郷士

五池内 傳 内

六横屋 儀衛門

郷士與一衛門子

郷士岸本浦又之丞代養育人

七池内 小文 次

八松田 銀 太

土居村百生久武民

土居村百生東村民

九所 兵 衛

十平 七

人数貳拾四人

今朝別座

右御經終、御焼香、第一中山五郎右衛門也、其後次第
混雜、御齋御酒大盃、當村年寄儀兵衛持參營之、中
山五郎右衛門ニ始リ、從夫段々座中行り數獻大
酒、中山五郎右衛門盃住持ニ納ル、御幕參拜禮モ第
一中山五郎右衛門也、

池内市郎右衛門養子繼跡

一池内喜之助、於三列座、先祖ヲ尋ルニ、喜之介云、我等先祖ハ池内肥前弟右京ト申者ト傳フ、然共何之證據モ無レ之ニ付、唯申傳ヲ以、右京が子孫ト申のみ也ト、肥前ニハ子ナシト云傳フト、今按、地檢帳ニ池内肥前玄蕃彌六有、右京ト云ハ不傳聞、

一本名成谷氏ナリ

一谷清五衛門地檢帳ニ、成谷何某有、成程侍ト見ユル、其家所藏文書ヲ按スルニ、四百一西山圓藏、傳兵衛、

一西岡氏、横屋氏、松田氏、此三家輕士カ一兩具足カ不詳、以前香宗家ヨリ出ル家ナリ、

一村山氏中ノ村地檢帳ニ、紺屋與市給、並紺屋ヤシキ與市居ル有、

世主

○十一月廿日從高知中山八十之進、與一兵衛別次郎松、中山田左衛門佐子、新助、子與兵衛、子覺承養子、中山市兵衛、子作右衛門、其子與一兵衛子、參拜也、中山

但遺臣當日ノ列座略ス、

寛保元年辛酉十一月廿二日書之 中山益菴良爲

○右中山次郎松家ヲ本トス、源朝臣香宗我部血脈綿々トシテ不

絶繼、代々家督故、香宗家之古文書始メ、其家譜等存、此家詳到
于今、枝葉繁茂、苗裔雖蔓三國內、枝葉中山家皆以未得三其家譜、

我若年之比、實父重久被語しハ、祖父五郎右衛門

正氏、慶長五關原之亂後、香宗我部右衛門八殿國を

去給ふに屬從て、泉州堺に在し、年有て暇を給ひ國

に至り、右ニ記盛親、主中山田五郎右衛門殿ト有之、文書ヲ以考ルニ、右衛門八殿御手前之儀萬成ニ推量一候と有、舊

宅土居村御北の土ゐに住、當村ハ一豐君御入國之

後、老臣山内備後に玉ハルニ付て、備後殿へ達シ、

居をやすんじ、二度仕へる事を不レ求、終に正保四

年丁亥十月十九日卒す、齡七十七、寶鏡寺之境内に

葬、石碑は今見存す、父良久十六歲之時、瑞應寺テキ

不詳、住持へ被レ頼候而、手習學問等被レ致候由、漸

成長之後、老職山内備後殿へ瑞應寺住持より厚く

被レ頼候處、備後殿許容有て、被レ加ニ與力職、此時

分野中傳右衛門殿、山内彦作殿國務たり、然ニ彦作

之常々病身にて、御寄合之日毎度不參被レ致故、爲

レ代與兵衛良久出勤也、傳右衛門殿御心に應じて、折

節六ヶ敷存寄も申上しと、常に傳右衛門殿戲言に

彦殿々々と被レ仰たると、六十二三歳の比也、中風

を煩、元祿四辛未八月廿九日七十歲卒去也、○重久

云、祖

父正氏の方へ瑞應寺ヨリ申越ハ、源太郎(與兵衛良久也)之儀、山内氏江可ニ頼入一云、五郎右衛門云、御恨志不レ淺、如何様ニモ不レ洩責命、乍レ去備後殿ハ常々傳聞スル處、不レ頼母シキ人トキコユト申サレシト、

村田氏譜序

伏惟我祖先村田某、往昔從ニ武田源主、香宗我部家是也、自ニ

甲斐國ニ始移ニ於土佐國香美郡香宗郷ニ世仕焉、天文中香宗我部主今按、出羽守親秀主歟、未レ得ニ明證一也、與ニ安喜郡司ニ戰、蓋有

年、香宗主漸及ニ衰微、量ニ家運ニ乎、一夕居城而頼自殺、我曩祖新六左衛門介ニ錯之、弟新兵衛、其外家士凡十六人殉死矣、主從繪像傳在ニ香宗寶鏡寺、澁谷武左衛門我祖父正安等、若年時見之、曩祖影白髮老人也云、後爲ニ而所ニ屯家長諸士聞レ之、驚皆歸レ城、相

蠹鼠ニ失レ之、議曰、當家不レ圖既滅亡、只當下從ニ兵勢隆泰姓ニ亡中怨敵、一決而遂請ニ長宗我部國親ニ男親泰君、建ニ香宗家、我先人亦仕レ之也、嗚呼世代久遠、本系無レ由尋焉、今竊父祖之遺傳、且不レ洩下所ニ聞見ニ餘裔、具錄之、永貽ニ家門ニ云、

益菴按

○右村田氏ノ系譜ノ序今按出羽守親秀主歟ト有、出羽守ハ文明ノ比ノ人也、天文年マデ九十年ニ及ブ、親泰ハ享年不レ知トイヘドモ、兄元親主、天文八年ニ生レタル人也、シカレバ前後無レ所レ取也、

寛保元年酉十一月廿六日

先祖覺書云、天文ノ比、安喜郡司何某ト香宗殿取合、不慮ニ生害ナサル、其時侍十六人切腹ス、其子細長々シキユヘ略之、時ニ一人新六左衛門ナリ、主從二人ノ爲レ鉢繪ニカキ、寶鏡寺ニアリ、親父正安見ラレケルト語リ玉フ、寶鏡寺住持高山和尚、鼠ノ巢ニナス云々、

右ハ曾祖十兵衛友安之所レ記ニテ御座候、

村田杏仙

右所ニ書集ニ雖レ爲ニ愚昧之身、享保之初、舊蹤香宗郷野市村に來リ、土居村四方の堤の纔に残る所、或寶鏡寺境内之御墓所、又東野之御墓所、或野々土居新介秀正隱居ノ所也、或御北屋鋪、或中山田城跡、第一立山宮、本社東西北割菱ノ紋、彼是見及び聞傳ヘ、責而先祖之系譜具に書記す事を欲し、嫡子敬道に令レ編之、備ニ別卷、此書は諸方所ニ傳藏ニ之古文書、并蠹簡集之中、又當家に傳る所の文書謄寫者也、于時寛保元年辛酉十一月念六日

中山益菴良爲 手記

新宮村西山傳兵衛所藏古文書之寫

康安二年十一月十三日 藤原隆重判

(一) 去申香宗我部郷内 甲斐小次郎氏秀子息次

郎太郎安秀分事

合貳町壹段卅屋敷二所田數
注文在別番

右伴田島等者、伯父氏秀爲ニ未處分之間、子息安秀江
彼地お去申畢、公家武家御公事等者昭海置文定候
間、於ニ後々未來ニ不可有ニ異儀ニ候、上者限ニ永代ニ
安秀仁所エ去申候也、仍爲ニ後日ニ去狀如レ件、

永和五年壬子四月廿一日 通 秀(花押)

(三) 去渡安秀重代相傳屋敷
四至境界

一所山田内限ニ東兼光屋敷、西ノ土根、限ニ南ナヘルカ内
北ノ岸、限ニ西堂内東ノ土根、限ニ北岡松山一

二反廿代
一所窪内限ニ東原田島、限ニ南大郎入殿ヤシキ、北土根、
限ニ西長島東土根、限ニ北野島道一

永和五年閏四月廿一日 通 秀(花押)

(四) 合貳町壹段卅坪付

一所七段東ソカ
クロソ井

一所三段土橋并忠二郎の前
家トコロ

一所屋敷新田一反
山田ノ内四書有之

一所所卅代御出書ノウシロ薪田

○康安二壬寅○寛保元マテ
三百八十年ニ成
貞治元年也 ○永和五己未○同マテ
三百六十二年
康暦元年也

後小松

○永德三癸亥○同マテ
三百五十九年 ○應永六己卯○同マテ
三百四十二年

後花園

○永享九丁巳○同マテ
三百五十五年 ○長祿二戊寅○同マテ
三百八十四年

後土御門

○寛正六乙酉○同マテ
三百七十七年 ○文明四辛卯○同マテ
三百七十年

後土御門

○文明十四壬寅○同マテ
三百六十年 ○延德四壬子○同マテ
三百五十年

後柏原

○永正七庚午○同マテ
三百廿貳年 ○大永八戊子○同マテ
三百十四年

後奈良

○天文六丁酉○同マテ
三百五十五年 ○天正十七己丑○同マテ
三百五十三年

(一) 沽渡物部庄内惣案主職事

右所領者、隆重々代相傳之所帶也、然而依レ有ニ要
用、代拾漆貫文、香宗我部甲斐次郎殿母儀太夫殿
所、限ニ永代ニ沽渡申候者也、雖レ然後々將來不可
他人妨、仍爲ニ後日ニ沽券狀如レ件、

クホノ内

一所二反廿代 一所窪内西

右坪付狀如件、

永和五年閏四月廿一日 通 秀(花押)

(五)連中起請文事

此起請文牛玉ノ裏

合一通

右契約元者、相互に人の曲言候共用申まじく候、自身見ざらん事もとかくよそへ申候て、相互にせういんあるべからず候、於向後者大事少事を見はなち申まじく候、若背此旨候者、日本國中大小神祇、伊勢天照大神、八幡大井、賀茂、春日大明神、殊者當郷の鎮守八幡大井、立山大明神、金剛童子、御罰を各身に可蒙罷候、仍爲後日起請文如件、

安 秀(花押)

永徳三年七月十三日

家 秀(花押)
通 秀(花押)

(六)ゆつりわたすとさの國物部庄之内惣あ主□きう

やしき田畠之事

合五段十貳段十

左近二郎 馬三郎

溝淺權守田タリ入候

權守

右件のゑりやうは、たゆうちうだい、さうでんの所たる也、ゑかるに子息にしやまどのへゑいたいをかぎり候て、ゆづりわたす所ぢぢなり、但ゑそんなくばかいの五郎殿御子息西山殿玄そんへゆづりわたすところぢぢなり、若このぎをそむかんともがらにをいては、ながくぶけとして、あとをもつべからず、仍爲後代龜鏡讓狀如件、

永徳四年二月五日

尼 大 輔

(七)讓與

○表ニ松石丸讓狀と有、○此手跡サテ見事也、

香宗我部郷内一分地頭職事

合

家所

一箇所貳段

ヤシキ

一所壹段忠三郎ヤシキ

右所領者宗海重代相傳之地也、然子息松石丸仁限ニ永代讓與處也、御公事等者彼惣領千増丸仁可有合力也、無子孫者兄弟等子孫ニ可讓與物也、仍爲後日讓狀如件、

應永六年四月五日

沙彌宗海(花押)

(八)讓與香宗我部郷内一分之地頭職西山分之事

右件之所領者、香宗我部郷内西山重代相傳之所領也、然其子宮法師生年十三歳之時節、熊野參詣之

時、讓與所實也、但惣領地頭方へ之御公事等之事者、惣領次ニ難レ勤可レ申、其時一口之子細あるまじく候、仍爲ニ後日ニ之狀如レ件、

永享九年十二月廿三日

西山秀員(花押)

宮法師へ

(九)讓與香宗我部郷内壹分之地頭職田畠之事

合貳町壹段卅

ツホツケ本
證文あり

右件之田畠者、通海住代相傳之所領也、然間ちやく子孫太郎大藏限ニ永代ニ讓與所實也、但右限とひのおん公事等、惣領方へ可レ令ニ勤仕ニ候者也、仍爲ニ後日ニ之狀如レ件、

長祿貳年二月十六日

通海

(十)讓與香宗我部壹分之地頭職之事

合二町壹段井屋敷等

右之田畠等者、惣領方之御公事、ねんごろにきんし申べき所實也、其外所従等ことくく孫太郎之外は他人さまたげあるまじく候、仍爲ニ後日ニきけいの讓狀如レ件、

寛正六年九月十六日

西山大藏

秀俊(花押)

孫太郎方へ

(十一)ゆづりわたす香宗我部地頭まき之事

○表ニ孫太郎ゆづり狀と有

秀俊

合二町

右件之所領は、西山大藏秀俊ぢうだいのそうでの所領也、だ、し惣領御公事等きんしすべき物也、男子孫太郎に田畠のこさず永代をかぎりゆづりわたすところまちなり、他人さまたげあるまじく候、仍爲ニ後日ニゆづり狀如レ件、

大藏

文明四年十一月十五日

秀俊(花押)

孫太郎

ゆづり狀

(十二)定西山之大藏おきて文之事

右之おきて文ハ二町二段卅之公事にて、惣領ニおきてちうせつといたし候間、二段卅御めん候、このむねこゝろへられべき者也、次ニ男女いくたり候て、名田等之内たん分もゆづりわくる事、まち代ニおき、惣領いかやうニ人なんと申子細候とも、とおかんなく、ほうかう御公事等、きんしすべき者也、

仍末代のおきて文如件、

大藏

文明四年十一月十五日

秀 俊(花押)

孫太郎

(十三)よづりあたわる田地事

合二町者

右かの田地は、西山ぢう代そうでんの所れう也、ちやく子之千代丸一とカそしろものこさず、よづりあたる所實也、さる間そうれう方とうしんに京とへまかりのぼり候間、かの物わたすなり、さる間おやにて候物、永海之おきてニまかせ、けうだいいくたり候共、のぞむまじきなり、仍爲後日一よづり如件、

西山大藏

文明十四年七月廿七日

秀 信

千代丸

よつり狀

(十四)新宮別當職、豊後入道次男申付所明白也、但諸公事無沙汰候は、何時も違反可仕候也、仍狀如件、

延徳四年壬子六月八日

親 秀

西山一鐵

(十五)ゆづり渡副狀、如先人々田畠之書立前ニ有り、男女多有共、一とカそ代も分儀有まじく候、此旨又手つぎの時も可被ニ申置一物也、仍爲末代一定右如件、

豊後守

永正七年十一月廿八日

秀 信(花押)

孫太郎

(十六)一慈航庵物之事

一所下王子中西分同光明院殿分一段

合二段

後日狀如件、

永 海○秀俊也

永正八年辛未二月九日

秀 信(花押)

(十七)申合永代之事

右件之永代之儀者、大恩王子中西分、字作田一反代五百文、在所賣所實也、若彼在所相違候者、我々本領之内一反可遣候、此只今違亂有間敷候、何も大恩賣德引列、可任其旨一候、爲後日一如件、

大永八年貳月廿八日

秀世

木の下新五郎殿

(六)右申合永代之事

ほう田之内一段五貫五百文、同まき米一俵也、寶鏡寺於三子孫、天下大法行候共、相違有間敷候、并香宗我部殿同心に無別儀候、以中間孫兵衛、寺家九郎左衛門、便申候、爲後日之狀如件、

寶鏡寺

天文六年乙酉三月吉日

永珠

大恩中彌介殿參る

(七)坪付

チハカ内

一所壹段拾代

廿代ヤシキダ
田分
下(一字蓋)

西山二郎太夫

同ノ東

一所四拾五代下

新五村

西谷北ノ山ネトンビタ有

一反十二代下

同

花木ノ内

一所貳段拾貳代内

一反十二代下

同

一所壹段

下ヤシキ

同

谷ノ内同上下懸テ

下ヤシキ

同

一所卅六代

下ヤシキ

同

同ノ西ノホリ明

下ヤシキ

同

一所廿代

下ヤシキ

同

香宗我部氏記録

シヤウブガ谷ノ同姫明

一所八代

同

西山とのヤシキ後懸テ

一所壹段卅代

同

同ノ前西ノ外懸テ

一所廿五代

同

同ノ別

一所廿代

同

同ノ北ノ所

一所壹段拾五代二步中ヤシキ

同

同ノ北

一所卅六代

同

ツカノ本ノ同

一所貳段卅代

同

タハタノ同

一所四拾代

同

竹ノウシカノ付

一所貳反

同

クロソヘノ北川フチ

一所八段拾六代二步杓内

同

上ソカ宮ノ東

一所四段三拾五代

同

クホヤシキ

一所壹反五代貳步

同

カリヤ大恩大

一所貳段卅六代五步拾方

同

カキタノ同ナワテノ下

一所卅壹代

同

合三町四段貳代方

同

源五郎口

同

タハタ

同

同善五部口

同

同新承持

同

同

同

コウダ

所四段廿七代 中

上田村

同

高タ

一 所參段卅五代三步 下

同

惣合四町貳反廿四代三步方

一 上々八段拾壹代二步勾

一 上壹段

一 中壹町壹段四十八代五步勾方

一 下七段廿三代三步

一 下々四段卅八代

一 中ヤシキ貳段四十五代二步

一 下ヤシキ六段二代

一 荒 五代

以上

天正拾七年己丑

八月廿五日

親氏(花押)

(ニ千)坪付上屋敷田分

ミツダ

一所五反 四反うけ(二字盡)

本行坊

タカダ

一所五反

彦左衛門(一字盡)

藤兵衛

以上壹町

西山

(廿二)

如レ仰未不レ入ニ見參ニ候得ども、承候間悦存候、値直之時は、承候は、自レ是可レ入レ申候、兼又物部惣案主職之事は、時秀之御時、甲斐二郎殿と仰候之間、身が出申、もしうりけんには、甲斐二郎殿と出申て候、いまの御案文は身が進候之狀には、もし五つたかいて候と存候、何事連々に可レ申承候、恐々謹言、

七月廿六日

沙彌了(花押)

謹上甲斐二郎兵衛殿

(廿三)對馬入道殿へ

是ハ立紙ニシテ表ニ有

別當職事、西寺へ可ニ申遣ニ候、いづれも先麥などをば豊後入道まかせられ候へと可レ被レ申、來月二日ニ可ニ人遣ニ候、恐々謹言、

十月廿九日

(花押)

(廿三)對馬入道殿

是モ立紙ニシテ表ニ

可レ給候、此分重而可レ被レ申候、

先々豊後入道孫子おゝき事に候間、在所被ニ請取申候、以上、

新宮別當職事、豊後入道申付候處ニ斟酌候、雖レ然西寺南泉坊ニ申付候へと被レ申候、一坊かへおき

親秀

候事に候間、此方より申付事いかゞに候、さりながら親類中より先遣人、南泉坊ニ而相尋、御心中聞候て可申合候、別當など事はさかいろの事に候間、おかしげなる物など候而ハ不_レ可_レ然候間、始末時々案仕申事ニ而候、先ニ豊後入道領掌候へかしと存候、恐々謹言、

十一月十八日

(花 押)

(廿四) 是モ立紙ニシテ表ニ
對馬入道殿

親 秀

別當職、豊後入道被_レ致_二領掌_一候肝要候、さかいろの事に候、いかにも此間ニ相替、萬可_レ給様ニ候はば、公私返候肝要候、恐々、

(以下蠹滅)

(廿五)

なく候間、誰_レ別當職事は久敷本人候つる候共、其たしなみに難_二申付_一候、なく候つる間、新儀を申付候、其まゐし、

別當職事、既三箇條罪人として罷、夫々仰_二弟子_一

契約仕候は、親罪人_{ニシテ}としてはのがれがたく候、

正納言も同事也歟、中候はんずるニ、可_レ致_二其成

敗_一候處ニ、南泉坊申付候、はや別人と存候間、是

非を不_レ申候處ニ、西寺儀も別當代と申なる、其時

と別當罪事、同意たるべく候哉、能_レ可_二相尋_一候、我々心中ニハ南泉坊ニ正納言申付候、子細之末若事にもなにとしても、此萬事ハ東西働事繁候間、年寄ならでは公事なども難_レ仕候間、別々ニ申付候と心へおき候、此間も西山も別當も先規ニ相替、せ見子の一疋もつながれず、がいにかせられ候口惜候、今更とかく被_レ申事入まじく候、恐々謹言、

十一月十三日

親 秀

池内殿

○此一通甚よめ不_レ申候ニ而、本文之通寫ス、

右數通ノ文書、紙ニ包ミ、表ニ宗海ト有、其上ヲ藍染布破袋ニ納、袋ノ上ニモ宗海ト有、此手跡應永年、宗海ノ文書ト同筆ト見ユル也、

右合二拾五通、新宮村郷士西山傳兵衛所藏古文書謄寫之、

于時寛保元辛酉冬十月十八日、

中山益庵良爲

同 辨太敬道

本家香宗我部書

右二十五通新宮村西山傳二郎所藏、包紙有_二宗海二字_一、又裏布袋同字存、

雜錄

馬場、五百藏、萩野、甫喜山、伊尾木、山川、安田、北川、室津、在井、和食、奈半利、北村、賀江、佐竹、秦泉寺、十市池、下田、廣井、執行、西和田、野田、豐永、又新田五人衆ト云ハ、志和西厚窪川西東也、

(三) 一條殿系圖 土佐軍記

家房 一條關白兼良公嫡男教房——之二男房家也、文明二年大亂ヲ避テ、兼良ハ奈良ニ往、教房ハ兵庫ヘ下ル、房家ハ土州ニ下ル、是幡多一條家ノ元祖也、天文八年御歳六十六ニテ卒去、王代二覽嫡子房通ハ一條關白冬良ノ養子婿トナリ、京ノ一條ノ家嗣タリ、

房冬 房基 兼定 土州ヲ追出ス、内政 元親ノ婿也、大津ノ御所是也、若君 母元親ノ娘ナリ、父内政ヲ追出シテ、此子ヲ可ニ取立トテ、久禮田定祐ニ預テ守護スル、此ヲ久禮田ノ御所ト云、長宗我部没落ノ後、大和國ニ移玉ヒテ、京ノ一條殿ヲ頼テ御座有トゾ、是限ニテ土佐一條家絶タリ、

抑一條殿土佐國ニ下ラル、コト文明初年也、當時大亂ヲ避テ、祖父兼良公ハ暫奈良ヘ下リ、嫡子教房ハ兵庫ヘ下リ、其子房家ハ土佐ノ幡多ヘ下ル、將軍義政卿ヘ訴訟アリテ、土佐ノ國司ヲ望玉ヘバ、叡聞ニ達シ、國司ノ宣下有テ、義政卿ヨリ土佐ノ侍中ヘ御教書ヲ玉リケレバ、國中一條殿ヲ國主ト崇奉リ、幡多中村ニ口城ヲ拵、移シ奉テ守護ス、國士在中村シテ事ヘル、家老、土居、羽生、爲松、安並、四人也、最其身謙退シテ禮厚クスレバ、國中自治ル、國中ノ侍元服スル時ハ、一條殿御前ニテサセラル、文明二年ヨリ天正元年マデ百五年ニテ、當國一條ノ家亡フ、

(四) 元秀戰死 秦氏系圖曰、策序也、實辨元秀ニ作誤也、故ニ此書兼序ニ改ム、

永正四年六月廿四日、王代一覽廿細川右馬頭政元、京都ニテ切腹、王代一覽曰、永正四年六月廿三日ノ夜、政元ガ家人香西ニテ逆心ヲ企テ、政元ガ小臣戸倉某ニ賂ヲ與ヘテ、今月廿三日ノ夜、政元愛宕精進ノタメ湯殿ニ入ケルヲ、戸倉從入テ密ニ政元ヲ害ス、其子高國武勇ヲ振トイヘドモ、王代一覽曰、政元當ニ魔法ヲ行ト稱シ、潔齋ス、故ニ子ナシ、下ノ屋形讓岐守元勝ガ子六郎澄元ヲ養テ子トス、然レドモ澄元未ニ上洛ニ云々、同書曰ク、永正十七年細川澄元ト細川高國ト權ヲ爭フテ合戰、高國敗レテ江州ニ赴ク、高國ハ細川民部政春ガ子也、政元養子ノ約アリト云々、相順フ人モナシ、其比長宗我部宮内少輔兼序ト申ハ、元親公ノ祖父也、年比細川ト甚睦マ

シケレバ、其威ヲ以國士ヲ蔑ニスル、此遺恨ニヨツテ、細川ノ切腹ヲ聞テ、本山張本ニテ大平、吉良、山田ト申合テ、兼序ヲ討テ本望ヲ達セント、永正五年五月、其勢三千餘騎ニテ江村郷豐岡ノ城ヘ取掛クル、兼序是ヲ聞テ、手勢五百騎桑名久武中ノ内ヲ先トシテ、山下ヘ下テ、本山七百餘騎ニテ扣ヘタル眞中ヘ切テカ、リ、敵六七十討取テ、関ヲ上テ此競ニ城ヘ引トレト下知シテ引取ル、大平、山田、吉良ガ勢二千餘騎、二手ニシ城ヘ入ント突テカ、ル、兼序前後ノ敵ヲ追北シテ、無難ニ城ヘ取籠ル、大平、山田、吉良、本山、城ノ三方ヲ取卷テ、晝夜二十五日攻戰フ、兼序ノ軍兵大半討死シテ兵糧モ盡タレバ、明日突テ出テ腹ヲ切ベシト思案シテ、近藤ト云普代ノ侍甲斐々々敷者ナレバ、
〔テ申様、此間ノ合戰ニ、軍兵過半討死シテ、兵糧盡ヌレバ、明ナバ合戰シテ討死スベシ、汝ハ此千王丸ヲ懷テ、如何ニモシテ一條殿ヘ參リテ、兼序最期ニ申置、此子ヲ進上申トイヘ、何ノ子細モナク御憐愍有ベシ、是ゾ我爲第一ノ忠勤、生々世々ノ恩ナルベシト宣ヘバ、近藤承テ、全シ生待レ命、遠難輕死、臨節近易シト云リ、六歳ナル千王丸殿ヲ一條殿ヘ奉テ養育センコト、

遠シテ難キトイヘドモ、代々ノ芳恩難レ忘候ヘバ、何トゾ千王丸殿ヲ一條殿ヘ奉リ、我モ御奉公可レ仕ト請合ケレバ、兼序悅デ、今ハ思ヒ置コト更ニナシ、千王丸ヲ汝ガ子ト思テクレヨト宣ヒ、近藤ニ渡シ玉フ、近藤ハ竹ノ皮籠ニ千王丸殿ヲ入、背ニ負テ其夜城中ヲ忍ビ出デ、四日路有ケル、幡多郡一條殿ヘト急ケル、扱兼序ハ足手ニカ、ル家人ドモノ妻子所縁ヲ尋テ、夜中ニ落シ、明ルヲ待テ居玉フ、本山城ノ體草臥タルゾ攻ヨトテ、士卒ニ下知シテ攻上ル、大平、吉良、山田、續テ攻ル、兼序六七騎ノ兵ヲ先ニ進マセテ、敵ヲ塀際マデ寄テ、門ヲ開テ突テ出ル、本山吉良ガ山下ヘ崩レテ落ルヲ、追討ニシテ引取、山田、大平、入替テ攻カカル、此勢ヲモ突崩シテ、五六十騎討取テ引トル、四人ノ大將軍評定シテ、二手ニシテ攻破ルベシト相定テ、関ヲ上テ攻上ル、兼序塀際近ク敵ヲ寄テ突テ出、復山下ヘ追崩ス、右ノ手ヨリ大平山田千餘騎横合ニ切テカ、リ、火花ヲ散シテ攻戰、本山取テ返シテ切テカ、ル、二時計ノ合戰ニ、本山舍弟本山勘解由討死スル、此競ニ城ヘ引トル、サレドモ後ノ門ヲ破ラレテ、大平山田ガ兵共亂入テ火ヲカクル、兼序兼テ用意ノ

コトナレバ、櫓へ取籠リテ、妻子トトモニ自害シテ、侍大半討死シ終ニ落城ス、此跡四人ノ大將配分スルト聞ヘシ、又近藤ハ漸一條殿へ無_レ恙參着シケレバ、土居ト云人ヲ頼デ、一條殿へ言上スル、一條房家公此子並ニ近藤ヲ被_ニ召出、對面有テ泪ヲ流サセ玉テ、長宗我部ハ近藤ト云能侍ヲ持テ家ハ絶マジキゾ、主ノ孤ヲ取立テ世ニ出スコト和漢其例多シ、近藤程ノ臣下ハ有間敷ト御感有テ、近藤ヲバ御家人ニ召加ラレ、千王丸ヲ御傍ニ置セラレテ、朝夕痛ハリ思召養育シ玉フ、諸人感涙ヲ流ス、又兼序爲_ニ菩提_一城下明榮寺ニテ法花經供養アソバシ、法名關翁常秀居士ト諡ス、國中ノ侍是ヲ聞テ、此御所ノ爲ニ一命ヲ奉テ奉公スベシ、頼母敷ト感ゼヌ人ナシ、此子眼ザシ非_ニ平人_一、成人ノ後ニ家ヲ起スベキ人ト思ヘリ、七歳ノ時一條殿二階ニ御坐有テ涼マセ玉フ、此子ニ向テ汝此越戸ノ上ヨリ庭へ飛ナラバ、父ガ名字ヲ取返テトラセント宣フ、此子聞モアヘズ、則越戸ノ上ヨリ庭へ飛玉フ、一條殿御覽ジテ手ヲ打セ玉テ、長モ恐ルベキ所ヨリ飛タリ、何ト見テモ唯者ニアラズト譽サセ玉フ、近年世上ヨク治リテ、此子十五歳ノ時、御前ニテ元服シ

テ、實名ナレバ長宗我部宮内少輔元國秦氏系圖曰、國親也、故ニ以下、ト號ス、連々一條殿、本山吉良山田大平ニ仰ラレテ、長宗我部ノ本領廿枝江村郷ヲ取返シ、三千貫ヲ此宮内少輔國親ニ下サレテ、成人シテ豊岡ノ城ヲ拵テ移ル、方々浪人シテ居タル普代ノ侍ヲ召返シテ、長宗我部ノ家ヲ相續シテ、男子四人、女子五人
土佐軍記ヲ持テリ、嫡子元親、天文八己亥ノ五月誕生、二人ト有_ニ持テリ、嫡子元親、天文八己亥ノ五月誕生、次男親貞吉良左京進是也、三男親泰香宗我部左近大夫是也、四男親房、鳴瀬九郎是也、嫡女吉良、二女十市、三女波川、四女津野、五女他ノ旗以上系圖、按ルニ、本山式部少輔ノ妻トシ、恐ハ此五女乎、

山田退治ノ事

近年世上能治リテ、宮内少輔ハ親ノ怨敵可_ニ討亡_一思フトイヘドモ、一條殿許容ナケレバ、徒ニ年月ヲ送ル、生得利根ナル人ナレバ、國中譽ルニヨツテ、本山吉良ヲ始、兼序ヲ討タル人々、行末如何ト薄氷ヲ蹈、其中ニ本山ハ張本人ナレバ、一條殿へ連々申上、宮内少輔ノ息女ヲ乞テ、子息式部少輔ト夫婦ニセバ、親子因ミ深ク、昔恨モ殘マジキト思案シテ、一條殿ノ家老土居ト云人ヲ頼テ訴訟アリケレバ、一條殿宣ハ、近年世上治リタル上、宮内少輔本山ト入魂セバ、彌治平ナ

村小備後カト云、江村聞テ、監物能出タリ、尋常ニ勝負ヲセヨ云テ、三尺餘リノ太刀ヲ抜切テカ、ル、監物ハ長刀ニテウケツ開ツ戰シガ、監物受太刀ニ成テ、長刀捨テ小備後ニ無手ト組、小備後大男ニテ力増リテ、監物ヲ押テ首ヲトル、山田是ヲ見テ、馬ニ鞭チ、其勢三百餘騎、足ヲ亂シテ逃ル、江村ガ兵宮内少輔ノ旗本續テ追掛ル、山田衆三ノ丸ヘ逃入テ、門ヲ閉ントスル、豐岡衆ヒタトツヒテ鎗ヲ突ク、敵猛勢ナレバ、山田ガ兵門脇ニテ三十餘人討死ス、江村ツバヒテ攻入、二ノ丸ヲモ乗取テ、山田兵本丸ヘ引取カテテ大略落ウセル、山田丹波守ハ六七十騎ニテ城ノ山下ヲ西ヘ落ルヲ、久武内藏佐十六七騎ニテ追カケ、十八町ノ内ニテ追詰、馬ヨリ引下テ縛搦テ、鞍ッボニ結付テ歸ル、宮内少輔十五日逗留アツテ、降參ノ者ヲ許テ本知ヲ玉リ、城番ヲ置テ豐岡ヘ歸陣也、山田ハ虚人ナレバ、殺テ無益トテ、江村ニテ少領知ヲ玉リ、時々出仕シテ居ラレケリ、長宗我部是ヨリ六千貫ノ主トハ成玉フ、

長濱合戰ノ事

吾川郡ノ内長濱ト云所ニ城有、本山領知ニテ同名玄

蕃ノ頭ヲ入置ク、本山居城ヨリ朝倉マデ道八里、豐岡ヨリ長濱ヘ道三里、入海ニテ小船往來ノ所也、此城ニ門ヲ可レ立トテ、材木ヲ揃ヘテ宮内少輔城下ニ上手ノ大工アリ、此大工ヲ雇テ門ヲ建ル、宮内少輔聞玉ヒテ、彼大工ヲ召寄ラレテ、長濱ノ城門ヲ建ルト聞、外ヨリ二三十人シテ押時ハ、貫木迦ル、様ニ立様ハ有マジキカト仰ラル、大工承テ、ソレコソ有ベキコトナレト申上ル、サラバ貫木ハヅル、ヤウニ建ヨト宣ヒ、大工長濱ヘ行テ門ヲ立ル、上手ナレバ外ヨリ三十人計ニテ押セバ迦ル、様ニ立ル、佗人はヲミテ、此門丈夫ニシテ恰好ヨシト譽ルトナン、國親悦喜不レ斜、其翌年夏家老中ヲ呼テ曰、長濱ノ城忍ビ取ベシ、然ラバ本山口惜思ヒテ、有無ノ合戰アルベシ、十死一生ノ覺悟究メタル由宣ヘバ、家老ドモ尤ト申テ、其勢五百餘騎、弘治二年六月初ニ艦船三百艘ニ取乗テ、長濱ノ城ヘ押寄テ関ヲ上ケレバ、夜中ノコトナレバ、城中周章騒、大手ノ門ニ着テ、二三十人シテ押ケレバ、貫木迦レテ城中ヘ打入、家々ヘ込入テ攻殺ス、

此段元親記曰、本山梅慶領分ハ、東ハ一宮境、西ハ二淀川、南ハ浦戸限二郡ノ主也、朝倉ノ城ヲ居城ニシ

テ、子息式部少輔ハ弘岡^{吉良氏城主}浦戸兩城ヲ掛テ

持、斯カル處ニ、元親公ノ父覺世對ニ本山一年來遺恨

ノ子細有テ、本山ト弓矢可ニ取起ト一念カケラレ

ケレドモ、長宗我部纔ノ家ナレバ、其計畧ニ佗種々

思案ヲ回シ、先式部少輔ヲ堵ニシテ緣邊ヲ結ビ、連

連本山ノ家ヲ見透シテ手立評定ス、其内雙方雜説

ヲ企テ申犯ス、然ドモイマダ色ニハ出ザリケリ、有

時覺世大津ノ江ヨリ舟ヲ仕立、種崎ノ城ヘ兵糧ヲ

積セラル、處、潮江ヨリ舟ヲ出シ、此兵糧船ヲ切取

タリ、覺世是ヲ序トシテ存分ヲ發シ玉フ、右ノ手立

梅慶父子不レ知由、色々申シ陳ジラルトイヘドモ、

覺世無ニ承引、其ヨリ終ニ不通ニハ成ニケリ、誠ニ

小事ヨリ起リ大事トハ成、是本山ノ家運ノ末トゾ

見ヘシ、斯ル處ニ面白キ傳出來ス、覺世譜代ノ者ニ

福留右馬丞ト云大工有、彼者科有テ、永濱ヘ浪人シ

テ居ケルガ、上手故、城主扶持シテ城門ヲ建、櫓ヲ

立、其外城中ノ作事、悉皆此右馬允ニ任也、有時覺

世此右馬丞致忠節長濱ノ城ヲ取ニオイテハ、可レ被

ニ召歸ト種崎傳ニ慰望セラル、處ニ、大工歸住ヲ

悅テ、早速御請申、城門ノ相鑰ヲ用意シ、種崎ヨリ

人數ヲ繰込、右馬允引入シテ、永祿三年五月廿日

夜、長濱ノ城ヲ取、城主大窪美作ハ木塚ヲサシテ落

退ク、扨本山驚テ、其夜中朝倉ヲ打立、木塚ニテ勢

ヲ揃ヘ、先二千餘騎ニテ、翌十一日辰ノ刻計ニ長濱

ヘ討出、覺世元親公自ニ種崎ニ至ニ御疊瀬、其夜中ニ

被ニ打渡、纔其勢千騎ニハ過ザリケリ、然ル處ニ長

濱ノ城ノ落人四人、浦戸ヘ退ントシテ、江口ヨリ船

ニテ逃處ヲ、高橋三郎左衛門此舟ヲ切取、一人討

留、今三人ハ海ヘ飛入、ソレヨリ山傳ニ浦戸ノ城ヘ

逃籠ル、本山進掛テ、度運寺ノ前ニテ鎗ヲ合スル、

此時ニ江村備後守、一圓但馬、池添源之丞、濱田久

左衛門、一番鎗仕リ、已ノ刻ヨリ午ノ下刻マデ、掛ッ

返シツ討ツウタレツ火花ヲ散シ切戰、終勝負不レ見

處、元親卿五十騎計ニテ懸出シ、敵軍ノ真中ヲ掛

破、旗本ヘ眞黒ニ撞テ掛ル、既敵足本ヲ亂シ、西ノ

廣野ヘ引取、追詰散々ニ討崩ス、池添源之丞ハ、長濱

ノ城主ノ子、大窪勘十郎ヲ討取、濱田久左衛門ハ、宇

賀平之丞ト云モノニ被レ討處ヲ、弟善左衛門馳續、

兄ノ敵宇賀ヲ討取、東四郎衛門ハ、吉良民部ヲ討取、

既本山討負敗軍ス、本ノ塚マデ追詰、究竟ノ武者百

騎餘討捕、然ル處ニ廿八日ノ早朝ニ、從浦戸式部少輔若宮表へ打出合戰ス、元親ノ舍弟左京進自身鎗ヲ初、式部少輔ヲ追立、本ノ塚ノ門際マデ追詰、數人討取、此時本山ガ内井ノ村左介ト云者、左京進ヲ目掛胸板ヲ一鎗突タリ、左京進馬上ニテ打返シ、井ノ村ヲ追詰ラル、處ニ、井ノ村ハ其ヲ逃レ城へ引取、其後若宮へ海際マデ柵ヲ結ヒ、浦戸ノ通路ヲ留ム、五六日モ有テ、覺世如何思モハレケン、若宮ノ持口ヲ口ケ、式部少輔ヲ破レ落、朝倉へ一所ニ引籠ル、扨又大工奎丞ハ、右ノ忠勤ユヘ、豐岡へ被ニ召返、本知ニ加増シテ玉ハル、然ルニ此年ノ夏急病ヲ被レ請、既ニ存命不定ニ成玉フ、及ニ臨終ニ宣フハ、我本山ト弓矢不ニ成就ニシテ相果コト無念至極也、乍レ去一足モ本山分境ヲ蹈越、城ヲ取遂ニ一念、我死後猶可レ無ニ危所、去年戸ノ本ニテノ合戰、元親ノ振舞、武者遣ヒ以下無ニ殘所、本山ノ弓矢全不レ可ニ無事、我軍神ト成可レ守ト遺言アツテ、

永祿三年六月十五日遠行、此時國親五十八歲、元親廿二歲覺世大居士、弘治二丙辰六月十五日、長宗ナリ○今瑞應寺過去帳ニ、瑞應我部宮内少輔泰元國、豐岡北谷葬ト記ス斯而本山方ニハ、此由ヲ聞、競ヲ得、此時思トイヘドモ、近比長濱ノ太

刀風ニ怖レ、其上究竟ノ武士數十人被レ討、家中弱リ、評定區々ニシテ不ニ一決、月日ヲ過ストイヘリ、元親卿ハ、國親死去ノ砌ヲモ不ニ差緩、長濱本ノ荷野二口ヨリノ手遣稠シク、爰カシコ數度ノ合戰ニ討勝、本山居城ノ外、端城十三箇所、三箇年ノ中ニ悉切取、朝倉一城ニ逼ル、二三箇年モシテ終退散シテ、本山へ引取、賣生野ト云切所ニ取籠、川限ニ七年堪タリ、梅慶モ式部少輔モ以前ニ令ニ病卒、息將監兄弟三人有レ之也、サテ又朝倉ノ城落去シテ、二淀川限、元親ノ手ニ入、則舍弟左京進弘岡ノ城ヲ預ル、其ヨリ名字ヲ吉良吉良ハ吾川郡弘岡荒倉山ニ城有、此時本山ノ城ト云、不審、○土佐軍記ニ永祿六年吉良退治有具ニ出ス可ニ考合ト名乗ラル、也、年ナ考フルニ、此年永祿六年ニ當ルカ、次又七箇年日ニ本山入有、川越、無ニ異義、被レ打渡、不移時日賣生野へ取詰メル、將監ハ賣生野ノ谷口ニ要害ヲカマヘ、吉井ト云家老ニ預ケ守ラセラル、然ルニ此口ノ合戰ニ吉井討タレ、元親公此要害ヲ蹈崩シ、賣生野へ責入ル、將監不レ叶終降參ス、元親卿兼テハ可レ被レ捐様ニ宣ヒケルガ、宥免アツテ惣領將監二男内記、三男又四郎、女二人、母儀トモ六人連出シ、知行玉リケルトナリ、

長濱勢思モヨラス所へ夜討ニ入ケレバ、十方ヲ失ヒ追討タル、モノ數ヲ不_レ知、適太刀長刀取人アレドモ、其所ヲ不_レ去討タル、城主玄蕃_{右ニ記ス元親記ニ、討死スル、本山へ歸ル勢纔ニ十四人ト云、宮内少輔本望ヲトゲ、此城ノ掃除シテ、本山攻來ラバ、有無ノ合戦アルベシト覺悟シテ居玉ヘド、一日有テ宮内少輔心地煩玉フ、大病ナレバ豐岡へ歸陣ナリ、此時元親十八歲ニテ長濱ニ在陣ナリ、國親此病氣本復難_レ成事ヲ思テ、元親ニ參ラレヨト云ツカハサレケレバ、元親早速豐岡へ御出アリ、國親御前參玉ヘバ、近習ノ者ニ助ケ起サレテ、元親ニ向テ宣ハク、我死テモ本山ト合戦勝ナルゾ、丈夫ニ心得ラレヨ、又我死後ニ佛事曾テスベカラズ、北谷ニ葬リテ本山退治ノ後吊ヘト宣ヒテ、盃取カハシ、早々戻ラレヨト仰ケレバ、則長濱へ歸陣ナリ、宮内少輔ハ、弘治二年六月十五日逝去有行齡五十四歲也、十六日ノ曉天、國親卒去ト長濱へ告來ル、皆人力ヲ落、サレドモ元親卿十八歲ナレバ、皆安堵スル、元親公秦泉寺豐後守ヲ召テ、宮内少輔殿逝去無_ニ是非事也、近日本山攻來ルベシ、元親敵ニ逢テ鎗突コトヲ不_レ知、如何教ヘヨト宣フ、豐後承テ、敵ノ眼ヲ突}

ト申、元親聞テ敵眼ヲツカレヌ時ハ如何、敵ノ眼ヲ突ト云心持ニテ突ト申ス、大將ハ先ヲ蒐ルカ後ニ居物カト宣ヘバ、豐後承テ、大將ハカ、ラヌモノ逃ヌモノ、此謂_レ有ユヘニ先ヲ蒐ヌモノト申、元親尤ト宣フ、サテ十日計過後ニ、本山長濱ノ城取返ント、其勢千餘騎、サシモ怒レル氣色ニテ押寄ル、元親公城ヨリ十八町出テ、鹽堤ヲ本陣トス、本山千餘騎、二手ニ分テ鎗ヲ入ル、元親公モ二手ニ分テ、一方ハ江村小備後ヲ大將トシ、一方ハ元親旗本ナリ、小備後鎗ヲ入ル、本山鎗ヲ合テ、火花ヲ散シテ攻戰フ、本山大軍ナレバ、江村突立ラレテ敗軍スル、元親公鹽堤ノ上ニテ下知セラ_ル、是ヲ見テ敵二人切テカ、ル、突倒テ後ヘヨリカ、ル敵ヲ、鎗ノ石付ニテ突倒テ、首ヲ取テ捨ル、敵ヲ江村久武桑名秦泉寺百餘騎計リモリ返、是ヲ見テ中ノ内、國吉野中下田七八十騎同ク返テ切テカ、ル、本山勝軍ト心得テ、マバラニ追テ行處ニ、敵二方ヨリ返シケレバ、本山切立ラレ、散々ニ崩ル、式部少輔モリ返シケレドモ、大軍ノ靡キ立タル癖ナレバ、下知ヲモ不_レ聞、一陣破ヌレバ、殘黨不_レ全事ナレバ、朝倉サシテ逃ルヲ、元親公ノ勢潮江マデ追討ニシテ、首百三

十餘討トリ、勝鬨ヲ作リテ引取ル、此時マデハ御舍弟ハ利發、元親公ハ内氣ニテ、長宗我部ノ家ハ嗣レマジキト呟者有シガ、此合戰ヨリ、國侍又一條家ニモ、土佐ノ國ノ出來人哉ト譽ヌ人ナシ、

秦泉寺合戰ノ事土佐軍記元親記ニ不記之無所考

本山和陸附大平退事土佐軍記

土佐郡本山ハ、先年長濱合戰ノ後中違テ、元親卿姉君ト狀通モナシ、元親公今ハ多勢ニナレバ、本山ヲ追出サント、其勢千餘騎、永祿五年四月中旬、朝倉ヘ押寄テ鬨ヲ上ル、大手ノ門マデ攻ヨスル、本山式部千餘騎ニテ防ギ戰フ、本山衆六七十騎門脇ニテ討死ス、元親卿ツバヒテ攻不レ給、頓テ引取陣ヲ取テヲワス、一兩日有テ執行加賀守ヲ使トシテ宣フハ、式部少輔ハ我姉賀ナリ、殊ニ子供モ有ナレバ、更ニ無遺恨ニ式部少輔ニ家督ヲ渡シテ、親父隱居アラバ、元親和陸セント被ニ申遣ケレバ、本山敵對シテ不レ叶ト思案シテ許諾シ、向後元親公ヲ奉レ賴、式部少輔ニ名跡ヲ續テ玉ハラバ、今日ヨリ居城ヲ渡シ隱居セント返答シテ、和睦調テ、式部少輔ニ城ヲ渡シ、其身法體シテ宗玄梅慶也、宗玄ニ作ルハ非也、又元親記ニ曰、朝倉ノ城ヲ退テ、本山ヘ引取、寶生野ニ取籠、七年堪タリ、其中ニ梅慶モ式部モ病死、息將監兄弟三

人籠城、終降參、嫡子將監、二男内記、三男又六云々、上ニ見ヘタリ、下略、ニ一味シテ、旗本ニツナヘラレケル、郡侍波川、三ノ宮能津、箇様ノ城持小身ノ侍マデ、人質出シテ被官トナル、彌多勢ニ成玉ヒテ、此郡大平ヲ退治セント勢揃シテ、二千餘騎ニテ取蒐ル、大平四千貫ノ主ナレバ、千餘騎ニテ防ギ戰、武勇日ノ出ノ元親ナレバ、大平家老マデ武勇怯フシテ、身命ヲ捨働者モナシ、大平齟ヲナセドモ、下知ニ不レ順、前後ノ敵ニアタリ、押立ケレドモ、波川執行一番ニ返シテ鎗ヲ合スル、大平ガ兵四五十騎討レテ引退ク、郡侍、片岡、森、中村ナド、元親公ヘ内通シテ、山陣ヲ取見合テ居タリ、中ニモ片岡ハ大身ニテ、多勢ノ人ナレバ、大平一方ノ大將ト賴シ人合戰セデ居ヌレバ、大平力盡、或夜忍シデ阿州ヘ落タリ、吾川郡手ニ入テ、是年ヨリ思立、土佐ノ守護ヲ滅ス謀略ヲ廻サレケル、

吉良退治ノ事土佐軍記

土佐郡吉良駿河守ハ、五千貫ノ主也、元親公永祿六年三月中旬ニ、二千餘騎ニテ取蒐ル、元親記ニ、此時本山式部少輔ハ、弘岡浦戸兩城ヲ掛テ持ト有、恐クハ誤也、秦氏系圖曰、覺世ノ嫡女吉良ト有、吉良千餘騎、谷一類、大黒、楠村ナド、云兵先トシテ、城下戸ノ木ト云所ヘ出テ備

ヲ立ル、元親卿左京進殿ヲ先手ニテ押寄ル、鐵炮軍始
リ、互ニ鎗ヲ入ントスレドモ、兩勢鏖ヲ傾テ膝ノ上ニ
鎗ヲ置テ睨ミ合、鎗入兼スルヲ、親貞一番ニ鎗ヲ入
ル、光富權之介並ニ濱田善右衛門同鎗ヲ入、敵モ立上
リ鎗ヲ合ル、互ニ押ツ押レツ一時計捫合フ、吉良衆突
立ラレテ、谷一類數度モリ返ス、元親自身鎗ヲ突、旗本
ノ内、桑名、江村、波川、粉骨ヲ盡ス、此三人ニ突立ラ
レテ、敗軍スル敵ヲ城ヘ追込テ、本陣ヘ引取、元親侍
歷々手負有、後マデモ戸ノ木一番左京進ト譽ル、二度
目ノ合戰ニ、谷ノ一類大谷其外討死スル、吉良ハ終ニ
打負、讃州ヘ落去セラル、此郡侍、大高、坂、國澤、吉松、
大黒、谷、横山、稻毛等ノ城持皆降參シテ家老トナル
モ有、又吉良ノ城ヘハ、左京進入城有ユヘ、左京進ニ附
ラル、モ有、抑此吉良氏ト云ハ、賴朝卿ノ弟、希義ノ末
葉ナレバ、此名跡ヲ潰スニ非トテ、左京進ヲ吉良ト改
ム、即吉良左京進親貞是也、彼希義、東鑑ニ曰、賴朝卿
之弟希義、永曆元年依ニ故左典廐、緣坐、配ニ流于土佐國
介良庄、治承之年賴朝卿東國舉ニ義兵、之間、弟希義
可レ討、小松内府家人、蓮池權頭家綱、平田太郎俊遠被ニ
仰付、兩人欲レ討ニ希義、希義日來與ニ夜須七郎行家依

レ有ニ約諾之旨、落ニ介良庄、行ニ夜須庄、此時家綱、俊遠
追掛吾川郡、按ニ、長岡郡カ、年越山、今坂折ノ北山ノ端ニ、年越明神有レ是、追付、希義
討取、夜須七郎者、蓮池平田等希義可レ討企聞、一族同
心馳向所、野々宮、今ニ香我美郡野市村ノ北ニ野々宮有、之邊而希義被レ討給
聞、空歸ト有、此希義土佐ニテ一子ヲ生ム、夜須七郎
此子ヲ養育シテ、其身器用人ナレバ、賴朝ヘ言上シテ、
鎌倉ヘ呼下シテ、其後土佐ニテ三千貫ヲ下サレ、吉良
ト云、又夜須七郎奇特ニ守立タルトテ、是モ千貫ノ地
ヲ給ハル、此吉良八郎ヨリ十八代ト語リ傳、

香宗我部和睦之事土佐軍記

香美郡香宗我部景好ハ、四千貫之主ニテ、此郡主也、元
親弓矢日ノ出ナルヲ見、姬倉玄蕃頭ヲ以、息女一人持
テ男子ナシ、元親ノ舍弟左近太夫ヲ給ラバ、養子増
トシテ家ヲ渡、景好ハ隱居仕度ト仰ケル、元親公悅
テ、則此事調テ、左近太夫殿香宗我部ヘ入城有リ、香
宗我部左近太夫親泰是也、是ハ鎌倉權五郎景政ノ藥
葉ナリ、

此香宗家ヲ權五郎ガ末ト云ハ不知ノ者ノスル所ニ
テ、甚ワケモナキコト也、香宗我部氏ハ、多田滿仲ヨ
リ四代源賴信、賴信ノ三男新羅三郎義光ノ孫、武田

太郎信義ノ末、甲斐國武田氏族、鎌倉將軍ノ時代、土州香美郡ヲ給リ、當國ニ移リ、大忍郷香宗土居村ニ居城シテ世々住ス、既ニ足利將軍元弘年中、長宗我部新左衛門ヘノ狀中ニ、甲斐孫四入道ト有、是香宗我部員通入道性海也、蠹簡集、又延德年中香宗我部出羽守源親秀書、西寺ニ有トカシ、又香宗寶鏡寺境内ニ墓有、其銘六孫王經基——ト有、旁無紛、清和源氏ノ末流明白也、予良爲、今案ニ、元親ノ次男五郎次郎、讃州香川ノ家ヘ養子壻トナル、此香川家鎌倉權五郎景政ガ末也ト云、恐ハ此家ノ事ニシテ、傳聞ノ誤ナルベシ、

香宗我部家紋四ツ割ノ放レ菱是也、此紋昔ヨリ佗ニ不_レ用、甲州武田家ニ限_ル紋ナリ、故ニ稱ニ於天下ニ而武田菱ト云、サレドモ今田夫賤士適此紋ヲ付ルモノ有_レ是、全ク不_レ辨ノ者也、張ニ佗姓ノ紋ヲ付ルコトナカレ、如今武鑑ヲ考_ルニ、如_レ此佗姓ニ不_レ見_ル所_レ用、又今土居村立仙宮ノ紋、昔ヨリノ割菱有、又當國中山氏有、是香宗我部ノ氏族也、

安喜退治ノ事土佐軍記

安喜郡安喜修理大夫元親記、安喜城土山城守ト有、ト云ハ、五千貫ノ主也、七人ノ守護ノ内ナリ、此居城ヨリ豐岡ヘ道程五六里也、其比安喜ハ一條殿ト縁者ナレバ、五日路隔タル

一條殿ヨリ加勢ヲ乞テ、豐岡ヘ取蒐ル、先ニ發スル者ハ則人ヲ制シ、後レテ舉スルモノ人ニ制セラル、ト云文有、自_レ此取蒐ルヨトテ、一條殿ヨリ加勢三千玉テ、手勢三千餘騎、合テ六千餘騎ニテ、永祿八年元親永祿三年ノ合戰ト有、八月中旬ニ、豐岡ヘ取蒐、坂中ヘ攻上ルヲ、元親ノ士、桑名、久武、中ノ内、江村、其外吉良、香宗我部、坂中ヘ下リ合、鎗ヲ合スル、火花ヲ散シテ防戰フ、安喜大軍ナレバ突立ラレ、城中ヘ取込テ、安喜切岸堺際ヘ詰寄テ、堀越ニ鎗ヲ合ス、元親公鐵炮キビシク打カクレバ、手負死人彌ガ上ニ重リ伏タリ、桑名、久武、江村、突テ出ト申セバ、時分早シト制シ玉フ、安喜家老、平野矢之介ト云剛者、安喜ヲ諫テ云、今日城ヘ乗セ玉ヘ、手負モ有ベク候ヘドモ、味方進ナレバ、此競ヲ拔シテハ敗軍タルベシト申セバ、安喜聞テ、人ヲモ不_レ殺長宗我部ヲ手虜ニセン、今一兩日ノ中ゾト仰ケレバ、平野涙ヲ流シテ、平ニ御乘アレト申セドモ、運ノ末トコソウタテケレ、一向進マレズ、又元親ハ自身突テ出ベキト日ノ暮ヲ待所ニ、天運ニヤ、安喜裏崩シテ、右往左往ニ敗軍スル、元親城門ヲ開キ打テ出、関ヲ咄ト上テ突テカ、ル、大軍ノ靡立タル曲ナレバ、反ス兵一

人モナク崩ル、城下ニ香我美野^{香我美都、今ノ野市村ヲ香我美野ト云、豐岡ノ城下、香我美野ノトテ、三里野邊有、豐岡城下三里ノ野邊不審、夜ニ入此野邊ヲコト不審}安喜退ヲ、附慕テ追討ニスル、元親團扇ヲ取、福富隼人^{後飛驒ト云}、熊谷源介^{後伊豆ト云}、二人ニ、是程ノ大崩ナレバ、荒切シテ通レ、小切ハ若者ニサセヨト宣ヘバ、福富廿人、熊谷十八人切ニケリ、此言葉後々土佐ニテ沙汰スル、首數九百餘取ト記シケル、^{以上安喜ヨリ豐岡へ攻來レコト元親記ニ不レ記此條不審、}扱四五日有テ、元親公此競ヲ拔サズ、安喜居城へ取蒐ル、

元親記ニ云、安喜城主山城守ハ、一節可レ致ニ降參ニ者、親泰傳ニ申通ナルガ、其筈令ニ違却ニ之條、彼地可レ令ニ發向ニトテ、永祿十三年秋打立、先和食ニテ勢揃、人數ヲ二手ニ分、安喜ノ後山へ回シ、元親卿ハ濱ノ手也、安喜ヨリ新城穴内兩城ヲ道口ノ押ニ持、斯カル處ニ、敵矢流山マデ取出合戰ス、則被ニ追立ニ右兩城へ北籠者モアリ、又安喜へ引取者モ有、此時二階孫左衛門十七歳ニテ、穴内ノ城外木戸口ニテ、有澤ト云者ト鎗ヲ合、有澤ヲ討取、若年ノ手柄トテ、感狀ヲ玉ハル、則時ニ新庄穴内ヲ切崩シテ、安喜へ押入、西濱ヨリ焼立、安喜ハ一合戰スベ

キト催シケレドモ、早矢流山ニテノ太刀風ニヲソレ、其上山ノ手ヨリハ、城ノ後へ回り焼立、追手搦手稠敷攻ラレケレバ、城ヲ離レ一足モ出ルコト不レ成、敵ヒシト取卷攻ル、如レ此二十四日シテ、終落城シテ、城主切腹ス、又七日過而黑岩ト云侍追腹切ト云、此競ヲ以、東灘奈半利ノ後山、北川成願寺、其ヨリ奥マデ悉降參ス、奈半利ノ城桑名丹後、安喜ノ城香宗我部親泰へ預ラレ歸陣也、

兩舍弟勢合テ三千餘騎ニテ押寄ル、安喜二千騎ニテ城ヨリ廿町出テ、矢流ト云所ニテ、敵ヲ防クニヨキ地トテ備ヲ立ル、是ヲ香宗我部八百餘騎ニテ突テカ、ル、吉良千餘騎二陣ニ進ム、元親公旗本千餘騎、関ヲ上テ切テカ、ル、安喜衆二手ニ分ル、平野矢之介北川千餘騎、安喜旗本千餘騎、自身鎗ヲ入、火花ヲ散テ攻戰フ、元親ノ先手、田中新右衛門、福富隼人、一ノ宮神主飛驒守、先ヲカケテ鎗ヲ合スル、安喜ノ内北村ト名乗テ、飛驒守ニ渡合、飛驒ハ長刀、北村ハ太刀ニテ切合、飛驒守左ノ手ヨリ鼻ヲカケテ筋違ニ切ラレナガラ、長刀ヲ取ノベ北村ヲ突倒首ヲ取、北村ト云剛兵一方ノ組頭討死スレバ、此手ノ人々騒立ツ、サレドモ

平野矢之介モリ返シ、切テカ、リ突立ル、田中、福富
蹈留テ鎗ヲ合、鎗二本ニテ平野ヲ突殺ス、是ヲ見テ安
喜衆敗軍シテ、城マデ一里ノ内、三百餘騎討死ス、是ヲ
矢流崩ト云、安喜城ヘ引取ル、元親公晝夜三十日攻
戰、一條殿ヨリ加勢モナク、兵糧モ盡ケレバ、或夜安喜
百騎計リニテ阿波ヘ退キ給フ、元親記、城主切腹ト有夜明テ城ヘ
乘入見レバ、兵一人モナシ、自レ是此郡手ニ入テ城持、
北川、室津、横山、和食、奈半利、有井、北村、人質出シテ
降參、此城ヘ香宗我部入城シテ、香宗我部本領ハ子息
ヘ渡ス、今度合戰、高名ノ感狀玉ハル衆多シ、

蓮池ノ城乗取事元親記津野城攻ノ所ニ出ス

佐竹陣ノコト右同斷

久禮城主佐竹信濃守領ヘ落出立事右同斷附信

濃降參并狂歌ノ事

一宮建立ノ事右同斷

相撲ノ事同斷

羽根ニテ鎗ノ事附崎濱入ノ事同斷

野根落城事土佐軍記

安喜郡野根ト云在所、先年ヨリ給人ヲ野根七郎ト云、
土佐國ノ中ナレドモ、野根山トテ、十里ノ大山ヲ隔テ、

阿波ノ海部宗食ヘツバイタル所ナリ、此野根難所ヲ
頼ミ、又阿波ヘ近キニヨリ、元親ヘ降參セザルニヨリ
テ、元親ヨリ付城ヲコシラヘ、香宗我部ヘ城番ヲ被ニ申
付、是ハ多勢押込ベキ様ナケレバ、人數六七百遣シ
テ、年々取合退屈セバ降參スベシ、サモアラバ許シ玉
ハントノ事也、三四年過テ、敵モ心安ク思ヒテ、野根ノ
町七月十二日ヨリ躍ヲ始テ、男女ノ聲ニテ毎夜躍ル
音聞ユ、附城ノ番ノ内、西ノ内喜兵衛ト云若者、傍輩ニ
申様、本城ノ内番衆大勢町ヘ出テ躍音聞エタリ、此躍
衆ニ紛テ城内ヘ忍ビ入、様子ヲ見ルベシ、皆々ハ躍見
ズトモ寢ント云、喜兵衛又申ハ、城内様子ニヨリテ火
ヲツケベシ、火ノ手上ラバ乘入レト云、傍輩ヨモユカ
ジト思テ笑居タリ、喜兵衛一人躍所ヘ行テ見レバ、城
番衆ト見ヘテ、長キ刀ニ包面シテ躍ナリ、サテ喜兵衛
城内ヘ忍入テミレバ、門モ明テ城ハ順番持ナル故、女
以下マデ一人モ居ズ、留守番四人、門櫓東ノ戸ヲ明テ
敷居ヲ枕トシテ、月ノ夜ニ竝伏タリ、喜兵衛立寄テ、
四人トモ起シモ立ズ切殺ス、サテ城ニ火ヲ掛テ焼立
ル、一人シテスルトハ敵モ思ヨラズ山ノ手ヨリ香宗
我部衆大勢忍入テ、乗取タルト心得テ、野根七郎ヲ

始、下々町人マデモ、阿波、海部、肉食へ逃散ル、香宗我部衆燒ルヲ見テ、俄ニ取合テ掛付、少々追討ニスル、喜兵衛志深ク、十八歳ニテ野根ノ城ヲ乗取ル、是併元親武勇盛ナルユへ、箇様ノ名譽ノ侍出來タルト、諸人申アヘリ、

元親記ニ云、奈半利城主桑名丹後、以ニ調畧ニ野根山ヲ越、本ノ掛取ニ仕タリ、七月ノ事ナルニ、野根ノ城主ハ、其夜麓ニテ、踊ヲ躍ラセテ見物シテ居タル留守へ、西内喜兵衛一番ニ忍ビ入處ニ、門番唯一人老人ノ聲ニテ打囀テ居ル、爰アケヨト呼所ニ、主ノ歸リタルトテ、門ヲ開テ入タリ、其男ヲバ案内間シタメ生捕テ置扱、西ノ内喜兵衛ハ、留守居ノ侍三人討取、則鐵炮三十計續ケ放シテ、時ヲ咄ト上ル、其聲ヲ城主ハ麓中ニテ聞、甲浦サシテ逃退ク、則翌日甲浦へ押寄ル處、甲浦ノ者モ皆聞落ニ仕タリ、扱甲浦ノ城ヲ普請シテ、丹後將監城ヲ預ル、阿州へ逃タル町人ドモ皆歸住ス、此度ニテ一國無ニ殘所ニ相濟也、

夢合ノ事元親記

津野城攻ノ事土佐軍記

高岡郡津野大膳太夫

姓ハ藤原氏、天兒居根之苗裔、大織官鎌足ノ子、仲平之末葉也、高岡西郡牛山郷姫ノ

野ト云所ニ居城有、者、五千貫ノ主也、元親公五千餘騎ニテ取菟攻玉フ、此由聞テ一條殿へ加勢ヲ乞ケレバ、一條殿家老ヲ召テ評定セラル、土居ガ云、元親弓箭日ノ出ニテ、土佐七郡之内既ニ五郡之取タリ、津野家果タラバ、當家之御大事不_レ可_レ過_レ之、急ギ御加勢アレ、評定ニ不_レ及ト申ケレバ、孰茂一同シテ三千餘騎加勢有、扱二淀川トテ大河有、船渡ノ所也、此河端ニ、蓮池トテ古城アリ、此城ニ一條殿ノ加勢ヲ入置玉フ、是ヨリ津野居城へ十八町也、津野居城ハ、當郡ノ西部ニテ、牛山村ニ有、蓮池ヨリ七八里之所也、不審、此加勢年替リニ詰ル、替ル時、元親衆ト道ニテ數度セリ合有、サレドモ押ヘキカスルコトナク、三四年大河ヲ堺ニ攻戰フ、元親公ノ方ヨリ付城ヲシテ人數ヲ入置給フ、是モ年替リニ詰ル、一條殿御居城ヨリ三日路ノ所ナリ、當年ノ番衆ノ内、土居孫太郎後肥前ト云、十九歳ノ時、此城下ニ妙連寺ト云寺アリ、此住持へ參テ常々物語スル、或時孫太郎本卦ヲアツラヘル、其僧申ヲ聞バ、大河ヲ渡リ行所ニ利有ト讀タリ、孫太郎心中ニ、此河土佐第一ノ大河也、本卦ニ任セテ謀叛ヲ企、元親へ忠節シテ、立身スベキト思案シテ、川原ニテ鵲鴿ト云鳥ヲ射取ントテ、此河ノ上下ヲ歩ミ、川越ニ元親公ノ方へ箭文ヲ

射ル、傍輩此志有コトヲ知ズ、——土佐軍記此段ヲ用ル、下略、

蓮池之城爲レ取事元親記

此城ハ幡多——可レ記レ之、

一條殿落去ノ事土佐軍記

幡多郡一條殿、年比土佐國侍ヲ幕下ニ屬シ、此一條殿御前ニテ、諸士元服セラル、先祖房家公ヨリ四代、春秋七十餘年、國司ニ備給テ、當年天正元年、今按ニ元覽曰、文明二寅年、房家土佐國ニ下ルト有、天正元西ノ年マデ一百四年ニ成、七十四年トスル不審、清書ニ用、

幡多落去之事元親記

一條殿ハ——

元親言行土佐軍記

一元親男子五人、女子五人、

一嫡男彌三郎信親、豐後大方郡戸次川ニテ、嶋津ト

合戰シテ、天正十四年十二月十二日討死、女子一

人、舍弟盛親ノ内室也、

一次男香川五郎次郎、讃州香川氏之養子、後病死、

此香川家ハ、鎌倉景政ガ末ト云、

一三男津野孫次郎親忠、慶長五、關ケ原亂後、舍弟爲ニ盛親ニ被レ殺、

一四男右衛門太郎後式部大輔、盛親、大坂落城ノ後生捕ト又土佐守、成、於ニ京都ニ被レ殺、右四人ノ母、齋藤内藏佐妹也、

一五男右近大夫加藤肥後守元親ト知音故、肥後ニ在、盛親之弟タルノ條、盛親滅後於ニ伏見ニ切腹、

此母ハ小少將ト云、

一女子内政公ノ簾中也、男子一人有、内政土佐ヲ被ニ追出ニテ後、若君ヲバ久禮田定祐ニ預テ守護ス、秦氏沒落後、京ノ一條殿ヲ賴テ御座有トゾ、

一女子ニ吉良左京進親實ノ内室、親實切腹後病死、

一女子ニ佐竹藏人内室也、男子二人アリ、

一女子ニ吉松十右衛門内室也、男子一人有、

右四人之母、齋藤内藏之介妹ナリ、

一女子五小宰相殿、是ハ右近太夫ト同母也、元親存生ノ内幼少也、

織田信長公江使之事土佐軍記

可レ用、元親記冊七

家康公江入魂ノ事同書

宇喜多直家江入魂ノ事同書

吉良左京進親貞病死ノ事同書

嶋彌九郎親房合戰討死事 同書

元親公郡廻ノ事 同書

右上卷

夢合ノ事二十丁
阿波入最初ノ事并——二十一丁

自是中

阿州海部落去事 土佐軍記

牟岐城落去事 右同書

元親記ニ云、牟岐城主新階道前ハ、親泰才覺ヲ以、人質出シテ降參、一ノ宮蠻山ノ城モ、道前降參ヲ聞テ、是モ人質出シテ降參、其後道前一ノ宮ノ城主ハ、心替リシテ腹ヲ切ラセ、牟岐ノ城、親泰一ノ宮江村孫右衛門、蠻山小村石齋ニ預ケラル、

此間モ元親記ニ

當國波川謀叛ノ事三十五丁 阿州大西器用降

參事廿四丁 大津ノ一條殿ニ趣事 三十六丁

同器用心かわりの事 嘉例文句ノ事廿六丁

大西陣ノ事廿五丁

東條井城々一味ノ事 土佐軍記

元親記ニ曰、桑野^{土佐軍記}、城主東條關兵衛降參故、元親公ヨリ桑野ノ城ヘ、中ノ内兵庫ヲ大將ニテ、加番指コメラル、牟岐城主新階道前、此城ヘ加番ノ有コトヲ不^レ知シテ押寄ル所、加番ノ士、中ノ内兵庫、岡上彦之丞、森田兵左衛門、宇賀孫右衛門、一番鎗ヲ入、道善敗軍、

右道善、既ニ前條牟岐落去ノ事ニ出ルニ付略ス、可考、

重清岩倉城落去ノ事 土佐

元親記曰、右翌年ニ大西ノ下郡ヘ被^ニ打出、三好モ重清マデ打出、川越ニ合戰、大西上野、久武内藏、先陣シテ川ヲ渡シ戰トイヘドモ、猛勢ニ被^ニ切立、重清ノ城ヘモ不^レ入、下郡サシテ敗軍ス、スグニ重清ノ城モ責崩シ、此競ニ岩倉表ヘ攻カ、ル處、岩倉城主式部少輔^{土佐軍記、岩倉兵衛作、}實子ヲ人質ニ出シ降參ス、此度ニテ上二郡手ニ入ト有、

三好衆放火軍評定ノ事 土佐

中富川合戰之事

北伊與二郡之侍共降參ノ事元親記廿六

嘉例文句ノ事土佐軍記二

久武內藏介討死ノ事付——事元親記廿七丁

^土讚岐出陣事

^土藤目城主青野事

元親記曰、藤目城主齋藤下總守ハ、土佐軍記、青野重行

作、上野守依レ爲ニ縁者ハ、上野以ニ肝煎ニ致ニ

降參、則孫ヲ人質ニ出ス、是讚州ニテ一番

ニ手ニ入所ナリ、然ルニ三好阿讃兩國ヲ

催シテ、此藤目ノ城ヘ可ニ取掛ノ由注進

アルニ付、則爲ニ加番桑名太郎右衛門ヲ

差向、追々後卷ノ手立有レ之、人數五百被ニ

差遣所ニ、ハヤ落城シテ、皆大西ヘシリ

ゾケリ、

同記、藤目ノ城取返ス事、三好藤目ノ城ヲ

攻ノ時、後詰ノ人數遲滯故、早速ニ取返

事、外聞遺恨ノ次第トテ、同年ノ三月打立

テ、城下ヘ取詰メ、曳々聲ヲ出シ責登リ、

終ニ責落ス、元親公此度打死ノ侍共弔ノ

タメニトテ、大西ヨリ貴僧ヲ被レ召、米澤

山ニ遣シ供養セラレ、サテ此城ヘハ、以前

ノ下總ヲ被レ入テ歸陣タリ、

^元阿州岩倉合戰ノ事元親記二十九

^土香川和陸ノ事——此香川家ハ平姓ニテ、鎌倉

^{三十二}元親記、香川殿降參并縁邊取組ノ事ニ曰、

^土元親公息達其外家中侍之子共、元親記卅二

財田退治并降參ノ衆ノ事

^土元親記、讚州羽床陣ノ事ニ曰、——、

伊豫働事

^土元親記曰、北伊與二郡ノ侍降參ノ事ニ云、

豫州北川陣ノ事

^{卅丁}元親記、當國波川陣取ノ事ニ曰、

同書、豫州北川陣事ニ云、

元親記、大津城ニ御座有シ一條殿ニ趣ノ事

卅七丁

河野合戰ノ事

久武伊豫出陣討死

元親記廿七丁

同 阿州三好合戰ノ事三十九丁

阿州岩倉城攻事四十三丁

同 岩倉落去以後 事四十四丁

同 讃州引田ニテ仙石肥前ト合戦ノ事四十五丁

同 淡州湊本城爲取事四十七丁

同 太閤様へ三河御陣ノ跡へ——事四十七丁ウ

同 豫州美間陣ノ事四十八丁ウ

豫州 北ノ川退治付 黒瀬退治ノ事

高森城攻ノ事

御庄井 城々降参ノ事

自是下目錄

秀吉四國退治ノ事

元親記 太閤様へ降参ノ事五十丁

四國御仕置ノ事

元親記 太閤様へ降参以後ノ事五十四

元親上洛ノ事

元親記 初而上洛ノ事五十三丁

同 二度目上洛ノ事

同 大佛殿御材木ノ事五十六丁

戸次川合戦事

元親記 豊後陣ノ事五十六丁

元親記 元親公昇殿ノ事

元親記 鮫進上ノ事六十丁

京陣ノ事

親實切腹ノ事

大地震付 御成ノ事

元親記 聚樂ニテ書院中ノ事六十二丁

同 高麗陣ノ事六十二丁

土佐寄船ノ事

元親記 浦戸湊へ黒船入事六十四丁

同 高麗西國陣ノ事六十五丁

同 於伏見御成ノ事六十七丁

右元親記終

秀吉御薨逝付 元親病死事

盛親改易付 最期ノ事

寶鏡寺建立勸化牒

夫本州香我美郡香宗土居村龍珠山寶鏡禪寺開基乃由緒を原るに、世々香宗郷の領主は、清和源氏甲州武田の氏族香宗我部なりしが、出羽守親秀に至り、家運衰へければ、戰國の倣にて、時勢を謀り、長宗我部秦國親乃三男にして、元親の舍弟たりし親泰を養子として、家を譲り、其身は中山田に隱居し、後年甥乃親吉に中山田の家を與へ、親吉は左衛門佐と稱せし也、扨親泰主は、左近太夫と稱し、秦元親四國を掌握にし、武威盛なりし頃は、安喜の土居に住し、安藝守と稱す、其知行の地、東北は槇山、西北は本山、南は海濱を限り、其餘、吾川安喜兩郡の内、都合萬貫餘也、萬貫と云ふ田三拾石餘、地に於て、三萬三千三百三拾石餘、終に文祿二年癸巳十二月に卒去せられ、今茲乙巳に至て百九十九年に成る、親泰主の嫡男親氏主は、彌七郎と稱し、文祿元年壬辰、秦元親に従ひ、朝鮮に在陣、同年十一月、彼國にて病卒せられ、香宗に新寺を建立し、月溪山芳心院と號し、親氏主乃法名、月溪芳心と稱す、菩提を弔はれけるが、已後、江之口に移る、尤卒去の頃より、靈牌を寶鏡寺にも安置せられ、今猶親泰主と同じ

祭奠す、親泰主卒去の前年ゆへ、百九十四年に成れり、親泰主の二男親和は、右衛門八と稱し、幼稚にして親泰主の家督を相續せられけるが、慶長五年の冬、秦盛親本國を退られし時、親和を十歳にて他國に退られ、成長乃後、肥前の國唐津乃城主寺澤侯に仕へ、五百石を領す、寺澤乃家滅びて後、堀田侯に仕へ、貳千石餘を領す、香宗我部左近貞親と革め、萬治三年庚子、總州佐倉の城下に於て、七十歳にて病卒せらるゝとかや、開基大檀那乃家全盛の時は、寶鏡寺も若干寺領有り、一方の伽藍にて、和尚の位階に昇りし僧住職せし法地なりしが、奈何せん世に隨ひて衰微せり、慶長六年乃春、一豐公、御入國の砌、寶鏡寺の由緒を聞召せられ、寺領山林等寄附せしめ給ふ、夫より程經て、再建の寺も、亦殆百年に垂として、大破に及びぬ、拙僧も去年辰の秋入院せしかども、件の形勢を見ては、時乃職分に當て、暫くも安堵を爲さず、故に默止がたくて、建營を存立けるが、素より自力に叶ふべき事ならねば、檀中檀縁乃衆は勿論、同郷同村に住居の人々を遍く勸進せんと欲す、時節柄一統乃不如意は顯然たりといへども、御精力を出されて、信施し給ふならば、速に成就に至ら

ん、而ふして、新建の精舎に於て、常々祈禱をも勤修し、且又開基兩主二百回乃遠忌、近年の中に當り給ふなれば、此法會をも執行せん、左有らば、舊領主の尊靈を感應まし、諸佛菩薩、諸天善神も、増守護し給ひて、大小乃施主、家運長久、如意安全ならん、惣而世俗よりの財施、佛道よりの法施、此ニツハ等じて、互に其功德乃深き事、佛經に詳なれども、茲には略して載せず、只當寺由緒の大率と、今般志願の趣意を記す而已、敬白、

天明五乙巳年二月吉祥日

寶鏡寺現住侶泰圓

崇印文
泰圓
字

寶鏡寺追遠記

維時天保壬寅冬某月某日、於香宗郷土居村寶鏡寺、
弔香宗我部瑞松公二百五十年之遠忌、而以_ニ其嫡淨
德公附祭焉、按系譜、其先出_ニ於甲斐武田氏、始祖諱
時秋養_ニ于中原秋家、而仕_ニ鎌倉、以_ニ土佐國香我美郡
宗我部深淵二邑_ニ爲_ニ采地、世々相承、至_ニ出羽守君諱
親秀、而嗣子幼孩、養_ニ長宗我部雲蹊公弟諱親泰_ニ爲
嗣、以_ニ長女配_ニ之、即瑞松公也、而自退居_ニ于中山
田_ニ因氏焉、其幼子諱泰吉、稱_ニ左衛門佐、繼_ニ中山田氏、
方雪蹊公武威日張、并吞四州、其勢將元原瑞松公頗
有_ニ勇功、故徙_ニ安喜土居、稱_ニ安喜守、所領倍_ニ崔舊時、
其嫡彌七郎君諱親氏、文祿元年壬辰、屬_ニ雪蹊公_ニ如_ニ
朝鮮、遂歿_ニ于彼國、此爲_ニ淨德公、以_ニ其死_ニ于外國
也、瑞松公特悲_ニ哀之、建_ニ寺於香宗郷、號_ニ月溪山芳心
院_ニ以祭焉、今移在_ニ瑞應寺傍_ニ也、其翌年癸巳、瑞松公
亦病卒_ニ于家、於_ニ是次男右衛門君諱親和繼_ニ家、慶長
中、長宗我部氏、有_ニ故國除、因_ニ是右衛門君亦攜_ニ家寶
與_ニ親臣某々_ニ往_ニ他邦_ニ、遊_ニ筑紫_ニ事_ニ寺澤侯、秩五百
石、寛永中、天草賊起、寺澤侯遂故滅亡、後亦往_ニ東國_ニ

流寓時、堀田侯以賓客待之、餽以千有餘石、乃委贊至今、屬籍不絕、且親臣五人受別俸、各成家云、然而中山田氏之後、分爲數家、慶長年中、我大通公受封於土佐之後、以名家子孫所收用、或加士籍、或成鄉士莊官、其家仍以中山爲氏焉、其臣隸起家在城市者不少、而事農商家舊里者、亦有數十家焉、是以寺主貫公、欲盛追遠之儀也、與其遠裔及臣隸之家相謀、且告之佐倉藩香宗我部氏、卜月日行祀典、增益先規、以隆盛其儀節、可謂盡臣子之忠孝矣、其後嘉永壬子冬、寺主貫公、瓢然負笈東海、至下總國佐倉藩、面謁香宗我部隼人君、而得閱其家所藏將家顯官之文書焉、上自源二位下文、下至神祖教書及井伊本多兩侯書、總計六十封、今現在焉、堀田侯甚愛之、恐回祿災也、藏之傑閣、別寫其文字副本、以置公家及私家、若有佳賓、請其真蹟、則出自閣上示之耳、貫公淹留之間、談及往歲追遠之儀各相謀隆盛之事、隼人君不堪感喜、曰、卽今對寺主、優然如見祖先在其位矣、及其辭去、頒賜家寶二、曰、欲永傳其寺也、其一以蜀紅錦、韜之三箇盃也、此則雪蹊公全盛之時、當朝天子

所賜、而鳩酸艸現出於其中、以爲祥瑞、故今畫其花於盃中者也、及卷物一軸也、寺主大喜齋歸以永爲寺寶焉、於戲、名閥之家、自天祐之如此、雖假令去其國、然祖廟乃有寺主及子孫臣隸猶存、而保護之、不廢其祭祀、以報其本也深矣、豈可不謂忠臣孝子乎哉、曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣、其此之謂乎、

竹村修謹撰

五之

本山防藩、鳴瀧月光山關雲禪寺輪住、距今二十一年、天保甲午、卅七世故大休叟、職務既允焉、爾來復訂、來々歲丙辰、辱拜請牘、併以遺例之嚴、不可下以不敏辭也、若夫日時、佛供常恒、僧齋爭得一鉢所乞能給之乎、因淑舊典、募配未之福緣、而敢權任挂錫、僅免譴責而已、亦知連年屬歲險且夷防、治費、乃檀越施財豈餘錙銖乎、然則喻誘勸頗煩、佗力、又可想也、剛舉甲午、再度金數分署之爾、伏惟鳴瀧滋潤、萬松本枝益茂、本藩補目、萬松山豫兵寺者、我寺統所繫、洞上風下掃、兇邪、倏忽令秋告豐、黎庶唱昇平、卽酬思效績、茲芻所宣分去聲、請納察、

雪心花押

瑞應現住元明和尚

寶鏡寺大鐘銘

奉寄附洪鐘一口、仰冀

當山大開基前太守甲斐左京亮 從五位下金波海公大
禪定門、及其累代諸尊靈、乃至先亡久遠、山川地主曠
野諸鬼神等、乘此音聞、永證得無上菩提、

茲歲癸丑冬、當山主藏峯和尚興行結制大會、余繇錄
刹命、來而宣宗門之規矩、暨點檢安居僧員、因和
尚請、余云、鑄洪鐘、既就、蓋爲之銘、明也與、和
尚、夙爲莫逆交、劣亦不獲以辭、乃爲銘、

曰源氏開闢 于府城東 寶鏡不昧 龍珠玲瓏
華鯨新就 化緣在隆 送昏吼月 迎曉喚風

下徹黃土 上響蒼穹 一聞脫苦 百結共融
大願施主 功德無窮 善哉重器 永鎮梵宮

瑞應現住元明謹撰

維時嘉永六年歲次癸丑冬十月吉祥日、

本藩香我美郡岸本村住 功德施主富中林右衛門藤

原義就、同郡土居村龍珠山寶鏡禪寺七世住持、

大勸諭主比丘默三藏峯、鑄工何州何郡何之住何、

五百年大忌化簿

日本洞上創業垂統本寺開山承陽祖師五百年忌募緣
啓并引

惟夫四恩之洪也、誰與不脫意于報謝哉、其中法恩爲最、是以

承陽祖師云、祖恩逾父母、蓋世出世間之所、以有優劣也、謹考却後九年壬申之曆、乃丁本寺開山承陽祖師半千年之大忌也、恭欲下設齋會、以酬祖恩之萬一焉、由此特馳緇介、而率淨財於分派之諸山者、固攀例也、所冀各々亮照枝派之所、出自之與靈源之所、潤澤而不違先例、則幸甚矣、謹具短啓、奉告者如左、

右伏以

空手還鄉、七十州寶山湧現、渾身陷地、
五百年眞風勃興、萬象大曼陀羅、縱橫文彩一時王三摩野、今古要機、面目現成、朝々日東出、身心脫落、夜々月西沈、格外商量只自知、環中消息又誰肯、宜指蹈翻窠窟英傑、仰稱扶起叢林兒孫、

恭惟

日本國中遠孫諸大和尚、各坐肉山、共浴福

海、曾握_二竹篋_一、任_二版首_一、凜々震_二法威_一、尋戴_二綸綍_一、踞_二堂頭_一、巍々聳_二德勢_一、檀信歸嚮瑞雲湧_二龍鉢_一、

參學敲唱清風起_二烏膝_一、

布穀當軒 者裡絕_二音韻_一、銀椀盛雪何處惹_二塵埃_一、

佛天靈鳳展_二翼翔_一、祖域德驥弄_二蹄驤_一、

可_レ謂_二盛矣_一、豈不_レ恢哉、

如月也法門庸流禪席脫進 從來三學俱闕、仰惟龍天

卽今二嚴亦踈、俯愧_二遠近_一、

叨誤_二公牒_一、應_二此時節_一、

敕董_二祖席_一、感_二彼因緣_一、

老肩雖_レ癯、更兩那邊拋_二檐子_一、

寸心惟痛、茲憑_二諸位_一馳_二僭僧_一、

納衆流成_二巨浸_一也、江河淮漢胡分、

積寸土得_二層嶽_一、則夷戎蠻狄悉搬、

只冀

百味禪晚食 忌中恭營_二大會齋_一、

五分法身香、真前謹拈_二小片木_一、

臨路莫_レ堪_レ書、愼之至、謹啓、

惟時

寬保第四歲舍甲子正月穀旦、北陸道越前國吉祥山永平禪寺第四十一世住持敕特賜大智慧光禪師江寂叟圓月謹啓

土佐國香我美郡香宗土居村龍珠山寶鏡禪寺者、香宗我部家所_レ創建也、稽_二家譜_一、清和源氏之一流、從五位下駿河守武田信義長男、一條次郎志賴、壽永二年六月六日、於_二鎌倉_一所_レ誅、有_二孤子_一、被官大中臣秋家、竊撫爲_二己子_一、建久四年賜_二當所香宗深淵兩鄉_一、始號_二香宗我部氏_一、歷_二十有餘世_一、至_二出羽守親秀_一、無_二嗣嫡_一、養_二長宗我部宮內少輔元親弟安藝守親泰_一、配_二其長女_一、於_レ是親秀甥泰吉分食_二中山田村_一、因稱_二中山田左衛門佐子孫省_一、田字、遂爲_二中山氏_一、當寺有_二鳧鐘_一二口、一則出羽守親秀、大永元年所_レ寄、一則泰吉五代中山專右衛門氏久、同氏五郎右衛門氏益、中山玄益、享保三年所_レ附也、雖_レ追_二末裔_一、頃屬_二豐稔_一、音響不_レ諧、讚偈懶怠、今茲文政癸未、中山氏秀追_二懷大久之遺功_一、乃與_二同族中山田長_一、拋_二財改_二造法器_一、正備_二其所願_一、永在下薦_二祖先之冥福_一、禱_二將來之榮幸_一云、

銘曰

曉擊昏扣、一百八聲、
徧度迷城、聞々解脫、
願使含識、等覺不生、
夢々須驚、

文政六年癸未冬十二月如意寶珠日現住眞石叟誌

施主

中山泰左衛門源氏秀
中山新藏源氏長

鑄工

豫州字和島
國友佐十郎藤原正富

香宗我部氏記錄終

菅谷傳記

常陸國小田の城主は、讃岐守源政治と申て、累代の弓執にて、武威關東に盛なり、幕下には、信太範宗菅谷勝貞、其外所々の城主相隨、武備嚴重也、同國太田の城主佐竹義重は、坂東一の名家にて、猛勇日々に秀たり、此時四海大に亂て、國土一日も穩ならず、兩虎二龍は必爭の習にて、佐竹は小田を合せんと志、小田は太田を奪と謀る、されども互に會盟を守て、近境をも犯さず、禮讓を以て年月を経る、爰に古河の屋形より援兵を乞るゝに依て、政治止事を得ず出張し、援兵を出し、佐竹とも合戦におよぶ事數度也、然るに永正十三壬子年、菅谷攝津守勝貞を援兵として指出す、勝貞士卒を勵、粉骨を盡し相戦故、大利を得條、公方高基より感狀を賜、同十六己卯年八月、上總國推津合戦の節も、勝貞大將として出張、大軍に討勝、感狀賜、其後も古河公方より數度感狀を賜はり、土浦の城に歸けり、

信太範宗木田餘へ引籠事

爰に信太伊勢守範宗は、家子掛馬治部左衛門岩田彦六兩人を招ぎ申されけるは、當氏治國下を保べき將に非ず、某度々諫を入と雖承引なく、古河公方へ味方し給ふ事愚將なれ、小田の家運傾時至りぬると覺たり、我等も代々是ま、鬱憤無に非ず、此節本懷を達せずんば、何の時をか期せんと有ければ、岩田掛馬此儀可然時節を伺、能に計給へと申ける、さらばとて居城木田餘へ引入ける、氏治は御暇も申さず、範宗我儘に引退條不屈也、早々木田餘をふみ潰さんと給ひける、諸臣委細承、こは大切の事社出來たれと、かたずを吞で扣けり、攝津進出て申様、範宗いまだ逆心の實否もぞれず候、卒に討捕も此節他國の聞へも如何成、暫く御見合も候へかしと申ければ、氏治も此儀に同じ、木田餘の城をば夫なり切りに棄置せ給ふ也、

信太範宗討捕事

天文二十二年、氏治も所々へ御出張有に依て、範宗へも出仕の催促度々申遣といへども、病氣と稱不參也、其上漸もすれば我意を震ふ、愈隱謀相違なし、出討亡さんと、近臣を集評議有る、何れも口を揃へ、信太

は大身と申、大勇の者也、殊に菅谷左衛門太夫も正しく信太の氏族也、政貞所存も計難し、菅谷を召御評議有べし、左衛門範宗劣ぬ者成ば、別心無に於ては、信太討事いと安るべしと申上、氏治是に同じ、政貞を召、竊に仰けるは、範宗が我等をないがしろにし、不參の條甚し、是當家を傾、自立を心掛成べし、御邊も範宗が近き類族也、御邊と範宗と同意せば、我如何ともすべきやうなし、心よく腹切んと有ければ、政貞大に驚、御疑は御尤奉存候、我く御代く御幕下に屬し、一度も不忠を不存、弓矢八幡も上覽有、政貞に於ては、先祖の忠心忘却せじと、齒がみをなして申ける、氏治御歡有て、其後軍評定折く也、勇猛の範宗、近年は我意におごり、武具兵糧等飽まで詰置事成ば、一だんには乗捕難しと、評議一決せざりけり、政貞竊に氏治へ申上けるは、範宗も期たる事中々力責には叶まじ、日數をも經るほどならば、其内如何成變も計難し、他人の手に掛より、政貞謀を以討申さん、御免有べきやと伺ば、氏治聞召、兎もかくも御頼有よし仰ける、政貞謀の次第を委く申上、中根主膳知矩を招、閑談數刻に及歸ける、其後菅谷政貞中根知矩打つて、遊獵を

催しけるが、醉狂の餘りに、小田殿巡見に出られけるも憚らず、過分のぶ禮を働ける、氏治以の外立腹あり、諸臣を集評議有、先菅谷中根を追込ける、是より政貞は土浦へ引入、愈我意をぞ振廻ける、知矩も手野の郷に引籠り、傾城等を集め、傍若無人の働也、此事隱有ざれば、範宗が郎等掛馬治部左衛門信太にかくと語、範宗大に歡、書簡を以政貞へ無音を問ける中に、我く先祖より忠有て私無、然に近年漸もすれば非義多く、小田殿家法を亂さる、條、心外の事ども也、貴殿少々誤有とも宥免の沙汰社有べきに、讒臣有て舊臣を潰さんと計、能く思慮有べしと慇懃に被書たり、政貞仕濟したりと朦鬱を細くと認、使を饗應し婦されける、範宗此返書を掛馬等に見せ、政貞やしんを含、是時至りぬ、彼小田殿の手を離れば、刀に血を付ず氏治を追出さんと歡ける社連の究達也、其後は一族の中と云心置なく、掛等をも差越れ密談有時に、天文二十三寅年八月、忍て出會せんと約して、日限をぞ極めける、政貞父子兼て期たる事成ば、萬事支度して中根知矩が方へ出會せんと、八月十五日土浦木田餘よりと打立けり、然所に範宗の室申さ

れけるは、今日の御出會は御延引候へかし、某打續き夢見も悪敷候得ば、占はせ候に、殿の御身に付一大事有と承る、三日の内は御慎候へかしと申ける、範宗承り、女性心に常々我等を大切におもはる、故、戰國の事成ば左様申さるゝも尤也、古語に南人駝を夢見ず、北人象を夢に見ずと云り、南方に駝なし、北方に象なし、見聞ざる物は何ぞ寝ても氣にふれんや、夢は臟腑の弱也と云り、夢を見たりとて是を用て士たる者約を變せんや、御身も知ることく、政貞父子はまさしく信太の一族にて候、今母方の氏菅谷を稱と云とも、病難に付、筑波權現の告に依て也、範宗が片腕とおもふ政貞、他人は知ず何條心置べきと、郎等多く引ぐし、中根が方へ入來る、知矩立出、珍敷御來臨と饗應、政貞漸々手廻り少々引ぐし驛より乘來り、家來は不揃歸されける、扨對面し互に無音を問、其後三人額を合せ、隱謀の計略を談ける、範宗申様、かく各と申合る上は、手に立者候はじ、諸士へ氏治の非儀を申觸、小田殿を追出さん事案の内成と評儀一決して、則酒宴に及ける、主膳罷出、今宵は折節最中の秋、御兩殿の御會戰身に餘り忝し、此手野の郷の月の影色を

も寛く御覽も候得かしと、數獻の進め、城邊より呼寄置し遊女共を御酌に出しける、範宗政貞手を打て、是は手野の郷には心得難き月影かな、と希へば、主膳打笑、御不審は御尤也、某籠居の内鬱散の爲、去頃より呼寄候と申ば、何れも奥に入、吞や唄へとさいめきけり、中にも猿子と云る女やう顔美麗也、範宗飽まで色におぼれる男にて、猿子に打もたれ、政貞も今宵は是にて夜を明されよと、郎等共をば木田餘へ歸けり、死生命有りの天運とは云ながら、傾城傾國の迷の道社薄情なれ、政貞仕濟したりと、我身も共に遊君に打ふれて、玄どもどろの爲躰、中根も元來東國に指を折るゝ大力の、酒は飽まで吞けるゆへ、大盃を引請て深く興にぞ長じける、範宗も酒色に姪する男にて、おとらじ負じと差請引請傾て、本性も亂けり、夜も漸更れば、政貞は時分を伺討んとす、信太も流石に大膽者成ば、容易には討難しと、暫く時刻を移しける所に、範宗運の極にや、腰刀を猿子に持せ廁へ行けるを、政貞跡より玄たひ行、猿子にたわふれ居る所へ、範宗何心なく廁より出るを、左衛門拔打に切付る、返す刀にて水もたまらず首かき落、信太は最期に兩眼を見開、汝

政貞同性のよしみを忘、我をたばかる條きくわい也、

七代立じと齒嚙をし撃れけるが、兩眼生るごとく白眼詰て死にけり、左衛門が目に後々もさへぎるやうとぞ語られけり、係て菅谷政貞中根知矩は、信田が首を氏治へ送り、直に木多まうの城へ責寄る、其勢都合九百餘騎、追手搦手へ同時に乗掛、鯨波を發し乗込けり、城兵範宗の死を告るを聞、周章する所へ、政貞追手より無二無三に乘入ば、防べき術を失ひ、奥方を引ぐし、右往左往に落行ける、菅谷入替り萬事堅固に取靜め、近邊の仕置等申付られければ、氏治感狀を以褒美有ける、則信田が首を土浦の城下禪宗神龍寺へ葬りて、華林院殿喜山宗歡と諡す、範宗嫡子紀八、同年八月二十七日自殺す、玉窓院殿玉質壽輪と諡し、木田宗妻憤意して自害す、松月院殿玉質壽輪と諡し、木田餘の城下寶積寺に葬けり、其後土浦にて様々妖怪有と云ども、政貞猛勇の者成ば事共玄給はず、去ども棄置べきにも非ずとて、高野山清隆心院より僧を招、一寺を建、求徳山長樂寺と號し、範宗父子等を神にし、其妻に阿彌陀號を諡り、惡魔降伏眞言秘法の祈念懈らず、二六に丹情を盡しけり、

常州無垂合戰の事

光陰矢のごとく、弘治の間も度々のせり合にて、軍の止驚もなし、永祿元年も、古河公方の援兵として、政貞出陣數度也、其人々には、菅谷彦次郎政頼、由良判官則綱、行方刑部少輔貞久、海上主馬五郎武經等也、佐竹義信も大軍を以、古河殿と對陣也、越後の輝虎も八千の逞兵にて出張し、萬卒苦戰しけり、永祿二年三月、佐竹方よりも、宇留の四郎義元を大將として、二千餘騎無垂に出張し、入替々相戰、政貞つくづく思案し、此軍手延にせば、佐竹の大勢馳加はり、味方敗せん事必定也、佐竹に勢を付なば、氏治父子の爲大事也と、由良戸崎行方に謀を云合て陣を取せ、五百餘騎を三手に備へ、一夜討せんと扣へたり、折ふし風雨烈しくて、篠を突がごとくなり、菅谷父子願ふ所と、子の刻より打立、明る晝までの兵糧を士卒に持せ、ばいを含ませ、鎮りかへつて押寄る、佐竹勢も戰草臥、夜明けば太田の加勢も着すべし、荒手の働を見んと物語して、哀や菅谷頃日の戰に、大半士卒も手負つかれ、其上荒手はなし、味方付ば逃歸ん、追打にせんと寛々として居る所へ、菅谷が勢聲をも立す柵引破り、

喚叫で突掛る、佐竹も聞ゆる勇將、白幣を振て人數を静めんとする所へ、由良刑部左右より凱歌を作て後へ廻れば、敵色めくをどつと突掛け相戦、佐竹も一足も引じと踏留る、義元大音揚、爰を引て明日着く味方に何面目か有らん、命を棄よと下知をなす、此勢に力を得、柵より外へ追出す、政頼鎧を引提、きたなし者どもよ、大聲揚て下知するは大将と心得よ、押並て組め、葉武者に目なかけぞ、續けく〜と真幕に乗込たり、おくればせじと云儘に、海上武經踏鎧を合、十文字に駈通る、武經政頼いづれも三十字を花の盛り武者今宵を限りと、縦横無碍に駈立る、政貞是を見て、

古河の公方は加勢として出張し、此陣引て氏治へ何の言譯あらん、闇みを紛に近寄て撫切にせよ、必首を取べがらずと、下知に勇んでまたもり返し突懸る、義元の郎等共申けるは、菅谷父子を初味方に援兵加はると聞、死狂ひの働と社存候へ、少し御引退候へかしと諫ける、掛る所へ政頼武經馬を並べ、のかしはやらじと突たりけり、佐竹勢も駈立られ、むれ〜に成所へ、由良戸崎後陣をかけ抜け本陣へ打て掛る、依レ之義元勢惣敗軍に成にけり、行程二里追打しける、

風雨も漸く静り、日も東海に輝きける間、人數を集め、敵味方の手負死人を改る所に、大将佐竹宇留野四郎義元數箇所の痛手にて、亂軍の中に討れけり、則勝鯨波を揚、義元が首其外討取首三百餘級、古河の公方へまいらする、則古河殿より政貞へ書面を以、苦戦の勞を問れける、左衛門尉は氏治へ面談し、軍の赴申述、土浦へ社歸りける、

山王堂軍の事

去天文十二卯年、野州宇都宮の城主右馬權頭藤原俊綱は、先年多賀谷家重へ、小田家加勢の儀を深く遺恨に含、小田へ寄らるゝよし風聞に依て、小田家よりも出張して、宇都宮領茨木郡坂戸の城を責落し、人數を入置、度々合戦に及ぶ、小田方每度勝利を得る、同十四巳年俊綱、小宅三右衛門を爲三大将責動す、小田よりも菅谷左衛門尉、同隠岐守朝範、小神野、高嶋等も、援兵として遣す、城主信田紀次郎力を得て大に戦ふ、宇津宮勢惣敗軍に及けり、是より暫く俊綱も人數を出さず、時を待てぞ居たりける、爰に永祿二巳年越後守輝虎八千餘騎の兵を率、下野國へ出張し給、幕下に屬せざる城〜を、息をもつがせず責しかば、半日も

立ざるに、或は城を開、或は降參落城し平均に成しかば、直に總州常州さして押來る、佐竹、宇津宮、益子、眞壁、笠間、茂木、小宅、下田土、四月二十七日暮時、小田領山王堂につく、依之海老嶋の城兵甚騷動す、然と雖、平塚山城守を初として、海老嶋新左衛門、同七騎の者ども駈合相戰ふ、輝虎嚴しく下知しければ、小田勢駈立られて、まどろに成て見へにける、氏治も出馬有り、同二十八辰の刻より、兩陣入亂れて戰ふ、越後勢備を亂、短兵急に追討、小田勢大亂敗軍す、氏治ものがれ難き所に、菅谷彦二郎政賴馬を返し、見くる味方の面々、此儘落行ば、小田の城をも即時に乘取らるべし、何國にて死るも天命也、心よく山王堂を墓所にせよと下知すれば、是に勵されて取て返し相戰ふ、政賴手勢與力を前後左右に進ませ、本陣を目かけ駈拔く突掛る、其隙に氏治は漸く小田へ引取ける、其日も未の下刻成ければ、政賴と有所へ駈出味方を見れば、郎等與力も爰かしこにて討れ、殘る者どもわづか五騎に成けり、政賴を初數箇所の疵を蒙り、今は切抜て落事も叶難く、何卒輝虎に近寄引組て差違はんと、笠印もかなぐり捨、輝虎の旗本を心掛けて玄のび

寄、旗本備より見あやしめ、血に染つて乘來るは敵とおもふぞ油斷すなと云程社有、時花雄の若者ども鎧を捨て立向ふ、政賴をそんじたりとおもひ、大音揚、是は小田殿の片腕と頼給ふ菅谷彦二郎政賴と申者也、きのふ今日の戰に數箇所の疵はかふむれども、いまだ氣力はおとろへず、大將に組んと志す、其退き給へと突て懸る、にくき敵の振舞かな、物ないはせず突取れと、追とり卷、鎧玉に社揚にけり、衰成かな、政賴生年三十二歳にて、四月二十八日、山王堂の土とぞ成にける、輝虎續て小田を圍責戰ふ、城兵も突て出、夜晝嚴敷爭ひけり、此城小田家數代の居城にて、武具兵糧詰置故、中く急に責落すべしとは見へざる所に、土浦より菅谷左衛門尉も討て出る、越後勢兵糧も乏く成、長陣は難成、早々越後へ引入けり、

府中と小川の百姓鬭諍の事

係て輝虎越後へ引取給へば、佐竹義信宇津宮俊綱も歸城ある、此度眞壁が大軍に恐れ、小田をそむく條ふ届成と、退治に及んとし給ふ所に、ふ慮の事出來て、また合戰に及ぶ、爰に小田領府中の百姓と佐竹領小川の百姓鬭諍におよぶ程に、石礫を以打合、互に疵を蒙

る、府中の百姓小田へ斯と訴る、氏治承り、佐竹とは會盟あるによりて、近境をも犯さず、禮讓を以年月を経る、然るに今度輝虎へ加勢有事謂なしと、氏治立腹の折成ば、評議にも及ばず、時の目代に下知して、小川の百姓十餘人打殺す、佐竹是を聞、家臣を集て此儀如何と評定有る、丹波守申様、此儀穩便の沙汰成がたく、此方よりも騎馬を遣し、府中のやつ原一人も残らず討しと申上候、義信此義に同じ、騎馬二十騎遣し、府中の者民何んの手もなく數十人打殺す、氏治よりもまた宗徒の士五十騎差遣し、小川の百姓悉く切殺す、因_レ是兩家止事を得ず、互に人數を出、對陣に軍び、足輕を懸て佐竹勢おびき出し、または大田方より手立を替、互に力戰隙もなし、政貞も土浦の城より搦手へ討て出る、佐竹方よりも鹽井内膳正を大將として差向給ふ、兩陣互に鯨波の聲を揚て操合ける、信利荒手を入かへ、菅谷が小勢を中に取込討んとす、政貞魚鱗に進駈通る、信利も爰を破られじと采牌を振て下知し乘廻、互に子房孔明がはい肝を出たる駈引にて、進めば引、引けば追いり、離るべき勝負共見へざりけり、小勢の政貞戰勢れて、さつと引、大田勢勝

に乗り、鯨波を發して追懸る、菅谷が勢は少高き所へ取揚、備を立直し、鎧をつ取、折敷て社待かけたり、信利是を見て、敵は軍を持たるぞと、采牌を振て味方を引揚、軍は是切成とて引入ば、左衛門尉も小勢成ば、重て戰ん事不_レ叶、引取て氏治父子の陣所へ參、此軍急に勝負を決せん事難_レ叶、扱を入て見候半と、以_二使者_一佐竹方へ被_二申越_一けるは、今度戰陣に軍候、全く目代どもの無念より事發れり、御同心に於ては互に目代を引替申さん、夫にて和談候へと申ければ、佐竹も一先引ばやとおもひ同心し、惣方陣を引にけり、

梶原北條眞壁謀叛の事

小田佐竹の確執止事を得ずして、義信も色々秘計を巡しける、氏治の幕下眞壁入道道夢を竊に飾語て、氏治退治の内通を賴ける、道夢則一味して、小田を亡さんと謀をぞ催しけり、梶原美濃守は、道夢が聲成れば、彼が居城柿岡へ打越、政景に對面し、此事如何と内談す、政景に承り、親にて候三樂にも談じ申とて、聽て片野の城へ使を馳す、何事やらんと東_二く_一、眞壁梶原對面し、彼隱謀を語、三樂打領き、兩人も存知のごとく、某も時を見合て、本國武藏へ歸らんとおもひ

候、然に氏治斯頼べき將に非ず、此企社幸なれ、義信へ一味し申と答れば、政景申やう、此ぶんにて大事成難し、北條出雲守治高の小田殿へ遺恨ある人なれば、北條を飾語んと、急ぎ治高を招き寄、此事如何と内談す、北條子細におよばず、氏族の由緒を振捨て、一味同心の約をなす、是より評定取くも也、梶原進出申やう、我く父子片野の域にて旗を揚る物成ば、氏治父子打て出る事必定也、其時各は小田の城を乗取べし、氏治取て歸し乗返さんとする成ば、我く後より攻掛り、中に挟んで討取べしと申さるれば、皆此儀に同じ、評議數刻に及、各居城へ歸ける、片野の城主三樂齋、二男梶原美濃守與力の勢を招寄、軍の用意頻也、此事小田へ急を告る事櫛を引がごとし、氏治父子自身出馬せんと申されける、菅谷左衛門尉は、氏治父子を諫て、此合戰大事にて候、大田父子元來武州に有、數度の勇猛人の知所、如何智略をば仕出候はん、御出馬然べからず、討手を遣され候へかしと申上る、氏治父子承引な、三樂父子浪くの所、宇津宮が頼にて、壹萬石の扶助米を以召抱候處、此度逆心を發る條不屈也、自身行向太田を生捕、さかはつ附に懸んと、

兩將七百餘騎を引卒、中軍に備ふ、先陣は左衛門尉政貞三百餘騎、小田を打立手葉井山に陣を取る、三樂父子も一時に雌雄を決せんと、其勢五百餘騎にて押寄、兩陣凱歌を發しける、梶原が郎等鈴木半藏、三人張に十三束暫し堅めて兵と射る、其矢河合五郎が眉間にぐさと立、河合たまりもあへず馬より落る、是を軍の始として、政貞が勢入替く責戰ふ、太田父子は兼て時を移し、眞壁北條等に小田の城を乗取せんと化粧軍して時を移しけり、兩陣共戰勞れ、互に陣を引退く、既に日も夕陽に傾ば、菅谷左衛門尉申けるは、先此軍小田へ歸され可然と申さるれば、氏治父子承引なし、政貞言葉盡、定徒の人く大略此陣に候、殘置れたる面くは、中く御用に立べき共覺へ候はず、不意の變も心元なし、御引取候へて、打手に向られ候へかしと、様く申上けれど、猛將守治聞給はず、我く父子馬を出し、扶助し置三樂父子が首を落さずんば、末代迄の笑ぐさなりと怒り給ふ、政貞又諫て、太公望が三略の書に曰、柔も設處有、剛も施す處あり、弱きも用る所有り、強も加る處有り、此四ツの物を兼て、其宜を制せよと候へば、變に應じ圖をは

づさぬ社軍にて候、假勝軍仕候ても、手負打死味方多きは實の負にて候と、色く諫れども、父子用給はず、守治是非に夜陣と仰ける、菅谷もあきれ果、小田家連の盡成とおもひ定て、然ば此御陣如何の事候とも必引せ給ふべからず、夜軍の手配仕らんと申棄立にける、其後敵味方また入亂戦ども、梶原はあしらい軍にて、おもふ儘に味方を欺く、由良戸崎も菅谷が陣に來り、梶原父子が軍の躰を考ふるに、謀を用ふると覺へたり、小田の事も心にくし、唯く今宵御引取可然と申、菅谷承り、其儀にて候、御馬を出さるゝさへ、梶原しきに無念也、越後の謙信は梶原に氏をさづけてゐたしき中、先年浪くの時、宇津宮殿御口入にて、當家へ父子召出さるゝ、其節も色く申といへども、御用なく、壹萬石を給、其後段々御加恩有る、三樂父子道に背く條、きくわい也、此陣中く御引取の事おもひもよらずと語るゝ、由良戸崎力を落し、世の諺にいふごとく、若鷲天狗に成すといふも是等をや云覽めりと、齒がみをしてぞ居たりけり、かくて兩陣引退、夜廻り嚴敷かゝりを焼、明るを社は待にけり、

小田城責事

係て小田の末家北條出雲守治高、眞壁入道道夢、兩人逞兵をすぐつて五百餘騎、佐竹の加勢三百餘騎、未だ曉雲も明ざるに、小田の城へ取かけ、鯨波地震て責掛る、城中には防べき手立もなく、以の外に周章し、先搦手より御簾中を上山の山へ落奉り、残りし者ども手配し、戦んとする内に、敵城内へ乗入ば、裏崩して四角八方に逃散る、北條眞壁城へ入、木戸矢狹間の手配し、手葉井山の様子を伺ける、氏治父子是を聞、齒がみをなし、先梶原をさし置、小田を乗返さんと、手葉井山より引歸す、政貞申けるは、是は如何成御事ぞや、御後より梶原追來るは必定也、前後に敵を請ては八十梟に勵むとも叶ふまじ、一先土浦へ御引入、所々の御幕下を召て、重て大軍を以討給へと申ける、氏治父子是に同じ、政貞に後殿をさせ、土浦藤澤等へ引入けり、

鳥出の臺戰の事

係て三樂父子も小田の城へ打越、眞壁北條對面、軍評定して、氏治父子へ遠所旅下馳付ぬ、先取掛べしと一決し、三樂と道夢は揃て城を守り、北條、梶原逞兵を撰で、五百餘騎藤澤の城押寄る、氏治是を聞、守治を

大將として、由良、戸崎、菅谷、其勢合て七百餘騎にて、鳥出の臺に陣張る、梶原是を聞、取あへず「敵の首取での臺と聞からに今日の軍に我は梶原」狂歌を詠で打笑ひ、梶原北條一手に成り、魚鱗掛に討て入、由良戸崎、鶴翼に陣を備へ、寄來る勢を圍まんと、命を義のために輕んじ、爰をせんとと戰ける、梶原北條少し引色に成て見^エにけり、後陣の政貞采牌を振て、息を續す突掛る、政景治高安からずおもひ、大音揚て味かたを勵し、爰を引て何の面目か有ん、きたなし引なと叫き喚で突合ける、血は流て草を染、勝負はごかくに見へにける、後陣の菅谷、先手の横を打通り、一文字に打て掛る、先陣の由良戸崎、元來勇猛銳氣の者なれば、後陣に先てを越されなと、眞先に馬を入、大太刀を眞甲に差かざし、豎横十文字に討て廻れば、さしもの政景治高叶はじと、棄鞭打て尾高の邊迄引退く、のがさじ物と則綱長俊軍を亂し追懸、政貞軍士を以先手を制し、勝負は明日決せんと、互に夜陣を張、人馬の足を休ける、敵も味方も諸共に手負死人ぞ夥し、爰に今朝の梶原が返歌と覺へ、高札をたてけり、「軍には梶原と社おもひしにおくれ取出の臺と社聞」掛る騒

動の中にも、口ずさみして慰む者もふてき也、扱また眞壁勢の中に、鰐鹿嶋新左衛門尉といふ者有、如何したりけん味かたを離れ、歩立に成て引けるが、守治の勢に行合、隠れんとおもひ、傍成る麥畠にふして息を殺して居る所へ、守治の勢稻石與十郎と云者殿りを心掛引けるが、新左衛門を見附、能敵とおもひ打て懸る、鰐鹿嶋もせんかたなく、稻石と渡り合、火花を散し相戰、終に與十郎、新左衛門を切伏て首を取、とある所にさし置、流へおり立太刀を洗て居る内に、長澤清兵衛といふもの彼首を盗み、一鞭くれて走り行、稻石堀より揚り、惡きやつかなと牙齒をかめども甲斐ぞなき、よし／＼返報せんと追て行、清兵衛は鰐鹿嶋新左衛門尉が首を早々氏治の實見に入、感狀を給りける、稻石安からずおもひ、長澤が馬を盜せける、清兵衛何者の仕業成覽と思ふ所に、與十郎が中間盗みたるよし、依之以^レ使馬盜人を渡さるべきよし云送る、與十郎承り、其方が他人の高名を盗みたるにより、己が心に引くらべ、左様の事を申か、此稻石に向て下手されして、おもはぬ地獄の罪人と成り、釜煮に成なと散／＼に惡口して、空嘯て居たりける、使歸りて

有の儘に申せば、長澤以の外立腹し、きやつ安穩に置べきかと、稻石が方へ押寄る、與十郎心得たりと拔合せ、人交もせず切結ぶ、互に下人も渡り合、火の出程戦ふたり、此騒動に守治の陣屋上を下へと騒ぎけり、政貞是を見て、梶原北條討て出んは必定也、先手に構ず備を立よと、乗廻く下知し給ふ、漸く備堅固に立させ、敵の方を見る所に、梶原北條眞麿に駈出る、守治備を固んと、麾を振立く下知すれど、不意に發りし事成ば、如何にも備を立かねたり、政景治高息をもつがず、七てん八倒して突廻る、守治猛將たりと雖、崩る勢に引立られ、一戦にも及ばず引退く、治高梶原に向ひ、此亂たる虚に乗て守治を討ん、逃を追に利有とは、今宵の事成らんと云、梶原尤と同じ、鯨波を作りかけく、透間もなく追掛たり、政貞敵を逃くと引附、一聲鯨波を作り、靜に備を押出す、梶原も數度の戦に名得し男、先手へ乗出し、後陣の備は嚴重也、長追無用引取と、乗廻しく急に人數を引揚る、政貞さ社と突掛る、梶原北條貪着なく、兩人備を立替くくり引に退けば、政貞も敵の備定るを、見追す味方も有ざれば、輕く先手を引揚げり、梶原も終を慮、味方

へ援兵を乞ければ、佐竹も大軍にて出張のよし聞ける、其外宇津宮、越後勢も出張し、木多餘藤澤を一時に乗取べしとひしめきけり、

守治梶原北條と再戦事

斯て稻石長澤が同士討に、大將守治不意を討れ、無念骨髓にてつしけり、其上敵の援兵所より出張のよし聞へければ、安からず思はれ、菅谷、由良、海上、戸崎等を集め評議有、由良則綱進出申けるは、上杉謙信、佐竹義信、加勢の者共、兩總より搦手へ廻り、木田餘藤澤の兩城を取んと議すよし承、兩城堅固の御手當候て、御出馬候へかすと申上る、氏治守治尤成とて、今度は菅谷左衛門尉を城に残し置、父子八百餘騎にて打出る、由良海上を横備と定、三百餘騎を引分て、三手に成てぞ向はれける、押寄とひとしく先度の耻を雪んと、面も振らず責立る、梶原眞壁も突て出、縦横に馳廻る、互に人數を颯とひき、暫く息つぎ居所へ、由良海上時分は爰ぞと一聲喚で駈立る、梶原が後陣の馳合て相戦、由良は元より大力櫓木の棒の三間程有をひつ提、歩立に成て打倒す、梶原勢是に驚き、右往左往に逃散りけり、治高射取て下知すれば、

矢ぶすまを作て射かけたり、由良も遠矢に手持なく、

己が陣に引退、扱又政貞は方々へまのびを出し、敵の援兵を伺に、未だ二十里に寄ざるゆへ、あんかんと城を守るも無益なりとて、手の者引れ、夜中打立、鳥出の臺の後ろへ廻り、静り返てまのび居る、氏治父子、梶原眞壁爰にかばねをさらさんと、一舉に死をぞ争けり、政貞時分を考、鳴りを静めて敵陣の後へ旗を出す、北條梶原是に驚引んとするを、由良、戸崎、海上、敵色のくぞ逃すなど、一とかく當て乗込たり、梶原北條前後の敵に術を失ふて、我先にと逃て行、勝はこりたる味方の勢、追討に討程に、鳥出の臺より小田迄は、本草を血に染なしける、氏治父子勝鯨波を作、首實檢して首塚を築せて歸城ある、扱梶原父子も容易出る事不能、また氏治も佐竹長尾の加勢にあぐみける、また所々に戦最中成ば、互に時を見合、白眼合て年月を送る、梶原も武藏等へ出張し、佐竹も伊達最上等と戦ふ故、手もさえず、氏治父子も兩總並里見一族と數度相戦、されども足輕せり合等にて、はかばか敷軍もなく押移けり、互に城をかたく守て、境へも容易出ざりけり、

藤澤の城軍の事

係て佐竹義信は、天庵を退治の爲、梶原父子、北條眞壁等を先鋒として押寄、其勢三手に別れて、藤澤へは梶原父子先鋒也、土浦の城へは北條眞壁先手也、三樂五百餘騎にて、藤澤の城を取巻、守治、由良、戸崎、行方、海上、小美河等打て出で、四角八方へ切て廻る、寄ての中より蘆野右京と名乗、守治へ組んと乗掛る、則綱押歸引組で首をかく、大關久米之助則綱に討て掛るを、戸崎大膳亮長刀取延て打ければ、甲を打割、首は左右へ別ける、梶原平左衛門引詰て、兵と放矢小美川が喉腕を射通され、馬より落、寄手の陣より、鈴木半藏大矢を番ひ放ほどに、味方大せい手負ける、爰に河合彌五郎、兼て兄の敵とねらい居けるが、一鞭くれて近寄、馬より飛おり、引組で終に首をかき落、城兵是に力を得、短兵急に駆立れば、寄手こらへず引退、其日の軍は止にけり、明れば足輕を出、互にせり合、對陣に社及びけり、係て守治は諸將を集め、今宵は一入曇深し、一夜討せんとの給ひて、相言葉を定め、袖印ひしくと相究、同十月二十日巳刻、静々と押寄、含板を一度にはづし、叫喚で突立る、梶原勢

大に驚き、取物も取あへず逃散るを計程に、七十餘級討取ば、三樂父子も漸く小田の城に逃歸る、後陣に扣し佐竹勢も崩る、味方に引立られ、散く社成にけり、守治輕くと手勢を引揚、勝鯨波を作歸給ふ、

北條城軍の事

斯て北條眞壁等、佐竹の援兵加て、所く燒働しける、政貞も人數を出し相戦ふ、敵も願ふ所と、士卒を下知し打て掛る、加茂兵藤沼尻五郎、田伏次郎太夫、片岡七郎左衛門、沼尻播磨、信太紀次郎、大山の崩る、ごとく鍵を齧へて突懸れば、眞壁北條叶はじと馬引歸せば、惣敗軍に成にけり、政貞先陣を亂、荊田郷迄追討けり、其後人馬の足を休め、小田の城へ責掛る、守治は五百餘騎にて、城の西成川を隔て陣を取、政貞三百餘騎にて先鋒に進み、晝夜のわがちなく責立る、政貞郷人を呼出し、金銀をあたへ、舊主氏治へ志有者共は城内の輩を味方に進めよ、急度御褒美給べき旨申ける、郷人共舊主の御恩報奉べしと、城内の郷人へ内通し、政貞を城中へ引入る、梶原父子を初、防べき手便を失ひ、返忠の者有と騒立、上を下へ周章す、守

治政貞眞葛に突入ば、搦手より散く落行ける、氏治大歡、政貞が忠義に依て、再小田へ還住し、菅谷攝津守へ感狀をぞ給ける、此勢に北條を乗取べしと、政貞五百餘騎にて押寄、君嶋川に打望給ふ所に、大雨玄きりにして、俄に水増し、渡ん瀬も計難く、暫くためらふ所に、敵聲く古より宇治川利根川など渡し候、是は其十ヶ一にも足らぬ小川也、御渡候へ、さなくば早々引給へ、水干は是より案内申さんと、一度に嘲り笑けり、政貞が陣より武者一騎、川端に馬をかけ居へ、適成る御異見かな、北條殿の御首を給らんと罷向候、此川渡さで候べき、田伏次郎太夫が川越を見給へと、手綱かいくり颯と乗込ば、攝津守采牌振て、田伏討すな續けやと、馬を打入給へば、三百餘騎おめいて乗入、向の岸へ打上り、鯨波を作、天維も落、坤軸も碎よと責戦、北條勢まくり立られ、城を指て引退く、味方勝に乗て追掛、要害嚴敷山城へ坂中まで責登る、城兵も爰をせんと大石數百投落す、寄手是を防兼て、坂より下へ引退く、然に佐竹の大勢夜を日に續て押來、大將額田義房小田山の峠を越、實鏡山の北の方へ打上り、赤白の旗押立て山風にへんほんたり、

其勢幾千騎とも知難し、搦手へ向たる鹽井信利は、十三塚より東の山を越し、北條の城へ加りけり、政貞も此大軍に驚く、一野矢原へ引退、夫より土浦へ引入ける、

藤澤の城軍の事

斯て佐竹の大軍、藤澤の城を責落とて、十一月九日辰の刻より城を取巻、鯨波を作、天地も響、山河も崩れ、金輪際に入かと夥し、由良戸塚叶ふべきにあらざれ共、戦ずして退も後代の嘲り、逃難しと追手を開突て出る、平出伊賀守、足高加賀守、志築左近、横山彈正、岩崎勘解由、甲崎四郎右衛門、彼是五百餘騎續て打て出、追つ返つ百騎が一騎に成までも引な引じと戦けり、いざ一方討破覽と喚き叫で駈立れば、引包て討取と、敵も進んで切結ぶ、足高加賀守、甲崎四郎右衛門も討れ、殘六人一所に集り、大息續で扣へたり、敵を矢に射落さんと、四角八面より雨や霰と放けり、由良則綱も馬の太腹に矢二筋立ば、屏風倒に伏にけり、則綱馬に離れ、爲方なく手負たる風情して臥ければ、小野寺將監、岩城孫六首を取んと馳來る、則綱むくと起、某いまだ存命也、首をば御覽候へと、孫六をかい

抓、四五間取て投出す、將監透さず討て懸を引捕へ、小脇に挟み馬に打乗けり、其隙に平出志築駈附て、孫六を討てけり、敵小野寺を取返さんと追懸る、由良是を見て、出かへさんと云儘に、將監を差上後へ向て提附れば、血を吐て死にける、横山岩崎も討にければ、いざ切抜けて落んずと、眞幕に駈入れれば、敵もあへて寄附ず、平出は矢田部の城へ落つ、左近は志築の城へ落行ける、由良戸崎兩人は行がた知らず成にけり、藤澤の城落ければ、討取首實檢して、此勢に木田餘、土浦をもみ潰せと云ければ、北條出雲守進み出、土浦の城と申は、坂東に名を得たる名城、西は櫻川の流の末、筑波山の峯より落る男女川、白井の辨天、稻荷川、其外爰の瀧、かしこの澤水落合候大河也、錢龜橋といふ長橋をかけ、追手と定め、北はまた廣くたる泥沼なれば、人馬及事なし、南は霞が浦とて入海漫々たる、東一方は、陸地に續候を搦手と申也、然れども眞鍋が臺とて要害あり、卒爾に寄は難儀成ん、其上菅谷政貞如何成智略をか仕ん、能く虚實を伺候と申ければ、佐竹も重て寄べしと、一先軍を納けり、明けば永祿六亥年、氏治府中大承清元と相戦、政貞先鋒として五百

餘騎、三村に於て大戰、味方大半討死、政貞も鎧を取、敵十六人突倒、太刀束切折れ、すでに危所へ、味方もり返し大利を得、府中の城際まで討詰て數級を得る、日も夕陽に成ければ、早く軍を引揚げり、氏治よりも感狀を送られけり、此節對太刀貞俊鎧は嶋田也、則家に傳へけり、

木田餘の城軍の事

斯て佐竹勢出張し、木田餘の城を責とす、氏治父子も追手搦手の人數の配をし給ふ、行形海上を大將として、五百騎にて追手を堅め、由良、岳見、牛久、足高等五百餘騎にて搦手へ向、其外江戸崎監物、寺嶋掃部、片岡七郎右衛門、星野宮亦左衛門、中野平藏、野中瀨鈍齋、沼尻等は遊軍と成て、弱からんかたへ向はんと構、佐竹勢も一時に乗落さんと、寄ると等く追手搦手より鯨波を發して責戦ふ、氏治勢も突て出、いづれ隙有とも見ざりけり、然に西風俄に發、大木を倒し、土煙空を覆ふ、敵味方闇夜の心地して、暫し息を續く、佐竹勢の中より、強弓を勝出し、火矢を烈敷射懸たり、あやまたず矢倉に火移ければ、氏治勢消んと上を下へ返す所へ、佐竹義房此虛に乗て込入と、一番

に駆出れば、總軍叫で突懸、なじかは城兵たまるべき、右往左往にかけ散され、城へも入べきやうはなし、狼狽するを討程に、城兵數百討れけり、氏治父子も搦手より突て出、一方を打破り、漸くにつけ抜て、土浦として落給ふ、敵勝に乗、短兵急に追撃す、海上引返大音揚、上總介忠經より二十三代の末葉、海上主馬五郎武經といふ者也、擊留て高名せよと呼はれば、行形氏治の御大事此時と同馬を引返し、昔日源賴光殿の一武者平井保昌が末葉、行形幸菊丸と申者、我とおもはん人有ば、見參せんと鎧を捻て突出す、逃しはせじと追取卷、爰をせんとと突合ふ内、我もくと乗返ば、敵も後陣を待にけり、此しは合に引取を、梶原士卒を下知し、敵に引添、土浦へ附入にせよと馬を飛せて追掛る、菅谷政貞かくと聞、逞兵三百餘騎を勝り、半途に出て備を立、落來る味方を馬手になし、靜り返て扣へたり、追來る先手突掛覽とする所を、政景馬を乗廻し、菅谷が堅陣卒爾に掛らば味方敗せん、備へを立、後陣を待構へ、動靜を見て戦へと下知すれば、寄手もそうなく近付ず、政貞も目に餘る大軍成ば掛り得ず、城内へ引入ける、

土浦合戦の事

去程に佐竹の大軍、土浦の城を十重二十重に取圍み、夜晝となく立る、菅谷攝津守も人數の手配をして相戦ふ、政範政有る夜霞ヶ浦の遠淺を竊に打渡し、敵の本陣押寄所へに火をかけ、爰を突かしこへ廻り、鯨波正て切散す、追手を堅めし海上行形時分を見合ふれば、前後の夜討に繰立られ、佐竹勢も蒐を失ひ、討を社したりける、され共鹽井内膳正信利備をか、押太鞍を打、涼くと駈向、菅谷海上も一手に、早城へ引入ける、今宵擊首三百餘級と記けり、搦に向ひたる梶原、北條も手便替に責れども、由良、能防故、敵死亡するのみに引退、遠責に社し、けり、由良岳見、出や居寝むり覺させんと、不意へを發し討て入、散くに切立る、寄手備も立べきやふもなし、東西南北に蜘蛛の子散すごとく逃退く、猿生太左衛門、古塚治部右衛門等嚴敷追懸、半田與右衛門、中吉喜兵衛を初、名有首數級討取引返す、追手搦手共に初度の軍に打負、無念成と、在家を毀て筏とし、是に飛乗く責近く、政貞も兼て期したる事なれば、築山泉水の大石、堀裏へ運せ、靜り返

て扣へたり、敵ひしと堀に附、鳶に熊手を打懸打懸引破んとする所を、守治御覽じ、我が力は此時也と、五人十人にて運し大石堀越に投出せば、是に當るもの何かは以てたまるべき、手負死人夥しく出來ければ、敵兵驚騒て川に落、又は己が鎧長刀に突拔れ、疵を請る者數知ず、漸々と引退く、政貞父子是を見て、木戸を開き真先に馬を出し突立れば、佐竹勢梶原眞壁等も散くに駈立られ、右往左往に落て行、長追せばあしかりなんと、人數を引揚、勝鯨波を行、城中へ引入けり、

氏治土浦へ落事

元龜元年大田三樂眞壁道夢小田の城へ取掛る、北郡手這坂へ小田勢出張し相戦、爰に江戸崎監物は、一方を承て防けるが、中、此城持こらへ難しとおもひ、大田方へ内通し、彼是と味方をかたらひ、近く城へ三樂勢を引入と相計る、搦守治は海上主馬五郎を招、我と御邊とが武勇いつの時をか期べき、兩人討出て敵に肝を潰させんと有ければ、武經血氣の勇士にて、是社望所にて候へと、一尺二三寸廻りの櫓の木を三間計に捻切に、片手に提、究竟の兵三百人前後に

隨打立ける、守治も爰を晴と出立、五尺三寸有ける大太刀を眞甲に差かざし、眞驀に討て入、堅横十文字に馳廻る、守治武經兩人が手先へ廻るぞ不運なれ、敵も大將と見知て、餘すな漏すなと十重二十重に取圍て責討ける、範政是を見て、大將深入し給ふ、續けや者共と乗出せば、行形、由良、岳見も追くゝに突て出、火を散して相戰、梶原下知して、名有者共討出たるぞ、一人も逃す討死と、麾を振立くゝ乗廻る、江戸崎鹽物時分はよしと裏切して責立る、味方前後の敵駆立られ、惣敗軍に及けり、漸くゝと氏治を土浦の城へ引取籠城してぞ居たりける、

木田餘落城並田宮合戰の事

歲月押移て天正十七丑年、大田、眞壁、北條、梶原等、木多勢にて出張す、氏治は木田餘の城を取立居られける所へ、梶原俄に押寄、短兵急に責動す、氏治も命を限りと相戰所に、梶原忍を入、夜に入て火を懸る、氏治防衛を失ひ、また土浦へ落給ふ、菅谷範政手勢五百餘騎を率て木田餘へ馳向、三箇日息も續せず相戰、彼の城を取返し、敵大勢討取けり、扱また藤澤の城を修理し、氏治の居城とぞ成にけり、斯て範政は梶原美濃

守が居城の近所、田宮の郷に陣取、晝夜相戰ふ、梶原も勇猛のもの成ば、互に透を伺、去のびを入、手便を替責戰と雖、はかゞ敷勝負もなく、對陣して社居たりけり、

土浦の城開事

豐臣秀吉公關東へ發向有、小田原の城を責捕、奥羽まで討平給ふ、爰に於て土浦、藤澤、木田餘等も開城におよびけり、範政、範貞、土浦の城をさり、同所高津村に蟄す、文祿元辰年、淺野彈正取持にて、大久保相摸守、本多佐渡守奉り、家康公へ範政範貞父子被召出、上總國平川村にて千石の地拜領す、石田三成謀叛の節、左衛門尉範貞、秀忠公の御供仕、大久保加賀守手に屬し、眞田が城際まで附候所、本多佐渡守下知に依て、惣人數引揚られ候、其後家康公御直に氏治へ忠心の勸御尋御感有之、慶長八辰年十月、舊地の内常州筑波郡に於て五千石の地拜領仕、同十九寅年、大坂御陣の節御先へ罷立候處に、中途に飛脚を被下、佐保山の城御番被仰付候間、佐保山に至るの刻、其日の内に重て飛脚を被下、伏見へ被召出、松の丸の御番被仰附、元和元年大坂御陣、五月五日御出陣、

前日四日に於_二伏見_一、秀忠公之上意として、松平隱岐守に被_二相添_一、京都の御番被_二仰附_一、土井大炊頭奉て申渡す、兩度の御陣御番仕儀、達て御侘言申上所に、本多佐渡守申合候は、忠心の者と思召、京都丹波の入口へ城戸御番被_二仰附_一候儀、忝存可_二罷越_一よし申渡候間、上意難_二默止_一御請申上る所に、御前へ被_二召出_一、重疊之過分の上意、御番の様子、萬事被_二仰附_一候、同八日家康公御開陣の刻、御番所城戸際にて御目見仕候所に、範貞並家來の者まで御詞被_レ下、翌九日に二條御城におゐて御前へ被_二召出_一、銀子五百枚拜領仕候、同三巳年伏見御城へ加番被_二仰附_一、同四年於_二名古屋_一丸御番所にて死去仕、嫡子範重へ家督被_二仰附_一也、

右傳記蟲喰又者舊稿故甚破損往々難用に付政常公御代に至命有て古書の儘に引寫し置者也

寶曆八寅年中秋

茂木繁稔寫之

菅谷傳記終

箱根山中城責由來

去天正十八年庚寅歲三月廿五日、大閣秀吉公小田原北條氏政爲_ニ征伐、諸大將御供にて、豆州草原に御陣張給、駿府内府公者駿東郡長久保後陣被_レ召候、同廿六日山中城責之御評定有_レ之、來廿九日定日と被_レ出仰、其節諸大將並居被_レ遊序にて、大閣之上意には、此度先陣何人か被_レ望候哉と被_ニ仰出_一候處に、諸將一道に御請無_レ之、依而大閣被_レ仰候は、此度之先陣相勤候者には、一箇國心に被_レ任之由被_レ仰候、依而直末公席に進出仰候は、身不勝には候得共、御上意蒙候は、拙者罷向、一戰に踏破可_レ申由言上可_レ致候得ば、大閣御満足に思召、然者何國か被_レ望候哉と御尋之處、伊豆國者銘國に候得ば、豆州を頂戴仕度旨申上給、左候は、伊豆守と名乗被_レ申候様上意に而、御返答御請被_レ申御退出被_レ成候、依而陣中御歸り被_レ成、物見を出し物見之旨申付候、依而御家臣某早速乗付見分申處に、山中城下出崎有_レ之候處に大筒三丁並、用心之躰に相見候故、早刻立歸り此由言上仕候、依而直末公思

召候は、一大事之先陣也、用意に向がたく御かくご被_レ成候、御家臣に被_レ仰候は、此度之先陣大切成、各々得とかくごを究め被_レ向候様に被_ニ仰付_一、廿九日を相待被_レ申處に、山中大將間宮豊前、小田原城評定之節、松田尾張守評定宜からず故、最早代々御家此度滅ばうと心にかたく究め、私等も年七十六歳、おしむ所もなし、とても此城以かため候とも、何の益無、一戰に打死して、末代名殘し可_レ申と分別究、上方勢に何のうらみ無_レ之、大筒にて打捨る事無益のせつ生なり、敵之はたの手見へざる内一はなし候は、後は無用なりと下知なし、手勢三間計引連、下長坂迄出張して、待所に、一柳伊豆守直末公家來に下知傳被_レ申候は、此度一戰某一大事戰なり、必ず未練のはたらき無用也、名は末代事也、御前おゐて高言申上候處也、面承知被_レ致様に御下知有_レ之、明七つ時、巢原出陣有也、夫より三嶋明神江御拜被_レ成、山手江御向被_レ成候、はた手見ゆる比大筒音電如く吹ひき、各々きもを消路留る、大將下知して、山中城者殊外あはて候故、かならず恐事なかれ、戰は利有、すゝめ、御下知有、諸兵いさみすゝむ所に、三谷邊迄登り候時分、

間宮が旗の手見へ、下長坂に相待躰、程なく近寄候處、間宮中陣進出て呼り候は、それへ見へ候は、先陣の勢と見ゆる、山中城大將間宮豊前、當年七拾六歳也、早向てぢんじやうに戰、我等首取べし、大將は何人也と大聲にて呼りける、一柳きゐて、某一柳伊豆守直末也、不束あらじ打取れと御下知、それより戰初り、入替く九つ時迄戰、人馬つかれ、兩兵大半打死して、惣方入亂火花ちらし戰しが、間宮いらつて進出、一柳初而見參なり、一鍵參らんと、直末公目懸馬を飛せて築て懸る、心得たりと鍵を合せ戰ひ給所に、間宮は坂の上手成、一柳は坂下より築上る鍵也、直末公馬足踏そんじ馬より落候處、間宮心得たりと左のかた、先つき立、あまりつき候故か、馬より供に眞さか様に落候故、一柳兵共主人を打すまじと、むらがり寄所、間宮が家人も共に寄、主人をかひほうして、馬打乗せ、陣中引とす、一柳兵打取らんとむらがり戰ひ、三十六人同枕に打死、其内直末公を介ほうして、其ほとり迄引ゑりぞく、間宮も數所手負、半死半生にて城中へ入事かなはず、上長坂にて打死す、直末公も其手にて御死去成り、城將死去候へば、山中兵共小田原指

て引歸す、其内大閣秀吉公、伊豆佐野口より、箱根境木迄御登り有て、小田原に御發向成り、山中城一夜に落し次第、誠に一柳伊豆守直末公の大功成り、御遺骸は其地葬り、大石を集め塚に築立、亂世の習其儘年を経て、御石碑相豎候由申傳へ候、聞書如此御座候、敬白、

從五位下伊豆守越智直末公碑文

御墓出來之碑文
倉氏先祖寫之

公諱直末、濃州厚見郡人也、父又右衛門尉直高、處士不仕、潛隱終身、公以天文二十二年癸丑之歳、生於岐阜城下西野邑、幼而穎悟過人、及長也雄才拔群、元龜庚午歲未及弱冠而事于豐臣大閣、而勤仕無怠、屢有戰功、是以賜于宇治真木嶋城、采地一萬石、從其以後遷于江州勢田城、采地一萬五千石、及濃州大垣城、采地二萬五千石、又遷於同國輕海河田邑、采地六萬石、小田原北條氏政負險不服、大閣征代之、公爲先鋒、攻于宮根山中城、即日城陷、公大振勇力、而死于城下、享三十有八歳、家臣住居助四郎亦一所而死、實天正十八庚寅歲三月廿九日也、葬于遺骸豆州宮根山之内下長坂矣、公娶于黒田氏某、有子早世、弟監物直盛嗣其遺跡、直盛有子、長丹後守直

重、次美作守直家、季藏人直賴、有子卽山城守直治也、直治以爲、歲月淹延、陵谷變遷、子孫或失某墳墓、故爲下立三石碑、以垂中不朽上矣、

大通院殿前豆州大守天叟長運大定門

此書者駿州駿東郡上石田邑百性に而代々福者に而、宍倉儀兵衛某子、同致孝と申、名者和助と申、生年廿三才也、私駿東郡江十五箇年程以前、初落付、寶藏寺江安居住居砌、入魂に成候仁也、久々に而思ひ出し參り、一夜滯留仕、四方物語之節、風と御墓地咄致候刻、其古戰場物語私方に委、先祖之聞書の者有之、御目懸可申段申吳候故、望所に候へば、其日緩々滯留致寫參り候、然老筆故分りかね可申と奉存候、宜御推察可然奉存候、敬白、

相州愛甲郡荻野邑養德禪寺

現 東溟徒

晚了拜書

忍城戰記

忍城攻之事

天正十八年庚寅之春、武州忍之城主成田下總守長氏舍弟左衛門佐等、隨北條氏政、籠相州小田原、然處同年四月廿九日、石田治部少輔三成、大谷刑部少輔吉隆、長東大藏大輔正家、速水甲斐守晴之、堀田圖書之助勝吉、野々村伊豫守雅春、伊東丹波守重實、中江式部少輔有能、中嶋式部少輔氏種、松浦安太夫宗清、鈴木孫三郎重朝、北條左衛門太夫氏勝、其外關東諸城之降人、都合二萬三千百餘人、圍忍城、成田之妻女、招家人正木丹波守、酒卷勒負之助、柴崎和泉守、吉田和泉守等、曰、敵兵攻取於館林城、而此城寄來由有其間、長氏被居當城、無勢也、敵定可爲大勢、味方籠城能可拒之、無云甲斐被責落者、長氏之死生難計、到百姓、町人、寺法師等悉馳籠于城中、兵糧五穀之類、日比農人、商夫、寺社等所畜置、早可取入云々、正木答云、縱雖小勢馳向川俣之渡、防敵可安乎、雖然關東之諸城悉降、敵前後無味方、發兵

川俣、後敵兵襲跡、忽可落城、只堅守城可防敵兵、旨、評議一決、一日之內相觸近鄉隣里、運取米穀數萬石城中、而後所々持口定、

長野口持

吉田和泉守、柴崎和泉守、三田加賀守、鎌田次郎左衛門、成澤庄五郎、吉田新四郎、三田次郎兵衛、秋山搦右衛門、足輕三十人、農人三百餘人堅之、

此口之寄手大谷刑部少輔、堀田圖書、松浦安太夫、其外騎西館林之軍勢六千五百人、長野口北谷迄引圍、

北谷口持

西木十郎兵衛、藤井大學、同右馬之助、橫田大學、沼澤兵庫、江田主水、足輕三十人、農人二百人堅、

佐間口持

正木丹波守、福嶋主水、長谷部隼人正、內田三郎兵衛、櫻井文右衛門、內田源六、足輕四十人、農人商夫、都合四百三十餘人堅之、

此口寄手長東大藏太輔、中嶋式部少輔、速水甲斐守、並、羽生、津久井、關宿之降人、四千六百人圍是、

下忍口持

酒卷勒負、矢澤玄蕃、酒卷右衛門次郎、手島采女、櫻井

藤十郎、堀勘五郎、青木兵庫、足輕百人、百姓町人六百七十餘人堅之、

大宮口持

齋東右馬之助、布施田彌兵衛、佐東彌市郎、松岡十兵衛、門井圭水、小高右京亮、平賀又四郎、此口之寄手石田治郎少輔、北條左衛門太夫、伊東丹波守、鈴木孫三、並佐野足利之降人、都合七千餘、陣丸墓、而下忍口ヨリ大宮口迄圍之、

行田口持

嶋田出羽守、吉野源太左衛門、同源三郎、坂本將監、福田治郎左衛門、萩野傳右衛門、吉野源七郎、足輕百廿人、百姓町人五百人堅之、

皿尾口持

篠塚山城守、松橋内匠、安藤治郎左衛門、宮原右近、足輕廿五人、百姓町人百五十人堅之、

此口寄手、中江式部少輔、野々村伊豫守、並川越、江戶、加治之軍勢五千騎圍之、此口深田、而人馬進退不自由、間、各遠取陣、

持田口持

長鹽囚獄、松本織部、長瀬新六、黒田新六郎、足輕廿五

人、百姓町人都合百七十五人堅之、

寄手此口開而不圍、其故者、城兵之心不一、輒可攻落謀也、其外城中佐々野萬十郎、栗原攝津守、今村佐渡守、山田又右衛門、加藤五郎兵衛、吉野織部、中村圭水、大水四郎右衛門、鈴木彈正、藤大炊助、林野市右衛門、伴近林、加藤隼人正、吉羽彦之丞、森傳十郎、吉羽織部、八木原織部、茂松刑部、以上十八人、籠所々門堅、又城中持口之外所々堀裏、十五歲以上童等添旗、百姓少々是難、令見大勢有之勢敵兵、預大鼓、若敵持口之外攻來、急可打大鼓、由有評定、下知其外籠城女童、每日三個度煮飯、所々持運、持口城主之室女甚有知謀、勇越丈夫也、敵若城中攻入、一合戰可致旨有用意、相待、凡城中侍六十九人、足輕四百廿人、百姓町人寺法師雜兵以下、所々持口之人數、都合二千六百廿七人也、十五歲以下之童部等千百十三人、男女都合三千七百四十人、櫓籠也、寄手総人數二萬三千百餘騎圍城、此城抱大沼、四方道窄、左右深田、而大勢進退不自由、細道進順、攻戰之間、寄手々負死人甚多、城中兼日定約云、雖何持口、味方打勝、可吹立具、味方及難儀、可鐘撞、最螺大鼓鐘等數、每日評定

之、若聞鐘音、他自持口互可助合議定、要害尋常堅固、急可攻落、不見、爰尾尾口寄手二千騎、欲直進攻破、城中鎮鳴、敵近付、攻口大將松橋內匠、以大鐵炮、敵中打入、忽寄手八人被打殺、手負若干也、敵成野白、不進得、城兵乘氣、如雨鐵炮打出、內匠又打入大鐵炮本陣、又敵三人忽死傷、大將驚云、此城治在四方、大勢進退不自由、然寄來餘近、爲敵有利、味方無利、今少引退、上栖樓、四方以大鐵炮、自此方可打入、引退陣、自是此口止合戰、打合鐵炮、送日、

同六月七日、石田三成近習之兵六七騎率而出陣所、登小山、忍城下見、而則招諸將云、今見城跡、兵糧玉藥卓散、而究竟之要害也、故雖大勢攻不落、唯今迄關東之諸城輒攻落事、或要害淺間而不防戰、恐大勢乞降、今此城已能防兵、見此城之形勢、地下有流水、便所詮築堤、切掛利根荒川、可致水攻乎云々、皆云、此儀可然、於是石田則相觸于近鄉隣里云、不依男女兒童、來忍城外、連土築堤者、可賜米錢云々、依之近國近隣鄉農人商夫兒童等、端的數十萬人相集、不分晝夜、持連土之間、數千間

之堤、四五日之中築之、石田相謀賜米錢、晝一人永樂六拾文、米一升、夜永樂百文、米一升也、此時城中之農人商夫、以錢買米入城、奉行人間、是事、告石田云、自城中取米入城、然兵糧不可盡、彼輩一召取可誅、石田云、不然也、堤成掛水、城兵一人不殘可殺、然兵糧雖有幾十萬石、無詮、唯一人多招集之、一時早堤出來樣可相計云々、故不倚、

同月十一日、石田三成所築堤成就間、以入夫堰留利根荒川、切掛於江原堤間、忍之城外數十町四方、忍河水流入、漫々殆如湖水、湛六日、人皆哀、可城兵溺死事、然城中敢水不溺、波浪漲無道路、故、城兵解甲、寬伏、以日來之忘辛苦、

同月廿日、於小田原、秀吉公召山中山城守云、汝與忍城主成田、相知事久矣、試遣一翰、可令降、彼吾、山中畏歸陣所、則書馳成田、其狀云、

捧一封、伸寸志、畢、仍年々預溫問事、甚以恐悅之至、更以甚深候、就中關八州氏政家人之城々、或被攻落、或降人成畢、然其御城涸魚迫服前候、貴翁先祖之家業、絕不絕、昌不昌、有唯今寸志、秀吉御前之儀、宜執申之條、急被變御心、尤候、委曲

使者可_レ得_二芳意_一之條、不_レ違_二禿毫_一、恐惶謹言、

六月廿日

山中山城守

成田下總守殿

密通之使者夜半出遣處、無_レ恙到_二成田陣所_一、成田使者對面、聞_二口上_一、且見_二書狀_一、以爲北條家之滅亡有_レ近、相_二續名字_一、祭_二先祖_一、不_レ絕樣可_レ仕旨、返翰云、

御内狀之趣辱次第、難_二楮上盡_一、御前之様子宜樣頼入外無_二他事_一、委細之儀御使者任_二口上_一之條、止_二管城_一云、恐惶謹言、

季夏念日

成田下總守

山中山城守殿 同章

山中持_二成田回章_一、獻_二秀吉_一、々々御感也、

同月廿四日、秀吉公御家人淺野彈正弼長政、木村常陸介、赤座久兵衛等、昨日武州岩槻城北條十郎氏房之家妹尾下總守、片岡源太左衛門等楯籠攻落、而後忍城之未_レ陷由聞_レ之、今夜寅刻立_二岩槻_一、未下刻到_レ忍、淺野長政陣_二長野_一、木村常陸介赴_二皿尾口_一、赤座久兵衛加_二石田_一屯_二崎玉_一、于_レ時石田三成招_二一手之次將等_一、長政既攻_二落岩槻城_一、今日到_レ忍、定而急攻_二是城_一、若爲_二長政_一被_レ落、自_レ初軍功如_レ無、唯願當手之士卒一心

可_レ攻_二破下忍口_一、皆此儀從、仍案内者立_レ前、俄以押寄、短兵急欲_二攻_二城兵_一、以_二俄騷動_一頗失_二防戰術_一、于_レ時此口之大將酒卷鞆負助、鳴_二相圖之鍾_一、故所々自_二持口_一分_二人數_一、救_二下忍口_一、敵兵進直附_二門脇_一、後陣之大勢又乘_二堀爲_一入_二内處_一、所々加勢馳來、而飛_二鐵炮_一如_レ雨、乘_二堀爲_一入_二内輩_一、以_二鎚長刀_一突落、此時石田軍兵一度乘_二堀、城兵可_二難儀_一處、道窄左右先後在_レ沼、適入_レ渥者進退失_レ途、唯的成討、僅四五十人進_レ順乘_二堀入_一渥間、城兵防_レ之有_レ便、此時若寄手_二搦軍_一一度自_二諸方口_一々々攻入、可_レ落_二城處_一、石田兼諸方不_二狀合_一、欲_レ立_二唯一身故_一、諸將徒_二見物_一、於是石田兵忽_二三百餘人討_一、手負及_二五百人_一、此時淺野長政在_二長野_一、當_二已手方_一、時聲矢呼音聞、搦手既攻_二城_一、若於_二落城_一無念之次第也、急押_二寄長野_一出張、一慶越_二堀破_一柵附_二木戶口_一、城兵暫雖_二相防_一、大勢自_二所々_一押入之間、頗以_レ手如_レ防_二水_一、城兵評云、堅雖_二木戶口_一防_二大勢_一自_二所々_一込入之間、被_二取切_一、復敵不_レ可_レ叶、所詮捨_二此口_一成合行田勢可_二相戰_一者引退、寄手乘_二氣圍_一是、要_二彼攻戰間_一、城兵大勢討、漸欲_二逃入_一城處、淺野長政進_二真前_一可_レ附_二入城_一旨下知、城兵柴崎和泉守、吉田和泉守、同新

四郎、三田加賀守舍弟二郎兵衛、鎌田次郎左衛門、成澤庄五郎、秋山捨右衛門、其外從城中爲加勢、吉野織部、鈴木彈正、大木四郎右衛門等、蹈止々々拒戰、此間足輕農人等漸引、取城內、既八人之城兵欲入門內處、大谷刑部少輔、堀田圖書助等組輩、青山九郎八、飯沼主水追番、欲入門、于時鎌田次郎左衛門、成澤庄五郎、秋山捨右衛門三人、猶蹈立橋上、以鍵折敷、突立々々相戰、橋窄前登之兵、辟易而敢不進得、鎌田云、急可木戸下、兵卒則木戸下、此間敵大勢、競來、三人一所討死、敵乘氣欲附門乘、城兵兼防鳴鐘、于時正木丹波守率五十餘人、自佐間口出、敵廻後放鐵炮、發鯨波、有裏切、由喚叫、於是敵騷立引退、城兵勇開門突出、正木得力追之甚疾、半途追捨敵輕入兵、此時長束大藏大輔正家、行田下忍有合戰之由見、俄進兵攻佐間口、速水甲斐守、中嶋式部少輔、其外羽生津久井園宿之軍勢、我不劣押寄、道窄人多不進退自在、唯進順、此口之大將正木丹波守率立十餘人兵、救行田口間、當手以外無勢也、此由城中聞、今村佐渡、山田又右衛門率手勢出來、引弓以鍵一方相防、其外福嶋主水、長谷部隼人、內

田三郎兵衛、同源六、櫻井文右衛門以下、馳廻令打鐵炮、長束老臣家所帶刀、白杆平四郎、一宮喜兵衛、有坂宮內以下十人計、奔々附門脇、長束正家爲下知、先登之兵討續者共進兵處、正木丹波追捨長野口寄手、自佐間口欲入城中、敵兵見自行田、致後詰心得、周章騷引取人數、誰無追者言、或自橋被闕落、或深田乘入馬、進退失者若干也、被討者無言、武具悉賦見苦、此時若自城中突出、寄手大勢可被討處、小勢故不出、唯作勝時鳴螺、討而出不追、日暮道不見、殿引味方、敵追來心得、亂足逃走、本陣不留者若干也、凡今日之合戰、長野口寄手々負死人及四百餘人、城中又侍三人、足輕十二人、農人商夫八人、若黨九人、都合三十二人討、手負及四十人、下忍、佐間、長野三方寄手若干討、或蒙疵者不知數、酉之下刻各歸本陣、

同月廿五日早朝、自小田原秀吉公之御陣所、飛腳到來、諸將會合書狀披見之處、秀吉稱仰、山中山城守有申旨、其詞云、成田長氏事、志通秀吉、附某乞降、仍則有免許、城未陷早解圍、東州若不從有城可攻取、依之石田則右之趣告、城中、今日午刻、請取

城拂陣、城中男女出籠如鳥悅、今度正木丹波守武
勇、敵味方共感之、

天正十八年

右戰記求三武州南河原今村氏家家藏之本而寫之、
今村氏者、佐渡守之末孫也、

寛政十年正月七日書寫畢

成田左衛門尉泰親九代

隆見齋元維(花押)

清正高麗陣覺書

酬を待て羽柴筑前

關白秀吉公御治世之事

一爰に本朝人皇百七代帝正親町院御宇に至て、羽柴筑前守秀吉といふ者あり、織田右大臣信長の臣下にて、中國の先手として、備中の國在陣之刻、去ル天正十年六月二日に、信長本能寺に御座候時、明智日向守と申もの信長を恨申付細有之ニ付、本能寺におし寄、信長に御腹を切らせ申候、其到來秀吉陣所に聞へ申付而、中國をバ扱させられ、則京都に責上り、明智日向守を退治し、其後越前の柴田修理亮をうち果し、天正十三年秀吉を被_レ任攝政關白、明る天正十四年に豊臣姓を給り、攝政關白豊臣朝臣秀吉と號、被_レ補_ニ任征夷大將軍、然る所信長の嫡子織田三七殿とて御座候が、秀吉を御恨候て、隱謀の企あり、就_レ夫織田三七殿を擒、尾張國にて知行を可_レ被_レ進之と候て、うつみに被_レ遣、うつみにて御切腹被_レ成候、其時三七殿自製、

むかしより主をうつみの野邊なれば

秀吉思召候ハ、いづれぞ壹人ハ、信長の御子息を御取立候するとの儀にて、信長三男織田常信に尾張八郡、北伊勢五郡、以上百萬石之積り被_レ進_ニ御取立、候、されども常信是をも祝さ_ニ不_ニ思召候、乍去大閤信長公の御厚恩を請たる人にて御座候ゆへ、小牧陣以後も尾張八郡、北伊勢五郡、百萬石餘被_レ進、御位内大臣迄御へあがり候て、尾張内府と申候、その後小田原陣以後御國被_ニ召上、御法躰にて常信と申候、其儀ハ信長に大閤記に有_レ之付而不_レ及_ニ書載、候、其後九州陣御座候て、嶋津和平を乞、御馬をつなぎ、九州にて治申候、左候て天正十七年丑のとし、肥後の國天草合戰御座候、明る天正十八年寅のとし、相州小田原陣御座候て、北條氏直に腹きらせ、それより奥州五畿七道日本國中、秀吉公に不_レ隨といふもの壹人もなし、其後ハ天下一統し、上壹人を敬、下萬民を撫られしかば、四海の外も普其權勢に不_レ服といふ事なし、堯舜の御代にも越、延喜天曆乃古風にも過たり、寔に天に請たる聖主、地に受たる賢君なりとて、民みな堂々の化に誇、其德

を賞せぬものばかりけり、され共、天ハ滿を闕ならひなれば、天正十九年九月に秀吉惣領八幡太郎殿御逝去候ニ付、其年のくれに秀吉甥乃三好中納言秀次を養子に被_レ成、被_レ任攝政關白、之ゆらくの御城被_レ渡、秀吉を大闇と申事、

高麗陣被_ニ思召立_ニ藍觴之事

一高麗被_ニ思召立_ニ藍觴ハ、天正十九年九月に八幡太郎殿御逝去之時、日本の諸大名小名共におもひく御望のため、もとゆひを拂申候、關白秀吉公も以之外御臆氣にて、御膳もあがり不_レ申候刻、加藤主計頭清正御前に罷出申上候は、古より神功皇后應神天皇以來、三韓より日本の御貢を備へ候ども、近代は左様の手筋も取失ひ無_レ之候間、八幡太郎殿御吊に被_レ當、高麗の御人數被_レ遣候は、清正が先手をうけ給、高麗國王をとらへ、日本に御貢を納させ可申候、通_ニ清正被_ニ申候得ば、其時秀吉玉顔初て解、扱々可_レ然儀を申上候、則高麗陣可_レ被_ニ思召立_ニとの御誼にて、秀吉公即時に備定被_ニ仰出_ニ候事、

高麗御陣備定之事

一秀吉公被_レ仰候は、主計頭は先手を望候得ども、清

正は高麗の舟道陸道可_レ爲_ニ無案内_ニ候之間、先手は小西攝津守行長に、有馬、大村、五嶋、平戸、壹岐嶋、宗對馬守を與力ニ付、自分共ニ二萬五千騎、二番手の大將を加藤主計頭清正ニ、龍藏寺、松浦、相良相加り三萬騎、三段は黒田甲斐守父子、豊後之大津義宗相加り二萬五千騎、四段は毛利壹岐守大將にて、薩摩嶋津兵庫頭父子、伊藤修理亮、秋月、高橋相加り三萬騎、五段は小早川左衛門佐隆景、毛利藤四郎秀包、立花左近將監、筑司主水正相加り二萬五千騎、其跡ハ毛利中納言輝元息宰相秀元、四國、中國、五畿内、東海道、北陸道、おく奥州に至まで、日本國中打移し可_レ被_ニ差遣_ニ之由被_ニ仰出_ニ、則諸大名衆に被_ニ相觸_ニ候事、

名古屋御城普請之事

一加藤主計頭清正は、筑紫に罷下、肥前國名古屋に城普請仕候へと被_ニ仰出_ニ、御暇被_レ遣候に付、翌日早天に罷下、九州九箇國の惣人數相催、名古屋の城普請被_ニ申附_ニ、九月下旬より十二月中旬迄ニ大坂におとらざる御城出來申候、左候て、加藤主計頭清正其外各爲_ニ越年_ニ京都へ罷上候事、

文祿元年正月朔日兩御所御對面之事

一 明る文祿元年正月朔日ニ、當關白秀次公の御座候
ぢゆらくの御城に諸大名不_レ殘出仕被_レ申、それよ
り直ニ大閣様御座候御所に仕被_レ申、大閣何と思
召され候や、御機嫌惡しく、いまだ大名衆に之御對
面も無_レ之候て、いづれも不興の躰に御座候處に、
大鞍うちの樋口と申もの御前に罷出、目出度御正
月にて御座候段申上候得ば、秀吉御誼ニは、何が目
出度正月にて有べし、天下をバ人ニとられ、かやう
に隱居にて物毎手せはき仕合にて、面白も不_ニ思召
候よし御誼にて、樋口も詞なくしていよく大名
衆に之御對面延引仕そうニ御座候付而、各被_レ申候
ハ、今の御きげんにてハ如何敷候間、主計殿御前に
被_ニ罷出、何とぞ御意に應じ候事ども被_レ申可_レ然よし
被_レ申ニ付、主計頭其節諸太夫の官にて御座候ニ
付、赤襷束にて一番に大閣の御前に罷出られ候へ
バ、御誼ニハ、主計名古屋城普請はいかい候やと御
意ニ候、主計頭申ハ、名古屋の御城悉出來にて、大
坂におとり不_レ申候、結構に出來申候段申上候へバ、
そこにて御きげん直り、扱ハ其通候や、御祝着に

被_ニ思召一候通御意にて、諸大名衆に之御對面相調
候事、

諸大名衆御暇被_レ遣國々に罷下陣支度仕候事

一元日之御目見相濟候て、加藤主計頭清正、小西攝津
守行長、其外諸大名衆に御暇被_レ遣、當三月ニハ御
出陣被_レ成候間、各國元_に罷下支度仕候へとの御誼
にて、國々に被_レ下候事、

各高麗渡海并釜山海城落去之事

附けくまう古都發向之事

一文祿元年三月上旬に、小西攝津守宗對馬守一手之
先手衆出船仕候ニ付、二番手加藤主計頭、三番手黒
田甲斐守父子、四番毛利壹岐守一手之衆、五番小早
川左衛門佐、其外次第に船仕、肥前國名護屋
より壹岐國に乘、それより對馬、それより釜山海に
一日おくれに渡海仕候、一番に小西攝津守一手の
衆、ふさんかいに切上り、ふさんかいの町を放火
し、數千人うち捕、釜山海の城を取、主計頭を相待候
處に、次の日早天に主計頭もふさんかいに着陣す、
夫より都にの道二手に分り、ふさんかいを右に見
候て、やくさん海道には小西攝津守、ふさんかいを

左に見候て、とゞねき海道へは加藤主計頭おし候而參候、ふさんかいより十三里おくに、けくちうとて古都に家の二三萬軒も御座候處へ主計頭着れ、其所を發向し、數千人うち捕申候、則其到來を日本へ被_レ仰遣_二候、其時の使庄林喜右衛門と申ものにて候、歸朝仕、都をさして上り候處に、筑前國めいの濱にて、大閣様なごやへ御座候路次にて懸_二御目、書狀を差上申候、大閣殊之外御祝着にて、使庄林喜右衛門に御羽織ども被_レ下、主計頭へは御感狀被_レ遣候事

ちくちうにて清正行長一所へ行相亂妨物ども
焼捨候事

一けくちうより九日路行候て、ちくちうと申所に着陣仕候、そこにて唐人を生捕、是より先へ日本勢通り候やと被_レ尋候へば、壹人もいまだ不通候よし申候、就_レ其ちくちうニ二日逗留被_レ申候所ニ、小西攝津守一手の衆二萬五千乃人數亂妨仕、ぬのもめの類を大分とり、牛馬につけ候て、ちくちうへ被_レ參候、其故路次のはか不_レ行候、それを清正見られ候て、小西に向て被_レ申候は、都へ行候へば、きん

らん、段子、金銀、珠玉みちくちて有_レ之ニ、かやうのきたなき物共大分取候て、何の用に可_レ立ぞ、悉爰にて焼捨候てかるくさせられ、いそぎ都に着候て可_レ然之よし被_二申付_一候て、右之亂妨物を一所に積置、山のごとくにつみ候て、火をつけやきすて被_レ申候事、

清正行長又手分仕南方へ行別候事

附清正都川渡候事

一ちくちうにてまた都への手分仕、東大門口へ小西攝津守、南大門口へは加藤主計頭被_レ參候、是より都内之案内者通詞を對馬守にやとはれ候へば、徳右衛門と申通詞いまだ都へ參たる事も無_レ之と、もりを一人やとわかし申候、それを馬に乗先へ立、ちくちうより二日半行候へば、大川御座候、爰に至て向へ越可_レ申便無_レ之ニ付、主計頭先手衆より本陣に此段申越候、清正もいそぎ彼所被_レ參候得ば、川の面二三町も御座候、向ニは播磨の室、備後の鞆のやうなる瓦葺の家ども幾千間共、相見へ候、舟も向の地ニは數百艘御座候得共、此方の川ばたニハ一艘も無_レ之候、何とも可_レ仕やう無_レ之候て、眺居

候處、紀の湊の住人峯佐助と申者、私および候て參見可申と申候て、川中迄參候へども、向へおよび着候事不叶、此方の地に相戻り候、然處に、越中國礪

並川の邊に住たる曾根彌平兵衛と申者の子に、曾根孫六と申者、歲十八歲に成申者候、彼者すゝみ出て申やうは、是ほどの川をば何とも不存候、礪並川はこれよりも大分瀬のはやき川をさへたやすくおよび申條、私向へ參候而、小舟を一艘乗候て、可相戻と申、主計被聞候て、一段よき事を申候、さらば早々參候て見候得と被申付、彼孫六および候て、難なく向の岸に取あがり候、左候て大なる家の内へ參見候得ば、はや明退食を焼捨候て置申處を見候て、其食を給、酒を吞、まばらく休罷居候て、小舟を一艘乗、此方の地へ戻申候へば、清正嬉しがり候て、其にて知行二百五拾石并馬具足被遣、親の知行貳百五拾石と合五百石の役目を親子仕候、其舟に人を乗、向へ渡し、大船を漕よせ、また人を遣、數百艘を少しの間にこぎよせ、清正先手の衆清正を初め五六千程へ、其日向の地へ着陣候て被居候、跡勢并鍋嶋勢も如、此の仕合候間、早々人數差越候へと

の使ニ、木村又藏を被遣候、又藏罷越此通跡勢并鍋嶋勢ニ申聞候へば、各早彼所に參、舟ニ乗、向の地へ罷着候事、

清正都に一番乗仕候事

一木村又藏主計殿陣所に相戻り、跡勢も次第に參候通申上候て、それよりうしろの松山へ上り、榮さらしなどの有之所を見置可申と存參候處に、二三町計原を行候て見候へば、都の跡見候、高所ハ内裏と覺敷て、少火事相見へ候、其外大小の家何萬軒ともなくおびたく相見へ候ニ付、又藏立歸、清正へ申上候ハ、則爰が都にて候、早々被立候て可然候、爰ハ都より辰巳にて候、都より丑寅の方に遠山には、小西攝津守がのぼり相見へ候條、早々御立候て都への一番入をさせられ候て可然候通申上候へば、其時清正被申候ハ、都ハ是より日本道四里ばかり先にて有之由申候へば、又藏が見候ハ、僻目にて候ずると申され候、其時達而左様にてハ無之候、無紛都にて御座候通再三申上候付、さらば可立と被申候、具足を被召當番の母衣の者、阿波伊兵衛嶋川九兵衛兩人、御右筆下川兵太

夫、主計殿主從四五人、木村又藏を案内者として、馬上にて至_二彼所_一被_レ見候得_レ、無疑都にて候付て、主計頭都へ之一番乗仕候通、太閤秀吉公に被_レ遂_二注進_一候、其時の使木田孫兵衛と申母衣之者也、名古屋にて太閤御對面被_レ成、鞍置馬被_レ下、主計頭所へハ高麗之都へ一番乗被_レ仕、無_二比類_一之通、御感狀被_レ下候事、

諸勢都に被_レ着候事

附王をとらへ可_レ申とて清正行長又手分仕兩道を押申事

一都に十七八日逗留候て、跡勢被_レ待候内ニ、太閤爲_二御名代_一、浮田中納言秀家、并石田治部少輔、増田右衛門尉、大谷刑部少輔、其外四國中國衆悉都へ被_二相越_一候、左候て、御名代秀家石田治部少輔兩人、小西行長を被_レ引候故、王をとらへさせ可_レ申とて、本唐道へいあん道へ小西行長を被_レ遣候、其故ハ高麗都に之一番乗を加藤清正仕候條、責て王をバ小西ニとらへさせ可_レ申との儀と聞へ申候、其續きはんはい道へハ、黒田甲斐守、豊後大津、かせんほへは、小早川左衛門佐、是ハ本唐道へ之道筋也、るあん道

へハ加藤主計頭清正、龍藏寺、相良宮内少輔、都之續かあん道へハ、毛利壹岐守、大隅、薩摩、日向之衆、其外ハ都と釜山海との間、傳ひく_二の城_一へ被_レ遣候事、

長橋と申府中に王御通り候段札を立候事

附鍋嶋異見候へども清正承引不_レ仕おして參候事附りはいれぐ人王をとらへ置候通清正へ注進申事

一都より五里行候て、かをんほ川を渡り、三里行過別の道有_レ之、夫より小西攝津守、黒田甲斐守ハ、本唐口をさして押され候、是ハはんはい道の内なり、加藤主計頭ハ、るあん道丑寅をさして押され候、都を出て十三日めニるあん道のさしより、あんへんと云都ニ被_レ着候、文祿元年七月五日ニ着陣候て、あんへんにて鍋嶋を待合候て、十日逗留し、七月十六日ニ清正も鍋嶋も跡勢ともあんへんを立、三日路行、長橋といふ府中ニ着被_レ申候、然所ニ長橋の町ニ札を立候て、高麗の王ハ御兄弟ともニ是より奥へ御通り候段申候、其時清正殊之外悦候て、王を追詰生捕候べしときおひ被_レ申候所ニ、鍋嶋清正に被_レ申候

ハ、異國の習、かやうに遠路を一處へおびき込候而、此方をつからかし、討捕候するとの手段にて候はんまゝ、誠に御心得候而追過候ハ、不覺を御取候する條、左様ニ御心得可被成候、第一我等者共ハ、都より十六日路、炎天に大難の道をおし候へバ、草臥候て不罷成候、爰元ハ米大豆などたくさんなる所にて候間、爰元ニ御逗留候て、都へ御注進被成、其様子次第、都へ御引取候て可然候通、鍋嶋被申候を、清正の手勢鍋嶋殿を案内者として、ほめぬ人ハなかりけり、扨清正鍋嶋加賀守殿へ被申候ハ、此札を唐人の立たる札とおぼしめし候や、全非其儀、天照皇大神八幡大菩薩の御立被成候札なり、神慮にまかせ追詰、帝王を生捕可申候、加州ハ爰に御まち候へと被申候、清正手勢一萬餘騎にてさきへさきへとおされ候、長橋より清正被立候て、明ても暮ても東丑寅をさして押程に、都を立て六十八日め、鍋嶋に別れて五十二日ぶりニ、おらんかいの堺なるほいれぐと云城ニ帝王御籠城ニ候、清正はほいれぐより四里こなた鏡の城、唐人ハとぐをんと申候、此所迄被參候、此ほいれぐといふ所ハ日本に

てハ八丈が嶋、いわうが嶋などの様なる流罪人の配所にて候、朝鮮國の内なり、三里四方の野あり、其中に山あり、石垣を築城取て、都よりの流罪人を置候、廻りの野を開、粟ひへを作り渡世を送り申候、然所ニ其城ニ代々乃流罪人歷々御座候ゆへ、一味にて、帝王ハ我々爲にハ代々の敵にて候、此ときついへニ乘て帝を生捕、日本人に渡し、日來の鬱憤を散じ、我々榮花にはこらんとて、悉生捕申候、帝王御兄をばいもはい君と申候、御弟をバ玄ゆのう君と申候、左大臣の名をバほう君と云、右大臣をバはんしん藏と云、其外月卿雲客十二人の后、次より女官迄以上二百餘人、悉生捕、首がせを入、日本人に注進申候、清正此よしを聞、先伊勢天照大神八幡大菩薩、日頃御玄んこう有り、三拾番御拜禮有之、終夜惣勢に被相觸様は、此中日本馬嗜おけと申は此時なり、明日はみなく日本馬に段々備も不入、ほいれくをさして來るべしと仰有りて、既に其夜も明ければ、清正は例のはね月毛といふ沓不入の馬に乗、まつさきかけて被懸けり、先手三組馬廻り小姓入亂、おもひくに駈出る、清正本陣鏡の城

より此所までは、道の間四里有之、

清正はいれくの城本へ參着候事

附清正城中へ入王を請取被_レ申事

一清正手勢一萬餘騎有_レ之といへども、傳ひく_レの城に残し置、はいれく迄參候人數八千餘騎也、はいれくへ參着候て、城を相渡し候するかと存候處に、城を不_ニ相渡_一門をうち罷在候、はいれくの者申候は、王をば搦置候間、城より外にて可_ニ相渡_一候、城中ハ日本人いれ申儀不_ニ罷成_一候よし申候、清正被_レ存候ハ、いかやうなる者をか王子と號し渡候ずると被_レ存、何とぞ城中へ入り候て、正眞の王か紛者かを見度存候へども、彼城にかたき人數三千餘相籠候、城ハ能き城にて候ゆへ、取か_ハり候事いかなり、まづ城中にて請取度通り申遣、様子聞、其上の儀に可_レ仕と被_レ存、おなじくば城中にて王子を請取申度よし申遣候得ば、左候は、大將主計小勢にて城へ御入候へ、王子を相渡可_レ申よし申附、清正入可_レ申よし被_レ申候、家老共申ハ、小勢ニて彼城に御入候事はいか_ハと達てとめ申候得ども、清正是まで參り、城へ不_レ入候事有間敷とて、無理ニ侍十

五六人計ニて城の内へ入られ候、内のやうすハ長サ七八町、廣サ六十間程有_レ之、大馬場御座候、其脇ニ瓦筵の家有_レ之所に、帝王御兄弟御座候其所に清正被_レ參御對面申され候、其時清正被_レ申候ハ、日本辨當振廻可_レ申上よし被_レ申、辨當取よせ申附、かよひの者として鎧武者に食次椀おしき箸まで一ツ宛侍共持候て入候ゆへ、鎧武者七八十人程内へ入申候、其時門番に申附、門を開候へと申候得ば、はや不_ニ相成_一門を開申候、清正當時の御知略不_レ淺諸人ほめ申候、清正王子御兄弟、其外之者ども皆々請取、早速人數千餘騎にて警固仕、鏡の城へ遣し被_レ申候、鏡城番ニ置かれ候、田寺久太夫、前野助兵衛兩人に、くつきやうの人數千相添預被_レ置候事、

おらん海人の城一日ニ十三取事

附其内一の名城は清正自身乗崩し被_レ申事

一其後はいれくの者、口ひき物がたりども、通詞を以被_ニ相尋_一、おらんかいの様子被_レ聞候處に、彼者申候ハ、おらんかいと申所は弓取多、事外すくやかなる國にて御座候通申候、清正さらば日本人の弓矢取候様子、おらんかい人ニ弓矢取候て見せ可_レ申、是よ

りいか程おくに勢ハ多く居候やと被_レ尋候へば、是

より四里半程行候て在所御座候、夫より一里計行

候得ば、城十三御座候通申候、夫よりまた一日路行

候得ば、おらんかいの都御座候通申候、さらばはい

れくの者先手を仕候へ、彼の所に御取懸け候て、日

本人の手なみを見せ候するとの儀にて、味方うち

無_レ之様ニと候て、はいれくの者三千計の者にハ南

無妙法蓮華經の題目を鐙にも笠にも書附候て先へ

おし立、日本人八千餘、都合一萬千餘騎にて彼所へ

おし寄られ候、明る早天に城十三有_レ之所に着陣

す、異國の習にて、前をバ堅固にかこひ候へども、後

ハ深山高石垣を頼、さのみ防申躰不_ニ相見_一候に付、

はいれく人をバ前へやり、日本人ハ後の山へかゝ

り、當に五十人三十人にて引申程の石をかなでこ

にて堀崩し、山より下へおとしかけ候へば、麓に有_レ

之家ども悉うちつぶし、鐵炮をうちかけ申に付、お

らんかい人不_ニ罷成_一退散仕候、其城十三の内川上

の方の名城一ツをば、清正自身取懸られ乗崩し被_レ

申候、其時清正うち木田孫兵衛と申もの、名譽の組

討高名仕候て、疵をかふむり申候、清正、ひざのうへ

にて看病被_レ成被_レ遣候事、

清正朝鮮地に歸陣仕候處おらんかい人猛勢に

て附送候事

一それより五六里程高麗の方へ引取、山陣を取、清正

被_レ居候、次の日高麗に歸陣可_レ仕と被_レ存候處に、

おらんかい人幾千萬といふ數も不_レ知、清正陣所に

よせかけ申候、其時清正自身ばれんの馬印を振被_ニ

切懸_一候て、日本人は八千四五之者手を碎き相働

候、清正下知にハ、首は不_レ入候間切捨との儀にて、

日本人壹人としておらんかい人廿卅切不_レ申とい

ふ事なし、就_レ其敵少々退申候、されどもかれは猛

勢にて御座候に付、物の數にもせず及_ニ難儀_一候、其

後また切かゝり候處、日本神國の故にて候や、其日

俄に大雨殊之外降て、おらんかい人のつらへ吹か

け申ニ付、又かゝり候事不_ニ罷成_一引退申候、翌日朝

鮮國の内、鬼せくと申所迄歸陣候事、

せいしう浦に罷越せるとうすをとらへ候事

附後藤二郎と申通詞をとらへ申事

一鬼せくに五日御逗留にて、人馬の足を御休候處、夫

より五日路東、せいしう浦と申所に、せるとうすと

申北國の武者大將罷居候よし清正被_レ聞候て、鬼せ
くより五日路東へと行、程なくせいしう浦に着候
而、せるとうすをとらへ申候、せるとうす歳の程は
五十四五、長六尺五寸計有_レ之、かすはひげの大男
にて御座候、せるとうすも日本人罷向候と聞、せつ
所ね引籠り、大勢にて罷在候を、清正内のいかるが
平治と申者大將にて、よき人數二千、鐵炮百挺相添
被_レ遣候て、うしろの山より仕より、無_レ難とらへ申
候、其所にて後藤と申通詞を壹人生捕申候、此後藤
と申者は日本松前より獵船に乗、風に放されせい
しう浦へ着候て、廿年計彼所に居申候に付て、おら
んかい口をも、朝鮮口をも、日本口をも、自由につ
かい申候、能通詞にて候ゆへ、清正重寶がり候て、
則二郎と名を附られ、後藤二郎と申候、せいしう浦
より天氣能時は、富士殊之外近く相見へ申候、彼所
よりは、富士山は未申に當りて見へ申候、松前より
は眞北にて候ずると存候、彼せいしう浦にも昆布
多く候て、家をも昆布にて葺候て居申候、初は昆布
と不_レ存候へども、後々は昆布と知り候て、家々の
上葺取、汁に仕、日本人給候事、

せるとうす王に對面之事

一せるとうすをとらへ候て、朝鮮國の帝王御兄弟、ほ
う君、はんじん藏以下悉生捕申候段申聞候へば、せ
るとうす申様には、それは朝鮮國王にては無_レ之候、
町人にて候を王に似せ候て置申候、本王は本唐へ
御退被_レ成候通申候、此方の者存候にも、是は定而
僞にて申するとは存候へども、底心には氣味惡敷
事を申物かなと銘々存候、左候てせいしう浦より
五日路行候へば、鏡の城へ着陣申候、彼所にてせる
とうすを王に對面させ候するとの儀にて、帝王御
兄弟高き間に御座候、其次にはう君、其次に清正被_レ
居候て、せるとうすを呼出し、對面させ申され候、
ゑん迄あがり候へと清正被_レ申候へども、ゑんへも
上り不_レ申候、白洲に罷居、首を地に附、泪をながし
鳴申候、左候て首を眞砂にきつく打附申候ゆへ、ひ
たいより血ながれ申候、其時清正申され候は、せる
とうすは定而自害を可_レ仕と存、かやうに仕ものに
て可_レ有_レ之間、通詞を以問候へとの儀にて、後藤二
郎を被_レ遣問申候得ば、せるとうす泪をおさへ申候
は、私事は其むかし小身なるものにて御座候へと

も、いもはい君の御親王の時、御目利を以國を被
下、武官を授、都より南けくい道、ちぐしやく道、
けくしやく道、せんらん道、此四海道の武者大將は
木曾判官、都より北かあん道、ゑあん道、はんはい
道、へいあん道、此四海道の武者大將はせるとうす
と定置かれ候所に、無_二其甲斐_一二弓矢も不_レ取、如
レ此王を生捕られ候事、骸のうへのちじよく不_レ及_二
是非_一候、日本人今少緩々に追附申候は、諸國に
觸遣人數十萬餘騎も集り、一合戦仕、王をば生捕れ
まじきものを、すき間もなく追附中に附、人數あつ
まり申事不_レ叶、王をも生捕れ、我々も如此四人に
罷成候事、生々世々に至迄口惜次第哉、生て二度龍
顔に對候事何之面目か有べき、せめて打死候は、
かやうに悲しき目にも逢まじく候ずれ、警固稠敷
候へば、自害も不_二罷成_一、不_レ及_二是非_一次第とて愁歎
仕候、其時玄ゆの君はう君をはじめ、日本人も上下
おしなべ、せるとうすが申所理りかなと、なかぬ人
はなし、

鏡の城よりあんへん迄清正歸陣の事

附つたひくの城に日本勢被_レ置候事

一鏡の城より朝鮮國の帝王御兄弟、ほう君、はんしん
藏、せるとうす、十二人の后迄同心にて、清正人數
一萬計にて、谷峯大川を越、八日路都の方へ歸陣仕
られ候て、吉州と申郡見事なる城の有_レ之所御座候、
此吉州より案邊迄十三日路をば、此方より持候て
年貢を納させ可_レ申候、其外ハあまり大そうの儀に
候間、捨にさせらるべきのよしにて、吉州より案邊
迄つたひくの城ニ人數五百三百ツ被_二殘置_一
候、吉州は清正持分之端にて御座候ゆへ、肝要の持
所とて、加藤右馬允、加藤清兵衛、加藤傳藏、並河金
右衛門、永野三郎左衛門、原田五良右衛門、天野助左
衛門、山口與三右衛門、以上八人より人數千五百添
候て被_二殘置_一候、それより藏床ニ、近藤四良右衛門、
安田善助、たんでん、是は銀山の事にて候、爰にハ、加
藤三右衛門、九鬼四良衛、井上大九郎、りせくには、
小代下總守、大脇次良左衛門、并組之弓三拾挺、ほ
くせんニハ、吉村吉左衛門、堤權右衛門、如_レ此傳
ひ傳ひの城に人數五百三百宛被_二殘置_一候、それよ
り三日路の間は、鍋嶋平九郎、成隅十右衛門、龍造寺
七良左衛門、傳ひくの城に鍋嶋殿人數被_レ置候、

長橋には鍋嶋加賀守自身被_レ居候、其次はあんへんと申所にて候、爰には加藤主計頭清正在陣仕、霜月十日頃より明る文祿二年二月廿日頃迄あんへんに被_レ居候、彼所より一日路有_レ之坂の下と申所には、多田茂左衛門に馬廻り之者四五騎添候て被_レ置候、あんへんより左手八里過、かあん道堺、はつかいと申處には、小田原半助木戸清助兩人に馬廻二三騎添、爲_二代官_一被_レ置候、其年の年貢浦々よりの上りもの調させ、そこくの藏に納置候事、

本唐口へ參候小西行長其外日本勢敗北之事

附都南大門合戦之事

一本唐口南海道へあん道の先手は、小西攝津守の人數合て二萬五千、二番はんはい道には、黒田甲斐守大將にて、大津義宗一手にて二萬五千、三番備はんはい道の内かさんほには、小早川左衛門佐隆景、久留米の侍從秀包、立花左近將監、筑司主水正、都合其勢三萬騎、高麗の都迄持つ_レけ被_レ申候、然所本唐の將軍まんろうや、やろうや二頭、かくなみ勢四拾萬騎にて、小西行長惣陣に切懸り申候、眞先にて、小西兄弟、小西類右衛門討死仕候、其組之者手を碎働候

て大分討死仕候、かくなみ勢四拾萬にて野山平地もなく陣取とり卷申に附、小西叶がたくやおもはれけん扱ひを取被_レ申候、さらば人質を出し候へと申に付、行長小姓頭竹内吉兵衛と申ものを人質に出し被_レ申候、此方へも人質くれ候へと申候へども、人質を不_レ出、竹内を唐人請取候て、あつかひにも不_レ仕、いよく取まき攻申に付不_レ叶、先手の小西二番備の大津陣に崩かゝり申候段被_レ聞候て、小西不_レ參候うちに、黒田甲斐守陣に被_レ退候、其時甲斐守大津殿に向て被_レ申候へ、行長勢大津殿御陣まで敗軍申やと被_レ尋候へば、大津被_レ申候は、いまだ我等陣まで人數は不_レ參候得ども、先手崩候段まざれず候に付、是迄退候と被_レ申候、其時甲州被_レ申候は、それは聞逃と申ものにて候、我等は小西行長是迄不_レ參候は、退申間敷候よし申され候て、くひとめ居られ候、此段大閣御耳に立候て、大津身上崩申候、然所にかくなみ勢四拾萬にていよく追立參候に付、惣勢一同に三番手の小早川陣、かさんほへ被_レ退候、左候は、かせんほ川を渡、せんくくに都本陣に相加へられ候、其時かくなみ勢四拾萬之内二拾萬

をわけ、やろうや大將にて加藤主計頭清正被_レ居候
ゑあん道口に遣候、残り二拾萬騎は、まろうや大
將にてかさんほ川を渡し陣取、都内の日本勢洛外
の出入不_ニ罷成_ニ候様にかくなみ勢數萬騎にて取
まき、あひく_ニに日本勢下々洛外へ出申候をうち
捕申ゆへ、都に被_レ居候奉行衆諸大名談合相究、一
合戰可_レ有_レ之由に候、然ゆへに、此度之合戰は、日本
大明わけめの軍、一大事の儀共に候間、小早川隆景
功者の儀にて候間、先手被_レ仕可_レ然よし奉行衆被_レ
仰候、其時小早川隆景被_レ申候は、此度之合戰大事
の儀ニ存候へども、各御談合之上隆景ニ被_ニ仰付_一
候間、とかう申ニ不_レ及候由被_レ申、則陣所に被_ニ罷
戻_一、二手乃衆立花左近、筑司主水正、高橋主膳不_レ殘
様子被_ニ申渡_一候、其時左近被_レ申候ハ、明日之先手を
バそれがし可_レ仕候間、右様ニ被_ニ仰付_一可_レ被_レ下候
よし被_レ申ニ付、尤の儀に候故、然バ先手ハ左近殿
被_レ仕候へ、自分乃人數、粟屋四良兵衛井上五良兵
衛兩人の組をさし添可_レ申のよし降景被_レ申、みなみ
な陣所に被_ニ罷歸_一候、左候て次の日立花左近備を
南大門の口へ押寄られ候、粟屋四良兵衛井上五良

兵衛兩人の備をもおし出し候、左候て夜明に立花
手にて合戰有_レ之、十時傳右衛門など討死仕候、其
外手負死人數多御座候、二度めの合戰隆景内、右之
粟屋四良兵衛井上五良兵衛兩組之備をくり出し、
手を碎き相働申ゆへ、かくなみ勢敗軍仕候、立花左
近、高橋主膳儀不_レ及_レ申、其外小早川一手乃衆押つ
づきく_ニ追崩し候、都に被_レ居候大名小名ともに數
萬騎うちとり被_レ申候よしニ候、都より四里半有
レ之かせんほ川邊迄かくなみ勢退候よし承候、都よ
り十三日路おくニ罷居候ゆへ、都合戰の儀不_レ存候
得ども、其後立花左近殿家老 小野和泉天野源右衛
門、清正へ被_レ參物語仕候を承候、其以後も都合戰
之趣承候處、大形都合戰乃様子右之通リニ候、委數
次第ハ他家の儀ニ候故不_レ存候事、

清正の陣所あんへんに北京乃大王より勅使之
事

一 加藤清正ハ其頃まで案邊と申所に越年にて被_レ居
候、然所ニ正月五日ニ遠見乃者所より申越ニハ、唐
人案邊をさして參候通申越候、清正被_レ申候ハ、唐
人にて候ハ、此方にて悉切取可_レ申由にて、勢ハ

いかほど有^レ之やと被^レ尋候へバ、重而申候へ、本唐よりの官人勅使にて候や、上下二三十人程にて候、馬上之上官二人有^レ之よし申候、さらバ不^レ苦候間、かまい申間敷通^レ被^レ申、無^レ程清正陣所へ參、通詞を以清正へ申候へ、本唐北京乃大主より之勅使ニ參たるよし申ニ付、主計頭もさうち共被^レ申付候山海乃珍物取揃へ、饗應乃支度被^レ申付候、則兩使清正所に參、北京の大王よりの綸旨を渡、口上之通詞を以申渡候、其様子ハ、むかしより日本之儀ハ本唐愍帝乃下にて、七帝乃内其一之霸王にて候、百王百代之約束にて王號を本唐乃帝王より御免にて、本唐に御貢を納來候處ニ、近代左様乃道をも取うしなひ、剩今また日本小國乃王の官下大闇と申者より人數を相渡し、高麗に發向し、狼藉を仕候段歎慮不^レ穩候ニ付、其後凶徒誅戮乃爲まろうや、やろうやニ人數四拾萬騎差添、れうとう境迄差出し候へバ、一戦にも不^レ及、小西攝津守藤原朝臣行長爲始、日本勢悉武道具を拾逃退申ニ付、高麗都迄追詰去ル正月廿日ニ、都に籠城候太闇名代の者を先として悉うち捕、釜山海を限り、朝鮮國の内ニ、日本人

といふ者壹人も無^レ之、清正計にて候、爲^レ天高不^レ被^レ上、爲^レ地堅不^レ被^レ入、瓶の中の鼠の如くなる身躰ニ清正罷成候、乍去清正ハ法度を能おき、無^レ料唐人をバ切不^レ申候慈悲ふかき者候よし、兼而達叡聞候間、朝鮮國兄弟并高麗第一之美女を清正が手へ生捕候通被^レ聞召候間、是を相渡し候へバ、清正人數二三萬も有^レ之由候條、數千艘の舟を北京の都より被^レ仰付、無^レ異儀歸朝させらるべきとの勅使ニ參たるよし、通詞を以口上也、清正勅定之趣謹而承、本唐四百餘州乃大王の御綸旨を、日本秋津洲小國王の臣下太闇が家老として、直ニ拜見仕候段、弓矢の冥加忝次第とて本唐の方へ向、手を合三度拜ミ奉り、勅使をも馳走候て、引出物とて日本小袖二重ヅ、兩使ニ出され、其時官人も此様子を承悦候て、物語ども仕候、然者鍋嶋加賀守被^レ居候、長橋と申三日路有^レ之所に使を被^レ遣、此段被^レ申遣候、鍋嶋殿被^レ申候へ、此女の儀ハ、日本太闇に之土産ニ可^レ仕と存候へども、何篇清正の下知に付候へとの太闇よりの仰にて候間、何事も清正被^レ仰次第との儀にて、鍋嶋よりも侍壹兩人彼の女に添候て被^レ出候、

勅使を六七日逗留させ、其間ハいろ／＼もてなし、彼美女參候時、高麗の王御兄弟并彼女を勅使に見せ候得者、此女の事にて有之由申候付而、其時清正勅答の返事被_レ仕候、其様子ハ、朝鮮國の王之儀、日本太閤に問不_レ申候へば、其方に相渡候事不_レ成候、美女之儀ハ、其元より被_二仰越_一候様ニ、爲_二天高_一不_レ被_二上爲_一地堅不_レ被_二入と被_二仰聞_一候間、天へも不_レ上、地へも不_レ置、勅使の御前にて中に置見せ申候、へいあん道へ參候小西行長と申者ハ、日本堺乃浦の町人にて候へども、宗對馬守と縁者ニ付、本唐道の案内者たるによつて彼所被_レ遣候、日本太閤乃臣下の武者と申者ハ、加藤清正也、是に四拾萬騎の人數被_レ越候へバ、幸能所ニ罷居候間、此由を能越候とも、一日ニ一萬ならでハ越申間敷候條、一日ニ壹萬ヅ、四十日ニ四十萬の人數をバ討果可_レ申候、かうろ山の玉もひろへバ盡ると申ならはし候間、我等手勢ばかりにて悉うち捕、夫より直ニ本唐におし入、宮殿樓閣本唐四百餘州悉灰燼となし、北京の大王をも此朝鮮國のごとく生捕、日本へ渡し、異國のやつことなし可_レ申段、仙齋と申文者に

書せ、豊臣朝。加藤主計頭清正と書留、判をすへ候て勅使に相渡し、扱美女をバ外にて相渡し可_レ申と申て、はた物木に上ゲ、清正秘藏之總長の鍵にていもざしに突候て被_レ見候、勅使兩人供之者迄此由を見候て、舌を卷恐るゝ事限りなし、夫よりして朝鮮國の儀ハ不_レ及_レ申、本唐四百餘州おらん海迄も、加藤清正を鬼上官と申候、是本唐と日本との手ぎれなり、

吉州より到來有_レ之ニ付てあんへんより北青と申所迄七日路清正被_レ戻候事

附鍋嶋異見之事

一右之勅使罷戻り、一兩日間候て、清正人數被_レ置候吉州と申城より注進狀到來す、加藤右馬允、加藤清兵衛、加藤傳藏、並河金右衛門、永野三良左衛門、原田五良右衛門、天野助左衛門、此七人の衆連判にて注進狀參候、其様子ハきつちうより一里半程有_レ之所に、日本之輜となる能浦御座候、それへ年取物共越候へと、城より使を遣候へども、陣中の事にて候へバ、さのミ大分越し不_レ申とて、下々の者共亂妨ニ罷出、地下人共打果しおし取共仕候ニ付、彼所

之一揆起り、是ハ大上官清正よりの掟にてハ無_レ之候、近頃狼藉なる儀と候て、地下人起り、亂妨ニ罷出候者を入仕、跡を取切大分討申候、其時山口與三右衛門も討れ申候、左候てきつちうの城を取まき猛勢にて責申候、されども清正内々掟を手堅被_レ仕候ニ付、右之分にてハ注進不_レ申候、おらんかい人猛勢にて取巻、城を責申候よし注進申ニ付、清正急ニ後詰のためとて、あんへんより三日路被_レ戻、長橋にて鍋嶋へ此通被_レ申候へバ、加州被_レ申候へ、彼所迄はるゝと御戻り候事ハ御無用にて候、きつちうへ飛脚を被_レ遣、其元切はらひ、爰元へ早々參候へ、都へ一同ニ可_レ有_二御越_一通被_二仰遣_一、此方へ御呼候へ、天竺の獅子ハ子をうミ、三日の中ニ數千丈有_レ之瀧へなげ落し、かんでうニ才覺候て上り候を子ニ仕ぞだて、死するをバ捨と申候、武士も其分にて候、彼者共甲斐々敷候ハバ、敵ども追はらひ、此方へ頓て可_レ參候、無_レ左候て被_レ討候ハバ、御捨候て可_レ然候、我等將分も是より三日跡迄持候て、同名之者を始として、歷々急候へども、自然かやうの儀出來候ハバ、捨ニ可_レ仕と被_レ申候、其時清正被_レ申候へ、

加州は左様ニも被_二思召_一候へ、我等ハ左様ニハ相成間敷候、其故ハ先手へ遣、或ハまづはらひなどをさせ、及_二難儀_一候を見捨申儀ハ不_二罷成_一候、以來之爲にても候間、清正迎に參、及_二難儀_一候ハバ、其時士卒と共に切腹可_レ仕候、さらば加州は是に御座候へ、玉を預け可_レ申とて、帝王御兄弟せるとうす以下迄悉鍋嶋に預られ、清正はそれより四日路行候て、吉村吉左衛門堤權右衛門を被_二殘置_一候、ほくせんと申城迄被_レ參候、然所下々雪やけにあひ、手足損し、鳥目になり、目一圓見へ不_レ申條、爰に五日御逗留にて、人馬の足を御やすめ候へど、下々訴訟仕候に付、さらば爰に五日御逗留と被_レ仰、侍下々休足候て罷居候處へ、きつちうに殘置候頭七人、下下千五百并、藏床たんでんりせくに被_二殘置_一候衆中上下三千餘、陣はらひを仕、敵を追崩し、此方へ參候、先手之昇五里つゝきたる松原御座候、其松原よりのぼり相見へ候通、遠見の者所より申來候へバ、各陣屋に休足候て居候者、或ハ親兄弟、或ハむこえうと、皆々無_レ之者は一人もなきゆへ、各嬉しがりと皆馬引よせ打乗、松原へ出向、誰々ハいか_レ候やと

銘々問、以下共に親兄弟親類に尋あひ、手を取あい悦事限なし、夫より程なくほくせんの清正御座候處へ參候、其時清正は、大釜にて幾所にて食を大分たかせ、清正前へ取よせ、清正自身手にて食をつ

くね、右馬允參たるか、清兵衛參たるか、扱々苦身仕たるかと、右之つくね食を手づから被_レ遣候へば、請取いたゞき退申候三千計の雜兵迄、壹人も不殘手づからつくね食を被_レ遣候、扱各も是迄清正迎に御越候事忝次第に候、此君に命を御用に立候事、露ほども命を不_レ可_レ惜とて、以下三千清正の供之者共壹萬許の軍兵共以下おしなべ、清正の御情を感じ、又は親類無_レ恙再參仕嬉しきとて、鎧の袖をぞぬらしける、各數日寒天雪中に參候間、人馬つかれ候へつるとて、ほくせんに又五日御逗留、前三日と引合八日之逗留也、ほくせん米、大豆たくさんなる所に候ゆへ、上下悅申候、ほくせんの地下人殊之外馳走仕候に付、餘の所をば陣はらひとて放火仕候へども、ほくせんをば壹軒も燒不_レ申候、八日めには跡勢迎勢一ツに成、日をつぎ鍋嶋の被_レ居候長橋へ出、王并せるとうす以下請取召共して、鍋嶋相

良清正の勢、都合三萬騎の勢にて、都をさして長橋を出、十六日めに鍋嶋勢は都へ入、清正勢は都へ三里行不_レ着、川畑ニ一夜陣をすへ被_レ居候事、

せるとうすを取ぬがし申事

一明る日、右之陣所より三里にて候故、早天に打立、都入被_レ仕候、清正并王子其外人數大分にて候條、大なる家を相渡し候するとて、南大門より外に大屋形有_レ之を、奉行衆より被_レ相渡、然所にせるとうすをば、去年より津田三四郎と申もの、是は尾張衆にて、信長にも御親類にて、清正内にては、如_レ形の身上にて、手勢百四五十も持申者にて候故、是に鐵炮の者三十人添候て、せるとうすを預置かれ候、さる程に其前々夜せるとうすを取ぬがし申候、三四郎も迷惑がり候て、既に切腹可_レ仕よし申候所、清正其儀には不_レ及之由被_レ申候て被_レ差留候、都に被_レ居諸大名衆諸奉行も清正王をとらへ、是迄參たるは第一の忠義なれども、肝要のせるとうすを取ぬがし候事沙汰の限りにて候、是は王よりも大事なる者にて候、鍋嶋同前に其夜都入被_レ仕候はゞ、かやうには有_レ之まじき物をと、諸人清正をかげにてゑか

り申候、あんのごとく明る日せるとうす爰かしこ居候ものを集、朝はや人數一萬計にて爰かしこの山に取上り、馬を乗、方々にねりくり廻り申候、其時いよく清正をあしくいはんとて、せるとうすを取ぬがし申候は、千里の野邊に虎を放したる様と各申あへり、されども此せるとうすをかせんは川の邊合戰の時、清正の手へ討捕申候事、

かくなみ勢十萬餘騎の大將を清正自身討捕候事

附惣人數かせんは川へ追はめ不殘討捕候事
一南大門の外、清正陣所に日本の諸大名備前中納言秀家を始め、三奉行五奉行の衆不殘見廻被申候、扨扨永々苦身させられ、奥がたの合戰手を碎かれ、御手柄、そのうへ高麗の王御兄弟左府右府の官下まで生捕られ候事無_レ比類御忠義のよし、御名代秀家公、石田治部少輔を先としてはめ被_レ申候事無_レ限候、左候て此中の辛勞忘れ_ニとて、大名衆奉行より廻り振舞など御座候、然所治部少輔被_レ申候は、此都に永々籠城にて、各御座候馬の草菜そうじ取者をも追たて、何篇手づまりたる仕合に候、是より四

里半有_レ之かせんは川のこなたに、かくなみ勢十萬騎にて陣取罷居候、かせんは川向には、まんろうや人數三十萬騎にて罷居候、其故方々の通路はきれ、都の内許にて馬の草をさへ自由にからせざる仕合に罷成候、其上兵糧もきれ無_レ之候間、ふさん海へ引取、かいへんに城普請被_レ仰付、日本よりの兵糧取越候様に無_レ之候は、永陣なるまじく候、此都はふさん海より十三日路奥にて御座候、爰にて唐人ニ仕つめられ候つるよりは、ふさんかいへ出、城を堅固にかまへ、王をも同心にて罷居候は、都は籠中の鳥のごとくに可_レ有_レ之候と申され候、其時清正被_レ申候ハ、いや、我等ハさやうニハ不_レ存候、此都各手を碎、如_レ此乗取候を、今更すて候て、敵の手へ相渡し候事如何ニ候、大閤に御一左右被_レ仰御判頂戴之上ならばともかくも候べし、只何となしに都をうち捨、釜山海まで退候へば、敗軍仕たるに異ず候、第一様子により大閤是まで自身御馬を向られ、異國乃都御覽あるべくなど、被_レ仰出_ニ儀も可_レ有_レ之候、左様之節はいかにせられべきやと被_レ申候、其時治部少また被_レ申候ハ、いかにしても兵

糧つきて人馬兵糧無^レ之と被^レ申候、清正一左右有^レ之迄ハ拘^{くわう}をくはずともこらへ可^レ申と被^レ申候、加藤遠江被^レ申様ニハ、我等ハ砂をくい候ても相待可^レ申と被^レ申候、又清正被^レ申候ハ、十萬騎之人數川を渡し、こなたの地に罷居候て、此方を仕つめ申候ハ、何とぞ追ちらし候て、見候てハ被^レ置^おせ、そ、彼ハ十萬、此方之人數ハ十五六萬も都^もニ可^レ有^レ之候、十五六萬の儀ハ不^レ及^レ申、人數壹萬ニても輒儀と被^レ申、其時治部少被^レ申ハ、左様輒候ハ、清正參り追ちらし被^レ申候へと被^レ申、それこそ安きほどの儀ニて候、いでさらバ追散し候て見せ候ずると被^レ申、治部少被^レ申ハ、さらバ鍋嶋人數ハ御同心も御無用ニ候、清正手勢ばかりにて追散され可^レ然と被^レ申候へバ、其分ニ可^レ仕と被^レ申候、則時ニ被^ニ打立^一候、清正家中の者共ハ、無^レ詮物あらそひ被^レ仕、我々犬死仕候事不^レ及^ニ是非^一候、何か日本國乃諸大名衆寄集り、人數十五六萬ニてさへ不^レ成候やろうやを、清正壹人して何としてかハ退散可^レ申や、物に被^レ狂候か、さてく笑止なる儀と申候て、王の番ニ被^ニ殘置^一候千餘騎の者に各暇乞仕、奥高

麗にてばくなど仕候者共を王の番の者に渡、歸朝被^レ仕候て、我々父母、或ハ妻子兄弟、或ハむこ玄うと、是く^くに渡候て給候へと申、銘々文を書^レ台同號以下迄も、茶湯の爲とて書付相渡し、死出立仕、各供仕候、其夜四里半有^レ之かくなみ勢陣所被^レ參候へバ、まだ夜ハ不^レ明、丑の刻計ニて候、惣陣も寢入、物音少しも無^レ之候、そこニて清正被^レ申候ハ、一段能時分ニて候ぞ、轡の音高候間、銘々手拭ニてまき候へと被^レ申候、各轡をまき、音のせざる様ニ仕候て、いかにも靜々と本陣の方へ清正馬を乗込まれ候、大將の本陣とおぼしき所ニらうそく爰かしこ燈し、少宛火の有^レ之申所も御座候、其所に清正自身つと入、大將を清正自身一討ニうたれ候、それより爰かしこより出申、唐人を各討取、本陣に火を付、又わきく^くかなたこなたニ火を付焼立、とききの聲をあげ、かくなみ勢十萬餘騎の大將をバ清正自身うち取たるとよばはり、勝どきを上られ候ゆへ、十萬餘騎の人數さる物もきず、赤はだかにてかけ出し、川向の方にまんろうや三十萬騎ニて罷居候所を目にかけ、たおれふためき、かせんは川に飛

つゝり申候、然所都の諸大名衆被_レ申候ハ、清正情のこはき者にて、一身彼所に參、定て可_レ被_レ追崩_一と無_ニ心元_一被_レ存、各より人數五百三百ツ、清正跡に付て被_レ遣候者、おくれはせにて川端まで參、川にわづり半死半生の者を引あげ、壹人して二人三人ツッ首をとり、高名仕たる跡にて、各川ばたニ頸をすへ置罷居候、其時清正祐筆數十人ゑらび出し、感狀之文章ニ、其方事今度かせんは川の邊にて追討之節組討被_レ仕、手を碎被_ニ相働_一、頸一或ハ二ツ被_ニ討捕_一、手柄之段無_ニ比類_一候、我等ハ高き所ニ罷居、其方組被_レ申候段見届申候、侍ハ不_レ知物にて候、自然牽人も被_レ仕候ハ、此狀を以我等所に被_レ參候へと書留、年號月日仕、加藤主計頭清正と書判をすへ、數多書置、さて川ばたにて首取被_レ申候衆ハ、其元ニ銘々被_レ取候頸を前ニおき被_ニ相待_一候へと、清正只今實檢ニ參候通被_ニ申付_一、各川ばたに首を備相待候所に、清正被_レ參、此首ハ何がしより使_ニ參たる何_一と申者討捕候段披露申候ハ、中くそれは清正見申候、鎧いかやうなる鎧、ゑるしハ何にて名譽乃高名無_ニ比類_一候、則感狀を出し可_レ申と被

レ申、右ニ書置候狀ニ宛所許をこゝにて書付被_ニ相渡候_一、いづれも其ごとくニ被_レ仕、預置候衆中ニハ無_レ殘感狀を出し被_レ申候、各末代の高名ニ成、御文章旁以忝と申、各可_ニ罷歸_一と申候時、また清正被_レ申候ハ、各是へ被_レ參候へ、可_レ申子細候と申、各清正の前へ參り候ハ、清正被_レ申候ハ、此上の大藏ニ十萬餘騎の人數乗候、馬數千居候、牛も大分居候、米大豆何十萬石有_レ之とも不_レ知程御座候、此藏を打破り、あの馬牛ニ付ケ候て、一人して五疋も十疋も才斷仕、都へ戻られ候へと被_レ申、各畏存、其旨之通申にて、彼藏に行見候ハ、清正被_レ申様ニ、米大豆何十萬石、馬牛何千疋ともなくミちく可_ニ罷居_一候、牛馬ニくらを置、米大豆をおせ、一人して五疋十疋、才斷して、かさんほより都まで四里半の間引も不_レ切牛馬つゞき候て、都へ米を持たれ候、左候て、使之者都へ戻り、銘々主へ此通申上、かさんほ川にて高名仕候とて、清正より給り笑感狀出し見せ候ハ、各被_レ申候様ニハ、主計頭ハ人間にてハよもあらじ、いかさま大ぼさつまりし尊天の化身にて候すると申され、加藤主計頭清正をほめぬ人

ハなし、

太閤より御教書參都を明釜山海迄引取候へと
の儀に付て各ふさんかいへ引取候事

一都に被_レ殘候御名代浮田中納言秀家公并三奉行衆
各大名衆より相談有て、日本名古屋へ被_二申上_一候
ハ、都を明釜山海に引取可_レ申哉と注進被_レ申候、大
閤御書にはまづ釜山海まで引取、やくさんこもか
いニ城を取、右五人敗軍させたる木曾判官が居候
陳州之城に惣勢不_レ殘おしよせ、もくそ判官が頸を
切、日本に可_レ渡との御誑也、惣勢悅都を出、都川に
舟橋を渡し、次第く歸陣仕候事、

陳州之城日本勢責る事

附木曾判官を川に追はめ其頸日本に渡候事
一主計頭は陣ばらひして都を出て、十三日めにふさ
んかいより左三里おくに着候、清正繩ばりにて、や
くさんこもかいに城取を仕、惣勢にて作り立申候、
左候て五月中旬にやくさんを立、加藤主計一番に
木曾判官が城に着陣候、次第く惣勢も參候、大
閤御名代には浮田中納言秀家、御横目には淺野彈
正忠にて、扱惣勢とり卷、陳州の城に竹たばにて寄、

夜晝五十日の間責候、然所に加藤主計頭より口
と黒田甲斐守より口と一所に責申度と、黒田如
水より御望にて一所になり、十五日めには清正よ
りてこつかひ三人、甲斐守殿よりてこつかひ三人
おし合、石垣のかどの大石を引はね崩す、左候て主
計頭手前よりの一番乗森本儀太夫、飯田覺兵衛、三
人めには、加藤主計頭城内へ切こまれ候、續て手勢
不_レ殘切入候得ば、黒田甲斐人數も一所に入組切か
かり申候、此由惣勢見候て、平乗に乗込申候、就夫木
曾判官は川にばかり申候を、川下にて頸を取申候、
惣勢は三分二も城中にて頸を取申候、唐人皆々日
本の劔を恐れ候て川へ入り申候を、引あげく首
を討申候、則其日小西攝津守所より早船を仕立、日
本大閤に注進申候、陳州の城一番乗を小西仕たる
よしを申上候、大閤此由聞召、扱は行長一番乗仕候
や、主計めはいづくに居候やと御機嫌よからづ候
處に、家康公御取合には、主計頭すはだにて甲計着、
一番に飛入、木曾判官に切かゝり候へば、木曾判官
主計に恐て川に飛つかり候を、川下にて首を取た
るよし町説に申候、能々御聞直し候へと、返々家康

公御取合にて候、是は大閣御前にての物がたり也、
扱陳州の城責崩したる次の日、浮田中納言殿、淺野
彈正忠殿御出有之、諸大名衆を呼よせて、大閣へ
の御注進狀を被書、諸大名衆一同に主計一番衆に
て候由被申候、淺野彈正殿被申候は、さらば連判
を被遊候へと被申、承候とて日下に浮田中納言
殿判を被遊ければ、諸大名小名奉行迄次第に
判を被仕候、其様日本名古屋に着し、大閣御覽候
て、家康取合被申段僞ニ成不申候、加藤主計頭陳
州の城一番乗をあらそひ申人も無候事、

日本勢諸所在陣之事

附やくさん迄七日路之間浦々日本勢取つゝ
け候事

一陳州より三日路奥はたらきなで切申付候て、各
引被申候、主計頭ハせつかいと云所ニ在陣す、是
先手也、其次に毛利壹岐守、嶋津、秋月、高橋、伊藤
與力ニて、せいくわと云處に被居候、其次に黒田
甲斐守同如水父子ハ、くちやんと云所に被居候、
其次に美濃衆とくねぎといふ所に被居候、是ハふ
さんかいより東添北四日路の間也、釜山海より西

の手先ハ小西攝津守先手にて、ふさんかいの續や
くさん迄七日路の間ハ、日本人浦々取續候事、

石田治部少加主計を讒奏仕候ニ付大閣御腹立
被成加藤主計に切腹可被仰附との儀ニて
日本に被召寄候事

附二ノ傳奏日本來朝之事

一小西攝津守行長事、今度高麗乃御先手被仰付、加
藤主計と兩手にわかり、へいあん道の先手を仕、お
して參候處に、敗軍仕候而、かせんはまで居候、清
正都へ一番乗仕候のミならず、王をとらへ、其上
又此度陳州の一番乗をも清正仕候、行長ハ仕合あ
しく敗軍仕候、大閣御前如何可有之やと氣遣被
申、内々石田治部少を被頼候處、治部少別而入魂
にて候ゆへ、さらば本唐と日本の和平之儀を行長
才覺を以被相調候するとの儀ニて、台長老に狀
を書せ、本唐へ被申達候ハ、古の如く日本より
本唐へ御貢を納、古ニ不替北京の下として仰
可申のよし被申遣候、左候て小西所よりの人
質に、竹内吉兵衛と申者を被置候を取返し、内藤
飛驒守と申ものを同名ニなし、小西飛驒守と名乗

せ、本唐への人質に出し申候、就其日本へ一の傳奏、二の傳奏とて勅使を北京の大王より被_レ相渡候、其故ハ本唐へ御馬をつながれ候あつかひ調候ニ付、北京の大王より大閤へ冠を御免被_レ成候勅使也、然所一の傳奏歷々の金銀珠玉を持、結構なる跡にて參候を、清正内三宅角左衛門と申鐵炮大將の手のもの追剝仕候ニ付、二の傳奏日本へハ渡り申候、其頃石田治部少、大谷刑部少、増田右衛門尉を先として、奉行衆の分ハ大閤より召候て、歸朝被_レ仕、大坂ニ被_レ居候、治部少と清正中惡しく御座候に付て、何とぞ清正をうしなひ候ずると被_レ心得ハ、小西とハ入魂ニ候ヘバ、色々に讒言被_レ仕と聞ヘ申候、其箇條ハ、清正此度高麗にて手柄も仕候へども、大閤様より今度高麗一方の御先手被_レ仰附候小西攝津守行長を、日本堺の浦の商人にて御座候など、申、我身ハ御免なきに豐臣の朝臣など、北京の大王に之勅答ニ仕、剩今度異國本朝の御和睦之儀を小西攝津守才覺を以相調、唐より日本に御調を納候へつるとの儀にて、異國本朝和平の勅使參候、其一の傳奏を主計頭内の者三宅角左衛門と申者追剝仕、狼

藉之段、前代未聞不_レ謂儀共ニ候通折々大閤に被_レ申成候而、北京の大王に之勅答の返狀を持參仕られ、大閤被_レ懸御目候、就其大閤御誼ニハ、さてさてにくき主計めが仕様かな、何とて大唐の大王の勅答に、小西はどなる者を日本より先手に仕立遣候者を、町人など、申事、日本の外聞と申、大閤目利を度ニ仕と申、一方ならざる曲事不_レ及ニ是非候、其上御免も不_レ被_レ成に、豐臣朝臣など、書候事、言語同斷沙汰の限りに候、そのうへ勅使を追剝仕候段、何も重科不_レ輕とて御腹立有りて、急清正を日本に被_レ召寄、切腹可_レ被_レ仰附、との儀にて、主計頭を日本へ被_レ召寄候事、

二の傳奏登城之事

一二の傳奏と申勅使來朝之通、奉行衆見被_レ申上候付而、大閤かねてより被_レ聞召、御馳走可_レ被_レ成との儀にて、殊之外御馳走にて御座候、左候て登城仕候て、御對面被_レ成候、大閤御高間に御座候て、二の傳奏をば次の間に被_レ置候、二の傳奏存候には、大閤本唐に扱を被_レ致、本唐に馬をつなぎ被_レ申候へば、我等爲には傍輩にて候、無禮なるあいさつとぞ

んじ、大閤を次の間へさがり候へ、北京の大王より御免の冠をさせ候すると申候、其時大閤すいははやく大將にて御座候故、御さとり候て、いや／＼このあつかいは手にはちがひ候、此冠をば何の用に可立ぞ、捨候へと被仰、廣庭に御なげすて被成候て、異國本朝のあつかいはされ申候、

清正歸朝候て増田右衛門尉所被參大閤に之御理之談合被仕候事

附清正家老くやみ候事

一清正は切腹可被仰附として日本被召候をも、さのみくやみ不申候、高麗にて仕かけ候城普請御座候を、夜を日に急候て成就之上歸朝仕、急伏見被罷上、先日來増田右衛門とは中能候間、此理之談合可仕として、増田右衛門尉所へ被參候折ふし、台長老など被居咄半にて候、奏者谷市助申様には、加藤主計頭殿高麗より御歸朝として、是迄御見廻之よし、右衛門尉に申候へば、右衛門尉被申候は、能こそ御出候へ、是に御通候へと被申候へば、清正則急其座敷參られ候、其時右衛門被申候は、近年ハ朝鮮中打續御苦身不淺など、の挨拶にて候、其後

清正被申候は、我等只今こなたへ參候儀餘の儀にあらず、御存候様に我等を治部少輔めと中惡しく候により、色々我等事大閤に讒言仕候に付、腹きれ脊きれと候て、高麗に御上使參候に付、いそぎ歸朝仕候、治部少と我等中惡敷候段、上にも御存被成候、かやうに數年高麗中雪霜をいたゞき辛勞仕、都に一番乗仕、王御兄弟共に生捕、かさんほにて十萬餘騎の大將を清正自身うち取、十萬騎の軍兵を川に追はめ不殘討捕、陳州乃城一番乗を仕、木曾判官を川に追はめ、其首を日本へ渡し、色々粉骨仕候段、大形は日本國中に我等に肩を雙申人も無之程相働、遂忠節候條可被行忠賞とこそ存候所に、依虎口讒言被默止莫太勤功、今又腹きれ脊きれと被仰出候事不及言語候通、かきくどき被申候へば、右衛門被申候は、其段は淵底我等も存候、乍去此理の儀は、とかく治部少と中さへ御直り候へば可相濟候、今の世に於天下清正の様に治部少など、申者、日本國中に有之間敷候、治部少と御中直候するとの儀に候は、明日にも我等治部少に申候て可相濟候、無左候は我等の才

覺には成間敷候通右衛門被_レ申候、其時清正被_レ申候は、八幡大菩薩摩利支尊天も御照覽あれ、治部少めと一世中直り候儀は不_レ罷成候、其故は此度朝鮮國にて數箇度之合戰御座候へども、一度も手に不_レ相人のかげ事のみ申通り謗言をかまへ、人をたおし候ずるとのたくみ計仕、きたなき奴原に一度中直り候ても何かせん、縦大閤の御前直り不_レ申候、此儘にて切腹被_レ仰附_一とも、治部少めと中直りは仕まじく候、右衛門殿も被_レ聞候へ、寔今度高麗おらんかい迄渡り、六七年ぶりに初て參候からは、清正參候通被_レ聞候は、日來のよしみにて候、せめて次之間迄成とも被_レ出、久敷なつかしきなど、被_レ申事やすき程の事にて候、居ながら首ばかりひねり廻し、能來りたると被_レ申候は過分にも無_レ之候、所詮我等身などの様なる禮儀も知らざるものと申談候ても不_レ入候、向後頼申間敷と被_レ申、つとかげ出し被_レ戻候、右衛門も其時に至、左様に而は無_レ之候、今少し御咄し候へか、と被_レ申候へども、聞も不_レ入被_レ罷歸_一候、清正家老乃者共くやみ申、扨々主計殿は物狂はしき人にて御座候也、左様之謔言

はむかしも今も有_レ之習と承候、既以源義經は正しき頼朝公乃御兄弟にて候へども、梶原が謔言により切腹被_レ仰附_一候、夫は梶原一人が謔言にて候、今又清正ハ三奉行、五奉行之衆共に悉中を違られ惡み申候、其内にてハ増田右衛門尉壹人清正へ御入魂にて候へども、右衛門尉共に如此御中違ひ候ては、扨々不_レ及_一是非_一儀共に候、定而御理候するとも成間敷候條、切腹被_レ仕にて可_レ有_レ之と申、各、くやみなしがり申候事、

大地震之事

附清正大閤御座候伏見之御城に參上候事
一其夜は、慶長元年七月十二之夜也、大地震ゆり候事、二百年三百年にも、かゝる例不_レ承、大地震洛中不_レ及_レ云、五畿七道悉ゆり申候、就_レ中五畿内大分ゆり候て、京大坂伏見在所々の家一字も不_レ殘たおれ申候ニ付、おしにうたれ死するものいか程といふ數も不_レ知候、其夜清正則起上りて、こつかひ候もの三百召連、てこを持せ、御城に出仕候て、大閤御座候所の邊迄被_レ參候へば、はや大閤も不斷御座候間を御出有りて、大庭に出御なされ敷物をしき、

幕屏風などにてかこい大庭に御座候、折節清正つと被_レ參候へバ、大閣様、政所様、松之丸様、高藏主、其外御上臈衆の聲聞へ申候、はや御出被_レ成たると清正も悦び、高藏_{（五）}と清正被_レ呼候、誰ぞと御答候節、加藤主計頭清正是迄參候、大地震おびたいしく御座候條、上様をはじめ、各おしに御うたれ候て可有_二御座_一やと存、參候て押おこし可有_二申と存、てこの者三百人ニ悉てこ持せ參候通、大閣様へ被_二仰上_一候へと被_レ申候、其聲を大閣、政所様被_二聞召、扱扱はやくも參たるものかな、氣の附たるいき者とて、御懇ニ御座候により、其時清正被_レ申候ハ、高藏主能御聞候へ、私事此五六年以來、高麗に渡り數箇度之合戰得_二大利_一、都江之一番乗仕、帝王御兄弟、左府右府之臣下迄悉生捕、せるとうすをとらへ、かせんはにてハかくなみ勢十萬騎乃大將を清正自身うち捕、惣勢を川に追はめ、悉うちとり、陳州の城一番乗仕、木曾判官川へ追はめ、其首を日本へ渡し、隨分粉骨忠義仕候段をバ少しも御耳ニ不_レ入、石田治部少めと内々中あしく御座候より、種々讒言仕候を誠と被_二思召_一、今度腹きれ脊きれと被_二仰出_一、高

麗より被_二召寄_一候へども、私少しも誤無_二御座_一候得バ、天道之加護も可有_二之とぞんじ_一、何とも不_レ思歸朝仕候、治部少さへにより清正ニ腹を御きらせ候するこの儀、只今共ニ三度にて候へども、誤御座候へバ申ひらき、今ニ此分ニ候、今度之次第も能被_二聞召_一候ハ、我等誤無_二御座_一段ハ聽て玄れ可有_二申と、いかにも高聲に高藏主に向て被_レ申候を、大閣も御覽候て、具に被_二聞召_一候、扱清正事ハ五六年以來、高麗にて寒天炎天ともいはず、方々旁々仕候ゆへ、日ニやけ色黒く、くろぼうの色ニなり、疲おとろへ被_レ申候を、大閣御覽候て御涙をながされ、御なげき候事無_レ限候、其時清正高藏主ニ向て被_レ申候ハ、夜と申ばつらなる舂候條、中門ニ我等者を附置申候と被_レ申、高藏主御前に被_二申上_一候へバ、いまだ物をバ不_レ被_レ仰御うなづき被_レ成候より、清正内之者を附置、清正不_レ申内ニハ誰をも通候間敷候通被_二申渡_一候、其後石田治部少、其外奉行衆など出仕被_レ申候、中門にてせき申候、其時治部少にて候、くるしくも無_レ之候間、通し候へと申され候、清正内の者申様ハ、何ぞ治部少など、申者が今まで

おそなはり候て參ものにて候ぞ、通し申間敷よし申候、治部少申様ニハ於天下此治部少を不_レ知門番ハ何者ぞと被_レ申、加藤主計頭が者にて候と答申候、其時治部少被_レ申候ハ、主計ハ御前を御免被_レ成候かと被_レ申、清正内の者申候ハ、御前を御免被_レ成間敷子細ハ候かと申候を、大閣被_レ聞召、治部少通し候へと被_レ仰出候、其時主計申様ハ、彼のせいのはろき男にて候が通し候へと被_レ申候、治部少も内へ被_レ參候事、

清正の政所様松之丸様より御使并御上ろう

衆其外よりも御使御座候事

附清正下城之事

一其後各御見廻に出仕被_レ申ニ付、廣庭もせばく成候ニ付大閣政所様松の丸様をはじめ、各石垣の後築地犬ばしりへちやうちんを燃させ御のぼり被_レ成候、其時大閣御誼ニハ、未御前も御すましなき奴原が御前をえて廻り候間、石垣のがんぎより上へあげ申間敷候、其外召候ハぬ者をバ壹人もがんぎより上へハ上申間敷通被_レ仰出候へども、主計頭ハそれにもかまはずがんぎの下に立候て被_レ居候、其時

迄も清正御前をバ御免不_レ被_レ成候へども、何と思召され候や、ちやうちんをとぼし上ケ、清正を細く御覽候て御なき被_レ成候、其時政所様、松之丸様より御上臈を主計所に被_レ遣、御前ハ大形相濟候、殊之外御かわゆがり候て御なき被_レ成候間、主計にハ少しも氣遣仕間敷通、かなたこなたより人のうしろをつたひ、大閣御目をかくれ使を被_レ遣候、また内々治部少をバ不_レ思、主計に心をよせ候衆も多御座候ニ付、主計が科がなくて治部少にさへへられ、難儀致候を、脇にて不便がり被_レ申候衆、此様子を聞傳へ、主計わきへ被_レ參、心安ぞんじ候へ、清正誤無之段ハ、次第く被_レ聞召分ハ、如此御懇ニ御座候、日本ハ神國にて候は、切々日出度と口をはなつて悦を被_レ申衆も多御座候、然所に夜もはや明申ニ付、御前をも御免なき者共ハ早々罷下り候へと、大閣御誼にて、清正御城より被_レ罷下候、其時ハはや御門矢倉共悉くたおれ、御門番横濱市庵などおしにうたれ相果候、道も通じ不_レ申ニ付、かなたこなた廻り、毛利殿橋を渡り、主計頭ハ屋敷へ被_レ罷歸候事、

三奉行衆より清正所に使之事

一其後政所様、松之丸様より清正へ御使御座候、其様子ハ主計御前之儀ハはや相濟候、殊之外御懇ニ被レ成ニ御意ニ候、乍レ去主計など程成大身の者の御勘氣を内儀づく御うら傳などにて被レ召直ニなど、申儀ハ世間の扠判もいかゞ敷候間、御表向家康利家など御取成を以、御前被レ召直ニ候するとの御意にて、只今御廣間へ御出被レ成候間、定て早々可レ被レ召出ニ候、左様ニ相心得候而可レ然候、進物なども有間敷候間、何にても進上申候と存候物を書立、主計内の者を御臺所へ上被レ申、御物奉行衆にもはや被レ仰渡ニ被レ置候間、可レ有ニ其心得ニとの御使也、然處ニ家康より御使御座候、榊原式部少使にて家康利家被レ申候ハ、唯今御廣間に被レ成ニ出御、主計噂御座候ニ付而、我々兩人御取合を申上候へバ、夜前早速罷出候段神妙ニ被レ思召ニ候間、御前を被レ成ニ御免ニ候、やがて可レ被レ召出ニとの御誼候間、定而石田治部少、増田右衛門、德善院所より使可レ參候、御使御座候ハ、頓而登城被レ仕儀にて可レ有ニ之候、御進物以下御用意候へとの御使也、廳而石田治部少所より柏原彦右衛門、德善院より大

池清左衛門、増田右衛門尉より谷市助三使參候、則被レ出迎、口上之通被レ聞候、三使口上之趣ハ、清正數箇條不屈儀ども御座候得共、夜前早速登城仕候段神妙被レ思召候、惣而大闇様に對シ心疎ハ無之候得ども、其身不調法ゆへ如レ此之通候と被レ思召分、御勘氣を被レ成ニ御免ニ候條、早々出仕候へとの御意ニ候、兼又三人被レ申候ハ、上様いまだ羽柴筑前守にて御座候時、清正いまだ虎として御腰本ニ被レ召候様ニ御答共被レ仕まじく候、今ハ一天下乃主、大闇之御位迄御昇進候へバ、中々左之様ニ御答共被レ仕候ハ、此中乃ごとく御勘氣を可レ蒙之よし被レ仰出候間、何事も被レ仰候とも謹而被レ承、所詮御口答被レ仕間敷との御使也、主計御請ニハ、何申分可レ有ニ御座ニ候ぞ、何事も謹而奉レ存ニ其旨ニ候由、御請被レ申上、三使罷戻候、其跡にて追付、家康公に清正使を以被レ申候ハ、只今三奉行衆より三使被レ越候、御前をは被レ召直ニ候、御前にて何事を被レ仰候とも少しも御口答共仕間敷之よし被レ申越ニ候、其分にて御座候やと被レ相尋ニ候へバ、家康公より御返事ニハ、利家我々御傍を少しも不レ離罷居候が、左様之儀ハ

少も不被_レ仰出_二候、何にても申分候て可_レ然儀共候ハ、御前に被_レ出候次而に何事なりとも直に被_二申上_二候へ、其儀計ニて御勘氣ニ候ハ、利家我我申分候て可_レ進候との返事にて候付、がつてんニて御前に被_二罷出_二事、

大閣清正に御對面之事

附清正科無_レ之段直ニ被_二申開_二事 附清正ニ豐臣之氏被_レ下十萬餘騎の大將ニ被_二仰附_二重而高麗渡海之事

一其後御城に仕被_レ仕候進物ハ、虎皮五枚三間つゝき猩々緋、御廣間の緣迄被_二持出_二候、石田治部少奏者にて披露被_レ申、大閣御誼ニハ、高麗之妨物ニて可_レ有_レ之由被_レ仰候、左候て主計にハ御前近く參候へとの御意ニて被_二召寄_二、御刀掛に御腰物御座候を御取候てさゝせられ、腰の刀に御手を懸られ、扱々主計めハにくき奴めニて候、古へ虎として三人扶持に米五石三石遣候て置候時之分別も、今又國を取らせ五萬三萬の大將を被_レ下高麗に被_二遣候_二時分之分別も、少しも不_二相替_二、傍輩せりを仕、小西攝津守堺の浦之町人など、申段不可_レ然候、日本の人も

なきように異國にも可_レ存候、おのれめハ何ぞや、御免も無_レ之に豐臣朝臣など、北京の大王之勅答ニ書候事不_レ及ニ是非一候、日本ニて豐臣姓を御免被_レ成候ハ備前中納言、大和中納言、筑前中納言、此三人ならでハ無_レ之候、おのれめハ誰が免し候て如_レ此書附唐にハ遣候として、殊之外御まかり被_レ成候、清正謹而御誼之通承届候、家康利家能御聞候て可_レ被_レ下候、其狀を書候次第ハ、あんへんと申所ニ罷居候節、北京の大王より勅使參候官人申様ニハ、往古ハ四百餘州之惣帝より日本乃王へハ百王百代乃約束ニて、本唐より王號を被_レ免、御貢物を備候、其故本唐七帝の内の日本も其一之霸王ニて候、然所に近代ハ左様之手筋もすたり、御貢物も不_レ納候さへきくわひニ思召候處、日本小國之王之臣下大閣と申者人數を差渡、高麗國へ發向し、剩大唐境迄人數參候ニ付、本唐よりまんろうや、やろうや兩大將に四拾萬騎の勢を添りやうとう境と申所迄差出候へバ、其勢におじ一戰にも不_レ及武道具を捨、小西行長逃退候條、高麗乃都迄追詰、去ル正月廿日ニ都南大門ニて散々遂ニ合戦、大閣名代の者を先とし

て、一人も不_レ殘討捕、それより釜山海迄つたひつたひ乃城に置候者迄悉討果、今ハ朝鮮國の内ニハ日本人といふ者壹人も無_レ之、清正ばかりにて候、爲_二天高_一不_レ被_レ上爲_二地堅_一不_レ被_レ入、瓶の中の鼠乃如なる跡ニ清正罷成候、然其此清正ハ何篇乃法度能置、科もなき唐人をバ切不_レ申候由達ニ叡聞_一候條、一命を御免被_レ成候間、朝鮮國王并高麗第一の美女を清正が手へ生捕候段被_二聞召_一候條、是を勅使ニ相渡候ハ、一命を助、北京より數千艘の舟被_二仰附_一、日本へ可_レ被_二送附_一候、無_レ左候ハ、爰元にも四十萬の勢を越、一人も不_レ殘可_レ有_二御誅戮_一との勅使也、其時彼の美女之儀相尋候ヘバ、清正手ニハ不_レ生捕、鍋嶋加賀守手へ生捕申候よし候間、加賀守罷居候長橋と申候所ハ清正居候あんへんよりハ三日路御座候、是を使を遣し呼よせ候て、王御兄弟并美女勅使に見せ申候ヘバ、無_レ紛此王此女の事にて候通申候ニ付、其時我等内ニ仙齋と申者に返書を書せ申候、その書やうハ、王を渡し候へと被_二仰下_一候へども、此王をとらへ候通、大閤に注進申候條一通り大閤に問不_レ申候てハ相渡候事不_レ成候、

美女之儀ハ天にも不_レ上地にも不_レ置、勅使の前ニて中に置候て懸_二御目_一候、また本唐口へ參候小西行長上官と申者ハ、日本堺と申所之町人にて候、本乃大將にてハ無_レ之候へども、對馬守と縁者ニ付、本唐道に之案内者たる故差遣たる者にて候條、逃申たる儀も可_レ有_レ之と日本をかざり候て申候、又豐臣朝臣と書候ハ、小西が本唐とあつかい狀を書候て遣候を、勅使清正ニ見せ如_レ此と申候、藤原朝臣小西行長と書申候、私ハ四ツや五ツの頃より親にはなれ、然バ系圖をも不_レ存候ニ付、何と書可_レ申ぞと存候へども無_レ之候間、豐臣朝臣と書申候、扨日本大閤が本之臣下大將と申者ハ加藤主計頭清正上官也、是に四十萬の人數を越候て被_レ見候へ、幸よき所あんへんと云所に罷居候、是に參候ハ彼の山道を能越候て、一日ニ壹萬ならでハ越まじく候、壹萬越候ハ待うけ候て、即時に切盡し、四十日に四十萬の人數我等切たいらげ可_レ申、其いきほひニ打立、本唐迄責入、都を放火し、北京の大王をも此朝鮮王のごとくとらへ候て日本に渡し、本唐四百餘州悉切とり焼はらひ灰燼と可_レ成と、日本をかざ

り、小西をバ悪しく申候、また美女をバ勅使の前にて中に置候て見せ候ずると申、はた物にあげ、我等秘藏の穂長の鍵にていもざしに致し候て見せ申候、勅使兩人并下々迄是を見恐れ候て舌を巻逃退候、夫より我等をバ本唐迄兎上官と名付候よしニ候と、一言も不_レ殘御前にて被_二申上_一候へバ、大閤御泪をながされ、御誼ニハ、扨々大閤ニ能似たる奴めかな、彼れがうしろひもの時より我等ひざの上にてそだて、身が謀を能見置て、其儘大閤が分別乃ごとくニ似せ候主計めハ、我等ためにハ一近き親類にて候、されども餘りあら者にて人からかひをちいさき時より仕候に付て、親子名乗を今に不_レ仕候と、家康利家に向て秀吉公被_レ仰候、其時清正又被_レ申候ハ、次而ながら家康利家被_二仰上_一御系圖を被_レ下候様奉_レ願候通申上候へバ、大閤被_レ仰候ハ、おのれめハ本より我等ちかき親類にて、豊臣朝臣にて候間、自今以後ハ豊臣氏を被_レ下候よし、清正朝鮮中乃粉骨を盡され候段、直ニ被_レ達ニ上聞候、右之科條の内、本唐より勅使一之傳奏を清正内の三宅角左衛門追剝仕候段をバ、大閤御誼候ハ、如何申候て

能候ハんやと、内々清正談合被_レ仕候時、三宅角左衛門進出申上候ハ、是ハ清正一圓御存なく候、我等も不_レ存候へども、手の者追剝を仕候、乍去左様ニ御答候てハ、御前ハ相調申間敷候間、三宅角左衛門仕たると可_レ被_二仰上_一候、左候ハ、我等へ御た_レり候て、其者を曲事ニ申付候へと可_レ被_二仰出_一候間、私罷出腹を切御用ニ可_レ立候間、左様被_二仰上_一候へと、達而角左衛門訴訟仕候、されども大閤様何と思召され候や、此條ハ申開成間敷候など、被_二思召_一候や、又御失念被_レ成候や、追剝之御沙汰ハ無_レ之候間、右之兩條申ひらき候て、御前は相濟申候、大閤右之次第殊之外御氣ニ相、清正を御褒美被_レ成、此度ハ又十萬騎乃大將軍ニ被_二仰附_一、高麗の先手に被_二仰附_一、一方十萬騎の大將ニハ小西攝津守被_二仰附_一候て、此たびも又清正、行長兩大將にて人數貳拾萬騎被_二差遣_一、悉なで切可_レ仕との御事也、海邊の分ハ船も候と申せバ、やすき道にて候間、小西行長おし候て可_レ參、中山道をバ加藤清正おして參、手にかゝる程の者をば壹人も不_レ殘なで切ニ可_レ仕候、自然兩道之内いづれなりとも手強方有_レ之バ、廿

萬騎一所に寄候て可_レ相働_一と大閣御手分被_レ成、また高麗に被_レ渡候事、

清正并高麗渡海之事

附奥十日路なで切并唐人鼻を切日本に渡鼻塚を御築せ被_レ成候事

一其年のくれニ肥後の國熊本に主計頭被_レ罷下、熊本ニ三十日逗留候て、留守番ニ被_レ置候衆中ニも振廻など被_レ下、今度讒言ニあひ、朝鮮國より歸朝候へども、大閣御前ニて悉申開、殊更此度ハ十萬餘騎の大將軍ニ被_レ仰附、重而高麗に渡候事大慶不_レ過_一之候よしにて、家老の者共にも振舞など御座候、家老共もおもひく御悦振廻ども申上、熊本ニ三十日逗留候て、霜月十日ニ肥後國を被_レ立、船中ニて越年いたし、明る慶長二年正月三日に、せつかいと申船つきニ被_レ着候、せつかいニ其年七月迄在陣被_レ仕候、然處ニ六月十五日ニ日本より御使參候、早々最前備定被_レ仰附候様ニ、浦手海道ハ小西行長大將ニて拾萬餘騎、中山道ハ加藤清正大將ニて十萬餘騎、二手に分り、なで切ニ仕、奥へおし候て可_レ參との儀也、就_レ其惣勢其支度仕、七月十六七日之頃より奥

におし候て、せつかいより十日路奥に參候、左候てせんらん道の府中せんまゆと申所ニて、清正行長兩手より行逢、それより談合候て道を替、二手に分り、十月のすへに被_レ罷戻_一候、其時日本人壹人役ニ朝鮮人の鼻三ツ宛被_レ當、其鼻高麗ニて横目衆實檢被_レ仕、大樽に入鹽を仕、日本に被_レ渡候、それを大佛の前に塚を築被_レ置候、今に至て其鼻塚大佛の前に有_レ之候也、

蔚山籠城之事

附かくなミ人城中へ石火矢打かけ候事

一其年の十月の頃ニ日本大閣より御上使御座候、此中清正罷居候せつかいの城ニハ黒田甲斐守を召置、清正にハ蔚山を惣人數寄合ニて城普請仕置候へとの御上使也、就_レ夫惣人數寄合、普請夜を日ニ繼て急候て、詰の九、二の九、三の九普請半ニて、大手の分ハ普請被_レ相調、堀共附候所も御座候、いまだ附不_レ申所も御座候、半普請ニて有_レ之所へ、大明朝鮮人四拾萬騎、まろうや、やろうや兩大將にて、野山平地もなく取巻申候、城中ニ居候者どもハ清正名代被_レ置候、加藤清兵衛、中國毛利輝元家中穴戸備前

守、吉見大藏少輔、成羽紀伊守、其外にも歴々侍人數有^レ之、上方衆ニハ淺野左京太夫、御目附大田飛驒守、彼是取あつめ壹萬計籠城申候、此到來清正被^レ居候せつかいと申所聞へ候ニ付、清正御供ニハ、吉村左近、同長右衛門、下川右衛門作、蟹江藤三郎、下川兵太夫、三宅喜藏、相田權内、魚住彦十郎、嘉禮次郎三郎、河原少九郎、母衣ニハ、阿波爲兵衛、村田八右衛門、弓頭ニハ村田市太夫、平野角右衛門、舟手頭梶原助兵衛、小舟に乗、即時ニ蔚山に被^レ參籠城被^レ仕候、十二月廿二日より明る慶長三年正月三日迄、夜晝攻申事無^レ限候、本丸ニハ、清正名代加藤清兵衛、淺野左京太夫、大田飛驒守、二の丸ニハ、穴戸備前守、加藤主計頭、三の丸ニハ、加藤興、左衛門、永野三良左衛門、二の丸、三の丸の間にハ、美濃部金太夫、九鬼四良衛、是等ニて持かため申候、此籠城の儀ハ俄之儀ニ而御座候付而、兵糧一圓無^レ之候てつまり申候、加藤清兵衛所より清正と淺野左京太夫殿江ハ五人ヅ、の辨當を毎日二所江一日ニ二度ヅツ上ゲ申され候、され共清正も左京太夫殿も自身ハ鳥の玉子程も不^レ參、手廻りの小姓其外ひたるそ

うなる者に分候て被^レ遣候、廿七日ニ清正二の丸より被^レ罷出、二の丸、三の丸の間にひらりとしたる芝がらけ乃廣所御座候、城餘りせばく候間、小屋がけを可^レ仕と存られ候所がら見合罷出候ニ付、山より北の方ニ蔚山の城より高き山有^レ之、是にかくなミ人陣取、蔚山をバ目の下に見さげ申候、され共城中ニハ矢鐵砲もとゞき不^レ申、五六町程も御座候、それより石矢を仕かけ、蔚山にうち申候、清正芝からげの所に出られ、人數多付候て罷出候所に、唐人石火矢をうち申候へバ、清正内衆ニ當り候て、胴中より上を打切、腰より下計残り候て御座候、其時清正被^レ申候ハ、少しも不^レ動候て罷居候へと被^レ申候、少の間ニ又壹ツ打申候、是ハ人にハあたらず候へども、芝からげに打込申候得バ、狸の穴ほど打こみ申候、其時も清正被^レ申候ハ、少しも不^レ動罷居候へ、我も人も命のおしき段は同事にて候、清正も少しも不^レ退爰ニ居候ぞ、かまいて少しも動申間敷の通手堅被^レ申渡一候、三番目の石火矢詰の丸の城よりも高く大分空を玉通り申候、其時さらバ退候へと清正被^レ申候て、各罷立本陣に引入候、唐人存候に

ハ、三番目の玉行能候て敵逃退候と相心得、其後よりハみなく高くうち申候付而、少しも城中乃いたミニ成不申候、其時各行當り候て銘々申候ハ、清正最前兩度之石火矢ニ不_レ退、三度目の虚空を通り候玉ニ清正被_レ退候段尤之儀と申、上下おしなべ名大將と申者の分別ハ格別ニて有_レ之と各々申候事、

蔚山追討之事

附吉川藏人廣家に清正馬印を被_レ出候事

一右之分ニ猛勢取巻蔚山を責申事、晝夜すぎ間も無_レ之候ニ付、高麗諸所ニ被_レ居候大名小名悉後卷可_レ仕とて、せつかい迄被_レ集、後卷の人數十萬餘騎、慶長三年正月朔日ニ蔚山乃後の高き山迄取上り、翌日正月二日ニいよく、近く陣取よせ候て、惣勢罷居候蔚山より南高山有_レ之、是に日本人大分備候て、其北の方毛利宰相秀元の陣所より其中ニとんぼうの様成二ツ引兩かと覺敷馬印乃大將まつ先ニ進ミ、おろしかけ被_レ參候と存候へバ、惣勢一度におろしかけ申候、其時唐人敗軍仕候、中國衆陣所の奥ニ古城御座候、其所にかくなミ勢逃かり候を、其時又彼の二ツ引兩の馬印の武者まつ先ニお

ろしかけ、先を取切申候ゆへ、それハ唐人退候事不ニ罷成、それより前なる口へ取なをし逃申候、其先ニも池の有_レ之所に猛勢逃かり候を、日本人悉追詰、壹人してかくなミ二人三人切不申者ハ無_レ之候、其時清正ハ蔚山の城より右之次第能見られ、中國陣壹番ニおしかけ申候、其中ニ二ツ引兩のとんぼうのごとく成馬印の武者壹騎はやくかけおろし申候、其武者古城の方へ行横きり申候ニ付、かくなミ勢其方へ退不申、こも池へ退かり候ニ付味方大利を得候、其武者ハ誰なるらんとて人を見せニ被_レ遣候へバ、吉川藏人ニて有_レ之よし申候、其後清正廣家に被_レ逢、右之次第をはめ被_レ申候乍去馬印はそく候て見へかね申たるよし清正被_レ申候、其時廣家被_レ申候ハ、色をバ替可_レ申候條、清正のばれん串を被_レ下候へかしと所望被_レ申候、清正被_レ申候ハ、我等も左様ニ存候處、心底ニ相叶本望ニ存候、りとも被_レ成候へと被_レ申、ばれん串を吉川藏人廣家に清正馬印を被_レ出候、今ニ至廣家の馬印ハ、赤きばれんニて御座候事、

蔚山籠城之間ニ不思議之奇瑞共御座候事

一清正籠城仕候より少間御座候て、毛利壹岐守、安國寺、山口玄蕃、上下百人計、是も蔚山のわき迄船ニて被_レ參候、其時日本之方の海上より黒^{くろ}か^いミか何かと存候處ニ、其あやしき物次第_一近く成候を見候へバ、鵜の鳥ニて候、惣て高麗ニて鵜をバ常々終に見不申候が、さて_一大分なる事と申、見申候處ニ、其數何萬何百萬といふ數も不_レ知事々數御座候、其鵜共蔚山の城の廻り城のうへニ飛上り飛さがり舞あそび申候、此方の衆中存候ハ、鵜ハ天照大神八幡大菩薩のましやと哉らん申候間、如何様日本之神神日本之勢を御守り可_レ被_レ成ためニ力を添らるゝと頼もしく存罷居候、扱又肥後國に藤崎八幡と申宮御座候、常々清正信仰ニて、神田共寄附ニて被_レ置候、其宮の神主の子俄に物付口ばしり候て申は、我等に藤崎八幡宮乗移らせ給ひて候、いかに諸人能承候へ、加藤清正蔚山に籠城之處、大明朝鮮人異國の夷共猛勢ニて取まき既難儀候間、我等彼の所に罷越城中に心を添、異國夷共明日三日ニ悉追拂ひ申條安堵仕候へと、飛上り_一物ニ狂ひ申候、是

ハふしぎの事共哉、乍_レ去誠からぬ儀と存候處に、正月十八日に飛脚着船候て、蔚山よりの到來御座候が、右之物狂申候ニ少も不_レ違、正月三日ニ後卷御座候て、大明朝鮮人敗北仕、大分討捕籠城連を開申候通被_ニ仰越_一候、其時ニ至いよ_一信心肝に銘じ、歸朝之節清正に各被_ニ申上_一候へバ、彌信仰被_レ申、藤崎八幡宮に又々社領共寄進被_レ仕候事、

蔚山籠城之段并唐人敗軍候通大閣様に被_レ遂ニ
注進_一候事

一右之ごとく蔚山取巻かれ及_ニ難儀_一候段、大閣に清正より注進被_レ仕候、其時御使村田八右衛門と申者にて候、歸朝仕、大坂にて大閣に申上候へば、直に被_ニ聞召_一、扱主計のはいつ方に居候ぞと大閣御尋被_レ成候、主計頭は其節迄せつかいと申五里餘處に居候へども、其段を聞候て手廻り十人計にて小船に乗蔚山へ籠申通申上候、其時大閣御手を御うち候て、扱は心安候、此城は持拔可_レ申條、大閣後卷させられべきと候て、さらば具足を出し候へと被_レ仰、御そばへ御取よせ候て、則日本乃諸大名小名に至迄急度高麗江の御陣立と被_ニ仰觸_一候、然所其翌日

また清正よりの使阿波猪兵衛と申着候て、大閣に申上候へ、去ル正月二日ニ後卷御座候て、かくなミ勢四十萬騎悉敗軍仕候、追詰十萬餘騎日本勢うち捕、籠城運をひらき申候通、具ニ書立を以被_レ遂ニ注進候、扨々目出度とて大閣様高麗に御渡被_レ成候事止申候事、

重而蔚山籠城之事

附寄手之唐人又敗軍之事

蔚山敗軍ハ正月三日ニて候、それより後ハ所々ニて草切などを唐人切候ずるとて罷出候を、日本人よりも出合、少々、せり合など御座候へども、大なる事ハ無_レ之候、然所其年の九月ニかくなミ勢評定仕候へ、當正月の敗軍ハ手だてをあしく仕、後卷有_レ之ゆへ敗軍申候、此度ハ後卷無_レ之様ニ二手に分、加藤清正居城蔚山に二十萬騎、嶋津兵庫頭が居城順天に二十萬騎、此兩城に二手に分、とり卷責可_レ申と談合にて、慶長三年九月下旬ニ順天蔚山兩城に四十萬騎を二手に分、よせかけ申候、蔚山乃城を夜晝十四五日責申候、されども此城此度は普請も相調、石垣矢倉以下迄堅固ニ御座候、其上兵糧玉藥

もたくさんニ御座候へバ、當正月之籠城ノ時ニハ違ひ、城中殊之外くつろぎ申候、敵近く參候へバ、矢倉より矢鐵炮をもて目乃下ニ見おろし射放申ニ付而、城に付申事不_レ叶候、然所今度ハ唐人楯の板厚く三寸餘程有_レ之板をこしらへ、銘々楯を持上り申候、其時木村又藏存候ニハ、楯の板大分厚く見へ候得共、思案するに是も郡中に當候て出させ候ずる條、端ハ厚くとも中ハ薄く可_レ有_レ之候間、我等真中をねらひ候て、鐵炮にて打見可_レ申候、此鐵炮ぬけ申候ハ、各も楯乃板の真中を被_レ討候へと申、程近くより候唐人楯の板まん中をねらひ打候へバ、案のごとくぬけ候て、うしろの唐人玉にあたりたおれ、血の流候迄城中より見へ申候、夫より後ハ各も楯の板をねらひ打申候ニ付、かくなミ勢不_レ叶とやおもひけん、楯を脊におい引退申候、其先ニこも池大沼有_レ之所に逃かゝり、泥に埋れ蜘蛛の家に蟲のかかりたる様に跡へも先にも不_レ行、わやくとし候て罷居候を城中より見および候ニ付、惣様より申候へ、如_レ此候間又藏清正の御前に參、此通りに候條門をひらき打出申候ハ、大分切取可_レ申候通申

上候へと各申候、又藏則清正の御座候處參候へば、其時清正は矢倉の家のうへニ毛氈を敷、鐵炮之上手にて御座候ゆへ、鐵炮をうち候て被_レ居候、此段申上候へば、清正被_レ申候へ、いやゝ一人も切て出申間敷候、其故ハ大閤ハはや御遠行被_レ成候、唐人を大分うち候ても、誰にほめられ可_レ申や、不_レ入事どもニ候、第一石田治部少輔我等首を三度まで切可_レ申企を仕候條、此鬱憤ニハ歸朝候て治部少と一弓矢取可_レ申とおもひ定候之條、此度ハ切て出候事、玄かと無用にて候、歸朝候て治部少との合戰の時、各手を碎馳走候てくれ候へとの被_レ申やうにて、切かゝり不_レ申候、漸々程近くニ居候もの計弓鐵炮にて射殺申候ニ付、頭三四十程取候て、唐人敗軍仕候事、

諸大名衆歸朝候へとの使札參各ふさんかい迄被_ニ罷出_一候事、

一其後ハ大閤御遠行被_レ成候儀隱密候へども、悉諸大名衆被_レ存候ニ付、異國に永々逗留仕合戰仕候ても不_レ入儀候間、各歸朝可_レ仕と被_レ申候處、家康利家より使札を以、異國に被_レ居候衆中各に被_ニ

申越_一候へ、大閤之御事、當八月十八日ニ御遠行候間、高麗をさし捨各歸朝被_レ仕候へと被_ニ申越_一候ニ付、各一同に釜山海迄被_ニ罷出_一候事、

小西行長釜山海に遲參候ニ付清正迎に被_レ參候事

一釜山海にて勢揃ひ仕候て被_レ見候へば、小西攝津守程遠き所に居候て、ふさんかいへいまだ不_レ被_レ參候、其時清正被_レ申候ハ、此段不_レ及_レ聞儀ハ有間敷候、定而猛勢ニ被_ニ取巻_一、爰元は不_レ被_レ參ものニて可_レ有_ニ御座_一候、小西と我等ハ、内々中惡しく候得ども、それハ私事にて候、日本之大將を壹人捨候て歸朝仕候事ハ、日本之外聞如何ニ候間、早々小西が居城の所へ參、小西を同心候て可_ニ罷戻_一候と被_レ申、舟にて三里、小西被_レ居候城の方へ被_レ參候、然所ニ小西も此段聞傳候て、高麗を捨釜山海の方に戻候時、道にて行逢候、清正も此通にて行長の迎に是迄參たるよし被_レ申候へば、行長もさてゝ忝候よし被_レ申候て、清正の船に乘移り、食どもくい被_レ申候、清正も相伴被_レ仕候、其時行長被_レ申様にハ、此中清正と我々中惡しく御座候へども、此たびの

御芳志不_レ淺忝存候間、古き事を捨られ、自今以後ハ別而可_ニ申談_一と行長被_レ申候、清正被_レ申候ハ、尤左様ニテハ御座候へども、行長ハとかく治部少輔と一味被_レ申候ハで不_レ叶はづニ候、我等ハとかく家康を頼_ミ申候ハで不_レ叶筈ニ御座候條、行長と我等之間初終ハほつとく成かね可_レ申と被_レ申候、それより行長清正別れ候て、以後ハ再會無_ニ御座_一候事、

釜山海より日本人歸朝之事

一左候て清正も行長もふさんかいに被_ニ罷戻_一、惣勢そろひ申候、其時惣中より被_レ申候ハ、歸朝ニテ國本_ノに歸陣可_レ仕候や、また大坂に直様可_レ有_ニ御上_一候やと被_ニ申入_一候處、各被_レ申候ハ、家康利家秀家など大坂ニ御座候、奉行衆も不_レ殘大坂ニ被_レ居候間、まづ大坂に被_レ上候て可_レ然との儀ニテ、各大坂に罷上候事、

清正屬ニ家康公ニ御馳走被_ニ申上_一候事

一清正事ハ、本より家康被_レ懸_ニ御目_一候ニ付而、直に家康公に參、萬事家康公を奉_レ頼候通被_ニ申上_一候ハ、家康も御祝着がり候て、昔より別て申談候間、

向後も不_ニ相替_一深重可_レ被_ニ仰談_一との儀ニテ、清正を聲に御取候て、肥後一國を丸め加藤主計頭清正ニ家康公より被_レ下候、其後はいよ_ノ家康に御馳走被_ニ申上_一候ニ付、別而御懇ニ御座候て子孫繁昌候、息肥後守にも無_ニ相違_一肥後一國被_ニ宛行_一、當御代にも其通ニテ御座候や、

蔚山籠城連開候時之御朱印

黒川氏本奥書

此書下川百兵衛殿より門屋氏借用して寫之下川氏其故加藤清正公ニ仕ヘ有職たり加藤家斷絶の後御當家に被_レ召出と聞傳此書ハ下川氏代々所持之旨然ハ專加藤家ニ而認置候書ならんか尤本之やうす則文牒旁實事たらん事をおもふにより書寫之置もの也

于貳寛政十二庚申年十月十一日

石川忠總家臣大坂陣覺書

御覺書大坂御軍一卷

慶長十九年冬御陣寅年十月十五日十四日に濃州大垣罷

立、但家中

石川主殿頭忠總公也

一殿樣駿府を十月十一日御立にて、伊勢路御上被_レ成候、大垣江前嶋孫左衛門御使ニ被_レ遣、大久保權右衛門殿ニ惣家中御つれ御上候様にと御意、孫左衛門十月十一日ニ大垣江參着御意之趣申渡ス、中二日おき、十四日ニ惣家中衆大垣を立、

一醍醐に御一宿被_レ成、惣家中御目見仕、彼地より惣家中被_ニ召連ニ御出陣、それより伏見江御着、富田屋所に御一宿被_レ成、翌朝御立被_レ成候時、惣家中馬乗之分御前に而召出しに御酒被_レ下、其上にて御手づから不_レ殘金子被_レ下候、それより八幡の近所うちさとへ御着被_レ成、十日程御逗留被_レ成、それより津田に御一宿被_レ成、それより平岡江御越被_レ成候時、すなの邊ニ而加賀之人數通申候、此人數通り候跡

に御押被_レ成候は、大軍勢之事ニ而候之間、二日も御をくれ可_レ被_レ成候間、加賀の人數之内押破、此方の人數通し可_レ然と被_ニ思召、則御馬ニ被_ニ召御乗破らせられ、御通被_レ成候、其跡ニ則權右衛門殿打つゝき、惣家中乗破り、權右衛門殿乗出し、加賀之人數の中江乗込、馬を横に立、加賀の人數ヲ通し不_レ申候、此加賀ノ人數とせり合喧嘩になり、さらに互にあらそひ申候、然ども此方の人數せり勝候て、人數を不_レ殘とをす也、扱彼所に一兩日御滞留、それより平野江御押被_レ成候、御相宿之衆松平下總守殿、西尾豊後守殿、徳永左馬殿、稻葉淡路殿、此衆之内、徳永左馬殿遅ク御出候付而、久法寺の前ノ河原に暫御待被_レ成候内ニ、平野ニ籠り居候敵此方乃旆の勢を見候てか、平野を地焼いたし大坂江引取、平野の宿未焼不_レ申候に付て、其夜ハ平野に野陣御一宿翌日平野乃宿に御打入、平野に十日程御逗留、此所にて番所五箇所有_レ之、此方より一所張番仕候、此時大坂より物見に出候者三人有_レ之、其内一人此方乃物見に出候者討捕、殘ル貳人は城中へにげ入申候、此外ニは諸手江一人も討捕不_レ申候、住吉と平野と

の間ニ野陣一宿、それより住吉の濱の松原の北方に野陣、爰に久しく御逗留、穢多瀬に蜂須賀阿波守殿御陣取御座候て、よし嶋江たれぞ被_レ仰付_一、其博勞ヶ淵を取申度候と阿波守殿言上被_レ成候_ニ付て、本多上野殿、水野日向守殿、永井右近殿をよし嶋見せニ被_レ遣候、此よし嶋の様子阿波守殿御申上候通に御座候に付而、御前にて御直に權現様日向殿へ被_ニ仰附_一候、然所に日向殿御申上候は、此所ハ舟なくしてハ不_レ成所に御座候、私之儀舟を持不_レ申、船無_ニ御座_一候而ハ難_レ得_ニ勝利_一御座候とて御辭退被_レ成候由ニ付而、權現様御不興被_レ成候由取沙汰申候、

殿様内ニいづ方江成共御先手被_ニ仰附_一候様ニと被_ニ仰上_一候ニ付、主殿頭可_レ參哉と權現様被_レ成_ニ御意_一候ニ付而、本多上野殿、水野日向守殿、永井右近殿、堀丹後守殿もよし嶋へ上野殿右近殿など御同道にて御出候、下心ハなにとぞ可_レ成所ニ候ハ、御申上よし嶋をうけ取可_レ申と御内存ニ御座候つれども、川御座候其上、鹽の指引有所ニて難_レ叶場ニ而御座候とて、兎角の事御申上なく候と其節取沙

汰申候つる、偕よし嶋御うけ取被_レ成一夜野陣、此よし嶋鹽滿有_レ之所にて候ゆへ、少小高き所御座候付而、御本陣に取申候、殊更其夜に雨ふり申候、鹽の指引有_レ之所にて候故、諸侍まで立あかし申候よし、嶋へ人數出し申候と敵見申候而、せいろうより鐵炮をひとつちかけ申候ニ付而、土をかきあげ是ヲかた取、惣家中の者ども一人も休閒もなく、終夜鐵炮うち合申候、翌朝ハ洲崎江押出し、向のせいろうより鐵炮打出し候者ときびしく鐵炮うち合申候ニ付、手負ども數多御座候、此所ニ而殿様御傍ニ居申候御さし物をうち申候者、胸をうちぬかれ申候而、當座ニ相果申候、蝶_{（羽）}の羽にも鐵炮いくつも中り申候へども、殿様御身ニハ御仕合能候而、一ッも中り不_レ申候、此所薄田隼人持口之由申候、此時權右衛門殿殿様ニ御取附候て、大將の先ばしり用なき事とて御留候へ共、御ふりきり洲崎へ御出被_レ成、向へ越候様ニと御下知被_レ成候得共、惣様之馬を住吉ニ置申候、其上折節鹽滿候時分にて候故、遅ニ申候處ニ、流舟一艘見出し候て、侍八人乗申候、ろかいも無_ニ御座_一候故、鎗の柄にて指候て、や

うく中嶋までつき申候、向へ渡りたかり候へ共、ろかい無御座候而、遅々申候様子見申候而、蜂須賀阿波守殿船大將岩田甚五兵衛と申者小船こぎ出し、又松平宮内殿船大將横川次太夫と申者も小舟ニ乗候て向へ着申候、此内に鹽も少々ひき、其上敵の乗すてたる船どもながれ來候を取候て乗、早速惣人數向へ無理越ニ渡り越申候て、則五分一を御乗取り被成候とをり御注進被成候、其使ニ

權現樣江

久目武太夫

被遣

將軍樣江

高木權兵衛

高木權兵衛御使ニ參候へバ、將軍樣殊之外御機嫌能被成御座、御前近所迄被爲召候て、御障子越ニ五分一乗取候様子權兵衛ニ委被爲聞召、其時刻權兵衛ニ吳服御羽織被ニ下置、御前ニ御座候御赤飯をも被下候、扨御前罷立候時、本多佐渡守殿御申候へ、權兵衛召連候者共ニ赤飯くわせ候へと御申、下々迄赤飲被下候て、事の外めいげらしき様子にて罷歸候、扨追附手柄仕候由にて、

御上使

權現樣ヨリ

加々爪民部殿

豐嶋主膳殿

將軍樣ヨリ

近藤勘右衛門殿

高木九兵衛殿

御出被成候、

博勞ヶ淵を御乗取被成、せいろう此方へ御取、それより仙波口へ押詰、大筒を御打せ被成候、仙波の塀矢倉などうち破申候、此時向より鐵炮きびしくうち候て、此方の者鐵炮手負申候者數多出來申候、此日晝迄ニ成瀬隼人殿御出被成深入いたし候て、上ニ御不興ニ被思召候、早速御引取り候へと被仰候、殿樣被仰候へ、あの向ノ塀矢倉など打破度候て大筒を打せ申候、向ノ様子御覽候へ、大方打破申候間、先引取候へんと存候間、御同道可申とて隼人殿御つれ立被成御引取被成候、其時權右衛門殿隼人殿御申候へ、主殿殿若氣ニ而深入めされ候とも、貴殿御留候へでおなじやうニ御出候事沙汰のかざりと御申候へバ、權右衛門殿あいさつニ、流矢ニ中りて成共死度候と御申候へバ、又例のこげつきを御申候とて、御笑被成候、扨隼人殿

御申候故、則御引せ被_レ成候、隼人殿御歸以後、又御はり出し鐵炮御うたせ被_レ成候、殊外鐵炮せり合御座候、其晚殿様御一人敵地に近く御攻寄御座候而、味方の陣に遠く其上いづれも川隔申故、夜討有_レ之事も可_レ有候間、無_ニ御心元_一被_ニ思召_一候との上意ニ而、鐵炮四百挺、瀧川豊前殿近藤石見守殿爲_ニ上使_一御連被_レ成御出、其夜御兩使も夜もすがら御起候て御座候き、石見殿ニ御附候て彦九郎殿も御出被_レ成候、加勢ニ參候鐵炮ハ、銅嶋_{土名}信濃殿より二百挺、淺野但馬殿より貳百挺、鐵炮頭之者拾人計參候、

扨右之四百挺の鐵炮つるべはなしニ遍御打セ被_レ成候てより、御本陣より後に被_レ成_ニ御置_一候、この時鐵炮頭の者斷申、是非御先手ニ被_レ爲_ニ置候_一而被_レ下候様ニと達而申候へ共、殿様御意ニハ、各被_レ申様も尤ニハ候へ共、我等者ども先手ニハ、番所申付置候間、跡に居被_レ申候様ニとて、三四町跡ノ川べりニ所指ヲ被_レ成御置被_レ成候、

傳勢ヶ淵ニ御陣取の夜、仙波地燒仕引取候様子ニ見へ申候と物見之者ども見來候ニ付、其夜仙波御

乗取リ可_レ被_レ成と思召立候處ニ、佐久間河内殿_{瀧川}
殿近藤石見殿ハ爲_ニ御横目_一御座候而、河内殿申候ハ、是迄御出候さへ深入と上ニ被_ニ思召_一御不興ニ御座候、仙波へ今夜御乗候事必御無用と達而御留候處ニ、殿様被_レ仰候ハ、我等今夜乘不_レ申候而も阿波殿御乗候はん間、我等乗取リ可_レ申と被_レ仰候へバ、河内殿御申候ハ、阿波殿御乗候はんと御申候而も、瀧川豊前指留申筈に彼は仕置候間、阿波殿も御乗有間敷候と河内殿御申候得共、是非參度候と再三被_レ仰候へバ、三度目ニ河内殿御申候ハ、我等首を御はね候而御乗候へ、其上討死被_レ成候は、御子々孫々迄御跡も立不_レ申様ニ可_レ仕と河内殿御申候而御留候、其時權右衛門殿御申候は、討死可_レ仕と存候も御奉公ニ成可_レ申事と存候而こそかせぎ申候へ、其儀ニ候ハ、主殿頭可_レ罷出と被_レ申候とも指留可_レ申候と御申候、右之仕合故無_ニ是非_一思召留り候也、其曉物見ノ者ども仙波へ乗込、敵ノのぼり三本首壹取來、則茶磨山へ御上被_レ成候、其朝仙波乗取り手柄仕候山、兩上様ヨリ上使、高麗橋にてきびしく鐵炮せり合、辰之下刻より未之刻迄有_レ之、手負死人

數多有之、御旗本御知人中も爲ニ御見舞掛附々々御出被_レ成候、此鐵炮ノ寄、權現様被_ニ聞召_ニ引取候へとの上使衆度々御出候へ共、くひあひ候て有_レ之候所ニ、豐嶋主膳殿上使ニ而人數於_レ不_ニ引取_ニは、謀叛同意たるべきと被_ニ思召_ニとの上意ニ而、其上ニ而御引取被_レ成候、此以後段々ニ仕寄ヲ附、堀口迄押寄申候、此後御扱ニ成、惣堀埋申候而京都迄御歸陣、蔭繪師庄太夫所ニ被_レ成ニ御座ニ候、惣人數ハ伏見より大垣に直ニ致_ニ歸陣_ニ候、以上、

大坂夏御陣卯年卯月七日八日兩日ニ濃州大垣ヲ

立、

石川主殿忠總公也

一殿様駿府御立被_レ成、直ニ伊勢路御上被_レ成候、惣家

中大垣より罷上ル、江州勢多にて御目見、それより大津ニ御泊被_レ成、それより殿様京へ被_レ成ニ御座_ニいづれの手ニ成共被_ニ仰付_ニ被_レ下候様にと板倉伊賀殿被_レ成ニ御意、惣家中人數ハ東寺の近所御所ノ内と申所へ參着、一兩日逗留、殿様も御所之内ニ被_レ成ニ御座_ニ一夜御泊り被_レ成、それよりかう谷へ被_レ成ニ御座_ニ此節高槻明候而御座候故、伊賀殿彼地

へ御越候得と被_レ仰候芳有_ニ之候へども敵陣近ク味方あたりニ無_レ之候故、何も御思惟御座候處ニ、殿様より箇様の所にも參度よし伊賀殿に被_ニ仰入_ニ候處ニ、尤ニ而候とて、伊賀殿御悅ニ而如何とも御越候様ニと被_ニ仰越_ニ候故、殿様早速かう谷御立、其晩高槻に被_レ成ニ御着、十七日彼地ニ御陣取被_レ成ニ御座ニ候、

一三嶋口張番之者之御注進之様子之事、

此時大坂落人十四五人虜、權現様すなと申所ニ被_レ成ニ御座ニ候故、御引を御上ケ被_レ成候處ニ、殊之外御機嫌能御座候由ニ而候キ、此時京極若狹殿、同丹後殿合宿いたし候、京極筋押可_レ申旨上意之趣御奉書參候、其日はや申ノ下刻にて御座候故、漸日暮申候間、柱本迄ハ明日御越被_レ成候様ニと、權右衛門殿をはじめ、組頭年寄共申候へ共、兎角今晚柱本迄押寄可_レ被_レ成と殿様達而被_レ仰、則御馬にめされ御出被_レ成候故、惣人數も追々打立、其夜柱本へ參着仕候、舟越之川御座候、此柱本其外近郷、喜多見五郎左衛門殿御代官にて御座候ゆへ、小舟貳拾艘御肝煎御借被_レ成候、舟越一番二番の鬨取りをいたし、

唯今より終夜越候へと御下知被_レ成候に付而、宵より夜明迄ニ惣人數越拂申候、皆々明曉より御越被_レ成可_レ然と申上候へ共、大勢ノ人數急速には越れまじく候間、只今より越候へと被_レ仰、宵より越候て、夜明時分に越拂申候、殿様御下知之様ニ、宵より越不_レ申候者、七日之御合戦に御あひ被_レ成候事遅延可_レ申候ニ、早速御こさせ被_レ成候故、七日の御合戦に首尾能御あひ被_レ成候とて、年寄候者どもかんに申候キ、

扨京極丹後殿同若狹守どの先備にて、殿様ハ三番備にて御座候故、御兩殿にきれと早々御越可_レ然之由被_レ仰候處ニ、御返答ニきれと前ニ當陣取可_レ罷在候旨被_レ仰付候間、越申事罷成間敷候之由申來候ニ付而、又重而とかく御越被_レ成可_レ然候、實ニ御越不_レ被_レ成候ば、御兩殿先備ニ而御座候得共、きれと御守候事ニ候間、拙者一人先々越可_レ申候由被_レ仰遣候處ニ、貴様一人越させ申候而是ニ罷在候事ハいかゞニ存候、然ども右申通きれとヲ守り可_レ罷在旨被_レ仰附候ニ、此所を越參候はいかゞ可_レ有_レ之と存候、後日ニ公儀より御とがめ御座候ば、其

節貴様御指圖にて越申通請ニ御立候ニおいてハ越可_レ申と被_レ仰越、互の御使度々往來御座候處ニ、則殿様より被_レ仰遣候ハ、拙者申候而御越候様ニいたし候通、急度可_レ申上候間、御心安御越候様ニと被_レ仰遣候ニ附而、さらば請ニ御立候上ハ、御越可_レ有とて、御兩殿きれとを御越被_レ成候、喜多見五郎左衛門殿も其場ニ御座候、御越候事尤至極に御座候とかろぐと申候へバ、殿様被_レ仰候ハ、きれとヲ越一戦をとげ、うち死仕候へバ、後日ノ御とがめもあるまじ、又一戦にうち勝敵ヲ追崩し候ハ、猶以御とがめ有間敷候之間、これ程心易請に立物ハなく候と被_レ仰、大笑被_レ成候、扨京極殿きれと御越候ニ付、殿様も即時ニ御越、京極丹後守殿、同若狹守殿ハ、道筋ニ備を立御陣取、殿様ニハ道筋堤より下ニ御陣取被_レ成候、是ニも殿様御心持御座候而如_レ此御陣取被_レ成候、大坂人數道筋ニ出、京極殿人數突崩され候ハ、横矢ニ相掛リ、跡ヲ御取切被_レ成、十死一生の合戦を被_レ成可_レ被_レ得ニ勝利との御行にて御座候、物見之者被_レ遣候へバ、一里程先に大軍押出し候と相見へ候由乘歸申上候、其内ニ御本陣

よりも人數押出し申鉢相見へ申候ニ付而、其まゝ一戰を可_レ被_レ成と思召、人數押出しひたものかゝり候處ニ、敵の人數旗指物見へ不_レ申候ニ付而、上下共ニ不審をなし、其内にもひたとかゝりゆき申候處ニ、少程在てから大坂の天守より烟一筋高クあがり申候故、烟とも見分がたく、彌不審ニ存候内ニ焰出申候故、扱ハ落城にて候と殿様被_レ仰、彌惣人數早ク押詰一戰可_レ仕と御下知被_レ成候故、則押かゝり候へバ、大軍にて候へども、落武者故、不及ニ一戰一崩申候を、追討ニ京橋ノ際迄追打ニ打申候而、首數貳百七拾三討捕、則茶磨山に御上ケ被_レ成候、此外切捨に仕候者、首數より多御座候、先々早く御押詰可_レ被_レ成候間、高名ニ手間入候へで、切捨ニ仕候へと御下知被_レ成候故、大形切捨申候、はやく取申候首ども計持參候故、其分貳百七拾三御上被_レ成候、扱京極殿ハ道筋を御押候故遅ク御座候、殿様の御人數ハ田畠をも構ず押候故、京極殿御兩殿の人數よりばつくん先へ成申候、京橋近ク罷成、御旗奉行鈴木與左衛門、山崎六郎右衛門御旗を何方ニ立可_レ申哉と伺申候處ニ、殿様旗御引可_レ被_レ成と

て兩人之奉行ども再旗指被_レ召連、京橋の橋爪に御立被_レ成候故、惣人數則京橋之町ニ屋陣仕候、京極殿御兩殿跡より御押被_レ成候故、野陣ニ而俄ニ可_レ被_レ成様無_レ之間、町屋之はづれヲ本陣計御借被_レ成候ハ、可_レ忝旨被_レ仰越_レ候之處ニ、殿様御返事ニ、安キ御事ニ御座候、借可_レ申由御返事被_レ成、町屋一町餘御渡可_レ被_レ成と被_レ仰、其分之屋陣ニ居申候者ども明候てつばみ候へと被_レ仰、御意ニ付皆々つばみ申候、何もつばみ申候者共腹ヲ立申候、春日市右衛門御前に參候而、京極殿ニ用なき町屋御借被_レ成、我等共も有付候所ヲ出候而、餘の方わづばみ申として御前ニ而腹を立申候へバ、殿様御笑被_レ成箇様之無心申仁ニハ、何時も明て借ヌ物にて候由被_レ仰候、京極殿より御禮狀來ル其趣ハ、今度ハ御指圖ニ依テされとを早速越申候故、是へ早々參着申候、其上陣屋迄御借被_レ成、忝偏に御かけと重疊忝存候と申來候、五月七日之事ニ而御座候、京橋筋取固備を立御座候、翌八日に權現様御歸陣之節、京橋にて旗ヲ御覽被_レ成、主殿頭是へ押詰候かと御懇之御上使被_レ下置、殿様はいまだ御前御赦

免無_レ之時分ニテ候故、御目見不_レ被_レ成、權右衛門殿修理殿を初、御存知之者ども罷出、其後惣侍共罷出御目見仕候處ニ、御存知之者共にハ御詞ヲ被_レ爲_レ懸御通被_レ成候、

一銀の千枚ふんどう持通申候を追落候て、茶磨山に上ゲ申候、

一生捕三拾人、是ハ手前ニ而穿鑿いたし、侍の分をば切捨、町人百姓をバ追放候へとの上意ニ付而、それぞれに被_ニ仰付_一候、

一御歸陣以後於ニ京都ニ一權現様御咄ニ、主殿頭方より指上候首、大手より來候首共と追付來候事不審ニ被_ニ思召_一候處ニ、翌日御通之節御覽被_レ成候へバ、主殿頭はやく押詰候と見へ候て、京橋ノ際ニ陣取候間、是ニ而首ノ早キ所御不審はれ候と上意ニ御座候、此段世間ニ流布候て、京極殿御兩殿先手ニ被_ニ仰附_一候ニ、後に成候事御迷惑思召、段々御斷被_ニ仰上_一候由、就_レ夫主殿様之様子御聞可_レ被_レ成と思召候得共、殿様はいまだ御登城不_レ被_レ成候ニ付而、幸春日又三郎初中後、殿様御供申參候ニ付而、又三郎を被_レ召、本多上野介殿、安藤帶刀殿、成瀬隼

人殿、御三人ヲ以テ主殿頭ハ三番ニ而候ニ、先へ押詰候様子いかやうの子細ニ而候と御尋候處ニ、春日件之趣御老中へ委細ニ申上候へバ、御三人之衆も何よりの證據ニハ、橋爪ニ主殿頭之旗を押立候間、何らの事も不_レ入候とて、則被_ニ仰上_一候へバ、權現様御機嫌能被_レ成ニ御座候と承候、此節殿様御自身御旗御引被_レ成、京橋の際ニ御立被_レ成候事是一ツ、又京極殿ニ屋陣を早々御借被_レ成候ニ而き、りと京極殿跡ニ成候所、一ツ町之内にてたゞしく一二相見へ申候段皆々存當、殿様御分別故と奉_レ感、春日又三郎も其時最前之腹立をうちわすれ大悦仕候由申候キ、

一京都に御歸被_レ成、大宮通貴妙院と申寺ニ御宿被_レ成、兩上様御在京中、京都ニ被_レ成ニ御座、直ニ伊勢路を駿府へ御下向被_レ成候、御人數ハ高槻より直ニ大垣へ罷戻り申候、

一銘物之吉光ノ刀大坂之御物に而候を、七日之日討取ニ致、京都ニ而權現様に御上ゲ被_レ成候處ニ、殊之外御機嫌ニて此刀ハ秀頼より明石掃部ニくれられ候由ニテ候間、其討取者はいか様の様子にて被

哉と御尋ニ付而、吉光討取候權田五太夫京都へ急
ギ御呼御間被レ成候へども、見知不レ申候ゆへ、其通
ニて候、其段五七年も程經候而、台徳院様之御咄
ニ、吉光は明石掃部ニ給候由ニ候間、定て主殿手へ
討取候者明石掃部ニ而可レ在レ之候か、其後掃部行
衛なく候之間、此節相果候ものにて可レ在レ之候得
共、主殿が召使ノ者共三河筋之者にて、上方之侍見
知候ハぬ故、惣首之中に押籠候ものにて可レ在レ之
と上意之由申候、

卯五月七日於ニ大坂ニ高名之帳

一頭一ツ 卅計具足下黒シ 加藤新七郎
若黨左助申候
一頭二ツ 一人ハ廿七具足下淺黄 石川彌七郎
卅四具足下かさめさやの大脇
差取申候
一頭一ツ 卅計具足下 石川藤太夫
計着申候
一頭二ツ 一人ハ五十計柿の帷子着 一人 加藤與兵衛
ハ廿四淺黄帷子着刀計取申候
一頭四ツ 一人ハ廿五計黒帷子着 一人ハ五 伊奈主水助
十計具足下淺黄 一人ハ廿四五め
ひき帷子着 一人ハ卅計白帷子着
一頭一ツ 卅計甲付鳥 石川八郎右衛門
毛ノまころ

一頭一ツ 四十計黒帷子着刀脇差取申 天野刑部左衛門
候是ハ若黨堀口忠九郎討取
一頭三ツ 此内一人ハ 伊奈平兵衛
若黨討取
一頭二ツ 此内一人ハ 近藤奎右衛門
若黨討取
一頭二ツ 卅計脇差 平出右衛門七
取申候
一頭一ツ 四十計 和田五右衛門
卅計脇差
一頭一ツ 五十計甲付蓼畑ヘ手ニ而具足 柘植六兵衛
わき捨申候所ヲ見出討申候
一頭二ツ 一人ハ廿七具足下高宮 川澄彦太夫
一人ハ若黨二助討取申候
一頭二ツ 一人ハ四十計具足下 大久保新七郎
一人ハ廿六七白帷子
一頭五ツ 二人ハ卅計 三人ハ若黨 山崎五郎太夫
彦三郎惣五郎討取申候
一頭三ツ 二人ハ四十計白帷子 平岩新左衛門
二人ハ淺黄帷子
一頭一ツ 四十計刀脇 淺井藤右衛門
差取申候
一頭一ツ 廿四五計 成瀬宗一郎
卅計刀脇
一頭一ツ 卅計刀脇 太田彌太夫
指取申候
一頭三ツ 二人ハ具足下計着刀一ツ取 瀧見源藏
申候 一人ハ若黨討取申候
一頭二ツ 一人ハ刀計取申候 加藤三七郎
一人ハ刀脇指取申候
一頭三ツ 一人ハ卅計脇指取申候 細木彌次之助
一人ハ四十計 一人ハ四十計 松井兵右衛門

一頸一ツ 四十具足下
淺黃大小取申候

成瀬十右衛門

一頸三ツ 一人ハ四十計 二人ハ家
來喜介又助ト申者取申候

大河内金三郎

一頸一ツ 廿四五具足下
萌黃どんす大小取申候

高木右衛門太郎

一頸一ツ 四十計具足下
白はぶたへ刀計取申候

大須賀勘左衛門

一頸二ツ 廿計

戸塚助右衛門

一頸一ツ 廿計
黒キ具足下刀脇指取申候

小柳津新右衛門

一頸三ツ

前嶋文太郎

一頸六ツ 内二人ハ召仕藤次郎
孫介ト申者取申候

神田九兵衛

一頸一ツ

濱名里右衛門

一頸一ツ 廿計

石川左次兵衛

一頸二ツ 一人ハ四十計若黨二三と申者にう
たせ申候一人ハ廿四五脇指取申候

田村齋院之介

一頸一ツ 四十計がつそ
うにて御座候

井出六左衛門

一頸一ツ 四十計脇
指取申候

片桐角兵衛

一頸一ツ 廿四五計

曾根又左衛門

一頸二ツ 内一人ハ内
ノ者討取

石川甚太夫

一頸二ツ 一人ハ廿計 一人
ハ五十計朱具足着

増田太郎右衛門

一頸二ツ

酒部仁太夫

一頸一ツ

村越九太夫

一頸一ツ 四十計具足下
す柿刀脇指取申候

市川作右衛門

一頸二ツ 一人ハ廿七八具足下
紫人ハ廿四五刀脇指取候

小野田小兵衛

一頸二ツ 一人ハ廿四五脇指取申候
一人ハ四十計刀計取申候

稻富傳右衛門

一頸一ツ 廿計淺黃
帷子着

加藤九郎兵衛

一頸一ツ 廿五計大
小取申候

岩田兵庫

一頸二ツ 一人ハ五十計具足下
淺黃刀脇指取申候 一ハ四十計

小寺長兵衛

一頸二ツ 一人ハ廿四五甲付
一人ハ四十計

酒部次郎兵衛

一頸一ツ 廿計刀脇
指取ル

市川長右衛門

一頸一ツ 廿計黒
具足着

田邊與次左衛門

一頸一ツ 四十計

野々山忠左衛門

一頸一ツ 廿計

梶川右馬之助

一頸一ツ 廿計

松井喜右衛門

一頸一ツ 廿四五白
キ具足下

高岡半兵衛

一頸一ツ 廿計

岡田長藏

一頸一ツ 廿計

中黒彌兵衛

一頸一ツ 廿計

芝田少三郎

一頸二ツ 一人ハ廿計 一人ハ
廿五六大小取申候

高木權兵衛

一頸一ツ 廿四五計
脇指取

渡部宮内

毛利半助

山崎次兵衛

奧山金左衛門

柘植左五左衛門

加藤又十郎

松井久兵衛

來鹽忠藏

矢田文右衛門

山口左太夫

市本九左衛門

淺井庄兵衛
名倉爾右衛門

村田新介

向渡權兵衛

戸丸五郎七

板倉五左衛門

半田忠太夫

矢田忠兵衛

糟屋彌平次

鈴木市兵衛

權田五太夫
鶴殿忠三郎

松野三郎左衛門

松田勘助

桑子太郎左衛門

曾根宗右衛門

市郎左衛門

松井勝右衛門

野澤左太夫

高木與五左衛門

川井又右衛門

一頸一ツ 卅四五具
足下淺黃

一頸一ツ 卅計具足下高
みやノ淺黃

一頸一ツ 四十計具足
下くり梅

一頸一ツ 卅計具足下淺黃
大脇指取申候

一頸一ツ 卅二三具足
下高宮萌黃

一頸一ツ 内一人小
者討申候

一頸二ツ 刀二腰取申候
内一人ハ家來討

一頸二ツ 内一人ハ内
ノ者討申候

一頸二ツ 大脇指計
取申候

一頸一ツ 四十計具足下
裏表白キねり

一頸二ツ 一人ハ廿計
一人ハ卅四五計

一頸二ツ 一人ハ卅四五計
一人ハ卅四五計

一頸一ツ 刀計取
申候

山田五郎兵衛

榎本五兵衛

中川半之丞

渡部勘右衛門

河井牛之助

森 權十郎

布施久太夫

其原旦三郎

中川十左衛門

櫻井權十郎

伊奈九郎太郎

山 本 佐 吉

寺嶋慶三郎

市 橋 平 内

成瀬太郎助

久目一平次

酒井左平次

高木三十郎

一頸一ツ 四十計

一頸一ツ 卅七八計

一頸一ツ 卅計

一頸一ツ 卅計具足
下うす柿

一頸二ツ 卅計

一頸一ツ 刀脇指
取申候

一頸二ツ 一人ハ卅計
一人ハ内ノ者庄六討

一頸一ツ

一頸二ツ 刀計取
申候

一頸一ツ

步行衆

一頸一ツ 卅計具足下淺
黃脇指取申候

一頸一ツ 五十計刀脇指取申候
山 木兵右衛門助ケ申候

一頸二ツ

一頸二ツ

一頸一ツ 廿二三計具足
下淺黃ノ帷子

一頸一ツ 卅四五刀
計取申候

一頸一ツ

山崎五助

淺井又助

淺井少次郎

小寺作三

伊奈彦九郎

矢田光助

都石三九郎

鱸 平 介

中澤久太郎

淺茅左太郎

篠窪長左衛門

白井四郎兵衛

山 田 作 介

曾根太郎左衛門

川 田 平 助

宮 内 甚 内

森 七 兵 衛

一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ

加茂二平次
高橋伊左衛門
塚本打右衛門
細木權七郎
渡部角太夫
高田甚三郎
近藤五兵衛
長谷川六太夫
桑原吉太夫
名輪左傳次
鈴木伊右衛門
渡部勘右衛門
山木兵左衛門
高橋清八郎
祖父清太夫
近藤九右衛門
鈴木彌平次
坪井七郎兵衛
加茂次郎左衛門
根岸六之助

一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ
一頸一ツ

大久保權右衛門内

一頸一ツ四十計

一頸一ツ廿七八具足下辻が花染さめざやノ中脇指取申候
一頸一ツ廿八九中脇指取申候

片桐助左衛門
八木茂兵衛
田村兵太夫
木俣八左衛門
新田喜兵衛
鳥井吉右衛門
近藤七左衛門
大原金右衛門
天野半右衛門
筒井奎左衛門
井口作左衛門
服部佐左衛門
猪俣六藏
深井茂兵衛
寺澤孫右衛門
中嶋長三郎
谷瀬兵衛
福田治左衛門

一頸一ツ

足輕衆

久世六太郎

作左衛門

一頸一ツ 廿七八刀脇指取申候

美濃組

川崎五兵衛

一頸一ツ 廿二三計

鈴木三平

一頸一ツ 廿四五計

平井少次郎

一頸一ツ 四十計

近藤奎右衛門同心

犬飼市助

一頸一ツ 廿四五計

木村作内

一頸一ツ 五計

石垣組

三田村勘十郎

一頸

和田五右衛門同心

北村角左衛門

一頸二ツ 廿五六

野原吉助

一頸一ツ 廿七八刀脇指取申候

天野刑部左衛門同心

大野少三郎

一頸一ツ 廿四五計

柳 忠次郎

一頸一ツ 廿計

鈴木與左衛門同心

高瀬長三

一頸一ツ 廿四五計

松岡 仁右衛門

一頸三ツ 一人ハ甲付四十五計刀脇指取申候
二人ハ廿五六ノ者

新右衛門

一頸一ツ

勝三

一頸二ツ 一人ハ廿二三刀脇指取申候
一人ハ三十計

何右衛門

一頸一ツ 四十計

作左衛門

一頸一ツ 四十計

左内

以上

都合首數貳百六拾七

但家中又者迄

大坂冬御陣之時主殿頭様御陣取并大坂迄武者押之次第

一伏見油懸ニテ惣家中指物を指可參之旨御觸在之、
扱馬ニ乗參候者之分、千石より切米十五石取申者迄御前に被召出、御酒を被下、金子壹兩ツ、被下候、此節御前に被召出様、知行高年分無高下罷出次第御酒を被下候、此段を家中ニ而申候は、高下なしニ被召出一候事過分成儀と申候、家中又ハ脇々ニ而もすいりやう仕候ハ、今度主殿頭様討死ニ御究被成候御心底と心有者ハ申、心なき者ハ酒と金もらひ申と計存ものもあるべく候、
一次之陣所八幡の東内里村と申所ニ陣取被成、それより津田と申所ニ陣取被成候、此所ニ而ハ最早濫妨を仕候、穴を堀候て埋候米共ヲ取始候事、

一 くらがり峠の下、松原と哉らん申所ニ、御陣被爲取、くらがり峠の上ニ百姓小屋ヲ掛罷有候、小屋落シニ參度と大久保權右衛門殿申所小屋落ニ參候事、一 此頃の陣所くらがりより五三里程先畑ニ陣取候へ共、雨降小屋懸候事不_レ成、わらを取よせ面々之身にまとひ罷在候、又手廻し能者ハ、其夜ニ小屋を懸候者も御座候、此所ニ而毛利孫兵衛と申者と三宅十太夫と申者ハ人足の儀出入ニて打果し申候、一 右之頃住吉表小妻と申所ニ陣取被_レ成、主殿様ハ逼息ニ而御立被_レ成候故、公儀より萬事御下知も無_ニ御座、責口の被_ニ仰附_ニ茂無_レ之、無_ニ十方_ニ躰、諸大名も公儀ヲ恐_レ、主殿様と近附申者一人も無_レ之所に、松平下總守殿代々の御知音筋目被_ニ思召_ニか、下總守殿人數之跡ニ續テ御押之様にとの依_ニ御内意、下總守殿之跡ニ附人數被_レ爲_レ押候事、一 水野日向守殿馬喰が淵御責可有由被_ニ仰附_ニ候へ共、日向殿身躰ニて御責候事成間敷由ニて、公儀へ斷御申、責口御上ゲ候之儀、主殿様、權右衛門殿へ御聞被_レ成、權右衛門殿住吉御本陣被_レ參、主殿頭人數を召連參、責戰申度由被_ニ申上_ニ候得バ、尤主殿頭

權右衛門左様ニ可_レ申と被_ニ思召_ニ候、早々彼手馬喰淵に參候様ニと被_ニ仰附_ニ候、主殿様御悅、馬苦勞ガ淵に十一月廿七日ニ地形責口の善惡爲_ニ御覽_ニ御越被_レ成、葭ヲ刈如山ニ築地之形相御覽被_レ成、御歸之節旗をばらせ、住吉へ御歸候、旗ををばらせ候儀御心も有_レ之哉、次之廿八日又旗ヲ張り、武者押行列ヲ定御越御着陣被_レ成、扨此押陣之時、水野日向守殿責口御上候事殘多被_レ存候哉、又日向守人數押出し堤の上ニ罷在候、權右衛門殿主殿様惣人數を召連御越候處ニ、日向守殿人數ニ而道つかへ申候附、何とて人數先つかへ候哉と被_レ努_努候へバ、日向守殿の人數ニて先つかへ申候由申候へバ、權右衛門殿殊之外怒り、主殿人數さしのけ先を可_レ仕もの日本の内ニハ有間敷候、ふみたおし通候へ、座敷ニてめとる成者をなぶりたるまねは此權右衛門ニハ成間敷ぞと被_レ申候へバ、日向守殿へ被_レ申候へ、いつてつ人之衆御通りあれと被_レ申候而通り候處ニ、其場に永井右近成瀬隼人安藤帶刀など罷在られ、權右衛門殿と水野日向殿と知人にいたし候はんと引合被_レ申候へども、權右衛門は其通ニいたし

うなづき罷通られ、蜂須賀阿波守殿舟を借、小川ヲ越候時、權右衛門殿被_レ申候ハ、日向守人數ハ、壹人も越させ申な、主殿人數ハ、草履取ニ至まで、一人も残すなと下知いたされ候、此詞をバ誰も脇ニ存たる者ハあるまじく候、大河内金三郎權右衛門殿傍ニつき罷在申候、其後主殿様御押、日向殿前を御通候節、永井右近太夫主殿様へ御申候ハ、大三河之寄合にて、さはちの出合あぶなき事と御申候へバ、主殿様被_レ仰候ハ、私口申事ハ聞不_レ申候間、左様ニ可_レ有_レ之と被_レ仰候事、

一右之通日向守殿に權右衛門殿御申候は、遺恨有_レ之而被_レ申候と相見へ候、伏見ニ而人數押ニ而罷在候節、窓より日向守殿此方的人數を見被_レ申、此人數ハたれノ人數と、我が小姓ニ被_レ聞申候へバ、石川主殿頭様人數と申候處に、日向殿被_レ申候ハ、あのせがれハ人數かと挨拶致候ヲ、權右衛門殿其前ヲ通り合御聞候、左様之遺恨にて候哉、日向殿ニはをかけ踏たをし候へなど、御申候と下々にて申候事、一右之通舟を越、馬喰が淵ニ陣取、明廿九日之未明ニ、馬喰が淵へ番船を出候旨申來、扨家中之侍鐵炮足

輕鐵炮惣様罷出、鈴木田隼人持口ヲ鐵炮打懸、互ニせりあひ候處ニ、玄んけいと申所之方へ人數少出申候を、鈴木田人數敵ニ後を取切れ候かとおもひ候か、主殿様手より強ク責候故か、敵退口ニ成候節、流舟來ヲ、神田九兵衛取候而、侍九人乘申候事、一玄んけいへ出候人數ハ、水野日向守殿手とも申、又ハ蜂須賀阿波守殿人數とも申候事、

一右之舟ニ乗候て越申時、蜂須賀阿波守殿之者森甚五兵衛と哉覽、白キ練の單羽織ヲ具足ノ上ニ着、小舟ニのり來て申候ハ、主殿様へ舟を借可_レ申由申候口、尤借候得ど、九人之中より申候へバ、心得申候と申、其節金三郎鐵炮之火繩の火消申候ゆへ見申候へバ、甚五兵衛ノ舟ニ火見へ候ニ付とらへ候へハ、割木ニ火付たるをくれ候て、殿様陣所之方ニ乘懸參候、此方ハ鍵の柄にて舟を指、敵陣にすゝみ參候を、甚五兵衛見申、舟ヲもどし候て申候ハ、さらバ某も懸り可_レ申と申候、小舟ニ艦あまた立押立候故、此方の舟より少先ニ進申候、此方の舟ハ神田と村田と兩人して、鍵ニ而精ヲ出し、まけじと指申候ゆへ、とたんニ着申候、甚五兵衛船少はやきニ

依テ陸へ上り首を取申候由、併此首ハ此方の手より強ク鐵炮打懸候故、死人手負幾人も有レ之候、左様の者之首を申哉、此方の者ハ首ニ心ハかけず、芝居ヲ取堅め可レ申と存、すゝみ申候節、大河内金三郎鐵炮ニ而退候敵ヲ立放ニ打候へ共あたらず、次ニ與五左衛門打候へバ敵たをれ申候、其時詞をかけ參タト申候へバ、はねおき退申候、細道ニ而、道ハ惡敷すべり申候故、すべりころび申候と見へ候、敵の矢ハさし矢ニ射申候間、十五間餘有レ之候、七郎兵衛ニ一ツ袖ニ當ル、新助ニ一ツ具足ニ當ル、扱退候ヲ追懸候へバ、彼白羽織の甚五兵衛跡より來テ申候ハ、主殿様衆深入にて候間、敵もり返し可レ申と申候故、此方申候ハ、何之可レ爲ニ深入候、仕テみせ可レ申と申、すゝみ追候へバ、三百人計之人數之中へ懸入退申候、其外阿波殿衆手負の首を取居申者御座候、神田申候ハ、此方の打ころし候者の首ヲ取候間、四五人之者ヲ打ころし、首を取返し可レ申と申候へども、味方打ニ可レ被レ成候間、無用と申、相止候事、一不レ燒精樓壹ツ有レ之候、それへ押懸候へば、敵にげ申候、鍵持五人ハ、中黒彌兵衛、坪井七郎兵衛、鹽谷

源五郎、村田新助、神田九兵衛、此精樓の脇ニかまへ居申候時、中黒差圖ニ而、精樓の影より出入ヲいたし、敵に大勢に見せ候へと申候而出入ヲ仕候、扱淺井左次右衛門、坂部與五左衛門、大河内金三郎、鐵炮ニ而さきへ出、膝臺ニ而鐵炮に火をはさみ敵を待懸居候へ共、敵不懸ニ付、金三郎川端ヲ見廻り候へバ、黒キ頭形りの甲に前ニ金ニ而何やらん紋ある黒具足着タル者、左ニたらいヲ持、右ニハ鍵ヲ持罷在候故、鐵炮ニ火をかけさし向候へバ、味方ニ而候れうじ仕なと申候間、誰の者と相尋候へバ、宮内少者ニて候由申候間、にげ用意に而たらいヲ持候哉、味方ニ而も打たをし可レ申と申候へバ、たらいヲ捨置、それより中黒罷在候所ヲ通り申候、中黒も敵とは不レ存味方と存候而、彼者にむかひ中黒申候ハ、向ノ敵ニ人數大勢ニ見せ候ためニ如レ此出入ヲ致候と申候へバ、彼者申候ハ、一段の御指引とほめ申候而、葭嶋につき罷通り、宮内少殿内横川次太夫ニもとがめられ候處ニ、横川を宮内殿者ととららず、又宮内者と彼者申候哉、かこの者共ニ、ろかいにて打たをされ、首を取り上様に差上ゲ御感狀取候由承

及候、此者たばかりヲ申、主殿様御陣場ヲ罷通り候、後日ニ申候ハ、此者の首ヲ取り差上候ハ、主殿様御手柄ニも可_レ罷成_一ものと殘多儀と申候事、

一 其外二ツ之精樓の間ニ葭嶋有_レ之候、此方より強ク責候故、手負死人數多出來、手負ども數人葭嶋に隠_レ居申候間、夜ニ入大坂に逃込候由、あつかひニ罷成和談之節、大坂籠城之者共ニ承り申候、此段存候ハ、よしニ火ヲ付候て、無_レ殘やきころし可_レ申ものをと後日ニ申候事、

一 權右衛門殿二番舟にて御越ニ、其時中山何右衛門御旗之まとひヲ持來、精樓に押立申候、厥後鹽干ニて惣人數無_レ殘越申候、主殿様御歩行之者八十人有_レ之、鎧をたばねさせ、中間ニもたせ、物前之時ハ一本宛一人々々ニ渡ス此者共馬の廻を圍備、先手突崩されても、旗本にて幾千萬の敵なりとも突返し申べき爲_レ牀、誠良將之生付有人也と覺タリ、手廻リ之歩行者ハ、家中之者小身成ル者之惣領、或二番目、三番目の子どもなれば、馬ニハ不_レ乗候へ共、手鎧ひつさげたる時ハ、誰にもおとらざる侍ども也、後に紀伊大納言殿へも申上候へバ、尤ニ思召候也、

一 主殿様ハ精樓ヲ本陣にイタシ、其脇にひさしの様成所在候而、是ニ權右衛門殿陣取御入候、敵近ク候所に一手諸軍勢より進出、敵陣に陣取、大河を隔御座候儀ヲ、安藤帶刀見被_レ申、加勢之鐵炮三百挺持來、主殿様鐵炮指令、夜半より前ニつるべ鐵炮三つるべうち掛、鐵炮頭召連罷歸候、鍋嶋どの鐵炮と承候而、餘人がらも參候哉、睨とハ不_レ存候、其後小屋不_レ掛に霜ニうたれ、川端ニ臥罷在候處ニ、神田九兵衛、中黒彌兵衛、坂部與五左衛門、堀際をありき聞申候處ニ、城之内足音高ク候間、退候かと存候間、主殿様に申上乗籠可_レ申由申ニ付、さらバ可_ニ乗籠_一とて罷越候、霜月晦日ニ侍十三人乗籠候、此内壹人吉田半左衛門ハ、中黒ニ二番乗りと斷候由、是ハ仙波屏乗一二之書付也、

一 仙波屏乗之時、未明一番に乘取候、其以後九鬼長門守殿者來テ申様ハ、主殿様御備一番乗御手柄ニ而御座候と申候、此方より申ハ、主殿頭ハ一番乗り仕候、能御覽候哉と挨拶仕候事、

一 佐久間河内と申御使番衆被_レ參被_レ申候ハ、主殿之御手先御法度ヲ背候而、城中へ乗籠候者共ニ切腹

可_レ被_二仰附候と被_レ申候由ニ候、天野刑部左衛門鈴木與左衛門兩人來、早々引取候へと申候ニ付、先へのり籠候者共申候へ、御旗早々被_レ押籠候へと申候へ共、二度か三度、刑部左衛門與左衛門兩人之者、殿様御意と申候へ共不_レ用、生取り之難人之者ニハなわをかけ、軒下ニつなぎ置、城之方へ猶々押籠見申候得共、彌右之通せいし申候故引取申候刻、阿波守殿人數ヲバ押込候様にと河内殿下知せられ候由、其節此方之人數は阿波殿人數と入違申候、此子細ハ河内殿と阿波殿と入魂故、阿波殿手柄ニ被_レ致度所存と相聞え候、然ニ付テ大御所様へ蜂須か仙波之一番乗と取成を申上候由ニ候へども、後日ニハ此事無_レ隱、主殿様一番乗と、世上へも相聞へ申候、一右いましめ置候生捕の難人の首を何者やらんえばり首を切持參仕、一番高名仕候と主殿様へ申上候由承候付、右馬喰が淵一番乗仙波之一番乗仕候者共申候ハ、是ヲ一番高名ニ被_レ成候ハバ、只今迄先ヲ仕候者ども一人も御家中ニ罷在間敷候、遠クにも參間敷候、御陣所ならびニ罷在かせぎ候て可_レ懸ニ御目候と申候へ共、誰とても罷出申者無_レ之ニ付、

大河内金三郎を使にいたし、右きより首之段々大久保權右衛門殿ニ申斷せ候へバ、權右衛門殿被_レ申候者、我が胴にくびの付候内ハ、高名ニハさせまじく候間、いづれへも左様ニ申渡し候へと御申候故、何哉へ其段金三郎申聞せ候へバ、それにてまづまり申候、

一極月朔日ニ高麗橋を敵方より焼落し可_レ申手立之様に相見へ候と物見之者申候て、主殿様權右衛門殿御聞ニて焼せ申間敷由にて御責懸候節、侍十六人、外ニ石垣組彌左衛門と申足輕壹人都合十七人、是ハ成宮彌左衛門事先ヲ仕、鐵炮打申候、敵地焼ヲ仕退候故、焼残り候土藏多し、鐵炮持候侍は打合候處ニ、坂部與五左衛門鐵炮當、其後兄次郎兵衛、高綱半兵衛、前嶋久太郎兩三人、與五左衛門打たをされ候所ニよこ切ニ罷越、半兵衛、與五左衛門ヲおひのき候處ニ、與五左衛門申様、胴ニ當リ候間たすかり申間敷候間、捨置敵に首とらせ候へ、我も手柄ニ成事ニ候由申候へバ、兄次郎兵衛申候ハ、我胴ニ首つき居申候内ハ、敵ニ首ハとらせ間敷候之由にて、又半兵衛引懸退候節、又鐵炮當リ、半兵衛ともニ打た

をされ申候へバ、彌捨候へと申候へ共、又退ケ申候處ニ、又鐵炮一ツあたり、以上鐵炮三ツ當り小屋迄いきて參候處ニ、主殿様ヨリ御使數度被レ下、御念比之御意どもニ御座候、

一大河内金三郎立上り、鐵炮ニ藥籠候處ニ、敵より打鐵炮ニ而、左のひぢかうより右之脇ノ下ノ少しまへめへ打出シ申候、退手ハ大久保八郎五郎右之脇之帶ヲ持、左ノ脇ヲ村田新介、是ハ少中途より出ル、

左之手ハ召仕之九郎助と申者引、中黒彌兵衛ハ跡ニ立退申候、步行にて小屋迄參道にて、鈴木與左衛門申候ハ、不レ入先手へこくり懸ニ參、手ヲ負候よし申候故、散々及ニ惡口、其腹立にて力付、小屋迄心安クあゆみ來り候、此後ハ高麗橋責あひ見不レ申候、橋ハやかせ不レ申承候へバ、我等手負候之後一時程有テ引取り、先懸之者も引取り小屋へ參候、此節之儀を權現様達ニ御耳、權現様爲ニ御見分御通り被成候節、家中年寄之者共道場へ罷出候處ニ、大久保權左衛門殿ニ權現様御意被レ成候ハ、餘りきつき責樣いたし、手負死人數多ク有之候由被レ爲聞候、いかにもゆるくと御責可レ被レ爲成候間、此以後は靜

ニ人不レ損様ニ責候へと被レ爲ニ仰付候、如レ此權現様達ニ御耳、主殿様責口きつく責申儀強キと被ニ思召候段御手柄と奉レ存候、
右は冬御陣之次第也、

慶長十九年

寅ノ霜月廿九日馬喰淵一番二舟ニ而越候者九人

馬喰が淵仙波高麗橋
三箇所先ノ人數

一 右同斷

一 右同斷

馬喰が淵仙波二箇所
先ノ人數

一 右同斷

馬喰が淵壹箇所
先ノ人數

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 同晦日仙波壹番ニ堀を越候者十三人

一 三箇所

一 同斷

一 同斷

一 貳箇所

坂部與五左衛門
中黒彌兵衛
大河内金三郎
村田新助
坂部與五左衛門
中黒彌兵衛
大河内金三郎
村田新助
坂部與五左衛門
中黒彌兵衛
大河内金三郎
村田新助
坂部與五左衛門
中黒彌兵衛
大河内金三郎
村田新助
坂部與五左衛門
中黒彌兵衛
大河内金三郎
村田新助

一 同斷

仙波高麗橋貳
箇所先ノ人數

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

仙波壹箇所
先ノ人數

一 右同斷

一 右同斷

同極月朔日高麗橋先ニ參候者拾七人

一 三箇所

一 右同斷

一 右同斷

高麗橋壹箇
所先ノ人數

一 右同斷

一 貳箇所

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

神田九兵衛

大久保八郎五郎

坂部次郎兵衛

小泉新兵衛

高岡半兵衛

吉田半左衛門

毛利半助

板倉五左衛門

都石三九郎

坂部與五左衛門

中黒彌兵衛

大河内金三郎

市川作右衛門

細木彌次之助

大久保八郎五郎

坂部次郎兵衛

小泉新兵衛

高岡半兵衛

吉田半左衛門

高麗橋壹箇
所先ノ人數

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

夏御陣並押陣之次第

一 一ごしよの内ニ陣取、其次かう谷ニ陣取被レ成候、其

後高槻之城ニ爲レ押主殿様被レ爲レ置候處ニ、有馬主

蕃殿ハ、富田之胭脂屋所ヲ本陣にして御入候、主殿

様ニ使者ヲ越御申越候ハ、私爰元ニ罷越候節、御旗

本ニ御沙汰被レ成被レ下間敷くと使者を以被ニ仰越

候由承及候、之かしながら定説ハ不レ存候、左様ニ

候ヘバ主殿様何と被ニ思召候哉、家中八組之侍共二

與ツ、高槻之城四口ヘ具足ヲ着番を御申付、き、

ばりヲ出し、不レ寝之番を一夜仕、翌日玄蕃殿ニ御見

舞被レ成候而、其後番を無用と御意ニ而不レ仕候、

中川半之丞

深澤半右衛門

稻富傳右衛門

松井勝右衛門

鵜殿忠三郎

前橋文太郎

石垣組之者

成宮彌左衛門

一 牧方ニ京極若狹守殿同丹後殿陣取御入候處、大坂ヨリ人數ヲ出し、牧方より十四五町下之方ノ大堤ヲ切、淀川を大坂にかけ申候、有馬玄蕃殿ハ程近キ富田ニ被_レ居、京極殿ハ牧方ニ陣取被_レ居候、眼前ニ而敵如_レ此働申候へ共、一圓可_レ構_レ躰に見へ不_レ申候、其節主殿様權右衛門殿被_レ思召ニ候は、玄蕃殿不思儀之使を越、又京極も目前之敵を見ながら不_レ構_レ躰にて堤を切セ候之事、若うら切の所存も有_レ之哉と無_レ覺束思召、此方よりも人數を御出し不_レ被_レ成候、此敵前後より取懸候ハ、敗軍致可_レ申候間、大坂迄之内ニハ追打ニ討取り可_レ申ものをと被_レ存候

一 五月六日ニ道明寺表ニて合戰御座候由、家中人數高槻を罷出、夜中舟にて越、夜明ニ越切候ヲ、京極殿も見被_レ申、人數ヲ押出し、大坂方へ乗かけ候、此方之家中之人數も備を作り、乘懸候處ニ、京極殿兩手右之切_レとニ人數ヲ立、切とヲ不_レ越候故、主殿様より春日又三郎ヲ使ニ被_レ成、されと御越候へと被_レ仰遣ニ候得共、無_レ御越ニ候故、又春日を被_レ遣、實ニ無_レ御越候ハ、御人數御あらけ可_レ有候、我等人數越可_レ申と被_レ仰遣ニ候處ニ、御旗本より切と越候へ

との御下知無_レ之候間、越申間敷と申來候付、主殿様重而被_レ仰遣ニ候ハ、我等儀ハ親相摸守御改易ニ御座候間、我等方へハ何とも御下知ハ有_レ之間敷候間、罷越討死仕、親に之御勘どうをもはれ申度候間、御人御あらけ被_レ下候へと被_レ仰遣ニ候へバ、無_レ是非ニ京極家二手三手之人數越申候付、其跡を主殿様人數越候而、守口ヨリ壹里程此方ニ陣取申、扨天王寺口之軍大坂方負候て、守口之方へ逃出、人數壹面ニ見へ申候ヲ見而、京極家之人數堤之上ニ備たるが敗軍いたし候而、漸本陣ニ堤へ中者二三十騎残り、其外ハ五六町もにげくづれ申候、

一 主殿様人數右之躰を見申候て、京極家逃候と申候て、權右衛門殿ヲ初として、一面ニ京極殿備の内ニ乘籠候へば、京極殿家老か武者奉行か歷々之者と相見へ候者、權右衛門殿ニ乗向、是ハ無行儀成被_レ成様ニ候、手柄ヲ被_レ遊候ても京極手柄にて候、主殿様之御手柄ニハ仕間敷候由申候處に、權右衛門殿普代之侍久次郎と申者、右之者ニ向て申候ハ、なせにげ候、にげ候ニ依テ主殿人數ハ乘籠候と申候へバ、夫ニハ挨拶不_レ仕、權右衛門殿御申候ハ、八組

之組頭ども人數ヲ引連本陣へ引取リ備候へ、我等一騎先へ參様子見切候て、一左右可申由にて、京極殿備の内靜にあゆませ、備のはづれより乗出、扨其先にてかんよしの馬ヲ乗越乗出し急候ヲ、大久保八郎五郎見付、親權右衛門乘籠候を見申候哉と被申候付、惣人數馬引寄面々ニ乗出し候て、京極殿備ヲモ乗割乗込候て、大坂備前嶋片原町に晝之八ツ時分ニ乗込候節、落武者の首を數百取、鼻數數百取り、御旗本に被差上候、其節天守ニ火懸り焼上り申候、主殿様下々小者足輕ハ、はや食ヲこしらへ申候、其時分京極殿召連被參候へ共、天満町ニも火懸り、又内町八軒屋之あたりも焼申ニ付、京極殿より主殿様へ使を越被申候ハ、私儀遅ク參、小屋場無之候間、少可被下由申來候付、主殿様家中へ御觸被成候ハ、家一軒ニ馬乗二騎三騎ヅ、罷在候而、是より跡ヲ京極殿に相渡候へと御意被成候處ニ、春日又三郎申上候ハ、今日深田ヲ乗り骨を折參候者共ニ、只今小屋替被仰付候ハ御無理にて御座候由、主殿様へ申上候ヘバ、御意被成候ハ、我等一番に乘込候ヘバこそ、京極殿より小屋をもらは

れ候間、御本陣ヲ望申候由、御自分ニハ野陣ニ被成候而も、箇様之時ハ御借可被成之由御意被成候ヘバ、春日又三郎是ヲ承り、御尤ニ奉存候由御請を申上候と春日直口如シ此御座候、扨翌日京極殿より使者にて御禮狀參候、文舁も春日ハ見申候由にて咄申候、京極殿よりの御狀之文舁有増、

昨日は御指圖ヲ以されとヲ越、家中之者共ニ高名いたさせ忝存候、扨又遅參候故、小屋無御座處ニ、小屋ヲ被下忝存候由、

右之文舁にて御狀參候間、其御狀可有御座候、一其後二條之御城ニ而、本多上野殿、安藤帶刀殿ニ被申候ハ、京口へ石川主殿殿も御越候由御座候得共、主殿殿よりは何共不申來候、京極殿ハ一番ニ大坂へ乘込候之由被仰候へ共、我等親子にて相摸守殿父子ヲさへたをし申候と評判御座候由ニ御座候、未言上不申候と帶刀殿へ被申候ヘバ、帶刀殿被申候ハ、御陣場之儀ハ注進次第之ものニ而候間、早々言上可有之と上野殿に挨拶被申候を、春日又三郎承り、主殿頭ハ大坂に乘込候事一番ニ而御座候、京極殿ハ遅御越候付、小屋場も

無御座、主殿頭方へ小屋を御もらひ、翌日右之通御禮狀使者參候、於只今一番とハ被仰にくき儀ニ御座候、主殿物ニ構ぬ人ニ候之間、其禮狀小性共引さき捨候も不存候、自然其狀御座候ハ、御前に差上候ハ、いか可有御座哉と上野殿に申候へバ、右之段々上野殿御聞御申候ハ、よくこそ言上不申候と帶刀殿に被致挨拶、奥にはいり被申候由、春日又三郎具ニ申候ヲ幾度も承候、是ハ慥成儀ニ而御座候、少も相違御座有間敷候事、
右夏御陣之次第也、

右之次第大河内奎左衛門正重致物語候ヲ口寫ニ書付させ候也、

寛文九年酉閏十月六日夜淀城ニ而

大坂陣山口休庵咄

御陣前大坂衆喧嘩附御天守怪之事

一籠城三年以前、秀頼公御小性衆十人計、并御詰衆、津田出雲守、渡邊内藏助、野田村藤の盛りニ見物に行、藤の邊に一日酒もりいたし、其後五三人ヅ、小舟ニのり、福鳴海左江村などへ見物ニ参り候内ニ、津田出雲守壹人、酒に酔て藤の邊ニ休居申候、出雲守家來ハ、野田村の在家へ参り、一人も附不申、林齋と申座頭壹人側に罷在候處、薩摩もの六人、四尺計の大刀の鎧ニちいさき車を付たるを指、是も野田の藤見物に參候て、出雲守ニ慮外いたし、口論ニ成り、薩摩もの六人ともに拔合、出雲守ニ切て懸り候處、出雲守十文字にて六人ながら野田の濱まで追出候へバ、濱にて六人ともニ返合、出雲守九箇所までふかでを負、危く見へし所を、右之林齋と申座頭、濱表に積置きし割木を取て、六人の方へ無透間ニ投懸防申内に、渡邊内藏助、其時は未權兵衛と申が、脇より懸附、長刀にて渡合、薩摩もの六人の内

三人討留、殘三人に何も手を負せ追拂、出雲守引立看病いたし罷在時、漸出雲守下人野田村より懸付申、其後方ニ見物ニ参り、御小性衆聞附次第馳集り申候、引出雲守大坂へ歸候て、終ニ其手にて打果申候、其後寅年籠城の初、鈴木田隼人、大野道犬、博勞が淵の取手を西國衆に乘取られ申候故、籠城の手初と云、殊方角野田表にて候故、彼野田にて口論の時、西國ものに出雲守討れ候と存知合、箇様の事可_レ在怪かと何も申候、

一其翌年秀頼公御座の間、そつの中の御次、柳の間と申所にて、御詰衆相場備前守を、田屋式部と申もの指殺し、秀頼公の御前にての事にて候故、城中殊外騒申候、式部を御穿鑿なされ候得バ、内々意趣有_レ之候由申候故、當座の切腹被_ニ仰附_一候、

一其後渡部内藏助私用御座候て、天王寺へ罷越候所、關東より参候へバ、からくみと申惡黨どもニ出合、口論いたし、惡黨どもを追拂、内藏助はうぐの躰にて、大坂へ引取申候、其時分内藤新十郎、其外小身ものども、生玉へ参り候處ニ、右の惡黨どもニ出合、大坂もの餘多手を負、大坂へ引取申、兩所な

から方角天王寺表、殊に敵へ關東ものに仕附られ候、御陣の砌此事存知合、不吉の由何_レも被_ニ申合_一候、其時内藤新十郎ハ、自身鍵の柄切こみをいたし、高名の證據に出し候を、自身切こみ被_レ致候段、證人出候て、新十郎面目を失ひ申候、

一籠城の前方、大坂御天守五重目、兩方より烟出申候、御城中并大坂中のもの御天守焼申候とて騒動仕、女童四方へ逃迷ひ申候、後ニ能々見候へば、御天守の兩方ニうんか集り申候を、烟と見申候、箇様の不吉ども節々御座候、後々何も存知合候事ども多御座候、

大坂冬陣起り之事

一慶長十九年甲寅の春の頃、家康公より秀頼公の老臣片桐市正を駿河へ御呼被_レ成、大坂の御仕置の條條被_ニ仰渡_一、其上秀頼大坂の城を明られ、大和へ御移、在々におゐてハ、大和國可_レ被_レ遣之候由被_ニ仰出_一候處、秀頼公此儀如何可_レ在哉と大野修理以下の老臣衆相談有_レ之候所ニ、大野修理秀頼公并御母公へ申出候ハ、今度駿河より被_ニ仰越_一候條々、并秀頼公へ大和國を被_レ進、大坂の城を明被_レ渡、御袋

様を人質に被_レ成、其後ハ次第に方々御國替被_ニ仰附、秀頼公御小身に被_レ爲_レ成候後、織田常眞のごとく_ニ可_レ被_レ成との事目前ニて御座候、大和へ御出可_レ被_レ成よりハ、兎角大坂に籠城被_レ成御覽可_レ被_レ成候、日本之諸大名、縦一旦家康之下知に随ひ、上洛いたし候とも、大閤の御恩深く、其上秀頼公を守立可_レ申との起請文差出申上ハ、殊に内々御味方可_レ申との覺悟在_レ之よし風聞及_レ承候間、とかく諸牢人を被_レ抱、急ニ籠城の御用意可_ニ仰附_ニ可_レ然旨えきりニ御謀叛すゝめ申候處ニ、片桐市正、同主膳、青木民部少、以下七組の頭分、秀頼公御親子并大野修理へ能々御分別被_レ成可_レ然由、種々いさめを申上候得共、大野修理達而すゝめ申故、籠城に相極、市正ハ家康と一身のものニて候故、御成敗可_ニ相成_ニとの御相談ニて候を、市正主膳被_ニ申出_ニ候ハ、今度駿河より被_ニ仰越_ニ候條々、何も秀頼公の御爲を存、達て御いさめ申上候、家康公へ一身にて申上候事ニてハ無_ニ御座_ニ候、此上ハ市正同主膳兩人大和へ引籠出家可_レ仕候旨申上候、其時最早御城中騒立、方々より鎧武者掛附候故、箇様ニ候て大坂之騒

殊に七組の頭分市正と一身いたし候、其外いか様の御大事出来可_レ申も不_レ存候、とかく市正主膳望申候通りニ被_レ成、御城を御出しなされ可_レ然との御相談にて、市正ハ則御城ヲ罷出テ、其行列ハ片桐市正ハ本知五萬貳千石、主膳壹萬石、兄弟の人數雜兵どもニ三四千も在し様ニ申候、市正ハ白小袖すはだにて乗物にのり、兩の戸を開き、玉造口の御門を出デ申候、乗物廻りには步行持五十人計、おもひおもひの鎧得道具を持、或ハぬきみの取矢、鐵炮に火繩を掛、用心の躰にて罷出候、市正家老多羅尾半左衛門、黒具足ニ金のおと、ひ筋つなりの甲弓と矢を持、乗物の脇ニ引添罷出申候、日比加左衛門と申もの、是も黒具足ニ金の三ヶ月ヲ附、二間計の鎧を持、乗物の脇に引添罷出申候、其あとに市正妻子并家中の妻子上下 鎧武者引包出申候、其次に侍分五百計きび敷鎧得道具 取矢鐵炮に火繩を懸出申候、片桐主膳卯の花鎧鎧を持殿仕候、何も指物馬印ハ無_ニ御座_ニ候、主膳御門の外にて御城の方を三度ふしおがみ、大和海道に懸り、何も退キ申候、此時私儀玉造口御門赤座内膳役所にて見物仕候、市正ハ

大和海道より牧方の方罷出、津國茨木の城へ引籠申候、其節茨ぎの城を御攻可_レ被_レ成相談御座候得共、大坂籠城の御用意ニ取紛致_ニ延引_一候、

諸牢人被_ニ召抱_一之事

一眞田左衛門佐

五拾萬石の御約束にて、人數六千計相具籠申候、是ハ眞田安房守と申、關東大名の子ニ而御座候、石田治部少輔と一味仕候、關ヶ原以後の牢人、高野山罷出、のぼり指物具足甲はろ以下上下ともニ、一色赤出立ニて御座候、馬印ハ金のうくゑにて御座候、

一長曾我部宮内少輔

土佐國一國可_レ被_レ下御約束にて、人數五千相隨籠申候、其後人數二三千も抱申候、是ハ土佐一國の大名にて御座候所、治部少と一味にて、關ヶ原以後牢人仕、京小川通りの上ニ友無と名を附、手習子を取居り申候、のぼりハ白地ニ紋ハ八藤番、指物ハ、まないにし御座候、此外人數持諸牢人、五十萬石、三十萬石、其品々より國所の仰附御約束ニて罷出申候、

其以後青木民部少、杉原伯耆守、織田常眞、織田有

樂、大坂を退き、江戸へまいられ候、

一仙石豊前

人數初五千着到ニて、後人數抱申候、のぼりハ白地に日の丸ヲ附申候、是も關東衆にて御座候、石田治部少一味ニて、關ヶ原以後牢人ニて御座候、京新町通り二條より上ニ、宗彌と名を附、手ならい子共起居申候、

一明石掃部

人數初四千の着到ニて、後人數抱申候、是ハ出所不_レ存候、のぼりハ黒地に白キ丸三つツ、附申候、

一森豊前

人數四千五百ほど、馬印赤キすみ取紙、是ハ西國大名の由、關ヶ原以後牢人、何方にて被_レ居候哉不_レ存候、

一織田左門但雲正寺と申候

人數難兵ども三萬ほど、のぼりは赤地に菊桐の紋、赤地のおもだかの紋、又金の切さき、自身の指物壹間半の竹ニ、四尺の横手三寸計のさいを附申候、是ハ織田有樂の御子、秀頼公と御一門也、公家のいのかま殿惡事の時牢人、京五條邊ニ居リ申候、初の名

とやかしの坊、中頃ハひよくさい坊と申候、

一京極備前

人數六千のぼりハ白地ニ四つ目結、是ハ京極丹後
いとこ、關ヶ原以後窄人、

一石川玄蕃

人數雜兵五千、是ハ信濃にて十五萬石の御大名ニ
て御座候、國の仕置惡敷御座候故、家康公より改易
被ニ仰附、大坂へ籠申候、

一石川肥後支蕃弟也

人數初ハ五千の着到ニて籠リ、後人數千計抱申候、

一後藤又兵衛

人數初六千之着到ニて籠、後人數抱申候由、のぼり
ハ白黒の段々筋、自身着物は黒き半月黒具足、御役
儀ハ足輕物見と申候、黒田筑前家來、小身ものゝよ
し、

一山川帶刀

人數初貳千の着到ニて籠リ、後人數三千ほど雜兵
ともニ抱申候、是ハ何國の者も不ニ存知候、

一北川次郎兵衛

右同斷、一度に御奉公ニ出申候、

一三宿越前

人數雜兵ともニ貳參百、是ハ出所不ニ存知候、

一細川與市郎 一結城權之助 一伊木七郎右衛門

一名鳴民部 一淺井周防 一三浦飛騨 一稻木三

右衛門 一南部久左衛門 一多田藤彌

右の衆小身もの也、五騎十騎ヅ、持申候、大野修理
ニ目見いたし、堀裏に被居申候、窄人ども少々騎
馬のもの後ニ抱申候、

一武田永翁

是ハ大閣御咄之衆ニて御諫役、仕人ニてハ無御

座候、

一判野源右衛門 一新宮左馬

右兩人ハ馬乘足輕覺之者拾騎ヅ、御預ケ、物見役

ニて御座候、

一惣がまへ、西ハ高麗橋筋横堀の内、南ハ八町目黒

門の内、町ヤハ壹間もこぼち不申候、諸職人諸商

人ニて其儘居り申候て、細工諸商買仕候、

一諸窄人の妻子ハ大形町ヤニ居申、大名窄人ハ屋

敷渡リ申候、一騎がけの窄人ハ妻子無御座候、

候、

一右諸窄人馬上二騎ニ付、黄金二枚ヅ、の積リニ、竹ながし貳枚ヅ、被_レ下候、御扶持ハ其人ニ應じ被_レ下候、大形怪き窄人ハ諸職人道心者或ハ百性など出申候、

大坂御譜代衆人數高本知高之事

一大野修理 本知壹萬石

此人數雜兵ともニ壹萬餘人、のぼりハ白地上ニぬり笠の紋壹つヅ、付申候、是は惣大將分にて、諸窄人此仁に目見へいたし相濟申候、御城中をも乗物ニて廻り申候、

一大野主馬修理弟也 本知五千石

此人數雜兵ともに五千人ほど、のぼりハ白地になたの紋を附申候、

一大野道犬修理弟也 本知三千石

此人數雜兵ともニ五千人ほど、のぼり右同斷、是ハ公家のいのくま殿惡事ニ附、家康公より御追放被_レ成、大坂へ歸り新參、

一南條中書 本知壹萬石

此人數雜兵ともニ三千五百人程、是ハ大闇御取立のもの、四百石より壹萬石ニ被_レ成候處、正宗手へ

引入て内通仕、御成敗被_レ成候、

一内藤左馬

此人數千五六百人御座候、

一細川讃岐 本知五千石

此人數雜兵ともニ貳千人程御座候、

一石川伊豆 本知壹萬貳千石

是ハ籠城之内、妻子をつれ、はごまをくゝり落申候、京石川宗林いゝこにて御ざ候、

一杉原伯耆

是ハ籠城前ニ江戸へ參り申候、

一鈴木田隼人 本知五千石

此人數ハ雜兵貳千五百人着到にて御座候、後人數抱申候、

一赤座内膳 本知三千石 與力三十騎

此人數千計御座候、

一村井右近 本知貳千石 與力貳十騎

此人數八百計御座候、

一山口左馬 本知貳千石 與力五十騎

一槇嶋玄蕃 右同斷

一岩佐右近 右同斷

とやかしの坊、中頃ハひよくさい坊と申候、

一京極備前

人數六千のぼりハ白地ニ四つ目結、是ハ京極丹後
いとこ、關ヶ原以後窄人、

一石川玄蕃

人數雜兵五千、是ハ信濃にて十五萬石の御大名ニ
て御座候、國の仕置惡敷御座候故、家康公より改易
被ニ仰附、大坂へ籠申候、

一石川肥後玄蕃弟也

人數初ハ五千の着到ニて籠リ、後人數千計抱申候、

一後藤又兵衛

人數初六千之着到ニて籠、後人數抱申候由、のぼり
ハ白黒の段々筋、自身着物は黒き半月黒具足、御役
儀ハ足輕物見と申候、黒田筑前家來、小身ものゝよ
し、

一山川帶刀

人數初貳千の着到ニて籠リ、後人數三千ほど雜兵
ともニ抱申候、是ハ何國の者も不ニ存知一候、

一北川次郎兵衛

右同斷、一度に御奉公ニ出申候、

一三宿越前

人數雜兵ともニ貳參百、是ハ出所不ニ存知一候、

一細川與市郎 一結城權之助 一伊木七郎右衛門

一名鳴民部 一淺井周防 一三浦飛驒 一稻木三

右衛門 一南部久左衛門 一多田藤彌

右の衆小身もの也、五騎十騎ヅ、持申候、大野修理
ニ目見いたし、堀裏に被ニ居申候、窄人ども少々騎
馬のもの後ニ抱申候、

一武田永翁

是ハ大閣御咄之衆ニて御諫役、仕人ニてハ無ニ御
座一候、

一判野源右衛門 一新宮左馬

右兩人ハ馬乗足輕覺之者拾騎ヅ、御預ケ、物見役
ニて御座候、

一惣がまへ、西ハ高麗橋筋横堀の内、南ハ八町目黒

門の内、町ヤハ壹間もこぼち不レ申候、諸職人諸商
人ニて其儘居り申候て、細工諸商買仕候、

一諸窄人の妻子ハ大形町ヤニ居申、大名窄人ハ屋
敷渡リ申候、一騎がけの窄人ハ妻子無ニ御座一

候、

一右諸窄人馬上二騎ニ付、黄金二枚ヅ、の積リニ、竹ながし貳枚ヅ、被レ下候、御扶持ハ其人ニ應じ被レ下候、大形怪キ窄人ハ諸職人道心者或ハ百性など出申候、

大坂御譜代衆人數高本知高之事

一大野修理 本知壹萬石

此人數雜兵ともニ壹萬餘人、のぼりハ白地上ニぬり笠の紋壹つヅ、付申候、是ハ惣大將分にて、諸窄人此仁に目見へいたし相濟申候、御城中をも乗物にて廻り申候、

一大野主馬修理弟也 本知五千石

此人數雜兵ともに五千人ほど、のぼりハ白地になたの紋を附申候、

一大野道犬修理弟也 本知三千石

此人數雜兵ともニ五千人ほど、のぼり右同斷、是ハ公家のいのくま殿惡事ニ附、家康公より御追放被レ成、大坂へ歸り新參、

一南條中書 本知壹萬石

此人數雜兵ともニ三千五百人程、是ハ大閣御取立のもの、四百石より壹萬石ニ被レ成候處、正宗手へ

引入て内通仕、御成敗被レ成候、

一内藤左馬

此人數千五六百人御座候、

一細川讃岐 本知五千石

此人數雜兵ともニ貳千人程御座候、

一石川伊豆 本知壹萬貳千石

是ハ籠城之内、妻子をつれ、はざまをく、いり落申候、京石川宗林いゝこにて御ざ候、

一杉原伯耆

是ハ籠城前ニ江戸へ參り申候、

一鈴木田隼人 本知五千石

此人數ハ雜兵貳千五百人着到にて御座候、後人數抱申候、

一赤座内膳 本知三千石與力三十騎

此人數千計御座候、

一村井右近 本知貳千石與力貳十騎

此人數八百計御座候、

一山口左馬 本知貳千石與力五十騎

一槇嶋玄蕃 右同斷

一岩佐右近 右同斷

一 木村長門 本知七百石

此人數雜兵八千人、馬印銀のふくべ下に白き練絹三さく切さき、是ハ秀頼公御そば小性四十三人預り、其外馬上の組も少々、御座候、

一 渡部内藏助

本知五百石 ねころ法師二頭同鐵炮三百挺預ル

一 丹羽勘解由

本知八百石

人數千五百、

一 別所藏人

本知四百石

人數なし、是ハ太閤御念頃の者ナリ、

一 木村主計

馬上貳十五騎

一 中嶋式部

本知千石

是ハ人數なし、

一 井上小左衛門

本知八百石

人數雜兵ともニ千計御座候、

一 桑山十兵衛

本知千石

此人數與力ともニ五百人ほど、

一 内藤宮内

小身もの、人數なし、

一 生田忠三郎

同斷

是ハ御役義御膳番、

一 内藤新十郎

右同斷

是ハ籠城前、生玉にて喧嘩いたし、散々ひけとり、人中へまし不申候、

七組之頭

一 速水甲斐

本知壹萬石與力五十騎

一 伊藤丹後

本知壹萬石與力五十騎

一 堀田圖書

本知七千石與力五十騎

一 野村伊與

本知三千石與力五十騎

一 眞野豐後

本知貳千石與力九十騎

右七組之頭ハ、諸宰人壹人も抱不申、是ハ大野修理、七組頭ハ江戸へ内通有之由疑とて、人數抱させ不申候、

一 籠城之惣人數拾貳三萬在之由申候、

内 壹萬貳三千ハ馬乗、六七萬程步行侍、五六萬程雜兵、外壹萬ほど御本丸女中在之由、

城中手配之事

一 城中諸方持口、南門之塀裏に人數持之諸宰人被二仰附候、

一 玉造口御門ニハ、赤座内膳、村井右近、横嶋玄蕃固申、以上九千計に御座候、

一 眞田左衛門ハ如何存候哉、玉造口御門之南、東八町目之御門の東、一段高き畑御座候を、三方ニから堀

をほり、堀ヲ一重かけ、堀の向とから堀の中と堀ぎはニさくを三重に附、所々矢倉せいろうを上ゲ、堀のうで木の通りニ、はい七尺の武者ばしりをいだし、父子の人数六千餘人ニて籠申、是を眞田が出城と申候、

一同所門より東の横手六十間之所、京極備前人数五六千にて固申候、

一眞田取出のおさへに、北川次郎兵衛、山川帶刀、人数壹萬計にて取出へ來り候、御門の堀裏を固申候、

一東八町目の門には、石川肥後人数五千計にて固申候、同所西の方堀うらニ石川玄蕃居申候、其西の方ニ仙石豊前人数七八千計にて居申候、此表攻口は、大方藤堂和泉守などよせられ候通かと覺申候、

一正宗攻口の堀裏ニ、南條中書と申ものかため申候、堀柱の根を引切、其上鐵炮ニ玉を込不_レ申候、御穿鑿の上にて上下七十人計御成敗なされ、上下三十人計へいうらニ獄門ニ掛り申候、

一南表寄手よりかね堀に御ほらせ候を、城中より土のすて様にて見附申候、其通りに自然ほりぬき候て、ふせぎ候へと用意いたし候、和泉守かね堀より

八百か西の方よりは、壹間計城中へ堀ぬき申候を、城中のこへ汁をながし入、其上へ城中のはきだめの芥を入申候、

一惣構堀は石垣なし、たゞきといニて、堀の向ニさくを一重、堀の中ニさく一重、へいぎはニさく一重、以上三重ぬり申候、何も栗丸太ニて御座候、三の丸にハさくは附不_レ申候、

一大御所様茶臼山ニ御着被_レ成、本多出雲守と名乗、上下廿騎計眞田取出の南表へ參り、堀に附申候を眞田人数壹人ヅ、請取、大勢いだし、鍵玉ニ上討取、首共御本丸に差出申候、ゑつけんの後、大將の首は三方ニのせ、本多出雲守と書附いたし、三ノ丸西の大手ニ首をもならべ被_レ置候を見物いたし候、

博勞ヶ淵取出落去之事

一籠城の初頃、大坂より、せん場表惣がまへの外ト、せんばに人数三萬計立居申、せん場表川の中ニ馬苦勞ヶ淵、ゑつたが城と申所、四方川にて道一筋有_レ之、用心能所御座候を取出いたし、鈴木田隼人、大野道犬、人数壹萬計にて罷在候處に、道犬金田の

船海表よりよせられて、敵に乗とられ申候、其後よせ衆大勢かさなり候に付、小勢にて此所難く抱存、とかく千ばへ引取可申との相談にて、道犬隼人惣人數大方馬苦勞ヶ淵之とりでを引取申、殿のものども又取出ニ居申候時、蜂須賀阿波守人數を馬苦勞ヶ淵へ被_レ向候處、阿波守内中村右近、かちだちにて一番ニ川へ飛込渡リ申候處、川深くたけたち不_レ申故、甲をぬぎ捨、鎧をうけになし、屏ぎわへ附申候、其跡に阿波守人數ひたくと川を渡し、其まゝ出城を乗取申候、取出のもの、首五つ六つてきとり申候由、其後隼人道犬ハ御城へ歸リ申候得共、とかくの沙汰無_ニ御座_ニ候、だいと武者と異名を附申し、だいとハなり大く、かぐ類の内、色能ものにて候へども、正月のかざりより外、何の用にも立不_レ申候、さて如_レ此名附申、其後せんば表の人數共、せんばを自燒致し、城中へ引取申、右の様子私此表へ不_レ參候故、委事ハ不_レ存候、此事ハ寄セ衆ハ存可_レ在候、御本丸にて取沙汰いたし候を承り申候、

後藤又兵衛中嶋出張の事

一十月初頃かといけん申候、後藤又兵衛被_レ申候ハ、西國衆大勢上り、神崎邊迄參り候ヲ相見へ申候、大形今夜中ニ川を越可_レ申候間、我等ニ人數貳萬計御添被_レ下候て、川を越させ候て、中嶋にて討取可_レ申と申す故、則御普代衆、隼人衆、都合貳萬計御指添、夜中ニ又兵衛中ノ嶋へ來り候處、相づ違にて、敵人數川を越不_レ申候故、漸一同計討取歸リ申候、

城中浮勢之事

一何方へも向不_レ申候之儀、武者にて夜廻晝廻りいたし候、大將は、木村長門、後藤又兵衛、明石掃部、長曾我部宮内、森豊前、此外七組の頭、番々ニ廻り申候、織田雲正寺ハ夜廻りの侍、馬上六七騎、其身ハ金のこざねニくれない紫いにておどし申候鎧ニ、頭なりまゝのかつそうの甲、桐の紋の旗、自身指物ハ一間半の竹ニ、四尺計の横手を附、二三寸計のさいをゆひ附指申候、又七十分と申女武者を拵、朱具足、朱ざやの大小、赤ほろをかけさせ、めしつれ、自然ねぶりいしものをば、彼女に申附、討檢にいたし候、

一 大野修理ハ大將分にて、城中をも乗物にてありき

て、同主馬道犬もうき武者にて候へども、夜廻リハ不_レ被_レ致候、

伴團右衛門蜂須賀手へ夜討之事

一團右衛門致_ニ夜討_ニ候意趣ハ、籠城の始、大野道犬ばかりうが淵取手を、蜂須賀阿波守ニ乗取られ、諸人の笑ぐさニ成、大野一門、取分阿波守本陣へ夜討いたし、度々の相談にて、幸伴團右衛門ハ大野主馬組成故、内々此夜討を心懸ケ、東表桑山十兵衛役所、阿はぢ町筋の矢倉へ至り、廿日計遠見を致候、蜂須賀阿波守本陣ハ、西本願寺の御堂にて、此筋よりは程遠く御座候、阿波守内中村右近、阿はぢ町筋より南の方御城惣構より壹町計引退、小屋を掛、堀一重はり、さくをつけ、まはり門を立居申せ、團右衛門能々見届、有夜桑山十兵衛ニ心を合せ、あはぢ町筋の門より出、中村右近陣場へ夜討いたし、方々の橋何も引候へども、此橋計残し置れ候子細ハ、十兵衛中筋の名人なる故ニ、人數五百計にて固申候、夫故此橋筋にハ初中後敵立よりいたす事の成不_レ申候故、此門より夜討ニ罷出候、團右衛門人數以上廿一人、合印ハ白き三尺手拭にて、甲の上を鉢卷いた

し、白き布をわたがみニむすび附候て、合言葉さいかと問バ、さいと答よと定罷出候、中村右近ハ具足着ながら夾箱ニ寄掛リ、甲をぬぎ、具足櫃の上に置、眠リ居リ申候所、團右衛すでに忍び入、小屋の戸を切落し申候時、内より聞附、夜討入申候と申候へバ、右近ハ右の手十文字を取、左ニ甲を持、小やより外へ出申候へども、甲を着可_レ申隙も無_レ之、甲を捨、十文字にてつきかゝり候を、團右衛門以下三人、鍵三本にて右近ニつきかゝり申候、右近ハ三人の敵を十文字にてあいしらい、うしろへしさり申候所ニ、小屋場のきはニ水だまり御座候ニふミ込申候を、右の敵三人にてつきふせ、首をバ團右衛門取申候、其後右近人數出合、おもいよらざる事にて、十方を失、少々どし討致しを、團右衛門組右貳十人ながら、何も高名致し、首以上廿一討取引申候所、阿波守本陣より大勢掛附、夜討をあはぢ町橋迄追附參り候、夜討の者壹人致_ニ討死_ニ、是ハ中村右近伴中村若狹生年十五才と名乗、追討にいたし候、其内貳十人ハ戌申へ右の橋より引取申候、内五六人手を負申候へども、何も高名いたし、大將どもニ

首廿指出申候、此内ニ歳十五六ニ成小性の首一ツ御座候、其夜の内ニ伴團右衛門、其外右十九人之者、千疊敷御庭へ御召寄、大野木村長門兩人、千疊敷の縁へ罷出、様子承り致し書附一候を、私も同所に委承り申、其翌日右貳十の首、三ノ丸西の大手ニ中村右近首ハ甲なし、さばき髪にて三方ニのせ、土段ニ置れ候、殘の首ハ何も甲附にて、其儘土段ニならべ置れ候、右近ハ其時とし頃五十計と相見へ申候、

志貴野合戦之事

一霜月廿五日の晩方、後藤又兵衛御本丸へ參り、大野修理木村長門など寄合被レ申へ、今日天滿の天神を拜見可レ申と存、北表を遠見いたし候處、北より東の敵ども、先そなへを跡へ直し、跡ぞなへを先へくり出し申候、如何様明日ハ此表に合戦可レ有レ之ニ御座被レ存候、御用心可レ被レ成と被レ申候へバ、木村長門被レ申候ハ、御存知の通り我等若輩にて、今まで手をおろしたる致し合戦たる事無ニ御座一候、明日此表合戦御座候ば、貴殿の御引廻し偏ニ頼申候由被レ申候へバ、又兵衛被レ申候は、御尤の御心掛け

にて御座候、自然明日合戦御座候ば、乍ニ慮外ニ老人の役ニ御指圖可ニ申合一と被レ申候、其後相談初り、諸方持口へ用心可レ致之由可レ被レ仰渡一候、同廿二日如レ案々野表の敵のそなへ各別に見へ申候故、後藤又兵衛物見のため、青や口の御門よりがもう堤へ罷出候、其内出立ハ黒具足、黒袴、黒ぬり半月のさし物を指し乗廻り申候處、堤の脇より横矢ニ鐵炮を打掛け申を、是ハ後藤又兵衛と申者也、若キ時分我等の身に鐵炮ハ當り不レ申、いか程も打候へと、かうげん云掛廻り候内、又兵衛草ずりのはづれニ鐵炮當り候へども、うす手にて御座候、其時味方御手をおはれ候やと申候へバ、合戦の度毎ニかすりでおはし候は、若き時より嘉例にて候と打笑申候、其後木村長門ハ白きねりの具足羽織に、長サ三尺計のかくの頭をみの、如くいたし、甲の玄ころの上に引廻し、銀の瓢箪の馬印、下ニ白きねり絹三尺計、三はトニ切さきたるを持せ、佐竹そなへを心掛け參り候、其時秀頼公御そばの小性ども十人計見物のため、殊ニ木村長門組頭にて御座候故、何も長門諍跡につき申候、然處ニ佐竹そなへより濫江

内膳と名乗、金の馬よろひ掛、其身ハむかし流のに
しき直垂を着、こがねざねの鎧に鳥のみの毛の具
足羽織を着、星甲ニ鉄方を打、堤の上^{うへ}たり道を唯
壹人乗出し、是へ御出候は承及たる木村長門殿に
て候やと言葉をかけ申し、長門守如^{ごと}仰木村長門に
て候と、につこと笑、鎧を合申候、長門ハ廿二三ニ
なる若武者、内膳ハ七十計と見へ申候を、互ニ乗よ
せくミ申候が、其儘長門守、内膳が首をもぎ附ニい
たし、馬に打乗り申候、此時高橋三十郎と申御小性
十四歳ニ成申候が、長門致^{いた}高名候所ニて、佐竹人數
にかたれ申候、是ハ高橋彌次衛門と申、大閣よりつ
たわりたる覺の者の忤^こニて御ざ候、それより長門
守引取申候刻、堀尾山城人數、横矢ニ鐵炮を打掛、御
小性ども四五人手おい候、其内一人別所多門と申
御小性、十七歳ニ成り申候が、右の横矢にて討れ申
候、是ハ別所藏人おいニて御座候、其後日頃手柄を
いたし候渡邊内藏助、此手へ罷出、いかいたし申
哉、追まくられ、ほうくの躰^{りみ}ニて城中へ逃込申候、
此時私儀長門見つきニ罷越、右の様子見申候、

十二月四日惣せめの事

一十二月二日三日兩日、後藤又兵衛御本丸へ参り申
され候ハ、此一兩日ハ茶うす山と岡山との間、ほろ
かけ武者あなたこなたと間敷げに通じ申、いか様
一兩日中ニ惣寄ニて、一もみもみ可^べ申と相見へ申
候、御用意可^べ被^レ成と被^レ申候ニ付、持口^{もく}へ加
勢仰附られ、浮武者衆へハ、何方へ成とも敵のつよ
き方へかせいたし候へと御意ニて、木村長門ハ
ひがし八町目、越前守衆向申候筋、ことの外足場よ
く候間、定而此口より乗可^べ申と、石河肥後守持口よ
り貳町引えさり、人數八千ニて三段ニ備へ申候、
一矢ざまハ一間に六ツ、切申候、矢ざま一ツ、ニ鐵
炮三挺ヅ、矢倉の間にせいろうをくみ、鐵炮の積
り同斷、堀のうで木の通ニはい七尺の武者はしり
をいだし、鐵炮すき間なくならべ申候、

一眞田取出へも、右の積ニ御加勢被^レ下候、

一十二月四日夜中より、井伊掃部殿先年眞田取出へ
押寄申候、越前衆も夜の内ニ人數三四百計、から堀
へ忍入居申候、四日ニは殊外霧ふり申候て、敵の旗
先見へ不^レ申、少晴申候て、堀の中ニ敵居申候、其上
眞田出城へ赤のぼりの武者二三百、さくを切をり、

堀ざわへ附申候、城の中よりつるべ打にいたし候
ゆへ、掃部殿も諸勢も堀ざわへ附不_レ申候、内之堀
へ附申者へ、一人も残らずうたれ申候、

一東八町目の御門より眞田出城へ寄せ申候敵へ横矢
い申候、内々宵より堀へ入申候ものども貳百計、堀
ざわのさくを引たをし、八町目門の東堀貳十間計
引をとし申候、是を防ぎ申とて、くすり貳斗計入申
候、ゑんせう箱へ火繩とりおとしもへ立申候故、堀
裏の肥後守人數をつれ申候肥後守も、わたがみへ
飛火入申候故、けがをいたし、持口を引申候、貳百
計乗り申候越前衆をバ、木村長門先備にて引つゝ
み、一人も不_レ殘打申候、扱諸方持口よりつるべ打
致し候故、越前衆堀ざわより二三町引取申候故、堀
へ入申候者、城へハ乗不_レ申、跡へハひかれ不_レ申
候て、城の内を東西へ掛廻り申候を、鐵炮又ハ石ニ
て不_レ殘打殺し申候、其内壹人さくの木を乗越申候
を打申候へバ、さくの木に取附死申候、白き指物に
野口靱負と書附御座候、其時越前衆の中より武者
二騎堀ざわに參り候て、高聲ニ名乗候へども、城の
内へハ聞へ不_レ申候、一人ハばれんの指物、壹人ハ

笛卷の錠を持申候、是ハ鐵炮も中り不_レ申候、えづ
えづと歸り申候、此時惣責にて、何も持口く_レ用心
被_二仰附_一候故、私ハ玉造口御門、赤座内膳役所ニ罷
在候處に、組頭木村長門守先手城中にて合戦いた
し由承、長門守爲_二見廻_一罷越候へバ、堀を乗申越
前衆、一人も不_レ殘討取申候、もはや方々より戸板
疊を取寄、越前衆やぶられ申候、堀をつくろい居
申候、それより石川肥後小屋場へ見廻り、朝よりの
様子どもはなし承り申候、

御扱内談之事

一右の通ニ御座候ば、いか様ニ責申とも、城落申まじ
くといづれも申所ニ、玉造口よりの御門へ、年頃卅
計の男、こんのもめんぬのこ着申候が、まる腰にて
二間計の竹ニあみ笠をゆひ付參り候を、御本丸よ
り持口く_レ矢どめ被_二仰附_一、其後御本丸より女乗
物一丁、下女二人にて玉造口の門へ女中出被_レ申
候、門より只一人かちにて、彼敵より參り候男と
ま_レバし物を申歸被_レ申候、せうぞくハ織すしの小
袖、大わたぼうしをかつぎ申、それよりハ毎日彼
使參り候、其後御扱の御相談御座候、眞田左衛門

後藤又兵衛など申候ハ、此分にてハ城も落申候事御座有まじく候、又敵も引申候まじく候間、御扱ニ被レ成、家康公と起請文御取かはし候て、來年大和中の小城ども一々責おとし、尾張名小やまでの城ども一々ふみおとし候て、駿河江戸へも寄可レ申候間、先々御扱被レ成御覽候へといづれも申候、其後木村長門御使、大御所様へ參り候て、起請かけ取歸被レ申候、夫より城中寄衆ども互出合申候、城中より脇引くに寄衆の仕よりなど見物いたし、藤堂和泉守かねほり御入し穴ハ、はゞ貳間半高サ壹間御座候、ひの木にて兩方の程の上けた切張けづりたてニ致候、三尺ニ一ツづ、兩方ニかけ、灯臺とぼし申候、此穴城までハ殊外遠御座候、何も寄衆ニハ金ほり御座候へども、役ニ立不レ申候、

一夏陣にハ、二の丸堀ハ御座候へども、さくもゆい不レ申候、此度は城ハ頼ニ成不レ申候、何方へも兩御所の御座候處へおしよせ候へとの相談にて御座候、大形役所冬陣同前にて御座候、

檜井合戦之事附伴團右衛門討死之事

一檜井の合戦と申は、大坂夏陣の少前方、藤堂和泉守

一頭大坂南表へ被レ參、紀州淺野但馬を相待候處、但馬領分日高郡以上十六萬石の所、一揆おこし大坂へ致ニ内通一候は、淺野但馬殿大坂表へ罷出候て、跡より一揆ども城乗取、但馬殿をも追討に可レ致候間、大坂より御人數可レ被レ遣候、但馬殿道ニて兩方よりさしはさみ打取可レ申との手筈にて、日高郡へ大野修理家老一人忍びに人數差添遣候處、紀州山口にて但馬殿衆に被レ見附、一人も不レ殘被レ討候と申候、其後但馬殿日高郡へ自分の人數被レ遣、御仕置なされ、夫よりかしの井の南迄出張致され候、淺野右近淺野右衛門かしの井の東西ノ高見に陣を取居申候、大坂大野主馬手勢三千にて、貝塚まで罷出候、大野道犬は、岸和田之城小出右京殿押へに手勢三千にて參り、然處にかいづかの本願寺下の御堂ト半所にて振舞をたべ申され申候内に、物見足輕大將新宮左馬伴團右衛門兩人かしの井を心がけ出申候處ニ、かしのいと貝塚の間に小坂二箇所御座候、此所にて新宮左馬申候者、此さきのくぼみに敵のふせ勢在レ之と見へ、小勢ニて參り候事無用と申、團右衛門を留申候へども、團右衛門承引不レ致

一段高き堤を乗越候へば、敵のふせ勢鐵炮貳百挺計、一度に打かけ申候へども、團右衛門組ども十一人、何も無恙、かしの井の町まで乗込申候、かしのいの町の内に少ひちをり申候所御座候、此所にて八分計の白木の弓を持、團右衛門に立向、脇腹を射ぬき申、團右衛門は馬より落申候へども、敵をおい拂、又馬に乗、右かしのいの町より濱手へ出申候所、敵の馬上十騎計かけ出申候、其内の大將白さぎのみの毛の具足羽織、同みの毛のたおいりけさや下知致し、團右衛門組四人迄討取申候、彼大將龜田大隅と名乗、團右衛門に打て掛け申候所に、團右衛門も伴の團右衛門と名乗、互に色々と寄申候が、いかゞ致候哉、組共に七騎かしのいの町へ引取申所、町の内にて黒具足に黒きはろかけたる小男一人、團右衛門にかけ合、上田宗古と名乗、團右衛門にくみ申候、團右衛門宗古を引よせ、脇にまめつけ、かしのいの町の出口まで引つれ参り候處に、宗古家來追かけ、其中に十七八成小姓、團右衛門まころニ取附、うしろへ引たをし、内甲をついけ打二十計打申候時、團右衛門宗古ニ首をとられ、残る六騎の大坂

勢其所にて何も残らず討れ申候、團右衛門指物ハ手嶋薙と金の御へいと白きのぼりニ墨ニ而伴團右衛門と大文字にて書申候を、かはりくさし申候、此時大坂を出申にハ右の白のぼりを指申候、此時の様子、一人も不殘候故、城中ニ不存候所ニ、かしのいの町ニ内々城中へ紀伊國より内通のものの御座候而、明ル日ニ参り、右之様子申上候を、大野修理木村長門など罷出、様子承り、彼もの口上書附申候を、私も同所にて承り、大野主馬ハもはや紀州へハ不參、大坂へ引取申候、大野道犬岸和田より大坂に被罷歸候、

五月六日七日合戦附大坂落去之事

一大御所様ハ天王寺表より御寄被成、將軍様ハ道明寺表より御寄可被成ニ極り、御先手の諸勢大坂へ急ニ寄せらる由其聞へ候ニ付、五月六日早朝ニ、道明寺表八尾久保寺へハ木村長門、後藤又兵衛、村井右近、鈴木田隼人、山口左馬、此外本參新參小身ものニ至まで、思く此手へ向候、此日方々口々古參新參人數持衆小身衆出向候へども、事急ニ御座候故、何も様子もつきくの事ハ不存候内、道明寺

表平野筋へハ長曾我部宮内、後詰ハ眞田親子ニテ御座候、此日朝の合戦ニハ、長曾我部、藤堂和泉守先手ニ打ち候由にて、藤堂名字大將分の首三ツ、其外甲附の首數多、馬上一人ヅ、首を取、大坂へ持參いたし候を、玉造御門ニ私朝より罷出、右之様子見申候、則首共之つげんの後、三ノ丸西大手ニならべ置れ候、其内藤堂仁右衛門、同新七、同勘ヶ由、右三人共和泉守同名と云、大將分成ニよつて、首をば三方にのせられ候、此日首ども追々大坂へ參、其後大坂諸大將此表にて討死致候由申來候、井上小左衛門ハ、此日眞田手ニ附、平野表ニ居リ申候が、眞田ニ暇を乞申候ハ、唯今道明寺ニおいて後藤又兵衛打負候由承候、又兵衛と申入候旨御座候間、一所ニ討死可_レ致と存候由にて、諸人數ニも暇をとらせ、善四郎と云郎黨一人、源太郎と申小姓一人、以上三騎平野を乗出し、道明寺表へ參り候とて、後藤又兵衛備迄參不_レ得、道ニて三人ながら討れ申由、下人大坂へ注進致候を承候、眞田親子はそれより天王寺表へ向、茶磨山ニ陣を取居申候もの、ほうくの鉢にて大坂へ歸申候、長曾我部宮内も、六日の晩、馬

上六七騎にて玉造口の御門より御城へかへり申候、右御門にていづれも長曾我部へ言葉をかけ、今日道明寺表の様子いかゞ候哉と被_レ申候へバ、此鉢ニ罷成候と計返事致し、城中へ入被_レ申候、私も玉造口御門ニ罷在候様子見申候、其後長曾我部城中をおち、いけどられ候よし承候、右六日ニ大將分道明寺表へ罷出候衆ハ、長曾我部の外一人も大坂へかへり不_レ申候、一同七日早天に眞田左衛門茶うす山ニ赤のぼりをたて、一色赤装束にて居申候、茶磨山の少東、眞田大助、同赤印にて居り申候、其東に森豊前、其次ニ大野修理、同主馬、其東に織田雲正寺居被_レ申候、朝一番の合戦ハ、越前衆へ眞田大助切り掛、其後雲正寺横あひに掛、大野修理、明石掃部のぼりも入亂れ、越前衆つきつぶし申候、二度目の合戦ハ、森豊前一番ニ越前衆ニつきかゝり、眞田大助横あひにかゝり申候、其時もはや雲正寺のぼりハ一本見へ不_レ申候、討死致され候も落られ候も終知不_レ申候、大野修理同主馬も大坂へ引取申候、のぼり一本もみへ不_レ申候、此時眞田大助のぼり西のかたへ少なだれ申を、眞田左衛門茶うす山より貝を

貳ツふき下知いたし、親子の勢一ツになり、敵を四五町おいまくり候所、御旗本衆と相見へ、あらてにて一むれ／＼追々に眞田備へ乗込、たかへにおいまくり、おいもどされ廻合候内ニ、もはや大坂ハ町目筋の方はう／＼に火の手みへ申候、私事ハ眞田手へ秀頼公御側衆参りニ附、天王寺表へ罷出、二度目の合戦より此時迄、眞田後詰ニ罷在候へども、最早眞田備もくづれ、大坂ニ火のて上り候故、何もおもひ／＼ニ落行申候、私事ハ森右近殿へゆいしよ御座候附、中嶋の右近殿陣場へ落着申候、

一西國衆ハ未大坂表へ、神崎表より大坂の火の手を見附、私ども中嶋へ落申候時分、中島迄何も懸附申候、天王寺より中嶋迄の間にて、町人百性其外雜兵どもの落人、西國衆ニ首とられ申候、其外たおれ死申候ものども何も取申候由、其時分右近殿家中にて承り申候、

天樹院様御城出之事

一同七日方々の攻口ニおゐて、大坂勢打負候故、秀頼公并御母公大野修理など御相談候て、秀頼公へ御前姫君様を城中より出し、大御所様へ御送り被

レ成候、御供ニハ南部志摩守と申者一人、馬上にて御こしの先を拂、大坂より姫君様御出被レ成候間、何も道を開き候へと敵方へ相斷、天王寺表へ御乗物一挺にて出し申候、内々ハ敵方より御姫君様を出候様ニとの手にても在レ之候由取沙汰御座候、先御城を御出被レ成候ハ、如レ此御座候、

一大御所様ハ、大坂御天守ニ火の手あがりして、晩方雨少ふり申候ニ、御馬ニ召、京都ニ御上り被レ成候由承り申候、

一秀頼公ハかのへ辰の御としにて、夏陣卯の年廿四にて御座候、同八日秀頼公御生害の様子ハ、我等大坂ニ居り不レ申候故不レ存候、是ハ寄セ衆御存可レ被レ成候、

赤座内膳伊藤丹後岩佐右近妙石寺へ行候事

一大坂落城の後、赤座内膳、伊藤丹後、岩佐右近、其外御小性十人計方々ニ隠れ居り申候へども、終ニ御さがし被レ出、耻辱に及可レ申と存、内々頼申候故、京妙心寺へ参り、海山和尚のぞめし請、二條御城へ書附、右面々の名字を印、御檢使被レ下候て、切腹可ニ致せ申上候へども、兩御所様上意にハ、大閤よ

り御普代のものども、秀頼公御せんとを見届候事尤ニ被^レ思召^ニ候、其内にも大野修理などのごとくニ、よしなき事共す、め申候ものども、其上諸宰人ハ石田治部少輔一味の時、一命をたすけ置れ候ニ、又此度秀頼公御謀叛に御味方申事、不届ニ思召れ候、右のものどもハ、妙心寺より何方へも参り度所へ参り居り可^レ申由、御ゆるしニ預り、それより何方へちりぐニ罷成り候、私事も右之人數ニて御免るしを蒙、妙心寺を罷出、方々いたし、右のものども妙心寺へ参り候意趣ハ、木下左京と申、大閤御普代のもの、忤海山和尚の御弟子ニて罷在候故、此よしニて何も妙心寺へ罷越、

國松様御生害の事とき若狭はなし

一秀頼公の御子國松殿ハ、伊勢より御奉公ニ出られ、女中の腹ニ御座候を、秀頼公の御母公ハ、京極若狭殿御兄弟成故、此若君をバ預り被^レ成候處、京極殿より若狭のとき彌左衛門と申者の兄弟、後家ニて居り申候もの、此御子去人の御末ニて、後ニハ世に御出可有之候、能々そだて候へとて、養子に下され候、此御子七歳迄とき彌左衛門所にてそだて申候

所に、寅年大坂籠城ニ附、此御子秀頼公の御實子ニて候故、關東より御せんさく可有之候間、とかく何方へも失ひ申候様ニと、京極殿御はからひニて、小舟ニのせ張附ニいたし、おしながし申寄相極申を、右の後家は非とも御供可^レ仕由ニて、一ッ舟ニのせ、張附ニいたしおしながし申はづニ取極メ申候、其後十日計有之候て、京極殿御袋御扱の御頼可^レ被^レ成候由ニて、俄に大坂へ人御越候故、幸此度彼若君を大坂へ御返し可^レ有との相談にて、早舟を仕立浦々尋、漸彼舟を尋出し、若君をば長持ニ入、京極殿御道具と書附申候ハ、大坂へ入申候、其時御供ニ彼後家と京極殿内田中六左衛門と申もの、若君ニ附申候、其後御和談ニ成、若君ハ其ま、大坂ニ御座候、田中六左衛門も御守ニ被^レ成、大坂ニ居申候、其後京極殿大津之藏屋敷奉行宗語と申もの、忤、十二三ニ成申もの、かぶろニて若君ニ附申候、夏陣の時五月八日迄、秀頼公御袋と一所ニ御座候て、何とぞして落し候へとの事にて、秀頼公御親子と御暇ノ御盃被^レ成、田中六左衛門并御守の後家右のかぶろ、以上三人御供いたし、若君京橋（新カ）はし堤まで御出

候へば、もはや秀頼公の御座候ゑんせう藏ニ火の手上り申候、それより若君こと牧方迄落し申候處ニ、牧方ニおさへに妻木雅樂頭被_レ居候故、爰にて六左衛門も被_レ拂、彼後家ハ雅樂殿家來衆取ものニいたし、若君ハ加賀衆へ取申候、右のかぶる青山伯耆殿へ被_レ申候、其後若君を伏見迄つれ参り候處、腹中御煩候故、伏見の加賀衆宿材木やニ預け置き申候、青山殿にて、彼かぶる右の若君の様子こまぐと白狀いたし候故、御所様より尋可_レ申由方々へ被_レ仰渡、板倉伊賀守殿より京伏見御尋被_レ成候處ニ、彼かぶる申候は、伏見ニ被_レ有候若狹ときと申もの、若君へ参候へバ、何も御おぢと申候間、此ものニ御尋可_レ被_レ成候由申して、則若狹とき親子御せんさくにあい、町中へ被_レ預居申候所、同五月廿二日、右の材木屋より若君をつれ、伏見町奉行へ出申候、則若狹とき親子ニ御見セ被_レ成候へバ、若君其儘若狹ときニ御取つき候故、うたがへ無_レ之、それより板倉伊賀殿へ若君を渡シ、若狹とき親子も伊賀守殿へ召つれ参り、同廿三日之朝、右の田中六左衛門若狹へ落してかくれ居申候へども、若君を公儀より

御尋相成候、其上ふしみニ御座候由承り、伏見へ参り候處、若君も若狹ときも、京都板倉伊賀守殿へ被_レ召参候由承り、すぐ伊賀守殿の御屋敷へ参り、右意趣申上候、御供可_レ仕せ申候ニ付、伊賀守殿六左衛門ニ對面被_レ成候、振廻被_レ下、今度罷出候事きどくニ思召候由にて、御酒ニこん被_レ下、緩々休息致候へと御申被_レ成、伊賀守殿御勝手へ御入被_レ成候へバ、其儘六左衛門ニ繩をかけ申候、六左衛門申候ハ、此度罷出候事ハ、御供可_レ仕候覺悟ニ御座候上ハ、箇様ニ被_レ成候にも不_レ及候と申候へバ、伊賀守殿御立歸被_レ成、只今御城へ召れ罷出、殊ニ國松殿御守にて被_レ居候へバ、其儘にて罷出候事如何ニ候、御まづけのため繩をかゝり被_レ申候へと被_レ仰候へバ、委細かしこまり候とて、繩かゝり申候、其後伊賀守殿六左衛門ことを被_レ召御登城被_レ成候、若狹とき親子ハ、伊賀守殿御屋しき罷在候、其後國松殿并田中六左衛門ともニ、七條川原にて御成敗被_レ成候由、伊賀守殿御歸被_レ成、若狹親子へ御咄し相成候由承申候事、

右山口休庵咄ハ、村越如泥翁の藏本を以寫申候、
如泥翁ハ松浦家之士にして、肥前平戸の產也、軍
談にくわしく、古實を知る人ナリ、或時の物語に、
山川帶刀ハ、秀頼公の妾の兄也、大坂落城の後、松
浦家へ御預ケニ成、百人扶持おくられ、休翁と名
を改、百人扶持の内を出入の職人町人など一人
分ほどヅ、合力いたし、物數奇ニて拵候器物等、
知人はめ候へバ、其儘あたへ候よし、子を後孫平
次と申、松浦家ニ勤候由、如泥翁若年の時分、休
翁をも見られ候、孫平次ハ、友だちニ致され候由
なり、又北川次郎兵衛も、大坂落城の後、大村因
幡守へ御預、次郎兵衛二男、後に平戸の家中へ養
子ニ參り候由咄被レ申候、

享保十一年丙午四月

人見行察寫之

土屋忠兵衛知貞私記

大坂兩陣供奉之御人數

(鈴木本には此條より福嶋黒田加藤平野四人の事までを卷末に記す)
冬御陣御留主夏御陣御供

御譜代大名衆

上總介殿
兵衛督殿
常陸介殿
越前少將
井伊掃部頭
榊原遠江守
酒井左衛門尉
本多美濃守
本多出雲守
松平主殿頭
松平紀伊守
松平下總守
松平阿波守

(寛永フニ御陣の事チもらす)

(ケ甲三、大給右近衛將監成重酒井左衛門忠次も屬して功あり)

(鳥居左京亮忠政御供の事チもらす)
(冬御陣御留主夏御陣御供)
(鈴木本有わ川上)

(ケ癸四、隱岐守吉次は慶長十一年八月二十六日卒恐らくは豊後守光教の誤りなるべし)

(貞享 番兵小田原箱根)

(ト癸九、但馬守泰朝の父越中守長朝又泰朝の子越中守富朝二人の内なるべけれどともに坂役の事には中になし)
後攝津守

(ケ甲二、庄右衛門昌利は慶長十八年十二月死す其子庄左衛門昌吉は十九年發向元年は江戸の留守番なつとむとあり)
後式部

松平周防守
水野日向守
本多豐後守
松平將監
本多縫殿助
石川主殿頭
鳥井左京亮
牧野駿河守
戸田左門
岡部内膳正
戸田因幡守
西尾隱岐守
三宅越後守
西郷若狹守
秋本越中守
稻垣平右衛門
菅沼織部正
丹羽勘助
松平庄左衛門

大名衆

(ヶ庚一、右京大夫義宣)
(のフ中に坂役の事なし)

後越中守

後松平

始蜂須賀

(若年故不能供奉)

(寛永フニナシ)

(兩御陣共不能供奉)

(兩御陣共岸和田之城ヲ守リ居ル)

(トヨトミ姓右衛門大夫延俊慶ノ五年頃より御家にゑたがひ同六年より日出の城を領すフ中坂役の事をもらす)
(長父但馬子慶利かフに坂役の事なし)

松平肥前守

松平陸奥守

米澤中納言景勝

左竹右京大夫

細川内記

淺野但馬守

藤堂和泉守

松平阿波守

○稻葉淡路守

金森出雲守

松倉豐後守

大和衆
桑山伊賀守

同
桑山左衛門佐

同
桑山左近

○松浦肥前守

小村大和守

木下右衛門大夫

遠藤但馬守

(シケノ信幸坂役の事をもらす)

(ヶ丁七、越前守秀久は慶ノ十九年五月六日江戸に卒すとあり恐らくは子息兵部大輔忠政の誤りか忠政は兩御陣なつとむとあり、ト癸七越中守信□かフ疎にて坂役の事をもらす)
(□□アへ姓坂役の事ないはず)

分部右京亮

堀丹後守

南部信濃守

津輕越中守

仙石越前守

秋田城之介

脇坂淡路守

水谷伊勢守

眞田伊豆守

新庄越前守

堀美作守

六郷兵庫頭

九鬼長門守

一柳監物

細川玄蕃頭

小出大隅守

佐久間備前守

佐久間大膳大夫

市橋下總守

(ク壬ニ、元年より江戸に相務奉仕スとのみあり貞隆)

(寛永フト已一かゝる人なし)

(寛永フニナシ)

兩御陣在國 (ケ丙一、嶋津大隅守家久フニ坂役の事なし)

冬御陣御供夏御陣在國 (毛利大江長門守秀就)

同断 (ト丙一、信濃守勝茂寛永フニ出陣ノ事ナシ貞享に出陣スベキトノ命アリ)

同断 (ケ丁一、池田新太郎光政利隆の子元和二年カトク當時九才なり忠雄利隆の出陣をもらす)

冬御陣御供夏御陣在國

(ト丙二、山内土佐守忠義土佐國より大坂に赴くといへども風波あらく還參小舟にのりて着岸すといへとも既に落城)

土方掃部頭
堀淡路守
谷出羽守
片桐市正
片桐主膳正
小堀遠江守
加藤織部
大田原備前
大關彌平次
千本大和
育王豐後
蘆野民部
岡本宮内
松平大隅守
松平長門守
鍋嶋信濃守
松平新太郎
松平土佐守

同 (ケ丙四、美作守忠政翌年大坂再亂の時忠政又よせてとなりて仙波御口陣より敵の首二百五か進上すとあり)

同 (ケ丁六、内勝正久盛)

同 (智、彦六郎典通といふ人あれども時代あはす)

同 (ウタ、能登守茲政は元和五年家をつぐ此時三歳也されば父豊前守政矩の誤り也政矩大坂再亂の時因州守政矩の伏見より供奉し正信組に屬し御旗本の前備に候すとありホニ政矩慶九

年右兵衛に任じ同十年豊前とあり同(兵ナ出ス)

同 (大藏長門守種春家老をもて名代として正信に屬し兩度の軍役をつとむ)

同 (ト庚二、民部大輔純頼)

同 (清盛對馬守義成元和元年カ)

同 (トク伏に於て兩公に謁ス)

同 (ケ庚四、淡路守盛利)

同 (後丹波守) 越智、來嶋右衛門一康親ハ慶長十六年死其子丹波守通春大坂御陣之時病によて國にあり兵士を出して軍事をつとむ丹波守通春はしめ右衛門といひしならん

森美作守
中川内膳正
稻葉彦六
加藤左近
伊藤修理亮
龜井能登守
秋月長門守
大村民部
宗對馬守
五嶋淡路守
久留嶋右衛門一
福嶋左衛門大夫
黒田筑前守
加藤左馬助

平野遠江守

右四人冬御陣江戸ニ被_ニ召置_ニ夏御陣御先江被_レ遣候

鈴木

文化乙丑得秋山彦兵衛君本于大河内新右衛門家抄于白藤書屋十月十一日情鱸氏對校一過原本美濃紙横帳字極精雅且古色可愛惜未勾摹耳十月念八鈴木恭誌

慶長十九甲寅年（鈴木本題大坂兩御陣覺書）

大坂御陣之節所々御番

大坂兩御陣供奉御城代所々御關所御番駿河江戸御留守居御褒美御知行拜領覺討死之覺改易衆御先手ニ而働有之衆

京諸司代

板倉伊賀守

二條御城御番

御鐵炮春日左衛門

同斷柘植三之丞

政所殿爲後見京都都有之

木下宮内少輔

此外諸奉行

伏見御城代

松平隱岐守（定勝）

成瀬吉右衛門

大御番二組

日下部兵右衛門

根來二組

丹後守事兩御陣伏見御番松平丹後守（重忠）掃部頭冬之御陣ヨリ佐和山人數ヲ召連御先手江被遣井伊掃部頭

鐵炮百挺根來愛染院

同斷同右京

町奉行

長田喜兵衛

知行七百石岡野江雪齋

淀

木村惣右衛門

加番

八千五百石大嶋彌三郎

五千石同茂兵衛

三千五百石大嶋久右衛門

岸和田

小出大和守

膳所

戶田左門

尼崎

後内匠後丹波守建部三十郎

上野安中

井伊兵部少輔

武州小佛御關所御番

御代官高室四郎左衛門

相州小田原御城御番

冬御陣戶澤右京亮

夏御陣近藤一黨中

箱根根府川兩所之御關所共ニ守之

駿河御留守居

御 鶴 君

町奉行

彦坂九兵衛

御留守居

御鐵炮松平加賀右衛門
御鐵炮成瀬吉平

權現様御供

御老中

本多上野介

松平右衛門大夫

板倉内膳正(鈴木無本)

秋元但馬守

出頭衆

伊奈筑後守

淺井七平

大岡兵藏

御奏者番

城和泉守

榊原伊豆守

永井右近大夫

西尾隱岐

御小姓

松平筑後守

黒田信濃守

長門守力金森五郎八

(鈴木本ニハ長谷川半四郎鈴木友之介の二を欠きて石谷友之介の一名を成す)

川窪主膳

別所軍平

高木善七郎

高力河内守

長野千竹

高井助九郎

長谷川半四郎

鈴木友之助

石川庄次郎

日根左京

間野庄次郎

柳澤左太郎

蜂屋五郎作

朝比奈勘右衛門

駒木根長次郎

阿部次郎吉

加納九十郎

喜多見主水正

三吉備中守

御給仕番

後河内 後將監 佐久間伊豫守

御小十人組
御旗奉行

御鍵奉行

御持弓

御持筒

御使番

三吉越後守

長野次郎兵衛

石谷友之助

後紀伊守
東城伊豆守

野々村三十郎

後仁右衛門
小栗勘十郎

德山五兵衛

三木十兵衛

堀田權六(作七)

石丸權兵衛(無本)

庄田三太夫

保坂金右衛門

大久保彦左衛門

石丸與五左衛門

中根喜藏

小栗又市

城和泉(守本)

横田甚右衛門

瀧川豐前守

眞田隱岐守

初鹿傳右衛門

清水權之助

米倉丹後守

山城宮内

本多藤四郎

嶋彌左衛門

間宮權左衛門

原田藤左衛門

奥山次右衛門

鈴木久右衛門

川野庄(右豫門)

山本新五左衛門(右)

服部權太夫

佐久間河内守

加々爪甚十郎

花井庄右衛門

後民部
後御目付
豐島主膳

後刑部
後御目付
豐島主膳

後大隅守
後御目付
後江戸町奉行
日下部五郎八
後御目付
牧野清兵衛

御步行頭

松平豐前守

阿部左馬助

松平右馬助

三井左衛門佐

御先弓

五十張 與力十人蜂屋七兵衛

五十張 與力十人布施孫兵衛

御先鐵炮

五十挺坪 內惣兵衛

同渡部彌之助

百挺山岡主計

同日向半兵衛

大御番

水野備後守

松平石見守

西尾丹後守

後出雲守 寺社奉行(鈴木無)松平忠左衛門

御普請奉行

佐藤駿河守子勘 右衛門

村田權右衛門

江戸御留守居

冬御陣御留守 夏御陣御供上 總介殿

兩御陣共二御留守

松平下野守

同斷最上駿河守

鳥居左京亮

冬御陣御留守 夏御陣御供上 土佐守(鈴木)

是八病氣二付兩御陣共二津宮被 與平 大膳大夫

有之人數八江戸へ差越御留守 兩御陣共二小田原御番戶 澤右京亮

後民部少輔依爲幼少江戸二被召置土屋平八郎

依爲幼少江戸二被召置北條久太郎

大御番

冬御陣御留守 夏御陣御留守 土岐山城守

江戸町奉行

後次兵衛 後彈正忠 嶋田兵四郎

後幽也 米津勘兵衛

台德院様御供

御老中

酒井雅樂頭 組共

本多佐渡守 同

土井大炊頭 同

安藤對馬守 同

奥御小姓衆

田中主殿頭

後長門守 小山左源太

後美作守

後御書院番頭 後御留守居 本多主水正

後丹波龜山城主 松平伊賀守

後阿部野馬守二改備中守家督 三浦作十郎
武藏岩村城主 後大猷院樣御老中 後石見守 鳥井讚岐守

內藤左兵衛

後宮內 後御小姓組番頭 尾猪之助

後隼人正 後御書院番頭 後御留守居伊澤吉兵衛

後采女又備中守 後御書院番頭 太田新六
遠州濱松之城主 今道顯

安藤甚助

後長三郎 川口左門

後喜多見五郎左衛門 井上半三郎
今宗幽

內藤小市郎

後七左衛門木造長吉

後惣兵衛 後彌二兵衛 三宅惣十郎

御小納戸 收又十郎

三宅藤五郎

御花島御番

一番 水野監物組

二番 井上半九郎組
後主計正 遠江橫濱賀城主 今子河內守笠間

三番 板倉周防守組
後諸司代 鈴木元

四番 成瀬豐後守

御書院御番

一番 參州吉田城主 後信州松本城主 水野隼人正

武藏岩付城主 青山伯耆守

二番 內藤若狹守

三番 淀之城主 後伊勢桑奈城主 松平越中守

四番 冬御陣 三枝土佐守

御旗奉行 同斷 老人故夏御陣御 捨免江戸に留る後意伯嶋田次兵衛

夏御陣 三枝土佐守

同斷 屋城越中守

御鍵奉行 室賀源七

小坂新介

後外記 內藤右衛門

御持弓 青山善四郎

御使番 鶺鴒殿岩見

牟禮郷右衛門

後忠左衛門 後因幡守 後大坂町奉行 久貝忠三郎

後御普請奉行 小澤瀨兵衛

同斷 山岡五郎作

兼松源兵衛

後水戸へ被爲付村 瀨左馬

近藤勘右衛門

後權大夫 荒井御番服部與十郎

三宅半七

後筑後守 後御持筒高木九兵衛

山田十太夫

後監物 御目付長井彌右衛門

青山石見

後土佐守 堺町奉行 後土齋石川三右衛門

溝口外記

安藤次右衛門

川口長三郎

永田庄左衛門

後御旗奉行中山勘解由

後御旗奉行太田善太夫

後大隅守御目付 後伊勢郡代石川八左衛門

後圖書 御目付 後百人戰炮渡邊半四郎

御目附

加藤伊織

太田新左衛門

木村源太郎

御步行頭 後出羽守 大和高取城主植村志摩守

後市正後石見守 大坂御城代阿部備中守ニ加ル 内藤主稅

後大隅守 江戸御留守居松平内膳

後攝津守 後大番頭 後大坂御城代備中 阿部彌一郎

御先弓 守ニ加ル 御捨免江戸ニ歸ル 後清部 久永源兵衛

本多太郎左衛門

倉橋内匠

御先鐵炮 百挺近藤石見

同駒木根右近

五十挺屋代越中守

同森川金右衛門

同服部石見

同服部金兵衛

同加藤喜助

大御番 後大坂御城代阿部備中守ニ加ル 高木主水正

阿部備中守

後内匠牧野豐前守

冬御陣江戸御番 夏御陣御供渡部山城守

御普請奉行 山岡五郎作

小澤瀬兵衛

大坂夏御陣五月七日勦ニ付爲御褒美御知行拜領之面々

御花畠一番

水野監物組

三百石

石丸權六郎

二番

井上主計頭組

五百石

後忠兵衛土屋左門

四百石

後御目付 後長崎奉行 山崎權八郎

二百石

岡部庄九郎

三番

板倉周防守組

四百石

初小十人番頭 後若狹守 後御稻垣藤七郎

二百石

後庄右衛門 後大御番頭 後留守居 高田藤五郎

四番

成瀬豐後守組

三百石

後市正 後風軒中山内記

御書院一番

水野隼人正組

千石

水野田宮

千石

天野佐左衛門

千石

横田五郎三郎

千石

東惣右衛門

五百石

後猪右衛門 東百助

五百石

土方宇右衛門

三百石

本郷庄三郎

三百石

齋藤左源太

三百石

堀田勘左衛門

二番

青山伯耆守組

千石

後玄蕃 御書院組頭(鈴木御書院番頭) 駿河御城代 大久保四郎左衛門

千石

書院番頭 後大御番頭 後宗閑 根傳七郎

千石

後肥前守 後主水正 高木善次郎

是者伯耆守組ニ候得共父主水正御旗本御先故主

水正備江參候而之勦負手

千石

後下田御番今村傳四郎

千石

松前隼人

五百石

安藤傳十郎

五百石

後茂右衛門 後ニ鐵炮川口茂兵衛

五百石

(鈴木同斷二字有)井戸左馬

五百石

後右馬花房又七

五百石

後甚右衛門 大久保牛之助

三百石

駒井右京

五百石

後源左衛門 後左馬 大久保源三郎

三番

内藤若狹守組

此組御加増衆無之候

四番

松平越中守組

三百石 後刑部 後御使番 (鈴木御城番)

跡部民部

三百石

後御使番 駒井次郎左衛門

大御番

高木主水正組

五百石

後下總守 後御目付 兼松彌五左衛門

後大御目付

五百石

後御鐵炮金田惣八郎

五百石

後御鐵炮高木忠右衛門

五百石

後六左衛門

後豐前守渡部平六

甲府殿甲州御城代ニ被ニ仰付一

惣都合御褒美三拾六人

此内高下御座候様ニ唯今世間ニ而沙汰仕候下地知行御切米取罷在候上ニ御褒美御加増拜領申候者高知拜領申候様ニ聞エ申候無足ニテ御知行拜領申候者ハ有之儘ニ相聞申候以上

大坂御陣五月七日討死

御書院一番

水野隼人正組

松平助十郎

二番

平七郎子

松平庄九郎

梁田平七郎

梁田平十郎

大嶋佐太夫

山崎助十郎

青山伯耆守組

野一色頼母

別所主水

松倉藏人

服部三十郎

山口小平次

古田左近

高木主水正組

林藤四郎

大岡忠四郎

筒井甚之助

米倉助右衛門(無本)

間宮庄五郎

安藤彦四郎

御書院御番ニ候得共斷ヲ申父帶刀ニ付井伊掃部手

ニテ五月七日討死

奥田三郎右衛門

大和衆故ニ五月六日自大和路河内道明寺へ寄討死

坂部作十郎

番ハツレ故御先江參討死三四郎子三十郎所江養子

是故坂部ヲ名乗ル

安藤次右衛門

五月七日ニ手ヲ負伏見江歸リ相果申候

戸田藤五郎

五月七日ニ手ヲ負其手ニテ累年相果

改易被ニ仰付ニ候衆御先手江參討死

五月六日

山口伊豆守

修理子
相模守末子
大久保内記 十六歳

城主討死五月七日

信州松本之城主
小笠原兵部大輔

上總大多喜城主
本多出雲守

改易衆御先江參働御座候衆

川野權右衛門

權現樣衆御先手ニテ致ニ高名ニ

權現樣江直訴申上被ニ召出ニ候

後

林三十郎

權現樣衆井伊掃部頭手ニテ五月七日鍵ヲ合以ニ掃

部頭御訴訟ニ被ニ召出一

朝比奈彌太郎

權現樣衆井伊掃部頭手ニテ五月六日鍵ヲ合ス以ニ即

掃部頭御訴訟被ニ召出ニ後駿河大納言殿江被ニ爲レ付

石川加右衛門

權現樣衆御先手ニテ高名窄人後京都有レ之藤堂和

泉守召抱窄人後淺野但馬守召抱但馬守死去以後窄

人京北山一乗寺ト云所ヘ引込丈山ト號スわたらし

なせみの小川の清ければをひのなみそふかけもは

つかしと云歌をよみ加茂川より外へいてす九十歳

にて死

大久保半助

台德院樣衆御先手江參高名被ニ召出ニ駿河大納言殿

江被ニ爲レ付候

羽柴勘右衛門

台德院樣衆御先手江參高名不レ被ニ召出一

大坂籠城之節籠候人數

古參之者

一知行三萬石歲四十八九秀頼公一所ニ死

大野修理亮

一修理宗領歲廿四修理次男彌十郎者爲ニ人質ニ江戸ニ有レ之後御成敗

大野信濃守

一木村彌市右衛門子トモ甥トモ云知行壹萬石歲卅五秀頼公右大臣任官之時諸大夫被ニ仰付ニ秀頼乳兄弟冬陣於ニ嶋野ニ敵二人突ふせ無ニ比類ニ働夏陣五月六日於ニ若江ニ討死掃部頭内安藤長三郎首ヲ取ル

木村長門守

一渡邊庄右衛門子知行五千石歲三十四六日ニ手負七日於ニ千帖敷ニ自害母庄榮首ヲ討ツ(鈴木六日千帖敷にて自害とす)

渡部内藏助

一修理次の弟歲卅四五計

大野主馬

大坂ヲ出テ後被ニ生捕ニ板倉伊賀守所において切腹申付ル

一輕者之子といへども被ニ取立ニ兩御陣侍大將被ニ申

付ニ小姓組大力爲ニ勝男也歲四十知行五千石六日若江ニテ討死

薄田隼人

一關ヶ原之節加賀大聖寺ニテ自害をとぐる山口玄蕃次男歲卅七八知行三千石小姓頭六日於ニ若江ニ討死玄蕃惣領右京亮玄蕃ト一所討死

山口左馬

一知行三千石歲七十餘歲大闇之時使番黃母衣大坂ニテハ黃シナヘ冬陣ヨリ赤座内膳と兩人惣軍奉行秀頼公一所ニ自害

郡主馬

一内藤新十郎同前六日若江口大將分討死井伊掃部頭内正木舍人討レ之

佐久間藏人

一御姫様之御乳母刑部卿子

内藤新十郎

内藤庄兵衛兄親ハ若狹衆罕人内藤庄兵衛也三千石歲廿三六日於ニ若江ニ討死掃部頭内八田金十郎討レ之

四

伊藤美作

一津田長門弟歲廿餘五百石程

津田監物

一野々村伊豫弟歲四十計之者知行二千石程

野々村豊前

一甲斐親類歲四十計小身

速水美作

一因幡子三十餘歲之者五千石 平塚左助

物見ニ出六日於ニ若江一討死父平塚因幡者關ヶ原御陣之節九月十五日討死大閤黃母衣之者戸田民部少

同前之者石田治部少萬事相談相手山内對馬守内檜井太兵衛ト云者討之檉井か筋于今土佐ニ有之

一覺ノ者郡主馬同前武者奉行知行三千石計歲五十程

赤座内膳

一大閤之時分ハ黃母衣此時は旗奉行歲六十計知行二千石程 津川左近

一左衛門大夫弟甥大坂後窄人

後道庵

福嶋伊豫

一伊豫弟二千石程

福嶋兵部

一廿四五歲ノ者長門弟又出雲下戚腹之子與惣次郎ト

金森掃部

云町人ノ子ニ遣ス

一掃部弟三十歲計窄人ニテ籠城討死

明石八兵衛

一尾張者五百石計足輕頭五十歲計

湯淺右近

一尾張者舟大將千石餘五十歲計

岡田丹後

一用ニ立タル者也尾張者

青野清菴

六十計之者物頭七日壬生寺之船手ヘ押ニ行候得共船不_レ見候故天王寺口ヘ引返シ討死仕候哉知不_レ申候

一尾張者足輕大將歲五十計知行千石程

岸勸解由

一右同斷之者

植木六右衛門

一五十計ノ者尾州者黃玄なへ

伊木七郎右衛門

一兵部親類千石計

古田助右衛門

一五百石計大閤之時祐筆秀賴公ヘ被_レ付候大坂陣五

六年前ヨリ物頭ニ被ニ申付二千計ノ大將

竹田永翁

一長門伯父物頭千石計四十四五歲程

木村主計

一堀左衛門佐下戚腹ノ子_{千石計略本}二三_{千石計略本}千石程歲五十計

堀對馬

七組

一尾張者壹萬石七十歲計

速水甲斐守

一甲斐守ヨリ若シ壹萬石

中嶋式部少輔

一同斷

野々村伊豫守

一同斷

堀田圖書助

一同斷

間野藏人頭

一同斷五月七日城ヲ出後被ニ召出ニル

伊東丹後守

一同斷夏陣之砌秀賴公ヨリ爲ニ使者被ニ指下ニ江戸被ニ

留置ニ後被ニ召置ニ

青木民部少輔

此外

一四十計千石程若名左門

織田雲上寺

夏之御陣父有樂ト一所ニ城ヲ被ニ出有樂者被ニ召

出ニ兩上様折々御對面雲上寺ハ病人故不ニ罷出ニ相

果雲上寺子織田三五郎被ニ召出ニ

一尾張者足輕大將

早川主馬

一伊豆親類同斷

石川肥後

一里見房州親類之由五十歳計

里見美作

一五百石程近江者物頭之内

黒川但馬

一尾張者物頭五十計之者

鎌田兵部

一三齋親類

細川讃岐

一佐藤駿河弟今駿河伯父

佐藤主計

一關東者物頭

本多掃部

一豐後弟播磨者（鈴木別所上有駿州侍豐前第六字）

別所内藏助

一大閤之時分ヨリ有ニ之者共出頭人ナリ元者毛利河

内親類也甥歟弟之由毛利河内跡ヲ續ク關ヶ原之時

分石田治部少一身身ヲ隠シ居候秀賴被ニ召出ニ大坂ニテ者物頭鐵炮預ル歳五十計ノ者

羽柴河内

一尾州者譜代覺有リ

山本左兵衛

鐵炮預ル六十歳計之者御家ニ山本新五左衛門ト申

者有リ此兄ト云

一小田原者歳五十計布施刑部兄弟刑部ト云者ハあら

や一位禪尼甥御家ニテ喧嘩ニ而人ヲ討立退後松平

新太郎家中へ被ニ付

布施武藏

一民部親類大閤家ノ者物頭歳五十餘之者

青木主水

一木下宮内弟之由政所殿之兄ヲ木下法印其宗領後藤

若狹少將後長嘯其弟宮内其次右衛門太夫其次秀秋

筑前中納言其弟左京其弟外記其弟内記

木下左京

一奥州者松田利助親類

松田圖書

物頭珍齋凡齋トテ陸奥守召仕シ童也其珍齋也

一利助親類奥州者物頭四十歳計 松田次郎兵衛

一信長家之者足輕預五十計其子後被ニ召出ニ

福富平左衛門

一尾張者弓大將歲五十計

寺町庄左衛門

一三河者物頭

青山助左衛門

一尾張者物頭

山田惣左衛門

一越後者宰人ニテ當時籠城

荻田藤五郎

一信濃者歲三十計宰人籠城

木曾長次郎

一尾張者下方左近親類歲四十餘之者宰人ニテ當時籠城

下方一左衛門

城

一尾州者譜代五十歲計使番慶長十九年十月八日從二

秀賴一使ニ來ル(鈴本ニハ使番尾張者五ノ十計江月ニテ召置候)

丹羽左平太

一三河者使番右同斷歲五十餘

小笠原左太夫

一大閤譜代秀賴小性立歲三十計

德原三十郎

一關東者歲五十餘ノ者

一色助左衛門

一譜代之者使番半兵衛親

三上外記(鈴本無)

一秀賴小性立之者德原同年比之者

植原八藏

一八藏弟

植原三十郎

一主馬弟歲四十計尾張ノ者

早川九左衛門

一尾張者士二十騎計引まはす歲五十餘覺之者(鈴本大坂にて侍大將とす)

赤座三右衛門

一廿歲計三河者平井久右衛門ト申者有リ水野日向守

同腹之弟親者大閤家平井氏之者就夫秀賴江奉公

致シ落城以後罷出候七兵衛者大坂ニテ討死隼人兄

久右衛門後被三召出御書院番相勤

平井七兵衛

一堀田圖書弟物頭四十計之者

堀田久左衛門

一堀彌太郎ト申者有リ其弟カ三河者物頭

堀野甚平

一譜代者鐵炮五十預ル慶長十九年十一月廿五日之曉

今福堤に張番出佐竹手ニテ討死

矢野和泉

一尾張者物頭四十歲餘

山本加兵衛

一四十餘之者元和元年五月六日道明寺に鐵炮百挺預

り又兵衛加勢ニ出討死大德寺玉室和尚之叔父爾今

其末治兵衛トテ子孫御當家ニテ御奉公仕罷在候大

坂之節今時分之籠城如何時節可有之ト達而御異

見申といへども承引無之結句被疑候以ニ此故ニ心

懸討死ヲ仕候由就夫權現様御威惣領井上治兵衛

四五歲之時後被三召出一

井上小左衛門

一尾張者(鈴本作上方侍)

桑原勝太夫

一大和者物頭御大工之中井大和カ主人大和ニ名字ヲ進シ候之由 中井次郎右衛門

一秋田城介親類士五十計預ル秋田修理後休齋兄弟年比四十餘五十二近 秋田左次右衛門

一遠江守親類使番歲四十程黃シナヘ

平野勘右衛門

一尾州者使番黃シナヘ歲四十餘 安木八左衛門

一越後者物頭謙信譜代筋之者五十計今度城籠歟前廉

大坂ニテ不及聞之 淺香勝七

一(使番) 竹田左吉

一秀賴使番クタ鍵ツカイ 田邊與左衛門

歲五十計此子四郎右衛門今尾張殿用人ニテ罷有

候與左衛門鳴野合戰クタ鍵ニテ有働

一奥州者正宗小姓也 松田利助

大坂ニ而使番黃シナヘ夏陣鐵炮五十挺預リ天王寺

表ヘ出鐵炮ヲ爲レ打夫ヨリ立退ク牢人ニテ相果ル

歲比五十計ニ而果候大坂之節四十計

一紀伊國者知行千石 伊丹因幡

大閤小性立大坂ニテ奏者番後城ヲ出被ニ召出番ハ
ヅレニテ御奉公仕候大坂之節四十程後五十計ニテ

相果ル其筋于今有之

一齋藤山城守子孫小姓頭三十歲計

齋藤才次郎

一陸奥守親類物頭年五十計 佐々九郎右衛門

一津國侍荒木攝津守者覺有之鐵炮預ル

生田清三郎

一物頭歲四十計藤掛三河親類 藤掛土佐

一長門甥廿歲計小性立 木村右京

一堀田圖書親類物頭 堀田武助

一刑部子人數百程預ル五十歲計之者

大谷大學

一尾張者使番黃シナヘ四十歲餘ノ者働有之大坂ヲ出

後淺野但馬守召抱 大桑平右衛門

一尾張者使番歲比五十計之者 村田將監

大閤取立之者子村田重兵衛其節大坂ヲ出牢人於ニ
嶋原ニ討死

大坂籠城之時分籠牢人年來秀賴公扶持被レ置

一友夢秀賴公ヨリ扶助ヲ得六十餘之者

長曾我部宮内少輔

一幡磨者大閤直參ニナリ拾萬石程之身代關ヶ原之節

治部少方敗軍以後長曾我部宮内坏同前秀賴御扶持
ヲ請今度籠城歲六十計之者掃部者七日討死親子吉
利支丹子者後從_ニ奥州_ニ被_ニ捕出_一

明石掃部頭

一尾張者元豐前ノ小倉ノ城主關ヶ原之時分治部少徒
黨歲五十餘土佐山内對馬守ニ御預其内土佐ニテ男
子二人女子一人出來候惣領式部ヲ召連土佐守ニ御
先_ニ可_レ參旨斷大坂江籠城ス 毛利 豐前守

一仙石越前守子親ノ勘當ヲ請罕人ニテ年來秀賴ノ扶
持ヲ請今度籠城歲五十四五 仙石 宗也

一安房守次男伊豆守弟 眞田左衛門佐

關ヶ原比ヨリ浪人歲五十計年來秀賴扶持ヲ請今度
籠城ス

一元黑田筑前守者大坂ノ節年五十計之由

後藤又兵衛

一歲六十計之者元來上總國養老之里之生之者千葉ノ
筋ノ家來ナリ北條左衛門太夫武藏玉繩之城主タリ
此家中ニ步奉公仕居候小田原落居以後上方へ登リ
加藤左馬介方へ奉公ニ出高麗陣之節番船ヲ乗取之
内功名有リ是ヨリ立身仕候甲ニ天然ト云字ヲ象眼

ニ入候元和元年四月廿八日於_ニ樫井_ニ討死淺野但馬
守内植田主水討_レ之彼が石塔于_レ今討死之所ニ有
_レ之 伴 團右衛門

一三齋次男越中守兄歲三十計大坂ヨリ出候ヲ三齋切
腹被_ニ申付_一 長岡 與五郎

一以前三齋者不足有_レ之引切大坂籠城後歸參

長岡監物

一駿河者今川家來朝比奈駿河守仕イ立之者若輩之時
分駿河ニテ一二度働モ有者也後上方へ罷上リ方々
渡リ立身ス大坂籠大野主馬組ニテ士百騎預ル伴團
右衛門長岡監物岡部大學三人主馬先手ニテ元和元
年四月廿八日岸和田へ出ル相手者淺野但馬守也後
出テ身上相濟長岡監物者歸參 岡部 大學

一主馬弟秀賴小性立 大野 道犬

子細（鈴木子細作ヒダ）有リテ京之町人松木ト申ス者之所へ

養子ニ遣候大坂籠城之節籠リ人數ヲ預ル大坂ヲ出
後東福寺前被_ニ生捕_一堺ヲ燒ク依_レ之昔重衡之例ヲ
引堺之町人道犬ヲ申請堺之町磔懸ケ候

（一五月七日討死 福田 左馬（鈴木）

一六十餘歲之者小田原ノ者勘兵衛ト申シ越前中納言

殿被ニ召抱ニ鐵炮被ニ仰付ニ候一白殿代立退其後大坂ヨリモ合力ヲ請浪人ニテ在ノ秀頼被ニ召出ニ時御約束ニテ御運被レ開候ハゞ越前ヲ可レ被レ下トノ儀ニテ越前守ニ成候秀頼御判ヲ頂戴シ首ニ掛討死越前野本右近討レ之右近ヲ見掛言葉ヲ懸ル討取

御宿越前

一足輕百引連大坂へ籠歲五十餘元信長御時代覺有レ之者

紀州高野根來

同斷トス田村輪藏院

一同斷歲六十計之者

こみちや

一足輕五十計引連籠ル歲五十計之者

同斷

同斷正徳院

一同斷

治徳院

右之外一挺鎗之坊主百計籠

(一相國寺之長老

矜長老)給本

一熊野神宮侍兄弟四人

堀内左馬

堀内左馬介同大和同若狭同主水主水者天壽院様ヲ出シ申ス殘ル兄三人者七日ニ討死ト云又城ヲ出タリトモ難說何モ二百計連ル、于レ今主水末孫有リ

大御番衆

一奥州者又兵衛組ニ付士五十預始ハ政宗ニ奉公其後

浪人秀頼被ニ召抱ニ七日城ヲ罷出松浦壹岐守ニ御預ケ此者重々子細有レ之者也 山川帶刀

北川次郎兵衛

一小田原者覺之者冬陣逆心内通露顯高麗橋梟首歲五十計人數五十程預ル

南條中務

一加藤左馬内川村權七弟士三十計之頭歲三十計七日

川村齋

一尾張者加賀之親類ニテハ無レ之候是ハ別家也物頭

前田主水

一紀州者

鹽川清右衛門

一清右衛門兄弟

鹽川清兵衛

別格ニ鹽川一黨二十計籠奥熊野之者

大坂一手頭分諸物頭所々討死自害被ニ生捕ニ城ヲ出分有増

慶長十九甲寅歲十一月十九日

一蜂須賀阿波守取ニ穢多村之城ニ從ニ大坂ニ平子主膳人

數千計ニテ守レ之十一月十八日曉蜂須賀阿波守以ニ
一手破レ之大將平子主膳討取阿波守并家來七人兩
上様ヨリ一通宛御感狀頂戴

討死 大將 平子主膳

一同日伯樂淵從ニ大坂薄田隼人爲ニ大將一人數千計ヲ
以テ守レ之石川主殿頭以ニ一手破レ之敵敗軍大將薄
田隼人大坂へ引退

同十一月廿五日

一上杉景勝堀尾山城守城兵大野修理亮子信濃修理人
數ヲ引連貳千計ニテ青屋口ヨリ出信貴野ニテ上杉
人數ト鐵炮セリ合間ニ有川其外モ足入然間足輕セ
リ合計信濃人數兩將被打立引入ル
景勝内黒金孫左衛門杉原常陸兩人ハ
安藤治右衛門一所ニ有テ勤御感狀頂戴

一廿六日朝自ニ大坂今福堤ニ張番ヲ出シ置矢野和泉
以ニ足輕五六十ヲ守レ之此外甲之緒ヲ爲レ縮武者五
六騎看ル佐竹右京大夫先手ノ人數少々堤之陰ヨリ
曉方忍入テ和泉討取ル足輕大坂へ引入ルヲ跡より
二ノ木戸迄附入少々討取佐竹人數討死十五人此内
先手之將滋江内膳家老討死

討死矢野和泉首友川南右衛門討取候

佐竹手へ首數十五討取ル佐竹内梅津半右衛門戸
村十太夫兩人御腰物拜領其外大塚九郎兵衛信太
内藏介黑澤甚兵衛
以上五人御感狀頂戴

一十二月十六日夜丑ノ刻城ヨリ蜂須賀阿波守手へ夜
討翌日小栗又市檢分被レ遣此門小妻口大野主馬持
口主馬以ニ下知一夜討ヲ出ス夜討頭分ノ者若原勘太
夫條々又八畑角太夫牧野牛抱田村輪藏院伴團右衛
門此者共爲ニ頭分ニ侍五十程ニテ罷出ル由右ノ外垣
ヲ破ル者小屋ヲ破者火付少々召連罷出由

元和元年四月廿八日

一淺野但馬守與大野主馬和泉國戰ニ檜井一

討死 伴團右衛門

大野主馬先手之將三人之内淺野但馬守先手植田
主水討ニ取之ニ首十四伏見へ廿九日ニ獻レ之御城
坂下ニ掛ル

同年五月六日

一松平陸奥守松平下總守水野日向守松倉豐後守堀丹
後守本多因幡大和衆桑山伊賀守桑山修理亮同左近
藤堂將監奥田三郎右衛門討死神保長三郎此外大和

衆自大和路河内路へ打越ル自大坂者後藤又兵衛
爲惣大將二組小組頭山川帶刀北川次郎兵衛青野清菴大谷大學植木六右衛門明石八兵衛

石掃部頭渡部内藏助毛利豐前守鐵砲井上小左衛門

同増田兵太夫戰道明寺此時討死

陸奥守手ノ鐵炮ニ當ル後藤又兵衛

討死井上小左衛門

菅沼織部内菅沼權右衛門討取之

同増田兵太夫

首不見

同月同日

一井伊掃部頭與木村長門守佐久間藏人薄田隼人山

口左馬内藤新十郎平塚左助等戰若江

討死總大將木村長門守

井伊掃部頭内安藤長三郎討取ル

同山口左馬

討手不知

同内藤新十郎

井伊掃部頭内八田金十郎討取之

同佐久間藏人

井伊掃部頭内正木舍人討之

同薄田隼人
同平塚左助

二人首不見

五月六日物見ニ出ル

五月七日

一於天王寺表ニ討死眞田左衛門佐

越前少將殿内西尾仁左衛門討取

初勘兵衛後越前ト名ヲ改

御宿越前

越前少將殿内野本右近討取

討死小笠原權之丞

同堀内左馬

同同大和

同同若狹

五月七日於三千帖敷自害渡部内藏助

五月八日

一於三千貫櫓秀頼一所ニ自害

修理惣領大野修理亮

七組之内大野信濃守

甲斐子速水甲斐守

同てき

七組之内

同斷

同斷

同斷

旗奉行

七日敗軍之時旗ヲ不亂城中旗ヲ入秀頼一所ニ自害

野々村伊豫守

堀田圖書助

間野藏人頭

中嶋式部少輔

津川左近

毛利豐前守

同式部

森嶋長次郎

加藤彌平太

堀對馬

眞田大助

高橋半十郎

高橋十三郎

土肥庄五郎

寺町少左衛門

植原八藏

同三十郎

小室武兵衛

以上貳拾六人

女房

中高將監

同半三郎

竹田永翁

荻野道喜

大藏卿

饗庭

あこ

右京太夫

たま

正榮渡邊内藏助母

宮内卿者淨光院殿へ使ニ出ル片梧市正内梅戸忠助

連出ル

京極備中守

七日ニ先手へ使ニ出立歸候得共秀頼公被レ寵候櫓

へ火懸候故立退

同斷

同斷

今木源右衛門

別所孫右衛門

右三人者使ニ出ル別所孫右衛門者後ニ被ニ召出一

今木源右衛門者後加賀中納言召抱京極備中者宰

人ニ而相果ル

始南部家老南部ニ有
不足立退大坂へ籠ル

南部十左衛門

七日ニ落於ニ勢州松坂一日向半兵衛生捕ル差上ル南部被レ下南部首ヲ刎

長曾我部宮内

七日落十日ニ牧方篠之中ニテ被ニ生捕ニ三條河原ニテ梟首

大野主馬

七日落京都ニテ後被ニ生捕被レ刎首

大野道犬

七日落京都東福寺前ニテ被ニ生捕ニ和泉之國堺之者ニ被レ下於レ堺礫ニ掛大野道犬以ニ下知ニ堺ヲ焼ユヘ也城ヲ出ル者

青木民部少

夏之御陣自ニ大坂ニ使者ニ來ルヲ江戸ニ被ニ留置ニ後被ニ召出ニ子孫相續

織田常心

冬御陣ヨリ城ヲ被レ出ル

織田有樂

夏ノ御陣城ヲ被レ出後被ニ召出一

夏御陣城ヲ被レ出 若名左門有樂息

織田雲上寺

七日ニ城ヲ出ル後被ニ召出一

伊藤丹後

同斷

同斷

冬御陣十月八日秀頼より使ニ罷越

同斷

小笠原佐太夫

同斷

同斷

丹羽左平太

松浦壹岐守ニ御預ケ

山川帶刀

大村民部ニ御預ケ

北川次郎兵衛

七日ニ城ニ火ヲ懸出ル

大隅與左衛門

七日ニ城ヲ出ル 天王寺表立退

松田利助

七日ニ城ヲ出ル 天王寺表ヨリ立退

三上半兵衛

自ニ大坂ニ正宗方ヘ使ニ遣留被レ置

和久半左衛門

新參ニ籠七日ニ城ヲ出ル者

根來

田村輪藏院

同

こみちや

同

正徳院

同

治徳院

同

矜長老 相國寺長老

新宮

堀内主水

後ニ被ニ召出

大坂奏者番

伊丹因幡

江原與右衛門

仙波夜討物頭安藤右京進召抱

仙波夜討物頭稻葉丹後守召抱

夜討頭分紀伊大納言殿被_ニ召抱_一今ニ存生

仙波夜討物頭森右近召抱後淺野但馬守召抱

鳴野ニテ鍾水野日向守召抱

道明寺ニテ鍾合永井日向守召抱

道明寺ニテ鍾小笠原右近召抱

同斷

鳴野ニテ鍾ナ合紀伊大納言殿被_ニ召抱_一

同斷

黒田筑前守召抱

宰人ニテ相果ル

蒲生氏郷甥大坂ニテ士大將宰人ニテ相果

酒井讃岐守召抱

加藤左馬内川村權七弟大坂ニテ物頭七日ニ城ヲ出病死

本多美濃守召抱

宰人ニテ相果ル

尾張殿へ與力ニ被_ニ召抱_一

尾張殿與力ニ被_ニ召抱_一

若原勘太夫

牧牛抱

田屋右馬介

條々又八

仙石喜四郎

村上次太夫

武井松菴松菴殿太夫ハ三節森太郎次ニ可入

同儀大夫

山中藤大夫

赤堀五郎兵衛

三浦彦太郎

遠藤八右衛門

小倉作左衛門

増田助太夫

川村齋部ス

渡三郎右衛門若名式部

二本松半齋

松本權兵衛

水野猪右衛門

天王寺表ニテ鍾保科肥後守召抱

毛利豐前家老後松平伊豆守召抱

毛利豐前組尾張殿被_ニ召抱_一病人故宰人ニテ于_レ今存生

(鈴木本)

一性不知槓

同中嶋式部

同大野半次郎

曾我五郎左衛門

齋藤加右衛門

右城中物頭ニテ方々へ有付普人之知ル者記置者也

一駿河興國寺

御譜代衆權現様御代ニ病死子小身繼ニ名字

一下野之内

台德院様御代ニ病死甥信濃守小身ニ而繼ニ名字

家ニ被_ニ仰付_一侍從

一筑後

台德院様御代ニ病死筑後國者被_ニ召上_一弟久兵衛二

田中筑後守

長井傳兵衛

宮田甚之丞

賀古次右衛門初永井九兵衛

青山駿河

竹内雲對

長屋平太夫

大塚勘左衛門

右六人壹廻リ有之者也

諸家名字計被_レ繼分(以下鈴木本無)

天野三郎兵衛

由良信濃守

高

田中筑後守

尾張殿與力ニ被_ニ召抱_一

尾張殿與力ニ被_ニ召抱_一

尾張殿與力ニ被_ニ召抱_一

尾張殿與力ニ被_ニ召抱_一

尾張殿與力ニ被_ニ召抱_一

尾張殿與力ニ被_ニ召抱_一

萬石ニテ繼ニ名字一依ノ無實子一菅沼主殿ヲ養子被

レ遣改ニ田中一追付主殿改易被ニ仰付一久兵衛跡之二

萬石ハ被ニ召上ニ其後知行別格ニ被ニ下置一

一讚岐 生駒讚岐守

子壹岐守代ニ改易壹岐守者御預之内病死其子被ニ

召出ニ生駒主殿壹岐守者土井大炊佐智

先鋒下野衆 後號老甫 皆川山城守

初川中嶋之城守クリ上總殿エ被レ爲レ付台德院様御

代改易大猷院様御代被ニ召出壹萬石子山城守繼跡

大御番頭ニテ相果ル子又三郎モ病死依レ之又三郎

弟七郎五千石ニテ繼ニ名字一

本多佐渡守三男

一下總板本 本多大隅守

台德院様御代ニ不慮之難ニ逢死ル子繼ニ名字一

松平因幡守殿子

一美濃大垣 松平甲斐守

甲斐守子因幡守代ニ小室エ所替被ニ仰付一因幡相果

無レ子跡絶弟佐渡守壹萬石ニテ伊勢尾張長嶋エ被

レ遣繼ニ名字一

一下野宇津宮 本多上野介

台德院様御代ニ改易子出羽守共ニ由利エ御預ケ由

利ニテ父子共ニ相果ル上野介孫出羽守子忠右衛門

使番被ニ仰付一當御代被ニ召出ニ繼ニ名字一

一美濃之内 別所豐後守

台德院様御代改易松平丹波守ニ御預ケ病死子軍平

今號ニ大藏一犬猷院様御代ニ被ニ召出ニ千俵被レ下繼ニ

名字一

一下野佐野 富田左近次男 佐野修理太夫

台德院様御代改易之内病死子兄弟大猷院様御代ニ

被ニ召出ニ今佐野吉之允繼ニ名字一

一出羽最上 最上駿河守

駿河守子源五郎代ニ家中申分ヲ出來源五郎身代御

果シ源五郎子刑部五千石ニテ繼ニ名字一

松平土佐守智

一陸奥之内三春 松下石見守

大猷院様御代亂心相果ル故跡不レ立子加兵衛松平

土佐守孫被ニ召出ニ小身ニテ繼ニ名字一今號ニ加兵衛一

一陸奥會津 加藤左馬助

大猷院様御代ニ左馬助病死死子式部繼ニ跡同御代會

津指上ル石見古田兵部御預於ニ石見一壹萬石被レ下

病死其子内藏助壹萬石ニテ繼ニ名字一

一出雲隱岐 京極若狹守

台德院様御智大猷院様御代若狹ヨリ出雲國國替

被ニ仰付ニ追付死去無シ子甥刑部於ニ讃岐ニ五萬石播磨立野ニテ一萬石都合六萬石ニテ繼ニ名字ニ刑部相果今刑部子備中守

一越後村上

堀 丹後守

大猷院様御代ニ病死十萬石之内ニテ參萬石打出シ二男七郎五郎ニ出ス其跡參萬石七郎五郎子丹波守ニ被レ下繼ニ名字ニ丹後守十萬石之知行者上惣領式部病死孫丹後モ病死十萬石被ニ召上ニ

一備中之内

池田 備中守

大猷院様御代病死子出雲守繼ニ跡ヲ一 大猷院様御代ニ是モ病死但備中守死去之後依レ有ニ出入ニ不レ被立レ跡出雲守子修理小身ニテ繼ニ名字ニ御小姓組カ御書院カノ組頭

一播磨安栗

池田三左衛門子
松平石見守

家中公事ニテ大猷院様御代ニ身代果ル子數馬壹萬石當御代被ニ召出ニ繼ニ名字ニ

野田菅沼初長嶋後膳所

菅沼 織部正

一丹波龜山 大猷院様御代ニ病死織部子左近繼ニ跡早世依レ無

レ子弟主水七千石三男越中守三千石都合一萬石ニテ繼ニ名字ニ

一伊勢長嶋後三州荊屋 松平能登守

大猷院様御他界之砌亂心當御代ニ身代果ル松平隱岐守ニ御預ケ子後被ニ召出ニ繼ニ名字ニ

一讃岐丸龜

山崎 甲斐守

大猷院様御代病死惣領志摩守繼ニ跡ヲ一子虎之助志摩守跡ヲ被ニ仰付ニ八歳ニテ早世甲斐守二男志摩守弟勘解由五千石ニテ繼ニ名字ニ

一播磨赤穂

池田三左衛門四男
松平右近太夫

黑田筑前守智大猷院様御代ニ亂心ニテ相摸守ニ御預ケ病死當御代ニ子被ニ召出ニ繼ニ名字ニ

一下總佐倉

堀田 上野介

松平隱岐守智當御代ニ亂心佐倉被ニ召上ニ弟脇坂中務ニ御預ケ今度所替依レ被ニ仰付ニ今酒井修理太夫ニ御預若狹ニ被ニ遣子豐前ニ一萬俵御合力被ニ仰付ニ繼ニ名字ニ

一上野安中

水野 備後守

當御代ニ病死其子信濃亂心ニテ安中被ニ召上ニ水野隼人正ニ御預子千俵之御合力ヲ被ニ下置ニ下屋敷ニ被ニ召置ニ信濃守ハ松本ニテ相果水野監物智一美濃之内 德永左馬

台德院様御代依_レ爲_二不作法_一改易御預之内死去後
子下總守被_二召出_一千俵御合力被_レ下繼_二名字_一

無跡大名衆

一水戸

武田御萬君

穴山梅雪娘之腹梅雪者勝頼姉_レ聲水戸ニ被_レ遣十五
歳ニテ御逝去此御跡頃日之水戸中納言殿ニ被_レ遣
御萬君御養子分也御萬君之衆不_レ殘水戸中納言殿
頼房卿ニ被_レ爲_レ付

一尾張

薩摩守殿

井伊兵部少輔智薩摩守殿御跡者右兵衛督殿被_レ爲_レ
繼薩摩守殿衆不_レ殘被_レ爲_レ付尾張大納言殿義直卿
一越後

上總介殿

松平陸奥守智御母公者御チャア遠江金谷之人也上
總介殿者二子ナリ上總介殿先ニ誕生候跡ニ生ル、
ヲ惣領ト致ニ依テ上總介殿ヲバ皆川山城守方エ被_レ
遣信州川中嶋ニ置申候最前之御子御勝君ト申ス
追付御遠行故川中嶋ヨリ上總介殿ヲ御取返權現様
御子ト號御幼名御辰君ト申ス辰之御年故也權現様

御代ニ改易

一駿河甲斐

駿河大納言殿

織田兵部少輔智宗源院様御腹也台德院様御代ニ改
易以後從_二甲州_一高崎エ遷御被_レ成於_二高崎_一御自害

一武藏忍

菅沼小大膳

遠江衆忍之城主御譜代衆權現様御代小大膳相果ル
一遠江横須賀
大須賀五郎左衛門

御譜代衆權現様御代ニ病死

一甲斐國

平岩主計頭

御譜代衆權現様御代ニ尾張大納言殿エ被_レ爲_レ付
於_二尾州_一病死

一丹波篠山

前田主膳正

太閤之時分町奉行德善院子也權現様御代ニ亂心死
ス

一攝津國之内

伊藤掃部頭

權現様御代ニ別所孫次郎誼諱ニテ相果ル
一越後之内
堀久太郎

本多美濃守智權現様御代ニ改易之内死去

一因幡伯耆

中村伯耆守

小姓ニ被_二突殺_一相果ル

初學

一越後

台德院様御代改易之内病死

村上周防守

一伊豫宇和嶋

富田信濃守

權現様御代ニ坂崎出羽守ト及ニ公事ニ改易岩城鳥居左京亮ニ御預之内病死

三浦監物

御譜代衆本多佐渡守智台德院様御代ニ病死

一信濃松本

石川玄蕃頭

御譜代衆伯耆守子權現様御代改易毛利伊勢守ニ御

預之内病死

一駿河沼津城主

大久保次右衛門

御譜代衆權現様御代病死

一伊勢之内

關長門守

權現様御代改易之内病死

一安房

里見安房守

大久保相摸守智權現様御代安房ヲ被ニ召上ニ於ニ豊後ニ一萬石被ニ下置一病死

一出雲隱岐

堀尾山城守

台德院様御代ニ病死

一安藝備後

福嶋左衛門大夫

牧野右馬允智台德院様御代ニ改易一萬石ニテ信濃飯山被ニ遣一説三萬石病死于備後先達而病死

一肥後

加藤肥後守

蒲生飛驒守秀行智大猷様御代ニ肥後國ヲ被ニ召上一萬石ニテ出羽庄内ニ被ニ遣病死

一美濃加納

松平飛驒守

台德院様御代ニ早世

一陸奥會津

松平下野守

氏郷之孫權現様之御智秀行之子然故權現様之御タメニモ御孫藤堂和泉守智台德院様御代病死依ニ無

子弟中務少輔伊豫松山ニテ二十萬石被ニ下繼ニ名字ニ藤左馬智病死是モ無ニ子始左京

一大和高取

本多因幡守

台德院様御代病死板倉周防守智

一石見濱田

坂崎出羽守

台德院様御代亂心自害

一上野之内

成田左馬亮

台德院様御代病死

一下野西方

藤田能登

御家ニ來

一大和郡山

簡井主殿

大坂冬御陣之時郡山明退其後病死

一丹波甲斐原

織田上野介

岡部美濃守聲大猷院樣御代病死

一遠江内本坂

水野遠江

水野日向守弟若名八十郎台德院樣御代ニ相果ル雖

有子跡不立

一播磨姫路

本多中務少輔

台德院樣之御智無子息女ハ松平新太郎ニ嫁台德

院樣御代ニ病死

池田

一播磨一國

松平左衛門佐

權現樣御孫池田三左衛門惣領大坂兩御陣之勤其後

死去

一甲州郡内

鳥居土佐守

駿河大納言殿ニ被爲付大猷院樣御代病死

一大和之内御所

桑山伊賀守

大猷院樣御代子加賀守病死

一一萬石

成瀬伊豆守

成瀬軍八次男大猷院樣御代病死

一一萬石

宮城主膳

松平豐前守聲大猷院樣御代病死

一豐後之内府内

竹中采女正

大猷院樣御代長崎奉行被仰付ル、町人ト公事仕

切腹

一美濃之内

大嶋久吉

台德院樣御代病死

一肥前嶋原

松倉豐後守

大猷院樣御代子長門守領分嶋原ヨリ吉利支丹起ル

因茲吉利支丹御退治以後長門守江戸ニ被召下一

於江戸ニ御成敗

一豐後府内

日根野織部正

當御代病死

一丹波福知山

稻葉淡路守

松平下總守聲離別大猷院樣御代亂心自害

一肥前唐津肥後天草

寺澤志摩守

大猷院樣御代病死同御代子兵庫於天草吉利支丹

依起天草ヲ被召上ニ耻之思ケルカ自害ス兵庫頭

者岡部内膳正聲

一遠江久能後同國掛川

北條出羽守

當御代病死

一但馬豐岡

杉原伯耆守

大猷院樣御代病死子帶刀繼_ニ跡ヲ_一養子吉兵衛早世

一石見濱田

古田兵部少輔

大猷院樣御代病死

一出羽最上之内

酒井右近大夫

大猷院樣御代領地ニテ百姓右近大夫不足有_テ之如_ニ

一揆ノ徒黨ニ百姓ヲバ皆張付ニ被_ニ仰付ニ五千石之處被_ニ召上ニ五千俵被_レ下大猷院樣御代病死

酒井長門守

平常不作法其上依田源藏ト成_ニ不届_一申分仕出因

レ茲兩人トモニ改易領地五千石

一伊豫之内

一柳監物

當御代不作法故改易松平加賀守ニ御預ケ

一丹後宮津

京極丹後守

伊達陸奥守聲當御代親安知隱居之後丹後守惡事ヲ

以書付公儀ユ訴指上ル依_レ之丹後國ヲ被_ニ召上南部御預ケ子近江守ハ藤堂大學頭ニ御預ケ

一肥前嶋原

高力左近

仕置惡ニ付當御代改易松平陸奥守ニ御預ケ子伊豫

守者立花左近ニ御預ケ

嶋原一揆松倉記

寛永十四年丑十月中旬、肥前國高來郡嶋原松倉長門守領内有馬と肥後國天草との海上わづか三里餘有之に、八嶋と云嶋有て、家數二十軒計有之、然るに天草之内寺澤兵庫頭殿領内之吉利支丹此嶋へ通ひ相談す、其比天草甚兵衛が子大矢野四郎僅十六歳にて、若年なりといへども、諸人に勝たる器量有て、種々術をつくし候事仙術の如し、然る故に諸人尊敬す、天草の吉利支丹等有馬の者を密に呼寄、彼次第を三吉角内兩人へ進め、四郎己が家の秘密を傳ふに依て、此貳人又其旨を諸人にすゝむる故に、三吉角内を皆人尊敬する事四郎に同じ、右之次第を丑十月廿二日嶋原へ告來る、長門守家臣田中宗夫岡本新兵衛多賀主水驚令ニ相談、足輕頭松田兵左衛門に申含、目附多羅尾奎右衛門侍以上拾人其外足輕以下申附、船にて遣はす、廿二日戌刻彼所に着船して、兵左衛門奎右衛門計を同道し、殘侍共は船端に留置、兩人三吉角内方へ潜に行見る處に、如レ案男女寄合居たる故、三吉角内

を呼出し、則時に搦捕といへども、一人も手さす事なし、妻子等迄船に取乗せ、廿三日嶋原へ召連來る、跡にて又思ひ／＼に村々所々にて寄合を始むるを、其所預りの代官聞出し、次第會合之所へ行打擲致し、繪像を破り追放ス、玄かる所に有馬村之代官林兵左衛門本馬九郎左衛門所々にて寄合を見附、右之通に致し、又寄合如レ此と注進するに附て、兵左衛門計行追散し、繪像を取歸る所に、會合之者如何思ひけん、追懸兵左衛門を討殺すと、其まゝ村次に南は、口津村加津佐村小濱村串山村水石村、北は、有家村堂崎村布津村深江村木場村へ觸遣はす様は、此方の代官林兵左衛門を只今打殺す、此上は宗門一揆一味致し、村々代官寺社共に討殺し、破却すべき由申遣はす、依レ之一揆一味して一同に起る、此儀を加津佐村庄屋助左衛門方より代官山内小右衛門安井三郎右衛門方へ告知するに附、一揆共に忍び山道を行所を、一揆之奴原所々案内は知たり、手合をして追懸、小濱と串山村との堺にて追附渡合ふ、小右衛門三郎右衛門手本へ寄來者三人切伏追散し、片原の小家に引取、一揆之奴原何程來る共討るまじとて小楯を取居たりしを、

敵是を見て、里より鐵炮を取寄せ、貳人共にあへなく打殺す、水石村の代官高橋武右衛門ハ、一揆起たる事も不知して居たりしを、一揆の奴原家々に火を懸、火事といふ、武右衛門聞附出る所を寄合討殺す、此武右衛門ハ、三會村で討死したる高橋彌次右門爲には惣領也、最前有馬にて討れたる林兵左衛門相代官本間九郎左衛門方へ庄屋長助來て、唯今寄合兵左衛門殿を討殺し候、急ぎ落給ひ可然と申に附、九郎左衛門其儘濱邊より即時に嶋原へ歸り、右之子細を田中宗夫岡本新兵衛多賀主水へ語る、依之相談して、此上は村々にて頭立たる者を押寄せ、急からめ捕、船にとり乗せ可來とて、新兵衛主水を先として、船二三十艘に思ひく取乗て、用意之道具とては棒^キさばかり繩、常之吉利支丹と心得て、武具の用意はなくして我先にと出船す、桑野孫兵衛小崎伊兵衛若村五右衛門一艘に、右之船共一同に出船、嶋原の港より有馬へ陸も海上も五里浦傳也、安德村深江村布津村有家村有馬村迄の浦々の堂寺に一揆共火をつけ、時の聲をあげ夥しく、海上は唯滿月のごとし、有馬村之港近く寄候時、有馬村の代官舩嶋久太夫庄屋一人召連、

一揆共に忍び小船にて出向ひ、岡本新兵衛多賀主水に申けるは中く陸へは上ゲ申事にはあらず、磯端に數百人鐵炮を揃待かけ候、一揆共威勢は嶋原の城をも責取べき舩に見へ申也、急ぎ立歸り兵具を着し、其上にて兎も角も指圖可然と申す、此儀尤なりとて、新兵衛主水それより取て歸し、實上刻嶋原へ歸着、富岡彌左衛門岡村源太郎跡船にて、先船に追着んとて、有家と有馬之出先迄來て、陸に時の聲聞へければ、扱は先船の者共早此所に揚たりと心得、磯へ船を押寄て、富岡見分せんとて一人飛揚とかく致内に先船は有馬の方より歸來る、富岡は石原岡村船を沖へ出し、先船一同に嶋原へ押戻す、富岡敵に押へられ、船は沖へ出す故、濱邊まで敵を忍び深江村迄來て、庄屋五郎兵衛方へ行、此一揆之舩心得がたし、其方などは中く一揆一味に成まじ哉と云、五郎兵衛申は、此上は兎角之儀難申、急ぎ御歸可然、中く一揆共歸し申間敷也、御使之由申候而、送り候者指添可申、人々を添右之次第を雖斷、一揆之奴原何之使討捕や者共とて打てかゝるを、一人伏餘多に手負せ切廻を、心得たりとて取はさみ、鐵炮にて討殺す、此富岡が

妻子町屋敷に居る夫は討れ城へ籠べき事を、敵近きゆへに籠事不成、召仕之下人は三會村宇土の者なれば、在所は心易き所也、在所へともなひ歸んと申處に、思ひの外相違して、一揆にかへらん、千本木之一揆妻子と一ツに卷添に成て、嶋原之城へ籠り、明る年二月落城、二日前廿五日濱邊へ下り、礮の藻草を取牀にて、細川殿濱手の仕寄に親子八人かけ込、萬死を遁無恙歸たるは是也、さて右に深江村一揆一味に成由之注進安徳村より告來、依之城中之侍半分ハ、三會村一揆一味に成儀も無心元事なれば、可走向跡に誰々可殘とも難計とて、岡本新兵衛惣人數之中を左右に乘分ケ、右之分ハ深江村へ可向、左ハ跡に残り宗夫一所に城を可守として、則新兵衛主水大將として、廿六日卯之刻嶋原を立て、二里餘之道を過、辰之刻に深江村に押寄る、敵も諏訪と馬場栗木林之前なる廣場へ出會、道城を前にして箕の手にそなへ居敷て待請たり、味方ハ行懸りに道堀を越、敵之合三十間計にして互に鐵炮を一放ツ、打合申、後に一揆の中より三四人懸出此方へかゝる處に、桑野孫兵衛一番にかけ合、なた長刀をもちかゝる敵壹人場中にて突留る、北村市郎

左衛門脇田勘藏小崎伊兵衛見之、其後敵味方入違、爰を専途と相戰、一揆之者共雖働即時に三四拾人討るる故、難堪く引退く、味方ハ競懸て敵を數の中へ追こみ、思ひ／＼に追懸討留る、殘敵ハ四郎左衛門屋敷へ取籠る、此屋敷構表之石堀高サ五尺計、其上に柳を植、前は堀入口違虎口也、此所へ岡本新兵衛多久市左衛門江間十兵衛先達而責入る所を、石垣の上藪之内より見下し、石を以て新兵衛市左衛門を打すゆゑ、早速乃如く打破といへども、加もひるまらず立上り進て懸る、敵も大勢にて是を防ぐ、味方にハ新兵衛を始、同庄兵衛多久市左衛門伊藤半右衛門須賀喜太郎白石市郎右衛門坂田六左衛門桑野孫兵衛山後次兵衛同吉左衛門、其外にも大勢有て、良久せり合、遠きハ鐵炮、近づくは鎧にて敵貳十人餘討取、殘は追込兩品にて敵五拾六人討取、深江村兩度之通合は是也、討死之侍進藤與兵衛、手負竹村新右衛門船田兵右衛門中西甚五兵衛鐵炮手負萩野馬之助、右何も鎧長刀疵、深手、其外石手鎧手淺手負之者數多有之、此時新兵衛申さるゝは、十分之仕合也、追散したる敵に目を懸、日を暮しては惡かりなん、勝之中の緒

を固とは此節なり、早々引取べきとて、壹人も不_レ殘ま
とひ、末の下刻嶋原之本城へ引取也、右深江村より布
津村へ注進するは、今朝嶋原より被_二押寄_一大勢討取、
唯今四郎左衛門屋敷へ引籠候を續て責寄、すでにあ
やうくみへ候、急加勢に可_二馳參_一由觸遣はす、依_レ之
布津村より堂崎村有家村有馬村其次々へ右之次第觸
遣はす故に、追々馳集て深江村へ馳來るといへども、
引取跡へ來て無詮一揆共こらへかねて、嶋原勢も昨
日よりのつかれ貳里半の道を引取共、いまだ半分に
はよも過じ、いざ追懸よや者共逆、跡を慕ひ馳來とい
へども、半時計以前にあぶなげなく引取也、一揆の奴
原申の中刻に今村口へ押寄來り、龍洙院櫻井寺二
箇寺に火を附、白地町より焼立、南の追手へ責寄、門
の扉二尺計切破る所を、山後治兵衛同吉左衛門青
木庄七池田半之助伊藤半右衛門須賀喜太郎多賀甚
三郎木村彌平次等居合、きびしくふせぎ居たる所
に、松明に火を附、門番所の窓より内へ投入焼立んと
する所を、山後次兵衛同吉左衛門、林治部右衛門、三
人門番所へ走入て、松明を取打消す、其後門の破より
吉左衛門鎧を突出すを敵打折、心得たりとて櫓へ走

り上り、鐵炮にて打殺す、敵是に難儀して引とるな
り、城中惣曲輪西の門之南二三拾間石垣塀共に其節
崩たる所有_レ之、敵常に案内は是を能知たれば、此破
無_二心元_一とて、城中大勢寄合相守り、敵も間近くひか
へてかゝらず、桑野孫兵衛は此所に詰る也、右の節城
中味方に馳集る在所、三會村東空閑村大野村湯口
村多比良村土黒村、此代官近藤源左衛門岡崎傳左
衛門瀬戸七郎右衛門足輕頭長屋助左衛門、此四
人爲_レ頭、外に花房七郎兵衛生熊助之丞同十太夫岡
村源太郎、以上八人西之門先敵押_レ之爲に、右村々之
人數道具を持せ遣出向ひ、敵合三町計にて生熊助之
丞を目がけ四五人かけ出、場中にて渡合、助之丞働と
いへども、相手大勢なれば突立られて討死す、長屋助
左衛門瀬戸七郎右衛門、生熊が子十太夫續て懸合、
助之丞を討たる敵之内貳人討取、依_レ之敵は跡へ引退
て、如此せり合村人討れけれども、大勢の敵は懸りも
せず、鐵炮も不_レ打、然處に味方に備たる三會村之者
共、敵へ懸るふりして跡へ向ひ、鐵炮を打懸る、山手
の一揆と一所に馳加る、是をみて味方に備へたる村
村の者共我先と在所の方へ逃行、依_レ之侍共早々城中

へ引籠る、廿六日も暮て夜に入れば、新兵衛諸士に向て申されけるは、敵四方に扣へ町家不_レ殘焼拂ひたり、何方へ責寄べきも難_レ計、面々屋敷塙裏を堅め、敵同意に火の用心可_レ懸_レ心、中間召仕之下人男女共に敵方可_レ有、無_レ油斷_レ心を附、持口を可_レ堅と申附らる、何も此儀尤也とて持口を相定、夜中共に鐵炮を打せたり、桑野孫兵衛小崎伊兵衛兩人權助門より辻も藏左右七八間を守る、湯江村多比良村之者共在所迄逃行て、其儘在所に居たるは、一揆同前也とて、夜明方に味方へ參、桑野孫兵衛見て聞届、庄屋年寄百姓人質に取て、健成者六十人留置、籠城之内鐵炮を打せ所々を守る也、惣而嶋原之百姓者餘國に替り常に鐵炮を能打者也、小崎伊兵衛事は翌廿七日年寄衆手前にて物書とて呼れて、桑野一人ニ而勤る、十一月に山内右馬之助來、堀九兵衛石原源助追手先町裏に藏屋鋪有_レ之故に、貳人共に此所に住居す、一揆起敵守るを聞て、兎角して城へ可_レ籠と妻子其儘船に乗せ、折節九兵衛病氣にて肩腰も不_レ立けるを、源助立歸、九兵衛を肩に引懸、船場へ行處に、火附之一揆跡より追懸る、源介是を見て惡き奴原哉とて、九兵衛をおろし置

渡合、敵貳人切ふせ、殘敵を追散し、又九兵衛を肩に引懸船場を差て行處を、敵追懸跡よりな長刀を以て源助を薙倒す、依_レ之貳人ともに討れたり、妻子は是を見けれ共、足弱なれば、すぐくと船を沖へ出しけり、又藤室甚吉は有馬村の定役人にて彼所に住居す、此忤加兵衛は勘定役人にて嶋原に住居す、一揆起りける故に、親事無_レ心元とて、廿五日之夜陸路を通有馬村へ行處を、布津村にて一揆に取卷れ、加兵衛働といへども、敵大勢なれば寄合討殺す、親甚吉をば所の者案内をして、山越に嶋原へ歸る、妻子は在所の躰を見合可_レ送とて、甚吉計廿六日辰の刻嶋原へ來るといへども、一子嘉兵衛は布津村にて討れ、其外妻子は敵に取込て爲_レ生甲斐なしと悔みけり、同廿七日廿八日兩日之内に、足輕中間家中召仕下々迄逐_レ穿鑿、一揆一味之者共百四十一人成敗する事、家老役事早々能き所に心附、無_レ油斷_レ故に嶋原籠城無_レ恙と、家中面置置作法を感じしたり、今度一揆初發之次第并深江村へ嶋原より押寄討散したる様子、勝家留守居田中宗夫岡本新兵衛多賀主水三人方より江間十兵衛を以て深江村より歸、申之上刻出船爲_レ致江戸へ遣し、

同刻に委細豊後府内御目附林丹波守殿牧野傳藏殿注進し、御加勢を願、御兩人之御返答に、加勢之儀達上聞、重而上意之御下知狀を以可被爲御沙汰之由被仰下、依之數日徒に送る殘念之至是也、御目附御兩人此時御働あらば、一揆の奴原原之城へ取籠事は難成事ならんと、松倉家中にては申也、水石村半分は南有馬村之一揆にくはゐる、庄屋大藏さる取て、代官高橋武右衛門を儻寺へ火をつけ、火事と云に附出會たる所を、鐵炮にて討殺す、相庄屋治右衛門は一揆に不成者共の足弱を先にたて、水石坂を押上ぐ愛津原へ引取、健成もの共には敵を押へさせ、坂下に殘置、庄屋治右衛門門愛津へ走行、代官横田長兵衛新甚左衛門兩人へ右之次第注進する、横田新心得たりとて、則時に預りの村々へ弓鐵炮鎗長刀有合次第之道具手々に持、急ぎ可參旨觸遣すゆへに、山田村守山村野井村の者共即時に愛津へ馳來、依之横田新右之人數を召連坂口へ押寄せ、庄屋治右衛門愛津之庄屋大膳を先にたて、水石村へ押下し、水石村之町所焼拂はせ引取、坂之上に敵押之人數殘置、味方之來る百姓之足弱共敵近き所に置事無心元とて、敵の方

より五六里隔たる山田村へ遣置故に、北内之方無危事なし、冬津村より嶋原へ道八里、火急之事なれば、相談も不成、横田新兩人之才覺を以如此也、此兩人共に常之領地仕置心得有之者也、嶋原の城より戊亥之方三會村之内木崎に納米兵糧米有、此所へ道一里餘有之、かくて十一月十二日に兵糧米取に遣はす、依之爲押足輕頭高畑次郎太夫松田半太夫高橋彌次右衛門佐野惣左衛門相添、人々には田中藤兵衛金木善兵衛金澤九郎三郎入江與右衛門小幡勘之進、三會村代官林治部右衛門進藤源左衛門目附横山三九郎以上侍十二人、雜兵二三百人敵を守、場所は杉谷村之西清水の出る所宇土といふ所、北面之臺廣みに備る、右者木崎村には、水石海道とて谷道の如し、左は宇土山千本木に續く山也、谷道有、向は江利といふ在所、三方共に林也、東は河原にて流あり、何れも三會村の内也、折節寒氣甚敷、依之明屋へ入て寒氣を防く、雜人は物取に行最寄、兵糧取に來るにも別條なしと油斷の所を、敵見すまして、宇土山に敵の方より物見を置、相圖を定兩方の谷道潜に回、江利村より小勢にて三方一同に懸る、味方はを不知、亂防之

者はを見て、我先にと逃來る、備まばらにて下知をも不聞、周章謀計にて、我先にと逃る、高畑次郎太夫高橋彌次右衛門入江與右衛門、此三人は場を不_レ去討死す、其外の者の追立足に成り引退、佐野惣左衛門は組之者に鐵炮一放し_{（音）}打せ、河原の方へ引取、右之備惡敷、此方より物見を可_レ置所に、不_レ置して、油斷を敵に知られたるもの也、此一族立籠_{（音）}千本木は、嶋原城より西山の麓道一里餘、上木場は、未の方道貳里、中木場は、巳午の方道一里餘にて輪の如し、要害能構にて楯籠り、嶋原山を中にして、千本木へかゝれば、上木場より切かゝり、中木場の敵はかな藏へ山越にかゝる、誠に長蛇の備とも可_レ云所にて、小勢にては三箇所一度にふせぎがたく、いたずらに數日を送る、玄かる所に一揆共相談には、天草の城を責取、長崎へ押寄、使を立、一宗門弟に不_レ成ば、四方より焼討にすべし、一味同心におゐては、嶋原之城を責取、天下を引請_{（音）}、幾年も我儘に致す物ならば、天下みな門弟に可_レ成と相談する之由、右之次第嶋原より府内御目附兩人へ之_{（音）}注進、十一月九日未之刻於_{（音）}江城_{（音）}言上之由遂_{（音）}上意、長門守印時に御暇を被_{（音）}下、同日子之刻江戶發足して、同十五

日卯之刻に大坂に馳着、即時に出船して、海陸日數十六日に至る、同廿四日嶋原へ歸城す、供之面々武藤七兵衛内藤瀬兵衛井上次左衛門西川三右衛門富岡八左衛門北村文右衛門時枝宇右衛門石井權之丞平野八郎兵衛中條傳三郎、以上三十人、其比茶壺爲_{（音）}奉行、宇治より大町權助稻垣權太夫岡村新助江戶へ下る、駿州宇都谷にて長門守に行會、大町、岡村貳人は取て返し、供の人數に加る、稻垣御直に江戶へ下る、さて又南都春日の神職野田次右衛門は、松倉家代々宿願之好み有を以、勝家在江戶故下り居合せたり、是非此度供して嶋原へ下り、數年の厚恩を報じ申さん、殊更先年大坂御陣の時も、私亡父前豊後守殿御手に屬せし吉例有、其時不_レ殘歸城ましくて、于_{（音）}今御家繁昌、旁以供之人數御召加可_レ給と所望す、始終の存命尤至極なれ共、今度之儀は、片時も急ぎ、嶋原へ下着する事可_レ爲_{（音）}本意、其上從_{（音）}公儀_{（音）}御傳馬十匹、乗物壹挺之御朱印、此外者曾而以不_レ成儀也、延引可_レ然と被_{（音）}申進、無念におもひ、相州戸塚迄勝家に先立て待請、是非に無_レ構供に交て奈良をも餘所に見て、直に大坂へ馳着、長門守同船にて嶋原へ下着し、一揆楯籠城責口方

方にて甲斐々敷働く、板倉内膳正殿眞の元日討死の時節近出て、内膳出て扉下にて働く、皆人は是を感じる故に、石谷十藏殿より證文二通、板倉主水殿より一通給_レ之而所持す、廿四日に長門守下着、其儘千本木に籠居る一揆を可_レ責とて、物見を遣はす處に、城主の着岸を聞、有馬村の古城を取立て籠城す、故に長門守も十二月八日に有馬表へ出陣す、

十二月四日、爲_二上使_一板倉内膳正殿御目附石谷十藏殿神代_レ御着、此所鍋嶋信濃守殿領内也同日嶋原へ御越、領分御順見、其儘神代へ御引取、翌五日嶋原へ御越、道三里半也、同八日有馬へ御出陣、

十二月五日、鍋嶋信濃守殿人數、同紀伊守殿同甲斐守殿兩大將にて嶋原へ押來る、今村に野陣して、翌六山手を押給、松倉人數ハ濱手村中を押、鍋嶋殿家老諫早豊前は、一手にて愛澤村より水石村越に南へ廻りて、口津村より有馬へ三陣一所に、十二月十日巳刻に原之城へ押寄、先矢合之鐵炮を放、寄手の方よりも早乗と心得間、近く寄る者共大勢手負死人百人に及べり、鍋嶋殿の足輕城中へ鐵炮を打懸る時、何とかしたりけん胴亂に火を入、皆々が胴亂に火移り、大勢之者

共身が火を附、消兼て水田へ轉び入者有て、彌上に成重り、中ノ取亂たる事也、上使是を見給ひて、即時に踏破る事難儀、各引取て向陣を張べき旨指圖に依て、鍋嶋殿大江口濱手より北へ小屋を取、松倉は北岡口濱手より先達而三之丸堀切近く仕寄近附築山を築、鐵炮大筒石火矢を晝夜無_二懈怠_一打懸る、鍋嶋殿にも追附、仕寄近附築山をつかせ、大筒小筒無_二懈怠_一被_レ爲_レ打、十日より十五六日迄は鍋嶋殿、松倉殿兩人數にて勤る也、十一月十二日、此兩日に有馬玄蕃頭殿人數、同兵部殿大將にて有馬表へ着船す、依_レ之持口數間之事、百九拾間、大江口濱手より北海迄、番船共に鍋嶋殿三十六間、松倉殿百四拾六間、有馬殿北岡口濱手より西南之持口、松倉持口、有馬殿は鍋嶋殿と松倉との間也、此三頭とて丑十一月より寅正月中旬迄晝夜のわかちなく勤る也、立花左近殿十一月十四日十五日兩日に人數着船有て、後陣にひかへ給ふ、有馬殿侍等築山をつき可_レ然とて、上使より之御指圖にて則寄合、有馬殿立花殿松倉人數以築立也、十二月十九日に上使より御指圖には、寄手ときの聲を揚て、城中よりも同く聲を合、少も周章たる氣色は

見へざりけり、翌日廿日相圖の如く鍋嶋殿搦手、大江口西の松山を責取らんとて取巻上る處に、爰かしこに旗計を結附置、さまで防者一人もなし、安々と乗取らんと上る處を、本丸より兼而の謀なれば、横矢に打立射すくめられ、手負死人多く、中々乗取事不叶して引退く、然ル處に、立花左近殿一手にて、追手三の丸濱手角より堀下へ忍び押寄せ、堀切迄責寄、一度に懸る、城中の者共兼て拵置く事なれば、少もさはがず堀裏を走、櫓に上リ、腰より上は出して石飛礫を抛、鐵炮にて夥敷防く、寄手又手負死人大勢有、續て責よする事不叶成して、去らみたるを、内膳正殿御覽じて、敵堀の上にて働處を、板倉者可打取、由被仰付、則手々に大筒をかへ出間、近く堀際へ寄打懸る、依之、不殘引籠、其内に立花殿人數も引入、松倉者討死、奥田左京計也、手負同多し、立花殿家來討死骸取殘有之、松倉仕寄先にて在々に附、立花殿へ以使取殘死骸有之御取可然旨斷申遣はす處に、返答に此方之者不殘取壹人も無之由に付、則死骸十七并小旗相印取揃へ、重而立花殿へ遣はす、死骸を取見申處に、御家之相印山伏出立之袈裟十七人共に懸、其上

幡指物に道具有之由案内申に付、内田清右衛門と申立花殿家來内證にて使し來、さて一面目無しとて、則死體請取歸る、此内田清右衛門は松倉家來多久市左衛門爲に弟也、此つなぎはをもつて也、於有馬表上使軍札之次第

條々

一今度吉利支丹徒黨爲御誅伐、嶋原表致發向、家中面々兩人可仕指圖事、

一兩人無下知、取掛儀堅停止、若猥先懸之輩有之者、物頭可爲越度事、

附、喧嘩口論并濫妨狼藉停止事、

一徒黨何茂爲郷人之間、致物具侍之出立不、相替族有之と云共、不撰其品、可被討捨事、

附、自然味方討於有之者、急度可被申附事、右堅可被相守此旨也、

十二月十七日

石谷十藏

板倉内膳正

一今度肥前國嶋原吉利支丹徒黨誅伐被仰附、加勢各可被致覺悟事、

一喧嘩口論堅可_レ被_二停止事、

一猥不_レ剪_二採竹木事、

一宿賃并人馬駄賃錢御定可_レ出事、

一今度嶋原逗留者人返被_レ致_二停止、互歸國以後可_レ

有_二沙汰事、

右之條々可_レ被_レ相_二守此旨也、

十二月十七日

石谷十藏

板倉内膳正

元日刻限之事

一明七ツ時分より人數出、石火矢を打次第、鐵炮打セ

時之聲を上、乗可_レ申事、

一人數出之時、陣中さわがしく無_レ之様ニ可_二申附

事

一大將之外歩立たるべき事、

一相印すみ取紙右之肩に可_レ附事、

一合言葉さいかさいと答可_レ申事、

一從_レ跡鐵炮打セ申間敷事、

一小屋之火を止めし、小屋番堅可_二申附事、

極月晦日

石谷十藏

板倉内膳正

板倉内膳正殿辭世、去年の今日は烏帽子之緒を止め、今年の今日は甲之緒を止め、誠に移り替れる世のならひ、早々打立候、

あら玉のとしにまかせて咲花の

名のみ残すをさかけと知れ

寛永十五年寅正月元日惣責之刻、板倉内膳正殿御目附石谷十藏殿兩築山に燈籠を出し、石火矢を打と一度に時聲を上、三陣一度に寅下刻限をたがへず責寄る、城中よりも、鐵炮鎚長刀石飛礮を打て防ぐ、有馬殿人數卯之上刻に崩る、鍋嶋殿人數も此時崩る、依_レ之内膳正殿是を見給ひて、手廻計にて有馬殿人數を下知し給ふは、引返事なかれ、返せくと宣ひ、惣勢より先達而塀下迄進み給ふ處を、城中より待請見すまして鐵炮を放す、あやまたず内膳正殿に中り、ついに討れさせ給ふ、誠に諸軍を進め一時に責落さんと思召御心底皆人感じたり、此故に同時に石谷十藏松平甚三郎殿鐵炮に中り手負給ふ、松倉人數ハ御定の如く責寄、塀下へ着て働、巳之刻に至まで不_レ退所に、勢之中横切に崩去し事は、黒田右衛門佐殿之足輕共崩れかへりたる故也、黒田殿足輕共は、金のとつは

い甲を着したれば其隠れなし、此頭大堂六左衛門自身は、塀下に附て松倉人数と一所に働、城中より鐵炮打石飛礮を打、箕に火を^{・駿アルカ}あつ灰をまく事降雨の如く、其外鎗長刀を以防ぐ、塀下に附たる者共石を以て甲を打ひしがれ難儀したり、桑野孫兵衛木村新左衛門曾我九太夫山内右馬之助柘植角太夫野中平三郎須賀半三郎山後治兵衛同吉左衛門塀下に着、寅之下刻より巳之刻に至る迄松倉勢働、御目附より可引取旨御下知故、塀下より十七八間引退、竹かふ有之所に相さへ、重而之御下知を請、午之下刻に引取、御目附并諸家之使者窄人衆迄可^ニ見給事也、元日塀下にて、鐵炮以石井勘七爲^ニ討死、依^レ之足輕頭無之故、塀下より引取と、早刻岡本新兵衛被^ニ申渡、右之足輕山後吉左衛門預り、二月廿七日迄召仕、所々にて竹たば柵を附させ、本丸水手門木戸口にて戰、吉左衛門并若黨迄手負引取迄、晝夜無^ニ油斷^一働也、爲^ニ上使^一松平伊豆守殿戸田左門殿正月四日着岸、則原之城御高見有^レ之、御軍札立替る、

條々

一今度爲^ニ吉利支丹徒黨御仕置^一、我等有馬表江被^ニ指

越候間、兩人無^ニ下知^一城責其外之儀被^ニ申附^一間敷候事、

一喧嘩口論停止之事、

一押買不^レ可^ニ狼藉^一事、

一有馬陣中人返停止事、

一於^ニ小屋場^一火之本堅可^ニ申附^一事、附馬取扱不^レ申様に可^ニ申附^一候事、

一今度申渡儀共無^ニ懈怠^一様に下々迄急度可^ニ申附^一事、

一若陣場届來諸窄人於^レ有^レ之者、其家中之者同意軍法も相背問敷旨申定可^レ被^ニ借置^一事、

正月十四日

戸田 左門

松平伊豆守

諸大將着岸に付、同月八日九日より中旬迄に仕寄小屋場持口高割にて替る間、數之覺、

一九拾間^{北岡口濱手仕寄場築山海番船有之松倉方より}

細川越中守殿

一拾九間

立花左近殿

一七間半

松倉長門守殿

一三拾九間

有馬玄蕃頭殿

一四拾間

鍋嶋信濃守殿

一貳百間

惣間數、三百九拾五間半

知行高、

後に寺澤兵庫頭殿、天草支配埒明、有馬に渡海有之而、黒田殿、鍋嶋殿兩將之間、仕寄を附廻、思ひ／＼に井樓竹把を附寄給ふ、北岡口三之丸、地形高くおのれと坂なり、立花左近殿仕寄場より寺澤殿仕寄場迄は深田、黒田殿方は鹽濱也、寺澤殿持口左右深田鹽濱にて場廣く、右之外諸將近々着岸にて、有馬村之内須川より大江迄、取巻陣屋を構置給へ共、有馬口廣き故、大軍なれ共、有馬村之内計にて、他郷へは無構、大江荒川より口津村堺迄、三分一は有馬村之内明き所にて有、十一月上旬より明る三月上旬迄、拾貳萬餘ノ軍勢入込、小屋道具薪等伐取れ共、有馬山盡る事なし、持口より井樓を上て、仕寄鐵炮石火矢を、晝夜のわがちなく打掛、井樓より城内を見下す、依之城中之者俄に土塀を築、通道之高き所は堀切、外より城中之往來不見様に拵たり、上使物ハ石火矢に迷惑すると見へたりとて、平戸より阿蘭陀船二艘三艘漕寄、石火矢を打せたまへども

無別儀、依之落城より前に、此船平戸へ戻し給ふ、

二月廿一日夜、城中より夜討に出たり、仕寄場へ一番に、酒卷伊左衛門桑野孫兵衛馳着、三原茂太夫仕寄場番居るに附、敵夜討に出けり心得よと斷、後追追馳來る、立花殿松倉仕寄場の間、柵之木を夜討共伐を、桑野見附、岡本新兵衛方へ申は、敵跡へ廻りては惡しかりなん、此人數を跡へくり、柵をぬかせざる様にと也、新兵衛尤とて、其通に爲下知、敵柵を切を、桑野懸り見たれども、深田にて中／＼近寄働事難成、白石一郎右衛門瀬戸七郎兵衛桑野三人にて、鐵炮にて敵三人打留、其外鐵炮夥敷打懸たる故に、立花殿竹束には火を附兼て、城中へ引入也、三人之死骸松倉手へ取といへ共、立花殿仕寄元の事故、是へ遣し可然と伊豆守殿御差圖にて、立花殿へ遣ス、此儀伊豆守殿御家來奥村權之丞松倉手之者爲討段、之を知り給ふ事也、其夜寺澤殿鍋嶋殿黒田殿手へ敵討取事貳百九拾八人、内生捕七人、是は立花殿へ遣はす三首共也、鍋嶋殿仕寄場竹束井樓を焼れたり、黒田殿仕寄にては、小屋に火を附焼

たり、寄手は幾重も柵竹束を附廻したれば、漸小屋井樓に火を附焼たる計にて、敵利を失ひて引籠、若敵が火を附たる間に、寄手無心得は、寄手大勢討死せんか危かりしと、松倉家のものいふ、

二月廿七日、出丸へ鍋嶋殿手より乗沙汰を、松倉家來高橋伊右衛門桑野孫兵衛兩人聞附、仕寄場の番所より先へ一曲輪打出し高出之所に、相詰る桑野が組市川平兵衛も居たり、此所へ岡本新兵衛來て、肥前之衆出丸へ乗沙汰無心得見分する所へ、窄人村上久左衛門來て、新兵衛方へ斷、此方より早乗可申哉と云、新兵衛返答には、肥前衆を見合可然と申、久左衛門又申、肥前衆之乗様子を見合せんとて、若乗おくれてはいかと申時、桑野孫兵衛聞て、心得たりと、人に先を懸られては無念成べしとて、其儘馬出しの口玄とみ、竹束壹束引のけ、其間より出、二之丸一番にのり込、高橋伊右衛門も續て乗込、一番桑野と名乗、高橋と續たりといふ、堀のうちへ入てみれば、口六尺計の堀有、桑野は刎越たり、高橋は堀より登る所を鐵炮にて討れたり、堀除の小屋より七八間先に人數だまりと相見へ、廣場へ敵

七八十人計り居たる所へ、桑野壹人懸り、通堀高さ貳尺計之土手を中に置、敵ふせり合、佐野小平次桑野左之跡に續てせり合、其外追々來るは杉山五郎兵衛村田作右衛門奥山茂太夫三浦十右衛門永田三郎右衛門浪人岸野九郎左衛門、右何茂せり合之内、奥山茂太夫永田三郎右衛門討死、杉山五郎兵衛鎧手負引退、村田作右衛門三浦十右衛門、右手負引退、又小者壹人討死、手負三人、殘者は、桑野、佐野、岸野三人にて、良久敷せり合突崩しけれ共、小平次九郎左衛門又手負、此所に留る桑野は敵の跡をえたひ行處に、敵三人取て返し、せり合處へ、鳥山權三郎來て助合、敵壹人突留る、桑野も又壹人突留る、今壹人之敵石をもつて鳥山が面をえた、か打、本丸の方へかけ出し逃行、鳥山が飛礫にて強く打れ當座に絶死いたす、桑野も右手鎧手負たれ共、不痛して其所にえばらく休居たる所に、木村新左衛門小畑勘之進立花七郎兵衛伊知地權之丞多羅尾奎右衛門來るを、一同して本丸下蓮池右之方に休み、何方へ可懸と見合る居所へ、主君松倉右近本丸木戸口へ乗込給ふを見て懸附たり、右近此責

口にして山後吉左衛門に下知しまふは、本丸へ鐵炮を打せよとなり、畏ると申て、木戸口にて持筒を打せ、一軍して山後手負引取ル、細川殿立花殿濱手より押來て、蓮池本丸角の方へ責良久相攫たれば、日暮に及上使より爲_三御使惣人數可_二引取との御下知也、右近是を聞給ひて、夜に入てはいかゝ可_レ乗哉先共と、自身さいを振て、手廻りにも先立て、本丸へ乗込給ふ、桑野も山後も一所に木戸口右の角より乗込、續て伊藤半右衛門内田安右衛門須賀喜太郎野添作兵衛内藤九兵衛來、旗とりかぬるとて、上より桑野取て本丸へ抛入る、右近乗込給ひて、敵にむかひ鐵炮を打せよと、さいを振下知しまふ所を、敵能見すまして右近左之肩根を鐵炮にて打たり、され共場所を去_レ給、伊豆守殿左門殿より再三之御使にて本丸を引給ふ、廿七日日暮に及、諸大將本丸へ乗込給ふは、不_レ見右近壹人也、然ば本丸一番乗は右近にて可_レ有_レ之哉、乗込と其ま、夜中鐵炮打せ相守し也、廿七日夜明曉に成て、宵に附たる柵の木の根をくつろげ、廿八日の早天に其間よりくゝり、敵の居たる長小屋四郎が指居小

屋土手を築廻て、松之丸通口に敵貳人居て、退く者を伺ひ、土手に居たるとせり合、壹人突伏、壹人小屋の方へ逃退く故に、其入口心易く通る也、此入口狹き故に何_レ茂働事成がたし、桑野山後先達而此所之様子は如_レ此、西田角兵衛松原彦左衛門も續て來、長小屋之先廣場に敵數百人爲_三並居、中より三人鐵炮鉈長刀を振てかけ出、此方へ來、桑野孫兵衛、山後吉左衛門出會互にせり合、初手に桑野突伏せたり、二之手は山後突留ル、今壹人は有馬玄蕃頭殿内に何某と申たる人突留る、廿八日本丸にての働、已之刻よりは敵草臥、大方働事なし、刻限にて諸人考可_レ被_レ成事、同未之刻に本丸落城也、

四郎はよし原之中に隠れ居たるを、細川越中守殿家來佐野佐左衛門討取、知行千石給ると也、

右衛門作として生捕に成し者は四郎が家老也と云、右衛門作、元は有馬左衛門佐殿内に有し者也と云、二月十日之比より城内に糧盡たると云也、

松倉長門守人數押之次第

鐵炮貳拾挺	伊吹平八郎	同 廿挺	廣田市太夫
同 廿挺	矢嶋與左衛門	同 拾三挺	佐野惣左衛門

同廿挺 長屋助左衛門

同廿挺 三浦十右衛門

安藤吉兵衛 金澤九郎三郎 山後權十郎

持筒拾三挺 細彌左衛門

同拾三挺 安澤治太夫

石橋三十郎 小國伯順 高橋伊右衛門

弓廿張 熊部小兵衛

長柄三拾本 西尾七郎兵衛

大町權助 中條傳三郎 白井善左衛門

長柄三拾本 桂 六兵衛

本持長柄十七 奧野源左衛門

安藤內藏助 安藤傳兵衛 北村市郎左衛門

玉藥奉行 野口孫左衛門

馬印奉行 西川三右衛門

內田安右衛門 白石市郎右衛門 黑野喜左衛門

小道具奉行 岡村新助

使番 林治部左衛門

平田權左衛門 宮嶋治左衛門 木村新左衛門

步行頭 富岡八左衛門

同 高月太郎兵衛

山利孫右衛門 宮都半左衛門 小川長兵衛

同 太田權右衛門

同 天方又左衛門

岡田角助 伊藤庄左衛門 山後次兵衛

左備頭

岡本新兵衛 渡部勘左衛門 池田權之丞

岩本五右衛門 林六太夫 絹川又左衛門

村田作左衛門 鴨野左藤太 近藤源左衛門

須賀喜太郎 坂部隼人 草野吉之丞

宮嶋六右衛門 堀池義右衛門 佐野長十郎

多賀九郎兵衛 本間九郎左衛門 坂田六左衛門

曾我九太夫 若林五左衛門 岡村源太郎

下司庄八 金澤角右衛門 曾我八右衛門

桑野八兵衛 原兵左衛門 柏尾二郎左衛門

高山彌兵衛 吉良勘太夫 高柳長左衛門

三浦利八 土田右馬之助 多羅尾奎左衛門

川上八右衛門 栗原彌平次 津田清太夫

林小左衛門 酒卷伊左衛門 蘆澤喜兵衛

野瀬又右衛門 石井權之丞

竹村庄左衛門 川勝六左衛門 山本六右衛門

右備頭

多賀主水 吉尾志摩 岡田作左衛門

齋藤忠兵衛

金木善兵衛 大塚齋關 內匠

旗奉行 中澤孫右衛門 鐵炮拾七挺伊藤半左衛門

貳百騎

松倉右近人數押之次第

此五人ハ後ヨリ來ル

鐵炮拾八挺	熊田忠左衛門	同貳拾挺	岡崎傳左衛門
同拾七挺	高橋半左衛門	同拾四挺	榎田長兵衛
同拾三挺	新 甚左衛門	同拾挺	菅 加兵衛
鐵炮拾挺	岸田長右衛門	持筒拾挺	石井 勘七
鐵炮拾挺	多久市左衛門	持弓廿挺	成瀬源右衛門
同拾挺	伊知地權之丞	同拾五本	伊藤市右衛門
玉藥奉行	橋爪作兵衛	馬印奉行	鹽塚加左衛門
小道具奉行	岩田新九郎	步行頭	黒野與兵衛
使 番	横山三九郎	同	奥村權左衛門
同	稻生半兵衛	同	稻生彦之丞

左備頭

田中藤兵衛	足立又八	下司孫太夫
安原半助	野添作兵衛	内藤九兵衛
田中藤左衛門	長谷川平左衛門	武藤七兵衛
井村助兵衛	栢植角太夫	曾我勘兵衛
酒卷治左衛門	山後吉左衛門	木村勘左衛門
吉田次郎兵衛	萩野加助	佐々半左衛門
柴田才兵衛	石原半兵衛	有馬彌平次
千賀角兵衛	山川半左衛門	宇田右馬之助

右備頭

岡本勝兵衛	杉山五郎兵衛	野本平三郎
須賀半三郎	西科才兵衛	奥田左京
村山加助	小幡勘之進	岡田新左衛門
花房七郎兵衛	伊藤又之丞	井上源右衛門
永田三郎右衛門	植木工之助	相良金左衛門
鈴木次左衛門	伊藤清太夫	西尾彌七郎
小川伊織	草野作十郎	今寺庄太夫
山岡茂兵衛	大和田五兵衛	村仁左衛門
稻垣權太夫	是ハ後ヨリ來ル	

侍討死

七拾五騎

林兵左衛門	新藤與兵衛	生熊助之丞
富田彌左衛門	山内小小右衛門	安井三郎右衛門
堀九兵衛	藤室加兵衛	高橋武右衛門
高畑三郎太夫	高橋彌次右衛門	入江與右衛門
井上次左衛門	奥田左京	伊吹平八
柴田才兵衛	下司庄八	千賀九郎兵衛
稻生半兵衛	多久市左衛門	小川半左衛門
石井勘七	榎田長兵衛	黒野喜左衛門
近藤源左衛門	金澤角右衛門	小川長兵衛

酒卷治左衛門 中澤孫右衛門 鈴木次左衛門
岩本五右衛門 村中惣兵衛 永田三郎右衛門
奥山茂太夫 村越次郎兵衛 岸田長右衛門
曾我九太夫 時枝宇右衛門
西尾七郎兵衛

四拾人

侍手負

岡田新兵衛 竹村新右衛門 松田兵右衛門
松田半太夫 中西甚五兵衛 荻野右馬之助
青木庄七 木村彌平次 菅加兵衛
柴田藏人 伊藤半右衛門 針嶋久太夫
長屋助左衛門 成瀬源右衛門 安藤吉兵衛
同傳兵衛 岡田作左衛門 伊知地久左衛門
有馬彌平次 太田權之助 佐野惣左衛門
天方又左衛門 坂田六左衛門 木村助左衛門
佐々半左衛門 宇田右馬之助 松田半藏
伊藤庄右衛門 岡嶋傳左衛門 廣田市太夫
吉良勘太夫 由利孫右衛門 熊田忠左衛門
北村市郎左衛門 井村勘兵衛 白石市郎右衛門
平田權左衛門 武藤七兵衛 福田庄左衛門

小川伊織 池田權之助 三浦十右衛門
安藤内藏介 飯尾彦之丞 渡邊甚左衛門
高橋長左衛門 竹村庄右衛門 同勝太郎
佃彌左衛門 津田庄太夫 佐野小平次
石井權之丞 鹽塚加左衛門 矢嶋與左衛門
伊丹仁右衛門 原久左衛門 小國三郎左衛門
西尾彌五郎 桑野八兵衛 鳥山權三郎
黑野與兵衛 堀池儀右衛門 熊部四郎左衛門
山本吉兵衛 野中孫右衛門 小幡勘之進

以上七拾貳人

隨身之窄人衆

松倉三彌 安宅主馬片岡雲齋
同三郎兵衛 森又右衛門 辻田加兵衛
伊藤喜左衛門 松村二郎兵衛 林九郎兵衛
黑坂新左衛門 伊藤喜助 岩永善六
岩永權左衛門 同助左衛門 富永惣左衛門
同左京瀧川道二 神邊次郎右衛門
田中與八郎 中村彌次兵衛 岡本伊左衛門
細迫權左衛門 平野長助 坂川長兵衛
田中吉太夫 岡村文太夫 村田四郎右衛門

久米大學 蘆川權太郎 平塚勘兵衛

山本七郎右衛門 富田與左衛門 富田左兵衛

桑木與一右衛門 小山權之丞 岡部次右衛門

伊飼權右衛門 永井清右衛門 太田忠左衛門

春田左平次 八十嶋宇右衛門 戶田與一郎

黑柳內藏介 安藤權兵衛 大原源兵衛

伊奈與惣左衛門 細井喜三郎 中野助右衛門

中野惣左衛門 井上治右衛門 豐田久兵衛

三村六郎左衛門 岡谷一郎左衛門 才藤十助

岸上左近右衛門 勝野三郎右衛門 勝野八郎兵衛

林源之丞 福田一郎右衛門 奥平五右衛門

須戶半兵衛 岡田太郎兵衛 伊藤忠左衛門

四宮藏人 山口又右衛門 上原一郎兵衛

稻生作右衛門 林市左衛門 田坂喜左衛門

岡田一郎兵衛 大道寺次右衛門 勝田喜助

小倉茂兵衛 內藤新藏 櫻間勘平

宮田八郎太夫 圓城寺甚九郎 布施又兵衛

門野次郎右衛門 渡邊太郎右衛門 振村十左衛門

今枝四郎兵衛 山田勝兵衛 加藤清左衛門

加藤角太夫 石買喜三郎 同茂太夫

同孫四郎 柳生新右衛門 武田九兵衛

大屋半右衛門 瀨尾求馬 鍋嶋新五右衛門

渡部源之丞 村嶋左兵衛 大月仁右衛門

平野才兵衛 齋藤六太夫 谷仁兵衛

馬地三右衛門 岸野九郎右衛門 伊口喜八郎

八渡半兵衛 渡藤彌左衛門 早水源右衛門

三瀧宗玄 今橋久五郎 猪本太夫

平田小善

以上百拾七人、是ハ松倉家中二男三男并諸方ヨ

リ追々來る場を借たる窄人衆也、

有馬出陣之時、松倉自分之騎馬都合百七十七騎也、難

兵共ニ人數三千八百餘之外、右之窄人百十七人、鐵炮

貳百七拾五挺、弓四拾張、長柄百七本、

嶋原城代留守居

田中宗太夫 長谷川意齋 竹村休甫

伊丹宗仁 黒川玄朔 平嶋勘兵衛

中村太郎右衛門 八條勘兵衛 山本藤右衛門

山岡喜右衛門 鯨江熊之助 大塚喜十郎

絹川彌右衛門 奥山藤右衛門 平野嘉兵衛

細門仁兵衛 小崎伊兵衛 荒川理右衛門

宮田 市 助 今橋久兵衛 脇田仁右衛門
黒坂茂太夫

右有増爲覺分にて候、此外にも可有之、手負又ハ病人にて、残るは竹村新右衛門、松田兵右衛門、松田半太夫、中西甚五兵衛、萩野右馬之助、此五人ハ手負、中西ハ手所平癒して、二月中旬より有馬へ來勤る、森數馬、大村勘助、鴨野勘之丞、杉本仁兵衛、此四人病人にて残る、森大村ハ、病氣能、二月中旬より有馬へ來勤ル、

右籠城之内、武藤九左衛門亂氣にて、相番之者を切殺す故に、寄合九左衛門をも切殺す、岸田彦兵衛亂氣して、並川太郎左衛門を切殺す、雙方相果たり、江戸詰之者共も、追々有馬へ來て相勤るといへども、騎馬之外也、嶋原之城にも足輕中間相應に残し置、一揆切發に所々にて討死之侍拾三人、供騎馬此分不足也、足輕中間道より右之分不足也、此儀ハ一揆之者共抱置たる分ハ、一揆一味成故に、右に穿鑿して成敗いたす、并家中又者も同前也、此外口津之藏奉行小谷清藏大原治兵衛兩人口津に住居するを、右之一揆共取卷て、原之城へ一揆一同に無_ニ是非_一籠る也、小谷清藏親子

三人籠城之砌、黒田右衛門殿手へ懸入死を逃たり、黒田殿御斷有て、筑前國へ被_ニ召連_一たり、大原ハ落る事難_レ成して死たりし、有馬落城之後、一揆之首を塚に築込、死骸ハ不_レ殘焼捨たり、本丸之石垣を崩させ、三月上旬に寄衆引取、惣小屋本陣共に其儘指置也、所々事々々諸方より寄集百姓込之爲_ニ被_レ爲_レ置、伊豆守殿、左門殿、諸事御仕置被_ニ仰付_一、三月中旬に天草御見分、長崎へ御越、名古屋、唐津、筑前國福岡より、豊前小倉小笠原右近殿城外へ御着、太田備中守殿爲_ニ上使_一、三月廿七日嶋原へ着岸、翌廿八日出船ス、

今度一揆ニ附、有馬へ被_レ遣候、豊州小倉右近城外へ四月上旬に至て可有_レ爲_レ着就_ニ上意_一、何茂御寄合、松倉長門守も四月四日に着、

上意之趣ハ、長門守領地仕置惡敷故一揆起り、大小大分之人痛ましむる、依_レ之改易被_ニ仰附_一、森内記方へ御預也、右近儀者、生駒壹岐守方へ御預ケ也、寺澤兵庫頭ハ、天草一揆起を不屈に被_ニ思召_一、天草郡四萬石被_ニ召上_一、長門守同日晩配所津山森内記城下へ被_レ遣、右近儀者手負嶋原に居たる故に、是より配所讃岐へ被_レ遣、然所に長門守江戸屋敷御改之節、下屋敷に家來

岡田作左衛門道具入置、藏之内に桶二ツ入たる死骸有之、右之旨達上聞、依之長門守可被召寄之旨、奉書五月四日作州津山へ到來して、同日申之下刻津山發足、家來谷尾嶋之助、内藤瀬兵衛、大町權助、主從四人、内記殿より道中送之面々、組頭赤取主殿、番頭林伊織、足輕頭福田左助、折原與兵衛、伊川彌一右衛門、鐵炮三十挺、弓貳十挺、長柄廿本、前後に備、乗物廻步行拾人、家來三人、乗掛壹人に、手明拾人宛附たり、五月廿一日江戸内記殿屋敷に着す、同廿九日迄上下四人一所に被召置、右近三彌江戸着、御待合之内何之御尋も無之下着、翌日爲上使井上筑後守殿秋山修理殿を以御尋、六月朔日之朝より上下四人、別々に被召置御尋、初終長門守不存候通無替儀被申上、道具を入置申候家來ハ何者と御尋之時、岡田作左衛門と申年寄役人申附候者之由被申上、依之彼作左衛門長崎へ居を、江戸へ被召下、公儀籠合に被仰附、様子御尋之時、長門守も不存候、大町權助可存と申上に附、權助へ色々御尋被成候といへども、初終不存候通申上る、七月十九日宮城越前守殿、井上筑後守殿御檢使にて、森内記殿屋敷に

て長門守切腹、權助も御成敗、岡田作左衛門ハまばり首に被仰附、此作左衛門無雙之大惡人なるを、主君見知給ハズして、かれが諫を用給故に、家をも身をも失ひ給ふ、一揆起といふも作左衛門故也、桶に入たる死骸は、小性之佐藤宇兵衛切腹したるを、不取置して作左衛門召置たる物也、内藤瀬兵衛、谷尾嶋之助御赦免也、右近儀ハ別儀迎、保料肥後守殿へ御預ケ、羽州山形之配所へ被遣、三彌事ハ長門守弟也、奈良成心院之寺を持たれ共還俗したる故、長門守不通なりしを嶋原一揆起といふを聞て驅下り、有馬陣中勤る、依之勘當免ス、此事達上聞、内藤帶刀殿へ御預ケ、奥州岩城へ被差遣也、嶋原之城本丸爲御番小笠原壹岐守殿、爲御番久留嶋丹波守殿、正月十七日に着岸、松倉城代田中宗夫則城を相渡す、御目附下曾根三十郎殿、二月廿三日嶋原へ御着也、

諸大將旗馬印之覺

一板倉内膳殿馬印、白き絹切割之半月、
一同主水殿馬印、赤き瓢箪上に小熊附、
一石谷十藏殿指物、淺黄之四半に金の五之字、
一松平伊豆守殿旗地白紋登りはしこ、まねき同斷、馬

印角取紙のゑつる大印、白き吹貫紋旗同前、家老和田理兵衛、小澤仁右衛門、篠田九郎左衛門、石川作右衛門、

一同甲斐守殿馬印、二段之はぐま、

一戸田左門殿旗、地白紋赤き九三ツ、まねき同斷、指物地紺に面之の名乗白く、家老大高金右衛門、戸田治部左衛門、

一淡路守殿馬印、菅笠三階、

一同三郎四郎殿馬印、三段之はぐま、

一細川越中守殿旗、地白上に紺之九曜に組之紋、馬印猩々緋之二本玄なる、紋金にて上に九曜下に一くらくまで、使番指物赤きなびき淺黄も有り、

一同肥後守殿馬印、黑白段々のばれん、

一黒田右衛門佐殿旗、中白上下に紺下に組みの紋、馬印奉書の切さきの輪ぬける、番指物白き四本玄なる、銘々のたし有、

一鍋嶋信濃守殿旗、上白下黒筋違、染分下に組々の紋あり、馬印大はぐま、

一甲斐守殿馬印、鳥毛の茗荷、

一有馬玄蕃頭殿旗、上白下黒白黒之釘貫、馬印ハ文字

はしに鳥毛附て、番指物銀の天衝、

一同兵部殿馬印、白き鳥毛二ツ團子、

一立花左近殿旗、上白下黒さに、白き組々の紋あり、馬印白き玄での二ツ團子、大馬印旗同前、染分つま下に、金のかちたる珠數附て、房紅、幡指物置、玄なる、旗同前、上にかゝみの家附て、

一小笠原右近殿旗、赤し、紋白き三階菱、番指物赤き四半に紋同前、

一寺澤兵庫頭殿旗、地白くこく餅附て、馬印に熊二段之だんご、下に金の切さきの團子一ツ、大馬印白き四半にこく餅、番指物白き二本玄なるこくもち、

一井上筑後守殿指物、赤き四半に白き五之字、

一同清兵衛殿指物、赤地金之丸之内に左二ツ、

一榊原飛驒守殿指物、白き四半赤き九二、

一同左衛門殿指物、赤き四半に白き餅、

一馬場三郎左衛門殿指物、赤き四半に白き五之字、

一松平甚三郎殿指物、赤きのれんに上にとり毛つけ、

一林丹波守殿指物、銀之札にはね題目、

一松倉長門守殿旗、上下黒く、中朱筋一、馬印二段の笠上下共に黒き絹切割白町連引廻し、番指物猩々緋

之羽織、串指物ハ銘々の好次第、是ハ大坂御陣已後、前豊後守の仕置、串指物働之障に成事有事故也、

一同右近殿馬印、赤き二ツ團子、

一牧野傳藏殿指物、銀之札にいろはにほへと、

右者患老之覺たる通計書附畢、

天草爲ニ上使ニ松平甚三郎殿、林丹波守殿、牧野傳藏殿御越、一揆不レ殘有馬村原城へ引籠に附、天草御見分有レ之、有馬へ御着岸、日限覺不レ申候、

正月四日、松平伊豆守殿、戸田左門殿、中防長兵衛殿御着岸、已後御越之衆、井上筑後守殿、兼松彌五兵衛殿、日正月七日御着、同九日に□□□□彌五左衛門殿、日根野織部殿、同八日御着、宮城越前守殿、石川彌左衛門殿、同月廿八日に御着、酒井因幡守殿、駒木根長次郎殿、二月朔日に御着、市橋三四郎殿、同十六日に御着、寺澤兵庫頭殿、有馬左衛門佐殿、小笠原右近殿、

同信濃守殿、松平丹波守殿、此五人御着日限覺不レ申候、水野日向守殿、同廿二日御着、下曾根三十郎殿、同日に嶋原へ御着、薩摩衆之渡海不レ知、太田備中守殿、三月廿七日ニ嶋原へ御着、翌日出船、

天草之城爲ニ御番ニ松原主膳殿、伊東大和守殿、御目附

杉原四郎兵衛殿、

細川越中守殿人數、天草一揆爲ニ退治、熊本より三隅之此方、志岐、水般、江之浦へ寄來て、向ニ大矢野ニ進之日に、一揆之奴原旗を立雙、夥敷爲レ躰也、三角之瀬戸熊本領と天草領との間、海上僅に三町程も可レ有、潮時惡けれバ船渡する事難レ成、依レ之熊本より渡し衆たる哉、又後陣待揃へしとて、一兩日延引したる哉、其内に大矢野一揆一人も不レ殘引取たる跡へ、熊本勢渡りて、又熊本へ引たると也、右より天草之儀者不レ存候、有馬陣中にて諸家中又ハ諸窄人取て沙汰を聞覺書也、嶋原一揆致ニ蜂起、初より有馬原城沒落まで、松倉一家中之事ハ相違なし、

高來郡嶋原領内村次城より、北ハ三會村、東ハ空閑村、大野村、湯江村、多比良村、神代、此所ハ鍋嶋殿領分伊古村、古郡村、三箇村高三萬石餘之所之由、館有鍋嶋彌平左衛門當代歟、西郷村、伊福村、三寶村、山田村、野井村、愛津村、此所に關所有、長崎へも越、諫間へも海道にて高來郡嶋是迄也、城下より南村、次萩原村、今村、此二箇村嶋中木場村、安徳村、此所平家亂之節、安徳天皇之宮、今に有なり、深江村、原之内にて、布津村、堂崎村、有家村、有馬村、口津村、此津昔は、唐船入津之由、近き所に早崎といふ瀬戸あり、鹽時惡ければ折節、加津佐村之内也、串船通りかたきゆへ、近代唐不ニ入津也、

壹萬千五百五拾貳人 女

三千七百八拾三人 味方百姓

內貳千六拾三人 男

千七百貳拾人 女

右之人數ハ嶋原領分計也、天草一揆共には、原之城に爲レ籠、男女三萬餘之積也、

嶋原城内二之丸之北方に、花島之丸として一曲輪有之、此内に書院（みか）、數寄屋、居間、廣間、臺所有、四方長屋南北百廿間、東西百間、門南向、長屋ハ厩百廿疋立、厩之前馬場、南北百間、東西八九間、東之方二百疋立之とつなき有、馬場湯洗場五箇所有、馬之毛燒所五箇所、丸之内惣追廻シ、二之丸之内にも三拾疋立之厩有、是にハ常之馬を不置、或ハ百拾四疋、或ハ百貳拾疋、常に馬を不レ絶、前豊後守より長門守兩代持來ル故、有馬出陣に俄の事なれ共、騎馬にて百七拾七騎押たり、

城内に有レ之道具有増覺

石火矢 八拾挺

長大筒 百挺 是ハ五拾目より貳三拾目迄

矢風筒 三百挺 是ハ貳拾目玉より拾々玉迄

六々玉筒 千挺 此鐵炮ハ、毎年北岡にて鍛冶北

岡大膳に申付張セ候故に數多し、石火矢ハ、樹權右衛門定政にはラセたる故也、大坂之御城御普請之後、石火矢松倉進上と朱を以、臺に書附差上たるも、右之同作也、

鐵炮之藥貫目積を以考に、大形石に積而貳百石餘可レ有之、是ハ廿年間前豊後守代より毎年毎日、白四から五がらにて合納置也、依レ之上使ハ御斷申上、有馬寄手衆ハ何程も入用次第に遣はすなり、

鐵炮玉本丸二之丸櫓に、石積にハ四五十石之積も、木綿火繩所々矢倉に詰置、何萬筋共不レ知、一揆起るより以來、所々攻合、嶋原籠城有馬陣中、木綿火繩にて勤たるハ、何茂御存知之通也、殘有レ之を以、諸人御考可レ有之、竹火繩も有レ之也、

弓 百挺

長柄 五百本 鞘烏毛

鎧 三百本 是ハ鞘色々

具足 貳百領餘 是ハ若者共之着する爲とて、色々の威なり

指物金之天突長サ七尺、

具足羽織貳百餘、猩々緋、是幡指物代惡騎馬着レ之、

馬具ハ右に相應程有、諸道具損拵直しに、小細工人とて、毎日具足弓矢鐵炮等之摺磨し而、修覆をいたす、奉行ハ、八條勘兵衛、隈部小兵衛、此兩人武事支配役也、

本綿拾五百、色々に染仕立置、肥後玄ほり千端、是ハ急成時何之用にも可立として調置也、

單物五百段、段筋紺に染有、

船大小八拾艘餘、

内 早船十八艘、七八反共三十四五艘有、大小ノ小之小早船、荷船、大坂長崎へ渡船也、

船大工も多し大勢有之、毎年船并道具普請作事之方にて遣、道具、釘金物、かなづき、つるのはし、鋤、鍬、領

内に役々鍛冶有之而、細工所四五箇所にて、毎日致置、奉行山後治郎兵衛、下奉行中村源太郎、依之釘金物

澤山に出來、其上大坂藏元より直段聞合、下直成時、船切調、戻り船にて積下す、唐物之類ハ、長崎藏屋敷に、

比見孫左衛門居住して、入津時分、天川久兵衛、絲屋隨右衛門割符之内、前豐後守代より例を以買取、家中

入用之者は、其内にて役人より請取、來年物成之内にて、勘定所にて差引也、百姓納之布、木綿、紙、油、蠟、

鹽、作事之杉、檜、此外材木、竹ハ三尺廻り、白銀壹兩

ハ、三拾五束宛之積にて、役人方より家中入用次第相渡、來年物成ニ而勘定所にてさし引也、松倉豐後守代、所々城繩張被致候、大和國宇知郡二見之城、是ハ大坂御陣以前、肥後國高來郡嶋原之城并濱城、同國唐津城、同國松浦、肥前守殿平戸之城構も、肥前守殿より松倉へ御頼繩張也、五嶋淡路守殿右同意にて、松倉渡海有之、繩張極り、普請役人石切其外之者迄、嶋原より遣し取立る也、

讃岐國丸龜之城、豐前之國小倉之城、細川殿取立之時分、彼之所へ重政渡海有之、相談之上繩張之口聞及候也、

或人のひめ置しを、能便して求め出しうつしとめ侍、文辭手所於そのくだく敷、跡先なる事もまゝ、みへ侍れど、古老の覺書なれば、其如くに筆をそめける而已、

享保第十四酉天初冬下旬 加正房某

伊豆守殿原之城中へ被遣候狀

態一翰申遣候、今度古城へ楯籠成敵條無謂、併天下之恨有之候哉、又ハ長門守一分之恨有之候哉、

其恨可_レ通爾天候者、如何様共叶_レ望爲_レ遂_二和談、急下城仕、歸_二本所之家宅一時分、催_二耕作一如_レ前之堪忍難_レ成覺候條、當時爲_二飯米貳千石可_レ遣候、當御年貢之錢者一切納所仕間敷候、以來定免三成_二相定、其上諸公役後代迄念入、能有附可_レ申候之條不_レ可_レ有_レ僞者也、

松平伊豆守

原之城申より伊豆守殿江遣ス返狀

尊墨畏頂戴仕候、今度楯籠意趣者、天下之恨旁之恨、別條更無_二御座一候、近代長門守殿内檢地詰存外之上、剩高免之被_二仰付、四五年之間牛馬書子令文狀、恨_レ他恨_レ身落涙漫_レ袖、雖_二納所仕、早勘定切果、無底死去之身依成果候、不_レ及_二他國仕責、并長門守殿江一通之恨申畢り、代々之柴之庵於離、妻子緣於切、十月上旬以來、凌_二寒天之雪霜、身襖_二百重葛、頭戴_二藤烏帽子一燒野之蕨出_レ手風情、自_レ是罷出可_レ申覺悟又無_レ之候、寔彼多勢、是_レハ無勢、蚊蛇群集被_レ成、雷電蟬螂聚似_レ覆_二龍車、是昔之諭也、地主之櫻盛之頃、天地霞花散亂方々之掛り御手朝之露ト

消身、今生如_レ非_二樂撥、邯鄲露情夢、五十年榮花、一日槿花、可_レ爲_二同所一候、來世煩魔之帳踏破り、修羅道踊出、皆極樂可_二安養一事何疑可_レ有_レ之候哉、片時蔑今生之暇希計候、恐惶謹言、

松平伊豆守殿

天 四郎

右享保十九年度寅臘月肥前嶋原下向之節以_二姉川伊兵衛家藏之秘書一傳寫畢

嶋原一揆松倉記終

嶋原天草日記

松平甲斐守輝綱撰

國家反_レ治弓矢永靖、四海定_レ一千戈不_レ揚有_レ年矣、于
 茲寬永十四年、九州之民虜竊背_レ憲法、橫_レ充邪說、加
 之動_レ兵革、劫_レ郡吏、而結_レ若干之徒黨、於是霜月中
 旬、板倉內膳正石谷十藏爲_レ詔使、而發_レ于九州一矣、
 同廿八日、松平伊豆守戶田左門、重奉_レ安邊之命、
 馳_レ于彼地、乃專_レ斧鉞之任、督_レ藩國十二萬之兵一矣、
 伊豆守集_レ諸將一云、關_レ原御陣之時、信綱幼稚而不
 能_レ服_レ戎事、大坂御陣之時奉_レ仕儲君、官居_レ于江府、
 自_レ爾以來、世狃_レ於治平、遂絕_レ格鬪之疆場、是故兵革
 之要、未_レ敢能_レ簡練、是人所_レ親知一也、然有_レ意外之
 變、忝_レ曲_レ兵柄、信綱雖_レ不敏、自_レ受_レ命以來既懷_レ元臣
 宿將之思、所以如何者、孤_レ進遠境、數不_レ能_レ伺_レ中御、
 諸軍之安危總懸_レ於一人、誠不_レ盡_レ膽力一致_レ愚忠一時
 乎、是以揮_レ一私之胸襟、肆_レ進止許多之大營、諸將
 亦宜_レ任從而勿_レ違非一矣、其所_レ申令、縱逆_レ中旨、雖
 被_レ大戮、嘗不_レ擁_レ怨悔之心、且自_レ諸將一至_レ陪臣一

有_レ權謀異策、則宜_レ諫_レ說之、豈拘_レ一己偏籌、而爲_レ捍
 格_レ乎、雖_レ然約束既布、而後諸營不_レ如_レ法則、又是不
 能_レ無_レ憤悱之心、然對_レ諸將若干之兵、何爲_レ促_レ我些
 子之卒、若得_レ保_レ生命、歸_レ江城、則須_レ達_レ台聽、然則
 饒令雖_レ有_レ高看、信綱尙不_レ得_レ已、各朝_レ府城之時、
 當_レ相對而暢_レ達素情、是亦所_レ下以不_レ遺_レ君且惜_レ他日
 之詔使也、諸將甚感_レ服之、乃下_レ令而附_レ柵穿_レ溝、
 布_レ列營壘、整_レ肅行隊、營陳之經緯、諸軍無_レ不_レ感悅、
 號令申明、舉_レ世無_レ不_レ喟嘆、於是近城隣境之商賈、
 會聚而爲_レ市、交易無_レ滯而諸卒樂_レ之、市中之法
 每營于御目附一人、按_レ察其教令、且所_レ令_レ諸軍之品
 間、課_レ郵驛而上_レ表之、或有_レ庸謨之策、以_レ詔書令
 之、詔書未_レ至、軍中既以_レ其策、陳_レ布諸營、上表聞_レ
 達之、詔書與_レ上表一多相合、半途遠方城外之謀策、與_レ
 中御一如_レ合符節、故數賜_レ褒賞之手墨一矣、誠懿恩
 之冥慮、武門之遭、何以加_レ之哉、是行也無_レ大無_レ小、
 一不_レ漏脫一筆一記之、而藏_レ兩笥、可_レ謂_レ累代之重器、
 家傳之至寶也、惜乎罹_レ明曆三年之火災、而悉燒失
 矣、於是予幸爲_レ苗孫令_レ筆一記之、然服戎之年々、未
 及_レ弱冠、只有_レ壯奮之志、敢無_レ瞻顧之畧、且歲月遙

隔、記憶茫洋、雖不擇策之藏否、事之巨細、聚纂未精、舛誤未削、次序繁亂、猶未能記千分之一、是以不_レ要_二他之模寫擴布_一、只於_二後來之子孫_一者、有識大概之小助、寛文三癸卯二月中旬、從四位下侍從兼伊豆守源姓松平氏信綱嫡男甲斐守輝綱記_レ之、

寛永十四年丁丑十月中旬、松倉長門守領地肥前國高來郡嶋原領、并寺澤兵庫頭領地肥後國天草領之百姓吉利支丹宗門之徒黨蜂起_二附、霜月_{小之}也_一、爲征伐、爲_二上使_一板倉内膳正源重正_{行年五十一}被_二差遣_一、御目附石谷十藏令_二副從_一之、廿八日、重爲_二上使執事_一武州忍之城主松平伊豆守源信綱_{行年四十二}譜代之御家人美濃大垣之城主戶田左門藤原氏鐵_{行年六十一}被_二仰附_一矣、戶田左門爲_二用粧_一、先達而到_二大垣_一、松平伊豆守拜_二領御馬_力御金、極月朔日可_レ爲_二發足_一之處、公用依_レ有_レ之、同三日辰一點伴_二嫡男甲斐守輝綱_{行年十八}江戶進發、馬上五十二騎_{此外乘掛步行侍}鐵炮八十挺_{此外父子持筒}弓二十張_{此外父子持弓}長柄鎧七十本_{此外父子持鎧}旗五本_{此外父子馬鎧}從卒凡千三百餘人也

御勘定衆 能勢四郎左衛門 山中喜兵衛
兩人爲_二兵糧出納_一、以_二台命_一扈從于西國、

中坊長兵衛時祐

極月大、

三日、神奈川、四日、大磯、

小幡勘兵衛景憲爲_二道行_一、自_二江戸_一來、給_二冑首_一、於_二武田信玄家_一號_二之喧嘩笠_一、

五日、箱根、六日、大雨、神原、七日、岡部、

八日、袋井、九日、白須賀、十日、岡崎、

十一日、熱田、板倉周防守源重宗爲_二所司代_一住_二京都_一、爲_二對談_一附_二與從卒於甲斐守_一、十三日朝到_二伏見_一、

見、

十二日、雪降、庄野、十三日、水口、十四日、伏

見、於_二小堀遠江守宅_一面_レ謁板倉周防守源重宗、并永

井信濃守大江尙政、自_二女院御所_一拜_二領衣服_一姉婿

天野豐前守藤原長信嫡男長三郎藤原長重自_二京都_一來會、即伴_二西國_一戶田左門氏鐵伴_二次男淡路守_一三男

三郎四郎、自_二大垣_一來會、嫡男采女正以_二台命_一分_二氏鐵十萬石之內三萬石之勢_一、而令_レ留_二守大垣城_一、板

倉周防守饋_{ルウチ}內飼一箇於伊豆守、饋_ル鎧二本內飼一

簡於甲斐守、

十五日晚、伏見出船、十六日、大坂、十七日、同處滯

留、石川丈三饋^{キリノチキ}曹一首^{號ニ雖尖}、於甲斐守、大坂御

城代阿部備中守、稻垣攝津守面謁、

十八日、同處滯留、

自^ニ大坂^ニ載^ニ送大鐵炮於西國、鈴木三郎九郎以^レ有^ニ

鐵炮之鍛鍊、奉^ニ行^ニ之^ニ到^ニ西國、

十九日未廻、川口^ニ到而^レ出船、

伊豆守左門其外上使等、爲^{ノリユク}駕行、豫課^ニ山陽道南海

道西海道之大名、令^レ出^ニ關船、大坂御奉行小濱民部

少輔請^ニ取^ニ之、松平伊豆守家中江相渡關船六十艘、

載^レ馬船十艘餘、各有^ニ晝夜之船驗、自^ニ紀州大納言

賴宣卿役船^ニ者不^ニ課出、伊豆守爲^ニ饗應^ニ寄^ニ八十丁

立之船、伊豆守駕^レ之、甲斐守自^ニ阿波國主蜂須賀阿

波守^ニ粧來六十丁立之船仁駕、自^ニ賴宣卿^ニ令^下御家

人市川甚右衛門、井吉田三右衛門、山中作右衛門、

田屋五郎左衛門、^{寅二月廿七日討死}扈^ニ從西國^ニ來^上、

廿日、播州室、本多甲斐守、同能登守、同内記面謁、

廿一日、備前牛窓、廿二日、同國下津井、

廿三日、備後鞆、廿四日、同國只海、

廿五日、安藝釜川、

廿六日、防州上關、

廿七日、長州下關、

小笠原右近大夫、同信濃守、同壹岐守、松平丹後守

渡^ニ海路^ニ而來謁、

廿八日、豐前小倉、廿九日、同所逗留^{自^レ是至飯城主}

小笠原右近大夫忠真、贈^ニ步兵着用之疊具足、晦

日、筑前飯塚、^{自^レ是至原田行程七里八町、此間號冷水越有山、}

黑田甲斐守、同市正於^ニ驛路^ニ面謁、

正月大、

元日、雪降、筑前原田、^{自^レ是至寺井行程十里}

二日、肥前寺井、^{自^レ是至嶋原行程十里}

自^レ是渡^ニ海路^ニ而至^ニ嶋原^ニ大風漂^レ舟、

三日、同國嶋原之渚、^{自^レ是至有馬海上五里}

去元日、攻^ニ原城^ニ之處、板倉内膳討死之旨告來、伊

豆守附^ニ與士卒於甲斐守、伴^ニ戶田左門氏鐵、至^ニ嶋

原城^ニ而寓宿、明日自^ニ陸路^ニ着^ニ有馬、

四日未廻、有馬着船、

檣柄與^ニ有馬^ニ之間陣取、

令^ニ諸手^ニ法則六箇條面^ニ說諸持^{將方}井陪臣^ニ之、準^レ式

別書記之、

五日、細川肥後守光利自肥後國熊本、引卒父越中守之兵士而來、自大坂御城、令漕送、仕寄具足鐵楯配與先鋒、

六日、爲糺諸手之仕寄番、松平伊豆守命、使者番之家人、岩上角之助、酒井三十郎、長谷川源右衛門、與村權之丞、片山彌五左衛門、小泉彥右衛門、晝夜令廻諸手之仕寄、後分六番、且加平例之士一人、令循行、

七日、依伊豆守戶田左門下知、寺澤兵庫頭自天草之內大嶋子、引卒士卒來、爲上使、兼松彌五左衛門、極月廿五日江戸發足、今日來着、

八日、兼松彌五左衛門歸于江戸、

九日、移陣屋於西方之岡、

十日、自海上具鐵炮而雖令擊賊城、舟小城高、而大的不如意也、於是令探求大船、幸阿蘭陀大船在平戶郎課阿蘭陀人、漕送其船、向賊城、令放石火矢、

十一日、十二日、十四日、十五日、

爲嶋原城番、小笠原壹岐守久留嶋丹波守被差置、爲富岡城番、伊東大和守松平主稅被差置、

十六日、上使井上筑後守來着、子息清兵衛伴來、十七日、十八日、十九日、

廿日、廿一日、廿二日、賊徒之爲四郎母五十歲計、姉、才二妹、小左衛門、才四郎、甥小平禁獄肥後國、依伊豆守信綱左門氏鐵之命、以之來、

廿三日、爲上使本郷庄右衛門來着、

廿四日、廿五日、廿六日、

細川越中守正月十二日發江戸、今日來着、有馬左衛門佐井子息藏人來着、

廿七日、廿八日、

午刻爲上使宮城越前守、石川彌左衛門來、諸手久依在陣、諸軍疲勞之故、被成下十萬零六百十九人之扶持方米、知行高一萬石七四百人扶持方米之積也、米穀者到近國之大名在陣之諸將、課糴米、令運漕于此處、其後於大坂給白銀、

二萬千六百八十人
細川越中守
松倉長門守
立花飛驒守
有馬玄蕃

一萬四千二百八十人 鍋嶋信濃守 四千九百廿八人 寺澤兵庫頭 二千二百廿 有馬左衛門佐

六千人 小笠原右近大夫 三千二百 小笠原信濃守

千四百八十人 松平丹後守 四千八百 水野日向守

千五百人 松平伊豆守

是者數遍之上使并井上筑後守父子、中坊長兵衛、鈴木

三郎九郎、能勢四郎右衛門、山中喜兵衛相加、伊豆守

假屋中之故、多_ニ於他之員數、

四百八十人 板倉主水 六百五十一人 小身之面々十人分

凡十萬零六百十九人

外自_ニ長崎_一來工匠鍛冶等之作料有_レ之、

令_レ歸_ニ帆阿蘭陀舟於平戶_一、

廿九日、未刻、松平伊豆守家人、寺西太郎助假屋失火、

即時撲滅_ヲ、是太郎助庇_ニ置窄人山神彌四郎_一假屋之

失火也、以下太郎助密焚_ニ置彌四郎_一之科_上被_ニ追捕_一、

夜中板倉主水亡父內膳、石谷十藏江着來、青山大藏

少輔使者假屋失火、

二月小、

朔日、爲_ニ上使_一酒井因幡守、駒木根長次郎、正月廿日

發足、今日來着、酉刻、有馬玄蕃頭自_ニ江戶_一來、令_ニ四郎甥小平持_ニ小左衛門狀_一被_ニ遣_ニ城内_一趣、一筆申入候、我等共并召連候四人_ニ之者共_一、五六日以前、有馬江被_ニ召寄_一、御上使衆、松平伊豆守様、戸田左門様、御前江被_ニ召出_一候、就_ニ其御上使衆被_ニ仰聞_一様子、一ツ書ヲ以申入候、御披見之上御返事待申候、

一御寄手衆細川越中守様、鍋嶋信濃守様、松平右

衛門佐様、有馬玄蕃様、立花飛驒守様、有馬左衛

門佐様、寺澤兵庫様、松倉長門様、此外仁御上使

衆御人數十萬餘仁而候、此以前ハ城中ヲ大方思

召候テ、人數御ソコナヒ被_レ成候、カサネテ御責

被_レ成候様子ハ、竹タバ楯ノ板カナタテ丈夫ニ

被_レ成、御責ナサレ候、右之道具共御見セ被_レ成

候、越中守様、右衛門佐様一手ニ而成共急度被_ニ

仰付_一候様ニト、御所望被_レ成候得共、江戸様ヨリ

之御誼ニ、吉利支丹之百姓原ニ侍衆ソコナハセ

候事、不_レ入儀ト被_ニ思召_一候間、柵ノ所々丈夫ニ

被_ニ仰付_一、ホシ殺ニ被_レ成候様ニト、伊豆様、左門

様、御直ニ被_ニ仰聞_一候事、

一 去年今年之内、城ヨリ落ル者合三四人御座候處ニ、命ヲ御助被レ成、其上金銀ヲ被レ下、剩其在所ノ内ニテ、當年ハ作取ニ仕、其外色々忝被ニ仰付様ニテ、出候者不ニ大形ニ忝カリ候由承候事、

一 天下様ヨリ被ニ仰出候ヲ、伊豆様左門様御直ニ被ニ仰聞候ハ、吉利支丹宗之儀ハ、當歳子ニ不レ依御果シ被レ成候ニ相定申候、今發起ニ附テ前ヨリノセンチヨ當分無理ニ吉利支丹ニス、メラレ罷成候者、被ニ聞召届、御助可被レ成候事、上意之由ニ御座候、其子細ハ無レ科者ヲ御果シ被レ成候事、天下之仕置ニ相違申候ト御誼被レ成、就者大矢野者ハ御吟味ニテ、センチヨノ分ハ御出シ可有候、勿論吉利支丹宗之儀具ニ承届、難有存候者ハマリチリニ合申候カ、又ハ籠舍仕相果候共、其段ハ銘々次第ト存候、就レ夫我等共吉利支丹宗旨尊ク存候様ニ御尋被レ成候共、別ニ見届申儀無レ之ト申上候、親子親類大矢野不レ殘吉利支丹ニ罷成候ニ附テ、一同罷成候ト御請申候、此上ハ各様御分別ニ被レ成候儀者尤マリチリニ御逢可被レ成候、左候ハ、私モ御斷申上、一所ニ相

果申度候、ソレモセンチヨノ分御出シ候ハ、私共城中エ可被レ遣トノ儀ニ御座候、但各様我等同前ニ思召候ハ、城ヨリ御出シ可被レ成候事、一 城中大將四郎ト申儀其カクレナク候、其年茶ヲ聞召候得者、十五六ニテ諸人ヲス、メ、加様ノ儀ヲ取立申儀ニテハ無レ之候ト思召候條、四郎ガ名ヲカリ取立申者可有レ之ト思召候、左様ノ事ニ候ハ、大將四郎ニテ御座候共、罷出タル者於レ在レ之ハ、御赦免可ニ罷成ニ之由ニ御座候事、

一 惣手ヨリ今度起候マキノヘニ成、無理ニ吉利支丹ニナシ申、センチヨ城中ヘ籠候者ハ、不レ及レ申、又其身ヨリ望今度發候附テ吉利支丹ニ罷成、只今ニ至迄後悔ニ存、城中ヨリ罷出、如レ本センチヨ可ニ罷成ニ儀ニ候ハ、是又御免可被レ成ノ由ニ候、右ノ通ノ者城中ヲ出シ候ハ、四郎母、同姉福、妹萬、ヲノコ小平、四人共ニ城中エ御入、可被レ成候由、伊豆守様、左門様、御直ニ被ニ仰聞候事、

一 我等共如レ此之身上ニ罷成、右之通申遣候事、相果候ヲ迷惑ニ存申入様ニ可被レ思召、御心中御

耻敷存候、努々左様ニテハ無ニ御座候、兎角城中ニテ相果候ハントノ儀ニテ候ハ、我等共宗旨見届申事ハ無レ之候ヘ共、城中ヨリ出申度ト申者共御出シ候ハ、御斷ヲ申、城中ニ參、一處ニ相果可申候、加様ニ申事モ無ニ心元思召候ハ、矢留ヲ被成御出合、對面ヲ可被ニ仰附御意ニ候、我々儀永々迷惑成仕合ニ候間、何之道ニモ早カドツキ申度候條、有無之御返事奉レ待候、恐々謹言、

二月朔日

大矢野

渡邊傳兵衛

渡部小左衛門

合津七左衛門

瀬戸小兵衛

瀬戸理右衛門

渡部左太郎

各御中

四郎母遣ニ城内ニ狀

一筆申マイラセ候、上様御使ニ、松平伊豆様、戸田左門様、御前ニ被ニ召出、則小平ヲ御使ニツカハサレ候マ、申越マイラセ候、我々ナト被ニ拾置候テ、永々迷惑ナル仕合、情ナク存候、城ノ内ニ籠

申、センチヨ被ニ出候テ、我々共其モトニ被ニ遣候ハントノ御事候間、其御心得可被ニ成候、僞ト思召候ハ、何ノ口ニ成共返事次第出合對面サセラレ候ハントノ御意、兎角各一處ニ何ノ道ニモ成行申度候ハ、御分別ヲ以人替ニ被ニ成給候様ニ御返事待入マイラセ候、賢ク、返々四郎ハ、其元ノ大將之由承候マ、ムザト逢申事成不申候ハ、何ノ矢サマニ成共出合對面可申候、小平事頓御返事可給候事、賢ク、

二月朔日

四郎母

マルタ 吉利支丹ノ名號

同姉

レシイナ同

益田

甚兵衛殿

同

四郎殿

即日返牒之趣

御狀之通具ニ披見申候、御無事ニ御座候由、此方同前之儀ニ御座候、扱各御陣場ニ御越之通、左様ニ候ハント存候、申迄ナク候ヘ共、如御存ヒイラス堅固ニ御届尤ニ候、我々城中之衆モ對天主如何様ニモ

此節身命ヲ可奉捧覺悟迄ニ候、一門中何ニ相替儀無レ之候、然者他宗ノ者ヲヲサヘテ吉利支丹トナシ不レ申事ハ各御存知之前ニ候、下々不レ及レ申、落人ノ儀ハ如何程御座候トテモ、城中ヨリ打モラシ可レ被レ申事ニ無ニ御座ニ候、恐々謹言、

二月朔日

渡邊傳兵衛

金津七左衛門

瀬戸理右衛門

渡部左太郎

瀬戸小兵衛殿

御返事

何モ連判

小平持ニ返牒ニ來、穴徒入ニ柿蜜柑砂糖久年母鰻頭芋魁於紙袋ニ而與ニ小平、此外前後數遍有ニ矢文、爲ニ計策ニ有ニ返ニ落人於城内ニ之事、

二日、三日、

有馬左衛門佐家人有馬五郎左衛門、於ニ城壘與レ柵之中間ニ對ニ話城中之賊徒三人、是去比以ニ矢文ニ有ニ通達ニ之故也、

四日、細川越中守、從ニ樓之前ニ以ニ望樓ニ窺ニ見城中、

五日、六日、立花飛驒守自ニ江戸ニ來着、七日、八日、子剋、黑田右衛門佐假屋失火、城中之兇徒望ニ其烟、相悅而舉ニ凱聲、

九日、自ニ江戸ニ鍋嶋信濃守來、

自ニ豐前國小倉ニ小笠原右近大夫、同國中津小笠原信濃守、豐後國高田松平丹後守來、酒井因幡守、駒木根長次郎、歸ニ于江戸、

自ニ細川越中守家人細川立卯越中守弟也假屋ニ失火、廿竈斗燒亡、

十日、頃於ニ城中ニ度々有ニ鳴ニ大鼓躍舞、其歌云、

一カ、レノ寄衆モツコテカ、レ、寄衆鐵炮ノ玉

ノ有ニ限ハ、

一トント、鳴ハ寄衆ノ大筒、ナラストミシラシヨ

コチノ小筒テ、

一有カタノ利生ヤ、伴天連様ノ御影テ寄衆ノ頭ヲ

スト切支丹、

如レ斯賊徒會集而促ニ踊舞、歌聲鼓音姦ニ城外、依

レ之諸部怪ニ突圍出城之策、故各誠備會不ニ怠惰、

十一日、自レ初以ニ金堀人一令レ堀城之時、城中モ又同

ク堀來、故放ニ鐵炮ニ殺ニ敵二人、暮時自ニ城中三九

炯光遙出、寄手料テ云、爲^{ラント}城中ノ失火、然非ニ燒亡、而以^{ナマ}生葉^{アスワリ}蒸ニ金堀之穿來甬道^{コウ}之故也、或令^レ注ニ糞穢^ニ滿^ニ流甬道^ニ、

十二日、十三日、十四日、

十五日、自^ニ近江國甲賀來隱形者、欲^レ入^ニ城中、夜々忍寄、然共城中之賊無^ニ一人不^ニ西國語、且吉利支丹宗門之稱^ニ名聞、而不^レ得^レ知者甚多、是故不^レ能^レ交^ニ居城中之賊^ニ矣、一夜忍^ニ入^ニ城中^ニ之時、賊則知^レ之而逐^レ之、於是取^ニ屏畔之旗而出^ニ城外、賊以^ニ石強打^レ之、

十六日、寺澤兵庫頭前鋒捕^ニ落人^ニ而來、其生口云、城中糧食乏、去九日夜城中三手分雖^レ相^ニ計破^レ圍、寄手仕寄萬機嚴蜜之故、休^ニ止此策^ニ云々、

大凡攻城之法、圍軍必闕、勿^レ攻^ニ窮寇^ニ云々、雖^レ然此城者吉利支丹宗門之徒黨屯居之故、務要^ニ賊徒一人又不^ニ亡脫、是以自^ニ松平伊豆守着陣、課^ニ諸手^ニ令^ニ一重堀^ニ堀設^レ柵堀中散^ニ蒺藜、其後附^ニ竹策^ニ舉^ニ西樓^ニ築^ニ土山、城中甚屈^レ之、

十七日、爲^ニ上使^ニ市橋三四郎來着、

十八日、十九日、

廿日、市橋三四郎歸^ニ于江戶、

廿一日、城中兇徒分^ニ其卒於三部、一者竊出^ニ大江口^ニ可決^ニ勝負、寄衆諸勢揀集而騷動之時、一出^ニ出丸脇口^ニ、廻^ニ諸手^ニ之後、附^ニ火於假屋、以^ニ其光^ニ討^ニ寄手^ニ之人數、城中之老弱又可^レ合^ニ凱聲、然則寄衆之敗績必矣、其時一出^ニ丙口^ニ、亂^ニ入假屋、推^ニ取糧米鉾前、則城中得^レ勢、防戰可^レ保^ニ歲月、如此相計丑之刻一手出^ニ大江口^ニ、發^レ闐而亂入、然共寄衆受^レ敵、備之外諸手各守備、曾不^ニ騷動、依^レ之出^ニ出丸脇口^ニ、一手失^レ度、大半歸^ニ城內、丙口之賊徒不^レ及^ニ出向^ニ兇徒之豫謀違失之故、戰鬪失^レ利而忽敗北矣、是生捕之口也、松平伊豆守夜廻之家人、岩上角之助、尼子八郎兵衛、紀伊大納言賴宣卿使者、山中作右衛門、相^ニ改大江口仕寄番^ニ之節、兇徒即越^レ柵來、角之助先^ニ諸人^ニ而以^ニ鏈撞^ニ伏兇徒二人^ニ、相次而八郎兵衛兇徒一人、作右衛門二人討^ニ取之、作右衛門對^ニ敵鏈^ニ而傷^レ股、

黑田右衛門佐備

討捕頭數六十四
生捕二人

同家人

手負百六人
討死三十八人

黑田甲斐守備

討捕頭數十五
生捕十五

同家人

手負十人
討死一人

黒田市正備

討捕頭數十

同家人

手負四十五人
討死八人

寺澤兵庫頭備

討捕頭數三十三

同家人

手負九人
討死五人

鍋嶋信濃守備

討捕頭數百六十九

同家人

手負百一人
討死二十三

立花飛驒守備

討捕頭數三

都合頭數二百九十五 生捕七人

寅剋爲上使、水野藤右衛門來着、

廿二日、卯剋松平伊豆守戸田左門、相伴而被_レ循見昨

夜々討之場、伊豆守左門令而使_レ割_{サカ}賊骸之腹、其腸

中有_レ青蒼之物、依_レ糧米困乏_ニ而食_レ麥葉_ニ歟、

廿三日、午剋自_ニ江戸_一水野日向守并息美作守來着、

廿四日、廿五日、雨降、

廿六日、爲_ニ上使_一、三浦志摩守、村越七郎左衛門來着、

廿七日、自_レ初有_ニ詔旨_一云、對_ニ黎首之賊_一何爲_レ殺_{スコトヲ}士

卒、只絕_ニ糧道_一可_レ令_ニ饑餓_一、且制禁之宗門發起之刑

賊也、不_レ可_レ使_ニ一賊亡匿_一云々、因_レ茲附_レ掘堀

築_ニ距堙_一、不_レ費_ニ一卒_一、而遂屈_ニ賊情_一矣、伊豆守左門

相議_{シテ}云、台命之要須不_レ使_ニ士卒戰死_一、不_レ使_ニ一賊亡

走_ニ爲_レ善焉_一、關ヶ原大坂之兩陣既經_ニ歲月_一、當時弓

矢之法修鍊之者希也、且爲_レ調_ニ習壯年之士卒_一、具_ニ

器械_一而至_ニ城闕_一、以_ニ倉卒舉_レ城之策_一可_レ決_ニ些少之

勝負_一、共既合_ニ廿六日攻城之計謀_一、然廿五六兩日相

續雨降、是故議而限_ニ定廿八日_一矣、諸手之竹策近_ニ

敵城_一、其間僅五間計、_{繪形見}諸手自_レ初雖_レ放_ニ鐵炮_一、城

中橫掘_レ地而防_ニ鉦箭_一、然處自_ニ出丸東脇_一、仕寄最先西

樓窺_ニ見出丸之内_一、至_ニ堀之中_一、見處無_ニ遺子_一、故橫

放_ニ鐵炮_一、賊徒無_レ所_レ依而退散、因_レ玆以_レ使告_下向_ニ

出丸_一寄手之先鋒、且賊徒退_ニ散出丸_一之時、向_ニ寄

手_一云、料識_{ハカリシル}寄手平日望_{ムコトヲ}出丸_一、今城中弃_レ渡出丸_一云

云、則鍋嶋信濃守以_レ使者_一告奏、松平伊豆守相_ニ伴戸

田左門氏鐵_一到_ニ彼所_一、循見之上、謀_ニ信濃守輕卒_一、令

毀_ニ出丸之屏_一、輕卒出_ニ入出丸_一、登_ニ屏毀之_一、時自_ニ城

中_一放_ニ鐵炮_一而倒_ニ絕輕卒_一、伊豆守左門下知、引_ニ舉

輕卒、伊豆守直到_ニ戸田左門假屋_一、集_ニ列陣之御譜代

衆、暫有_ニ閑談_一、然處自_ニ鍋嶋信濃守備_一令_レ攻_ニ城_一、他

備之士卒見_レ之、各自相進、當_ニ此時_一雖_ニ紛紜々々_一、以_ニ

約束既明_一故、諸部渾々沌々垂_ニ錯亂_一、未剋責_ニ取出

丸并二三九、酉剋乘_ニ取本丸海手之方、本丸五分之
一程依_ニ夜陰_一附_レ柵、待_ニ其夜之明_一、

廿八日、諸手登_ニ入本城、悉放_レ火、賊徒無_ニ一人不_ニ殺
害、午上剋唱_ニ凱歌_一、即各歸_ニ假屋_一、賊徒口津村山田
右衛門佐城中察_ニ別心_一、自_レ初面縛_ス、今日寄衆小笠原
右近大夫家人得_レ之來、吉利支丹之法有_レ故而制禁
嚴密也、是以宗門之徒依_ニ舊歸_ニ佛法_一、然而浸々吉利
支丹者或藏_ニ其繪於壁中_一、或埋_ニ其器於土中_一、既經_ニ
廿餘年之星霜、寬永十四年之春、一人有_ニ沈痼之患_一、
不_レ治殆及_ニ一年_一、故街衢之浮說多疑_ニ薨殂_一、於_レ是
吉利支丹之_ニ相言曰_一、背_ニ我最極之法_一、入_ニ彼釋氏之
門_一、是非_ニ彼我之心_一、只所_ニ以荷_ニ制禁之重_一也、當時
一人薨逝二君未儲、一天之萬機有_レ誰握_レ之、天主之
宗法何人制_レ之、且領主松倉長門守施_ニ苛政於士卒_一、
厚聚_ニ歛於百姓_一、是以領內之衆庶無_レ處_ニ措_ニ手足_一、是
繼絕興廢之時也、同志陰謀發_ニ起吉利支丹_一、乘_ニ釁而
挫_ニ長門守城_一、招_ニ集而萬卒_一、柔_ニ服肥前國長崎_一、掠_ニ
集所々器財_一、擴_ニ宗法於近城之衆民_一、有_ニ不_ニ歸依_一
者、則當燒_ニ亡其閭巷_一、斬_ニ殺其衆庶_一、九州者從來歸_ニ
依吉利支丹_一、當_ニ此時_一不_レ同_ニ心者必鮮矣_一、故以_レ法

懷服、以_レ勢平聲、冬中逼安_ニ治九州_一、及_レ春可_レ進
師、大坂賊徒之陰謀斯窮矣、

吉利支丹之徒、奎右衛門、善左衛門宗意、山善左衛
門、廿年以來遁_ニ居天草內大矢野千束嶋_一、自_ニ去年六
月中旬_一、五人相共語_ニ衆人_一云、天草內上津浦住居之
伴天連、廿六年前自_ニ公儀_一被_ニ追捕_一、即遺告書曰、
自_ニ今年_一當_ニ廿六年_一、善男子一人必可_ニ出生_一、不_レ學
而悟_ニ諸文_一、應驗現_ニ天_一、饅頭實_ニ于木_一、靡_ニ白旗於野
山_一、立_ニ栗栖於諸人之頭_一、且有_ニ雲之燒_一、東西二國、當_ニ
此時_一、諸人之家屋及野山草木、悉可_ニ燒失_一云々、
天草大矢野四郎遺告書、所謂善男子也、正爲_ニ天使_一、
更無_レ疑、五人之徒以_レ斯告_ニ諸人_一、令_ニ宗_一尊四郎、四
郎生年十六才也、吉利支丹發起當_ニ丑十月廿五日_一之
頃、有_ニ勦_一搖天地之奇事、其時衆庶勿_レ驚、五人之
徒告_レ之、

寬永十四丁丑年十月廿四日、松倉長門守代官林兵
左衛門、循_ニ見村邑_一之日、到_ニ有馬村_一、見_ニ號_一角內三
吉、二人鄉民勤_ニ行於切支丹之法_一、子_ニ粵兵左衛門強
罵詈焉_一、故二人之鄉民不堪、而即時及_ニ殺代官_一、終
其事發露、而聞_ニ嶋原城_一、果如_ニ上所_一謂、丑十月廿五

日之夜、吉利支丹倉卒發起矣、村々之長民合ス計謀、誑ス導衆民、募集銳卒、嶋原所之代官并他宗比丘、不歸ス吉利支丹者、悉斬殺之、屯居村々所々、松倉長門守留守之臣聞之、相驚帥士卒百餘人、進深江討賊徒四十級、即退松倉城、賊徒追而責之、松倉士卒戰于城外、即追而鎖門、賊徒破門頻進城中、又竭力防之、故賊徒遠退、燒亡ケル園闌道場、各屯村々、賊徒議云、立四郎而爲ス宗旨之司主、乃差使謁四郎云、先年背ス宗門各存ス悔心、今度立足下爲ス吉利支丹之大將、可再ス興宗門矣、四郎答云、與予同志則帥諸卒進師、所不歸ス宗門者斬殺之、可發起宗門、予縱進師於何處、必隨順予令者、書記其人數、可呈來之云々、四郎者誘引人數七百計、發起宗旨而屯居大矢野宮津矣、嶋原村々之賊長即書記人數、呈四郎、四郎引率人數四五十計、至嶋原内大江、翌日議云、諸卒一萬二千、分一部、屯日見峠茂木峠、遣使長崎、令問歸服宗門否、若不歸依、則進擊長崎、四郎合謀既欲令進發、然自天草上津浦告嶋原内大江云、今度之子細寺澤兵庫頭留守

之臣聞之、富岡之城代三宅藤兵衛爲先鋒、集士卒、既進上浦之近城嶋子志柿、急可令差來援勢、因茲止長崎進發之儀、四郎引率賊徒千五百人計、至天草、加上津浦之賊、與寺澤士卒戰于嶋子、殺藤兵衛、又經一日、伐富岡城、攻入二丸、然不能舉城、退至嶋原内津町、長門守自江戶至嶋原城、且鍋嶋前鋒至唐子、四郎聞之相驚議曰、可籠原之古城、既合計謀、自丑十月朔日、村々百姓之飯米、并長門守所藏口津之倉廩糧米、悉運輸古城、

同三日、四郎至古城、同四五兩日惣人數男女悉至古城、同五六兩日城之修補了、同七八兩日城中假屋成、即立小旗、同九日、自天草人數男女凡二千七百許入古城、其所駕來船并大江濱之舟、悉穿破爲城中屏陰之輔、只遺三十丁立關船一艘、

城中惣頭覺

上總村

助右衛門
宗右衛門
平

道崎村

次右衛門
久藏

三會村

次兵衛
次右衛門
六左衛門

フツ村

吉藏
次右衛門

有馬村 次右衛門 長久右衛門 助

串山村 太郎兵衛 惣左衛門

有宗村 清久兵衛 善四郎 藏

深江村 作甚右衛門 內

小濱村 久兵衛

安德村 久兵衛 角作右衛門 助

千々岩村 大五郎左衛門 藏

口津村 甚左衛門 二郎兵衛 吉

上津浦村 市郎兵衛 七右衛門

大矢野村 七左衛門 深案

以上村々之庄屋也凡三十五人

軍奉行

此前任修理處

蘆浦仲右衛門 歲五十六七

松倉長門守陪臣 松嶋半之丞 歲四十計

醫師 有馬久意 歲六十計

大矢野半人 相津源アフ 歲三十二

大右衛門 歲六十計

十二月廿日之城攻之時、右衛門佐在_テ其守方、不

知_レ子細之事、正月朔日城攻之事、極月晦日城中知_レ之、故豫備防_レ之、城中戰死者并蒙_レ疵者、凡十七人也、

二月廿一日、夜討之事、千四百人自_二大江口_一進_二松平右衛門佐備_一、六百人寺澤兵庫頭備、自_二出丸_一千人

進_二鍋嶋信濃守備_一、自_二三九_一五十人進_二立花飛驒守備_一、松倉長門守備、城中戰死并蒙_レ創者、凡四百三十人、此內百三十二人、退歸_二城中_一、此節右衛門佐依_二矢文之策_一露顯、巨細之事不_レ知_レ之、城中鐵炮有_二五百三十挺_一、玉藥自_二正月季旬_一已_レ絕_ス矣、雖然藏_二備少計_一、廿七日城攻之時放_レ之、所_レ籠_二城中_一之宰人行年五六十之者四十人、主或爲_二計策_一、或計_二敵之虛實_一、或進_二退諸卒_一、其宰人皆不_レ知_二何許人_一、右衛門佐者、爲_二四郎老臣_一而主_二玉藥資料并矢文萬事之進退_一、四郎於_二本丸_一圍碁之時、自_二鍋嶋西樓_一自放_二石火矢_一、穿_二四郎左袖_一、殺_二侍坐之男女五六人_一、城中之賊徒以爲、雖_レ持_二不測之奇妙_一、四郎猶中_二鐵炮_一、且侍坐之男女滅亡、是不吉之至也、依_レ之人心更衰、自_レ被_二西樓放_一來鐵炮、多不_レ外蒙_レ疵者甚多、城中屈_レ之、依_レ之右衛門佐心更無_レ勇、于_レ爰自_二有馬左衛門佐備_一令_レ射矢云、汝爲_二譜代之家人_一、是般以_二計策_一須盡_二忠義云々_一、以_二應諾_一報_レ之、卽副從之賊七百人之內、得_二同志之者五百人_一、故廿一日自_二我守方_一三之丸、導_二引寄衆_一、發_二火於城中_一、令_二寄衆應_一于外、予

誑_三四郎、寄衆既亂_三入城中、急觀_三濱手之船、宜_レ亡_三出城中、四郎應諾則駕_レ船擒_レ之、當_レ盡_三忠義、以_三此策二月十一日射_三矢文於左衛門佐備、然不_レ見_三得矢文乎、廿一日之約束相違、於_レ是猶豫之處、廿一日之晚景自_三左衛門佐備_一令_レ射_三矢文云、十一日之矢文遲見_三得之、故約束相違矣、重限_三時日_一宜_レ射_三矢文云々、城中見_レ之、相疑即謂_三四郎云、右衛門佐恐有_三逆意、即面縛而遣_三松山、廿一日令_レ將_三來于本丸、右衛門妻子者廿七日於_三本丸大手口外形之內_一令_三刑殺、此日小笠原右近大夫家人見_三右衛門佐、而既將_レ斬_レ之、右衛門佐呈_三示矢文、依_レ之擒來、誠出_三萬死_一遭_三一生_一者耶、此外生口之中少々無_レ答之旨、豫有_三通達之者_一而助_レ之、

三浦志摩守、船越四郎左衛門歸_三于江戸、細川越中守以_三廿七日戌刻_一落城之趣聞_三達之、其奏狀三月六日至_三江戸云々、松平伊豆守、戸田左門、廿八日落城之趣以_三飛脚_一聞_三達之、其奏狀同八日申剋至_三江戸云々、(次頁之圖在于此)

細川越中守源忠利 肥後國熊本 五十四萬石
子息肥後守光利 家人 討死 二百八十人
手負 千八百九十七人

黑田右衛門佐忠之

筑前國福岡 五十二萬石

黑田甲斐守源

家人 討死 二百三十三人
手負 千六百五十八人
家人 討死 二十三人
手負 三百十五人

黑田市正源

家人 討死 十六人
手負 百五十六人

鍋嶋信濃守藤原勝茂

子息紀伊守

家人 討死 百十六人
手負 六百八十三人

同 甲斐守

有馬玄蕃頭源

筑後國久留米 二十一萬石

子息兵部少輔源忠賴

家人 討死 七十八人
手負 百八十五人

立花飛驒守源茂政

筑後國柳川 十一萬石

子息左近將監忠茂

家人 討死 百廿七人
手負 三百九十三人

寺澤兵庫頭源堅高

肥後國唐津 十二萬三千石

松倉長門守勝家

肥後國嶋原 四萬石

同 右近重賴手負

家人 討死 二十一人
手負 九十九人

小笠原右近大夫源忠真

豐前國小倉 十五萬石

小笠原信濃守源長次

家人 討死 二十五人
手負 二百三人

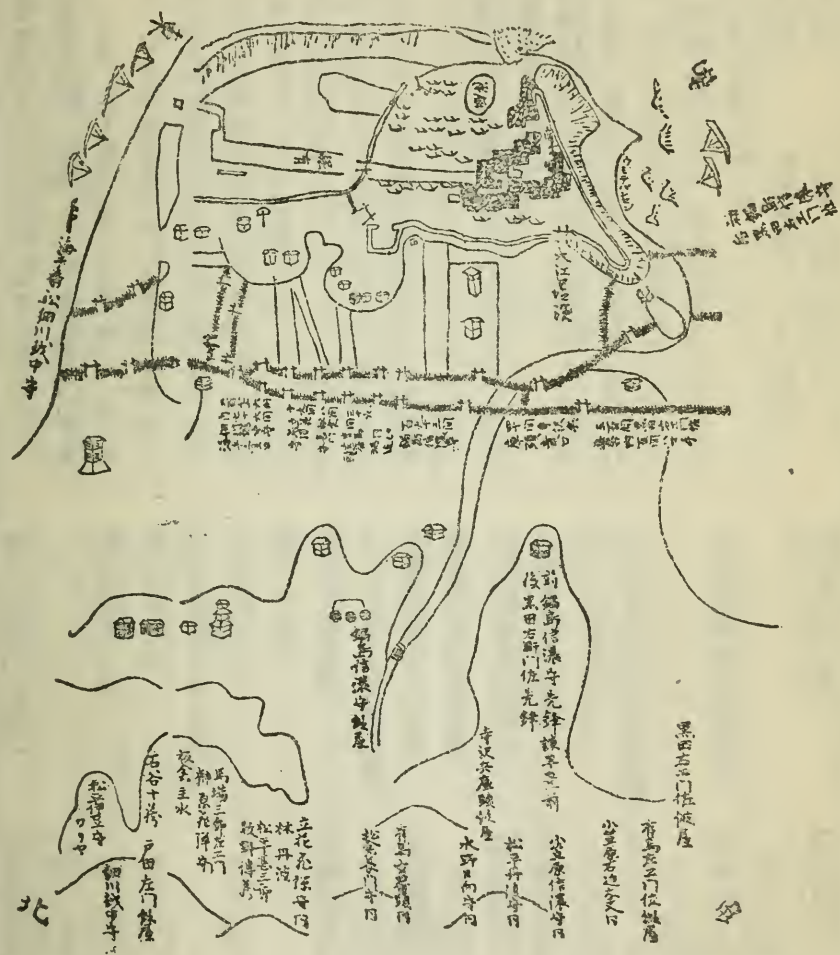
豐前國中津 八萬石

家人 討死 十九人
手負 百四十八人

小笠原右近大夫弟

豐前國高田 三萬七千石

松平丹後守源



水野日向守源

家人討死三十一人
手負百廿七人
備後國福山 十萬石

子息美作守勝俊

家人討死百六人
手負三百八十二人

有馬左衛門佐藤原直純

日向國 五萬二千石

子息藏人康純

家人討死三十九人
手負三百十二人

板倉主水正源重矩

一萬石

戶田左門藤原氏鐵

美濃國大垣 十萬石

子息淡路守

家人討死四人
手負三十二人

同三郎四郎

松平伊豆守源信綱

武州忍 三萬石

子息甲斐守源輝綱

家人討死六人
手負百三人

討死手負合討死千百廿七人
手負七千零八人

八千百三十五人

有馬玄蕃頭

立花飛騨守

松倉長門守備之御目附

牧野傳藏

手負

三千石

細川越中守

馬場三郎左衛門

二千八百石

鍋嶋信濃守備之御目附

二千五百石

神原飛驒守

寺澤兵庫頭備之御目附

黑田右衛門佐

二千石

林丹波

千五百石

松平甚三郎源去元日 千三百石

井上筑後守安信 四千石

同息清兵衛安信

中坊長兵衛

鈴木三郎九郎

能瀬四郎右衛門

山中喜兵衛

此陪臣并諸方之使者窄人戰死蒙疵者、其時不事

呈、故不載之、

廿九日、爲上使、下曾根三十郎、杉原四郎兵衛來

着、

伊豆守令諸將云、在陣日久、既積勦勞、宜歸

其國矣、自古治兵之時、發火而燒營、然此地

非敵國、且亡處而絕人家、爲他日移來之百姓

勿燒營屋、

三月大、

朔日、昨日有伊豆守令、而今日諸將破壞賊城、

二日、懸賊徒之頸於獄門、籠城之人數、男女凡三萬七

千人、

三日、賊徒之將四郎一類悉被及殺、其外生捕令斬

罪、剎至_二童女之輩、喜_レ死蒙_二斬罪、是非_二平生人心之所_レ致、所_二以浸_ニ々_一彼宗門_二也、

四日、五日、七日、八日、

九日、松平伊豆守引_二率雜兵二百計、發_二有馬_一到_二嶋

原、家中之士卒十四日發_二有馬_一、十七日到_二小倉、

十日、嶋原逗留、城主松倉長門守日々面謁、同弟右近、

去月廿七日蒙_レ疵之故不_二來謁、伊豆守左門巡_二行

城中、去十月廿六日賊徒攻_二來所々、其所_二穿破_一之

城門并至_二本丸、無_二處不_二循見_一、

十一日、嶋原逗留、十二日、同所逗留、

十三日、肥前國天草内須本、着_二船於三角_一有_二遊詠_一、

十四日、同國河内浦、自_二本戶_一經_二海路_一而來、甲斐守

渡_二海路_一、直到_二富岡_一、

十五日、同國富岡、自_レ是渡_二海上_一、

十六日、肥前長崎着_二船於茂木、經_二陸地_一而來、

十七日、長崎逗留、爲_二上使_一松平出雲守源來着、

十八日、同所逗留、十九日、長崎逗留、

廿日、同所逗留、廿一日、同所逗留、

廿二日、同所逗留、爲_二上使_一太田備中守源資宗來着、

廿三日、同所逗留、廿四日、同所逗留、

廿五日、同國平戸、自_二長崎_一至_二時津_一陸路也、大村松

千代饗應、自_二時津_一渡_二海路_一而至_二平戸_一、

城主松浦肥前守日々面謁、且於_二城中_一有_二饗應_一、

廿六日、平戸逗留、

廿七日、同所逗留、阿蘭陀人例年爲_二商賣_一、來_二于平戸_一、

自構_二其住宅_一、伊豆守左門、爲_二循見_一至_二彼宅_一、二方

向_レ海築_二石壁_一、上構_二瓦屋_一、二方接_二陸_一、亦構_二三層之

瓦屋、其高至_二檐間_一、六七間許疊_レ石爲_レ壁、其體恰如

見_二城闕_一、

廿八日、同、廿九日、同

晦日、同國唐津、着_二船於名古屋_一遊_二詠太閤秀吉家康

公御陣所、城主寺澤兵庫頭面謁、且於_二城中_一有_二饗

應_一、

四月小、

朔日、筑前銘之濱、

二日、同國赤間、黒田右衛門佐、同甲斐守、同市正迎_二

來于驛路_一面謁、

三日、豐前小倉、公用有_レ之、至_二重諭之時_一可_レ止_二小

倉_一之旨、初次飛脚奉書到來、依_レ之逗留、

四日、小倉逗留、自_レ是以前奉_二台命_一、太田備中守到着、

依_レ之有馬列陣之諸將、可_レ來_二會_一于小倉_二之旨、豫相_二告_一之、即諸將去朔日二日相追而參會、今日辰剋集_二諸將於戶田左門旅宿、備中守演_二說上意之趣、被_レ預_二松倉長門守美作國森內記、被_レ預_二松倉右近於讚岐國生駒壹岐守、被_レ沒_二收寺澤兵庫頭領地天草四萬石、

諸將欲_二退散_一之時、伊豆守止_レ之曰、有馬城縱雖_レ以_二一手_一屠_レ之、犯_二軍令_一則信綱可_レ遂_二確執_一之條、豫相_二約_一之、然鍋嶋信州先鋒背_レ法、江府參勤之時發_二志情_一云々、

諸將被_二退散_一、鍋嶋即剋到_二伊豆守旅宿、憑_二家人小澤仁右衛門_一曰、唯今所_レ被_二暢達_一御鬱憤之條、誠當然之至、自堪_二惡縮_一、然非_二我之背_一令、併御目附榊原飛驒守所_レ爲也、達_二長崎_一執_二榊原證文_一、呈示而可_レ附_レ之、其後令_二家人鍋嶋若狹守、膺_二榊原證文_一被_二陳謝_一、

五日、小倉逗留、依_二細川越中守請_一、伊豆守贈_二馬二疋_一、

六日、同所逗留、

七日、同所逗留、有_二相撲之會_一、

八日、同、於_二城中_一小笠原右近大夫有_二饗應_一、

九日、同、十日、同、於_二近邊之山田_一獵_二麋鹿_一、十一日、同、遊_二咏海布莉之明神、自_レ是至_二赤間關之道場_一、毛利甲斐守有_二饗應_一、

十二日、同、十三日、同、十四日、同、

十五日、小倉逗留、於_二小笠原信濃守宅_一有_二饗應_一、且有_二相撲會_一、

十六日、同、十七日、同、十八日、同、十九日、同、

廿日、未剋小倉出船、長州下關、

廿一日、周防上關、

廿二日、安藝釜刈、甲斐守遊_二咏嚴嶋、見_二清盛一族所納之胴丸_一、來_二會此處_一、

廿三日、備前國下津井、生駒壹岐守渡_二海路_一來謁、

廿四日、播州室、到_二本多甲斐守領地湊之宅_一有_二饗應_一、

同能登守、同內記來謁、

廿五日、攝州大坂到着、

廿六日、同所逗留、於_二稻垣攝津守_一有_二饗應_一、

廿七日、於_二淀嶋崎之條亭_一永井信濃守有_二饗應_一、

京都、

廿八日、同所逗留、於_二板倉周防守宅_一有_二饗應_一、

廿九日、草津、於_二小野宗左衛門大津宅_一饗應、

五月大、

朔日、水口、於龜山驛、本多下總守有饗應、

二日、庄野、三日、熱田、四日、岡崎、

五日、白須賀、

六日、袋井、於濱松驛、高力攝津守、

七日、岡部、八日、吉原、於小林彦五郎三嶋宅有

饗應、

九日、宮根、十日、大磯、十一日、江戸到着、

十二日、有令曰、爲吉日之間、可登城云々、依之

今日不違出仕、入夜而竊被召二九、有馬之

品、有台問、御閑談之儀、惣伊豆守不出口、故今

不能記之、

十三日、松平伊豆守、戸田左門、御目見、松平甲斐守、

戸田淡路守、同三郎四郎、於御黒書院御目見、

爲檢判、肥前國佐賀城主鍋嶋信濃守、長崎奉行榊

原飛驒守有命、召來于江戸、於評定所、有再三

之點檢、而飛驒守蒙御勘氣、令逼塞、信濃守可停

出仕之旨有台命、令閉門、信濃守及三歲末、蒙

看赦、飛驒守至翌年、被免許、

戸田左門賜采邑、大垣歸休之御暇、表御感、拜領

御脇指、其外賜物如例々、

松平伊豆守、翌年寛永十六年己卯正月六日、拜領

川越城并騎西、祿秩一倍而成六萬石、且拜領去

年租稅、正保四年丁亥七月六日、拜領常陸國府中

并武藏國羽生、領知高凡七萬五千石、

山田右衛門作物語

予生所イヘバ、難波ガタヨシナキ賤ノ境界ヲ、貧家ス
コシキニダニオキカ子テ、身ヲウキ舟ノ梶ヲタテ、イ
ヅコヨルベトタバヨヘバ、ユメミルホドノウタ、子
モナシ、コロシモ寛永庚辰秋ノ最中モハヤ過テ、スエ
ノタノミモシラ玉ノ、消ヌバカリヲタヨリトシ、江城
ノ邊ニ芝居シテ、野モセノ空ヲナガムレバ、ユフベノ
アハレスクナカラヌニ、月サヘクモリガチナレバ、ツ
レヅレナリシアマリニ、トボシ火ヲカ、ゲ、夜モスガ
ラ筆ヲ友トシ、萬ノ事オモヒノコサヌ折カラ、世ハ定
ナキモノカハ、我一トセ鎮西ノ傍ニ籠居ノ頃、肥ノ前
後兩嶋ニ卒カニ狼烟立サワギ、タエテ久シキ弓箭ノ
ホコリヲ拂ヒ、西戎ノ數勢メヅラカナル行粧ニテ、彼
嶋ニ馳ムカフ、愚蒙モナガレニヒカレ行テ、其始終粗
見聞ス、マコトニ白地ナルコトナガラ、治亂ノ跡何ト
ナクオモシロフ侍レバ、其場ニイタラヌ郷黨等、サコ
ソキカマホシカルベキト、オモヒ出ルヲタ子トシテ、
ソバロナルヨシナシゴトヲ、此三卷ニツバリ、舊里ノ

友ドチニオクル、若コレ友外ニモレナバ、サコン世間
ノ訕ハ、カリ、千々ニ思ヘドモ、ヒトヘニ下愚ノ私
輩、席會笑興ノナカダチノミ、就中徒黨ノ行働ハ、山
田衛門作言語ノ以記、攻衆ノ樣品ハサシモオホヒナ
レバ、聞ニハ精粗モ有ヤセン、唯オロカニ見聞シコ
トヲ、露モカザラズアリノマ、ニ、短筆ニ令レ染畢、

山田右衛門作以言語記卷之一

貴利師檀始發之事

南州ノエビスヨリ、吉利支丹トイヘル宗門、日域渡來ノワウジヲ、カタヘノ老翁ニトフニ、時代分明ノコタヘナシ、タバイツトナク、グハイケイシユノ心ヲヤヨセタリケン、スデニ元龜天正ノコロホヒハ、シバシバヨウリウストイヘリ、ナホシソノクワンユウヲタヅヌルニ、オキナノ曰、予齡若ノコロ、アラカジメホノキ、シハ、カノ宗旨ノソソ人ニ、バテレン・イルマン、ナドイヒシモノ本朝ニブンサンシ、アマチクシユマヒテ、ヒソカニセウシンヲナシケルハ、益ナキ佛神ニ心ヲヨセンヨリハ、デイウスヲキカウセバ、今世ハ萬端如意ニシテ、死後ハシヤウテンメイラウナリト、種々ノカウゲンキドクヲジユツシ、秋津洲ノ貴賤ニクワンケンナスニヨツテ、愚民ハコレヲカンニメイジ、一心ヲフランシラス・レキシンス、ホウキヤウヲナゲウチ、タニンコノシウニシンシヲウツス、シカルニ南蠻等ホウシンヲト、ノヘ、コンシウ、ケイシユ

ノモノニホドコスアイダ、シヨシユノボクミンラ、タチマチニ貧苦ヲサツテ、テイクワノエイヲナス、シカノミナラズ乞丐非人ニイタルマデ、レンイクヲナスアイダ、センコウブベンノキヤウミンラ、タウジノリヨクニフケツテ、コレイマ、ジヒゼンダウノハジメナリトヨロコンデ、コトノクデイウスニシンキス、サレバアクギヤク無道ノヤカラニカタブクウヘハ、キノフマデ、ハイソンセシジヤドウモ、ケフハスデニ、ハイエニオヨブ、カルガユヘニ、ホンヲフノキヤウバウハ、ナガクタヘントシタリケルトキアツテ、東照ノ天守、コノムチゾン意ニタツセラレ、コレ日域ワザハヒノナカダチナリト、オホキニゲキリンアツテ、扶桑ノ人民キビシクキウバツアリシカバ、タチマチ宗旨ヲカユルモアリ、又カノ宗門ニフカク思ヒ入リタル奴原ハ、シゴシマウデントクワンチンシ、チウバツニノゾミシスルモアリ、シカルアイダ、近年ハ日本國中ニ吉利支丹トイヘルシウシノモノ、コトノクダンゼツシタリヌトカタタル、愚オモヘラク、キンカタノセジヤウヲモウクワンスルニ、マコト四カイフウハノナンモナク、上ニ御マツリゴトスナホナレバ、下

ニハ四民ソノワザヲツトメテ、國家アンタイノヲリ
カラ、コ、ニ寛永十四丁丑十月下旬ニイタツテ、鎮
西肥前ノ國タイ鴻原トイヒシトコロノケウミン、フ
リヨニ、一揆ヲオコス、ソノランヂヤウヲタツスル
ニ、コノトキカノシマバラノ守護ヲバ、松倉長門守勝
家トマウス、長州ソノコロハ武將ノ御キウジニヨテ、
武藏國ニ參勤ス、シヨシユノヒマヲヤウカバヒケン、
カノ嶋バラノケウノ内、イニシヘノ吉利支丹ニコト
ゴトクタチカヘリ、天守ノキンボウヲサマタグルア
イダ、世ジヤウノセイヒツモ、タチマチニソウバウ
シ、九州ノシヨシフヨウヲオコシ、アマツサヘ天下ノ
ヒヤウケイトナリケル、ソノシホツノケントウハ、大
矢野松右衛門、千束善左衛門、大江源右衛門、森宗
意軒、山善右衛門トテ、コレヲ五人ノヤツバラ、キク
ワンノトウリヤウトゾキコエシ、カノ五人ノモノド
モハ、小西攝津守ノカニン、セツシウハランノジセツ
ヨリ、天草ノコホリ大矢野千束トイヒシ嶋ニキヨジ
ウノモノナリシガ、キンチンハ肥前國高來ノコホリ
嶋原ノウチ深江トイヒシザイシヨニ來ヂウシ、チン
レキヲオクリヌ、カノモノドモソノコロ、キンガウ、

リンタウノミンシユヲヲチカヅケ、ヒソカニス、メ
ヲナシケルハ、コ、ニフシギノシヨセキアリ、慶長カ
イリヤクノジセツ、アマクサ上津浦ニバテレン一人
アリケルヲ、テンカ御キンボウニヨテ、ソノコロ異國
ヘツイホフアル、カノバテレンソノトキ未鑑トナヅ
ケテ、一紙ノシヨヲノコス、ソノシユセキノウチニイ
ハク、同年ヨリ五々ノレキスウニオヨンデ、ジツイキ
ニゼンドウ一人シユツセウシ、ナラハザルニシヨダ
ウヲ留、ツウシゲンゼンタルベシ、サアラバ、トウザ
イウン焼シ、コボクニフジノハナサカバ、シヨ人ノカ
シラニクルスラタテ、海ゴウ野山ニシラハタナビケ、
デイウスヲ尊時^{ソレンジシカ}至可也ト云々、イマツク^トト、コノ
シヨシユヲカンガヘミルニ、タウチンニオヨベリ、マ
コトニ、メイシンノユイシヨニタガハズ、トウザイニ
雲ヤクルコトオビタバシ、シカノミナラズ、大江ガニ
ハノサクラヲミヨ、フジニカウクハヲアラハセリ、又
ゼンドウナラハザルニ、シヨガクラ留、ツウゼシメイ
ヨノコトハ、オノ^ツ子ニキ、エタル、アマクサ甚
兵衛ガナンシ、四郎コソイマダ若年^カタリトイヘドモ、
キリシタンノゼンニンタリ、カウザイ^カアマチクナ

ラブ人ナシ、サレバイニシヘ、デイウスヲソシヤウ
セシヲリカラハ、セジヤウモカンセイニシテ、タミノ
カマドモユタカナリシカドモ、ブシヤウノキンボウ
ニミヲマカセ、キリシタンノシウシヲナゲウチ、ブツ
シンノシン^ハニオモムキシヨリコノカタハ、ワヅ
カナルキヤウガイヲダニセイロイトナナミ^{新カ}カタク、
アルカナキカノウキヨナレバ、デイウスノメグミ、
今キタリケン、カタ^ハイニシヘノテンオンヲオモ
ヒイデ、キリシタンニシンシノヒト^ハハ、タウザ
ニハンレンアツテ、テンノタメニ一メイヲオトサン
トノゾミタマヘ、コノ宗旨ヲタツルモノ、テンカノキ
ンボウトテ、キタイノザイクハニシヨセララル、コ
ト、世ニスクナカラズ、オノ^ハ一ドウニシンキセ
バ、キリシタンヲシンホツセントイヒケルハ、コレヤ
元弘ノコロ楠兵衛正成ガ、グンシノ心ヲトランガ
タメ、テンワウジミライキニコトヨセ、ホウシヨヲ
ナセシニコトナラズ、サルホドニ、クンシユノ首農
等、モトヨリカノシウシヲホカニナゲウチ、ウチニハ
タモツヤツバラナレバ、ヲリヲエテキエツノマユヲ
ヒラキ、タウザニレンキンヲバナシヌ、カ、ルトコロ

ニ、ナヲフシギコソイデキタル、カノムラノカタハラ
ニ、左志來左右衛門トイハルヤジン有、コレモキリシ
タンニシンシノモノナリシガ、タビ^ハテンカノカ
イサクニ、イカバハシテシヨヂシケン、デイウスノフ
ルキシサウヲカツ^{ウカ}シオキ、イカニモシテ屏具^{ウケ}ヲシ、タ
モチタキトオモヘドモ、世上ヲンビンノコトナレバ、
センカタナクテ日ヲオクリ、ジセツトマチシヨリカ
ラニ、イカナルモノ、シワザニヤアリケン、カノ御エ
イ一夜ノウチニ、左右衛門子ンライシヨモウノヒヤ
ウグ出來シ、クダンノケイチウヘカケオキヌ、左右
衛門コレヲユメニモシラズ、マイテウ、ミツハイノゴ
トク、ヲノガテヤウダイヘサシイリ、ハイセントミタ
リケレバ、アリシミエイニヒヤウ具アリ、左志來オホ
キニオドロキヨロコンデ、ワレコノ年頃コヒ子ガヒ
シシンテイヲ、天ノアハレミマシ^ハテ、ス、メノタ
メノズイサウ、今コノ時ニアラハレタリ、カ、ルタツ
トキ御ツゲヲ、ナニカハ人ニツ、マント、リンシヨノ
フルキリシタンニ告ケレバ、キ、ツタヘ^ハ、シヨミ
ンキドクノオモヒヲナシ、カノミエイヲハイセント、
左右衛門ガ茅屋ニ群集ヲナスコト、市バノゴトシ、

トコロノ代官コノ由ヲキ、ツケ、オホキニオドロキ、
ヤガテ左志來ガシユクシヨヘ馳ユキミテアレバ、キ
キシハモノ、カズナラズ、ケンハイノケイニン、ラウ
ニヤクナンニヨ、オビタバシ、所司代グンジュノナカ

ヘカケイツテ、コハイカニ、オノレラハ、カホド天下
ノ御ハツトニ、カクラシイダシタルアリサマハ、言絶
筆捨ノチウクハナリト、興サメ腹ヲスエカ子テ、カノ
ミエイヲオサヘトツテ、サン／＼ニヒキサキ、ヤガテ
クワ中ヘ投イレケル、コレヲミテ、一ザノヤツバラ、
コハイカニ、モツタイナシトイフマ、ニ、グンジュノ
モノドモトリヨツテ、カノ代官ヲタチマチニチウガ
イシ、コレゾシウモンハハンジヤウノハジメニテア
ンナレ、カ、ルテンカウシリナガラ、イマナンゾ貴利
支丹ニフケイセバ、カヘツテ天ノメグミニソムキ、身
ノアダトナランコトカンゼンナリ、ヘンシモキツト、
シウモンヲトリタテ、此アイダキリシタンヲ天下ニ
セバメラレシ、ウツムヲハレント、イソギカノムラノ
者ドモモヨホシ、ソノキンリンノザイ／＼タシウノ
シユツケ、アルイハブギヤウ、ダイクワンラ、アルヒ
ハ田居ノホソツシニウチヨセ／＼、キリシタンニケ

イシユノホカハ、コト／＼クチウバツス、コレフシギ
ノ一キ、コノシマノハメツノジセツ來リヌトゾミエ
シ、

山田右衛門作以言語記卷之二

松倉人數深江村押寄事

附郷人等高來ノ城ツケ入ントセシ事

去ホドニ、マツクラ留主イノカラウドモニ、コノ旨チウシンアリケレバ、オノ／＼オホキニオドロキ、ジコクウツリテイカバトテ、馬ノリ十四五騎、ザウヒヤウカレコレ三百餘人ニ、テツボウ八十ヨチヤウアヒンヘ、カノザイ所ヘサシムケ、インギチウバツスベキヨシヲイヒツカハシケル、コロハカミナ月廿六日ウノコクバカリノコトナルニ、深江村ヘオシヨセテ、三百餘人ノモノドモ、キヲヒアマツテ、一ドウニトキノコエヲアゲケレバ、キリシタンノト、ウドモ、モトヨリゴスルコトナレバ、五六カシヤウノ^{ヤカ}ハツバラ、一千バカリオコツテ、タガイニテツボウ打チガヘ、コ、ヲセンドトセメタ、カウ、サレドモ一揆ハタゼイナリ、シロガクノ者ドモハ、ワヅカ三百ヨ人ニテ、カナフベシトハ見ヘザリケリ、シカリトハイヘドモ、シロガタノテツボウニテ、マツサキガケシガウニシラ、二

十餘人ウチタホス、キリシタンノト、ウドモ、コレニスコシキヲクレズ、ウタル、モノヲバコヘ、ヲドリコエ、ヲメキサケンデト、ウドモ、松クラ方ノ人々ヲ一人モモラサジト、ゼンゴサウヲトリカコミ、マツサキガケノ馬ノリ五六騎、ザウヒヤウ、カレコレ百ヨ人、ヤニハニウツテヲトシケリ、日ゴロサンヤヲカリメグリ、カトリヲウチシジヤウズドモ、サゲハリアラソフテツボウナレバ、一ツモアダヤハナカリケリ、コレヲミテ、マツクラガタノ人々、タカクノジヤウヲウチタツニハ、ガウニンノヤツバラ何千騎アリトモ、シムハシノサ、ヘニモオヨブベキカ、鎗刀鉾箭モイラバコソ、一々ニカラメトリ、武勇ノホドヲガウニンニミセバヤナンドイサミシガ、カレラガセイトウノフゼイヲミテ、センゲンハヅルモノモナク、一センニモオヨバズ、サン／＼ニウツタテラレ、タカクノ城マデヒキケルハ、アサマシカリシ次第ナリ、アマツサヘト、ウドモ、一里ガホドヲオヒウチシ、コノイキホヒニゼウジテ、タカクノ城ヲセメントテ、モミニモウテオシヨセ、シロジタ町ヲモヤキハラフ、城方ノ人々ト^{ハウ}筒／＼ノテイニテ城内ヘトリコミケル、ガウ人ノ

ヤツバラ、ヤガテツバイテオツツメ、オフ手ノキドヲ
ウチヤブリ、タゞ一ノリニトカ、リシガ、ガウ人バラ
ノコトナレバ、弓ヤリオホクモタズシテ、アルヒハ
棒、アルヒハ竹ヤリ、ナタナギナドヲトリモツテ、イ
ヤガウヘニカサナリ、ワレモくトス、メドモ、カノ
城ト申ハ、長州親父豊後守コシラヘオキニシ城ナレ
バ、ヨウガイトリワケカシコキニ、城内ノ人々コ、ヲ
センド、フセギケレバ、シロガタノテツボウニ、キリ
シタンノヤツバラ二百ヨ人ウタレケレバ、サシモニ
タケキト、ウラモ、ツバイテセムルニ及バズ、ソノマ
マヒイテノキニケル、

山田右衛門作以言語記卷之三

松倉人數籠城ノ事

附城内ヨリ二江村ヘ糧取ニ出シ事

シカルアイダ、松倉ガタノ人々ガウ人ニ恐懼ヲナシ、
ソノ後ハ一揆ヲ、チウバツノ心ザシマデモナク、ヒト
ヘニタゞ高來ノジヤウヲガウ人ニ入ラレジトノミ、
ロウジヤウニコソ及ビケレ、サレドモ城内ニハ、長州
留主イノテイナレバ、サブラヒドモ、多カラズ、ワツ
カ五十ヨキ、ザウヒヤウカレコレ七百ヨ人トキコエ
シガ、ゲニンハミナ所ノ者ニテアリシニヨリ、ト、ウ
ニジヨエンノモノドモナレハ、ケライノヤツバラ、コ
レランゲキニトリマギレ、城内ノブダヲススミハタ
ラクヨシニモテナイテ、タブンヨセテノガウニント、
一ツニコソハナリニケル、シカルアイダ城内ノ人々、
ヨセクルヤツバラヨリモ、メンくノ下僕ニ心ヲツ
カヒ、ユダンスンゲキナカリケル、サレドモ、カクテハ
カナハジトチ、ヨクくセンサクヲタバシ、數百人ガ
中ヨリ百ヨ人エラビ出シ、タチマチニチウバツス、ナ

ホモ城内ノカボク心モトナク、コトサラ留主居ブニ
ンニテ、此ラウジヤウハナリガタシ、キンリンノ御カ
セイヲコハバヤトノセンギニテ、鍋嶋細川兩公ハ、在
江戸ナリシコトナレバ、リヤウ國ノ家臣ニコノム子
使者ヲタテ、カセイヲコソハコヒニケル、コレニヨテ
ナベシマ信濃守勝茂ノ留守居伊左早豊前、三千ヨキ
ニテ出陣シ、鍋シマノシロモト龍造寺ヨリ五六里オ
シイデ、マヅ刈田ノ庄ニヒカヘタリ、細川越中守忠利
ノ留守居ヨリハ、志水伯耆守トイヒシ者、人數四千餘
インソツシ、肥後國川尻トイフ所ヘオシイダシタリ
ケルガ、サレドモテンカノ御ハツトニ、タトヒリン國
イカヤウノコトアリトテモ、御ゲヂナキニ國守ヨリ
ソツジニ人數イダシナバ越度ナラント、カ子テオキ
テノ上ナレバ、家臣ドモノ愚慮ニマカセ、加勢ハイカ
ガヤアラント窺テ、鎮西ノ御目附豊後、府内ニキヨヂ
ウアル牧野傳藏、林丹波守ヘ此ヨシチウシンシタリ
ケレバ、イヨ／＼上意ヲマモルベシ、ソウソク御ハタ
モトニチウシンシ、追テサシヅヲナサントアリシカ
バ、兩國ヨリ加勢ハサラニ出ザリケリ、カ、ルノビノ
ビナルシワザナルニヨテ、數日ヲウツシ、イヨ／＼ト

トウホウキシテ、八千ヨキニナルトカヤ、ソノ、チハ
一キノヤツバラ、タカクノ城ヘモオシヨセズ、ヒトヘ
ニ軍起ノケイリヤク、豐群糧集ノヨウイトヅキコヘ
シ、カクテ日數ウツルホドニ、十一月上旬ノコロ、嶋原
ノ城ヨリ北ノ方、三江トイヒシ在所アリ、コレハシロ
ガタノ者ドモナルニヨテ、城内糧絶ノヲリフシナレ
バ、カノムラニ勝家數萬石ノ糧藏アリ、城内ヨリ兵糧
ヲトランガタメ、馬ノリ十四五騎、ツガウ三百ヨ人、テ
ツボウ百チャウアイソヘテ、カノ三江村ニサシツカ
ヒケル、城ヨリ三江ノソノアイダ一里ガホトゾアリ
ケル、此三江村カズアマタニテ、半分ハ切支丹、又半
分ハシロガタナリシガ、リンシヨノ吉利支丹等コノ
ヨシヲハヤクミテ、ト、ウ數百人一度ニドツトオシ
ヨセケレバ、シロガタノ者ドモアハテサワギ、シカジ
カテツボウヲモハナタズ、トルモノモトリアヘズ、ワ
レサキニトゾニゲニケル、ソノトキシロガタヨリノ
大將ニ、高橋彌次右衛門、高島二郎左衛門、入江與右衛
門、コレラハテツボウガシラナリシガ、一足モトリノ
カズ、ウチジニヲトゲニケル、ソノ外ノ人々ハ、一支ニ
モ及バズ、城内サシテ引ニケル、ソノ後ハ、郷人共ミナ

カノ近郷コトハ、ク、キリシタンニシタガヘイレ、糧
藏ヲモ、ト、ウノヤツバラ、ウバヒトリシトキコエシ、

山田右衛門作以言語記卷之四

天草吉利支丹起發ノ事

附大矢野大司庄カラメトラル、事

カ、リケルトコロニ、肥後國內アマクサトテ、四萬ヨ
石ノ離嶋アリ、コレハ寺澤兵庫頭忠高ノリヤウ分也、
コノ嶋モ一萬ヨ石ノザイシヨ、コトハ、クキリシタ
ンノ宗旨ヲヲコス、コノトコロノヲコリハ、生住アマ
クサノ農夫ニ甚兵衛ト申者アリ、カノ甚兵衛キリシ
タンノ宗旨ヲ偏極ノ者トキコエシガ、ツチニシマバ
ラ長崎邊、カナタコナタト順行シ、ヒソカニキリシ
タンノ宗門ヲ進教シテ、近年ハ肥後國宇土ノ郡ニ在
宅シ、スウ年ヲオクリ、デンサク、シヨウバイニ、セイ
ロライトナミシガ、カレガ子ニ四郎ト云ヒテ、ソノコ
ロ十六歳ノワラハアリ、才智ナラブ人ナク、手跡普通
ニスグレ、儒學ニ心ヲヨセ、一學兩悟ノウツハニテ、
ソノヲリフシ、アマツサイ、シヨジユツヲオボヘ、シ
ヨミンヲ狂見シケルアイダ、名譽ノモノトゾ人々申
ナシニケル、シカルニヨテ、近年ハカノ四郎ニ方々遍

進サセ、甚兵衛ハタゞ隱居ノヤウニテ居タリケル、サ
レバカノ四郎シヨジユツトツクシ、アラタニキドク
ヲナシ、シヨミンニミスルニヨテ、ミナ善心ヲヒルガ
ヘシ、コレコソデイウスノウマレカハリ、タゞヨノツ
子ニアラジトテ、コトゞク此宗旨ニ心ヲソメヲハ
ンヌ、コトサラアマクサハ四郎ヲノゴコキヤウナレ
バ、父子トモニ所縁音信ノタメニ、アマクサヘコヘ、
ヒトヘニコレラス、メケル、時ニ嶋原ヲコルトキイ
テ、アマクサニアリケル四郎父子、天草頭民ノ者ドモ
ヲマチギヨセ、サテモワレラガヤウニアリガタキ宗
旨ニ心ヲヨセントスレバ、天下ノ御法度トシメシ、ス
デニ死ザイニオヨブヤカラ多シ、ツラゞ事ノヤウ
ヲアンズルニ、此宗旨トダニ云モノハ、科アルモ科ナ
キモ、トモニチジヨクヲアラハシ、人間ニアラザル口
ヲシキハテラスル、シカラバイヅレノミチニテハテ
ンモオナジ、タゞ此宗旨ニ心ヲヨセ、此ウラミヲハラ
シテ、ハテナントキハメテ、デイウスノタメニ宗門ハ
ンジャウノ心ザシヲオモヒサダメナバ、チンゼイミ
ナキリシタシニ傾趣センコト疑ナシ、サアラバシヨ
コクトモニ、コトゞクワガ宗門ニトリタテンコト、

タナゴコロノ内也、内々嶋原ノ者共ニモソノ細教ヲ
ナセシガ、テンノトキヲヤカンガミケン、ハヤ意趣オ
ヒラクトキコユ、ヲノゞイカバハ思フトイヒケレ
バ、モトヨリアマ草ノ大司庄渡邊小左右衛門ト云モ
ノ、甚兵衛ゲンサイノ第四郎ガタメニハ叔父ナレバ、
イヨゞ此ギニドウジケルウヘハ、大矢野ヲハジメ
トシテ、天草中タブンコノ意趣ニ心ヲヨセベキノク
ハダテヲナシヌ、カ、ルウヘハ、イマダセジャウニ分
明風聞ナキサキニ、四野ガ老母兄弟ヲモ宇土ノ郡ニ
オキケレバ、コレヲモヒキコシ、又宇土邊ヲモ時宜ニ
ヨテス、メントヤ思ヒケン、カノ渡邊小左右衛門ヒ
ソカニ上下四五人ニテ、小船ニノリ、細川越中守忠利
ノリヤウナイ宇土ノ郡甲ノ浦ト云トコロニ船ヲヨセ
アガリケル、シカレドモ天草一キノコトハリン國ニ
カクレナク、肥後ノ大守ノ臣下口々ニミナトゞニ
番ヲスエ、往還ノ者マデモキビシクカイサクスルニ
ヨテ、小左右衛門ガ陳謀ノガレガタク、ソノマ、カラ
メトラレニケリ、アマツサヘ宇土ニアリケル四郎ガ
ハ、兄弟ケンゾクニイタルマデ、コトゞクメシト
ラレ、ヤガテロウシヤトナリニケル、

山田右衛門作以言語記卷之五

天草城代藤兵衛尉唐津使者立事

附唐津勢天草押向事

此コトハヤアマ草ヘキコエ、ノコル一キドモ手ニア
セヲニギリ、ナゲキシトハキコヘケレドモ、カヒアル
ベキニテアラバコソ、ソノ、チハイヨ一揆ノ心
ザシヲ思ヒ定メテ、年貢捧菓ニイタルマデ、スコシモ
公納イタサズトコソ、オノヨクリウス、アマクサ
グンカウノダイクワン、田居ノサムラヒドモ、コノヨ
シヲケンモンシ、イカニトサワギ、ケイバツセントシ
タリケレドモ、タゼイニ不勢カナヒガタクヤ思ヒケ
ン、コトク富岡ノ城ヘニゲカヘリ、ジャウダイ三
宅藤兵衛ニツゲケレハ、三宅大キニヲドロキ、コハイ
カニ嶋原ノホツキヨゾガマシゾキ、ツルニ、アマ草
マデカ、ルベシトハ思ヒモヨラズ、コレタバゴトニ
アラズ、サアラバ大ヤノ上津浦邊ニウツテヲイソギ、
サシツカイ、イマダ多ゼイニナラザルサキニ、コトゴ
トクタイヂシテ、靜嶋トナスベシトテ、手勢百ヨ人、

トコロノ地サブラヒ、マタカラツヨリザイシヨ
シヨニメシオキシボソツノモノドモマチギヨセ、三
百ヨ人アリケルニ、テツバウ六十ヨチャウアヒソヘ、
スデニカノザイシヨヘヲシムケントシタクセラレ
ケレバ、カノニゲキタリシダイ官、田居ノボンツド
モ、此ヨシヲミテ、コハモツトモニテ候ヘドモ、ハヤ
大ソウノ一キニテ候、スデニハヤ、カウツラアタリヨ
リ、オホ矢野、千束、ゾウノ嶋、ヤナギノセトニイタ
ルマデ、コトクハヤ吉利支丹ニ心寄シタルトオ
ボヘ候、ソノウヘ、カリムシヤドモヲ、セウノサシ
ツカハシ、シゼン一キニウツタテラレ、ハイグンニヲ
ヨビナバ、御ブリヤクムナシカルベシ、コトサラ當所
ノテイヲモ御ゾンジナクシテ、御勢ヲチラサセ玉フ
コト、イカバヤアラント申シケレバ、三宅モツトモト
ヤヲモハレケン、サアラバマツトミヲカノ城邊ヲオ
シシヅメント議定シテ、近ガウノヤツバラノ子妻ヲ
シチニトリコメ、カラツヘ此ム子チウシンシテ、カラ
ツ勢ヲゾマチギケル、サテカラツヘ此ヨシキコヘケ
レバ、家老ドモオホキニオドロキ、オノヨリアヒ、
ウツテノヒヤウヂヤフマチノナリ、サレドモ忠高

留守居ノテイナレバ、ハンダン一意ニマカセガタク、家老人モチヨリアヒテ、議定バカリニテ日ヲオクル、カ、ルホドニアマ草一キノ吉利支丹等、アソコノムラムラ、コ、ノザイリニヲシヨセ、ミナキリシタンニシタガエキ、シセンソノウチニ、城ガタニ深志ノ存民ヲバ、タチマチ打ハタスニヨテ、シタイ不進ノ者ドモ、コトクシタガヒキ、サレバ、アクジ千里ヲユクナラヒ、タレツグルトハナケレドモ、トミヲカニ此ヨシキコエケレバ、三宅イヨ、オドロキ、ナニトテカラツノ人々ハ、カ、ルダイジヲキ、ナガラ、出デシノ延遲ザヤト、搔頭拳手ニヲモハレケレドモ、エンシヨカイロヲヘダツレバ、心マカセニナバラコソ、トミヲカヨリカラツマデ、四十八里ノ海路ヲバ、チウシンノ使船コギアヘズ、サレバ、カラツニハユウクワンニカマヘテ、與タクセラレシヲフシニ、一キ大ゾクノヨシ、頻リニ急ヲツゲケレバ、ワカザムラヒドモウチヨツテ、ヨシナヤ、三宅イマダカホドノコトナドニ周章ハ、タバニ老耄シタマフカヤ、サレバ名ヲユシサブラヒ、ムホンシンバツト云トモ、サホドサワグベキヤカラナラズ、コトサラ、田夫野人ノ一キバラ、鋤

鋤ヲトツテ田作コソハ上手ナリトモ、武勇ハイカデシルベキゾ、アマ草ヘハタレユカン、カレユキテケチラサント、望諍ノテイナレバ、申ニヲヨバズ、センホクニイタルマデ、ノコラント云モノハナシ、家老ドモノ下知ニハ、忠高公在江戸留守居ノテイナレバ、アマ草ハワヅカノ小嶋也、此城下ヲアケントハ、イカナルセンギナリケルゾ、一キバラト思ヒ、カロキニツイテノゾミタマフカ、イヅレモガシヨ存ニハマカセガタシ、サレバトテ、此ミチニイヅレヲワキテトバメンハ、自餘ノウラミモアランヅレバ、クジトリニサダメテ、イソギシユツデンアルベシト、オノノ寄アヒ、センギニテ、サラバトクジヲトリケレバ、マヅ岡嶋次郎左衛門、同七郎左衛門、澤木七郎兵衛、原田伊與守、コノ人々が大將分ニテ、千五百人インソツシ、十一月五日ニ、ヒゼンノカラツヲシユツセンシ、順風ニホヲアゲテ、オナジキ七日ニハ、ヒゴノ國アマ草ノコホリ、トミヲカノ城ヘツキニケル、ヲノノ人馬船ヨリアゲ、ソノ夜ハトミヲカニテ夜ヲアカシケリ、トミヲカノ城ヨリ五里ホドテキチンヘイタリ、本渡トイヘルトコロアリ、此トコロヘオシイダシ、一キノテイヲモキ

キトバケ、ソノサタスベシ、カウツラマデ、コノ城ヨ
リヲシヨセンハ遠路ナレバ、敵徒不相ノウチニ人馬
ツカレ、時ニイタツテカナヒガタシトノセンギニテ、
オノ〱此儀ニドウジ、アクル八日ニハ、トミヲカノ
城ヲイデ、本渡ニコソハツキニケル、コノ本渡嶋子
ノアタリヲバ、ハヤサキダツテ、ト、ウ等掌隨セシカ
ドモ、ガウ人バラガ計策ニハ、サダメテカラツ勢ム
カハバ、此トコロ一ダイジノモチ口也、吉利支丹ニ心
ザシナキテイニモテナシ、カラツ勢トコ、ロヲアハ
セ、シカルベカラン時コクヲミテ、カウヅラニチウシ
ンヲナスベシ、ワレ〱オシヨスルトミタリセバ、メ
ンメンガ家〱ニ火ヲカケ、裏切セヨトミツ定シ、
シゼン武家ヨリハカラレテ、コ、ロカハリモアレバ
トテ、本渡嶋子ノト、ウラノ人ジチドモヲ、カウヅラ
ニトリコメケルトゾキコヘシ、カ、ルトコロニ、寺澤
人衆ハ、ユメニモコレヲシラバコソ、皆ミンヲクニデ
ンドツテ、ドウロノ者ヲヨビ出シ、コトノヤウヲトヒ
ケレバ、所^豊モトヨリ一キノドウルイナリケレバ、カ
ラツガダノ人々ヲオモヒノマ、ニ僞誑シヌ、サン候、
此アイダ、カウツラヘンノ者ドモ、嶋子タウシヨへ使

ヲサシコシ申ヤウ、天帝ニシンケイシタテマツル
ガ、モシマタイハレ是アラバ、タバイマヲシヨセ、コ
トコドクウチハタサント云ヒコシヌ、内々嶋子トウ
シヨノモノドモハ、タガヒニ縁昵ノコトナレバ、一同
ニ心ヲアハセ、イマ、デ忠高公ノ御セイレンヲカウ
ブツテ、イマサラ所守ヲソムキタテマツルベキブギ
ヤアラント、タガヒニ類諾シマカリ有ノトコロニ、ア
マツサヘ、カ、ルニクテイナルツカイナレバ、ナジカ
ハドウシンイタスベキ、アクコウノヘンタウツカマ
ツリ、カノジトウラヲ、ヲツカベシ候、ソノセツ四鬼
ノ御城代へ、此旨言上イタサント、センギセシムルト
コロニ、カウヅラノヤツバラ、ウツテヲヤコサント、
マヅソノヨウジンニ時日ヲウツシ、トカクエンイン
ツカマツリ候キ、シカレドモンノ、チハ、イカバヤ
オモヒケン、シマコ當所へモウツテヲコサズ候、コ
レハタバトミヲカノ御城代ニヲツレヲナストヲボ
へ候、サダメテ御勢コレマデ御出陣ト、ゴウ人ドモウ
ケタマハリ候ハバ、ナヲシケウクノオモヒヲナシ、
カウサムツカマツルニテコソ候ハメ、サナクトモ嶋
子邊へハ、イヅレナリトモ御一所、ヲシイダサセタマ

ヒナバ、カノチノ者モ、チカラヲエ、カウヅラノヤツ
 バラハ、ヲソレヲナサントゾンジ候ト申ケレバ、オ
 ノオノコノ儀モツトモトキ、ナシ、三宅藤兵衛ヲ大
 將トシテ、アヒトモナフモノドモニハ、林又右衛門、
 同小十郎、大野助左衛門、國枝清左衛門、ソノホカサ
 プラヒ十五六人、ツガウ二百ヨ人ニ、テツボウ五十チ
 ヤウアヒソヘ、アクル九日ニ、嶋子ニコソハツカハ
 シケル、コノ嶋子ト申ハ、南ニ高山ガバトシテ、北ハ
 海上ビヤウ／＼タリ、東西ハ山道ノケウナンナレバ、
 ワヅカ一騎ウチノ阿克シヨ也、カノ嶋子ヨリ敵所カ
 ウヅラマデハ、ワヅカ一里ノアイダ也、ミカタノジン
 シヨ本渡マデハ、ソノアイダ四里ニテ、アマツサヘ、
 一里ノ遠干潟アリケレバ、シホノミチヒニ、トキヲウ
 カバウトコロナレバ、ナニゴトアリトテモ、カケアハ
 スベキヤウハナシ、マタ栖本ノタチヘモ、吉利支丹等
 ヲシヨセンヨシノ風聞アリケレバ、コレニモ加勢ト
 シテ、岡嶋七郎左衛門、柳本五郎左衛門、コノ兩人ニ、
 テツボウ二十ヨチヤウアヒソヘテ、スモトノタチヘ
 ヲシムケル、マタカノシホヒノワタリ口ヘモ、ヨウジ
 ンノタメトテ、澤木七郎兵衛ニテツボウ二十丁アヒ

ソヘテ、ハリバンニコソ出シケレ、サレバキリシタン
 ノドウルイ、カラツゼイ、本渡嶋子ヘヲシイデチンド
 ヲテアルヨシヲキ、一キバラガ計サクニ、カラツ勢
 ヲチラサンガタメ、アソコノムラ、コ、ノ在里ニヲシ
 ヲセ／＼、ヒヲカケ、レバ、カラツ勢ニコノコトトキ
 ヲウツサズキコヘケル、シカルアイダ、アソコニ二十
 キ、コ、ニ三十キ、ヲサヘノタメトテ、ツカハスアイ
 ダ、敵徒ノリヨケイニゼウシテ、ホンドニハ、ムゲニ
 人コソナカリケレ、

山田右衛門作以言語記卷之六

嶋原一揆之徒頭等天草四郎大將立事

サテモ嶋原キリシタンノ頭民等、ウチヨツテノヒヤウゼヤウニハ、カ、ルウヘハ大將ヲソナヘテ、諸人ノ心ヲムスバズハ、全勝ノホドウタガハシ、イザヤ四郎ヲ宗門ノツカサニトリタテ、ウツタ、ント、オノノヒヤウギードウシテ、嶋原ホツキノムラノヨリ、大矢野四郎ガトコロヘツカヒヲタテ、先年宗門ヲボンエキシメルコト、コウクワイ也、自今以後貴童ヲキリシタンノ正縁ニサダメ、ハンダン御下知ニマカセナントイヒヤリヌ、四郎此由キ、ソノギニオイテハ、ソノテノ人數ヲ着到シ、宗門ノ誓紙ヲカタクシタ、メテ、早速持來アルベシ、アマ草ハ過半我宗門ニケイシユス、イマ手勢五千ヨニテ、大矢野色津ニアリヌトヘントフス、シカレバ嶋原村々ノ人數、マヅ八千ヨアリケルニヨテ、ソノ頂農等四郎ガ下知ニマカセ、誓紙連判ヲト、ノヘ、アマクサヘ打コエ、四郎ニカクト云ケレバ、四郎エツキノマユヲヒラキ、我イマダ、レイ

ジャクナレバ、至極ノケイサクニオヨビテハ、モツトモオノノノ謀智ナラント、ケンシ、テ、サアラバ先嶋原ヘウチコシ、軍ノヤウヲモギヂヤウセント、嶋嶋ノ内、大江トイヒシ在所ヘウチコシ、人遠地離ノ小嶋ヲ談合嶋ト名ヅケテ、オノノヨツテヒヤウヂヤフニハ、先人數一萬二千ヲ二手ニワケ、モギ峠日比峠ニ人數ヲサシヲキ、長崎へ使者ヲタテ、吉利支丹ニヒケイニヲヒテハ、ヲシヨセ火ヲカケ、ツイトフシ、軍神ニマツリナント、四郎カクトギチヤウシテ、スデニウツタ、ント用意ヲナセシトゾキコユ、

山田右衛門作以言語記卷之七

吉利支丹等嶋子へ取懸事

井本渡合戦之事

カ、ルトコロニ、本渡ノガフ人等、時節トヤ思ヒケン、
ヒソカニ一キガタニチウシンシタリケレバ、カウヅ
ラノキリシタン等、モトヨリ誘有ノ者ドモナレバ、此
ヨシ嶋原ヘツグルニオヨバズ、味方小勢ナリトモ、嶋
子本渡ノ軍勢ヲケチラサンコト、クビスラメグラス
ベカラズトテ、十一月十三日、ステニ嶋子ホンドヘヨ
セントシタリシガ、ケフハ日柄ヨカラズトテ、翌日十
四日ソウテンヨリヲシヨセント、其日ハムナシクト
バマリヌ、カ、ルトコロニ、嶋原大江ニウチヨツテ、
ヒヤウヂヤウナセシ一キドモ、唐津勢、アマクサ退治
ニハツカウスルニヨテ、カウヅラノ者ドモサキダツ
テオシヨスルト、オノノキイテ、長崎ヘノテダテノ
ヒヤウヂヤウヲサシヲキ、キザサラバ、マヅアマ草ヘ
ヲシヨセ、カラツゼイヲ誅伐シ、手モトノヲゴリヲト
ドメ、ナガサキヘヲモムカント、四郎時貞ニンジユ五

千ヨヒキツレテ、小船ドモニトリノツテ、アマ草カゼ
イニヲシワタリ、マヅ上津浦ニコギヨツテ、コトノヤ
ウヲ聞ケレバ、翌晨ニヨセントシタクス^{ル後カ}。ヨシヲ云、四
郎キイテ、ヨキヲリフシニ來レリ、寺澤人數カ、ルカ
セイノヨシヲキ、オヨブトモ、ヤガテヨスベキトハ
ヨモオモヒヨリサブラハジ、サレバ太公ガ兵道ノコ
トバニ、兵勝ノ術ハ、ヒソカニ敵陣ノキヲサツシテ、シ
カモスミヤカニ、ソノ利ニノツテ、トクソノ不意ヲウ
テトイヘリ、タゞ今夜深更ニオヨンデ、河内ノ郷、
嶋子ナカクヘヒソカニ人數ヲオシヨセ、未明ニ嶋子
ヘトリカケナン、ハマ手ハ嶋原方ノ者ドモガ請取ニ
シテ、フナデヨリカ、ルベシ、アマ草人數ハ山手ヨリ
押ヨセ、海陸ノモフ勢一度ニドツトトキノコエヲツ
クリカケ、ゼンゴヲツ、ミセメカケバ、事ユウテヤ
ウナルカラ津勢、途ヲウシナヒ、中々一タテモアハス
ベカラズ、身カタ治定ノ勝軍ナラン、ヲノノイカニ
ト云ケレバ、ミナモツトモト同ジ、ソノ宵ハ嶋原方ノ
ガウニンハ、ミナカフヅラノナギサニデンドリス、サ
ルホドニ、ソノ夜モアケガタニナリシカバ、號令ヲト
トノヘ、ヲノノサダメオイタル相圖ナレバ、海手

へハ嶋原ノトタウラ、山手ハトコロノガウニンドモ、
コロシモ中冬十四日、マダ夜ヲコメテ押寄タリ、嶋子
ノ軍勢ハ、モトヨリガウ人原トヲモヒアナドリ、敵ヨ
セントハツユモヲモハズ、定テトタフノヤツ原ハ、カ
ラツ勢ノ出陣ヲツクヘキ、カフヅラヲオチサリナ
ント、ユダンノホドコソフカクナレ、シカレドモナイ
ナイノヨウジンニ、ウヘノ山ニトホ見ノ物ヲアゲオ
イテ、シゼント、ウノヤツバラガ、ヨセンモヨウヲ見
タリセバ、イソギチウシンイタセトテ、五六人召オキ
シガ、モトヨリトヲミノヤツバラモ、トコロノ者ニテ
アリシニヨリ、ナジカハチウシンライソグベキ、寄ク
ルト、ウトウチトケ物語ナドシ、カラツ勢ノ優緩ノ
有サマヲコマ^ハト云キカセ、ステニ夜淺ニナリシ
トキ、トラミノヤツバラ立カヘリ、只今チキヨスルト
オボヘテ、スマンギノ中ヨリ、白ハタ、白ヅルシ、オビ
タバシウ見エテ候、イソギマヅ本渡ノ方ヘヒキトラ
セタマヒ、何レモ御一所ニテ御フセギアルベク候ト
云ヒケレバ、三宅藤右衛門オホキニオドロキ、ナニト
申ゾ、敵トノ間ハ、カホドニエテアルゾ、太刀ヨ刀ヨ
馬物具ト、ヒシメクトコロニ、ハヤ一揆ノヤツバラ、

ウヘノ山ヨリ嶋子ノ東ノ口、大森ノキワヘ五六手、一
度ニドツトオシヨセケレバ、海手ヨリハ嶋バラノト
トウドモ、フデヒタ^ハトツケサセ、コレモ五手ヨウ
チアガリ、東ホクノ一キ、一同ニトキノコヘヲアゲケ
レバ、陸地モシンドウシ、オビタバシウヅキコヘケ
ル、一キドモガシタクニハ、難働子妻ノ者ドモヲ、オト
コノ躰ニサマヲカヘ、白布ノハタ、白紙ノノボリヲイ
カニモカロクコシラヘテ、カノナントウノヤツバラ
ニサ、セ、左右ニモタセケルホドニ、一人ニハタ三ボ
ンヅ、ゾサ、セケル、シカル間、山海ヘンハ、偏ニミ
ナ敵トハタヲナラベ、ナンマンキトモ見エワカズコ
ソオボヘケル、マコトニシヨ天ノコトナレバ、朝ボラ
ケノキリマジラウタル中ヨリ、クダンノセイキヲサ
シアゲタルハ、嶽^{オヒタケ}シキトモ、中^ハニ申ニオヨバザリ
ケリ、モトヨリアヒヅノコトナレバ、トコロノガウ人
ドモ、タバニ吾屋ニ火ヲカケ、レバ、カボク躰ハ少々
ヤケシ、タルモ有トカヤ、嶋原ガセイノモノドモハ、
四郎ガゲチニ隨テ、アマリハタラキニハカマハズ、本
渡ノカヨヒヂトリフサギ、中ニトリコメウツベキト
テ、西ノ手ヘコソミチ^ハタレ、モツトモガウ人ガタ

ニハ、人ジユハオ、シ、敵ノ情ヲバ知ル地形ノケンナ
 シ、モトヨリ明知ノコトナレバ、武家コノ時ニ至テハ、
 ハイゲン甚モツトモナリ、シカレドモ、大將三宅藤右
 衛門ハ、イカバハセラレケン、ホンドノ方ヘハヤクヒ
 キトリケルトカヤ、ソノ外ノ軍兵ハ、トリカコマレタ
 ケレリバ、センカタナクヤ有ケン、南ノ高山ニタドリ
 アガリ、スモトノ方ヘ落行モオホカリケルトヅキコ
 ヘシ、コノ南山ハ、ヨノツ子人ノカヨフベキーコロニ
 テハアラ子ドモ、マコトノトキニハケンナンヲモキ
 ラハズ、タニフケヲモエラバズ、ニゲノビケルコソア
 サマシケレ、サレドモンノ中ニ、林又右衛門、オナジク
 小十郎、大野助左衛門、コレラ三人ハ、ハヒボクヲヤ
 ハチニケン、オホ勢一キノソノ中ニテ、シバシサ、ヘ
 テタ、カヒ、吉利支丹ノヤツバラヲ、六七人ヤリ附シ
 ガ、ドウ勢ハツヅカズ、タゼイニブセイ、コトサラガ
 フ人ハテツボウノ上手ニテ、ソノマ、ソコニテウチ
 死ス、ソノ外ノ者ドモハ、俄事トハ云ナガラ、右往左往
 ニ逃チツテ、敵徒ニオモテヲアハセ、タ、カヒヌルハ
 ナカリケリ、寺澤方ノ軍勢廿餘人ウタレケル、キリシ
 タンノヤツバラ、コトハジメノカツセンニ、カドイデ

ヨシトヨロコフテ、ソノマ、カチドキツクリカケ、イ
 ザヤコノキホヒニテ、本渡ノ陣ニオシヨセン、カノシ
 ホヒノワタリモ、コレヨリ貳里ノ間ナレバ、ヨリカラ
 鹽モヒキテンズ、ヤスムニヲヨハズトテ、ソノ足ニテ
 ゾカ、リケル、サレバ三宅藤右門ヤウ、ニヒキ
 トツテ、柳ノセトラウチワタリ、澤木ニシカ、ノヨ
 シヲ云、ソレガシモコ、ニテ一戦トハ思ヘドモ、此小
 勢ニテ中々勝利ヲウベシトオボヘズ、マツ本渡ニカ
 ケトラリ、イヅレモユダンスベキニ、コトノヤウヲ云
 キカセ、アレニカクヒキウケ、一キノヤツバラ、コト
 ゴトク追拂センコトヤスカルベシ、爰シモクツキヤ
 ウノサ、ヘバナレドモ、目ニアマリヌルト、ウラガ、
 ズニ乗タルコトナレバ、トテモ勝利ハアリカダシ、只
 敵ヲ半途ニ妨滞セバ、ホンドノイクサ利アルベシ、フ
 カクノハタラクムヤウ也、サキニテマイリアフベシ
 トイヒステ、コントホリケレ、澤木七郎兵衛ハ、モト
 ヨリヨウイノコトナレバ、ラウジウドモヲ近附テ、
 アヒカマヘテ、カタ、三宅ガコトバヲキ、オデナ、
 勝利ハ多少ニヨラバコソ、コ、ヲ死場トキハムベシ、
 ソレ侍ノツ子、ノゾムハ此トキ也、只今身方ノ小

勢ニテ、アノ大軍ニウチカタバ、日本一ノ高名也、吉利支丹ノヤツバラナニホドマ近クヨセタリトテモ、澤木ガアヒヅヲ守テ、一度ニワツトモミタテ、弓テツボウヲハナツベシト、キウニシカウヲイヒフクメ、五十ヨキノ者ドモヲ、ヤブカゲヘサツトヒキカクシ、シヅマリカヘツテ居タリシガ、ステニト、ウノマウゼイイサミス、ンデオシキタル、澤木コノヨシ見ルヨリモ、時分ヨシトヤ思ヒケン、六韜ノ十四變長路ノインハ爰ナリト、イサムバカリヲチカラニテ、一度ニドツトヲコシタテ、爰ヲセンド、ウタセケレバ、アダ矢ハヒトツモナケレドモ、ワヅカテツボウ二十四チヨウノコトナレバ、大ゼイノト、ウラ、スコシモサワグケシキナク、ウツテツボウヲモノトモセズ、ウタル、モノヲバフミコエ、オメキサケンデカ、リケレバ、澤木モシバシサ、ヘシガ、多勢ニブセイ、カナフベキヤウアラザレバ、二十ヨキホドウタレテ、本渡ヲサシテヒキトリヌ、ガウ人ノヤツバラ、ナラシツバイテ進カクル、本渡在家ノガウ人ドモ、コノヨシヲミルヨリモ、カチテアイヅノコトナレバ、テバニワガ家ニ火ヲカケテ、ゼンゴ左右ヲトリカコミ、トキノコエ

ヲアゲケレバ、寺澤方ノグンゼイ、アンニサウイノ裏切ナレバ、中一戰ニモ及バズ、岡嶋原田小笠原澤木ナンドヲ始トシテ、太刀物具ヲタイスルヲ吉ニシテ、コトク四鬼ノ方ヘヒキトリヌ、オリフシ又スモトノタチヘ居タリシ岡嶋七郎左衛門柳本五郎左衛門モ、イヒアハスルコトアリトテ、コレモンノジセツ、ホンドニキタリアヒ、サイハヒナリシコトナレド、ゼンゴノ敵ニアキレハテ、コレラモミナ富岡ノ城ヘヒキニケル、サレドモ、ソノ中ニ、三宅藤兵衛、佃八郎兵衛、並河九兵衛、青木勘右衛門、佐々小左衛門ナド云シモノ、コレラ五人ハ、アトニトバマリタ、カヒシガ、身カタノハイグンヲミテ、イヅクマデモヒクベキゾ、カヘセトイサムレド、タイグンノナビククセナレバ、前デシカヘサントスレドモ、後デンス、マズ、子ハヲヤラステ、郎從ハ主ヲシラスシテ、ワレガチニトニゲケレバ、太刀トルモノハ刀ヲワスレ、弓トルモノハ矢ヲシラズ、足ガルドモハコトク、テツボウ玉ヤクウチステ、カラ、イノチタモツテ、ハウバウヘコンオチニケル、サテモ大ゼイノシソツノ中ニ、三宅、並河、佃、青木、佐々ハ、フミトバマツテ、五人一

心ニ同ジテ、ヨセクルト、ウ二十ヨ人、手ノ下ニツキ
 フセ、大ゼイヲ追ハラヒ、猛勇ナリシツノ躰ハ、タダ
 イスクナクキコエケル、シカリトハイヘドモ、ゲニ大
 ゼイノキリシタン、前後左右ヲトリカコミ、モミニモ
 フテセメケレバ、命脱ノヒマモアラズシテ、ヲシヒカ
 ナ、五人トモニ一キノテツボウニアタツテ、空死ノホ
 ドコツアハレナレ、大將ユウクワンノテイナレバ、カ
 ボクトウハナヲモツテ、ブヨフジンノトコロニ、フト
 マフゼイオモヒ切タルヤツバラ一萬餘人オシヨセケ
 レバ、ナニ者カコノトキニ、勝利ヲウベシトハ見エザ
 リケリ、

山田右衛門作以言語記卷之八

唐津勢富岡籠城之事

附富岡ノ城ヲ徒黨等兩度攻事

サルホドニガフ人ドモ、ソノ日ハ兩所ノトリアヒニ
 ミナツカレ、コトサラ夕日カタブケバ、富岡ヘハ追テ
 モユカズ、ミナノ本渡ニ陣ドリヌ、サテソノ日富岡
 ヘタテコモル人ジユ、マツ岡嶋次郎左衛門、同七郎左
 衛門、原田伊豫守、大竹加兵衛、稻田平右衛門、淺井ト
 菴、三宅藤右衛門、澤木七郎兵衛、嶋田十郎左衛門、テ
 ツボウ頭ニハ關善左衛門、國枝清左衛門、柴田彌五左
 衛門、小笠原齊介、ソノ外侍十七人、富岡ノ城ヘトリ
 コモリ、ヨウガイカマヘテイタリケル、岡嶋、三宅、原
 田ナド城内シヨシノ下知ヲナセシトキコヘケル、コ
 ノ城ト申ハ、ブン内セバシト申セドモ、ヨフガイ世間
 ニキコエタル、マコトニカシコキ城内ニ、大石火矢大
 テツボウヲ、矢ザマノニシカケケレバ、ガウ人ノヤ
 ツバラ何萬キヨセタリトテモ、オツベキ城トハミエ
 ザリケル、サル間、ガウ人ドモウチヨツテノセンギニ

ハ、コノ分ニテ打ステオキテハセンモナシ、モトヨリ
カラツノ軍勢ニ、手ナミノホドヲバミセオキヌ、イマ
ダオクビヤウガミノサメヌマニ、イザヤ富岡ノ城へ
押ヨセテ、タゞ一攻ニセメオトシ、アマ草中ヲシタ
ガヘテ、富ヲカラ身方ノ子ジロニモチイント、ト、ウ
オノノ議定シテ、同キ十八日、吉利支丹ノヤツバラ
一萬ヨキニテ、富岡マデハヨセズシテ、城ヨリ一里へ
ダテ、四鬼トイヒシ所マデ、人數ヲコソハオシイダ
ス、件ノ白ハタ白ノボリヲ、數千本サシツラ子、人數
ゾロヘヲシタリケレバ、トミヲカノ城ヨリ一里ヘダ
テ、見エタルテイハ、凡ソ二三萬モ有ラントコソ見
エニケル、ソノ日富岡ヘヨセントヲモヒシガ、人數ノ
テイヲホノミセテ、ホドナクコソハヒキニケレ、シカ
ルニ依テ富岡籠城ノ人々モ不審ヲナシ、定メテ夜ガ
ケニヤセンヅラント、用心ヲナス所ニ、サハナクシ
テ、翌日十九日早天ヨリ吉利支丹ノヤツバラ、トミヲ
カノ城ヘオシヨセ、時ヲドツトヨミタテ、高オトラジ
トセメケレドモ、城内ヨリノテツボウスキマアラズ
ウチケレバ、集賢ノコトキヨセテドモ、シヤウギダヲ
シニスル如ク、二百ヨ人片時ノアイダニウタレケリ、

ト、ウノモノドモ、カクテハ叶ハジトヤオモヒケン、
強テ城ヲセメズシテ、ソノマ、チンヲヒキニケル、城
内ノ人々コノ一戦ニ力ヲエ、イヨノケンゴニヨウ
ジンス、サルホドニ四郎時貞、ガウ人原ヲ近附ス、メ
テ曰、カホドノ小城ナンドヲバ、コレホドノ人數ニテ
セメオトサムコソヤスカラ子、ツラノコレヲアン
ズルニ、持ダテヲモ用意セズ、只ウカノトセメカケ
テ、味方フカクノ負ヲナシ、敵ニ變利ヲユサセタレ、
今度ハ勝負浮沈ノ合戦ナレバ、ソウゼメセントフレ
ヲナシ、一萬二千ノチャクタウ附、モチダテカイダテ
用意シテ、同キ廿一日、マダ東雲モヒカザルニ、又富
岡ヲトリカコミ、一度鯨波地ヲウゴカシ、魚リンノ如
クオシヨセテ、死テハ昇天、生テハ家トミヲカノ城主
也ト、オノガ宗旨ノチンジュヲトナヘタテ、竹タバラ
ツキカザシ、ウタル、モノヲバフミコエノセメカ
カリ、オモヒ切タルハタラキナレバ、城内ノ人々モ、
フセギカ子テゾキコヘケル、カクテト、ウノヤツバ
ラ、手痛急ニモミタテケレバ、三ノ丸ヲバオシヤブリ、
二ノ丸マデゾコミ入ケル、誠ニ城ノ浮雲コト氷淵ヲ
フムニコトナラズ、サレドモ城内ノ人々、サイゴノハ

タラキコ、ナリト、死ヲ此節ニアラソヒ、上下一同一
 心シテ、本丸ケンゴニタモチシガ、ツチノ三宅藤兵
 衛ヨウイヲヤシタリケン、クツキヤウノ弓ノ射手ド
 モガ、火矢オビタシウイカケレバ、寄手ノト、ウ
 ラ、イサミカ、ツテツキカザストテ、竹タバモバラ
 ラトヤケ、レバ、カナウベキヤウアラズシテ、ウチス
 テ、ニグルヲバ、テツボウノ上手ドモ、スキマアラセ
 ズウツホドニ、麻虎力稲・竹園ノゴトクオシヨセタリシ一キ
 ドモ、五百ヨキホドウタレケレバ、サシモ氣勇ノガウ
 ニンモ、カナフベキヤウアラズシテ、ソノ日モ城ヲエ
 ノラズシ、ムナシク陣ヲヒキニケレ、寺澤家頼ノサム
 ラヒノ、ホンド、嶋子ノチジヨクヲバ、コノ城ニテソ、
 ギケル、浮雲カリシコトドモナリ、ソノノチハ一キノ
 ヤツバラ、トテモカナハジトヤモヒケン、城ヲモセ
 メズ、四郎ハ加ゼイノト、ウヲヒキツレテ、嶋原口ノ
 津ヘコソカヘリケレ、サテ又トコロノガウ人ハ、コト
 ゴトクカウツラニトリ籠、ヨウガイカマヘ、用心シテ
 コソ居タリケレ、

山田右衛門作以言語記卷之九

嶋原天草ノ徒黨等爲ニ退治ニ諸勢押向事

附一揆郷人等原ノ城ヘ楯籠人數ヲ配事

カ、ル所ニ上使トシテ、板倉内膳石谷十藏兩人、尊詔
 蒙テ、肥前嶋原エ下向アル、ソノ意趣ハ、兩嶋ノガウ
 人等、一揆ノオモヒヲナスハ、タゞ所守松倉寺澤ニ
 厚歛恣政ノウツブン有テ、事ヲ吉利支丹ニキスルナ
 ルベシ、シカラバ兩使發向ヲト、ウノヤツバラモレ
 キカバ、サウソク路次ヘイデムカヒ、旨趣ヲテンカヘ
 ソタクセン、ソノオモムキニシタガヒテ、ソノ沙汰ニ
 及バント、ヤスキ心ニ思ハレケレバ、路次ヲタバモイ
 ソガズシテ、心シヅカニクダラレケル、サレドモト、
 ウノヤツバラ、上使ヘ指ムカフマデモナク、カナタコ
 ナタヲヂヤキシテ、ヒトヘニ一キノ色ヲアラハセリ、
 シカルニ依テ、兩上使肥前嶋原松倉ガ城ヘチャクヂ
 ンナリ、カクテ鎮西ノ御メツケ、豊後府内ニ居住アル、
 牧野傳藏、松平神三郎、林丹後守、又ソノ比長崎ノ守
 護代ナリシ馬場三郎左衛門モ、オノノ駛艇鞭掉ニ

テ、高木ノ城ヘハセアツマリ、兩使ノイシユヲ承知シ
テ、イヅレモヨリ合センギアル、カ、ルトコロニ在江
戸ナリシ嶋巴拉ノ所守松倉長門守勝家、アマクサノ
領主寺澤兵庫頭忠高、兩人モ給知ノ一キ募重ノ旨上
聞ニタツシ、御暇給ツテ、夜ヲ日ニツイデ、オノノ本
國ヘ歸城セシム、サテモ上使ノ評定ニハ、カクテハコ
トユクベキニハアラザレバ、マヅリンゴクノダンゼ
イヲマチキヨセ、一キノヤツバラケイバツノテイヲ
ホノミセバ、ト、ウノヤツバラコラヘカチ、カウサン
ナドカセザラン、ヨシノソレニモオドロカヌ自
業自得、果ヲマチキナバチカラナシ、ト、ウバラ一々
ニ運機ヲハチテスツベシト、オノノギヂヤウ一同シ
テ、リンゴクノ人數ヲコソマチカレケレ、マヅ同國ノ
コトナレバ、鍋嶋人數ヲ早速嶋原ヘシユツデンアル
ベシト云ツカハシ、又キンリンナレバ、筑後兩城ノ軍
勢モ、キツト松倉ガ城ヘ出陣アルベシト使ヲタテ、ナ
ラヒノ嶋、天クサヘモ寺澤小勢バカリニハカユクベ
キニアラザレバ、細川越中守忠利ノ人數ヲアマ草ヘ
ハイダサルベシトチウシンシ、此オモムキヲサツソ
ク江戸ヘ飛馬ヲタテ、ヲツテキウメイツカマツリ、尊

意ヲヤスンゼントノ言上トコソキコヘケル、シカル
間、肥前龍造寺ノ城主鍋嶋信州ハ、武藏國江戸サンキ
ンニ依テ、チャク男紀伊守元茂、欠男甲斐守直澄、一
萬五千ヨ人引卒シ、同國嶋原ヘハツカフアル、サテ筑
後久留米ノ城主有馬玄蕃頭豐氏モ在江戸ナリシコト
ナレバ、子息兵部大夫忠里、八千餘人シタガヘテ、嶋
原ヘコソ出陣アル、同國柳川ノ城主立花飛驒守茂政、
コレモ在江戸ナリケレバ、猶子左近忠茂五千餘人ヲ
引卒シ、タカクノ城ヘハツカウアル、サテ又肥後ノ軍
勢ハ、細川越中守忠利父子トモニコレ又江戸在勤ニ
依テ、家臣長岡佐渡守有吉頼母佐兩人、一萬餘人ヒキ
ツレテ、アマ草ヲモテヘ出陣ス、カ、ルトコロニ、ア
マ草ノ領主寺澤兵庫頭忠高ハ、居城カラツヘ歸城シ
テ、在國城ヲカゾフレバ、ノコリスクナク、ヒンデン
シトミヲカ籠城セシムルユヘ、ワヅカ八百餘人ヲヒ
キグシテ、アマ草ヲモテヘ出船ス、同所軍奉行ニハ、牧
野傳藏、松平神太郎、林丹波守コノ三人トソキコヘ
シ、爰ニ細川越中守忠利ノチャク男肥後守光利、イマ
ダ幼歳ノ始ヨリ、武藏國御ハタモトニ在任ニテ、ソノ
コロ十八歳トキコヘシガ、肥後國人數、アマ草ウツテ

ニハツカウノヨシ告來リ、御暇ヲノゾミ給ヒ、夜ヲ日
ニツイデ肥後ノ國ヘハセクダリ、一萬ヨキヲ引卒シ、
十二月六日、コレモアマ草オモテヘ出陣アル、詰ル内
ニアマ草中ノト、ウドモ、此ヨシヲツタヘキ、カナ
ハジトヤ思慮シケン、トルモノモトリアヘズ、小船ド
モニトリ乗テ、コトハク嶋原ヘニゲワタリ、一處ニ
ナリシトキコヘケル、シカルニ細川ノ先後ノ軍勢、ナ
ラビニ寺澤兩勢ニテ、アマ草中ヲ尺地モノコラズカ
イソウセシトキコエシガ、モトヨリキ、落シタリケ
レバ、ト、ウ一人モ居ザリケル、サルニ依テ細川光利
ハ、アマ草ツ、ガナシトテ、寺澤人數ニヒキワタシ、
手ヲ空シテ本國川尻ノ津ヘニンジユヲオシ入レ、嶋
原加勢ノウツテヲノゾミ玉フトキコエケリ、サテ又
天草上使三人ハ、有馬ノ浦ヘオシワタリ、板クラ石谷
兩人ニクハ、リタマフトキコヘシ、サテモ嶋巴拉ア
マ草兩所ノ一揆等、兩鴻ノ所守、ナラビニ、リンゴク
ノ諸軍勢、吉利支丹誅罰ニハツカウノヨシヲキ、四
郎ヲ始、一キノ頭首等、オホキニオドロキ、コノマ、
シヨノニ人數ヲメシヲキ、勝利タヤスカルマジ、サ
レバタカクノ郡有馬ノウラハラノ城ハ、ムカシヨリ

名ヲ得シ城、天守ヨリ一國一城ノ外、キンゼイノ法式
タルニ依テ、カノ城守ナクシテ、今ハハヤ荆棘ノハラ
ノジヤウトナリス、シカレドモヨウガイチツトモム
カシニタガハズ、此城ニコモリナバ、鎮西ハサテヲキ、
天守ノ御出馬タリト云フトモ、城中ニ糧米鉦樂ツキ
セズバ、落城オモヒモヨラズ、ソノ上ヘ天帝ヲ世尊勸
廣シ奉ラントノ籠城ナレバ、勝利ヲウベキコト、タナ
ゴ、ロノ中ナリトテ、カノ古城ヲ十二月朔日ヨリ十
日中ニ、城中普請ヲト、ノヘテ、コトハク人數糧米
ニイタルマデ、トリコミケルトゾキコエシ、カノハラ
ノジヤウト申ハ、二方ハ海マンノトシテ、コトサラ
屏風ヲ立タルゴトキノケンソナレバ、船ヲヨスベキ
ヤウモナキ、トリワケ手アキノアク所ナリ、二方ハ又
キシタカクンバダチ、ソノ下ハフケ也、城ノソウガハ、
マハリ百餘町モアルラン、ソノ間ニ數千ノセイキヲ
タテナラベシガ、風ニヒルガヘツテナビクケシキハ、
秋ノ野ノヲバナガスエニコトナラズ、サテ築地ヲタ
カクツキ、サマヲキリ、サカモギヲヒイテマチカケケ
レバ、ナニホド多勢ナリトテモ、タヤスク落ツベキト
ハ見エザリケリ、城中ニハクツキヤウノケンミンラ

二萬餘人、ソノ外働弱子妻ノヤツバラ一萬六千餘、都合三萬六千餘人トゾキコエ、原ノ城總大將ニハ、件ノワラハヲ受領サセ、アマ草四郎太夫時貞ト號シテ、本丸ニシヤウ用ス、オナジクトモナブ者ドモニハ、蘆塚忠右衛門、渡邊傳左衛門、赤星主膳、馬場休以、會津宗印、同右京、毛利平左衛門、林七左衛門、松竹勘右衛門、三宅次郎右衛門、久田七郎右衛門、秦村休津、打田奎丞、コノ十三人ハ籠城ノラウ人衆トテ、諸民崇用シ、時貞同坐ニツラナツテ、伽慰ノ者トゾキコヘケル、サテ城中モチロノ大將分、山田右衛門作、大浦四郎兵衛、働民二千餘人シタガヘテ、本丸ノ持口カタメタリ、二ノ九猛農ノ頭首ニハ、千束善左衛門、上總助右衛門、同三平、戸嶋捨右衛門、此四人五千二百ヲシタガヘテ、二九ヲコンカタメタリ、二ノ九ノトリ出シラバ田崎刑部ガウケトツテ、寄農五百デカタメタリ、三ノ九ヲバ、大江源右衛門、布津村吉藏、堂崎對馬、北有馬久右衛門、此者ドモ二千五百ヲ引卒シ、持口ケンゴニタモツタリ、同出丸ニハ、ト、ウ五百餘人ヲ有馬ノ掃部ヒキマハス、大江口ヲバ、櫛山、小濱、千々輪、口ノ津、上津浦村、此五箇村ノ者ドモヲ、大矢野三左衛門、一千四

百デカタメタリ、池尻口ニハ安徳木場ノモノドモ六百ヨ人、義村右兵衛木場作左衛門ゾヒキマハス、田尻口ヲバ深江次右門、五百ヨ人ヲウケトツテ、持口ヲコソカタメタリ、コノ外大矢野松右衛門山善左衛門兩人ニ、健民二千餘人アヅケオキ、持口アヤウキトコロニハ、加勢ノタメノ浮人也、サテ又軍奉行ニハ、有江監物入道シテ休意ト號ス、コレヲ始トシテ、蘆塚忠兵衛、松嶋半之丞、布津村代右衛門、アマ草玄札、此五人ヲバ、軍奉行ニ定ケル、ジヤウ中諸事ノヒヤウ定人ニハ、上總村、有馬村、有江村、布津村、田崎村、深江、三江、木場、チ、輪村、津浦、下津浦、大矢野、カヤウノ在家村々ヨリ、日來民首ノモノドモヲ、二十三人サダメキラ、ナニゴトニオイテモ、ヒヤウデヤウノ時節ニハ、コノ者ドモガウチヨツテ、トカクノ議定ヲナスニヨリ、二十三人ノ談合人トゾ申ケル、使バンニハ、池田清左衛門、口ノ津左兵衛丞、チ、輪作左衛門、此モノドモトゾサダメケル、夜マハリノバンガシラ、四鬼丹波守義安、柄本左京進之時、此兩人ハ古老ノテガラニントゾ申ケル、城中ノテツボウハ、二千ヨチャウトキコヘシガ、ソノ總大將ハ、柳瀬茂右衛門、鹿子木右馬

助、時枝隼人正トテ、此三人ハ、何レモ六十猶豫ノ古
士ナルガ、日夜朝暮ニハセメグリ、持口ユダンナキヤ
ウニ、テツボウヲコソウタセケル、サテハタガシラニ
ハ、高句權八楠浦孫兵衛兩人也、總奉行ニハ、蜷川左
京、森宗意軒、カクノ如ク、ソレノ持口ヤクツケ
ヲナシ、武家ヲウツシ、武勇ヲタモチ、ウヘナキ仕合
ドモニフルマフハ、タメシスクナキ次第也、

山田右衛門作以言語記卷之十

十二月廿日原城一番攻ノ事

シカル間、松クラ長門守勝家ヲサキ手トシテ、鍋嶋紀
州元茂、同甲州直澄、立花左近忠茂、有馬兵部大夫忠
里、オノノニンジユヲ引卒シ、ハラノ城ヘオシヨセ
玉フ、上使板倉石谷ソノホカノ御目附、何レモ出陣
マシノテ、ハラノ城ヲミ玉ヘバ、アンニ相イノ次第
也、コレハユ、シキ大事ナルベシ、ガウ人バラト思ア
ナドリ、ソコツニカ、リ玉ハズトモ、マヅムカヒヂン
ヲトリ玉ヒ、セムベキテイヲミセシメバ、ト、ウノカ
リアツメタル勢ナレバ一和ニケンゴハヨモアラジ、
タブンカウサンノ扱佗目前ナリ、ナイシセムベキホ
ドナラバ、諸手不_レ合シテナリガタシト、板クラ石谷
ギヂヤウニテ、オノノムカヒチンヲゾ居ヘラレケ
ル、サテアルベキニテアラザレバ、ヨセテノ軍勢カズ
ノテツボウ、大石火矢ニテ、日カズ送リウチケレドモ、
城中ノヤツバラ、カツテカウタクノテイモナク、サラ
ニコト、モセザリケル、シカルトコロニ、松クラ長州

ノ後陣ナリシ、立花左近、有馬兵部大夫サキテヲノゾミ、敵城マヂカクシヨリヲツケ、ヒトヘニテツボウズクメバカリニテ、ムナシククワウインヲクラル、サルホドニ十二月十九日ノコトナルニ、板クラ石谷諸將ニムカツテノタマフハ、カクテ鳥兎ヲオシウツシ、イツマデトテカアルベキゾ、マヅ今夜諸勢ニトキノコエヲアゲサセ、夜カケノテイヲアラハシ、城中ノヨウダイヲウカバヒミン、ソレニモオソレズ、強敵ナサバ、ヨシノ寄手小勢ナリトモ、ト、ウバラノ籠城ナレバ、ニンジユハイカホドアリトテモ、セメオトサシコト掌握ナリト宣ヘバ、諸將ノメンノ一同ニテ、ソノ日ノ暮ニモナリケレバ、シヨグンゼイ夜カケノテイニソラゼメシ、トキノコエヲアゲケレバ、城中ノト、ウラモ、同クトキヲ合セツ、シヅマリカヘツテ居タリケル、シカル間、板倉内膳ノタマフハ、此マ、居テハセンモナシ、一セメセントノギヂヤウニテ、軍ノセイバイヲゾセラレケル、マヅ鍋嶋ノ人ジユニ西松山ヲ乗トラセ、トキノコエヲアゲサセバ、城中ノトウドモ、大半ハ西ノ手ヘウチイデナン、シカラバ東ノ大手ハ變隙ナルベシ、ソノトキ立花人ジユハシヅ

マリカヘツテヲシヨセ、カラメテノトキノコエヲ相圖ニシテ、一度ニドツトセメイラバ、タトヒフセギタタカフトモ、追手カラメテモミアハセ、タバ一ノリニ乗捕ント、板クラ内膳指圖ニ依テ、十二月廿日トラノ刻ヨリ鍋嶋人ジユ一萬三千人、モトヨリ、相圖ノコトナレバ、西ノ手松山下ニヲシヨセテ、トキヲドツツクリカケ、カノ松山ニヒタノ乗アガリ、ト、ウノ立オクノボリドモカナグリトツテ、オメキサケンデセメカケケレドモ、コノ松山ト申ハ、遠見セシニコトカワリ、結ナリナル狹山ニテ、人數ヲタツルニトロナキ切所ノ山ニテアリケレバ、城中ノヤツバラ、スコシモオドロクキシヨクナク、本丸ヨリ横矢ニミオリシ、弓テツボウヲハナツコト、篠衝雨ニコトナラズ、サシモノ鍋嶋大人數、指圖ノ山ヲバノリケレドモ、此鉦箭ニタマリカチ、四度路ニナツテ見エケレバ、元茂直澄コレヲ見テ、叶ヒガタクヤ思ハレケン、コトハクク人數ヲコソハヒキ入ケレ、サテ又立花人數ハ、丑ノ刻ヨリシノビヤカニ人數ライダシ、大手ホリキリギハマデ、夜ニマギレ持ダテ、カイダテトリ持テ、相圖ノ時刻ヲマチシ處ニ、鍋嶋人ジユノ時ノコエトヒト

シク、左近忠茂手勢五千餘騎ヲ勇メモミタテ、楯竹手把ヲツキカザシ、東ノ大手ヘ雲霞ノゴトクセメヨセテ、只一ノリニトス、メシガ、寄手ノアンニ相違シテ、城中ノヤツバラカ子テ定メシコトナレバ、持口切ニハタラク間、三ノ丸ノ大將分、大江布津村堂崎ナド、三千五百揆引マワシ、爰ヲセンドトフセガセケレバ、寄手多勢ノ人々ヲ、遠キハテツボウニテウチヲトシ、近ヅク敵ヲバ大石アマタトリ持テ、オメキサケンデウチケレバ、勢アマツテツキカザス、タテ竹タバモ、ミデンニウチクダカレテ、タバヨフ所ヲ、城中ノイテドモ、サシツメ、イケル間ニ、方ノ坂ヨリコロビヲチカサナツテ、友道具ニツラスカレテ、手負死ヲイタスモノ、ソコバク也、コレニモシラマズ、ナヲ屏ノ手ヘセメヨルヲ、ハヤリ長刀ニテツキチラス、寄手ノ人數、コ、ロタケクハイサメドモ、ドウ勢ハツバカズ、サシモ勇氣ノ忠茂モ、カクテハ勝利アラジトヤ思ハレケン、ソノマ、陣ヲヒキトリヌ、ソノ日立花左近手ニウチ死ノサブラヒ、マツ立花三左衛門、十時吉兵衛、佐田清兵衛、渡邊次郎右衛門、綾部藤兵衛、車田三郎右衛門、岡田久右衛門、小野掃部、コレヲサキトシ

テ、人持物頭廿八人討死ス、ソノ外手負ノ侍六十九人、ザウヒヤウカレ是討死手負三百八十餘人トゾキコヘシ、鍋嶋手ニハ、強戰ニ及バチバ、シカルベキ侍ドモハオホクハ損セズ、鉦矢ノ手負ハオホカリケリ、シタジタ足輕ドモ、是モ二百餘人討死ストゾキコエ、其外方々國々ヨリ、上使ニツキシ武士ドモ、三十四人討死ス、松クラ長州ノ手ニモ手負ヲカウブル者多シトキコヘケリ、ソノ日城中ニハ、死人ハ一人モナシ、手負ハ少々アリトカヤ、是軍ハ勢ノ多少ニモヨラズ、只ハカリコトノ圖ノ當違ニ依ルトハイヘドモ、此時ノヤウダイハ、アナカチ城ヲノルベキ手ダテノゴクイニアラズ、カクセムベキ風勢ヲ城中ノヤツバラミタリセバ、サダメテカウサンヲヤセンズラント、試切ノ意趣トキコエケレバ、コトワリスギテオボエケリ、

山田右衛門作以言語記卷之十一

元日原ノ城二番攻ノ事

カクテ光陰矢ノ如ク、極月二十日ニナリニケル、カ、
ルトコロニ、天守ノ御目代トシテ、松平伊豆守信綱、戸
田左門氏繼、カサ子テ御下知ヲ蒙テ、有馬ヘ下向トキ
コヘシガ、スデニ著船明々日トフウブンス、板クラ、石
谷キ、給ヒ、何レモ寄手諸將ニムカツテノタマフハ、
肥前有馬ノ一キバラ退治ノタメニ、自他ハセムカヒ
シトコロニ、カサ子テ信綱サシ下サル、條ハ、サダメ
テサンヌル廿日ノ城攻ヲシソシタルニヨツテ、御
逆鱗トオホヘタリ、サレパスギニシ城乗ニ、ドウ勢ツ
ヅカザルニ寄テ、寄手フカクノマケヲナシ、世ノ人口
オサヘガタシ、ツラ／＼愚按ヲイタスニ、此度ノ城攻
ハ、古來ノ例モイリガタシ、其謂ハ必死徒黨等數萬ノ
籠城ニ、味方モ敵ニ對揚ニテ、カクマデカクオシ詰カ
コムコト、農民トオモヘバコン、古今珍事ノ城攻也、
シカリトハイヘドモ、城ニハ糧道タヘテ、後詰ノ助成
ナシ、コトニ一キノアツマリ勢、俄ニ發スコトナレバ、

彼是虛實オホカリキ、味方ハ敵ニ對スレバ、一騎當
千ノ猛民ト謂、糧道水木自由也、カクノ如キノ實ヲモ
チ、ト、ウノキヨ城ヲセメンコト、ナニ、ヨツテチ、
スベシ、今度ハ前ニヒキカヘテ、諸手一同ニ大手ヨリ、
一向ヒツ死トセメイラバ、城ヨリ射出ス鉦矢ハ、剗
那ノ間ノコトナレバ、手負モサマデハヨモアラジ、堀
ウラヘドツトセメ寄テ、ヤリ太刀間ニオヨンデハ、ガ
ウ人ノヤツバラ、イカデカフセギトバムベキ、ソレニ
日カズヲククリナバ、近日信綱ハセクダリ、他勢ヲ以
テ此城セメヲトサンニ至テハ、カタ／＼ワレラニイ
タルマデ、トシナキコトニナリユキテ、ホトンド後日
ノ悔ヲイカバセン、只トニカクニ此勢ニテ、キウニ一
揆ヲセメヲトシ、ラチアケバヤト議定シテ、アラタマ
ノ年ノハジメハ、敵モ味方モ祝心不意ノトキナレバ、
翌年元日ニ惣ゼメセントゾサダメラレケル、諸將ノ
メンメンコノ儀モツトモシカルベシトテ、ヲノ／＼
用意ヲブゼラレケル、城ゼメノ時ドリハ、辰ノ一天ト
ゾ聞ヘケル、今度大手ノ先ガケニハ、有馬兵部太輔ト
サダマリケル、松倉鍋島諸手トモニ相圖ノトキヲゾ
待タレケル、然所ニ忠里一手ハ素ヨリ先陣ノ用意ナ

レバ、諸手ニ先ヲセラレジトヤオモヒケン、又先ガケ
ノ印シニ諸軍ニヌキンデ夜ノ間ニ城ヲセメヤブリ、
後陣ニチンクワイサスベシトヤ思ハレケン、又鶏明
ノ比ホヒヨリ、スセンノ人ジユクリ出シ、城ノ大手
三ノ丸堀キリギハヘオシヨセシガ、城中ノト、ウド
モ、此由ヲキ、ツケテ、健ミンノヤツバラ一千バカリ
ウチ出、弓鐵炮ヲトリモツテ、降雨ノ如クウチカケ、
レバ、ヤサキニス、ム士卒ドモ、討死手負ノ別チナク、
一千餘人時ノ間ニウタレケレバ、心タケクモ押寄シ
久留米ノ軍ゼイコトク、寅ノ半バモスギザルニ、
サンクニ敗北ス、城中ノヤツバラ此勢ヒニゼウジ
テ、夜討ノタメカ、ヌケガケカ、優シク寄セシ人々ノ
暗夜ヲタノミニグルカト、惡言ハイテ追ウチス、ニガ
シキアリサマ也、寄手殘勢ヲ見テ、過不及有間
ノ城ノリカナト、カボクノヤカラハ云アヘリ、サルホ
ドニ、後陣ノ軍勢ハ、カチテサダメシ元三ノ刻限ニモ
ナリケレバ、諸手一同ニ大手ノ城戸ニオシヨセテ、時
ヲドツトツクリカケ、タテ竹タバヲツキカザシ、
進ニス、ンデヘイウラマデニツキケレドモ、城中大
手ノ多勢共、一人モシリゾカズ、テツボウ、弓、ヤリ、

ナタ、長刀、大石、大木トリモツテ、近附ヨセテノ軍勢
ヲ、ミヂンニナレトウチケレバ、或ハテツボウニウタ
レ、或ハナタ長刀、大石等ニウタル、モノ、幾千人ト
云數ヲシラズ、シカル處ニ、城中ニハ、四郎ヲハジメ老
士ドモ、コマカケマハシ、ザイフツテ、ヨセテノ人數
ハ手ワケヲセズ、只一方ヨリカ、ルトミユ、カチテノ
用意ハ此節也、山大矢野ガ加勢ノ人數ヲサシクハヘ
ヨト下知ヲナシ、助成ノ勢ヲオシアハセ、大手ノ持口
五千餘人ノト、ウドモ、コ、ヲセンド、フセギケレ
バ、ヨセテ多勢ノ軍兵モ、死ヲカロンジ、名ヲオモン
ジ、討死コ、ゾト思定シテ、オモテモフラズカ、リシ
ガ、モトヨリツヨキ大手ノキドニ、合力勢ハ一倍セリ、
テツボウ弓ヲシゲク立、ス、メルヨセテノ軍兵ヲ、近
近トヒキウケテ、エラビウチニテウツタリケル、サス
ガ寄手ノマウゼイモ、此キヨクセンニ勇氣折レ、ス、
ミカチテゾミエニケル、板クラ内膳コノ由ヲ見タマ
ヒテ、控捲ノアマリニヤ、一陣ニテ、ミ出テ持タルザ
イヲ振リマハシ、不進ノ士卒ヲ勇メント下知シタマ
ヒシトコロニ、城中ヨリノテツボウニテ、ハカナクナ
ラセ玉ヒケリ、石谷十藏松平神三郎モセントウニヌ

キンデ、手キズヲカウブリ玉ヒニキ、カクテ寄手ノ軍勢ハ、サスガヒクベキ上使ノ御下知モナカリシカバ、城ヘモカ、ラズ、マタメンノ陣屋ヘモカヘラズ、タバモウゼイノ人々、中有ノヒヤウチンニテ、ト、ウノ的ニゾアタリケル、シカル間、諸將ノメン、此マ有テハセンモナシ、ヲノ人数ライレントテ、辰ノ刻ヨリオシヨセテ、未ノ刻ニヒケケルハタバゴトナラズミエニケリ、軍サンシテキ、ケレバ、ソノ時シモ城中ニハ、ラウシノトモガラウチヨツテ、カ、ルゼンシヤウアリナガラ、イザヤヨセテノヒキイロナルニ、追討セントタクミシガ、サスガ兵家ノシルシニヤ、カホド亂シ大軍ヲ、イクサヲモツテシヅト、クリヒキスルヲ、四郎見テ、イヤ十勝ヲコノムハ負招ノモトイタルベシ、今コノトキニ追ウチハアシカリナントセイスレバ、イヅレモナリヲシヅメケルトゾキコユ、ソノ日ヨセ手ニウタル、人数、マヅ有馬忠里家頼ニハ、討死ノサブラヒ九十ヨ人、手負ノサブラヒ百七十五人、ザウ兵ドモニウチ死手負千百有餘人、鍋嶋家頼ノ人々ニハ、大頭モノガシラ、サブラヒブンノモノドモ三百八十三人ウチ死ス、手負ノサムラヒ四

百ヨ人、ザウヒヤウカレコレウチ死手負二千五百ヨニンナリ、松クラ長州家來ニハ、討死ノサブラヒ十七人、手負ノサブラヒ四十九人、ソノホカアシガルザウニンドモニウチ死手負三百二十七人、同松クラ右近手ニツイテ、ヲシヨセタリシ諸宰人、二十二人ウチ死ス、コノ外方々クニ、ヨリ上使ニツキシ軍使ノサブラヒ三十餘ニンウチ死ス、同手負ノモノドモ五十ヨ人トキコユ、惣ジテソノ日ウチ死手負オシナベテ三千九百二十八人トコソシルサレタリ、前代ニタメシナシ、サテ末代ニアリガタシト、諸人申ゾ合シケル、ジャウ中一キノ手負死人ハ、ワヅカ九十ヨ人トキコヘケル、コレタバゴトニアラズ、イカサマテンマノシヨキトゾオロカノ輩云ヒアヘル、サレバジャウ中ノヤツバラ、カクヨセテノ負勞ノ變ヲウカバヒテ、夜陰ニオヨンデ夜ウチセバ、ヨセテノ運ノキワメナランニ、ヨセザリケルコソ、セメテノコトナレ、コノゴロハ毎暮夜半ニオヨビ、西天臙膩オビタバシク、ソノ外禎祥ノ氣オホカリキ、フシギト云フモアマリアリ、

山田右衛門作以言語記卷之十二

松平伊豆守信綱戸田左門氏繼有間下向事

附隣國ヨリ加勢事

サルホドニ、上使ノ人々、カクテハ無人ナリトテ、ソノ翌日二箇日、肥後ノ大守、筑前ノ大守、兩國ノ人數ヲモイソギオシムクベキヨシ言ヒツカハス、カ、ルトコロニ、御目代松平伊豆守信綱戸田左門氏繼着船アツテ、彼軍陣ヲ御ランジテ、マコトニコレハ無勢也、イヨ／＼キツト兩國ヨリ人數イタサルベキノムチ、カサチテチウシンアリケレバ、肥後ノ大守ノニン數ハ、モトヨリヨウイノコトナレバ、細川肥後守光利二萬三千ヲ引率シ、正月三日ノ曉天ニ肥後國川尻ノ津ヲ出船シ、同キ四日ノバンケイニ、肥前國洲川ノ浦へ着船ス、原ノ城ヨリソノ間ワヅカ一里ノトコロナリ、細川人數、ソノ夜ハ洲川ニ野陣ヲカケ、カバリヲアマタトコロニタカセ、オビタバシキアリサマヲ、城中ノト、ウ遠見シ、イトバケウクラナスラント、寄手ノ老士ハイヒアヘリ、シカウシテ翌日巳ノ刻

ニ、人數ヲ有馬ヘオシイレテ、城ヨリイスイノ山手ヘ陣ヲトル、サテ原ノ城大手ノサキ手松クラ長門守勝家、舊冬ヨリシヨ／＼ニテ人數ヲウタセ、アルヒハ手負、アルヒハツカレハテ、長陣ノ働キ不如意ナレバ、何レノ御手ヘナリト大手ヲ上裁ニアヅカラント、御目代ニシキリニ訴託アリケレバ、オリフシ細川肥後守アラテノ大軍ナレバトテ、スナハチ大手ヲヒキワタサレ、細川光利大手ノサキ手ニテ仕寄ラレケル、カカリタルトコロニ、寺澤兵庫頭忠高モ、アマ草別儀ナキニ依テ、コレモ有馬ヘ出陣アル、筑前ノ守護黒田右衛門佐忠之人數モ、正月中旬ニ忠之在江戸ナリケレバ、舍弟黒田甲斐守、同市正一萬八千ヨ人引率シ、有馬ノウラヘハツカウアル、嶋津人數モ五六千、嶋津下野大將分ニテ、有馬ノウラヘオシワタル、カクテ原ノジャウ強敵ノムチ上聞シ、在江戸ナリシ九州ノ諸大名、何レモ御イトマタマハツテ、原ノ城ヘゾハツカウアル、マヅ細川越中守忠利、黒田右衛門佐忠之、鍋嶋信濃守勝茂、有馬玄蕃丞豐氏、立花飛驒守茂政、小笠原ノ一黨、有馬左右衛門佐、水野日向守、何レモ御下知ヲ蒙テ、夜ヲ日ニツイデ肥前國有馬ノ浦ヘチャク陣ア

ル、ソウジテ寄手ノ陣ナミハ、敵城ヨリ東西北ヲトリ
マハシ、オノノ陣ヲ居ラレケル、マヅ大手東ノ口
細川越中守忠利、ソノ次立花飛驒守茂政、ソノ次松ク
ラ長門守勝家、有馬玄蕃豐氏、ソノ次鍋嶋信濃守勝
茂、ソノ次小笠原ノ一黨、ソノ並ニ有馬左衛門佐、ソノ
次寺澤兵庫頭忠高、西ノハマデヲバ黒田右衛門佐忠
之、持口ノムカヒチン、オノノカクノゴトク也、水野
日州ハ、ハルカニチサンナリケレバ、陣處ノアキアラ
ズシテ、後陣ノ山手ニヒカヘタリ、嶋津人數肥後勢ノ
陣屋ノハヅレ、城ヨリキタノハマデ、コレモホドヘテ
ヒカヘタリ、サテ御目代伊豆守信綱ヲハジメ、何レモ
上使ノ人々ハ、立花松クラ兩陣ノヲク、スコシ小ダカ
キ山ノ手ニオノノチンヲ居ラレケル、ソウジテ
ヨセテノ御人數ハ十二萬五千ノツモリトゾキコヘシ、
カクテ在陣ノ諸將、イヅレモ御目代ノ指圖ヲマモル
ニ依テ、スデニコノ城ツリヲトサント、所存ノ將衆モ
アルラメド、オノレマカセニナラザレハ、名譽ノ老若
會陣シテ、謀智ヲアフハスコトモナク、ムナシク日數
ヲオクラル、アルトキ伊豆守メンノ持口ノ諸將
ニムカツテ宣フハ、信綱イマダ軍功ナシトイヘドモ、

スデニ御下知ヲ蒙ツテマカリムカツテ候上ハ、ヲノ
ヲノオモンバカリニモレタリトモ、只信綱ニ任セラ
ルベシ、サレバソレガシガ所存ノヲモムキ上意ノム
子、ヒトヘニ同意ナルニヨツテ、城ノリ停止セシム、
ソノ意趣トテモ別儀ナシ、一キノヤツバラ數萬ニオ
ヨビ、トリ籠リ、スデニ死ヲ宗トシテ、カ、ルヲ待ヌ
ルト、ウラニ、是ヤリアイノ軍ニモアラズ、弓テツボ
ウニハ武農ノヘダテアラバコソ、ソレニ名ヲエシサ
ブライドモヲ、トホヤニカケテウタセンコト、ハナハ
ダモツテ暗事ナリ、ツクノ敵ノ行粧ヲミルニ、是古
跡ノ城トハイヒナガラ、俄ノフシンナリシユエ、物ア
サマニハミエケレド、城中必死ノイハレニヤ、ハヤス
カドノ城ゼメニ、一度モ味方ニ利ナシトキク、爰ヲガ
ウ人トオモヒアナドルトコロ、カヘツテ不覺ノ至リ
也、タノノサクヲフリマハシ、吉利支丹ノヤツバラ
一人モ散セズ、リヤウ盡ノセメニシクハナシ、上意猶
モツテソノム子ナリ、諸手トモニソコツノハタラク
チャウジアルベシ、セムベキ時節ハヲノノヘ令觸
スベシ、サレバトテ只イタヅラニアランヨリ、竹タバ
ナドヲツケヨセサセ、ツキ山栖樓ナドヲユルノト

コシラへ、只テツボウズクメシカルベシ、信綱モテツ
ボウヲウタセントテ、長崎ヨリ唐船四五艘マチキヨ

セ、オランダ人ニ大石火矢ヲウタセ、クワンイノテイ

ニテ見物シテゾオハシケル、サル間諸將何レモ御目

代ノサシヅニマカセ、城ノマハリニ二重三重ニ大サ

クヲフリマハシ、サテツキ山、セイロウ、竹タバタテ

ノ板ヲトリソロへ、ヲノノ敵城ヘシヨリツ、ヒト

ヘニ鐵ボウズクメバカリ也、海手ヨリハ肥後筑前ノ

國守ヨリ五十ヨサウノ番船ライダサセ、海上ヨリモ

大石火矢大テツボウヲスキマモナクコソウチカケ

ケレ、サレバニヤ城中ノ一キ等モ、アマリニ手シゲキ

テツボウニ、栖居ナリガタクヤ思ヒケン、數千軒ノ民

屋シコトノク地ヲホリ、土藏ノゴトクニコシラヘ

テ、タトヘバ狐狸ノ栖居ノゴトク、カホドスセンノ民

屋ヲ、火矢ノ用心ニヤ、シツカイヌリヤニコソハシタ

リケル、ムカシヨリ籠城オホシトイヘドモ、本朝ニオ

イテチンジ也ケルロウ城也、イカサマニモ此城ノコ

シラへ、ヨウガイノカマへ、諸事萬端ニイタルマデ、
農人バラノ智リヤクニハ思ヒヨリナキコトナレバ、
諸人不審ヲヒラカズ、古往ヲヒクニ例ナシ、イカサマ

ニモ籠城ノ黨類ニ、レキノ古老ノ武士ノアルニ
ヤト人々申合シケル、

山田右衛門作以言語記卷之十三

二月廿一日吉利支丹等夜討ニ出シ事

カクテ城中ノト、ウラ、今マデハ鎮西ノ諸大名ノコ
リスクナクヨセケレバ、今ヤセメン、今ヤノラントマ
チシカドモ、カノ大サクニキヲ失シ、サテハ城ノリ停
止シテ、糧盡ノ攻ニオヨビヌト、城中ノヤツバラ、イ
ヨイヨ心モツカレケル、カクテ光陰フルホドニ、青
陽モウツリ、昭月モナカバスギヌ、カ、ルトコロニ四
郎時貞、城中持口ノ民首ヲ近附ケ、コノ城ノテイタラ
ク、ツク^くトクワンヅルニ、ハヤヨセテ兩度ノ城ノ
リニ手ヲデシテ、セムベキ議色ヲトメ、兵糧ヅメニ
スルトミヘタリ、カ、ル上ハ、寄手大軍ナリトテ、イタ
ヅラニ日ヲオクリナバ、數萬ノモノドモムナシク飢
死センコト、多日ヲウツサジ、ソノ上後詰ヲタノムニ
モアラズ、クウジヤクニ籠城オホシト云ヘドモ、糧水
ツキテハ數日ヲウツサズ落^しス、當城モハヤ兵糧乏
絶ニオヨバントス、シカルニスマンノモノドモイタ
ヅラニ餓死センヨリ、イマダ勢力ノノコルウチニ、イ

カニモ寄手ノ兵ニムカヒキヨクセンノ勝負ナラデ
ハ、ミカタノリウンアリガタシト思フ、オノ^くイカ
ナルテダテヲカリヨケイユシマスト異見ヲトラヒ
ケレバ、皆頭首等コノ儀モツトモト同ジケル、ソノ中
ニ有江ノ休意申スヤウ、時貞ノ言趣モツトモナリ、サ
レバ武家ノトモガラモ、去年始冬ノミギリヨリ永陣
ナレバ、晝夜ノキヅカヒニ、上下トモニミナツカレナ
ン、カ、ルキヨヘンヲカンガヘテ、セウ^く夜討ヲイ
タシ、城中ノモノドモニモキヲツケ、目ヲサマサセ、
シゼン寄手ニ失アラバ、又イカナル手ダテモアリヤ
セン、愚老ハ別慮ナシト云、オノ^くコノ儀シカルベ
シト同ジ、サテヨウチノヒヤウデウトリ^くナリ、シ
カルトコロニ、時貞思案ニイハク、夜討ノ儀大手ヨリ
イタサンハ、細川人數手シゲク、シヨリヲツケ、キビ
シキテツボウナレバ、イダスニ人數ヲソソズベシ、有
間、立花持口ハカ、リバアシ、シカラバ鍋嶋、寺澤、
黒田手ニ人數ヲヒソカニオシ出シ、カズノ竹タバ^ンダ
テノイタ、デンゴヤドモニ火ヲカケサセ、ソノ火ヲ相
圖ニサダメテ、城中ヨリトキノコエヲアゲサセバ、サ
シモノオホキ寄兵ドモ、ミナアハテサワギ、アルヒハ

ヤケ死、或ハ同士ウチシテ、前後モサダカニワキマヘ
 ジ、サアランニ於テハ、ヨセテノ軍兵ノキヲツラチシ
 陣屋ドモニ、ミヤウクワフキシクホドナラバ、ウンカ
 ノゴトクヨセテドモ、ヘンシノ間ニ退散センコトウ
 タガヒナシ、シカラバ大手ノ手シゲキ仕寄ドモ、一陣
 アフレテハ、ザンタウマツタカラジトオモフナリ、サ
 アラバ寄手ノタモツ糧糧、銚箭ウバヒトリ、大石火矢、
 大テツボウモミナ城中ヘトリコミナバ、日本國ガヨ
 セタリトテモ、攻ベキテダテガラバコソト、イト事
 モナゲニカタリケレバ、列座ノ者ドモコレヲキ、サ
 テモユ、シキテダテヤト、イサマヌモノハナカリケ
 ル、サルアイダ、オノノコノ儀ニ定メ、マヅ相言ヲ
 シメシ、サテ二千人ヲ三手ニワケ、千百人ヲ蘆塚忠兵
 衛、布津村代右衛門、此兩人ニシタガヘサセ、黒田筑
 前手ヘゾオシムクル、サテ又天草玄札ニハ、六百餘人
 相ソヘテ、寺澤手ヘゾオシムクル、又千三百ヲ上總三
 平、千々輪五郎左衛門、兩人ニシタガヘサセ、鍋嶋手
 ヘゾオシムクル、此兩人ハ手ワケヲシテ、マヅ上總三
 平ニ五百ヨ人ヲシタガヘサセ、火矢、ヤキグサヲトリ
 モタセ、ヒトヘニ火附ノ役ニソナヘ、大セイロウニオ

シムクル、同ク千々輪五郎左衛門ニ八百人ヲシタガ
 ヘサセ、是ハ一向夜ウチノテダテヲハカラセシトゾ
 キコユ、コノ鍋シマ、クロ田持口ハ、所シモ寄手ヨリハ
 ナン所ナレドモ、城^{ジョ}中ヨリ出ルニハ足場モヨク、日來
 モ諸人ノヒハンニハ、一キ夜ウチニイヅナラバ、サダ
 メテ此口ヘイデナント云フホドコンハアリケレ、コ
 ロハ如月廿一日ノ夜半、バカリノコトナレバ、目刺ト
 モシレヌクラキ夜ニ、五郎左衛門三平ハ、千三百ヲシ
 タガヘテ、鍋嶋手ヘゾオシヨセタリ、ナベシマソノ夜
 ノ仕寄番數千人ノモノドモ、オモヒヨラザルコトナ
 レバ、アワテサワギ、敵フセガントスルヒマニ、タテ
 竹タバ、大セイロウ、サテデンオクニト、ウドモ、手
 手ニ火ヲカケタリケレバ、オビタバシクヤケアガリ、
 ヒルニチツトモタガハズ、ニガノシキコトバモナ
 リ、コレヲ見テ、城中ノ殘黨ドモ、エツキノコ、ロア
 ラハシテ、二萬ヨ人ノヤツバラ、一度ニドツトキノ
 コヘヲアゲケレバ、ロクヂモシンドウシ、天地モヒバ
 クナリ、サレドモ鍋嶋家頼ノシソツドモ、數千人居合
 テ、コ、ヲセンドトハタラキケレバ、夜討ノト、ウヲ
 百ヨ人討トリヌ、イケドリモ少々アリヌトキコユ、鍋

シマ家頼ノサブラヒニハ、秀嶋四郎右衛門、石井九郎右衛門、コノ兩人討死ヲシタリケル、其外手負ノ侍二十四人下々足輕ドモニ手負討死八十四人トキコヘケル、サテアマ草玄札ハ、六百^人シテダヘテ、唐津陣ヘ押ヨセ、ケンゴニ仕寄シ、竹手把ドモヲヒタ^くト打破リ、本陣ヲコ、ロガケ、ドツトキツテゾイツタリケリ、コ、ニ寺澤サキテノ大將ニ、三宅藤右衛門コノ由ヲキ、ツケテ、スハヤ夜討トコ、ロエテ、長刀ヲツトリ、マツサキニス、ンダリ、折節有合郎從、又ハ組附ドモ、我ヲトラジトハセムカヒ、前後ヲハウシテタカヒシガ、タガヒニウツツウタレツ、マコトニキビシキ働也、モトヨリヨセタルト、ウドモ、必死ノ夜討ナリケレバ、ヤリテツボウヲ事トモセズ、コ、ヲサイゴトセメタ、カフ、アマリニツヨキト、ウラニ、寺澤方ノ人々モ、フセギカ子テゾキコエケリ、サレドモ三宅藤右衛門、粉骨ヲ碎キ、死ヲコノ時トハタラキケレバ、三宅自身ガ長刀ニテ、吉利支丹ノヤツバラヲ二三^人キリフセ、大ゼイノ徒黨ヲカコミノ外ヘ追拂ヌ、ヒルイスクナキハタラキナリ、カ、ルキビシキフルマイニテ、大將ノ藤右衛門三箇所手キズヲ蒙リケリ、

ソノ組ツキノ侍ニハ、陰山源左衛門、池田新助、松下半之丞、谷崎八左衛門コレヲ四人ノモノドモハ、皆ウチ死ヲトゲニケリ、ソノ外手負ノ士卒ドモ、廿四人トキコエケル、サレドモ夜討ノ吉利支丹、卅五人ウチトリヌ、ソノ中三人ハ生捕タリト聞ヘシ、彼三宅藤右衛門、嶋子ニテノ耻辱ヲバ今コ、ニテゾ雪ギシト、キク人ゴトニ言合ヘリ、サテ黒田右衛門佐忠之ノ持口ニハ、忠兵衛代右衛門千百人ヲ引率シ、一度ニドツト押寄タリ、ソノ夜忠之持口ノ仕寄番黒田監物大將ナリシガ、毎夜物見ノ用心ニ、忍ノモノヲ十ヨ人、城邊ニ出シヲキヌトキコヘシガ、件ノ忍ノ物見ドモ、夜討ノモヤウヲ告來ル、竹手把裏ノ數千人、堅固ニ居タリシ士卒ドモオホキニサワキ、ツイテイデント仕タリシヲ、監物イカツテオシシヅメ、ヒゴロノソナヘハ爰ナリト、テカズノ人數ヲカコミノ中ヘサ、ヘサセ、吉利支丹ノヤツバラヲ竹手把裏ヘイレジトテ、大勢ノ兵ケン刀キヨクセントリ持^テヘテ、シヅマリカヘツテヒカヘタリ、モトヨリ寄タルトタウドモ、思ヒキツタル健民ナレバ、千ヨ人タバードウニドツト寄、タテ竹手把ヲモキラヒナク、ヒタ^くト討破リ、オメキサケン

デキツテイリ、大將分ヲト目ニカケ、監物ガ手へ面モ
 フラズカ、リシヲ、二度マデドツトツキクヅシ、三度
 ニオヨブソノトキニ、吉利支丹ノテツボウニテ、惜哉
 黒田監物頭ヲ左右ニ打ヌカレ、ソノマ、ムナシクナ
 リニケル、ソノ子岡田佐左衛門カタハラニオリアヒ
 シガ、タイ松ノヒカリニテ、コノ由ヲミルヨリモ、今

ハカウトヤオモヒケン、猛勢一キノソノ中ニ、面モフ
 ラズ討死コ、ゾト思定シテ、ドツトツイテカ、リケ
 レバ、コレヲ見テ相伴人々、小川縫殿助、菅勘兵衛、郡
 勝太夫、新見太郎兵衛、杉山久太夫、ソノ外ソノ夜ノ
 シヨリバン、ワレモトオボシキ侍ドモ、五六十、一度
 ニドツトツイテカ、リケレバ、サシモニタケキト、
 ウラモ、カナフベキヤウアラズシテ、クモノコノチル
 如ク、皆チリムニ引ニケル、サレドモ夜討ノ吉利支
 丹、百ヨ人ウチトリヌ、ソノ中生捕十七人、都合忠之兄
 弟三人ノ手ニ討トル、二揆百廿三人トコソキコヘケ
 ル、サテ又忠之家頼ウチ死ノ侍ニハ、マヅ黒田監物、
 ソノ子岡田佐左衛門、相伴フ者ドモニハ、新見太郎兵
 衛、杉山文太夫、明石權之丞、是ハ黒田市正家老コレヲ始トシ
 テ、名ヲエシ侍ドモ七八人討死ス、手負ノ侍ハ廿五人

トキコヘケル、惣ジテソノ夜筑前手ニ討死手負難兵
 共ニ五十四人トキコユ、サテ又ソノ夜討トル一揆、鍋
 嶋寺澤黒田手ニ首帳二百五十八、生ドリ二十四人ト
 シルサレタリ、諸手コレニ日ヲサマシ、用心キビシカ
 リケレバ、ソノ後ハ一キノヤツバラ、夜ウチニモ出ザ
 リケリ、

山田右衛門作以言語記卷之十四

二月二十七日吉利支丹落城之事

并根村源五右衛門先掛ノ事

カ、ルホドニ、イツラチアクベキトモナク、日數ヲムナシクフルトコロニ、フシギニ一キ落城ス、ユエヲイカニトタヅヌルニ、鍋嶋信濃守勝茂ノ手ニ、吉利支丹等出城ヲコシラヘオキシガ、一キノヤツバラ、ハジメノホドハ用心ヲモキビシクシテ、常ハ城中ヨリテツボウヲモ打ケレドモ、コノホドハ、鍋嶋ツキ山ヨリノ大石火矢ニヤイタミケン、一キノヤツバラ、コノ出丸ヘハ往來ノケイゴヲトバムトミエタリ、シカレバホカヨリノテツボウイカホド打テモ、城中イタムトミヘズ、シカルアイダ勝茂カノ出丸ヲトリ、竹手把ヲ附サセ、テツボウキビシクウタセナバ、城中ノト、ウコラヘガタクテ、ツキイデン、ソノ變ニ乗ジテ、只一ノリニノツトラント計慮ヲナシ、御目代ニ出丸ノ仕寄ヲノゾミケレバ、所望ヤカナヒケン、ソノ日廿七日ノ午ノ刻バカリニ、出丸ヘ仕寄ヲツケタリシガ、シゼン

一揆打出ナントキノ用心ニヤ有ケン、具足武者三百ヨキ、竹手把裏ニニカクシオキケリ、諸手ノ人數コノ山ヲ見ツケ、コハイカニ鍋嶋ニ抽テサキノリスルト見ヘタリトテ、諸軍勢カツチウヲ帶シ、ヒシメケドモ、サスガ御フレナケレバ、ツ子ノカタキ御軍法モダシガタクテ、時ヲウカバフトコロニ、鍋嶋コン出丸ヘ竹手把ヲ仕ヨル用心ノタメト、オノノツタヘキキ、ツレバコソトテ、何レモ鳴ヲシヅメケル、カクテナベ嶋人數出丸ヘ仕ヨリヲツクルト見テ、ソノ持口ノ一揆ドモ、數千人トリヨツテ、石テツボウヲゾ打カケケル、勝茂人數モモトヨリ用意ノコトナレバ、テツ炮ヅクメニ仕寄ケル、ゲニハナベシマ多ゼイニテ、ソノ手ニス、ム一キラヲ、コトノク打シラメケル、時ニナベ嶋手ノ御目附榊原飛驒守ノ子息左衛門佐、當年十七歳、イマダ若武者ノコトナレバ、御軍法ヲモワキマヘズ、ノリシホ吉ト量見シ、手モトニス、ム弓ノ者ヲヒキツレ、二ノ丸ヘイノ手ニノリ上リ、指詰ヒキツメ、サンノニ射サスレバ、矢前ニス、ムガウ人等、スコシヒルムトコロニ、左衛門ツト二ノ丸ヘノリコミ、原ノ城一番ノリ榊原左衛門ト、ガウジャウニ名ノ

ラレケレバ、親父飛驒守コレヲ見テ、御軍法トハイ
ヒナガラ、愚息左衛門ヲ討セテハ、後榮イツヲ期ス
ベシト、猶豫ナクドツト乗コミケレバ、後陣ニツメシ
鍋シマ人数、上使討セテセンナシト、ワレモトノ
リコミケル、城中ノ一キラハ、舊冬ヨリ數日ノロウジ
ヤウ、朝暮ノキヅカヒニ草臥、アマツサヘコノ間ハジ
ヤウ中ノヤツバラウヘニ及ビ、ミナツカレハテ、オノ
レオノレガ民屋ニ疲煩ノテイニテイルモアリ、アル
ヒハ糧絶ノアマリニヤ、海ヘンニ忍ヒ出、海サウモト
ムルヤツバラモオホカリケルトゾキコヘシ、サレバ
ナベシマ出丸ヘ仕寄ヲ附ルトハキ、タル餘黨モアル
ラメド、諸手ハシヅカナリ、コトサラ白晝ニヤワカ寄
セント、徒タウドモユダン強敵トナツテ、榊原父子ヲ
サキテトシテ、ナベシマ人数フト城中ヘノリコミ、ハ
ウロク火矢ヲナゲ、レバ、二ノ丸ノ大手口、カスミト
トモニヤキ立ル、コレヲ見テ諸手ノ人々、ナベ嶋ニサ
キノリセラレテンケリト、ニワカニコソハノリコミ
ケル、マコトニクハキウノ城乗ナレバ、惣軍ノヨセテ
ニカツチヲタイスル人ハオホカラズ、多ブンハス
ハダニテコソハセノリケレ、カ、ル内ニ大手ノサキ

テ細川越中守忠利、數萬人ノ軍兵ドモ持口ノ大手、三
ノ丸ソクジニノリ破リ、ハタラクトタウラ討ステ突
ステ、ガウ人バラノコトナレバ、頸トルマデニオヨバ
ズ、ソノ足少シモタメラハデ、二ノ丸ハマ手ニトリカ
ケテ、モミニモフテゾセメニケル、鍋シマ人数モ、二
ノ丸、二ノキドヘトリコミ、コレモ即時ニウチヤブラ
ントス、ミケレドモ、吉利支丹數千人、二ノ丸、三ノ
キドヘ打出、テツボウ弓ヤリトリモツテ、コ、ヲサイ
ゴトフセギケレバ、サスガナベ嶋大人數、押ヨセタリ
ト云ヘドモ、城戸口ヤブリガタクシテ、トキヲウツス
トコロニ、細川人数ウシロノハマ手ヲ打ヤブリ、働農
ノモノドモヲコトクキリスト、軒ヲツラチシ民
屋ニ、手々ニ火ヲカケ、火花ヲチラシセメケレバ、城
中ノ一キドモ、オモヒモヨラヌ後陣ヨリ破レニケレ
バ、前後ノ寄手ニアグンデ、バウセンノ力モツキハテ
テ、バウゼントシテミヘタリシガ、トテモカナハジト
ヤオモヒケン、多分本丸サシテニゲコミケル、細川人
數ハヤクホンマルヘイノ手ヘセメカケヒキトル、一
キ等少々討ステ、即時ニ本丸ヘノリ入ラントシタリ
ケレドモ、本丸ノガフ人バラ、大石大木ヲナゲカケ、

或ハ弓テツボウヲハナチカケ、或ハトマ茨ニ火ヲ附
ナゲカケ、ヤリ長刀ヲトリ持テ、本丸ヲノラセ
ジト、爰ヲ最期トフセギケレバ、細川人數ハ後陣ニタ
ダ利父子、コノ手ノ軍奉行ニハ、馬場三郎左衛門、二
ノ丸ヘヒカヘ、諸勢ノハタラキ見物シテヲハシケレ
バ、細川人數殘足ヲヤハチタリケン、ウタル、モノヲ
ノリコエ、カ、リケレバ、數百人片時ノアイダニ
石木玉箭ニウタレ、勢モスコシコダレテ、乗レツベシ
トハミヘザリケリ、サレドモ細川人數ゲニハ大軍ナ
リケレバ、新手ヲイレカヘ、セメケレバ、サシモニ
猛キ郷人モ、防戰ノタヨリアラズシテ、ソノ日二十七
日ノ酉ノ下刻バカリニハ、本丸ヲ半分ヒガシノハマ
テヲノリトツテ、九ヨウノボリヲ入サセタルハ、比類
ナカリシハタラキナリ、サテ又立花左近忠茂先手ノ
家臣十時三彌之助、申刻中半ナランニ、本丸ヲノリト
ラントコ、ロザシ、手勢七八人バカリニテ、モミニモ
フデカ、リケリ、ソノ組附ノ窄人ニ、根村源五右衛門
寺田左衛門眞先カケテス、ミ、本丸ヒガシノ堀下ニ
ツキ、粉骨ヲツクシテハタラキケル、城中ニハ郷人等
コレヲ見テ、死場コ、ゾト議定シテ、ウヘガウヘヨリ

オリカサナリタルハ、タゞ高山ヲクヅシオトスガ如
シ、剎那ノアイデニ手オヒオホカリケリ、十時三彌之
助モオモテモフラズハタラクトコロニ、大石ニアタ
リテ、手オヒケルトミエシガ、ソノ場ヲスコシ引下ル
トコロニ、根村源五右衛門、寺田角左衛門ハ、シバラク
フミトバマツテイタリケルガ、時分ヨシイザノラン
ト云、根村源五右衛門コレヲキクヨリハヤク、本丸ニ
カケ上リ、立花左近手ノ一バンノリトナノリテ、二人
トモニ一度ニ本丸ヒガシノハマ手ヨリノリコミタル
ハ、タグヒスクナクミヘタリケル、コ、ヲセンドトタ
タカヒシヲ、アヒノコルモノドモコレヲミテ、ジコク
ウツサズワレモ、トノリコミ、テンデニブン
ドリヲゾシタリケル、カ、リケルウチニ日モクレケ
レバ、細川ノ人數本丸ヲ半分ノリトツテ、大柵ヲフリ
マハシ、ソノ夜ヲアカストキコヘシ、サテカラメテ黒
田右衛門佐忠之、大江口ノ持口ハ、トリワケナン所ナ
リケレバ、日ゴロモ仕寄ヲハカ、シク附ルト云
コトモナク、時節トマチシヲリフシ、諸手ノ様子ヲ見
附、コレモ數萬人ノモノドモ大江口、松山、アマ草ト
ウノヤツバラ、コト、ク討トツテ、ソノ日本丸ヲノ

ラントシタリケレバ、數勢ハツカレタリ、ソノ上暮
 天ニオヨビヌレバ、チカラナク、ソノ夜ハ大江ノ丸ニ
 サ、ヘ玉フ、鍋嶋人數モ上使榊原ヲサキ手トシテ、二
 九破魁ヲバイタマシカドモ、二ノ丸、二ノ城戸ノタ、
 口、マコトニ例シカリケレバ、カノ城戸口ニテ時ヲ
 ウツシ、日暮ヌレバ、コレモ本丸ヘハエノリコマズ、
 本丸ノ出丸ニオシヨセ、ソノ夜ヲコソハアカシケル、
 ソノホカ立花、松クラ、寺澤、有マ、小笠ハラ黨、水野
 日州、有間左衛門佐、オノノ人數イヅレモ面ノノ
 持口、又ハカナタコナタヨリ、オクンバセニ、我ヲト
 ラジトノリコミ、粉骨ヲ碎キハタラキケレドモ、ミナ
 ミナ本丸ヘハオモヒモヨラズ、諸手トモニ二ノ丸ヘ
 コンヂンドリヌ、サテモカラメテノ大將黒田右衛門
 佐忠之、ソノ夜ハ大江ノ丸ニサ、ヘ給ヒシガ、家頼ノ
 武士ドモ近附、サテモ、此口ナン所タリトハ、諸人眼
 前タリトイヘドモ、今日本丸ヲノリトランコソムテ
 ンナレ、翌天ハ自身マツサキガケテ、天守ノタメニ露
 命ヲバ原ノ城ニウツマントオモフ也、我ニコ、ロザ
 シノ者ドモハ魁供セヨトノタマヘバ、家臣黒田美作
 ス、ミ出テ、御諍モツトモニテ候、サナク候テモ愚私

サイハイヲ給テ、御サキヲ仕リ、老終ノ思出ニ、諸卒
 ヲヌキンデ乗トラント、シキリニノヅミタリケレバ、
 忠之ツクルキ、タマヒ、サアラバサキヲイタセト
 テ、黒田美作父子ニユルサレケル、ユ、シキ君臣ノ勇
 士カナトキク人コレヲカンジケル、サテ翌日二十八
 日アケボノヨリ、諸手一同ニコエヲアハセ、本丸ヲ半
 分堅固ニタモツテ、大石大木ヲナゲカケ、アルヒ
 ハテツボウ、アルヒハ鑓ナタ長刀ヲ手々ニトリモチ、
 本丸ヲアラセジト、爰ヲセンドト戦ヌ、寄手ノ軍勢ハ
 マコトニキウナル坂石垣ヲタドリアガリ、面モフラ
 ズカ、ルトイヘドモ、本丸タゼイノヤツバラ、ウヘヨ
 リ見オロシ、大石大木ヲナゲカケ、アルヒハ苦茅ニ火
 ヲツケ、スキマアラセズフセギケレバ、數萬ノ寄手心
 猛クハイサメドモ、ミアゲテ戰コトナレバ、心力モツ
 カレ、オホクノ武士ドモウタレケレ、サレドモ西ノ手
 大江口黒田忠之持口ヨリ、黒田美作同三左衛門父子
 ヲサキガケトシテ、數萬ノ士卒殘足ヲハヂ、魁諍ノテ
 イナレバ、ト、ウハゲシクフセグトイヘドモ、忠之人
 數新手ヲ入替、セメケレバ、ソノ日ノ本丸サキノ
 リハ、黒田手トコソキコヘケル、シカリトイヘドモ、

本丸四郎が居陣ヲバ、ソノ日ノ曉天ニ、細川肥後守手ヨリ火矢ニテヤキタテケルホドニ、オリフシ嵐ハゲシクテ、數千ノ軒屋カスミトトモニヤケアガル、諸手ノ人數コノ炎上ニチカニラエ、前後左右ニヒタヒタトノリコミ、惣軍勢一同ニ勝時ドツトトリヲコナヒ、働民ノモノドモヲバキリストツキステ、コ、トニイサミニイサンデセメケレバ、ト、ウモサイゴノ戰ナレバ、老若男女ニ至ルマデ、今日ヲカギリトフセギケレドモ、日來遠矢ノ利運ニ相違シテ、ヤリ太刀合ノコトナレバ、猛民ノヨセ手ニ氣ヲ失シ、我モトオボシキモノドモモ、名ヲアジハシテ死モナク、ミナ／＼ヤミヤミト討レケル、又少々進働ノヤツバラモ、ホノヲニムセンデ寄手ノ面モミエザレバ、今ハカウトヤオモヒケン、アルヒハ火ノ中ヘトビイリ、アルヒハウチ死シタリケル、一揆ノ大將四郎ヲバ細川越中守忠利ノ家人陣ノ佐左衛門ト申モノ討トリケルトゾキコヘシ、ソノ日二十八日ノ午ノ刻バカリニハ、ミナコトゴトク亡ビケル、不思議ナリシコトドモナリ、サレバコノ原ノ城ト申ハ、ムカシヨリ籠城タビ／＼ナリトイヘドモ、タヤスク落タルタメシナシト、古人モ申合レ

ケル、サシモニヒロキ原ノ城、敵味方ノ骸骨山ヲツキタルガゴトシ、死スルトコロノカウ人、老若子妻ニイタルマデ、三萬七八千モアルラントコンキコヘケル、サレドモタブンハヤケ死ケレバ、都合ハシレザリケル、數萬ノヨセ手モ死ヲカロンジ、名ヲオモンジ、タガヒニハレノ城ノリナレバ、一足モアトニ心ヲノコサズ、先登ヲコ、ロガケ、ソレガチニノリコミケレバ、オホクノ士僕討レケル、マツ細川越中守忠利ノ人數ニハ、ウチ死二百七十餘人、手負ノ士卒千八百二十六人、サテ黒田右衛門佐忠之ノ家人、討死二百十三人、手負千六百五十八人、同舍弟黒田甲斐守家人、討死三十二人、手負三百四十五人、同ソノ舍弟黒田市正家人、討死十六人、手負百五十六人、鍋嶋信濃守勝茂ノ手ニ、討死百六十、手負六百八十三人、有間玄蕃頭豐氏家人、討死七十八人、手負百八十五人、立花飛騨守茂政家人ニハ、ウチ死百二十七人、手オヒ二百七十九人、マツクラ長門守勝イヘ家人ニハ、ウチ死二十七人、手負九十七人、小笠原右近大夫家人、ウチ死二十五人、手オヒ二百三人、オナジク信濃守ケライノ人ニハ、ウチ死十九人、手負ノモノ百四十八人、松平井後守家人、

ウチ死三十一人、手オヒ百二十七人、水野日向守家人ニハ、ウチ死百六人、手オヒ三百八十二人、寺澤兵庫頭忠高家人ニハ、討死二十三人、手負三百十五人、有間左右衛門佐家人、討死三十九人、手オヒ三百八人ナリ、戸田左門家人ニハ、討死四人、手オヒノモノ三十餘人、サテ松平伊豆守信綱家頼ノ人々、ウチ死六人、手オヒ百餘人ナリ、ウチ死合シテ千、百三十六人、手キズヲカウブル士卒六千九百五十ヨニン、都合ウチ死手オヒノ士僕トモ八千八十六人トコンキコヘケル、ソノ外軍士諸宰人ウチ死多シトイヘドモ、精クシルスニオヨバズ、サテモガウ人、數萬ノモノドモ、カヤウニ一心不亂ニ死ヲサダメ、思ヒキツタルソノ意趣ハ、上古ニモ末代ニモ類スクナキコトドモナリ、

山田右衛門作以言語記卷之十五

山田右衛門作萬死ヲ出テ一生ヲ得ル事

今亡數萬ノ吉利支丹ノ中ニ、山田右衛門作トイヒシモノ、萬人ノ死ヲマヌカレシ、ソノ旨趣ヲイカニトタズナルニ、彼右衛門作才覺人ニスグレ、諸學ヲモツバラニ困ナミ、諸道アサカラヌモノト風聞セシガ、カレ原ノ城本丸ノ持口、兩人ノ民首ナリシガ、右衛門作コロニオモフヤウ、ガウノフ天下ヲヒキウケ、カク一揆ヲ致スコト、恐天何ゾナカラシヤト、深理ヲトツテ、ヒトヘニ武家ヘ忠烈ノコ、ロザシヲタモチ、孟陽中甸ノコロ、ヒソカニヨセテヘ忠存ノムチ、サイ毫ヲ上聞ニ旨趣ハ、山田右衛門作ニ隨傾ノモノ八百餘人アリ、コレミナ地舛不進ノ吉利支丹ナリシカドモ、徒黨ヲソノ發場ニイタツテ押籠ツカマツルアイダ、力ナクタテコモリ候、コレラコトハ武家ヘ深志ヲ存シ奉ルモノドモナリ、カ、ルウヘハ城ノリライソギ御催促候テ、時日ヲタカヘズ御告文ヲ拜シタマツラバ、吾手勢八百ヨ人禦ク由ニテ、ジャウ中ノ諸屋ニ

火ヲカケ、ミナ／＼御陣ヘマキリ候ベシ、又某ハ四郎ガ居陣ヘハセユキテ、一マヅ落ベキフゼイニテ、小船トリノセ、タヤスク四郎ヲイケドリテ、御忠節ノソノ一トゾンジサダメ、籠城ノハジメヨリ私慮ヲ以テ、小船少々用意仕リ、召シ置キ候ヨシ、委細矢文ニシタタメ、有馬左衛門佐ノモチ口ヘイタリケレバ、ヨセテノモノドモコレヲトリ、ヤガテ御目代ニ披露ス、信綱コレヲ披見アツテ、オノ／＼モチ口ノ諸將ニ會合アリテ、コノヨシヒソカニ御サタトリ／＼ナリ、サレドモコノモノ城中ダイ一ノ民首トキコユルニ、懸心ウタガハシクオボシ召、定テガウ人ヲ俘虜ノセメニ定シニヨツテ、イツハリノ手ダテナルベシトテ、サラニ御許用ナカリケル、山田黙止ガタクオモヒ、重疊武家ヘ深志ノ意趣ヲ諸社ノ牛王ヲヒルガヘシ、倭南兩州ノ誓言ヲ書記シテ、ヒソカニ又捧ク、シカルウヘハ何カイツハリアラント、城ノリノ時節ヲ御定メアツテ、ヒソカニカレガ手ニ旨趣ヲ矢文ニ射サセラル、サレバ城中イマダ小時ノ運ヤツヨカリケン、山田ハコレヲシラズシテ、ヲリフシ夜マハリノヤツバラ拾ヒトリ、四郎ニカクトツグニケル、時貞大キニオドロキ、サ

テサテカレラハ一向ノ吉利支丹トオモヒシニ、カルベシトハ知ラザリキ、タノム木ノモトニ雨モナントスルトコロニ、天帝ノ冥助アリガタシトテ、ヤガテ右衛門作カラメトリ、カレラガ妻子一族等コト／＼クソノバニオイテ殺害シ、山田ハイマダ問フベキ子細アリ、キビシクイマシメ助ケオケトテ、大江ノ詰籠ニクビガセヲイレテ召オキヌ、サテ四郎城中口々ノ民首ヲチカヅケ、此矢文ノ跡、近日武家ヨリ夜ウチノ手段ナリ、モチグチオロカニシテハ、中々大事ナルベシ、ユダンナク警固スベシトテ、四鬼栖本兩人ニイクサ奉行ヲサシソヘテ、三百餘人ヒマナクジャウ中ヲマハラセ、モチ口心疎ノナキヤウニ、ヨウ心ストゾキコヘケル、カ、リシトコロニ、ジャウ中ハヤ永陣ニ糎ツキ、落人少々出ニケリ、御目代カノ落人ノ中ニコザカシキモノヲ召シイダシ、ジャウ中ノコトバモ御タヅ子アリケルニ、ツ、ムニオヨバズアリノマ、ニ吐答ス、ハヤジャウ中コノ旬ハタブン糎薪ツキテ、ギヨクセンタエ候ヨシヲイフ、サテ又山田右衛門作トイヒシモノアリヤト御タヅ子アリケレバ、サン候、カレハ本丸持グチノカシラ兩人ノウチニテ、人數八百

ヨ人ノ大將仕ルモノニテ候ガ、コレハ寄手ヘコ、ロガハリノヨシアラハレテ、山田ガ一門コトトク當時ニ殺害セラレ、右衛門佐ヲモ誅スベシ由ニ定メ候ヘドモ、時貞問ベキ子細アリトテ、手錠ニテ、大江ノ籠舎トウケタマハリ候ト申ス、上使オノノキ、トドケ、サテコソカレハシンジツ味方忠レツノモノナリシニ、アハレジヨメイタテオカマホシクオボシケレドモ、サテノミウチスギタマヒシニ、山田ガ連ヤツヨカリケン、日カズホドナク不思議ニラクジヤウキウヲナシ、二月二十八日ニイケドリノ一キノナカニマジハリテ、クビカセナガラトラハレケル、御目代御ランジテ、右衛門作ニコトノヤウヲ御タツテアリケルニ、サキノ落人ノ申シニスコシモタガワズ、山田ガ申上ル條、一々ソノ理キコヘケレバ、右衛門作一人ヲ天下ニ忠存ナリケレバ、助命ノ言上イタサントテ、助テ江戸ヘ召供セラレ、永々害ヲゾノガレケル、サレバオホクノ一揆死運ノ中ニ、天命ノ恵ニヤ、山田一人虎口ノ害ヲノガレケル、人身ノホドコソ不思議ナレ、

山田右衛門作以言語記卷之十六

寄手ノ人數歸陣之事

附松倉兄弟流刑之事

サルホドニ有馬ノ城ヲ、コトトク崩破平均ニシテ、眞ノ原トナリニケル、斯テ寄手ノ諸軍勢、イヅレモ卯月始メニハ、皆國ノヘ歸陣アル、サレドモ御目代信綱氏鐵ハ、直ニアマクサ長崎邊ヘ打コエタマヒ、御仕ヲキ等トリヲコナヒ、ソレヨリヒゼンノ名古屋カラツ邊ヘヲモムキタマヒ、チクゼンノ城下福岡ノ庄ヲウチナガメ、筑紫アラマシ順ランセシメ、豊前國小倉ノサトニツキタマフ、カ、リシトコロニ、御ハタモトヨリ、又太田備中守尊詮ヲカウブツテ、コレモ豊ノ小クラニツキタマフ、シカルアイダ九州ノ諸將ヲ又豊州小倉ニメシヨセテ、上意ヲコソハ仰セワタサル、ソノ意趣ハ、今度嶋原アマ草兩所ノ一キハ、スベテ所守ノ政法輕弱タルユエナレバ、イヅレモ死刑ニオコナハレンゾレドモ、憐宥ヲ加ヘラレ、スナハチ松倉長門ヲバ美作ノ國ヘ流罪セラレ、森内記ヘゾ預ラル、

ソノ舍弟松クラ右近ヲバ、讃岐國ヘナガサレ、生駒壹岐守ヘゾ預ラル、次ニ寺澤兵庫ヲモ、罪科カロキニアラテドモ、流罪ヲ免許アリテ、榑原飛驒守父子鍋嶋信濃守兩人モ、御軍法ヲソムキ、魁シタル科ニ依テ、御フシンヲ蒙リシカドモ、ホドナク御赦免トゾキコヘケル、サレバ君ノ御イキドホリフカク、御慈ノ普ヒロキコトヲ思ヘバ、是ヤ史記ノ詞ニ、トガアルヲ誅セザル、則惡ヲモオソレズトハ云トモ、罪ノウタガヒヲコレカロンゼラレ、今ノ松倉寺澤ノ死罪ヲナダメラレ、其輕重ニ隨テ、或ハ流刑或ハ安堵ノ思ヒヲナス、アリガタカリシコトドモナリ、カ、ル御成敗ノ上ハ、イヨイヨ海内シヅカニシテ、士農工商ニイタルマデ、エイヨフニ住セシコト、ツタヘキク延喜天曆ノ聖代モ、コレニハスキジトゾ見エシ、

山田右衛門作以言語記終

休明光記

こさふかはくもりやすらむみちのくの蝦夷には見せし」となん古き歌にも侍るよし聞つるに、その秋の夜の月の光と明らけき御代にあひて、今彼千嶋の隈くままであらたにてらさせ給ふ御惠のする廣さは、いかにいひも盡すべき、かくて筑前守藤原安論朝臣と正養とに此事を奉はり行ふべきよし仰ごとあり、されどをのれざえみじかく、心あさくして、いかでかかるおほいなる御政をなし得べきわいだめもなし、まかはあれど、重き仰のかしこさを、いなみまいらすべきさすがもあらねば、安論朝臣はさらなり、其餘したがつ所の人々のちからをたのみつゝ、たどりく行ひゆく程に、日をつみ年をかさねて、淺からぬ御惠は彼嶋々にぞ及びける、かしこに住るものども、賤しきえびすごゝろにも、朝な夕なに其かしこさをあふひで止す、いでやかくやごとなき御政のあらましを、千とせの後につたへまほしく、そのもとすゑのひとつふたつを、拙き文にかいつけ侍りぬ、ひとへに休明の御代の光りによるものから、いまし此草紙の名と

するものならし、

文化四とせ彌生安藝守正養みづから敍す

凡例

一此書は、蝦夷地御處置の始末、其大綱を後世に傳へむために述る也、ゆへに御書附類、詞書などを盡く記す時は、甚煩雜にして、却て分りがたきにより、其要なるものはこれを記し、其餘は多分に其趣きのみを摘取て、爰に記し、諸書もの類は、ことごとく附録に譲る、くはしきを知らむ事をもとめば、附録を閱して參考すべし、

一其年の事を記すに、近き所は同年と書き、遠き所は年號を記す、是かへりみる事の煩しきを厭ひて也、且其記し方、先は年月の順次に隨ふといへども、其類におゐては年月に拘らず、たとへば其發端は未年に出、其次申酉戌等にありとも、ことごとく引上げ記するあまたあり、これは其類の一ついきにして、其本末を見安からしめんがため也、故に申年、酉年などの事をゑるせしあとへ、また立戻りて未年の事などを記す類あり、是は其事の別なるをもつて也、

一懸り役人の姓名も、初年計を記し、其のち代り合の

分は不_レ記、役割并在勤の事も是に同じ、

一奉行の在勤交代の事も、初ての時計をゑるし、年々には記さず、事ある時は其とし誰在勤と注す、

一支配向も、初て命せらるゝもの計姓名を記し、其餘はゑるさず、

一御用取扱町人共も、其始計をゑるし、後の代り合は記さず、

一御用船も、初ての造立のみをゑるし、其餘は記さず、

一此書の書振は、煩雜なる事を悉く省き、いかにも簡易にして、聞えやすきを要とす、故に聊も文華を飾らず、後の君子自己の文才を曲げ、俗に隨て書繼給はん事を希ふのみ、

一都て蝦夷地へ立る碑類に漢文を用ひざるは、林大學頭乘衡が曰、今度彼地の舉は、新に本邦より處置せしめ給ふ所なれば、和文こそあらまほしけれとなり、故にみな和文を以記す、

以上

蝦夷地の御處置往々行はれ、百年の後に至らば、皆風をうつし、俗を易へ、盡く本邦の人の如くなりゆくべ

し、故にいま蝦夷人の躰を爰に畫て、後世にまらしむ、

(蝦夷人男、小兒、女、畫略之)

休明光記卷之一

○蝦夷地惣論の事

○蝦夷の地は、陸奥國の東北にして、江城を去る事二百數十里、東は南部の佐井より渡り、西は津輕の三厩よりわたる、北極の出地凡四十三度より五十一二度に係て、至て塞國なり、周廻凡六百里、カラフト嶋、クナジリ嶋、エトロフ嶋、ウルツブ嶋等をはじめとし、有名無名大小の嶋々數をまらず、世に蝦夷が千嶋といふは是なり、三厩より渡れば松前に着き、佐井よりわたれば箱館にいたる、此海路兩所とも凡十里也、抑此地の事は、齊明天皇の御宇、安倍臣をして蝦夷を征せしめ給ひ、後方羊蹄に政所を置たると、日本書紀に見えたり、此後方羊蹄は、今のシリベシと云、蝦夷地第一の高山也、此頃は土人も多く住居したればこそ政所をも置て治められしものならめ、夫より後人も往々に減少し、誰有て制御するものなかりしに、嘉吉年中に、下國安藤太といふもの渡りて、今松前の下國といへるわたりに居たり、其後寶徳三年に、武田信廣、

南部の蠣崎より渡りて、下國氏を亡して、天河といふ所に住居す、是今の松前氏の先祖にして、代々こゝに住して、蝦夷を制御す、然るに蝦夷地より東北にあたりに、海上數百里をへだて、ヲロシヤといへる國あり、或はこれをミユスコビイともいひて、廣大の國なり、此國數代豪傑の主相續し、近國を盡くなづけ、既に韃靼阿蘭陀なども此國に屬し、國勢甚強大也、此國と蝦夷の境とは、カムサツカといへる湊也、然るにいつの程よりか、彼カムサツカに近き蝦夷地のまじま、甘計も彼方へ蠶食し、嶋の名も附改め、代官舩のものを居置、専ら彼國より處置し、剩明和二酉年ヲロシヤ人ノイバンレエンチ、といふもの、蝦夷地の内レシヤハ嶋へはじめて渡來し、カムシリ嶋に越年し、翌戌年エトロフ嶋へ渡來し、嶋中の様子を見めぐり、ウルツプ嶋に越年し、翌亥年歸帆の時、ラシヨア嶋夷人共へ對し、不法に及びたる事などもあれど、彼嶋人勢ひ及ばざれば、其儘に歸帆せさせぬるよし、同五子年にはウルツプ嶋東浦ワニナウといふ所へ、ヲロシヤ人多く乗たる大船渡來し、同六丑年には、ヲロシヤ人イバンホロシヒチニイカノフといふもの、又

ウルツプ嶋へ渡來し、翌寅年同所長夷兩人を鐵炮にてうち殺す、此ウルツプ嶋にはもとより住居の夷人はなくて、エトロフ嶋より出稼の者なりしが、右のごとくヲロシヤより大船渡來し、剩人をも殺しければ、夷人共大に恐れ、悉エトロフ嶋へ立歸りぬ、其跡にてヲロシヤ人共思ふ程漁業などし、安永二巳年歸帆に赴けるが、同所西浦アタツといふ所にて難風にあひ、大船破れ、乗組の者共一同同所アタツトイといふ所へ上り、遂にエトロフ夷人共と和融をなし、互に交易を以業とし、同五申年まで四年滯留し、其年本國より迎として大船來り一同歸帆せしよし、夫より同七戌とし、ヲロシヤ人ケレトブセメテリヤウコヘツなどいふ者を初として、大勢渡來し、東蝦夷地キイタツプのうち、ノツカマアといふ所の松前家運上屋に來り、彼國より通信通商の事を願ふといへども、彼地詰合の家臣共より挨拶に及びがたきによつて、ひとまづヲロシヤの内ヲホワケといふ所へ歸帆し、其年の秋末、復ウルツプ嶋へ渡來越年し、翌亥年アツケシの内ツクシユイといふ處へ來り、昨年のおいさつを待、松前の家臣陣屋へ訴ふる所、叶ひがたきよしを演説し、

ウルツプ嶋を離散しぬ、
其事は猶後文に見ゆ、

ウルツプ嶋を離散しぬ、
其事は猶後文に見ゆ、

○蝦夷地警衛の掛りを命ぜらるゝ事并東蝦夷

地七箇年御試として上地の事

此者共是より十一年を経て、漸く

○かくてヲロシヤ國より前件のごとく、蝦夷の屬嶋を次第に蠶食し、又彼國人の蝦夷地へ往來する事、既にあまた度に及び、玄かのみならず、寛政の度、御普請役最上徳内、御小人目附和田兵太夫、西蝦夷地カラフト嶋へ見巡りの時も、ヲロシヤ人來居、面會もなしたるよし、又東蝦夷地エトモの内、白鳥の澗といふ所へ、寛政八辰年、同九巳年、兩年續けて、異國船渡來し、且前件のごとく、ウルツプ嶋エトロフの内へ、ヲロシヤ人玄ばく渡來せし時の事にてや有けん、彼國にて信ずる邪宗門に用る十文字木といふものを、エトロフ嶋に建置たる事有、既にかくのごとく、ヲロシヤ國より蝦夷地蠶食の催し頻なりといへども、素より松前氏小家なれば、施すべき術もなく、只其まゝに歲月を過せしに、此事追々公に聞え、かくて其儘捨置なさまく、寛政ころ朝議有、まづ有司を遣して監察せしむべしとて、寛政十年御目附渡邊久藏胤、御使番大

河内善兵衛政壽、御勘定吟味役三橋藤右衛門成方を
 して、彼地巡見の事を命ぜらる、御勘定奉行石川左近
 將監忠房は、江都に在て此事にあづかる、それより渡
 邊、大河内、三橋の三士、各其屬吏をひきひて進發し、
 渡邊胤は松前に居をといめて事を糺し、大河内政壽
 は、東蝦夷地シヤマニまで、三橋成方は、西蝦夷地ソウ
 ヤ迄巡行して、詳に事の跡を監察し、同年の冬三士と
 も府に歸り、其始末をつぶさに上達す、是より以前、石川
 配勘定近藤重藏に蝦夷地の末々の邊迄遣し、則、忠房の手より支
 彼地に越年し、事のやうな謀り、追々に注進す、こゝに於てまた
 品々朝議有て、其年二月廿七日、御書院番頭松平信
 濃守忠明をして、蝦夷地警衛の事をうけ給るべき由
 命ぜらる、旨、執政太田備中守資愛朝臣達せらる、此類
 の御用御勘定奉行、御目附吟味役等承るは常の事也、番頭のあづかる
 べき事にあらずといへども、忠明兼て蝦夷地の事に思ひ含たる品もあ
 りて、是よりさき執政方よりも御尋有、策を奉じ、翌十一未年正
 月十六日、御勘定奉行石川左近將監忠房、御目附羽太
 庄左衛門正養をして、蝦夷地警衛の事を可承由命せ
 らるゝの旨、執政安藤對馬守信明朝臣達せらる、大河
 内政壽、三橋成方にも、また改めて此命あり、渡邊胤は、
 於江都一此事にあづかるべき由達せらる、執政にて
 は、戸田采女正氏教朝臣、參政にては、立花出雲守種周

朝臣これをつかさどらる、奥御右筆組頭近藤吉左
 衛門、奥御右筆尾嶋鍋三郎、布施藏之允これをうけ給
 る、其日采女正氏教朝臣左之通書附を以達し給ふ、

松平信濃守

石川左近將監

羽太庄左衛門

大河内善兵衛

三橋藤右衛門

今度異國境御取締被_二仰附_一候に付、東奥蝦夷地
 の内嶋々迄、當分御用地に相成、其方共御用被_二
 仰附_一候、是迄松前若狹守右之土地より年々收納
 之分は、從_二公儀_一若狹守江相渡り候様被_二成下_一
 候に付、右之場所には萬端其方共差圖に任せ候
 様、若狹守江申渡候間、被_二得其意_一、當土地之様子
 も追々申談之上、見分有_レ之、蝦夷人教育之儀を
 始、風俗を替候儀、并交易之趣法迄も存寄に任
 せ、一躰開國之御趣意を含み、服從いたし候儀、
 第一に可_レ被_二心得_一候、右御用之儀者深き御趣意
 に而被_二仰出_一候儀に有_レ之、御國境之事にも候得
 者、其心得を以、銘々粉骨を盡し、今度之御趣意不

違樣進退差引、精勤可被致候、尤不_レ得_レ止儀者不_レ及_レ伺取計可被_レ申候、御入用向等之儀者不_レ少儀にも可_レ有_レ之候間、追々可被_レ相伺_二候、同日對馬守信成朝臣より左之書附松前若狹守江達し給ふ、

松前若狹守江

今度異國境御取締被_二仰附_一候に付、東蝦夷地之内嶋々迄當分御用地被_二仰附_一候間、可被_レ存_二其趣_一候、尤右土地よりは近年々其方收納之分は、御用中は從_二公儀_一御取替金御下ケ可被_レ成候、右之御用御書院番頭松平信濃守、御勘定奉行石川左近將監、御目附羽太庄左衛門、御使者大河内善兵衛、御勘定吟味役三橋藤右衛門、右五人之面重立被_二仰附_一、右土地之蝦夷人教育之儀を始、交易之趣法等萬端差引進退可_レ仕之旨被_二仰出_一候、是又被_レ得_二其意_一、右之面々差圖に任せ候樣可被_レ致候、委細之儀者、懸り之面々より可_二申談_一旨相達候條、得_二其意_一可被_レ談候、

右の如く御達しありて、則東蝦夷地之内南の方ウラカハより、北の方シレトコ限り、其餘嶋々迄七箇年の

間御用地なり、御試として御處置有べきに極りぬ、此場所之松前家收納之分は、御下ケ金有けり、此御下被_二仰出_一の條にこれをあるす、かくて今度蝦夷地の懸り五人の有司に従ふ所の官吏には、御勘定組頭松山惣右衛門、御勘定太田十右衛門、同高橋三平、吟味方改役並鈴木甚内、同水越源兵衛、同大嶋榮次郎、支配勘定佐藤茂兵衛、同近藤重藏、同松田伊左衛門、同竹尾吉十郎、同菊地惣内、同木原半兵衛、同田邊安藏、同格富山元十郎、支配勘定勤方松平信濃守、與力岩間哲藏、御徒目附細見權十郎、同村田兵左衛門、同岩瀬猶右衛門、同藤本徳三郎、同湯淺三右衛門、西丸御徒目附堀越友左衛門、同比企市郎右衛門、御徒押より御徒目附勤方宮田次郎橘、表火之番より同斷比留半藏、同小幡千次郎、同正田周平、西丸表火之番より同斷金指專八郎、同岡田大五郎、御小人頭より同斷和田兵太夫、御普請役元格寺田忠右衛門、同三浦千藏、同宮本源次郎、同山田鯉兵衛、吟味方下役野々山牧三郎、御普請役最上徳内、同中村小市郎、同戸田又太夫、同渡邊大之助、同河野權次郎、同倉橋藤四郎、同安藤三次郎、同庵原久作、同寺澤治部左衛門、御普請役勤方長嶋新左

衛門、同村上次郎右衛門、同佐藤平八、同出役屋代龍八郎、御中間目附深山宇平太、御小人目附大橋善四郎、同青柳貞市、同小林卯十郎、同小林新五郎、西丸御小人目附井上辰之助、同栗山政五郎、同宮川勝助、同内田平四郎、同西村常藏、御小人より御小人目附勤方柿沼吉次郎、同相川平作、同根津清左衛門、同柳田元吉、同安藤巳之助、同塚田富次郎、同田口久次郎、同岡田左市、同古澤常吉、同八田直四郎、西丸御小人より同斷松田仁三郎、御先手同心より同斷高橋次太夫等なり、各精撰の上窺ひを歴てこれを命す、今度の擧は、世の常の事にあらざれば、面々身命を抛ち、格別に力を盡すべきのよし、各誓ひを立て精勤す、是より後、度々なりといへども、繁雜なるがゆへにこれをふるさす、只最初に命ぜらるゝ所に面々のみを爰にふるす、官吏の増減

○懸り五人の首司商議并松前大炊介事

○さる程に五人の有司會合して商議をなすに、元來蝦夷の土人、其形は五躰備りたりといへども、人倫の道もゑらず、男は髪を亂し髻をそらず、身にはアツシといひて、木の皮にて織たる物を襦だけに仕たて、左衽に着し、女は禿のごとく亂髪にて、襟のあたりにてきり、夫を持たるものは口の廻り、又は兩手にこと

ごとく黥し、これもアツシを左衽に着し、男女とも繩を以て帶とし、小兒は多く裸形なり、たまゝ犬の皮などを着すもあり、食は五穀をくらはず、魚物或は鳥獸を捕くらひ、或は煮焼し、あるひは生にて食ふといへども、多くは鹽をも用ひず、四方に丸木柱をたて、キナと云草或は熊笹杯をもつて、やね及四方を圍ひ、ゆかはなく、艸薙をしき居、又は穴居坏して暮すものもあり、文書通せず、歳次四時もゑらず、己が年齢をもわきまえず、病む事あれども醫療なく、只イケマといふ草の根を採て食ふのみなり、されば疱瘡麻疹、其外疫病の類流行する事あれば、人の死する事其數をゑらず、父兄親族死する事あれば、大に哭して其家近き地をほりてこれを埋む、死者の住し小屋は焼捨、年忌祭祀に營む事もなく、其性まことに至愚至直なる、然るに松前家小身にて、廣大の土地家士をもつて制御する事あたはず、場所／＼を割附、町人に預け、これを請負と名づけ、運上をとりたて、收納とする事なりしに、彼是次第に勝手むきさしつまり、年々に此運上の取ましを促すにより、場所引受の姦商共は、まづ第一にをのれ／＼が利潤をはかり、其あまりをもつて

運上の増を出さむとするほどに、蝦夷人共と交易のとき、米酒たばこ其外の諸品にいたるまで、升目を掠め、秤目をくるはせ、或は腐れ損じたる品をわたしなんど、あるとあらゆる非義を行ふにより、蝦夷人どもは次第に衰微し、松前家の苛政をうらむる事すでに年久し、まかるに彼ヲロシヤ人近年邦内を廣げしは、合戦攻撃の業をなさず、唯仁を假り惠を似せて、人をなづくる事彼國の奇法にて、あまたの國々を悉く屬従としめたれば、蝦夷人もかたのごとく衰へ、松前家をうらむるよしを傳へき、奥蝦夷地の嶋々より段段になつて、既に甘嶋ばかりも己が有となし、猶前に記す如く、ヲロシヤ人度々東蝦夷地の内へは渡來し、是を伺ふ事まきりなり、去によつて今度警衛の事を命ぜらるゝといへども、蝦夷地は四方海にして、廣大なる嶋なれば、いづこをさして堅城砦杯を設くべき謀もあらず、されば只々夷人共を厚く撫育し、ことごとく國家の仁政にのべふし、衆人一致に心を決し、外國よりいかになつくるとも、敢てかたむかざるやうに教へなすより、施すべき術もなし、もとよりヲロシヤ國は、攻戰を好ず、人をなづくるをのみ業とすれ

ば、此術よく整ふときは、外寇蠱食の道を斷切る道理にして、則衆人を以、堅城砦となすの法也、然れども若干の夷人故なく是を惠まんとせば、其失費いふべからず、まかのみならず、異人ども恩になれ、愛をたのみて、己々が業を勵む事を忘れ、却て懈惰を勸るの道也、只年頃仕馴たる交易の業を元とし、これを扱ふものは、今迄の如く、町人に命じ、其場所毎に悉く官吏を措て、これを點檢せしめ、渠が方より出す所の產物のかへものとしてあたふる所、ことごとく改めて、聊も惡しき品をわたさず、又升目秤目等を嚴にして、些少の不正をも施ざる様、官吏どもあつく心を用ひてこれを行ひ、交易場所或ひは五里に一屋、十里に一屋、官舎を設け、常は交易の事を行ひ、旅人ある時は旅宿とし、又夷人共漁業をなすに、其具乏しければ、網其外漁具をあまた彼官舎に貯置、是を夷人に借して漁せしめ、其働き拔群にして、たゞ產物を出すものには、其功にまたがつて程よくほうびを與へ、又第一に憐むべきは、これまで松前の掟にて、いかなる雨雪の時といふとも、夷人共簑笠草鞋杯を用ゆる事あたはず、若狂すものある時は、つぐのひを出さする事也、

先此禁をゆるめ、猶勝れて困窮なるものには、衣食居所の手當をし、病者ある時は、本邦より醫師をあまた雇ひ、場所／＼に配り置、是を療せしめ、又錢通用を初めて其便利を玄らしめ、産業をはげむこゝろを發させ、専ら和語をつかひならはせ、或時は連々に五常の道をも教へ、いろは文字をもならはせ、若本邦の風俗にあらためむ事を欲る者有時は、其意に隨がつて是をめし、本邦の服をも興へ、また格別なるものには、其時宜により家居も本邦のごとく補理ひ遣し、往往は耕耘の道をも教へ、百年の後は、蝦夷地一圓盡く本邦の如くにならむ事を旨とすべし、既に古は今の仙臺領宮城郡の邊よりして、こと／＼く蝦夷人ばかりしが、漸くに開けて今かくのごとし、多賀城の碑にいはく、去_ニ蝦夷國界_一二百二十里と刻めり、此頃は六十一里なれば、今の道法にては二十里也、此時惠美朝獺等、奥州の蝦夷を征伐し、二十里こなたの宮城野に鎮府を設、此碑を建られし也、是古の蝦夷國境なり、其後延暦中に、坂上田村麿、南部の大濶、津輕の外が濱まで服從せしめて、海より南を日本の地とし、北を夷地と定められたり、是今の蝦夷國界なり、又此郷南部

七ノ戸壺村に碑を建、日本中央と記されたり、此邊は日本東北の末なるを、いかに中央と記されたると思ふに、後年蝦夷地こと／＼く開けぬる時は、正に此邊日本の中央たるべし、今時に至て此舉あらむ事を、數百年前に計られしは、此卿の卓見恐るゝに堪たりといふべし、星霜重らば爰に至らむ事亦難からじ、此廣大の土地左の如くならむには、實に日本の地にあらたに一國湧出たるごとくにて、其益言語を以ていふべからず、去れども是等の事急速に行事などは、此方より促す時は、果して人望にたがふべし、とき至てかれらが方より望むを待べし、都て今度の舉は、聊も功を急ぐべからず、先今さしあたる所は、夷人の服從を第一にはかり、場所／＼の官舎に官吏を措て、是を用とらしめ、又非常の備には、南部大膳太夫津輕越中守が領國、蝦夷地に隣りたれば、此兩家より軍卒若干を出すべきよしを命ぜられ、便よき所に番舎を補理ひ是を配り、武器を備へ警衛せしめば、今外寇の防はたるべし、夫が中にもウルツプ嶋には、既にヲロシヤ人も居を玄めたれば、そのこなたなるエトロフ嶋へは、殊更に此警衛を嚴重に設け、官吏をも撰び遣はし、夷

人服従の事も此嶋を第一の眼目として事を謀らば、危ぶき事有べからず、又蝦夷の地は盡く嶮岨にして、通路自在ならず、所としては人蹟を絶え、其海岸搔送り、舟をもつて漸々に通路をなすといへども、風順よからざれば、舟行の道をたち、徒に風を待て日を送る、かくては事あらむ時、急を告るに妨あり、亦常に往來の煩ひなれば、ことごとく道を開て通路をつけ、往來の煩なからしめ、又數里の間旅宿なければ、旅行のものの野宿の勞にたえず、前にいふ所の官舎を建て旅宿とせん、先是等の數事をさしあたる所の急務として手を下さむ、今度の御入用其程はかり難しといへども、凡一箇年金五萬兩ヅ、申おろして事をはからんと、衆議既に一決したり、

○松前若狹守父隱居大炊介、寛政十年年より命あつて出府し、營中に於て執政方兩三度談給ふ事有、翌未年二月廿九日、伊豆守信明朝臣より達し給ふは、今度蝦夷地の御用懸りに命せらるゝにつき、大炊介事地理案内にて、年來心掛たる趣も聞ゆるにより、御用の品もあるべきに付、先在府して掛りの面々にも諸事申談すべしとの御事也、此事は、執政方御深慮ある事のよし聞えし、大炊介則在

府して、忠明忠房が宅へも度々來り、彼是談の事も有り、

○蝦夷地經濟の地大本伺の事并村上三郎右衛門遠山金四郎長坂忠七郎御用を蒙る事

附官吏共役割の事

○蝦夷地の經濟其大本の旨趣既に商議整ひければ、いざや此趣を執政に達し、御旨をも伺はばやとて、前後の數條、猶其上些少の事共もありて悉く調べあげ、伺書を仕立、采女正氏教朝臣、又は出雲守種周朝臣に就て奉るもの數通也、其中には御不審の廉などもありて、再應再々應其譯を申ものも亦あまた也、終には右數條の旨趣をもつて計ふべきとの御事也、爰におゐて五有司謹て申て云、彼地經濟の大本既に前件のごとく思ひ設け候へども、いまだ手を下さざるの土地に候へば、今爰に議する事の如く、果して行はるべきや、行はるべからざるやとらず、先者大本は前件の旨趣を目當とし、其餘は機に臨み變に應じ、其所置仕るべしと申ければ、尤左に有べき事なりとの御沙汰にて有ける、先ことしの所は、松平忠明、大河内正壽、三橋成方の三士、諸官吏を召具し、彼地へ發し、事の様

をこゝろみ、前件の數箇條の内、直に行はるべき事は
行ひ、又行ひがたき事は猶豫し、後日の所置たるべし
と相議して、上啓を遂けるに、其通りたるべしとの御
事なりければ、三士専ら旅裝ひをぞいとなみける、

○又寄合村上三郎右衛門常福、西丸御小姓組松平圖
書頭、組遠山金四郎景晋、西丸御書院番淺野佐渡守、
組長坂忠七郎高景も此御用として、彼地へ遣はさる
る旨、寛政十一未年二月十日命せらる、是等者今度の
御用に相當なる人物により、兼々此方より薦舉せし
所なり、此三士は忠明出立の前後に發足し、村上長
坂は彼地に越年し、事を計ふべきよし相議し、さらば
先官吏共をさきへ發足させしめんとて、各其受持の
役を定む、宿割には、長嶋新左衛門、栗山政五郎、普請
方の内道造り兼水越源兵衛、最上徳内、中村小市郎、
長嶋新左衛門、青柳貞郎、小林宇十郎、場所請取兼交
易掛りには、太田十右衛門、大嶋榮次郎、細見權十郎、
寺田忠右衛門、中村小市郎、戸田又太夫、村上次郎右
衛門、青柳貞市、大橋善四郎、井上辰之助、安藤巳之
助、普請方より南部大畑仕入物御用兼佐藤茂兵衛、正
田周平、和田兵太夫、渡邊大之助、河野權次郎、根津清

左衛門、岡田佐市、田口久次郎、津輕青森仕入物御用
取扱には、水越源兵衛、藤本徳三郎、岡田大五郎、倉橋
藤四郎、屋代龍八郎、宮川勝助、柳田元吉、是等を一
番立とし、二番立には普請方より場所懸り兼松田伊左
衛門、竹尾吉十郎、岩瀬猶右衛門、野々山牧三郎、三浦
千藏、佐藤平八、羽州酒田仕入物御用取扱には、高橋三
平、宮田次郎橘、宮本源次郎、柿沼吉次郎、場所受取よ
り交易掛り且仙臺石ノ巻仕入物御用兼菊地惣内、小
幡十次郎、安藤三次郎、庵原久作、交易掛りには、比企
市郎左衛門、比留半藏、金指専八郎、古澤常吉、相川平
作、八田直四郎、エトロフ嶋懸りには、近藤重藏、山田
鯉兵衛、松平忠明手附には、岩間哲藏、内田平四郎、大
河内政壽手附には、堀越友左衛門、塚田富次郎、三橋成
方手附には、木津半之丞、西村常藏、御船政徳九子モロ
に直乗の上乗には、富山元十郎、寺澤治部右衛門、松田
仁三郎、高橋次太夫、江戸懸りには、松山惣右衛門、鈴
木甚内、木原半兵衛、田邊安藏、村田兵左衛門、湯淺三
右衛門、大林久米右衛門、蓮見安之助等也、是より年々
の場所懸
り、其年ごとに違ひありといへども、ことごとく記す時は、至
て煩雜となり、其家初の役割のみを記して、その以下は畧す、

○松平忠明大河内政壽三橋成方并村上遠山長

坂及官吏共出立且澁江長伯蝦夷地に至る事
○かくて懸りの官吏共、前件のごとく役割既に極り
ければ、寛政十一年二月中旬より廿日後迄に不_レ殘出
立し、松平忠明、大河内政壽、三橋成方、村上常福、遠
山景晋、長坂高景は、三月中旬より下旬迄に追々出立
なり、件の面々拜領物御手當左のごとし、

御暇

金拾枚

時服四羽織

御朱印

人足八人馬五疋

松平信濃守

御證文

御用長持二棹

御合力米七百石十二箇月割

御扶持方分限に應し一倍

宿代一箇月銀七枚ツ、

外

用意金五百兩

但二度目より御暇拜領物無_レ之、その代りとして金百兩被_レ下、此用意金六百兩に成る、

御暇

金拾枚

時服二羽織

大河内善兵衛

御朱印

人足八人馬五疋

御證文

御用長持一棹

御合力米五百石十二箇月割

御扶持方分限に應し一倍

宿代一箇月銀五枚ツ、

外

用意金貳百兩

但二度目より御暇拜領物無_レ之、其代りとして金百兩被_レ下、用意金如_三初度_一、

御暇

金拾枚

三橋藤右衛門

時服二羽織

御朱印

人足八人馬五疋

御證文

御用長持一棹

御合力米四百石十二箇月割

御扶持方分限に應し一倍

物書料金三拾兩

宿代一箇月銀五枚ツ、

外

用意金百兩

但二度目より御暇拜領物無之、御暇代りとして金百兩被下、用意金如三初度、

御暇

金三枚

時服二羽織

村上三郎右衛門

御朱印

人足貳人馬三疋

御證文

御用長持一棹

御合力米四百五拾俵四物成月割

御扶持方分限に應し一倍

宿代一箇月銀三枚

物書料金貳拾兩

外

一日金貳分ツ、

但筆墨紙蠟燭品物渡り

右は御勘定組頭之振合也、此年御勘定組頭は出立無之、其後村田鐵太郎出立之節此通被下、

遠山金四郎

御暇拜領物并御手當等諸事同右、

長坂忠七郎

御暇拜領物并御手當等請取事同右、

御暇

金貳枚

御勘定

吟味方改役も此通也、此年は無之、

御朱印

人足貳人馬三疋

御證文

御用長持一棹

御合力米貳百俵四物成十二箇月

御扶持方分限に應し一倍

物書料金拾五兩

賄道具代銀四枚

御手當金一日壹步貳朱ツ、

宿代一箇月銀貳枚ツ、

筆墨紙蠟燭品物渡り

御暇

但二度目よりは御暇拜領物無之、代りとして金貳拾兩被下、宿代賄代相止、筆墨紙蠟燭代金七兩被下、

金貳拾兩

吟味方改役並

支配勘定

御朱印

人足貳人馬貳疋

御證文

御用長持一棹

御扶持方分限に應し一倍

雜用金一箇月五兩ツ、

御手當一日銀貳拾目ツ、

賄道具代銀四枚ツ、

宿代一箇月銀貳枚ツ、

筆墨紙蠟燭品物渡り

但二度目より拜領物無之、代として金貳拾兩被下、其外前條同斷、金七兩被下、

御暇

金拾兩

御朱印

人足貳人馬貳疋

御徒士目附

御證文

御用長持二人江一棹

御扶持方七人扶持一倍

雜用金一箇月四兩貳分ツ、

御手當一日銀拾五匁ツ、

賄道具代金三兩貳分

宿代一箇月銀一枚ツ、

筆墨紙蠟燭品物渡り

但二度目より御暇拜領物無之、代りとして金五兩被下、其外前條同斷、金七兩被下、

松平信濃守與力岩間哲藏も被下物御徒目附之通り、并向々より出役御徒目附勤方之者ども此通り、

御暇

支度金四兩

御普請役元

御證文

本馬一疋

雜用金一箇月五兩

御扶持方五人扶持一倍

御手當一日銀拾匁ツ、

宿代金三歩二匁

筆墨紙蠟燭代金貳分

但二度目よりは支度金貳兩被下、其外書面之通被下、

御暇

支度金三兩

御普請役

御證文

本馬一疋

吟味方下役も此通被下、支度金四兩、貳度目より貳兩被下、

雜用金一箇月三兩貳分

御扶持方三人扶持一倍

宿代金一箇月貳分ツ、

筆墨紙蠟燭代一箇月金貳分

御手當一日銀拾々ツ、

外ニ

帳箱持

但し二度目よりは支度金無之、代として金壹兩貳分被下、

向々より出役御普請役勤方之者も、被下物此通り

也、

御暇

金三兩

御小人目附

御證文

本馬一疋

御扶持方貳人扶持一倍

雜用金一箇月貳兩ツ、

賄道具代金貳分、

宿代一箇月金貳分ツ、

御手當一日銀拾々ツ、

筆墨紙蠟燭品物渡り

但二度目よりは被下物無之、代りとして金一兩被下、

向々より出役御小人目附勤方之者も、被下物此通り也、

○石川忠房、羽太正養は、江府に在て御用を承り、彼地の三士より申來る趣を執政に達し、御旨を承りて三士へ達る事あまた度也、

○奥詰醫師澁江長伯、採藥の事を命ぜられて、彼地へいたる、三士に引續て出立し、東蝦夷御用地の方を巡行して、其年の冬府に歸れり、

○御用聞町人共の事

○江戸會所の事

○御用船の事并政徳丸子モロへ直乗の譯

○天文名堀田仁助乗組の事

○無名の御箱訴の事并中村徳三郎作一書の事

○細見權十郎西村常藏熊を仕留る事

○シリウチより箱館迄土地の事

○今度の御用取扱の町人、江戸にては、栖原屋角兵衛、栖原屋久次郎、田中屋伊助、角兵衛は、享和元酉年銀五枚爲取、久次郎伊助兩人に成、後久次郎は金六と改む、箱館にては、栖原屋庄兵衛、伊達屋林右衛門、阿部屋傳兵衛、平岩平八、傳兵衛は、翌申年差免し、其子伊兵衛に申付る所、病氣によつて聞しなく差免す、平八は翌々酉年差免す、庄兵衛は享和二亥年金貳拾兩爲取差免す、栖原屋半次郎兵衛、伊達屋清兵衛、林右衛門、兩人は、御用聞見習、西田屋正二郎は、御用聞助、此三人は享和三亥年に申附、それより箱館は、林右衛門、半次郎、清兵衛、正三郎、此四人之所、正三郎不束之事有之、文化三寅年御用聞取放し申附る、京都御用取扱人は、越後屋利右衛門、寛政十申附、大坂にては、多田清左衛門、伊丹屋四郎兵衛、小山屋吉兵衛、廣屋三之助、兵庫にては、北風庄右衛門、清左衛門、四郎兵衛、吉兵衛は、申年に付、三之助、庄右衛門は、文化二五年申附る、南部大畑にては、菊地屋與左衛門、新屋元左衛門、此二人申年申附る、同所鍛ヶ崎にては、小嶋屋茂左衛門、大坂屋甚左衛門、此二人酉年申附る、津輕青森にては、竹谷與次右衛門、瀧屋善五郎、此二人は、酉年申附る、與次右衛門は、亥年差免し、其代り藤林屋源右衛門に申附る、羽州酒田にては、板屋惣兵衛、五十嵐屋七郎左衛門、二木與助、渡邊多市、此四人戌年申附る、與助亥年差免、其代上林

次郎次、越前敦賀にては、綱屋傳兵衛、館屋治左衛門、此二人申附る、奥州岩城にては、鈴木甚左衛門、酉年申附る、常州平瀨にては、鈴木屋忠三郎、亥年申附る、總州銚子湊にては、十五屋傳五郎、未年申附る、相州浦賀にては、齋藤豐次郎、石井幸十郎、下田にては、岩田幸右衛門、此三人文化二酉年申附る、長州下ノ關にては、綱屋七郎左衛門、長府屋左兵衛、此二人丑年申附る、又定雇船頭には、攝州兵庫高田屋嘉兵衛、享和元酉年申附る、江戸廻船請負には、筑前屋新五郎、未年申附る、是等のもの共御用向取扱申附、障なきや否の事、町奉行及び領主等々掛合の上申附る、此事兼て、伺前書町人共の内、栖原屋甚左衛門、田中屋金六、伊達屋林右衛門は、文化三寅年三月、願によりて御用達被三仰附、御扶持方三人扶持被下、御扶持方殿裏地御用金之、同年十月、願によつて苗字御免あり、甚内より渡す、右衛門は北村と改め、金六は田中、林右衛門は伊達と號す、此時より三人とも此方の支配となる、

○又彼地より運送の産物、此方より仕入物等取扱ふ所、其初めは、江戸伊勢町にて、商家の家藏を借り、當分の用を辨じ、其後靈巖橋のほとりにて所を見立、町奉行へ掛合の上、伺ひを歷て、寛政十一未年五月、五百坪の地所を請取、此所は、石屋勘兵衛といふもの、請負の地にて、二箇年地代金六十兩出す、會所を

建、此所江戸懸り官吏の詰所にて、専ら御用取扱所とぞ成ける、其後追々に御用も嵩み手狭につき、此地所は、石屋勘兵衛請負地にて、都合九百坪餘有けり、勘兵衛を外へ移し、残らず受取度旨町奉行へ談ずるの處、當時二百坪渡し、残りは五年之内渡すべきとの事につき、文化元子年八月、二百坪請取、其段執政方へも申上、河通りに築地して、水門を建、會所もあまたの建足し出來たり、

亦御用船數艘を造る、所謂

政德丸 千二百石積也、此船は、先年蝦夷地御用之節、御買上有之、御船手の預りなりしが、寛政十一未年、當御用之方へ受取、

凌風丸 千石積也、同年御買上、文化元子年修理し、千四百石積となる、

神風丸 千四百石積也、同年相州浦賀にて造る、翌申年、南部にて破船、修理して如神丸と改む、

忠教丸 孝興丸 義温丸 禮常丸

此四艘は、百石以下也、未年、南部大畑にて造る、

隼丸 二百五十石積也、同年同所にて造る、享和三亥年、蝦夷地シリキシナイにて破船す、

第一丸 千石積也、寛政十三申年、相州浦賀にて造り、享和元酉年、越後青嶋にて破船、同所酒田にて修理して、安全丸と改む、

同年同所にて焼失す、

飛龍丸 千四百石積也、同年蝦夷地シヤマニにて造る、

翔鳳丸 千五百石積也、同年同所にて造る、享和二亥年、蝦夷地ヤムクシナイにて破船、

濟通丸 六百五十石積也、同年蝦夷地シヤマニにおゐて造る、

鳴鶴丸 六百石積也、同年同所にて造る、其年同所にて破船、

萬春丸 四百五十石積也、同年同所にて造る、

萬全丸 千五百石積也、享和元酉年、蝦夷地シヤマニにて造る、文化二五年、南部にて破船、翌寅年南部大畑にて修理、

景福丸 千四百石積也、同年同所にて造る、同三亥年上總守谷沖にて破船、

千春丸 六百五十石積也、同年同所にて造る、

吉祥丸 七百石積也、同年同所にて造る、

天祐丸 六百五十石積也、同年同所にて造る、享和二戌年、南部にて破船、

瑞穂丸 三百五十石積、關船仕立也、同年大坂にて造る、翌戌年南部家より願によつて、何之上引渡す、

榮通丸 同石同斷、同年同所にて造る、同三亥年、津輕家より願によつて同斷、

寧濟丸 七百石積也、同年同所にて造る、文化二五年、能州沖合にて破船、

安焉丸 同石、同年同所にて造る、享和三亥年、蝦夷地クナシリにて破船、

福社丸 同石、同年同所にて造る、享和三亥年、志州沖合にて破船、

天福丸 七百五十石積也、同年蝦夷地シヤマニにて造る、文化二丑年、南部にて破船、翌寅年同所大畑にて修理す、

唱德丸 千五十石積也、同年御買上にて、會所船に成る、

歡厚丸 千二百石積也、文化元子年箱館野田追にて造る、

厚德丸 千石積也、文化元子年箱館にて作る、會所船と成る、

安泰九

六百五十石積也、同上、

○寛政十一未年はじめて蝦夷地へ差向たる御船は、政徳丸なり、此船の上乗は、富山元十郎、寺澤治部左衛門、松田仁三郎、高橋次太夫也、抑此船に官吏共乗組せ、江戸より直に奥蝦夷地チモロへ直乗させたる趣意は、今般の催し、定めて夷地の巷説紛々として、夷人共とやく疑惑を懐く事有まじきにもあらねば、諸説流行せざるさに、早く奥蝦夷地へ官吏をさしむけ、御撫育の厚き趣意を示し、夷人心を安からしむるため也、又御用は、舟路の往來重なれば、天度に熟せるものをいざなひ、星宿を測り、方位を定め、乗筋を辨へ置ん事、一ツの要務なるべしとて、その人數を撰びしに、龜井隱岐守家來堀田仁助といへるもの曆學に長じ、今頒曆所へ出役し、御扶持をも給はるものなれば、此もの然るべしとて、龜井家及び天文方澁川主水へ相談するに、障りなき由申すに任せ、其事を伺ひければ、頓て彼地へ可被遣旨、龜井家へ命下れり、爰におゐて、仁助其門人小普請方出役川村勝左衛門といふもの、忤五郎八を召具し、政徳丸に乗組、かの地に至りぬ、仁助御手當は、御普請役被下もの、通りなり、仁助府に歸るの後、其天度乗筋の次第等悉く圖にあらはして出之、則

出雲守種周朝臣へ達す、執政方にも一覽し給ひぬとて、後に下け給ひしなり、

○蝦夷地御處置之事に付、評定所訴狀箱へ無名の訴書をいれたるものあり、是は心得に見置、猶所存の程も申べきとの御沙汰のよし、未七月十五日采女正氏教朝臣より達し給ふ、則忠房正養是を閲するに、今度の御催しことごとくゑかるべからざるよし、數箇條を擧て記せり、其事粗理にちかき事あるべしといへども、一牀の趣意を不知して、只傍見一通りの論なれば、悉く本旨に違へり、仍て兩人相議して、箇條ごとに其得失を論じ、具に解書をゑたゝめ、同廿五日彼朝臣に就て返呈し奉り、又蝦夷地巡行の三士へは其寫しを遣はす、後に三士よりもまた悉く解書を奉る、其外にも浪華の儒士中井善太といふもの、弟徳三郎といふもの、蝦夷御所置の事に付、一部の書を著して得失を論じたり、是も心得に見置べしとて、出雲守種周朝臣より内々見せ給ふに、此書も傍見一通りの論なるゆへ、其趣意悉く齟齬せり、是は解書して奉るべきにもあらざれば、一閱の後彼朝臣に返しまいらせぬ、然れども此書世に傳らば、人をして疑惑を生ぜしめむ、ゑかりとて中井氏に對して答ふべきにも

あらざれば、其後正養竊に筆を取て、一部の書を作り、ことごとく彼書の惑ひを解て、則邊策私辨と題して家に藏む、

○御徒目附細見權十郎、御小人目附西村常藏、蝦夷地に於て熊を仕留たる事は、其事三橋成方より申來る趣にて、寛政十一未年六月廿七日、彼地ウラカハといふ處へ寄鯨ありけるが、其臭をや慕ひけむ、同廿九日夜、大なる熊出て、その邊を徘徊し、夷小屋に入、食物を喰ひ、人にもかゝりける故、夷人共驚き逃去り、翌七月朔日、其趣き訴へ出ける程に、彼地に詰合たる村上三郎右衛門をはじめ、各相議し、御徒目附細見權十郎、御小人目附西村常藏に命じて、各津輕家勤番の足輕二人に鐵炮を持たせ、外に夷人を二人ヅ、召具し、同二日二手に分れ、彼熊を搜しけるが、草深くして見えがたく、終夜尋あかして、翌三日になり、其邊を見れば、草などをふみあらしたる跡有故、猶々残りなく尋るといへども見あたらず、とかくして其日も暮れ、蝦夷小屋に止宿し、翌五日早天より段々山手の方へ尋入しに、山中にて獨りの夷人に行逢、其熊を是より一里半程も山奥にて見かけたるよし申により、其道

筋凡二十町はどもたづね入る所に、遙に彼熊を見懸、鐵炮を放ちかくるといへども中らず、召具したる夷人ども、是も走寄、矢二筋射かけたれども、淺手なればとまらず、其行方を見失ひ、翌六日又候所々を尋る所に、思もよらぬ笹原内より彼熊踊出、常藏が具召したる夷人に飛かゝり、少し疵附て其儘逃去たり、すはやと云て追駈たれども、走る事早くして行方を見失ひ、其翌七日又候所々草原の内を殘る所なく狩求めしに、權十郎手より追ひ出し、津輕家足輕に飛懸り、押倒して逃行を、權十郎常藏一手になり、嚴敷追懸しに、彼熊立戻り、權十郎を目懸飛かゝる所を、刀をぬき彼熊の咽喉を突く、其儘常藏へ飛かゝる所を、同じく刀をぬひて、目より口へかけ切下たり、此二箇所の手に弱りてたいよふ所を、津輕家の足輕共鐵炮を打ちかけ、終に打留るよし、此熊大サ九尺七寸餘のよし、皮及び膽を添て、成方より巨細に申來る、則其書面を以、七月廿七日正養より采女正氏教朝臣へ申ければ、内々台廳へも入ぬるよし、八月廿七日、彼朝臣より左の書取を下し給ふ、

御徒目附細見權十郎、御小人目附西村常藏、蝦夷

地にて熊を仕留候趣、其節の始末三橋藤右衛門より委細申越候紙面一覽之事に候、兩人共いかにも手際よく在勤先之儀、勇氣も引立候働にて、一段の事に候、不慮に骨折候儀と存候段、各一同噂申事に候、此趣彼もの共へ可_レ被_二申聞_一事、

正養謹てこれを請取、早々蝦夷地三士の方へ申遣し、三士より、權十郎常藏へ達す、此兩人歸府の後、權十郎は御附たり、正に此功とぞ聞えし、勘定、常藏は御普請役被_二仰

○東蝦夷地七箇年上地の事、ウラカハより以東嶋々までと、當春被_二仰出_一之處、有司及び諸官吏の往來、津輕の三厩より松前へ、或は南部佐井より箱館へ渡海の事ゆへ、是迄佐井より箱館の渡海は、容易にはなかりしが、此御用船初りて此かた追々乗筋を辨へ、今は専ら此海を渡す秋の末より冬分は、海上少し荒きゆへ松前を渡す、私領其間にはさまり難儀の譯も有により、願くはシリウチ川を境とし、箱館向寄よりウラカハまで、追上地に差上度よし、松前家より寛政十一未年六月中、采女正氏教朝臣に内願を申たるよし、依_レ之八月十二日、彼朝臣より左之通り書附を以、若狹守へ達し給ふ、此時松前より代地の事に付、猶内願_レ之、御試中の事なれば、追ての御沙汰たるべきとの衆議なりけるよし聞えり、執政方評議有

松前若狹守

内願申立之趣有_レ之候に付、當分御用地之内爲_二代地_一五干石之地所可_二相渡_一候間、右之場所年貢等當分收納可_レ被_レ致候、一躰申立之趣意者、無餘儀事に候得共、御試之初年、未其品も難_二相分_一候間、追而御沙汰之程も可_レ有_レ之候、且又箱館向寄上地之事も申立之通たるべく候、年限之儀者、最初之上地と同様可_レ被_二心得_一候、委細懸り并御勘定奉行江可_レ被_レ談候、

八月

右之通此方共へも御達し有_レ之、忠房正養承書して奉る、右五千石之地所は、武州埼玉郡久喜町にて下し賜る、此五千石の石代は、蝦夷地御用金之内より年々御金藏へ納_レ之、外に東蝦夷地收納の分は、御下金あり、此御下ケ金員數は、後文東蝦夷地永久上地被_二仰出_一の條に在るす、是よりしてシリウチ川より以東殘らず、當分上地とはなりけり、

休明光記卷之二

○松平大河内三橋村上遠山長坂等於蝦夷地

品々取計之事并制札の事

○南部家津輕家勤番之事

○蝦夷地御用執政方惣御取扱となる事

○大河内善兵衛遠山金四郎御役替之事

○かくて松平忠明、大河内政壽、三橋成方をはじめ、村上、遠山、長坂等、五月初迄に松前に着、諸官吏は夫より以前彼地に至り、その持渡くへ行しもあり、又は松前に止りて、三士を待受るもの有、或は諸國買上物の御用として、いまだ松前に至らざるも有けり、夫より三士及び村上、遠山、長坂等を初め、一同箱館に至り、まづ居をとめて、萬の事を商議し、各蝦夷地に至り、先第一制札を建る、私領の時は、かゝる制度もあらざれども、假にも御料の姿を以御處置あらんには、法制なくばあらじ、されど草昧の地、密なる法網は、行れがたきにより、林大學頭乗衡と議し、漢の三章に擬へ、三箇條の法を定め、伺を歴てこれをたつ

る、其詞に曰、

掟

一 邪宗門にまがふもの、外國人にまがしむもの、其罪おもかるべし、

一人をころしたるものは、皆死罪たるべし、

一人に疵つけ、又は盜するものは、其ほどに應じ

咎あるべし、

夷人共に通辭を以、此旨をよく諭さしむ、また蝦夷人のならはしにて、メツカ打といふあり、死者有時はかりもがりをし、魚肉獸肉其外さまぐのものゑをなへ、其前にて兄弟親戚寄集り、慟哭し止ず、まづらくして後互に棒を以撃合、血を出すを祭とす、是をメツカ打とも、ツチ打ともいひて、追善の類ともす、強くうたれたるものは太に惱みくるしむ、又熊祭といふ事有、是は子熊を捕へ、女夷の乳を以て養ひ育る事、子よりも愛を盡し、漸長じたる後に至り、其時有大勢集り、此熊を殺し、まがも又大に哭す、乳をあたへたる女夷は、殊に悲歎にたへず、さばかり歎くかと思へば、頓て彼男女寄こぞり、此熊の肉を悉く喰ひ、酒をのみ、唄をうたひ、舞樂しみ、更に患のいゑなし、此二

事は、往古より夷中の習はしなりといへども、殊に夷狄の惡風なるがゆへに、忠明以下の有司、彼地に到るのはじめ、前の三章の法制とともに、嚴く此事を制禁す、且耳かね鯨の事は、是迄のものは是非もなし、今より後生たつものには絶て是を禁ず、又會所を建る事凡十箇所也、所謂セウヤ、シラヌカ、クスリ、コブムリセン、ホウシ、ノコキリヘツ、カンチヘツ、ノツケ、アツケシ、シヤマニ等也、此後年々造立有て、若干にいたる、又町醫師を數人雇ひて、江戸より來らしめ、場所〳〵に置いて、和人夷人の病ひを助く、雇醫師手當は、一日銀七匁五分づい、此馬廻りたる時は、銀七匁五分づい、此馬廻りたる時は、又先達て出立の官吏ども、南部に於て馬六十疋、牛四疋を買上來り、場所所に畜ひ置て、日用を辨せしむ、蝦夷人共ははじめ、見るがゆへに、驚き恐れて近寄ものなし、後にはつかい馴て悦事かぎりなし、此馬年〳〵に子を生じて、今蝦夷地にみち〳〵たり、松平忠明は、子モロよりシヘツ迄巡行し、シントニ崎を見積り、クスリ山越して箱館に歸る、三橋成方も奥蝦夷地迄すゝむ心得にて、ウラカハ迄巡行の所、俄に疾ひを發しすゝむ事あたはず、彼處に止りて療を施し、數日にして愈る事を得、七月に至り、箱館に來りて事を計る、大河内政壽は、シヤマニに至りて、新道を開て、下司には、中村、小市郎、最上徳内是を指揮す、抑此

所には、チコシキル、トモチクシ杯いふ所ありて、蝦夷地第一の難所也、或は繩をさげ、梯をかけて渡り、又は巖の間をくぐり、或は浪の打寄る隙を見て飛越る所もあり、殆人蹟を絶する程の難所なり、然れ共是を開かん事莫大の入費なれば、私領の力に及ばず、國家の力を以此難所を開き、蝦夷地第一の通路を得たり、其南部家にて猶潤色して、今に車馬の通路自在をなす也、村上常福、長坂高景は、シヤマニに止り、越年して事を行ふ、長坂は翌申年三月、村上は同九年府にかへる、遠山景晋は、ホロイツ迄巡行す、ウルツブ嶋よりは、ヲロシヤ人居をえめたるよしなればとて、近藤重藏、山田鯉兵衛をエトロフ嶋へ渡らしめ、事をはかるべき手合せなりしが、今年は句季後れて渡る事能はざる故、シヤマニに越年し、來年渡るべきに極る、斯て忠明以下の入々發足、前議する所の數箇條、そのあらましをおこなひ得て、九月下旬迄に追々府に歸り、采女正氏、敦朝臣に就き事の跡を詳に申、猶微細の書を捧る、官吏の内今年限りにて御用濟のもの、引續き勉さすべきものとを撰み、其姓名を呈書し、御用濟のものへは、御褒賜あらむ事を願ふ、翌申年四月御勘定へ銀拾五枚ヅ、支配勘定、御徒目附へ同様拾枚ヅ、御普請役

御小人目附へ同貳枚ヅ、賜_レ之、此姓名事繁キ故略_レ之南部津輕の

兩家より備人數の事、出立前申上、兩手にて百人ほど固めありといへども、以來は、一家より重役之者二三人、足輕五百人ヅ、兩家にて千人の積差出させ、便

よき所へ番小屋を補理、武器を設け置、警衛せしめむ事を、五有司より氏教朝臣へ申、則寛政十一未年十月

二日、其通り兩家へ命せらる、此勤番所兩家共箱館を本小屋とし、南部家は、テモロ、クナシリ、エトロフ、

津輕家は、サハラ、エトロフに勤番所を補理、足輕小頭重役等差添警衛す、

○蝦夷地御用之事、是迄は采女正氏教朝臣受持給ふといへども、以來は執政方一同にて取扱ひ給ふよし、

御用の事は、月番の方へ可_レ申旨、寛政十一未年十一月二日、對馬守信成朝臣より書付を以達し給ふ、

○同年の冬大河内善兵衛政壽は、西丸御先手に被命、此御用を離る、是より懸り四人となる、渡邊久藏胤は是

先手に命ぜられ、江戸より以前、西丸御取扱の事なる、遠山金四郎景晋も御徒頭に命せられ、此御用を離る、

○江戸掛り御手當之事

江戸懸り諸官吏御手當之事、寛政十一未年夏中、御扶

持方を願ふといへども、叶ひ難きよしにて、御勘定組頭へ銀拾枚、御勘定支配、勘定及び御徒目附へ同七枚ヅ、御普請役へ同五枚、御小人目附へ同三枚ヅ、可_レ被_レ下との御事にて勤來る所、外見合之事も有りて不足に付、同年十二月伊豆守信明朝臣へ左之通りの書札を呈進し、已來如_レ此になりたり、此書附は、別録にありといへども、是江戸懸り御手當の基本なるがゆへに、今また爰に抄出す、

蝦夷地御用江戸懸り之者手當之儀に付申上
候書附

松平信濃守

石川左近將監

羽太庄左衛門

三橋藤右衛門

蝦夷地御用江戸懸り之儀、追々御用向差添ひ、當時にては、増御用地も有_レ之、場所廣太に相成來、申年御仕入物も是迄之一倍程に可_二相成_一、衣に付場所へ_レの掛合越年之者共より、來申年之手繰、其外共場所限申越候儀等、追々御用向相嵩、并御船廻着之節は、出荷物取捌方に付日々會所へ

相詰、誠に取扱共繁用之儀、巨細に者申上兼候程之儀に御座候、勿論右懸り之者共へ、當夏以來御手當被成下、一同難有出精相勤候儀に者御座候得共、長崎御用江戸懸り、古銅吹所掛り、町會所懸り、伊豆國附嶋々懸り、御手當に見合候得ば、蝦夷地御用江戸懸り之儀は、半減にも届兼候程之儀に有之、御用向繁雜之處者、新規之取扱故、別而手數相懸り、御勘定所にても晚景迄取調等に相懸り、會所へ罷越候節者、猶更難費も相懸り、内實は、銘々及難儀候哉にも相聞候間、何卒増御手當之儀可相願共奉存候得共、一旦被仰渡候儀を、今更増方等被仰出候而者、外々之響にも相成、如何之筋にも奉存候間、別段御手當之儀者不奉願候、乍然前書之通御勘定所内諸懸りに見競候得ば、御用向者勝劣も無之候處、御手當者格別相劣候而は、出精相勤候身分に取、萬一氣分之折にも可相成哉も難計、左候而は、一旦御手當被成下候詮も薄く、恐入奉存候間、種種評儀仕候所、前文諸懸り御手當之儀者、其場所場所附金等之内にて被下候儀ニ御座候間、蝦夷

地御用江戸懸り、御勘定組頭始御手當之儀も、是迄被下候分者居置、其餘者蝦夷地出荷物代金之内を以、前之諸懸り御勘定方、其外へ被下候御手當相當仕候程に割合相渡候得ば、別段増御手當奉願候筋にも相當らず、尤別口御金出方も無之、小給之者どもは、別而此上差はまり、勤向勵之ためにも可相成奉存候間、右之趣を以、已來御手當相渡候様可仕奉存候、依之此段申上置候、以上、

未十二月

下札

本文蝦夷地御用、江戸御徒目附之儀者、御堪定所打込に而御用向取扱候儀に付、支配勘定同様之御手當相渡候様可仕、御小人目附之儀者、都而江戸内に相勤候、懸り御用定例之御手當通り相渡候様可仕奉存候、
別紙見出しなし

松平信濃守

石川左近將監

羽太庄左衛門

三橋藤右衛門

蝦夷地御用江戸懸り相勤候者共御手當之儀、是迄被下候分は居置、其餘者御勘定所内諸懸り御

手當に見合、蝦夷地出荷物賣立金之内より割合可ニ相渡、凡積り左之通り御座候、

蝦夷地御用江戸懸り

一金拾三兩

蝦夷地御用江戸懸り

御勘定組頭

是は蝦夷地出荷物賣立金之内より以來爲ニ御手當ニ相渡し候積、

外に丁銀拾枚 此代金六兩三分

是は先達て被下候御手當之分、

合金貳拾兩

長崎御用江戸懸り、御勘定所支配所懸り、伊豆國附嶋々之懸り、御勘定組頭へ一箇年金貳拾兩ツ、御手當被ニ成下候、

右同斷

一金拾貳兩

御勘定一人分

是は右同斷

外に丁銀七枚ツ、

此金五兩餘

是は右同斷

合金拾八兩

町會所掛り、伊豆國附嶋々掛り、古銅吹所懸り、御勘定へ一箇年金拾八兩ツ、御手當被ニ成下候、

右同斷

一金拾兩

吟味方改役並支配勘定并出役御徒目附一人分

是は右同斷

外に丁銀七枚ツ、

此金五兩餘

是は同斷

合金拾五兩

伊豆國嶋々懸り、支配勘定同出役へ一箇年金拾五兩ツ、御手當被ニ成下候、

一金拾兩三分餘

右同斷

御普請役一人分

是は右同斷

外に丁銀五枚ツ、

此金三兩貳分

是は右同斷

合金拾四兩餘

古銅吹所、伊豆國附嶋々掛り、御普請役江戸内に而相勤候懸り、御用定例御手當通り、一箇月金三分三人扶持ツ、被下候儀に付、右扶持米石壹兩之積金に直し候得者、一箇年一人分御手當金拾四兩餘に相當り申候、

右同斷

御小人目附一人分

一金四兩餘

是者右同斷

外に丁銀三枚ツ、

此金貳兩餘

是は右同斷

合金六兩餘

御小人目附江戸内に而相勤仕候懸り、御用定例御手當一箇月金壹分貳人扶持ツ、被_レ下候儀に付、右御扶持米石壹兩之積金に直し候へば、一箇年一人金六兩餘に相當り候、

右之趣を以、蝦夷地御用江戸懸り相勤候、御勘定組頭初へ以來爲_二御手當_一、彼地出荷物賣立金之内より相渡候積に御座候、

本文御徒目附之儀、御勘定所打込にて、御用向取扱候儀に付、支配勘定同様御手當相渡候様可_レ仕、勿論以來御用向取扱候節、被_レ下候御手當之見合には、難_二相成_一筋に御座候、

右請取高之事は、金銀一所にして、御勘定組頭は、金貳拾兩、御勘定は、同拾八兩、吟味方改役、並支配勘定、御徒目附等は、同拾五兩、御普請役は、同拾四兩、御小人目附は、同六兩貳分、蝦夷地御用金之内より相渡、其外在住之内より江戸懸り之者へは、御目見以上以下之差別なく被_レ下、以上五人扶持被_レ下、以下三人扶持被_レ下候、在住之事は、後文に見ゆ、此江戸懸_レリ之事は、享和二戌年九月伺濟也、

○原半左衛門同斷新助手附之者共召連_レ蝦夷地に至る事

○御武器箱館并蝦夷地場所々々備ふる事

○松前獻上之品々相止此方より調進之事

○在住之事

○八王子千人頭原半左衛門願の通、組同心之子弟等召具し、蝦夷地に相越、御用勤むべきのよし、寛政十二申年正月十四日命せらる、是は半左衛門兼ての志願、武州八王子は邊土にて、彼地住居之同心、日來耕作に馴たる故、其子弟厄介等凡百人程、蝦夷地へ召具し、可_レ然土地に於て耕耘の道を開かせ、則彼等をして農兵たらしめば、一つの警衛たらむよしを、去年中御鍵奉行迄申たりしよし、先達而執政方より其書附を下給ひ、懸り評論の上可_レ然よしを申上げる故、今日命せらる、所也、半左衛門弟新助も、半左衛門手代りとして具召し度よしを願ふによつて、勝手次第たるべきよし、正月廿六日_三執政方より達せられ、則原兄弟同心共の子弟厄介之内可_レ然人物を撰び、百人を召具し、三月下旬八王子を發し、蝦夷地に至り、半左衛門は、シラヌカ、新助は、ユウブツを持場とし、手附五十人ヅ、引分け、鐵炮二十五挺ヅ、備へ、警衛を主とし、兼ては耕作をいとなむ、後手附三十人餘増人有

て、一場所へ十五六人ヅ、鐵炮七八挺ヅ、を備ふ、
 半左衛門江戸出立之節、御暇金貳枚、在勤御手當貳百俵、四物成月割御
 扶持方十人扶持一倍、宿代一箇月銀二枚ヅ、一日御手當金壹分貳朱
 ツ、被下之、弟新助は一日銀拾々ヅ、手附の者一箇月金貳分ヅ、
 三人扶持、支度金壹分貳分、道中本馬貳人立一疋、木賃米代被下之、
 肝煮も右之通にて、外勤金貳兩二分、支度金貳兩貳分、本馬一人立一
 疋、小屋頭も右之通にて、外勤金貳兩、支度金貳兩也、馬は二人立一
 疋、且半左衛門兄弟、并手附之者ども、蝦夷地へ相越す
 に付ては、往來之御用筋等、千人頭志村又左衛門心
 得、同人日光在勤、其外故障之時は、同役石坂彦三郎心
 得取扱ふべき旨、御鎗奉行懸合之後、出雲守種周朝臣
 へ申上の上相達す、組頭には、川村勝五郎、森田宇右衛
 門、山本良助、松本六郎、風祭三左衛門、平同心には、小
 嶋文平なり、其後文化元年三月晦日、半左衛門箱館奉行支配調役
 被命、弟新助、半左衛門に従て箱館へ相越、御馬の御
 用を承る、夫より手附のもの共は、地役御雇と稱へ、箱館及び場所場
 所并散在して勤をなす、爰に於て、志村又左衛門以下、の事も申上のう
 へ、江戸取扱さしめし、又左衛門産三郎へ銀七枚ヅ、組頭へ金
 五百疋、同心へ同三百疋、蝦夷地御用金之内より手當相渡す、
 ○御武器は、弓鐵炮、大小長柄鎗具、太鼓、徒具足、同心
 具足等、寛政十二申年正月より年々に廻す事若干也、
 第一箱館に備へ、其次はエトロフ、其より場所々へ
 普く備ふ、若黃鷹、若隼、昆布、臘臍、寄數子、熊
 膽等、是迄松前家より獻上の品にて、尤西地よりも
 出るといへども、其品よろしからず、東地の方より重

に産するの處、此度御用地成たるうへは、如何心得べ
 きやのよし、松前家より窺ひ申によつて、寛政十二申
 年二月十一日、伊豆守信明朝臣より其伺書を下給ひ、
 懸りの面々商議の上、右品々は、已來東御用地の方に
 て取計、其時々差上べき間、松前家獻上は御免ありて
 然るべき旨申上、其内寄せ數子の事は、製し方とくと
 承る所、其仕立清淨なる方にも聞えず、風味も常の數
 の子と異ならざる趣につき、已來通例の數の子を調
 進奉るべき哉に伺ふべき處、其通りたるべきよし御
 下知相濟、翌酉年より追々右調進の品員數相定る所
 左の如し、

シノリ産

昆布七百枚

數子二十貫目

ニシヘツ産

鹽引鮭七十疋

臘臍二匹

椎茸五百

年々十一月頃一箱、十二月頃
 可相廻候、
 年々十月頃一箱、十一月頃四十疋可
 相廻、由、以上三品は、寛政十三酉年正
 月、御膳番より申立のよし、出雲守種周
 朝臣より達せらる、
 捕獲次第、鹽漬にて可相廻、由、タケリ
 も有之は、于立て可相廻、御膳番
 より申立の由、同年二月種周朝臣より
 被達、
 都合次第可相廻申、享和二年戊午十二
 月、御側衆平岡美濃守朝臣より達せら
 る、御扣二百加へ、都合七百年々五六月
 頃相廻す、

熊膽

上品五ツ、下品ニツ宛可ニ相題ニ由、翌
亥年二月御側衆高井飛驒守清宣朝臣達
せらる、

黃鷹十五据内巢鷹三据其餘者網掛之積り

此鷹之事は、年々數も定らざりしが、文化三寅年十
二月、御小納戸頭取長谷川主膳正へ、戸川筑前守談
之上如レ此極る、

御先手青山三右衛門組同心井上忠右衛門、後下役に
なり、喜右
衛門と、願之通り家族召具し、蝦夷地在住之事、寛政
十二申年二月廿八日被ニ仰附、是在住の始也、此よ
りして御目見以上以下、御譜代御抱入の差別なく、
追々在住被ニ仰附、此在住のもの御手當左のごと
し、

高拾俵より貳拾俵迄

金貳兩 御扶持方一人半扶持

外引越之節一度被レ下候分、支度金貳兩、

路用金三兩、厄介一人江金壹兩貳分ヅ、

賄道具代金壹兩、

高貳拾俵より三拾俵以下迄

金三兩 御扶持二人扶持

外引越之節一度被レ下候分、支度金貳兩貳

分、路用金四兩、厄介一人江金壹兩貳分ヅ

ツ、賄道具代金三兩貳分、

高三拾俵より五拾俵以下迄

金五兩 貳人扶持

外引越之節一度被レ下候分、支度金五兩、

路用金拾兩、厄介一人江金貳兩ヅ、賄道

具代金五兩、

同部屋住金拾五兩、引越入用同斷、三十俵以下は、部

屋住は無レ之積、

高五拾俵より七拾俵以下迄

金七兩 三人扶持

外引越之節一度被レ下候分、支度金五兩、

路用金拾兩、厄介一人江金貳兩ヅ、賄道

具代五兩、

同部屋住金貳拾壹兩、引越入用一度被レ下候分、支

度金三兩、路用金七兩、厄介一人江金貳兩ヅ、

高七拾俵より百俵以下迄

金八兩 五人扶持

外引越之節一度被レ下候分、支度金七兩、

路用金拾貳兩、厄介一人江金二兩ヅ、賄

道具代金五兩、

同部屋住金貳拾七兩、引越入用支度金貳兩、路用金

拾兩、厄介一人江金貳兩ヅ、
高百俵より百五拾俵以下迄

金拾兩 七人扶持

外引越之節一度被_レ下候分、支度金拾兩、

路用金貳拾兩、厄介一人江金三兩ヅ、

百俵以上之部屋住者、先御用不_レ被_二仰付_一候積、

高百五拾俵より貳百俵以下迄

金拾三兩 拾人扶持

外引越之節一度被_レ下候分、金五拾兩、

高貳百俵より貳百五拾俵迄

金貳拾兩 拾人扶持

外引越之節一度被_レ下候分、金七拾兩、

高貳百五拾俵より三百俵以下迄

金貳拾貳兩 拾壹人扶持

外引越之節一度被_レ下候分、金八拾五

兩、

高三百俵以上

金貳拾四兩 拾貳人扶持

外引越之節一度被_レ下候分、金百兩、

三百俵以上は不_レ拘_二高、本文之御手當を以爲_二此相

勤_二候積_一、

右在住之面々、場所_二に於て、別段御手當は、蝦

夷地御用地之内より渡_レ之、此手當者、場所の遠近
によつて各不同あり、事繁きがゆへに是を省く、
委しくあらむ事を要せば、別録の元極を閲てゑ
るべし、江戸懸り御手當の事は、前の江戸懸りの
部に注す、

○申年春三橋成方同年冬村上常福箱館に至る
事

○戸川藤十郎大河内善十郎蝦夷地に到る事

○豆州波浮湊切割浚御普請之事

○伊能勘解由測量として蝦夷地に至る事

○諸家御買上米之事并姦人共御仕置之事

○河田甚太郎蝦夷地に至る事

○望月三作蝦夷地に到る事

○寛政十二申年は、三橋藤右衛門成方箱館にいたり、
夏より秋迄を處置し、秋より末は村上三郎右衛門常
福是をつとむべきのよし伺の上事定る、是は去る未
年松平忠明をはじめ、數多の有司蝦夷を巡行し、場所
場所の手配りも凡に設けたれば、今年は一先成方箱
館に居をしめ事をはかり、來年にも至らば猶又懸りの
内巡行せんとの商議なり、かくて成方は、三月中旬江

府を發し、四月中旬箱館にいたり、同所龜田村といふ處に、松前家龜田奉行の住居せし役所あれば、此役所館へ引、交代やしきをつく、其あと今鷹部屋となる、その所をすこしく補理なして、こゝに居をしめ、萬事の所置を指揮す、當春出立の官

吏どもは、成方に先達而彼地に至り、兼て越年の面々と俱に事を行ふ、箱館に番所と唱へて、私領の時、龜田奉行の用と銘々の居小屋は、外に、向を扱ひたる所あり、官吏共此所を役所と小室を補理て居住す、成方は其年九月府に歸り、夫より末、村上常福、箱館に至て事を謀る、前に番所と唱ふるもの常福住居す、今の吟味役の御役宅はなり、常福は翌酉年冬迄在勤するなり、

○寛政十二申年二月十六日、御納戸頭取格戸川藤十郎安論、其年十二月被任筑前守、後箱館奉行に命ぜらる、御納戸大河内善十郎政養、蝦夷地巡見之事を命ぜられ、當懸り會合席へも度度出席ありて事を議し、同年三月出立、東蝦夷地クナシリ嶋迄巡行、九月府に歸る、

○東海廻りの船々、豆州沖合にて度々破船し、數年の憂大方ならず、別て當御用初りては、蝦夷地の廻船専ら東海を往來すれば、この恐れ最深し、同國波浮の湊を切割、水底を浚ひ、繫船の設をなす時は、此憂をまぬかるべしとて、伺の上、石川忠房承り、屬吏共を遣して是を行はしむ、此御入費は、則蝦夷内御用金の内より出す、湊普請出來之後、

御勘定組頭村田鐵次郎、出來榮見分として相越す、此湊成就してより以來、東海廻りの船々難破船の憂をまぬかる、事數多度なり、其後文化元子年より此湊御勘定所惣持に成る、

○西九御書院番頭津田山城守知行所百姓伊能三郎右衛門父勘解由といふもの、高橋作左衛門門人にて、天文學に通じ、蝦夷地に至り測量せん事を願ふ、先頃堀田仁助をして海路の方位を測らしむるといへども、未陸地の測量あらざれば、則伺を歷て彼地へ至らしむ、寛政十二申年四月、勘解由府を立て、十一月歸り、測量の次第悉く圖にあらはして出し、則出雲守種周朝臣へ呈す、執政方一覽し給ひぬとて、後に下げ給ふ、御役所に藏す、勘解由手當は、雇醫師の通り、一日に七匁五分ヅ、御用金より渡す、

○長坂忠七郎申年五月屋敷改に命ぜられ、當御用を離る、

○蝦夷地へ運送する糧米は、南部、津輕其外奥筋より買上て廻すといへども、若其國々凶作などある時は差支なきにあらず、仍て國々の諸侯領分米、來秋の收納を目當に、兼々御買上有^レ之、先方預高に應じ、其米代凡見込を以て七八分程、前年の冬渡し置、萬一奥羽

邊凶作の時は、直に其米を蝦夷地に運送し、奥羽邊恙なく運送に不及時は、其米江戸會所へ廻し、御拂をなすべき積り、米代前年に相渡し、家々金銀融通の一助にもなるゆへをもつて、納米の節時相場より米一石に付一升の安の割合を以ておさめの積り、伺を歷て寛政十二申年より行之、諸家は願ふ輩年々に増す、其後文化二丑年伺の上、五箇年御買上米有之輩は、餘程之有餘米納めも濟たる事ゆへ、六箇年めよりは一箇月五合安の割合を以て納方致させ、元石代も年々二歩通り引下げ相渡し、跡五箇年に皆濟の積り、其石代を以て親規願の方へ相渡す事となる、此石代最初は、產物代を以て元より渡す、享和三亥年御勘定所打合せ伺之上、產物代よりは差出さず、有餘米代をもつて元より立、段々利倍して渡す事となる、此石代二十萬兩に滿たる上は、有餘米代元より立すして、御入用金の方へ用ひべきとの伺濟也、此御買上米の事につき口入人杯と唱へ、品々跡形なき事いひ觸し、諸家へ立入不正を働く姦人有よし聞えけるにより、下役深山宇平太を細作として探り索め、既に其證を得たりければ、町奉行にて吟味あらむ事を、享和三亥年十月朔日、伊豆守信明朝臣へ申す、則町奉行根岸肥前守鎮衛承りて是を糺明し、同年十二月廿五日御仕置有、左の如し、

小普請組

溝口相摸守支配

佐々井又太郎父

佐々井古竹

其方儀蝦夷御用會所より貸附金有之趣承および、世話人と申成し、謝禮金を可_レ貪取_一ため、貸附方割合等取拵、懸り重役人に遠縁之者有_レ之、會所にも罷越、小泉仙藏と申役人にも懇意之趣、無_レ跡方_一事共迄申觸、諸家の家來借受之儀申聞の候者へ應對致候段不届之至、依_レ之中追放被_二仰附_一もの也、

右溝口相摸守組

原井龜太郎

其方儀蝦夷地御入用會所金諸家へ御貸附に相成候儀者無_レ之處、佐々井古竹申聞候儀を實事と心得候迎、世話致候て、禮金等有_レ之、爲にも可_レ相成_一と古竹、喜三郎申合せ、借受望之先々迄罷越内世話人之由、屋敷役人共にも應對致し懸合候儀共、御家人之身分に有_レ之間敷儀不埒に付、御扶持被_二召放_一、

加賀町新助店

新右衛門

其方儀蝦夷地會所にて、諸家の御貸金と申儀は無_レ之處、知人寺田加藤次申聞候を實事と心得候とて、口入致世話候は、助成にも可_二相成_一と、加藤次申にまかせ、同人共會所役人、又者役人内縁も有_レ之右之趣申僞り、出入屋敷其外に引合せ話可_レ致と取計候儀共、不埒に付、家財取上所拂、

松平相摸守

辻番人

曾我部勘次

其方儀佐々井古竹身分に而、蝦夷地御用會所金等之儀に可_レ携筋無_レ之處、其心附なく世話致し候は、謝禮も有_レ之、身分之ためにも可_二相成_一と同人より九鬼和泉守外兩家家來ども願込之書面請取、新左衛門に相渡、同人宅にて懸り役人内右家來共を可_二引合_一積り對談に及び、或は右貸附金有_レ之趣、町方同心より先達て承り居候旨、竹内榮助申聞候とて、右手筋をも可_二相賴_一旨、古竹へ申談候ゆへ、追々浮説申觸し候者有_レ之始末に相成候儀共、武家方相勤候身分に而、別而不埒に付、武家奉公構、暇差出候様申渡引渡す、

下谷善養寺門前

藤七店

甚兵衛

其方儀蝦夷地會所御貸附金之有_レ之趣に承り及び、世話致候は、助成にも可_二相成_一と存、寺田加藤次は、會所役人、喜三郎は、同所用達と心得、知人に成、出入屋敷等之家來へ申勸め、右兩人之者に懸合等致候始末、不埒に付、急度叱り、

宇田川町

忠兵衛店

善次郎

其方儀蝦夷地御用會所貸附金と申儀は無_レ之處、寺田加藤次は、右會所役人之内縁有_レ之口入致候由、右世話致候は、助成に可_二相成_一と申聞候を、實事と存候連、得と子細も不_二相糺_一、懇意之者等へ相咄し、追々借受望之武家家來等罷越、其方にて度々會合爲_レ致候儀共、不埒に付、急度叱り、

大御番

安藤伊豫守組

山口五郎兵衛家來

川村安左衛門

其方儀蝦夷地御用會所御貸附金と申は無_レ之儀に候處、得と糺も不_レ致、善次郎申聞候を實事と

心得候とて、寺田甚兵衛口入を以、立花左近將監
家來大城勘左衛門を寺田加藤次ね爲引合候始
末、主人方借入取計候儀にも無之、右躰之世話
に携り候儀共、武家用役相勤候身分にて、不埒に
付、急度叱り、

根岸肥前守組同心

中山政五郎兄

中山 幸吉

九鬼和泉守家來

和久山治部之進

松浦壹岐守家來

柏原 甚助

松平飛驒守家來

加納清四郎

立花左近將監家來

大城 勘左衛門

酒井雅樂頭家來

新井五郎右衛門

櫛原式部大輔家來

伊崎 喜藏

松平淡路守家來

野入三郎右衛門

鍋嶋甲斐守家來

副嶋^{四郎}官太夫

永井出羽守家來

小西 藤五郎

南部左衛門尉家來(松平備中守家來)

金子 八郎

松平備中守家來(南部左衛門尉家來)

岡田 傳右衛門

芝泉岳寺配下

曹洞宗

鯨嶋千日谷

發昌寺 日山

其方共儀右一件に付相尋候處、不埒之筋も無之
候間、一同無構、

芝西應寺町

家 主 久兵衛

麻布市兵衛町

五人組持店 佐助

櫻田備前町

半右衛門店 新助

木挽町壹丁目

長藏店彌兵衛
門方に居ル 彌左衛門

小松町

源兵衛店 吉兵衛

吳服町

孫兵衛店 吉兵衛
清次郎親

龜嶋町

仁兵衛店

藤兵衛

小傳馬町二丁目

市郎右衛門店

九番組人宿
清兵衛〇子

竹内榮助

麻布三軒屋町

五郎兵衛店

彦八

其方共儀右一件に付相尋候處、不埒之筋も無^レ之間、一同無^レ構、

一喜三郎儀存命に候得は家財取上、江戸拂可^ニ申附^ニ處、令^ニ病死^ニ候間、其旨一同可^レ存、

堀田大藏大輔家來

梅村源兵衛

寺田加藤次儀吟味中病死せしめ候間、其旨主人に可^ニ申聞^ニ、

右亥十二月廿五日大目附井上美濃守、町奉行根岸肥前守、御目附佐野宇右衛門立會、美濃守肥前守申^ニ渡之^ニ、

○大御番市橋下總守組河田甚太郎、蝦夷地在住志願之由、頭より申立るによつて、先一箇年彼地へ被^レ遣、猶御用之品により在住を可^レ被^ニ仰付^ニ旨、寛政十二申年十二月廿九日命せらる、翌酉年二月出立、彼地の御

用を勤め、同年十月府に歸る、御手當は二百俵高、在住の割入用金三拾兩被^レ下、然るに翌戌年東蝦夷地永久上地被^ニ仰出^ニ是迄は御所置の模様も變り、是程の身柄の在住御用にも無^レ之に付、御免にな^ル、

○小普請組仙石彌兵衛支配御醫師之望月三作、療治爲^ニ修行^ニ蝦夷地在住願之よし、頭より申立るによつて、寛政十二申年十二月十八日被^ニ仰附^ニ、翌酉年二月出立、御手當二百俵高、在住の割入を以、金二拾兩拾人扶持、引越入用金七拾兩被^レ下、其後病氣に付、願之通在住御免、享和三亥年正月府に歸る、

○エトロウ嶋開基之事并高田屋嘉兵衛定雇船頭と成事

○エトロウ嶋と云は、松前をさる事凡三百里、箱館よりは二百七十餘里を隔、御用地以後、東蝦夷地場所々新道なり二百四十里にたらず、東蝦夷地の奥まで、周廻二百六十里の巨嶋也、此嶋の向に、海上十餘里を隔て、ウルツブ嶋といふ嶋あり、前にもいふごとく、ヲロシヤ國より蝦夷の屬嶋を段々蠶食し、彼國の人このウルツブ嶋にゑばゑば渡來し、既に寛政七卯年渡來の者ども十餘人、今此嶋に安居す、抑當御用の眼目は、此警衛のひとつにといまる、さるによつて、ウルツブ嶋のこなたなるエトロフ嶋を開き、此所を厚く所置し、外冠を防ぐべし

とて、此嶋の懸り近藤重藏、其時御勘定なり山田鯉兵衛、其時御元格なり寛政十一未年蝦夷地クナシリ嶋迄至るといへ共、旬季後れて此嶋にわたる事を得ず、重藏はシヤマニ、鯉兵衛はユウフツといふ處へ立戻りて越年し、翌申年此嶋に至る處、此嶋は外國に近く、殊に前にいふごとく、隣嶋には異國人も住居する事なれば、警衛最嚴格を盡すべしといへども、周廻二百里にあまる巨嶋なれば、番所砦等の設も事ゆくべきにあらず、只々此所の蝦夷人を厚く撫育し、外國よりいかやうになづくるとも、志の傾ざる様に教なす事、所望の眼目と心得よと、近藤山田の兩人は能々にして遣しけるに、兩人則領承し、彼嶋に到て其舩を見るに、廣々たる孤嶋に蝦夷人男女老少を合せて七百に過ず、小屋もあるかなきかの舩にて穴居同様也、衣類は酋長の分、漸熊水豹犬皮の類を着し、其餘は鳥の羽を綴り、又はキナといふ草をとり聚て着し、或は赤裸なるもあり、十五六歳より以下の小兒は、極寒の時といへども惣て赤裸也、朝夕の要器もなし、鍋一ツあれば、五家六家にて用ゆるゆへに、常用をなしがたし、されば食物とする魚類も、多くは煮る事を得ず、焼て食ひ、或は

生にて食ふ、彼嶋魚は許多有といへども、漁具なければ取事あたはず、鱒鮭の類旬季後れて海中をはなれ、川々へ上る比にいたり、ヤスと唱て木の先へ釘の如きものを附け、是を持て漸突留め、銘々少しの魚を得て、脯にして冬分の食料とし、猶たらざる時は、夏月草の根を採たくはへ置、四時共に食物とす、されば多く肌寒に迫りて死するもの年々其數をえらず、蝦夷の地何方も此類也といへども、地方の蝦夷は漁具も略備り、魚を捕る事に乏しからず、交易に出し、食料も又足ざるにあらず、唯憐むべきは此嶋のありさまなり、さばかり窮せる折を窺ひ、異國より懷んとするも又むべなり、されば此嶋の塗炭を救ん事第一の急務なりとて、近藤山田心を合せ、専ら其事を行ふ、然るに此迄まは、海路至て荒汐にて、船の往來容易ならざるよし、古へよりいひ傳へ、私領の時も和人の渡海する事甚希にして、蝦夷船の外通路なし、故に夷人介抱の諸品漁具等をも此嶋に送る事を得ず、斯ては此嶋人を撫育すべき道なきゆへに、攝州兵庫の舟人、高田屋嘉兵衛といふもの、海路の事に鍛練なるゆへ、前年此ものに命じて、エトロウ嶋へ渡海乗筋の事を試まし

むるに、尤烈しき海路にして、汐路も三筋あり、渡り口にて落合、勢ひはするどきに似たれども、礮岩等もなければ、乗方をだに辨へなば、大船の通路自在なるべしとて、汐路嶋懸の様子等悉く見極め、來年よりは大船を以て渡らむといふ故、則中年此ものゝ手船辰悦丸千五百石積に、仕入物數多積入て渡らしむ、是エトロフ嶋へ大船通路の始り也、日の丸の印を押立て、彼嶋近くなりければ、夷人共斯る大船を見る事はじめてなれば、驚き仰ぐ事大形ならず、かくて此船に積來りし諸品を夫々夷の共にわかちあたへ、漁業の場所新に十七箇所を開き、悉く漁具を渡し、其業を勧るに、夷人共はじめて衣服を着し、日用の要器ども事足り、漁具も十分に備りければ、新たに晴天白日を觀たる心地して、本邦の御徳化を仰ぎ慕ひ、日々天地を拜し、感涙更に止事なし、初て其具を得て魚を取る事の勞なきを玄り、我劣らじと漁業にすゝむ事、少しの隙をも爭ふ程になりしかば、許多の産物を出して、又己が食料にも飽充たり、夫より年々大船の往來絶ずして、あまたの交易行はるゝにより、夷人共衣食に足りて、

樂みを極るのみならず、又國益をなす事莫大也、此所

は前にもいふごとく、至て荒汐にて、古より容易に和人の渡海なりがたきよしひ傳へ、蝦夷船の外通路する事なかりしに、かの高田屋嘉兵衛初て大船通路の基を開しかば、其功最少からざるがゆへ、以來此者をして蝦夷地御用定雇船頭に申附、當御用金の内より三人扶持をとらせ申度旨、享和元酉年二月出雲守種周朝臣へ伺ひ申せしに、伺の通りたるべしとの御事なりければ、夫より定雇船頭とぞなりける、

休明光記卷之三

○ウルツプ嶋に居住せしヲロシヤ人之事

○エトロフ嶋の隣嶋ウツルブ嶋には、前にいへる如く、ヲロシヤ人度々渡來し、就中寛政七卯年六十人餘渡來し、其内三十餘人此嶋に居をえめたりしが、又其内追々外へ退きたるもの、坏もありて、今十餘人安居する故に、エトロフ嶋よりウルツプ嶋ヘラツコ獵として出稼する蝦夷人共に命じて、彼等が進退の様子を見せ、又は通辨をさせ、歸國の事を説しむるといへども、素より夷人の事なれば、通辨も届かね、其委しき事を得ざるゆへ、明年は此嶋へ官吏共の内見糺として遣すべきやと、寛政十二申年十二月伺ひさせしに、其事尤然るべし、扱此ヲロシヤ人共彌安居して、歸國の心なき時は、いかゞ所置すべきや、勸辨の程を可_レ申旨執政方申させ給ふよし、出雲守種周朝臣より達せらる、則懸り四人會合して商議をなすに、各異儀ありて決しがたし、故に銘々建議の趣を別々に記し、翌酉年正月十一日、種周朝臣へ呈す、先松平忠明建議の趣

は、彼嶋を見糺として相越す所の官吏共、ヲロシヤ人應對之上能々申諭し、歸國いたさすべきは勿論也といへども、素より言語も通せざれば、互の事情も盡しがたかるべく、先年勢州の舟人光太夫儀、吉などいへるもの、ヲロシヤ國に漂流して、彼國より送り歸せし時、有司を松前へ遣され、請取らせ給ひしが、かかねて事あらば、肥前長崎へ來るべし、我國の法として若實異國の船長崎より外の港へより來るときは、船は打くだき、人は永くといめて、歸さざるの趣、其時之使節のものへ信牌をわたし、おごそかに命せさせ給ふ所なれば、彼國にても已に我國法はゑるべし、されば今ウルツプ嶋に在る所の異國人共へ對し、巨細の問答にも及ばず、只歸るか歸らざるかの否計を問答し、歸るべきなれ共、船の用意なしといはゞ、蝦夷船四五艘も手當して與ふべし、若かへるまじといはゞ、一人も残らず此方へ召具し、口蝦夷地箱館向寄の内に可_レ然所を見立、永く禁獄して置べしとの事也、石川忠房建議の趣は、既に忠明の議する如く、先年松前に於てヲロシヤ國の使へ命せられたる趣もあれば、彼國にて我國法をゑらずとは云ひがたし、然るに彼

もの其境を犯して、ウルツブ嶋に住するは、日本を侮りたる振舞也、古より長崎へ黒船入津する時は、九州の諸侯へ命せられ、火炮を以船をくだき、人は残らず打殺す掟にて、既に先蹤も有ときけり、長崎は從來異國應接の地にてさへ猶かくのごとし、況其外の國に於てゆるすべきにあらず、されば此度見分の官吏共、ヲロシヤ人に對し、歸國の事を嚴敷命じ、若拒める色あらば、一人も残さず打殺して然るべし、日本小國なりといへども、古より武備を以て治る國風なる事を彼國へ知らせて、蠶食の念慮を斷しむべしとの事也、羽太正養、三橋成方建議之趣は、是迄右ヲロシヤ人共へ蝦夷人を以歸國の事を説しむるといへども、既に通辨する事を得ず、今官吏共を遣はし、彼者に應對のうへ、詳に利害を説かしめば、便利となるに似たりといへども、是以異邦の人との應對なれば、果して其事情通すべきや否をえらず、蝦夷人よりの應對ならば、たとへ歸國の事をいなむとも、先夫なりの計らひもあるべきなれど、官吏共より直對して、もし拒む事有時は、其儘にも置がたし、忠明の議の如く不殘此方へ召具し、禁獄せしむるか、又は品により忠房の意

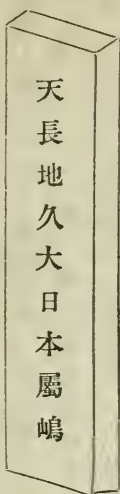
のごとく皆殺しにもせずしてはかなふまじ、然れ共其如く事がましき所置などに至る程ならば、初より品々の勘辨にも及ぶべからず、退て思ふに、彼異國人共交易の品々を貯へ、藏杯補理入置て、是迄私かに蝦夷人共と交易を營み來れるよし、其聞もあり、されば全く渡世のために居をえめたる様子なれば、此上の所置は彼是の通辨にも及ばず、エトロフ嶋の詰の官吏共ウルツブ嶋へ渡す蝦夷人の船を嚴しく改め、酒た葉粉其外都て交易にもなるべき品は、其者ども一己の用意の外決して餘分に渡さず、蝦夷人共は素より魚食なれば、糧米等の用意にも及ばず、質米など與ふる事あらば、歸嶋のうへ渡して可也、凡右の手續を以交易の叶はざる様にえむけなば、異國人ども所得の道を失ひ、遂には彼方より退くべし、素より僅十餘人の事なれば、たとへ退かずとも、國家の憂とするに足らず、先一兩年の間は、その手續を以、模様を見む事可レ然と也、かくて此三等の建議を以、執政方評定し給ふよしの書取、正月廿八日種周朝臣より達せらるる、其趣は、右三等の内、凡の所正養成方が議の方なるべし、一舛の異國人共彼嶋に來り居るも、是迄松前の

政事届ざるより起り、ヲロシヤの方角カムサツカ杯の向寄より連々に移り来る事なれば、今更先年松前にて信牌を與へ、彼地へ来る事を禁じたるを、頻に其辭を盡し説聞すとも、素より他邦の人、其事情異なるには、道理も分りがたく、其詮も有べからず、されば強て此所を退くべしと一概に命じ、夫を受引かざるとて、此方より手荒に所置すべき事其謂なし、此事急速に埒を附むとの所存は、幾重にも不可然、彼者共退く事、たとへ當年に濟きらずとも、聊くるしからず、只只事を急がず持重りに量るべきよし、よつては官吏共の内ウルツプ嶋に遣はし、彼者共に應對させ、此所に來り居るは何等のためにや、交易を志しての事なるや、夫は國禁にて成がたきよしを穩に申諭し、其上いさゝかなりとも交易ならざる様に計らひ、嚴に其道を斷切、猶暫く模様を見るべし、其上にも彌際限なく歸國の志も見えざるにおゐては、忠明が意のごとく連來り、可然所に留置、猶得と事情をも探るべきやなれども、夫は詰る所の事にて、始より所置すべきにあらず、先前文の趣を以、事を急ずして様子を試み、猶追々其躰を申べしとの事なり、依之尙又懸り

商議してウルツプ嶋へ可遣官吏を撰み、富山元十郎其時支配勸定格也、深山宇平太其時御中間目附なりに一決して、則伺ひを歴て、酉年二月下旬、江府を出立し、六月中旬エトロフ嶋にいたり、彼所にて風待し、同月廿七日右兩人并八王子の人、同心二人、御船禮常丸に乘組、同所シベトロといふ所より出帆せしに、此所よりウルツプ迄の海上、凡十里餘也、夕方より雨降、雪霧深く、咫尺も辨へがたきにより、針を丑寅に向けて走り、夜に入風も和らぎ沙路をも乗切、曙に至てウルツプの山を見かけ、夫より山に添て七八里も乘戻し、翌廿八日晝頃ウルツプ嶋の内ヲカイワタラといふ所に着船し、同所へエトロフよりラツニ獵とし遣したる蝦夷人サケロクといふもの居合せたるゆへ呼出し、嶋中の様子及び異國人の躰を尋しに、彼者共はやはり同嶋のトウボといふ所に居住し、其會長をケレトブセといふ、此者心荒く從者を撻つ事數度にて、當春迄に四人打殺せしゆへ、從者ども殊之外恨み居るよし、其外變る事なしといふ、則サケロフに命じ、此方共は、嶋中見廻りとして渡りたるにより、風順次第明日にもトウボの方へ相越し、異國人にも應接すべし、不意に行むもいかなれば、彼者共

に此事申べしといひ附、日和を見合せ居る所に、翌廿九日の暮頃サフロク來て、昨日の趣ケレトブセへ申通る處、殊之外恐怖したる躰にて、何ぞ身上にかゝる事にてはなきやと申により、全くラツコ獵見廻りのために越されたるとの事なれば、氣つかはしき筋には有べからずと答へしに、ケレトブセ安堵の躰にて、此方へ來られなば應接すべし、其節惡敷心なき證據には、鐵炮を放つべし、日本の方にてあしき心なくば、鐵炮を放さるゝ様にゑたき事なりと申たるよし申、此鐵炮を放つ事は、玉を拂ひ害心なきと云ふるし、又出船入船の祝ひ也といふ、夫より日々風波ありて出船すべき日和なく、五六日此處に逗留したり、又此嶋へ渡りたる證にとて、左の如く文字を木に彫りて小高き岡に建たり、

天長地久大日本屬嶋



七月四日風順を得てヲカイワタラを出帆し、トウボに至る、此間水路凡十里餘、海岸嶮岨の所多く、巖石所々小山のごとく聳へ、水底にも隱岩ありて舟路容易ならず、かろうじて同日八時過トウボ近くなりしか

ば、異國人の方にて鐵炮を打事數十聲、此方にて二放し三放し打せ、海岸へ出向ひ待受たる躰也、官吏共上陸する時、ケレトブセ被りものをとり、砂場へ片膝つき、頭を下げて禮をなす、こなたも笠取禮を受けて、則ケレトブセ先へ立て案内す、途中從者共海或は山へ向て頻に鐵炮を放す、各懷中鐵炮をも持たる躰也、濱邊より一町餘行て、十文字杭立たる所有、夫より半町程行て彼者共の居所に至る、其構へは土手を穿て作り、穴藏のごとくして、高サ一間餘、幅四尺程の入口あり、夫より入て三四間程廊下程なる所を行、脇の方に又小き入口あり、先より入れば、其内板穴藏のごとく、内は九尺に二間程、高サ六七尺あり、雲母にて張りたる窓一箇所、天井に小さき煙拔あり、疊はなし、板敷にて兩側に腰掛あり、悉く萌黃羅紗を敷て席を設けたり、其席へ案内にまかせ腰をかけ、互に初て面會の一禮し、ヲロシヤ人の通辨するシモシリ嶋の夷人、及びこなたより召具したる夷人ども其席へ出、雙方通辨するといへども、其言語わからず、只面を見合せたる計也、然ども元十郎は、先年松平にてヲロシヤ人に應對し、少し彼國の詞も覺へたれば、試に問答

するに、漸其旨を得たり、先當嶋へは、何のために來りたるやと問へば、ラッコ獵のために來りたりと答ふ、本國へは歸らざる所存なるや、歸る所存なるやといへば、本國へ度々書簡を贈るといへども、一切音信なき故に歸らずと答ふ、何年以前何程の人數にて來りたるやと問へば、六年以前六十人程にて來、引別れ此所に殘れること答ふ、本國はいづ方のものなるやと問へば、イリコウツカの者也、先年松前へ來りたるエコロイハノエチとは近隣の者也と答ふ、蝦夷地はいづれ迄行たりと問へば、此嶋より小舟に乗り、アツケシ迄行て見たりと答ふ、ラロシヤ國王の名は何といふと問へば、女帝は崩し、其王子ハアヘランヘトロエチ今の國王也と答ふ、交易を志して來りたるやと問へば、前にいふ如くラッコ獵のために來りたれども、交易行はれば素より望む所也と答ふ、他國交易は、吾國往古より嚴敷制禁なりといへば、心得たりと答ふ、夫よりケレトブセラツコ皮二枚出し、元十郎宇平太に贈らむといふゆへ、請がたしといへば、本國より便なく米酒ども用ひ切、難儀之由により、此皮を受て米酒少々給はれといふゆへ、夫は今いふ所の交易に似

て、日本の國禁なれば、決して成がたし、然れども米酒なくて難儀ならば、代りものには及ばず、有合たる品少し取らすべしとて、米一俵^{四斗}酒一樽^{二斗}をあたへければ、則米酒をいたいき、殊之外悦びたる様子にて、羅紗をかけたるシツボコ臺を出し、女二人給仕に出、罇のつみ入の吸物、魚の油揚三四種、錫の器又は朱塗の椀にもりてこなたより與へたる酒を出し、上陸のもの殘らずに振舞、又六七歳と三四歳の女子兩人出、殊之外饗應尊敬する躰なり、此女子生れたち奇麗にして愛深く、親の詞に玄たがひ憶する色もなく、此方の手足へ顔を摺附て甚親しむ、是彼國尊敬の躰なりと云、扱人物の有さまケレトハセは、年齡五十餘に見え、身の長六尺程色白く鼻高く、眼は淺黃にうるみ、髪は赤くたれたるを三ツ組にして、後へさげ、黒革の唐人笠を被り、衣類は紺色の唐綾留を筒袖にして、合羽に似たる如く仕立たる物を着し、黒天鵝絨の股引に黒革の沓をはき、附添ふもの共は衣類は同じ仕立にて、紺木綿或は赤革を着し、紺黒等の木綿の股引に、黒革の沓をはき、いづれも人物逞しく、長く高く色白く、眼中淺黃にうるみ、赤き髪を三ツ組にして後

ろへさげたり、女も皆長く高く色白く、紅粉は用ひざれ共顔色奇麗なり、是も眼中は淺黃色にうるみて、するどき方なり、赤き髪を三ツ組にして後へさげ、頭をば桃色の絹のごとき物にて包み、衣類は筒袖にて、淺黃色又は桃色の絹のごときを着し、萌黃色の唐綾織の風呂敷の如きものを脊に打掛前にて結び、絞染の羅紗の袴のごとき物を腰にまとひ、黄木綿の前だれの如き物を前につけ、黒革の沓をはきたり、子供も頭は母のごとく絹にて包み、衣類は紅染木綿に紅染羅紗の袴の如きものを腰にまとひて、まばらく酒宴して暮にも及びたる故、暇乞して立出んとすれば、今一兩日逗留せよかしと、天へ指さし頻にどいむ、こなたも公事あれば久敷居がたしとて、強て暇を乞ひ立出れば、皆送り出、その時居所の前又は板藏の邊杯に従者數多各鐵炮を携へ居並びたり、其名を尋れば、ケレトブセ一人ヅ、呼出し、名乗をせしめたり、其名左の如し、

ワシレイコレニヲブズエズトンケレトブセ

五十歳餘

從者

イエフテヘイハブセン	四十歳餘
イハンヤリヤンノフ	三十歳餘
マクセムカアセン	四十歳餘
ステハンドマセフ	同
ミハイランクヂチエブフ	三十歳餘
ミテレイセンエベレエニマフ	同
ニハイヲレシイテコウ	四十歳餘
ダニハボトフ	五十歳餘
ステバシガザンツヲウコ	三十歳餘
イハンドロヒム	三十歳餘
タニハフトウ妻	三十歳餘
ゼナンエヲレノヲリイナ	二十歳餘
ステバシガザシツチウコ妻	同
ヲニシヤアレキセエハ	六七歳
イハンドロヒム妻	三四歳
ヲヒシヤイハノハ	二歳位
女子	
ナタリア	
ヘドシヤン	
ヲリイナ	

以上十七人

夫より板藏の中壇に仕立置たる三百目計もあらむと思ふ唐銅の大筒放つ、其板藏へ入て見るに、網類其外

漁獵の具、鐵炮又は古き衣類等を入置、久々本國より便なき故にや、衣類も殊之外手薄なる舨に見ゆ、外に従者の居所一箇所あり、又食糧を入置たるよしの萱藏一箇所あり、是も本國より運送なきゆへにて、大ぶりの類一切見へず、舟も夷船の如き作りにて、大ぶりなるもの二艘見へたり、其外所々見廻り歸らむとするに、ケレトブセ途中迄送り來り、則暇乞し引別れ、濱邊に出、丸小屋を補理ひ、幕打廻し一夜を明す、其曉方に至り、ヲロシヤ人四人來り、幕の外にてこなたより召具したる蝦夷人に、暫く物語して退きたりし、其蝦夷人に子細を問へば、ケレトブセ手荒なるものにて、從者の内此間股を強く撃れ、其外平生非道にて難儀に付、今度の御役人へ願ひ、エトロフ嶋へ連行給るか、又其事叶ひがたくば、以來手荒にせざる様御役人よりケレトブセへ申示し給る様にと申ゆへ、是等の事は、此方の所置に及びがたきと答へければ、其儘歸りぬるよし語りぬ、既に夜も明たれば、出船せんとする所へ、ケレトブセ從者召具し、子供婦人等見送りとして出來り、こゝにかく今一日なりとも逗留せよかしと、天を指し去きりに留むれども、遅々しがたき譯を

告て立別れけるに、名残おしげに濱邊に立て見送りたり、乗船岸をはなる、時、鐵炮を打事きのふの如し、こなたにても打せて、日の丸の帆を上げ、同日の夕方ヲカイワタラに着船したり、

圖略^レ之 ○校者曰黒川本之外此三字無

翌六日ハラカイワタラに日和待し、七日に出帆して、同日夕方エトロフ嶋シベトロへ歸船し、彼々懸りの面々へ示談し、以來ラルツブ嶋に出稼する蝦夷人の舟、エトロフにて悉く改め、酒たばこ等一己の用意の外は決して渡さず、異國人と交易する事能はざるやうにして遣しける、かくて元十郎宇平太は、その年十月府に歸る、則懸りの面々より上件の趣を盡く記し、人物并居宅船等の口は一々圖に寫し、種周朝臣に就て執政へ呈す、翌享和二戌年正月に至り、當年もラルツブ嶋へ見廻りの者遣し、異國人共彌歸國も致ざるに於ては、兼て伺ひの通り取計候はむやと伺ひ申しに、當年は見廻りの事は見合せ、ヲロシヤ人の様子はエトロフにて計り、彌歸國もせざる舨ならば、來年にいたり兼々伺ひ置たる様所置すべし、當年の様によつて猶又伺ふべしとの御事なりければ、則エ

トロフ懸り近藤重藏山田鯉兵衛に其趣を巨細に示しつけて、彼地へ發せしむ、兩人エトロフ嶋に至て、其年同所よりウルツブ嶋へラツコ獵としておもむく蝦夷人へ能々命し、ヲロシヤ人共の様子を伺はしむるに、彼ものどもやはり彼嶋にありて、さのみ變たる様子なしといへども、是迄とちがひたるはこなたの蝦夷人ラツコ、アザラシ等の獵業をなす時、異國人共其場所へ立廻りて、海獸を追散し、獵事の妨をなし、又シモシリ嶋より先嶋々々の蝦夷人共、エトロフの繁榮を聞つたへ、彼嶋に渡らむとて、夷舟に乘くみ、ウルツブ邊迄來りしに、異國人さし押へ、直に押返したるよし、エトロフの夷人歸嶋の上申之、右是迄はエトロフ嶋の事、松前家より一切手當なし、前に記せる如く彼嶋の者ども衣食に乏しく、死亡するもの少からず、自然と異國人に親みしが、近年エトロフの御所置行届、御仁德に服し、異國人に親しむの情疎くなりし故に、獵事杯をも妨け、シモシリ先の夷人エトロフを慕ふ心をも偏執して、追返したるにてもあるべきやと、重藏鯉兵衛その年の冬府に歸りて申之、爰に於て安論正養相議して、戸川筑前守安論、羽太安藝守正養、此年二月箱館奉行被

レ命、其事は末文に見ゆ、此上異國人取計方の事巨細に伺つて兩人此事を相議す、此上異國人取計方の事巨細に伺書を記し、重藏鯉兵衛が申旨は、又一通の別書に記し、十二月廿八日伊豆守信明朝臣へ呈す、其伺書の大旨は、ウルツブ嶋に來り居る所の異國人の事、當正月三懸り伺濟の通、エトロフに於て様子を計るに、前件示の如く歸國すべき躰も見えず、此上は來年に至り松平忠明が伺置る如く不_レ殘連來り、蝦夷地の内に場所を見立、生涯とめ置べき手續を取調べ伺ふべしといへども、猶又打返して能き事を計るに、ヲロシヤ國の向寄カムサツカ迄は、蝦夷の屬嶋とはいへども、素より異國人と繪圖面など取かはし、國境取組たる事もなければ、又彼等が方にはいかやうに心得居るも知べからず、尤先年松前へ來りたるヲロシヤ人へ申渡し書并信牌など有といへども、素より異邦の人、本邦の文義に疎かるべければ、其信牌の趣も了解したるや否を知らず、されば今一概に其罪を責むも聊斟酌有べきか、所詮總計の人數いつ迄彼嶋に居たればとて、憂とするにたらず、彼是年月を歷る内には、死絶べし、殊に當時クナシリ、エトロフの二嶋へは、嚴重に警衛も備りたれば、彼者共此二嶋へは立入事叶ふべ

からず、然るに於ては、今懸念すべき謂なし、只々此上は飽まで彼もの共に不自由させ、渠等が方より自然と退かしむる術こそあらまほしけれ、もとより是迄も其合にて、年々ラツコ獵として彼嶋へわたる蝦夷人にも、酒たばこ其外の品々其者一己の用意の外、聊も餘分の品を渡さず、ヲロシヤ人との交易は厳しく禁じ置、既に今度重藏鯉兵衛より申越にても、ヲロシヤ人と蝦夷人の中、何となく疎意なる様子に聞ゆれども、是以彼蝦夷人共の申條、僞の程は計りがたし、思ひの外己が用意の酒たばこなどヲロシヤ人にあたへ、ラツコアザラシ等の皮などに交易し、歸國のうへ自分稼の趣に申なすかもあるべからず、左有時は、ヲロシヤ人ども其交易を嗜^{アヤ}んじ、いつ迄も歸國の期はあるべからず、仍て先兩三年の内試のため、彼嶋へ蝦夷人渡海の事をひとと止め、ヲロシヤ人との音信を斷切べし、然るときは、ヲロシヤ人交易の道絶、所得のよすがもなければ、自ら歸國すべし、ラツコの皮は、御鞍覆御用の品也、ウルツプの往來停止のうへは、暫く此御用は闕べしといへ共、彼嶋の警衛にはかえがたきにより、先兩三年右の手續に取計見候はんやと伺ひ

申に、翌享和三亥年三月廿三日^{ニイ}に、伺の通取計べしとの事なり、此年四月、近藤重藏は、小普請方に轉じ、山田鯉兵衛并下役松田仁三郎、今年エトロフに到る、鯉兵衛此時調役並也、則前件の趣を仔細に申渡し、此時よりして蝦夷人ウルツプ嶋へ出稼を差止、異國人との音信を斷切たり、其翌文化元子年にいたり、去年よりウルツプの音信を斷切ぬ、此上當年來年と都合三年斷切たる上、來々寅年に至らば、彼嶋へ見分のものを遣し、様子を試み候はんや、遠路の事ゆへ來年に至り伺ふときは、其手續の成がたきにより、只今申所也とて、子年十二月八日、采女正氏教朝臣へ伺書を呈しけるに、同月十四日、伺の通りたるべしとの御事也、然るに翌文化二丑年六月、ヲロシヤ屬嶋ラシヨア嶋の蝦夷人共、エトロフ嶋へ渡來したる事あり、此事は詳に後文に見ゆ、此ヲシヨア嶋といふも、元來蝦夷の屬嶋なりしを、彼國より蠶食し、今はヲロシヤの屬嶋と成、此蝦夷人共の申せしは、當夏ラシヨア嶋を出帆し、ンクンタクホイ嶋へ來しに、去る寛政七卯年よりウルツプ嶋へ來り居しヲロシヤ人共、男女十四人居合たる故、何として此所に居るやと尋しに、永々ウルツプ嶋に居住する處、本國より便なく、持參の衣類諸道具も追々に損失し、

玄かのみならず一兩年以來、エトロフ嶋よりひしと蝦夷人渡來することなく、交易のみちもたえれば、所得すべき所もなし、エトロフ嶋へは、追々日本人來り増し、次第に警衛をごそかなりと聞ゆれば、いつ迄此嶋に居たればとて、事行べしともおもはれざるにより、小舟を打立、酋長ケレトブセを初め、去年秋の末、一門ウルツブ嶋を引取、此嶋迄來りしに、旬季後れて先の嶋へ渡る事を得ず、またウルツブ嶋へ立戻り越年せしに、當春ケレトブセ、ワシリコンチニチ兩人彼嶋にて病死し、其外女子二人去年病死し、残り十四人今度ウルツブ嶋を引拂、當嶋にわたり日和待して居る也、日和次第早々本國へ歸る事也と答へけるよし、彼ラシヨア蝦夷人共申侍りき、此ラシヨア人共は、則エトロフに留置、取計方の事江戸へ伺ひ申せしに、其御下知いまだ至らざる内、翌文化三寅年三月廿六日、エトロウ嶋を逃去りぬ、則追手として同嶋詰合の下役關谷茂八郎并南部家勤番の足輕通辭番人蝦夷人等を召具し、出船して追かけたりしが、終にその行衛を求め得ず、さらば兼てヲロシヤ人の來り住しウルツブ嶋の内トウボといふ所に行て、その様を

見んとて、かしこに至り悉く見めぐるに、ヲロシヤ人共の住居たる穴居の跡のみ空しく残りて、人は一人も見えず、さきにラシヨア人共のいひけんごとく、去年の夏こゝを去て本國に歸れる事明らか也、則穴居の様子等ことごとく圖して、茂八郎エトロフ嶋に歸て、此趣箱館へ申しければ、さればヲロシヤ人共の退きたるあとウルツブ嶋へ御所置を附むやいなやと得失を議論するに、いまだエトロフ嶋の御所置充實にも至らざるを、又此嶋へ手を延さむ事たやすからじ、さればとて空嶋にて置べきにもあらねば、先此嶋は年々見廻りの者に、ラツコ獵として、蝦夷人少々差添て渡らしめ、夏より秋迄も獵業として、冬はエトロフへ引取て然るべし、冬中は四海氷となれば、外寇の恐もなし、先兩三年の程は其手續に取計ひ、追々の模様により處置有べしと商議一決し、則其趣を以て同年八月廿一日、伊豆守信明朝臣へ申せしに、子細あらじとの御事にてありければ、翌文化四卯年より、エトロフ詰下役同在住の内一人、并南部津輕勤番足輕之内三十人、通辭番人兩三人、蝦夷人三十人、ラツコ獵兼ラツコ見廻りとして、年々ウルツブ嶋へ渡海する

事に成りぬ、

○蝦夷地御用得失の議論三奉行へ命せらる、
事

○松平忠明石川忠房羽太正養蝦夷地巡行之事
并箱館船作事場出来榮國橋掛る事

○今度蝦夷地の御用は、容易ならざる大御政事にて、當時蝦夷地の方七箇年の御試上地として、懸りの面迫々事を謀るといへ共、此上彌松前家の手を放し、一圓に公儀より御處置あらむ事可然哉、其得失後弊の有無深く遠く思惟して、銘々建議の趣一己限りに言上すべき旨、寛政十三酉年二月、三奉行へ命せらるるよし、夫に付三奉行よりは迄蝦夷地御用取扱方の事問合する事あらば、覆職なく物語すべき旨、同月九日對馬守信成朝臣より書取を以、懸り一同へ達し給ふ、則三奉行より巨細に承り度由にて、同三日營中櫻の間に會合す、寺社奉行土井大炊頭、松平周防守、脇坂淡路守、堀田豊前守、町奉行小田切土佐守、根岸肥前守、御勘定奉行柳生主膳正、中川飛驒守、病氣に付出席なし、菅沼下野守、小笠原和泉守、此方掛り四人共、不殘出席、右御用是迄取扱之手續、此上見込の趣どもことごとく、

く演説す、夫より後、三奉行各建議の趣を言上し、又林大學頭へも御尋ありて、議書を捧げたるよし聞えぬ、右數輩建議の次第を各一己の見込なれば、他に知る事なし、

○寛政十二申年は、前にいふ如く、三橋成方箱館に到り事を計り、蝦夷地巡行はなかりき、翌酉年は、松平忠明、羽太正養、蝦夷地巡行すべきよし、申年十二月朔日、出雲守種周朝臣より兩人へ被達、然るに石川忠房是迄蝦夷地へ赴ず、彼地の事をまらざれば、便利ならざるにより、此度兩人と共に巡行したき旨伺ひかげしに、則つかはさるべきとの御事なるよし、同き六日采女正氏教朝臣より達せらる、又忠明は先達而東蝦夷地一通り巡行したる事なれば、今度は西蝦夷地ソウヤシャリを廻り唐太嶋をも遠望し、警衛の場所等心組可申哉と伺ひ申せしに、伺ひの通りたるべきよし、同十九日種周朝臣より達せらる、夫より忠房正養は翌享和元酉年二月廿六日^五日出立、拜領物御手當等左のごとし、

御暇

金拾枚

石川左近將監

時服三羽織

御朱印

人足八人馬五疋

御證文

御用長持貳棹

御合力米六百石十二箇月割

御扶持方分限に應し一倍

外宿代一箇月銀七枚ツ、

用意金四百兩

御暇

金拾枚

羽太庄左衛門

時服二羽織

御朱印

人足八人馬五疋

御證文

御用長持一棹

御合力米五百石十二箇月割

御扶持方分限に應し一倍

外宿代一箇月銀五枚ツ、

用意金貳百兩

忠明は二月廿九日出立也、忠明拜領もの御手當等の事は、去る未年の記に詳也、故に不記、忠房正養等、忠明より先へ出立し、兼て願の上日光山拜禮するが故也、兩人拜禮畢て、三月五日奥州白坂驛に着、忠明は昨四日彼驛に着、一日逗留して待合せ、是より三手一同に旅行、忠明の手附には、同人與力岩間哲藏、忠房の手附には、御普請役寺澤治部左衛門、正養手附には、御徒目附湯淺三右衛門、御小人目附大林久米右衛門也、官吏共御手當之事も、未年の條に記すことし、同き十一日松嶋一見、是は去年戸川安論、大河内政良、三橋成方等、蝦夷地御用の序、伺之上松嶋一見ありし例を以、今度三人共一見の事、種周朝臣へ口上にて伺ひ申せしに、勝手次第との御事により相越す、同廿八日南部佐井湊に着、三日風待して、四月朔日箱館へ渡海す、同廿日迄同所に在て、品々の御用を取扱ふ、

○箱館湊船の作事場なく修覆坏する事ある時は、必南部津輕の地に至て修造をなす、此事甚不便利なるが故、内澗町の海岸へ、あまたの地を築出して、作事場とし、又同所に横堀を掘て橋をかく、これを榮國橋と號す、

○同廿一日忠房出立、ヲシヤマンへ通り、陸地を経て五ウフツにて落合の筈、其翌廿二日忠明、正養出立、

サハラ渡海して、ユウフツにて忠明と落合のはづにて、三手共箱館を發し、同廿九日忠明正養ユウフツ江着、翌五月朔日忠房も同所へ着、翌二日は逗留し、三日忠明は、シコツ川通り西蝦夷地巡行、忠房は東蝦夷地シレットコ嶋迄巡行して、シヤリにて忠明と落合の筈、正養はクナシリ嶋迄巡行の筈也、是は渡海も度度ありて、風順は一日をも争ふものなれば、旬季の後れざる内、片時も急ぐ方可然との評議にて、則正養は二日にユウフツを發し、兩士は前書の連り三日に發して、東西に別れ巡行す、夫より正養は同十九日ニシヘツね着、二日風待し、廿二日クナシリ嶋トマリへ渡海す、是より同所アトイヤ迄は陸地なし、海岸搔送り舟にて巡見する事故、六月朔日迄風待し、翌二日漸順風を得て出船、夫より所々にて一兩日二三日ツ風待し、同十五日にはシヨケベといふ所へ野陣し、翌十六日アトイヤに着、先是迄にて巡見もすみ、警衛の場所其外の取調も盡く整ひければ、夫より日々風波荒く、或は雨天にて歸路に越く事を得ず、七月十三日迄アトイヤに逗留す、翌十四日漸順風を得て、アトイヤを出帆は、此所着より二十九日め也、夫より所々

風待して、同廿二日クナシリ嶋の内トマリへ歸着す、此嶋に七日風待、此嶋清水を汲で飲食に用ゆるに、其性あしく病を發するもの少なからず、當所の在住重松熊五郎、清水表向勤番井水を撰ぶ事に妙を得たれば、其地を見極め井を掘すべしと、六月中正養此嶋へ着の時申置たりし、則熊五郎所々を撰ひて、會所の邊にて其所を見極め、井水をほらせけるに、其水至て清冷にして盡る期なし、正養が歸る迄に、井桁其外全く成就したり、夷人共井といふものをはじめて見て、水なき所に水を求む、日本人の智測りがたしとて、驚嘆せしもおかしかりき、是よりして此嶋に住ものをはじめて水毒を免るゝ事を得たり、是熊五郎が功なれば、則此井を重松の井となづけ、永く此嶋の名蹟にせよとて、一首の和歌をそふ、

幾世々にくみてゑるらむつくりなす

板井の水のふかきめくみを

同廿八日順風を得て、トマリを出帆、シベツ江渡海す、クナシリに在事、都合六十餘日也夫より大雨降つゝき、同所に二日逗留、八月二日同所を發し、段々旅行し、同き十五日ヒロフに至りしに、御小人目附田口久次郎此所を受持た

り、當所にラッコベツといふ川あり、度々洪水の憂あるにより、此川の末を切落したりしに、ヒロフの山上より高サ凡十六間餘の瀧となりて、其絶景いふばかりなし、此瀧に名をつけよと久次郎がいふにまかせて、即正養幾世の瀧と名づけて、一首の和歌を添ふ、

するたえぬ御代の光はいく世々に

その名もひけ瀧のまら玉

夫より段々旅行し、九月五日箱館へ歸郷、同九日迄同所に逗留、諸御用取扱ひ村上三郎右衛門、其外同所詰官吏共日々入來、諸伺等差圖に及ぶ、かくて松平忠明は、西地見分相濟、七月七日箱館に歸郷、石川忠房は、シレントコ崎迄巡行相濟、同き十日箱館に歸郷、兩士共同月十四日同所出帆、佐井に渡海し、九月九日府に歸る、正養は九月十日箱館を發し、松前に至り、一通り見分し、同じき十六日三厩に渡海し、十月十一日府に歸る、忠明忠房巡行の次第、見込の趣等は、正養が歸府より以前、巨細に記して呈進有しよし、正養が巡行の次第、見込の趣、殊にはクナシリ嶋の模様、御要害の安危、夷人服従の様子等委細に記し、繪圖も數度を添て、同じき十七日出雲守種周朝臣へ呈す、且蝦夷地巡

行年々に及へば、夷人共産業に障り、その難儀も少なからず、既に今年三手の面々東西蝦夷地普く巡行し、御所置の手續場所受持の官吏共へことごとく命じ置たれば、來戊年は、懸りの内巡行に及ばず、御用筋差支無之段、種周朝臣へ申上置たり、猶其品にて秋にも至り、遺哉と、戊年二月申上置といへども、奉行に被ニ仰附ニにより其儀なし、村上三郎右衛門箱館へ可

○カラフト嶋見分として中村小市郎高橋次太夫相越す事

○カラフト嶋見分の者遣すべきやと伺ひ申せしに、遣すべきとの御事なりければ、頓て其人を撰み、御普請役中村小市郎御小人目附出役高橋次太夫にぞ極りける、則享和元酉年五月晦日、西蝦夷地ソウヤより出船し、カラフト嶋入口シラヌシといふ所に至る、此嶋はソウヤより北にあたり十八里の渡海也、此シラヌシは、東北に山を負ひ、西南は岩根の平磯にて、西請の場所也、夏分は廻船の淵懸りもよき場所につき、運上屋及び松前家の勤番所もありて、年々四月末より勤番士貳人、足輕貳人ヅ、詰越、取締方蝦夷人介抱等の事を計ひ、七月末八月初の頃引拂ひ松前に歸る、此所より東西三四十里の間、専ら漁業の場所にて、年々

商人共多く入込、其内五六人程は越年もする事也、番家板藏物置など多くあり、斯て此時山丹船一艘シラヌシ江着居たるにより、則船主を呼出し様子を見るに、惣髪を三組にして後へ下げ、髻は至て薄く、中年位にて、其形蝦夷人よりは、却て本邦の人に似たれども、形容至て野鄙也、山丹は則滿洲の屬夷にて、文字不通、言語は蝦夷言に似て、音律拙なく聞分がたし、名前及び生國の地名船乗組の人数、彼地出帆の頃合等尋るといへども、曾てわからず、通詞番人等も通辨する者なし、故に年來山丹人と交易を仕馴たる蝦夷人を以て通辨させけるに、少しは分りたり、彼者は山丹タイカサントいふ所の夷人の酋長にて、名はカンテツカイといひ、乗組人数は八人、彼地出帆月日等は辨へず、雪の有うち出帆せしといふ、此方へ着船は五月初のよしなれば、三月中にも出帆せし事ならんか、則山丹地よりカラフトへの渡り口の様子、其外尋れども都て分らず、夫より東西見分の手配等して日和を待居たる内、六月三日夕、又山丹船四艘一時に着たり、此者共をも呼出見るに、形容前の山丹人に變りたる事なし、則彼通辨に馴たる蝦夷人を以、さきのごと

く尋るに、一艘の船主は、山丹マシコ川筋キンチャといふ所の夷人の酋長にて、名はバンゴウといひ、乗組八人のよし、一艘は同川筋モンコレといふ處の夷人の酋長にて、名はシヨシヨといひ、乗組八人のよし、一艘は同川筋トワンといふ所の夷人の酋長にて、名はバロウといひ、乗組七人のよし、一艘は同川岸ヨイマンチャといふ所の夷人の酋長にて、名はトンコといひ、乗組は八人のよし、いづれもさのみ隔りたる場所にあらず、彼地一同に出船して、又爰にも一同に着たりといふ、此内キンチャの、バンゴウといふものは、三十年餘も續て、カラフト嶋へ渡り、交易を仕來りしよし、此バンゴウが舟に乗組の内、カリヤシンといふものは、元西蝦夷地ソウヤ出生の蝦夷人なりしが、十三四歳の頃、山丹人に連行かれ、彼地のものになり、二十四五年以來年々カラフトに渡り、當嶋の夷人と山丹人と交易の通辨をなすといふ、都て今度着船のもの共は、前に渡り居たる山丹人よりは事も分りやすき方なり、則山丹地の様子、カラフトへの渡り口、カラフト奥地の模様等、砂に圖引などさせて、段段尋る所に、山丹の地は格別の高山もなく、先は平山

がちにて、作物をいとなむ事一切なく、夷人どもは、マンコといふ川の縁通り所々に住居し、魚漁を生り業とし、食物は魚類又は犬を喰ひ、皮を着服とし、或は山に入獸を取、肉は食料とし、皮は滿洲の人へわたし、木綿たばこ鍋雜穀其外品々に交易するよし、彼マンコ川といふは、滿洲より流るゝ大河にて、川幅一里程も有べき様子に聞え、此末流はカラフト嶋北の方へ落るよし、此川下迄は、ヲロシヤ舟も折々來り、船繋等もする舁を見懸たる事度々なるよし、尤いづ方へ行とて滯船するにや、其事は辨へざるよし、此マンコ川筋を廿日ほど涉れば、滿洲の地ホロツコといふ所へ至る、それより十日ほど浜れば、イチヨホツといふ所に到る、此所は家居も餘程建續き、宮寺杯もあり、佛は座像も立像も太刀を帶し、或は鉾杯持たる形もあり、僧は木綿の衣を着し、一寺に八九人も居るよし、其家つゞきにて高き所に、役人の住居有と云ゆへ、家作等の様子を尋るに、間口十間餘にて、山丹人間たるにあらず、シラマシの勤番所鐵炮鎗杯かざりあり、數を辨へ運上家等に引合せて尋しよし、此役人の宅へは、年により山丹夷共皮を持、ヲクシヤと唱へ、禮に出る事も有よし、其所よりマンコ川を暫く浜

れば、タジタイといふ所にいたり、夫よりキリヲラといふ所に至り、夫よりホチヨンといふ所に至る、此所には餘程重き人住居し、土地柄も至てよく、聊不自由なき所とは聞ど、山丹夷ども其所迄は行がざるがゆへに、委しき事はゑらずといふ、又滿洲より山丹へ年役人下るといふ故、其役人の様子名前等覺えたるやと尋るに、名前はゑらず、頭分と見えたるもの兩人にて、衣服も木綿にあらず、帶、劔はなし、鎗鐵炮などはもたせ、其外書役舁のもの一人、供廻り六七人、皆木綿の衣類にて、山丹夷は勿論カラフト奥地より來り居る蝦夷人共交易して歸るよし、扱又山丹よりカラフトへの渡り口は、彼マンコ川の落口より一日路程西南の方へより、カマヲタといふ所有、夫より半日程して、モチツフといふ所あり、此兩所より搔送り、舟にて半日路程行ば、カラフト嶋ナツコといふ所に出るよし、此渡山丹地の方は深く、カラフトの方は至て淺く、沙干の時は通船なりがたく、沙満を待て渡し、冬春の内は氷海になり、氷の上を犬に船を引する事もあるよし、今年は彼ナツコといふ所より、カラフト西海岸を段々搔送り、舟にてつたひ、三十四泊にてシ

ラヌシへ着たるといふ、カラフトぶまウシヨロといふ所、同
引移りある船蝦夷人イマンランケリヨナイ、ヤンハクといふ兩人が
中には、カラフト嶋のするナツコといふ所の奥より東の方は、山丹の
山を押廻し、地檀の様に思はるゝといふ、此のども度々山丹へ渡りけ
るか、其渡り口はナツコ或はノテといふ所より舟に乗、山丹地カマ
タ或はモチツフといふ所杯へ着岸する事にて、ナツコより入江にな
り、奥へ乗込たる事もなければ、確とは辨へざれども、渡場より見請
たる所にては、山丹とカラフトは、マンコ川の落口を隔てたるばかり
にて、其奥は山つゞき成べしといふ、此説は、後に次太夫廻嶋の時、彼
兩夷より聞所也、いまた何
れが是なる事なまらず、
是迄松前家にて見分せしは、コ
タントルといふ所迄にて、其未分明ならざるにより、
彼コタントルより奥山丹へ渡口のナツコといふ邊迄
の様子、彼山丹人共に尋るに、ナツコ迄の間蝦夷人住
居の地あまたあり、海岸にも住居又は山中に引籠り
住事もあり、その海岸西のかたホロコタンといふ所
迄は、蝦夷人の風俗なれども、其所より奥は、山丹の風
俗にて、スメレングルと唱へ、年々山丹へわたるキン
チマといふ所にて、満洲の夷人と交易するを生業と
なすよし、東北裏タライカといふ處の奥、ヨリカタと
いふ所に住居するものをワロコ人と唱へ、是も山丹
の風俗にて、専ら山丹満洲と交易するよし、
山丹といふ所の向寄をスメレングルと云ふし、カラフト奥夷共、年々タイカサ
ンといふ所にいたるも交易をなすゆへに、其地名を稱するにもあらんが、チロコ
といふも則スメレングルのうちの別名なるよし、是等は敢て外國より
來るものにてはなく、やはり蝦夷人の内なるが、山丹へ近きゆへい

つとなく化せられて、風俗も夫より兩人手を分て、東海岸
變り、號も別に成たるといふ、夫より兩人手を分て、東海岸
は中村小市郎、西海岸は高橋次太夫見分すべしと定
め、則小市郎シラヌシを立て巳の方に赴き、一里程に
てメトロといふ所にいたる、此處カラフト嶋南の方
盡る所の出崎にて、至て急流也、夫より子丑の方より
折入たる濱形に隨て五里程行ば、チシャといふ所に
至る、夷家二軒あり、夫より半道ほど隔ちベシャウシ
ヤム同二軒、圖合舟懸り潤有、同所より六里ほどにて
コンブイ、同四軒外に番家あり、前後の夷人を集め、地
引網を以鱈を漁す、產物は、鮑、鮓、魚、油、鹽、鱈等也、此處船
着よからず、大舟は遠沖に懸置荷積をし、圖合舟のみ
往返す、此所より一里程隔ち、ヤトマリ夷家三軒、圖合
舟懸り潤あり、それより十里程行て、イカツチナイ同
二軒、同所より三里程にてホロナイボ同二軒、夫より
一里程隔ち、ナイブツヲロ同二軒、猶又一里程隔ち、
キナイウシ同一軒、夫より一里程にてタナンナイ
同四軒、猶又一里程にてリテ同三軒、夫より二里半程
にてルヲタカ同四軒、此所番家あり、前後の夷人をあ
つめ鱈を漁す、幅六十間餘の川あり、圖合船は入ど
も、大船の懸り場なし、夫より一里半程にて、カモイシ

ヤバ夷家三軒、同所より半道ほどにてフラランナイ同五軒、夫より二里程にてシユシユヤ同七軒、ノトロ崎より此處迄凡三四十里、子丑に向ひたる濱形にて、地方高山はあらねども、ホロナイ邊迄はすべて山根の海岸にて、巖石或は欠崩等多く、ホロナイよりシユシユヤ迄は遠山なり、海邊平地にて、漢松に似たる木立おほし、夷人、此木をクイといふ、濱通は砂地遠淺にて、船附よからず、是よりシレトコ崎の方は、巳午に向ひたる濱形にて、同所より二里程へだち、チナエボ夷家五軒、夫より夷家引續、いづれも半道づ、隔て、トマリ、ヲンナイ、エレルムヲロ、ウンラ、各二軒づ、ウシヨウンナイ三軒、クシユンコタン八軒、此處舟附至て能、大小船ども澗懸り自在也、番小屋ありて、春は前後或はシレトコ邊までの夷人を集め、鯨を漁し、夏に至れば其夷人をルヲタカ邊へくり越、鱒を漁す、此所より一里程にてホロアントマリ夷家二軒、圖合舟懸り澗有、夫より半道程隔て、エンルムカ同二軒、又一里程にてヲフユトマリ同一軒、圖合舟懸り澗あり、同所より一里程にてヲタシヤム同二軒、又二里程にてベシトエ同二軒、又一里程にて、イノシコヲマナイ同

一軒、夫より三里程にて、チベシヤニ同三軒、クシユンコタンより此邊まで海岸平山の裾にて、巖石出路等もあれど、平地も有、舟路も乗りやすきかななり、同所より一里程隔て、ホラクブニ夷家七軒、夫より一里半程にて、ナエトム同二軒、又一里半程にて、ヨグシ同四軒、夫より二里程にて、トウブツ同八軒、此所沙入の沼あり、海鼠を漁す、沼縁七八里の間夷家あり、イクエといふ處に四軒あり、ナエホロに三軒、ホロベツ二軒、ウエンベツに二軒、シヨウニに二軒あり、沼の口六七十間、深サは三尋位より七尋位迄の處ありて、大船も入べき湊に見ゆ、近年ヲロシヤ船沼口迄乗寄せ戻りたる事もありといふ、應對したる者もなければ、何ゆへ戻りたるといふも知れず、此所番家もあれば、漁業の時見廻り迄にて、常は明家也、夫より二里程にてコチヨベツ夷家三軒、チベシヤニより此邊迄平地にて、グイの木多し、遠淺の砂濱にて、トウブツの外舟つきなし、夫より二里程にてイノシケタアンナイ夷家二軒、同所より一里半程へだて、ヤワシンヘツ同四軒、又半道程にて、ナエクロト同三軒、同所より一里半程にてホロシヨボ同二軒、夫より一里程

にて、チシウシ同二軒、又一里半程にて、ホンナイホ
同二軒、夫より夷家引續き、何れも半道程ヅ、へだて、
ヲマヘツに三軒、ワツカタナイホに同二軒、ヲホシナ
イに四軒、クウシベツホに一軒、チフナヲシに三軒、
シヤクトウホに四軒、此所迄の夷人共番家時の場所
へ行て稼により、諸色も潤澤のよし、コチヨヘツより
此邊迄山續にて、海岸峻岨なるゆへ、船つきもなし、
是よりシレトコ崎の方は、わきて高山續き、海岸も尙
峻岨也、故に夷家なし、シレトコ崎を越れば又夷家あ
れども、番人等の見廻もなく、夷人の風儀氣随情弱に
て、諸色もまた不自由也、かのシヤリトウボより七里
程の間、ホウル山といふ高山の麓を乗廻り、シレトコ
崎に至る、此邊數尋の巖石海岸に聳へ、俄に暴風吹起
り、船を覆すべき様子度々ありて、殊に船着なく、通船
至てむづかしき所也、此シレトコ崎を廻れば、濱形子
丑にむかひ、六里程にてイチルンといふ所に至る、夷
家一軒有、此所則彼ホウル山の後にあたる、前件の同
様の海岸にて、通船甚むづかしき處也、圖合懸り澗一
箇所あり、夫より一里程隔、ハシホク夷家二軒、同所
より四里程にてヲタシユ同六軒、圖合舟懸り澗あ

り、夫より五里程にてホントボ同三軒、圖合船懸り
澗あり、又五里程にてシヨウヤヲマベツ同四軒、夫よ
り十八里程にて、アエルフ同三軒、イチルンより此邊
迄處々圖合船懸り澗あれども、ホウル山の並びにて、
山々引續、時々暴風起り、殊に海岸峻岨にて、舟路よ
ろしからず、此所より濱形南にむかひ、一里程へだて、
トウボブ夷家五軒、夫より西に向ひ六里程にて、トン
ナイチャ同九軒、此所圖合船入るほどの川有、同所
より南海岸トウフツと云所江夷人山越の路あり、路の時、此所夫より先々戌亥子にむかひ一里程行て、ヲ
な越たり、ムトウ夷家一軒、又一里程にてヲチヨホカ同三軒、
アエルフより此邊迄地方平地勝りて風筋よく、舟の
懸り場もあり、乗易き方也、此處より二里半程にてウ
エンコタン夷家三軒、夫より一里ほどにて、ホスベ
シ同三軒、又一里程にて、ヲブツシヤケ同三軒、夫より
二里程にて、シユマヲコタン同一軒、同所より四里程
にて、イヌスシナイ同七軒、夫より二里程にて、リヤウ
シ同二軒、又一里半程にて、シヨウンナイ同二軒、圖
合舟懸り澗あり、夫より三里程隔、ヲシヨイコン同三
軒、圖合船懸り澗あり、同所より一里程隔、ワシイ同

三軒、圖合船かゝり澗あり、夫より半道程へだて、シャツサツ同七軒、また二里程にて、ホロインルム同一軒、夫より一里半程にて、トウル、カ同四軒、ヲチヨホカより此邊迄山根の海岸にて平地少し、殊にシユマヲコタンの前後は巖石至て多し、まかれども格別なる高山にもあらず、風筋和らかにて、船路は乗易き方也、同所より二里半程にて、ナイフツ夷家五軒、幅百間程の川あり、圖合舟懸り、川上は南に當り平地にて、濱より一里ほど浜り、右の方は周廻五六里の沼有、近邊にての大河也、鮭鱒アザラシ等も此川にて獵す、トウル、カより此邊迄平地砂濱遠淺にて舟つきなし、地方は打開きたる廣地にて、グイの木多し、濕地にて水性至て惡く、煤色の濁水也、此處にて七月朔日より三日迄大風雨高浪はげしく、出船成がたく、逗留する内、俄に秋色を催し、冷氣甚しく、召具したる夷人共、歸路の旬季後れん事を恐るゝの情類にして、更に進む心地なし、故に力なく此所より立戻れり、則トンナイチャといふ川へ船を乗入、此川幅六十間程川上にては、百間より二百間程の水幅也、此川口を一里半ほど浜れば大沼あり、長十八里、横二里餘、此沼を漕

渡り小川有、平地より沼へ流れ出る川にて、幅三四間なり、此川を一里半程浜れば、平山に至る、グイの木多し、此處一里程過て、南の方に小川有、幅二間程、此川半道程下り小沼あり、さし渡し一里程、此所漕わたる、又小沼に至る、さし渡し半道程、此沼を過れば、流の末幅十四五間の川に入、此川筋を三里程過て、トラブツといふ沼に至る、さしわたし二里程、此沼水の落口は則南海岸にて、夫より最前の船路を歸る、此時案内として具召したる南海岸ホラクブニといふ所の酋長リクカ、同シャウトヲボといふ所の酋長シユマシニテといふ二人の夷人は、タライカヲリカタ迄折々行たるよしにつき、廻嶋中寄々奥地の様子を尋るに、地理の模様又はヲロコ人杯の鉢も、前の山丹夷がいひたる所に格別の違もなし、ヲロコ人は形容至て野鄙なるものにて、髯薄く、惣髮生立のまゝにて、三ツ組にして後にさげ、言語は夷人言葉少く、山丹詞多く、衣類をはじめ、諸品山丹持渡りをやるゆへ、悉く彼地の風俗に近きよし、タライカより七里程手前ナイブと云處に、長十里程の大沼有、夏中ヲロコ人此所へ出て鱒小魚等を漁す、住所等も定居なく、折々所をかへ、

丸小屋にて、木の皮或は鮭の皮を綴りて屋根とし、をのづから別種のやうになり、蝦夷人共交はらずといふ、又山丹人雪中西地より山越して、ヲロコ人と交易し、夫より彼者ども、段々口地の方へ出て交易するゆへ、衣類其外都ての品、皆山丹の産物を用るにより、ヲロコは勿論、其外の夷人迄も、山丹風俗に馴易し、正義ヲロコもとは蝦夷人なるが、山丹人に化せられたるならんといふ説もあれど、ヲロコ人は皆髭薄しといふ、山丹人も髭薄しといふ、蝦夷人は髭厚きものにて、去からばヲロコといふものは、彼ヲロコ人山丹より来るものにて、蝦夷とは別格ならん、彼ヲロコ人先年より夏分に至れば、十徳段切鷺羽魚油等を持、ロレイナイフツ邊迄きたり、ソウヤカラフトの夷人、米麴烟草皮類其外を持、同所迄行て交易せしに、カラフトへ運上家建しより、十年程以來ヲロコ人共ロレイナイフツを打越、クシユコタン番家へ來り交易するよし、頭取たるもの二人有て、名はキミサカ、コラレンと云よし、夷船二艘に交易の品積入、船方四五人づ、も乗組、クシユンコタンに去年迄來りしが、去冬キミサカ病死し、今年は來まじき趣申こしたるよし、彼リクカシユマシンテ兩人の蝦夷人申レ之、扱高橋次太夫は、西海岸を見分すべしとて、シラスシを立て子丑の方に向ひ、五里程行て、シャウニと

いふ處夷家二軒、夫より一里程にて、ルウクシトイ同一軒、同所より九里餘隔て、マツラウシナイ同三軒、夫より一里餘にて、ウエニ同四軒、此所より申西の間沖合七八里程隔、周廻三里程なる嶋あり、ト、嶋といふ、冬春の内夷人渡りて、ト、アザラシ等を獵す、平山にて樹木薄きよし、彼ウエニより二里餘隔、ナイホ夷家三軒、圖合船灣懸り等はなるべき場所なり、夫より一里半程にて、トルマエ夷家一軒、此所より半道程へだちトコンといふ處は、春中鯁多く、よりて近邊の夷人出稼の場所なり、前後平磯の岩根を取廻し、夏分廻船灣懸も成べき所也、夫より一里程にて、トンナイ夷家十一軒、此所松前家番家物置藏等もありて、夷人出稼交易の場所なり、西請の片濱なれど、渚より三四町程は、沖合に平磯の岩根ありて、其内へ夏分は廻船も懸るよし、此所より一里程にて、ラントケシ夷家四軒、又一里程にて、ホロシタイ同一軒、夫より一里程にて、トフシナイホウ同一軒、圖合舟懸り灣有、此所よりヲゴといふ所迄一里程の間、夷家一二軒有、ヲゴより一里程にて、ヲトシクナエ夷家二軒、夫より一里餘にて、アサンナイ同二軒、又三里餘

にて、タラントマリ同三軒、圖合船懸り澗有、初のシヤウニより此處迄の間、海岸平山續にて、樹木もなし、内山には、夷松樅等の木立も見ゆ、同所より半道程にて、アンチナイホ夷家二軒、又半道程にて、ヲホトマリ同二軒、此所は餘程の入江にて、夏中廻船澗懸りなるべき場所なり、夫より二里程にて、ビロウ夷家二軒、又三里程にて、キトウシ同二軒、又二里程にて、エンルムカヲマツ同二軒、又一里程にて、ヲニチウ同四軒、又一里ほどにて、ホロトマリ同二軒、又一里餘にて、ウツクマカ同一軒、圖合船懸り澗あり、トンナイ番家より鯨漁の時出稼の假小屋もあり、都てヲホトマリより此邊迄は、餘程の入輪に成て、圖合舟の澗懸りは、何方も成べき躰也、此所より二里半程にて、ヲウチトマリ夷家二軒、夫より二里程にて、トンナイケシ同一軒、又二里程にて、トウブ同一軒、此所より三里程の間地山より一里程も砂先になり、此邊ノトコ崎と唱ふ、夫より二里餘隔、ノタシヤム夷家三軒、此所より八九里ほどの間は山裾なり、浪打つけ、海岸へ崩れ、通路成がたき躰なり、夫より十里餘にて、シラロニ夷家一軒、鯨漁の時夷人出稼の假小屋もあり、

夫より二里餘にて、ナヨロ夷家六軒、此所幅二十間餘の川有、水尾口深サ四尺餘、圖合舟懸り場也、灘通は遠淺にて小舟も寄がたし、地方は山際迄打開きたる所にて、山手には、夷松樅柳梓等の木立も見ゆ、此所迄の夷人は、シラヌシトンナイ邊へ年々出て、漁事の手傳し、或は山丹の交易場をも取次よし、爰より奥地の夷人は、其所々に居て、夷人同士或は山丹人抔と交易して事を辨するよし、此ナヨロ夷人の酋長ヤエンクルアイノといふもの、折々山丹へも渡りたるよしに付、カラフト奥地より山丹渡口の様子等を尋るに、最初シラヌシにて山丹人より聞しに先は違はず、去年三月末、彼ヤエンクルアイノをはじめ、夷人廿四五人乗組出船し、カラフト、ナツコといふ所より、山丹地モチツフと云所に渡り、夫より沼越に川跡を乗下し、マンコ川通りキンチマといふ處へ出、滿洲人へ通辨に馴たる夷人チヲウといふものを雇ひ、同川筋を浜り、ウチャラといふ所へ至る、此所へ滿洲よりの船五艘着居、頭分の者二人は船に住居、その餘七八人の者は川縁に木の皮を圍ひたる假小屋を補理住居し、その外船方躰のもの、一艘に十四五六人づゝも乗組た

る躰也、則ヤエンクルアイノより仕來りに任せ、ホイ
ヌの皮拾枚、頭分兩人に土産として遣しければ、彼方
よりも挨拶として、錦古着木綿十反贈り、酒など振廻
たるよし、其外持わたりたる獺、狐、貉等イヌの皮と段
切、木綿、玉、きせる、たばこ杯の類と交易し、八月末に
ナヨロへ歸嶋せしよし、夷人月數を辨へたるにはあらず、雪消の節出帆し、雪降のせつ歸嶋したるよし、彼地は三月中旬より雪消、八月末に雪降るといふ、故に凡そ月數を考て、こゝに辨する也、以前は滿洲の
人、マンコ川筋キンチャ迄下りて交易せしが、近年は
キンチャより餘程川上ウチャラ迄來りて居る故、其
所へ至りて交易したりと云、滿洲人の姓名を聞たり
やと尋れば、まらずと答ふ、衣服其外の様子は、先に山
丹人のいひたるに似たり、夫よりナヨロを出て二里
餘ゆけば、クシユンナイといふ所夷家二軒、此所幅十
五六間の川有、此川通り五六里汭り、一里餘山越すれ
ば、東海岸へ出る道有といふ、夫より十八里程にて、ラ
イチンカ夷家二軒、此所幅六十間餘の川あり、水尾
口深サ五尺餘、川内は一丈四五尺も有て、三百石積位
の通舟は、川園も成べき所なり、此所より五六町も入
込、長サ三里程幅一里ほどなる沼有、地方は山續に
て、ニイチシカ山などいふ、餘程の高山もあり、木立も

あまた見えたり、夫より十三里餘にて、コタントル夷
家二軒、夫より十二里餘にて、ウシヨロ同十五軒、海
岸餘程の入江にて、千石積位の舟三四艘は濶懸り成
べき所なり、既に去々未年夏中、ヲロシヤ船二艘此所
へ懸り、橋舟四艘に三四十人乗上陸し、薪草採とり、
一夜滞舟し、翌日出帆したる由、所の夷人互に言語通
せず、事の譯はまらずといふ、此入江、春は鯨多く寄
り、向寄の夷人出稼に來り漁すと云、奥地ホロコタン
といふ所の夷人イコンラン、チリヨナイ、センバク杯
といふもの、近年此所へ引移り住居す、此者共度々山
丹へ渡りたるよしにつき、彼地の模様を尋るに、凡の
所は、最初の山丹人、或はナヨロ夷人のいふ所に違は
ず、然其彼等がいふ所は、カラフトの奥ナツコより、山
丹地の渡り口は、七八里の瀬戸なりといふ、此兩人が
いふ所をきけば、地續の様にも思はる、この兩説決し
がたし、此説は、最初の地理の所に注す、ゆへに贅せず、扱このウシヨロより末は、
圖合舟の懸るべき場所なしといふゆへ、夷船四艘に
乗がへ、糧米のみ積入出船し、五里程行てホロケシと
いふ處に至る、此所元は夷人住居も有しよし、今は鯨
漁の時のみ來りて、定住の夷人なし、夫より十里餘に

て、トコロといふ所に至る、爰にても前は夷人住しよし、今はなし、夫より五里程にて、リヨナイ、此所の夷人、今はウシヨロへ引越たるよしにて夷家なし、夫より十二里餘にてノタシャム、此所も前は夷人住しよし、今はなし、夫より八里程にてリイベシヤ夷家なし、此所よほどの出崎なり、其崎を廻り五里餘にてシユウヤ、此所の夷人も、近年ウシヨロへ引越したるよしにて夷家なし、爰より凡三十里程の間は、嶋山も見ゆれども、末の限りも玄れず、召具したる夷人共が申には、此所浪靜なる日和を撰び、八九日も搔送らざれば、山丹渡り場所ちかくも至りがたからん、其日和を撰んは、何程の日數を歴んも計りがたし、其内には旬季後て、歸船の期を失ふべしとて、更に進む心なし、其頃七月初なりしが、兩三日大風雨ありて、俄に涼氣を催し、其上夷船四艘へ積入たる糧米も乏しくなり、此上日數を歴る程ならば、第一の難儀なるにより、彼シヤウヤ崎より立戻りぬ、抑カラフト東西海岸の模様、ソウヤカの渡り場、シラヌシの向寄は、格別の高山はあらねども、海邊より段々山續にて、所によりては打開きたる所もあれど、平廣の地といふはあらず、風は

至て烈敷寒氣はソウヤより倍し、雪は四五尺積り、灘通り四五町より七八町も沖へ氷海になり、冬春の内はシケニと唱へ、舟に似たるものに飯米その外のものを積、犬にひかせ往來するよし、住居も暮春より季秋の頃迄は海邊にすみ、冬にいたれば山寄風かげの所を見立、土中より塗立に小屋を補理住居し、たまたま日和よき時は、海面の氷をわたり、トバ、アザラシ杯を獵し、肉は食料とし、油は交易に出し、皮は着服又は沓に作りて用ゆ、暑はソウヤより薄く、五月より七月頃迄の間、晝の内少し暑く、朝夕は國地の十月頃の季候のごとし、奥地へ入程山も高く、木立も茂りて見ゆれど、風當り強き故にや、大木見えす、故に夷人船を造るに柳木を丸く彫り、うちより張を入れ開かせて、縁へ板を結び付て用ゆ、至て不丈夫なる舳也、此嶋松前家にてこれ迄手の届きたるは、東はシラヌシより四十里餘、クシユンコタンといふ處に出張番家あり、向寄に三箇所程漁場取立、同所より三十里程先ミレトコ崎より内に住居する所の夷人を呼集め、鯨鯨海鼠などを取らせ、介抱交易し、西にてシラヌシより二十里トシナイといふ所より出張番家あり、向寄に漁場

○蝦夷地之儀、是迄心得の事たりといへども、なを又忠明忠房より能々申送り承り、兩人厚く申談、向後諸般之處置追々伺ふべき旨、且忠明忠房よりも、入念申送るべきよし、雙方へ御書附を以、信成朝臣より達し給ふ、

○同廿五日には、御勝手方御勘定奉行へ御書附出、今度安論正養、蝦夷地の奉行被_レ仰附、新規之儀に付、御趣法の居合迄は、御入費等萬端の手續も定らざるにより、御勝手方、御勘定奉行一統申談じ、兩人打合せ、御用可_レ取扱_一旨、御達有_レ之に付、得_レ其意可_レ申談_一旨、信成朝臣旨達し給ふ、

○御役宅之事は、箱館の内に究め、當年御普請取懸り、出來の上來年より在勤可_レ仕哉と伺ひ申せしに、當年の内一人相越、勤中に御普請出來候様には成まじきやとの御尋により、是迄村上三郎右衛門がありつる所は、箱館役所と申て、元松前の家士共用向取扱たる會所にて、至て手狭に付、餘程建足模様替にてもせざれば、奉行の假住居にもなりがたく、三橋成方が在つる龜田の役所も、同じく甚手狭にて、既に成方が家來も納り兼たる程なれば、是又餘程の建足あらざれば、

住居がたし、此御失費誠の不用なり、_レかかれ共當年兩人之内不_レ相越して叶はざる子細もあらば、其御失費論すべきにもあらずといへども、先達て元懸りより申上置たる如く、當年は官吏共計り遣し、萬端事足り候手配にいたし置候得ば、奉行の内相越候はずとて、差支候譯も候はず、_レかのみならず、此度御所置始にて、至て大切な御事に候得ば、兩人數度會合し、萬端厚く商議を遂ざれば、容易に事も計りがたく候故、迎も急速に出立も成がたし、其内には、旬季も後れ候により、旁以來年より在勤の積申上候處也と答へ申せしに、其通りたるべきよし、後に信成朝臣より達し給ふ、

○支配向の事は、先祖頭兩人被_レ仰附、その以下のものは、追々取調可_レ申上_一候間、當時御勘定所御目附方、其外より御用に懸り居るもの共を先に、其儘手附にさし置、此節彼地へ出立も致させ、江戸懸り等も申渡候間、其趣頭々にも御達し有_レ之候様仕度と申上ければ、則向々へ御達し有けり、夫より組頭の御宛行格式等之事取調、二月廿三日信成朝臣に呈す、御用人書上は、三月朔日、采女正氏教朝臣へ呈す、
此組頭被_レ仰附の事は、未文に見ゆ御役

名は、吟味役と成る、其外支配向は、當時出立之時節にて、御役替等間に合ざるにより、前書のごとく、先身分其儘にて

出立させ、江戸懸りを申渡す、此の共在勤御手當、先當也、追て支配に被_レ仰附べき節の御宛行啓式等の申上は、未文に見えたり、年は是迄の懸り役の通り

○同年三月六日、村上三郎右衛門常福被_レ爲_レ召、蝦夷地御用御免、爲_ニ御褒美、時服二、金三枚を賜ふ、

○御入費向取計方伺書御勘定所爲_ニ相談遣す事并一鉢の伺濟見度由御勘定所より申上たるにより御答の事

○箱館奉行の御役名極る事

○東蝦夷地永久上地被_ニ仰出事

○蝦夷地御用御向之事は、御勘定奉行可_ニ申合との御事に付、則此已後御入費取計方伺書の草稿を仕立、享和二戊辰三月十八日、御勘定所に相談として遣し、組頭以下支配向御宛行の事も取調、是又相談として四月八日遣す、此時蝦夷地御用金并産物代を以、是迄仕拂來る所の廉書も取調、心得のため達し置、然るに當時より以來、彼地の取計の趣意、大鉢にも辨へざれば、御入費は勿論、支配人數の多少御宛行の高下等も可_ニ引當一目當なきにより、蝦夷地一鉢の取計方伺

濟もあるべきにつき、右書面並以來兩人取扱心得の事等、巨細に可_ニ申談旨、兩人に御達し有之様仕度との事、御勘定奉行より執政方へ申立たるよしにて、其書面五月十五日伊豆守信明朝臣より下させ給ふ、然るに此御用元懸りの時より、品々多端の伺濟はありといへども、皆その一廉限の事にて、一鉢を統たる伺濟といふはなし、其故は彼地の事、第一の眼目は、御取締の一事にて、是迄松前家の所置、小身にて行届かざるがゆへに、御年限中、東蝦夷地御用地と成、夷人の介抱を肝要とし、聊も疑心をいだかせず、厚く御仁徳に伏從させ、外國へ親む念慮を斷切せんといふ事を主とし、又姑息に流れざる様に心を用る事、此御用の基本にて、諸般の取計多端なるも、歸する所は此一事にして、畢竟形なき御用なれば、江戸表常鉢の御用筋などのごとく、前廣より取極伺といふものにはあらず、去ながら、御勘定奉行の目當なくて、議論に及びがたきと申も、餘儀なき事なれば、一鉢御用の趣意は、容易に打明がたき事なれども、御入費筋の事に付ては、萬端打合せ計ふべきよし、先達て御達しも有_レ之上は、御趣意のあらましをも申談じ、夫より諸般の手つゝ

きをも可_レ申達_ニやと伺ひ申せしに、其通りとの御事なりければ、則是_ニまで取扱の手つゝき并此末取計の見込等巨細に取調、六月五日柳生主膳正へ達す、
 ○兩人御役名以來箱館奉行と可_レ唱よし、享和二戊年五月十日、伊豆守信明朝臣より書附を以達し給ふ、
 ○東蝦夷地の儀、永久上地に被_ニ仰出_ニ旨、同年七月廿四日、松前若狹守名代堀三左衛門_{若狹守在邑也}江采女正氏教朝臣より、左之通書附を以達し給ふ、

松前若狹守

蝦夷地之備者前々より其方進退いたし來り候處、東地之方、先達而當分御用地に相成候場所、永永上地に被_ニ仰附_ニ、西地之儀者、如是迄相心得、仕置之儀者、厚く心を用候様被_ニ仰出_ニ候、可_レ被_レ存_ニ其意_ニ候、

翌廿五日此方へも左之通書附を以達し給ふ、

箱館奉行

松前若狹守

今度東蝦夷地上地被_ニ仰出_ニ候に付、爲_ニ其代_ニ向後年々、金三千五百兩宛被_レ下候、尤是迄當分御用地之代に渡來候武州久喜町之所務并東蝦夷地

收納之内より相渡候御金之儀も、以來相止候段、若狹守江相達候間、可_レ被_レ得_ニ其意_ニ候、

右東蝦夷地收納の内より相渡したる御金といふは、此收納辻の事、殊の外入組、急速に取調出來がたきにより、先内渡として、未年には金千兩渡し、申年には三千五百兩渡し、酉年には貳千五百兩渡したり、戌年より前書の通になりて、此渡し金止む、

○蝦夷地取計ひ方の事に付御勘定所より存寄書を呈進し御答の事并御勘定所と贈答の事

○蝦夷地取計ひ方之儀に付、御勘定所より段々の存寄を申上たるよし、享和二戊年七月十三日、對馬守信成朝臣より下給ひ、兩人打返し能々評論を盡し、丁箇の程を巨細に申べしとの御事也、仍て段々評論のうへ、御答書を認め、九月朔日呈_レ之、此論談甚事長く入組て、一朝一夕に解しがたし、ゆへに煩雜なる事は悉く省き、御勘定所よりの申上書と、此方よりの御答書と、只其趣意のみを摘取て爰に記す、事の委しきを知ん事を要せば、別録によつて閱すべし、

一蝦夷人介抱御取締筋の事は、御趣意もありて、奉行被_ニ仰附_ニたる程の事なれば、其手先官吏も

御家人の勤方にあらざれば事ゆくべからずといへども、交易かたの事は、素より町人の所業なれば、身厚なるものに引請させ、相應に御手當被_レ下、手金を以仕入物致させ、その仕入金の歩合は相應に被_レ下、品に寄下代給料其他をも御手當有て、場所く交易を取計せ、當時勤居候所の通詞番人等は、その儘さし置、官吏は只其上に在て、彼等が不正を糺すのみを勤とせば、御入費も軽く、御人も多からずして辨すべし、長崎杯も最初は町人共自分仕入にて、交易の後には地役人と唱へ、商賣方并異國引合の事一式を引請取計ふ例もあれば、然るべしとの事也、此方御答書に申には、此儀場所く官吏共附添、其不正を糺すと申せば、一通の引受よりは、聊其品は變るといへども、其實はやはり町人請負也、畢竟私領の時、此町人引受より流弊を生じ、蝦夷人悉く難儀し、連々外國人に志を通ずる様になりけるゆへ、此御用も起りし事也、玄かれは當御用御取締の眼目は、全く蝦夷人伏従の一事に歸する事なり、然れども此伏従と申も、猥に介抱のみを厚くし、

頻に物をあたへ、美食を給させなどして、一時の歡をする譯にあらず、其根本は、松前の苛政に引かへ、交易其外萬事進退、向後公儀の御直捌に成たりといふ處、蝦夷人の歡喜第一にて、全く伏従の基本也、其故に山奥嶋々杯へ離散しつるものども、進み出來りて、市に歸するもの月に増日に盛ん也、又場所々々の通詞番人等も、公儀御直捌といふ處を甚重んじ、おのづから格別に愼み恐れ、萬事正路に勤居る事なり、然るに以來其金元は町人に成、仕入物産物拂方等、都て町人の引請に成りたりといふ事を聞ば、同じ町人にて己等のみ正直に骨を折、他人の利潤を助る事面白からず思ひなすは、必ず卑賤の事情なれば、自然と官吏の目を掠め、不正を働く様に成行べし、初年には彼地へ行たる官吏は六十人に餘りしが、段々御所置も居合、年々に人數を減じ、既に今年などは、拾六人に彼地の在住を打交、二三場所づゝも兼持に心得させ、凡には間に合、町人共の不正もなし、然るに若通詞番人共いひ合せ、官吏共の目を掠る様に成たらば、必一場所毎に改

の役人を嚴重に詰させ、逸々に糺させずむば叶ふまじ、然らば復々最初のごとく、殊之外大勢なくば間に合べからず、今御度勘定所より申立の趣も、畢竟は御人を減すべきとの見込の所、却て今迄より遙に増べし、然らば是迄の通詞番人等を盡く取放し、彼引受町人の手先のものと入替たらば、此憂は薄かるべしといへども、彼取放されたるもの共、己々が述懐の餘り、種々の流言等をいひ觸し、夷人の心を惑すべし、素より頑愚の夷人なれば、とり留ざる事より騒動に及ぶ事、全く彼地の風儀にて、是迄數度先蹤あり、萬一右躰の事あらば、是迄の御世話も空しくなり、一時に手戻りするのみならず、松前家杯にて却て思はん所もはづかし、殊には南部家津輕家杯へ莫大の物入をかけ、御用をも被_レ仰附_一ながら、公儀にては御入費を御厭ひ、町人の手を借らせられ、剩へ御仕損じにて騒動に及べり杯と申嘲られむは、何ほど口惜き次第なるべし、長崎の例を引といへども、彼地は交易一通の御用にて、介抱撫育の所置は有べからず、蝦夷地は介抱撫育第一の

御趣意にて、交易は其次なれば、長崎と同日の論にあらず、扱又前書のごとく、町人引請に成、相應の歩合も可_レ被_レ下との事、たとへば五朱位の隨分輕き歩合にて、御金高二萬兩にも及びなば、凡千兩程も下されずしては叶ふべからず、其上御手當も被_レ下、右三四人の町人に各下代給料等も可_レ被_レ下との事なれば、如何様に積りても、千五六百兩乃至二千兩にも及ぶべし、當時江戸箱館町人共御手當、其外會所向一切の御入用、官吏共御手當等迄殘らず結ひ上、中々千兩にも及ばず、是利附の金子と無利足との得失也、其上彼引受の町人產物運送の諸懸り船々打立并修復雇船の運賃を初め、惣て交易筋一切の諸入用を綿密に算用し、產物賣立金の内より差引ならば、御收納は何程も有べからず、既に松前家領地の節、運上を頻に取まし、夷人を十分に虐げてさへ、一箇年收納五千兩に過ず、然るに夷人の撫育は潤澤にし、引受町人も相應に利潤を得、前件品々の入用をさし引ならば、甚些少の御收納成べきに、其内より前文町人への御手當下代給料仕入金の歩

合等、凡二千兩程も下されむとせば、恐らくは御
收納にて足るべからず、其上箱館御役宅并官吏
在住之長屋等、其外場所々會所旅宿等御普請
修復、或は嶮難の土地、道造橋懸渡し、惣て御要害
向の御入用、松前家へ領地代りの被_レ下金奉行初
め、諸官吏の御宛行在勤、先御手當等其他許多の
御入用は、町人より出金はせまじければ、悉く御
金藏渡りなるべし、御國務の故とは云ながら、永
久大造成御入費なるべし、依_レ之此方評議の趣
は、是迄年々五萬兩づゝ御金藏より請取てまか
なひ來りしが、已來は廉々格別に取縮め、其半減
凡二萬五千兩程にて仕上げの見込、奉行始め諸
官吏御宛行在勤御手當等、凡一萬兩の見込、松前
家へ被_レ下金三千五百兩、都合三萬八千五百兩程
之處、凡四萬兩と見込、蝦夷地御收納末年より以
來平均し、凡二萬兩程なれば、さし引二萬兩程不
足なるべし、此補ひ方は、諸家へ御買上米二十萬
兩の元金に備る時は、凡餘分米一箇年二萬兩づ
つ出る故、是を以補ふべし、然るに當御用御入用
金、去る末年より來丑年迄七箇年の間、年々五萬

兩づゝ可_二請取_一筭之御斷濟もある事なれば、來
亥年より丑年迄三箇年、やはり五萬兩づゝ請取、
其内にて御入用遣ひ拂の殘金の分、成べきだけ
御買上米の方へ差入る時は、今二十萬兩には及
ばずとも、其内追々餘分米代をも又元金へ結び
入なば、遠からず二十萬兩に至るべし、然る時は、
亥年より末は、最早御下金請取ずして、永久取賄
ひ出來、猶後年には御遣ひ殘金御藏納にも成べ
し、此趣法既に當三月中取調、御勘定所へ談じに
遣し置といへども、未挨拶なし、來亥年より丑年
迄受取べきといふ五萬兩づゝは、初年に伺ひの
上、元御斷濟もある事なれば、いづれ出すべき筭
の御金にて、新規に可_二請取_一といふにはあらず、
凡如此ならば、寅年より已來は、御下金に及ばず、
前書の町人引受にて、永久莫大の御出金あらむ
よりはまさるべし、扱町人引受の事は、前にいふ
ごとく、品々の故障あれば、容易に行ひがたしと
いへども、若仕入方を望む町人あらば、往々は二
三人も箱館へ邸を開かせ、諸色貯へ置せ、其品々
を買上て、仕入物に用ひなば、便利なるべし、左あ

れば、其實は自分金の仕入なれども、御勘定所より申立る所の趣法とは品替り、歩合金并下代給料其外御手當等の沙汰に及ばざる故、是等の事はもし望むものあらば行ふべしと、兼て存居る所にて候也、一駄此度御勘定所より申立る趣、前件段々の故障は有といへども、畢竟御所置始の事にて、何事もいまだ確と見極たる事もあらざれば、今暫く様子を口し、若往々故障もなき趣ならば、御勘定所よりの申立の趣に成ても可然、此一件只今改革せざれば、追てはなしがたしと申譯にはあらず、いつにても模様替は成べき事なれば、此上の様子に随ひ、若御勘定所建議の趣行るべき時節もあらば、其時可_レ申上_レ候也、

一蝦夷地御用廻船打立、或は御買上船もありといへども、此破損修復又は此上新規打立も有べきにより、此御入用少からじ、以來交易方町人の引受に成時は、此船の入用一切彼等が方にての取計ゆへ、御入用もなく、官吏の手數も減すべし、若又右の舟御要害の爲ならば、南部津輕の兩家、彼地の御用も承る上からは、右等の備も

あるべき事につき、御入用を以てとり計ふべきにはあらしとの事也、此方より答へ申趣意は、此船の事、全交易運送一通りの事にあらず、既に辰巳兩年打續、近蝦夷地の内へ異國船差寄りたる事もあり、素より海をひかへたる御要害場に候へば、第一に船の御備こそ肝要なるに、商船のみを當にする如き事にては、至て御手薄の儀といふべし、之かりとて未だ事も見えざるに、悉く軍船の御備を致さんも又おだやかならず、殊にいつ御用あらむも知らざるに、其一事の爲のみに、今莫大の御入用費さんもいかいなれば、外には交易運送のためと唱へ、専ら產物運送に用ひ、内には萬一の時の御用を含みたる御備舟なり、且雇船の運賃は至て高價なる物故、此御手船最初に打立の時は、餘程の御入用も有といへども、後々修復の入用、御雇船の運賃と比ぶる時は、御手船の御入用遙に手輕なるのみならず、商船と違ひ、拔荷仲賣等の憂も薄し、扱右御手船専ら行るゝにより、雇船の運賃殊の外引下り、爭ふて御用を承む事を願ふ、尤雇船も毎時入用の事故、爰

に於てもひとつの益を得たり、又此御船御要害のためならば、南部津輕の兩家にて備ふべきとの論もさる事ながら、此兩家今度存寄す當御用を蒙り、御地へ五百人づゝの兵卒に重役人共も添て詰させ、彼等が居所勤番所等も補理ひ、其入費既に莫大なれば、此御備船迄悉く手當せよとは命せらるべき筋にもあらじ、實に左程には手も届くべからず、依て當御用の方にて取計ひ來り候也、えかゝるを先達て兩家より艦立の船一艘づゝ用意致度所、仕立方不案内のよしにて、御用船の内一艘づゝ願請度内願の趣により、則伺の上打立の節の御入費納めさせ、兩家へ一艘づゝ渡し、扱遣ひ方の内含、治亂の御備なる趣をもよく／＼演説し置たれば、則御手船同様にて遣ひ方自在也、最初より備船の事を命せらるゝ程ならば、其船軍事の如きは兩全の備也、猶此上にも願ふ事あらば、伺の上追々渡すべしと存含候なり、

一諸家領分米買入の事、都合二十萬兩の高にいたらば、凡石高二十五六萬石にも及ぶべし、其米

拂方は大造成事にて、一鉢の米相場にも拘り、年により右の石高捌兼る事もあるべし、其米の置場、世話人の入用、懸りの官吏も餘程の人数にあらずむば事ゆくべからず、前書の如く町人引請になる時は、此買入米の融通にも及ばず、旁以便利なるべしとの事なり、此方より答へ申趣意は、是全く外見一通りの論議也、元來此買入米の事は、元懸の時より伺濟にて、蝦夷地御用は、奥羽兩州の米買上定式なれば、萬一兩州凶作の年は、用意として、諸家領分來年の收納米を目當に買上、代金は其八九分通り前年に渡し置、萬一奥羽凶作の事もあらば、其領分より直に蝦夷地へ運送させ、又兩州恙なき時は、其米を江戸會所へ納め、即日御拂にし、又は納主用米等に買戻しを願ひ、直に渡す類も間々有之、暫くも御藏納する事あらざれば、置所の差支もなく、世話する人もいらす、此米追々に入津次第、右の如く計ひ、一度に拂ひ出すにあらざる故、一鉢の相場に拘る事もなし、捌兼るといふ憂は素よりなし、其上此米は、其家々にて是迄年々江戸廻米し來る所

の米高を精々糺しの上、諸國の障りにならざる様、其石高程買上置事なれば、たとへば其米公儀にて御買上あらずとも、逆も夫だけは年々江戸廻りに成べき石高なれば、是が爲に江戸の米高多く成、相場に拘る杯の謂曾てなし、其上自餘の拜借金杯とは事かはり、先々より領分米御買上を願ひ、前貸として請取所の金子なれば、收納の時に至り、不納する事は成がたし、若其領分不作の年は、似寄たる代米を以納め、萬一似寄の品なき時は、名代を以納る規定にて、納めすむ時は、直に又來秋の收納米御買上を願ひ、即時に前金を請取、いつとてもその代金は、元の如く手に入る事なれば、おのづから不納はなき道理也、玄かれども分限不相應の石高に至りては、納方もいかにつき、凡一萬石に五百石程を内規矩とし、四五萬石以上よりは、猶其割合を減じ買上來れり、此買上米石代二十萬兩に及ぶ時は、餘分米代二萬兩程も全く納る事なれば、前にも申す如く、是を以當御用の御入費の不足を補んと存る所にて候也、

一蝦夷地通用のため、鐵錢壹萬貫文、去る未年江戸より廻り、當時は専ら銅錢通用も有よし、彼地御改正の上は、金銀錢はいふに及ばず、何品によらず通用便利有べきは、勿論の事也といへども、御國內にても、西國は銀通用、東北國は金通用、其外遠國嶋國は、錢通用重もなり、松前は、砂金壹兩を錢六百元と定め、萬の交易をなし、正金の取引は稀にして、錢通用重也、況蝦夷地は、從來品物交易にて、錢通用なき所なれば、此後共に金錢通用は薄き方然るべし、且近年諸官吏彼地に詰、勝手向賄、其外入用の諸品、江戸より御入用を以仕入、彼地へ廻し置、正金錢を以是を求るよし、彼官吏共蝦夷人同様の品は用ひがたかるべければ、別段に仕入するは止事を得ざる事なれども、正金錢を以求る事は停止し、金札が錢札にて取遣し、追て江戸にて正金錢と引替る方玄かるべし、又蝦夷人介抱方の事不正を糺し、實意に取計、飲食等の事にも念を入、伏從を宗とするは勿論たりといへども、元來邊鄙の夷にて、漁事の品をもつて常の食とし、其餘りあれば、米穀其外と交易し、

米は濁酒杯にも手造りにして用ひ、其外衣類器財等何れも品もの交易し、甚不束のよし、本邦にても遠國山方杯にいたりては、飲食衣類等至て不束なりといへ共、其地に生れ得て、他國の事を辨へざれば、自足れりとし、美を好まず、されば蝦夷地も耕作の道、又何にても土地の諸業開けざる内、飲食其他國の振合にのみ移りゆかば、奢侈に流れ、困窮に及び、それより財用の足らざるを憂ふべし、たとへば酒の事も、是迄多くは羽州酒田津輕青森邊の地酒にて濟來りたるに、御直仕入に成てより以來、大坂灘邊の上酒を仕入て廻すよしその聞えあり、是は其性合損せざる爲にても有べけれど、別して酒は其次第ありて、本邦にても下賤の者の上酒を用ゆる事はなきに、蝦夷人に上酒を用ひさするものならば、果して飲食の奢長すべしとの事也、此方より答へ申趣意は、此錢通用の事は、去る末年伺濟の通、彼地は前より品物交易なりといへども、多分の交易にいたりては、勘定合も入組、通詞番人其外の姦商ども夫に乘じ、品々不正を行ひ、己々が利

潤を謀る故に、夷人共の氣受宜しからず、其不正を逸々糺さんとするには、場所毎に官吏も多く詰合、巨細に吟味せざれば届きがたし、錢通用なれば、何程多き交易にても、算當の上にて明白に分る事なる故、官吏共の手數も懸らず、糺し方も行届、又是迄は品替なるゆへ、數十里に散在したる夷人共、其品々盡く會所へ持運び、又替りの品をも運送する事なれば、多分の產物交易に至りては、甚不便利なりしが、錢通用行はれてより後は、彼等が方にも中買躰の者も出來て、產物を取集め、會所へ出すが故に、山方邊鄙の夷人迄も、盡く交易の便利を得て、自然と銘々精を入、劣らじと稼ぐ事に成たり、且品替といへば、衣類器財其外も有といへども、先重なるものは、米酒たばこの類也、素より辨へなき夷人共なれば、貯へ置き心もなく、又永々貯へ置時は、其品の損するを厭ひ、多分は一時に遣ひ仕廻ひ、喰ひ仕廻ふ類にて、折角年中骨を折稼ても、全く其日暮しといふ如くなる境界により、御仁慈を以介抱被_レ仰出_一うへは、往々衣食住にも安んずる様にならざれ

ば、御世話の甲斐もなし、然るに錢通用行はる、により、自然と銘々其錢を貯へ置、米酒たばこ等は程よく求め、其餘の錢を溜め置、古手布子の一つ宛も求め、己も着し妻子等にも着さする心になり、右様のもの一人あれば、その近隣の人も五人も七人も其風に移り行は、全く朴素の質なるが故也、是其日暮しの境界を免るゝ兆しなり、又是迄は、女子供など少分の品を稼ぎ、會所へ出すといへども、替物にあたふべき程の品なければ、只酒一盃、飯一盃など、其座にて給さする迄なれば、一向身になるなし、今は二錢三錢の品にても、錢を以交易するゆへ、其錢を溜置、好のえなを求る事を樂しび、女子供迄も精を入れて稼ぐ事也、元來蝦夷人介抱の事は、前にも申如く、いたづらに手當のみ厚くし、物をとらせ、美食を喰せなどするは、一旦の姑息にて、實の介抱にあらず、此仕癖募る時は、懈情を生じ、奢りもつきて、御世話甲斐なきのみにあらず、却て以前よりも惡敷風を教る道理也、是己々が産業に精を出し、一身の立と立ざるとは、全く其業の精と不精とによると

いふ事を、よく／＼會得させざれば、永續の介抱とはいひがたし、然るに此錢通用初りてより以來、少しも多く錢を得たるを手がらのやうに覚え、われおとらじと勵み合て、其かせぎ怠らず、是則彼地産業繁榮の根本はこの錢通用の一盆にあり、産業繁榮するにつきては、めい／＼心おもしろく、其職をはげみ、異國へ心を通するなどいふ念慮はひとしと止たり、是全く當地の産業繁榮し、己々が身過も行立により、外國の助力を憑むに及ばざるが故なり、夷人の心を固め、御取締の第一にて、當御用の眼目なれば、錢通用の大益をなす事、爰に於て明らか也、尤今度御勘定所より申立たるも、強て錢通用を難じたるにはあらず、畢竟鐵錢計通用すべきの處、銅金銀なども通用するやの聞えあるゆへ、金銀錢通用は、薄きかた然るべしとの議論と見えたり、此儀は最初伺濟の通、鐵錢の外金銀は堅く通用停止にて、嚴しく制度を立置、萬一夷人共金銀を持來るとも、決して品物渡さざる事に規定してあれば、彼等が爲に金銀は瓦石も同じ事也、然らば不用の金銀を、若

千の錢と取替、翫物一通りに所持すべきいはれ
もなし、銅錢の事は、前々より夷人ども寶物と唱
へ、少しづつ、首に懸たるもの、杯も稀にはあれど
も、程の乏れたる事也、抑金銀銅等夷人の手に渡
す事を禁ずる所以は、外國へ洩ん事を恐るゝが
ためなり、然るに外國交易の事は、先達而林祭酒
杯と打合せ、品々議論を盡し、伺の上、永く斷切事
に決したれば、たとへ金銀銅等夷人の手にあれ
ばとて、異邦人へ洩るゝ道曾てなし、されば此異
國交通斷絶の道さへゆるまざれば、蝦夷地は則
御國內也、蝦夷人として別にいやしめ、夷狄あし
ひにすべきいはれなければ、やはり金銀銅通用
させたればとて其實は害なしといへども、西地
の方は私領なれば、萬一彼方より異國へ洩るゝ
事もあらむやと恐るゝが故に、彌金銀の制度は
ゆるさざる様精々行ふ事なり、銅錢は前にいふ
如く程の乏れたる事也、又彼地へ詰居る所の諸
官吏勝手賄其外の品仕入物の内より求る時、金
銀札の内を用ゆべしとの論あれども、右品々を
求るは、官吏のみにあらず、通詞番人并船方の者、

漁事稼方のもの、職人其外惣て此方より渡り居
るものどもは、悉く右品々を求る事也、然るに此
法にならば、官吏を初め、都て此方より渡り居る
數多の人々、盡く金銀札を用ひ、蝦夷人ばかり正
錢を以て通用する事に成たらば、兩端に分れ、夷人
の心に疑惑を生ずべし、玄からは官吏より初夷
人迄、札通用にすべきともいふべきか、一躰金銀
の事、札を以て通用し、害なきものならば、其便利な
る事故、蝦夷地のみに限らず、天下一統札通用に
なりて子細有まじきに、御國初より以來其事な
し、且勢州山田のみ銀札通用あり、私領には適札
通用の所もあれば、もしや山田も往古は私領杯
とて、其遺風にもあるべきか、其外御國內に札通
用の事は聞及ばず、蝦夷は御新撫の國なれば、何
事も疑惑なき様、金は金、錢は錢と明白に押顯し
て、教導ども施し度、二つには、夷人はいふに及ば
ず、此方より渡り居る船方并漁師杯、いづれも海
邊荒働をするもの共なれば、彼金銀札若濡そん
ずる時は、格別損失にも及び、又後々に至りては、
必贖せ札を拵へ、夷人をたばかり、是が爲に科人

を生ずる事あるまじきにあらず、且外々銀札通用の振合を聞に、銀一分以上より札を以て通用し、一分以下は札一枚受取、釣の錢を以て通用するよし、蝦夷地とても壹錢づゝの札百枚千枚取扱んは甚不便利なるべければ、拾錢以上扱は札通用にし、其以下は札受取、つりの錢をもつてとりやりすべし、左ある時は、やはり錢通用止切には成べからず、扱其上に百文一べ文扱いふごとく、品品の札なくはなるまじ、此方より渡り居るもの共は、夫も會得すべけれども、小兒の様の蝦夷人を相手にし、是は拾錢の札、是は百錢の札、是は壹貫文の札扱と申教へ、扱拾錢以下は釣の錢何程を以て差引する扱、巨細に申含とも、右様繁雜なる事は中々會得せず、間違のみ出來、大に疑惑を生ずべし、且支配人通詞番人等は成べき程は、彼地へ妻子扱も召具し、落着居て世話する様に有たき物なるに、札通用になりたらば、彼等が給分も正金にては渡さず、札にて渡し、歸路の時箱館にて正金銀と引替るの手續に成べし、玄かる時は、人情の習、少しも早く正金受取度心より、歸

心専らに生じ、永く彼地に居つく念慮は有まじ、扱件金の銀は、歸路の上、南部津輕の潤とのみ成て、蝦夷地の潤ひとなる事なし、かたゞ以て札通用の後弊少からず、又蝦夷人に、大坂灘邊の上酒を用ひさするといふ説は甚しき間違也、初年廻したる酒五百樽程味變じたるにより、一年試として大坂灘の酒少々取寄たるに、性はよしといへども、高價にして引合ざるにより、其年限りに是を止め、扱其酒場所々へ少し宛廻したりといへども、中々行渡らず、官吏等をはじめ、此方より渡り居るもの共計り、少し宛用ひんとするに、夫さへ一向に引たらず、蝦夷人扱に用ひさする事は、思ひもよらざる次第なり、元より夷人に渡す酒は、前々より仕來りにて、越後羽州津輕等の酒を用るといへども、是等さへ夷人のためには甚の美酒にて、平生悉く右等の酒を用るにはあらず、専ら手造りの濁り酒を用ゆる事也、都て何事によらず奢侈を附る類の事は、後弊少からずと申す譯、此方及び官吏共も、兼々辨へ居て、よろづの事を取扱ひ候所なり、

一都て交易の事は、其産物の出高の多少に随ひ、拂直段高下有ものなれば、出産高多き時は、直段下落して、拂ひの時利潤少く、出産高少き時は、直段上騰して、拂ひの時利潤多かるべし、左かれれば仕入金多く出産増すのみを好むべきにあらず、是等の事も町人の引受にならば、仕入の駈引勘辨有べしとの事也、此方より答へ申趣意は、是全く利潤一通りを目當にしたる論にて、蝦夷人介抱彼地繁榮を主としたる論にあらず、出産高増す時は、拂直段下落すべき事勿論なり、されども夫は全く御手元の御損失にて、御用筋の本鉢へ曲尺を當て見る時は、却て恐悦なる事なるべし、其故は蝦夷人共情氣にあらず、其職に精を入、産業を樂しむ効は、即産物の出高に見えて、此出高多き程、彼地は潤ふ事なれば、御撫育の根本を得たりといふべし、尤江戸にての拂直段は、下落すべしといへども、下直なる時節は、やはり下直に御拂ありてこそ、正道成御所置と申べけれ、既に町家へは諸色直段引下の事度々觸流しも有ながら、公儀の御拂物は、ひたすら高直をのみ欲る

は、一事多様な道理にて、強て適當の論とも申がたく哉、勿論出高多き時は、拂直段は、下直成といへども、惣高にては、仕入もの差引、いつとても多方に益あり、左かれれば出産多きは、兩全の計にて候也、

右之趣御勘定所より申立たるにより、段々前件の趣意を以答申所也、則右御答書信成朝臣より御勘定所へ下給ひ、此上は箱館奉行へ直談に及ぶべしと御勘定奉行吟味役等へ達し給ふよし聞えぬ、夫より翌享和三亥年正月五日、御勘定所より直談の懸合書來り、同年三月二日、此方よりも答書を達す、其贈答の趣意左のごとし、

一初而段町人引受の事品々の故障有よしなれば強て申難し、若仕入望のものあらば、箱館へ廊を開せんとの事はしかるべし、後々は左も有べき事也、二箇條御用船の事も申べきむねなし、此上南部津輕にてのぞみもあらば、御わたし方になりてゑかるべし、

一錢通用の事は、外國交通斷切の道定て、嚴重なる事なるべけれども蝦夷地に金銀散在せば、異國人

の望又一際深くなるべく、たとへば蝦夷人金銀を得る時、官吏方へ出しては品物も渡さず、瓦石同様なりといへども、異國人に見せなば、是迄の易物に幾倍の品をかへて交易し、夷人の心を赴かしめん、然る時は交易以前より深くなり、外には御制に随ひ、内には交通し、密計防ぎ難かるべし、殊に西地の方は私領なれば、いよく手も届くべからず、既に長崎表異國通商の事、拔荷其外厳しく制度有といへども、いつとなく金銀外國へぬけ、唐紅毛に口^取口^力る、事毎以少からず、されば蝦夷地の事も、當時は何程嚴重の制度有とも、年を重ねるに随ひ、終には異國人に利を射られ、國用を減すべければ、彼地に於て金銀通用は然るべからず、且又札通用の事は行はれ難きよし、品目故障の趣御答書にも見え、既に錢通用の伺ひも濟たるうへは、今更議論其詮なきに似れども、金銀銅錢等御國用の節は、御勘定所主役の内、重なる事により、後年異國へ扳んかとの懸念、やむ事を得ず、猶議論を盡す也、所詮鐵錢計の通用ならば、強ての論もあらざれども、金銀彼地に散在

するは、幾重にも去かるべからず、札通用行れがたきうへは、猶外に良策もあるべきや承りたく、且通詞番人等給分、札にて渡す時は、歸心専らに成べきとの論さる事なれども、逆も正金銀にて通用せざる掟に成るうへは、給分計正金銀にて請取たればとて、其詮なければ、札にて請取通用し、歸國の上早速正金銀に引替んに何の憂かあらむ、又其正金銀早く請取度心より歸心を急ぐ時は、己々が稼をやめ、とり得べき金銀を減する道理につき、あながち歸心のみ生すべき謂も有べからずとの事也、此方より答への趣意は、此儀先達ても申上書にもいふごとく、去る末年同濟にて、鐵錢計の通用は始りたりといへども、金銀は決して通用なし、勿論通詞番人其外彼地へ立入る者共、一己に所持の金銀はあるべきなれども、素より蝦夷人と商賣交易等は嚴き制禁にて、夷人の產物或は鐵錢をもつて買受、又通詞番人其外のもの等、若彼地產物望の事も有時は、會所より願ひ受、其代物は會所へ納め、其外仕入物等會所より求る諸品も代料、其會所へ納る歟、又は

帳面に記し置、箱館に於て勘定立るにより、蝦夷人の手に金銀散在すべき謂もとよりなければ、外國へ洩ん憂もなし、長崎表唐紅毛の例もさる事なれども、是は元來通信の國にて、其國人も毎時來往する事なれば、本邦の金銀密々に洩む事も有まじきにあらす、蝦夷地とても、若外國交通初らば、何程嚴密の制度を設るとも、鐵錢其外本邦の重寶密々に彼地へ洩む事、實に防ぎがたかるべけれども、元來外國とは交通なきうへ、御用地以來猶嚴敷制度を立、萬々一異國船漂着するあるときは、本邦の人を以て固めをなし、假にも蝦夷人と應對をさせざるにより、たとへ幾倍の替物をもつて金銀と交易せむ事を欲るとも、其應對成がたきうへは、姦通の道爰に於て絶たり、既に當時もウルツプ嶋といへる無人嶋に、ヲロシヤ人十人餘も來り住するにより、其嶋の手前なるエトロフ、クナシリ杯いふ嶋へ番屋を設け、官吏及び在住御家人、南部津輕兩家勤番のものを遣し嚴重に守り、彼ウルツプ嶋へ蝦夷往來の事を必止とさし留、只年々春夏の内一度づ

つラツコ獵として、夷人少々彼嶋へ渡すといへども、其節鐵錢は一錢も持せず、酒たばこ類も自己が遣ひ用の外は決して渡さざるより、彼等が手より金錢の異國へ洩るべき謂曾てなしといへども、夫すら猶懸念につき、彼嶋にヲロシヤ人の在る内は、蝦夷人を渡す事停止すべきやとの伺書上置たり、御下知次第ひと差とめむ存念なり、然る上は異國の通路寔に斷切により、蝦夷地に金銀散在するといふとも、外國へ洩む憂なき上に、素より鐵錢の外、金銀は決して散在せざれば、その懸念は聊もあらず、然れ共爰に一つの論有べきは、西地の方は私領なれば、制度いかゝあらんか、素よりは是とても金銀は散在せず、鐵通用もなしといへども、鐵錢の事は東地の夷人より西地の夷人の手に渡り、夫よりカラフト嶋傳ひ、山丹滿洲杯へ洩行むは計りがたし、是とても鐵錢ばかりの事にて、金銀の洩るべき憂はなし、玄かれども其鐵錢の内には、自然と銅錢も少しづゝ交り有るゆへ、精々箱館にて撰分し、上蝦夷地へ廻すといへども、猶撰落しも有べし、且通

詞番人其外の者ども、私に所持する錢には、果して銅錢交り有べし、玄かれども是迎も彼もの共、其初め南部津輕等にて調べ持來たりる錢のみの事にて、長途重きもの故、多分の錢は持越がたく、夫より後は場所々會所にて調る事故、やはり此方より撰立廻したる鐵錢なれば、たとへ彼もの共最初持越したる錢に、銅錢残らず入交たればとて、程の知れたる事なるべし、然共此所に於て其多少はえらず、銅錢の異國へもれまじきとはいひ難し、是を防がむとするには、札通用にも有べけれど、既に前件品々の故障ありて行ひがたし、仍て猶又考るに、若此憂をのぞかんとならば、蝦夷地に限り通用のため、鐵錢を以一文錢、十文錢、百文錢杯といふものを拵へ、常の通用錢と紛れざる様其形をかへ、是を以通用させる方にも有べきや、此外には手段もなし、扱此銅錢異國へ洩むといふ懸念は、前にいふごとく、全く山丹滿洲計の事にて、ヲロシヤ國の事は、西地とても氣遣あらじ、萬一異國船漂着など有る事有時は、松前家私にははからひがたく、早速御届被

レ申、嚴重に處置あるべければ、猥に彼地の蝦夷人と應對はかなふまじ、然る時はヲロシヤ國へ洩む事は、西地とても懸念有べからず、殊にヲロシヤ國の事は、唐紅毛杯とちがひ、金銀至て潤澤にて、佛像杯も金銀を以造るよし、只米穀不足なる故、若日本と交易をゆるされなば、金銀は何程も持來り、米穀と易ん事を願ふよし、先年漂流人光太夫、磯吉等を送り來りし通詞のいひたるよし、又光太夫、磯吉が申を聞にも、いかにも金銀は潤澤にて、米穀甚乏しきよし、彼等が言一槩に信じかたしといへども、若言の如くならば、強て金銀を望むまじきやと思はるゝ也、又札通用に成たる時、通詞番人共早く正金銀請取度とて、己が勤の期月をも待ず歸んとするものは、有まじきとの事、成程一季居の者の上を以て論ずるには、此論至極成べきなれども、先達て此方より御答書に申たるは、其事にはあらず、彼等は是迄一年一季居の者共也といへども、願くは以來妻子にても召具し、彼地へ引こし、期月もなく年を重て居つき、世話する様に有たきもの也、えか

るに札通用になる時は、正金銀請取度心より、永く居住する念慮は薄かるべしと思ふ故也、然れども是等は畢竟枝葉の説にて、札通用の一杼さへ障なく行はるゝものならば、よしや彼等が歸心の遲速は二の次の論にて、いづれにても夫迄の事也、

一産物の出高多きは強て好むべからずといひし一條は、只直段下落のみを厭ひたる末利の論のみにもあらず、たとへ限りなき大海に生る魚類にても、其地方により其品を生る所は有と見えて、東海にて鯨の捕れる事もなく、北海にて鰹の場所ある事もきかず、蝦夷地の鯨は、蝦夷地の海中にかぎり生ずる物と見えたり、然るに強て産物を増んとするには、たとへば前は下網様のものみにて取得たるを、地引網の類にて引揚る様にもするならば、其出高は増して、一旦繁榮の姿には似たれども、遠からずして取からし、終には魚の種を減ずべし、是一旦の榮繁にて、後々の衰微に及ぶべしと也、此事は是迄漁業の事を取扱ひたる官吏共に尋ねて、其譯委しく書出させ、別

紙に添て答をなす、其趣意は、凡鯨のより來るは、冬より春にて、此漁業は、箱館及び蝦夷地とも暮方より夜を懸、小船にて乗出し、海岸或は沖合一二里の間に悉く網を下げ置、翌朝未明に行て引揚れば、鯨網の目にかゝりて揚る也、此網は差網と唱へ、凡三尺計、長五尋程に仕立、豎横都合五端を一放しといひ、鯨に限り用ゆる事也、右は夜分の漁事といひ、海岸或は沖合一二里の間なれば、多分岩石續き、水中隠れ岩坏ありて、古來より地引網は用ひがたし、其内箱館在有川村、戸切地村といふ處は、岩石少き所有て、彼下げ網を繼合せ、冬の内計り鯨のよせ來る時、引網の如くして漁する事ありといへ共、纔の村方にて、是がために取からずなどいふ譯にはあらず、殊に其引網も從來の仕來りにて、御用地以來始りたるにはあらず、さればたとへ後來に至り多欲なるもの出來て、地引網をもつて捕得ん事を欲るとも、前にいふごとく海邊岩石多く、殊に夜中の事なれば、いかにも地引網は用ひがたし、忖此鯨寄來る時は夥敷事にて、里俗の方言に群來クニルと唱へ、海

水一面に眞白に見ゆる、其所へ差網を下るといへども、其内より網にかゝる魚は、誠に千萬の一にも及ばず、たとへ是迄の百倍千倍多く捕たればとて、中々取盡すべき躰には見えず、また鮭鱒の事は、海邊川筋有所、眞水を慕ひより來るものにて、前々より地引網を用ひ、又はヤスといふものにて突留る、鱒は沖合にて釣得る也、此鮭鮭鱒の四品は、彼地重の産也、其外の雜魚ども、往古より其所々に仕馴たる漁具を以捕得る事にて、前々は迂遠なる具なるが、御用地已來工みなる具に仕替へて取からなどいふ譯曾てなし、彼地の魚類夥敷事は、鯨に限らず、諸魚海中に充滿し、此上いかにとるとも中々盡る期あるべきとは思はれず、殊に鮭鱒などは年魚なる故、人よりとらずとも、秋末に至れば川上へのぼり、己と死して流るゝもの、奥蝦夷地にては、川水の色も見わかぬばかり也、是國土の費といふべし、とらずんばあるべからず、

右御勘定所よりの懸合書、前件の趣を以て答へけるに、猶又同年八月十日書面來て、答への趣承知のよ

し、漁業の事も前件の趣ならば、とりからず憂もあるまじ、札通の代り蝦夷地限りの通用に、新錢鑄立の事は面白かるべきにより、取調べ伺ひ可然との事也、最早此方より別段答書は遣はさず、承知の趣中川飛驒守へ正養より口上にて申述、新錢の事は當時安論箱館在勤なれば申遣し、猶又彼地の形勢も能々監察のうへ、同人歸府の後勘辨に及ぶべしと申達置、夫より安論彼地に於て段々錢通用の得失を糺得と思惟をめぐらすに、ヲロシヤ人の居住するウルツプ嶋へ蝦夷人ラツコ獵とし渡海の事は、伺の通り停止すべきよし、既に御下知も濟て、必止と通略の斷切たれば、彼方へ洩るべき懸念なし、只西地の方カラフト傳ひの山丹滿洲へ渡む歟の一弊のみ也といへども、此事も猶又得と糺しみるに、彌前件にもいへる如く、彼地へ立入る通詞番人其外の遣ひ錢は國許より持來らず、みな箱館并に場所々々にて調ぶるよしなれば、彼撰立たる鐵錢にて、撰落しの銅錢纔に交るのみなる故、たとへ西地へもれたりとも、何程の事にもあらず、殊に密々松前家の形勢を考るに、逆も永く西地を持悖ふべき様子にあらず、遠からず御用地に成ぬべき趣

休明光記卷之五

なれば、西北の御取締附む事近年にあり、然る時は、山丹滿洲へ洩むとする防がたはいか程も有べし、漸此頃蝦夷人ども錢通用に馴れて、其歡喜する折からなれば、今爰にて改革あらむも又穩ならじ、今暫く様子を試て後、ともかくもなるべしと思惟し、則歸府後柳生主膳正へ其趣を演説し、先此事は暫く見合になりぬ、

○支配吟味役江仰付事

○蝦夷地新寺院開基の事

○御入費取計方元極の事

○箱館奉行御役料の事

○正養叙爵の事

○奉行吟味役交代時節の事

○箱館御仕置筋の事

○享和二戌年十月十八日、御勘定組頭村田鐵太郎、御勘定高橋三平、箱館奉行支配吟味役被_ニ仰附_一旨、於_ニ御右筆部屋椽頼_一執政方列坐、采女正氏教朝臣達し給ふ、兩人とも繫て當御用に掛り出役し、鐵太郎は江戸懸りに付、直に被_ニ仰附_一三平は箱館在勤に付、御勘定奉行に御書附を以達せらる、兩人共格式は小十人組頭の次たるべき旨、御宛行の事は追て御沙汰有べきむね、御書附を以達せらる、且右兩人とも外遠國奉行組頭並の通、年始、五節句、月次御禮、嘉定、玄猪、御誕生、其外御禮頂戴物の節差出すべきやと同月廿六日伺ひ申せしに、即刻伺の通たるべきとの御下知也、同年十二月十四日御宛行、左

之通被_レ下旨氏教朝臣より御書附をもつて達せらる、

箱館奉行支配

御役料三百俵

吟 味 役

在勤年

御合力米三百俵四物成

御手當金百貳拾兩是は初め御書附には百兩と出たり、御暇拜領物金三枚と兼て願置處、二枚に

成たり、故に翌亥年二月廿七日御書附出直り、如_レ此に成、

右之通被_レ仰渡、在勤御暇之節金貳枚、時服二被_レ下_レ之、且席高之事は、佐渡奉行支配組頭杯の如く、持高の儘にて御役料計り、右之通可_レ被_レ下との御事也、然るに此兩人は、當御用初年より出役し、度々彼地へも相越し、格別の勤功も有_レ之に付、兩人に限別儀を以、是迄の御足高其儘被_レ下候様にと達て願ひ申せしに、翌亥年閏正月十九日、其通被_レ仰渡、鐵太郎は御勘定組頭の通三百五十俵、三平は御勘定之通百五十俵被_レ下_レ之、

○蝦夷地へ此方より參り居るもの死去の時、葬るべき場所壹箇所も取立、墓守の僧差置、猶追々都合次第、少々宛も取立申度、新規の寺院建立の事は、元祿年中停止のよし聞及びたりといへども、寛政十一年豆州波浮湊取上の節、同所へ出百姓病死のものの葬る

べき墓所取立、墓守の僧差置度旨伺のうへ濟たる例もあり、殊に蝦夷地は、御國內とは譯も違へば、苦しかるまじきやと、享和二戌年九月廿一日、寺社奉行へ懸合書遣しけるに、新寺院の事停止たりといへども、蝦夷地は外國の境にて、追々御世話もある事なれば、くるしかるまじ、之かし後年にいたり、不正の筋も生ずべきや難_レ計により、別紙を以新寺何箇寺と定め、其餘菴室の類は成がたき事に極めて之かるべしと、同年十月十一日、松平周防守より挨拶有けるにより、則其趣を伺ふべしとて、取調て居る所に、同年十一月廿五日、備前守忠精朝臣より正養へ書取をもつて達し給ふ事あり、其趣は蝦夷地へ在勤のもの末々迄にては人數も不_レ少、南部津輕より參り居るものもあり、夫等の内死失の時、簡易に取計の爲にも成べきにより、寺院ありて然るべし、新寺造立は制禁たりといへども、彼地往々宗門等取締にも可_レ然哉、尤夷人共葬埋の事は、仕來りを變へさする怀いふ事にはあらず、彼等自然と本邦の風俗に移り來る事も又制すべきにあらず、是等の趣を含み商議して、丁簡の程を申べしとの御事なり、然るに此一條は前にいへるごとく、此

方にても其催しありて、寺社奉行へ懸合も濟み、伺書の草稿も出來居たる事なれば、早く伺ひ可_レ申由を申て退き、其翌廿六日同朝臣へ伺書を呈上す、此伺書の趣意は、則前文の如く、蝦夷地在勤のもの其外死亡の時、取置のため新寺造立いたし度、寺社奉行へ懸合候處、箇様々々に挨拶有_レ之候、凡蝦夷地の内五箇寺程も造立いたし度、尤彼寺院とも檀家等も無_レ之により、追て檀越等出來迄は普請并出家扶助等も當御用金の内より賄ひ可_レ申との伺ひ也、夫より寺社奉行の方へ御沙汰ありける由にて、品々懸合あり、住職等寺社奉行の方にて撰び、上野増上寺金地院の會下より可_レ被_二仰附_一との事也、右寺院造立の場所普請の模様、住僧所化其外の御宛行、道中の御手當本尊佛具經籍勝手道具、其外等の事迄、品々寺社奉行と談じの上、連名又は銘々より、追々に數通の伺書を呈上し、夫々に御下知あり、此數通の伺ひ書夫々御下知ありて、一件事濟たるにより、最初上たる伺書は、別段御下知無_レ之、夫より翌々文化元年左之通住職被_二仰附_一、

天台宗

淨土宗

歸嚮山厚澤寺

等澗院秀曉

大白山道場院

善光寺莊海

五山派

景蓮山
國泰寺文翁

右住職は、寺社奉行の宅にて申渡、入院の御禮は、御白書院にて申上、彼地へ御暇の節、於_二躑躅間_一時服二被_レ下_レ之、此三箇寺御手當は、一箇寺へ一箇年米百俵、金四十八兩、扶持方十二人扶持づ、子年より先十箇年の内被_レ下_レ之、外道中諸入用并支度金として拾五匁づ、被_レ下_レ之、普請并本尊佛具等も御入用を以て拵遣し、僧籍の入用は、代金拾匁づ、被_レ下_レ之、皆當御用金の内よりの取賄也、此三箇寺身分は、寺社奉行の支配たりといへども、法義に不_レ拘儀は、箱館奉行にて指揮し、願筋も添翰の有無に不拘取上の筈、寺社奉行へ懸合、彼方にて伺濟の由挨拶有_レ之、都て箱館寺院の通の取扱ひ也、扨此寺院共住職の場所ハウスに善光寺、箱館より三十六里餘、シャンニに等澗院同九十六里餘、アツケシに國泰寺同百六十七里、右三箇寺共、翌丑年三月出立して、各入院濟む、入院の御届は、寺社奉行より申上、此方に扱ひなし、善光寺は問もなく病死したるといへ共、此御届并代り住職等の儀、都て寺社奉行の進退にて、此方にて取扱なし、

○享和二戌年十一月十一日、蝦夷地御用御入費取計方の事、御勘定所へ打合、伺書を調べ、兼々御入費筋

の事は、御勝手方若年寄へ申せとの事なりし故、京極備中守高久朝臣へ呈せしに、是はやはり御用番の執政方へ出すべき由にて、同十五日戻し給ふにより、即日備前守忠精朝臣へ呈進す、此一舛は、同年三月中取調伺書を草稿し、御勘定所へ相談に遣し置、其後度々懸合有之、漸く十月に至て挨拶あり、故に伺に及ぶ、其伺書の趣意は、蝦夷地御用場所々仕入物、御普請并御船入用町人共手當、蝦夷人介抱等を初め、其外の諸入用、是迄は年々五萬兩づ、御遣ひ捨りに成來れる所、此度萬事取縮め、凡半減二萬五千兩の見込、又奉行初諸官吏御宛行、御暇拜領物等、凡壹萬兩程の見込、是は今迄前の五萬兩の外なりいへども、追ては當御用の方より仕埋度積り、又松前家へ被下金三千五百兩は、當時御金藏より渡るといへども、是も追ては、當御用の方より仕埋度積り、此三口合せて、三萬八千五百兩程、全く御入用相懸るべき所、蝦夷地產物拂立代金は迄三年平均し、凡二萬兩餘なれば、差引二萬兩足らずも不足なるべし、此不足補ひ方は、諸家御買上米の餘分米を以補ふべし、當時御買上米金高凡六萬兩餘有之、此金高二十萬兩に及ぶ時は、有餘米代二萬兩

程有べければ、是を以て彼不足を補ふべし、此御買上米の譯は、前にくはしく記したるゆゑ、爰に贅せず、此御買上米代金は迄は本文の伺書には、巨細に書載たり、蝦夷地產物代を振向置、御入費の方は御金藏渡りの五萬兩にて取賄來れり、然るに此五萬兩の事は、去る未年より來る丑年迄、七箇年の内可三請取一筈、元御斷濟も有之、事なれば、三箇年之内やはり年々五萬兩づつ請取、其内にて御入用金遣ひ拂殘金の分成べきだけ御買上、米の方へ差入る時は、二十萬兩には及ばずとも、其内追々餘分米代をも又元金へ結び入なば、遠からず二十萬兩に至るべし、然る時は、亥年より末は、最早御入用金請取に及ばず、取賄ひも出來申べきとの趣也、夫より此伺書御勘定所へ御下に成、同所よりも猶又段々存寄申上たる所、兎角箱館奉行へ得と熟談を遂げ申上よとの御事のよしにて、此方へ數度懸合有、段々相談の上左の通りに極り、翌亥年三月十五日、御勘定所と連名の書面を備前守忠精朝臣へ呈進す、是迄の懸合書等數通なりといへども、事繁きのゆへに省之、此書上は後來見合に可成ため、其儘にて左に記す、

中川 飛驒守

小笠原和泉守

戸川 筑前守

羽太 安藝守

鈴木 門三郎

岡松 八右衛門

金澤 瀬兵衛

澤次郎 右衛門

蝦夷地御用御入費取扱方之儀に付、御勘定所に
て評議仕候趣申上候處、打合熟談仕候様申上候
様被_レ仰渡_二候に付、同申談候所、先達而御勘定所
より申上候通り、蝦夷地產物拂代金貳萬兩程之
分は、諸家領分米買入之方江不_二相用、蝦夷地一
舁御入用之内江御遣ひ方いたし、御役人御宛行
被_レ下物等、凡一萬兩程并松前家江被_レ下金三千
五百兩之分、御出方に相成候、蝦夷地御入用方へ
は五千兩づゝ年々御渡り方有_レ之候得ば、差支不_レ
申候得共、產物拂代金之儀は、翌年春ならでは
取立揃兼候間、五千兩づゝ御下ヶ金之儀は、翌年
之分前年秋相渡不_レ申候ては諸拂方差支に相成、

尤五千兩にて御金繰不足之節は、別段箱館奉行
よりの御斷申上、御取替金御座候様仕、勿論其分
は產物拂代を以、其年限返納仕候積御坐候、且年
年五千兩づゝ御出方并御役人御宛行被_レ下物等、
凡一萬兩程松前若狹守へ被_レ下候金三千五百兩
之儀者、買入米代貳拾萬兩之高に相成候迄は、不_レ
拘_二年數_一御出方有_レ之候積に相成候得者、此末
蝦夷地一舁之御入用二萬五千兩之内、二萬兩程
は產物拂代を以取賄、五千兩づゝ御金藏より受
取、有餘米代貳拾萬兩に相滿候得者、右五千兩并
御役人御宛行被_レ下もの一萬兩程、松前若狹守江
被_レ下金三千五百兩之分共、貳拾萬兩貸附金之内
を以取賄候儀に付、別段御金藏より御出方に不_レ
及相濟申候様取計候積に御座候、右私共評議
仕、以後之所取調候に付、此段申上候、以上、

亥三月

右書面呈進しければ、同月廿四日忠精朝臣より正養
へ左の通り書取を以達し給ひ、此趣を以最初の伺書
へ承附致すべしとの御事也、

御書面御入用取賄方之儀、蝦夷地產物代金を以

御入用之方取賄差引、不足之分金五千兩づゝ、年
 年翌年分を取越候て請ニ取之、是迄諸家買上米
 賃附之儀は、追々利倍致し、右利金にて御入用不
 足高仕賄出來候迄者、前書之通り取計可レ申候、
 委細之儀者御勘定奉行可レ被ニ相談ニ事、

則右之趣を以承付いたし、翌廿五日返呈す、
 夫より後蝦夷地產物年々に出増し、御繰合も宜しき
 により、此五千兩亥年子年は請取たりといへども、丑
 年よりは先受取す、猶四五年も御處置の様子を様々
 御斷返し可ニ申上との書附、子年七月廿日、采女正氏
 教朝臣へ安論より呈進す、且松前家へ被レ下金三千五
 百兩、年々御金藏渡りなりといへども、此分も諸家御
 買上米餘分米代を以仕埋可レ申段、丑年八月晦日、右
 餘分米割下げ、一件伺書の内へ書入、氏教朝臣へ正養
 より呈進す、則伺之通りたるべき旨、同年九月九日御
 下知有、のこりて奉行并諸官吏の御宛行の一口のみ
 當時御金藏渡り也、是も凡は一萬兩の見込なりしが、
 其實は五千八百兩程にて事足る也、

○享和二戌年十二月十四日、戸川筑前守安論、羽太庄
 左衛門正養被レ爲レ召、御役料千五百俵づゝ被レ下旨、

於芙蓉間一執政方列座、采女正氏教朝臣達し給ふ、同
 日御書附を以、箱館在勤之儀者、來春筑前守御暇可
 レ被レ下により、隔年に交代すべし、格別遠境邊土の事
 に付、在勤年は御手當金七百兩づゝ被レ下、初て相越
 す時は拜借金も有べしとの御事なり、則奉行一人の
 御宛行左の通りなり、

高貳千俵

外

御役料千五百俵

在勤年

御手當金七百兩

初在勤の時は、拜借金五百兩、翌年より十箇年に上納

御暇拜領物金拾枚、時服二羽織、

此日吟味役始惣支配向御宛行、并在勤手當の事御書
 附出る、吟味役の事は、前の村田鐵太郎、高橋三平被レ御附の條に

の上取調、先達而伺置所に、此方の何よりは餘程減じたり、其事は、前
 此末惣支配向被レ御附の條に委しく記すゆへ、こゝに記さず、

件のごとく、奉行初其外御宛行御手當等極るといへ
 ども、手初の事にて、失費の程も難レ計により、別段用
 意として、御用金の内より貳千兩持越し、費用足らざ
 る事もあらば、奉行はじめ其外共、右の内を以遣拂、
 追て申上よとの御事也、此遣拂は猶末文に記す、

○享和二戌年十二月十五日、羽太庄左衛門正養被_レ爲_レ召、叙爵被_ニ仰附_ニ旨、於_ニ御白書院橡類_ニ執政方列席、伊豆守信明朝臣達し給ひ、被_レ任_ニ安藝守_ニ、

○奉行吟味役交替時節、并兩人共江戸詰明たる節、支配向身分に付取計方の事、且右様の節機密の御用あらば、御宅に吟味役を差遣し、御直に申上さすべきやとの伺書、享和二戌年十二月廿一日、伊豆守信明朝臣へ呈進す、翌亥年二月十日御附札有て、交替の事奉行は年々二月中御暇被_レ下に付、四月下旬迄に彼地交替すべし、尤一年替りたるべし、吟味役は四月中御暇被_レ下、翌々六月中交替し、三年在勤たるべし、外支配向の事は、未文に記す、且奉行兩人留守中、支配向身分の事は、外遠國奉行を以て申立べし、機密の御用は、在勤先又は旅中にも書面を以申べし、輕きは吟味役を以申べしとの御事も、

○於_ニ箱館_ニ御仕置筋取計之事、享和二戌年十二月より追々伺濟あり、此一件は委しく別録に記す、

○支配向被_ニ仰附_ニ事並御用濟御返し人の事

○支配向在勤割並引越の者の事

○奉行並支配向參上御禮獻上物の事

○支配向へ取人の書上、并御用濟の者御戻し人御褒美願、享和三亥年正月十五日、采女正氏教朝臣へ安論正養兩人にて呈進す、同年閏正月十八日、左之通被_ニ仰附_ニ旨、於_ニ躰躰間_ニ備前守忠精朝臣達し給ふ、

箱館奉行支配
調役

御勘定吟味方改役

鈴木甚内
支配勘定
御徒目附
菊地惣内

藤本德三郎
支配勘定
同格
坂本傳之助

富山元十郎
御代官等西重次郎手附
御普請役元格
宮本源次郎

山田鯉兵衛
御普請役元格
御勘定
大嶋榮次郎

外

箱館奉行支配
調役

御勘定

佐藤茂兵衛
西丸御徒目附
比企市郎右衛門

同

調役並に

寺田忠右衛門
支配勘定格

右之面々者箱館蝦夷地等在勤に付、頭々に御書附を

以被_二仰渡_一、

御普請役

庵原久作

戸田又太夫

中村小市郎

長崎新左衛門

支配勘定岸本武太夫手附
御普請役格

箱館奉行支配

調役下役に

御先手久松忠次郎組同心
高橋治太夫

御中間目附
深山宇平太

御小人目附
松田仁三郎

御小人
田口久次郎

論所地改手代
御普請役御屋
新規御抱村上次郎右衛門

右者頭々に御書附を以被_二仰渡_一、

都合

調役

同並

同下役

六人

五人

十人

右之内調役は、年始御禮御流頂戴、五節句、月次御禮、

嘉定、玄猪、御誕生、御祝其外頂戴物等之事、同年閏正月廿七日伺濟有_レ之、支配向御宛行格式等左之通、

御勘定吟味方改役上席

調役

高百五拾俵

御役扶持拾人扶持

在勤年

御合力米百五拾俵四物成

御暇

御手當金拾九兩

金壹枚時服二

吟味方改役並上席

調役並

高百俵

御役扶持七人扶持

在勤年

御手當金七拾兩

御暇

雜用金三拾兩

吟味方下役之上席

調役下役

高三拾俵三人扶持

在勤年

役扶持三人扶持

御手當金貳拾兩

御暇

雜用金四拾貳兩月割

被下物無之

右御宛行之事、去戌年十二月十四日、奉行吟味役在勤

御手當等被^ニ仰渡^一之節、御書附之内にも有^レ之、尙又今日も御書附渡る、右兩渡之御書附には、在勤御手當、調役は七拾兩、調役並は六拾兩と有^レ之、右は御暇拜領物之儀、調役は金貳枚、同並は金二十兩と兼て願置候處、調役は金一枚、同並は金十兩と成たる故、同年二月廿七日御書附出直り、前書之通り御手當之方相増す、右後の御書附の趣を以此處へ記し置、

右之如く御宛行は極るといへども、前に記すごとく、今度手始の事にて、失費の程も難^レ計により、初在勤の節、御用金の内より別段金貳千兩持越、奉行始め支配向迄費用不足の事あらば補ふべきよし、戊年十二月被^ニ仰渡^一も有^レ之に付、亥年安論在勤の節、右御用金持越段々取調る處、奉行吟味役を始め箱館在勤之者は不足もなしといへども、場所々へ持越ものは不足に付、其遠近に隨て、左の通前段に日當の手當渡す、
一ホロイツミ迄相越者 一箇年分

調役者一日銀三匁つ、
同 金にして十八兩程
同並は一日銀貳匁五分つ、
同 同 十五兩程
下役は一日銀貳匁つ、
同 同 十二兩程
一ヒロウより子モロ迄相越者

調役は一日銀三匁五分つ、

同 同

同並は一日銀三匁つ、

同 同

下役は一日銀貳匁五分つ、

同 同

一クナシリ嶋シコタン嶋に相越者

同 同

調役は一日銀五匁五分つ、

同 同

同並は一日銀五匁つ、

同 同

下役は一日銀四匁五分つ、

同 同

一エトロフ島へ相越者

調役者一日銀七匁五分つ、

同 同

同並は一日銀七匁つ、

同 同

下役は一日銀六匁五分つ、

同 同

一下役共先役吟味方下役、或は御普請役之節、遠國御用御暇の時、支度として被^レ下金も有^レ之處、當時にては其儀なく、小給者難澁に付、一人に金四匁つ、手當遣す、

右之通相極以來、共に當御用金之内より書面之通可^ニ相渡^一旨、安論歸府の後、子年七月廿一日書附を

以、采女正氏教朝臣へ呈進す、

同日亥間正月十八日也御用濟の面々懸り御免、左之通り御褒

美被_レ下候、

支配勘定

銀拾五枚つゝ、

田邊安藏
和兵衛太夫

御徒目附

銀拾枚

湯淺三右衛門

御徒目附

銀三枚

正田周平

是は江戸懸りに付如_レ此

吟味方下役壹人

銀三枚

牧三郎

御普請役三人

銀三枚つゝ、

寺澤治右衛門

井上辰右衛門

渡邊新右衛門

銀三枚

御小人目附壹人

銀三枚

大森久米右衛門

湯吞所之者一人

右之者共名前出ざるにより、朱書を以_レ括弧を以_レ記し置也、

○支配向在勤割之事は、都て廿一人の内、七人は江戸懸り、十四人は在勤にて、其内より一年は三人、一年

は四人宛出府、江戸懸りと代合の積、享和三亥年二月廿三日、伊豆守信明朝臣へ伺濟なり、右の割合則一統三年番也、右之内調役鈴木甚内、同並山田鯉兵衛、下役村上次郎右衛門は妻子召具し、彼地に引越可_二相勤_一由申により、則伺ひの上詰越可_二相勤_一になる、御手當、甚内へ金三十兩、鯉兵衛へ金貳拾五兩、次郎右衛門へ金二十兩、蝦夷地御用金之内より渡_レ之、

○奉行參上御禮之節、獻上物は西御丸に御矢羽一箱づゝ、臺居、大島五、若此品差支の時は、椎茸一箱づゝの積、享和三亥年三月九日伺濟なり、其後猶又右兩品若

差支の時は、煎海鼠獻上の積り、文化二丑年八月十一日伺濟なり、支配向參上御禮の節は、吟味役調役とも箱肴獻上の積り、享和三亥年十月卅日伺濟なり、

○箱館御役宅出來并御普請懸り御褒美の事

○御黒印御下知狀を賜る事并安論箱館へ出立の事

○蝦夷地場所々行程を定る事并箱館六箇場所の事

○アブタ牧場取立の事

○富山泉の事

○交代屋敷造立の事

○享和三亥年春箱館御役宅出來惣構地坪三千三十坪

餘、建坪六百三十坪餘也、御普請懸りのもの共は、御褒美を願ひ、同年七月十七日、調役佐藤茂兵衛へ銀拾枚、林手代より出役手附萩野藤太郎、西丸御持同心より在住向井勘介へ銀二枚づゝ被下之、

○同年安論初て在勤に付、三月廿五日御黒印御下知狀を賜る、初ての事なれば、正養も罷出承るべきよしにて、一同承る、表御右筆組頭深澤伊兵衛讀之、其文章左の如し、

定

一 蝦夷地之儀、萬端念入、不_レ衰弊_ニ樣沙汰之、對_ニ蝦夷人_ハ、非分之取計不_レ可_レ有_ニ之事、

一 異國境嶋之儀、嚴重取計、日本人は不_レ及_ニ申、雖蝦夷人、異國江令_ニ渡海_ニ儀堅可_ニ停止_ニ之、自然異國之船於_ニ令_ニ着岸_ニ者、其所々に留置、早々可_ニ注進_ニ事、

一 耶蘇宗門彌爲_ニ制禁_ニ之間、守_ニ之無_ニ油斷_ニ可_レ遂_ニ穿鑿_ニ事、

右相_ニ守此旨_ニ可_ニ沙汰_ニ之、猶載_ニ下知狀_ニ者也、

享和三年二月十五日 御黒印

條々

箱館奉行

一 箱館之儀、寺社町人百姓等に 至迄御法度相_ニ守之、不_レ可_レ企_ニ斯儀_ニ旨、常々可_ニ申附_ニ事、

一 蝦夷人共隨分入_ニ念令_ニ撫育_ニ、産業不_ニ衰微_ニ樣可_ニ取計_ニ、與蝦夷嶋々者共、異國へ親不_レ申樣、精々可_レ加_ニ教示_ニ事、

一 箱館之者共、公事訴訟等有_ニ之節者、諸事准_ニ江戸之御仕置_ニ可_ニ申附_ニ候、勿論蝦夷人共仕置之儀は、爲_ニ別方之事_ニ間、猶又入_ニ念可_レ申事、

一 產物取捌方正路取計、商人共猥之振舞無_ニ之樣可_ニ申附_ニ候、私に彼地江令_ニ渡海_ニ、賣買仕者有_ニ之歟、密々蝦夷人と直商買致者於_ニ有_ニ之者、急度可_レ處_ニ罪科_ニ事、

一 萬一異國之船不慮に令_ニ着岸_ニ、及_ニ不義之働_ニ、人數於_ニ可_レ入者、南部大膳大夫、津輕越中守江申遣、人數爲_ニ差出_ニ、箱館番之人數に差加取_ニ計之_ニ、早々可_レ及_ニ注進_ニ事、

右之趣相_ニ守之_ニ可_ニ沙汰_ニ之旨所_ニ被_ニ仰出_ニ也、仍執達如_ニ件、

享和三年二月十五日

大炊守 居判

備前守 同

采女 正同

伊豆守 同

戸川筑前守殿

羽太安藝守殿

○同月廿七日安論箱館へ發す、今年は奉行はじめの在務にて、御所置の手始なれば、事物之格別に心を用ひ、各其規矩準繩を定む、其廉々至て多端なれば、記に違あらず、此在衛にして者、御所置の大綱凡成就し、蝦夷地の場所々を受持たる官吏共も各其精好をみがき、夷人の撫育に怠らざる故に、遠き嶋々迄よく治り、異國へ心をよする夷人などは絶てなし、只夙夜に國恩の廣大なるを仰ぎ、己々が産業を勉る事怠りなければ、其國産を出す事、日に添ひ月に増れり、

○東蝦夷地エトロフ嶋迄松前より凡三百里、箱館より二百七十餘里なりしが、追々場所々にて山路を開き、近道を附たる程に、今の里程左のごとし、

箱館より
大野迄

五里

但休所有川村

大野より
ワシノキ迄

八里半

但休所スクノツベ

ワシノキより
ヤムクシナイ迄

五里四町

ヤムクシナイより
チシヤマンベ迄

八里半

但休所ヲトシベ

但休所シラリカ

チシヤマンベより
レアンケ迄

六里半
レアンケより
アタ迄

五里五町廿四間

但休所ライハ

但休所ベンベ

アタより
ウスよりモ

十二町
ウスよりモ
六里半

モロランよりエト
モノ迄海上二里餘

モロランより
ホロヘツ迄

五里

但休所ヲサルベツ

エトモより
古ヘツ迄

陸地五里

ホロヘツより
シラチイ迄

七里七町

但休所山中

但休所アイロ

シラチイより
エウアツ迄

九里餘

ユウアツより
サル迄

八里

但休所コイトイ

但休所ムカハ

サルより
ニイカツア迄

六里

ニイカツアより
シツナイ迄

四里卅町

但休所アツヘツ

但休所ウセナイ

シツナイより
ミツイシ迄

二里

ミツイシより
ムクチ迄

五里

但休所ウラカハ

ムクチより
シヤマニ迄

三里

シヤマニより
ホロイツミ迄

六里十七町

但休所ホロヘツ

但休所ホロマンベツ

ホロイツミより
サル、迄

六里二十四町五十間

サル、より
ヒロウ迄

六里

但休所タモギサバ

但休所ルベシベツ

セコウより
トウアイ迄

七里八町

トウアイより
チホツナイ迄

六里十四町

但休所アイボシマ

チホツナイより八里四町
シヤクヘツ迄

但休所ヲコツヘ

シラヌカより七里
クスリ迄

但休所ヲタノシケ

コンクマイより五里八町
ゼンボワジ迄

但休所ノンデキ

アツケシより六里十八町
ノコベリベツ迄

但休所センベ

アンネヘツより川舟六里餘
ニシヘツ迄

(アンネヘツよりネ
モロ迄海上九里餘)

ノツケより海上四里程
クナシリ迄

アトイヤより海上七里程
エトロフ入口迄

都合箱館よりエトロフ嶋入口迄凡二百三十四

里餘也、エトロフ入口タンネより同所アトイヤ迄凡

八十二里に及ぶ、四十里餘也、故に箱館よりエトロフ末迄は二百

又アツケシよりネモロへ陸路有左のごとし、

アツケシより七里十九町
ビバセ迄

ハラタウシより三里廿六町
チソチシ迄

但休所ユウトウ

シヤクヘツより四里八町
シラヌカ迄

但休所バシタル

クスリより四里
コンクマイ迄

但休所カラロコイ

ゼンボワジより海上二里
アツケシ迄

ノコベリベツより五里六町
アンネベツ迄

但休所ライナハシ

ニシベツより海上六里餘
ノツケ迄

(ニシベツよりクナシリ迄海上十里
餘ネモロよりシリ迄海上十六里餘)

クナシリ入口トマリより四十里程
リ同所末アトイヤ迄

又箱館六箇場所と云は、

ヲヤストイ シリキシナイ ノクライ

ヲサツベ サハラ

ウスジリ ワシノキ

シカベ

○蝦夷地諸運送のため、先の年南部地より多くの馬を場所々に畜ひ置しに、追々駒を生じたり、安論元より馬術に巧なるが故に、其駒を乗込試るに、頗駿足なるもの數多有、夫が中より殊に勝れたるを三疋撰び、同人歸府の時牽せて、上覽にも備へしに、天晴御用にも立べきとの御事なりければ、重ての下向の時は、父馬にも成べき御馬少々申おろし、蝦夷地のうち可然所にて牧を取立申べきやと伺ひ申せしに、其通りたるべしとの御事也、かゝるにより、文化二五年下向の時、森越栗毛、八戸白栗毛、黒谷鹿毛といふ三疋の御馬を申下し、蝦夷地の内アブタといふ所へ牧を開き、南部仙臺より駄馬を多く買上、彼御馬と共に是を放つ、夫より年々駒を生じ、良馬を出す事限りなし、調役原半左衛門が弟同苗新助、専ら此事に預る、又江間彦八郎といふものを牧士觸頭とす、其下の牧士をも

數多抱入て是を行ひ、今鎮臺に繋く所の良馬既に數疋に及べり、其内勝れてよきものは、江都に送りて、その餘は、鎮臺の備とす、凡外遠國奉行の承る土地に、如斯の馬を備へたる事なし、馬は軍用の第一なれば、警衛の土地にして、暫くも欠べきにあらず、今既にかくのごとく數疋を備へたれば、不虞の設け全く整ふれりといふべし、今度始て牧を開き、原新助をはじめ、是にあづかるものども、勤勞大方ならざるにより、文化三寅年十二月三日、原新助へ銀七枚、下役福井政之助へ銀三枚、此ものは牧場御普請かゝりたるゆへを以、別段三枚、牧士觸頭江間彦八郎へ銀貳枚を賜り、同月廿六日安論へは、御用取次平岡美濃守頼長朝臣を以、茶羅紗五間をぞ賜りける、

○斯て箱館の御役所成就し、井を掘るに及て、海岸に添たる山陰なれば、巖石多くして掘得がたし、漸ひとつを作りなすといへども、事ゆくべきにあらず、爰におゐて、調役並富山元十郎殊に心を勞し、所々を點檢し、則箱館山の内より清水の涌出る所を見出し、硯をつたへに是を引事をなし得たり、因て其功を不朽に傳むために、一碑を立む事を同職山田鯉兵衛より

頻に望むゆへに、則正養其文を撰び、碑を立る事左のごとし、

富山泉碑

梓弓やしまのほかもてらします、御代の光りいたらぬくまなく、蝦夷の嶋人をさへなでやすむせらるべきよし、をきてさせ給へるにつきて、享和二とせ箱館にはじめて政所をまうけられ、筑前守藤原安論朝臣と正養とをして、かはるゝそこを守らせらる、かくて政所より諸士の官舎にいたるまで、ことごとく造營なりてのち、井をほらんとするに、こゝは海岸にそびへたる山陰なれば、いははおほいにしてうがつべきよしなく、かろうじてひとつほりえたれども、あまたの官舎に用ゆるにたらず、これぞ上下のうれへなりける、まかるに被接の官人おほかるなかに、富山元十郎保高といへるが、わきて是をうれふる事せちなりしほどに、ある日蝦寨の山あひより清水のながれいづるをとみになめこゝろみしに、その性清淨にして、あぢはひもまた甘美なり、つゐに岩間をうがちて、あまたの硯して、是を

ひくに、政所をはじめ、もろ／＼の官舎にひきても、猶あまりあり、いでや水は五行のひとつにして、まばらくもかくべからざるものなり、そも保高が功おほひなりといふべし、かるがゆへに此みなもとを富山泉となづくるもの也、くみそめし泉ともにいさをしの

その名もつきぬ世々につたへむ

文化三年二月

安藝守藤原正養誌

屋代太郎源弘賢書并題額

○文化元年子の春、龜田村にある所の役所を引て、奉行の交代屋敷を造る、則鎮臺の向にして、惣構七百坪餘、建坪二百坪餘也、

○正養箱館在勤新田開發の事

○制札事

○下役御増人の事

○萬年橋の事

○文化元年四月廿一日、正養箱館へ發し、安論と交替す、かくて箱館近在田作の事、去る申年の頃より試るに、年々に實のりよく、往々成就の事疑ひなく見ゆるにより、此上地味よき場所を撰び、來丑年より開發

可仕やとの伺書、安論歸府後同年七月廿日、采女正氏教朝臣に呈出しけるに、八月十五日、伺の通たるべしとの御下知なりければ、調役並山田鯉兵衛、下役村上次郎右衛門、石坂武兵衛、在住勤方代嶋章平を懸りとし、其下箱館御用達御用濟とも請持にて、諸國の百姓人多き所より望の者を雇ひ入、居小屋を補理、農具の手當し、則丑年より開發せしむるに、其年一年に功を成事、新田百四十町歩、内九十町歩字庚申塚、五十町歩字文月、畑二十町歩、内十五町歩字濁川、三町五反歩、を開く、夫より年々開發記すにいとまあらず、往々廣大の國益をなすべし、扱此事に用ゆる所の御入費は少からず、抑當御用始りてより、彼地へ運送する所の米穀は、重に奥羽の兩州より買上て廻すといへども、若兩州不作の事もあらむかとの備へに、諸侯の領分米收納の前年に約束し、代金前度に渡し置事、前件に段々述る如し、然其其國ともまた凶作などあらむ時はいかむともすべからず、箱館をはじめ蝦夷地場所々迄、本邦より立入る人許多なれば、米穀は一日も欠べからず、然れば何程御入費ありとも、箱館を始、蝦夷地末々迄追々に土地を開き、米穀を生ぜん事遠大の謀にして、當御用の經營是に過す

といへども、猶同じくは御收納金銀を以てせずして、此事を成就せんと、懸りの官吏共殊に心を勞し、品々評議の上、一策を考出し、御用船の稼ぎ出し金に主法を定め、其餘計を以此御入費にあつべしとて、則御船の事を統承る、水主同心長川仲右衛門に得と相議し、御用船の事は迄の主法は、其行所の遠近に應じ、雇船並の通り運賃を渡し、其内にて船中諸入用、水主給分等迄、一箇年限勘定仕上げ、差引残の分稼出し金と唱へ納め來る法也といへども、元來御用船といふ名目に泥み、舟具の用意其外萬事の取扱ひ何となく手重にて、船中の入費嵩み、彼稼出し金多からず、難破船杯ある時はいふに及ばず、修復小作事等はいつとてもある事なるに、兎に角彼御用船といふ名目に拘り、をのづから不用の所迄も叮嚀を盡すやうに成行、作事入用殊の外に嵩み、難破船杯ある時は、彼稼出し金を残らず遣拂ひ、猶たりずして、別段に御用金より多分の補ひあり、然れば稼出し金は名のみにて、少しも其益とする事なし、依て此度より法を改め、運賃金の内、何程は船中入用、何歩は修復入用、何歩は稼出し金と定め、御用船十五艘を江戸箱館御用達御用聞并定

雇船頭高田屋嘉兵衛が引受とし、彼修復入用は、箱館の會所へ積金とし置て、何れの船の破損なりとも是を以補ふべしと定たり、扱歩割の事、其船々の大小によりて、各不同有といへども、凡平均して見る時、惣運賃の内、五歩程舟中入用、壹歩程修復入用、四歩程稼出し金に當る也、譬へば、一船の運賃金千兩なれば、内五百兩は船中入用、百兩は修復入用、残り四百兩は稼出し金と云割なり、既に如此割合を以、丑年一年試みたりしに、其年は難破船も殊に多かりしが、彼積金の修復入用を以作事等も整ひ、右船々の稼出し金、都合四千三百兩餘初めて全く生じたり、尤船々運送の事は度數にもより、年々少しづゝ不同有べきなれども、先凡の目當は是を以歴然たり、之からば以來開發方御入費は此稼出し金を以計ふべし、左有時は聊も御收納に響ずして、開發全く成就すべしと評決し、則其趣を仔細にゑるし、文化三寅年八月十七日、伊豆守信明朝臣へ安論より呈進す、夫より年々に此開發は増り行事にぞ成ける、又百姓町人其外誰にても、自己の入用を以開發せん事を願ふものあれば、各地所を割渡して是を開かしむ、今この箱館の近在空地限りもなければ、ことゝく開なば、廣大の事成べし、蝦夷地の内をも

サルといふ處の番人、一己の力を以少しの場所を開しよしにて、新米をも差こしぬ、彼サルといふ所は、餘程奥地なるが既に如し、亥からは蝦夷地の内いづ方か不毛の地あるべき、彼地の夷人共は元より魚食をして、耕耘の術なき故に、世々此事に至らざる成べし、猶此上開發の事段々蝦夷地へ移りゆかば、其國益の事勝ていふべからず、今この御代にあたり、數千載の不毛の地一時に消て、上國とならん事、あふぎても尙餘りある御事也、

○箱館制札の事、亥二月中伺ひ置しが、御勘定所へ御下げになり、長崎表へ懸合ありて、文化元年九月廿日、備前守忠精朝臣より御下知あり、則翌丑年より建之、其文左のごとし

定

一異國人萬一來る事ありといふ共、交易は不_レ及_レ申、都て通路應對等堅禁制之事、

附若怪敷船等見懸候は、早々其所之役所へ可_ニ注進_ニ勿論、差圖なくして右舩之船に堅乗べからざる事、

一蝦夷人と相對て、商賣は不_レ及_レ申、惣て蝦夷地に

おゐて、私に產物商賣堅禁止之事、

一蝦夷人に對し非分之儀申掛、或は産業之妨に相成儀、決而致間敷事、

一商人共并商船之類、私に蝦夷地へ入べからざる事、

一何船に限らず、蝦夷地に漂着之節は、其所の役所に早く申出、可_レ受_ニ差圖_ニ事、

右條々可_レ相_ニ守_ニ之、若於_ニ相背_ニ者、可_レ被_レ行_ニ嚴科_ニ者也、

文化元年 月 日

奉行

定

一親子兄弟夫婦を始め、諸親類に_ニ亥_ニたく下人等に_ニ至迄、是を_ニあはれむべし、主人ある輩は、各其奉公に精を出すべき事、

一家業を専らにし懈る事なく、萬事其分限に過べからざる事、

一偽をなし又は無理をいひ、惣じて人の害になるべき事をすべからざる事、

一博奕の類一切に禁制の事、

一喧嘩口論を慎み、若其事ある時、猥に出合べから

ず、手負たる者隠置べからざる事、

一鐵炮みだりに打べからず、若違犯の者あらば申出べし、隠置他所より顯はるゝにおゐては、其罪重かるべき事、

一盜賊惡黨之類あらば申出べし、急度御ほうび可_レ被_レ下事、

一死罪に行はるゝもの有時、馳集るべからざる事、
一人賣買堅停止す、但男女の下人、或は永年季、或は譜代に召置事は、相對に任すべき事、

但譜代の下人又は其所に往來る輩他所に罷越、妻子をも持有附候もの呼返すべからず、但罪科あるものは制外之事、

右條々可_レ相_ニ守之、若於_ニ相背_一者、可_レ被_レ行_ニ罪科_一者也、

正徳元年五月 日

奉行

定

一毒藥并似せ藥種賣買之事禁制す、若違犯のものあらば、其罪重かるべし、譬同類といふとも申出るにおゐては、その罪をゆるされ、急度御ほうび可_レ被_レ下事、

一似せ金銀賣買一切に停止す、若似せ金銀あらば金座銀座へ遣し相改べし、はつし金銀も、是又金座銀座へ遣し可_ニ相改_一事、

附惣て似せ物すべからざる事、

一寛永の新錢、金子壹兩に四貫文、壹分は壹貫文たるべし、御料私領ともに、年貢收納等も御定のごとくたるべき事、

一新錢之事、錢座之外一切鑄出すべからざる事、

一諸職人いひ合せ、作料手間賃等高直にすべからず、諸商賣物或は前々買置しめうりし、或はいひ合せて高直にすべからざる事、

一何事によらず誓約をなし、徒黨を結ぶべからざる事、

右條々可_レ相_ニ守之、若於_ニ相背_一は可_レ被_レ行_ニ罪科_一もの也、

正徳元年五月 日

奉行

定

一きりしたん宗門は累年御制禁たり、自然不審成ものこれあらば申出べし、御ほうびとしてばてれんの訴人

銀五百枚

いるまんの訴人

銀三百枚

立かへり者の訴人

同斷

同宿并宗門の訴人

銀百枚

右之通り被_レ下べし、たとひ同宿宗門の内たりといふとも、申出る品によ_リ銀五百枚下さるべし、隱置他所よりあらはるゝにおゐては、其所の名主并五人組迄一類共に可_レ被_レ行_ニ罪科_一者也、

正徳元年五月 日

奉行

定

一火を附るものを去らば早々申出べし、もしかくし置におゐては其罪重かるべし、譬同類たりといふとも、申出るにおゐては、其罪をゆるされ、急度御ほうび下さるべき事、

一火を附るものを見附ば、是をとらへ早々申出べし、見遁しにすべからざる事、

附あやしきものあらば、せんさくをとげて、早奉行所へ召つれ来るべき事、

一火事出来の時みだりに馳集るべからず、但役人差圖のものは格別たるべき事、

一火事場へ下々相越、理不盡に通るにおゐては、御

沙汰有_レ之旨申聞せ通すべからず、承引なきものは搦捕べし、萬一異儀に及ば_ニ討捨たるべき事_一、火事場其外いづれの所にも金銀諸色ひろひとらば、奉行所迄持參すべし、若隠し置他所よりあらはるゝにおゐては、其罪重かるべし、たとひ同類たりといふ共、申出る輩は、其罪をゆるされ、御ほうび可_レ被_レ下事、

一火事の節、地車大八車にて荷物をつみのくべからず、鍵長刀脇差等ぬき身にすべからざる事、

一車長持停止す、譬あつらへ候もの有とも造るべからず、一切に商賣すべからざる事、

右條々可_レ相_ニ守之_一、若於_ニ相背_一者、可_レ被_レ行_ニ罪科_一もの也、

正徳元年五月 日

奉行

定

一公儀之御船はいふに及ばず、諸廻船とも遭難風時は助船出し、船破損せざる様に成程精を出すべき事、

一船破損之時、其所近き浦のものの精を出し、荷物船具等取揚べし、其所揚早々荷物之内、浮荷物は二十

分一、沈荷物は十分一、但川船は、浮荷物は三十分一、沈荷物は二十分一取揚者に可_レ遣事、

一沖にて荷物はぬる時は、着船の湊におゐて所の御代官手代庄屋出合途ニ穿鑿、船に相残る荷物船具等之分可_レ出_ニ證文_一事、

附船頭浦々のものと申合せ、荷物ぬすみ取_レ之はねたりと偽り申におゐては、後日に聞といふとも、船頭は不_レ及_レ云、申合輩にいたる迄、其罪重かるべき事、

一湊に永々船をかけ置輩あらば、其子細を所之者相尋、日和次第早々出船致べし、其上にても金難澁は何方之船と承届之、近邊は其地頭御代官、遠方は御勘定奉行、又は其邊の奉行所へ急度可_ニ申達_一事、

一御城米廻之刻、船具水主不足之惡船に不_レ可_レ積_レ之、并日和能節船於_ニ破損_一は、船主船頭可_レ爲_ニ曲事_一、惣て理不盡成儀申掛之、又は私曲於_レ有_レ之は、可_レ申_ニ出_一之、縦雖_ニ同類_一其科をゆるされ、御ほうび可_レ被_レ下事、

一自然寄船并荷物於_ニ流來_一は可_レ揚_ニ置_一之、半年過

迄荷主於_レ無_レ之、其揚置候輩可_レ取_レ之、若右之日數過荷主雖_レ爲_ニ出來_一不_レ可_レ通_レ之、雖_レ然其所之地頭代官可_レ受_ニ差圖_一事、

一博奕惣而賭之勝負堅停止たるべき事、

右條々可_レ相_ニ守_一之、若於_ニ相背_一は、可_レ被_レ行_ニ罪科_一者也、

正徳元年五月 日

奉行

前々より浦々高札相建、

公儀之船は不_レ及_レ申、諸廻船共猥成儀無_レ之様に被_ニ仰附_一候處、遭_ニ難風_一節も所之者ども船之助に者不_ニ相成_一、却而破船候様にいたしかけ、荷物をはねさせ、或は上乘船頭と申合、不法之儀も有_レ之様に相聞え不届に候、御料は御代官、私領は地頭より常々途_ニ吟味_一、毛頭不_レ埒不_レ仕様に急度可_レ被_ニ申聞_一候、若此上不埒之儀於_レ有_レ之者、後日相聞候共、其者はいふに不_レ及_レ、所之者迄可_レ被_レ行_ニ重科_一、其上其所之御代官地頭迄可_レ爲_ニ越度_一事、

一御城米廻近年破船多候に付、今般諸事相改、別而大切可_レ仕旨申渡、船足之儀も深く不_レ入様に、大

坂船は大坂奉行、其外國々之船は、其所支配之御代官より船足定之所に極印を打、船頭水主之人

數を不_レ減少_二様急度申附令_三運送_一筈に候、依_レ之湊に寄候船之分は、船頭水主人數并船足極印之通り無_レ相違_二哉送狀に引合、急度相改帳面に記置、上乘船頭印形致させ、右書物其所に留置、御料は御代官、私領者地頭之差出し、御代官并地頭より御勘定奉行迄可_レ被_二差越_一候、且又極印船足深く入候船有_レ之候は、積候俵數委細改_レ之、御境米之外、船頭私之運賃を取、他之米穀或は商賣之荷物等積入候歟、又は水主人數定之内令_三減少_一候ハ、私に積入候荷物は其所に取揚置、水主人數不足之分は、其所にて慥成水主を雇せ爲_レ致_二出船_一、其上にて右之譯早速御勘定奉行に可_レ訴_レ之事、

一破船有_レ之節、浦々之者出合、荷物船具等取揚候刻、盜取候歟、又は不屈之仕形於_レ有_レ之は、船頭より不_レ隱置、有_レ跡に早速可_レ訴_レ之事、

右條々急度可_二相守_一、若違犯之輩於_レ有_レ之は、證議之上可_レ被_二行_一罪科、不吟咏之子細も候は、

其所之支配之御代官又は地頭迄、可_レ爲_二越度_一者也、

辰八月

定

一何事によらず、よろしからざる事に、百姓大勢申合せ候を徒黨となへ、とふして、ゑゐてねがひ事くはだつるを、ごうそといひ、或は申合せ村方を立のき候を、てうさんと申、前々より御法度に候條、右類之儀有_レ之は、居村他村にかぎらず、早々其筋之役所に申出べし、御ほうびとして、

とゝうの訴人

銀百枚

ごうその訴人

同斷

てうさんの訴人

同斷

右之通り被_レ下_レ之、品により帶刀苗字も御免有べき間、たとへ一旦同類になる共、發言致候もの名前申出るにおゐては、其科をゆるされ、御はうび下さるべし、

一右類訴人致すものもなく、村方鑒立候節、村内の者を差押、とゝうにくはゝらせず、一人もさし出

さいる村方有^レ之者、村役人にても、百姓にても、重に取^レまづめ候ものは御ほうび銀被^レ下、帶刀苗字御免、差續^レまづめ候もの共^レ有^レ之者、夫々御ほうび下し置るべき者なり、

明和七年四月

奉行

右制札場箇所

本制札	箱館	鷺木	砂原
九箇所	白尾	龜田村	有川村
	大野村	泉澤村	木子内村
	乙志部	尻岸村	小安村
	當別村	札刈村	釜谷村
浦高札	三石村	茂邊地村	富川村
十三箇所	三谷村	下湯川村	錢龜澤村
	石崎村		

○下役十人の處、不足に付五人の御増人を願ひ、文化元年九月十六日、左之通被^レ仰附^二旨、備前守忠精朝臣より書附を以達し給ふ、

此喜左衛門は九月十四日被^二仰附^一

御先手水野小十郎組同心

井上喜左衛門

御持頭桑山猪兵衛組同心

關谷茂八郎

箱館奉行支配
調役下役江

御先手木原兵三郎組同心

小川喜太郎

千人頭河野四郎左衛門組同心組頭

石坂武兵衛

小普請組彦坂丸兵衛組

福井政之助

○文化元年龜田村萬年橋を造る、龜田村の橋なれば、萬年を以名とす、

○日浦孝女の事

○常盤木橋の事

○千とせ川の事

○箱館の片ほとりに日浦といふ所あり、そこに清十郎といへる民有けり、その子伊之助といふに、同所石崎村の民長四郎が娘れんといへるをめとりて嫁としけるが、寛政十一巳年伊之助身まかりけり、その時れんは三十四五歳にて、いとけなき男子三人あり、舅清十郎は七十七歳にて、年久しく中風の病に係り、行歩も叶はず、素よりすぐれてまづしければ、朝夕の煙だにたえまがちなるを、いさゝかも舅に其色を見せず、老人の介抱子供の養育、れん身ひとつの辛勞艱苦の有さまいふにたえたり、親長四郎もとくにむなしくなり、今は兄長四郎といひて其跡はつぐといへども、

これも至て貧しく、漸其日を送り、力を添ふべきやすがもなし、さればれんが齡もいまだ中年の事なれば、後夫を迎へて相應のたつきをなし、此くるしみを遁れよと、近きあたりのもの共舉てすゝむるといへども、既に子供も三人迄あり、今さら二夫にまみへて貞操を折かん事いかにも心憂く、そのみならず其後夫の心底により、若舅へのつかへかたよろしからざるとき、男子の妻を離別するとは譯もちがひ、女の方より夫を離別もなりがたし、玄かるときは、亡夫への不貞、舅への不孝、いかばかりかなしき事なるべし、此事は幾重にも免し給へといひて更に受引ず、扱此日浦といふ所は、海邊の内すぐれて邊鄙にて、素より田畑もなく、皆漁業を以てすぎはひとす、至て荒き磯邊なれば、女の手業に漁事も叶はず、海邊へ打寄る所の昆布などを拾ひとり、夫食のたしとし、又は賣代なし、或は春分海岸に生ずる露の臺などを摘取賣渡し、些の價を得て少しづゝの米穀をもとめ、薪は海岸へ流れよる古木枯木杯をとり集め、かろうじて其日を送れども、舅へ少しも苦しみを見せず、其中至てむつまじく、舅嫁の躰には見えず、實の親子よりは猶うち

とけて隔なく見え、聊も老人の心に違はず、其中にて幼なき子共を養ひそだつる有さま、晝夜の艱苦いふばかりなし、清十郎もよく孝養に満足したりや、常々近隣のものに申けるは、我はいかなる果報ものにて、かゝる心ざま美しき嫁をとり、年老難病を受たれども、聊もその憂なく、今日を無事に送る事、偏にれんが力也とて、よろこびに堪ず、かくて近村普く其至孝を感じ、各少しづゝは合力杯をもし、既に七箇年程送り來るといへども、素より貧村の事なれば、此上助力も叶ひがたきよし、文化二丑年其所の長等より、場所懸り小川喜太郎迄訴へ出たり、此時正養箱館在勤につき、段々の始末を糺すに、既に前件の通なり、其年清十郎八十三歳、れん四十歳なり、仍之前段の次第を具に記し、正養府に歸るの後、同年六月廿九日下野守忠裕朝臣へ呈進し、御褒美を願ひ申せしに、七月十九日れんへ白銀七枚、清十郎へ老養として一人扶持生涯下し賜る旨、同朝臣より達し給ふ、則ち箱館安論より清十郎及び孝女へ台命之旨を申下す、清十郎は病氣に付代のものを出したる、其もの歸て清十郎に達したるに、只感涙にむせび入て、暫くは人心地

もなかりけり、斯てたまもの、白かね米穀を近隣に少しづゝわかちて、其公惠のいちゐるしきを吹聴し、れんもこれよりいよゝ考道の有難を知りて、益怠りなくぞつかへける、

○文化二丑年、七重村常盤木橋をかくる、其邊は木を多く植附たる故名とす、

○コウブツの内シコツ川といふ川有、此川の名となへ惡しければ改度よし、其所を受持たる山田鯉兵衛よりいふ、彼川は鶴の數多居る所なれば、則千とせ川と改む、是は同年の事なり、

休明光記卷之六

○ラシヨア嶋蝦夷人エトロフ嶋へ渡來の事

○文化二丑年六月九日、エトロフ嶋シヘトロといふ所へ、異國人と見えたる者男女拾人餘小舟に乘組着岸したり、即刻同所詰調役菊地惣内下役共引れ出向ひ、件のもの共早速捕へ、會所へ召具し糾問するに、ヲロシヤ屬嶋ラシヨア嶋といふ所の長夷マキセンケレコウリフ、同ケツヒリヤンといふものを初とし、男七人、内三人は十四五歳の小兒、女七人已上十四人也、則通辨を以渡り來の旨趣を尋るに、此者共元來蝦夷人に屬し、此方の夷人とは詞少しの違にて大體通ず、近來ヲロシヤに右長夷共ヲロシヤ人よりの申附にて、年々シムシリ嶋、チリホイ嶋、其外嶋々へ渡り、ラツコ、アザラシ、狐等を獵し、當春ラシヨア嶋へ歸りし所、同所惣長夷ケレコレといふものが申には、昨年ヲロシヤ本國よりカムサツカに居る所の役人迄書翰來り、同所より申こす趣は、此節エトロフ嶋へ日本人大勢入込たるや、嶋中の様子得と相糺申聞よとの事なれば、汝等急ぎ彼嶋へ渡り、委細に見糺し來るべし、

若又交易もなるべくは、酒少々持来るべし、此後交易も行るべき様子ならば、蝦夷舟二三艘つゝ廻すべし、是はヲロシヤ人よりの申附にはあらず、彼ケレコレが存念のよしをいひ含め、交易として鷺の羽少し持參、其外弓鐵炮鎗磁石等所持するがゆへに、件の品々はことごとく會所へ取上、渡來の者共は嚴敷番人附置、猶追々得と糺問の上申越べきよし、八月中惣内より箱館まで申來る、其時安論在勤に付、先其趣を御届書に仕立、正義方へ差越、則閏八月廿一日、正義より大炊頭利厚朝臣へ呈進す、夫より惣内彼もの共を追追糺聞する處、エトロフ嶋より八嶋目ヲシヨア嶋出生の蝦夷人にて、此者其親の幼少の頃迄は、奥嶋々迄も一統地方蝦夷人の風俗にて、嶋々へヲロシヤ人の來る事もなかりしが、追々東蝦夷地の近き嶋々へ押渡り、蝦夷人を教育し、いつとなくヲロシヤの屬嶋になり、男女一人より狐の皮一枚づゝ年貢として出す事となりたり、然れども未ヲロシヤ人ヲシヨア嶋へは來る事もなく、ホロムシリ嶋の長夷來りて、向後ヲロシヤ國へ年貢として皮類差出すべしと申により、出すものもあり遣さるものもありて、區々なりし

が、明和二酉年の頃、ヲロシヤ國輕き役人のよしイバン・レエンチ、并ハステンといふものヲシヨア嶋へ來り、當浦見分の上、エトロフ嶋へ渡るにつき、當嶋のものどもも召具すべしと申により、則マキセンケレコウリツが親ケレコレといふものをはじめ蝦夷數多附添、シムシリ嶋へ到り越年し、翌年エトロフに渡り、嶋中の様子人別等まで悉く改め、ウルツブ嶋へ立戻りて越年す、然るにヲシヨア嶋より附添たる夷人共、初てヲロシヤ人の手に屬したるゆへ、その語も通じかね、都ての用事も不便利なるを怒り、ヲロシヤ人夷人を撻事數々なれば、一同に恨み、附そふたる夷人の人の内マキセンケレコウリツ父子をはじめ、少々は逃歸りけるが、逃後れたるものは捕へられ、諸道具は打碎かれ、舟は燒捨られ、歸るべき方便もなく、歎き暮しけるが、流木を以竊に小舟一艘を打立、又少々は逃歸りけれども、尙逃後れたるものは心ならずヲロシヤ人に從て嶋々を巡りける、然るに明和六丑年の頃、ヲロシヤ人イバン・ホロシヒチニイカノウ、同ケシセンニコウ、同イロヘムと云三人の者ヲシヨア嶋へ來り、嶋中のものへ申渡すやうは、去々年イバン・レ

エンチ、エトロフ嶋に渡海の時、當嶋のものを召具し、甚非道の振廻有けるよし本國へ聞え、其もの重き仕置に逢たり、其節召具したるもの其のうち、半は子細有てホロムシリ嶋に残したり、追々歸嶋すべし、其餘の者共は今則召具したり、以來ヲロシヤ人へ對し、いさゝか隔意なく、心を安んじて當嶋に住すべしと申渡し、ウルツプ嶋の方へラツコ獵として相越よしにて歸帆せり、然るに前年明和五十年の頃より、ヲロシヤ人大勢大船に乗組、ウルツプ嶋に來り、嶋中所々に居所をかまへ、ラツコ其外獵事をなしたりしが、ラツコ獵并寄鯨の事に寄、エトロフ嶋ヲシヨア嶋の夷共とヲロシヤ人爭論に及び、彼夷人共獵業に出たる留守へ大勢押かけ、女子子供を追ちらし、重器等その外諸道具等を盡く奪ひ取、或は打碎きなどし、其餘品品不法の働をなせり、元來彼等境を犯してウルツプ其外嶋々へ渡り、十分獵事をなすのみならず、如此無量の狼藉に及ぶ上は、其儘にさし置がたとして、エトロフ、ヲシヨア兩嶋の夷人黨を結び、弓鎗等を用意し、明和七寅年ヲロシヤ人數十人を殺害したり、惣人數何程ありしや詳ならず、多分は討れて七八人本國

へ逃歸りたる趣なり、夫よりヲロシヤ人ウルツプ嶋へ來る事もなかりしゆへ、エトロフ、ヲシヨアのものは、年々彼嶋へ渡りて獵業せしに、安永二巳年の頃、ヲロシヤの大船一艘沖合にかゝり、其内より小舟へ乗組、海岸へよる躰なりければ、扱は先年の復讐のために來るならんとて、夷人共俄に弓鎗等用意し、數百人毎岸へ出向ひけるに、いかゞ思ひけん彼小舟大船へ乗戻したり、其時夷人共相議して、今度ヲロシヤ本國より復讐として來る程ならば、人數も多く武器も手厚なるべければ、逆も敵對は叶ひがたかるべしとて、各ウルツプを引取て歸嶋せり、其跡にてヲロシヤ人共ウルツプ嶋へ上陸せしが、其年の秋風波ありて、彼大船破船し、其舟具を以海邊に小屋がけし住居するよしを聞、安永三年の頃その様子を見むとて、又々蝦夷人共いひ合せ、ウルツプ嶋へ渡り、大勢弓鎗を持、其居小屋へ近寄しに、内よりヲロシヤ人鐵炮をも持ず立出、向後蝦夷人へ對し聊隔意なきにより、是迄の事は和談し交易をなすべしとて、夷人共へ烟草食物等を贈て、はじめて互に交易の道開けたり、夫より追々ヲロシヤ國よりヲシヤ嶋中迄制度を立、彼嶋の

長夷をはじめ惣首長に申附、又かの國よりヲロマン・ヘイテレイチといふ出家初て渡來し、嶋中へ佛道を教へ、ケレステと云物首にかけさせ、唱へ事ありて信仰させ、此僧惣て嶋中の事を指揮し、人別を改め、一夫一婦の外妾を持事を禁じ、縁談取結び杯の事も此僧の計ひにて、惣じて嶋中の規矩をさだめたり、是より年々一男一皮の貢物を出し、蝦夷人の風俗も盡く改めて、ヲロシヤ人の風になり、嶋の名もヲロシヤ語に改て、テリナンシヤトイヲ、シトロップと云、彼年貢殘の皮類は、別段に彼國より交易を司る人折々見廻りて、望の品と交易する事にぞなりける、其外嶋嶋の名を改附たる年歴は、いつ頃といふ事も詳ならざれども、マキセンケンコウリツが親の幼年の頃迄は、其事もなかりしといへば、今推して考るに、凡延享寛延の頃はひより追々改めきたりたるにてもあらむか、當時の嶋の名、此もの共に尋問ふ所左の如し、

クナシリ嶋 トハチヤトイチ
ナシトロップ

エトロフ嶋 トベツナツシヤト
イチ、シトロップ

ウルツブ嶋 ヲアシムナツシヤト
イチ、シトロップ

ヤンケチリボー嶋 セムナツシヤトイ
チ、シトロップ

シフンケチリボー嶋 同名

マカンル、嶋 シウチユチ、
シトロップ

シムシリ嶋 レシナシヤトイ
チシトロップ

ケトフ嶋 ヘツナシヤトイ
チシトロップ

ウセシリ嶋 チヤチリナツシヤト
イチ、シトロップ

ラシヨア嶋 テリナンシヤトイ
チ、シトロップ

モトウ嶋 ルヘナツシヤトイ
チ、シトロップ

ラツコアキ嶋 チテンナツシヤト
イチ、シトロップ

モシリ嶋 デチヤトイチ
チシトロップ

シアシコタン嶋 ヤムナツイチ
チシトロップ

エカルマ嶋 ナシモイチ、
シトロップ

チルシコタン嶋 デバトイチ、
シトロップ

ハルマコタン嶋 セントムシ、
シトロップ

ラン子コタン嶋 ベヤトヤチ、
シトロップ

マカンル、嶋 テレイチチ、
シトロップ

シリシケ嶋 センベルトイチ
チシトロップ

ホロムシリ嶋ナブトロッチ、シトロツプ

ヲヤコハ嶋アライテチ、シトロツプ

シムチチヤウ嶋ナベロチイチ、シトロツプ

以上廿三嶋

夫よりラシヨア嶋のものどもシムシリ其外の嶋々へ渡り、ラツコ其外獵業し、年貢の外は交易して經營をなし、今度渡來のものども、去子年シムシリ嶋に越年し、當丑年春ラシヨア嶋へ歸りしに、此嶋の惣長夷ケレコレといふもの申には、昨年ヲロシヤ本國よりカムサツカに來り居る所の役人迄書翰來り、同所より申越す趣は、近來エトロフ嶋へ日本人大勢渡り、夷人を教育するよしその聞えあり、彌相違なきや、嶋の様子其外ども得と糺して申聞よとの事也、マキセンケレコウリツは、先年ヲロシヤ人に隨ひ、アツケシ迄至り、エトロフの地理も辨へたる事なれば、汝ケツヒリヤント同伴し、其外手下の者共を召連れ、急ぎ彼嶋に越べし、若又レフンチリホイ、ウルツプ嶋等にエトロフの夷人居合せたる事もあらば、彼等に嶋中の様子巨細に承糺して歸るべし、其事なくば、直にエトロフに渡り、得と見糺しの上、片時も早く歸るべし、且交

易の事は、ヲロシヤ本國よりの申附にはあらざれども、若なるべくは酒少々持來るべし、此度交易の行はるべき様子ならば、蝦夷船二三艘づゝ廻すべしといふにより、則交易の料として鷲の羽少々用意し、件の兩人并手下の男女を召具し、以上拾四人弓鐵炮磁石其外の調度を用意し、ラシヨア嶋出帆し、同年の夏レフンチリホイ嶋迄着岸せしに、去る寛政七卯年よりウルツプ嶋へ來り居しヲロシヤ人共男女十四人此嶋に居合たる故に、子細を尋しに、永々ウルツプ嶋に住居する處、本國より便なく、持渡の衣類諸道具も追々に損失し、玄かのみならず一兩年已來は、エトロフ嶋より蝦夷人渡來する事なく、交易の道も絶たれば、所得すべき事もなし、エトロフへは追々日本人も渡りまし、次第に警衛をこそかなりと聞ゆれば、いつ迄彼嶋に居たればとて、事ゆくべしともおもはれざるにより、小舟を打立、酋長ケレトフセをはじめ、去年秋末一同彼嶋を引とり此嶋迄來りしに、旬季後れて先の嶋嶋へ渡る事を得ず、又ウルツプ嶋へ立戻り越年せしに、當春ケレトフセ、ワシリコンネニチの兩人嶋にて病死し、其外女人一病病死し、残り十四人今度ウルツプ

嶋を引拂ひ、當嶋に至り風待し居る也、日和次第本國へ歸るなりと語りし故、此方共も今度ヲロシヤ本國より命によりて、エトロフに渡る趣など咄しあひ、彼嶋を出帆し、ウルツブ嶋へ渡りて見るに、ヲロシヤ人の住居し跡明家となり、人一人も見えず、夫より六月九日順風にて彼嶋を出帆し、直にエトロフ西浦シベトロ濱へ着船せしに、海岸に番屋を建連ね、津輕家勤番所ありて、ことごとく武器を設け、大筒も仕かけ有之、日本人大勢居渡り、嚴重の様子に見え、殊の外驚き、かほどの事にて有べきとは思はずヲロシヤ屬嶋の者の身分を以猥に渡來せし上は、いかなる憂目にやあふべきと甚恐れ、直に歸帆せんとせしを、引捕へて會所へ呼出し、段々吟味を遂る所、會所の牀嚴重にして、日本人多く詰合せ、爰にも亦南部家津輕家の勤番所ありて、武器を飾り大筒を設け、甚嚴重の様子に見え、まかのみならず、當嶋の蝦夷人共悉く御仁政に伏從し、大半風俗をも改めたるを見て、彌恐怖の情まきりにして、唯慈悲を以て歸國をゆるされん事を願ふの外他念なし、則會所惣構の内へ一室を補理入置、エトロフ嶋中の者の面會を禁じ、嚴しく番人を

附置、度々呼出して追々に吟味を遂る所、其申口既に段々前件に記し來る通なり、今度エトロフ嶋の様子見に參りたる旨趣を尋るに、ヲロシヤ本國よりエトロフ嶋の様子見て參れと命せられしは、いかなる深き意有かは存せず、我輩はかの國屬嶋の夷人にて、極めて卑賤のものに候へば、其本意申聞せらるべき様もなく、只嶋中の様子具に見糺して早々に歸帆せよとの事なれば、其旨を得たるのみにて候とぞ答へける、扱又此者共風俗の様子は、男子は髭を延し、髪は三打に組後ろへ下げ、髪のを細き紐へ青玉を通し結び附け、ヲロシヤ人は、髪を延す事なし、此者共元來蝦夷人にて、彼國に屬したるのみなる故、蝦夷の風俗を失はず、髪は延したるは、上着は鳥の皮を縫合せ、此鳥は、エトヒリカと云て、頭と足は赤く、鴨程の水鳥にて、毛の方を内にして皮裏を表へ出し、其くちばしを二つに割り、五六寸より壹尺六七寸程にあみて襟元へ縫附け後ろへさげ、裾には黑白の犬の皮へ彼背を取添縫附、下着は白緋紺木綿の筒袖胴着、同じ皮の沓をはき、辭儀する時は立上り、兩足を揃え、大指人差指中指のみ指をもつて額胸兩肩を押へ、其後兩度うなづき、又元の如く三度して安座す

るを禮とす、女子の衣服も男子に同じく、少し仕立方の違意也、髪を三つ打にして頭上へ卷上げ、玉蟲茶色のかいき、又は更紗木綿の風呂敷を被る、口元手のあたりへ黥したる事他方の女夷の如し、右男女の圖左の如し、

(圖略之)

右之者共名前左之如し、

長夷 マキセンケレコウリツ

同 ケツヒリヤン

平夷 フロキセ

イバン

メエテリ

キート

イバン

女子

フロナ

マリヤ

ヘトシヤ

フロナ

ナミタシヤ

マリヤ

以上十四人

ヲツコロベシヤ

右之趣并繪圖等巨細に取調、菊地惣内より箱館迄差越、前に段々年號を記し來るといへども、ラシヨア夷人年號を辨へたるにはあらず、天明五巳年御普請役殿夷地嶋々へ渡り粗記し置處に、此度ラシヨア人いふところと符合せるも、夫より彼者どのなとつて、其年號を考へ合せて記すなり、も取計方の事、安論存念の趣を正養へ談じ越し、則兩名を以伺書を仕立、同年十二月三日大炊頭利厚朝臣へ正養より呈進す、其伺書の旨趣は、彼者共エトロフ嶋中の様子見糺しとして來りたるよしなれば、不ノ輕筋により、歸嶋の事は扱置、いかさま嚴格なる取計方も有べきなれど、此もの共は素よりラシヨア嶋の夷人なれば、此者共は素より御國法をも辨へず、只惣長夷より申附る趣を守りて渡來せしのみなるゆへ、其罪を責るに足らず、先年フロシヤ人松前へ來りし時、御國法の事論し書も渡したるに、今度彼國の屬夷を以、エトロフ嶋に來らしむる事、カムサスカに在る所の役人の仕方にくむべきに似たりといへども、元より異邦の人なれば、彼國主をはじめとして、御國法の論し書も了解たるや否を知らず、若了解なればとて、右は畢竟御國地へ渡來の制禁にて、夷地の事は

くるしからずとも思ひたるや、其故は既に明和の頃より彼國の人數度蝦夷地へ渡るといへども、其儘にて濟來り、殊に當時もウルツツ嶋へはヲロシヤ人年久敷住居もなす事なれば、蝦夷地嶋々迄往來する事は御國禁の外と心得、今度のエトロフ嶋へ差越たる歟もゑるべからず、左有時は一概に其罪も責がたし、今此者共をもとめ置なば、いかなる事にて歸らざるやと外人をさしこすなども有まじきにあらす、此ものどもエトロフ嶋の驚衛嚴格なるに甚恐怖したる趣なれば、よく御所置あるうへは、蝦夷地嶋々に至るまで、向後は決して渡來すべからず、若犯す事有時は嚴科に處せらるべきの旨を仔細に示し、此度は則議を以歸嶋させなば、却て御所置の整ひたる趣も彼國へ知れ、蠶食の念慮をも斷切べしとの趣を以、いさゝ伺書に仕立呈進せしに、同月十六日則伺の通り計ふべきよし利厚朝臣より達し給ふ、此頃は、佐藤茂兵衛エトロフ詰なるに其書狀未彼地へ至らざる以前、三月廿六

日の夜、ラシヨア夷人共居小屋外の丸太矢來をくつろげ忍び出、其頃海岸に引揚をきたる漁舟に打乗逃失たり、翌朝是を見つけて大に驚き、即刻追手として下役關谷茂八郎、南部家勤番の足輕通詞番人蝦夷人等を召具し、早々出船せしめたるよし、猶此追手のもの共否の事は分り次第重て申越すべきよし、茂兵衛より箱館迄注進す、かくて此ラシヨア夷人共立さりたるはいかの故にや、萬一嶋中に手引などせしものにて有たるやと、茂兵衛より色々探索するといへども、更に其躰もなく、依てつらく考るに、此もの共去年六月中より居小屋にのみ籠り居、甚退屈して朝暮歸嶋を待兼、當年に至り春色を催し、取分籠居も難儀の躰にて、殊の外勞鬱し、中には病氣附たるもの有により、居小屋近邊計も步行し、少しは鬱氣をはらし度よし、チゑきりに歎きて不便なる事なれば、茂兵衛をはじめ詰合のものの共相議する様は、此ものども素よりラシヨア嶋の蝦夷人にて、ヲロシヤ人といふにもあらず、却てエトロフへは最寄近嶋の夷人の事なれば、御武威は勿論、ふたつには御仁恵にも蒙らせたるかたゑかるべし、且は居小屋より外へ出すとも、

いまだ氷海の時節といひ、殊に離嶋の事なれば、子細あらじと評決し、通詞番人を差添、その餘の者は、蝦夷人迄も應對はいふに不_レ及、ちか寄事も堅くいましめ、居小屋後ろの小山或は會所前海邊内など所々を定め、左右を限り歩行を免_レじ、二三度も出したるに、さのみ歡べる躰もなく、只々愁の色のみ見ゆるゆへ、いかい鬱散にもなるやと通詞を以尋れば、只有がたしとのみ答へて、さらく、歡喜の色なし、是いか成故ぞや、強て願ひたる歩行をゆるしたるうへは、格別に歡ぶべきに、その事なきは、夷とはいひながら何ともいふかしき様子につき、内々底意の程をよく探り見るに、兩三度小屋出の時、居小屋入口、勤番所并シヤナ會所前、海口見込の場所、左右へ南部家、津輕家の勤番所武器嚴重に飾り置、殊に彼等が歩行する時は勤番のものも残らず詰、いかにも嚴格に固をなしたるゆへ、其躰を見受、殊の外恐怖し、右武器の事は、去年上陸の時見受て甚恐怖せしに、猶又此度小屋出の時に度々見受、其度毎に恐懼の情頻りに募りたるよし、其後は小屋出の事も願ひ出ず、益々鬱勞盛むなる躰につき、其愚意の不便さに通詞を以説しむる

は、彼飾り置たる武器は不慮の備に常々設置事にて、汝等へ對したる事にはあらず、聊も恐るべからずとくれぐれ申諭すといへ共、兎角疑ひ深く、甚煩勞なる躰也、然れども又御武威を示すためには、強て其上の安易を説にも及ばず其儘にさし置しに、彼恐怖の情頻りにつのりたるゆへにや、終に忍び出、兼て彼等が大切にする所佛の像躰の物、并弓鐵炮其外の要具、會所へ取上置たるを其儘に打捨置、剩澗口出し風にて一躰の風順をも見定めず出船したる始末、全く恐怖の念慮頻に募りたる故なるべし、此外心當の事もなきよし、茂兵衛より箱館詰調役迄内々申越したり、其内交代の時節にもなり、正養箱館に下りければ、則兩人相議して、安論歸府の後八月十六日、右ラシヨア夷人立退たる趣を委細に記し、茂兵衛よりの届書も差添、大炊頭利厚朝臣へ呈進す、此年正養出立前病氣、安論十五日安論歸府す、_ラ交代前病氣にて相延、八月十六日呈進す、彼朝臣の給ふは、此ラシヨア夷人共エトロフを立去り、歸國のうへ御所置嚴重の趣を國人共へも物語らば、却て御取締の一端にもなるべきやとの御事に付、安論對へ申様、なる程其儀は茂兵衛方より箱館詰支配向迄内々申越、彼もの共立去候始

末、段々相糺し候へども別の子細も候はず、當春以來殊之外勞鬱いたし、小屋出の儀を相願候により、箇様箇様の手續にて小屋出致させ候處、飾り置たる武器其外嚴重成牀を見請、殊之外恐怖を生じ候趣、箇様箇様の次第に候とて、茂兵衛より箱館詰迄申越たる趣を具に申述、彼等が所持する所の佛像牀の物は申に及ばず、弓鐵炮杯の類も敢て武用の爲と申のみに御座なく、穀食致さる者に付、日々食料に用ゆべき鳥獸を取獲る爲の要具にて、片時も手放しがたき品に候處、夫をさへ其儘打捨置立去り候は、能々恐怖の情募り候事と見え候により、渠等歸國の上は、エトロフ警衛嚴格なる事を國中へ申觸し、御取締の一端になるべき事は相違もあるまじと存候得ども、此事こなたより申上候へば、何とやらむ事を飾り候様にも聞え候故差扣候へども、御尋の上はあらましを申上候と申ければ、さも有べき事也、茲からば其趣を巨細に書取て見すべしとの御事也けるにより、則茂兵衛より箱館詰迄申したる考の趣を委しく書記し、同廿日彼朝臣へ呈進す、扱も關谷茂八郎は、三月廿七日彼ラシヨア夷人共の追手として、南部家勤番の足輕

通詞番人蝦夷人等を召具し、出船して追駈たりしに、折しも雲霧深くして咫尺も分らず、ラシヨア人の行衛を見失ひ、其内雨も降出し夜に入れば、せひなくベトブといふ所へ上陸し、一夜を明し、ラシヨア人共は必定ウルツツ嶋へ至りぬらむとて、翌朝未明に出帆し、彼嶋への渡り口、シベトロといふ所迄はせつきしに、風波荒くなり、夫より先へ進む事能はず、日々風雨烈しくして、徒らに此所に日を送る、漸四月十一日に至り、少しく風順を得て爰を出帆し、ウルツツ嶋の内ヲカイワタラといふ所へ着岸し、所々を尋るといへども、ラシヨア人の行方も知れず、扱は眞にラシヨア嶋へや歸りぬらむ、最早かく數多の日數も經たるうへは、所詮追附事も叶ふべからず、さらば兼てヲロシヤ人の來り住る所へ行て見むとて、トウボといふ所へいたり見るに、前にラシヨア人のいひし如く、ヲロシヤ人は皆退去して壹人も見えず、則住捨たる穴居の蹟等悉く點檢し、圖に記して空くエトロフへ立歸りぬ、此時菊地惣内、佐藤茂兵衛と交代にて、エトロフ嶋に在りければ、惣内子年にエトロフに至り越年して、丑年の冬歸り、直に寅年の春引返して彼嶋に至り越年す、其趣を仔細に箱館迄注進す、仍て正養より安

論へ具に達す、安論則其趣を記し、利厚朝臣へ呈進し、ヲシヨア人共彌行衛不ニ相知うへは、其節詰合の調役佐藤茂兵衛不念に付、差扣伺差出させ可申哉と内々伺ひ申せしに、彼ヲシヨア人共の事兼々上向より御沙汰にて禁固させ置たるにもあらず、奉行の手にて差押へ置たる迄なれば、上へ對し差扣等の沙汰に及ばざるとの御事にて故なく濟けり、

○鍛冶村二孝女の事

○箱館近在鍛冶村といふ所に清次郎といふ民あり、文化三寅年八十九歳なり、同人妻ひさ七十五歳なり、聲養子勘之丞六十五歳、清次郎娘勘之丞妻りう五十歳、勘之丞娘きは十六歳なり、去るにより至て貧しき上に勘之丞勝れたる病身にて稼も出來ず、殊に齡も六十を越ぬれば、猶更心に任せず、依之妻りう娘きは兩人にて僅ばかりの畑作を仕付、少しの野菜杯をとりてたつきとし、又は村内其外に雇れて、些少の賃をとるといへども、老人二人と病身の勘之丞を附置たる計にては心も安からずとて、一人は必家に残り、一人づゝ出て稼をなし、漸僅の米穀を求得て、老人共へは米飯を勧め、己等は粟稗やうの雜穀を粥杯にし

てくらひ、漸今日を送り、又居小屋は土間にて寒氣堪へがたなきゆへ、兼て粟稗の殻を夥敷貯へ置、冬分に至れば爐の際へ此殻を敷、其上へあつしといふものをかさねしきて、老父母を坐せしめ、毎朝新に此殻を取かゆること一日も怠らず、りうきはの内、一人づつ其焚火にて手を得とあたゝめ、老父母の手足より顔の邊まで撫あたゝめ、壹人は食事を炊しぐ事乏しきゆへ、有合せたる衣類残らず取集め、老人共へうちきせ、又燈油求むべきよすがもなければ、幸ひ寒氣防きの爲とて、樺といふ木の皮を多く取置、是を爐火に焚て燈の代りとし、又老人共の寒氣防の一助とす、二人の孝女は、半夜代に起居て此火を焚き、夜仕事などしながら老者を介抱し、夜もすがら火のたえざるやうに心を盡す事一夜も怠る事なし、近郷其孝を稱していつくしみ、祝儀或は佛事等ある時、酒飯など振廻んとて招げとも、稼のためは是非もなし、私の事に老人の介抱を欠べきにあらずと斷て行かず、夜は殊更半夜代りの務もあれば、一切門より外へ出る事なし、且此所は至て貧村にて、家數漸十八九戸ありて、皆漁事の手傳に雇れ、纔の賃をとりて世を渡る所なる

に、近年不獵にて一統困窮のよし、金三十兩五箇年賦上納の積を以拜借を願ふにより、去冬申貸渡し遣はしけるに、其内勘之丞へも金壹兩割合村長より渡したるよし、其時勘之丞申様は、おのれは病身にて稼も叶はず、漸妻子の働を以今日をおくる所なれば、拜借金はあるがたけれど、多分にては返納の所も覺束なければ、金貳分拜借いたすべきよしを申により、則其意に任せけるに、やがて勘之丞其金を持歸り、養父清次郎に見せて、ありがたき御惠の段を吹聴し、玄だひに年も老たまふに、かゝる貧家なれば、何ひとつ心に任せまいらせたる事もなし、せめては此金をもて入用の時遣ひ給へと申けるに、清次郎がいふやう、我我夫婦は家内打よりて孝養を盡すゆへ、更に不足なし、殊に世を捨たる身なれば、金銀に望なし、汝は正月の支度歳暮の取始末等にも要用の品も多くあらめ、其用にあてよとて更にうけひかず、勘之丞さまざまに詞を盡して申により、玄からば壹分を貰ふべきよしにて受用し、翌朝孫娘きはをよび、汝薄命にしてかゝる貧家に生れたり、ことしははや十五歳なれば、衣類其外定てほしき品も有べきに、其風情聊色にも

出さず、父母并我々へ孝養を盡す志、神妙とやいはむ、不便とやいはむ、此金是有がた、も今度上より下し給はるよしにて、汝が父よりわかちあたへたる品なり、是をもてせめて布子の表にても調へ、目出度新年を迎よとて、かの金をあたへけるに、此娘常々老者の心にさかふ事なければ、一應の辭退もせず有がたきよしにて其儘受納め、其日は十二月廿七日の事なりしが、やがて箱館の町へ行、米味噌醬油其外正月要用の品をとゝのへ、残りたる錢にて古着の木綿裕を一つとゝのへ歸り、祖父母父母へも見せ、殊の外歡びたる躰にて、其裕をねんごろに仕廻置たる處、大晦日の頃は至て寒氣強、凌きがたきにより、かの裕を取出し祖父へ着せ、おのれは正月に至りても、やはりあつしとて蝦夷人の着る木の皮にて織たるすねたけの物を着て、聊もはづる色なく嬉しげに孝養を盡しける、近村此二婦の孝を稱して止ず、遂に場所懸り石坂武兵衛迄訴出たり、其時安論箱館在勤たるゆへ、事の始末を具に記し、安論府に歸るの後、同年八月十七日、伊豆守信明朝臣へ呈進し、御褒美を願ひ申せしに、り

うきはへは御褒美として白銀十枚、清次郎夫婦へ老養として各一人扶持生涯下し給はる旨、九月六日同朝臣より達し給ふ、則於箱館清次郎夫婦、勘之丞夫婦、孫女きはを呼出し、正養より台命の趣を申下す、かくて清次郎己が居村へ歸るやいなや、右拜賜の白がねと申渡書とを取持、妻子孫女迄不殘引具し、其所の鎮守稻荷の社へ詣て是を備へて厚く拜をなし、夫より宿へ歸り、座の正面へ新らしき樽をすへ、其上へ板をのせ紙を敷火を打て清め、かの白銀と申渡書を其上にかざり、神酒を捧げ、燈明をかゝげて、清次郎はじめ家内五人拜禮し、一同只泪にくれたる計にて、更に詞も出ず、夫より村中及び近郷上山村、龜田村などへも吹聴せよとて、柳を遣しけるに、頓て彼村々の者共寄集り、村役人は、各麻上下にて來り、其々に御恵をかしこみて歡を盡す事限りなし、扱彼來り集たる者共、白銀とやらむいふものつゝに拜みたる事のなければ、くるしからずばそとをがませて給りなむやと一同に願ふにより、則清次郎嗽手水して恭く取出して拜せけるに、皆々掌を合せてぞ拜しける、夫より彼神酒をいたいかせ、なをほかに少しく酒肴の用意も

して、彼ものどもをもてなしてぞ歸しける、かくて彼拜賜の白銀の内一枚と、さきに正養が鍛冶村へ至りたる時とらせたる金子と、官吏高橋三平、大嶋榮次郎、山田鯉兵衛、石坂武兵衛等があたへたる金子と、各其内を少しづゝ除置、紙幾重にも封し、彼白銀と共に新たに箱を作りて納め、非常の時は直にゑりにかけて持退んが爲に其箱に紐を附、神棚へ納め置、家内一同朝夕此箱に向て拜禮し、朔望には神酒を備へ、燈明をかゝげ、又毎朝門口へ出、箱館の方に向ひ掌を合せ拜をなす事一日も怠らず、かくて勘之丞は病身、きは年頃に成ぬれば、相應なる聲を取んとて、兼て撰びけるが、箱館の町人和賀や孫三郎方に七年已前より勤居る三郎といふ者、南部三戸の生れにて、きはめて木訥なりといへども、また貞實並ぶ方なければ、此者を貰て聲にせまほしく、過し頃より度々媒介を以いひ入るといへども、孫三郎方にては是迄多くの人も仕ひしが、三郎が如きものは又得がたしとて敢てゆるさず、空しく其儘に過しけるが、はからずも清次郎一家こたび莫大なる御褒美有けるよしを、孫三郎聞及び感嘆に堪へず、かゝる果報いみじきものよりの

望みなるに、なんぞ吾一奴を惜んや、さばかりめで度家なれば、吾も一家のちなみを結ばんとて、孫三郎は彼三郎が親元となりて、翌卯年二月三郎を清次郎が方へぞ遣しける、清次郎家内よろこぶ事大方ならず、則きはにめあはせけり、其夜清次郎、三郎に盃をあたへ、第一汝に申べき事あり、吾家の重寶は是也とて、神棚より彼箱を取出し、御恵の莫大なるをことごとく説きかせ、汝も又子孫に申傳へ、命にかへて此箱を大切にせよとくり返し／＼申けるに、三郎及び其座に居あはせたる一族村役人等にいたるまで、一同に感涙にむせび、廣大なる御恵みの程をぞ仰ぎける、是よりさき同村に嘉之助といふもの、孫に八五郎といふあり、勝れたる惡少年にて、所にてもてあまし、久離にてもせばや忤議し居たるに、彼二孝女之行狀近村頻にいひもてはやしけるにぞ、八五郎深く心に愧、夫より行狀をあらため、産業に精を出し、天晴の若ものとぞなりける、是は二孝女の公褒より以前の事なり、是德不孤必有隣との本文に開當したるとぞ覺え侍りき、

○石切地村長壽者の事

○箱館回祿并鼎の泉の事

○箱館在石切地村連右衛門といふ民の祖母とりといふもの、文化三寅年百六歳なり、兼て九十歳以上のものへは老養として生涯二人扶持、其子孫の類は介抱届きたる故を以、鳥目五貫文づゝとらする事定例なりといへども、此姥は類の稀なる長により、同年六月十七日呼出し、老養として二人扶持、外に鳥目十貫文をあたへ、連右衛門同妻五貫文づゝ取らせぬ、吟味役鈴木甚内此事を申渡す、彼姥耳は聾たりといへども、容貌血色は格別衰へたるさまにも見えず、珍らしき齡なり、此が妹も二人近村にあり、一人は八十五歳、一人は七十四歳といふ、各長壽の血筋と見えた

り、
○同年十月十日曉、箱館辨天町河岸市店より出火し、折節西北の風強く火勢盛んなり、正義在勤につき、早速出馬し、消防の事を指揮するといへども、風烈しく人は少く、次第に火勢強く、同所表通兩側内濶町迄焼拔、山の上町へも少し焼入、御役所坂下の惣門、并門番所、高札場、交代屋敷、且仕入物等入置所の板藏二箇所、土藏一箇所類焼、御役所并官吏の住居、向會所

等は別條なし、市中にては寺院四箇寺の内、實行寺、稱名寺、淨玄寺の三箇寺、并町家大小三百十六戸類焼す、元より狹き土地なれば、格別の大火にてぞ有ける、早速會所にて粥を多く煮させ、類焼のもの共にあたへ、又山の上町の芝居を明させ、彼もの共を入置、御役所に假小屋を補理し、御救ひ飯を類焼のもの一軒に米一俵つゝ、御收納方元へは五俵づゝ、同手代寺院并名主等へは三俵づゝ、與へ、其外許多の拜借米を出し、又南部地より代金千兩分の材木を取寄せ、拜借木に渡しぬ、夫より段々寒氣に向へども、窮民共小屋掛の手當なきものあまたありと聞ゆるにより、坂下御藏の焼跡と御役所前高札場の脇とへ假小屋二箇所を補理、彼もの共を入置て寒氣を凌がしむ、また今度南部津輕兩家の手勢格別の働き有ける故、其趣執政方へも申、重役者を呼出し稱し置たり、かくて此地井水乏しく、今度の火災にも防ぎの術を失ひたる故、安論正養心を合せ、市人の爲に井を設けて與む事をおもへども、當町雪深ければうがちがたく、春に成雪の消るを待ちて作らせなんと議し居たる折から、さきに蝦夷地の御用を承りし御勘定奉行石川左近將監

忠房、今度函館の火災を聞て警嘆に堪へず、いかにもして窮民等を救はまほしく思へども、遠路の程なればせんすべもなし、兎も角もよきにはからひてよと、黄金十兩を正養が方へ贈られぬ、さらば此人をもくはへて彼井を成就せんとて、遂に翌卯年の春大町にひとつの井を作りなす、此井地中の巨巖を穿ちたれば、清泉漲りて止ず、數多の覓して近隣數十家に引、常は朝夕の助とし、事有時は災を防むとす、正養が臣高坂龍介元禎其銘を書て井桁に刻む、其文曰、

此函館の湊は、いはほ多き磯邊なれば、井をほる事たやすからず、民草の茂り行に玄たがひ、水自ら乏し、されば去年の冬祝融の災有し時も、これを防ぐによすがなふして、三百宇あまりを失ふ、筑前守戸川の君と我頼みまいらする君とは、時の尹にてましませば、いふもさら也、昔蝦夷が嶋の事にあづかり給ひし左近將監石川の君も、又此事を深く歎かせ給ひ、三たりの君たち心をひとつにして、民の爲にとて此井を作らしめ、其水をあまたの家々にひかせて、朝な夕なの助とし、あるは非常の備とし給ふ、かくてやつがれに

休明光記卷之七

其事を誌し、はた井の名をもちうがへよと仰事あるにまかせ、竊におもふ、井は養ふて窮らずとも、また民を勞り勸め相くとも見えし、古き文の深き心をくみとらせたまふ、みたりの君たちに擬へ奉らば、鼎の泉ともいはましやと、かしこみかしこみ申侍る、

羽太安藝守書記

文化四年三月

高坂龍介源元禎誌并書

○南部領牛瀧村船方の者共魯西亞國へ漂流し歸帆せし事

○文化三寅年七月三日、東蝦夷地エトロフ嶋の内シベトロといふ所へ見馴ざる小舟一艘着寄り、乗組たる者を見れば、いづれも惣髪にて、身には鳥の羽を綴りあはせたる衣を着し、都合六人也、何さま異國の人共覺しき風情なれば、詰合たる官吏共早束に捕へ、事の元を尋るに、彼等は異國の人にあらす、南部大膳大夫領分奥州北郡牛瀧村の船頭繼右衛門、水主専右衛門、吉五郎、福浦村彌内、勘右衛門、水主牛瀧村炊岩松といふものにて、去る亥年難風にあひ、翌子年魯西亞國へ漂流し、今般歸り來れるよしを申により、則官吏共より其始末のあらましを糺し、彼地の詰合調役菊地惣内より注進の書狀、八月十四日箱館の鎮臺に到り、その時正養在勤たるゆへ、翌十五日先其通を江戸表へ告まいらす、扱此漂流人共の事は、長崎などの例もあれば、事の始末は箱館にて吟味すべし、急で此地

へ出すべしと、惣内が方へ云贈りける程に、翌卯年四月廿四日、惣内則此六人のもとを連て箱館へ出る、冬中水海に成り、エトロフより通路成難きに、翌年及ぶ、夫より彼者共を呼出して紀問するに、箱館辨天町湊屋次兵衛、同所大町辰巳屋七郎兵衛と云者より、江戸鐵炮洲栖原屋久次郎、同四日市鎌倉屋庄兵衛といふもの方へ箱館在臼尻村の產物積送りの事を請負、牛瀧村百姓源右衛門といふもの、持船慶祥丸五百八十石積へ、此六人の外、牛瀧村水主平次郎、脇之澤村庄兵衛、長子村伊之助、河内村仙之丞、吉五郎、藤藏、福松、荷主よりの上乘源次郎、已上十四人乗組、臼尻村鹽鱈三萬本餘積入、其内三分一は御買上に成べき筈にて、其分は箱館役所よりの送狀を請取、享和三亥年十一月八日、臼尻村を出帆し、巽の風にてはせ行しに、其夜南部領尻谷村の沖にて大風雨になり、高波船の櫓を打越し、甚危く見えける程に、積荷物の内五六十石目刳捨て漸く凌ぎ、翌九日仙臺領とうに湊へ入津し、難船の改をうけ、船の繕ひ糶米買入などし、十三日に同所出帆、段々はせ行、廿九日總州九十九里濱沖合に到りたる時、夜中より風雨強く高波打入、翌晦日も同様にて、彌北風吹募り大時化に成、次

第に船も危きにより、追々積荷物も刳捨て、後には帆柱をも切捨て、乗組一同命限りに働くとも、助るべき舩にもあらざる故、いづれも髪を切拂、神佛を祈り、漸凌き居たりし内、十二月朔日には雨もやみ、其日の夕方には、風も少し和らぎ、十里計も隔て三宅嶋幽に見えける故、いまや彼嶋へ寄せんと思へども、帆柱は切捨て、せんすべなさに帆桁を柱の代りにたて、はせ出しぬれども、捗とらざる内、翌二日西北の風強く吹變り、又もや船中へ高波打込、三宅嶋の地方より遙の沖へ吹出され、波に漂ふ事三日にして、辰巳の風に變りし故、いかにもして地方へ船を寄せんとて、二日二夜程はせたりしに、又西北の風に變り、遠沖へ吹離され漂ひ居る内、牛瀧村水主平次郎は持病の積聚にて果たり、夫より翌子年正月まで引續き西北の風強く、彌遠沖へ吹出され、永々の大荒にて、船中一同疲勞し、今は命も保ちがたしと覺悟せしに、同月下旬より濤和らぎたるにより、何國なりとも地方へ船を寄せんとて、彼帆桁へ帆を懸はせ行しに、何方にやあるらんことの外暖なる海上に到りぬ、此時二月上旬也、脇の澤村水主庄兵衛も積氣にて此所にて果たり、此の海上

に漂ひ居る事三月上旬迄なり、其内東南の風に成り、西の方を心ざしはせたりしが、雨降出し風烈しく大時化に成り、高波度々櫓を打越し、遙に北の方へ吹流され、漂ひ居る事數日にて、四月上旬に成り寒氣堪がたき海上に到りぬ、何れの地にやと見廻せども、四方に山も見えず、薪水に事欠けども、求むべき所もあらず、されば櫓の上へ少しの穴をあけ、船中へ雨水を取りて用水とし、船へ敷たる竹簀又は船掉杯を薪とし、食をも炊しぎ、寒さをも凌ぎ、糧米も追々乏しく成ける故、只飢を養ふのみに粥などにして少しづ、用ひ、或は海草寄貝などを取て喰ひ、漸凌ぎ居たる内、永々寒暖不同の海上を漂ひ、殊に食物などよからぬ故にや、乗組の内病人多く、四月下旬より七月上旬^迄の内、長子村水主伊之助、荷主よりの上乘源次郎、河内村水主福松、仙之助、吉五郎、藤藏も果たり、病症皆同様に、骨痛み惣身眞黒に成たり、繼右衛門、勘右衛門も病氣故、専右衛門其外のもの共いろ／＼介抱し、日々漂ひ居れども、山も見えず、いかゞ成行事やらんと心も心ならずいたりしが、七月廿八九日頃、遙に山を見懸し故、すはやと一言に歡び、彼方へむけはせ

行しに、既に山近く成たるゆへ、碇をもつて舟を繋ぎ、皆々はしけ舟に乘移り、手近なる衣類并殘米一斗二三升、鍋釜などつみ入、ひとつの嶋に寄りて見れば、磯際に昆布おびたしく見ゆる故、定めて蝦夷地の内なるべしとて上陸し、人家を尋るに見えず、四日程の内此嶋に在りて、所々を尋れども一戸も見えず、人にも逢はず、此時は嶋の名も知らざりしが、後にきけば、サロシには、人家もあるよしなれば、サロシの嶋島ホロムシリと云島なるよし、西浦の方爰は東浦にて其事をしらず、其内南風強く吹出し、繋ぎたる慶祥丸碇綱きれて流れ失たり、繼右衛門、勘右衛門は病氣なるに食物さへ乏しければ、此時に在りても詮なしとて、又はしけ船へ一同に乗組さして、行べき心當りもあらざれども、風のまに／＼東北の方へ船をむけてはせたりしに、四五里も行て廣き地見えたる故、蝦夷地のうちなるべしと思ひ上陸し、所々を見めぐれども、人家見えず、此所後にきけば、チロシヤ國の嶋嶋シムチ、クヤウと云嶋なるよし、此時は八月中旬なり、食すべき物もあらざれば、海草などを取て喰ひ、流水をあつめ焚火などして、漸くに凌ぐといへども、繼右衛門、勘右衛門は病氣といひ、迎も飢寒を凌ぎ得べしとも思はれざれば、只故郷を慕ふの涙のみ催して、濱邊に打臥し居たる所に、遙向

ふの出崎の方に小舟一艘みえたり、あはや人こそ見ゆれとて、一同磯邊に立出て頻に招ぎければ、船よりも見附たるさまにて、こなたへ漕よせ上陸する者の舳を見れば、いづれも惣髪を三ッ打にし、革の服を着し、鐵炮一挺ヅ、持ち、男女合せて九人也、其内頭立たる者は、衣服などもよく見えたり、此者ども此時は何者にさげば、ナロシヤ國の屬嶋ホロムシリ嶋の夷に、とも知らざりしが、後に頭立たるものはナロシヤ本國の出家なるよし、扱此もの共何やらん云へども言語通せず、こなたよりは頻りに食を乞ふ眞似して見せければ、會得したりや魚の煮たるを與へけるゆへ、みなく一口ヅ、喰ひて飢を凌ぎ、此ものどもにあひたるうへは、命助かる事もあらんやと、少しは心頼みに思ひ居たるに、是より跡の方へもどれば、船を覆し死るよし、眼を眠り死せる眞似をし、此處より先々へゆけば助るよし色々仕形して教るゆへ、則彼者共に隨ひぬ、舟行する事廿日ばかり也、さるにても此邊ヲロシヤの屬地とは心もつかず、全く蝦夷の内にて、彼もの共も蝦夷人成べしと思ひ居たるゆへ、只々松前へ方むと^{其方}言事を度々いひしに、彼等も聞知りたるにや、松前は遙に遠きよし手眞似して見せたり、夫より段々ゆく程に、明日は赤人

の所へゆくべしといふゆへ、扱は赤人の國へ來れりやと、はじめて心附き大に驚き、赤人の方へ至りなば、容易に歸國も成がたからむと思ひしゆへ、元の嶋へ歸りたきよしを頻にいへども、是より歸りては食物もなければ、明年雪消へ草の延たる時節に歸るべしとて、うけひく色も見えざれば、ちから及ばず彼等に隨ひ行しに、あけの日は赤人の所へ參りたるよしいふ程こそあれ、沖合より異形の大船一艘出來り、大銃を打出しけるほどに、すはや打殺さるゝ事やと肝を冷せしに、左はなくて、此大船地方へ向てはせ行、彼異國人共の乗たる船も同く地方へ寄ゆへ、こなたの舟も夫に隨ひ漕寄しに、最上の船繋場にて、大船の入津なども見えたり、異國人共は先へ上陸し、こなたを向て招ぐゆへ、則岸に船つけしに、黒革の笠をかぶり毛髪赤く異國人の人、大勢磯邊に立並び、其中より一人聲かけ、只今船をつなぐ、此間脱文あるべし船頭は繼右衛門といふ者なりと答へければ、此間脱文あるべし先御身ばかり上陸し、水主たちは船を向ふへ廻されよといふにより、則繼右衛門上陸し、爰は何てふ所ぞやと尋しに、是は魯西亞國の内ガハンといへる湊なり、此邊へ

來るうへは、最早心を安堵すべしといふゆへ、さるにても今御身のさまを見れば、全く此國の人と見ゆるに、いかなればかくばかり和語に通じ給へるやと問へば、さればとよ、己は元仙臺の産にて、善六といふ船のりなりしが、先年此國へ漂流し、今は此地の人と成りて、名もヘツテハンと改め、通辭をして世を渡るなり、心安かれ同國の人、いか様にも世話すべしとて、頓て船を繋たる處へ連行、乗組のもの共も皆上陸させ、そこにある板藏やうの所へ一所に入置、暫く爰にて休息すべしとて、ヘツテハンは歸りしが、又間もなく來りて、當所詰の役人商人の宅に於て、繼右衛門へ逢んとの事なれば參べしといふ故、則ヘツテハンに打連れてゆきて見るに、其它の舳一方口にて、土間へ直に板を敷、廻りに腰かけあり、役人舳の者正面に腰かけ、繼右衛門にも腰懸させ、通詞ヘツテハンを以、漂流中食物の事などを尋ね、何れの浦へ漂着したるやと問ふゆへ、海草などを喰ひて漸に飢を凌ぎ、漂着したる所は爰より海上四五里も隔しと覺へたる嶋なりしが、所の名は知らずと答へければ、其後は尋る事もなく、砂糖の入たる茶を吞せて歸りけり、その明の日に

は、彼役人の宅へ乗組の者殘らず呼出し、いづれも心を安んじて緩々居るべしとて、酒など飲せて歸したり、此ガハン湊といふは、則カムサツカの内にて、ヲロシヤ人の家數二十戸ばかりあれども、本國より詰たる足輕舳の者の居所にて、此漂流人共の居べき所もあらざれば、所々へ引分て置べしとて、役人より宿割の事を促し、其内四五日は彼板藏に居たりしが、頓て宿割極りぬとて、繼右衛門岩松は、ヘツテハンが方に同居し、吉五郎彌内は、商家一軒に同居し、專右衛門勘右衛門と商家一軒に同居し、食物は商人ヒヤウトロといふものより、麥の粉を目にかけ草袋へ入て渡す、然るに吉五郎以下の者の住居至て手狭にて難義なる上、專右衛門勘右衛門が同居したるあるじの妻女、心さまよからぬ者にや、言語は分らざれ共、日々の取扱以外の外なりければ、永く同居せんも心うく思ひ、彼等が手限にて別家を補理ひ住居たきよしを、ヘツテハンへ談するに、兎もかくもと申により、山へ入て木を伐り來り、あやしげなる小屋をゑつらひ、繼右衛門岩松は、やはりヘツテハン方に同居し、外四人は此小屋に住居しが、雪中に取建たる家なれば、殊に不

東にて寒氣を凌ぎ兼たりしに、其頃アリヲツといふ
嶋ガハンより辰巳の方にある嶋也、通ふ魯西亞の商船、此湊に冬籠り
して居たりしが、其船頭之内アテリヤノハシリアチ
といふ者、此小屋の躰を見て、かゝる家にては寒氣凌
ぎ難かるべし、我船方の者どもの居小屋は廣ければ、
そこへ来るべしといふにより、則四人共彼小屋へ移
り、魯西亞人の水主共と同居したり、此地穀物は至て
乏しく、重に魚類を食とすれども、鹽漬或は乾肉など
にして貯ふる事もなければ、其度々魚をとりて喰ひ、
薪なども日用程づゝ伐出して遣ふ事也、四人のもの
彼水主と共に同居し、世話にもなる事なれば、諸事も
手傳ひ、或は雪風を犯して、山に入薪をこり、或は湊
の内の堅氷をくだきて魚を取る、千辛萬苦し艱難を
忍び居たりしが、其年十二月カムサツカの重役人の
よしハウイイハノエチといふ者此處へきたり、繼右
衛門をはじめ、六人共旅宿へ招ぎ、通辨ヘツテハン
をもつていふ様、汝等はからずも此所へ來り、萬事便な
らずして嘸難儀なるべし、先年日本より漂流したる
光太夫といふ人を送りて、本國松前へ至りし時、日本
の手當殊に厚かりし程に、今年も亦日本より漂流の

人を送りて、長崎へ使節を遣し、通商の望をも言をく
りたれば、此使歸りて彌通商願行はれば、追々日本と
は親しく成べし、明年は大船に乘せて送りかへすべ
しとて、酒など吞せ、此地より日本迄嶋續きの圖、又
は日本の地圖など壁に懸置たるを見せしゆへ、日本
へ嶋續き海路の様子を彼ハウイイハノエチがいふ所
を歡び、心強く越年し、長崎より使節の歸船を待居た
るに、翌丑年五月十日頃、長崎舟歸りし故、すはやと
云て歡び、頓にヘツテハンに逢て其便宜をさくに、長
崎にて通商の望を申遣し、が、其事叶はざるにより、
以來日本へ便船もなければ、歸國は叶ふまじきよし
をいふにより、一同に望を失ひ、いかゞせんと歎し
が、此上は力なし、日本迄の海路、嶋傳ひの様子はさ
きに繪圖にて見置たり、いざや我々が乘來れる小舟
をもつて、嶋傳ひに歸國せばやと一決し、ヘツテハン
をもつて其よしを役人へ申けるに、はるくの海上
を小舟にては渡りがたし、果して中途にして命を失
ふべし、其内には此國の詞にも通じ、なりはひの品も
あるべければ、まげて止り候へと頻りに申けれ共、よ
しや歸國は成難くて、中途にして命を失ふとも、日本

近き所の土と成らむは本懷是に過ぎれば、強て歸帆したきよしを押返し／＼申けるにぞ、左あらば心任せなるべしといふにより、則小舟に修理を加へ、食料の魚なども少々貯へ、日和を待ち、六月中旬頃に至り順風に見へける故、ヘツテハン方へ行、今日風順に付出帆すべし、是迄の厚意忘れ置ず、役人衆へも禮謝の程よく／＼頼み入などいひて歸りしが、程なくヘツテハン來り、長崎より持歸りたる米の内を役人より與ふるにより、商人ヒヤウトロ方より請取べしといふ故、彼もの、宅へ行しに、則米を秤にかけ、凡一斗五升ほど渡したり、且繼右衛門は出帆前に此ヒヤウトログ方にも暫く居て世話に成りし事も有、衣類なども貰ひける故、別段に暇乞に行て恩を謝し、彼貰ひたる衣服を返しければ、達て受よといへども、こなたより報ゆべき品もなければ、強て請がたしとて押さし戻し、夫より一同彼小舟に乘組、ヘツテハンは濱邊迄見送りて別をつけ、遂にガハン湊を出帆し、十四五日も舟行し、シムチ、ヤウ嶋遙に見えたれど、逆風にて乗寄せがたく、暫く日和を見合せる内、食料の魚も用ひ盡し、少しの米はあれども、先々渡海の程あひ

も計りがなければ、まづ米には手を懸ず、海岬サト或は貝類杯をとり喰ひて飢を凌ぎ居たる内、少し風筋直りしゆへ舟をすゝめ、シムチ、ヤウ嶋近く成たる頃、又もや向風強く吹出し、遠沖へ吹流され、小舟の事なれば防くべき手當もなく、あはや此所にて一同命を失ふよと覺悟せしに、夜に入沖の方より風吹來りけるゆへ、さらばいづれの地方へ成りと舟を寄んとて、風に任せてはせたりしが、其内夜も明て見れば、シムチチャウ嶋は見えず、何といふ所かはえらず、廿里ばかりも續きたる海岸へ差よりたり、則此所に滞船して日和を待しが、四五日過て順風なりし程に出帆し、シムチ、ヤウ嶋へ事なく着ぬ、されど食物もなく寄鯨の骨計有しを見出し、其骨の間に残りたる肉を堀出して喰ひ、僅に飢を凌ぎ、夫より彼嶋を乗離れ、一里餘にしてホロムシリ嶋へ着たり、此時七月上旬也、彼嶋の海岸三日ほど舟行するうち、向ふの出埼に人二人見えたり、あはやと云て力を得、其所へ船を寄て見れば、則此嶋の夷人にて、去年漂流せしときガハン湊迄送りてくれたるイハンチレといふ夷人なども此内に居れり、彌ちからを得て彼等が小屋へゆき、魚肉

など與へられて飢を凌ぎ、是より末海路の様子を尋るに、嶋傳ひに日本迄至んはさのみ難からねど、嶋々船着の所ことの外岩石多ければ、小舟にては覺束なし、是より遙へだて、ラシヨアといふ嶋あり、其所の人今ヲロシヤ本國へ往て居れり、其歸帆にはいつも此嶋へ立寄るなれば、彼者共の歸船に乗組、先ラシヨア迄至るべし、かしこよりエトロフ迄の海路は程も近ければ、その事はまた彼嶋にて謀るべしと、長夷ラシヨア人より教るにより、其意に任せ彼ラシヨア人を待たりしに、日數ゑばらく過ぎてラシヨア嶋長夷マキセンといふ者をはじめ、大船に數人乗組、ヲロシヤよりの歸りとて此嶋へ着けるゆへ、歸船の時同伴の事をラシヨアと俱に頼しに、心よくうけがひければ、小舟は此嶋に残し置、彼ラシヨア船に一同乗組、七月中旬ホロムシリ嶋を出帆し、海路凡十八九里にしてランネコタレ嶋へ渡り、夫より凡六七里にてハルマコタン嶋へ渡り、夫より凡十一二里にてシヤコタン嶋へ渡り、夫より凡六七里にてモシリ嶋へ渡り、夫より凡六七里にてハルマコタン嶋へ渡り、夫より凡五十六里にてラクアキ嶋へ渡り、夫より凡五六

里にてモトハ嶋へ渡り、夫より凡七八里にてラシヨア嶋へ着たり、此時は八月初旬なり、最早旬季も後れて、先々渡海も成がたきにつき、今年は此嶋に越年すべし、來春は我々がエトロフ迄送りて得さんと長夷マキセンがいふによりて、其意にゑたがひ、繼右衛門と吉五郎はマキセンが方に同居し、專右衛門はマツヘといふ者の方、彌内岩松は、ハテといふ者の方、勘右衛門はワシリといふ者の方に同居し、嶋中の者より厚き介抱を受けて凌ぎ居るうち、エトロフへは日本人勢渡海ありしなど彼嶋人の噂するをき、既に歸國もしたる心地に頼もしく歡び居たり、然るに先年ウルツブ嶋へ渡り居たるヲロシヤ人、今度歸國せしよしにて、男女合せて十三人小舟に乗組、ラシヨア嶋へ着、マキセンに應對し、彼が住居より一里程隔たる所の夷家二戸を旅宿とし越年したり、其牀犬の皮などを衣とし、ことの外窮したるさまに見えたり、折々マキセン方へも來り出會たる事もあれど、言語通せず、只ガハン湊の様子を尋たる事のみ少し分りたるゆへ、永々かしこに在りて世話に成りたるよしを答へたり、此ヲロシヤ人共先年商賣のためウルツ

プ嶋へ渡りて居たりしが、近年エトロフ、アツケシより蝦夷人共の來る事もなきゆへ、所得の道を失ひ、今度歸り來れるよしマキセンが申ける、此ウルツプ嶋へ來り居しといふは、則卷の三に記したるチロシヤ人なるべし、其事實に符合せり、夫より翌寅年春に至り出船の支度し、こなた六人の外に、マキセンをはじめ七人合せて十三人乗組、エトロフ嶋まで送るべきに議定したり、然るに歸路の時人數少く、かくては船の都合あしければ、エトロフの蝦夷人少々乗組せて歸りたり、此よし彼地に在る所の役人に申てくれよとマキセンがいふゆへ、其事は兎もかくもすべしといひて、則六月中旬ラシヨア嶋を出船し、海路凡二里計にしてウセシリ嶋へつき、鳥類夥しくあるを捕へて食料に貯へ、夫より凡七八里にてシムシリ嶋へ渡り、夫より凡十七八里にてマカシル、嶋へ着たりしに、夷人共多く見へたり、兼てラシヨア嶋越年中、彼嶋人のいふをきけば、シムシリ嶋よりラシヨアの持嶋、チリホイ嶋よりエトロフの持嶋なりといひしゆへ、扱は爰に居る夷人の内にはエトロフの者もあるべし、彼嶋の様子を聞ばやと思ひしに、左はあらで彼等は去年エトロフ嶋へ渡りしラシヨア嶋の者共なりとい

ふ、されば彼嶋に暫く居たるよしなれば、そのあらましは知りつらんと尋るに、エトロフへは日本人大勢渡り、役人方も越年して御處置ありといふにより、この外に力を得て歡びあいしが、いかなる故にや有けむ、ラシヨア嶋より送り來りし者どもマキセンをはじめ、是より先へは行がたきにより、新に船を作りて與ふべければ、其船に乗り歸るべしといふゆへ、是迄も同船したる事なれば、とてもエトロフ嶋迄送り得させよと、ひたすらに歎けども聞入ず、此嶋は流木すくなくて船を作るに便なければ、チリホイ嶋にて作り得さすべしとて、頓て彼嶋へわたり流木をひろひ集め、一艘の小舟を打立て與へ、是より先々海路の様子をねんごろにいひ教へ、鳥の皮をつゝりあはせたる衣、或は鷺の羽、鷺の爪、又はヲキナといふ魚の牙、其外の品食物などを手當して夫々に贈り、終に此處にて別れたり、此事何ゆへと思ふに、卷の六に記したるラ其取計方江戸何ひの間留置した、いかなるうきめにやあはんと心得ちがいたりしや逃去りしが、本文のもの共は則其ラシヨア人にて、今度此嶋へ來り其事を語りしゆへ、マキセンはじめ又ちや捕へられんかとうたがひて、エトロフまでゆく事をいなみしと見えたり、夫より六人の者共今はせんすべなければ、彼舟與へられし小舟に乗り出船し、海路凡十五六里にしてヤン

チ、リホイ嶋へ渡り、夫より凡四五里にてウルツプ嶋へ渡り、西浦通り舟行せしに、風順あしく、此嶋に暫し滯船する内、食物につまり、海草又は山へ入て草の根などを掘り喰ひ、やうく凌ぎ居たる内、六月下旬の頃順風になり、此嶋を出帆し、海路凡八九里にしてエトロフ嶋の内アトイヤの邊迄寄せたりしが、風順あしく暫く滯船し、七月二日に風筋直りて出船し、同嶋の内シベトロに着船せしに、勤番より役人來りて子細を尋るにより、箇様く申せしかば、玄からば上陸せよとありしゆへ、一同はじめて再生したる心地にて上陸したりと申ゆへ、ヲロシヤ國又は屬嶋に逗留中、其地のもの共に勧められ、邪宗門に入佛など拜せし事はなきやと再應強て推問するに、若彼國の宗門などに入なば、歸國は叶ふまじければ、たとへいかほど勧るもの有とも決してうけひくべからずと、六人一同に兼ていひ合せ置けるに、思ひの外彼國のならはしとて、他國より漂流の人歸國に念なく、彼地へ足をとくむるに決せざる内は、宗門を勧る者もかつてなく、此六人ははじめより歸國の願ひ甚かりし程に、誰一人すゝむる者もなかりしといふ、また

南部領より出帆せし時、武器類積入たる事はなきや、金銀錢等も所持も乏つらむ、異國逗留の内彼地の人と金銀取やり賣買などしたる事はなきやと尋しに、元來箱館町人より江戸町人へ產物積送りの舟なれば、武器など積入べきやうは素よりなく、運賃の内荷主より請取たる金子の内にて、最初難船の時糧米等買入たる残りなを少しは有りしが、ホロムシリ嶋へ漂着の時、金錢衣類等入置たる箱は元船に置上陸せしに其船流れ失たるゆへ、金錢の貯へ聊もなく、彼國在留の内金銀取遣り賣買等したる事會てなく、ガハ湊に居たる内飢寒を凌ぐばかりの衣食は貰ひ受たれども、衣類など餘り損せざる分は出帆の時差戻し、ラシヨア嶋にて貰ひ受たる品は箇様くといふより、其品を改めたるに、鳥の皮を綴り合せたる衣類、鷺の羽革にて作りたる履、又は小袋、ヲキナシヤチトドなどといふ魚の牙、アザラシの膽、鷺の爪、鷺の骨などの類にて、はかくしき品にもあらず、其外金銀の類會てなく、箱館役所并荷主よりの送狀も所持したる故、則荷主共をも糾問するに、相違なく聊あやしき舛も見えざるにより、長崎にて漂流人の取計の例に

に任せ、領主南部家へ引渡し、領内の外猥りに住居せざる様申渡す、卯年六月十六日江府へ伺ひまいらせしに、其通り計ふべき旨、七月廿四日伊豆守信明朝臣より下知し給ふよし、村垣左太夫定行定行は御勘定御用を取扱ふ事詳に未文のに見ゆ、の許より八月十三日箱館へ告越され、翌十四日彼漂流人六人及び南部氏の家士を召出し、正養より申渡し、一件落着す、此一件は、漂流人共の御書を以記至て煩雜なるゆへ、數事は皆省て、爰には一二の大意を擧るのみ、

○松前西蝦夷地上地の事

附支配向御増人并地役雇の者同心名目に成し事

○文化四卯年三月廿二日、執政伊豆守信明朝臣より、左の通り書附を以て安論へ達し給ふ、

箱館奉行江

松前若狹守

右松前西蝦夷地一圓被_レ召上、新規九千石被_レ下候間可_レ被_レ得_ニ其意_一候、

若狹守には、左のごとく御達しありけるよし、奥御右筆組頭近藤吉左衛門より其寫しを安論へ見する、

松前若狹守

蝦夷地之儀は、古來より其方家にて進退いたし來候得共、異國へ接し候嶋々萬端之手當難_レ整様子に付、先達而東蝦夷地上地被_ニ仰出_一、從_ニ公儀_一御處置被_ニ仰附_一候、西蝦夷地之儀も、非常之備等其方手限難_ニ行届_一段申立、外國々境不_ニ容易_一事に被_ニ思召_一候間、此度松前西蝦夷地一圓被_ニ召上_一候、依_レ之其方へは、新規九千石被_レ下候、場所之儀は追而可_ニ相達_一候、

此新地場所の事は、追て御書出し渡り、奥州伊達郡、上州甘樂郡群馬、常州信太郡、河内郡、鹿嶋郡に而、都合込高とも一萬八千石餘の地所を下されたりと聞えぬ、

一同年三月廿六日、松前先主美作守へ、左の如く被_レ仰_ニ渡之_一よし聞えぬ、

松前美作守

其方儀家督中、蝦夷地取治不_ニ行届_一異國人手當も等閑に心得、其上隱居いたし候而も言行不_レ慎之様子相聞、不_レ埒に思召候、依_レ之永蟄居被_ニ仰附_一もの也、

一今度西蝦夷地上地被_ニ仰出_一し事は、三四年已前より品々御之らべあり、安論正養もさま_ニ御尋問あ

りて、議書を捧げたる事も數通なりし、又去ル丑年には、御目附遠山金四郎景晋、御勘定吟味役村垣左太夫定行を西蝦夷地御用として遣はされ、景晋は其年の冬松前に下向し、定行は病氣によつて旅中より引返し、翌寅年の春松前にいたり、夫より兩士とも西蝦夷地クウヤシヤリの邊迄見廻り、歸路には東蝦夷地よりユウブツ通りより箱館へ出、正養に面會し、其年の秋府に歸らる、定めて兩士の見込建議の趣など仔細に申述べられたるならむ、是かれをもつて御調もとくと整ひ、こたび仰出されたる事なるべし、扱しもたやすからぬ御大政事にてあれば、今より後御處置の立かた、厚く議論を盡して取交らべ伺ひまいらす書もの數通に及べり、至て多端なる事ゆへに爰に載せず、詳に附録に見えたり、

一 四月十日備前守忠精朝臣より、左の通り書附をもつて、安論へ達し給ふ、

戸川筑前守

羽太安藝守

松前西蝦夷地上地被_二仰附_一候に付、地所請取相濟候はい、向後何れも支配可_レ被_レ致候、

又今度の上地につきては、右の町方の方漁獵請負等仕來りの輩、都て生業筋是迄とかはる事はあらざるゆへ、一同に安堵し、各精出すべき趣を箱館奉行より促すべしと、同朝臣より書附を以て達し給ひ、在勤先正養方へいひ越し、同人より松前在町及び西蝦夷地場所々へ觸流す、

一 松前地所引渡しの際、勤番は南部大膳大夫津輕越中守より差出すべきよし達し給ひぬれば、場所等の事は、宜しく沙汰すべきよし、忠精朝臣より安論へ達し給ふ、

一 今度の上地につきては、支配向在住等も、是迄の人数にては、間に合がたきにより、御増人の事を取しらべて申上置しが、三月廿九日、先左の面々出役被_二仰附_一旨、忠精朝臣より書附を以、安論へ達し給ふ、

御勘定

湯淺孫藏

支配勘定

田邊安藏

箱館奉行手附
出役

御船手

仙石次兵衛組水主同心

永倉勘右衛門

又四月十三日、左之通り被_二仰附_一旨、躑躅の間におゐて、忠精朝臣達し給ふ、

御勘定

木原半兵衛

箱館奉行支配調役並

箱館奉行支配

富山元十郎

調役江

同

宮本源次郎

支配勘定

三浦喜十郎

御普請役元格

小俣次郎八

同調役並江

箱館奉行支配調役下役

高橋次太夫

御賄方

太田彦助

箱館奉行支配吟味役格

箱館奉行支配調役

被_二仰附_一、元來御宛行之

大嶋榮次郎

外、御役金五拾兩、在勤

同

年御手當金六拾兩被_レ下之、

菊地惣内

是は今度新規被_二仰附_一

同調役並

寺田忠右衛門

同調役江

同

山田鯉兵衛

右は當時在勤に付、御書附にて渡る、正養方へ差越し、五月二日箱館におゐて同人より申渡す、

小普請組

同調役並被_二仰附_一金

八木十三郎支配

五郎は引下勤、哲藏

増田金五郎

は元來地方之内百石

御書院番頭

被_レ下、勤之内並之通

高木伊勢守與力

御足高被_レ下之、

岩間哲藏

右兩人は在住にて箱館蝦夷地に罷在、頭々より申渡す、

同調役元格被_二仰附_一

箱館奉行支配調役下役

八十俵三人扶持御役

戸田又太夫

金十兩在勤年御手當

中村小市郎

金三十兩雜用金五十

五兩被_レ下、役順儀は

關岡右衛門

御普請役元格之上座、

村上次郎右衛門

是は此度新規被_二仰附_一

右御書附を以被_二仰渡_一、江戸并箱館にて申渡す、

明屋敷伊賀者

早川八郎

御持頭
深澤主水組同心

玉井犀助

西丸御持頭
松平信濃守組同心

向井勘助

火消役
神保左近組同心

兒玉嘉内

御先手
多賀三右衛門組同心

鈴木覺次

同下役江

御先手
多賀三右衛門組同心

近藤斧八

西丸御先手
渡邊久藏組同心

荻野藤太郎

林奉行手代

杉山良左衛門

御舟手
仙石次兵衛組水主同心

中村金右衛門

新規御抱

右は頭々江御書附を以被ニ仰渡、

河西祐助

八王子千人頭
山下橋次郎組同心
(同心見習) 4

御先手

高木又兵衛組與力

高橋藤藏

篠田次郎四郎組御徒

丹田專助

山本伊勢守組御徒

大西恒右衛門

調役江

御先手

木原兵三郎組同心

武見辨之助

同
荒尾但馬守組同心

遠藤伴右衛門

西丸御先手
渡邊久藏組同心

森田祐次

蝦夷地在住

御鐵炮玉藥奉行組同心

齋藤要八郎

御具足奉行組同心

金井泉藏

濱御殿番世話役

和田貞吉

御船手

丸毛甚三郎組水主同心

田村兵右衛門

評定所同心

河久保和三郎

御代官

竹垣三右衛門手附

水谷茂十郎

小普請組

逸見左近組

丹羽鑑次郎

同

藤田權佐組

石井善藏

同

小濱長五郎組

平川半次郎

右者頭々江御書附を以被_二仰渡、
又四月廿一日左之通被_二仰附、

小普請組

岩本石見守組世話取扱

蝦夷地在住

牛袋左兵衛

御勘定

箱館奉行手附

荒井平兵衛

出役

西丸
村上主殿組御徒

竹内五郎助

右頭々江御書附を以被_二仰渡、

一八王子千人頭原半左衛門、蝦夷地出役の時、同所組
同心共の子弟厄介等を召連、御手當金六兩、三人
扶持にて勤たりしが、半左衛門支配役被_二仰附候
砌、その御手當を高に直し、同心と唱へ申度旨、去
ル亥年に伺ひ申せしに、いまだ奉行所の處置も定
らざれば、今暫く見合追て伺ふべしとの御事なる
により、箱館地役雇のものと唱へ、身分の進退奉
行の手に取扱置たりしが、今度東西一圓の御料
成り支配向も御増人有程なれば、彼等が類の者松

前にも御抱入ありたきにより、以來は御宛行二十俵二人扶持被下、同心と唱へ抱入申たく、尤御宛行の出方は是迄の通り、當所御用金の内にて取賄申べしと、四月廿一日忠精朝臣へ伺ひ申せしに、伺ひの通りたるべきよし、五月朔日下知し給ふ、此時より同心と唱へ、自分の進退は是迄の通り奉行手かぎりの取扱なり、

一 今度の上地につきては、西蝦夷地へ赴く官吏共、御手當の事をあらぶるに、東地とも違ひ、いまだ居合ざる事なれば、萬事不都合も有べし、奥地などに至りては、諸品も定めて高價なるべければ、今失費の見つより玄がたきより、元懸りの時去ル^{升カ}牛年西蝦夷地へ赴きたるもの共御手當の例もあれば、其通り下されむには論もあらずといへども、其時は臨時の御用なれば、其御手當も亦潤澤也、今度の事は其例にも従ひがたし、去ル亥年官吏共新に命せられ、初て在勤せし時手始の事にて、失費の程も計りがなければ、別に御用金貳千兩持越し、定りたる御手當にて若不足の事もあらば、奉行および官吏の費用をも補ひ、追て申上べしとの御事なりしが、奉行には不足もなし、官吏共の費用少しづ、足らざ

りし故、夫々に割渡し、夫を已後の目當とし、場所場所へ赴く者其遠近に隨て別御手當の基本と成たれば、此度も其例に見合、不足の分糺しの上、夫々に渡し申べきやと四月十八日忠精朝臣へ伺ひ申せしに、伺ひの通り心得、東地の振合を見合せ御手當嵩ざる様取計ふべしと、同廿七日に下知し給ふ、是西地別御手當の基本也、

一 松前若狹守へ新知九千石下されしうへは、松前及び西蝦夷地收納の分は、今年より御藏納に成べき事勿論なれば、若狹守手捌きの場所はいふに及ばず、家士共の給地迄今年の分悉く先納に成り、今更上納の手だてなく甚當惑のよし聞ゆるにより、別紙を以て今年の收納は若狹守へ残らず下され、新地九千石の物成は來年より被下然るべしと伺ひ申せしに、其通りたるべきとの御事にて、則七月廿四日若狹守へ其旨書附を以忠精朝臣より達し給ひ、此方の伺書にも承附して返呈す、

一 松前上地と成て彼家の君臣退散の後は、領主の菩提所は更也、家士などの頼みたる寺も俄に檀家に離れ、神社とても同様の事につき、少しの御手當も

あらまほしく、其頃若年寄堀田攝津守正敦朝臣、夷國船一舉につき松前へ下向し給ひし故、是はエトロフ來せし一件也、事は詳に末に見ゆ、此事を申せしに、夫程の事は江戸へ伺ひ申にも及ばじ、奉行の見切をもつて程よくはからひ、追て執政方へ申て然るべしとのたまふにより、則領主の菩提所法幢寺へ一箇年米五十俵、その外の寺院十六箇寺へ百五十俵、神社七箇所へ五十俵手當として遣し、同年十一月其趣を伊豆守信明朝臣へ申す、

一今度の上地につき、箱館奉行交替中は、御勘定吟味役村垣左太夫定行、長崎懸りの振合に准じ、當御用取扱ふべき旨命せられしにより、彼支配向の内、吟味方改役柑本兵五郎、同出役伊藤九左衛門、下役兩人懸りとして御用取扱ひしが、平年の交替中とも違ひ、異國船の渡來もありて、攝津守正敦朝臣箱館松前へ下向し給ひ、下役の内一人は彼地へ赴き、品々の御用差つどひ、殊更いづれも火急の取扱のみにて、晝夜の勤勞いふ計もなければ、長崎懸りなどの振合に准じ、相應の御手當あらん事をねがひまいらするよし、定行より忠精朝臣へ申けるにより、定

行へも下さるべし、長崎の例に任せ、箱館會所金の内より渡し方ありて差支なきや、員數等の事も丁簡して申上べしとて、十月八日正養へ下給ふにより、十月六日正養歸府によつて也、則取調箱館會所金の内より渡し方の事差支候はず、員數の事は長崎の例に見合、箇様箇様にて然るべしと申せしかば、頓て定行へ金五十兩、吟味方改役同出役へ十五兩ヅ、下役へ九兩ヅ、下さるべしとの御下知にて、正養よりも承附してまひらせ、則會所金の内よりぞ渡しける、

一松前居所及び村請取として、御勘定組頭男谷平藏、御勘定守屋權之丞遣はされ、九月中旬松前に至る、同月廿七日請取渡しに議定し、支配向よりは吟味役高橋三平、調役木原半兵衛、同並高橋次太夫、下役元々村上次郎右衛門、下役早川八郎、杉山良左衛門、立合居所立關前の固は、南部家の人數にて、物頭一人、上下目附一人、上下小奉行一人、上下緋役一人、上下八人、上下鐵炮三十挺、弓十五張、長柄十五筋、足輕合七十六人、裏門内の固は、津輕家の人數にて、物頭二人、上下下役二人、上下鐵炮二十挺、弓十張、長柄十筋、足輕合三十五人也、松前

家士にて家老下國豊前、用人町奉行兼工藤清右衛門、用人近藤惣左衛門、勘定奉行松浦喜久右衛門、目附岡口忠藏、牧村忠右衛門罷出、居所在町とも引渡すみ、帳面其外諸書物品々請取、則翌廿八日安論より呈書を添て御届書、江戸表へ差上、十月十八日大炊頭利厚朝臣へ、村垣定行より進呈す、

西蝦夷地上地之一件、是にて落着といふにはあらざれども、正養が勤役中取扱たるも此所までにて、是より末を知らず、素より今は東西一圓の御料となりたれば、地所引渡し済たる後は、西地の事として廉を分て記すにも及ばじ、定めて東西附込にも成べきなれば、此松前請取渡しを見切にして、上地一件の段をきりても可ならん歟、仍て此所におゐて筆をといひ、

○カラフト嶋へ異國船渡來の事

○西蝦夷地カラフト嶋は、松前若狹守領地の屬嶋なりといへども、往古は彼嶋へわたるものもなく、同嶋の蝦夷人僅山丹人と交易したる品をソウヤへ持來り、松前の人と交易したり、錦虫の單な、どの類也、漸く寶曆年間より松前家にて彼嶋へ手をかけ、寛政の始に至り運上屋

舩の家居も補理ひ、輕き家來も少し渡し、漁業其外處置するといへども、只首夏より初秋迄の事にて、仲秋にも至れば、家來は引取、番人舩の町人三四人づ、爰かしこの運上屋に越年する迄也、然るに文化三寅年九月十一日、此時は西蝦夷地上地となり、いづくの船とも知れざる異國の大船一艘、彼嶋の東浦ラツイトマリヤといふ所へ懸りたり、此時は例のごとく松前氏の家來は引取たる跡なり、此所に蝦夷家一戸ありて、チウラツシクルといふ夷人住居たりしが、其所へ異國人も二十人計、革づゝみの橋舟にて上り内へ入り、何事にかあらん心易げに申せども、言語分らず、兎角する内チウラツシクルが子の十七八歳なるをとらへ、船へ連ゆかんとするゆへ、雙親驚きやらじと爭へば、鐵炮を打懸て威し、遂に彼子を無舩に連行舟に乗せ、其家へは眞鍮の如き板のかねに横文字様の物ゑり附たるをかけ置出帆し、夫よりクシエンタンといふ所の海岸より一里半程へだてゝかゝり、其日は上陸の舩もなく、翌朝はしけ舟三艘、革船一艘、以上四艘へ異國人凡三十人程乗組上陸し、同所の運上屋へ來り、其内より鎗の附たる鐵炮を持し者戸口窓等の邊を固

メ、一箇所に四人程ツ、彼鐵炮を打達に持て扣へたり、其餘は皆運上屋へ入り、一同に腰をかけたばこそ吞居たる故、番人共より飯を出せしに、少し喰ひて跡はまきちらし、首領とも覺しきもの、懷より書附やうの物を出し、何やらん申せども、只日本商ひといふ詞のみ僅に聞へて、其餘の言語はすべて分らず、羅紗のきれを出し商ひくといふ故、商ひは制禁にて成がたきよし手眞似して知らせければ、首領大聲を發し、外に居たるもの残らず内へ込入たり、其時居あはせたる蝦夷人皆逃出しけれども、追捕へんともせず、番人共も逃出んとせしを、四人とも残らず搦とりて、元船へ連行き、繩を解き砂糖の入たる茶を吞す、艫と胴の間とのあいだの穴へ入、蓋をして置たり、此番人は、富五郎、酉藏、源七、福松といふもの也、夫より異國人ども運上屋及び板藏等へ亂入し、米五六百俵餘、酒數樽、たば粉木綿膳碗の類、其外仕入物の諸品残りなく奪ひ取、運上屋板藏へ合せて十一箇所、外に辨天の社一箇所、神體は奪とりたり網圖合船等まで悉く焼拂ひて、元船へ立戻りぬ、きのふ捕へ置しヲフイトマリの夷人チウラブシクルが子は此時免し歸したり、同十七日迄

滯船し、十八日に出帆したり、舟長さ凡十五六間、幅四間程、深さ一丈餘、兩側に大筒二十四五挺仕かけあり、玉は鐵の樣に見へ、玉藥は木綿又は革の袋に入たり、食料は麥豆小豆蕎麥などの粉を餅の如く製し、牛の油を懸て喰ひ、番人共にも是を與ふ、乗組人數は六十人餘、内に女も二人ありて、一人は子持なり、異國人どもは丈ヶ高く色白く、髭のあるもあり、なきもあり、髪は赤みありて亂髪也、首領と覺しきもの三人程ありて、赤色の長き帽子の如きものをかぶり、白き筒袖の衣類に胸の邊に銀の牡丹懸したるを着し、其餘のものも衣類は同じ仕立にて、色は思ひくくなるを着し、一同に股引し、黒き沓をはき、銘々に鐵炮を持たり、首領の内一人は劔を帶し、二人は脇差をさし、其餘帶劔のものは見えす、此船中の様子、異國人の衣類、其外人チウラブシクルが子のいふ所と、後にカラフト番人共の歸ていふ所とを參考して記す、彼等が取落したるにや、玉目四五匁計の鐵炮一挺、衣類之内二ツ白木綿、一ツは黒にて地合知れず、いづれも筒袖也、又眞鍮の如き板金に横文字やうのものゑり附たる札一枚、前の蝦夷屋へかけ置たる札とも二枚なり、紙に書たる物二枚拾置たり、此船

十一月下旬までカラフト沖に懸り居たりとの説もあり、又此船にやありけん、別船にや有けん、翌卯年三月カラフト西浦シャウニといふ所をばせ通りしなどいふ説々ありて、松前家よりの届書にも見えたりども、此船は彼四人の番人を乗せ、寅年九月十八日カラフトを出帆し、其冬チロシヤ國カムサツカに越年し、翌卯年エトロフへ來りたる事、彼番人ども後に此船より戻され來て、巨細に申立たり、其事は詳にエトロフ一件に記す、既にカラフト嶋にかくの如き異變有といへども、番人四人とも残らず捕はれとなり、剩船をも焼捨られたれば、松前家へ注進すべき方便もなく、其儘に成り居たるに、翌卯年三月に至り松前家よりカラフト嶋支配人徒士格柴用角兵衛といふもの、ソウヤより出帆し、カラフト嶋へ至り、初て此事を聞き、大に驚き即時に飛脚を立て注進したるが、其飛脚四月六日に松前へ着たるよし、翌七日出同家よりの届書、同十日箱館の鎮臺へ來り、此届書はこの外簡易な後追々糺しの其時正養在勤につき、翌十一日其趣を江府うへ記す、此頃既に松前家の領分松前西蝦夷地とも被_レ召上て、いまだ引渡以前なるといへども、公料に成たる上は、扱止むべきにあらず、此一事は過去たる事なれば、今異國人の仕業を考るに、蝦夷人には敢て亂妨せず、和人のみを苦しめたる始末、何さま心ありげなる所行なれば、又もやいづかたへ渡來せんも知るべからず、先西蝦夷地にて肝要とする所は、カラ

フトの渡り口ソウヤなれば、今箱館近邊に在る所の津輕家の人數をもつて、此所を守らせんとおもへども、先在合たる分八十人に調役並深山宇平太、下役小川喜太郎、其外地役のもの五六輩を添へてソウヤへ遣しぬ、扱西地の要害場は爰のみにあらず、備を設くべき所數多あれば、然るべき勤番の諸侯早々命せられ候様にと江府へも申つれど、猶その至り着む迄も明置がたし、然るに南部家にては、素より國元に千八百の逞兵を備え置、若事あらば承らむと兼て聞えし程に、さらばその内一身分の人數二百五十人を定式の南部津輕の兩家にて、五百人なるゆへ、當分出し、新規勤番諸侯の人數いづる迄の警衛すべきよしを達し、此旨具に江府へ申、此南部家の人數其後追々着到す、然るに其内又エトロフに事ありて、此人數東西へ配る、江府にてもさまざま朝議ありて、カラフト嶋は懸り隔たる離嶋にて、容易く事整ふべきにもあらざれば、先今年は手を出さず、ソウヤにて見切、彼所を初として地方の警衛専らにすべきよし、執政方より促し給ふにより、則其意を得て事を謀りぬ、此カラフト嶋御處置の品々の申上、又執政方より御書取も、前にいふ所の異國人共のあまたあり、詳に附録に見へたり、事につきては安論よりカラフトに残し置たる眞鍮札の如きもの二札、紙に

記したる書もの二枚、及び鐵炮衣類等は、深山宇平太
ソウヤ迄取よせ、箱館へ越したるゆへ、悉く江府へ捧
ぐ、扱も此年四月下旬、魯西亞船エトロフ嶋へ渡來し
て事ありければ、則此船にてカラフトにて捕へられ
たる番人共富五郎をはじめ此船中に居たり、エトロフ一件
は詳に末に記す、其船エトロフへ來り、ラフヲウエトマリウタカ等
又も番屋を焼拂ひ、クイシリ嶋にて船々を襲ひし事
あり、それ等は悉くエトロフ一件の内に記す、

休明光記卷之八

○エトロフ嶋へ異國船渡來一件之上。

○文化四年卯四月廿三日、東蝦夷地エトロフ嶋シャ
ナ會所より三十里程南の方ナイボといふ所へ、異國
の大神二艘はせ寄、大筒を放ち、海岸より凡三里ほど
へだて、船を繋ぎ留たるにより、先取あへずかしこ
に詰たる番人の内、シャナ會所へ注進として來りし
に、其途中海岸にも魯西亞人六人見懸たれば、彼船は
多分ヲロシヤ船にてあるべきよしを申につき、會所
詰合の官吏共評定し、此年エトロフ懸りば、吟味役格菊地惣内、
下役元戸田又太夫、下役關谷茂八郎、
兒玉嘉内、其外同心共在住御家人並南部津輕新番士足輕等詰合たり、
惣内は品々御用ありて立歸りに箱館へ出此時エトロフには詰合す、
關谷茂八郎、同心并勤番の足輕共をつれてナイボへ
赴しが、其途中にて追々聞ば、元船は沖合につなぎ
置、異國人共小舟にて上陸し、居合せたる番人共をか
らめ取、大船へ連行き、魚獵小屋其外焼拂ひ立去りた
るとの風聞の由、猶委細の事は追々注進すべき旨、戸
田又太夫よりの書狀、五月十四日の夜箱館の鎮臺に
來る、此時正養在勤に付、翌十五日其趣を江戸表へ注

進し、さきにカラフト騷動により、勤番の諸侯一手命せられ候様にと申つるが、今又かゝる事も候へば、猶一手をまし、以上二手早々命せられ候様にと申上る、又箱館町人和賀屋宇兵衛といふ者の手船、鯨魚積取として箱館より十二三里隔矢尻濱といふ所に沖懸りしつる内、今月六日ごろ沖合三四里程へだて、帆二ツ懸りしやと見へたる船一艘見掛たれども、雲霧深くしてさだかならず、其内行衛を見失ひたる由、もし異國船にも有べきや、又は常舨の船二艘つらなりゆきたるを遠目に見あやまりたりやはしらざるよし、彼手船風順あしく暫く滞船し、昨夜歸帆して申出たる旨、十五日の朝宇兵衛より申により、取留ざる事にはあれど、此事も江府へ申上ぬ、

一五月十八日エトロフ嶋關谷茂八郎よりの書狀箱館に至り、四月廿九日異國人どもシヤナの會所へ押懸、鐵炮を打懸放火し、戸田又太夫は自殺、其外の者は會所を立退たるとのみにて、ことの外狼狽したるや、事の始末一圓分らざるにより、彼嶋より追追歸り來る船方其外の者に尋れば、異國人共多勢にてエトロフ亂妨より引續き、クナシリ、チモロ、

アツケシの地をも襲ふべき勢に聞えたりといふ、扱はエトロフの事は今は悔とも力なし、此上地方へ立入せては安からぬ事なれば、此警衛こそ肝要なれ、先箱館に詰合たる南部津輕の人數の手を分け、早々彼地へ遣はすべし、又箱館の警衛も欠がたし、惣人數何程の内、何程ヅゝはそこへ遣はし、何程は箱館に残すべし、武器玉藥兵糧も差支ざる様夫々に配分すべし、扱右之人數を以所々の警衛は迎も事足るべからざれば、南部津輕の家來を呼出し、早々増人數差出すべき旨を促し、又彼賊船此上何程援兵あらんも計りがたし、兩家の人數にて足らざる時は、近國の諸侯へ加勢の事申達すべき旨、兼々申上置もありといへども、其期に至りて達する時は、遠路の事間に合ざるにより、羽州秋田佐竹右京大夫、同國庄内酒井左衛門尉へ臨時人數催促の書簡を認、早馬を以て達す、其文如左、

東蝦夷地之内エトロフ嶋へ異國の大船二艘渡來及騷亂、クナシリ嶋へも附寄可レ申趣相聞候に付、南部大膳大夫、津輕越中守彼地勤番候條、今度増人數之儀申達候、然ル處右異國人共追々援

兵を以、此方之地方へ押分可_レ申程も難_レ計、左候得は兩家人數にて引足不_レ申候間、鐵炮組足輕大筒小筒玉藥等支度夫々用意船に而早々箱館へ向ケ可_レ被_ニ差立_ニ候、右人數一度に揃兼候は、追々にも被_ニ差立_ニ候様存候、自然異變之節、兩家勤番人數にて不足之儀有_レ之候は、向寄御領分の方へ可_ニ申達_ニ旨兼而申上候儀に有_レ之、且寛政三亥年御書附之趣も有_レ之候間、此段申達候、以上、

五月十八日

羽太安藝守印

佐竹右京大夫殿

役人中

猶以酒井左衛門尉役人中へも前書之趣申達候間、爲_ニ心得_ニ此段申達候、以上、

以_ニ別紙_ニ申達候其人數之儀御分限高も有_レ之儀に者候得共、火急之變事大切之時節故、其心得を以人數被_ニ繰出_ニ候様存候、扱又蝦夷地之儀は、海防第一之地に而、異國人共上陸いたし候而も、海岸遠く相備、重に火炮を以爭戰いたし候儀に付、弓鎗等より鐵炮人數多き方相當

之地理に候間、右之心得を以用意被_レ致候様存候、已上、

酒井家へ遣したるも同し文章につき記さず、追て兩家共承知の返書來る、略_レ之、

右の如く其の日の内に悉く手配はなしたれ共、扱江府へ御届の事、茂八郎が書狀のみにては一向分らざるにより、彼地より歸りたる船方其外の者どもに事の始末を問ひ、かれらがいふ所をもつて、菊地惣内山田鯉兵衛の兩人御届書を取えらべ出せしゆへ、一覽する所、四月廿三日ナイボに來りしヲロシヤ人は、詰合たる番人二人稼方の者三人を捕へ、番屋及び藏々まで焼拂たる事は、先達て風説の通り違ひなく、其節の様子彼ヲロシヤ人共小舟にて上陸せし故、薪水等の用辨にもあるべきやと思ひ、去ル寅年出たる御書附の趣もあれば、穩に取扱ひ置しに、理不盡に右の始末に及び、彼五人の外も和人風俗に成たる蝦夷人も六七人捕へ船へ連行しが、元夷人のよしを申ければ、とくと改めたるうへ、彼等は残らず歸し、五人の和人のみ留置、夫より彼大船シヤナ會所の方へ赴く様子により、官吏

をはじめ在住御家人其外一同彼會所に集り、嶋中手當届たる場所の分は番人夷人どもシヤナへ引取、且シベトロといふ所は、ウルツフの渡り口なるにつき、津輕家勤番のものに在住御家人を添て詰させ、所々手配してまつ所に、廿九日晝過ヲロシヤの大船二艘はせ來り、會所の前なる濱へ寄せ、大勢上陸し、鐵炮を打懸たるにより、此方よりも打懸しばらく爭戰するうち、支配人陽介といふもの内股を拔れ引退きたり、一舩彼大船へ人數百人乗組、大銃夥數つみいれ來りしに、此方には兩家の勤番をはじめ、惣人數二百三十人程詰合たれども、其内より彼シベトロへも人數を分たれば、全くシヤナには詰合ず、彼方の人數船には何程あるや知れざれども、追々に上陸したる分凡七百人程もあるべし、此方は少人數をもつての取合なれば、必死になりて爭戰し、異國人の内六七人は鐵炮にて打殺し、其外手負たるもある舩に見へたり、夫より夜に入大銃四五手より打かけ、其内異國人共會所裏手の方へ廻り燒立けるゆへ、今は防戰かなひがたく會所を退、クナシリ嶋の方ルヘツといふ所へ一同

に引取る時、戸田又太夫は跡より引しが、異國人共に追かけられ、若し虜と成らば、外國へ對し本邦の耻辱にもならん事口惜しとて自殺したるとの趣也、其次第大舩は事も分りぬるにより、則其儘清書させて江府へ申上たり、又別紙を添て彼南部津輕増人數の事佐竹酒井へ臨時人數申達せし事に具に聞え上まいらず、此御届は翌十九日に成たり、十九日には箱館沖合^カ弁^カ禾^カの方に當り、凡一萬石積程にて帆を十一字懸たる異國の大船一艘見えしが、次第に近寄、地方より一里半程隔て船を止め、帆桁の上へ五六人のぼり、各遠眼鏡をもつて箱館の様子を伺ふ舩あざやかに見へたるゆへ、早速南部津輕兩家の人數并支配向在住同心等夫々に手當し、彼船つき寄り狼藉に及ば、打崩さんと手配して待し所に、夕方迄汐首崎といふ所に沖懸りし、夫よりエサシ崎の方へ船をむけ、何地ともなくはせ行ぬ、此日南部領大澗沖にも此類の船見え、きのふは津輕領權現崎の方にも見えたるよし追々注進ある、津輕沖に見えたるは此船なるべし、大澗沖に見えたるは同日にて、所も遙に隔たれば、もし別船

にもありしや計りがたし、則翌廿日には件の趣江府へ注進す、忝此船何方の沖に懸り居て、地方へ着寄らむも計りがたし、又此船にも限らず、かゝる時節なれば、猶類船の來らむも計られざるにより、兩家の人數晝夜とも陣を設け、夜は簫を焚て警衛す、

一今度異國人共亂妨の仕方、和人は捕へ其小屋等は焼拂、夷人夷小屋杯へは手も附ざる心底、全く夷人をなづけむとする手段にもあるべきや、東蝦夷地は既に厚く御撫育もあれば、夷人の心もたやすくは傾くまじけれども、西蝦夷は是まで御國恩も蒙らず、そのうへ松前家こたび舊領に離れたる事も、何となく本意なき様子に思ひ居る夷人杯もあるまじきにあらず、左あらん所へ異國人共來り、若彼方へなづけなば、傾くまじきともいひがたし、されば今引渡し以前なりといへども、今度上地も被_レ仰出_二たるにより、すえ永く御撫育ある趣をよくいひ諭し、酒たばこやうの物夫々に與へ、厚く伏從を謀るべしと、其場所懸りの官吏共へ促す、

一エトロフ亂妨したる異國船は、五月三日同所を出

帆し、何地へ行けんまばしは見えざりしが、同月十四日西蝦夷地ルシャの沖合に二艘とも見え、廿一日にはカラフト嶋へ至り、去秋焼拂たる番小屋跡などを見廻り、ルウタカといふ所の番屋をまた焼拂たるよし、松前氏の家士共同所シラヌシといふ所に居たれども、是は去秋カラフトの一擧により、家屋をはじめ百六十人程先達て彼嶋へ渡りたり、異國人大勢にて防ぎがたしとて、人數残らずソウヤへ引取たる由、エトロフ詰ソウヤ詰の官吏方より告來る、六月十日江府へ注進す、

一エトロフ詰の面々は一日クナシリ嶋へ引取たるよしにて、エトロフ爭亂の次第をあらましに取玄らべ、關谷茂八郎より申越おもむきは、其節支配人陽助鐵炮にて内股を打れ、津輕家の足輕一人足の甲を打れたれども、いづれも薄手のよし、外に名の知れざるものも即死二人あり、一人は石火矢臺の際に倒れ、面鉢こげて分らず、石火矢の發したる時怪我したるにてもあるべきや、一人は岩穴の内に倒れ、敵の鐵炮に中りたるやにも見え、兩人共衣服の軀を見れば、漁業稼方のものにもあるべしと思はるれど、其事頭取たる者彼嶋を逃去りしにより

確と知れがたし、又アラムイといふ所の蝦夷一人、シヤナ川向にて鐵炮に中り死たり、敵の方にてはヲロシヤ人三人、シヤナ會所へ上陸の時打倒し、其外三四人も打しと覺へたれば、確と見留ざる由、又シヤナ會所燒跡にてヲロシヤ人一人、酒に酔ひ夷人に對し我儘をふるまひ、夷人共集り、五月三日の夕打殺したるよし、また會所番人行十郎といふ者、五月三日夕異國船出帆後、夷人を連れアラムイといふ所の夷小屋へ立寄たるに、夷人の妹と外に一人の夷人居たるゆへ、辨當をつかはんとて内へ入、召連たる夷人兩人はシヤナ會所の跡を見せに遣はし、飯を喫し居たる所へ、ヲロシヤ人一人鐵炮を携へ來りしにより、彼男女の夷人は仰天して逃去り、行十郎も外へ出、キナといふ草の陰に忍び居て見れば、彼ヲロシヤ人は、行十郎が喰ひかけたる飯を喰ひ、所々を見廻し、頓て行十郎が忍び居たるを見つけ、其前へきたり、頭より肩先へ撫おろし、手を取引出し、爐邊へ連行き、何やらん咄し、アメリカ何々とひいて、指を四ツ折、ウルツブにポロン〜などいひけれども、言語分らず、暫く過て寢

る眞似をし、行十郎にも寢よといふ仕形するゆへ、ヲロシヤ人の側に寢轉びたるに、頓て行十郎が傍に置たる脇差に手を懸しゆへ、取隠しなどする内、最前シヤナへ遣したる二人の夷人も歸りきたり、其夜は四人共同宿す、行十郎は此ヲロシヤ人を生捕にせばやと思ひ居たる所に、追々外夷人共大勢集り、是非打殺すべきとひしめき、いかに制すれども聞入ず、たとへ召捕たりとも夷人共大勢にて迎も助くべき勢ひにあらざるゆへ、今は是非なしとて、行十郎脇差を以てヲロシヤ人の胸を差通し、夷人共寄合打殺したる由、此ヲロシヤ人兩人の衣類鐵炮或は守正教朝臣も見給ひ、江府へは繪圖に寫上之、藥袋頭巾等箱館へ來る、後に攝津又番人喜惣次といふ者と支配人陽助が子與太郎といふ者、五月二日夜アトムイの新道を通りし時、何者とも知ず、與太郎へ切懸、右の手の甲一寸餘疵附られ、笹原をくゞり山を越へ、ルヘツといふ所へ逃去たり、其時喜惣次へも切かけたる跡に見へしが、此者の安否はいまだ知ざるよし、喜惣次の事末に記す以上の件々茂八郎より申來り、則六月十日詳に江府へ申す、

一西蝦夷地ソウヤ、シャリ邊へ送る仕入物品々、松前伊達林右衛門が手船宜幸丸へ積入、五月廿一日過出帆、段々はせ來り、^{ルイ}シリ嶋に澗懸りして居たる時、同月廿九日沖の方より異國人大小二艘はせ來る、其船より橋舟四艘をおろし、彼宜幸丸へ向頻りに鐵炮打懸、素より町人の事なれば、防ぐべき手當もなく、元船乗捨傳馬船にてテシホといふ所へ漕戻りたるよし、林右衛門より訴へ出る、此外先達てソウヤへ向け、御武器諸品等積入て廻したる吉祥丸萬春丸といふ御船、地役雇の者ども上乘して出たるが、その安否はいまだ知れず、此舟の否は未に記す、則此趣六月十日江府へ申す、

一此時安論は箱館下向の時旅中なりしが、今年に西地付、江戸に御用ありて例より先達てエトロフ嶋へ直乗として出帆したる水主同心長谷川仲右衛門、雇醫師新樂閑叟といふもの、東蝦夷地子モロ迄はせ行しに、エトロフ騷動の沙汰を聞、何れ彼嶋へ渡り見届べきと、猶又海路を急ぎ、クナシリ嶋まで廻りて様子をきけば、はやエトロフは落去せしといふゆへ、玄からば往ても詮なし、此上は片時もはやく箱館へ

注進せばやとて乗戻したりしが、風順悪しく佐井の湊へ着、箱館への風待して居る内、此兩人より安論に旅中へエトロフの次第あらまし聞たる趣を申越、五月廿三日安論より江戸へ注進す、其外南部領沖合へ異國船見えたり杯、旅行先へ所々より申わたるにより、是は五月十九日箱館へ見えたる船なるべし、其事并佐竹上杉へ臨時人數被^ニ仰渡^一可^レ然など品々江府へ申たり、正義より佐竹酒井へ人數の事申達したるは、安論いまだ知らず、故に本文の如く計ひたり、

一先達而諸家へ申達したる人數の事、佐竹家への書簡は、五月廿四日に國元へ着、直に翌廿五日より人數出張、追々箱館へ着到の惣人數五百九十一人、酒井家は廿六日に着、六月朔日より出張、追々着到の人數三百十九人、南部家の増人數達しは廿二日着、直に翌廿三日より出張、追々着到の惣人數六百九十二人、外に定式の人數二百五十人、都合三千二人也、此家々何れも怠りなしといへども、わきて佐竹津輕^市は書簡到着の翌日直に人數を出し、中にも佐竹は不意に達したる事なるに、神速なる計ひ、家柄とはいひながら格別なる事也、則此趣委細に記して江府へ申す、扱此人數の配り分は、箱館に南部

勢三百四十二人、佐竹勢五百九十一人、合せて九百三十三人、サハラには見張の爲のみに、南部勢三十人、ウラカハに同家の勢百人、アツケシに同家の勢百三十人、チモロに同家の勢百三十人、クナシリに同家の勢三百四十人、松前には南部勢百三十人、津輕家勢三百三十人、酒井勢三百十八人、着到三百十九人の内一人病死、合せて七百八十一人、エサシへ津輕勢二百人、ソウヤに同家の勢二百三十人、シヤリには同家の勢百人、各武器玉藥兵糧等厚く用意して備えたり、

一 六月廿一日安論箱館に到着、日々會合して品々議論す、

一 さきに安論正養より執政方へ申つる注進狀の御返簡追々に來り、人數の事も安論が申によつて、松平政千代佐竹左京大夫へ達し給ふといへども、安論よりは、佐竹上杉と申つるが、御評議によりかく成しとみえたり、佐竹家へは最早正養より達し、人數出張したるよしにつき、此上の人數は箱館奉行より猶申旨あらば出すべし、仙臺家の人數は五百人ほど揃え置、是も箱館よりの沙汰あらば速に差向べしと促し給ひ、猶又南部左衛門尉へ

も品に寄人數差出すべき旨達し給ふよし、且非常の時節、奉行旗手持せずしては不都合にもあるべきなれば、用ゆべきのよし其外品仰出さる、餘は略レ之、

一 今度の一舉につき、若年寄堀田攝津守正養朝臣、大目附中川飛騨守忠英、御目附遠山左衛門景晋、金四郎改名して左衛門といふ、御使番小菅伊右衛門正容、村上大學義雄を遣され、追々箱館へ至るべきよし執政方より仰下さる、

一 六月十九日ソウヤ詰調役並深山宇平太より書狀來り、先達て異國船へつれ行たるカラフト番人富五郎、西藏、源七、福松、エトロフ番人五郎次、左兵衛、長内、六藏、木挽三助、外にエトロフにて捕へたる南部家火業師大村治平、都合十人の内五郎次、左兵衛は留置、残り八人はリイシリ嶋より小舟に乗せ歸したるよしにて、六月六日ソウヤへ着き、彼國より書簡一通を贈れり、表は彼國の文字にして、旗の圖などもゑがき、裏には片假名を以左のごとく書たり、此文章見安からんが爲に、傍に朱を以文字を附、

近く、近所之事に御座候間、下チカクキンシヨノコトニコザソロアヘダ、シ

之者に申 附 渡海 商ひ 之事
 タノモノニモヲシツケ、トカイアキナイノコ
 希 ひに遣 し 候 而 傍 輩 同
 トコイ子ガイニツカハシソヲロテホウバイド
 様に 寄合 吟味 相談 之上、商
 ウヤウニヨリヤイ、ギンミソウダンノウヘ、ア
 ひ 首尾 好 致し 候は 誠
 キナイシユビヨク イタシソヲラワバ、マコト
 に仕 合に 存 候 得 共、度々
 ニシヤワセニゾンジソヲラヘドモ、タビ
 長崎江 使者を 遣し 候得 共、
 ナガサキヘシシヤヲ ツカワシソヲラヘドモ、
 只 返事もなく 返辨 被成 候 故
 タバヘンジモナクヘンベンナサレソロユヘ、
 異變 初而 此元之 天下 様より 大
 イヘンハジメテコノモトノテンカサマヨリヲ
 きくして 腹 立て 商ひてもなくば
 ホキクシテハラタチテアキナイテモナクバ、
 赤人 同様 に からふと、此文不解、からふと
 アカヒトドウヤウニカラフト、を赤人の國 同様に
 すべきといふ 夫に 依て 最初 願ひ 置
 事にあるや ソレニヨツテサイシヨ子ガイヲキ
 候 得 共、聞 受なく 夫 故 此 度
 ソヲラヘドモ、キ、ウケナク、ソレユヘコノタ
 此 元之 手 並 見 せ 申 候 而 きかな
 ビコノモトノテナミミセモヲシソロテキカナ
 い時には 北の地 取上 可 申 候
 イトキニハ、キタノチトリアゲモヲスベクソ
 ならふ事 ならば 返事之 便 にても 濟
 ロナラフコトナラバ、ヘンジノタヨリニテモスミ

ます事 に御座候 からふと または 嶋々
 マスコトニゴザソロ、カラフトマタハシマ
 うるつふ迄 赤人 つゝお行れますに
 ウルツフマデ、アカヒトツイイカレマスニヨ
 つて 追散してやります、又は 希ひ 願
 ツテ、ヲツチラシテヤリマス、マタハコイ子ガ
 イノ筋叶はせ 候は 末代 心
 易く 致し 度 心 懸に 御座候
 ロヤスクエタシタキコ、ロガケニゴザソロ、
 左 様 無 御座 候 得者 又々 船々
 サヤウゴザナクソヲラヘバ、マタ フ子フ
 澤山に 遣し 此の如くに 致し
 可 申 候
 モヲスベクソロ、

月 日

松 前 御奉行さま
 マツマヘヲブギヨサマ
 ヲロシヤ

此文章は、異國人の首領ミカライサンタラエチとい
 ふ者、日本詞に記したる小冊を所持し、其内より撰
 び出して詞を作り、カラフトにて捕へたる 源七と
 いふ者に片假名をもつて書せたるよし、今度歸り
 たる八人の者は、下役小川喜太郎差添押付、箱館へ
 出べきよし、其時書簡の本書は持來るべしとて先
 寫を差越す、(此八人のもの、追て) 糺問したる申口は、異

國船大之方は千石餘積、小之方は三四百石積、人數は大船之方四十人餘、小舟の方二十人餘、合せて六十四五人もあるべきよし、此二艘の外當年渡來の事は番人共聞及ばず、紅毛イギリス等商船は出居る趣に聞たるよし、此異國乗組の者、名前左の如し、

大船の方首領

ミカライサンタラエチ 三十二三歳

下役

ヒヨウトロマルキチ 三十歳

イワソベトロエチ 二十五歳

船頭

ヒヨウトロキワノエチ 三十四五歳

商人

ミハラエチミツチコウ 四十歳位

小舟の方首領

カブリウハイハノエチ 二十四歳

右異國船當年はもはや歸帆もすべきやの趣に番人共聞たるよし、宇平太より申來り、其始末并書簡寫等、即日江府并正敦朝臣の御旗行先へ同心大貫專

助、天野喜右衛門を早馬にて注進す、此早馬正敦朝臣六月廿四日に達し、江戸へは廿六日に達し、二百里餘の行程七日半に達し、格別神速の由を以、御褒美として銀二枚つい、外に箱館御用金の内より金三兩づゝ取らすべき旨、大炊頭利厚朝臣のたまふにより、村垣定行計之、

一さきにソウヤへ向て出帆したる御船吉祥丸萬春丸の内、吉祥丸は事なく彼地へ至りつきぬ、萬春丸には、御武器其外品積入、地役雇の者森重左仲内野五郎左衛門上乘し、リイシリ嶋の潤内に懸り居たりし折から、五月廿九日沖の方に大筒の音頻りに響き、異國船渡來したるとて、同所に懸り居たる商船共騒ぎたち、其内伊達林右衛門が手船宜幸丸へ異國船より鐵炮を打懸られたるよし、乗組の者ども傳馬船にて逃來り、わな／＼／＼申により、萬春丸の水主ども一同に狼狽し、我も／＼とはしけ舟にて逃去り、いかに制すれ共聞入ざるゆへ、是非なく左仲五郎左衛門も、御武器の内百目筒一挺、二十目筒一挺、十匁筒四挺、四匁五分筒三挺、胴亂五ツ、其外火繩口藥等漸にはしけ舟へつみ入、三四里も乗出して跡を見かへれば、リイシリの方に當つて大に煙立たる故、萬春丸は焼拂はれたる事にもあ

るべきやと、六月朔日此兩人ソウヤへ來りて申けるよし、翌二日には萬春丸の見届として、兩人とも圖合船にて乗出したるに、沖中にて風變り、ノツシヤフといふ所へ着寄りて風待し、同六日に至り漸風和らぎ着船し、バツカイベツといふ所迄至りしが、異船より戻されたる番人共に行あひ、萬春丸の事を尋れば、最早焼拂ひたるよし申により、今は見届に行ても詮なしとて、その儘ソウヤへ漕戻りたるよし、彼リイシリを立退とき、萬春丸に残し置たる品々は、徒具足二領、同心具足八領、五百目大筒一挺、四匁五分筒二挺、合藥十五貫目、鉛二十貫目、米三百五十俵、味噌三十樽、醬油三十樽、酒二十樽也、是等は異國船へ取られしや、焼拂らはれしや、知ざる也、此品々の事、後に番人共のソウヤ詰より申來り、口書にて、大鉢は知れたり、六月廿八日江府へ申す、此兩人並船頭水主等箱館へ呼出して、糺問の上、口書たる趣と、後の口書の大畧とを併て記之、

一浪人村上左金吾といふ者、越後流軍學心得あるに、より、去ル頃より地役雇に成り箱館に居たりしが、カラフトの一擧により、ソウヤの警衛として調役並深山宇平太を遣すにつき、同人に隨ひ軍事を謀

るべきよしを命じ、五月初旬、前の左仲五郎左衛門と俱に萬春丸に乗組出帆させしが、左金吾は地理見分のため、ラシヨロといふ所より上陸し、六月初旬マシケといふ所へ着するに、四代中エトロフ嶋騷動の事を聞、左あらば異國人此上所々を亂妨し、箱館へ至らむも計りがたしとあやぶむ折から、五月廿九日リイシリ嶋にて宜幸丸へ異國船より鐵炮打かけ、水主共逃去り、萬春丸に乗組たる左仲五郎左衛門なども立退たる趣追々に傳へ聞、心ならず萬春丸の様子をも見届ばやと、デシホといふ所よりはしけ舟にて乗出し、三里程も行たるが、風變りソウヤへ乗戻したる所にて、津輕家の飛脚に行逢ひ、五月廿日頃箱館へも異國船渡來し、亂妨の有無は聞ざれ共、かしこも穩ならざるよし、ユウブツ邊にて風説聞たると語るにより、彌心ならず、扱は異國船エトロフ、カラフト等を亂妨し、其上氣に乗じて箱館へも來りしならん、此上數艘東西より押寄せ、援兵米糧等の通路を斷切らば、ゆゑ敷大事也、殊に箱館は防戦すべき地理にあらず、大野市の渡りの邊へ砦構して、奉行所を移すべきなどいふ念慮頗

に生じ、宇平太へは、其趣を書札にて申通じ、ソウヤへは到らずして、テシホより引返し、六月十九日の夜箱館に歸る、左金吾が所存一理あるに似たれ共、かれはソウヤの軍事を委ね遣しつるに途中の風聞によつて思案して、奉行の下知にたがい立戻りたる條、いかにつき後に糺しの上口書を取て江府へ呈進す、
一かくて、六月廿八日の夜には、彼異國船より戻されたる番人七人と、大村治五平を小川喜太郎が將ひて、箱館へ到り着たるにより、翌廿九日一同呼出し、糺問するに、去年九月十一日カラフト嶋亂妨の始末、及び同所の番人共が捕はれたる事などは、前にカラフト一件に記したるが如し、船の大サ、鐵炮の様子、人物の模様等詳にカラフト一件の内に見へたるゆへ、爰に不贅、夫より此者共は彼船中に在て、麥豆小豆蕎麥などの粉を餅のごとくに製したる物を與へられて命をつなぎ、九月十八日にカラフトを出帆し、段々はせゆき、十月四日にヲロシヤ國カムサツカ近邊まで到りしが、風順よからず久しく滯船し、漸十一月五日に至り、カムサツカの内ヘトロハウシユイといふ湊に入澗懸りして居る内、水主五六人ヅ、日々上陸して、旅宿の手當し、同月廿日過一同に上陸して、彼四人の者は同所の

飛脚屋カフリウハメエチンアチキリユウといふ者の方を旅宿とし、四尺四五寸に七尺餘もあるべき一間なる所に一同に住居し、疊はなく板敷にて、カラフトより取來りし薄縁を敷き、彼船に乘組居たる鍛冶鐵炮師ヲウセミマキセムエチエヒフロウウといふ者、晝夜附添て世話し、首領より差圖のよしにて、カラフトより取來れる米を日々四升程ヅツ請取、黒米の儘にて飯にかしぎ、鮭の鹽煮などをそへ物にして、朝夕二度ヅ、給させたり、然るに或時宿の妻女煮たきする鍋にて足を洗ひたるを見うけ、餘りにむさくろしさに、彼附添のものへ談じ、藥罐を借り手賄ひにし、飯も黒米にては喰ひにくきにより、桶をかり少しヅ、搗て用ひたりしが、或日首領ミカライサンタウエチ見廻りに來り、是を見て米をいかにするぞと尋るゆへ、米の皮ありては腹にあたり給べにくきゆへ、日本にてはかくして用ゆると答へければ、玄からば左いたせよといひて歸りぬ、此所野菜の類は一切なく、魚類鳥類又は牛の肉を赤人共は常の食とす、米も少しはあれども飯にかしぐ事なく、たまゝ粥にして喰ふ、

其米は古米の如く、至て輕くして風味あしく、首領の旅宿は彼等が居所より一軒置たる隣にて、四間に六間程の家なり、硝子窓杯あり、疊はなくて物に腰をかけて居る、臥す時は木綿蒲團に鳥の毛を多く入たるを二ツ^{ふた}ぎ、其上へ臥せば、左右折れくるまる、其上へ蒲團一ツかけ、枕も木綿に鳥の毛を入れて長く縫ひたるを三ツかさね、中くぼみて顔へくるまり、枕元には劔并鎗の附たる鐵炮を懸置たり、四人の者共日々此旅宿へ呼れ、砂糖の入たる茶并麥蕎麥粉等を餅の如くしたるを給させける、此所家數三十餘戸、皆山海の獵師なり、商家は只一戸にて、革類反物穀物茶蠟蠟油其外品々をひさぎ、反物は羅紗更紗天鷲絨木綿の類也、爰はヲロシヤの内田舎なるゆへ、よき品はなしといふ、此地一圓海岸にて山もあり、海岸に土手を築き、大筒五六挺或は十挺程ヅ、仕掛たる場所九箇所あり、山際に二百間計の鐵炮打傷并鐵炮車臺杯入たる藏二棟、焰硝藏一棟、穀物入たる藏一棟あり、此藏と并首領の旅宿へは、足輕やうのもの一人ヅ、と蝦夷刀の如くなる拔身を持て晝夜とも警衛す、ヲロシヤは塞國

なりと聞しが、此地は左程にもあらず、却てカラフト嶋杯よりは凌ぎよき方也、寺も一箇所あり、住居は惣髮にて筒袖の衣に似たる物を着し、袈裟を懸、妻帶肉食也、俗家にも釋迦の像に似たるものを板にゑがき、朝夕拜す、又牛は餘程あり、日本の牛に變る事なく少し小ぶり也、荷物の用には遣はずして皆食料とす、犬も日本の犬にかはらず、雪車を挽せて用をなす、猫は至て拂底也、鳥類も數多あり、馬は一向なし、ヲホツカといふ所には少しあれども、荷物のみに用ひて乗る事はせざるよし、味噌はなく、醬油はあれど拂底也、酒は燒酎のごとく至て強し、去年十二月十五日、大船の首領ミカライサンクラエチ、小舟の首領カブリウハイイハノエチ同道にて、カムサツカの代官の所へゆき、其月の廿九日に立歸りしが、當正月中旬頃に至り、カムサツカの代官ハンコウイハノエチといふ者此地へ來り、ミカライサンクラエチ其外のものも、渠が旅宿へゆく躰也、其翌日に至り四人の番人、彼代官の旅宿へ越すべきよし、ミカライサンクラエチがいふにより參りたるに、上座には代官其頭にミカライをはじ

め、其外船中に乗組たる足輕以上の役人共何れも席机に腰をかけ、入口には足輕三人鎗の附たる鐵炮を持て守りたり、其時代官四人の番人に對し、ヒサミイ／＼といひけれども、何事にや分らず、夫よりミカライへ向ひ、此者共は當國の詞を覺えたるや、酒を吞むやと尋ぬ、詞も少し覺え、酒ものむよし答へければ、玄からは代官持參の酒なりとて一盃ヅツを吞せ、やがて彼面々品々談しの牀にて、足輕百人も連ゆくべしと代官よりミカライへいひける時、夫にも及まじ、船に有合たる人數にて事足りなむと答へたるをば聞取たれ共、其餘は知れず、此者共去年中よりヲロシヤ人に交り、言語も少しは通じけるゆへ、是ほどは聞取たり、此代官三日逗留して歸りたり、此者は去々年長崎へ使節に來りたる役人の兄のよしに聞り、又或時ミカライサンタラエチ方へ行しに、日本にては何品を好むや、金銀鐵羅紗の類はありやと尋しにより、金銀銅鐵の類は潤澤也、毛類は日本の産にあらずれども、長崎にて交易して事欠事なし、其外絹布織物などは結構なる品澤山ありて、聊も不自由なければ、何品を好むと

いふ事もなしと答へけるに、日本人羅紗を衣ふくにせば暖なるうへ丈夫にて然べしと申により、日本は暖國故毛類を着する事なし、只合羽火事具に用ゆるのみ也と答たり、彼國にては何品を好むや知らざれども、米鹽絹類拂底にて、わきて海氣を尊ぶ牀に見えたり、扱又我輩を捕へしは何ゆへにやと尋しに、去々年長崎漂流人を送りて使者を遣し交易の事を願しに、其年叶はず、以來船を寄せば焼拂はむとの事なるゆへ、成べき程は日本を焼拂、彼國の人をも捕へ來れと、國王の命により、カラフトの一舉に及びしと答へしにより、いかで日本にてさばかりの不法の處置あるべき、そは全く其國の聞たがひなるべし、日本へは其譯聞えず、今度の仕方ひたすら海賊の所行とのみ聞ゆべしと申ければ、さればとよ、亂妨の事素より本意にあらず、交易の願ひ叶はざるゆへ、止事を得ざる所也、全く盜賊の筋にはあらずる證據は、彼奪ひ取たる品々焼拂ひたる家藏船等に至る迄巨細に記し置、通商整ひたる日に至ては悉くつぐなふべきよし國王の命也と云て、暫く思惟したる牀なりしが、然らば通商の願

書を遣はすべし、さればヲロシヤ文字はよむ事難かるべければ、日本の詞を日本文字にて裏書すべしといひて、青き紙を取出し、ミカライ則筆を取て表書を認め、夫より日本詞を記したる小冊を取出し、其内より撰び出して一句／＼に詞を作り、此通り日本文字にて認よといふゆへ、源七やがて片假名を以て裏書し、よみ聞せたるに、よろしきよしにて受取置ぬ、前に記したるは、則此書簡也、夫より四五日過て、猶又二枚裏書せよといふゆへ、何故にやといへば、一枚は本國へ遣し、一枚はミカライが扣にするよしふにより、則又二枚認め、外に源七が手覺に一枚認め置ぬる由、此手覺への一枚は、源七荷物の内に入置しが、何方にや失ひたりといふ、夫より四月三日に至り、去年カラフトより歸航したる大船の方へミカライサンタラエチをはじめ、四十二三人乗組、四人の者をはじめ其船へ乗せ、小船の方へガブリウハイハノエチを初め二十二三人乗組、其日に澗口の外へのり出し、日和を見合、同

七日に至り、順風にて二艘とも出帆し、段々はせ行、此間所々の嶋々へ寄りたる事有、事多ければ畧す、同月十八九日の頃にはウルツフ嶋へ差寄べき心構へにてありしが、十九日の夜

より大風雨に成り、いづくともなくはせ行き、廿日の朝に至り大なる海岸へ差寄りたれども、小船の行衛知れざるゆへ、或は乗戻し、或ははしけ船などを出して所々を尋ね、廿二日の夕方に至り、漸く小舟と一所に成り、廿三日の朝彼海岸へ差寄り、船頭水主等上陸して、土地の様子を見るに、船を作りたるにや、林に板などはあれども、濱邊に人は見へざるよしにて、旗一本持歸れり、見ればアツサノボリ大明神と書、下に惣兵衛、三助、作之助、太郎助、豊吉、左兵衛、長助と記したり、扱はウルツフへゆく心懸なりしが、彼嶋はいつか乗はづして、爰ははやエトロフ也とて、其月は同嶋のうちナイボといふ所の海岸に懸り居、廿四日の四時ごろに至り、小舟の方より首領カブリウハイハノエチを始め十人餘、橋舟にて上陸し、其内より首領をはじめ三人、番屋へ入て腰をかけ、帳面とおぼしきものを出し、何やらんいへども、其所に詰合居たる番人どもに言語通せず、只日本といひたる事のみ分りたり、きせるを借せといふ如き眞似するゆへ、番人左兵衛きせるたばこをかしければ、やがてたば粉をのみ

居たるのみにて、様子分らず、飯を出しければ、濱の方へ持行き、手をもつてつかみ喰ひ、そこに鱈^{タラ}の干して有しを見て、くれよといふ真似するゆへ、筵に一盛り與へたり、又其所にイクニン^{イクニン}といふ蝦夷人の居たりしが、頓て其者を連て一同に元船へ歸り、イクニンノへ鐵炮一挺玉一ツをあたへて歸しけるゆへ、異國人何事をか申つると、長内より尋るに、何やらむ申ぬれども分らずといふ、舁船中に在る所のカラフト番人共は、ヲロシャ人共又此所にて何事をかするやらんと心ならず思ひ居る内、其日の八時半時大船より首領を初め二十人、橋舟に乗、何れの場所へか上陸し、夜に入元船へ歸り、家は十二軒あれ共、人は居ざるよしにて、油一樽三味せん一挺、薄縁一枚、鮮魚少々持歸り、其夜は二艘とも同所に懸り居たり、舁もナイボにては異國船渡來につき、シャナへ注進の飛脚を出し、又も來るべきとて用心して居る所に、廿五日に至り大船の方より首領をはじめ十二人、小舟方より首領をはじめ十一人、ナイボへ上陸し、番屋へ押入、番人五郎次、左兵衛、長内、六藏、木挽三助一同にからめ、橋

舟へ連行、藏にある所の米二十三俵、木挽鋸大工道具等、并仕入物の古綿入四ツ、白紺の木綿二三反ツ、其外番人所持之衣類夜具腸差等奪ひ取、番屋所へ火をかけ、一同元船へ歸り、捕へたる番人共は繩を解き、砂糖の入たる茶を吞せ、カラフトの番人共と一所に置たり、廿三日は大風雨にて、二艘共同所に懸り、廿七日の朝出船し、子丑の方へはせ行しに、ヲイトいふ所の沖にて日本船一艘見ゆる由にて、番人共は穴入置、^{ふ、そこへ入て上より蓋をす、}頻りに鐵炮の支度坏する様子につき、あはれ日本船無難にあれかしと一同神佛にねごととして居たる内に、俄に卯辰の風強くなり、彼船を見失ひたるよしを申により、各心を安んじ船行する程に、廿八日は雨降り風も強く、頻りに丑寅の方へはせ、廿九日にはシャナの沖に至り、四時頃同所海岸より一里程へだて大船懸、半里ほどへだて小舟懸れり、頓て大船より首領をはじめ二十人程橋舟に乗組上陸し、小舟よりも八人程も乗出せしが、風烈しく陸へ寄りかたく元船へ戻りたり、夫より陸地にての始末はいかゞありしやと云らず、七時過に至り、濱邊に五

六箇所の火の手見へ、間もなく大船より上陸したる者共、元船へ歸り來るにより、ミカライサンタラエチエシヤナの様子を富五郎より尋しに、通商願の書簡を持って上陸し、ヲロシヤの禮なれば、筒先を空へむけて鐵炮を打しに、日本の方より鐵炮を打懸たるにより、止事なく此方よりも打懸け、日本人五六人も打殺し、味方にも手負三人あれ共薄手也と語りしゆへ、火の手の見へしはいかにと尋ければ、これはこなたより焼たるにはあらず、一同引取し跡にて燃立たりと答へたり、此鐵炮せり合の事は筒様にはあらで、はじめに赤人の方より打かけたる由、焼打の事も津輕の陣屋は敵の取切られて都合あしきとて、こなたにて焼拂たれど、其外は彼等が方にて焼たるよし、末文エトロフより歸りたる同心共が申口に詳也、番人どもは始終船の内にのみ居たるゆへ、陸の様子は何事もまらず、彼同心共が申口の條に、其夜は二艘とも同所に懸り、陸の次第は委く見えたり、其夜は二艘とも同所に懸り、翌五月朔日には大小の船より凡四十人計上陸し、大筒を打、一同に大聲にてヲラ／＼といへば、船中にも同じく聲を合せ、夕方に至り品々積入歸船したり、其品數の凡を見るに、大船の方へ取入たる分、酒五六十樽、米三十俵程、具足五六十領、弓十張程、長柄二十筋ほど、并五百目已上と覺しき大筒一

挺、二三百目之短筒三挺、小筒三十挺計、金丸籠の纏一本、旗幕等も見えたれど、數は確とぞれず、金屏風二雙、十手一本、大小三通り、脇差四五十、腰玉藥一ツ、火繩并衣類枕類等なり、小舟の方へ取入たるは二三百目の大筒二挺、小筒十挺餘、長柄二十筋計、具足二十領、酒衣類枕類等も見えたり、御武具に成よし、猶殘りしは有べけれども、其爰にいふ所は、御武具に成は、多分は南部津輕兩家の道具と見えたり、此諸品を持運びしは、朔日の夕より二日の朝迄なり、四時頃シヤナ所々に火の手見えたり、是は會所其外を燒拂たる時成べし又其夜八ツ時頃にもありけん、船中にて助けくれよといふ聲の聞へけるゆへ、番人共目覺誰ぞと問へば、津輕家の足輕なるが、シヤナにて捕はれたりといふ、此男一眼にて、顔は一圓に水ぶくれの如くに腫て、至て見ぐるしき躰也、此足輕の名は、聞ざるよし、翌朝に至りミカライサンタラエチ是を見て、此ものあしき病ひあれば舟中に置がたしとて、橋舟に乗せミカライより書附を渡し、此書附エトロフの役人に渡すべしといひ合せたる様にて、陸へ送り歸したり、此書附は、後にエトロフにて殺したる赤人の懷中にありしとて、在住平嶋長左衛門より差越し、江府へも申上り、是則さきに源七が裏書しける、書簡三通の一通なり、又此足輕の事、津輕家へ達して、さきよりいふとあれど行衛まれず、いかにして赤人の懷中に書附は有けん、いと

いふか又水主イハンミカライといふ者、シヤナへ上陸の時手を負ひなやみ居たるを、帆柱へ縛りつけ置けるゆへ、いかなれば手疵あるものをかくはするやらんと、ミカライサンタラエチへ源七より尋ければ、日本人を殺すまじきと兼ていひ附置たるを用ひず、此方よりの差圖もせざる内に、鐵炮を打かけたる故、かくのごとく仕置するよし答へける、是を以て考れば、前の鐵炮せり合は、彌赤人の方よりはじめたる事と見えたり、夫より三日の夕七時頃、兩艘共シヤナ港出帆し、翌四日戌亥の方へはせゆく、船中にてミカライサンタラエチ源七にいふ様、十餘年以前、ヲロシヤ國の者ウルツフ嶋にて破船し、彼嶋へ上陸して、いまだ歸らざるにより、行て糺さんと思ひつるに、はからずもエトロフへ着たり、然るに彼所にヲロシヤ人の衣類碇などもあり、彼者共をば日本の役人殺したるとの噂をきけり、今船中へ捕へ置たるエトロフの番人共に此事を尋ねよといふ故、則エトロフ番人五郎次に尋しに、碇は先年ウルツフへ渡りたる官吏の富山元十郎、深山宇平、携へ來りて、今エトロフにあり、衣類はさきにヲロシヤへ漂流したる日本人南部牛尾村繼右衛門が徒なり、彼

國より貰ひ來れるなりといふゆへ、そのよしをミカライへ申けるに、日本人は偽りのみいひて信じがたし、いづれウルツフ嶋へ渡りて實否を糺すべしといふゆへ、彌日本人赤人を殺したるに決しなば、カラフト番人四人共殺さるべしと、富五郎、源七より堅く詞をつがひ、ウルツフへ向けはせ行しに、風順よからず所々に滞船し、七日晝頃漸く彼嶋へ着寄り、赤人二三人上陸し、間もなく二尺に六七寸計の板に横文字書たる物を持歸り、先年渡りたるヲロシヤ人の内三人は病死し、残りは彼嶋を立退たるよし書附あり、彌源七が申せし如く、日本人の殺したるにはあらず、和人は偽のみいへど汝等が言は偽なしとて、ミカライ疑を晴したり、夫より十二日迄沖にまきり居、其日の晝過クナシリ嶋アトイヤの邊に至り、暮頃より寅卯の風に成り、西の方へはせ、夫より日々所々の沖をはせ過、十八日の暮頃に至り、カラフト嶋シレトコの海岸より一里程沖に懸り、翌十九日の朝船頭ヒヨウトロマルキチ、其外の人數は確と知れず、同所へ上陸し、間もなく蝦夷人十人計連來り、大船へ乗せ、酒を吞せ、富五郎

源七にも彼夷人に逢べしと、ミカライサンタラエチがいふに任せ、行て見るに、皆見知りたる夷人なるゆへ、カラフト嶋の様子を尋けるに、去秋富五郎等が捕はれたる後、トンナイといふ所番三人越年して居るゆへ、事のよしを告たれ共、いまだクシユンコタン亂妨跡の見分もなく、當春に至り松前より支配人番人等渡海し、初て其事をき、仰天し、巨細に様子を問ひ糺して、ソウヤへ乗戻したりといふ、夫より夷人共は歸り、ミカライをはじめ同所へ上陸せんと支配し、富五郎源七も參りたく思はば參るべしといふに任せ、則兩人も俱に上陸せしに、其時赤人の内より水主一人逃去り、追駈たれ共、山深く入て知れず、是はヲロシヤの人にはあらず、アメリカより來り居る人のよしに聞えぬ、夫より一同に同所の會長ユウトロマツカといふ者の所へ立寄りたるにより、富五郎源七より彼會長へ嶋の様子を尋るに、當春松前より下りたる支配人ことの外疑惑を生じ、去秋番人共の捕はれしは、夷人共赤人に馴あひ手引したるなるべしなどいふゆへ、一同甚迷惑し、早々番人を下し、是迄の通り介抱に

あづかり、漁業をたきよしを松前家へ小使蝦夷を遣し願ひ出たる由、又ソウヤへは、公儀の御役人も大勢詰、カラフトのシフヌシへは、松前の家士も來れりなど咄し居る内、ミカライ彼會長ハ酒を吞せ、四尺四方程なる緋羅紗と銀にて作りたる國王の像を與へ、外に四五寸四方の紙へ横文字書たる物を渡し、此後赤人船多く參るべきにより、此書附を出し見すべし、左あれば米酒切れ類何にても望の品を與ふべしと懇にいひ含め、外夷人どもへも玉類切れ類など少しづ、與へけるにより、富五郎源七ひそかにかの會長をかたはらへ招ぎ、たとへ赤人より何品を貰ふとも、必玄たがふべからず、此よし外夷人共へもよく／＼申含むべしと巨細にいひ諭し、一同に此家を立出、又もやライシヤモといふ會長の方へ立寄、酒を吞せ切れ類などを與へ、夫より一同に濱邊へ出、的をたて、鐵炮を打て夷人に見する、ミカライは中りあしく、其餘の者はみな中り細かなり、又夷人の飼ひ置たる熊の子を二疋所望し、鐵炮にて打殺し、船へ積入食料とす、夫より一同に元船に戻り、夜に入乗組の者へ夥しく

酒を吞せ、何れも酔臥したる時、ミカライサンタラエチ艦の方へ廻り、太鼓を烈しく打ければ、酔ふしたる者共一同に起たち、櫓へ上り銘々鐵炮を打拂ふ、此手廻し至てすみやかなり、その内別して手際よきものは賞し、不手際なるものは其輕重に隨ひ撻つ事二三十より四五十に至る、折々此事をして訓練せしむる也、翌廿日には大船の方よりヒヨウトロマルキチを初め十人、番人福松も乗組、小舟の方よりも五人程いづれも橋舟にて乗出し、カラフトの内、ヤハンベツといふ所へ上陸せしに、夷小屋は三戸あれども、人は見へず、其夷小屋の前に杭ありて、ちいさき箱を懸置たり、ヒヨウトロマルキチ其箱ををろし、中より生銀歟硝子の如き玉と切れ類を取出し見て、又箱へ入れ、猶其上へ切れ類を少し足して納め、元のごとく杭へ懸置たり、其さま彼者共、去秋此所へ來りし時、掛置たる箱にてもあるやと見へたり、いかなる故にてかくしつるや知れず、又彼蝦夷小屋よりカモ酒を入る器なりを三ツ取出し、酒を一升程ヅ、入、濱邊へ杭を三本たてこれを懸たり、前の箱此カモハ杯は、夷人へ與へる心に

てもあるや、其子細をきかざるゆへえれず、夫より一同元船へ戻り、翌廿一日には未申の風にてはせ、同嶋の内ヲフイトマリと云所に懸り、ヒヨウトロマルキチ、ヒヨウトロキハノエチを初め、其外何人乗組たるやえれず、同所へ上陸し、番小屋一軒、雜藏一棟、物置一箇所焼拂ひ、元船へ立戻り、又晝過に成りて、クシエンコタン海岸より半里程に懸り、船頭水主八人并源七も上陸せしに、蝦夷一人も見えず、濱に圖合舟一艘引上あり、長サ一尺に巾七八寸もあらむと思ふ、眞鍮の板がねをみよしへかぶせ置たり、文字ゑり附ありしやいなや見届ず、是も赤人共去秋參り之時の業ならむ歟、夫より重に一同元船へ戻りたる所へ、エモンカイホ、トタラリシ、ヲケエンタルといふ蝦夷三人圖合船に乗り、源七等を尋ねて元船へ近づきたるを、ミカライサンタラエチ見附て、頓て元船へ乗組移らせ、酒を吞せ、カラフトの番人共を呼び、逢ふべしといふ故、面會し、いかなる事にて來りしと問へば、異國船渡來につき、夷人共一同山へ隠れけれども、源七を見てなづかしく思ひ、尋ね來れりといふゆへ、カラフト、

エトロフの番人并大村治五郎等異國人に捕はれ、今日に及びたる迄のあらましを五郎次に認させ、宛名はカラフト支配人平兵衛と記したる書狀、エモンカイホが脊中へ密に押入、早々松前へ届けよといひ含ぬ、此書狀後に松前家より差出し、執政方へも内々に見せまいらず、頓て夷人共は酩酊したるにより、イハンヘトロエチ送りと陸へ歸したり、其夜同所の沖に懸り、翌廿二日の晝頃、ルウタカ海岸より一里程に懸り、ミカライサンタラエチをはじめ、二十六七人上陸せしが、間もなく火の手見え、七ツ時頃に至り、大釜五ツ持歸りたるゆへ、其様子を尋ねしに、番家二軒、藏九棟、辨天拜殿焼拂たるよしを申す、廿三日より廿八日迄は、或ははせ或は滞船し、廿九日にいたり、卯の風にてはせ行たるに、終に見馴ざる山ひとつ見え、何地とも辨へざるに、あれはレブンシリなるべしと、ミカライサンタラエチがいふ内に、もや晴てよくよく見れば、いかにもレブンシリにて、番屋杯幽に見えたり、その時ミカライ大に笑ひ、源七等はをのれが國を去らず、我はつるに見ざれども、繪圖をもつて知れりとして自負したり、其日七時頃日本船

見ゆるとて、番人共をば穴へ入、人數何程かは去らず、橋舟にて乗出し、暮頃鐵炮の音烈しく聞えしが、頓て晦日の朝に至り、橋船四艘にて千石積餘と見へたる大船を挽來る、其船は宜幸丸と題したる大船なり、米五百俵程、酒十四五樽、衣類少々元船へつみとり、六月朔日には鹽三十俵ほど積取り、猶残りたる鹽其外の品も有とやと見えしが、其日の晝頃此船を焼拂ひたり、是伊達林右衛門手船宜幸丸其日も風あしく、夜中沖の方に漂ひしが、ミカライサンタラエチ、富五郎源七にいふ様、今度汝等に書簡を折せて松前へ歸すべけれども、其内二人は留置、本國へ連行き來年歸すべし、カラフトの番人共は、去年よりヲロシヤに在りて、かなりに詞も通するなれば、書簡を持せ遣はしても分るべし、エトロフの者共は、いまだ通辨も出來ざるゆへ、五郎次左兵衛を残し置ん、尤隨分大切にいたはり養ひ置べし、エトロフに居たると同じ事に思ひ心を安んずべし、親元にても案じざるやう書狀を遣はすべしと、懇にいひ含たり、翌二日には、申酉の風にてはせ行しが、ソウヤとノツシヤフとの沖合に當て、日本船見ゆるよしに

て、番人共は穴へ入、元船二艘共はせ行、大筒二聲發し、間もなく日本ぶねを見よといふゆへ、穴より出て見れば、松前家の手船禰祥丸にて、乗組の人は見えす、此乗組のもの異國船に恐、頓て彼船より長柄二筋、素麵二三俵、衣類の入りたる葛籠三ツ、大船の方へ積取り、小舟の方へも衣類等持連ぶ舩に見えたり、夫より又リイシリの方へ乗戻したるに、同所に帆柱のなき赤船一艘見えたり、是則森重左仲、内野五郎左衛門等が乗捨たりし萬春丸なり、其時大船の方よりヒョウトロマルキチをもち、橋舟にて乗出せしが、頓てかの赤船に乘移り、大筒を放ち、一同に大聲を發し、白地の木綿に黒く十文字附たる鎗を押立、鎗一筋合藥焔焔の入たる樽一ツ、具足三領取來れり、翌三日晝頃リイシリ嶋へ水汲に行たる水主共、日本の小舟一艘挽來れり、見れば松前市中の船誠龍丸のはしけ船也、同四日に至り、彼赤船より五百目計の大筒一挺、百目筒程の臺計、焔焔合藥三升程、米數俵、酒五六樽、日本繪圖一枚、蝦夷地繪圖一枚、カラフト繪圖一枚取來れり、此外衣類の夜具等漁船へつみ入たるが、元船近くなり覆り、皆海中に入た

り、夫よりヒョウトロマルキチを始め五六人、リイシリへ上陸せしが、番屋藏にても焼拂たりと覺へて、煙立四箇所に見えて、誠龍丸よりも火の手上りぬ、萬春丸は夜に入焼拂ひたり、翌五日に至りて、ミカライサンタラエチがいふ、始赤船は武器も積入れたれば、然るべき大將も乗組たらんが、リイシリ山へ立退たると覺えたり、此大將を捕へなば、番人共は残らず歸すべし、いざや搜せよとて三十人餘上陸したりしが、晝頃歸り來りて、山には一人も見えざるゆへ、家藏圖合船等焼拂ひ歸りたりといふ、夫よりミカライ、富五郎源七を招ぎ、大將を捕へ得ざるにより、さきにいひつる如く彌汝等が内貳人をとめて、八人を歸すべし、土産のため何にてもあれ望の品あらば申べしといふ故、素より望の品はあらざれども、歸國のうへヲロシヤの產物何品をもつて交易を望むやなど、もし御尋もあらん時の爲なれば、羅紗其外の切れ類少しツ、貰ばやと、仲間一同に商議し、ミカライに申つるに、是は安きあいたの事也、爰に有合たるは、去年長崎へ見本に持行たる品にて、古びたれども與ふべしと、卷

物内より裁て羅紗六切レ、魯西亞切レ三切、花布二切レ、小切レ八切レ、外にヲロシヤ文字の書籍二冊、頭巾一ツ、コツブ五ツ、鏡一面、角細工一ツ、内に針ありヒ三本、ヲロシヤ假名書たる物一枚、繪圖五枚を與へたり、此品々ソウヤへ持來り、戸へ通じて執政方へ捧ぐ江渡船には彼誠龍丸のはしけを貰ひ請しが、船具不足により、權八本、碇一挺、繩二筋、帆一流を貰ひ、又船中の料として白米三俵、素麵一俵、醬油一樽、酒一樽、大藥罐三ツ、鉞一挺、鋸一挺、鈍二挺、鑿二本、たばこ十玉を與へられたり、其時ミカライ、さきに源七が裏書したる書簡をとり出し、四隅を封じたりしが、又思惟する躰にて、この書簡江戸へ出すべし、松前にては一覽する事なからむには便ならじとて、源七に渡し、松前に至り奉行に達すべしといふゆへ、返簡は何地へ届くべきやと問へば、來春カラフト、ウルツフ、エトロウの内へ來るべければ、彼三嶋の内へ達すべし、又通商の願ひ叶はゞ、上白中青下紅の旗を立てよ、叶はずば白地に黒く十文字の附たる旗を立てよ、旗の雛形、書簡に見えたり我輩今年はヲホツカへ歸帆する也、汝等相かまへてソウヤへ行事なく、速に松前に至

るべしといふ、則其旨を得て出帆せしが、さるにても赤人がソウヤへ行べからずといひしかど、彼所には御役人も詰合たりと聞及べば、夫をさし置松前へ行ば手後れに成べし、いざやソウヤへ行んと船中一同に商議し、頓て彼方へむけてはせたりしが、其夜ソウヤの内、イウツといふ所へ至りしにより、其所に野宿し、翌六日の朝乗出し、一里計も行たるに、もやの内より帆影の見えける程に、すはやヲロシヤ船の先へ廻りたるにや、いかゞはせんと驚しが、さはなくて彼萬春丸に乗組たりし地役やとひの者共が、彼船の成行見届んとてリイシリをさしてゆくにぞ有ける、かくて彼者共より萬春丸はいかにととふゆへ、はや焼拂たりと答へければ、之からばリイシリへ行ても詮なし、ソウヤへ歸るべし、汝等もこのふねに乘れといふゆへ、則八人のもの共かのふねに乗り移り、其日八時頃ソウヤへ着て、深山宇平太をはじめ、同所詰の官吏に事の始末をのべたりといふゆへ、五月十八九日の頃、彼等が乗組たるヲロシヤ船、松前南部箱館邊のり廻したる事はなきや、其外に彼國より船の出たる事

は聞及ばざるやと尋しに、其頃はカラフトの邊に居たれば、松前地乗廻したる事はなし、ヲロシヤより此外に船の出たる事も聞及ばざれ共、イギリス阿蘭陀商船は出居るよし聞及びたりといふ、

是はイギリス阿蘭陀より出たる船にや、又はヲロシヤよりイギリス、阿蘭陀へ出したる商船にやと尋しに、其所は確と云らずといふ、然らば五月十九日箱館へ見えたる大船は、是等のうちにもあるべきや、されどもイギリス阿蘭陀より出たる船ならば、其頃南部箱館の邊乗廻し、下蝦夷地の方へ行べきいはれもなし、恐らくはヲロシヤより彼國々へ行たる船の歸帆するにてもありしや未詳、

休明光記卷之九

○エトロフ嶋へ異國船渡來一件之下

附新規松前奉行兩人命せらるゝ事

并箱館奉行の御役名替りし事

○夫より大村治五平を尋るに、かれは南部津輕家の火業師にて、エトロフ嶋に詰居たるに、四月廿九日異國船渡來により、詰合の官吏より差圖にて、足輕共を連れ、會所山上の草を刈取らせ、屯場を手當し、同家の火業手傳役宮川忠作大畑忠平等にも、夫々足輕を差添、各鐵炮をのせ、防ぎの用意をなす、扨戸田又太夫關谷茂八郎がいふには、彼異國人共何歟申旨ありて來れるやも云れざれば、猥りに鐵炮うつ事なく、彼等が事情を聞て專一とすべしとて、支配人陽助といふものに玉止メの云るしを持せて海岸へ進ませしに、彼が方より大筒小筒を頻に打懸け、陽助手負たるより、此手續は、後の同心共の申口に詳也、事煩しきが故に爰に略す、今は此方よりも打べしと又太夫より申によつて、忠作忠平等其外十四五人、辨天社の脇へ出張り、各鐵炮を打懸ける内、異國人の

方より臺仕懸の大筒を引上、きびしく打懸たるにより、治五平も十匁筒を取て打拂ひしが、玉藥盡たる故取來らんとて會所へゆく途中にて、異國人より打懸たる鐵炮に足の甲を打せ、陣屋へ入、布にてまき立出けれども、歩行不自由にて、防戦も心に任せざるにより、會所川上の山岸に疵保養して居たるうち、其夜の九時頃、會所の人數は引拂たりと聞けれど、歩行なりがたきにより、彼所に野宿し居たるに、翌五月初日には異國人共上陸し、會所其外を亂妨し、二日には歸帆したる様子にて靜になり、病も少し和らぎければ、會所の躰を見届ばやと辨天社の後まで出たる所へ、川下の方より赤人一人出來り、それ日本と聲をかけ、拔身を持打かけるゆへ、治五平も拔合せ、二太刀三太刀打合ふ内、異國人六人ほど各鐵炮を向け取圍みたるゆへ、振返るとて坂の段木へ疵ある方の足を踏かけ、横ざまに倒れければ、異國人ども其儘折重り、二の腕計を繩にて縛り、會所脇土手の上へ引ゆきたり、そこには異國人二十人程もありて、藏々より米豆等を運び居たり、水ひとつくれよと手眞似して見せければ、藥罐に酒を入れて持來り吞せたり、かく運盡て捕はれ

たれば、とく首うてと仕形して見せたるに、其内頭立たる者が、赤人は日本人を殺さず、やがて送り歸すべきよし手眞似し、夫より腰繩をつけ、サクベツの方へ四五町連ゆき、日本人くゝと指さし、其さま會所の人數は何の方へ立退たるやと尋る。躰に見へけるゆへ、頭をふり知らずと答へければ、又會所の人數は何程と問ふ躰にて、役人くゝといへる事のみ聞えけるゆへ、是又きらざる趣を手眞似して見せければ、其外色々尋る様子なりしが、分らざる故答へざりしに、其後は何事も尋ず、扱會所の邊敵味方の死骸なども見えず、異國人二人酒に酔たる躰にて臥し居たりしが、八時頃彼二人と治五平を橋舟に乗せ、大船へ連行、繩を解穴へ入たり、そこには、カラフト、エトロフの番人共も居たり、程なく首領ミカライサンタラエチ、治五平を呼出し、船繩にて腰を三重廻し縛り、みよしの方へ連行き腰を懸させ、半時計置て繩を解き、元の所へ歸したり、是は陸にて捕はるゝ時、刀をぬき刃むかいたるゆへ、一旦の咎なれども、はや構ひなきよし、ミカライ源七へ申たり、又治五平を役人と心得居る様子につき、町人なりともなしくれよと源七へ

たのみ、漸に申取帳つけの趣に成れり、又異國人共源七其外の者には咄もすれど、治五平は言語一向通ぜざるゆへ、何事も言はず、夫より彼船ウルツフ、カラフト等へ乗廻し、リイシリにて番人共と俱に小舟に乘組、ソウヤ迄歸りたる始末は、富五郎等七人がいふ所のごとしといふ、且異國船の様子大筒仕懸方等の事、治五平が見及たる所繪圖にして出せしにより、則江府へ捧ぐ、卷之八、番人共の申狀并此治五平が申狀、悉く記して執一二の主要のみを摘て記す、其始末甚多端なるがゆへに、こゝには纔に

一エトロフ嶋へ詰居たる同心の内、羽生宗次郎、小嶋官藏、柏屋與七、井瀧長藏、橋本義八といふ五人の者ども、追々箱館へ歸來れるにより、彼嶋争亂の始末を尋るに、四月廿五日の曉、ナイボよりの飛脚シヤナ會所に至り、異國船渡來のよし告來れる關谷茂八郎かしこへ越により、宗次郎、官藏、與七、并梅津富右衛門といふもの、都合四人従ふべきよし、茂八郎より申渡し、南部津輕鐵炮方の者三人、足輕二十六七人、大筒小筒の鐵炮を用意し、圖合船二艘にのり組、其日の四時頃出帆せしが、向ひ風にて捗どらず、夕立シリムイといふ所へ着寄り、野宿して居

たる所へ、ナイボよりの飛脚の由、蝦夷人兩人にて書狀持來り、茂八郎其狀を見て、彼飛脚を直にシヤナに遣したり、何等の事いひ來りしにや、其子細はえらず、翌廿六日の朝出帆し、フウシベツといふ所まではせ行しに、風替り彼所に暫く見合せ、七ツ時頃風筋直りて船を出し、夜中も走行、廿七日の曉方に至り、ホロ〜といふ所へ差寄りしに、下役兒玉嘉内、ナイボ番人一人、蝦夷人六人、此處の岩穴に有ていふ様、去ル廿五日異國人共ナイボへ上陸し、番人四人と稼方の者一人を捕へて元船へ連行き、番屋藏々等焼拂ひたる由語るにより、扱はナイボよりはシヤナの方心許なく、急いでシヤナへ立歸り、備へをなすべしとて、嘉内もこなたの船に乘組、舟子どもをせり立々急ぎし程に、其夜の内にシヤナへ乗戻したり、翌廿八日の早天には、同心共一同に會所へ出、各手分して鐵炮玉を鑄立、竹鎗を拵へ、暮頃迄に大小の玉八百程、竹鎗三百本程仕立、夜中は代々海岸を見廻り、翌廿九日の早朝會所へ出しに、戸田又太夫關谷茂八郎がいふ様、今度は安からぬ陳事なれば、いづれも身命をなげうつ

て働べし、異國人共上陸したりとも、こなたより差
圖せざる内は、猥りに鐵炮打べからず、駈引の合圖
は大鼓三ツうたばかり、四ツうたば引べし、兵糧
方は兒王嘉内引受て計るといへども、猶手廻り兼
る事あらば、宗次郎も世話すべしといふゆへ、其旨
を得て、各鐵炮玉藥等請取、宗次郎は會所の上手へ
蝦夷人二十人程連行、草を刈せ、南部家の火業師大
村治五平、足輕二三十人、津輕家の火業師^{姓名}足
輕二十人程連來り、同じく刈取、凡八十間四方ほど
に地をならし、兩家の幕張し、又會所前土手上は十
間餘の所へ三尺程板を打、其内へ南部家の幕張し、
長柄四十筋、旗一流、纏一本たて、津輕家にては、彼家
の勤番所うしろ遠見場所へ幕張し、見張の者を附
置、各備へを設し所に、九時前に至り、異國船二艘見
へ來り、大船の方は、海岸より一里程隔てナヨカと
いふ沖の方へ寄り船を留め、小舟の方は、シヤナ會
所より二十町程隔て懸りたり、扱異國人ども何歟
申旨ありて來るやもえれざれば、猥りに殺伐を用
ひず、其事情を察すべし、先玉止の合圖をせよと、
又太夫茂八郎より、支配人陽助といふ者へ促しけ

れば、則白木綿を三尺程長き木の先へつけ、陽助こ
れを持て海岸へすゝむ、其跡へ義八、富右衛門、官
藏、與七、并園田武右衛門といふ同心、いづれも鐵炮
を持添ゆき、海岸に至り、陽助彼合圖の布をふりた
るに、橋舟より三百目計の鐵炮を陽助へ向て打懸
たれど、玉は脇へそれたり、其時與七小筒を彼橋舟
へむけ一發しけるに、陽助是を見て、今異國船より
打懸たるは、玉筋は此方へ向たれども、若や合圖の
心なるかもえれざれば、先こなたより船へ向て打
んはいかないなり、山の方へむけこ玉拂して然るべ
しと申に、異國船二艘とも既に車櫂を押立けるゆ
へ、扱は合圖を受たるならむと思ひ居る内、異國人
ども皆々上陸したるゆへ、會所へ行て其旨を申し
けるに、えからは異國人共會所へ來るべければ、も
はや案内に及ばず、彼等がせん様を見よとて暫
くためらひけれど、異國人共は只海岸に立並びた
るのみにて、何の樣もえれざるゆへ、かくては果じ
何ぞ申旨もありや參りて承るべきと、陽助が申によ
り、然らば最前の如く同心共も附添ゆくべし、もし
陽助を捕へなどせば格別、左もなきには、努々鐵炮

打べからずと、又太夫茂八郎より申につき、其旨を得て一同に打連濱邊へすゝみしに、陽助懷中紙を取出し、左り右に振て玉止めの仕方を見せけれども、會得せざるや頻りに打懸ける故、進みがたく引戻しける時、小筒にて陽助内股を打れたるにより、其旨會所へ申、鐵炮打べきやと伺ひしに、今は打拂ふべしとて、又太夫茂八郎をはじめ、兩家の人數と一同に、辨天社の脇へ出張、筒先を揃えて打立しに、異國人共は川向の粕藏へ取籠り、鐵炮を打出すにより、此方の人數は會所土手上へ引分け、左右より打懸、互にせり合居たる内、粕藏脇の蝦夷小屋より夷人一人立出しが、敵の鐵炮に中りて死したり、又辨天社の下にも粕藏あり、官藏その粕藏の板を破り、その所より三百目筒を打出せしに、異國人の籠りたる粕藏を打抜、餘程色めきたる牀に見えたり、又南部陣屋の山手より同家の火業師大畑忠平三百目筒を橋舟へむけ打出したる時、異國人共は彼粕藏へ火をかけて、粕藏五六箇所焼たりと云、且津輕動番所は、敵に取切られては都合あしきとて、此方にて焼たり、一同橋舟に取乗り、元船へ引取たり、此時七時半頃也、夫より一同會所へ集りしに、兩家雇

足輕をはじめ、番人職人漁業稼方のもの蝦夷人等悉く逃去り、兒玉嘉内見えす、嘉内事は、末に見ゆ、大村治五平も七時過より見えす、治五平事は、前に見えたり、只會所に居たる者は、又太夫茂八郎御用金を取集め、小者に持せて立退せたり、此御用金クナシリに持ゆき夫より箱館へ来る、暮時過より異國船にて折々大筒の音聞ゆるゆへ、兩家の人數并同心ども海岸へ出、此方よりも打懸たり、扱又太夫茂八郎兩家の役人一同に事を議し、もはや玉藥も乏しければ、此會所にては防ぎがたし、一まづ立退き、アリムイといふ所の番小屋へ引取べければ、同心共も附添參るべしといふにより、一同に引取る時、打殘したる合藥を取集め、南部家の火業師小川忠藏に渡し、同家陣屋の前にある一貫七百目の大筒を打せたり、此玉敵の元船をかすりたる牀にて、元船の懸る場をよほど遠ざけたり、九時半時頃、又太夫茂八郎、宗次郎、與七、武右衛門、富右衛門、長藏、并森彦十郎、大場專藏といふ同心、銘々鐵炮をもち、曉七時頃、アリムイ番屋へ至り、間宮林藏百姓にて、蝦夷地御用屋に成り、彼所へ行たるものなり、海邊を見渡し、異國の橋舟一艘大筒を打、此處へ着寄るべき牀也といふより、玄からば爰に在らむは然るべからずとて、同所を立

出行く程に、皆々跡先になり、五月朔日晝頃アリュムイ、シベツといふ間にて暫く休らひ、茂八郎も此所へ來り休むべしと、又太夫がいふにより、宗次郎尋へ出しが、一町程先に休居たるゆへ、其事を申けれど、ことの外勞れたれば、立戻りがたしとて、其儘居たり、かくて一同に勞れ甚しければ、今宵は爰に野宿して、あすこそルベツへゆかめと、又太夫がいふにより、木の枝などを折て火を焚、一同休居たる内、又太夫見えざるゆへ、彦十郎傍の山手へ登り見たる所に、地役同心共此頃は、いまだ地役と唱へし時なり、と聲かけ、其さまあやしき様子により、一同にはせ行見れば、又太夫脇差を咽へ突たてうつぶしに成、はや事きたり、其時エトロフに來り居たる鍛冶共、又太夫が蒲團を持て居たるゆへ、直に其蒲團を打着せ、彼もの共を番に附置、宗次郎は茂八郎を尋ねてルベツの方へ十四五町行たれども、逢はざるゆへ、立戻り見れば、番させ置つるものども一人も居ざるにより、扱は最早茂八郎來りて見届のうへ、番に附置たるもの共も引連行たるならむとおもひ、ルベツをさして急しほどに、其夜の初更の頃に至り、かしこに着し

が、其所にも茂八郎其外のもの見えざるゆへ、扱はフウシベツの方へ行しならむと、其跡を慕ひ行ばやと思ひしが、其所に大河あり、川向に船は見へたれど、渡すべき夷人もあらざれば、是非なくルベツに夜を明かし、翌二日に至り、夷人一人夷舟に乗て來りしを見受、其舟にのり、川を渡り、漸く八時頃フウシベツへ到りたるに、其所の蝦夷小屋に、茂八郎、林藏、并仲間の者共、兩家の役人、足輕、雇足輕、稼方、職人など、都合四十人程居たるゆへ、又太夫が自殺の始末を語りしに、茂八郎も則其場所へ至り、様子は見届たれ共、騒動の中故、死骸の取始末も成かね、其所に在合たる者共は、一同引連來りし由をいふ、專藏、與七はヲサウシといふ所より海岸を通行したるゆへ、又太夫が變死を知らず、五月朔日夕方にルベツへ着しに、間もなく山の手の方より茂八郎、彦十郎、長藏、富右衛門、武右衛門、林藏、兩家の役人共、足輕其外の雜人等追々に來り、彼者共に又太夫が事を初て聞て驚歎し、夫より何れも一同にフウシベツへ至りつきぬ、官藏は四月廿九日の夜、ナヨカロといふ所へ異國人上陸せしも計りがたけ

れば、見て来るべしと、又太夫茂八郎がいふにより、九時頃かしこに至り、南部勤番所の山より見れば、人五六人居る躰也、闇夜にて確と分らざれば、異國人なるべしと思ひしゆへ、急いて會所へ立戻りしに、はや一人もあらざるゆへ、うしろの山手八九町程退きたる内夜も明ければ、シベツ川の方へ十町程も行たる所へ、山の手の方より、兒玉嘉内漁方の者五人出來り、きのふ嘉内が妻子何方へか立退行衛まれざるゆへ、所々尋居る内、海岸より鐵炮打かけ、會所へ立戻がたく、山に籠り居たる由をいふ、夫より嘉内官藏、ブクシャといふ草の根あるひは百合の根などを掘て喰ひ、其所に五月三日迄野宿し、同日晝ごろ川上四五町行しに、蝦夷人七人居たりしが、其内より二人矢を射かけたり、是は深き人心ありての事にもあらず、異國人共シヤナ亂妨の紛れ、此夷人共米酒等掠取たる事ありて、役人より其吟味にあはん事をおそれ、かゝるふるまひありしなどいふ説あり、菊地惣内さまに箱館へ出居たりしが、エトロフ一舉につき、とく彼地へ歸りしゆへ、此二人の蝦夷が仕形輕からぬ事なれば、よく、彼蝦夷の内より、此二人糺明を遂て申越べしといひなくりぬ、ノポリサシとていふもの、彼川筋二三町上をのぼれる小屋へ、嘉内、官藏を伴ひ養ひ置しゆへ、此所に五日の朝迄居たりしに、さきにシヤナ會所にて鐵炮

疵負ひたる支配人陽助、此川上に保養して居たりしが、異國人歸帆したる由をき、シヤナ會所の様を見んとて、嘉内官藏が居たる所へ來りしゆへ、則三人一同にシヤナへ行て見るに、會所藏々南部家勤番所悉く焼拂ひたり、會所うしろの草原に一人の死骸あり、身の内に疵なし、其所へ津輕家の雇足輕來かゝり、是は彼家の足輕なるが、腫病にて果たりといふ、又夫より少し脇蝦夷小屋の前に異國人の死骸あり、黒羅紗筒袖の衣類を着し、同じ股引をはき、切疵つき疵矢きずあり、是は夷人ども集りて殺したりといふ、此始末前にみゆ、扱此三人、又太夫茂八郎が成行を知らず、アリムイの方へ行ば逢事もあらんやとて、その日の晝ごろかしこへいたりたるに、こゝにも異國人の死骸疵等あり、是は番人行十郎といふものころしたる由、此始末前にみゆ、時にその所の山の手より、はからずも嘉内が妻子并津輕家の雇足輕四人、南部漁方のもの五人、大工夫婦のものなど出來り、まづ恙なきを悦びあひ、一同圖合船にのり、ルベツへ渡りて止宿し、六日の四時頃フウシベツへ至りたるに、茂八郎其外のもの、蝦夷小屋に居

たるゆへ、面會して品々談じあひける、義八は四月廿九日の暮行よりシヤナ海岸を見廻り、五時過會所へ立戻りて見たるに、舟人一人も見えず、其時は陣屋見廻りとして一同出たるよしの處、それとは知らず立退たる事と心得、會所後ろの山四五町行し所に、支配人陽助并番人喜惣次、小使與七郎、漁方の者十九人居たるゆへ、其所にて夜を明し、五月朔日同所を立てシベツに至り止宿し、二日には其川上へ到りしに、陽助は鐵炮疵にて歩行成がたし、漁方の者に負はれ行しが、笹原深く越へがたきにより、陽助、喜惣次、與太郎は、其所に残り、其外一同に三日にはルベツに到り、四日暮頃フウシベツへ着、茂八郎其外のものに逢たり、夫より一同商議のうへ、一旦クナシリへわたり、萬事をとり調、茂八郎は、品によりまたエトロフへ戻るべし、嘉内をはじめ同心共、兩家の役人雜人等は箱館へ行べしと、茂八郎が申により、同心共は是迄附添たる事なれば、達てといまりたきよしを再三申といへども、糧米等も乏しく、萬端便ならざるにつき、是非ともに登るべきよしを申により、力及ばず出帆し、追々

に箱館に至り盡ぬといふ、此申狀も委しく記して後に執爰には一二の要を擧るのみ、且關谷茂八郎、兒玉嘉内が申狀は、正義が退役の後を達に成しゆへ、今爰に記さず、
一 七月十一日御使番村上監物義雄箱館着、上下三 翌十二日御目附遠山左衛門景晋、上下三 同廿六日若年寄堀田攝津守正敦朝臣、上下三百三 同日大目附中川飛驒守忠英、上下六十 御使番小菅伊右衛門正容、上下三 小普請役近藤重藏、上下六 奥役御右筆蘆谷源五右衛門、石尾彦四郎、各上下八 吟味方下役野々山牧三郎、御徒大嶋太左衛門、御普請役岩佐三五太夫、御鷹方山田忠兵衛は、正敦朝臣の手附として、一同に着、其外御徒目附小田切彦兵衛、加藤才助、林餘四郎、神谷勘右衛門、磯野七十五郎、三輪善平、西村吉之丞、御小人目附小林新五郎、田草川傳次郎、前田友之助、古澤半左衛門、末次左吉、近藤文次郎、木村富藏、金子五郎吉、栗原伊八、小林卯十郎、水沼宗一郎、御普請役小林周助等、大目附御目付御使番等之手附にて、役々の到着の日に追々到着す、此諸有司箱館寺院又は町家に旅宿有、正敦朝臣着し給ふ時は、安論正養旅館へ至り、先御機嫌を伺ふ、其時上意あり、其趣は今度異國船渡來に付、堀田攝津守遣はさ

る、御用之儀申談、諸事入念可ニ相勸との御事の由、正敦朝臣より申達し給ふ、畏て承りぬるよし謹て御請申、又江府へ御禮の呈書を出す、翌廿七日より日々正敦朝臣の旅館へ諸有司會して評論あり、扱は今度の一舉は、たやすからぬ珍事なれば、此上の處置いかありて然るべからんや、各深く遠く思ひをめぐらし、萬全の策を奉るべきよし、彼朝臣より促し給ふにより、安論正養はじめ、諸有司己れ己れが異見をまいらせ、正敦朝臣よりも數條の書取をもつて厚く議し給ふ事品々也、

一今度の一舉につき、江府より鐵炮鍛練の者を遣はさる、其人々は御先手深尾八太夫組與力黒澤槌右衛門、同井上左太夫組與力西尾鎌次郎、依田大助、其子斧三郎、おなじく荒尾但馬守組與力中里三次、同長田六左衛門組與力龍神數馬、町奉行根岸肥前守組同心平野勝五郎、御先手大林彌左衛門組同心松岡鐵藏、宇田彌一郎、長嶋萬五郎、小金宗次郎、已上十三人、七月廿三日箱館に至りぬ、

一去月廿九日には正敦朝臣箱館奉行の御役宅を見廻り給ふにより、大目附御目附御使番御右筆等も

入來、已刻過正敦朝臣來り給ひ、御用談も一通り終りて後、此度異國船より戻されたる番人どもを白洲へ呼出し、兩奉行委細を糺問し、正敦朝臣諸有司も其席に列りて聞給ふ、其事果て後、馬場にて蝦夷立の御用馬を見給ひて、其外所々見廻りて歸らせ給ふ、

一前の番人其外の者どもなどが申狀をきけば、エトロフ亂妨の一件、さきに正養より江府へ申つる御届書の趣とは大に齟齬せり、其時はエトロフ詰メ關谷茂八郎よりの注進狀一向分らざるにより、彼嶋より追々歸り來れる船方、其外の者共に菊地惣内山田鯉兵衛が事の由を尋てゑらべたりしが、彼等がいひし所取留ざる事にや有らん、いづれにもかく事のたがひぬるうへは、今さらいひとくべき詞なくて、恐れ甚しければ、正養をはじめ、惣内鯉兵衛ども差扣伺の事を正敦朝臣へ申せしに、此節伺ふ時は、事々につき差支甚多ければ、追て歸府の上言上、其外御用向一通り濟たる後に至り伺ひ申方然るべし、其由は執政方へも彼朝臣より申させ給はんとこの御事也ける程に、此上はとて先暫く見合

せぬ、

一八月朔日には、正敦朝臣箱館山春泊^{サキ}より藥師山水元尻澤邊を見廻り給ふ、大目附御目付御使番御右筆奉行支配向等附添まいらす、

一二日には正敦朝臣の旅館へ南部、津輕の重役の家來を呼出し給ひ、蝦夷地勤番の人數年々出せる上に、今度異國船渡來につき、多分の増人數をも出し出精のよし、殊に南部家は、領分大勢通行の所、人馬其外差支もなく、一段の旨勞ひ給ひ、松前若狹守家來をも呼出し給ひ、今度松前西蝦夷地上地も仰出されたる上、異國船渡來につき、海邊固^ツの人數をも出し、彼是心配なるべし、猶又引渡し迄の所、念入べきよしを達し給ふ、

一御徒目附神谷勘右衛門、御小人目附小林卯十郎、木村富兵衛、東蝦夷地クナシリ嶋邊迄見廻べきよし、小普請方近藤重藏、御鷹方山田忠兵衛、御小人目附田草川傳次郎、西蝦夷地リイシリ邊迄見るべきよし、二日に正敦朝臣より促し給ふ、

一三日には、正敦朝臣大森濱まで、南部家の陣營を見廻り給ふ、大目附御目付御使番御右筆兩奉行支

配向等附添まいらす、南部家大小の兵士各甲冑を帶し、兜は脱て高紐にかけ、馬は傍に牽たて、蹲踞して禮をなす、此兵士一備限り幕を張、旗馬印をたて、弓組、鐵炮組、長柄組の列を正し、嚴重に固めたり、一通り見廻り、濱邊に設置したる幕張に入給ひ、重立たる兵士共を召出して勞ひ給ふ、且今度江府より來りし諸組の與力同心共の炮術をも此所にて見分し給ふ、

一四日には、七重濱にて佐竹勢の備立掛引の業を見給ふ、諸有司兩奉行其時附添、きのふのごとく濱邊の幕張には、小高き棧敷を構へ、正敦朝臣をはじめ一同に列座す、兵士皆甲冑にて、兜は持せ馬を牽せ、棧敷の前を中禮して一同に押行き、夫より兜を着馬に乗り、指物をさし各得物^{モノ}をもち、金鼓を鳴らし、弓鐵炮をはなちて駈引す、進退よく整ひたり、事果て後重立たる兵士等を棧敷の前へ召出、今度異國船渡來により、臨時の人數の事を達するの處、取あへず出張し、殊に今日の備立、隊伍もよく整ひ行届ける事のよし、正敦朝臣より勞ひ給ふ、又兼て彼朝臣より沙汰し給ひて、此日近場所の蝦夷人共を

呼出し、彼備立駈引等の躰を見せて、御武威を玄めし、夫々に物など賜はりけり、

一異國船より歸りたる者どもの内、カラフト番人富五郎、源七、エトロフ番人長内を江戸へ差出すべしと、正敦朝臣の申させ給ふにより、下役小川喜太郎を差添として、口上書并彼國より貰ひ來りし品々など取持て、八月五日箱館を出帆して江戸へ赴く、

一エトロフ嶋シャナの蝦夷人日本風俗に成たる勘八といふもの十七八歳なりしが、番人喜惣次といふものと、シャナ立退の時荷物持送りの事より口論に及び、喜惣次を殺けるよし、事の始末は得と糺明のうへ申越すべしと、菊地惣内より申來る、是は先達て關谷茂八郎より申越したる、五月三日の夜、かの喜惣次と支配人陽助忤與太郎といふもの、エトロフの内アリムイといふ所の新道を通りし時、何者とも知れず切懸、與太郎は手を負ひ、喜惣次は行衛知れざるとの風聞のよしなりけるが、果して此事なるべし、今度の爭亂に拘りたる事ども聞へざれど、輕からぬ事にもあれば、正敦朝臣へも具に申、江戸表執政方へも申上置給はるべしと、八月六

日に村垣定行へ申送りぬ、

一御書院番頭水野石見守、與力森重靱負は、炮術鍛練のものなるにより、當御用に出役の事を先達て江戸へ申せしが、則その通り命せられ、靱負并手傳として、門人大嶋雲四郎組御徒遠藤市之進、小普請近藤登之助組三宅幸之助、松平讃岐守家來本木鎌助、石川千勝家來三井友七、牧野豊前守家來齋藤甚太夫、外に内弟子のもの五人、以上十八人、八月七日箱館に到着す、

一正敦朝臣近蝦夷巡見として、八月廿九日箱館を發し給ふ、安論并支配向附添まいらせ、遠山景晋と正養は取えらぶべき御用の事ありて箱館に残り、その餘の諸有司皆相赴す、東蝦夷地ウスアフタ邊迄見廻り、歸路には直に松前に趣き給はんとこの御事なり、

一八月十四日には、正養箱館を發し、十八日松前に至り、川支にて一遠山景晋は十五日發し、十九日に着し、日逗留いづれも松前家士の宅を旅宿とす、

一正敦朝臣蝦夷地巡見終りて、八月廿六日松前に着給ふ、小菅正容も同日着也、村上義雄は廿五日、中

川忠英は廿七日着也、安論は諸有司より一日後れて彼地を立しが、旅中川支ありて、九月朔日松前へ到着す、各松前の家士の宅旅館となす、

一 八月廿七日正敦朝臣松前市中より海岸通り見廻り給ひ、夫より立石野にて酒井勢の備立を見分し給ふ、諸有司并正養相越す、爰にも棧鋪を構へて、一同に列座す、扱酒井家は御譜代の事ゆへ、一己の備は立す、奉行の旗に隨て働くべしと、國元出張の時申附られたるにより、備へは立がたし、只鐵炮の業のみして見せ奉るべき由を申、足輕以下は甲冑、士以上は陣羽織にて、鐵炮織の列を正し、つるべ打早打等さまぐの業をなす、事果て後重立なる兵士等を棧敷の前へ召出し、正敦朝臣より勞ひ給ふ事、并西地近場所の蝦夷共にも見せて、物賜ふ事など、都て佐竹家の例のごとし、

一 此節は、異國船も歸國して靜謐に成り、殊に句季も後れ、もはや渡來も成がたき時節につき、佐竹酒井の人數も歸國させ、松平政千代人數も先當年は出張にも及ばず、來年に至り差出し然るべし、其事はなを追々取調伺ふべしやと正敦朝臣へ議しまい

らせけるに、其通りにて然るべしとのたまふにより、則其趣執政方への申上書を仕立、八月廿八日村垣定行の元迄遣し、進達の事をたのみをくりぬ、南部左衛門尉人數の事も、先達て御沙汰有て、被家より懸合もありけれども、至て少人數にて、當時差配方も不便利につき追て相應の御用もあらば達すべきむれを申達、其由六月中江府へも申上置たり、

一 八月廿九日には、正敦朝臣エサシ見廻りとして發駕し給ふ、諸有司隨ひ行事例の如し、安論はいまだ蝦夷地より着せず、正養は松前に御用あるにより、支配向ばかり附添まいらす、巡見終りて九月四日に松前に歸り着給ふ、

一 今度發向の諸有司歸路の時、手をわけて奥羽其外海岸通り要害地理見分させさすべしやと、正敦朝臣より先達て執政方へ伺ひ給ひしが、九月五日その返翰來り、諸有司は伺ひの通りたるべし、箱館奉行は見分の事にあづからず、少も早く歸參して、有し事共具に言上すべしとの御事のよし、江府の若年寄植村駿河守家長朝臣より正敦朝臣の許へいひおこし給ひぬるゆへ、正養は何かをさし置、早々歸府して言上を遂げ、又執政の御方へも此事彼事具に告げまいらすべしと、正敦朝臣より達し給ふ、

一 九月五日、正敦朝臣立石野にて津輕家の備立駈引等を見分し給ふ、諸有司并安論附添まいらす、備立駈引の次第其外ども、都て佐竹の例のごとし、此日森重勲負が火術船軍術を見分し給ふ、附添例のごとし、

一 十二日には、順風にて、正敦朝臣をはじめ諸有司と俱に、正養も松前を出帆し、三厩へ着船す、多人數同所に宿しては差支のよしにつき、遠山景晋と正養は今別に止宿す、正敦朝臣は人馬の揃ふを待て、二三日三厩に止り給ひ、中川正英、遠山景晋、村上義雄は、奥羽其外海岸見廻りとして、おもひ／＼に出立し、小菅正容は正敦朝臣に隨ふ、

一 正養はさきに正敦朝臣より沙汰し給ふむねもあれば、翌十三日直に今別を發し、道を急いで行程に、十七日には、南部領の一の戸驛迄至りぬ、そのとき村垣定行の許より書狀來り、先達て異國船よりもどされたる南部の家士大村治五平病氣成しが、快氣に於ては江府へ差出すべき旨執政方より申させ給ふよし申來り、則其段松前表安論の許へ申送る、夫より段々に旅行し、十月六日に江戸に至り着ぬ、七

日には御届として月番執政大炊頭利厚朝臣の許へ參り、定例のごとく、廻勤登城の事を伺ひ申せしに、廻勤は勝手次第、登城の事は追て沙汰し給ふべければ、先見合すべきのよしを申させ給ふにより、則廻勤のみして宅に歸る、その夕方村垣定行來り、進達物等もあらば、同人を以て上べし、若御直に申べき子細もあらば、利厚朝臣の御許へ參るべしと、御同人申させ給ふよし達せらるゝにより、則來辰年蝦夷地御固の人數の事、并エトロフ嶋御處置の事等をはじめ、品々進呈物をたのみ、又御直に申べき事もあれど、定行は此御用を取扱はるゝ人なれば、素より秘すべきにあらざるゆへ、此事彼等聞えわけ給はるべしと品々演説したり、

一 正敦朝臣十月十三日江戸着し給ふ、小菅正容も同様なり、

一 中川忠英村上義雄の兩士は、津輕三厩より西海岸通り、越後村上の邊迄見廻り、忠英は十月十三日府に歸り、義雄は日光拜禮して、同月廿八日歸府す、遠山景晋は、南地より東海岸通り、常陸鹿嶋の邊迄見廻り、十月廿一日府に歸る、

一 吟味役格菊地惣内、山田鯉兵衛、下役關谷茂八郎、兒玉嘉内、江府へ差出すべきよし、十月十七日利厚朝臣より書附を以達し給ふにより、則松前表安論の許へ申遣す、

一 正養が差扣伺ひの事、箱館にて正敦朝臣の申させ給ひし旨もありて見合居たりしが、當時登城もせざれば、御用向の差支もあらざるにより、十月十八日に、佐渡奉行土屋長三郎を以利厚朝臣へ捧ぐ、其趣意は、當四月エトロフ嶋へ異國船渡來亂妨の趣御届の節、支配向より取留たる風聞を以取調差出せしを、其儘申上ぬる段不調法の至り、又菊地惣内は、エトロフ亂妨の時詰合のものと不始末に及び、其節惣内は詰合ざれども、陽助懸りの事なるに、申談ども行届かず、且御届書取調の時も、取留ざる風聞を以相違の事を申上、山田鯉兵衛も此御届書を俱に取調たるにより、同様に不調法のよしを以、正養并惣内、鯉兵衛が差扣伺、又外に一通には異國人エトロフ亂妨、并リイシリ嶋に、御船萬春丸へ狼藉の節、支配向不始末に及び、恐入たる故を以、安論正養連署して捧ぐ、利厚朝臣請取給ひて、暫く御沙汰

もなかりけり、

一 十月廿四日御納戸頭より御勘定吟味方兼帶河尻甚五郎春之、御勘定吟味役村垣左太夫定行御前へ召出され、松前奉行に命せられ、兩士共三百俵高に御加恩あり、春之は、元高三百五十俵、定行は元高百俵、松前へ移り、是迄御役所は箱館なりしが、以來は松前へ移り、安論正養が御役名も松前奉行と唱ふべきよし、此日利厚朝臣より書附を以て達し給ふ、此時より松前奉行四人になる、

一 十一月十一日クナシリ、ソウヤに詰合たる官吏共へ御賞詞の事あり、其故は當四月異國船エトロフ嶋へ渡來の折に、クナシリ嶋には、下役向井勘助詰合たりしが、エトロフ爭亂の事は、追々注進あるにより、賊船隣嶋を犯す上は、程なく此嶋へも來るべし、いまその用意せばやとて、先南部家勤番の者へ達し、會所をはじめ東西の番所より、晝夜とも物見をさせ、在合たる番人蝦夷人共迄悉く呼集め、賊船寄來らむ時、防方の手當を巨細に命じ、兵糧方など手を分けて差支ざる様に用心し、扱其頃は、支配人番人稼方の者なども代り合の時節にて、殊に少人

數なれば、異國人上陸させては事むづかしかるべし、只御武威をもつておびやかすにはまかじとて、有合たる布木綿を取出し、旗指物幕の類を夥しく拵へ、會所をはじめ所々の山の手、或は海岸の船々へも立つらね、夜は所々に篝火をたき、嚴重に構ける程に、山方其外に住ひ居る夷人共聞傳へ、我もくとはせ集り、差圖に應じて防ぐべしとぞはやりける、則此夷人共に命じ、晝夜懸りて半弓毒矢を夥しく拵へ、又常に夷人の熊をとるアマツボウと唱へて、努弓に似たるものあるゆへ、其器を多く作らせ、海岸にかけならべ、賊船來らば切放さんとかまへ、其外居合たる鍛冶に鎗を多く打せて、夷人共に渡し、今やよすると待かけたり、扱番人夷人等を集めていふ様、異國船渡來のうへは、手痛く防べきは勿論なれば、若も戦ひ難儀に及ば、我は速に討死すべし、汝等とても御國恩を蒙りたらば同じけれど、士とも違ふなれば、いかにもして命を全ふし、後詰の來るを待べしと懇にいひ諭しけるに、彼もの共是を聞、左ばかり我々を厭ひ給ふ御志の忝ければ、一命を捨ん事何かおしからんと、夷人共迄一致し

て心を決し、各身命を無きものにして働んとぞ誓ひける、此あらまじは、クナシリ通行の御用船、其外船方のも共委細に見聞し、箱館へ來て悉く告たり、彼異國船エトロフ亂妨の後、クナシリの沖へも乗廻しけるが、彼舩たらくを見て、多人數籠めて備へ有とや思ひけん、終にクナシリへは寄せざりしとぞ聞へぬ、又勘助より箱館詰合の者へ申越したる趣は、今度の一舉討死すべきは勿論の覺悟なれど、其身分にあらされば、鎗一筋も持たず、嘸死後の舩見ぐるしかるべし、殘念は只此一事なりと申ししたるのみにて、妻子もある身なれば、それらの事など頼みこすべきは世の常の人情なるに、曾てそこに至らず、輕きものには珍らしき健氣なる心底也、又調役比企市郎右衛門は、チモロ、アツケシ、クナシリ兼持にて、アツケシに詰居たりしが、彼騒動をき、取る物も取あへずアツケシを發して、クナシリに至り見るに、防戦の手當最中なれば、猶又勘助と謀り、さまぐに手配りし、殘る所もなく備へたり、夷人ども是をみて、いよく勢をまし、賊船とく來れかしとぞ勇みける、かくて市郎右衛門

おもふ様、もし連盡て我と勘助打死せば、クナシリ一嶋の御用筋一向に分るべからず、事の靜なる内に諸書物を取えらべて、箱館へ送らんにはまかじとて、諸帳面をはじめ、其外要用の書物をことごとく封じて箱館へ差越、猶又此末心組置たる御用筋等、一品も残らず巨細に申越、今は心安しとて、ひたすら討死の覺悟をぞ極めける、又ソウヤへ詰たる調役並深山宇平太下役小川喜太郎也しが、異國船カラフト嶋へ渡りし時に、かしこに詰合たる松前の家來ども防がたしとて、ソウヤへ引取、且リイシリ嶋へ懸り居たる御用船雇船等乗組のもの共、異國船におびやかされ、追々ソウヤへ逃來りし程に、何となく彼地の和人夷ども氣をくじきたるを、さまざまにいひ勵して勇氣を引立、乗捨逃たる船々をも見分に遣し、賊船來らばとりひしぐべき手配等殘る方なく備たり、是等のもの共は何れも心懸よく覺へける程に、さきに正敦朝臣の箱館に下り給ひし時、具に聞えあげまいらせしに、彼朝臣の一己をもて、夫々褒美し給ひ、又惣内鯉兵衛等があやまちをいまして歸り給ひしが、今度執政方へ事の

始末を申させ給ひしよしにて、左のごとく書取を下し給ふ、

クナシリ詰合

調役 比企市郎右衛門
下役 向井勘助

ソウヤ詰合

調役並 深山宇平太
下役 小川喜太郎

魯西亞船相見へ候節、防方手配之次第委細老中衆へ申達候處、心懸宜一段之事に候旨被_レ申候、此段申聞譽置可_レ被_レ申事、

右之内小川喜太郎は江戸に詰合、外三人は彼地に在により、名代のもの共へ春之、定行より申渡す、十一月十五日、營中に於て酒井左衛門尉へ御達し、蝦夷地嶋々へ異國船渡來の節、人數差出し、彼地に逗留も久しく、家來共大儀之事に思召るゝ段台命の由、伊豆守信明朝臣より達し給ふ、佐竹右京大夫は在國により、彼朝臣の御許へ家來御呼出し御達しありけるとぞ、

十一月十八日、若年寄水野出羽守忠成朝臣の亭にて、正養へ左のごとく命せらる、

羽太安藝守

名代 中嶋政次郎

當夏中魯西亞人ゑとろふ嶋へ罷越及ニ亂妨候節、詰合之者共平日之心懸不_レ宜、聊之儀に度を失ひ、防之手段にも至らず立退候、畢意常々申附方不行届故に候處、兼々取締相整候由申聞候段

不都合之儀、且又右之節、其方儀箱館より申上方、其外取計も危忽之仕形、旁不調法之至に候、依_レ之御役御免、小普請入逼塞被_ニ仰附_一者也、

正養職を退きたるにより、此處にて筆をと_レむ、當任の方、是より後を書繼給はん事を希ふのみ、

文化四年丁卯十一月 安藝守正養

追加

休明光記、正養職を退くの條迄を記して、今の松前奉行へ引渡しぬ、夫より後の事は其任にあらずれば記すべきにあらず、然ども異國船一件に携りたる人々の成ゆきは、正養が身にも懸りたる事なれば、聞及びたる所をもつて、ひそかに其一二を記し、私家に藏する事左のごとし、

一 關谷茂八郎兒玉嘉内等安論より糺しの上、口上

書并エトロフ嶋へ詰合たる南部津輕の家來共より申立書、其外の書附類、卯年十二月初旬、松前表安論の許より正養が方へ來る、是はまた正養が退職をえらざるがゆへ也、よつて其儘今の松前奉行へをくる、

十二月七日、山田鯉兵衛、同十一月關谷茂八郎、兒玉嘉内江戸着、是は本文に記したるごとく御呼出しに付て也、菊地惣内はエトロフに在りていまだ着せず、

十二月十五日、備前守忠精朝臣の御下知にて、村垣定行の宅に於て、左の通り申渡しあり、

松前奉行支配

調役下役元

中村小市郎

其方儀當夏クナシリ嶋へ參り合居候節、シヤの方へ大筒の音相聞、異國船よせ來候趣に候處、右場所にて者向井勘助一人詰合罷在候を、取急ぎ不_ニ心附_一、自分持場江罷越とは乍_レ申、右場所引取候段不行届儀に付、急度可_ニ叱置_一旨、牧野備前守殿被_ニ仰渡_一候、

一十二月廿七日、大炊頭利厚朝臣の御下知にて、川尻春之の宅におゐて、左の通り申渡ありけるよし、

松前奉行支配

吟味役格

山田 鯉兵衛

其方儀兼てゑとろふ嶋は異國境之事ゆへ、御要害第一に心を懸可^レ申處、取締筋にも申聞御備向ゆるかせに有^レ之段、初發より相詰候詮も無^レ之、當夏魯西亞人及^ニ亂妨^一候節も相違之儀を申立候始末、惣而表裏之勤方不^レ埒之至に候、依^レ之役儀被^ニ召放^一、御目見以下小普請入押込被^ニ仰附^一、

松前奉行支配

調役下役元^ノ

戸田 又太夫

右ゑとろふ嶋へ魯西亞人渡來之候節、會所を明退自殺候に付、御宛行并屋敷上げ候、

此又太夫が悴、後に松前奉行同心に御抱入ありけるよし聞^レ之、

一同日御同人御差圖にて、御奉行根岸肥前守御役宅に於て、左之通申渡ありける由、

松前奉行支配

調役下役

關谷 茂八郎

兒玉 嘉内

其方ども儀ゑとろふ嶋へ魯西亞人渡來之節、會所を明退候段、未練之始末不届之至に候、依^レ之重追放申付之、

松前奉行組同心

羽生 宗次郎

小嶋 勘藏

粕谷 與七

其方共儀ゑとろふ嶋へ魯西亞人渡來之節、戸田又太夫關谷茂八郎俱々會所を明退候段不届之事に候、依^レ之江戸拂申附之、

一同日御同人より左の通り御書附、松前奉行へ御渡之よし、是は彼地に罷在候もの共より安論の許へ申遣し、翌辰年二月二日、松前に於て安論より申渡しありけるよし、

松前奉行組同心

井瀧 長藏

橋本 義八

其方共儀ゑとろふ嶋へ魯西亞人渡來之節、戸田又太夫關谷茂八郎俱々會所を明退候段不届之事に候、依之江戸拂申渡之、

松前地役雇之者

森重左仲

内野五郎右衛門

其方共儀りいしり嶋にて船繋いたし候節、異國船渡來候由承り、御武器并御船を捨置逃去候始末不届之至に候に付、江戸拂申附之、

松前地役雇之者

村上左金吾

其方儀そふやへ罷越候於途中、所々へ異國船渡來之趣承り、奉行之申渡を背き、箱館へ引返候段、不届之至りに付、江戸拂申附之、

此時船頭甚三郎といふものは、急度叱りの御告ありけるよし、

一文化五辰年三月十一日、大炊頭利厚朝臣の御下知によつて、荒尾但馬守宅に於て、左の通り申渡しありける由、但馬守は、去卯年十二月廿二日、御先手より松前奉行被仰附、

南部大膳大夫家來

火業師

大村治五平

其方儀主人家法を以相應之仕置可申附旨申渡、南部大膳大夫方へ引渡す、

南部家來江申渡

南部大膳大夫家來

吉田一學

大村治五平儀南部大膳大夫方へ引渡、家法を以相應之仕置可申附旨、土井大炊頭殿御差圖に依て申渡す、

右之段主人へ可申聞、

一同年四月三日、戸川筑前守安論歸府、翌四日御届として備前守忠精朝臣之御許へ參りて、登城の事を伺ひ申せしに、先見合すべきとの御事なりしが、同く六日攝津守正敦朝臣の亭に於て、御同人より左の通命せられるよし、

戸川筑前守

去年とろふ嶋へ魯西亞人罷越候節、詰合の者共立退候始末、兼て取締相整候由申聞候とは相違せしめ候、畢竟支配之者江任せ置、申附方おろそかなる故と相聞、不調法之事に候、依之御役被成御免もの也、

右に付翌七日差扣伺ひ申せしに、差扣可_二罷在_一旨被_二仰渡_一候よし、

一四月十九日、正養逼塞御免之旨、大炊頭利厚朝臣より達し給ふよし、小普請支配朝比奈河内守達せらる、

一五月廿七日、戸川安論差扣御免之旨、攝津守正敦朝臣より達し給ふよし、

一五月廿九日、山田鯉兵衛押込御免のよし、

一六月廿二日、菊地惣内江戸着、同廿八日大炊頭利厚朝臣より御下知にて、荒尾但馬守宅に於て、左の通り申渡し有けるよし、

松前奉行支配

吟味役格

菊地惣内

其方儀とろふ嶋之儀引請罷在候上者、御要害第一心懸可_レ申所、御備向等閑にいたし置、去年夏魯西亞人及_二亂妨_一候節も、於_二箱館_一相違之儀を申立之始末、旁不埒之至り、依_レ之役儀召放、御目見以下小普請入押込被_二仰附_一之、
右十一月四日、押込御免のよし、

休明光記半ば成し時、文化四年の秋、堀田攝津守正敦朝臣箱館に下向あり、其書を閲し給ひ、頓て左のごとく文作りて賜りぬ、
つゝみ紙に

休明光記を見るの詞

正敦

ふたりの司へまいらす

空にみつるやまとしまねの教おほかるなかに
も、ひじりの跡文みる道と、ゆみ矢とるものゝふ
のわざこそ、こよなかりけれ、されば古よりふた
つを車の輪にたとへ、鳥の翼にもなぞらへしぞ
かし、今や秋津洲の浪たいらかに、朝日影明らけ
き御代の光の、蝦夷が千嶋をかけてくまなかりけ
る、まかはあれど、えみしらがすむかざりは、まか
ち、をろさ、などいふことさへぐ國々の遠からず
と聞へぬれば、ひさうのもうけ怠りなからむこ
とをおぼしけるにや、さいつころかの浦々の政
する所を箱館にすへられ、嶋々の守たつものを
もをかれにけり、其つかさは、ちくせんの守安論、
安藝の守まさ養のふたりになんありける、安論
はことにもものゝふの業を好み、正養はふみみる

ことをたしめぬれば、をのゝそのざえを撰び給ひけるにやありけむ、こたび思はずも千嶋が磯に浪たちぬと聞えしにより、正敦がたぐひこれかれ見めぐるべきとのみけしきかうぶり、まづかのはこ館にいたりぬ、されどはや夕沙の引のこせる藻くづもなく、あみのめをもれたるいそも見えざりしかば、ゑばしこゝにとゞまり、後のあらましなどを打よりあげつらふ折から、かたはらなるふばこのふみどもゑめされしを見るに、中垣の内外の政はさらなり、夏麻ひくうな原の掟までもいとつばらかにゑるし、名づげて休明光記といへり、これ正養が去年の冬籠にかきつどひし所なりとなむ、夫より前栽の處をわけて、うしろなる岡にのぼれば、弓場馬場のたぐひきよらにゑつらひ、沛芟なる馬どもあまた引つらねたり、音にきく立野が駒、もろこしの冀北とやらむも、おさ／＼おとるまじう見ゆ、これも此ほとりなる阿富多といふ牧よりとりてまいらせしを、安論いつもみづから打のり、これを試み、すぐれたるをば國府のみむやにひかせ、またし

き程はなるをば猶みま／＼かひて、明くれやしなひたてしかひありて、かくはものせしなりけり、この二つを見て、ふたりの司の其とくに心を盡す事のまめやかなるをゑり、はた車の輪、鳥の翼にたぐへしことのむなしからざるをおもひ合せぬ、わがともがらゆくりなく爰に來り、かゝるいさほをみるにつけても、これにゑたがふ人は、ものゝふの八十の健男のたけきこゝろをおこし、つるぎたち箱におさめし御代にも、みだれたるをわすれずとかいふひじりの教を守り、ひさうのまうけ怠らずして、松風のとはに吹つたへつゝ、あづき弓やしまの外までもよく明らかなる光を仰ぎたてまつらむことをこひねがふのみ、文化四とせの秋葉月、旅のやどりにして、攝津守の正敦ゑるす、

續々群書類從第四終

黒川眞道
御橋惠言校
小瀧淳

明治四十年六月二十日印刷
明治四十年六月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯兼
發行

東京市本所區番場町四番地

印刷者
本間季男

東京市本所區番場町四番地

印刷所
内外印刷株式會社

第一

內在中國學之書

第二

本國學之書

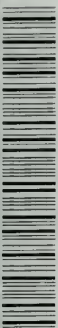
第三

外國學之書

宣統元年六月廿五日
宣統元年六月廿五日

宣統元年

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03043 6745